

【完結】魔法少女リリカルなのは —The Ace Chronicle—

春風駘蕩

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

願ったのは、愛しい人が幸せでいること。たとえば自分の何を犠牲にしても、守り抜きたいと彼女は願った。

苛烈な戦いを終わらせた蒼き騎士は、自らが背負った罪に縛られ組織に飼われる道を選んだ。それでも決して屈さぬと、大切なものを守り抜くと心に誓って、歩き続ける道を選んだ。たとえばその道に、終わりが無いことを知っていても。

運命と戦い続けたもう一人のエースの物語、はじまります。

目次

第0章 誰が為に剣は舞う

0. ある物語の結末 | 1

第1章 海にて鳴く声に誘われ

1. 少女の夢 | 18

2. 交わる道 | 30

3. 日常の乖離 | 49

第2章 紅き種は妖しく啜う

1. 青き騎士 | 64

2. 二人の訪問者 | 87

3. 先を生きる者 | 109

4. 歪んだ欲望 | 132

5. 才能の兆し | 158

第3章 金刃の黒き死神

1. 金色の大鎌 | 182

2. 束の間の癒し | 205

3. 運命の出会い | 227

4. 黒き蟲兵 | 249

5. 少女の覚悟 | 278

6. お人好し | 301

第4章 蘇る紫紺の騎士

1. かけがえのないもの | 319

2. 星光と雷光 | 337

3. 世界を滅ぼす光 | 355

4. 守りたいもの | 373

5. 紫紺の騎士 | 390

6.	解かれた封印	408
7.	ハートの弓士	427
8.	彼らは舵を取る	453
9.	魔女と蛇	467
第V章 違った想いは交わらず		
1.	再始動	481
2.	それぞれの願い	496
3.	時空航行船へ〈アースラ〉	514
4.	かつての戦友たち	530
5.	ハジメという男	542
6.	折れた心	558
7.	悪の意思	574
8.	乙女の献身	593

9.	戦う理由	614
10.	明かされる真実	637
第VI章 時空を護る者達		
1.	喉から手が出るほどに	653
2.	共同戦線	665
3.	天狗たち	680
4.	新たな日々	695
5.	少女の意地	713
6.	生まれる波紋	729
7.	御神の剣士	739
8.	望まれぬ者	759
9.	忘れてはならぬ記憶	779
第VII章 異形の神は何を望むのか		

1.	揺れる心	789
2.	悔いる者達	800
3.	正義の在処	812
4.	夢を真に	829
5.	邪神降臨	847
6.	緑の血	866
7.	アインという女	883
8.	生きろという願い	901
9.	託された名	919
第Ⅷ章 仮面の裏に涙を隠して		
1.	石板（モノリス）	931
2.	四人目の騎士	942
3.	闇に囚われた心	957

4.	異形の翼	970
5.	例外なる者	986
6.	荒ぶる本能	1004
7.	託した意志	1019
8.	誇り高き戦士	1035
9.	王の力	1054
10.	愛のために	1073
11.	最後の二人	1086
12.	滅びの序章と終章	1103
13.	騎士の結末	1125
第Ⅸ章 此に在るはただ一つの願い		
1.	日常へ戻る	1139
2.	蛇の誘惑	1150

7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.	第X章	7.	6.	5.	4.	3.
殻を破る時	母の本音	総出動	ただの一人の騎士	語られざる真実	あの日を取り戻す	あの日に戻りたい	母は愛が故に道を誤る	最後の決闘	必ず帰ろう	魔女の遣い	親友との約束	再々始動

1319130412891273126112461233

12201204119211761163

10.	9.	8.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.	第XI章	9.	8.
戻らないもの	黄金の剣	希望と絶望	弓士の帰還	不屈の心	忌み子	悪魔の科学者	墜ちる騎士	邪神再臨	番犬の謀反	切り札はその手の中に	伝えたい想い	罪人の告白

1492147214551438142114061391137913661351

13431331

11. 父と母と娘 |

第XII章 明日を選んだ蒼き劍聖

1. ありがとう |

2. ここから始める |

3. ただいま |

4. 名前を呼んで |

5. さらば愛しき友よ |

最終章 かの者の旅は終わらない

∞. 遠い地からの便り |

1505

1516 1524 1538 1551 1566 1580

第0章 誰が為に剣は舞う

0. ある物語の結末

頬を叩く雨粒がこれほどまでにありがたいと思ったのは初めてだった。

数分前から降り始めた豪雨はまさにバケツをひっくり返したという表現がびつたりなほどの規模を誇っていて、何の備えもしていなかった自分はあるとこの間にずぶ濡れになってしまった。癬が強くボリユームがあり、獅子のようだと自他共に言っていた金色の髪は雫を滴らせ、自然と重く顔を俯かせる。制服は上も下も水が染みて重く肩のしかかり、内側のシャツはベツチャリと肌に張り付いて気持ち悪くこの場で何もかも脱ぎ捨ててしまいたくなるような衝動に駆られる。

いや、実際に解放されたかった。この身の内で渦巻くある者達への嫌悪の感情から、両肩にのしかかった重責から。持っている全てを何もかも捨てて、生まれたままの姿でここから逃げてしまいたかった。

ズシリと心が重い、胃がムカムカして吐き気がする。課せられた使命が枷のように自分を縛り、目指す場所へ向かって踏み出す足を鈍いものに変える。雨音に混じって嫌な音が聞こえる、何かが軋みをあげ壊れかけているような耳障りな音が聞こえる。

だが、もうその音の正体も出所はわかっている。この軋みは、自分の心があげ続けている悲鳴だ。自分の中の悲しみが、怒りが、あらゆる感情が怒濤の勢いを以って荒れ狂い内側から膨れ上がり自分の心を強く圧迫しているのだ。

すると、それとは別に耳障りなノイズが自分の耳に届き、顔をしかめながらそういうえ自分で念話を拒否していたなと思いついてジャミングを外す。

『——アイン!!? 応答して、アイン!!?』

聞こえてきた親友の悲鳴じみた声に、アインと呼ばれた幼さの残る顔立ちをした若い女性は眉間の皺を深くする。冷めきっていた脳に直接甲高い大音声を叩きつけられ、先ほどから抱いていた自分への苛立ちが嫌でも増長させられる。

しかしアインはその感情を押し殺し、焦燥しているであろう親友に無愛想に応えた。

『……………デカイ声で騒ぐな。通じているよ、リンディ。……………すまないな、私の我儘に付き合わせて』

『つ……………、謝るのは私の方よ。結局私にできたことといえば、少しの時間稼ぎだけ……………でももうこっちは保たない。〃奴ら〃はもう私達の……………人間の手に負える相手じゃないわ……………!!?』

『……………十分さ。おかげで——こっちもようやく覚悟ができた』

アインの呟きに、念話の向こうからぐつと息を飲む声が聞こえた。きつと向こうで彼

女はお人好しにも真剣に親友のために深く悩み、表情を歪めているのだろう。非情な決断を迫られる組織の歯車の一部となるにはまだ彼女は若すぎ、真正面から責任を重く受け止めてしまっている。

嗚咽を漏らしながら、リンディは念話越しに涙声で何度も謝罪の言葉を繰り返す。

『……………ごめんなさい、アイン……。貴女の気持ちはわかってはいるはずなのに、私は……私………!!?』

「…………泣くな、友よ。お前はもう十分私に時間をくれた。……十分、共に戦ってくれた」
まるで我が事のように泣く親友に呆れたように苦笑しつつ、アインは決してつられまいとぐつと唇を引き結び決壊しそうな感情を必死に覆い隠す。

もう、これ以上彼女に迷惑はかけられない。これ以上彼女に背負わせようものなら、きつと彼女は限界を迎えて心身ともに壊れてしまっただろう。自分のために親友がそんなことになることだけは、耐えられなかった。

そんなことになるなら、いつそ自分が傷ついた方がいい。

「……………ありがとう」

短く答えるとアインは一方的に念話を切って天を仰ぎ、長く深いため息をつく。何度彼女には迷惑と心配をかけたことか、もはや数え切れない。その半分以上が自分の無茶の尻拭いであることを考えると、彼女には申し訳なくて思わず苦笑が漏れる。

いつも自分はこうだ。一人で戦うと決めたはずなのに孤独には耐えきれず、行く先々で人を巻き込んで危険な目に合わせて、拳句何度も大切なものを失わせて。人が自分を死神と呼ぶのも納得だ。ただ存在するだけで人に不幸を、周りに悲しみを呼び寄せる、近づきたくない人間。

これで、終わりでもいい。もうあの子を巻き込む必要はない。

こんな女には、一人がお似合いだ。

その時だった。ギチギチと牙を鳴らして、怖気を呼ぶ唸り声を上げる黒い蟲の異形が通りの角から何十体も姿を現したのは。

長い触角に薄く大きな羽、緑の複眼に節くれだった四肢と外殻を持つその異形は、一般家庭のどこにでも出没しそうな黒い昆虫に似た姿をしていた。外殻は戦士の鎧にも似た見た目であり、腕も二本だけであるものの、気味の悪い昆虫が二足歩行で蠢くその様はより嫌悪感を沸き立たせる。数の多さも、並の女性の嫌悪感を沸き立たせる要因の一つとなっていた。

ダークローチと呼ばれるその異形——世界を終焉に導くべく生み出された破壊の使徒は、先だけが緑色の手を蠢かしてアインにジリジリと迫って行く。目の前にいる一匹の「餌」を喰らおうと牙を剥き、鋭く研ぎ澄ました牙と爪を見せびらかして少女を脅していた。

だがアインは、微塵も表情を変えずその異形たちを見やった。悲鳴をあげてもおかしくはない状況で、氷のような無表情で異形の集団を見つめている。

異形たちに向けられたその口が、ハツと嘲笑の形に歪んだ。

「……………もう、涙も枯れたな」

アインは気だるげにそう呟くと、懐に手を差し入れて内ポケットから何かを掴み取り、だらりと手を下げて取り出す。鋼鉄製の箱のようなそれを豪雨の中に晒しながら、次いでスカートのポケットに手を突っ込んで一枚のトランプカードに似た札を抜き出し、箱の前面のスリットに挿入して箱を自身の腰の前面に当てる。

すると、箱の片方から赤いカードのようなものが何枚も連なって噴き出し、アインの腰を一周して箱の反対側へとつながり一本のベルトへと変貌する。

アインは左手をベルトに添え、右手を自身の左前方に伸ばすとスツと目を閉じる。黒い異形を前にしながら豪雨の中佇むアインは、カツと目を開いて伸ばした掌を反転させた。

「――変身」

【TURN UP】

ベルトに添えた手がレバーに似た部分を引っ掛けて、野太い声が響くと同時にベルトの全面が展開し、カード部分がひっくり返ってスペードの紋章が現れ、アインの目の前

にベルトから放たれた青い半透明の壁が展開する。中心に大きく一本角の甲虫の全身像が描かれた角が丸い長方形——先ほどベルトに挿入したトランプのような形状の壁が、青色を揺らめかせながらアインの前に浮かんでいた。

アインが唇を噛み、生じた傷口からジワリと血を滲ませながら一步足を踏み出して浮遊する壁に身を重ねると、ぐにやりと粘土のように壁が歪んでアインに纏わりつき、形を変えて融合する。奇怪な壁は一瞬で形どころか材質まで変わり、通り抜けたアインの体を覆う甲冑と戦闘服を生み出した。

身に纏う藍色のスーツは首のチョーカーから広がり大胆に肩と背中を晒す形状で、足の付け根までだけを申し訳程度に覆い、同じ色の指が抜かれたロンググローブとハイソックスが残る肌を隠す。さらにその上に何かの革製のジャケットが纏われる。胸と腰を覆い、スカートのように下に伸び、白いラインの入ったそれは前面が邪魔にならないように切り取られている。

胸を覆う銀色の鋼鉄のプレートアーマーは分厚くアインの胸を締め付け、両手両脚を覆う装甲はトランプを重ねたデザイン。鳩尾の装甲には、カードと同じ甲虫のエンブレムが刻まれている。

顔には縦方向に伸びた菱形の面頬が装着され、両の頬にも防具が備わる。目の下を覆うそれには、まるで涙を流すかのような模様が描かれている。

白銀と群青の鎧に身を包んだアインの目が赤く光り、豪雨の中に灯る。 ゆっくりと上がって行くアインの顔。その目は、静かな怒りに燃えていた。

「……………失せろ、畜生共」

バリイツ、と青い稲妻が彼女の金色の髪に迸る。

自然の雷と同等の威力を誇る雷の魔力が唸りを上げた瞬間、本能的に危機を察知した黒蟲兵はすぐさま殺気を放って走り出した。

ここにいるのは餌ではない、敵だと認識したのだ。

「キシヤアアアアアアアアアア!!?」

「ゴアアアアアア!!?」

咆哮とともに、黒蟲兵はアインに襲いかかる。

幾体もの異形が各々の凶器を振りかざして向かってくるにも関わらず、アインは緊張も狼狽もしない。おもむろに腰に下げた剣の柄に手をかけ、銀の刃に金の莊嚴な裝飾が施された刀身を露わにしていく。

切っ先を下げたアインは異形たちを見据え、ゆっくりと足を踏み出した。バチバチと刀身にも青い稲妻が走り、電灯のようにあたりを青く染め上げる。

「——ウエエエエエエエエ!!?」

咆哮とともに放たれた、残像を刻むほど凄まじい一閃。

それは一瞬で、アインに迫っていた黒蟲兵の数体をまとめて真つ二つに切り裂いてしまふ。まさに雷速の劍技で、異形の集団を次々に屠つてしまった。

上下に、左右に切り裂かれた黒蟲兵はぼとぼと苦しみ悶えながら落下し、悲鳴をあげてアインを睨みつけるも、傷口からほとばしった雷撃によつて断末魔の絶叫へと変わった。高エネルギーの一撃を全身に受けた異形は黒く焼けていき、端からポロ炭となつて崩れ消滅していく。

だがそれで終わりではない。きつと目を鋭く尖らせたアインはまだ残っている異形たちを睨みつけ、劍により大きな雷電を走らせる。

異形たちもこれには耐えられないと察したのか、もはや敵どころか敵う相手ではないと脇目も振らずに逃走を開始する。

「サンダー……レイジ!!？」

アインはそれを決して逃さない。纏わせた雷を劍の形へと変え、逃げ去つていく黒蟲兵の背中に向かって振り下ろす。

放たれた刃は巨大に膨れ上がり、強烈な熱と光を持つて異形たちを飲み込み完全に消し飛ばしていく。曇天が昼間の日向のように照らし出され、降り注いでいた雨粒が余波を受けて蒸発させられる。

後に残ったのは、地面に黒く残った電撃の跡としゅうしゅうと湧き立つ煙、黒蟲兵が

いたとわかる僅かに白く残った部分だけだった。文字通り跡形もなく、アインに襲いかかろうとした異形たちは容赦なく消し飛ばされてしまった。

「……………」

アインは剣を振り下ろした体勢のままじつと虚空を見つめ、やがてブンと得物を振つてから地面に突き立てた。

すると視界の端で、僅かに物音がした。みれば片足が吹き飛ばされたダークローチが物陰に隠れていて、アインからなんとか逃れようと身を潜めている。はつきり言つて丸見えだったが、パニックになっていているらしい手負いのダークローチはまるで気づかない。見てくれなど関係なく、ただただ必死に逃げようとしていた。

アインはその情けない様を見やると目を細め、剣を抜いて近づいていく。異形は諦め悪く、片足で必死に体を引きずり敵から距離を稼ごうと這うようにして逃げ続ける。

その姿に、抱く感情など微塵もない。恨むなら恨めばいい、憎むなら憎めばいい。もうここへは、何をしてでもあいつの元へと向かう覚悟を決めて来たのだ。

「逃げるな。……手元が狂う」

アインは残った敵を斬り捨てようと、剣を高く掲げてゆつくりと歩み寄つていく。せめて痛みがないよう一太刀で決めてやろう、といっそ慈悲深く刃を振り上げる。

だが、唐突にその必要は無くなった。

逃げていた異形が何者かに貫かれ、背中から一本の刃が生えたからだ。一瞬のことに異形は対応できず、ビクンと体を震わせて動きを止めてそのまま項垂れる。

ずるりと異形の体が崩れ落ちるとそのまま塵となって消滅し、雨粒の中に紛れていつてしまう。

異形がいなくなったことで露わになった何者かにアインは一瞬だけ目を見開くも、やがてその何者かの正体を特定し皮肉げな笑みを浮かべた。

もう少し、奴らの相手をしていたかった。そうすれば、決着を長引かせる言い訳も、結末から今しばし目をそらす言い訳もできたというのに。

「……………探す手間が省けたよ、始」

アインは内心悔しげに表情を歪め、目の前に現れた存在に向かつてそう呟いた。

現れたのは、真つ黒な鎧に身を包んだ異形だった。ダークローチに似た姿であるようにも見えるが、明らかに格が違う。

長い触角はより太く、右の肩のみが異常に伸びた鎧はさらに固く鋭い。緑色の肉体はさらに毒々しく、胸の中心で輝く光は不穏に脈動している。顔は骸骨のように恐ろしい風貌であり、その上には体と同じ色の透明な仮面のようなものがかぶさっている。両腕に生えた鋭い鎌からは、黒蟲兵の血液らしき緑色の液体が滴っている。

「……………やはり、お前が来たか。ケンザキ」

カミキリムシに似た異形、何者の祖でもない例外的な生物・ジョーカーアンデッドは黒い目でアインを見つめ、口を開く。

人間の喉からは出せるはずのない、無数の声が混じったような不気味な声でアインに語りかける。だが、不思議と目の前の異形からは恐怖は感じなかった。見るのもおぞましい凶悪な外見であるはずなのに、アインの中に異形に対する恐怖心は微塵もなかった。

「……………始」

女騎士は初めて表情を歪ませる。悲しげに、苦しげに眉を寄せ、異形を凝視する。ギシツと歯を食いしばり、必死の表情を浮かべてアインを凝視する。

「こんな未来に繋がる前に……………、こんな結末を迎える前に……………他になかったのか!!? 私たちにはつ……………もつと、選べる未来があったはずじゃないのか……………!!?」

「……………それは、あまりに傲慢な問いだぞ。ケンザキ」

ジョーカーアンデッドは厳しい口調で、しかしどこか哀れむような声でアインに語る。

「俺たちは所詮、ゲームの駒だ。俺という存在がここにただで、人類の敗北は決定してしまっている。……………それを防ぐためには、俺を封印する他にない」

「ッ……………」

アインは唇を噛み締め、俯く。
わかつていた。そんなことは。

わかつていて、これまでずっと見ないふりをしてきた。この優しい異形を失いたくなくて、奪わたくなくて、ずっと戦うことをためらってきた。

そんなことに周りの者たちが納得するはずもなく、なんども仲間たちとぶつかった。彼を傷つけさせまいと、自らが仲間たちの敵に回ったことさえあった。傷つけたくない者たちだったはずなのに、自分で全て壊す寸前まで至ってしまった。

結果を見れば、誰も失わずに済んだ。だがその決断ののちに至った今のこの状況は、最悪というにふさわしかった。

そうだ。こんな状況になったのは、全部自分の弱さが原因だ。

「ケンザキ、これは運命だ。……俺たちは、出会った時から戦うことが決まっていたんだ」

「……………嫌だ嫌だと駄々をこね、問題を先送りにしていた罰か、今のこのザマは」

雨雲を仰ぎ、アインは両目を手のひらで覆ってため息をつく。この惨状は他の誰でもない、自分自身が引き起こしたものだということだ。情けなくて涙が出る。

「……………うまくいかないな、何事も」

「……………そうだな」

力なく笑うと、頬を何か熱いものが伝つていく。何度目だろうか、この豪雨に感謝し
そうになるのは。

今ならきつと、どんなに涙を流したつて誰も気付きはしないだろう。たとえそれが、
目の前にいるかの男であつても。

「——決着をつけよう、始……いや、ジョーカーアンデッド」

そう言い、アインは左腕に新たなデバイスを装着した。剣のホルダーを展開してカ
ドの中から一枚——二頭の山羊が円環を描くQと◆?のマークが入ったカードを抜
き取ると、左腕のデバイスにセットする。

【アABSソORブBソ クQUEイENン】

ベルトと同じ低い男性の電子音声が響き、デバイスが起動する。アインはいつでも
一枚の——三本角の甲虫が描かれたKのマークが入ったカードをデバイスに刻まれ
た溝に切り裂くように読み込ませた。

直後、彼女のデバイスが青電を走らせ、眩い光を放った。

【エEVウOLリUTシIONン キKンINGグ】

アインの体を、金色の光が包んでいく。ベルトから13枚の光が飛び出し、彼女の両
肩、二の腕、足、そして胸に重なつて新たな鎧を構成する。体の各所に13体の獣のレ
リーフが飾られた鎧を纏い、腰からは黒い生地金の刺繍の入った腰布がはためく。イ

ンナーもバリアジャケットも黒く染まり、高貴な金のラインが入ったものへと変わる。不意に横に伸ばした彼女の手にも、一筋の光が灯る。大きな刃に、赤いラインの入った彼女の身の丈すら越えるほどの巨大な剣。明らかに女性の力では持ち上げることすら困難なはずのそれを、アインはまるで木の枝でも振り回すようにして持ち上げ、地面に深々と突き立てる。

これこそが彼女の持つ、王の力。

目の前の全ての敵を滅ぼす最強の力。

本気だった。本気でアインは、目の前の男を殺す気でいた。

「うおおおおおおおおお!!??」

まるで獣のような雄叫びと共に、アインは巨大な金色の剣を振り回し、ジョーカーアインデッドに斬りかかる。足を踏みしめると同時に、コンクリートの地面は爆発でも起きたかのように陥没し、破片が木の葉のように吹き飛んでいく。

しかしジョーカーアインデッドも右腕の鎌を振るい、アインの剣撃を受け止める。渾身の力で振るわれた斬撃はジョーカーアインデッドをわずかに後退させるだけで止められ、二人の間で生じた衝撃が雨粒を吹き飛ばして空間を作り出す。

全ての音が、消える。

騎士と異形。二つの存在しかない世界で、鋭い刃が互いに軋みを上げてぶつかり合

う。互いの力は完全に互角、完全に拮抗したまま刃が火花を散らし、嫌な金属音が響き渡る。

金属音の余韻が響き、次いで巻き上げられていた雨粒が一気に両者の頭上に降り注ぐ。アインとジョーカーアンデッドは一瞬で水浸しになり、轟音の中に包まれる。

「——アアアアアア!!?」

アインは全力で大剣を振るい、ジョーカーアンデッドの鎌を振り払う。そして再び剣を振るい、バランスを崩したジョーカーアンデッドの首を狙う。

ジョーカーアンデッドは左腕の鎌を振るって弾き、反対にアインの懐に入って右腕で斬りつける。アインは籠手でそれを防ぎ、上から押さえつけてジョーカーアンデッドの動きを制限させると振り上げた大剣を振り下ろす。

一瞬の不意をつき、ジョーカーアンデッドはアインの腹に向かって蹴りを放ち、女騎士の斬撃を躲す。アインは水たまりの中に転ばされるも、飛沫を上げて転がるようにして立ち上がる。

時間にしてわずか数秒。その間に、何度も致命傷となりうる一撃が加えられ、何度も防がれていた。

豪雨の中、異形と騎士の振るう刃が火花を散らし、曇天の中を明るく照らし出す。守り続けた想い、望んだ願い、抱いた祈り、自らが望んだそれら全てを無にする戦いを続

け、アインの心はもうボロボロに傷つき疲弊しきっていた。

「うつ………うああああああ!!？」

泣き叫んだアインは右腕で大剣を振り上げ、左手の中に5枚のカードを召喚する。金色に彩られたそれらを、一枚ずつ大剣の柄部分についたギミックの中に挿入していく。

【SPADE・10, SPADE・JACK, SPADE・QUEEN,
SPADE・KING, SPADE・ACE】

5枚のカードが大剣の中に取り込まれ、「役」が揃う。切っ先を頭上に向けて大剣を掲げたアインは、柄を両手で持つて構える。その途端、鎧のレリーフが金色の光を放ち、大剣の刃に吸収されるように重なって収束していく。

【ROYAL STRATE FLASH】

数々の敵を屠ってきた、黄金の騎士の最強の奥義。

その全てを、アインは目の前の異形へと向ける。

「ジョオオオオオカアアアアアアアアアアアア!!？」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!？」

眩い金色の光沢を放つ13の異形の力と一体化した王の鎧を纏った少女と、何者とも交わらぬ唯一の存在たる黒く醜い怪物。出会った時から、道が交わった時から戦う運命にあつた二人の咆哮が交じり合い混ざり合い、互いの放つ殺気と気迫に合わさって雨粒

を弾き飛ばす波動へと変わる。

親友^{とも}を斬る——その覚悟を決めた二人はもう止まらない。人類の未来を背負い、宿命と因縁を抱えた両者が掲げたそれぞれの得物の刃が雫を斬り裂き、生じた飛沫が宙に斬撃の軌跡を真つ直ぐに描いていく。

究極の破壊の力、金と黒の光を纏った二つの刃が激突し、焰が爆ぜ、混ざり合いそして。

あらゆるものが、金色の光に包まれていった。

第I章 海にて鳴く声に誘われ

1. 少女の夢

——わたしがその人のことを夢で見る時は、決まつてわたしは一人で泣いていた。夢の中のわたしはいまよりもずっと小さくて、暗い顔で寂しい公園のブランコに乗っていた。誰もいない公園で一人、声を殺して泣いていた。

その時のわたしは、とても辛いことがあつて、一人で過ごすことが多かつた。お家にも何もさせてもらえなくて、そのせいで必要とされていないような気がして、いつの間にかお家にわたしの居場所がなくなつてしまつたような、そんな気がしていた。なんでもいいから何かお手伝いがしたくても、「いい子にしててね」と拒絶されて、求められていないと思えてきてしまつた。

お母さんは忙しくて甘えることが許されなくて、お兄ちゃんはどこか怖くて近づけなくて、お姉ちゃんも落ち込んでいて話しかけるのをためらつちやつて。

わたしにできたことは、みんなの邪魔にならないように一人でいることだけだつた。みんなに迷惑をかけない、「いい子」であれば、それが一番みんなのためになるんだつて、そう思つていた。

でも、やっぱり悲しみは堪えられなかった。どんなに苦しい気持ちを抑え込もうとしても、気を抜いたら爆発してしまいそうな、溢れ出してしまいそうな感覚に陥っていた。だからわたしは、誰にも見られないように、一人で泣いていた。誰からも心配されないように、誰にも迷惑かけないように、たった一人でブランコに腰掛け、暗くなるまで過ごしていた。

「悲しげな声をあげている君は、一体どうしたの？」

そんな時、決まってあの人は現れるのだ。

記憶が曖昧なせいかもしれないがもうあんまり顔が思い出せないけど、金色の髪に、赤い瞳が印象的で綺麗な人だったことは覚えていて、忘れることはない。その人はぐしぐしと目元を拭うわたしの前にしゃがみ込んで、優しい微笑みを浮かべながら頭を撫でてくれた。

「そんなに強く目をこすつてはいけないよ。ほら、綺麗な顔が台無しじゃないか」

不器用な手つきで撫でてくれるその手のぬくもりが嬉しくて、わたしは涙を止められなくなったことを覚えている。

その人は私の頬を伝う涙を拭くと、わたしと視線を合わせて覗き込んできた。その瞳はまるで、宝石のように綺麗な光をたたえていた。

「何か、辛いことがあったんだね? …それで、一人で我慢して、抱え込んでいたんだね」
あまりにも綺麗で、近寄りがたい魅力のあったその人の顔に甘えるような関係があったという覚えは、わたしにはなかった。なのに、私はなぜかその人に向けて自分の悲しみや苦しみを吐き出していた。

この人になら全部打ち明けてもいいと思えるような安心感が、その時のわたしの心を軽くさせていた。

「……君はどうも、優しすぎるね。誰かのことを思うあまり、自分の心が傷だらけになっていることに気づかないでいる。それでは、君が救われない」

その言葉に、わたしはボソボソと言い訳のように小さな声で反論していた。

誰かに迷惑をかけるくらいなら、誰かの枷になってしまいうくらいなら、わたしは誰の邪魔にならないようにしていたほうがいい。わたしなんかのことよりも、お母さんやお兄ちゃんたちの方が大事だから、みんなのためなら、いくらだって我慢できる、と。

そんなことを言ったと思う。

「それは確かに、とても大切なものだ。自分以外のだれかのためにそんなにも必死になれる……誰にでもできることじゃない。だが、自分を大切にできないのでは、君のことを思う人たちが悲しむことになる」

そう言われて、わたしは自分の心が締め付けられるのを感じた。みんなのためになっ

ていると思ったことが、実はみんなを悲しませることになるなんて。

でも、そこまで言われてもわたしは迷っていた。もし、その人が言うようにお母さんたちに構って言って言っても、本当に邪魔に思われるかもしれない。嫌われてしまうかもしれない。

そうわたしが呟くと、あの人は困ったようにため息をついて、わたしの頭をポンポンと優しく叩いて来た。

「……大丈夫。私が君を助けてあげる」

その人の突然のセリフに、わたしはきよとんと首を傾げた。

あつげに取られているわたしをおいたままあの人はにっこりと笑みを浮かべると、すつくと立ち上がってわたしの前で姿勢を正し、恭しく手を差し伸べて来た。それはまるで、絵本の中の騎士様がお姫様の前に傳っているようで、あの人の美しさと相まって幻想的に見えた。同時に、わたしがお姫様の位置にいることがわかって、顔が真っ赤になったことを覚えている。

「君の願いを、私が叶えてあげる。君ができないことを、私が代わりにやってあげる。だから、もう泣き止んでおくれ？」

顔を真っ赤にしながら戸惑っているわたしに向けて、あの人はどこか悲しそうな、それを無理やり押し殺したような笑顔を見せてこう言った。

「安心して。私は——魔法使いだから」

◆ ◆ ◆

「……——ンお姉ちゃん!!？」

自分の声で、目が覚めた。

ぐっしよりと寝汗をかき、ベッドの上で荒い呼吸を繰り返している少女——高町なのはは、自分の部屋の天井を呆然としながら見上げていた。

気付けば虚空に向かって手を伸ばし、何かをつかもうとして空を切っていた。

「……また、あの夢だ」

気づけば見ている、最近になって見る頻度が増して来た不思議な夢。

顔はよく覚えていない。本当にあったことなのかどうかもわからない。なのにどこか現実的で懐かしい気がして、それでいて、思い浮かべるたびに胸がきゅんと締め付けられるような気がした。

言葉ではどうにも言い表せない気持ちを持って余したまま、なのははベッドの上でぼんやりと天井を見上げていた。

「なのはー、朝ごはんよー」

そうしてしばらく過ぎていると、階下から母が呼ぶ声があった。その声にハツと我に返り、目覚まし時計に目を向けてみればすでに時刻は予定をだいぶ過ぎていていることを示している。

「うにやつ!?? ね、寝過ぎしちゃった!??」

慌ててベッドから転がり落ちるように這い出し、寝間着を脱ぎ捨てて学校の制服を取り出し、袖を通す。この時刻は皆、朝食を終えて店の準備を始める頃だ。喫茶店を経営している我が家は、いつも準備があるために朝が早いのだ。

大急ぎで支度を終えてダイニングへと滑り込むと、そこにはやや呆れ顔の母の桃子と父の士郎が待っていた。

「おはよう、寝坊助さん」

「おはよう、昨日は夜更かしでもしたのかい?」

二人はまだ朝食を終えていないようで、なのはの分の朝食の他に兄と姉の分も揃えてテーブルに並べている。姉である美由紀はいつも通り、道場にいる兄の恭世の方へ迎えに行つたのだろう。

「ご、ごめんなさい。ちゃんと起きたんだけどぼんやりしちゃって……」

「……もしかして、またあの夢を見たのかい?」

なのはの表情に何かを感じたのか、士郎がどこか真剣な表情でなのはに尋ねた。いつ

も朗らかな雰囲気を放っている士郎には珍しく、その目にはまっすぐな鋭さがあるように思えた。

桃子もどこか不安げで、影がありながらなのはを心配するような眼差しを向けていたため、なのはは戸惑いながらも頷いた。

「う、うん。…でもやっぱり思い出せないの。あの人が誰なのか」

「……そうか」

士郎はやや険しい顔で宙を見つめていたが、不思議そうに見つめて来るなのはに気づきすぐに破顔する。桃子も陰のある雰囲気を消し、台所へと向かっていた。

「あ、じゃあ、お兄ちゃんたち呼んで来るね？」

なんとなく居心地の悪さを感じて、なのはは兄達のいる道場の方へと向かう。

以前夢に見たあの人のことを話してから、両親や兄達はさっきのようになることが多かった。何か知っているのは確かだが、なのはに気を遣ったのか不穏な雰囲気を隠そうとしているようで、なのはにはそれが逆に気になって仕方がなかった。

とはいえ自分から尋ねるのは気が引け、聞く気になれなかったことも確かだ。もっと勇気が欲しいと思ったが、所詮は夢であるためそんなには気になつていなかった。

若干悶々としながら、なのはは二枚のタオルを持って恭也達のいる道場に向かう。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん。朝ごはんできたってー」

戸を開けると、素振りをしている美由紀と姿勢の確認をしている恭也の姿があった。「お、やつと起きたか寝坊助」

「おはよう、なのは。寝癖がまだついてるよー」

「うん、おは……つて、えっ!? 本当に!?」

二人に振り向きざまに言われ、なのはは慌てて自分の髪に触れた。確かに感じた乱れに、赤くなりながら必死に直す。

「もー、お父さん達も言ってくれたらしいのに」

鏡がないため苦労したが、美由紀が手伝ってくれたためにすぐに寝癖は治った。

美由紀にセットしてもらい、自分でも出来を確認しているとふと、恭也がなのはを凝視しながら何かを考えていることに気づいた。なのはの顔に、何か違和感を感じているかのような目だ。

「……………」

「ん? どうしたの、お兄ちゃん?」

「恭ちゃん?」

なのはや美由紀に心配そうに見つめられても、恭也の表情はどこか硬い。

しばらくしてから、恭也はフツとなのはから視線を外し、誤魔化すような笑みを浮かべた。

「……いや、なんでもない。気のせいだ」

「? 変なお兄ちゃん」

不思議に思ったがそれ以上は聞かず、なのはは兄達と共に道場を退出して、高町家のダイニングへと戻っていく。

自宅に戻り、ダイニングで父と母に迎えられてから指定の席に着くと、三兄妹はテーブルを中心に向かい合った。

「おまたせ、父さん」

「ああ、じゃあ改めて」

「はい」

一家の大黒柱の合図で、5人は一斉に手を合わせる。テーブルの上に並べられた朝食に、朝の活力を作る命に感謝を込めて、大きな声で告げる。

「いただきます」

「いつてきまーす!」

朝食を終え、学校指定の鞆を背負うと、なのはは小走りで家から出発する。

寝坊のせいかな少しだけ予定より遅れてしまった、友達はまだ先にバス停についてしまっているだろうか。

スクールバスが停車するバス停に急ぐと、そこには金のロングヘアーツーサイドアップにした少女とウエーブがかつた紫の髪の少女が待っていた。

「アリサちゃん、すずかちゃん、おはよー!」

「あ、おつそいわよなのは!!?」

「おはよう、なのはちゃん。寝坊しちゃった?」

プンスカと怒る金髪の少女アリサ・バニングスと苦笑する紫の髪の少女月村すずか。なのはと同じ学校に通う、仲良しの二人である。

なのはは駆け足で二人の元に近寄ると、ゼエゼエと洗い息を吐きながら遅れたことを謝罪する。アリサは憤慨しながらもさりげなくなのはの背を撫でて落ち着くまで待ち、すずかも親友の素直じゃなさに苦笑する。

そのうちやってきたバスに乗り込み、なのはたちは語りながら学校まで揺られて行く。

愛する家族に送られ、親友達と朝の挨拶を交わし、高町なのははいつも通りの平和な毎日を送るのだった。

送る、はずだった。



「……この街に来るのは、久しぶりだな」

海鳴の街を見渡せる崖の上で、僅かな笑みを浮かべた一人の女が呟いた。

傍に止めた青いバイクにもたれかかり、群青色のライダースーツを纏った背の高いグラマーな女は、長くボリウムのある金色の髪を風に揺らして、ルビーのように煌めく赤い瞳で街を眺める。長い睫毛の下の瞳は、眩しげに日の光を反射して輝く広い海に釘付けになっていた。

空を舞う鳥の鳴き声風が森の木々を揺らす音、遙か先に見える海から漂ってくるのであろう、ほのかに香る潮の香りに包まれていると、以前この街にきたときの記憶が徐々に蘇ってくる。

様々な出会い、対話、そして別れ。それらはいずれも心昂らせる喜びの記憶などではなく、苦々しく胃の腑に重くのしかかる味を思い出させるものだった。

思わずしかめっ面になるも、深く呼吸を繰り返して落ち着かせ、無表情を保つ。正直顔を合わせ辛くて気がすまないが、これから尋ねる場所にそのような表情は向けられない、せめてポーカーフェイスを保ったまま行かなければ。

「……行くぞ、ブルースペイダー」

〔Yes, sir〕

女は傍においたバイクに告げると、返ってきた野太い電子音声の返事もおぎなりに、

ひらりと乗り慣れたシートに跨って長い髪をまとめ上げていく。髪がはみ出ないよう
にヘルメットをかぶると、女は前屈姿勢で前方を見据え、ギアを何度か回す。

グオングオンと唸りをあげたバイクは女を乗せると、タイヤを滑らせて猛スピードで
山道を駆け抜けていった。

2. 交わる道

「……将来かあ」

弁当箱の蓋を開き、箸を持ったままなのはは虚空を見上げて呟いた。

「ん？ どうしたのよ藪から棒に」

「もしかして、今日の授業で先生が言ってたこと？」

アリサとすずかがおかずを口にしながらなんのことかと振り向くも、なのはは「ん」とぼんやりしたまま一人考え込んでいる。

学校の屋上で昼食中の彼女が考えているのは、今日学校の授業で担任教師から渡された問い。その内容は、「将来何になりたいか？」というありふれたもの。

他のクラスメイトは色々と考えていた。野球選手や画家やミュージシャンなど夢にあふれたものや、医者に弁護士にキャビンアテンダントなど妙に現実じみたものまで幅広く、9歳の少年少女たちは夢見ていた。担任教師はその答えに一つ一つ嬉しそうに頷き、微笑ましげに聞いていた。

だがなのはは、それに答えを出すことができないでいた。何の仕事をしたいかと尋ねられても、はつきりコレといったイメージが湧かなかったのだ。

「そう深く考えなくてもいいんじゃない？　いまの私たちでしつかり考えてる子ってそんなにいないでしょうし」

「私も、そう思うよっ。」

「うーん……」

アリサ達はそう言ってくれるが、なのはにはどうにも看過できないようだった。

悩んでいるなのはに、二人も改めて自分の将来に思いを馳せてみる。

「そうねえ……強いて言うなら私は、両親の会社を継ぐからまず経営の勉強かしらね」

「私は……機械に興味があるから工学系かなあ？」

同じ課題を受けたなのはの友人たちは少し悩みながらそう答える。夢を思いつくというよりも、将来の姿をどう言い表すか手間取っただけのようだ。

……正直、もつと子供らしい夢を持ってよと言われそうだが、それを言及するものはこの場に誰もいなかった。

なのははその答えを聴きながら、やはり自分には思いつかないと肩を落とす。アリサたちはその様子に、かなり本気で悩んでいるようだと察して真剣に聴きに回った。

「アンタの場合、翠屋の二代目じゃないの？」

「うん。よくお家の手伝いとかしてるでしょ？」

「ん〜そうなんだけど、もつと他に私のできることはあるんじゃないかって……」

弁当の中の白い米を箸ではしたなくつつきながら、なのはは考える。だが、次第にその表情がどんよりと暗く沈み始めた。何か嫌な想像でもしているらしい。

「……私って取り柄とかあんまりないし、運動だって苦手だし、あんまりできることないのかもだけど……」

「このバカチンが！」

「うにゃ!?」

ネガティブになっただんどん小さくなっていくのはに、アリスが自分の弁当に入っていたレモンの輪切りを投げつけた。

「アンタ私より理系の成績良いでしょうが！ どの口がそんなこと言ってるのよ！」

「にゃあく引つ張らないでええええ」

そのままアリスに頬を左右からつねられ、絶妙な力加減でいじられるのはに、すずかは苦笑する。

悩める少女のそんな迷走は、放課後帰宅の時間になるまで続いたのだった。

◆ ◇ ♡ ♡ ♡

「……うーん。難しいなあ」

「アンタ、まだ迷ってたの？」

授業を終えたなのはアリスとすずかと一緒に自宅帰り道に就く。友達との会話を

楽しむために、帰りは行きとは違い徒歩での帰宅なのだ。

だが、なのはは会話に花を咲かせることなく、なおも昼間の悩みを引きずっていた。「だって……なんか気になっちゃったんだもん」

唇を尖らせて言い返すもアリサは呆れたまま、すずかは苦笑するままだ。

するとふと、アリサがどこか意地悪な笑み度浮かべてなのはにジト目を向けてきた。

「ははーん。あんたさてはまたあの人の夢見たわね？」

「うにゃ!!?」

凶星だったようで、なのははビクツと体を震わせて立ち止まった。どう言う原理か、ただのツインテールがフーツと猫のように逆立っていた。

「な、何でわかっ……!!?」

「あんたがそうネガティブになるのって、例の夢が関係してるって相場が決まってるのよ」

「なのはちゃん、分かりやすいもんね」

友人たちの指摘に、なのははポフンと顔を真っ赤にして俯く。しばらく「あー」だの「ウー」だの意味不明なうめき声を漏らしていたかと思うと、ちらりと二人に視線を向けた。

「……そんなに分かりやすい？」

「ええ、割と」

「顔に出ちやつてるもんね」

なのは顔がもう一段階深く染まる。自分の感情が他人にバレバレというのはなかなか恥ずかしいものだ。

どうにか火照った頬を冷ますと、なのはは虚空を見上げながら夢の中の人を思い出す。どうして何度も夢に見るのかわからないが、その人に自分が抱いてる感情は何と無くだがわかつている気がした。

「……憧れてるから、かな。よく覚えてないけど、すごく綺麗な人で、夢の中で勇気をもらった気がするの……できるかどうかはわからないけど、あぁなれたらなって」

「ふーん……」

「憧れかー」

わかったようなわからないような、そんな曖昧な感覚でアリスとすずかはなのはの抱いている想いを反芻する。

だがアリスは、なぜかニヤニヤといやらしい笑みを向けてなのはの顔を覗き込んできた。

「……お嬢様、恋する乙女の顔になってますわよ?」

「ええっ!?」

「にやつ!!? ち、ちがうよ!!? そんなんじゃないよ!!?」

「なのはちゃん……そつちだったんだ」

「すずかちゃん!!? そつちでもどつちでもないよ!!? わたしは女の人が好きとかそ
ういうことじゃないよ!!?」

「ゴメンねなのは。あたし、アンタとは仲の良い友達でいたいから……」

「アリサちゃん!!? 距離を取らないでよ!!? 狙つてないからね!!?」

ケケケ、と淑女にあるまじき笑い声をあげるアリサと悪ノリするすずかにいじられ、
また真つ赤になったなのはが必死に弁解する。おかげで悩んで沈んでいた気分が吹っ
飛んだが、代償がこの羞恥では釣り合わない気がした。

憤慨し、両手を上げて抗議するなのは。アリサとすずかはそんなのはに謝りながら
ヨシヨシと頭を撫でてやる。完全に年下の子ども扱いだった。

もー、と恨めしげに睨むなのはをなだめ歩いていると、いつしか着いていた空き地か
ら騒がしい少年たちの声が聞こえてくる。草野球をしているらしく、威勢のいい掛け声
や甲高い打撃音が聞こえてきている。いつも通る道でよく耳にしているため、なのは達
は尺的にすることもなく談笑しながら通り過ぎようとしていた。

だが、不意に一つの打撃音のちに悲鳴に似た怒号が聞こえた。つられて横目を向け
たアリサは、暴投したのかあらぬ方向——ちようどなのはに直撃するコースへと飛ん

でくる硬式ボールに気づいた。

「!?? なのは、危ない!!?」

「えっ……」

慌てて注意するも、すでにボールはなのはの目前にまで迫っていた。気づいたなのはあつと声を上げて立ち止まり、とつさに両手を前に出して顔をかばった。

すずかやアリスがなのはに手を伸ばすも間に合わず、なのはは目を見開いたまま両手で防御の体勢をとる。そして衝撃を覚悟したなのはに球体が迫り。

バシン、と空気が破裂するような音が響いたかと思うと、ふわりと小さな風がなのはの前髪を揺らした。

呆然と凝視する先にあつたのは、自分の顔面のすぐ前で止められた野球のボールとそれを止めているグローブの嵌められた手。視線を横にずらせば、大きく手を伸ばしているひとりの女性の姿が目に入った。

「……………」

ボールを受け止めてくれたのは、背の高い、あまりにも美しい女性だった。

髪は金糸のように艶やかで、獅子の鬣のように粗雑に纏められているが、それが逆に野生的な魅力を放っている。瞳の色はルビーのように深い光を放つ赤で、長い睫毛の下から煌めきを放っている。

身にまとっている群青色のライダースーツとジャケットは内側からはち切れんばかりに胸元や臀部が膨らんでいて、同性であつても視線を引き寄せて止まなかつた。

何よりも、鋭い視線や凜とした表情、身にまとっている雰囲気があるで劔のようで、近寄りが見たい感覚を与えていた。

「すみませーん！ 大丈夫でしたかー？」

「Be careful!」

女性は謝りにきた少年たちに軽く注意をすると、ボールを投げ渡す。見事なコンントロールでボールは少年のミットのの中に収まり、少年はペコペコと頭を下げてから仲間達の元に戻って行つた。

なのははそんな彼女の姿にポーツと見とれていたが、ややあつてからようやく覚醒する。つい見とれてしまったが、助けてもらつたのにお礼も言えていない。

「……あつ、ありがとう、ごさいます！」

「Don't worry about it」

どもりながら頭を下げると、すぐに凜とした耳に心地のいい声が返ってくる。

「Excuse me？」

金髪の女性は、朗らかな笑みを浮かべながらなのはに向かつて尋ねてきた。銀のように澄んでいて、涼しいアルトボイスを用いて、少女たちを安心させるように話しかける。

だが、慣れない英語で話しかけられたなのは咄嗟に反応することができなかった。ビクツと驚かされて飛び上がった猫のように肩をはね上げ、その場に硬直して女性を凝視してしまう。

「Do you know where Midoriya is? I have lost the map that is written where it is」

「ふえ!?? えっえっ、えっ、ええつと……!??」

女性のかけた質問は、冷静になれば対応できるくらいの簡単なものだったが、完全にテンパっているのは完全に気圧されていた。

「なのは、アンタ落ち着きなさい」

アリスに背中を軽く叩かれ、なのははようやく我に帰る。

そうだ、落ち着かなければ。話しかけている女性はじつとなのはが質問に答えてくれることを待っている。ここは、最近必須科目になった英語の授業で学んだ知識をフル活用して答えなければ。

隣では日本語も英語もすらすら話せるバイリンガルなアリスが助け舟を出そうかとスタンバイしているが、なのはは自分なりのプライドを守るためにそれを拒否する。

まだ不慣れな知識を必死に記憶の中から引き出し、なのはは若干おののきながら女性

にまつすぐ向き直った。

「えつ、えつと……みつ、みどりやいず——」

「——ああ、すまない。話しかけるときはつい母国語が出てしまったな」

「日本語喋れるんかい!!?」

無駄に気を張っていたなのは思わず、その場でコケそうになった。

しれつと流暢に話し始めた女に思わずアリサは初対面だということも忘れて声をあげてしまう。失礼にも思えたが、意外にも女はキラキラと目を輝かせて興味深そうにアリサを見つめてきていた。

「おお……これがジャパニーズツツコミ。いいものを見せてもらったぞ、少女よ。……できればもう一度やってみては」

「絶・対・嫌よ!!?」

「そうか」

ピキピキとこめかみに血管を浮き立たせながらアリサは拒否する。誰が好き好んで見ず知らずの人間に芸人扱いされなければならぬのか、と憤慨する。

女性はカラカラと笑うとアリサをなだめるようにポンポンと頭を撫でる。

「すまないね。可愛い子を見るといじりたくなる私の悪いくせなんだ。許してくれ」

「あう……」

美人に面と向かって可愛いと言われ、なのはの頬が照れて赤く染まり、同時にいじられていたということがわかって羞恥が湧き上がってくる。

「……で？ 結局何の用なのよ？ 冷やかし？」

「さつき尋ねただろう。翠屋に行きたいんだが、つい地図をなくしてしまつてな。場所を知らないか？」

「はっ、そ、そうだったの！ みどりやいず、まいほーむー！」

「もう英語はいいよ……つて、君の家？」

不意に耳にした言葉に、女性の目がわずかに見開かれた。

「……つてことは、君は」

「ふえ？ それがどうかし……つ！」

硬直した女性に訝しげな表情を向けるなのはの肩が、不意にピクリと震えた。バツと背後を振り返り、眉を寄せて辺りを見渡し始めた。

なのはの奇行に気づいたアリサが、片眉を下げてなのはを凝視する。

「……？ どうしたのよ」

「……いま、何か聞こえなかつた？」

「え？ 何かつて……何よ？」

「何だろう……声、みたいなの？」

「声？」

何か聞こえただろうか、とアリサとすずかが首を傾げていると、だんだんと不安げな表情になってきたのはがだつと脇目も振らずに走りだした。

アリサとすずかは一瞬呆気に取られていたが、しばらくしてからハツと我に帰り、慌ててなのはの後を追っていった。

「あつ!!? ちよつとなのは! どこ行くのよ!!?」

「な、なのはちゃん! 待ってえ!!?」

道には女性だけが取り残され、どうしたものかと頭をかく。ようやく目的の場所を知っている者を見つけたのに、詳しく聞く間も無くいつてしまったのだから当然とはいえ当然だが、その女性の様子はどこか違っていた。

どこか懐かしげで、どこか満足げで、一言では言い表せられない複雑な表情になった女性が、少女達の背中を見つめていた。

「……………そうか。大きくなったな、なのは」

走り去っていく少女の背中を見つめながら、感慨深げな表情になった女性は、そんな小さな眩きをこぼした。

「うわっ……………これはひどいわね」

警察が境界線を張り、隔離している現場を見てアリサが思わずこぼした。

普段ならばボート遊びやデートに興じる人々が集う静かな公園が、今や見るも無残に荒らされている。ボートは砕かれ、木々はへし折られ、美しい景観は滅茶苦茶にされている。

まるで巨大な獣が荒らしたようで、なのは達は思わず背筋をぶるりと震わせた。

「何だろう、こんな風になるなんて……」

「…ふむ、これは確かにひどいな」

「うわっ!!?」

背後からいきなり聞こえて来た声に、アリサは慌てて振り向いて距離をとった。いつの間にか追いついて来たのか、先ほど出会った女性が興味深そうに事件現場を眺めていたのだ。

「あんたいつからそこにいたのよ!!?」

「いまさっき来たところだ。何だか気になってな」

悪びれることなく腕を組む女性に、アリサは思わず呆れた表情になる。

「別にあんたが来る必要なんて……ってなのよ!!? あんたまた……!」

「待ってってば!」

話しているうちに、再びなのはが何かに引き寄せられるように走り出してしまった。

もう、と頬を膨らませるもアリサは急いでなのはの後を追っていき、すずかもその後が続いていった。

「……忙しい子だな」

休む間も無くいつてしまった少女たちにくすりと笑うと、女性は不意に表情を変え、鋭い目で事件現場を見据え始めた。

そんな女性を一人放置し、アリサとすずかは全力で駆けて行くのはを追いかけ、林の奥へと入り込んでいった。なのははどちらかといえば運動は苦手なはずなのだが、そうとは思えないほどの俊足で歩きづらい道を抜けていくため、ついていくのが大変であつた。

「ちよつと、さつきから何なのよ!? ……つて本当に何よそれ?」

そんな先で不意に立ち止まったなのはにアリサは不満をぶつけようとするも、振り返った彼女の腕の中にあつた存在に訝しげな表情になつた。

なのはが抱えていたのは、一匹の細長い体を持つ小動物だつた。淡い黄土色の体に短い手足、小さな耳とふさふさとした尻尾を持ったイタチ科に似たその生き物は、ぐつたりとしたままなのはの腕の中に包まっていた。

「ここに倒れてて……どうしよう、怪我してるみたい!」

よく見れば、イタチの体にはどす黒く固まった血の跡が残っていて、息も絶え絶えに

なっている。何かの要因で負傷し、弱っていることは確かだった。

一瞬あつけに取られていたアリサだったが、すぐに落ち着くと狼狽しているのはの肩を押さえた。

「と、とにかく落ち着きなさい！　すずか、近くに動物病院あつたわよね？」

「う、うん。今日は確か開院してるはずだよ……？」

すずかも狼狽しているのかどもりながらも、自分がいつだったか利用した病院があることを同意し、詳細な場所を思い出す。

「じゃあ急ぎましょう。なのは、あんたちやんとその子抱いてなさいよ！」

「う、うん！」

アリサに叱咤され、なのははようやく冷静さを取り戻す。腕に抱いた命を決して離すまいと強く抱きしめ、なのは達はすずかの案内で林を抜け、専門家の元へ急ぐのだった。

「……この残滓、やはり魔法………しかもこの濃度はかなり高位のもの……」

なのはたちが走り去って数分後、事件現場から少し離れた池のほとりに膝をついた女性性が、厳しい目で周囲を観察していた。

赤い瞳は爛々と輝き、瞳孔は大きく開いて全てのものを捉えるかのように蠢いている。風は風いであるが、彼女の髪はまるで粘つく風に吹かれているかのようにざわざわ

と揺れていた。

先ほど見せていた雰囲気とはまるで別人の、抜身の刃のような触れることを憚るほどの気迫がいまの彼女からは放たれていた。

「厄介なことにならないければいいが……それにしても」

立ち上がり、ため息をつく。すぐに鋭い気配は身を潜め、女性はどこか気だるげに辺りを見渡した。

「……あの子達を見失ってしまったな」

♠ ◆ ♡ ♣

「……フェレットに似てるけど、見たことがない種類ね。ちなみに男の子だわ」

なのはたちの見つけて来た生物を診察した獣医はそう言いつつも、その生き物の負傷が大したことがないことに安堵しなのは達に頷いて見せた。

「うん。命に関わるほどじゃなくてよかった。このまま安静にしていればすぐに元気になるわ」

「良かったあ」

獣医の診断結果になのはたちはようやく安堵する。あの生き物のか細い呼吸がいつ途切れるか、気が気でならなかったのだ。

「だから言ったじゃないの。慌てすぎだって」

「一番オロオロしてたのはアリサちゃんだと思おうよ？」

「バツ、バカにしないでよね!!？」

頬を染めたアリサに、なのはとすずかはクスクスと笑みをこぼす。きつい口調で誤解されがちだが、彼女は誰よりも優しいのだ。落ち着き払っているようだが、内心は同じだけ慌てていたことだろう。

「ふふ……それで、どの子が引き取るのかしら？　うちではずっと預かるのは無理よ？」
その言葉にハツとする。後先何も考えずに来てしまったが、このままあの生き物を放置するわけにはいかない。病院としても治療費が必要であるし、一度関わったのに途中で放り出すことも許されない。

だが、なのはたちは今すぐに手をあげることにはできなかった。

「う、うくん。うちには大きい子たちがたくさんいるし……」

「私のうちもかな。……むしろ危険かもしれないし」

「えっと、うちも飲食店だから……でも相談して見たらもしかして……？」

最後になのが言ったことで、二人の視線が集中する。

比較してみると、なのはの方が受け入れてもらえる可能性が高いように思えてくる。

ニツコリと笑ったアリサは、ポンとなのはの肩を叩いて見せた。

「決まりね。この子の命運はあんたに預けたわよ」

「ふえ!??」 いきなりそんな責任重大みたいなこと言われても!??」

急にアワアワと狼狽し始めるなのは、アリサは意地悪く、すずかは苦笑してみせる。消去法になつて申し訳ないが、考えてみれば最初に見つけたのはなのはなのだ。責任は取つてもらわねばなるまい。

そんな会話をしていると、獣医がふと起き上がった存在に気がついた。

「あら、起きたみたいね」

獣医の声で、なのはたちは診察台の上に寝かされていた生き物の方へ注目した。

黄土色の細長い体を持つ、フェレットに似たその動物の目の色は緑。痛々しく包帯が巻かれたその生き物の首には、赤い宝石のようなものが身につけられていることが初めてわかった。

フェレットもどきは体を起こし、クリクリとした目でじつとなのはの方を見つめていた。

「……ねえ、この子。なのはの方を見てない?」

「え? ほ、ほんとか……」

好奇心を刺激されたなのはは思わず、フェレットに向けて手を伸ばす。差し出された指先にフェレットもどきはすすすと鼻先を近づけると、白く小さな指先をペロリと舐めた。

「わあ……！」

くすぐったくも暖かい感触になのはの目が輝く。胸の奥がキュンキュンと高鳴り、暖かい感情が溢れ出すような感覚を覚えた。

「にやう……なんかすごくキュンキュンして来たよ！」

「じゃ、決まりね。しっかり説得するのよ？」

「ふふ。なのはちゃん、頑張ってね」

アリサとすずかに激励され、なのははポワポワとした表情のまま頷く。家族への説明が大変に思えたが、小さな命と触れ合った少女は彼をなんと少しでも迎え入れたいと思うようになっていた。

3. 日常の乖離

「……やっぱりダメかあ」

風呂上がりの濡れた髪を乾かしながら悔しげに眉尻を下げたなのは、自室のベッドの上に身を投げ出した。

不思議な女性と別れ、声の聞こえた方に向かい森の中に入ったなのは、歩きの根元に怪我をしたフェレットを発見し、急いで動物病院へと抱えて飛び込んだのだ。

幸い命に別状はなかったようだが、かなり衰弱している上にいつまでも置いておけるわけでもなく、なのはは心配でたまらなかった。

自宅に戻って家族に飼えないかと相談して見たのだが、結果は芳しくはなかった。やはり、ただ気になるという理由で、飲食店で動物を飼うことを説得するには至らなかった。

「……どうすればいいのかな……」

風呂から上がり、寝巻きに着替えたなのはベッドの上に寝転がると、ごろりと転がって天井を見上げる。

あのフェレットの傷ついた姿を見ていられず、思わず関わってしまったが、途中で放

り出すことになりそうで心苦しい。最後まで助けてあげられないことが、なのはの心を苛んでいた。

アリサもすずかも気にしていたのに、力になれない自分が情けなくて仕方がなかった。

「……………」

深いため息をつくとき、なのははまた転がって横を向き、深く憂いを帯びたため息をついた。

「……………聞こえますか……………僕の声が聞こえますか……………」

声が聞こえたのは、そんな時だった。

空気を震わせて伝わってくる声ではない。ラジオの電波を合わせたかのように、幼い少年の声がなのはの頭の中に直接伝わってきたのだ。

「ツ……………だれ？」

ハツと目を見開いたなのははその声に聞き覚えを感じ、慌ててベッドから体を起こした。

謎の声から返事はない。やはり一方的に声が届けられているようで、なのはの声は届

いていないようだ。

「僕の声が聞こえる方、聞いてください……お願いします……僕に力を貸してください……お願いします……!」

顔が見えずとも伝わる、悲痛な叫び。聴く者にも危機感を抱かせるほど、必死さを感じさせる声だった。

「……今のは」

なのははつきりと確信した。この声は、あのフェレットを見つける前に聞いたものに間違いない。

この声を信じ、その後傷ついたフェレットを見つけたなのはには、再び助けを求めて自分に伝わってくるこの声を無視することはできなかった。

「……よし!」

強く頷いたなのははベッドから降り、自身の寝巻きのボタンに指をかけた。

「……えっと、ここだと思っけど……」

謎の声に導かれたなのはは、例のフェレットを連れて行った動物病院の近くにまで来ていた。

格好は寝巻きではなく、急いで着替えた普段着だ。下にいる家族にバレないように息

を殺して自宅を脱出すると、一心不乱に動物病院の方を目指して走って行ったのだ。

運動が苦手なのは、近所にたどり着いた時点でヘトヘトになり、重い足取りのまま荒い息を吐いていた。

「……やつぱり、気のせいだったのかな」

汗をぬぐい、辺りを見渡すなのは。

もうすであの声は聞こえない。近くに来れば何か分かるかと思つたが、やはり幻聴だったのだろうか。

「帰ろ……」

異常も見当たらないのにここにいっても仕方がない。わずかに肩を落としたのはが、自宅に戻ろうと踵を返した時だった。

ズンツ！と地響きが近くで生じ、なのはの元にまで振動が伝わってきたのだ。

ハッと振り向いたなのは、動物病院のある方向で粉塵と瓦礫が巻き上げられている光景を目にする。

突然の事態に固まるのはだが、粉塵の中に見たことのあるシルエットと赤いきらめきを目にしたことでようやく再起動を果たした。

「あれって……」

吹き飛ばされ、空中に投げ出されているフェレットを目にしたのはすぐさま駆け

出した。間一髪、胸にフェレットを受け止めると、飛来する瓦礫を避けて扉の陰に身をひそめる。

「な、何があつたの——」

ガス爆発かな、などと考え、恐る恐る扉の陰から覗き込むのはだが、すぐさま後悔する羽目になった。

そこには、異形がいた。グネグネと不定形に蠢き、吐き気を催す奇妙な色をした存在が数体、無数の触手を蠢かせて徘徊している。目と口と思わしき部分は空洞になっており、その奥に高校土地のような赤黒い光が宿っている。どう見ても、まともな生き物には見えなかった。

発狂しそうなほど気持ちの悪い存在をまともに見てしまったことで、なのはは強烈な恐怖感を覚えた。

「——!?」

なのはは口を手で覆い、漏れそうになる悲鳴を抑え込む。だが、嫌悪感から思わずずさり、足元にあつた小石を蹴って小さな音を立ててしまった。

その小さな音に反応し、三体の怪物はぎよろりと目らしき部分を向け、なのはを視界にとらえた。

わけのわからない存在に睨まれ、なのはは恐怖でガタガタと身を震わせる。

すると、動けずにいる少女に向かって怪物の一体がわずかに近づき、うねうねと動かしていた触手の一本をしならせ、なのはに向かって打ち出してきた。

「キヤアアア!!？」

かろうじて、というか偶然膝から力が抜けたなのはの頭上を、鋭い触手の一撃が通り抜けていく。

腰を抜かし、尻もちをついたなのはは顔を青く染め上げ、フェレットを抱えたまま怪物たちを凝視していた。

なのはは恐怖で凍りつきそうな足に叱咤し、ふらつきながら立ち上がって駆け出した。怪物たちがずるずると近づいてくる音を恐れながら、なのはは細い路地を利用して怪物の目を撒き続け、身を潜めようと足を動かし続ける。

ようやく一息つける距離をとれたと思うと、塀に背中を預けてずるずるとしやがみこんだ。

「な、な、な、何なのあれ……!?？」

ゼエハアと荒い呼吸を繰り返し、思わずつぶやくなのは。その耳に、かすれた小さな声が届いた。

「……来て、くれたんだ……！」

今度は、さきほどの幻聴のような脳に直接響いてくる声ではない、鼓膜を響かせて伝

わってきている。

「えっ？　だ、誰？　誰の声なの？」

「ここです。……いや、後ろじゃなくて君の腕の中の……」

周りに誰かいるのかと思つて思わず振り向いたなのは、そこでようやく声は自分の胸から聞こえてくることに気づいた。

まさか、と思つて視線をそろそろと下にずらしていくと、小さな緑の瞳を上げて見つめてくるフェレットと目があった。

「ええええ!!?　しゃ、しゃべったあ!!?」

声を発してから、なのはは慌てて口を閉じた。せつかく隠れたのに自分で怪物に場所を教えてしまうところだった。

若干恨みがましい目でフェレットを見つめると、フェレットは申し訳なさそうに頭を下げた。

「巻き込んでしまつてごめん。でも、あれを止めるために力を貸して欲しいんだ！」

「え、ええ!!?　わ、私が!!?」

喋るフェレットだけでももうお腹いっぱいだというのに、いきなり漫画やアニメのよくな展開になっていくことになのはは慄く。なんだかもう、どんどんトンデモナイ方向に流されてしまっている気がする。

「む、無理だよお！ 私、普通の子供だよ!?? あんなのをどうにかする力なんて……」
「大丈夫……君には素質がある。コレを持って」

ブンブンと首を横に振るなのは、フェレットは首に下げていた赤い宝石をなのはに差し出した。

困惑しながら、なのはは宝石を手に取る。そして、無機物とは思えない暖かさに一瞬恐怖感を忘れ去っていた。

「あつたかい……」

「それはデバイス。……その力は、僕では使いこなせなかった。でも、君ならもしかしたら……!」

フェレットの説明は、なのはにはチンパンカンパンで理解ができそうにない。だが、この状況をどうにかできるかもしれないということだけは、漠然と理解できていた。

なのはは自然と宝石を両手で包み込み、目を閉じていた。あたかも、祈りを捧げているかのよう。

「管理権限、新規使用者設定機能、フルオープン……僕の後に続いて、パスワードを唱えて。ゆっくり、心を落ち着けて……」

「う、うん……」

フェレットとなのはの足元に、まばゆい光が迸る。縁を描き、幾何学的な模様と見た

こともない文字が刻まれ、なのは達を中心にゆっくりと回り始めた。

風が舞い、少女の髪を揺らす。光の粒子が辺りに舞い上がり、美しい幻想的な光景を現実世界に映し出した。

「まず、『我、使命を受けし者』……」

「え、えつと、わ、我、使命を受けし……」

戸惑いながら、なのはがフェレットの唱える言の葉を紡ごうとする。

だが、そんな二人の頭上を黒い影が覆った。

なのはとフェレットを探して徘徊していた怪物が、自らの体を弾ませながら移動し、塀を越えて追いついてきたのだ。

「!??!? しまった、もうこっちに気づいて!??!?」

「ヒイツ!!?!?」

上空から近づいてくる異形の顔を目にしてしまい、なのはは顔を引きつらせて凍りつく。

言の葉も中断してしまい、足元の陣も光を失ってしまった。それはまるで、なのは達の希望の光も失われてしまったかのようにも見え、なのはの心は一瞬で恐怖に塗りつぶされてしまった。

「逃げて!」

「や、やだ、やだ、ヤダ……!!?」

フレレットがかばうようになのはの前に出るが、恐怖に縛られた少女の体はやすやすとは動いてはくれない。その間にも、血のように真っ赤な怪物の目と口が、少女の命の灯火を消し去ろうと猛スピードで迫った。

「たすけて——!!?」

こんな状況で、誰かが助けしてくれるとも思えない。

しかし少女には、叫ぶことしかできなかった。

だがその時、夜闇を切り裂く朝日のように、少女のいる空間に光が差した。そして少女の悲鳴も、怪物の咆哮も全てつんざいて、けたたましい爆音がその場に轟いた。

「!!?」

触手を伸ばし、なのはに襲いかかろうとした怪物の背後から、一台の青いバイクが疾走してきたのだ。突然のことに自身の窮地も忘れ、思わず目を見開いて呆然となるのはの前にそのバイクは突入し、怪物の巨体よりもなのはのもとにたどり着いた。硬直するののはに向けてバイクに跨っていた人物が手を伸ばし、疾走する勢いのまま少女の細い腰に手を回した。

「——しっかり掴まれ!!?」

まるで雷のような、空気を震わせる鋭い声なのはに向けて放たれる。その凄まじさ

に一瞬ビクンと震えるのはだが、ただ固まっていることさえ許されてはいなかった。

——オオオオオオオオオオオオオオオオ!!?

騎手が操るバイクがエンジンを唸らせ、後輪が先ほどよりも勢い良く回転する。途端にバイクは速度を上げ、触手が追いつけないほどの速さに達する。

そのすぐ後に、怪物の巨体が轟音とともに着地し、地面に放射状のヒビを入れた。

「うにやああああああ?!!?」

脇に抱えられたなのは不安定な体勢のまま風に揺らされ、涙目になりながら悲鳴をあげる。

細い路地を巧みに疾走するバイクは怪物の触手から大きく距離を取ると、小脇に抱えた少女を掴む手にぎゅつと力を入れた。

バイクの騎手は路地を出て大きな道に出ると後輪を滑らせて方向転換し、砂塵を巻上げて停止する。

ようやくタイヤが止まると、騎手は怪物のいる路地を睨んだままゆつくりとなのはをその場におろしてやった。

なのははばくばくと鼓動する胸を押さえ、パチクリと何度も瞬きをして自分が無事であることを確認した。

「びび……びびクリした」

「今のは、一体……？」

なのもフェレットも、一瞬何が起こったのか理解できていないようで、呆然と先ほどもで自分たちがいた路地を見つめていた。

そんな二人の頭上から、「はあ…」と深いため息が聞こえてきた。

「……何で素人がこんな大層なものに巻き込まれているんだか」

その声に、なのはとフェレットはバツと同時に振り向いた。出会ったばかりだということに恐ろしい息の合いようである。

バイクの騎手はかぶっていたヘルメットを外すと首を振り、こぼれ出した長い金髪の三つ編みを払いのける。

「――」

なのはは、露わになった騎手の顔に言葉を失った。

月明かりに照らされたのは、一度見た顔立ち。月光に照らし出される、誰もが見惚れる白い肌と黄金の髪。長いまつ毛に縁取られた目は赤い宝石のような瞳を持っている。

見間違えようもない、帰り道で助けてくれた、あの人だ。

「以前来たときから思っていたんだが、この世界はやはりどこかおかしい気がするの私だけなのか？」

凜とした声で、呆れたようにつぶやく女性。なんのことを言っているのかわからない

が、なのには気にする余裕すらなかった。

惚けたまま動くこともできないなのはに変わって、フェレットが恐る恐る口を開いた。

「……あ、貴女は？」

「ん？ 私か？」

バイクから降りると、騎手は視線を路地からフェレットに移し、わずかに笑みを浮かべた。

「通りすがりの、正義の味方さ。……危ないから、しばらくそこでおとなしくしていき
れ」

「え、で、でも……」

自分も見えず知らずの少女に力を借りようとしたが、それは対抗できる力があると確信してのことだ。

だが迷っている時間すらもあ許されてはいないようで、ついに路地から怪物がずりりと顔を出し、恐ろしげな唸り声を上げる。一体だけではなく、残った二体も屋根を伝つてなのは達のいるところに顔を出し始めた。

フェレットが戦慄の表情を浮かべるのを余所に、騎手の女性はまた深いため息をついた。

「私はここに、休暇で来たはずなんだがな。……魔法文化もないこんな所で、こんな相手にぶつかることになるうとはな」

女性はバイクから離れ、エンジン部分を軽く叩いた。

「ブルースペイダー、モードリリース」

〔Yes, sir. Mobile mode〕

ライトが点滅したバイクから野太い男性の合成音声が発すると同時に、バイクは見る間に小さく折りたたまれていく。物理法則を軽く無視した変形に目を丸くするのは目の前で、バイクはスピードを模したペンダントへと形を変えた。

ペンダントに変わった相棒を手にとった女性はそれを懐にしまうと、なのはとフェレットを背に庇う位置に立つ。

「結界展開……は、もうしているのか。優秀な子だ」

空を見上げた女性は小さくつぶやき、満足そうに笑みを浮かべる。

変形するバイクを目にしたフェレットは、より大きく目を見開いていた。

「アレは、インテリジェントデバイス……まさか貴女は!?」

驚愕の中に、隠しきれない期待の色をにじませたフェレットに向けて、女性は背を向けたまま口を開いた。

「時空管理局所属、アイン・K・アルデブランド陸曹だ。管理局規定に則り、現事案を鎮

圧する。……せいぜい長く踊ってくれよ、同類」

そう言つて、紺色のライダースーツとジャケツトをまとつた女性——アインは、怪物たちに向けて不敵な笑みを見せていた。

第Ⅱ章 紅き種は妖しく嗤う

1. 青き騎士

「時空管理局所属、アイン・K・アルデブランド陸士だ。……君は、スクライアに連なる者だな」

獅子の鬣のようにポリューミーな金色の髪をたなびかせた女性——アインが、目だけをフェレットに変身している少年・ユーノに向けて尋ねる。鋭い視線を向けられたユーノは、どうやったのか動物である自分の顔をパアツと明るくした。

「時空管理局……！ 来てくれ、たんだ……！」

「時空……管理局？」

へたり込んでいるなのはには、ユーノとアインが何の話をしているのか皆目見当もつかない。だが、二人がお互いについて何かしらの情報を持っていることだけはわかった。

そして何より、この女性が自分たちを危機一髪のところまで救い、守ってくれているのだということは、確信することができた。まるで、今日の夕方の再現だ、と脳裏に思い浮かべた。

「そこに来てくれ。あまり近づくと危険だ」

なのはとユーノが無事であることを確認したアインは視線を前方に戻し、怪物を油断なく睨みつけたままなのはに話しかける。

獲物を狩る邪魔をされたことへ怒りを感じているのか、ヘドロ状の怪物は先ほどよりも激しい唸り声をあげて、邪魔者であるアインを威嚇している。常人であれば失禁してもおかしくない状況にありながら、アインは全く動じた様子を見せなかった。

アインはグローブに包まれた拳を握りしめ、その中でバキバキと関節を鳴らす。微塵の表情も浮かんでいないその目からは、全てを凍り尽くさんばかりの殺気が迸っていた。

その気迫に押されていたユーノは、アインが武装も施さずに怪物の方へと向かっていくことに気が付き慌て始めた。

「ま、待つてくください!!? そいつらは思念体……実体を持っていません!!? 物理攻撃は……」

ユーノの警告も虚しく、アインに向かって三体の怪物たちが一齐に飛びかかっている。コンクリート程度であれば簡単に押しつぶせる質量を持った怪物の動きは見た目に反して素早く、数メートルの距離を一瞬で狭めて、鋭く尖った触手を放たれた矢のとき勢いで突き出していく。

避けるそぶりを全く見せないアインに黒い影が迫る光景を目の当たりにし、なのは口元を覆って声にならない悲鳴をあげる。膝の上でユーノが叫ぶ声も届かず、おぞましい触手が命の恩人に迫っていく光景を前に硬直し、その体が貫かれる姿を幻視した。

「ウエエエエエエイ!!？」

だが、アインが突如あげた雄叫びと共に、恐怖は一瞬で吹き飛んだ。

ドンツ!!?とアスファルトに大きくヒビが入るほど踏み込んだアインは、握りしめた拳を振りかぶり、そのまま怪物の顔面のだ真ん中に強烈な一撃を加えて見せたのだ。

拳を真正面から受けた怪物の顔は深くめりこみ、そこを中心に大きく波紋が広がっていく。水面に石を投げ込んだかのように波紋は怪物の全身へと伝わっていく、荒ぶる力が余すことなく浸透していく。空中で静止した怪物の体内に叩き込まれた衝撃は逃げる場所を失い、ついには反対側から飛沫となつて噴出した。

粘体の体は一瞬で粒状に千切れ飛び、ペンキをぶちまけたかのようにあたりの壁や地面を破壊しながら周囲にこびりついていく。他の二体の怪物もその余波を受け、一部が風圧によつて吹き飛ばされて消滅させられてしまい、アインの前から離れてゴロゴロと転がって行った。

そんな光景を、当の本人は気の抜けたような無表情で眺め、呆れたようなため息をついた。

「……なんだ。存外脆いな」

期待はずれだ、とでもいうような態度でアインは肩をすくめ、半目で飛び散った怪物の残骸を見下ろした。

「……効かない……はずなんだけど……」

忠告しようとしたはずのユーノが、逆に驚かされている。隣にへたり込んでいるのは、恐ろしい怪物が一撃で吹き飛ばされ、細切れにされている光景を見せられ、間拔けな顔で「わあ……」と呆けた声を上げていた。

だが、すぐにまた全員の表情が変わった。散り散りに吹き飛び、辺りに散らばっていた怪物の残骸が蠢き、徐々に一つに集まり始めたのだ。遠くに転がっていた怪物もゆっくりと動き始め、触手を伸ばしながら再びアインに敵意に満ちた眼光を向けていく。

「……なるほど、長持ちはしそうだ」

アインは好戦的な笑みを浮かべ、拳を鳴らして怪物たちに向かつて構える。そして再び伸ばされてくる触手に向けて、雄叫びをあげて砲弾の如き豪腕を振るって見せた。

背後の存在を守り、怪物たちを迎え撃っているアイン。より好戦的に挑みかかっている彼女とは裏腹に、ユーノは難しい顔で怪物たちを見据えていた。

「……ダメだ……再生を始めてる。やっぱり封印しないと……」

「……ね、ねえ」

これまで状況の変化についていけず、流されるばかりであったなのはユーノに呼びかける。

腕の中の小さな存在に向ける表情は不安げながら、何かをしたいという意思を帯びている。視線はわずかに揺れながら、状況を理解しているはずのユーノをまつすぐに見つめ、そらそうとしなかった。

その視線の強さに、ユーノは思わず息を呑んだ。

「よくわからないんだけど……このままじゃ、ダメなんだよね？ 攻撃しても治ってるって……封印しなくちゃいけないって。あの人だけじゃダメなんだよね？」

「……うん。あのジュエルシードの思念体は、物理攻撃を受けてもすぐに再生を始めてしまう。あの人封印術式を持っていなければいいんだけど、さっきの様子から持っていない可能性が高い。……あの人の実力なら、危ないことにはならないはずだけど」

「……………私なら、なんとかできるの？」

なのはにはなぜか、確信があった。

自分だけに聞こえてきたあの声が、自分の元に逃げてきた彼が、渡された宝石から感じたあの温もりが。自分の力を求めているようにしか思えないのだ。

目覚めよと、そう言っている気がしてならないのだ。

「あなたはさつき、私には力があるって言っていた。それって、私なら、あのお化けたち

をなんとかできるってことなの？」

「……………」

ユーノはわずかな間迷い、ややあつてからキツとなのはを見つめた。

「……危険な目に合わせた僕がいうのはおこがましいかもしれないけど……けど、お願いします！ 力を貸してください！ あの暴走体を止めるために、君の力を！」

悲痛な声で、ユーノは深く頭を垂れる。

幼い少女に頼ることも、危険な目に合わせたことも不甲斐なく、自分が情けなくて仕方がない。今もなお無関係の女性に時間を稼いでもらいながら、頭を下げるしかない自分を恥じる他にない。

だが、資格のない自分には頼る他になかった。

そんな彼をしばらくじつと見つめたなのは、やがて笑みを浮かべた。若干不安に引きつりながら、それでもそれを感じさせまいとするような、硬い意志を感じさせる笑みを。

「……うん、わかった。私、やるよ」

なのはの答えを聞いたユーノはぐつと息を呑み、安堵の表情を浮かべてまた頭を下げる。

「お礼は……きつとこのお礼はします！」

「お礼なんていい……だから教えて。私は何をすればいいの？」

なのはの催促に、フェレットは再び首から下げた宝石を差し出した。先ほどなのはが触れた、あの赤い宝石だ。

「さっきの続きだ。もう一度、僕の後に続いて！」

「う、うん！」

ユーノが叫び、再び二人の足元に桜色の魔法陣が展開される。

ちらほらと、なのはたちの周囲に浮かんだ蛍のような光が天に向かって昇り、幻想的な光景を描き出す。その周囲だけ、怪物との戦いに殉ずる女戦士の喧騒と隔絶されているように見えた。

『我、使命を受けし者なり』

「……我、使命を受けし者なり」

ユーノの詠唱に、緊張しているのかなのはがたどどしく追いつがる。次第に光が濃くなる魔法陣に反応したのか、怪物がより一層激しく吠えたが、アインが鉄壁の防御を以って通さない。

『契約のもと、その力を解き放て』

「……契約のもと、その力を解き放て」

詠唱の度、なのはの声も落ち着きを取り戻し、澄んだ声で輪唱を重ねていく。同時に

魔法陣の光もそれにおいて光を強め、あたりに真昼よりも神々しい光が満ちていく。

『風は空に、星は天に』

「風は空に、星は天に、そして……」

もはや、ユーノの先導は必要無くなっていた。迷うことなくなのはは祝詞を重ね、自身の体の内側から力が湧き上がっていくことを実感した。

かりそめの万能感が全身に浸透し、周囲に風が荒れ狂い、ポカポカと暖かい光が溢れ出す。

『不屈の心はこの胸に』！ “レイジングハート” セットアップ!!?’

そして桜色の光の中、己の使命と役目を完全に把握したなのははカツと目を開き、残された呪文のフレーズを口にする。その直後、嵐が巻き起こったかのような魔力の暴風が吹き荒れ、なのはの全身を包み込んだ。

上着の裾を、スカート巻上げる桜色の風の中で、なのははイメージする。自分が想像する、彼女の力になれる格好を——彼女を助けられる “魔法使い” の姿を。

[Stand by ready]

その瞬間、彼女の格好に変化が現れた。なのはが身にまとっていた服が光の羽となつて消滅し、一糸纏わぬ姿へと変わる。

真っ白な素肌を晒し、生まれたままの姿へと戻ったなのはは、地震の目の前に浮遊し

た宝石——レイジングハートにそっと口づけをする。

一層激しい輝きを放ったレイジングハートに、次々に新たなパーツが集っていく。大きくなった宝玉を支える三日月型の装飾、トリガーとマガジン、無数の部品、それらが組み合わさり、レイジングハートは一本の杖へと変わる。

[Barrier jacket set up]

なのはの半身を覆うように光が凝縮し、黒のインナーが生み出される。さらにその上に青いラインの入った純白のベストが追加され、胸元に金色の装甲が装着される。次に胸の中心にレイジングハートと同じ色の宝玉が出現し、流星に似た装飾となってなのはの胸に宿った。

なのはの腰元に金属製のリングが生み出され、ウエストを締めるとか半身を覆う純白のスカートが生み出され、風に揺れて大きく広がる。上半身にも光が集まり、なのはの学校の制服に似たブレザーとなって纏われる。袖口には青い籠手型の装甲が追加され、金のラインと赤い宝玉が輝きを放った。

最後に彼女の足を守る純白のブーツが生み出され、なのははふわりと軽やかに真下に降り立った。その直後、凄まじい魔力の奔流が吹き荒れ、木々を激しく揺らしてザワザワと騒がしく鳴らした。その光景は、まるでなのはの持つ力に恐れおののいているかのようだった。

最
適
な
形
状
を
自
動
選
択
し
た
for
t
I
s
e
l
e
c
t
e
d
t
h
e
o
p
t
i
m
u
m
c
o
n
f
i
g
u
r
a
t
i
o
n
f
o
r
t
B
a
r
r
i
e
r
J
a
c
k
e
t
a
n
d
t
h
e
D
e
v
i
c
e
?】

「ふえ!? と、とりあえずよろしくお願いします!!?」

いきなりの挨拶に相当混乱しているのである。なのは自分が持った杖に向かってぺこりと頭を下げた。

「成功だ!!? コレで逆転できる!!?」

「……え、えつと。コレであとはどうすればいいの?」

グツと拳を握るユーノを、なのはは不安げな表情で見つめた。言われるままに “契約” をかわしてしまっただが、一体何をどうすればいいのか全くわからなかった。

そんな彼女の元に、凜とした落ち着いた声が届いた。

「落ち着け」

思わずハツと表情を変えて振り向いたなのはに、アインは怪物たちの前に立ちほだかりながら笑みを見せた。なおも近づこうとする怪物の顔面を殴りつけ、雄々しく仁王立ちしたまま笑みを浮かべる。

「あとは……君の相棒が教えてくれる。心を落ち着け、耳を澄ませ!」

「……この子が」

手の中にあるレイジングハートを見下ろしたなのは、そう反芻して握る力を強め

る。

すると、状況が悪い方向に傾いてきたと察した怪物たちが、突如グルンと体を丸く固め、アインの前から一斉に跳びのき出した。まるでボールが跳ねるように高く飛び跳ね、アスファルトやコンクリートを粉碎しながら逃げ出したのだ。

「チツ、逃すかア!!?」

アインは怒りの形相のまま自身のペンダントを取り出し、空中に放り投げる。放り上げられたペンダントは青い光とともに、空中に大きな魔法陣を描き出した。

スペード型のペンダントが光を放ち、先ほどの逆再生のように形を変えていく。無数のパーツが集まってエンジンが構築され、管が伸びてサイレンサーとなり、ゴムのカケラと鉄の棒が集まってタイヤとなり、ガツシヤンと地面に着地した。

青い光沢を放つバイクへと変貌した相棒にアインは跨り、ギアを全開にして爆音を響かせた。

「ブルースペイダー!!? 追え!!?」

〔Yes, 解sir!〕

渋いバリトンボイスで答えたバイクは後輪を滑らせ、怪物を追って疾走を開始する。滑る後輪が摩擦で煙を巻き上げ、唸るエンジンが待機をビリビリと振動させた。

「お、お姉さん!!? 待って!」

【Flyer flies】

「わっ!?」

駆け出そうとしたなのは両足首に小さな桜色の光の羽が生え、ふわりと少女の体が宙に浮かぶ。急な浮遊感に慌てるのはだったが、すぐにその感覚に慣れたようでその場から力強く飛び立った。

ユーノが慌ててなのはにしがみつき、二つの影はあつという間に空高く昇っていった。

「と、飛んでる……!」

目の前の現実を現実と認識しきれないまま、なのはが呆然と呟く。こんな小さな羽だけで、まるで風のように軽やかに天を舞っているなど、信じられなかった。

混乱しながら、自らの体で風をきる感覚を知って知らぬ間に恍惚としていたなのは元に、凜とした女性の電子音声が届いた。

【How much do you know about magic?】

「ぜ、全然、全くありません!」

【Then I shall teach you everything. Please do as I say.】

なのはは謎の安心感を感じながら女性の、レイジングハートの声に従って飛行し、ア

インの後を追う。アインの追う怪物たちはぴよんぴよんと建築物の屋根の上を跳躍しながら、アインを翻弄するように縦横無尽に逃げ回る。だが向かう方向は決まってお
り、その先には煌々と光を放つ街が見えた。

「このままじゃ……」

【封印のためには、
To seal,」

either get closer and invoke the sealing ma
or use more powerful magic.」

「どうすればいいの？」

【あなたの思い描く you're about to strike.」

Hold out your strongest hand.」

なのはの手の中で、レイジングハートはチカチカと宝玉を点滅させ、なのはに指示を告げる。

しかし友達と喧嘩したことはあっても、戦ったことなどないなのはには強力な一撃など思いつくはずもない。しかしなのはの内に感じる熱が、今まさに出口を求めて高ぶっているような感覚を覚え、そのイメージが固まっていく。

なのはは言われた通り利き手を前で出し、集中する。すると手のひらに桜色の光が収束し、いくつかの光球が生み出されていく。汗を流すほど集中し生み出されたそれは、

レイジンググハートの合図のよつて勢いよく解き放たれた。

【Shoot it!】

「えいつ!!?」

放たれた数発の光球は曲線を描きながら空を裂き、怪物たちに向かつていく。それらは一発も外されることはなく、見事に怪物たちに直撃した。

ボンツ!と閃光が弾け、炸裂した光球の衝撃によつて怪物たちを三体とも撃墜させることに成功した。

「そうだ! なかなかうまいぞ!」

「は、はいっ!」

真下を走るアインが、なのはにグツと親指を立てる。なのはは急な称賛にびっくりしながらも、誇らしさを感じて頬を染める。

しかし、撃墜した怪物が即座に起き上がり、先ほどよりも高く跳躍し大きく距離を取られてしまった。

「逃がさん……待てよ出来損ないどもが!!?」

アインは獐猛な笑みを浮かべてギアを回し、猛スピードでの追跡を再開する。獣の咆哮のようなエンジン音が響き、テールランプが闇の中に軌跡を描き出した。

なのはは遠ざかっていく怪物とアインを見つめ、ついでレイジンググハートを見下ろし

た。このままでは置いていかれてしまう、その前になんとかするにはどうしたらいいの
か、手の中の協力者に尋ねた。

「……………さつきの光……………あれを遠くまで飛ばせれば……………できるかな?？」

「If that's what you desire.」

なのはの問いに、レイジングハートは優しく答える。その強い返答に、なのははぐつ
と表情を引き締めて頷いた。

空を舞い、なのはは無人となったビルの屋上に降り立つ。しがみついていたユーノを
下ろすと、闇の中を走り抜けていくバイクのテールランプを探し、その先にいる怪物の
姿を探し出すと、レイジングハートを両手で持ち、宝玉を怪物たちのいる方に向けて構
えた。

「That's right.」

Focus your internal spiritual heat through

なのはにそう指示し、レイジングハートは自らの体を変えていく。三日月の装飾はよ
り鋭利なものになり、槍の穂先のような形状に変わる。柄の半ばにトリガーとグリップ
が追加され、杖は長銃に似た特徴を得ていった。

「Mode change. Cannon Mode.」

砲撃形態へと変化したレイジングハートを携え、なのははその砲口を怪物に向ける。

足元に丸い魔法陣が展開される中、なのはは両腕に集まっていた熱をレイジングハートの砲口に急速に収束させていった。

みるみるうちに凄まじい熱量を帯びていくレイジングハートを見て、ユーノは驚愕に目を見張った。

「これはまさか、封印砲……この子、砲撃型……?」

ビリビリと感じる威圧感が、彼女の潜在能力の底知れなさを否応なく伝える。

「Imm^ロedia^クte^オ fire^ン when^瞬 targe^間t is^に locke^トd.^ガ」

なのははレイジングハートの指示に従っているだけ、だがそれを確実な形で実現させていることは並大抵のことではない。なのに魔法に触れたことのなかつた素人が、凡人の域を軽く超える成果を見せようとしていることは、異常とも言えることだった。

そんなことは知らないなのはが、逃げ続ける怪物を目で追い続け狙いを定める。高スピードで逃げ続ける標的に、なのはは尋常ではない集中力で追いつがる。そして、ターゲットの位置を正確に把握した瞬間、なのははぐつとトリガーを引き絞っていた。

直後、ビルの屋上から桜色の閃光が走った。

流星と見間違わんばかりに眩い光が夜の闇を貫き、まっすぐに一点に向かって走り抜ける。その閃光は逃げ続ける三体の怪物を飲み込むように直撃し、凄まじい熱量を持って端から消滅させていく。怪物たちは悲鳴をあげる暇もなく肉体を崩壊させ、やがて完

全に消え去っていった。

一拍おいて、ドンツ！と鈍い音が大气にこだまする。音速を超えた一撃が、齡10にも満たない少女によって放たれる瞬間を見たアインは驚愕に言葉を失い、少女のいるビルの屋上を凝視した。

「これほどの大威力の封印砲だと……何？」

ただの子供だとは思っていなかったが、ここまでの結果を見せたことにアインは呆然となるも、やがて表情を引き締めてバイクを駆った。まだやることは残っているのだ。

◆ ◆ ◆

「す、す……」

なのはの肩に乗ったユーノが、怪物たちを仕留めた方に向かって飛行するなのはの横顔を見ながら呟く。

資質があると、最初に会った時から、そして念話がつきりと届いた瞬間からわかっていた。だがここまでの才能を持つまでとは思っても寄らず、未だ困惑したように眉を寄せている少女を凝視してしまった。

なのはが目的の地点に降り立つと、すでにアインが到着していた。険しい表情で、空中に浮遊している三つの光を睨みつけている。

なのはが近づくと、アインはちらりと視線を向けて道を開け、なのはに来るように促

した。

「……そのデバイスで、これに触れてくれ」

感情を押し殺したような声で、アインはなのはに頼む。なのははおっかなびつくり光に近づき、それを見つめた。

空中に浮遊していたのは、ひし形の青い宝石だった。生物の瞳を連想させるような美しいものだったが、力に覚醒したなにはそれが凄まじい力を秘めたものだど理解し、同時に先ほどの怪物の正体であると察する。

まだ恐怖感があった。だがそばに立っているアインの顔を見上げると安心感がわき、近づくことができた。

浮遊している宝石に、なのははレイジングハートの宝玉を近づけ、触れさせた。

「Inter nalize No. s 18, 20, 21.」

すると、レイジングハートの宝玉が光を放ち、ジュエルシールドを包み込む。浮遊した宝石は宝玉の中に入り込み、徐々にその光を弱めていく。

後に残ったのは、任務を終えて誇らしげに輝くレイジングハートと何も無い空間だけだった。

「……多少荒いが、なかなかの逸材だな。磨けば面白いことになりそうだ」

天空の雲をも貫きそうな桜色の砲撃の跡を眺めたアインは、内心冷や汗を流すような

心地でそう呟く。敵の不意打ちもあり危ない場面もあったが、自分の助けがなくても案外なんとかできたのではないだろうか。彼女が放った砲撃を思い出すと、ふとそんなことさえ思ってしまった。

「……お、わった、の？」

当のなのは、恐々とした表情で異形の消えた夜天を見上げ、レイジングハートの砲口を下げた。

あの恐ろしげなうなり声をも聞こえないことを改めて認識すると、へなへなと力なくその場に崩れ落ちた。レイジングハートを抱きかかえ、心底安堵した表情でぺたんとなの子座りになり、深い深い息を吐き出した。途端に衣装が光に包まれ、自身の格好が元に戻った。

「はああああ……」

「よく頑張ったな。偉かったぞ」

バイクを押し戻ってきたアインが、へたり込んでいるなのはにそう言って笑いかける。その笑顔を見て、もう大丈夫なのだと思っただけなのには力ない笑い声をこぼした。

すると、なのはの方から降りたユーノが、なのはとアインの二人に深々と頭を下げた。

「本当に助かりました……あなたたちがいなかったら、どうなっていたか……」

「え、えへへ……」

なのはは照れながらも笑い、アインはふつと優しげに微笑む。なのはにとつては最初から最後までアインやレイジングハートに助けられてばかりだった気がするが、それでも誰かの助けになれたというのは嬉しいものだった。

アインは何も言わなかったが、その顔はどこかくすぐったそうであれも混じっているようにも見えた。

「本当に……ありが……」

なんども礼を繰り返そうとしたユーノの体が、ぐらりと傾く。慌ててなのはが駆け寄り、小さなあらだを抱きしめる。

「あ、だ、大丈夫!?」

なのはが呼びかけるも、ユーノ杯もが切れた人形のようにぐったりとして動かない。不安げにユーノを見つめたなのは、近づいてきたアインをじつと見つめて目を潤ませた。

「どうしよう……」

「……先に、ここから離れたほうがいいんじゃないか?」

「ふえ?」

「ホラ、アレ」

アインが指差す方向を見ると、何やら音が聞こえた。赤い光が点滅し、ファン

ファンとサイレンの音が近づいてくる。

ついで、辺りを見渡してみる。怪物が飛んでつけた陥没や、へし折った看板、その他壊れた諸々が散乱し、酷い有様になっていた。

「ブワツと、なのはの背に嫌な汗が一気に噴き出した。」

「あ、あああああ!!? ど、どうしよう!!?」

「……やれやれ」

アインは呆れたようにため息をつく、再びバイクに跨がる。ハンドルをいじってモーター音を響かせると、もう一つのヘルメットを取り出してなのはに投げ渡した。

「!」

びっくりして目を丸くするなのはに、アインは腰をひねって振り返り、座席の後ろをトントんと差し示した。

「後ろに乗ってくれ。それをしっかりかぶるんだ」

「え? は、はい!」

半ば急ぎ立てられながら、なのははヘルメットを危なっかしく被り、フェレットを大事に抱きかかえてアインの後ろに跨る。

アインは小さな手が自身の腰に回されるのを確認すると、強くギアを回して地面を蹴る。

バイクはすぐに推進力を発揮し、エンジンの唸り声を響かせながら後輪を激しく回し始める。そして二人と一匹を乗せたバイクは、ちらほらと灯りが燈り始めた夜の住宅街の合間を駆け抜けていった。

2. 二人の訪問者

真つ暗な闇の中を、一筋の光が突き抜けてゆく。闇の中を走るブルースペイダーのヘッドライトの光がラインを描き、エンジン音とともに余韻を残す。

人気のない住宅地の道路をゆくアインの背にしがみつきなから、なのははアインの背中を見つめていた。肩幅が広く背が高いせいか、とてつもなくその背中は大きく見える。年齢は兄とそう変わらないように見えるのに、醸し出す雰囲気はずっと年上に思えた。

「あの……アルデブラント、さん」

「言いづらいなら、アインでいい。皆そう呼ばせている」

「はい……じゃあ、アインさん。……あ、その、私の名前は高町なのはです」

「ぼ、ボクはユーノ・スクライアです」

「……そうか」

ずっと名乗っていなかったことを思い出し、ようやくユーノとともに名乗ることができたが、それだけで会話が終わってしまった。沈黙に耐えきれず切り出したが、なおも居心地の悪さは変わらなかった。

恩人に対して何も言えず、ずっとアインの腰にしがみついていたのはだったが、落ち着いてくると次第に申し訳なきが募ってきた。

「……ごめんなさい。迷惑かけて」

なのはがポツリとこぼした謝罪の言葉に、アインは小さくため息をついた。

「気にするな。むしろ君は、危険も顧みずに飛び出して行ったことを反省しろ。志は立派だが、力のない君じゃどうなっていたかわからんぞ」

「うう……」

「そっだよ。……それに本当は、僕が悪いんだから」

「あ、ち、違うの！ そんなつもりで言ったんじゃないの！」

うつむくなのはをユーノがなだめるが、今度は彼のほうが落ち込んでしまった。なのはは自分が落ち込ませてしまったと思ったのか、慌ててユーノを抱き直して目を合わせ。そしてまた配慮の足りない自分に嫌悪を抱き、表情を暗くさせた。

アインは互いを慰め合い後ろで勝手に暗くなる二人に呆れ、ヘルメットの中で半目になつて前方を見据えた。

「その辺にしておけ。とりあえず、話はついてからにしよう」

「……はい」

静かに二人を諷めるアインに、なのはもユーノもそれ以上口を開かなかつた。

それでも二人の表情が晴れることはなく、落ち込んだままバイクに揺られている。アインは雰囲気だけでそれを察し、今度は少し厳しめの声で二人に告げた。

「それにな、君たちに何かあれば悲しむ家族がいることを忘れるな。……絶対にな」

最後の一言により強くこもった実感を捉え、なのはとユーノは困惑しながらも頷く。二人のことを思っているというよりは、自分がそんな光景を見たくないと言っているような気がしたのだ。

自己嫌悪の念から抜け出たなのは、ユーノを大事に抱きしめたままポスンとアインの背中に身を預ける。その時に感じたものに、なのははひどく既視感を覚えていた。

(この感じ、前にも感じたことがある……なんでだろう……? でもすごく安心するよ
うな)

しばしアインの背に体を預け、なのははバイクが止まるまでの間に安堵に浸っていた。

しばらくして、アインのバイクは高町家の門の前に到着した。近所に配慮し、なるべくエンジン音を抑えてもらったなのはは、姿勢を低くして忍び足で門に手をかけ、音を出さないように気をつけながら入っていく。

心配をかけたくないばかりに黙って出てきてしまったが、気づかれないように静かに

出てきたためバレてはいないはず、と思っていたなのは背中に、アインが呆れた視線を送った。

「なのは。残念ながら……カンカンになっておいでだ」

「ふえ？」

呆けた顔で振り向くなのは。その背後に、二つの影が音もなく現れ、鋭い視線をなのはに向けた。

「……………何か申しひらきはあるか？ なのは」

突如、背後から聞こえてきた声にはは。ピーンと直立の姿勢になり、猫のようにツインテールを逆立てた。だからだと冷や汗を流した哀れな少女は恐る恐るといった体で振り向き、玄関の前で仁王立ちしている二つの人影を居心地悪そうに見つめ返した。

「お、お兄ちゃん……お姉ちゃん」

不機嫌そうに腕を組む恭也と心配そうに眉尻を下げている美由紀。二人の視線を受けたなのはは。パツと後ろ手にユーノを隠し、亀のように首を縮めて俯いた。

「今が何時だかわかっているのか!?？」

「はうっ!?？」

「もう！ 心配したんだよ!?？」

「(ぎ) (ぎ)めんなさいー！」

滅多に怒られたことのないのは、兄の劍幕と姉の不安げな表情に心を締め付けられ、瞳を潤ませる。後先考えずに飛び出してしまったが、こんなにも家族を心配させてしまつて良心が苛まれていた。

だがそこへ、様子を伺つていたアインが前へ出て静かに言葉を挟んだ。

「そう叱らないでやつてほしい。この子が飛び出したのは、他の誰かのことを思つてのことだ」

第三者が会話に混じつたことに、恭也も美由紀も訝しげな視線を向ける。そして、街灯に照らされて姿を見せた金髪の女性の顔を目にし、驚愕で目を大きく睜つた。

「……アイン、さん?」

美由紀が、信じられないものを見たような様子でその名前を口にし、アインの顔を凝視する。口元を手で覆い、溢れ出す感情が声になるのを防ぐようにしながら息を呑んでいた。

その隣の恭也もまた驚愕の表情を浮かべていたが、同時に拒否感も混じつたような複雑な表情を浮かべていた。まるで、彼女とは会いたくなかつたともいうかのようなだ。

「アインさん……本当に久しぶりね」

「……変わりないようだ」

「ああ。……久しいな、恭也、美由紀」

美由紀と恭也が目を泳がせながら、言葉を選ぶように迷いながらそう言うのと、アインは無愛想にそう答える。

なのはが困惑の表情で両者を交互に見つめるのをよそに、高町家の玄関には長く重い沈黙が降りていた。両方が切り出す言葉に悩みながら見つめ合い、一步も動けずに佇むままであった。

やがて、沈黙に耐えきれなくなった恭也が口を開き、少し厳しめな声を発した。

「…………なぜ、ここに？」

「なに、そちらのお嬢さんがこいつのことを気にかけてうろついていたようだな。安全を考慮して送らせてもらった」

そう言つてアインは、なのはが後ろ手に隠していたユーノの首根っこを掴んで二人の前に差し出した。プラーンと吊られたユーノの姿は、襟巻のようで哀れに見えた。

顔を出した愛くるしい顔の小動物を前に、居心地悪そうに視線をそらしていた美由紀がパツと表情を明るくし、ユーノに飛びついた。

「わあ、可愛い…………！」

「動物病院から逃げ出してきていたようだな。なのはが保護したところに私も出くわしたんだ」

「…………そういうことでしたか。まあ、俺としてもなのはが無意味にこんなことをすると

は思ってはいませんでした」

恭也はアインの説明に、吊り上げていた眉を下げて怒気を取める。もともと、おとなしく真面目ななのはが真夜中に家を抜け出すなどという大それたことをするとは思わず、困惑していたのだ。

恭也が溜飲を下げたことを察したアインはフツと表情をほころばせ、恭也たちに背を向けて歩き出した。

「ではな、なのは。……美由紀、恭也。士郎と桃子よろしく言っておいてくれ」
「あ、ああ……」

アインは恭也への返事もおざなりにし、さつきと相棒のバイクの方に戻っていく。戸惑ったままの二人を置いて、ブルースペイダーのシートに跨ってヘルメットを装着し、そのままギアを回してバイクを発進させてしまう。

聞こえてきたエンジン音に、なのははようやく我に返って振り向いた。

「あ、アインさん！」

なのはの声にも答えることなく、アインの乗ったブルースペイダーは夜の闇の中へと消えていってしまった。

◇ ◇ ◇

結果的に言えば、ユーノは高町家の一員として受け入れられることとなった。

家族全員が集合したりリビングにて再び説教を食らったなのはが説得し、ユーノを置いてもらうことを了承してもらったのだ。ユーノが見せてしまった動物らしからぬ賢さについて言及された時は冷や汗を流したが、その後のユーノの恥を捨てた全力の可愛さアピールが後押しをしたのだろうか、今後はなのはが全面的に面倒を見ることを条件に、あっさりと飼うことを許してくれた。

だがなのはには、それ以上に気になっていることがあった。

再び風呂に入り、寝巻きに着替えたなのははアリサやすずかにユーノについての報告のメールを済ませると、ポスンとベッドの上に倒れて天井をじっと見つめ、考え込んでいた。

「…………た、高町さん?」

なのはがベッドの上で寝転がっていると、勉強机の上で休んでいたユーノが声をかけた。

「ふえ? あ、えっと、なのはでいいよ。私もユーノ君って呼ぶから」

「じゃ、じゃあなのは。どうかしたの? さつきから何か……難しい顔してたから」

「…………うん。さつきのお父さんたちについて、ちよつとね」

虚空を見上げながら、なのはは家族の様子が微妙におかしかったことを思い出していた。

結局微妙な空気のまま解散ということになり、なのはは就寝を余儀なくされてしまった。

だが、自分の中でその疑問が大きくなっていき、モヤモヤとした感覚が自分の胸の中に居座ってしまっていた。この感覚は、いつも見る不思議な夢を見た後と同じ気分だ。

「……一体、アインさんとどんな関係だったのかなあ」

「私がどうかしたのか？」

思わず呟いたなのはの耳に、つい先ほど別れたばかりのはずの声がかぐももって届いた。一瞬思考が止まったなのはは慌ててバツと身を起こし、カーテンを開いてみて思い切り目を見開いた。

なのはの部屋の窓の前に、アインが無愛想な無表情を携えて立っていたのだ。それも足場などろくにない、狭い屋根の上に立った一人で。

なのはは慌てて自室の窓を開け、アインに入口を用意した。

「あ、あ、あ、アインさん!?? どこから入ってきてるんですか!??」

「私のような得体の知れん女が正面から入るには少し抵抗があるだろうからな。こつちから失礼するぞ」

「……窓から入ってくる方が怪しいと思うの」

よつこらせ、となのはが開けてくれた窓の枠に足をかけて、アインは部屋の中に億劫

そうに侵入する。その間一切の音を出すこともなく、まるでこういつた行動に慣れていくかのようだった。

丁寧に靴まで脱いだアインは床に降り、その場であぐらをかく。ベッドの上に座っていたのはとユーノも、アインの放つ雰囲気にも飲まれて思わず背筋を直し、アインに向き直った。

「……それでは、事情聴取といこうか？ ユーノ・スクライア君」

一瞬で、アインの放つ空気が別物に変わる。

まるで抜き身の剣が周囲から突きつけられているかのような、その場から微塵も動くことを禁じられたかのような冷たい感覚に、ユーノはごくりと息を呑んで身を強張らせた。嘘偽りも、質問の拒否さえも微塵も許さないと言外に告げられているようだった。

「……えっと、できればもう少し穏便に？」

「君は少し黙っていいようか」

有無を言わず、アインはなのはに余計な口出しを許さない。渋々なのはは口を閉じ、ベッドの上で縮こまるにとどまった。

アインはユーノに厳しい目を向け、黙認できそうなほどの威圧感を進らせながら再度尋ねた。

「魔法文化のない管理外世界に、なぜあんな危険なロストログアが紛れ込んだのか。そ

してなぜ、君があんなものを追っているのか。詳しく聞かせてもらおうか？」

ユーノはその気迫に若干気圧されていたようだったが、しばらくしてから覚悟を決めたように息を吐き、訥々と語り始めた。

「……ボクの、せいなんです」

ユーノの話は、こうだった。

地球とは違う異なる世界、遺跡の発掘を生業としていた彼の故郷で古い遺跡の中から発見されたのが、願いを叶える力があるとされる古の遺産・ジユエルシードロストロギア。しかしそれは少しの衝撃で暴走する危険性を持った、制御不可能なエネルギー結晶体だった

世界を守る組織・時空管理局に依頼し、危険な力を秘めた21個の宝石を保護してもらおうと思ったが、ユーノが手配した次元船は原因不明の事故に遭い……。

「……この地球へ、散らばってしまったと。なるほどな」

話を聞き終えたアインは、じっとユーノを見つめていた。

「そして僕は、同じく遺跡で発掘されたこのレイジングハートをもつてこの世界にやってきたんです。……ですが、一つだけ回収しただけでボクは力を使い果たして……」

ユーノが悲痛な表情でそう呟くと、アインはじつと厳しい視線を向け続ける。その心の奥底を見透かすような鋭い視線に、ユーノはキュツと縮こまった。

「……無謀だな、君は」

「うう……」

思った通りの叱責の言葉に、ユーノはくしゃつと顔を歪める。あれほどの力を持つ古代の遺物を、たった一人で21個も相手取ろうとしたのだ。そう言われても文句は言えなかった。

なのはは一方的に叱られているようにも見える二人に割って入ることもできず、困ったように二人を見つめるばかりだ。

だが、アインはやがてその口元を笑みに歪め、優しげな眼差しをユーノに送った。

「だが、そんな子供は好ましい」

無愛想で厳しい態度ばかりとっていたアインからの思わぬ一言に、ユーノもなのはも惚けた表情で固まってしまう。

アインはすぐに微笑みを消してしまっただが、ユーノはその一言に若干救われたように肩の力を抜き、安堵しているように見えた。

「……あの、聞いてもいいですか？ どうしてあなたも、この世界に単身で訪れたんですか？」

「ん？ ああ、休暇だよ」

恐る恐る尋ねたなのはへアインが語った理由に、ユーノとともに意外そうな表情になった。

時空管理局の者だというのなら、この人もまた異世界から来たのだろう。ならば、ユーノのように何か特別な理由があるのかと思えば、特に変わった理由でなかったことに驚かされたのだ。

二人の表情に目を向けたアインは、苦笑しながら詳しく話した。

「上から急に言い渡されてな。ちょうど用事もあつたからこの街に立ち寄つたんだ。……まあ、こんな事態に巻き込まれるとは思わなかつたがね」

「……すみません」

「構わん。用事も済んでいたし、急いでいたわけでもないからな」

アインは申し訳なさそうに俯くユーノをなだめると、立ち上がりながらなのはとユーノに視線を向けた。

「さて、ではこの先のことは私も付き合おう。と言つても、あまりできることはないだろうがな」

「そ、そんなこと!」

「実際、私は現状ではそれほど戦えるわけではないんだ。さつき言ったように私は休暇中だからな、デバイスの使用許可が降りていないんだ」

「……そんな状態であの戦鬪を……」

「鍛えれば誰だつてできるさ。まあ、敵があつた程度ならそのデバイスの封印術式さえ使

えれば問題はあるまい」

驚愕を通り越して半ば呆れているユーノを傍に置き、アインは次になのはの方に視線を向けた。鋭い視線を向けられたなのはピンと背筋を伸ばし、緊張しながら視線を合わせた。

「君は、もう関わる必要はない。そのデバイスに封印術式があるなら、彼にまた使ってもらえばいい。今度からは私がフォローするから大丈夫だ」

「え……で、でも……」

なのはの中の正義感が、このままこの事件を丸投げすることを拒んで良心を苛む。ユーノがこんなにも困っているのに、自分は何もせずに日常に帰れといわれるのは受け入れ難かった。何よりも、無力な自分にも何かできるのかもしれないと思えてきたのに、その力を明け渡し気にはなれなかった。

だが、アインはなおも厳しい表情のまま、なのはが無意識に握りしめたレイジングハートに手を差し出す。

「君ははつきり言って素人だ。こう言う仕事は私のようなプロに任せろ」

「むう……」

「いいから、渡しなさい」

なのはの了解も聞かないまま、アインはレイジングハートを力づくで奪おうと手を伸

ばす。しかしなのはもそれには領かず、アインから距離を取るように身をよじった。

ユーノはきつく叱責されながらも必死に拒むなのはを見て、思わず口を挟みそうになるが、無関係な少女を巻き込んだ意識から重い口をひらけなかった。

アインの言ったことは間違っていない。事件解決よりも民間人の保護を優先し、戦場から引き離そうという考えにはユーノも賛成であった。もし今夜アインが来ていなければ、静かになのはの元を離れてまた一人でジユエルシードを探しに行くつもりであった。

アインが困ったようにため息をつき、無理やりなのはから没収しようと身を乗り出した、その時だった。

バチイツ！と閃光が走り、なのはとアインの間で激しい火花を散らせた。閃光はアインの手を拒むように、逆になのはを守るように強く迸り、わずかながら衝撃を辺りに放った。

「ぐっ！」

「キャツッ？」

不意のことにアインも反応できずに後ずさり、なのはも目をそらして悲鳴をこぼす。宝玉が放った光に照らされ、ユーノもとつさに視界を小さな腕で覆う羽目になった。

予想以上に大きな声と音が出たことに気づいたのははハツとなり、慌てて口を押さ

えるが幸い家族には聞こえなかったようで反応はない。ホツと安堵したなのは、ややあつて不安げにアインの方にそろそろと視線を向けた。

パリパリと桜色の電流が流れる右腕を押しえたアインは、なのはの腕の中でほのかな光を放つ宝玉に鋭い視線を向け、わなわなと幽かな怒りに震える口を開いた。

「……どういうつもりだ？」

【My master is the only her.】

微量ながらも殺気まじりに尋ねるアインに、レイジングハートははつきりと答える。痺れが残る腕を一振りしたアインは、先ほどよりも鋭く魔法の宝石を睨みつけた。

「本気で言っているのか？ どれほど危険かお前が一番わかっているはずだろう」

【It is of course.】

But I m sure that she has no one mastered me to the other.】

「ガキのお遊びじゃないんだぞ。魔法に触れたばかりのズブの素人が関わって、ろくなことにならないと私は思うがな」

【……】

y master other than her.】 But I do not allow m

レイジングハートはなおも強くアインの言葉を否定し、触れることを拒絶するかの方

に淡い光を放つ。呆けた様子で見下ろすなのはの掌の上に鎮座するその姿は、どこか不遜で誇らしげに見えた。

しばらくの間、レイジングハートを射殺すように睨みつけていたアインだったが、やがてその殺気を霧散させた。深いため息をつき、疲れを見せる憂いの表情を浮かべた。
「……ハア、とんだ頑固者だな」

唯一封印術式を使用できるレイジングバート自身に拒絶されてしまつては、今後力を借りることは不可能であろう。無理矢理なのはから引き離し、行使しようとすれば、今度こそへそを曲げられかねない。

レイジングハートの説得を諦めたアインは、申し訳なきような表情でなのはに向き直った。

「ならば君からー」

「イヤです!!?」

今度はなのはから力強く拒絶されてしまい、アインは額に手を当てて天井を仰いだ。何度も危険だと言つたのに、それなりにきつく言いつけておいたはずなのに、なぜこんなにも反抗的なのか。

なのはは呆れて言葉もないアインにふんすと鼻息荒く向き直理、畳み掛けるように反論を開始した。

「さっきのお化けみたいなのは怖かったけど……でも、だからって何もせずに見ないふりなんかしたくないです!!? 私も、ユーノ君のお手伝いをしたいです!!?」

「……………」

アインは天井を仰いだまま、正義感を爆発させている少女の言い分に眉を寄せる。気持ちにはわからなくもない。自分の周りに爆発寸前の危険物が転がっているのかもしれないのに、その命運を他人に任せるなど気分は良くないであろう。

しかし、これは魔法に触れたばかりの素人ではどうかできる問題ではない。知識も技術も疎い一般人がむやみに関われば、命の危険だってありうるものなのだ。

そう説明しようとしたアインだったが、なのはの目を見て早々に諦めた。

利益目的ではない、完全な善意によるゴリ押しは非常にタチが悪い。どんなに理路整然と語りきかせても、ほっとけない助けたいと精神論で返してくるためなだめるのが困難なのだ。無理に押さえつけようとすれば、より強く反抗心を持って向かってくるため終わりが見えない。

アインはなのには見えないように情けない表情になると、「こういう手合いはやりづらいんだよね」と小さくこぼし、深く深くため息をついた。

「それに、この子……レイジングハートは私しか認めていないんですよね? それに、さつきみたいなのを封印するにはレイジングハートの力が必要……なんだよね?」

「えっ……う、うん」

「じゃあ、私が力を貸さないとダメってことなんですよね？」

いいことを聞いた、と言わんばかりになのはの表情は明るい。逆にユーノは、ニコニコとしているのはに引きつった顔を向けていた。

確かにそうだ。いちばんの問題は、少女の手の中にあるデバイスが少女以外のものに手を貸してくれないことなのだ。なのはが命じない限り、レイジングハートは決して封印術式を使つてはくれぬだろう。

逆に言えば、なのはが命令すればレイジングハートは嬉々として魔法を展開し、アインの力にもなつてくれるだろう。ついでに未熟ながら類稀なる才能を持った新米魔道士もおまけでついてくるという、大変お得な話だ。人員も全くいないこの状況であれば、垂涎ものの条件であろう。

要するになのははこう言いたいのだ。代わりに封印してやるから私も連れて行け、と。

「……大人を脅すとは、大したガキだな君は。まあ、確かにその通りなんだが」

アインは目を覆い、見た目はおとなしくいい子に見える少女に戦慄を禁じ得ない。設定していたバリアジャケットも純白で、可愛らしい姿は天使にも見えるのに、言っていることはまるで悪魔のような凶悪さだ。なぜか、なのはの背後に小悪魔の尻尾と羽が見

えた気がした。

「まったく……人の弱みにつけ込みやがって。最近の子供は強かすぎやしないか……？」

アインは長い間ブツブツと唸りながら、真剣な表情で見つめるのはと不安げに見つめるユーノの間で板挟みになり、じっと同じ姿勢で固まったままでいた。

するとやがて、アインは降参だと言うように両手をあげ、呆れた視線を向けた。折れる以外に、この沈黙を破る方法が見つからなかったのだ。

「分かった分かった……私の負けだ。ついてくるなんてもう言わない」

「じゃあ……！」

「ただし！決して私の許可なしに勝手な行動はとるなよ。それで怪我を負っても、私は一切責任は取れないからな」

そこだけはつきりと言い残し、きつく言い聞かせることを忘れない。それでも勝ったといわんばかりにニコニコと笑っているのはを横目に、アインは窓枠を踏み越えて外に出て行く。視線の端では、なのはがユーノの小さな手を取ってぶんぶんと振って喜びをあらわにしている。先ほどの悪女つぶりを微塵も見せない、無邪気な様子だった。

「頑張ろうね！ ユーノ君！」

「う、うん……でも、本当にいいの？ 危険な目にあつたばかりなのに」

「平気だよ！ 私、頑張るからね！ よろしくね、レイジングハート！」

和気藹々とユーノやレイジングハートを相手にはしゃいでいるなのはを横目に、窓の外に出たアインは深く深くため息をついて情けない顔を晒していた。今まで鉄仮面のようになりあまり表情の変わらなかつた彼女が見せた表情は、疲れ切つた老人のように憂いを帯びたものだった。

「……クソ、あいつらになんて顔して会つたらいいんだ？」

腹立たしいほどまでに晴れ渡つた、満天の星空の方を向いて誰にともなく呟いたその言葉は、誰にも届くことなく虚空に消えるのだった。

3. 先を生きる者

「……そう、集中して。心の中にイメージを描いて」

人もまだいない早朝の公園にて、淡い桜色の光が一角を照らしている。

その中心に居るのは私服姿のなのはだ。目を閉じ、レイジングハートを構えたままじつとその場で直立姿勢を保っている。

それをアインとユーノが少し離れた場所から見守り、同時に周囲の気配に気を配っている。ユーノはじつとなのはに集中していたが、アインは腕を組んだまま厳しい表情でなのはの一举一動を監視し続けていた。

「そのイメージをレイジングハートに渡して」

「う、うん」

「イメージに魔力を込めて、呪文とともに杖の先から一気に放出するんだ」

ユーノの説明に必死に追いつき、なのはは言われた通りにイメージを形にしていく。三日月型の装飾の先端に光が収束し、紡がれたイメージが形を得ていく。

なのはのこめかみから吹き出した汗が頬を伝い、首筋を通って胸元に流れてつてもなのはは意識を途切らせない。常人を遥かに超える凄まじい集中力で、なのはは新たな魔

法を習得しようとしていた。

「えつとおく……捕獲魔法発動！」

そしてついに、勢いのいい声とともにレイジングハートから桜色の閃光が発射された。数メートル先に置かれた空き缶を的にし、目標を捕獲するための魔法が解き放たれる。

が。

「あ」

まっすぐ向かっていたはずの光は大きくカーブを描き、術者であるのはに向かつて跳ね返ってきた。呆けた顔で桜色の光を凝視し、硬直したまま動けずにいたのはだったが、不意に彼女の襟首がグイッと強く引かれ後ろに倒された。

「うにゃあああ!?」

とつさにバランスを取れなかったのはそのままアインに抱き寄せられ、大きな胸の中に包まれる。

迫り来る魔法の光を睨みつけたアインは、なのはを抱えたまま右足を槍のように突き出し、靴底を光の中心に向けて勢いよく突き出した。

パァーン!と強烈な破裂音が響き渡り、蹴撃を受けた桜色の光は一瞬で霧散する。衝撃と共にキラキラとした魔力の光が四散し、あたりをわずかに照らし出した。

ユーノは慌てて駆け寄り、なのはの安否を確認すべく呼びかけた。

「なのは!?? アインさん、大丈夫ですか!??」

「び、びつくりしたあ」

アインの腕の中に抱かれたまま、なのははアイン越しに受けた衝撃に目をパチクリとさせる。威力の低い初歩の捕獲魔法であったのが良かったのか、それとも自力で防御したためかアインには目立った外傷も痛みを感じている様子もない。端から見えていたユーノはほっと安堵した。

暖かい腕の中で呆けたままなのはに、アインは呆れた視線を向けたまま厳しい声を発した。

「集中を切らせたからだ。発動してもしつかり最後まで目を外すな」

「うう……ごめんなさい」

「それと、イメージが根本的に足りていない。本気で会得したいなら基礎の基礎はしっかりと押さえておけ」

「はい……」

厳しい評価になのはのツインテールがしゅんと垂れ下がる。まるで猫の耳のように感情を見せている様を、アインは一体どういう構造なのかと内心で興味深そうに眺めていた。

「なかなかうまくいかないなあ。……なんでだろ」

「いや、でもすごいよ。たった数日でここまでできるようになったんだから」

「そ、そうかな? えへへ……」

現金なもので、ユーノに褒められて急速に元気を取り戻す。ユーノ自身も慰めのつもりは微塵もなく、魔法の腕を数日でめきめきと上達させているなのは持つ才能の高さに本気で驚いていた。今まで全く魔法に触れたことがないなど、今でも信じられないほどだ。

だがユーノがベタ褒めする一方で、アインは全く容赦がなかった。

「まあ、失敗していれば意味はないがな」

「はうっ!??!」

「アインさん!」

せっかく上昇し始めたなのはテンションが一気に下がってしまったことに、ユーノが思わず抗議の声を上げる。再び心に深いダメージを負ったのは胸を押さえ、がっくりと膝をついてうなだれる。

アインは悪びれることなく、落ち込んでいるなのは前にしやがんで視線を合わせるのと、じつと真剣な眼差しを向けて語りかけた。

「己の力を制御することは、力を持つものの義務だ。中途半端に使える程度では、その力

で自分や他の誰かを傷つけることだってある。……ゆめゆめ忘れるな」

「……はっ」

実感のこもった重い言葉に、なのは冷や水を浴びせかけられたかのように平静になる。アインの言葉の中にある重みは、無下にすることを許さないほどの存在感をなのはに感じさせた。

物語のようにただ奇跡を起こし、人を救う優しいものだけが魔法ではない。ジュエルシードのようにゆがんだ形で人の願いを叶え、多くの人を巻き込んで大切なものを壊してしまう例もある。そのことを忘れてはならないのだと、なのはアインの言葉から汲み取った。

なのはが自分の言葉を胸に刻んだと察したアインは、満足したのかふつと微笑みを浮かべて立ち上がる。慰めるようにポンポンと頭を撫でると、くすぐったかったのかなのははわずかに頬を赤く染めていた。

その様に、ユーノは思わず驚嘆のため息をついた。

「……厳しいですね」

「お前が優しい分私が厳しくしておこうと思ってな」

「あはは……お世話になります」

見事な飴と鞭に、なのははぼりぼりと頭をかいて改めて頼む。ただでさえ未熟ゆえに

面倒をかけているのに、技術の向上にまで気をかけてくれる二人には頭が上がりなかつた。

ユーノはアインの持つ厳しさと、同時に気をきかせる優しさを目にし、ふと思いついたことを尋ねてみた。

「アインさんは、もしかして管理局で教官をやっていたんですか？」

「……一応な。戦術や近接格闘を指南していた。昔の話だな。まあ、魔法は初歩以外はあまり教えられなかったが」

「へえ〜」

アインの意外な経験を知り、なのはは感心した声を上げる。それならば教えることに対してここまで真剣にやってくれることにも納得できる。それが仕事だったならなおさらだ。

その時、ベンチの上に置いていたなのはの携帯電話がアラームを鳴らした。

「あ。もう朝御飯の時間だ」

「じゃあ、今朝はここまででってことで」

「ありがとう、レイジングハート。また後でね」

【Good by.】

なのはの手の中で、レイジングハートは光に包まれて待機形態に変形する。宝石の姿

となつた相棒を首から下げると、なのはは自身の掌を見下ろしてため息をついた。

魔法の力を手に入れてからわずか数日。ユーノとアイン、そしてレイジンググハートから様々な魔法の使い方について学んできたが、習得するに至つたものはまだまだ片手で数える程でしかなかった。力になる、と自分で宣言したというのに結果がこの程度というのが、なのはには不満であつた。

「……攻撃や防御の魔法はなんとなくコツがわかつてきたんだけどなあ」

「君は砲撃に特化した魔導師としての才能があるようだな。エネルギー放出系で元の魔力が大きい分、微妙なコントロールが難しいのだろう。まあ、できるに越したことはないがな。」

「ホウゲキ?」

「足場を固定し、相手に遠距離から魔力砲による攻撃を与える役だ。ただ……砲撃に準備がかかるため、前衛向けではないことは確かだな」

「うん。本来は後方に下がつて、味方に守つてもらいながら戦うべきなんだけど……でも、とりえずは大丈夫ですよ。少しは魔力が戻つてきたので、サポート系の魔法はボクがサポートできます。もともとそつち系の魔法は得意なんです」

「……そうか」

魔力が戻り、自信も多少戻つてきたのかユーノはなのはの肩の上で胸を張つた。

なのはが攻撃、ユーノが援護、まだまだ未熟ではあるがなかなかバランスのいいコンビであろう。普段から一緒にいるぶん連携も鍛えられていて、そう遠くないうちにいいコンビになることがうかがえる。

アインはそんなユーノやなのはをじっと見下ろしていたが、やがて何も言わぬまま目をそらした。一瞬だけ、その瞳の奥に何かしらの感情が見えた気がしたが、話し合っているのはとユーノにはそれが目に入らなかった。もし目にしていたとしても、それが一体どんなものなのかは二人にはわからなかっただろう。

「……では、私はここで」

「あ、はい。ありがとうございます！」

かすかな疑問を教え子たちに残したまま、アインは二人に背を向けて颯爽と立ち去っていった。

遠くなっていく背中にペこりと頭を下げた二人は、駆け足で自宅へ向かっていく。朝早くから動いたためか気持ちのいい疲労感と空腹感が湧いていて、なのはは自身の頭がすつきりと冴え渡っているのを感じた。

今までにないほど充足感に満ちている。いつも感じていた空虚感が消え去っていて、何もしていなくても自信が溢れてくるような気になっていた。

その時、途中で立ち止まってなのは達の背中を見送っていたアインは、時ちゆするよ

うに薄い笑みを浮かべて拳を震わせていた。

「……ありがとう、か。巻き込んでしまったのは、私なんだがな」

後悔に満ちたその声は、誰の耳にも届くことはなかった。

♠ ◆ ♡ ♣

「おはよー…」

「おはよう」

今朝の気分が抜けきらないまま、なのはは自分のクラスに入り、席に着いた。カバンの中の教科書を机の中に入れてみると、アリサとすずかが猛スピードで駆け寄ってくるのが見えた。

「おはよう、なのはちゃん」

「ユーノはどう？」

「あ、アリサちゃん。大丈夫、元気だよ」

どうやらユーノのことが気になって来たらしい。

一応メールで自分が飼うことになったと連絡したが、やはり本人の口から聞いた方が安心するらしい。メールを送った翌日は、それはもう怒涛の勢いで質問して来て驚いたものだった。

「そう、ならいいわ。でも本当に良かったわ。あの動物病院で事故があったみたいだし、

間一髪だったのね」

「ウ、ウン。ソウダネ」

「ん？ どうしたのよあんた。そんなに汗かいて」

「ナンデモナイヨ！」

「なんで片言なのよ……？」

アリサたちに目が合わないように必死に視線を逸らしながら、なのはは必死に話を合
わせる。

心配をかけさせまいとついた嘘だったが、もともとそこまで器用ではないのはには
いつボロが出るかと冷や汗ものであった。

「本当にすごい偶然よね。たまたま逃げ出してたあの子と道でばったり会うなんて」

「う、うん！ びっくりしちやった！」

偶然が過ぎて怪しまれるのではないかと思っただが、どうにか納得してくれているらし
い。しかし感の鋭いアリサと聡いすずかが相手では、下手にごまかせばすぐに嘘がバレ
るかもしれないと油断はできない。現にアリサが、様子のおかしいのはに疑惑の視線
を向けているのだから恐々とするばかりだ。

（二人とも、ごめんね……！）

何より親友たちに隠し事をしていられるという事実がなのはの良心を訶み、締め付けてく

るのが一番辛かった。

「今日は、前回の続きで少数について……」

担任教師の授業が始まり、生徒たちは一斉に黒板に向かって集中する。もともと学習内容が進んでいて、つまらなそうにしているアリサは別として、生徒たちはハイレベルな授業内容に耳をすませていた。

そんな中、なのはは胸元のレイジングハートを手に取り、心の中で小さく呼びかけていた。

「レイジングハート……聞こえる？」

【Yes, I can hear you.】

授業中ではあったが、なのはは最近覚えたばかりの念話で相棒に話しかける。友達に話せない分、こうして重要な秘密の会話を相棒とするのが日課となりつつあった。

「レイジングハートって、やっぱり高性能なんだね。練習に付き合ってもらってびっくりしたよ」

【But で す が 残 念 な こ と に 、 un for tuna tely , 私 単 体 で は 何 も で き ま せ ん 。 I can do little on my own . 一】

褒めるのはだが、レイジングハートはあくまで謙虚だ。ユーノと言いいレイジング

ハートと言い、異世界の人はみんな低姿勢なのだろうか。

「In a sense, I'm merely a vehicle. Without a driver, I cannot fully display my
〔乗り物……かあ〕

レイジングハートの例え話に、なのははふと一台の乗り物について思い出す。

闇の中を切り裂いて現れた、青い光沢を放つスピードを模した意匠のバイク。異世界の魔法使いが駆る、耳に心地いいバリトンボイスで語っていた、主人に忠実な鋼鉄の騎馬の姿を。

「そっか、ええ、思ったんだけど……アインさんの持ってたあのバイク、あの子もデバイス

……なんだよね？ 喋ってたし」

「Yes, He is also the intelligent device. Same with me, it is the intelligent device.」

ペンダントからバイクに一瞬で変形したかのデバイスの姿を思い出し、なのはの脳裏にはある疑問が浮かぶ。

自分の相棒には封印する力はあったのに、アインの相棒にはその能力はないのだろうか。

機能の違いに多少の違いはあれど、根本的に同じように思ったが実際はどこまで異なるのだろうか。

「でもアインさんは、どうしてあの子を使わなかったのかな？ 休暇中で使っちゃダメって言うってたけど」

「Unauthorised use of magic is prohibited. I think for the also I think that there is a reason other with
魔法の無許可の使用は禁止されています。そのために私は……。それ以外に理由があるよ。But he is, is also I think that there is a reason other with

「そうなんだ……でもその理由って……？」

「I don't know the details
Once, I think let's talk about it if there is he and opportunities.

「うん。ありがとう」

自分には勿体無いほど頼れる相棒に、なのはは期待が強まるのを感じる。同時に、こんなにも優秀な相棒に恥じない魔道士になるために、今朝よりもっと頑張らねばと改めてやる気を漲らせるのだった。

「……さん、高町さん！」

「は、はい??？」

担任教師から不意に指名されたのはは、狼狽しながら返事を返すのだった。

街の平和を守る前に、学校や塾の心配をしつかりせねばならないと気づき、しまらな

い気分になった。

◇ ◇ ♡ ♡

なのはが授業態度について教師に注意を受けていた頃、翠屋には新しい常連が顔を出すようになっていた。

もともと美人の店員が多いと評判のこの店には、彼女たちを目当てに集まる客も多く繁盛の一役をになっている。しかし、最近になってよく訪れるようになったある一人の女性を目当てに集まる人も増え、翠屋はより繁盛するようになっていた。

無地のシャツの上に、見慣れぬ外国語のロゴが入った藍色のジャケツトを羽織り、サングラスをかけて長い金髪を三つ編みにした女性。平均を大きく超える身長を持つ彼女は、長い脚を組んで蠱惑的な色気を放ち、男女問わず多くの視線を独り占めにしていった。

中でも男性客の視線を集めていたのは、シャツの中に窮屈そうに押し込められた巨大な二つの膨らみ。こだまのスイカが詰め込まれているかのような柔らかな胸が見せる谷間に、正直者な男たちはチラチラと視線を向けずにはいられなかった。

「……おい、声かけてこいよ」

「……無茶言うなよ。あんな美人と素面で口きけるかよ」

「……弱気なやつだな、当たって砕けてこいよ」

「……砕けたらダメだろ、バカかてめーは」

二人でできたらしい若い男性客が、一人でくつろいでいる女性に注目しながら囁きあっている。あわよくばご一緒したいと話しかける役を押し付けあっていたが、二人の目は基本的に女性のふくよかな胸元に集中していた。

男の悲しいサガとしては当然かもしれないが、それに気づいている他の女性客や店員たちには冷たい目で見られていることを、この男性客たちは気づいていなかった。

(……最近の男どもは意気地が無い奴ばかりだな。まあ、しかたがないか)

そんな視線に気がついていいる当の本人のアインは、呆れたように内心でため息をつく。正直ナンパされようとも相手にする気などサラサラないのだが、視線を向けるだけで行動に移そうともしない弱気な男たちには失望しか感じない。

本気で女性と関わりを持ちたいのならもつとガツガツ攻めてこいよ、と強気な考えを抱いていたが、かといって自分から話しかける気も全くなかった。

「アインさん、コーヒーのおかわりはどうですか？」

男たちの不甲斐なさを嘆いていると、カウンターを他の店員に任せた桃子がサーバーを持って席に近づいてきた。

思わぬ者の訪問に、アインはサングラスの下でわずかに目を見開くが、動揺を悟られぬようにと表面上は極めて平静を装って受け答えた。

「ん、ああ、桃子か。頼もう」

「は、」

桃子は優しい笑みを浮かべ、空になったアインのカップにサーバーから淹れたてのコーヒーを注ぐ。

途端に芳醇な香りが湯気とともに立ち昇り、喉が渴きを訴えてくる。白い手で取っ手を掴み、濃い色の液体を喉にゆつくりと流し込めば、先ほどと変わらない深みのある味に満足げなため息が漏れた。

「……腕を上げたな、士郎」

正直に漏れた感想に桃子が満足げな笑みをこぼして立ち去って行く。その笑みを目にしたアインは、バツの悪そうに目を逸らして口をつぐんだ。

アインの感想が聞こえたのか、カウンターの向こうにいる士郎も満足げに微笑んできたが、表情が固まったままのアインはそれに返答することはできず、黙々とカップを空にするばかりであった。

「あの……アインさん？」

一人コーヒーを堪能する彼女の元に、同じ異世界の住人から念話が届く。

居心地の悪さから逃避するように芳醇な香りと味に舌鼓を打っていたアインは、この家の子供部屋に在るであろうフェレットに機嫌よく取り繕って応えた。

「なんだね？」

「このあいだのことなんですけど……本当に封印術式は使えないんですか？ あなたのデバイスの……ブルースペイダーは、ちゃんと移動手段としては機能していたようですけど」

「ああ、そのことか」

なのはの部屋に置かれた籠の中で傷を癒すユーノの考えを瞬時に読み取ったアインは、少年の優しさに苦笑しながら返答した。

「私が今使用を許されているのは、君が言ったバイク形態と待機形態だけだ。他の機能は封印されている」

「え？ それはまたなんでですか？」

他意はない、ただ純粹な疑問で尋ねてきたユーノに、アインは一瞬だけいいよどむ。正直子供には効かせたくない重い大人の事情があるため、また自分の汚点を晒すことになるため慎重に言葉を選ぶ必要があった。

「昔、ちよつとやらかしてな。上層部^上から信用されてないんだ」

「あ……すみません。無神経なこと聞いてしまつて」

「気にするな。自業自得というものだ。……それに、他にも理由はあるしな」

話さなかつた己にこそ、そしてそんな事態に陥つた己にこそ最も責任があるのに、無

礼を詫びて声を小さくするユーノにいじらしさを感じる。

少年は本当に優しい、あまりに優しすぎる。自分のみの危険も顧みずに単身別世界へと渡って行った彼に、これ以上重荷を背負わせるわけにも行かないと、話題をここで切り上げようとする。

だが、人こぼした最後の言葉は少年に届いてしまったらしい。

「それは、一体？」

「……………」

口が過ぎた、と我に帰ったアインは突如ユーノの問いに答えなくなつた。訝しげにユーノは首をかしげたが、アインは一向に口を閉ざしたまま何もいつてくれない。

しばらくして、アインは話題を変えるようにユーノのいるであろう気配の方向に強い視線を向け、少年の体をびくりと震わせた。

「それよりも、ユーノ。君は今の話から察するに、なのはの元から離れて私とジュエルシードを探しに行くつもりだっただろう」

「うっ……バレちゃいましたか」

凶星を指摘されたユーノは首を縮め、遠くから感じるじとつとした視線に俯く。

アインがもし封印の力を有していれば、自分の魔力が戻る頃にアインとともに姿を消すつもりだったのだろう。

アインがかつて自分で言ったように、なのは本来なんの関係もない一般人であった。それを危険な目に合わせた負い目から、自分から離れようと思ったのだろう。

〔諦める。先日も身にしてみただろうが、あの子は恐ろしく頑固者だ。私たちがあの子の前から姿を消したからといって、それで身を引くとは思えん〕

〔でも、この間よりももっと恐ろしい目に巻き込んでしまうかもしれないのに〕

〔馬鹿者。そんなことをすれば、あの子は自分から危険に向かつて関わってしまうぞ?〕
〔うつ……〕

その様子が容易に想像できたのだろう、ユーノは呻き声を漏らして黙り込んでしまった。この様子だと、自分が安易に助けを求めたからこんな状況になってしまったのだと、また深い自己嫌悪に陥ってしまったているのかもしれない。

仕方のない子だ、とアインは呆れながら、無謀な勇氣に内心で賛辞を送る。こう言った男気を見せる連中に、アインは昔から弱かった。

〔あまり気負うな。そう言うのはお前達子供が負うものではない。役に立てない私たち大人の責任だ〕

〔アインさん……〕

〔案ずるな。——私が護るさ〕

アインは淡々と、まるで確定した事実を語るようにそういつて見せた。自信に満ち溢

れているわけでも、意志が固まっているわけでもない、ただそんなことは当たり前であるというように、アインはユーノに宣言して見せた。

根拠があるわけではない。だがユーノはその言葉に救われた気がして、安堵の笑みを浮かべた。

その時、入口のベルがチリンチリンと音を鳴らし、なのはが明るい笑顔とともに帰宅した。

「ただいまー」

看板娘の一人に笑顔を見せる客たちに挨拶しながら、なのははアインの姿を見つけて駆け寄っていった。

「あ、アインさんこんにちは」

「ああ、おかえり」

アインはサングラスを外し、ニコニコと上機嫌なのはに挨拶を返す。表情と同じく抑揚の乏しい声だったが、なのははそれでも喜びに満ちた表情を浮かべていた。

そこへ、食器を片付けていた桃子が何かを思い出し、なのはに耳打ちをした。

「おかえりなさい、なのは。あ、そうだわ。午後からのお休みの準備はちゃんとしてる？」

「うん！ ばっちりだよー！」

よほど桃子の言っている午後の予定が待ち遠しいのか、なのはいつにもまして浮き足立っていた。

なんの会話をしているのか流石に気になったアインは、店の奥に戻ろうと桃子が離れたタイミングを見計らってなのはに尋ねてみた。

「どうしたんだ？ 何か予定でもあるのか？」

「ユーノ君が家に来る前にした約束なんです。新しくできた温水プールにみんなで行こうって」

「ほう？ プールか」

何かと思えば、午後の休みを利用して遊びに行く計画だったようだ。できたばかりのプールに行くなら、確かにここまで楽しみに思うのも納得である。

するとなのはは、少しだけ期待の眼差しを向けながらアインの耳元に顔を近づけて言った。

「……あの、アインさんも一緒にどうですか？ お姉ちゃんやアリスちゃんたちも一緒に行くって言ってる、アインさんのことも紹介できたらいなって思ったんですけど。……ジュエルシード探しはお休みすることになっちゃいますけど」

「……いや、一緒に行くのは遠慮させてもらおう。友達との仲を邪魔するのも忍びない」
なのはは一緒にきてくれることを期待していたようだが、アインは少し居心地悪そう

に目を逸らしてそれを断った。なぜか視線が一瞬だけ桃子や士郎の方に向いた気がしたが、ほんの一瞬であつたためになのはは気づかなかつた。

「それに私は、実は肌を晒すのが嫌いなんだ。……すまないな」

「そう、ですか……」

ジャケットの袖を抑えてそっぽを向くアインの前に、残念そうになのはは眉尻を下げた。ただ遠慮されたのならもう少し粘るつもりだつたようだが、水着姿になるのが嫌なのなら諦めるより他にない。

それでもよほど誘いたかつたのか未練たらたらのようで、なのはは悲しげにアインの方を見つめて瞳を潤ませている。

アインはそんなのはに呆れ、ため息をつくとかすかに微笑みを浮かべて少女の頭を撫でた。

「楽しんでおいで。私はよそで見守つてるから」

「……はいー」

送り出されたなのはは笑みを浮かべて答える。誘えなかつたのは残念だが、アインにも事情があるのだから仕方がない。

ならばせめて彼女のぶんも楽しんでおこうと、期待を高めていた。

「……と、いうことだユーノ。今日は休みだ」

「は、はい。ボクとしてもものには自分のことを優先してもらいたいと思ってました
っ」

急遽念話をつなぎ、アインはユーノになのはとの会話の内容を連絡する。

ユーノもユーノで、手伝ってもらっている身で自分の都合を押し付ける気はさらさら
ないようで、逆に安堵の表情を浮かべている。正義感で自ら事件に関わりに行くのでは
なく、友達との時間を優先してもらって安心したのだろう。

そんなユーノに、なのははウキウキとした気分のまま妙に明るい声を届けた。

「ユーノくんも一緒にいきましょうね。みんなユーノくんに会いたがっていたし」

「……………え？」

唐突なのはの言葉に、思わずユーノの口から間抜けな声が漏れ出る。

全くの初耳である自分の予定に、ユーノは目を丸くして呆けていた。

4. 歪んだ欲望

自宅の門の前で、なのはと美由紀はそれぞれ可愛らしいプリントの施された袋を持ち、待ち合わせの時間を潰していた。

なのはの肩にはユーノが乗り、少し落ち着かなさそうにキョロキョロと辺りを見渡している。これからプールに行くというなのはの予定に半ば強制的に参加することになり、女の子と遊びに行くという経験がほぼないユーノはいまになって気恥ずかしくなってきたのだ。

ソワソワと所在無さげに佇んでいるユーノに、なのははふつと可笑しそうに笑いかけた。

「緊張しなくても大丈夫だよ。アリサちゃんもすずかちゃんも優しい子だから」

「キユウ……」

美由紀がいるため、ユーノは鳴き声でなのはに返答する。

一応、ユーノにもアリサとすずかに面識はある。だがその時は傷を負って朦朧としていた時であり、はつきりと向かい合ったわけではなかった。なんとなく顔立ちを覚えていたぐらいで、どんな子かは覚えてはいなかった。

そうこうしているうちに、高町家の前に一台の黒塗りのリムジンが停車した。黒々と光沢を放つ高級感漂う大型車に、初めて目の当たりにするユーノはなのはの肩の上で目を丸くした。

すると、リムジンの後部座席の扉が開き、メイド服姿の二人の女性が姿を現した。シヨートヘアで長身の凛々しい女性と、小柄なロングヘアの可愛らしい少女だが、髪の色から姉妹であろうと伺えた。

「なのはお嬢様、美由紀お嬢様、お迎えにあがりましたよ」

「今日はよろしくお願ひしますね〜」

「ノエルさん、ファリンさん、ありがとうございます」

ノエル、ファリンという月村家に仕えるメイドたちが、見とれるほどの美しい姿勢でこうべを垂れる。つい高町姉妹もつられて、二人のメイドに深々と頭を下げてからリムジンに乗り込む。

中の座席には、すでにアリサとすずかが着席しており、なのはたちに席を譲ろうとしているところだった。

「あ、すずかちゃん、アリサちゃん。送ってもらってごめんね」

「気にしないでいいよ」

「いっくわよー!」

威勢のいいアリサの声で、全員を乗せたリムジンはプールに向けて発車する。

「午前授業だと、午後にお出かけできていいよね」

「ねー」

「私は泳ぎを教わらなきゃ……！」

目的地に着くまでの時間に、なのはたちはそれぞれ思い思いに語り合い、過ごしていた。待ちに待ったプールに想いを馳せる中、なのははハツと表情を変えてアリサたちに手を合わせた。

「あ……そうそう。ごめんね、アインさん誘えなかったよ」

「そうなの……あれ以来会ってなかったから話そうと思っただのに」

「また今度だね」

申し訳なさそうに眉尻を下げるなのはに、アリサたちも残念そうに肩を落とす。

少ししか話してはいないとはいえ、一度は危ないところを救われたのだ。まともな話もできないうちにうやむやになってしまったため、もう少しちゃんと話しておきたかった。

「でも、翠屋によく顔出してるんでしょ？　じゃあそのうち会えるわよね」

「うん！　もうすっかり常連さんだよ」

アリサたちには秘密だが、なのはがユーノと出会い、魔法のことを知って翌日から、ア

インはよく翠屋に顔を出すようになった。相変わらず何を考えているのかわからなかったが、父・土郎のコーヒーマシンの味を気に入ってくれてイッルのは確かだったので喜ばしかった。

ニコニコと笑っているのは、ふと美由紀が真剣な顔を寄せてきた。

「……なのは、最近アインさんと仲いいんだね」

「え？ うん。まあね」

「……そっか」

何か言いたいことがあるのかと思ったが、美由紀はそれだけ言ってすぐに自分の席に戻ってしまった。

訝しげな表情になったのはは思わず、姉の顔を覗き込んだ。

「？ どうしたの？」

「……ううん！ なんでもないよ。プール、楽しみだね！」

取り繕うような笑顔で、美由紀はなのはに気にするなと手を振る。

はぐらかされているのは確かだったが、なんとなく詳しくは聞いてはいけないのではないかと思ひ、なのははそれ以上追求することはなかった。

◇ ◇ ◇

「プールサイドは走るなー！」

「周りに気をつけて遊んでねー!」

「はーい」

「ごめんなさーい!」

景観も美しい、新品のプールに少年少女たちの声が響く。

元気な子供達に注意を促した恭也は、濃い紫の髪の女性とともにプールサイドで佇んでいた。二人の距離は近く、相応に親しい仲であることがうかがえる雰囲気放つていた。

「あ、お兄ちゃんと忍さんだ!」

「こんにちはー!」

そこへ、それぞれで色とりどりの水着に着替えたなのはたちが訪れた。色鮮やかな水着の意匠も形状も実に様々で、容姿も整った少女たちが六人も集まればプールサイドは一層華やかになった。

「お、きたか」

「監視員のお仕事、お疲れ様!」

「お姉ちゃん、新調した水着似合ってるね!」

「ふふん、そうでしょ?」

なのはとすががそれぞれの兄姉のもとに向かうと、二人はそれを笑顔で迎える。す

ずかは目を輝かせ、姉のまよっている水着を賞賛すると、姉の忍は色っぽいポーズをとって豊かな胸を張った。

恭也の隣にいる忍のことを知らないユーノは、美由紀の持つカゴの中で小首を傾げていたところ、それに気づいたなのはが念話で説明した。

「忍さんはすずかちゃんのお姉さんで、お兄ちゃんとお付き合ってるんだよ」

「へえ……」

意外な繋がりにも、ユーノは驚きのつぶやきをこぼす。すずかとは親友であるだけではなく、そのうち親戚関係ともなるのか、と。

ユーノが関心していると、安堵の笑みを浮かべたアリサとすずかがカゴの前にしゃがみ込んできた。

「こんにちは、ユーノ！」

「元気になってよかったね！」

「キユー！」

拾われた時以来会っていなかった二人に心配をかけまいと、ユーノはフェレットになりきって全力で媚びを売る。知らないところにも心配をかけたことに罪悪感を覚えながら、今は無関係の小動物を装うのだった。

「じゃあ、予定通り時間を忘れて楽しみましょうか！ でも私たちの目の届かないところ

ろにはいかなこと」

「は〜い〜!」

子供達は元気よく返事を返し、歓声をあげてプールに向かつていく。飛び込み台や流れるプール、風呂好きなのエルもうならせる風呂も揃えられた贅沢な施設は、少女達の心を掴むには十分だった。

「キュツ、キュツ!」

「あははは! ユーノ泳ぐの上手!」

「すごいすごい、泳いでる!」

「すずかちゃんも泳ぐの速いね〜。向こうで競争してみようか」

「いいですよ、負けません!」

「じゃあ私審判やりますよ〜」

浮き輪につかまって器用に泳ぐユーノをはじめに、少女たちは水飛沫とともにプールを大いに堪能する。万が一のことがないように、美由紀やノエル、ファリンの管理のもとと年相応にはしやぎ始めた。

弾ける水飛沫がキラキラと光を反射し、少女たちの艶のある髪や肌を濡らす光景は壮観とも言える。さらには集まっているのは非常に容姿の整った女性ばかりであり、プールにいる男性陣にとっては大変ありがたく、眼福であった。

無論恭也も例外ではなく、恋人や妹、さらにその友人たちが楽しんでゐる光景を、警備ついでに満足げに眺めていた。

その時、通信が入った無線を手に取った恭也がなのは達の元から距離をとった。

「! はい、高町です。……なんですつて?」

様子が変わつた恭也に、忍が表情を変えて近寄つた。忍を見遣つた恭也は、妹達には悟られないように影に入り、腕を組んで難しい顔を浮かべる。

「忍、すまんが少し離れる。ここを頼んでいいか?」

「え? いいけど、どうしたの?」

「不審者を捕らえたららしいんだが……少し妙な話になつていてな」

「どうしたの、恭ちゃん?」

「何かあつたのですか?」

主人とその恋人の様子が変わつたことに、案じたノエルが近寄る。年長組が集まつているのに気がついた美由紀も、何事かと不安げな表情で集まつた。

難しい表情のまま無線機を見下ろしている恭也に変わつて、忍が集まつてきた女性陣に小声で説明を始める。

「以前から更衣室が荒らされたり、着替えや水着を盗まれる話があつたらしくて、プール側も警備を強化していたみたいんだけど……まだ犯人が見つかつていないらしくて

ね」

「それは……物騒ですね」

「もしかしたら、さつき聞いたのがその犯人かもしれない。だが、荷物周りには注意しておいてくれ」

「うん」

恭也の忠告に美由紀は、そんな輩がいるのなら自分たちで妹達を守らなければ、と保護者としての使命感を感じつつ頷く。

「そういうわけで少し離れる。子供達を頼むぞ」

「はいはい。この埋め合わせはちゃんとしてよね」

監視員をしながら、恋人との逢瀬を楽しんでいた忍に見送られ、恭也は連絡のあった場所へと急ぐ。

去っていく背中に視線を送る忍の様子を見ていたアリサ達は、眩しい恋人の姿に羨ましげな眼差しを送っていた。

「相変わずお兄ちゃんと思さんは仲良しなの」

「そんなにいいものかしらねえ……恋人って」

「ふふ……どうなのかな？」

未だ初恋も経験していない少女達は、甘酸っぱい未来に想像の花を咲かせる。自分た

ちはどんな人と甘いひと時を過ごすのか、どんな人と生涯を誓うのか、そんなことを夢想するだけで、少女たちの胸中には甘々とした感覚が芽生えた。

「恋人かあ……」

ふと呟いたなのは、自分の脳裏にもぼんやりと未来の恋人の顔を思い浮かべてみる。と言つても、親しい男子もまだそんなにいないというのに想像もできるわけもない。

だが、なぜかなのはの脳裏に思い浮かんできたのは、かの運命の夜に颯爽と駆けつけ、窮地を救ってくれた女騎士の姿だった。

なのはは慌てて、その空想を払いのけた。

(もう……なんでここであの人の顔が出て来ちゃうのかな)

確かにかっこいい人で、憧れを抱いているのは確かだが、恋愛という観点から言えば論外、のはずだ。

なのにその顔は、しばらくなのはの脳裏から離れてはくれず、なのはは赤い顔を水中に沈めて隠すよりほかになかった。

なのはたちを美由紀たちに預けた恭也は、連絡のあつた更衣室の近くにたどり着いた。見ればすでに何人かの係員と、見慣れない金髪の女性が立っているのが目に入っ

た。

「高町です。遅くなりました」

よく通る声で名乗り輪に入ってみれば、拘束された男が係員に連れられていくところだった。状況を見るに、この女性が不審者を捕らえたということであろう。

「あなたが不審者を捕らえてくださった方ですか？ 遅くなつて申し訳ありません」

近寄つて礼を言おうとした恭也だったが、女性が振り返つてきたことで言葉を途切れさせた。

「……………！ アイン、さん」

「む、恭也か。ちようどいいところに来てくれた」

横目を向けたアインが、恭也に顎で男の方を指し示した。

「ほれ。あいつが例のコソ泥だ。更衣室のあたりをうろついていたのを咎めたら急に態度を変えてな」

「いつの間に……………」

しばらく前からここにいる自分や他の係員よりも早く不審者を捕らえていたことに驚きながら、恭也は複雑そうな表情のまま視線を逸らした。恭也に背を向けているアインはそれに気づいていたが、何をいうこともなくただ黙つて男が連行されていく姿を眺めていた。

「結局なんだったんだ？ あいつは」

「……近頃、このプールの女子更衣室が荒らされたり水着や下着がなくなる事件が派生してしまっていてね、警備を強化していたんです」

「ああ、それでか。近くを通りかかっただけでよかった」

恭也はじつと何かを言いたげにアインを見つめるが、結局何も言わずに目を閉じる。そのまま、アインの背に向けて深々と頭を下げた。

「……協力、感謝します」

「ああ。後はよろしく頼む。ではな」

最後まで面と向かうことなく、アインは恭也の前から立ち去っていく。恭也もまた視線を向けようとしないまま踵を返し、次の警備場所に向かって歩き出していく。

わずかに重くなった足取りのまま、アインは冷淡な眼差しを虚空に向けてため息をついた。

(ジュエルシードの魔力を感じたから来てみれば……全く関係ない事件に出くわしてしまっただけ)

初めはなのにも言った通り、ここに来るつもりは全くなかった。

だが嫌な“予感”を感じてしまったために、渋々足を伸ばしてみたらこれが大当たりだった。一見何の変哲も無い場所だが、確かにかのロストログアが何らかの影響を受け

て、魔力を放った痕跡を見つけてしまったのだ。

〔……しかし妙だな、あの男からは確かに魔力の残滓を感じたはずなんだが……〕

しかしよく調べてみると、魔力の反応が妙に薄い。雨風にさらされて薄まってしまった匂いのように、ジュエルシードの反応が希薄になってしまったのだ。更衣室荒らしだというあの男の所持品の中にジュエルシードはなかったし、いくら探してもそれ以上探ることができなかった。

そんな時、アインの脳内に直接少年の声が響いてきた。

〔……あの、アインさん。ちよつといいですか？〕

〔ユーノか。お前も気づいたようだな〕

〔はい……やっぱりこっちに來ていらしたんですね〕

不意につながった念話に、アインは即座に返答する。どこか安堵したようなユーノの言葉に、やはり気づかれていたのかと苦笑する。

確かに、なのはには「一緒には」行かないと言ったのだから、嘘をついたつもりではないのだが。

〔なのははまだ気づいていないようだが、確かにジュエルシードが発動した形跡がある。だが妙に反応が薄くてな……〕

自分が気づいたのだから、アインも気づいて当然と思ったのだろう。妙な信頼のされ

方に、アインは微妙な笑みを浮かべて目を伏せた。

長年の経験から培われた自分のこの「勘」はうんざりするほどに優秀だ。長い付き合いのこれが今回もちょうどよく当たってくれたようだが、それを習得するまでのことを思い出すとあまり喜ばしくはなかった。当たって欲しくない予感というものもあるのだ。

「誰かの強い願いと後悔に、ジュエルシードが応えたのではないかと……」

「願いの主については、もう私の方で処理しておいたぞ。ジュエルシードは持っていないかったが」

「本当ですか！ さすがです！」

「……………それで、だな」

尊敬の眼差しを送っているのである。ユーノに、アインは急に言葉を濁し始めた。

いつも冷静沈着なアインがそんな風な態度になるのが意外だった。ユーノは、訝しげに首をかしげた。

「? どうしたんですか?」

「……………その願いというのが、どうも気になってな」

アインはそうつぶやいて、自分が捉えた更衣室荒らしのことを思い出す。

十中八九、ジュエルシードに願ったのはあの男だ。魔力の残滓も、状況も間違いなく

それを証明しており、疑う余地はない。

だが、そんな男が一体何を願ったのか、アインは自分で想像したくはなかった。

「言いづらいんだが、その願いの主がちと湾曲した欲望の持ち主だな。……其奴の願いを聞き入れたジュエルシードが一体どんな反応を見せるのか、と」

「大変じゃないですか！ い、いったいどんな人が……」

「その、な」

とんでもないことが起こるのかもしれない、とアインの様子から誤解したユーノの追求に、アインは居心地悪そうに頭上の空を見上げる。

こんなにも純粋な少年に、果たして言っているのだろうか、というかこんなことを言いたくない。しかしこんなな心配しているのに何も言わないというのも逆に心労をかけてしまいそうだ、とアインは深く悩む。

しばらく唸り、覚悟を決めたアインが話そうとした時だった。

「うわあああああ!!？」

自分が出ようとした通路の反対側から、聞き覚えのある男性の尋常ではない声と異音が響き渡った。

認識するよりも早く、アインの体は動いていた。すぐさま踵を返し、声と音がする方へ全力疾走を開始する。

「この声は……!! 恭也か!!?」

冷淡だった顔にわずかな緊張を混ぜたアインは、風よりも早く駆けていった。

◇ ◇ ◇

「熱戦の末、美由紀さんの勝ち〜!」

「イエ〜イ!」

「うう……残念」

「はい、タオル!」

美由紀とすずかの競争は決着がついたようで、プールの端ではしゃぐフェアリンの声が聞こえてくる。アリスからタオルを受け取っているはずかかかなり落ち込んでいたが、勝負に勝ったはずの美由紀が随分と驚いている様子からかなりの接戦だったことがうかがえる。

なのはそんな騒がしく賑やかな声を聞きながら、のんびりとプールサイドのベンチでくつろいでいた。

(こーやってると、魔法使いになったこととか夢の中だったみたいを感じるな……)

首から下げたレイジングハートをつまんで見下ろしながら、最近の急展開を思い出す。今でもふわふわと実感が湧かず、実は幻であったのではないかと思えるほど不思議な体験、そして新しい出会い。

しかし、この手の中にある赤い宝石の輝きも、隣でくつろいでいる存在も全て本物だ。瞬きしただけで消えてしまうような、あやふやなものではない。

(…でも、夢じゃないんだよね。アインさんも、ユーノ君も頑張ってるんだし、私も……) そう、日々の練習を見てくれる先生たちのことを思い出しながら、改めて決意を固めるのは。

だがふと、隣でくつろいでいたはずのユーノがずっと黙っていることが気にかかった。先ほどまで一緒になってはしゃいでいたはずなのに、いつのまにか黙り込んで小さくなってしまっている。

「ユーノ君、何かあったの？ さっきからずっと難しい顔してるよ」

無言のまま佇んでいるユーノに尋ねると、彼はどこか申し訳なさそうな表情を浮かべ、なのの方を見上げた。

ユーノは悩んだ。行かないと言ったアインがこの場に來ていることを知らせれば、なのはがどんな反応を返すのか。そのことを気にしたユーノはどこか気まずそうに言葉を濁そうとした。

「……うん。ちょっと気になることが……」

言いかけたユーノの顔が、ハッと別の方向をトーンアインの魔力を感じる方へと向いた。さっきまでつながっていた念話が唐突に途切れたのだ。

ジュエルシードについて話していたところだったがゆえに、何か不足の事態が起こったのではないかとユーノは焦り、なのはを置いて走り出した。

「ゆ、ユーノ君!?」

「ごめん、なのは! 楽しんでいるところ悪いけど、ジュエルシードだ。すぐに戦闘になるかもしれない!」

走りながら伝わってきたユーノの言葉に、なのはの表情が以前にも見た戦いを前にした時のもの変わる。なのはもすぐにユーノの後を追いつ、彼の向かっている方へと走り始めた。

「こんな時に、本当にごめん……!」

「大丈夫、私はユーノ君のコンビだもん。一蓮托生、いつでもOKだよ!」

「ありがとう、なのは!」

勇ましい表情でユーノを見つめるなのはに、ユーノは思わず目頭と胸が熱くなるのを感じる。本当なら、友達と一緒に楽しんでいたはずなのに、それを咎めることなくともに来てくれる、そんな少女の優しさが嬉しく、同時に申し訳なくてたまらなかった。

そんな彼の元に、ひときわ大きな魔力の波動が伝わってくる。足を止めたユーノは、緊迫した様子で周囲を見渡して眉間にしわを寄せた。

「しまった! 外部からの刺激を受けて行動を開始するタイプだったのか!」

今までジュエルシードの反応が薄かった理由が今ようやくわかった。休眠状態にあったジュエルシードに何かしらの存在が近づいたことで、ジュエルシードが自動的に覚醒し活動を始めてしまったのだろう。

だが、この場での発動は危険であった。多くの客が集まっている今ジュエルシードが暴れ出せば、最悪の場合犠牲者が出てしまうかもしれない。

「まずい、早くしないと！ 広域結界展開！」

小動物の振りも忘れて、ユーノは大きな声で叫びながら乏しい魔力を練り上げて魔法を発動する。小さな体の下に巨大な魔法陣が展開され、周囲の色が変わって空間が切り取られていくことを表す。

その直後、なのはとユーノのすぐ近くのプールの水が、突如生き物のように動き出し始めた。実体のない透明な塊は徐々に形を得はじめ、ギラついた目と大きく開いた口を持った、不気味な怪物へと変貌した。

「うわあああ？？？ な、なに？？？ 水のお化け？？」

突如至近距離に現れた水の怪物を前にして、なのはは驚愕に声を上げる。

そこへ、颯爽と風を切りながらアインが走り寄ってきた。かなりの速さだったにもかかわらず息も切らせず、怪物を前に固まっているのはとユーノの前に盾になるように立ちふさがった。

「アリサちゃんとすずかちゃんの声!?!」

目を見開き、顔を青ざめさせるなのは。まさかあの二人が、以前のようなジュエルシードの暴走隊に襲われているのか、そう考えてしまい、なのはの中に恐怖心が湧き上がり始めた。

震えるなのはを置いて、アインが悲鳴の聞こえてくる方へと走る。それを目にしたなのはも我に返り、レイジングハートを握りしめて走り出した。呆けている場合ではない、親友を助けるのだ。

そうして、悲鳴の聞こえた場所へとたどり着き、目にしたものは。

「な、何?!? なんなのよコレ?!? ってちよつと、いやらしい動きすんなあ!!?!」

「いやあああん! 脱がされちやううう!!?!」

プールの自ら伸びた、透明な職種に全身を弄られ、身につけている水着を剥ぎ取られそうになっているアリサとすずかの姿だった。

予想だにしなかった光景に、なのはは思わずぼかんと口を開けて立ち尽くし、アインは頭痛を堪えるように額を押さえ、ユーノは慌てて回れ右をして目を背けた。

「……命の危機つてわけじゃなさそうだけど、あれなに? どうなってるの?」

「……だから言いたくなかったんだ」

「ああああああみてはいけないみてはいけない!!?!」

立ち尽くす三人の前で、水の触手がアリサとすずかの脚や脇の間、胸元にまでからみつき、滑り込ませ、いやらしく這いずり回っている。心なき暴走体であるというのに、どう見ても邪な意思が感じられる動きであった。

心配して損したような気分だが、とにかく今すぐには命の危険はないらしい。男子であるユーノにはこの上なく危険な状態であろうが、アインにとつては呆れるより他にはない。

「あの、アインさん。あれはいったい……」

「願いの主が更衣室荒らしだったようだなあ……なんといいたらいいのか」

「つ、つまり……!」 女の子の服を見たいとか、集めたいって願いだから……!!?」

顔を真っ赤にしながら、ユーノが状況の説明をしようとした時、アリサとすずかを捕らえていた触手が動き始めた。するりと絡みついてきた触手が解け、アリサとすずかを空中へと放り出した。空を飛ぶ手段などない二人に、堪える術などない。

「ヴオオオオオオオオオオ!!?」

「きゃああああああ!!?」

「危ないっ!」

呆けていたなのはと、後ろを向いていたユーノはわずかに反応が遅れてしまった。落下していく二人に、魔法を使うことも忘れて駆け寄るも、間に合う距離ではない。

「よっ」

だが、なのはとユーノが躊躇している間に、アインが颯爽と二人の真下に駆け寄り、軽い声とともに危なげなく抱きとめていた。二人ともどこにもぶつかることなく、がっしりとアインの腕の中に収まった。

「あ……ええ？」

「あ、あんたあの時の……！」

すずかは何事かと呆けていたが、アリサはすぐに我に帰って自分を抱きかかえている人物の顔を見上げる。

アインは素っ裸で放り出された二人の少女を痛ましそうに見下ろすとすぐにプールサイドにおろし、自分の来ていたジャケットを二人の方に羽織らせた。少しサイズの大きいジャケットは、難なく二人の素肌を隠してくれた。

「ひどいことを……これでも羽織ってなさい」

「あ、ありがとうございます」

「ど、どうも……つてそんな場合じゃない！　なんてことしてくれてんのよ！　裸で放り出すなんてひどいじゃない！　返せ、戻せ!!？」

全裸のままいる周知よりも、水着を取られたことへの怒りが勝つたらしい。満足そうに水着を飲み込んでゆく水の怪物に向かって、アリサは憤然と立ち向かっていった。

だが、それが気に食わなかったらしい。水の怪物は目にあたる赤い光を細め、アリサたちに向かつて水の触手を猛スピードで放ってきた。

「わあっ!!?」

「きゃああ!!?」

怪物の攻撃に、アリサとすずかはとっさに頭を抱えて目を背ける。

しかし、硬直してしまった二人の前に立ちふさがったアインがぐるりとその場で一回転し、水の怪物に向かつて鋭く蹴りを放った。

「フンツ!!?」

ヒュン、とかすかな音を鳴らして振るわれた回し蹴りは大気を叩き、凄まじい衝撃波となつて水の怪物の触手を弾き返す。それだけではなく、本体と思わしき大きな塊にまで食らいつき、半身を大きく吹き飛ばすにまで至った。

明らかに物理攻撃が効かなさそうな怪物を全くものともせず撃退したアインに、アリサとすずかはぽかんと口を開けて呆けた表情のまま、信じられないものを見る眼差しを送った。

「……あんた、何したのよ」

「ん? 蹴つて吹っ飛ばしただけだが?」

「そんなもんだだの人間ができるわけないじゃないのよ!!?」

「……まあ、そうだな」

至極当たり前の指摘をするアリサに、さすががうんうんと強く頷いて肯定する。ぼりぼりと頭をかいたアインは考え込むように虚空を見つめてから、やがて何かを思いついたように目を見開いた。

そして、じつと見つめてくるアリサとすずかに向き直ると、ニヤリと意味ありげな微笑みを見せた。

「君の言う通り……これはただの夢だ」

「え……………」

アインがそう言うと同時に、アリサとすずかは黄緑色の光に包まれ、急激な睡魔に襲われる。耐えきれずに倒れ込んだところをアインに抱きとめられ、二人はそつとプールサイドの端に寝かされた。

「ご、ごめん二人とも！ プールサイドで悪いけどちょっと眠ってて！」

「よくやった、ユーノ」

アインはジャケットを二人にかけてやると、魔力光を放っているユーノを褒め、今度はなのはの方を向いて頷いた。

なのははすぐに頷き返し、レイジングハートを構えた。途端に桜色の光がなのはを包み、鋼鉄の杖と純白の衣装が生み出された。勇ましく、心優しい地球の魔法使いの再び

の出陣である。

「趣味や興味は人それぞれですが、人様に迷惑をかける変質的行為は良くないと思います！」

【Cannon mode, setup】

「と言わねば……！」

なのは燃えていた。せつかくの姉や友達との時間を潰されただけではなく、その友達にいかかわしい行為までされたことで、なのはの心は熱く燃えだぎっていた。

アインやユーノが、下準備を終えてくれた。あとは自分が全力全開でこの怪物を料理してやるだけだ。

「二人に代わって、私がお仕置きします！」

硬く、そして熱く燃える意志を携えた少女の構える杖が、まばゆい桜色の閃光を放った。

5. 才能の兆し

桜色の光が凝縮し、大鳳とかした杖の先端で眩しく輝く。

その砲口が狙っているのは、大量のプールの水が集まって生まれた怪物だ。無数の透明な液体を蠢かせ、街をなそうとしているなのはに鋭い目と轟く咆哮を浴びせかけている。

「ウオオオオオオオオ!!?」

「……あれ?　なんか、違和感が……」

「どうした、なのは!!?」

核であるジュエルシードを封印しようとしたのはだったが、ふと感じた違和感に眉をひそめる。確かにジュエルシードは発動している、だがその反応が妙に感じたのだ。

「な、なんだかよくわからないけどとりあえず封印!!?」

とにかく、暴れている暴走体を封じなければならぬ。違和感に目をつぶったのはは、荒れ狂う水の怪物の中心に向けて封印砲を発射した。

凄まじい閃光が弾け、水の怪物の体を蒸発させながら巨体を飲み込んでいく。轟音が響き渡る中、魔力をまとっていた水の怪物はみるみるその体を縮めていき、断末魔のよ

うな悲しげな咆哮がこだました。

轟音が収まっていき、水しぶきが霧のように立ち込める中、なのは達のいるその場は元の静かなプールへと戻った、だが。

「……止まった」

「……うん、止まったね」

互いに確認するように、そう呟く。

暴走体は止めた。だが、肝心のジュエルシードはどこにも見当たらなかった。

後に残ったのは、暴走体に奪われたと思わしき水着や下着、衣服ばかり。怪しげに輝いて絵いるはずのジュエルシードは、どこにも残っていないかった。

「でも、出てきたのは水着と下着ばかり……これってどういうことですか?」

「ジュエルシードがどこにもない……? でも、まだ反応は消えてませんよ」

キヨロキヨロと辺りを探し回るなのはとユーノが、困った顔でアインの方を向く。目を閉じて辺りを探っていたアインは、やがて険しい表情で宙をにらんだ。

感じる、魔力の気配。薄くなったそれが幾つにも増えていくのを感じ、アインは視線を鋭くしてため息をついた。

「……どうやら、あれは無数に分裂した内の一体だけのようだな」

「じゃあ急いで本体を探さないと……!」

「うん！ でもその前に……」

「え？」

駆け出そうとしたユーノを、いきなりなのはが抱き上げる。あつけにとられたユーノを肩に乗せ、なのはは誇らしげな目を向ける。

「ユーノ君は怪我が治ったばかりだし、無理は厳禁だよ！ さつきも魔法を使つたばかりで疲れてるでしょ？」

なのはの肩の上で言葉を失うユーノは、少女の目をじつと凝視する。

いつも自分を責め続け、何もかもを背負おうとした少年に、少女は優しさに満ちた笑顔を見せる。こんなにも頑張っているのだ、今度は自分が頑張る番だと、そういうように。

少女には、自分がこの小さな友人と一緒に戦う相棒なのだという、誇らしさがあった。

「私の肩は、今日からユーノ君の指定席！ 行くよ！」

「う、うん！」

戸惑いながら、喜びに満ちた表情で強く頷くユーノとともに、なのはは走り出す。

眩しいくらいの二人の背中を目で追ったアインは、少し悔しげに目を細めた。まるで、自分には無い物を持つていることが、羨ましくて仕方がないともいうかのように。

「……いいコンビだ」

そう眩かれた声は、なぜだか少しかすれていた。

ジュエルシードの反応を追いながら、走り続けるのは達。

ふとその途中、なのは不思議そうな顔になり、隣を走るアインの横顔を見上げた。

「さつき、アインさんがやったのってどうやるんですか？」

「ん？ 何のことだ？」

本気で訝しげに眉をひそめたアインの返答に、なのはは渋い顔になった。

「さつき、水のお化けみたいな暴走体を素手で殴っていたじゃないですか！ 普通でき

ませんよあんなこと！」

「ああ、あれか。あんなのはただ……魔力を拳にまわらせて殴っただけだ。大したこと
はしていない」

「それが普通じゃないんですよ……」

少なくとも自分には、いや他の人間でも早々できまい、となのはが複雑そうな顔になるが、アインは本気で大したことと思っていないようだ。

自分でできるからといって他の誰かにできるなどと言うつもりはないが、この人の場合は若干非常識な常識に思えた。得意分野が偏っているというか、戦闘スタイルが極端
なのだ。

言葉を失うのはとユーノに、アインは少し考えてから口を開く。本人としては呼吸のように意識せずに行っているようなものであるためか、適切な説明に迷っているような様子があった。

「まあ、要はイメージだ。今朝も行ったように、魔法を行使する上で最も必要なのは、自分の願いをデバイスにしつかりと託すことだ。信じるんだ、君の相棒を」

「私の相棒……レイジングハートを……」

そう言われて、なのはは手の中にあるレイジングハートを見下ろす。

そうこうしているうちに、なのは達の前で無数の透明な影が動き出した。先ほどの分裂体の大元らしき暴走体の集団が蠢き、獲物のいなくなったプールの中でいらだたしげな咆哮を放っていた。しかも、不定形のその体は分裂を繰り返し、今もなおその数を増やしていた。

「いたー！」

「でも案の定たくさんいるよー！」

決まった形もなく、動くたびに形を変え続けるその姿はやはり気色が悪く、なのはの顔色も悪くなる。数えるのも億劫になるほどに増えていく姿も、生理的な嫌悪感を催させて背筋に震えが走った。

「分裂して増殖してる……まとめて封印しないとまた増えちゃうよー！」

「どうすれば……!」

若干引き気味でユーノに助言を求めるのはのために、ユーノは必死に思考を巡らせる。力のない自分が、魔法のサポート以外でできるのは作戦を考えるくらいのものである。なのはに危害が加わらない、最善の方法を必死に模索するが、まだ魔導師となつて日の浅いなのはと手札が揃えられないアインでは、取れる手段は限られていた。

「大型の魔力放射砲で強制停止……なんてなのはにはまだ無理だし、複数ロックオンなんて、ボクもできないし……」

「足止めくらいなら、私にもできるぞ?」

そう答えたアインの、ユーノはハツと顔を上げる。

「ほ、本当ですか!?? でも許可が……」

「ああ。この程度の相手なら、後で言い訳はなんとでもなる」

デバイスがなくとも魔法を使うのは、途方もない努力が必要となる。術式を発動するための演算、効果を維持するための集中力、そして発動するために必要な魔力の安定した供給、それらすべてを、己一人で賄わなければならぬのだ。ユーノはそれほどの研鑽を積んで、サポート系の魔法を身につけたのだ。

管理局員であるアインにとつてもそれは同じで、戦うことはできずとも相手の動きを止めるくらいはできるのだという。デバイスの使用は禁じられていても、それを使わな

いやり方であれば手助けになるのだ。

だが、そんな相談を待つてくれる相手ではなかった。

ゴポゴポと音を鳴らし、水の怪物達がなのは達の方へと寄つてきたのだ。アリサ達とは異なり、獲物を狙うというよりも脅威となりうる存在を排除しようとしているように見えた。

迫り来る無数の怪物達を前に、ユーノは焦つた声をこぼす。

「こつちに気づいた!」

「任せろ」

身構えるユーノとなのはの前に、アインが立ちはだかる。

「ふっ!」

拳を目の前に掲げたかと思うと、バリバリと青色の電流が走る。眩しい光を放つ青雷は徐々に威力を増し、辺りに放電を始めて激しい火花を散らせ始めた。

荒ぶり、引き裂くような音を響かせる青雷の前に、ジュエルシードの暴走体達がなぜか怯えるように後ずさった。アインから必死に距離を取ろうとするが、分裂して増えすぎた後ろの分裂体が邪魔をして、後ろに下がることができずにいた。

「デバイスがなくてもな……このくらいのことではできるんだよ!」

鋭く分裂体の集団を睨みつけたアインは、雷鳴を轟かせる拳を大きく振り上げる。そ

の動作だけで、青雷はさらに大きく放電を放ち、暴走体達を戦かせた。

「おおおおおおおおおお!!?」

「グオオオオオオオオオ!!?」

雄叫びと共に、アインは濡れたプールサイドに向けて拳を振り下ろす。ガンツ!と鈍い音が響くと同時に、アインの足元からプールの水に向けて青い電流が伝わり、激しい光を放った。水の怪物である暴走体達は防ぐことなどできるはずもなく、青い放電の中で苦悶の咆哮を放って悶え苦しむ。

バリバリと激しく明滅するプールサイドから目を覆いながら、ユーノは戦慄の表情を浮かべた。電流が止んでもまだ帯電しているのか、暴走体は全て麻痺したように動きを鈍くさせ、プスプスと湯気を立ち上らせていた。

「デバイスがなくてもっていうか……デバイスなんていらないうじゃないですか!!?」

「いや、これには実は弱点があつてな。威力が弱い。ほら、全部は止めきれないだろう?」

拳を引いたアインが、困ったような顔でプールの方を指差す。

確かにアインの言うとおり、相性的に暴走体に攻撃は効いていた。だがやはり威力が足りていないのか、徐々にではあるが麻痺から抜け出そうとしているように触手を伸ばしていた。

「ちよつとした時間稼ぎにしかならないんだ。だが……」

だが、アインは満足げに動きの鈍い暴走体を睨みつけ、ついで隣を頼もしげに見下ろした。

その視線を受けた少女は、自信に満ちた表情で力強く頷いた。

「……はい、十分です」

その声に、ユーノは驚きの表情を浮かべた。

アインの足止めで作戦を立てるべきかと思っていた矢先に、なのははすでに動いていた。体にみなぎる魔力がレイジングハートへと集まっていき、桜色の光を散らしている。目を閉じ、静かに心を落ち着けた彼女は、レイジングハートの先端をゆつくりと水の怪物たちに向けた。

「……なのは？」

「魔力を……一気に収束させて……」

まるで祝詞のようなつぶやきを漏らし、なのはは魔力を操る。凄まじい集中でユーノの声も届いていないようで、ただただ魔法のイメージに没頭し続けていた。

「捕獲の……魔法………そして、固定の魔法……!!？」

【Restrict lock】

そしてついに、なのはのイメージが完成し、それを受け取ったレイジングハートが完

壁に思い描かれた魔法を発動する。

うごめく水の怪物たちの全てに桜色のリングが巻き付き、全身を拘束して硬く固定したのだ。流動する液体の体であるにもかかわらず、光のリングに縛られた暴走体はそこから一ミリも動くことができなくなっていた。

「攻撃対象の完全固定……収束系の上位魔法!!？」

自分が教えて間もない捕獲魔法を、さらに上位の魔法として完成させて見せたものの姿に、ユーノが驚愕の声を上げる。

なのははそんなユーノの声が耳に届いていないのか、ただただ真剣な表情で暴走体を見据えていた。

「そのままそこで固まってて! いくよ、レイジングハート!!？」

【OK!】

「今度こそ……シユュー……ート!!？」

完全に動きを止めた暴走体に向けて、レイジングハートの砲門から桜色の光の奔流が解き放たれる。まるで洪水のような怒涛の威力で、凄まじい轟音とともに放たれたそれは暴走体達を余すことなく飲み込み、魔力とともに勢いよく蒸発させていく。

砲撃の反動で吹き飛ばされるのはの前で、暴走体はそのシルエットをボロボロと崩れさせていき、悲しげな苦悶の咆哮を高く響かせる。

歪んだ魔力が霧散していく光景を見守りながら、アインは一人ニヤリと満足げな笑みを浮かべた。

「……お見事」

その直後、一気に魔力が四散して眩く発光し、プールの水が形を失って豪雨のように降り注ぐ。水の音が響くその中心で、妖しい光が一つ灯った。

「いたた……」

「出てきたよ、なのは！ ジュエルシードだ！

「う、うん！」

砲撃の反動で転んでいたなのはにユーノが促し、なのはは急いでジュエルシードの元へ向かう。

魔法の宝石にレイジングハートの先端を触れさせ、宝玉の中に収納させる。これで、もうよつぽどのがない限り暴走する危険性は無くなった。

【Receipt No. 17】

刻まれた宝石の番号に、なのはは満足げに息をつく。

ふと顔をあげれば、ジュエルシードの暴走体の中に取り込まれていた水着や服がふわふわと浮かんでいるのが目に入った。まるで自らに意思があるように、それぞれが別々の場所に向かって飛んでいく。

「あ、服と水着が戻っていく……」

「魔法が解けたから、元の持ち主のところに戻っていくんだ」

「よかった……」

「……なんという嫌な光景だ」

安堵するのだが、アインの顔はひどく渋い。確かに、魔法で生き物のように動いていくのが水着や下着というのは、あまり想像したくない最悪な光景であろう。なのもユーノも、アインのつぶやきに思わず苦笑した。

だがこれで、アリサやすずかの元にも勝手に水着が戻ってくれることだろう。これで二人が素っ裸で衆目に晒されることはなくなった。

「君もいい加減戻れ。アリサたちもそのうち起きるぞ」

「あ！ いけない！」

アインの忠告に、なのはは慌ててバリアジャケットを解いて走り出した。二人が目覚めた時に自分がいなければ、いらぬ心配をされる上に不審に思われてしまうかもしれない。

パタパタという足音とともに小さくなっていく背中を眺めていたアインの足元で、ユーノが呆れたように嘆息した。

「なのはの魔法のセンスってどうなってるんでしよう？ 僕よりずっと大きな魔力もス

「ゴい才能も持つてるのに、不器用なんだか器用なんだか……」

「さあな。よその世界には時々、突然変異のような才能の塊の持ち主が現れると聞くが……まあ、私として言えるのは」

類稀なる魔法の才能、膨大な魔力、そして物怖じしない度胸。

体力のなさや体を動かすことは苦手なことが弱点のようだが、それを差し引いても有り余る一流の魔導師に求められる要素を兼ね備えた少女。

魔法の浸透していない地球になぜここまで逸材が眠っていたのか、魔法世界に生まれなかったことが悔やまれると頭をひねるユーノに、アインはぼそりと呟いた。

「『死ぬほど羨ましい』ってことだけだ」

「え?」

「おっと、私も上着を返してもらわなければ……」

聞こえてきた小さなつぶやきを聞き返そうとしたユーノを置いて、アインもまたアリスたちの方へと走っていく。

本気で羨望の色が混ざっていた言葉に首を傾げながら、ユーノはアインたちの後を追って走り出した。

「あれ……?」

ふわふわとあいまいだった意識が浮上し、アリサは目を覚ました。

体を起こすと、隣で横になっていたはずかも目を覚まし、二人で不思議そうに顔を見合わせる。いつから眠ってしまったのだろうか、前後の記憶がひどくあいまいで首をかしげる他にない。

「あつ、二人とも起きた？」

「お二人ともよくおやすみで……」

横を見れば、忍やメイドたちがアリサたちを微笑ましそうに見下ろしているのが目に入る。気づけば見えている日差しは翳っていて、オレンジ色に染まっている。随分と長い時間が経ってしまったようだ。

「あたしたち……なんで……」

「はしゃいでたから疲れちゃったんですねー」

笑ってファリンにそう言われ、そんな気もしてくる。とすれば遊んでいるうちに疲れすぎてしまい、プールサイドで眠りこけてしまったのだろうか、だとしたら小さな子供のようであつと恥ずかしい。

だがしかし、それ以上に恥ずかしい記憶が、二人の中には残っていた。歪な姿の怪物に、いやらしく全身を弄られるという全力で消去したい記憶が。

(いや、なんか非常にアレな夢を見た気もするんだけど……)

(恥ずかしいし言えないよ……)

もちろん、言うつもりも思い出すつもりもない。悪夢は人に話すのがいいなど言うが言つてたまるか、とアリサもすずかも心に決める。

ふと、夢の中の登場人物をもう一人思い出す。黄金の髪をなびかせ、騎士のように颯爽と自分たちを救つてくれた女性の姿を、二人は探した。

「ちよつとなのは。さつき、前に会つた金髪の女の人がいなかつた？ 帰り道にボールを受け止めてくれた」

「え!?? あ、いや、見て、ない……かなあ……」

「そっかあ……」

なのはは一瞬ビクツと体を震わせ、そのまま壊れた人形のようにぎこちなく視線をそらす。

だらだらと冷や汗を流すなのはに訝しさを感じたものの、ここにいないと言うことはやはり夢だったのだらう。そもそもなぜ夢に出てきたのかは知らないが、所詮は夢だと気にしないことに決めた。

(重ね重ねごめんね、二人とも)

なのはは内心で、友人たちに嘘をついてしまったことを詫びる。あと、なんかひどい目に合わせてしまったことについても深く謝しておく。

二人が目を覚まし、決壊が解除される前に二人にかけてあつたジャケットを回収していくアインのことを思い出し、なのはは乾いた笑い声をこぼした。

「あれ？ 恭ちゃんどうしたの？」

その時、みゆきが背後から近寄ってきた人影に気づいて驚きの声をあげた。

ビチャビチャと湿った音を鳴らしながら歩み寄ってきた恭也は、ぐつしよりと濡れた髪をかきあげて顔をしかめた。

「ボイラー室を見回ってたら派手な水漏れがあつて、お湯の濁流にのまれた……」

「災難ね……」

タオルを持った忍が恭也の体を拭き、恭也はそれを大人しく受ける。

恋人の献身的な手助けに感謝しながら、恭也は不思議そうな表情で首を傾げていた。

「……誰かに助け出された記憶はあるんだが、あれは……？」

ライトを落とし、濁流に飲まれた中で己が体を引き上げた力強い腕の感触を思い出しながら、恭也は深く考え込む。

そんな彼を、プールサイドの物陰に隠れていたアインが声をひそめながら見つめていた。

（気づかれてはいない、か。まあ派手な水漏れだったし、暗かったからな。……しかし）
ジュエルシードの暴走体に襲われたのかと思えば、ただ水漏れに飲まれて声を上げた

だけであつたという結果。鬼気迫る勢いで駆けつけてみれば、実際はそこまでの命の危機ではなかつたことになつくりと肩を落としたアインだつた。

一応溺れては大変だと手助けしておいたが、勘違いしていた自分がかかなり恥ずかしくなる。知り合いのあげた悲鳴に、体が勝手に動くとは。

(まさか私が、あそこまで取り乱すとはな。……ガラにもなく焦っていたからか)

自嘲気味にため息をついたアインは、帰り支度を始めているのは達から目を離してその場を去つた。

♠ ◆ ♡ ♠

「なんか、どつと疲れましたあ」

自宅のベッドに身を投げ出したのはは、そう言つて気の抜けた顔を晒した。

帰る途中は我慢できたが、部屋に入つて安堵した瞬間蓄積した疲労がどつと押し寄せてきたのだ。一応寝巻きには着替えられたが、寝転がったままそれ以上動くことはできなかつた。

「それはそうだ。君が今日使つたのは大きな魔力を消費する上位の魔法だ。しつかり休むことだな」

「ふえ〜ん」

どこからか念話で聞こえてくる、劳いの言葉もないアインの厳しい言葉に、なのはは

悲鳴のような声を漏らす。頑張った代償がこれというのは、やはり正義の味方は大変なお仕事だと常々思った。

だらけてしまったなのは、アインは不意に呆れたようなため息をついた。

「それにしても、よくあれほどのことができたものだ」

「なんか、できるときは自然とできるんですよ」

「集中力の問題なのかもね。余計なことを考えずに、一つのこと集中してたからだとか……」

「そっか……難しいことを考えるより集中したほうがいいんだね」

感心したように眩くなのはだが、それはつまり理屈よりも感覚だけであれほどの魔法を使いこなしたということだ。

改めてユーノは、なのはの持つポテンシャルの高さに戦慄する心地となった。

黙り込んでいるアインとユーノをよそに、なのははふと思いつく。

願いを叶えるジュエルシード。願った内容によつては、今日のように人に迷惑をかける程度のものであれば、ユーノと出会った時のように人を傷つけるほどの現象も起こす。歪で不安定、もし願う者が邪悪な心の持ち主であったなら、もつとひどい状況になったかもしれない。

そう考えると、なのはの手は僅かながら震えた。

「でも、ジュエルシードってやっぱり危ないね」

「……うん」

「今のところ、ユーノ以外に直接的な犠牲は出ていないが……時間の問題かもしれんな」

「ボクまだ死んでませんよ!」

「結果的にはな。下手をすれば死んでいてもおかしくはないということだ」

「うっ……」

アインの忠告にユーノはうなる。

アインの言い方は厳しいが、言っていることは全て子供たちを心配するがゆえの優しさによる者だ、となのはは感じていた。

そんな気遣いに、なのははより答えたいという思いを強く抱いた。

「じゃあ、明日からはもつと頑張らなきやですね」

「……本当に、君はお人好しだな」

念話の向こうから、困ったようなため息が聞こえてくる。まだ、民間人であったなのはを巻き込んだという罪悪感が残っているのであろう。それを押しのけて事件に関わることを強行したなのはに、複雑な思いを抱いているようだ。

しかし、やはりなのはに止まるつもりはなかった。というよりも、引くわけには行かないという強迫観念のようなものが宿っていることに、なのはは気づいていた。

「これからもよろしくお願いします！ ユーノ君、アインさん！」

「うん、なのは」

「……ああ」

そっけない声で切られた念話に苦笑してから、なのはは就寝準備を進めるのだった。

「……さて、と」

なのはとの念話を終えたアインは、肩をすくめる。

今日の事件を体験して少しでも恐怖感を抱くかと思えば、少女はより正義感を燃やして向かってきてしまった。本来止めるべき、事件を背負うべき自分が何もできずにいることに、アインは陰鬱とした気分になる。

やはり強制的にでもデバイスを没収するか、それともなのは達がいけない間に他のジュエルシードを探して回収しておくべきか。そう考えていたアインは、自らの手のひらの上で輝きを放っている寶石を見下ろして、深いため息をついた。

「……やはり、ここにあったか。まさかこんなところで見つけてしまうとはな」

わずかな魔力の残滓をたどってみれば、予想通りジュエルシードはそこにあった。しかもまだ誰にも触れられていないのか、暴走の予兆は全くない。

願いに反応するロストログアだ。なんの知識もない一般人が触れれば反応してしま

うだろうが、事前知識を持つアインならば発動はさせずに持つておける。なのはが眠っている間にこのやり方で回収すれば、危険な目に合わせる回数も少なく済むし事件解決までの時間も短縮できる。

だが、やはり自分一人では安全性に欠けた。

「さて、封印はできんし、こんな時間にあの子を起こすのも気がひけるし……どうしたものだろうな」

こんな夜中に子供を起こすなど論外だ。自分が持つておくのもそれはそれで不安の種になる。

どうしたものかと眉を寄せていたアインの目が、夜の闇の中で鋭く光った。

「……何者だ」

周囲から、音が消えた。

人払いの結界が張られた瞬間、アインはあたりの気配を探り、一人佇んでいる膨大な魔力の反応を捉えていた。

今の自分の魔力をはるかに超えている、一般人どころか平均的な魔導師の比ではなかった。流れてくる魔力の流れからしても、その練度からして只者ではないことは確かだった。

暗闇の中から、声が響いた。

「そのジュエルシールドを、渡してください」

凜々しい、しかし幼さを感じさせるはつきりとした声だった。大人びているように聞こえるが、なのはとそう変わらないかもしれない、それほどにまで若い声だ。

アインはゆつくりと振り向き、ジュエルシールドを後ろ手に隠しながら視線を向けた。退路を確認しながら、月明かりに照らし出される金色の輝きに目を細める。

美しい、少女だった。金糸のように見事な金髪を両サイドでまとめ、黒いリボンで締めた中央には完璧なまでに整った顔と宝石のような真紅の瞳が輝く。どこか浮世離れた、壊れそうな儂げな美貌をたたえた少女が、レオタードのようなバリアジャケットの上黒いマントを羽織り、漆黒の戦斧を手に携えて佇んでいる。

その目は、アインとアインの手の中にあるものを捉えて決して外そうとはしなかった。

「……君は、誰だい？ 君のように若い子がこんな時間に出歩いているとは、感心しないな」

極めて穏便にアインは尋ねる。感情の機微を悟られないよう全力で気を張り、少女を観察する。

「貴女には関係ありません。……渡さないのであれば、力尽くでいただいでいきます」

少女は戦斧の切っ先をアインに向け、比較的低い声で告げる。明らかな敵意のこもつ

た忠告に、アインの肩がわずかにつり上がった。

「礼儀を知らない子だな。人の忠告は——」

一歩踏み出そうとしたアインの前で、少女は動いた。両手をだらりと下げた無防備な体に一撃を加えようと戦斧を振り上げ、数メートルの距離を一瞬で詰める。

完全に不意をついた、一瞬で意識を刈り取るために振るわれた斧の一撃が、吸い込まれるようにアインの胸に振るわれた。

「——素直に聞くものだと言いたかったのだが……聞く耳持たずか」

「!?？」

だが、それは数ミリ手前で止められた。

アインの突き出した指に挟まれる形で、戦斧の刃が止められていたのだ。少女は驚愕の表情を浮かべ、距離を取ろうと戦斧を引き戻そうとする。だが、刃を挟んだアインの力は押すことも引くことも許さず、ビクともしなかった。

少女はすぐさま魔力を刃に流し、電流に変換するとその威力を持つてアインの指を引き剥がす。さすがにアインもこれには顔をしかめ、弾かれるようにして少女と互いに距離を取るように飛び退いた。

「……っつちは丸腰なんだがなあ……」

ビリビリと痺れの走る手を振りながら、アインは困ったように呟く。

少女は完全にアインを脅威と感じ取ったのか、先ほどよりも殺気を濃くして睨みつけ、戦斧を構え直していた。可愛らしい顔に似合わない鋭い目に、アインな冷たい眼差しを返した。

「……ミツドの魔導師か。さてどうしたものか」

予期せぬ新たな魔導師の登場に、非番の魔導師は思考を巡らせる他になかった。

第三章 金刃の黒き死神

1. 金色の大鎌

「……結界は、まだ張っていないか。無作法な」

色彩の変わっていない空を見上げ、アインはしかめっ面のため息をつく。

まだ聞こえてくる人の声に頭痛を感じながら、アインは名乗りもせずデバイスを突きつけてくる少女の方を睨みつけた。

見れば見るほど整って見える、人間離れた美貌を持つ少女だ。まるで作られた人形が命を吹き込まれたかのような、そんな印象さえ抱かせる儂げな魅力がある。

そんな少女が鈍い光を放つ戦斧を携え、肌を大きく露出した戦闘装束を纏っている姿は、あまりに異様に見えた。

「なぜこんなものを集める？ 確かに見た目はまあまあいいが、こいつはロクなものじゃ……」

「話すことはない、と言ったはずです」

「……冗談の通じない子だな」

一言聞いてから、早々に説得を諦めて目をそらす。

この少女の瞳からは強い意志の力を感じる、というか人のいうことを聞かず、己の意思を曲げない頑固な雰囲気を感じさせている。何を言おうと、止まることはないだろう。

そう悟ったアインは、少女から目を離して辺りを見渡す。足元に転がっていた適当な長さの鉄パイプを拾い上げ、パンパンと表面を叩いた。

「じゃあ……これでいいか」

アインはそれを軽く振るってから、剣を持つように持ち直す。

その行為に、金色の少女はむっと眉間にしわを寄せた。

「……何のつもりですか」

先ほどよりも数段低くなった声にアインは気だるげに振り向き、少女を半目で見据えた。

「何がだ？」

「そんなもので戦うつもりですかと聞いてるんです」

「あいにく、得物が使えなくなってるね。これで我慢してくれ」

「ふざけないで!!? 私を、舐めているんですか……!!?」

明らかに怒りに震えた様子で、少女はアインを睨みつける。感情の昂りによって溢れ出した魔力が電流となって少女の肌走り、パチパチと閃光を放って路地裏の闇を照ら

し出す。可愛らしい顔立ちは、アインへの怒りによつて恐ろしげに歪んでいた。

「身の程を知らない小娘には、これぐらいで十分だと思つてな」

アインのその言葉は、少女の堪忍袋を引きちぎつたようだった。

目尻を釣り上げた少女の持つデバイスの魔力刃が一際強く発光し、破裂音とともに電流を放つ。少女は大鎌に変形させたデバイスを頭上に振りかざし、力強くアインに向かつて跳躍した。

「バルデイツシュ!!?」

〔Scythe slash〕

少女の声に、デバイスがダウンナーボイスで応える。雷電を纏つた三日月型の刃が奇跡を描き、アインの意識を刈り取るために襲い掛かる。その速度はまさに雷光のごとく素早く、常人ではまず反応することすらできないものだ。

「はああああああああ!!?」

「ほっ」

しかし、雄叫びとともに繰り出された渾身の斬撃は、アインの気の抜けた声とともに軽々とかかわされてしまった。曲芸師のごとく空中に跳んだ真下を刃が通過し、虚しく空気を切るだけにとどまる。

少女はすぐさま刃の方向を変え、勢いを殺さぬまま追撃を行う。細い路地の障害物を

利用して、あざ笑うかのように跳躍するアインを追って何度も魔力刃を振り回すも、攻撃は全て紙一重で躲され、掠ることさえなかった。

「いい腕だ。よほどいい師に恵まれたのだろう……まだまだ荒削りだな」

「くうっ!!？」

苛立ちまじりに振るわれた横薙ぎを跳躍して躲したアインは、そのまま壁を蹴つて上に登っていく。想定以上の身軽さに少女は目を見開くが、すぐさま自身も飛行魔法を用いてアインの後を追った。

ビルの上にたどり着いた少女の前で、アインは鉄パイプを肩に担いで飄々とした態度で佇んでいた。

「ほら、好きにかかっつてこい」

ひよいひよいと軽く鉄パイプの先端を揺らすアインの挑発に、フェイトの表情はわずかに歪む。だが怒りは胸の内に、頭は氷のように冷静なまま大鎌を構え、一步を踏み出す。

そしてその一步は、一瞬のうちに少女の体をアインの背後へと運ぶ。音を置き去りにした魔法による移動方法・ソニックムーブを使用した少女の大鎌が、空中に三日月型の軌跡を描きながら振るわれた。

視界の外から振るわれた一撃を防ぐ術などなく、アインの意識を刈り取る、かに思え

たが。

「そして、申し分ない速さだ。だが、まだ遅い」

フェイトに一瞥もくれることなく、アインは鉄パイプを魔力刃に向けて掲げ、斜めに斬撃を受け止めた。

鉄パイプの表面を滑るように魔力刃は流され、少女の斬撃は虚しく空を切ってしまう。それだけではなく、空中で体勢を崩した少女の脇腹に向けて、アインの強烈な回し蹴りが繰り出された。

「あぐっ!? うわあああ!?」

カウンターに重い衝撃をくらい、少女の軽い体は軽く撥ねあげられる。しかしキツと鋭くアインを睨みつけ、すぐさま体勢を立て直すと大きく距離を取る。そしてすぐに、雷のごとく疾走した。

狙いを定めさせないためにジグザグに左右に移動しながら、アインの死角を狙って大鎌の刃を振るう。

しかしアインの目は、常人では追いつけない少女の姿を確実に追いつき、振るわれる金色の刃を受け止めて見せた。魔力刃と鉄パイプの間に火花が散り、夜の闇の中で金属音が反響する中、両者はまるで舞うように剣戟を交わしていく。

「このっ!!」

「甘い」

少女の刃を鉄パイプで受け、弾き受け流すといった単調な作業を繰り返すアインに、疲労の色は全く見えない。

少女は自分の攻撃がことごとく躲かれ、受け流されることに次第に焦りを見せ始め、戦況が長くなつていくごとに狙いが甘くなつていく。速度と正確さを追求した、相手を攪乱し一撃で仕留める戦法が通用していないことに、少女は戦慄の感情まで抱き始めていた。

「ウエエエエイ!!?」

「ぐっ……!!?」

ここで、今まで防御に徹していたアインが攻勢に出始めた。

大鎌の刃にわざと鉄パイプを喰らい付かせ、刃を固定させることで反対に少女を振り回す。身長差のある少女の体は軽く持ち上げられ、遠く放り上げられてしまう。

かろうじて着地し、身構えるもアインの怒濤の連撃を受け止めることしかできない。反撃どころか、躲すだけで手一杯だった。

(どうして……!!? あんなただの鉄パイプなのに、どうして突破できないの!!?)

「くっ……!!?」

幾度となく自分のデバイスの刃を受けているはずなのに、鉄パイプは未だ健在であ

る。削れて磨耗していてもおかしくないはずなのに、未だ剣の代わりとしてアインの猛攻に加わっていた。

「そらそらどうした!?? こんなもので終わりなのか!??」

「うっ!?? ぐっ、あうっ!!?」

挑発気味にアインが吠えるが、少女にはもはや口を聞いている余裕はない。

迂闊だった。感じられる魔力の低さや武装を施していないこと、そしてなによりこんな僻地の世界にいる魔導師だからと、相手を甘く見たことが仇となった。

抵抗するならば多少の怪我は仕方がないと覚悟していたが、これではまるで立場が逆であった。

(そこらにあつたものを、技術だけでまるで本物の剣のように操るなんて……!??)

「ああああああ!!?」

【Arc saber!】

焦燥に駆られた少女は、魔力刃から分岐させた光の刃を生み出し、アインに向かって一斉に撃ち放った。三日月型の光の刃が高速回転し、四方八方からアインに喰らい付こうと襲い掛かる。

アインは刃が向かってくる刹那の間に、腰を落として鉄パイプを腰元に構える。まるで抜刀術のような構えをとり、鉄パイプの表面に満ちてと逆の手を添え、小さく口を開

いた。

「ライトニング……スラッシュ」

その直後、アインの周囲にかすかな風が起り、甲高い音とともに少女の放った刃がまとめて砕け散った。

少女は目を見開き、自らが放った魔法が粒子となって霧散する光景を凝視する。アークセイバーが、ひとりでに砕け散ったようにしか見えなかったためだ。何をしたのかさえ、少女には全く見えなかった。

「見所はあるが……やはり、まあまだ未熟者だな、小娘」

アインは素直に少女の実力の高さを褒めながら、自分にはまだ及ばないということを抑え込めず。

怪物でも見るかのように凝視してくる少女をよそにアインはその目を鋭くし、ダラリと両手を下げた。

「ではいい加減……終わらせようか」

そう鉄パイプを構えたアインが、フェイトの目の前で呟いた。

「!?」

少女は一瞬だけ驚愕のために硬直しながら、本能的な判断でデバイスを前に構える。その直後、凄まじい衝撃によってデバイスごと強く揺さぶられ、勢いよく吹き飛ばされ

た。

人間は基本、一つのものに集中し続けることはできない。注目し続けていたとしても、必ずその最中に意識のブレが生じる。

このブレを見極め、相手の無意識の中に入り込むことで、あたかも瞬間移動したかのように移動し相手の懐に侵入することができる。「だるまさんがころんだ」をやるように、相手に意識が向いていない中での移動法が存在するのだ。

これを、縮地という。

「あぐっ!!?」

受け身も取れず、盛大に転がっていく少女は激しく体を打ち付け、苦悶の表情で体を丸める。

何をされたのか、少女には全く理解が追いつかない。ただ漠然と、自分が認識できないうちに強烈な一撃を与えられたのだということだけはわかっていた。

痛みをこらえ、体を起こす少女は混乱したまま思考を巡らせようともがく。

「い、今のはいったい……!!?」

「よそ見してる場合か?」

「!!?」

至近距離からかけられた声に、とつさにその場から飛び退く。

その直後、振り下ろされた鉄パイプをかるうじて転がって躲し、火花を散らせるアインの足元から距離を稼ごうと立ち上がる。

しかしその時にはアインは再び少女に肉薄し、鉄パイプによる刺突を繰り出そうとしていた。

それを躲すことができたのは、単に少女が足をもつれさせ、転倒したからに過ぎなかった。

(ソニックムーブ……!!? いや、違う！ そんな生易しいものじゃなかった！)

飛行魔法で低空を飛行し、さらなる追撃を躲す少女は、アインの持つ非常識なほどの実力に戦慄の表情を浮かべる。魔法を一切使っている様子もないのに、少女は手も足も出せていないなど信じたくはなかった。

(魔法の扱いじゃない、純粋な剣術の腕がものすごく高い!!? なんでこんな人がこの世界に来ているの……!!?)

魔力量の差を物ともせず、そして氷のような冷静さで鉄パイプを振るうアインに、疑問が尽きない。

しかし考えることも許されず、少女は横薙ぎに振るわれた一閃によって跳ね飛ばされ、地面に伏せることとなった。なんとかデバイスでガードし、直撃は避けたが衝撃は殺せなかった。

意識が朦朧としたまま、屋上の壁に叩きつけられて息がつまる。

「あうっ!!??」

がっくりと項垂れる少女にはもう、起き上がる力さえ残ってはいない。

ジュエルシールドを確保しなければならぬのに、逃げることにすらままならずにいる。相棒デバイスを持つ手も震えるばかりで、全く力が入らなかつた。

(だめだ……この人、強い……ううん、そんなものじゃない)

あまりにも、彼我に戦闘能力に差がありすぎる。まるで台風に真つ向から立ち向かうがごとく、なすすべ全部が跳ね除けられ、屈服させられてしまう。

わずかな攻防の間に、少女の心は折られかけていた。

「……見事だ、今のを反射だけで防いだか。だが、脳を揺らした。しばらくは動けまい」
「くっ……うっ……」

反論すら少女にはできる余裕はなく、残った全力でデバイスを持ち上げ、威嚇するよ
うに突きつけることしかできない。

アインは表情を変えず、ゆっくりと少女の元へと歩み寄っていく。疲労の限界に達した少女をとらえることなど、簡単なことだ。

その時、アインの目がわずかに細められ、その足が止まった。

「それと……殺気がダダ漏れだぞ、犬コロ」

そう口にすると同時に、アインの持つ鉄パイプが真横に振るわれる。

立ち尽くすアインに向かってオレンジ色の影が襲い掛かるが、ぎらりと光る爪がアインに突き立てられるよりも前にメキイツと鈍く嫌な音が響き、襲撃者は苦悶の声をあげた。

「ギャン!?」

「アルフ!?」

不意打ちの途中に、予期せぬ一撃をわき腹に受けたオレンジの髪の女は吹き飛ばされ、ゴロゴロと転がりながら壁に激突する。少女の味方だったらしく、悲痛な叫びが響いた。

「ぐはっ!?」

背中からまともにつかつたオレンジの髪の女は盛大に咳き込み、涙目になりながら腹を抑える。

肌を露出したヘソ出しルックに籠手と足甲を備え、マントを羽織ったさらなる乱入者。アルフと呼ばれた女の側頭部からはイヌ科のものと思わしき三角形の耳が、臀部からはふさふさとした尻尾が生えていた。

「……使い魔か。まだ若いな、数年と行ったところか」

普通の人間には見られない特徴的な異形の特徴に、アインは目を細める。

獣を素体とした儀式から生まれる、魔導師のサポート行うために存在する魔法生命体、使い魔。

奇襲を易々と見抜かれ、反撃を食らった使い魔アルフは戦慄の表情を浮かべながら、鈍く痛みの残る体を叱咤して体を起こす。

素体となった獣の性質が色濃く残るゆえに戦闘、特に狩猟能力が優れているため、彼女の気配はほぼ完全に遮断されていたはずだった。

しかしこの騎士はそれに気づいただけではなく、全く狼狽した様子を見せずに攻撃を躲し、急所を微妙に外した一撃を加えてきたのだ。まるで攻撃が来ることをわかつていたかのように、淡々と反応して見せた。

その反射神経と危機察知能力、そして度胸はまるで人間とは思えなかった。

「ば、化け物かいこの女!?」

「失敬な。……まあ、間違いではないか」

痛みをこらえつつ、アインを睨みつけるアルフ。

アインはそんな彼女にしかめっ面を見せてから、すぐに居心地悪そうに目を反らして頭をかいた。

するとアインが視線を外した一瞬のうちに、脳を揺らされたショックから立ち直った少女が魔法を発動し、アルフの元へと移動する。だが音速の移動中、アインがひよいと

差し出した足に引っかけたり、少女はあっけなく半ばで転ばされてしまった。

「フェイト！」

主人の危機に立ち上がろうとするアルフだが、うつぶせに倒れた少女——フェイトの首元に突きつけられた鉄パイプを目にして動きが止まる。憎々しげにアインを睨みつけ、握りしめた拳を震わせるアルフだが、アインはフェイトから目をそらさず表情も変えない。

人質のような扱いになっていることに気づき、悔しげに歯をくいしばるフェイトは、それでも使い魔の方へ心配そうな目を向ける。

「アルフ……!!? 大丈夫……!!?」

「ぐっ……私は大丈夫さ。それより……」

「うん……手を、出しちゃダメ……この人、すごく強い」

もう刃を交えなくとも分かる。二人掛かりであろうと通用しない、それほど彼我には戦闘能力に差がある。

何より今、二人に向かって降り注いでくる圧倒的な覇気が、反抗する気力を奪い去っていた。

「最初からここまで本気で向かってくるといふことは、私が管理局員だとわかってのとどらうな？」

襲撃されて今更だろうが、一応の確認としてアインは二人に尋ねる。現行犯として捕らえておくこともできるが、情報はあつたほうがいい。そう考えて、アインは鋭い目を二人に向け、嘘偽りを一切許さない上で質問する。

しばらくの間無言が続いたが、やがてアルフの方から唸るような声が届いた。

「……知ったこつちやないよ。あたしはフェイトのためなら何だつてやるだけさ」

「見事な忠義だ。改めて君たちの名を聞こうか」

「……名乗つても、意味はない」

獲物を首に突きつけられながら、フェイトの声からも屈した様子はない。どんなに不利な状況であつても、譲れない目的があるのだろう。

アインは素直に、二人の意志の強さに感心した。

「いい心がけだ。馬鹿正直に名乗るやつならこんな大それた真似はしまい」

そう答えたアインの持つ鉄パイプに、パリパリと雷電が走る。威力は弱いが、一人を昏倒させるくらいは簡単にできる程度の電流が、フェイトのすぐ至近距離で迸った。

(私じゃこの人には……勝てない……!!?)

詰みの状況に、フェイトは悔しさに顔を伏せ、表情を歪める。目的をまだ何も果たせていないのに、手も足もできずに組み伏せられている現状が、鋭い刃となつて心に突き刺さつていた。

「フエ、フエイト!!?」

「大人しくしてろ、ワンコロ」

主人を救出しようとして踏み出したアルフだったが、直立のままのアインに一瞥もくられずに蹴り飛ばされる。

まともに立ち上がれないほどのダメージを負った相手は、もはや脅威とは言えなかった。

「ギャウツ!!? い、犬じゃない!!? 狼だコラっ……痛う!!?」

聞き捨てならない言葉に抗議するアルフだが、二度もけられた腹部を抑えて悶絶してしまう。

行動不能に陥った使い魔に目をやったアインは、冷たい双眸を目下の少女に向ける。

「さて……覚悟はいいか?」

「ぐっ……!!?」

肯定の答えなど帰ってくるわけがないが一応の礼儀として確認し、苦悶と悔しさの混じったうめき声だけを聞き取る。

アインはせめて痛みのないように終わらせてやろうと、帯電する鉄パイプを高く掲げて構える。ここで気絶させ、詳しく話を聞くために別の場所で拘留するつもりだったが、使い魔にはそうは見えなかったらしい。

「うわあああああ!!? やめろおおおお!!?」

主人の命の危機と思ひ込んだ、悲痛な悲鳴が響き渡る。

アインはそれを無視し、いったんの終止符を打つために得物を振り下ろそうとした、その時だった。

「……ごめん、なさい。母さん……」

か細く、消えそうな声で紡がれたその言葉に動きが止まる。

フェイトの首筋の寸前で止められた、今もなおパリパリと帯電する鉄パイプに、フェイトは驚愕に目を見開く。わずか数ミリの距離で静止している一撃に、少女は混乱していた。

「……やめだ」

同じくぼかんとした表情で固まっているアルフの前で、アインはだらりと脱力し、持っていた鉄パイプをぼいっと傍に放り捨てた。

アインが場から気だるそうにどくと、フェイトはすぐさま体を起こして離れ、警戒したまま困惑の眼差しを送る。

先ほどまで凄まじい覇気を放って退治していたというのに、今は全く気迫が感じられない。まるで抜け殻のようだ。

グリグリと肩を回したアインはため息をつき、その場からさっさと歩き出し始めた。

「興が冷めた。今日はもうここで失礼するでしょう」

「あつ、えつ………!!??」

急に言われて、フェイトは混乱する。

今日はここで失礼? 見逃された? なぜ?

一瞬前までとの行動の関連性が見つからず、間抜けな顔を晒してぺたりと座り込む他
にない。

「え………え………?」

「フェイトオ!!?」

呆けたままの主人に、アルフが心底暗視した表情で飛びつく。動く気力もない少女は
なすがままになり、抱擁やら頬ずりやらを受け入れる。

「うわああああ………よかった、よかったよお………」

安堵から泣きじやくるアルフをなだめながら、フェイトは遠くなっていくアインの背
中を睨みつける。

見逃されたことは喜ぶべきなのかもしれないが、理由が分からなければ納得はできな
い。まさか、自分たち程度の相手の相手などいつでも捕まえられるという自慢の表れなのだろ
うか。

そんなことを思っていたフェイトの元に、不意に何が放り投げられた。

慌てて掴み取ってみれば、手のひらの中に落ちてきたのは発動前のジュエルシードであった。

フェイトとアルフは目を見開き、ますます訝しげな表情でアインを凝視した。

「ど、どうして……」

「それはやるよ。もともと私一人が持っていては仕方がないからね」

気だるげな表情でそう告げたアインは、バリバリと頭を搔いて虚空を眺める。その横顔からはなぜか、面倒なものを任せて安堵するような感情が見えた気がした。

「それに、私だけでは封印できんからな。手間が省けた」

「なっ……」

「ではな。あまり妙なことはするなよ？」

そう言うのが早いのか、アインはひらひらと手を振ってフェイトたちの前から立ち去っていく。

フェイトもアルフも呆気にとられたまま見送りそうになるが、アインが屋上の端にたどり着いた時点でやっとなら返った。

「あ、アンタ……一体どういうつもりだい？ 管理局員なんじゃ……？」

「休暇中のな。生憎休みを返上してまで次元犯罪者を捕まえようとは思わん」

振り返ることもなく、本気で面倒くさそうに返すアインの背中からは、先ほどの鬼神のご

とき強さを誇る戦士とは全く思えない。いつのまにか別人と入れ替わっていたと言わ
れても納得してしまいそうだった。

「じゃあな」

「ま、待つてー!」

アインが屋上から飛び降りようとした時、フェイトが大きく声を上げて呼び止める。
立ち止まってくれるとは思っていなかったために一瞬呆けるが、すぐさま表情を真剣
なものに改めてじと見つめる。

「……あなたは、いったい何者なんですか」

彼女は、フェイトにとつてはあまりに不思議すぎた。

自ら管理局員であると名乗り、圧倒的な力量の差を見せつけながら、急に手のひらを
返したように手を引くと言う。行動が読めず、理解が追いつかない。

そんなフェイトに、アインはニヤリとずるそうに笑って見せた。

「アイン・K・アルデブランド。……まあ、通りすがりの騎士さ」

その直後、アインの姿がフェイトとアルフの前から消える。

するとまるで嵐がさった後のように、どつと疲れと安堵が二人の方にのしかかったよ
うに感じた。最初から最後まで引つ掻き回されたようで、精神的に非常に疲れてしまっ
た。

「……何だったんだい、アイツは」

「わからない……でも確かなのは、あのままだと私たちは負けていたってこと」

「うっ……」

最悪の事態を夢想し、アルフは苦い表情で肩を落とす。誇張や冗談ではなかった。

鉄パイプで向かってこようとした時には頭にきたが、あれはあくまで最低限のハンデであつたのだ。

もし彼女がちゃんとしたデバイスで向かってきていたらまず間違いなく、なんの抵抗もできずに無力化されていたことだろう。考えただけで、ゾツとする。

「……次に会ったら、必ず」

だが、ここで終わるわけにはいかない。

幸い、理由は知らないが現在の彼女にはデバイスを使用できない事情があるらしい。その間に対処する手段を取らなければならない。

自分とアルフを歯牙にもかけられる様子がなかった、一人の女騎士の顔を思い浮かべたフェイトは固く拳を握りしめ、肩を静かな怒りで小刻みに震わせるのだった。

◇ ◇ ◇

夜道を一人歩きながら、アインは物思いに耽る。

その顔は、まるで剣のように鋭く、そして冷淡であつた。

(……事故で流出したジュエルシードを狙う、おそらくはユーノや私と同じ世界から来た魔道士……)

先ほどの攻防を思い出し、眉間に皺が寄る。

アインにとつてはまだまだ未熟であったが、一般的な武装局員にとつては間違いなく脅威となる実力者であった。あれは相当な腕を持つ師に鍛えられ、訓練を重ねてきた賜物であろう。

それゆえにわからない。なぜそんな人物が、この世界にここまで早くたどり着き、ジュエルシードを求めるのか。

(タイムリングが良すぎる……少なくともこの地球にジュエルシードが落ちることなど、予測できるはずがない……)

考えれば考えるほど、この一件には疑問が生じる。あらゆることに疑念が生じ、何を信じればいいのか全くわからない。

事の始まりは、ユーノの一族が手配した輸送船の事故。そしてそこから地球に流出し、手に入れようとする者が現れた。

(果たして次元船の事故は本当に事故だったのか……それとも……?)

一体どこから人為的な意図が混ざり始めたのか、あるいは初めから何者かの悪意が混ざっていたのか。ろくに制御もできないロストログアを求めるなど、危ない橋を渡る目

的は一体なんなのか。

全貌を見渡すにはまだまだピースが足りず、空欄を想像で補うことしかできないが、それでもまだ真相が見えない。

そこでアインは、いつの間にか自分がこの一件の奥深くにまで浸かってしまっていることに気がついた。

「……ああ、いつのまにか仕事モードに入っていたようだな」

ため息をつき、本来の目的を思い出すアインは肩を落とす。

休むつもりでこの世界に来たというのに、知らないうちに仕事をする気になっていった。これではまるで、事務の局員たちと同じ社畜のようではないか。

日々ゾンビのように書類に向き合っては呻き声を漏らしている同僚たちを思い出し、アインの目が腐っていく。少し前まで自分も同じところにいたことを思い出し、げんりしてしまふ。

「はあ、私は休暇で来たはずなのに……なんでこうなるんだろうな」

頭上を見上げれば、憎たらしいくらいに月が煌々と光を放っている。

世界を超えても心労が絶えないことを察したアインは、再び大きなため息をついて肩を落とすのだった。

2. 束の間の癒し

翠屋の席につきながら、アインは物思いにふけていた。

考えていた内容はもちろん、昨晚遭遇した金髪に黒衣の少女についてのことだ。

『……ごめん、なさい。母さん……』

アインが最後に反撃を加えようとした時、少女が思わず口にしていた単語。

そう不思議なことではないのかもしれない。だが母に助けを求めるわけでもなく、口にしたのは謝罪の言葉であったことが、アインには気になって仕方なかった。

(……放っておく、なんて選択肢はないよな。さすがに)

いたいけな少女が、どうしてあんな悲しげな表情を浮かべてロストログアを集めて回るのが。あんなに幼い少女が武装局員にも匹敵するほどの高度な戦法を身につけ、躊躇うことなく刃を向けることができたのか。

その最たる原因に、少女の母親が関わっていることはまず間違いない。だが、なぜ母親がそのような危険なことを自分の娘にさせているのか、それが一番気がかりであった。

(家庭の問題、か。私に、そんなものに首をつっこむ資格などありはしないのだがな

……)

自分自身が最もそのようなものに縁遠い存在であることを理解しながら、アインはなおもその思考を止められない。

「……どうしたものか……」

無言で席で佇んでいたアインは、気がつけば目の前に立っていたなのはに詰め寄られていた。

「アインさん、聞いてますか?!?」

「……ん? ああ、すまんすまん」

むすつとした顔で顔を覗き込んでくるなのはに、アインは居住まいを正してから向きなおる。翠屋に來た時から思考に没頭していたせいで、なのはの話を全く聞いてやれていなかった。

「もー……ですから、今度の連休に、家族やアリスちゃんたちで近くの温泉旅館に行くんですけど、アインさんも来ませんか? ……って聞いているのに」

「……悪いが、一緒に遠慮させてもらおう」

「もー、またですかあ?」

またもお出かけのお誘いを断られてしまったことに、なのはは不機嫌そうに唇を尖らせる。

理由は聞きそびれたが、前回はなんだかんだで近くには来てくれていたようなので今回は、と思つたのに。そんななのは心の声が聞こえて来そうな表情に、アインはわずかに目を反らしてコーヒーをすすする。

どこか負い目を感じているようなアインの表情に、なのはは訝しげに首を傾げる。しかしすぐに、なのはの表情は申し訳なきそうなものに変つた。

「それは、ジュエルシードを探さないといけないこんな時について言うのはわかりますけど……」

「違う違う。君を責めてるんじゃない。本当に肌を晒すのが嫌いなだけなんだ」

アインはすぐに否定し、咎められているような面持ちで俯いているなのはをなだめる。

前にも言ったが、なのははジュエルシードの一件においては単なる協力者、本来の生活はないがしろにしてまで付き合ってもらおうわけにはいかないのだ。それらしい言い訳で断つたが、なのはやはり気にしている様子でアインを見つめてきている。

「旅行や友達との時間は大事にしなさい……ゆっくりしておいで」

「むう……」

なのははまだ何か言いたいようだが、アインの言葉に嘘はない。そして筋が通っている。

アリサやすずかたちとの時間を優先させてくれるアインの心遣いはありがたいが、アインにも一緒に来て楽しんでもらいたかったのだ。

アインは首を縦には振らず、空になったカップをソーサーに置いて席を立つてしまった。

「……では、私はこれで。 士郎たちによろしく」

「アインさん……」

アルバイトの少女がいるレジへと向かうアインの背中に、なのはは寂しげな目を向ける他になかった。

◆ ◆ ◆

海鳴市は自然あふれる街である。 中心部に行けばビル街が立ち並んでいるが、郊外に赴けば目立つのは人の手があまり加わっていないありのままの森林地帯が目に入る。そしてその景観を利用した歓楽施設も興っており、温泉地として賑わっていた。

連休の日には、高町家は喫茶翠屋を店員たちに任せ、家族水入らずで過ごすのが恒例であった。近場の温泉で日頃の疲れを癒すことが目的の今回の旅には、月村姉妹やそのメイド達、そしてアリサも加わっていた。

いつもなら両手を挙げて楽しむのはであったが、今回はどこか後ろ髪を引かれる表情をしている。

理由はもちろんジュエルシードのこともあるが、いて欲しかった顔がないことが最たる原因であった。

(……アインさん、やつぱり来てくれなかったな)

確かに彼女との関係はそこまで深くはない。しかし、少しの間とはいえ共に戦い、背中を預けあつたという変えがたい縁があることから、一緒に旅行へ赴いて楽しい時を過ごせないかと考えたのだが。

家族や友達との旅行に見知らぬものが加わることを気にしたのでろうか、などと考えていると、なのはの表情がやや暗いことに気づいたアリサがその肩を叩いて、顔を覗き込んできた。

「どうしたのよ、なのは。ぼーっとしちゃって」

「ふえ……あ、ううん。なんでもないよ!」

「せつかくの旅行なのに、そんな顔してたらダメじゃないの。今日は楽しむわよ!」

勇ましく拳を突き上げ、進んでいくアリサの背中に思わず力なく笑うのは。人に言われて、ようやくこれではいけないと気持ちを改めることができた。

「……うん、楽しまなくっちゃね!」

表情を満面の笑みに変えて、なのははアリサや家族の後を追いかけていった。

「あく、遊んだ遊んだ♪ やっぱり旅館といえは温泉よね〜！」

「お風呂だよ、ノエル！」

「は〜…♡」

温泉地を楽しんだ、その夜。

宿泊先の旅館の風呂にて、衣服を脱ぎ去ってタオル一枚を持ったアリサたちがはしゃぐ。特に風呂に目がないノエルが目を輝かせ、脱衣所の向こうにある風呂にうつとりとした眼差しを向けた。

桃子はその場にいなかったが、きつと士郎と二人きりで甘い時間を過ごしているのであらう。

「美由紀さん、胸おつきいわねえ……！」

「あん♡ もう、触らないでよお」

「フアリン、はしやぎすぎて転ばないでよね」

「そんなことしませんよお〜」

服を脱ぐ途中、大きく育った美由紀の胸を見たアリサがいたずらっぽいな笑みを浮かべて触れに行き、美由紀は若干の恥ずかしさから顔を赤らめる。

年若く、美しい顔立ちの少女たちが衣を取り払い、純白の肌を晒して生まれたままの姿ではしゃぐ姿は神々しくも見える。当時のように保たれた肌はそこにあるだけで芸

術品のような存在感を与え、同性のものであっても注目話詰めることであろう。

さて、ここで忘れてはならないのが、たった一匹だけこの場に異性の存在があることである。

(ぼ、僕は、なぜこんなところにいるんだろうか……!??)

なのはに連れてこられたユーノは、自分の背後で少女たちが裸体を晒していく光景から必死に目をそらす。顔はすでに真っ赤で、振り向きたい誘惑にかられながらも必死にこらえ続ける姿はいつそ哀れである。

しかし今の彼はフェレット、人間ではない。女性の裸体から目をそらし続けるという妙な行為を続けていけば、訝しげな目で見られてしまう可能性もあった。

そんなジレンマに苛まれているユーノに、髪をまとめるリボンを外したなのはが念話で尋ねてきた。

「ユーノ君は温泉つて入ったことあるの?」

「こ、公衆浴場なら何度か……! や、やっぱりボク恭也さんや士郎さんと一緒に男湯の方……!」

なのはの方に振り向いたユーノの声が、そこで止まってしまふ。

そこにあつたのは、いつも一緒に戦ってくれている少女のあられもない姿。プールの時とは違って、身を隠すには心許ないバスタオルのみというありのままの姿。

なのはは全く狼狽する様子はなく、むしろ喜ばしそうに微笑みながらユーノを抱き上げた。

もう一度言おう、今のユーノはフェレットである。

「一緒に入る!」

「……キユー」

もはやユーノは、身を委ねる他にない。逃げ出すことも考えたが、そんなことをすれば旅館の中で騒ぎになってしまうだろう。

真つ赤な顔で黙り込んでしまったユーノを抱え、なのは達は脱衣所の扉を開いた。

「おーーーーー! Fantastical!」

「すごい、広〜い!」

「これは絶景ねえ」

扉の向こうにあったのは、湯気の立ちこめる大きな浴場。大理石の湯船で仕切られた、全員が入っても余裕があるほどのお湯の空間。壁一面がガラスとなった窓からは夜景が一望でき、利用者に飽きさせない設計となっていた。

なのは達は風呂のルールに則り、まず体を洗うために洗い場に向かう。

姉妹同士で互いを洗おうとペアを組み、その際、アリサはなのはからユーノをひよいと受け取り、自分の膝に乗せていた。

「お姉ちゃん、背中流すね」

「ありがと、すずか」

「じゃ、あんたは私が洗うわね」

「キユーー！」

「あはは！　心配いらないわよ。あたし、洗うの得意なんだから♪」

「きゆうううう！！？」

少女に自分の体を洗われるという恥ずかしさにユーノは暴れるが、人間扱いされていない彼はそのままアリサの餌食となってしまう。泡立った手で全身を弄られ、身悶えるユーノは鳴き声と同時に念話でなのはに助けを求める。

「なのは！　なのは！　助けて！」

しかし、なのははなのはで姉・美由紀の背中を流すのに集中しており、ユーノには愛想笑いを向けるだけでった。

「ごめんねユーノ君。私ちよつとお姉ちゃんと話したいことあるから」

「そんな殺生なあゝ！」

キユウウウ……と切ない悲鳴も聞こえないふりをし、なのはは美由紀の背中を流す。その後交代しつつ、一日でついた全身の汚れを落とすのは達は、ようやく湯船の中に身を沈めた。

ジワリと熱が足先から伝わり、若干の浮遊感とともに心地よさが伝わっていく。暖かさに全身を包まれながら、なのは達は各々でそれを堪能するのであった。アリサに捕まったままのユーノはもはや諦めの境地に達し、自ら温泉の魔力に浸ることにしたようだった。

ふと、なのはは顔を上げ、アリサ達に見えないように声を抑え、美由紀の方に近寄って行った。

「……ねえ、お姉ちゃん」

「んー？ どうしたのー？」

ザブザブと湯をかき分け、なのはは美由紀の耳元に唇を寄せる。

何事だろうと首を傾げる美由紀の耳元で、他に聞こえないように声を小さくしながら、なのはは気になっていたことをこの場で尋ねてみた。

「アインさんとお父さん達って、何かあったの？」

「……………」

なのはの質問に、美由紀の表情が固まる。まるで胸の中を冷たい手で掴み取られたかのように、みゆきの表情が凍りつくかのように引きつった。

禁句を口にしてしまったのかと思つて不安になるが、美由紀は慌てて表情を取り繕つてなのはに向き直った。

「……どうして、そんなこと聞こうと思ったの？」

「この間ね、実はアインさんのことも誘おうと思ったの。でも……すごく辛そうな顔で断られちゃったの」

「……そっか」

なのはの言葉に、美由紀はどこか安心したような、反対に悲しげな眼差しで湯面を見下ろす。透明な湯の中で揺れる自身の体を見下ろし、黙り込んでいた美由紀は、やがて深いため息とともに顔をそらせる。

雫の滴る天井を見上げると、憂いを帯びたつぶやきをこぼした。

「そっかー……まだ引きずっちゃってるんだろな。あの時のこと」

なのはは姉の心情がわからず、困惑したようにじっと見つめる。

美由紀はやや悲しげに眉尻を下げ、アリサやすずか達の方を見やる。今は向こうで会話が花が咲いているようで、こちらに注意が向いていないことを確かめた美由紀は、ややあつてから気持ちを切り替えるようにお湯で顔をざぶんと洗い、なのはに向き直った。

「……なのははまだ小さかったから覚えてなかったのかな。まあ、あんまりいい話じゃないからその方がよかったのかもしれないけど」

たはは、と苦笑しつつ美由紀は語る。高町家とアインの、因縁とも言い切れないよう

な過去を。

「お父さんが大怪我して、入院しちゃった時のこと覚えてる？」

「……うん」

悲痛な表情になりながら、なのはは頷く。

思えば今の自分を形成している最も主な原因は、あの事件であった。

なのは達の父、士郎は御神真刀流の剣士であり、その腕を使ったボディガードのような仕事を請け負っていた。

当時はまだ翠屋も繁盛しているとは言えず、桃子達が経営に専念している間に士郎が家計を支えるという形で、高町家は保たれていた。恭也もそんな父の強い生き方に憧れを抱き、美由紀とともに日々剣術を学んでいた。なのはにはよくわからない世界であったため、時々自分のことを見てくれないことを寂しく思い、兄達に甘えては迷惑をかけた。

だが、そんな日々に亀裂が入る事件が起こった。

士郎が仕事中に重傷を負い、病院に担ぎ込まれたのだ。

「ある仕事で……お父さんは傷を負って、生死の境を彷徨った。その時一緒に仕事をしていたのが……アインさんなの」

「え……」

美由紀の告げた真実は初耳であり、なのはは大きく目を見開く。

危険な仕事に関わっていたとは聞いていたが、まさかアインがあの一関関わっていたとは。

そんななのはの困惑に苦笑しながら、美由紀は虚空を見つめながら先を続ける。

「もつと詳しく言うとな、アインさんの追っていた悪い人と、お父さんの依頼人を狙っていた人が一緒だったから関わることになったんだけど……その相手が、お父さんの手に負える相手じゃなかった」

「……………」

「本来はアインさんが請け負うはずだった悪い人と、お父さんは戦って……そして、傷を負ってしまった。悪い人たちはアインさんが捕まえたけど、失ったものが大きすぎた」
悲しげな表情で語るみゆきに、なのはは言葉も出ない。

アインが翠屋を訪ねるのは、魔法の初心者であるなのはが無茶をしないように見張るためだと思っていた。その度に、特に桃子や美由紀に会うたびに悲痛げな顔をするのはなぜかと思っていたが、そんな由来があったからなのか。

だとしたら、いつまでもこのままなのだろうか。アインは高町家に罪の意識を持ったまま、ジュエルシードの一件が終わるまで距離をとったまま、姿を消してしまうつもりなのだろうか。

なのはの不安げな表情をどう思ったのか、美由紀はうつむくのはを抱き寄せた。

「……大丈夫だよ、なのは」

なのはは眉尻を下げながら、不安に揺れる瞳で美由紀の方を見つめる。美由紀も寂しさが漏れ出しそうになるのを抑えた、ぎこちない表情で微笑を浮かべる。

「私も恭ちゃんも、お父さんもお母さんもアインさんを嫌ってるわけじゃないから。ただちよつと……ぎこちなくなっちゃっただけなの」

そう言つて、なのはを安心させるように頭を撫でてくる美由紀。

暖かい感触に目を細めながら、なのははアインのことを思い浮かべた。

過去の罪を背負いこみ、がんじがらめになりながらそれでも立ち続ける女騎士の姿を。

◆ ◆ ◆

少女たちがそれぞれで癒しの地を堪能していたその頃。人気のない旅館の裏手で缶コーヒーをすすする女性が一人、夜空を見上げていた。

街の光がやや少ないからか、都会よりも星が多く、綺麗に見える。満天とまでは言いがたいが十分美しい夜景を眺めていたアインは一口コーヒーをすすり、小さくため息をつく。

「……やはり、来ていたんだな」

そんな時、背後からかけられた声に、アインはちらりと視線を向ける。

暗闇の中に目を透かしてみれば、電灯の元にその人物が姿を見せた。浴衣を纏ったその人物、恭也はいまいち読めない表情のままアインの元に近寄っていき、その隣で壁に背中を預けた。

「気づかれていたか。……私もまだまだだな」

「あんたのことだ。こつちに来てから、ずっと俺たちのことを気にかけている……特に、なのはのことにな」

恭也の視線を受けながら、アインは固く口を閉ざして視線をそらす。

まるで、面と向かって話すことを恐れるような、そんな弱々しい姿に恭也は眉間に皺を寄せる。最後にあつた日から、この人の態度はこのまま変わっていないかった。自分で自分を責め続け、罪悪感に押しつぶされそうになっているようだった。

「……正直言うとな、この間来た時に追い出されるかと思っていた。どの面下げてここに来たんだって、罵られても仕方がないと思っていた」

恭也は反論しようとしたが、二の口が告げない。

少なからずアインの言ったことは的を射ていて、それを否定することができなかつたからだ。かつての事件をきつかけに、恭也がアインのことをよくは思わなくなっていたことを見抜かれ、拳を握りしめたまま立ち尽くすばかりだ。

そんな恭也の葛藤に苦笑しながらアインは、3年前のあの日のことを思い出していた。

「士郎さん……!!? 士郎さん!!? 目を覚まして……!!? 士郎さん!!?」
「お父さん!!? 起きてよ、お父さん!!?」

ストレッツチャーに乗せられ、集中治療室へと運ばれる士郎の姿。

桃子や美由紀はそれにしがみつき、引き剥がされるように崩れ落ち流も虚しく手を伸ばす。同じく悲痛に顔を歪めるのはも膝から崩れ落ち、母娘は互いに抱きしめ合いながら涙を流していた。

その場にいた恭也は、呆然と立ち尽くすアインに鋭い眼差しを向け、胸ぐらを掴んで病院の壁に叩きつけた。はらわたが煮え繰り返るような感なくに溺れそうになりながら、一人をにらみつけていた。

「あんたが……!!? あんたがいてなぜ、こんなことになった!!? なぜ父さんがこんな目に合わなければならぬ!!?」

言つてはならないことだとわかつてはいる。だが噴火のごとく溢れ出す感情は止められず、持て余していたそれを目の前の女性にぶつける以外できなかつた。

理不尽な激昂を受けながら、アインはただ俯いたまま抵抗も何もしなかつた。ただ恭

也の感情のまま、揺さぶられるばかりだった。

「なんであんなじやなかったんだ!!? あんたが追っていた敵じやなかったのか!!?」
「なんで……!!?」

「……すまない」

謝罪の言葉も、今の恭也には何の意味もない。むしろ火に油を注ぐがごとく、理不尽を憎む感情を近くにいた関係者にぶつける他になかった。

病院の関係者に止められた気がしたが、当時の恭也にはただわずらわしいとしか思えなかった。

「なんとかしろよ!!?」 頼むつ、なんとかしてくれよ!!?」

「恭ちゃん……!!?」

恭也の罵倒は美由紀に止められるまで収まらず、それでも恭也は悔しさのために泣き崩れてしまった。

涙を流す桃子に抱きしめられたなのは怯えた目が、アインの記憶には深く焼きついていた。

「あの時のことは、忘れたことは一度もない。……忘れるわけにはいかない」

手に力がこもり、飲み干したコーヒの缶がメキメキと握りつぶされていく。スチー

ル製の缶は細く変形していき、アインはハツと我に返つてそれを自分の陰に隠した。

恭也はそれを最後まで見ていたが、特に何も言わずに目をそらす。

「……俺はあの時、動転していた。言うべきじゃなかったことまで、あんたに言つてしまつた」

「それでも、お前の言つたことは全て真実だ。あの時、あの場に士郎はいるはずじゃなかった」

哀愁のこもつた悲痛な面持ちで、アインは呟く。当事者である恭也や士郎が何を言つたとしても、慰めたとしても、その考えは拭うことはできないようだ。

恭也も自分が言つたことだけに、深い責任を感じて黙り込んでしまう。あまりにも痛々しいアインの姿を、直視できないでいた。

後悔しているのはどちらも同じ。だがどちらも今以上に傷つくことを恐れ、向き合うことを恐れてしまつている。子供の喧嘩の後の仲直りのようにはいかないことが、恭也には歯がゆくて仕方がなかった。

「全て、私の責任だ」

アインはそういうが、そのアインをここまで追い込んでしまつたのは自分の言葉が原因だ、と恭也は思うも口には出せない。

だがそんな彼に、アインの方から氣遣うような表情で微笑みかけた。

「それと、お前には礼を言っておかねばならない」

「……？ 何を」

「なのはのことだ」

アインの一言に、恭也は思い出す。父が入院し、店や家のことに全員がかかりつきりになっていった時のことだ。

自分のなすべきことに必死になっていたために考えが至らなかつた、おろそかにしてしまつた末の妹。

彼女も自分なりに何かを為さねばと思ひながら、無力な自分を嫌悪し抱え込んでしまった。その末に、自分の心を押し殺して、笑顔の仮面を貼り付け、家族に迷惑をかける道を選んでしまった。

それに気づくことができたのは、ある豪雨の日。道場の前に訪ねてきた、この女性の言葉があつたからだつた。

「私のことは、どんなに恨んでくれて、憎んでくれて構わない……！」

「だがそれでも、それでも……！！？」 あの子なのはのことは、一人ぼっちにしないであげてくれ……！！？」

「私がこんなことを言うなんて、おこがましいことだろう……だが、頼む。あの子にま

で、重荷を背負わせないであげてくれ……!!？」

「あの時の願いを聞いてくれて、……ありがとう」

「……礼を言われる筋合いはない」

アインは本気で感謝の念を感じているように見えるが、本来礼を言うべきは恭也の方だ。

あの言葉があつたから、恭也達は一人の家族をないがしろにしにかけていることに気がついたのだ。昔から敏かつた末の妹は、家族の間で流れている張り詰めた空気を感じ取り、それ以上の心労をかけることを気に病んでしまったのだ。その結果、自分の気持ちを押し殺して抱え込むという選択をってしまったのだ。

小さな少女に、自分の気持ちを押殺させてしまっていたことに気づいた恭也達は、そこでようやく落ち着くことができた。今まで不測の事態に狼狽し、家族に目が向かなくなるほど余裕をなくしていたことに、ようやく気づいた。

危うく大切な家族の心を壊し、見殺しにしてしまひそうになった時に気付かされた。何度礼を言っても気が済まないほどだ。

「あんたのことはもう恨んでない。大事なものが見えていかなかった俺の目を覚まさせてくれたことには……正直、感謝している」

恭也は素直に頭を下げ、アインの前からじっと動かない。

アインは突然のことに少し呆気にとられていたが、すぐにまた切なげな表情で目をそらしてしまう。その反応にやや寂しきを感じながら、恭也は表情を改める。

今度ははつきりと、アインに対して強い感情を向けた、真剣な表情だ。

「だがな。今度あんたがなのは危険な目に遭わせたなら、俺はあんたを必ず殺しに行くからな」

「……肝に命じておくよ」

恭也の方を見ないまま、アインはそっけなく答える。恭也はそれを信じたのか、それ以上何も言わずにアインに背を向け、元いた部屋に戻っていく。

その途中、若干言いづらそうになりながら、アインの横目を向けて口を開いた。

「それと……たまには、うちのケーキ、食べに来てくれ。父さんも母さんも喜ぶだろうか」

「……考えておくよ」

肯定も否定もしない、そんな曖昧な答えに納得したのかはわからなかったが、恭也は無言でその場を後にする。再びその場は静寂に包まれ、どこかから虫の音色が届き始めた。

一人残されたアインは壁に背を預けたかと思うと、そのままブルブルと腰を下ろし、

膝を抱えるようにうずくまった。周囲に顔を見られないようにしながら、どこか自嘲するような声で呟いた。

「……恭也。私はそんな、できた人間じゃないよ」

3. 運命の出会い

「……うん。ここだとよく見える」

旅館からほど近い、海鳴市の夜景を一望できる展望台に赴いたのは、手摺りから少しだけ身を乗り出して呟く。風呂から上がり、浴衣に着替えた彼女は就寝する前に、外の空気を吸おうと抜け出してきたのだ。

胸元からレイジングハートを取り出し、手のひらの上に乗せて語りかける。

「ねえ、レイジングハート。聞こえる？」

【Yes, I can hear you.】

「ごめんね、ほつたらかしにしちゃって」

家族の前でレイジングハートに話しかけるわけにはいかない。そのため放置する形になったことが申し訳なくなつたが、相棒は気にしないでいてくれたようだ。非常に気遣いのできるデバイスである。

ちなみにユーノは美由紀に捕まって布団の中に連れ込まれている。恨み節が聞こえてきた気がするが、なのは苦笑して謝るだけであまり気にはしなかった。

「レイジングハートともお星様を見たいなって思つて……一緒に付き合つてくれる？」

【A l l r i g h t .】

了承してくれたレイジングハートに微笑みを返しながら、なのはは展望台の淵を歩き始める。高く設けられた地面の上から、自分の住んでいる街を俯瞰的に眺めてみた。

普段の生活で見る街の光とは違う風景に、なのはは不思議な気分になる。自分があの場所にいた時は光の中にいるようで、身近でそこにあることが当たり前のような感覚がしていた。

だがこうして遠くから見ると、自分の元にはない光を他の誰かが持っているような、自分以外の人々の暮らしというものがありありとわかるような気がする。漠然と感じていた「誰か」というものが、目で見て感じられる気がした。

「……このあたりに、ジュエルシードの反応はなさそう？」

【A f f i r m a t i o n s c a n n o t b e b u t , y e s .】

「そっか……油断はできないんだね」

思わずレイジングハートを握りしめ、こみ上げる気持ちに息を呑む。ユーノやアインには気にするなど言われてしまったが、やはりジュエルシードの搜索を休んでしまったことに気が咎める。

もし今、この時にあの街の光の中でジュエルシードが発動したら、間に合わなかったら、そんな思いが頭をよぎってしまう。今は自分たちだけがあの街に巣食っている悲劇

の胤たねの存在を知っていて、平和な日常を背負っている。大げさかもしれないが、そんな感覚を覚える。

「21個のうち、封印できたのは5個。残るは16個……まだまだたくさん残ってる」

4分の1も問題は解決していない、そのことを改めて口にし、なのはは真剣な表情で夜空を見上げる。

この街を、世界を守るのは自分たちだけ。そんな実感もわからないような大きな責任を背負うつもりで、なのはは天に拳を強く突き出した。

「ユーノ君を助けるために、頑張らないとね！」

相棒を、そして自分自身を鼓舞するように力拳を握り、己の意志を改めて口にしたその時だった。

ドクン、と。

目には見えない、常人には聞こえない確かな力の波動が脈動のように大気を走り、なのはのもとにまで響き渡ってきた。

これまで幾度も感じたことのある、この冷たい氷を背中に押し付けられたかのような感覚は間違いない。自分たちが追っている魔法の宝石が目を覚まし、世界に向かって鋭

い牙を剥こうとしているのだ。

「ユーノ君！」

「うん、なのは！ ジュエルシードだ！」

ユーノに確認するように、叫ぶような勢いで念話をつなぐと間髪入れずに肯定の返事が帰ってくる。

そう聞いた瞬間、なのはは浴衣の裾がまくれ上がり、乱れていくのにも意を介さず走り出した。着替えに戻るなど全く考えず、行動を繰り返すジュエルシードの元へとただ急いだ。

レイジングハートを介してなのはの声から心情を察したユーノは、慌てて呼び止めるために再び念話をつなぐ。

「待つてなのは！ ボクが行くまで……！」

「ダメ……待てない！」

ユーノの制止も聞かず、なのはは走り続けた。運動が苦手なせいですぐに息が上がりそうになるが、胸の内では燃える感情が体に力を与える。

「また誰かが巻き込まれちゃうかもしれない！」

なのはの中には焦燥感があつた。今すぐに向かわなければ、まただれかの涙が流れることになってしまうかもしれない、そう思っていた。

最初は、自分に力がなかったためにユーノが傷つき、次には対処が遅れたためにアリスとすずかが嫌な思いをさせられてしまった。ユーノやアインの手助けがなければ、もつとひどいことが起きていたかもしれない、そう思うと背筋に冷たいものが走った。

今抱えているこの気持ちは、かつて父・士郎が倒れた時と似たものだ。大切な人が目の前で傷つき、泣いているのに自分の小さな手は何もつかむことができず、ただその場で小さくなることしかできない。この気持ちは、その時と同じ種類の無力感だった。

「この間はちゃんとできた……！　魔法だって、アインさんやユーノ君といっぱい練習した！　レイジングハートも一緒にいてくれる！　だからきつと大丈夫！」

何度も口にし、恐れる心を押さえつけ走り続ける。今すぐに向かわなければ、間に合わねば、そんな強迫観念のような思いに背中を押されながら、なのははレイジングハートを握りしめる。

「レイジングハート、セーットアープ!!？」

光に身を包み、戦闘装束へと姿を変えるのは。

そんな彼女の視界の端で、森が動いた。

光が、森の中で輝きを放つ。

膨大な魔力を秘めた魔法の宝石がある個体の意識を察知し、その願いを叶えるために

動き始めた。それも、誰も望んだわけではない歪んだ形で。

数本の木々が立ち並ぶ、湖畔の陰。周りの樹よりもひと回り太く大きな樹の根元で、一組の男女が持った宝石が強い光を放つ。身を隠すように入り込んだ大樹の根元で浴衣を着崩させ、密接に体を絡み合わせた二人の男女が願ったのは、『このまま二人で永遠に一緒にいる』こと。

悲痛な表情で女性を抱きしめる男性と、同じくらいに悲しげな顔で涙を流す女性。どういった経緯でそんな願いを抱いたのかは知る由もないが、とにかく非常に強い思いから生まれた願望であったこと、そして強烈な負のエネルギーが発せられていたことで、ジュエルシードはこれまで以上に歪んだ形でその願いを叶えようとした。

二人一緒になりたいのなら、心も体も一つのものに。永遠を過ごしたいのなら、外界からの干渉の一切を拒絶する力を。そしてそれを邪魔するものを、容赦無く排除する力を与える。

そうして生まれたのは、周囲の木々をも巻き込んで構成される植物の怪物。

枝が男女を覆い隠す巨大な繭を創り出し、放出された樹液によって二人を閉じ込め、時間を固定してしまう。ざわざわと枝や葉が茂り芽生え、数本の幹が集まって強靱な肉体に変えていく。ちよつとしたビルも超えるほどの高さまで育ち、そこからさらに頭上を覆い尽くさんとするほどに枝が広がっていく。

伸びた枝はまた数本が束となり、めきめきと形を変えたかと思うと、鋭い牙を持つ大蛇のような蔓へと変貌する。目のない、しかし鋼鉄並みに硬い生木の蔓は咆哮を放ち、中心にいる男女に近づこうとする獣や鳥を排除しようと蠢き始めた。

「ギョオオオオオオオ!!？」

大気が揺れるほどの巨大な咆哮に、木々に止まっていた鳥たちが一齐にバサバサと飛び立ち、獣たちが逃げ出していく。

さつきまで何事もない平和な森であったのに、突如として危険な怪物が暴れ始めたことにパニックを起こし、森は一瞬で地獄と化した。飛び交う鳥は薙ぎ払われ、獣たちは蔓の蛇に丸呑みに、あるいは噛み付かれ締め上げられていく。強大な魔物に、地球の獣たちはあまりに無力であった。

木々の根元で丸まり、眠りについていた3匹の子猫もまた、突如始まった地獄に尻尾を丸め、カタカタと小刻みに震えていた。非力な彼らに対抗する力などあるはずもなく、逃げ出すための勇気も失われてしまっている。

そんな格好の獲物に、蔓の蛇はにたりと笑うように顎門を開き鋭い牙を剥き出しにして襲いかかった。

「ギョオオオオオ!!？」

哀れな3匹の子猫は、恐ろしい咆哮に縮こまる他にない。3匹で一つになり、襲いか

かるであろう痛みを覚悟して目を背けるだけであった。

だが、子猫たちの肉が裂ける音も、血が噴き出す音もしなかった。

代わりに周囲に響き渡ったのは、落雷のような強烈な破裂音と鈍い衝撃だった。

「……」

蔓の蛇が大きく顎門を開いたまま、空中で止められている己自身に驚愕する。鋭い牙は子猫に届くことはなく、目前に展開されている帯電している金色の光の盾に防がれている。ばちばちと電流が蛇の体にも走り、焦げ臭い匂いが辺りに立ち込めていく。

これはなんだ。意識とも呼べない機械的な思考で、蛇は目前の状況を分析する。

己に向けて雷光の盾をかざしているのは、同じ金色の長い髪を持つ幼い少女。幾何学的な模様の入った円形の盾を展開する黒いワンピースの少女は、黒のリボンでツーサイドアップにまとめた髪を揺らしながら、年齢に似合わぬ殺気のこもった表情で、赤い寶石のような瞳で睨みつけている。

ただの一撃で壊れそうな薄い盾だというのに、蛇は全くそれを破壊することができない。それどころか、電流による麻痺のせいで全く動くこともできなくなっていた。

「バルディッシュユ」

動きを止めた蛇の前で、少女が凜とした声を発する。すると、少女の手の中にある三角形の金属のかけらが低い声を放った。

【Get set.】

その瞬間、少女の展開する光の縦が光を強め、とてつもない衝撃と電流が蛇に襲いかかった。強化されているとはいえ、所詮は植物である蛇はその威力に耐えられず、わずかな抵抗だけを残して電流の本流に飲まれ、消滅してしまふ。

張り巡らされた触手の一本が破壊されたことを察したジユエルシードの暴走体の本体は、自身を破壊しうる力を持った少女を最優先に排除すべき「敵」と認識した。

暴走体は自身をじつと睨みつけるようにして佇む少女に向けて、他の蔓にも突撃の命令を下す。他の邪魔者を排除するよりも先に片付けねば危険と判断した蔓の動きは素早く、暴走の影響下にならない他の木々をなぎ倒しながら、少女の小さな体を叩き潰そうと一斉に迫った。

だがそれよりも先に金色の少女が動く。天に向けて、手のひらの中にあつた金属片を掲げ、光をまとい始めたのだ。

【Barrier jacket set up.】

金属片の音が発せられると同時に、少女の衣服が光の粒子へと変わる。黒のワンピースに包まれていた真っ白な肌が晒され、息をのむほど美しい肢体があらわとなる。余計な肉のついていない四肢、ほのかに膨らんだ胸部と臀部、すらりと長い足が次の瞬間には光ん粒子に包まれていく。

電流とともに形成されていくのは、体にぴつたりと張り付く水着のような衣装。体のラインを思い切り強調するようなそれをベルトのような装飾が締め、方からはマントが垂れ下がる。

幼い見た目でありながら、どこか蠱惑的な魅力を放つ彼女がそれをたとえば、常人にもいかがわしい気分陥らせることであろう。

〔A x e f o r m .〕

最後に少女の持つっていた金属片が浮き上がり、無数のパーツが合わさって一本の斧になつていく。黒く硬い重厚感を感じさせる戦斧を携え、少女——フェイトはキツと鋭く蛇の蔓の群れを睨みつけた。

「はあああああ!!?」

勇ましい咆哮とともに戦斧を振りかざすと、愛機・バルディッシュの宝玉が光を放ち、空中に斬撃の軌跡を描き出す。

三日月のような円弧を描く無骨な刃が大気を切り裂き、襲いかかる蛇の胴体を次々に両断し、地面に転がしていく。魔力で強化されているとはいえ所詮は植物である蔓はたやすく両断され、汚らしい樹液を垂らしながらぼとぼと雑な輪切りにされて落下していく。

しかし両断された蔓の一部はその動きを止めず、わずかな間のたうちまわったかと思

うと、やがてそれぞれで一匹の蛇のように形を変えてフェイトに飛びかかっていく。独立した個体となった蔓が牙を剥き、蛇の蔓の群れを叩き斬るフェイトに喰らいつこうと鎌首をもたげ、一斉に飛びかかっていく。

フェイトはその場から大きく跳躍し、曲芸師のように宙返りをしながらその場を離れて、蔓や蛇からの攻撃を躲していく。蛇と蔓が集まったところで、フェイトはバルデイツシユを構え先端から雷を放出した。

バリバリと眩い雷光に荒らされた蔓はほぼ一瞬で焼き尽くされ、いびつな形の炭となって地面に転がり、ポロポロと崩れていく。生木で水分が豊富であるため、炎で焼くよりも感電させた方が効果が高いらしく、予想以上に広範囲の蔓が薙ぎ払われた。

「ギユオオオオオオ!?」

しかし暴走体もただやられるだけではない。自身の根を地中から伸ばし、死角からの不可視の攻撃を加えようとうごめき始める。近づいてくる気配に、フェイトが鋭い表情で戦斧を構えた時。

「てえええええええ!!?」

突如、全く予想しない方向から幼い少女の声が響き渡ってくる。フェイトはハツと振り向くと後方に向かって跳躍し、枝の結界をぶち破りながら迫ってくる桜色の閃光を前にして、眩しさに目を手で遮った。

上空からジュエルシードの暴走体の姿を発見したなのは、素敵に引っかかる前に渾身の砲撃を放ったのだ。フェイトの周囲にあった蔓は一瞬で蒸発し、地面も抉って根まで焼き尽くされると、枝が埋め尽くしていた場所にぽっかりと空間が生じる。

自身が撃ち抜いた穴を通り、本体の目前にまで到着したなのは、男女を取り込んで脈動するジュエルシードの光を見据える。レイジングハートの砲口を向けて構えると、再び強烈な封印砲を放とうと自分の魔力を収束させていく。

「ジュエルシード、封印……！」

桜色の閃光が放出されるその直前、動きを止めていた暴走体が不意に動き出した。なのはを新たな敵と認識し、排除するために新たな枝と蔓を伸ばすと、ゴキゴキと不気味な音を響かせて攻撃を再開し始めた。

「うにゃっ!??!」

今まさに発射しようとしていた魔力砲はなのはが離脱したために霧散し、縦横無尽に襲いかかる枝に逃げ惑うことになる。シューターを発射して迫り来る攻撃を相殺するも、物量の違いによって徐々に押され気味になっていた。

その時、なのはが苦戦している間に、フェイトが再び動いた。迫り来る蔓に向かって自ら向かっていったのだ。

当然好都合でも言うように大量の枝と蔓が向けられるも、加速した少女にかするこ

とも叶わなかった。わずかな間に攻撃のパターンを学んだ少女は、完全に攻撃の全てを予測し回避していく。不可視のはずの地中からの根の妨害も、さしたる蠟梅も焦りもなく対処し、一気に本体に向かって突入していった。

「ギユオオオオオオオオオ!!？」

まるで焦るように、暴走体がさし向ける枝と蔓の数が増大する。まるで壁のように向かってくる攻撃を、フェイトは雷光のごとき速度で攻略し、男女を包む繭の目前にまで到達した。

「ジュエルシード、封印！」

【Scythe Form.】

バルディツシュの刃が展開し、魔力刃を備えた大鎌の形態へと変わると、少女はそれを頂点からまっすぐに振り下ろす。

中心にいる男女を引き離すように繭が斬り裂かれ、眩い光がその裂け目から放たれる。溜め込まれていた膨大な魔力が裂け目から吹き出し、爆発となると轟音と衝撃をあたりに撒き散らした。

元凶たるジュエルシードが強烈な魔力攻撃を受け、力の供給が絶たれたことで周囲の枝も勢いを失い、しおしおと弱々しく元の普通の木々へと戻っていく。

光が徐々に収まり、静かな森へと戻った湖畔のほとりには、解放された男女が並んで

横たわる。その真上にはジュエルシードが浮遊し、男女たちに取り憑くように未だ怪しい光を放っていた。

フェイトは無言でジュエルシードに近づき、バルデイツシュの宝玉をさし向ける。すると、宝玉に触れたジュエルシードがバルデイツシュの中に吸い込まれていった。

[Recept No. 16.]

凄まじい先頭の後であつたにもかかわらず、フェイトの表情に疲労の色は見えない。軽い運動程度のようにわずかに呼吸を早めているだけで、それだけで彼女が鍛えられているということがよくわかった。

目的のものを回収し、愛機を見下ろすフェイトの元に、なのはが恐る恐るといった体で近づいていった。

「……………あ、あの、待って……………」

「それ以上近づかないで」

いきなり大鎌型のデバイスの刃を突き付けられ、話をしようとは歩み寄ろうとしたなのはの足がピタリと止まる。自身の目をまっすぐに射抜く、金髪の少女の目の鋭さにひるみ、なのはは口を開くことができなくなった。

「……………!!？」

今まで人に向けられたことのない、はつきりとした敵意に晒されたなのははごくりと

息を飲み、冷や汗を流しながらフェイトを見つめる。不安げな表情でレイジングハートを胸元に抱えるも、目をそらすようなことはするまいとぐつと耐えていた。

「あの……あなたもそれ、ジュエルシードを捜してるの……？」

意を決し、鋭い視線に慄きながらも尋ねるのは。緊張のせいかわたしのせいかわたしとんちんかんな質問になってしまったように思うが、今のわたしにはそこまでの余裕はない。口を開けただけでもよくやった方だ。

返事はなく、フェイトは魔力刃を突きつけたままじつとなのはの方を見据えてくる。まるでフェイトの存在そのものが冷たい刃のようで、年はそう変わらないはずの少女に恐怖感を感じるほどだった。

「あの、お話ししたいだけなの……！ あなたも魔法使いなの、とか……なんでジュエルシードを探してるの、とか……」

なのはの問いに、フェイトは一切答えない。おもむろに動いたと思えば、片手で突きつけていた大鎌を両手で構え、月光に漆黒の光沢を反射させた。先ほどよりも強く感じる敵意に、なのはは慌てたように後ずさった。

それでもなお対話を促すのはだったが、彼女がさらに口を開くよりも先にフェイトの姿が消える。

いや、なのはが反応できないほどの速度で接近し、デバイスの魔力刃を振り抜いてき

たのだ。

「!?」

とつさに身を引けば、胸のすぐ前を金色の魔力刃がかまいたちのように通り抜け、空気を切り裂いていく。まず間違はなく自分を仕留めるつもりで放たれた攻撃に戦慄するなのは、すぐに厳しい表情に改めてフェイトに向き直る。

再び視覚から大鎌を振りかぶり、迫ってくるフェイトを見つけると、なのははレイジングハートを前に構え、斬撃をかるうじて防ぐ。

ギチギチと金属同士が噛み合う嫌な音が耳に届き、腕にかかる負荷と一緒になっているのは眉間に皺がよる。少女の細腕からは想像できない膂力により徐々に押し切られそうになるが、なのはも負けじと押し返し、両者は自然と見つめ合う形となった。

「待って！ 私……戦うつもりなんてないのに!!」

「だったら、私とジュエルシードに関わらないで」

「だから……! そのジュエルシードはユーノ君の……」

フェイトはなのはと問答をするつもりは全くないようで、命令するようにはつきり告げるだけで会話にならない。

なぜそこまでの敵意を持てるのかわからず、なのはは若干の怯えを抱きながらもフェイトの目を見つめ返す。

フェイトはそんなのはを拒絶する冷たい眼差しを送ると、無理やりバルディッシュを振り抜くことではなのはを振り払い、魔力刃を振りかぶる。

[Arc saver, Saver explode.]

[Protection.]

レイジングハートが自己の判断で障壁を張った瞬間、なのはに向けて金色の円弧状の魔力刃が射出される。空を裂いて飛来した魔力刃は障壁にぶつかり、強烈な衝撃を放つ爆発を生み出した。

「きゃあああああつ!!?」

障壁によってダメージはないものの、爆発の勢いでなのはの体は軽々と吹き飛ばされる。体勢を整えることもできず、また我に帰る暇もなく、目をつぶって悲鳴をあげるなのはに再びフェイトが肉薄する。

反応すらできずにいるなのはに向けて、周囲に多数の雷の球体を並べたフェイトが小さく口を開いた。

「……………(めんね)」

その小さな声に、意識が飛びかかっているなのはは思わず薄目で少女の方を見る。その瞬間に見えた表情に、なのはは胸が締め付けられるかのような感覚に襲われた。

だがそれを確かめる間もなく、落下していくなのはに向けていくつもの雷球が襲いか

かる。激しく放電する雷球が一斉に迫り、なのはの視界が金色の光に覆われた、その瞬間。

「……子供の喧嘩にしては、少しばかりおいたがすぎるんじゃないのか？」

そんな声とともに、雷球が一斉に弾け始める。周囲の大気を轟かせる爆発のような放電が発生し、一瞬だけ辺りが真昼のように明るくなる。フェイトの所にまで爆風が及びんで長い金髪がなぶられるも、フェイトはその場から全く動くことなく爆心地を見据える。

轟音が響き渡る中、フェイトの目が鋭く細められる。

煙が晴れ、なのはが落下した場所がようやくよく見えるようになっていく。そこには、気を失ったなのはを抱きかかえた背の高い女性の姿があった。いつか、自分と相棒を片手間のごとく圧倒したあの騎士だ。

魔力弾の直撃を受けたはずのなのはに、目立った外傷は見受けられなかった。おそらく彼女が攻撃を防いだのだろう、脇に味方を抱えながら。

「……また、あなたなの……？」

なのはよりも警戒心をあらわにしながら、フェイトがアインに向けて呟いた。予想はしていたが、アインがあの子の味方であることに若干の落胆を感じる。見逃された恩のようなものがあるが、やはり敵なのだ。

そう思うと、なぜか胸の奥がぎゅっと苦しくなるような感覚を覚え、フェイトの表情がやや暗くなる。首を振ってその思いを振り払っていると、真下からアインが声をかけて来た。

「よく会うな。このあいだの使い魔は元気か？」

「……………今は来ていない。ここには私だけ」

「そうか」

返事があつたことが嬉しかったのか、騎士はその口元にわずかに笑みを浮かべる。敵であるのにこの気安さを保ったままというのは、フェイトには理解できず険しい表情になる。

だがすぐにアインの足元で横になっているのはに目を向け、きつい口調で口を開いた。

「今度は手加減できないかもしれない……ジュエルシードは諦めて」

「あいにく、そんな脅しで引き下がるほど肝は小さくないんだよ。私も、この子も」

アインはなのはに呆れたようなため息をつくど、目を細めてフェイトの方を向く。以前感じたことのある、彼女の殺気が離れていても伝わって来た。

「まだやると言うのなら、私がまた相手になるぞ。それでもいいのなら……いつでもかかってくるといい」

「……………」

冷や汗を流しながら、フェイトはアインを見つめる。

この場で彼女を一人で相手をするのは得策ではない。しかし目的を果たすためには、騎士が守っている少女が持っているものが必要になるのだ。そのことを思えば、このまま引くという選択肢は選ぶ気にはなれなかった。

往くことも退くこともできず、膠着状態に陥ろうとしていた時だった。

どろり、と。

背中を伝うねっとりとした感覚が、アインたちを襲った。

「!!?」

アインは鋭く目を見開き、殺気を纏わせながら振り返った。一瞬だけであったが、確かにこちら側に対して害意を持つものの視線を感じ、警戒を強める。それも単体ではない、複数の気配がアインとなのはを取り囲むようにして突然現れたのだ。

フェイトもまた、不意に向けられた視線を感じ取って身構える。巧妙に隠された、しかし確かな悪意のような感情を肌で感じ、二人は険しい表情で周囲を見渡す。

「……………なんだ、この気配は」

地球で向けられるとは思っていなかった嫌な視線に、アインは懐に手を忍ばせながら眉間にしわを寄せる。

その時、茂みや草をかき分けて、ユーノが姿を現した。小さな体でようやくここまでたどり着いたらしい。

「アインさん！ 気をつけてください！ 半径100m内に、未確認の魔法生命体の反応が……!!？」

「なんだと……!!？」

ユーノからもたらされた報告に、アインは目を見開いて警戒をさらに強める。

地球に魔法文化はない、その上生物が魔力を持つことは非常に稀なはずである。なのはという例外は確かにあるものの、地球でそのような存在が確認されることはまずないのが常識であった。

なのにそんな存在がいくつも確認されるというのは、納得できるものではなかった。真つ先に魔法の知識を持つ何者かの干渉を疑っていたアインだったが、森の陰から姿を現したもののたちの姿を目の当たりにし、言葉を失った。

「……………バカな」

ギチギチと、カサカサと、気味の悪いは音や声を響かせ、それらは姿を現す。

艶のある、節くれだった外骨格に鋭い爪、薄く広い羽。不快な匂いを帯びた鎧のような皮膚を携え、長い触角を揺らして気味の悪い動きを見せつける。細く長い四肢でありながら中には詰まっているような張りがあり、膨張した筋肉の脈動がその中から確かに

感じ取れた。

その姿はちやうど、どここの家庭にも潜んでいる黒光りする悪魔に似ていて、その場にしたものは誰もが不快感を催されることとなった。

「ダークローチ、だと……!?」

信じられないといった心境で、それらの名を呼ぶアイン。

その表情は他の誰でもない自分自身が、それらの存在を受け止めることができないようであった。

4. 黒き蟲兵

「ギユアアアアアアアアアアアア!!?」

「ギギギギギギギギ……!!?」

「キシヤアアアアア!!?」

闇の中でうごめく無数の影、吐き気を催す醜悪な姿を晒した異形の群れが牙を鳴らし、その喉奥から吐き出した気色の悪い咆哮を少女たちに浴びせかける。ギラギラした赤い目と、血塗られたような赤い爪が月光に反射し、闇の中で光る。

カサカサと硬い表皮が奏でる怖気を感じさせる音は、住居の陰から忍び寄るかの黒い害蟲を彷彿とさせ、フエイトもユーノも背筋をぞくりと震わせた。通常目にする個体でも十分な恐怖感を煽るというのに、それが成人男性並みの巨大さで、しかも大群で押し寄せてきているのだ。とても正気ではいられない。

「……これは……!!?」

ユーノはなのはの前に立ちほだかるようにし、それでも顔を真っ青にしながら目を見開く。

突如現れた、地球上の生物とは思えない凶悪な外見の怪物の群れ。そんなものを前に

して、逃げ出さないどころか腰を抜かさないだけで大したものであった。

そんな中、ブルブルと震えているユーノを一瞥したアインが小さく口を開いた。

「ユーノ、広域結界発動」

「は、ハイ!!？」

小さくも、はつきりとした声にユーノはようやく我に帰り、言われた通りに魔法を発動する。感知している怪物を全て囲うように結界を発動すると、怪物たちのざわめきがより大きく聞こえてくる気がした。

徐々に落ち着きを取り戻してきたユーノは、アインに守られながら思考を巡らせる。相手が何者なのか全くわからないが、とにかく危険な存在であることは肌で感じる。こんな奴らを放置するわけにはいかないと、結界を強度に張り巡らせた。

「ん……んう?」

その時、気を失っていたなのはが周りの音に気づいたのか、小さな呻き声を漏らしながら眉を寄せる。ピクピクと痙攣する臉をゆっくりと開いた彼女は、ぼんやりとしたま体を起こし、見慣れない森の中の景色に首をかしげる。

そして何度か瞬きした後、自身を取り囲むように輝いている異形の赤い複眼と目があつた。あつてしまった。

「ひいやああああああああ!!？」

たまらず上がったなのはの悲鳴が火蓋を切った。

髪を猫のように逆立てた少女に刺激された異形たちが、恐ろしい咆哮を上げて一斉にアインたちに襲い掛かった。闇の中で赤い目が軌跡を描き、咆哮と羽搏き音が津波のように重なって鼓膜を震わせ、生理的な嫌悪感を生じさせた。

艶のある赤く鋭い爪が空を切り、最初に到達した異形がなのはに迫った、その寸前。

「オオオオオ!!?」

獣のような咆哮とともに、アインの強烈な回し蹴りが異形の横腹に突き刺さる。見た目よりも重量のある体はくの字に折れ曲がり、汚らしい唾液を吐き出させながら吹き飛んでいく。木の幹に激突した異形は苦しげな鳴き声を漏らす、すぐに興奮したような叫び声を上げて立ち上がった。

アインはチツと舌打ちし、すぐさま姿勢を落として背後からの攻撃を躲す。地面に手をつくくと、頭上に躍り出た異形の顎を蹴り上げて仰け反らせ、逆立ちしたまま両足を回して胴を蹴り飛ばす。続いて向かってきた異形の顔面を蹴りつけると、空中へ飛んで別の異形の顔面に襲撃を食らわせる。

「ギギギギイイイイイイ!!?」

「ギシャアアアア!!?」

暇なく襲いかかる異形の群れをかたつぱしからなぎ倒していくアインだったが、倒し

た先で起き上がり、再び群れてくる異形に忌々しげに顔を歪める。闘争路を探すも、次々に現れる異形が道を塞いでそれも不可能となつてしまった。

なのはそれを、恐怖に支配されたまま凝視する他にない。今まで何体かジュエルシードの暴走体に相見えたなのはだったが、この異形を前にしては勇気を奮うことはできなかつた。

暴走体よりも凶悪で醜悪な、本能的な恐怖感を煽る外見、アインの攻撃を受けても立ち上がる不死性、そしてそれが大群で押し寄せてくるという現状に、なのはの足は立ち上がる力を失いかけていた。

近寄ってくる異形を蹴り飛ばしていたアインは、震えて硬直しているなのはに背を向けながら声を発した。

「なのは……今すぐにユーノと共にここから離れる。今すぐにだ」

「あ、アインさん!? で、でも……!」

「こんなやつらの前に置いていくわけには……!!?」

向かってきた異形を投げ飛ばし、別の異形にぶつけながらアインは命じる。なのはとユーノに一切の危害が加わらないよう、アインはその身で異形の魔の手から彼女たちを守り続ける。

だが、なのはにはその命令には素直に従えなかつた。どんなにアインが強くとも、周

囲を覆い尽くすほどの数の異形の中にアインを置いていくことなど考えられなかったのだ。これではまるで、彼女を犠牲にして逃げろとも言われているようではないか。

しかしアインはギロリとなのはを睨みつけ、突き放すような形相で怒鳴りつける。

「早く行け!!? お前を守りながらではこの数は相手にできん!!?」

「……………!!?」

迷い、ためらい続けていたなのはだったが、アインの凄まじい形相に後ずさり、意を決したようにその場から飛び立った。ユーノをすくい上げていくことを忘れず、なんども後ろめたそうに振り返りながら猛スピードで異形の包囲網から離脱する。

アインはなのはの姿が夜空の闇の中に紛れていく様を見届けると、次に上空で止まっていたフェイトの方を見据えた。

「お前もだ! さっさとどこぞにいる使い魔を連れてここを離れろ!!? 死ぬぞ!!?」

「……………!!?」

フェイトは未だジュエルシードのことを諦めきれないのか、アインを悔しげな目で睨みつけ、そのまま逃走を開始した。なのはよりも冷静で、堅実な思考のためかなのはよりも潔く、その姿は見る間に遠くなっていく。

弟子と少女が離脱したことに安心したようにアインが呟き、異形の方を向く。

すぐに射殺すような鋭い視線を向ければ、異形たちは先ほどよりも警戒を強めている

様子で、より強い殺気が辺りに充満していた。

「……一応聞こうか、虫ケラども。お前たちは一体どこから現れた？ 何者だ？」

「ギギギギギ……ギシヤアアアアアアアアアア!!？」

「……答えるわけもないか」

隙をうかがうように蠢いていた異形のうちの一体が威嚇の咆哮を放つと、つられて周りにいた異形も吠え出す。背筋に寒気が走るようなおぞましい声が続くつも重なり、大気を震わせながらアインに浴びせかけられる。

しかし、常人ならば失神していてもおかしくない怪物たちの合唱の中にあろうとも、アインは涼しい顔のまま異形たちを睨みつける。その手が懐に伸び、封印していた代物をそろそろと取り出した。

それは、銀色の箱状の機械の塊と一枚のカードであった。

無骨でありながら、余計なものを一切排除したデザインスピードの機械の尾錠バックル。赤い背面に金の十字架のような紋章が刻まれ、表面には赤い剣の模様スピードの青い甲虫トが描かれた絵柄の西洋歌留多トラ。

それを取り出し、アインはしばし目を伏せる。

(……すまん、リンデイ)

尾錠——ブレイバックルを強く握りしめ、眉間にしわを寄せながら、アインはここ

にはいない友に謝罪する。

ブレイバックルの表面にあるスリットに、CHANGEと刻まれたカードを挿入する。すると、スリットの反対側の穴から無数の赤いカードが連なって現れ、長く空中に伸びていく。

カードはアインの周囲を囲むように連なり、ブレイバックルを引っ張るようにしてアインの周りで旋回する。そして、バックルが腰の真正面に張り付いた瞬間、バックルの端から伸びていたカードが繋がり、一本のベルトへと姿を変える。

(あとでいくらでも叱られよう、あとでいくらでも罰を受けよう……だから頼む)

甲高い金属音のような、美しい音がバックルから規則的に奏でられるのをよそに、アインは左腕を腰に添え、異形たちのいる前方に右腕を伸ばす。まるで挑発するように指を曲げ、奏でられる音の中でアインは足を広げて構えを取る。

幾度となくぐり抜けてきた刀槍剣戟の中、なんども繰り返し行ってきた儀式のような構えを。

(あの子たちを、守らせてくれ)

「変身!!？」

勇ましい掛け声とともに、右腕と左腕を入れ替えるように構えを変え、右手でバックルの右側についたハンドルを引っ張る。

バックルの中の機構が動き、スリットにはめられたカードがバックルの中に取り込まれる。バックルの前面が反転することで、内側にあったスペードの紋章が露わとなり、金色の煌めきを夜の闇の中に残す。

【TURN UP】

野太い男性の電子音声が鳴り響くと同時に、バックルの紋章から青い光が前方に向かって射出される。光が急速に長方形に展開し、スクリーンのような光の壁となってアインの前にそびえ立つと、前方にいた異形の何体かをまとめて弾き飛ばした。

「おおおおおおおおお!!？」

どよめく異形たちをよそに、その表面にカードと同じ甲虫の絵柄が描かれた光の壁に向かつてアインが駆け出した。

風のように走るアインの体が光の壁を突き抜けた瞬間、光の壁がアインの体に纏わりつくようにして、その身に銀色の装甲と藍色の装いを生み出していく。

豊満で長身の体はびっちりとしたインナーに包まれ、はち切れそうな肉体を藍色の衣服が覆う。スリットが入った長いスカートとジャケットは革のような触感を感じさせ、打ち込まれた鋳が頑丈さを示す。

その上に、分厚く鈍い光を放つ銀の鎧が張り付いていく。両肩と胸にスペードをもした甲冑が生まれ、四肢にはカードを並べたような装甲が張り付く。最後に額に長く伸び

た甲虫の角のような鉢金が巻きつき、全身が月光を反射した鈍い金属の光を見せつける。

その姿は、まさに騎士。優美さも華美さもない、戦うことに全てを捧げた戦士の姿であつた。

「さあ、私が直々に胸を貸してやろう!!?」泣いて喜べ虫ケラども!!?」

フェイトと相対した時よりも、さらに獰猛な笑みを浮かべたアインは腰に下げた片刃の剣を抜き、猛然と異形たちに躍り掛かる。

異形たちもおどましい咆哮を上げて爪を剥き出し、真正面から向かってくるアインに迫っていく。隆々とした体躯を持つ異形が、数え切れないほどの群れをなして荒波のように迫っていく光景は、誰がどう見てもアインには勝機が見えないと断じるものだった。

しかしアインに臆する様子は微塵もない。片刃の剣に魔力が通り、バチバチと帯電し始めた片刃の剣を高く掲げ、アインは気合とともにそれを力強く薙ぎ払った。

「ウエエエエイ!!?」

その瞬間、凄まじい勢いで青い雷が剣から発し、刃となって異形たちに向かって食らいつく。刹那の間に閃光が異形たちの体に突き刺さったかと思うと、一瞬だけ遅れて凄まじい轟音と衝撃が辺りに駆け抜けていった。

青雷の斬撃を食らった異形たちは、雷の放つ熱によって真つ二つに焼き切られ、直後に真つ赤な炎を上げて断末魔とともに爆散する。致命傷を避けた個体も体の一部を欠損させ、傷口から黒煙を上げてのたうちまわることとなった。

直撃を食らわずに済んだ個体も、衝撃波によって周りの木々とともに吹き飛ばされ、苦悶と憤怒の声を漏らしながら身悶えする。

アインは立ち止まることなく、片刃剣の鐔の部分を扇のように展開し、内部に収められていたカードのうちの2枚を抜き取る。別々の絵柄が描かれたそれらを片手に持つと、片刃剣の刀身に刻まれた溝に刺してスライドさせていった。

〔THUNDER・SLASH. LIGHTNING SLASH〕

読み込ませた二枚が青い光を放ち、最初の一枚と同じような光の壁となって空中に映し出される。雷を纏う角を持った鹿、そして刃の尾を持つトカゲの姿が映し出され、それらはアインが逆手に構えた片刃剣の刃に吸収されていった。

直後、片刃剣の刀身に先ほどよりも凄まじい威力の雷が発生し、夜の闇の中で目映い閃光を放つ。アインはそれを大きく振り上げ、懲りずに向かってくる異形たちに鋭い目を向けながら駆ける速度を上げた。

「ハアアアアアアア!!?」

森の中を走り抜けながら、すれ違いざまに異形の一体を袈裟懸けに斬りつけ、一撃で

真つ二つにする。続いて迫ってきた一体の胴を横薙ぎ一閃で斬り捨て、固まって向かってきた数体ををまとめて力尽くで叩き斬る。

常人であれば一体だけでも相手にもできないほどの脅威だが、異形にとつては彼女は相手が悪すぎた。どんなに硬い表皮に覆われていようと、どんなに数を揃えていようと、全く意に介さないだけの力量の差が彼我にはあった。

膨大な魔力に強靱な筋力、優れた動体視力に物怖じせぬ度胸、戦士に求められる素質の全てを兼ね備え、極限までそれを育て上げた彼女に、異形たちの狂刃など一切届くはずがなかった。

【THUNDER・KICK, LIGHTNING BLAST】

「でやああああああ!!?」

新たなカード、宙を飛ぶバツタの絵が浮かぶカードと鹿のカードを剣の溝に挿し、今度は己が身に力を取り込んだアインが剣を地面に突き立てる。剣の柄頭を足場に空中に高く飛び上がると、グルンと勢いよく一回転し、異形の群れに向かって右足を突き出す。

強烈な雷の力を宿した蹴撃が異形たちに炸裂し、木々を粉碎しながらまとめて吹き飛ばされていく。遠くなぎ倒された異形たちは断末魔の叫びをあげ、次々に爆発して塵と化していった。

だが、明らかに戦況が不利なはずの異形たちがアインの前から逃げ出す様子などなかった。

味方が死ぬことも、己が死ぬことも恐れぬように、アインに向かって無謀な突撃を繰り返すばかり。さらに困ったことに、倒しても倒しても異形たちの数が減る様子はなく、それどころかより多くアインの方へと集まってきたように見えた。

「くそッ!!? 斬っても斬っても湧いてくる……面倒だな」

「……アインさん!」

忌々しそうに表情を歪めながら異形を切り捨てるアインの元に、嫌な声が届いた。

まさかと思つて振り向いてみれば、ユーノを肩に乗せたのはが猛然と飛んできている光景が目に入った。

「馬鹿者!!? なぜ戻ってきて……!!?」

叱りつけようとしたアインだったが、すぐに様子がおかしいことに気がついた。

「助けてくださああああい!!?」

「うにやあああああ!!?」

まるで悲鳴のような甲高い叫び声を発しながら、なのはとユーノはアインの頭上を通り過ぎていく。余波で起きた風圧でアインの髪が揺らされ、ぽかんと固まった表情を撫でた。

「……は？」

思わず、戦闘中にも関わらず呆けた声を漏らし、なのは達の飛んでいった方向に振り向く。一体何が起こっているのかと思えば、バタバタというやかましい音の直後に一瞬だけ彼女の頭上を黒い大量の影が覆い隠した。

背中から黒い羽を生やした異形の群れが、アインの頭上を通り過ぎていったかと思うと、アインには目もくれずになのはの後を夢中で追いかけて回している。なのはは涙目になり、肩にしがみついたユーノとともに悲鳴をあげながら飛び回り、真つ黒な塊のようになうごめく異形の包囲をなんとか躲し続けていた。

かと思えば、遠く離れた方から凄まじい雷が落ちる音が響き渡ってくる。木々の隙間から透かして見ると、なのはと同じく異形に囲まれたフェイトが戦斧を振りかざし、雷撃を浴びせかけている姿が目に入った。

「くっ……！」

苦戦しているようで、アインの異常な聴覚がフェイトの漏らした苦しげな呻き声を捉える。無数の雷は確かに異形に対しての有効打になっているようだが、数の差に狙いが分散し、致命傷を与えられずにいるように見えた。

異形達はフェイトの攻撃の合間の隙を探すように飛び回り、じわじわと相手が疲弊するのを待っているかのように徐々に包囲を狭めていた。

アインは思わぬ事態に戸惑い、眉間にしわを寄せて思索する。

異形の危険性を知るゆえになのは達を離脱させたはずなのに、しんがり殿として残ったはずのアインではなく逃げたなのは達の方を標的にしている。しかも障害として立ちはだかっているアインとは違い、なのはとフェイトの方に集まっている個体は、彼女達を獲物として狙っているように見えた。

「あいつら……まさか」

思考する時間すらも許さないとでも言うように、異形達は現在もアインを狙って鮮血色の爪を振り下ろしてくる。わらわらと鬱陶しい異形達を片手で排除しながら、アインは縦横無尽に飛び回るのはと雷刃を振るうフェイトの方を睨む。

「ブルースペイダー、ビークルモードスタンバイ」

「Yes, sir. Vehicle mode」

寄ってきた異形の一体を蹴り飛ばすと、アインは胸元から相棒を取り出し、一言命じてから空中に放る。使令を受けたスピード型のペンダントは青く発行し、倒れた異形を踏み潰しながらバイク形態へと移行する。

アインはひらりと座席に跨るとギアを回し、爆音を響かせながら後輪を高速回転させる。地面を抉りながらブルースペイダーは後輪を滑らせ、なのはの穂飛んで行った方へと方向転換してから疾走を開始した。

不規則に立ち並ぶ木々を高度な操縦技術によつて軽々とかわしながら、アインはなのはの向かった方へと全力で向かう。

アインを狙っていた異形達も、他と同じように虫の羽を生やして夜の闇の中を滑空し、アインを追跡する。闇の中でギラギラと光る光が徐々に集まり、横一文字の光の線のように見えた。

なのはの方も同じで、まっすぐに飛んで逃げているなのはの周囲で黒い影と赤い光が横一文字に広がっている。その姿に、アインはある確信を持った。

「レイジングハート！ お前の所持しているジュエルシールドをこちらに預ける!!？」

「ふえ!!？」

なのはのほぼ真下にまで追いついたアインからの指示に、なのはは涙目のまま思わず間拔けな声をこぼす。肩にしがみついていたユーノはあからさまに驚愕していた。

「あ、アインさん!!？ 一体何を……」

「やはりな。どうやらこいつら……強力な魔力に反応しているらしい」

「魔力って……だからこつてジュエルシールドを!!？」

「あれならこいつらを釣るいい餌になるだろう!!？ いいから言う通りにしてくれ!!？」

「ふえ……で、でも！」

そう言われても、先ほど殿にすることにさえたためらったのに、囿にすることなどなのはには考えられない。

しかしアインは、そんなのはをまつすぐに見つめ、強い眼差しを向けてきていた。

「構わん……私を信じろ」

思わず見とれてしまいそうな、自信と男気に溢れた表情。

そんな表情をまつすぐに目にしてしまったのはは何も言い返すことができず、レイジングハートの中から光を放出させる。レイジングハートもアインの策に渋々同意したのか、わずかなためらいだけを見せてジュエルシールドを預けて見せた。

片手で魔法の宝石を受け止めたアインは、そのままハンドルを傾けてバイクの方向を思いっきり変える。

アインの急速な方向転換に、異形達は一瞬だけ迷うようなそぶりを見せてから羽を傾けた。今度はなのはの方を見向きもせず、最初からアインが目的であったかのように標的を変え始めたのだ。

アインを追っていた異形の群れに、なのはを追っていた異形の群れ、そしてフェイトを襲っていたはずの異形の群れまで加わる。

「……？ 一体、何が……あの人！」

襲撃が止んだことに、フェイトは荒い呼吸のまま不思議そうな表情で眉をひそめる。

ふと視線を向けた先で、一台のバイクと、それを追う大量の異形の群れの塊を目にした。湖の中心に向かって水面上を疾走するバイクを駆り、アインが異形達を引き連れてなのはやフェイト達から離れていく。木々などの障害物がなくなつたおかげで、制限なくアインを追う異形達が徐々に距離を詰めていく中、湖のちょうど中心でアインはバイクを停止させた。

「……お前達は私を追い詰めたつもりだろうが、餌にかかったのはお前達の方だ」

異形達が、アインから逃げ場を奪うようにあらゆる方向から迫ってくる。数千か数万、たとえばアインにどれほどのスタミナがあろうとも対処しきれないほどの数が、一斉にアインを仕留めようと向かってくる。そんな絶望的な状況下で、アインは水面上でバイクから降り、視界を覆う無数の異形を見上げながら、不敵な笑みを浮かべて一人たたずむ。

ブブブブブ、と耳障りな羽音が聴覚を刺すのも気にせず、アインは腰から再び片刃剣を抜き、肩に担ぐように両手で構える。すらりと伸びた、美しい意匠の施された刀身が月光を反射し、銀色の輝きを放つ。

その瞬間、アインの足元の水面に丸く波紋が生じ、風が吹き荒れ始める。アインを中心として生じたその風は、徐々に勢いと威力を増しながら渦をなし、アインの放つ雷を纏って眩い光を発し始める。

「ギイイイイイイ!!?」

異形達の咆哮があちこちから聞こえてくる中、ゴキゴキとアインの剣を支える腕と肩から筋肉が盛り上がる音が鳴り響く。大きく足を開き、重心を下げたアインは、次の瞬間蓄積した全力を解放し、天に向かって刃を振り向いて見せた。

「ウエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!?」

轟、と。

刃の軌跡が残像となる程の振りにより、湖の中心に風が吹き荒れた。ただの風ではない、斬撃による鋭い切れ味を持った鎌鼬カマイタチと、膨大な魔力が返還されて生じた凄まじい威力の雷撃が、強大な竜巻となって異形達に襲い掛かったのだ。

突如自分たちの真下から生じた風の災害に、深い意図もなく本能のままに集まった異形達はなすすべもない。斬撃により塵のように細かく切り刻まれ、雷撃によって焼き尽くされ、跡形もなく消滅させられていく。

これはアインの持つ切り札。

あまりの威力と攻撃範囲のために味方を巻き込んでしまう可能性があり、乱戦では全くもって使えない禁じ手。

しかし今回のように開けた場所で、大多数を殲滅するために使えば戦況を個人でひっくり返せるほどの奥義となる。

その名を。

「テンベスト暴風!!?」

手加減なしの全力で発動された大規模殲滅用剣術奥義が、ユーノの張った結界の中で荒れ狂い、異形達を根こそぎ滅ぼしていく。

人間の手によるものとは思えない、天災というべき暴風が湖の水をも巻き込んで天高く昇り、周囲の木々から木の葉を剥ぎ取っていく。

「うにゃああああ!!?」

「うわっ!!?」

「くう……ぐつ……!!?」

空中にいたなのは達は、呑み込まれそうになる体をその場に止めることで精一杯で、きつく目を閉じたまま動くことができなかつた。何が起きているのかも把握できないまま、突如起こった大災害に身を守ることしかできずにいた。

しばらくすると、風の勢いが唐突に大人しくなる。飛ばれていた髪がふわりと降りていくのを肌で感じたのはがゆつくりと目を開けてみれば、目の前に広がっていた光景に言葉を失う。

「……………!!? う、嘘……………」

そこには、何もなかった。

空を埋め尽くすほどに飛び回っていた異形も、その残骸すらも何も残ってはいなかった。まるで最初から何もなかったかのように。

だが、湖の中心に佇んでいるアインと豪雨のように降り注ぐ水飛沫が、先ほどの暴風の残滓であることは確か。アインは雨音だけが響き渡る中、静かに片刃剣を下げ、腰元に収めていった。

「……………これ、あの人……………!!?」

なのはは目を見開き、信じられないといった様子だったが、目の前の現状がその考えが命中していることを表している。

驚愕により動くこともできずにいるなのは。その代わりを勤めるように、フェイトが音もなく飛翔し、アインのすぐ近くにまで近づいていった。

「……………一応、助けてくれたことには礼を言います」

「そりやどうも」

不本意そうに眉を寄せながら紡がれた感謝の言葉に、アインはぶつきらぼうに答える。フェイトもそれ以上の反応を求めていないようで、わずかに目を細めただけであった。

見ているのは、アインの手の中にある封印済みのジュエルシード。しかしそれを奪うだけの余力はないようで、若干名残惜しそうに見つめるだけでそれ以上近づこうとはしなかった。

「……そのジュエルシードは、しばらく預けることにします」

「そうしてくれると助かるよ」

アインはそういって、ブレイバックルのハンドルをもう一度引つ張る。バックルのエンプレムが内側に収納されると再び光の壁が出現し、アインの体を通過して元の格好へと戻した。

「……貴女の目的がわからない。管理局員であることは認めているのに、私たちを捕らえようとしない。実力の差は明らかなのに、そうしない」

「言っただろ。休暇で来ているって」

「それは理由にならない」

「なるさ」

フェイトが何を訪ねても、アインははぐらかすばかりでまともな答えを返さない。視線も合わせずに佇んでいるアインに、フェイトは嘆息するように目を伏せ、背を向けた。

「……伝えておいてください。今度は、止められても容赦しないって」

「承った。……つと、そういえば」

なのは対しての言葉だろう、未熟な相手に対しての見下した言い方に苦笑していたアインが、ふと思いついたように呟いた。

何事かと横目を向けるフェイトに、アインは苦笑まじりに答える。

「いや、何。まだ君の口から名を聞いていなかったと思つてな」

「……………」

訝しげに見つめてくるフェイトだが、アインは真剣な目で見つめていた。

名を聞いたのは、彼女の使い魔が呼んでいた時だけで、本人からはフルネームも聞いていない。そのことを思い出し他アインが訪ねてみれば、フェイトは少しだけ迷いながら口を開いた。

「…………フェイト。フェイト・テストロッサ」

どういふ心境の変化であろうか、すでに知られているであろうに意外と素直に答えてくれたフェイトに、アインは満足げに微笑みを見せた。

「…………^{フェイト}運命。いい名だな」

「……………」

何気なく呟かれたアインの言葉に、フェイトの表情が若干ほころぶ。名前をもらったことが嬉しかったのだろう、などと推測しているうちに、フェイトはその場から音もなく飛び立ち、時期に見えなくなってしまう。

「……アインさーん！」

しばしフェイトが消えた空を見上げていると、我に帰つたらしいなのはとユーノが呼ぶ声が聞こえてくる。振り向けば、どこか小僧気味に息を切らせた二人は不安げな表情をアインに向けていた。

「だ、大丈夫ですか?!? どこか怪我とか……」

「さっきの怪物は……?!?」

「問題ない。こちらこそ悪かったな。あれを残らず殲滅するにはああするのが手っ取り早かったんだ」

「い、いえ！ そのおかげで助かりましたし……」

頭をさげるアインに慌てたように手を振るのはだが、ユーノはそれとは別に心配そうな眼差しを向けてきていた。

気になったアインが目を向ければ、ユーノはためらいながら小さく口を開いた。

「……あの、良かったんですか?」

「何がだ?」

「デバイスの使用のことです。偉い人たちに嫌われて、デバイスの使用許可が出ないって言ってたのに、あんなに暴れちゃって……」

「ああ、そのことか」

以前の戦闘時に、そんなことを説明していたが、大事なことを言わずにいたことを思い出す。それは今回のような事態が起こるなど思わなかったためであり、教える必要がなかったためであった。

「確かに私は現在、個人の裁量でデバイスを使用する権限がない。……だが」
腕を組み、気だるげにため息をつくアインは自身に科せられた面倒な制約を思い出す。

「多人数の人命の危機、及びそれに該当する脅威と遭遇した場合のみ——私はデバイスの使用が特例で認められているんだ」

「！ それじゃあ……」

「ああ……皮肉な話だ。あいつらが今後も関わつてるようであれば、特例が適用される」
ユーノは安心するが、同時に不安も抱く。

地球に来て、遭遇するとは思えなかった危険な謎の生命体。異常な不死性と数の暴力性を持っていたかの異形が、もしかしたら今後も群れをなして立ちふさがるかもしれないのだ。ただでさえ困難を極めているジュエルシードの搜索に、暗雲が立ち込める感覚を覚える。

あれらが何者なのか、知っている様子らしいアインはどこか不機嫌そうに見える。なんとなく、詳しくは聞いてはいけないのではないかと思ひ、ユーノは例えようのない不

安に襲われるのであった。

だが、そんな中にか細く弱々しい声が届いた。

「……………めんなさい」

うつむき、レイジングハートを握りしめたなのはが痛々しい表情で声を漏らす。

どんよりとした雰囲気を漂わせている彼女の姿に、ユーノはハツとした目を向けた。

「……………私が先走ったせいで、私ならなんでもできるって、調子に乗ったせいで……………ジユエルシートも」

「そんなことないよ！ それを言うなら、何もできなかったボクの方こそ……………」

「でも、そのせいでアインさんの足手まといになって!!? それに……………さっきの子にも負けそうになって……………私の、私のせいで……………」

かつてないほど落ち込んでいるらしいなのはに、ユーノはかける言葉が見つからない。なのはも何かを言われてしまうことを恐れてか、暗い表情で俯いたまま涙がこぼれそうになるのを必死にこらえていた。

そんな中、厳しさを感じさせるはつきりとした声が響く。

「ならば君は、この後どうする?」

心に確かな傷が残ってしまったらしい少女だったが、不意にかけられた言葉に身を震わせた。

それを言ったアインは、ユーノの咎めるような目も気にせずになのはの目の前に立ち、視線を合わせて跪く。

「反省するだけなら猿にもできる。大事なものは失敗から何を学び、どう改善するかだ。……君はいま、それを身を以て学んだ」

まっすぐに見つめてくる赤い宝石の瞳を見つめ返し、なのはは潤んだ目を見開く。

アインは決して慰めてはくれなかった。真実を告げ、それを突きつけたまま相手に自分で気持ちを変えさせようとしている。答えを、自分の中から探し出させようとしている。

安易な慰めを与えない厳しくもあり、なのはが問題を解決できると信じているような、そんな優しさがあった。

「それを忘れずにいれば……君は今よりもっと強くなれる」

「……アインさん」

なのはの表情が、先ほどよりも明るくなっていく。まっすぐに見てくれているアインの言葉で、自分の中の勇気を取り戻したのだろう。

それに安心したアインは立ち上がり、なのはの手を取るとジュエルシールドを手渡す。察したレイジングハートが光り、宝石を自身の内部に収納していく。

「さ、帰りなさい。士郎達も心配しているだろう。後処理は私がやっておこう」

「……はい！」

もう大丈夫と言うように元気よく返事を返すのは。ユーノはその姿を空元気のよ
うに感じながらも何も言わず、二人でアインに向かって頭をさげてから飛び立って行っ
た。

旅館の方に消えていく小さな背中を見送っていたアインは、しばらくしてから鋭い表
情で周囲の森を睨みつける。

「なぜ、あいつらが……いや」

なにはには決して見せない、確かな憤怒と困惑が混ざった複雑な表情になった彼女は、異形達が現れた闇の中を見通し、眉間にしわを寄せる。

驚きのあまり思わず名を呼び、ユーノに余計な心配をかけさせてしまったようだが、
考えれば考えるほど信じられないという気持ちが大きくなっていく。

この世界に、あいつらがいるはずがない。いてはならない。

なのに奴らは現れた。だが同時に、一目見たときから感じた違和感が頭から離れな
い。

「違う。あいつらじゃない……あいつらは白くなかった」

記憶の中にある異形の姿とは違う、確かな変化。それがなぜか異常なほどの不安を沸
き立たせ、アインの心をざわめかせる。

「なら、何だ……？ 姿形は同じなのに、色だけが違う……まさかそんな突然変異体じゃあるまいし」

情報が足りない、ピースが揃わない。

答えの出ない思考の渦の中に飲み込まれそうになり、アインは深く息を吸い、ゆつくりと吐き出す。

「……考えても仕方がないか」

ぐるぐると渦を巻いていた思考が切り替えられ、集まった欠片を一旦脳内に保管するに止める。それを組み立てるのは、もつと情報を集めてからだ。

この先現れないに越したことはない、もしかた現れても、その時はまたなのはとユーノ、フェイトを離脱させて仕留めるだけ。頭を使うのは得意ではないゆえに、
「彼女」の丸投げするのが最善であろう。

そこまで考えて、今後のことを考えてアインは憂鬱になる。

「……さて、ユーノにはああ言っておいたが、どうしたものか」

手を抜くつもりはない。親友に誓った以上、少女たちは自分が必ず守り抜く。何があろうとも、この手の中の剣で向かってくる障害も敵もすべて薙ぎ払っていく。

しかしそのために立ちほだかつてくるであろう問題のことを考え、アインは頭を抱えてため息をついた。

「また始末書に埋もれるんだらうな………ハア、憂鬱だ」
疲れ切ったサラリーマンのように、アインは情けないため息をつくのだった。

5. 少女の覚悟

(……………負けちゃった)

旅館の廊下をトボトボと、暗い表情のなのが歩く。

ユーノに見せていた元気な表情は鳴りを潜め、自分の不手際を責め続けるネガティブな思考のループに陥っていた。

(……………あんなに練習したのに、あんなに頑張ったのに、……………何もできなかった)

アインには厳しい口調で焚きつけられたが、それでも根本的な部分はずぐには改善されない。失敗の原因を全て己の中にあるものと考え、チクチクと際限なく自分の心を責め続けるばかり。

(アインさん、がっかりしちゃったかな……………いっぱい迷惑かけちゃったのに、何の役にも立てなくて)

もう一人の師匠とも言える彼女に落胆されてしまったら、今度こそ立ち直れない気がする。休暇と言っていた彼女の時間を割いてまで、魔法の練習に付き合ってもらったというのに、この結果では顔も見られない。

そのうち、抱えている様々な問題が大きくなっていき、まともに考えることもできな

いようになつていく。

自分はどうすればいいのだろう。あの少女とどうしたいのか、アインに何を返せばいいのか、これから一体何をすればいいのか、そもそも自分はなに悩んでいるのか。思考を繰り返すうちに原点までわからなくなり、司会や足元までおぼつかなくなりそうになつていく。

ぐるぐると考え続けていたなのはいつしか、夕方家族と一緒に入った風呂場の前にまでたどり着いていた。

考えてみれば、先ほど浴衣のまま走ったせいで汚れているし、短かったとはいえ戦闘によつて汗まみれになつている。気分を変えるといふよりも、この心の重りを洗い流したい気分になつていた。

「……お風呂、入つてから寝よう」

少し時間は遅いが、まだ入っている人はいるのだろう。明かりが見えている。

母や姉たちには悪いが、先にもう一度浸からせてもらおうと脱衣所に入る。並べられた籠の中にノロノロと脱いだ浴衣をしまい、一糸纏わぬ姿になつてからレイジングハートを浴衣の上に置く。先ほどのことがあつて少し不安ではあつたが、今は誰とも話したくはなかつたし、一人になりたかつた。

カララ、と扉を開き、まずは汚れを落とそうと洗い場に向かい、ヒノキの椅子に座る。

蛇口から桶に溜め込んだお湯をかぶると、少しだけ悶々とした感情から抜け出し、一息つくことができた。

だがふと、妙なことに気づく。桶から流した水音が、どこからか重なつて聞こえた気がしたのだ。それも隣から。

そう思い、音のした方を振り向いてみれば、見覚えのある赤い瞳と目があった。

先ほど、なのはが一方的にやられたばかりの少女・フェイトの姿がそこにはあった。

「……!?」

「……!!?」

一瞬だけ、なのはとフェイトは呆けたように見つめ合い、すぐさま目を見開いたまま立ち上がって身構えてしまう。バリアジャケットの印象や、おろした髪のせいで気づくのが遅れてしまったが、交わし合った目が彼女らに瞬時に気づかせた。

自分たちがタオルも何も身につけていない、完全に生まれたままの姿であることも忘れ、相手の一挙一動にまで警戒する状況に陥っていた。

(な、何でこの子がここに!?)

なのはもフェイトも同じことを思いながら、油断なく相手を凝視し続ける。だが、次第に冷静になってきたのか、まじまじと相手を注視している恥ずかしさに頬を赤らめ始めた。

なのはフェイトの、年代とは思えないふくらみとしなやかさを持つ肢体を、フェイトはなのはの均整のとれたすべすべとした肌をやってしまう。自分が持つていないもの、羨むものを宿している綺麗な体をつい凝視してしまい、赤面しながらも目をそらすことができなかつた。

互いが互いを警戒したまま硬直し、微塵も動くことができない状況。

そこへ、緊迫感を断ち切る厳しい声が響き渡つた。

「今すぐにその殺気を納めろ」

わずかな怒りが込められたその声に、なのはとフェイトはビクツと肩を震わせて首をすくめる。交わっていた二人の視線が外れ、硬直が溶けた二人は恐る恐るといった様子で声のした方を振り向いていく。

「ここは心身の疲れを祓う場所だ。無粋な真似をするようなら、そのままお前たちを外に放り出すぞ」

月光を反射する湯船、その中に一人音も立てずに浸っていた人影が、若干の不機嫌さを感じさせる低い声でなのはとフェイトに言い放つ。

「……………!!? アイ、ン?」

「こんな時間に入浴か?」

気だるげに振り返つたアインが、血の色を思わせる瞳で二人をジロリと詰る。

穏やかなアインから感じる、弱めながらもはつきりとした怒気に二人は縮こまり、居心地悪そうに視線をそらす。

二人から互いへの警戒心が薄れたのを悟ったのか、アインは怒気を散らして再び湯に浸かった。湯船の縁に腕を預けると、芯から温まるように身を沈めていった。

「まあ、来たからには入れ。そのために来たんだろう」

「あ……えつと」

「……でも、私は」

「いいから二人とも入れ。風邪をひくぞ」

アインに厳しい口調でそう言われて渋々、しかし互いに警戒したままなのはとフェイトはアインの方に近づいていき、湯気の立つ温泉に足を浸す。

しかしゆつくりと肩まで入った瞬間、なのはの目は緩々に蕩け、フェイトの眉間のしわは綺麗さっぱり消え去った。体の髓まで染み渡る温もりと心地よさにより、殺気も緊張感も粉微塵に消し飛び、少女たちの表情はこれ以上ないほどに惚けきっていた。

「……はうう」

「……んんう」

脳髓にも温もりが届いたのか、言語機能まで蕩けきって意味をなしていない。

上気して赤らんだ顔は快感に潤い、漏れ出す声は年不相応に色っぽい雰囲気醸し出

す。風呂の魔力は世界をも超えるようだった。

「今だけはいがみ合いはなしだ。大人しく浸かっておけ」

アインの声も、いつもより緩い気がする。戦うときは鬼のように恐ろしいこの人も、こんな風になるのかと二人は思っていた。

だがふと、気になっていたアインのあるものに目をやっていた。

服の上からでもわかるほど巨大な、湯の上に浮かんでしまっているアインの胸元の膨らみ。同性としては非常に羨ましく、風船のようにパンパンに張り詰め、濡れて艶やかな潤いを放っているその乳房には、深く長く刻まれた裂傷の痕があった。

乳房だけではない。普段は服の下に隠れている肌には、おびただしい数の傷跡があちこちに刻まれていた。

比較的広い肩に、湯の中に沈んでいるカモシカのように長くしなやかな脚に、白磁の彫刻のように白い腕に、うっすらと腹筋の浮いている腹部に。裂傷だけではない、銃創や刺創、咬傷に熱傷まで様々な傷跡が、アインの肌に刻み付けられていた。

衣服の上からでは全く見当たらなかった凄まじい姿に、言葉を失った二人はそれを凝視してしまふ。しばらくして、そんななのは達の視線に気づいたらしいアインが、わずかに目を伏せた。

「気になるか」

「……その、傷は」

「……これがあから、私は肌を晒したくないと言ったんだ」

「(づ)、ごめんなさい」

「気にするな……むしろ今後忘れてくれるとありがたい」

アインはそう言つて、自分の体の傷を――特に、胸の中心に袈裟懸けに刻まれた傷跡を撫でる。しかしそれは自分の過去を痛むものではなく、道具についた傷を見てそれがついた過去を思い出しているような、そんな触れ方であった。

「任務の賜物さ。……この業界には長くいるからな」

「……辛くは、ないの？」

「……ああ、そうだな。そんなに大したものじゃない」

そうは言うが、アインの声に悲痛さはない。自分の身体のことなのにどこか他人事のような、乾いた印象を持たせる穏やかな声だ。

普通の女性なら見せることを忌避するだろう傷だらけの身体を、大したものではないように見下ろしている目の前の女性に、なのは返す言葉が見つからない。

普段からあまり肌を見せない格好ばかりしていると思つたが、まさかこんなにも痛ましいものを隠していたとは。隠すようなそんなそぶりも、気にしているような様子も見せたことがなかったために想像もつかなかった。

(……………どうして、この人がこんな目に合っているの？　なんで……………そこまで頑張れるの？)

息を飲むほどに美しい人なのに、その下に引きずっているのは数々の悪意を受け止めてきた、死を目前に生きてきた者の身体。凶刃に脅かされながら、それでも戦うことを選んで歩き続けてきた戦士の証がそこにはある。

何がこの人を、その道へを向かわせたのか。

(……………私は)

なのはがジュエルシードに関わろうと思ったのは、困っているユーノを助けたいという正義感から。また、無力な自分でも何かできることがあるのではないかという期待から、魔法の力を手に取った。

これまで、なのはも何度か戦いを経験はした。だがそれらは全てアインやユーノに助けられて乗り越えられたものであり、命の危機にまで及ぶものではなかった。その勝利も助力と助言によって得た結果という印象が大きいものであった。

それでもなのはは、自分がだれかの役に立ったと、誰かの悲しむ顔を見ずに済んだと喜ぶことができていた。だが、この女性は違った。

(……………この人はこんなにも悲しい顔をするんだろう)

なのはを救っても、ユーノを助けても、怪物を倒しても、彼女はその顔の一切の表情

を表すことはなかった。喜びも安堵も、悔しさすらも表すことなく淡々と剣を握り続けるだけだった。

まるでそれだけが自分のなすべきことだともいうように、厄災の現れる場所に自ら赴く。何かに縛られているかのように。

「……私はもうあがるよ。君達ものぼせないうちに出なさい。……今度は喧嘩しないようにな」

アインはそう言い残し、二人と目を合わせないようにして湯船から立ち上がる。何も返す言葉の出ないのはとフェイトを置いて、肌から雫を垂らしながら歩き去って行ってしまった。

間に入ってくれていた者がいなくなつて、訪れたのは痛いほどの沈黙。かたやいきなり攻撃されて困惑したまま、かたや最初から敵意を持つて挑みかかり、良好とは言えない邂逅を果たした二人の間に、会話が生まれるはずがなかった。

何しろ、この二人でまともに自己紹介をしたこともないのだから。

「……あの」

なのはが話しかけようと口を開いても、フェイトは鋭い目で睨みつけるだけで声も帰つてこない。完全になのはを敵と判断しているようで、無用な接触を避けようと距離を保つたまま警戒を深めていた。

好意が全く通用しておらず、内心で涙目になったのはよよと後退する。

こんなにも分厚く心に壁を作る相手は初めてで、どう話しかけるべきか全くわからなかった。

(……………どうしよう)

「……………何を話しても、無駄」

悩んでいるなのはに、不意にフェイトが固い口調で語りかけた。

声を発してくれたことに若干喜びを感じるが、フェイトの向ける視線は相変わらず厳しい。馴れ合うつもりはない、といった感情がありありと見て取れる、そんな態度のままであった。

「あなたに教えることも、伝えることもない。あの人に言ったように、邪魔をするなら今度は容赦をしない。……………今度は、手加減できない」

「そんな……………」

「じゃあね」

まだ納得できないのは置いて、フェイトは湯から立ち上がった。

行ってしまう何か言わねば、そう思つて口を開いかけたのはだったが、不意に視界に入った赤い筋に目を見開く。

湯によって上気し、赤くなった艶やかな肌。同性でも見惚れそうなほど均整のとれた

美しい彼女の肢体には、無数の傷跡があった。

アインのように深く常に残るものではない、体温が上昇した時や何かのきっかけで現れるという、小さく薄い傷跡だった。見ているだけで痛々しいそれが、彼女の身体中のいたるところに見えた。

(この子も……何かを抱えてる)

かける言葉を失ったのは湯から立ち上がったまま、脱衣所に向かつて歩き出したフェイトを見送る。

フェイトはそれに一瞥もくれず、まるでなのはとの会話などなかったように一人歩き去って行ってしまった。

置き去りにされたなのは小さくなつていく背中を見つめたまま、襲いかかる肌寒さなど気づかずに立ち尽くしていたのだった。

◆ ◇ ♥ ♡ ◆

淡い朝日が照らす、旅館の駐車場。

昨晚の異変のことは結界のおかげか誰も知らずにいたようで、穏やかなものであった。

変わったことといえば、客の一组が代金だけを置いてどこかへ姿を消したことくらいで、他の客たちにはあまり関係がないことであつた。若い男女の二人組で、それを追っ

た黒服の集団がいたとかという話であったが、話していた者も大した興味を抱いていないようだ。

休日を堪能した高町家と月村家、そしてアリサ・バニングスは荷物を車に積み込みながら、旅行の感想を語り合っていた。

「楽しかったね!」

「そうね! いいリフレッシュになったわね。パパもママも来られれば良かったのに……本当に残念だわ」

「仕方がないよ。お仕事が外せなかったんだから」

両親との予定が合わず、一人だけの参加となってしまったアリサのぼやきに美由紀が返す。娘を本当に大切にしている夫婦ならば、きっと今頃悔しがっているだろうと、少女たちは少し意地悪に笑っていた。

荷物を積み終えた士郎が、自分も身の回りを確認しながら少女たちの方を向いた。

「みんな、忘れ物はないかい?」

「大丈夫です! ね、すずか、なのは」

「うん!」

「大丈夫……」

旅行の余韻で興奮している友人とは違い、一人だけ浮かない顔をしていたのはは

ハツとなり、悟らせないように笑顔を取り繕って答えようとする。

その時、ふと思いついたかのように目を見開き、辺りをキョロキョロと見渡し始めた。「? どうしたのよ」

「あ……ごめんね。ちよつとだけ待ってて」

「忘れ物かい?」

「う、うん……ごめんなさい。すぐに戻るね」

訝しげなアリサや恭也の視線を背に受けながら、なのはは先ほど視界に入った者の元へと走り出した。

駐車場の、高町家の用意した車とは別の車の陰。彼らから隠れるように停められていた、見覚えのある青いバイクの元に向かったなのはは、自分も士郎たちに見えないように気をつけながらその人物に話しかけた。

「あ、あの……アインさん」

少ない荷物を荷台にくくりつけていたアインは、背後からかけられた声にちらりと視線を向ける。

なのはは、昨晚の記憶からかどこかためらいがちにアインを見つめていて、アインは余計なものを見せたかと言うように目をそらした。

「……なのはか。まだ戻っていなかったのか」

「はい。……なるべく早く話をしておきたいなって思つて」

「そうか……なら、なるべく手短かに話そう。ユーノは？」

「(ト)にいます」

なのはの肩の上に、ユーノがひよつこりと顔を見せる。なのはが驚いているところを見るに、いつのまにかついてきていたらしい。

秘密を共有する三人が集ったところで、アインは士郎たちの方を探るように視線を向けてから、なのはたちに向き直った。腕を組み、若干眉間にしわを寄せて二人を見下ろした。

「……さて、思っていたより厄介な事情のようだな」

アインの言葉に、なのはもユーノも視線を落とす。

思い出されるのは、金色の少女との戦闘の結果、そして乱入してきた異形への対処。どちらも惨敗というべき結果に、なのはもユーノも表情を暗くさせる。

異世界の魔法技術が流入してしまったことだけでも問題だというのに、それを狙って第三者が介入してきてしまったのだ。早急に対応を取らねば、遠くないうちに泥沼に陥る可能性もあった。

この場に先に少女と邂逅している騎士がいるが、特に言うつもりはないようであった。

「……私、負けちゃいました」

「ああ……あれは向こうが一枚上手だった。それに加えて、君の経験不足が響いたといえよう」

「僕も、手も足も出ませんでした」

「ああ。天晴れとしか言いようがない」

ユーノは出遅れ、なのははただ翻弄されてしまい、ジュエルシードは封印すらできずに奪取されてしまった。

なのはも魔法に出会ったばかりだと言うのに異様な成長を遂げてはいるが、かの少女の方がその数倍の実力を有していた。今回の敗北は、当然といえば当然の結末だったのだろう。

加えてユーノには今回の一件について、看過できないことがあった。

「……あの、アインさんは、あの怪物のことを知って……う？」

「……………」

ユーノは思い出す。暗闇の中から突如として姿を現した、刺々しい鎧をまとった異形たちの姿を。

地球にいる生物とは思えない、明らかに異常な生命体の登場はユーノにとっては見過ごせない問題であった。

特に異形たちが現れた時のアインの反応は、ユーノには忘れられなかった。なのはが気を失っている間に彼女が奴らを目にした時、彼女はまるであり得ないものを見るような狼狽を見せていたのだから。

初めて見たものに対する反応ではない、明らかに過去に奴らと相對したことがあるのだ。そして、それらが現れるはずがないと、確信していたのだ。

アインはユーノの疑わしげな視線に気づき、目を閉じて息を吐く。

「あれに関して、君たちに語れることはあまりない。知ってはいるが、あれが私の知っている存在と同一のものかと聞かれると、自信がない」

「あの怪物たちも……今回の一件に関わるものなんでしょうか。明らかにジュエルシードを狙っていたような」

「私にもわからない。……だが、確かに言えることといえば、あれの相手は私にしかでないということだ」

ユーノが気にしているのは、奴らが何者でどんな目的があるのかということ。まさか奴らもジュエルシードを狙っているのだとすれば、後々激突することは目に見えていて厄介な状況になるだろう。

しかしアインは詳しくは答えずはぐらかし、異論を認めないというように鋭い視線をユーノに向けて告げた。

「あれに挑もうとは思うな。あれはジュエルシードよりも厄介で危険な存在だと思え……人間の手に負えるものではない」

「それって、どういう……」

前触れもなく人間に襲いかかろうとしていた異形たちの獰猛性や不死性を思い出しながら、ユーノはアインの発言に違和感を感じる。

人間の手に負えるものではないと言いつつながら、目の前の騎士は確かに異形たちを屠っていたのではないか。それなのにそのようなことを言うということは、それではまるで自分が人間ではないと言っているかのような。

しかしアインは詮索を許さぬように目を細めてユーノをにらみ、なのはに視線を戻した。

「さて、どうする？ 彼女らとの実力の差は歴然だ。このまま泣き寝入りするのなら私は止めんよ」

「アインさん……」

「ユーノには悪いが、前にも言ったように仕事で来ているわけではないからな。君が諦めるなら、私も無理には動こうとは思わんよ」

それは、最初に出会った時に二人に言い聞かせたことであった。

現状、ジュエルシードが人間に多大な危害を加える危険性がない以上、アインはデバ

イスを使えない。少女の目的や危険性が不明な以上、アインが相手をすることはできず、必然的になのはが対処せねばならないのだ。

少女に一方的に下され、敗北を味わってしまった少女に再戦を強制するのは酷であることはわかっている。ゆえにアインは、もう一度立ち上がるか引くかを自ら選ばせるつもりであった。

敗北の、傷つくことへの恐怖を一度味わってしまった者が心を折られる姿を、アインは何度も見てきた。もしなのはがそうなら、自分がその痛みを全て背負ってことに当たらう、そう考えていたが。

「……私、あの子ともう一度話がしたい」

なのはの答えに、アインは苦悶するように眉を寄せる。

なのはの表情は、折れてはいなかった。それどころか以前よりも硬い意志の火が目に見え、しっかりと前を見つめているように見えた。

「……何を話したいんだ？」

「あの子がなんて言うお名前なのか。なんでジュエルシードを集めてるのか。……なんで、あんなに悲しい目をしているのか」

まっすぐに見つめてくるなのはに、アインはじつと鋭い視線を向ける。

最初の彼女は、自分の中の正義感や倫理観に引きずられているだけの不安定な者だっ

た。自分の意思と倫理の境界線が曖昧になり、正義の味方になることよつていふような、そんな状態であつた。

だが今は違う。順調だつた流れを断ち切れ、自分を突き動かしていたものに疑問を抱き、改めて自分の意思を理解し始めたしつかりとしたもの。自分の本当の意思を理解し始めた者の、強い眼差しが彼女からは感じられた。

「……いいんじゃないか？ 君らしくて」

しばらくして、アインは引いた。

なのはの目を見ればわかる。これは絶対に引かない者の目だ。

「君の目を見るに、あの子に会いたいのはそのだけじゃないんだらう？」

アインは悟る。今のなのは、自分がかつて通つてきた道で浮かべていた眼と同じ輝きを放っている。

「……悔しかったんだな。あの子に負けて」

「ツ……！」

なのははぐつと息を飲み、眉間にしわを寄せて俯いた。キュツと締まる唇が、ギリギリと握りしめられる拳が、彼女の本心をありありと表している。

「あの子にもう一度挑戦したい。そして……勝ちたい。そう思っているんだな？」

なのはしばらく黙り込んでいたが、ややあつてからアインの目を見つめ返した。以

前よりも熱い、強いまなざしとともに。

「私……もつと強くなります。あの子に負けなくらい……ううん。勝ちたい！」

「……………」

本当に悔しかったのだろう。負けたこと自体もそうだが、さらに言えば相手にされなかったことが。

手も足も出せずに翻弄され、対話にも応じてもらえなかったことが記憶に焼き付いている。自分が取るに足らない存在としてあしらわれ、障害にもなり得ないと判断されたことが認められないのだろう。

それは、戦う者が誰しも通って行く道であった。

「アインさん、私は、上手な戦い方を知りません。この力の上手な使い方を知りません。……だから、教えてください」

なのはの真摯な態度に、アインは目を伏せて考え込む。

できれば、先に挙げた選択肢の時に引くことを選んで欲しかった。

なのはのこの調子なら、以前よりもさらに早く大きく成長するだろう。再戦し勝利したいと言う無尽蔵のエネルギーがあるのなら、肉体は絶えず動き続けられることである。

だが体は別だ。心がどんなに奮つていようとことを成すのは肉体の方、しかもものは

は幼い少女だ。魔法の腕をあげるためであろうが、戦闘経験を積み重ねるためであろうと、いずれ未完成な少女の体は悲鳴を上げてしまうのではないか、そんな懸念があった。だが、今のなのはにそれを伝えたとして、説得できる自信はアインにはなかった。完全に覚悟を決め、少女に再び挑もうと言う気迫に満ちているのだから。

「……わかった」

しばらくして、アインは頷く。

なのはが笑顔を浮かべるのに鋭い眼を送ってから、呆れたようにため息をついた。

「戻ったら、いつもと同じ公園で落ち合おう。私を学んできたものをできるだけ君に預けよう。と言っても、私が教えられるのは戦術だけで、技術はユーノに頼りつきりになっってしまうがな」

「それでもいいです。私……大事な時に力不足に陥って、何もできないなんて嫌です」

「だが無茶はする……」

「よろしくお願いしますね！ アイ……先生！」

アインが最も大事なことを言い切る前に、なのはは言質を取ったというように満面の笑みを浮かべ、アインに背を向けて走り去って行く。あまり長居して士郎たちに心配をかけまいとするための駆け足は、喜びのためかどこか浮き足立っていた。

アインはなのはの姿が見えなくなってから、嘆くように顔を手で覆って天を仰ぐ。

「……参つたなあ。あんなにまつすぐに言われてしまったら、断れないじゃないか」
アインは今更ながら、なのはに対して甘すぎる自分に気づく。

最初は贖罪のつもりで、なのはのことが心配で付き随うことを選んだつもりだったが、そばにいればいるほどその思いが強くなる。

なのはを争いや荒事から遠ざけるつもりでこの世界に來たのに、理不尽に巻き込まれる彼女は自分から立ち向かうようになってしまった。守るために存在している騎士が聞いてあきれれる話だ。

と言うか何が先生だ。即座に否定しろ、と思わず呟いてしまう。

(……すまん、恭也。私には、止められなかった)

少年とのかつての誓いを思い出し、自分が情けなくなる。彼との誓いの内容とは全く真逆の結末になりそうで、彼が激昂する姿が目に見えかぶようであった。

限りなく現実になりそうな未来を思い浮かべ、アインはがつくりとうなだれる。

しばらく唸っていたアインはため息をつき、車の陰から向こう側を覗き込む。

それぞれ乗ってきた車に乗りこんだなのは達が、次々に旅立つ姿を見送りながら、アインは今一度胸の中心に拳を当てて、姿の見えない青年に誓う。

(だからせめて、お前の妹は私が命がけで守るよ)

避けられぬ戦いを前にして、巻き込まずにはいられなかった。なのはに対して甘い自

分には、これはもはや取り消すことはできまい。

だからせめて、なのはが傷つくような未来を覆せるよう、改めて誓うことしかできなかった。

6. お人好し

「広域サーチ、第四区終了……っと。なかなか上手くないもんだねえ」

温泉地での騒動があった夜から少しして。

ビルの間の空間にて、人気のなくなつた公園のベンチに座り、目の前に広がっている光のスクリーンに目を通す狼の耳と尾を持つ女性、使い魔のアルフの姿があつた。

周囲にいくつもの光のモニターを浮かばせた橙色の髪の子、アルフが狼の耳をピクピクと動かしながらかつぶやき、眉間にしわを寄せて唸る。

街のいたる場所が映し出されたそれは、ジュエルシードの反応を探るためのセンサーである。個人で魔法も発動していないジュエルシードを探すには、地道に一箇所ずつ探す他にないのだ。

「アルフ……お疲れ様」

「フエイト♪」

別のモニターが映し出され、顔を出してくれた主人にアルフは笑顔を浮かべ、パタパタと尻尾を振る。

「少し邪魔が入ったけど……大丈夫だったよ。夜遅くまでごめんね、そっちはどう？」

「ごめん。まだ一つも見つかってないんだ。あ、でも今夜中にはこの辺一帯はサーチできると思うよ」

「ありがとう……私もまだ成果はないんだ」

「……あのバケモンだね？」

アルフが聞くと、フェイトは深刻な表情でうなづく。

以前温泉地に現れたという無数の異形の群れ。あの時点だけではなく、その後にも現れては封印を終えたフェイトを狙ってきたのだという。

同じ姿をした怪物が無数に迫ってくる様は、まるで前回の生き残りか、また同じ個体が蘇ってきたかのように見えたものだった。異様な光景であることは確かだった。

「なんなんだろうねえ、あの連中は。攻撃もまともに効かないから逃げるしかないし、数も多いししつこいから逃げるのにも一苦労だし……聞いてないよ」

「原生生物……とは思えない。あんな危険な存在がいるのに、この世界の人たちが知ってる様子はないし」

あれほど危険な存在が知られているのなら、もつとそれに対応する措置が取られていくはずである。なのにそれがなされていないということは、あの怪物はこの世界の人間にとって全くの例外の存在であるということである。

フェイトは画面越しに、不安げな表情のアルフに申し訳なさそうな眼差しを向けた。

「ごめんね、アルフ。いつもそっちに迷惑かけちゃって……本当なら、わたし一人でも」
「あたしは、フェイトが行くところに何処へでもついて行くだけだよ」

使い魔の、家族の優しさに目が潤む。正直に言っただけでかなり危険な綱渡りをさせていることに、ひどく罪悪感を感じていたのだ。使い魔といえど、もう逃げたいと言われても仕方のないことだとも。

それを選ばないというアルフに、フェイトは感謝しても仕切れなかった。

「……ありがとう、アルフ」

フェイトの胸の内に、また炎が猛る。予想外の事態に不安が足を搦め捕りそうになるが、引きちぎって進んでいける。

そう思ったフェイトが、アルフとの通信を切ろうとした時だった。

「よう、精が出るな」

聞こえてきた声に、フェイトとアルフはびくりと肩を震わせて凍りつく。

いつの間に、どこから、そんな疑問が湧き上がるよりも早くアルフが振り向き、魔力で伸ばした鋭い爪の切っ先を向けて構える。瞳孔が縦に裂け、髪と尾の毛を逆立たせて牙を剥く。

「……」

フェイトもまた、画面越しに映る金髪の女性の姿に目を瞠る。以前二人掛かりで相対

し、手も足も出せずに無力化させられた女騎士の姿を目にし、緊張で背筋に寒気が走るのを感じた。

二人の視線を受けるアインは気だるげな表情のまま、脱力した体勢のまま佇んでいる。一見すると隙だらけに見えるが、以前の結果を体が覚えていて、不用意に手を出せば返り討ちになると確信していた。

「ま、まさか……!!??」

「あんた……!!??」

アインは震える声を漏らす二人に向かって歩き出し、ジツと視線を固定している。アルフはその場に縫い付けられたかのように動くことができず、思わずその場にはいないフェイトのモニターの前に立ちふさがっていた。

「……フェイト、来ちゃダメだ!!?? 今すぐ逃げるんだよ!!?? アイツが……アイツがとうとうここを嗅ぎつけやがった!!??」

アインの異常なほどの強さを目の当たりにしているアルフが自ら殿となることを選ぶ。使い魔としては当たり前で、高潔とも言える選択ではあったが、アルフをただの使い魔ではなく家族として大切にしているフェイトには聞き捨てならない言葉だった。

「あたしが時間を稼ぐ、早く!!??」

「そ、そんなことできるわけない!!??」

首を振るフェイトだが、アルフは近づいていくアインを見据えたまま動こうとはしない。同時にフェイトを写していたモニターが「SOUND ONLY」の画面に切り替わり、周囲の景色と一緒に映らなくなってしまう。主人の居場所を特定させないためのアルフの処置のようだった。

その直後、身構えていたアルフの手首が掴まれ、異様な臂力で押さえつけられる。抵抗しようにも、押すことも引くことも許されないほどの力で空中に固定されてしまい、アルフは歯を食いしばって眉間にしわを寄せた。

「おい。いきなりそんなふうに身構えんでもいいだろう」

「んなつり!? クソツ、なんて馬鹿力だよアンタ!!?」

「失敬な。……まあそう言われても仕方がないが」

掴んでいる手を引き剥がそうとするアルフに、アインは呆れた目を向けて嘆息する。

アルフはなおも高速を外そうともがきながら、顔の見えなくなつた主人に声を張り上げる。

「フェイト、たのむ行つとくれ!!? あたしがコイツを押さえておくから!!?」

「だ、ダメ……そんなことでできない!!?」

フェイトは懇願するように叫ぶが、アルフはまともに返事を返すことなく通信を切ってしまう。

向こうの状況が全く分からなくなってしまうたフェイトは焦り、肩を震わせながら後ずさった。

カタカタと奥歯がなり、最悪の想像が脳内を埋め尽くしていく。

以前ぶつかった時は、よく分からない気まぐれで見逃された。だが今回は向こうから向かってきたため、圧倒的な実力差がある彼女からアルフが逃げ切れるとは思えない。

アルフが捕らえられ、二度と会えなくなるかもしれない。そんな想像が湧き上がっていた。

(そんな……そんなこと絶対ヤダ……!!?)

迷うことなくフェイトは飛行魔法を行使し、アルフのいる場所に向かって全力で飛び立った。隠密など頭の中から抜け落ち、人目など気にすることなく街の上を飛ぶ。

フェイトの脳内は、アルフを救い出すことだけでいっぱいになっていた。

思考を飛行に全て振り切ったためか、いつもよりも早く風邪をきることができ、アルフのいるエリアへとたどり着くことができた。上空に一旦留まったフェイトは、使い魔との繋がりを使得って居場所を探す。

そして、一角にある公園の中央にその存在を捉えた。

「アルフ!!?」

すぐさま急降下し、囚われの身となっているアルフの元へと向かった。が。

「まあまあ。そんなに荒ぶるな」

「いだけだだだだだだ!?」

そこにあつたのは、相変わらざる気だるげな表情でため息を漏らすアインと、アインに蛇のように絡みつかれて苦悶の表情と声を漏らしているアルフの姿だった。それがコブラツイストと呼ばれるプロレスの技であることを、フェイトは知らなかった。

「……え、えつと?」

苦しそうではあるが、命の危機ではなさそうなアルフの切羽詰まった表情とうんざりした顔のアインに、フェイトは先ほどまでの焦燥も忘れて呆けてしまう。これは、一体どういう状況なのだろうか。

すると、フェイトが来たことに気づいたアインが顔を上げて口を開いた。

「よお、フェイト。顔色悪いな、ちゃんと食事を摂っていないだろう。ダメだぞ」

「痛い痛い離しなよ!!?」

「そう思うならまずこっちに噛みつきょうとするな」

ガチガチとかを噛み合わせているアルフの顔を押しさえつけるアインに、フェイトは肩から力が抜けるのを感じた。色々といやな想像をしてしまったが、取り越し苦労だったようだ。

「とりあえず私に交戦の意思は……だからやめれ」

「あうっ!?？」

あまりにもしつこく嘯み付こうとするアルフの頭をはたき、その辺にぼいっと捨てるアイン。なぜだか扱いが以前よりもおぎなりに感じた。

解放されたアルフはすぐさまフェイトの元に駆け寄り、涙目で彼女にすがりついた。

「クツソオ……ゴメン、ゴメンよフェイト……!」

「アルフ……無事でよかった」

使い魔として主人を守れなかったことに、アルフは悔しさから涙を流す。反対にフェイトは家族に怪我がなかったことに安堵の表情を浮かべ、次いで危害を加えようとしていたアインをキツと鋭い目で睨みつけた。

しかしアインは困ったような顔でぼりぼりと頬をかき、呆れたようなため息をつく。もとより手を出すつもりはなかったのに、アルフがあまりにも敵意満々で向かってくるから軽く拘束してただけだというのに、と。

「私は悪魔か何かか? さつきから悲鳴をあげるやらお涙頂戴の芝居を繰り広げるやらなんなんだ一体」

射抜くようなフェイトの目を機にすることなく、アインはスタスタと軽い足取りで二人の方に近寄っていく。

後ずさつて距離を稼ごうとする二人の前に、背中側に回した手で取り出したモノを突き出した。

「人がせつかく飯を持って来てやったのに」

「……は？」

目の前に差し出されている布袋に、フェイトトアルフは間抜けな声と見開いた目を向ける。飾り気のない巾着袋の中には箱らしきものの影が見え、狼の嗅覚を持つアルフには僅かながらも食べ物の匂いを感じ取った。

「あ、アンタ。あたしたちを捕まえにきたんじゃないのかい？」

「そんな真似、この間とつくにできただろう。何より休暇中にまでそんな荒事をするつもりはない」

過剰なほどに警戒しているフェイトとアルフに嘆息するが、なのはとユーノの手伝いをしていいる自分は確かに敵か、と思い直して視線を逸らした。任務中にそのような輩にあつたなら確かに警戒する、絶対に信用しないだろう。

恐る恐る巾着袋を受け取ったアルフは、慎重に袋の口を開ける。中に入っていた地味な金属製のケースからは、さつきよりも強く食べ物の匂いがした。それもかなりいいいだ。

「本当に弁当だよ……ていうかどうかやってここを探り当てたんだい？」

「魔力を追った。以上」

「……………ハナから逃げ場所なんてなかったってことか」

なんといいことはない、とでもいうように告げたアインに頬を引きつらせるアルフ。自分の鼻よりも感度の高い五感を持っているアインに、自信が砕かれる気がした。

ようやく力の入っていた肩から気が抜け、フェイトとアルフから警戒心が薄れる。なんといいか、この女を相手に気を張ることが馬鹿らしく思えてくるから不思議であった。

「……………アンタ、お人好しにもほどがあるだろ。なんの得があるってんだい？」

「なに、ただの自己満足さ」

アインはそこらの段差に腰掛け、気だるげに首を鳴らすと二人を見つめる。

視線を向けられているフェイトとアルフも目を合わせ、少しだけアインと距離をあけてから腰を下ろす。なんとなく、彼女の好意を無下にする気にはなれなかった。

「君のような子らを見ているとね、どうしても体が先に動いてしまうのさ。理屈じゃなくくてね」

「……………」

「ホラ、心配なら私が食うぞ。毒など心配しないようにな」

「……………別に、いい。」

手でくいくいと促すアインから弁当箱を遠のけ、二人で分けて蓋を開く。中身はハンバーグやポテトサラダといった、ちゃんとした手作りのおかずが詰められていて二人の腹がキュウとなった。冷凍食品ばかりの食生活であった二人には、初めて見るものであった。

付属していたフォークを使って、小さめに切られたハンバーグをひとくち口に入れてみれば、フェイトとアルフの表情がパアツと明るくなった。

「うまつ!?? 肉が少ないのとか野菜が少ないのとか色々言いたいけどそれはともかくうんまつ!??」

「本当だ……美味しい」

「アルフ、お前からもご主人様に言つてやれ。もつとちゃんと食わないとどんどん顔色が悪くつていゝるつて」

「……うん、それはいつも口を酸っぱくして言つてるつもり」

「うつ……アルフ」

アインが前々から気になっていたことを口にすれば、二人ともぼつの悪そうな顔でそっぽを向いた。ジュエルシードの搜索に集中するあまり、私生活が雑になっているという自覚は確かにあるのだろう。アルフはそれを指摘しながらも改善できていないことに、フェイトは心配をかけていることに。

このままでは余計なことになって口を挟まれてしまうと悪い、アルフは無理矢理話題を変えさせようと思考を巡らせた。

「……と、ところで、こんなのどこで習ったんだい？ アンタ、騎士だろ？」

「友人に叩き込まれた。ま、昔取った杵柄というやつだ」
「？」

「要するに昔の経験だ」

地球の言葉が伝わらなかったことに苦笑し、アインはすぐに言い直した。

「以前、難民キャンプで炊き出ししたりする機会があつてな。作っても作っても足りんもんだから自然と腕も上がった」

「ふうん。あんたも色々苦労してたんだねえ」

鬼神のような尋常ではない強さといい、そつなく料理もできることといい、それなりに経験を積んでいることはわかっていたアルフが感心したような声を漏らす。

アインはもぐもぐと無心で弁当をからにしていくフェイトを満足げに見下ろし、口元に笑みを浮かべる。

「自分のやるべきこと、やらねばならないことが大切なのはわかるが、そのためにはまず自分のことを大切にしろ。お前が倒れたら、悲しむ奴がいるんだからな」

アインの言葉に、手を止めて黙り込んでしまうフェイト。よく似た見た目といい、立

ち位置から見ても、今の二人の姿は母親と叱られる娘と見たように見えた。

そう思ったアルフは、自分でも気づかぬうちにつぶやいていた。

「……なんか、お母さんみたいなやつだね、アンタ」

「……………」

何気なく呟かれた言葉に、アインの表情が固まる。浮かべていた微笑が消え失せ、見開かれた目は虚ろになる。

雰囲気の変わったアインにアルフは訝しげな目を向けるが、表情の消えた顔からは何も伺うことはできなかつた。怒りも悲しみも、なんの感情も浮かんでない無の表情だつた。

「お母さん、か」

「……………」

「すまん。なんでもない」

訝しげに見つめてくるアルフにそう返し、アインは不意に立ち上がった。

「では、私はこれで失礼するぞ。弁当箱は……今度会った時でいい」

「ちよ、ちよつと待ちなよ！」

いきなり席を立ってしまったアインを呼び止めようとするアルフだったが、向けられたアインの背中を見てその声が止まる。立ち上がるうとしたフェイトも、アインの方を

見てハッと表情を変えた。

一瞬だけ見えた女騎士の横顔は、すべての感情が凍りついたかのように冷めきった冷たいものだった。先ほどまでフェイトに向けていたような、かろうじて残っていた慈愛の眼差しは、濁った目の奥に消え去ってしまったように見えた。

そのまま歩き去ろうとするアインだったが、ふと立ち止まってその場で口を開いた。

「……フェイト」

背を向けたまま、訝しげに首をかしげる少女に声をかける。

「……母親のことは、好きか？」

唐突な質問にフェイトは戸惑うが、答えに迷う必要などなかった。

自分の覚悟は、戦いは、すべてあの人のためにあるのだから。

「うん……大好きだよ」

「……そうか」

質問の意図も読み取れないうちに、それだけ聞いたアインはその場から無言で立ち去って行ってしまう。

以前はとて大きく、はるか高い壁のように見えていたアインの背中は、今はなぜか、弱々しく脆い枯れ木のように見えてしまっていた。

日が暮れ、夜になつてもなお喧騒の中にある都市の交差点にて、アインは一人たたずむ。

人混みの中にあろうとも、他の女性達よりも頭一つ背の高く、人間離れた容姿を持つアインは目立つ。時折チラチラと向けられる女性からの軽い嫉妬や羨望、あるいは男性からの紅色や劣情の眼差しを受け、アインの眉間にしわがよる。

いつもなら、そんな視線など全く気になどならない。だが今日はなんだか虫の居所が悪く、苛立ちが表情に出してしまうのが止められなかった。

「ねーママ、きょうのばんごはんなーに？」

「うーん、何にしようねー」

不意に、横断歩道を挟んだ向かい側から声が聞こえてくる。ベビーカーを押す若い母親と、その母に甘える幼い男の子が、信号が青に変わるまでの短い時間を待つて、楽しみに話していた。

「はいはい！　じゃあオムライスがいい！」

「えー？　一昨日もオムライスだったじゃない」

「だっておいしいんだもん。ねー？」

「んー♪」

非常にながら良さそうに、男児は弟妹らしきベビーカーの中の乳児に話しかける。意味

が伝わっているわけではないだろうが、乳児は話しかけられたことに嬉しそうに反応していた。

「そうねえ……ま、いっつか♪」

「やったー!」

「あうー!」

わずかに困った顔をしていた母親は、満面の笑みを浮かべて男児に頷く。要望がかなったことを喜ぶ男児が声をあげると、わかつてはいないだろうが乳児もまた同じく声をあげた。

微笑み合う母親と子供たちは、まさに理想の親子の姿。誰もが見ていただけで微笑ましくなるであろう美しい姿だ。

だが、アインはその姿を直視することができなかった。

「……………」

いつのまにか信号の色が変わり、歩き出した人々に押されるようにアインは歩き出す。親子も歩き始め、アインの方に向かうように進んでくる。

対岸にいた家族とアインは目と鼻の先までに近づき、すれ違い、背を向けて離れていく。親子はアインに全く注意を向けることはなく、自分たちの時間を過ごして歩き去っていく。

あつとうまに離れ、見えなくなっていく理想の家族の姿に、アインはなんとも言えない物悲しさを感じた気がした。

「……何を今更後悔している。お前が選んだ道だろう、アルデブランド」

誰にも聞こえない小さな声でそう呟きながら、アインは先ほどフェイトやアルフと交わした会話を思い出し、自己嫌悪に陥る。

お前に誰かを恨む資格などない。妬む資格などない。羨む資格などない。全て己の意思で選んだ道なのだから。

お前はフェイトとアルフに、何の関係もない子供達に勝手にかの者の虚像を、己の失ったものを当てはめてはめて心の隙間を埋めようとしているだけなのだ。とうの昔に失った許されぬ想いを勝手に抱き、押し付けようとしているだけなのだ。

何という、醜い存在か。唾棄すべき、質の悪い女か。

そう己自身を蔑み、憎み、嫌悪する。

「自己満足、か……私は、間違っているのか」

人の流れから離れ、誰もいない路地裏に入り込んだアインは呟く。

虚ろな目を空に向け、雲のない空に孤独に浮かぶ月を見上げる。光の強さによって周囲の星の輝きを塗りつぶしてしまい、ただ唯一のものと化してしまっている、哀れな光だ。

「なあ、ハジメー」
その声は、誰にも届かなかった。

第四章 蘇る紫紺の騎士

1. かけがえのないもの

「い——かげんにしなさいよっ!!?」

生徒たちが登校し始めたばかりの朝の教室に、たまりにたまつた怒りを弾けさせた少女の聲が響き渡つた。

誰もがびくつと肩を揺らし、声の主であるクラスの華の方を凝視する。多少氣の強い発言はたびたび耳にしたことはあるが、ここまで本気で怒つた彼女の声を聴いたことのある生徒はこのクラスにはいなかった。

しかしその怒号を真正面から受けた少女は、ただ驚いただけで、なぜそんな土器を受けているのか全く分からないというような様子だった。

「え、えつと……」

「ア、アリサちゃん……?」

言葉を失うのはのすぐそばで、アリサとともになのはに話しかけていたすずかも戸惑い、眉間にしわを寄せてなのはを睨みつけているアリサを躊躇いながら呼ぶ。

「えつとじゃないわよ!……」最近、何を話しても上の空でぼーっとして……!」

アリサの指摘になのははハツとする。

最近、例の少女に対抗できるようになるために魔法の練習量を増やし始めたのだが、夜は遅くまで、朝は兄たちが起きる少しあとぐらいにと時間を確保し、フラフラになるほどに練習を続けていた。そのせいで日中についつい意識が手元を離れるようになってしまっていたのだ。

ユーノやアインには止められていたが、自分がやりたいと決めたことだからと強行し疲労や寝不足が重なってしまっていた。

しかしそんな事情は知らないアリサは、友達にないがしろにされているような寂しさと悔しさを感じていたらしく、それが募り積もった結果爆発してしまっただけらしい。

「ご、ごめんねアリサちゃん」

「ごめんじゃない！ あたしたちと話してるのがそんなに退屈なら……一人でいくらでもぼーっとしてなさいよ!!?」

さすがにまずいと思ったなのはが謝ろうとするが、言い訳にしか聞こえないアリサは涙目でのなの前から歩き去っていく。おろおろと戸惑っているはずかを置いて、溢れ出る涙をぬぐいながら教室の外へ飛び出して行ってしまった。

「行くよ、すずか!」

「アリサちゃん……!」

呼ばれたすずかはどうしようかと迷うが、同じ思いを抱いていたのは確かなようでのとはアリサが走っていったほうを見比べる。

なのは伸ばしかけた手を下ろし、すずかを落ち着かせるために微笑を浮かべる。無理矢理感情を押し殺した、悲痛な笑みになってしまったが、この痛みは甘んじて受けなければいけない、と。

「なのはちゃん……」

「……ん、大丈夫。アリサちゃんのところに行つて。今のは、なのはが悪かったから」
「……少し、アリサちゃんと話してくるね」

なのはに促されたすずかは一瞬迷うも、なのはがうなずくときゆつと唇を引き絞つてうつむく。

そして迷いを振り払うように首を振ると、遠くなくなってしまったアリサを追つて自分も駆け足で教室を後にする。

「アリサちゃん、待つて……!」

ぱたぱたと遠くなくなっていく足音を聞き届け、なのはは自分の席に座りなおす。

すつかり静かになり、巻き添えを恐れて離れてしまったほかのクラスメイトの気まづげな視線に囲まれながら、なのはは小さなため息とともに肩を落とした。

「……………怒らせちゃったな、ごめんね、アリサちゃん……」

巻き込みたくないから黙って頑張っていたのに、それが原因で怒らせてしまった。

ジレンマに苛まれる少女は何か平静を保とうとするも、胸の痛みでゆがんだ表情は言うことを聞いてはくれなかった。

一度生じてしまった歪みは、なかなか治ることはない。

少女たちの仲もこじれたまま、そして話す機会を得られないままずっと放課後まで引きずってしまっていた。

「今日は塾はないし、おけいこの時間まで余裕あるけど……なのはちゃん、今日も駄目なんだよね？」

「あ……うん、ごめんね」

眉尻を下げた申し訳なさそうな表情でなのはは謝る。すずかは困ったように笑いながらも何も聞かずにいてくれたが、アリサはムツとした表情のまま視線をそらし、カバンを背負って歩き出してしまった。

「別にいいわよ……大事な用なんですよ？」

「……ごめん」

「謝るくらいなら事情くらい聞かせてほしいわよ」

「アリサちゃんってば……」

アリサのきつい言い方にすずかは呆れ、なのははより悲し気に表情を曇らせる。いつもは面と向かつて話をしていたのに、少し目を向けられただけであとはずつとそつぽを向いたままなのがなのはにはつらかった。

「……………ごめんね」

今にも泣きそうな声で紡がれた声に、アリサはぐつと何かを吐き出しそうになるのに耐える。怒りよりも、悔しさのほうが感情を占めているような、そんな苦しい顔なのはから隠すと、アリサはすずかの手を引いてさつさと歩きだしてしまった。ずんずんと過剰に力がこもった歩き方に、彼女の行き場を失った感情が現れていて余計に申し訳なく思う。

「じゃあね！ 行くわよ、すずか！」

「ごめんね、なのはちゃん……………また明日！」

「……………うん、すずかちゃん……………アリサちゃん。また明日」

別れの挨拶はあまりにか細く、ちゃんと届いたかどうか自信がなかった。

一人残されたなのはは無理やり笑みを取り繕うと、片づけたカバンを背負って自分も教室を後にする。

「……………喧嘩したのって、いつ以来だったかな」

それがいつのことだったかわからないほど激しい喧嘩をしていない仲良しだったの

に、いつの間にか心が遠く離れていつてしまった気がする。このままきずなが途切れてしまうのではないだろうか、そんな想像をすると怖くて怖くて仕方がなかった。

「ちよつと、寄り道して帰ろう」

まっすぐ帰ることを避け、少しでも落ち着く時間を稼ぐために考える。

父や母、兄や姉に今の自分の顔など、見られたくはないから。

◇ ◇ ◇

「……ユーノ、なのはの訓練のことだが」

日暮れ間近の商店街を歩きながら、アインが念話でユーノを呼ぶ。背中から陽光に照らし出されたその表情は硬く、眉間によった皺が内心の苛立ちを表している。

そんな感情が伝わってしまったのか、ユーノから返ってきたのは少し暗く沈んだ声だった。

「……僕も心配してたんです。なのは……少し、根を詰めすぎなんじゃないか、つて……」

「以前から背負い込む癖があったとは思っていたが、今のあの子は何かしらの強迫観念に追い立てられているようにしか思えん」

険しい顔で、なのはの危うさを思って言葉を漏らす。

その一言が気にかかったユーノは、念話越しに首をかしげた。

「アインさん、なのはと以前会ったことあるんですか？」

「……少し、縁があつてな」

言いづらそうなアインの様子に、これ以上は踏み込まないほうがよさそうだと判断したあユーノは口を閉ざす。高町家とアインの間には何か深い関係があるらしいが、アインが恥か何かに思っているような雰囲気を感じるために問うことはできなかつた。

「なのはは、僕が巻き込んでしまったただけなのに……どうしてあそこまで」

「ユーノ。それはお前のせいではないといったはずだ。責任があるとすれば、肝心な時にまともに動けない私の方だ。……巻き込んだのは、私だ」

それは、魔法の使用許可が下りていないことか、なのはに対して強く言うことができないう自分自身に対してか。もしくはどちらもか。

「あの子の動向に気を張っておこう。……まさかとは思うが、いつか自分で自分を追い詰めて暴走する可能性もある。いいな」

「……はい」

それだけ伝えると、アインは念話を終えてため息をつく。

なのはの持つ危うさ、日常が崩壊するような異常な事態に遭遇しても動ける胆力、魔法を使いこなすために日夜を問わず鍛錬を続けられる精神力、そして、自分の日常を犠牲にしても立ち向かおうとする自己犠牲の精神。すべてが9歳の少女にしては異常

である。

少女を子供でいられなくさせるほどの精神状態に陥っていると思うと、不甲斐なさで自分自身に対する怒りが募ってくる。

(自分が頑張らなければ、何とかしなければならぬ……あの日以来、そういう風に思うようになってしまったのかもしれない。……私があの時、士郎を巻き込まなければ)

ぎしぎしと掌に爪が食い込みそうになるのを必死にこらえ、アインはどこにもぶつけれない感情を持てあますのだった。

「……！ 鮫島、ちよつと止めて！」

執事の運転する車の中で不機嫌そうに窓の外を眺めていたアリサは、不意にはつと目を見開いたかと思うと鮫島の座る運転席に縋りついた。驚くすずかやすぐさま止めた鮫島を他所に、アリサは歩行路に飛び出すや否や走り出した。

「ちよつと……！……！……！そのアンタ!!？」

その先にいたのは、ちようどユーノとの念話を終えたアインだった。

背後から近寄ってきた少女に訝しげな眼を向ける彼女だったが、すぐに何度か顔を見たことがある相手だと思ひ出す。同時になぜ彼女が話しかけてくるのかと疑問に思うが、それにも心当たりがあることに気づいた。

「……君は……確かなのはの友達の……？」

聞く必要もなかったが、答え合わせのつもりで尋ねる。アリサが答えようとした時、タイミングよくすすすが息を切らせながら駆け寄ってきたため、隣に並んでアインを見つめた。

「アリサよ。アリサ・バニングス……こっちはすすか」

「つ、月村すすかです……」

「そうか。私はアインだ。……それで、何か用かね？」

先ほどまでの苛立ちを隠し、アインは二人に向き直る。鋭い視線にすすかはひるみそうになるが、アリサは気丈にもそれに耐え、キツと自ら身睨みつけるように見上げる。

「……最近、あんたと会ってからなのはの様子がおかしくなった。あんた、何か知ってるんじゃないの？」

「……………」

半ば予想していた質問にアインは目を細め、どう答えたものかと少し考える。

なのはが魔法の練習に集中するあまり他がおろそかになってしまっているのは、彼女の気質によるものでほかに原因があるわけではない。しかし事件に巻き込んでしまったのは自分の不甲斐なさによるものだし、それ以上関わらないよう説得できなかつたのも痛い。さらに言えば、自分の存在が過去の彼女の自己形成に関わっているのも確かな

ので、無関係とは口が裂けても言えない。

道端で彼女たちを諭すには難しい、言葉を選ぶ必要があった。

「アリサちゃん……」

「何か知ってるなら、教えてよ。お願いだから」

じつと見つめてくる、アリサの真摯な目にアインは黙り込む。自分の苛立ちをだれかにぶつけようとか、だれかの責任を追及しようという意志ではない、純粹に大切な友達を思い、すぎるような、そんな強いまなざしだった。

アインはどこか苦し気に顔を歪め、次いで大きなため息をついて目を伏せた。

「……………場所を変えよう。……ここでは無駄に目立つぞ」

いつだって彼女は、子供の純粹な願いには甘く、弱いのだ。

「君たちは、なのはと随分深い仲のようだな」

アリサの執事に許可を取ってから、アインは二人を連れて手ごろな場所にあつた喫茶店のテラスに向かい、向かい合うように席に着いた。

アリサはじつと見極めるように、すずかは警戒するようにアインを見つめる。アインが気を使って注文されたココアが二人の前に差し出されるが、微妙に距離を取って一口も手を付けなかった。

「ええ、そうよ。……出会いは、あんまり胸を張れるものじゃなかったけど」
「……そうか」

アインからやや視線をそらしながら、アリサはかつての光景を思い出す。

裕福な家庭で、他の生徒とはかけ離れた容姿をしていたアリサはなかなかクラスになじめず、孤独にさいなまれることが多かった。

そんな時、同じようにクラスから孤立していたすずかを見つけ、気を惹きたかったのか注目してほしかったのか、彼女が大切にしていたカチューシャを取り上げるといふ暴挙に出してしまったのだ。無論泣きながら抵抗されたが、精神的にも未熟だったアリサは自分の突飛な行動も感情も抑えられず、そしてすずかの気持ちも察することができなかった。

そんなとき、突然アリサの頬にパチンツと乾いた音は響き、次いでじんじんとした痛みが広がってきたのだ。

呆然としていたアリサは、ようやく自分の目の前で平手を振りぬいて立ちふさがっている、そして涙をこらえながら睨みつけているなのはの姿に気づいたので。

そのあとはもう無茶苦茶だった。頭に血が上ったアリサがなののはにつかみかかり、二人して泥だらけになるような乱闘にまで発展してしまった。後にも先にもここまですられたことは双方初めてで、周りの生徒もどうすればいいのかわからずに立ち尽くすばか

りだった。

その後、これまで大人しい子と思われていたさすがが予想外の大声で制したことで二人はやつと止まり、だれかが知らせてきたのだろう、教師が大慌てでやってきて、三人まとめて叱られてしまった。

殴り合い、つかみ合いの大ゲンカから始まった、ようやく本音をぶつけ合える相手を見つけた彼女らの親交は、その時から始まったのだ。

「でも、あたしたちはあの子のおかげで友達になれた。あの子がいたから……ひとりぼっちじゃなくなったのよ」

「……うん。気弱で内気だった私は、あの時から変わることができました」

懐かしそうにつぶやくアリサとすずかを、アインはただ黙って見つめる。微笑を浮かべたその顔には、どこか羨ましそうな切なげな様子が見て取れる。

それも、狂おしそうなほどに。

「だから……何も言ってくれないのがムカつくの！ 友達の役に立ちたいのに……どんなことだっというのに……」

アリサがなののはに対して怒ったのは、それが原因だった。

無視されたことや、放置されたことが不満なのではない。我を忘れるほど大変なことに関わっているのなら、少しぐらい自分たちを頼ってほしかった。何もできなくても、

役に立てなくても、話を聞くことぐらいはできるはずなのに。

しかしなのは、それさえもしなかった、してくれなかった。

「何にもできないかもしれないけど……せめて一緒に悩むことぐらいしてあげられるじゃない……!」

その態度が、本当は自分たちを信用してくれていないのではないかと思い、不安になってしまったのだ。

悔し気に、悲し気に表情をゆがませてうつむくアリサとすずかをじっと見つめ、アインはふっと微笑んだ。

「……君たちは、なのはのことが大好きなんだな」

「そんなのあつたりまえじゃないの!!?」

予想以上に強い肯定が返ってきたことに、アインはくすくすと思わず笑い声をこぼす。

必要以上に力がこもっていたことがいまさらになって恥ずかしくなったのか、顔を赤くしたアリサはアインから目をそらす。友達が悩んでいる原因かもしれない女に笑われるのは、なんだか癪だった。

「……確かに私は、彼女のある秘密を知っている」

アインは真剣な表情で、アリサの疑問を肯定する。詳しいことは話さないが、嘘だけ

は言わない。

友達に心配をかけたくないというなのはの意思を尊重し、同時に彼女の決意と行動がその友達のためであるということを確認に伝える。

「それは時に君たちを守り、……時に君たちを傷つけてしまうかもしれないものだ。彼女は、そんな危険なものから君たちを守ろうとしている。……そんな義務など、どこにもないのにな」

「……やっぱり、ね」

思った通りだ、とアリスは肩を落とす。力になりたくても、それに値しないという事実を突きつけられてしまい、アリスの中の悔しさがより一層膨れ上がった。

「隠し事なんて……あの子が一番苦手なことだもん。あたしたちじや力になれないってことだもんね」

「……でも、待っててあげることしかできないなんて、やっぱり辛いよ」

アリスと同じ思いを抱くすずかも、力になれない自分を恥じて苦しげな顔をする。

友達が信じてくれないことも、信じてもらえるだけの力を持つていないことも、すべてが悲しくて悔しくて仕方がなかった。

だが二人をじっと見つめていたアインはやがて、その目に慈愛の心を見せながら口を開いた。

「……もし君が悩む友を持つているなら、君は彼の悩みに対して安息の場所となれ。だが、いうならば、堅い寝床、戦陣用の寝床となれ。そうであつてこそ君は彼に最も役立つものとなるだろう」……ある哲学者の言葉だ」

突然の言葉に、アリサとすずかは訝しげな顔で首をかしげる。アインは問われる前に微笑み、少し滯乗り出して二人の瞳を覗き込む。

「何もできないなんてことはないよ。君たちが無事でいる……それだけであの子も救われるんだ」

もし、戦地に向かう男とそれを待つ女がいるとしよう。

過酷な戦地で戦い続ける、いつ死ぬともしれない男を女はただ待ち続けるしかない。戦うすべのない女は日々、男が物言わぬ冷たい体で戻ってくるかもしれないという恐怖におびえ、枕を涙で濡らし続けることだろう。何もできない不甲斐なさに、そしてそばにいられない寂しさに胸を痛め続けることだろう。

だが男は、自分の帰る場所に女がいることで戦い続けられるのだ。命の危機にあらうとも、傷つこうとも、自分の帰りを待っていてくれる相手がいる、その事実が男に必ず生きて帰るといふ活力を与えるのだ。

そういうことを、アインは二人に伝えようとしていた。

しかしそう言われても、アリサとすずかには納得できなかつた。

「本当に……それしかないの？ そんなことしか、私たちにはできないの？」

「違う。君たちにしかできないことだ」

なのはが努力し続けているのは、家族が、そして友達がいるこの街を守るためだ。彼らに変わりはおらず、それを失うことはなのはにはきつと耐えられないことだろう。

だから彼女は背負う。自らが帰る場所を守るため、そこで無事で待っていてほしいため、そして笑顔で迎えてほしいために。その身を犠牲にしようとも、立ち向かうのだ。

その事実にも、アインはようやく気付いた。

「信じて待ってやってくれ。彼女もそれを望んでいるはずだ」

「……………」

アリスとすずかはアインの顔をじつと見つめ続け、沈黙が続く。アインの言葉を、自分なりに受け止めようとしているのだろう。納得できないことばかりかもしれないが、聞き入れるべき部分もあるのかもしれない。そう思い、なのはの様子と照らし合わせて考え込む。

しばらくして、ふいっとそらされた二人の表情に見えたのは、いまだに納得しきれない複雑なものだった。

「……あなたの言葉だけじゃ、納得しない。やっぱり、なのは自身からそれを聞かなくや、納得できない」

「ああ。わかつている」

望んでいた答えに近い回答に、アインは満足げにうなずいた。

ここで引き下がっていたならば、アインは彼女たちをその程度の存在と見放していただろう。他者の言葉で揺れ動くような友情など、砂城のごとき脆さしか持ち合わせてはいまい。

最初から最後までアインの掌に載せられていたような気がして、アリスは苛立たし気に眉を顰めるが、この女に文句を言っても仕方がないと自分自身を押しえつめる。アリスの葛藤に気づいたアリスは苦笑し、自分も複雑そうな微笑みを浮かべてため息をついた。

アリスとアリスは立ち上がり、アリスが鮫島のほうを向いて帰宅の意を示した。

「……じゃあ今日は、それで引き下がってあげるわ。呼び止めて悪かったわね」

「なに、大した問題ではないさ」

気にしない、と余裕そうな微笑みを浮かべているアインに不機嫌さを隠さず、アリスは内心で下を見せるぐらいの反発を見せる。癩だが、今のなのはの状況を知っていて力になれるのはこいつだけだと無理矢理納得することにしたらしい。ずんずんと荒々しくその場から立ち去っていった。

「じゃあなのはのこと、任せたわよ！」

「アリサちゃん……えっと、お願いしますー!」

すずかにはアリサの無茶苦茶なセリフに苦笑しながらも、自分も強いまなざしを送ってからぺこりと頭を下げる。

アインはひらひらと手を振って二人を見送り、その背中が見えなくなるまでその場に佇んだ。そして、二人を乗せた車が走り去っていくのを見届けてから、椅子の背もたれに背中を預けてため息をついた。

「……………本当に、羨ましいな」

漏れ出た声は、今にも泣きだしそうなほど濁っていた。

2. 星光と雷光

「そっか……アリサちゃんとは喧嘩しちゃったんだ」

「違うよ……私がぼーっとしてたから……」

真夜中の街中、その一角の街路樹の下で、私服を強い風にはためかせるなのは魔法を発動しながら、今日あったことをユーノに話す。

本当はユーノに余計な心配をかけさせたくないために黙ってしようと思ったのだが、時間の経過とともに隠していることに罪悪感が芽生え始め、気づけばぼつぼつと自身の悩みを告白していた。

ユーノ自身も、なのはの不調の原因になりえる情報はできるだけ取り除いてあげたかったし、そもそもの原因は自分であると思っっているためにそれを聞くのは義務のように感じていた。

「……なのは、魔法の練習はもう少し生活を顧みてメニューを組みなおそう。なのはが倒れたら元も子もないよ」

「……ううん。それはだめだよ。私をもっと強くなれば、それだけ早く事件を解決できるでしょ？ 遅れちゃったら、それこそ元も子もないよ」

「なのは……」

ユーノはなのはに心配そうな目を向け、そして少女の意志を変えられない自分自身の不甲斐なさに歯噛みする。

アインにはなんとか説得してみると豪語したのに、何の役にも立てていないことが悔しくて仕方がない。アイン自身もなのはに弱いようだし、頼むといわれたために努力はしたいが、妙などころで少女は頑固だった。

しかし、なのはがまだ幼いこともあり探索にも時間制限がある。あまり遅くなれば家族に心配され、これまで以上に秘密の行動が困難になるかもしれない。

「うーん……そろそろ帰らないとかも……」

すっかり真つ暗な空を見上げながら、やや気だるさを感じる体を叱咤しながら捜し歩き続ける。発動していないジュエルシードの反応は微弱で、「ある」ということはわかっても「どこに」「ある」かまでは判別できなかった。

この場合は地道に街を歩き、その反応が強い場所を直に発見しなければならず、非常に手間と時間がかかっていた。

「この辺りだと思うんだけどなあ……アインさんはどうですか？」

「こっちはダメだ。今までよりも反応が薄い。正確な位置まではまだ掴めそうにない」

少し離れた場所から魔力の反応を探すアインが、若干の不機嫌さを感じさせる低い声

で答える。

彼女が不機嫌なのはジュエルシードが見つからないからではない、件の白い害蟲の異形の出現を気にしているからだ。

なのははアインの苛立ちや怒りを感じ取り、内心で首を傾げる。あの異形たちのことをダークローチと呼んでいた、今まで見せなかつたデバイスを躊躇いなく使うようになったりと、確かな因縁があるように思えた。異形たちの出現以来、なのはやユーノが夜に外を出歩くことを気にし始めていた。

なのはもアインの不機嫌さには気づいていたが、時折見せる険しい表情や近寄りがたい雰囲気にもまれて詳しく聞くことができず、もやもやとした感覚を覚えることがあった。

〔なのはは家に戻って……あとはボクとアインさんで探すから〕

〔……二人だけで大丈夫……？〕

〔うん……〕

〔無茶はするなよ。ただでさえ君には前科があるからな〕

〔わ、わかつてますよ！〕

最初に一人で世界を渡ったことを言われ、ユーノは慌てる。念話越しにアインは疑わしげな視線を向け、ユーノはただらだと冷や汗を流す。信用されていないよう複雑な

心境になっていた。

なのは苦笑しながら、走り去っていくユーノを見送るとため息をつく。取り繕っていた笑みも崩れてしまい、悲しい気持ちを持って余した切なげな表情だけが残っていた。

「……アリスちゃんとすずかちゃん……そろそろおけいこ終わってる頃かな……」

星と月の光のみが照らす空を眺めながら呟かれた少女の声には、深い寂しさが感じ取れる。

空に見えた一番星は、どこか弱々しい光に見えた。

「確かにこの辺りだ……」

街を見渡せる高さを誇るビルの上で、フェイトはアルフとともに佇んでいた。

ジュエルシードが発している魔力の反応を辿ってきたはいいが、あまりに微弱な反応のために詳しい位置を探れず、その場で足止めを食らっていた。せめて建物や障害物に反応を阻害されないようにと高いところに登ってみたが、あまり違いはなかったかもしれない。

「ちよつと乱暴だけど……魔力流を撃ち込んで強制発動させてみるよ」

「あいつら……特にあの女に見つかつちやうかもしれないけど?」

「大丈夫……私の方が先に封印できる、と思う」

「なんだか不安だねえ……」

自信がなさそうに余計な一言を付け加えた主人にぼやきながらも、仕方がないとアルフも嘆息する。

高度な訓練を受けたフェイトとアルフを、軽く一蹴してしまうほどの武人が向こう側にいるのなら油断は禁物である。あの時アインが気まぐれを起こさなければ、自分たちはまず間違いなく捕らえられていたことだろう。

「よっしゃ、じゃあその役目はあたしがやるよ」

「え、でも大丈夫……？ 結構疲れるよ？」

ぐつと力こぶを作って前に出たアルフに、フェイトが心配そうな声をかける。

アルフはふふんと自信満々に笑って振り返り、豊満な胸を張ってぷるんと揺らして見せた。

「フツ……あたしを誰の使い魔だと思ってるんだい？」

「……うん。お願い」

フェイトは若干躊躇うそぶりを見せながら、素直に相棒の提案に従う。

一歩下がるフェイトに見えないように、アルフは安心したような笑みを浮かべる。ただでさえジュエルシードの捜索に心血を注いでいる主人だ、これ以上心労をかけさせるわけにはいかない。ならばせめてこういった大雑把な作業くらいは手伝ってやれねば、

使い魔としての名折れであろう。

自らを光に包み、アルフは本来の姿である狼形態へと変化する。太くたくましい両足を広げ、コンクリートに掴みかかるように身構えると、全身の魔力を収束させていく。

「そんじゃあ………ウオオオオオオオオン!!?」

膨大な魔力を集め、アルフは雷として発現させていく。そして、バチバチと帯電する魔力に甲高い方向を放ち、天に向かって一気に放出させた。

その衝撃は、凄まじいものであった。

夜空にとつともない勢いで暗雲が広がっていき、分厚く重い暗闇となつて覆いつくしていく。頭上で鳴り響く雷鳴に街中の人々はおののき、時折走る稲光に首をすくめて怯えた表情を浮かべた。

海鳴市を分かれて探索していたなのはたちも異変に気付き、戦慄の表情を浮かべて足を止めた。

「こんな街中で強制発動……!!?」 広域結界、間に合え……!!?」

何者かの、おそらくは例の少女たちの魔法の発動によるものと気づいたユーノはその場で静止し、一般人を避難させるためにすぐさま結界を発動させる。すでに異変に気付いている人たちがいるが、この際けが人や巻き込まれる人が出なければいいと魔法の発

動にのみ集中する。

雷鳴に気づいたなのはも表情を改め、胸元に下げていた相棒を手にすると、天に向かつて掲げて見せた。

「レイジングハート、お願い！」

「Stand by ready.」

すぐさまなのは体が桜色の光に包まれ、私服が分解されて魔力で編まれたバリアジャケットに変換されていく。魔法使いの杖へと変わったレイジングハートをヒュン、と振り回すと、飛行魔法を使って強い魔力を感じる場所へ急いだ。

「あいつら……後でお仕置きだ」

こめかみに血管を浮き立たせたアインが冷え切った目を細め、ゴキゴキと拳を鳴らし始めた。こんなにも堂々と魔法を発動することが後々どういう影響を与えるか考えないのか、自分の後始末の仕事をどれだけ増やしてくれるのか、そんな怒りが彼女の中で膨れ上がった。

前回は少し飴をやったが、そろそろ鞭を与えてやったほうがいいかもしれない。理由がどうであれ、目的が何であれ、いい加減止めてやらねば今度は何をしでかすか分かったものではない。

だが、少女たちの魔力を感じるほうへと踏み出そうとしたアインの足が止まる。

「……なのは、ユーノ。そっちはお前たちに任せるぞ」

その場で立ち止まると、懐から尾錠型のデバイスを取り出して腰に装着する。赤いトランプが带状に飛び出してベルトに変わる間に、新たな気配を感じた方へと方向転換した。

その先に、奴らはいた。温泉地にも出現した、白い害虫の兵達たちがぞろぞろと群れを成し、無人となった建物の陰から姿を現し始めたのだ。その数は前回にも勝るとも劣らず、ぎちぎちと牙を鳴らす不快な音が波のように耳に届く。

「私は………お客の相手をせねばならん。変身」

〔TURN UP〕

デバイスにトランプを挿入し、手早くポーズをとってからレバーを引く。

尾錠の全面が反転し、青いスピードの紋章が露わになると同時に、ベルトからトランプ型のスクリーンが飛び出して向かってきた異形たちを弾き飛ばす。甲虫の絵が描かれたそれをくぐり、騎士の鎧を身につけたアインは腰から剣を抜き放ち、異形たちに向かつて咆哮を上げて颯爽と走り出した。

無数に落ちる雷が、ついにひときわ強く輝く宝石の位置を探り当てる。その感触に、フェイトは思わず愛器を掴む腕に力がこもるのを感じた。

「見つけた……！ バルディッシュ!!？」

【Set up. Grave form get set.】

戦斧が変形し、弓矢に似た、あるいは十字架のような魔力の刃が生える。封印のために特化した形状に変化したバルディッシュを携え、フェイトはジュエルシードが目覚めた方向を狙う。

全く同じタイミングで、ジュエルシードの位置に気づいたのは、飛行魔法で飛翔しながらレイジングハートを構えた。まっすぐ視線を向けた先には、フェイトの魔法を受けて暴走を始める兆候を見せている。

「いけるよ……！ レイジングハート!!」

【Cannon mode.】

砲撃形態へと変形したデバイスの砲口を、ジュエルシードの輝きの中心へと向ける。幸運にも、ちょうど十字路の中心に浮遊していたそれを狙う障害物は、存在せず、足場を確保する必要もなかった。

「……………ツツツ!!」

魔法名を唱える時間も惜しく、ため込んだ魔力を封印砲として放出させる。

そのタイミングは奇しくもフェイト全く同じで、桜色と金色の光が青い閃光に激突する。

光は凄まじい力で拮抗し、大気が振動して地響きをも生じさせる。ジュエルシードそのものが意思でも持っているかのように、放出される魔力の嵐が封印砲の魔力を押し返そうとしていた。

「ジュエルシード……封印ッッ！」

決死の表情で魔力の放出を続ける二人が、さらに魔力放射の出力を上げる。ホースの噴水から川の激流までに威力が上がった封印砲の怒涛の勢いに押され、ジュエルシードの抵抗が徐々に抑え込まれていく。

そしてやがて、青い閃光が桜色と金色の光に呑み込まれた直後、魔力の奔流があった場所には、静かに浮遊するシリアルナンバーが刻まれたジュエルシードがあった。

「やったー！なのは、早く封印を……」

「させるかよッ!!?」

いち早く封印を促そうとしたユーノのもとへ、オレンジの毛並みを持つオオカミが襲い掛かる。咄嗟に障壁を張って襲撃を防いだユーノは、弾かれたオオカミが普通の獣ではないことを察する。

「君は……やっぱり使い魔……!」

着地し、大きく距離を取ったオオカミがメキメキと自らの体形を変えていく様に、兜の緒を締めなおす気持ちで身構えた。

「フエイトの邪魔はさせないよ!!？」

大人の人間の女の姿に変わった狼——アルフはそう言い、自分よりも小さくも油断ならない能力を有した少年に、再び襲い掛かっていった。

レイジングハートをデバイス形態に戻し、ジュエルシードの方を見やる。正確には、ジュエルシードを間にして、なのはと向かい合うように降り立った金髪の少女を。

たった二度しか会っていない、一方的に敵と認識され攻撃してきた相手。確固たる意志を持った冷たい目でなのはを睨み、なのに常に瞳の奥に見える寂しげな目が気になっていた、謎多き少女。

この日のために魔法の練習を重ね、待ち続けていた。

もう一度彼女と、真っ向から同じ目線で話し合うために。

「こないだは自己紹介できなかつたけど……わたし、なのは……高町なのは。私立聖祥大付属小学校三年生」

唐突な自己紹介に、金色の少女は眉を擡める。白い少女の意図が読めず、困惑を鋭い眼差しの奥に隠してバルディッシュの切っ先を向ける。

「ジュエルシードは諦めてって……次は手加減できないって、言っただよ」

「それを言うなら……どうしてジュエルシードを集めてるのかって、わたしの質問にも

答えてくれてないよね」

答えはない。答えるつもりがないのか、余計なことを離して情報を与えることを恐れているのか、はたまたその両方が。

「……お話ししないと、言葉にしないと、伝わらないことつてきつとあると思うの」

しかしなのはが一步を踏み出すと、怯えるように肩を震わせる。冷たい刃のようだった表情にも戸惑いと恐れが浮かび、少女の本来の性格が表れたように見えた。

何度傷つけても、怖がらせようとしても決して臆することなく向かってくる、そんな相手が初めてなのか、少女は明らかに、なのはに対してこれまでとは異なる感情を抱いていた。

「それにまだ、あなたの名前も聞いてない!!？」

決意の表情で、なのはは少女に自分の意志を伝える。

少女はそれを困惑した、しかしどこか躊躇うような表情で見つめると、ふいと視線を逸らす。

しばらくぐつと何かをこらえるような表情で佇んでいたかと思うと、デバイスを構えなおしてなのはに向き直る。その表情は、先ほどと同じ決意を固めた表情だった。

大鎌を振り上げ、自らの周囲に魔力による雷の球体を配置する。戦闘態勢に切り替えた彼女は、いまだ自分を真剣な表情で見つめてくる白い少女を睨み、大鎌を振りぬいた。

「おおおおおおお！！」

醒剣ブレイラウザーを振るい、真つ向から爪を振るいあげてくる異形たちを次々に斬り伏せていく。以前と同じく、硬い装甲の隙間を狙って正確な斬撃を浴びせられ、急所を穿たれた異形たちはさしたる抵抗もできずに弾き飛ばされ、討ち棄てられていく。

刻まれた傷口から火花と体液が撒き散らされ、一太刀で仕留められて倒れて屍を積み重ねていきながら、異形たちはせめてもの報いのようにアインの鎧や当たりのアスファルトを緑色に汚していく。

しかし、やはり数があまりに多すぎた。いくら斬っても、その分だけ数を増やしているかのように別の個体が姿を現し、アインを超えてジュエルシードの方へ向かおうとしている。

しかし、ジュエルシードは封印されたものの、それが回収された気配が感じられない。今もなお宙に浮いたまま、町の中心で輝き続けている。これでは、異形たちに獲ってくださいと言っているようなものだ。

「……………あいつらは一体何をしているんだ」

視線を向ける先には、浮遊したままのジュエルシードをはさんで戦闘を繰り広げ、何かを話している二人の少女たちの姿が見える。

彼女らの方に近寄っていかうとする異形を抑えるアインの苦勞など知らず、魔法を繰り出し合つて時に激突し、必死な顔で話しかけるのはと憚然とした態度でそれを聞くフェイト。すぐ近くにはせめぎ合っているユーノとアルフの姿まで見えて、アインの額に血管が浮き出そうになる。

「チツ……誰も封印せんとは、わたしにはできんといつも言っていたらうに」
横を通り抜けようとした異形を片手間で切り捨て、アインは苛立たし気に舌打ちする。

ジュエルシードがどれほどの危険性があるのかはまだ知らないが、古代の代物が生易しいものであるはずがない。それを放置している事態に、アインは少女たちの危機的意識の低さを嘆く。

今すぐにも叱りつきたいが、次々に押し寄せてくる異形の軍団を押さえつけるのに忙しくこの場を離れられない。苛立ちが蓄積し、アインの表情が阿修羅のように険しくなっていた。

桜色と金色の閃光が夜空に走り、激突し、弾けて消えていく。自身をすれすれでかすっていく魔力の弾丸を躲し続けながら、己の意地を通す少女たちの戦いは続く。

速度で勝るフェイトの魔力弾を鍛えた目で回避し、なのはは弾幕の数で対抗する。雨

のように降り注ぐそれらを高速で回避するフェイトだったが、なのはのデバイスの先端に高速で収束していく光に大きく目を見開く。

直後、非殺傷設定で放たれた砲撃がまっすぐにフェイトのもとへ牙をむく。よけきれないと判断したフェイトはそれを障壁で防御し、太い砲撃を真正面から押しとどめる。

しかし、徐々に押され始め、軋む自身の障壁を目にすると、このままでは危ないと判断し、すぐさま砲撃の直線上から離脱し、距離を取ってからデバイスを構えなおす。

突きつけられる大鎌を見つめ、なのはは小さく息を吐いた。

「目的があるなら……ぶつかり合ったり、競い合うことになるのは……仕方ないかもしれない。だけど……何もわからないままぶつかり合うのは、嫌だ！ わたしも言うよ……だから教えて。なんで……どうしてジュエルシードが必要なのか」

これだけ戦っても、拒絶されても、なのははあきらめない。

寂しげな目を浮かべる少女の思いを、ただ知りたくて。

「私がジュエルシードを集めるのは……それがユーノ君の捜し物だから。ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で……ユーノ君はそれを元通りに集め直さないといけないから。わたしは……そのお手伝いで……」

言いながら、なのはは自分の言葉に違和感を覚える。

最初はそれだけだった。ただの正義感や同情で、困っているユーノの力になりたいと

思った。

だがいつしか、一生懸命にサポートをしてくれるユーノや、いつも近くで見守り、手助けをしてくれるアインを見ているうちに変わった。自分の独りよがりやで怒らせてしまった親友たちや、帰りを待っている家族の姿を思い出して、変化が表れた。

自分とは別の、戦う理由を持っているフェイトを見て、自分の意志に疑問を抱いた。「お手伝いをするようになったのは偶然だけど……今は自分の意志でジュエルシードを集めてる。……自分が暮らしてる街や、自分のまわりの人たちに危険が降りかかったら……嫌だから。これが……わたしの理由」

迷いながら、戦いながら考え続けてたどり着いた、なのはの答え。それはまごうこと泣き、なのはの本心からの思いと願ひ。

真剣な表情で語りかけるなのはを、フェイトはじつと見つめ返す。

どこか、まぶしそうに。羨ましそうに。

「……………私は」

「フェイト！ 答えなくていい!!？」

重く閉ざされていた少女の口と心が、ようやく開きそうになった時だった。

ユーノに対し執拗に攻撃を繰り返していたアルフが手を止め、フェイトを叱咤するように声を張り上げたのだ。

しかしその声には主に對するものではない、なのはに對するいら立ちや怒りのようなものが見えた。

「優しくしてくれる人たちのとこでぬくぬく甘つたれて暮らしてゐるようなガキンちよんかに……何も教えなくていい!!?」

その言葉にフェイトの、そしてその場にいた全員の表情が変わる。

ハッと気付かされるように、あるいは愕然とするように、あるいはただ驚愕に、あるいは一つの予想が的中し、合点がいったというように。

「――」

その言葉を受けたフェイトの表情が消え失せ、開きかけた口がギョツと閉ざされる。元の氷のような彼女に戻った、あるいはさらに冷たい氷で覆われてしまったかのように、決意を強めたフェイトがジュエルシードに向かって降下した。

一拍遅れたなのは、自分の言葉が伝わらなかつたことを悔やみながらも表情を改め、自分もジュエルシードのもとへと急ぐ。話を通じないなら、最初の意志を徹すまで。フェイトに何があつたのかは知らないが、ユーノの悲願であるジュエルシードを渡すわけにはいかない。相手よりも先に封印すべく、それぞれのデバイスを振りかざす。

だが、それは危険な行為だつた。仮の封印を施されただけで、今もなお脈動を繰り返すジュエルシードに二人の魔法少女がデバイスを向けている光景を目にし、アインは血

相を変えた。

「!! 待て、やめろ!!」

「え!?」

フェイトとほぼ同時にジュエルシードのもとにたどり着いたのはが思わず尋ね返した時、レイジングハートとバルディッシュが甲高い音を立てて激突した。

二人の魔力がデバイスから生じ、ジュエルシードのもとで混ざった瞬間。

星の終焉 超新星を思わせるほどの凄まじい閃光が、二人の間で発生した。

3. 世界を滅ぼす光

「ぐっ……!!?」

飛びかけていた意識を無理やり引き戻し、アインはふらつく体を起こす。吹き飛ばされた際に激しく全身を打ち付けた上、揺さぶられた脳がグラグラと視界を揺さぶる。これではしばらくまともに動くこともできないだろう。

ブレイライザーを杖代わりにしてなんとか立ち上がり、激痛に耐えながら周囲の敵影を確認する。が、あたりに動く影はまったくなく、索敵の必要はなかった。

しかし耳を傾ければ、そこかしこから怨嗟の音が聞こえる。身体が半ば焼け焦げたものの、首から上、または反対側が消し飛んだもの、バラバラの部品になったもの、全て消滅してしまつたものと、それまで狂暴に暴れていた異形たちの中に無事な個体はいなかった。

「魔力の余波だけで奴らが蒸発するとは……」

先ほどの魔力暴走の凄まじさを改めて感じ、アインは舌打ちしながら眉をひそめる。

なのはとフェイトが激突し、その際の魔力の暴走によりジュエルシードから放たれた膨大な魔力の奔流を受けた異形たちが、その熱量によって次々に蒸発し消滅していたの

だ。だがこれほどの影響があらうとは予想外だった。

「……………これは、ちとまずいな」

いくら不死性があるうとも、再生する間も耐える間も無く消滅させられれば意味がなかったようだ。そんな中でアインが生き残れたのは、彼女自身が普通ではなかっただけのことだった。

だが、ジュエルシードがそこまでの被害を出す代物と見抜けなかったことは大きな失態だと、アインは険しい表情で自身を恥じる他になかった。

「あ、アインさん!!?」

ガツン、と自分の膝を叩くアインの元へ、息を切らせたユーノが駆けつけてきた。うまく障壁か物陰を利用して魔力の波をやり過ぎしたのだろう。無事であったことにひとまず安堵する。

「だ、大丈夫ですか!!」

「見ての通りだ……………しくじったというしかない」

ボロボロになった髪や汚れた鎧を目にし、ユーノの表情が曇る。思わぬ展開に自分の身を守るだけで精一杯になっていたが、アインほどの魔導師でさえここまでの負傷を負ったことに戦慄を禁じ得ない。

だがふと考える。単独で戦っていたアインなら、他を気にすることなく防御に徹する

こともできたのではないかと。

「アインさん……どうして障壁を使わなかったんですか？　あなたほどの魔力の持ち主なら強固な障壁を……」

「使えないんだよ」

「え？」

不意につぶやかれた言葉に、ユーノは言葉を失う。

いま先ほど信じられない言葉を聞いたようなのだが、本当にさりげなくつぶやかれたために聞き流した、あるいは理解が追いつかなかった。

「恥を晒すようだが、私はな………魔法を一切使えないんだ」

ユーノの方を見ず、そっぽを向くようにしながらアインは疲れたように答える。その言い方は何というか、同じことを何度も何度も説明しうんざりしているかのような、自分の恥を何度も晒し疲れたような、そんな投げやりな雰囲気があった。

「え……ええええええ？」

そんな状況ではないとわかっていても、流石にユーノは驚愕を堪えられなかった。

これまでずっとなのは魔法の練習の監督を請け負ったり、基礎知識の授業を行ってきたはずのアインからのまさかのカミングアウトは、予想外にもほどがあった。

ユーノの反応も予想していたのか、深くため息をつきながらアインはユーノを据わっ

た目で睨む。

「だから言っただろう。私には封印はできない、たとえデバイスがあろうとなかろうとな」

「そんな、まさか……」

「……私のことはこの際どうでもいい。それよりもなのはどこだ？」

今だに納得し切れていない様子のユーノから視線を外し、アインは未だ煌々と輝きを放つジュエルシードの方を睨む。吹っ切れたように見えて、多少は気にしていたらしい。

だが、状況はそれどころではなかった。魔力の奔流は凄まじい衝撃波を放ち、周囲のアスファルトやガラスを盛大に破壊している。物理的な爆発事故と遜色ない威力だ。

爆心地であるジュエルシードから離れたビルの壁に、ぐったりとしたなのはがもたれかかっていた。吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた際に砕けた瓦礫に埋もれ、バリアジャケットは所々ほつれ、煤や土埃に汚れてしまい痛々しい様を晒している。

「なのはー！」

なのはの姿を目にしたユーノは安否を案じてすぐさま走り出す。

しかしアインは動かず、古代の魔法の宝石が引き起こした暴走の跡をまじまじと凝視する。

異形を蒸発させた魔力の暴風、アスファルトを砕く凄まじい衝撃、バリアジャケットを貫通する熱波、そしてそれ以上に、魔道士の杖をここまで損壊させたという結果に目を見張っていた。

(まさかあの強度のインテリジェントデバイスに傷が入るとは……ジュエルシードとは一体……?)

いまにも砕けそうなほどに傷つき、弱々しい点滅を繰り返しているレイジングハートを凝視し、アインは自分たちが相対している存在の謎が深まるのを感じる。

不意に視線を外せば、同じように吹き飛ばされて遠く離れていたフェイトの姿が目に入る。彼女もまた、バリアジャケットのあちこちが裂けて白い肌を晒しており、愛機である戦斧には無数の細かいヒビが入っている。

点滅を繰り返し、それでも魔力の刃を保ち続けているデバイスを、フェイトは悲痛な表情でそつと撫でた。

「ごめん……戻って、バルディッシュユ」

自身を慮る主人の言葉に、バルディッシュユは素直に従って手甲の形態に戻る。冷静に自分の限界を察したのだろう。

デバイスを自ら手放したフェイトは一度自分の手をぎゅっと握りしめると、未だ危険な脈動と明滅を繰り返す宝石へと視線を戻す。ふわりと地面に降り立ったその足が、

ジュエルシードの元へと向かった。

「フェイトっ!??!」

使い魔でさえも主人の行動は想定外であつたらしい。丸腰でジュエルシードの元へ向かうフェイトを凝視し、不意に持ち上がった嫌な予感に顔を蒼白にさせる。

だが少女の考えに思い至つたのは、アインも同じだつた。

「!.. いかんっ……」

決死の表情で暴走の中心へ向かつて行くフェイトの考えを察し、アインは慌てて走り出す。普通に走つたのでは間に合わない、だが常人離れた脚力を持つアインの身体は風を裂き、いままさにジュエルシードを両手で包み込もうとしたフェイトの前に割り込み、少女を殴り飛ばした。

「あぐっ!??!」

横面を張り倒されたフェイトはアスファルトの上に倒れ、邪魔をしたアインをキッと睨みつける。

しかしそれよりも鋭く冷たい目がフェイトを射抜き、ぞくつと少女の全身を寒気が駆け巡つた。抜き身の氷の刃を目の前に突きつけられたかのような殺気に襲われ、反抗的な目つきは一瞬で怯えた表情に変わる。

「馬鹿者があ!!?! 魔力暴走を素手で押しとどめるなど死ぬ気か!??!」

「つ……でも、こうでもしないと……!!？」　あなただって、何もできないくせに……」
珍しく感情をさらけ出して怒鳴りつけるアインに、フェイトは何とか平常心を取り戻そうとしながら反論する。先ほどの告白を聞いていたのだろう、封印手段を持たないアインに対して咎めるような視線を送ってくる。

アインは盛大に舌打ちし、我ながら余計なことを言ったと今更ながらに後悔する。だが確かに、このまま放置してはロクでもないことになるのは確かだった。

目の前で煌々と輝くジュエルシードをにらみながら、アインは決断する。

「チツ……仕方がない。説教は後でまとめてだ!!？」

そういうとアインは、浮遊しているジュエルシードにためらいなく右手を伸ばし、がっしりとその掌の中につかんで見せた。

途端にジュエルシードが反抗するように光を強め、凄まじい魔力の波を発生させ始めた。アインはそれを、自分の手だけで抑え込もうとしていた。

「あ、アインさん！」

「アンタ……何やってんだい!!？」

乱暴な手段にユーノとアルフが絶句する。手段はフェイトが取ろうとした方法と全く同じで、考えうる限り最も危険で愚かな行為に見えた。現にジュエルシードはより反抗を強め、バチバチと弾ける光がアインの鎧の籠手を焼き焦がしている。

アインはそれらの声を完全に無視し、呆然と立ち尽くしているフェイトに鋭い視線と声を向けた。

「私の手の上からでいい、封印しろ!!?」

「えっ……!!?」 で、でも……!!?」

「いいからやれ!!?」 魔力暴走はこっちで押さえ込む!!?」

フェイトに強い口調と眼差しで命令しながら、アインは懐から新たなデバイスを取り出し、口に啜えて左腕に装着する。剣と同じカードリーダーとケースがついたそれは左腕に張り付き、自動的にベルトが巻きつく。

腰にさした剣のカードを展開させ、その中の二枚を抜き出して口に啜え、片方をケースの中に挿入する。

【**A**BSORB **Q**UEEN】

双頭の山羊の絵が描かれたその次に、三本角の甲虫が描かれたカードをカードリーダーに挿し、左腕を振るうようにして読み込ませる。

【**E**VOLUTION **K**ING】

野太い声が響いた途端、啜えていたカードが光に包まれてひとりでに動きだし、左腕のデバイスの表面に紋章として張り付いた。

その瞬間、アインに劇的な変化が現れる。

「うおおおおおおおおおおおおお!!?」

獣の咆哮のような雄叫びをあげたアインが、黄金の輝きを身に纏う。神聖で高貴な色でありながらその輝きは鋭く、夜闇の中を一瞬朝日のように照らし出した。

ブレイラウザーに収められていたカードが一斉に抜け出したかと思うと、それぞれが大きな光の紋章となって浮遊し、アインの周囲に一列に並んで囲むように回転を始める。回り続ける光はやがて列を離れ、アインの体の各所に散って新たな装甲を生み出していった。

黄金に輝く重厚な鎧を身に纏ったアインが、ジュエルシードをつかむ手に力を込める。より強く反抗して衝撃と光を放つジュエルシードだが、アインの鎧の硬さは先ほどまでとは比べものにならず、ジュエルシードの暴走を受け止めてもびくともしていなかった。

「そら、早くやれ」

その光景を呆然と見つめていたフェイトに、アインがルビーのような妖しく冷たい眼差しを向ける。魔力の暴風になぶられる髪の毛の影から覗く光は、なぜかいつも以上に凍えた無機質なものに見えた。

その目に背筋を震わせながら、フェイトはこくと頷いてアインの籠手を上から握る。冷たい、しかし得体の知れない力を感じるその手の上から自身の魔力を流し、押さ

え込まれているジュエルシールドを無理やり封印しようとする。

「止まれ……止まれ……止まれっ……!!？」

なおも暴れまわるジュエルシールドに、さすがのようにフェイトは魔力を流し続ける。

黄金の騎士の手を両手で握り、必死な顔で目を閉じている彼女の姿は、まるで祈りを捧げているかのようなだった。

その祈りが届いたのか、あるいは魔法の宝石が観念したのか、暴風は徐々に落ち着き始め、穏やかな風となってアインとフェイトの髪を揺さぶるだけになって行く。

やがて風は止んだ。衝撃波も光も何もかもが収まり、何も起きていなかったかのような静寂に包まれる。だが後に残った破壊された街と、アインの籠手から立ち昇る白煙とじゆうじゆうと焼ける音が暴走の跡を表していた。

力を出し尽くしたフェイトはフラフラと後ずさり、慌てて駆け込んできたアルフに抱きとめられるとぐったりと背中を預けた。恐怖と緊張が解けたせいで、気が抜けてしまったらしい。

「あ、あんたっ……」

「……………」

力技で押さえ込んだアインと、暴走を受け止めながら原形を保っている右腕を凝視し、アルフは絶句する。

いつの間にか黄金の鎧をなくしているアインはようやく大人しくなったジュエルシールドを握ったまま、無言で立ち尽くしていたが、やがて大きなため息をついて肩をすくめた。

「やれやれ、さすがに疲れたな」

まるで数時間の残業をようやく終えたともいうような軽い口調で嘆息し、アインはゴキゴキと首の骨を鳴らす。先ほどまで見せていた激情は影を潜め、いつもの気だるげなアインに戻っていた。

「ほれ」

「へ？ うわっ……と」

呆けたままフェイトを抱きとめているアルフに向けて、アインは右手のジュエルシールドを放り投げて渡す。

突然のことに慌てるアルフだったが、なんとか胸元近くに飛んできたジュエルシールドを片手で危なげに受け止めた。そしてすぐに、あっさりと渡してきたアインに不審げな視線を向けた。

アルフの視線を受けたアインは、ふんと鼻で笑って返した。

「封印したのはお前の主だ。持っていけ」

その言葉にアルフの表情が険しくなる。主人の危機を救われたのは確かだが、同情か

おこぼれのような形で目的のものを受け取るのは気が引けた。馬鹿にしているのだからか。

「……納得すると思ってるのかい？ あんたは敵で……」

「ジュエルシードの確保は最優先事項なんだろう？」

「ぐっ……」

自分で言ったことをおうむ返しで返され、アルフは思わず言葉を詰まらせる。

しばし悩むが、自分の手の中にあるジュエルシードと同じくアインを見つめるフェイトを見下ろし、自分の感情と天秤にかけるとすぐに片方に傾いた。

「……礼は、言わないよ」

「欲しがったつもりはない。あのままではこの場一帯が吹っ飛んだ可能性もあるからな」

フェイトと視線を合わせることなく、アインは面倒臭そうに答える。どこかその声に拒絶するような響きがあったことに気づいたアルフは、腕の中のフェイトを見下ろしてから、悔しげに顔を歪めるも素直に背中を向けた。

「……行くよ、フェイト」

「……うん」

それ以上の問答は不要と、主人を抱えた使い魔は地面を蹴り、夜の闇の中へと姿を消

した。

再び訪れた静寂の中、アインは少女と使い魔が去った方に背を向けたままじつと立ち尽くし、無言のまま空を見上げていた。破壊された町の十字路の中心で佇む姿は、まるで彫刻のようだった。

「アインさん……！」

そこへようやく、朦朧としていた意識が回復し立ち上がれるまでになったのはが駆け寄ってきた。しかしまだ歩き方もぎこちなく、足元を走るユーノが心配そうな視線を向けていた。

なのはは自分の負傷など気に求めず、爆心地の中心に立ったまま動かないアインの顔を覗き込んだ。

「大丈夫……ですか？」

「……ああ。大したことはない。それより、君は？」

「大丈夫です。……ちよつと、擦りむいたくらいで」

どう見ても擦り傷程度の負傷ではないが、不要な心配をかけることを嫌がったのはは頼りない虚勢を張る。ぎこちない笑顔を横目で見つめるアインは何も言わず、ただ小さく息をついた。

アインの無事を確認できたユーノがホッと息をつくとき、その視線は自然となのはのデ

バイスの方へと向かった。

「レイジングハートは、かなりの大出力にも耐えうるデバイスなのに……それを一撃でここまで破損させるなんて……」

「あの子となのはの魔力の衝突……にしては、説明が追いつかん」

宝玉の周囲にまで破損が広がっている様を見るに、相当危険な状況であったのは間違いない。たかが人間、それも才能溢れるとはいえ幼い少女たちの魔力がぶつかり合ったせいでここまでの被害が出たというのは考えられなかった。

どう考えても、原因は彼女たちが追い続けている古代の魔法技術の結晶の方にある。あれはただの願いを曲解して叶える厄介な代物ではない、もつと危険な、得体の知れない代物だ。

「……私とどっちが厄介かね」

「え？」

「……ユーノ、なのは。とりあえずお前たちは帰れ。さすがにこれ以上戻らんのはまずい」

「え……あ、はい」

不穏なつぶやきが聞こえた気がしてなのはが視線を向けるも、アインはギロリとやや強目に睨みつけてきて質問を許してくれなかった。

なんとなく嫌な、今まで彼女が見せなかつた恐ろしきを見た気がして、なのははブルリと背筋を震わせる。

「アインさん、本当に大丈夫ですか？ もしかして、さっきの光で怪我とか……」

「……誰の心配をしている。私はいいから、さっさと帰れ」

しつしつと野良犬を追い払うような仕草を見せられ、なのはは先ほどの嫌な感覚は勘違いだったのだろうかと思う。

しかしアインの言う通り、これ以上家を開けて家族に心配をかけることはよろしくない。アリサやすずかにも心配をかけたままであるため、もう無茶はしないほうがいいだろうと判断し、素直に応じることにする。

ぺこりと頭を下げたのは、ユーノを抱えて走り去って行く姿を見送ってから、アインはようやく我慢していた冷や汗を流した。

「……………全く、今後を考え直さねばならんな」

ガクガクと膝が震える。なんでもない風を装ってはいたものの、ここまでの威力を発する魔力暴走を力づくで抑え込むのは無茶がすぎたようだ。ヒクヒク痙攣する全身の筋肉を、どうにかなのはが行くまで抑え込むので精一杯だったが、流石に限界だった。

それでもアインは、痛みでまともに動かない体を引きずって歩いていく。とにかく、ユーノが張った結界の外へ、なのはや他の人間の目に入らないうちに。

時間をかけ、亀のような足取りでようやくビルとビルの間の影に入り、壁に背中を預けた。

「だがやはり、少し、無茶を……しすぎた、か……」

そう呟いた瞬間、ずるりと、アインの右腕がこぼれ落ちた。

ぼとりと地面に転がる自分の手をフツと自嘲気味に見下ろしたアインは、ぐらりと傾いた体を重力に預け、意識を手放した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

市内にある、高級マンションの一室。

フェイトとアルフが一時の拠点としているその階の、一面がガラス張りになったリビングのソファの上に二人はいた。

ジュエルシードの暴走を素手で抑え込もうとし、アインに庇われながら封印作業を行ったフェイトの手は、魔力の熱によって軽いやけどを負っていた。

「じつとして……」

赤くなっているフェイトの両手に薬をつけ、包帯を巻きながらアルフは悲痛げに表情を歪ませる。主人を守ることこそが使い魔の存在理由だと言うのに、いけ好かないあの騎士にその役目を奪われた上に怪我を迫らせてしまったことが悔しくて仕方がなかった。

帰ってきたときからずっと気にし続けている友達の姿にフェイトは苦笑しながらも、不謹慎ながらもくすぐったいような喜びを感じる。

「大丈夫だよ……あの人のおかげで、この程度で済んだから」

「ほんとだよ。あんな中に突っ込むなんてこっちは肝が冷えたよ！」

「うん、ごめん。……もうしない」

後になって恐怖が蘇ったのか、それともアインの叱責が聞いてきたのか、フェイトは素直に頷く。

愛機に頼ることもできず、自分一人でなんとかせねばと暴走した結果がこれだ。これからも戦わなければならぬ自分自身を潰しかけ、友達に心配をかけさせた挙句、赤の他人に無茶をさせてしまったことを、少女は深く悔やむ。

アインはいなかったら、この程度では済まなかった。もしかしたら、命の危機にも瀕した可能性もある。

「……明日は母さんに報告に戻る日だから、傷だらけで帰ったら心配させちゃうもんね」
「心配……するかねえ、あのヒトが……」

「……母さんは、不器用なだけだよ。私は……ちゃんと分かっている」

不機嫌な、まだいい足りなくて不服そうなアルフに苦言を呈する。アルフは勘違いしているだけで、母は本当は優しい人なのだ、フェイトは心の底から信じていた。

だからこそ、少女は戦うのだ。他ならぬ、自分の母の願いを叶えるために。

決意の表情で虚空を見つめるフェイトの横顔を見つめ、アルフは主人のその一生懸命さの裏にある強迫観念のようなものに不安を感じる。

と、不意に目に入った妙なものに首を傾げた。

「……フェイト、頬になんかついてるよ?」

「え?」

フェイトは言われて初めて気がついたのか、アルフが指差す場所を手の甲で拭う。妙な透明さを持った緑色のその液体は、フェイトにどろろと粘ついた感触による不快感を催させた。

「インクかい? でもなんでそんなの……」

「……ううん、違う。これは……」

少しの鉄くささと粘性を帯びたそれは、色は違うが間違いなく何かの体液。血管が破れるような傷を負っていないフェイトのものではない、なんらかの生物の血液の一部だった。

「緑色の……血?」

出所のわからない、普通の生物にはあり得ない色彩のそれが、困惑に表情を歪ませるフェイトの顔を映していた。

4. 守りたいもの

ジュエルシード争奪戦の翌日の早朝、高町家にて。

リビングで桃子たちが談笑している中、なのはの部屋の自分の寢床に入ったユーノは、破損しひびが入ったレイジングハートを見つめていた。

レイジングハートほどの高性能なデバイスがここまで破損したところは見たことがなく、本来ならば頭を抱えている場面だがなのはの手前冷静でいなければならない。幸いレイジングハートには自動修復機能があるため、無茶を重ねることがなければ破損がひどくなることはないはずだ。

「なのはは大丈夫……?」

「うん……レイジングハートとアインさんが守ってくれたから」

なのははその破損さえも自分のせいだと思っているのか、重く沈んだ声で答える。

自分のミスのせいで傷ついた相棒を見下ろし、悲痛な表情で目を伏せた。

「……ごめんね、レイジングハート」

心配するなというようにちかちかと光る赤い宝石。しかしその光は、いつもより弱々しく見えた。

ユーノはその様に難しい顔で眉をひそめ、今後の動向を大きく軌道修正する必要があると判断した。

「魔法の練習やジュエルシードの搜索は……レイジングハートが修復されるまで控えたほうがいいかもしれない。きつと機能のあの子たちのデバイスも相当ダメージを負ったはず……すぐには行動できないよ」

「そっか……うん、そうだよね」

「問題は……アインさんだ」

ユーノがためらいがちに言うと、なのはの表情がより重く沈む。言えば言うほどどんどん自分自身を責めて傷ついてしまいそうだったが、あえて伝えなければならぬとユーノは自分でも覚悟を決める。

巻き込んでしまったのは自分も同じで、責任は自分にもあると思っっているために二人に表情はどんどん暗くなっていった。

「レイジングハートを損傷させる威力の魔力暴走に直接ぶつかるなんて……腕が使い物にならなくなっているもおかしくないのに、あんな無茶を……」

「……私のせいだ。私がつと、もつとちゃんとできていれば……アインさんが傷つくことも、ジュエルシードが暴走することもなかったのに……私のせいで、私のせいで……」

「なのは、それは……」

違う、とユーノが言いかけた時だった。

〔何をバカなことを言っているんだ君は〕

心底呆れているようなその声に、なのはとユーノは思わずビクツとその場で背筋を伸ばした。若干蔑んだ冷たさも感じるその声音は、今まさに二人が無事を心配していた人物のものであった。

「あつ、アインさん……!!?」

とつさに立ち上がってきよろきよろと辺りを見渡しながら、つい大きな声を出してしまったなのはだが、すぐ隣や下の部屋に家族がいることを思い出して慌てて口を閉ざす。一人で大声で喋っているだけでも思われれば、別の心配をかける羽目になりそうだ。

周りに耳を澄まし、特に聞かれていないことを確認してホツと息をつく。そして今度こそ周囲に気を配りながら、念話に意識を向ける。

〔だ、大丈夫ですか!?? 今になって痛んだりはしていませんか!??〕

〔馬鹿者。私はそんなヤワな鍛え方はしていない。それにな、心配するなら先に暴走に突っ込もうとしたあの少女の頭を心配しておけ。いつか死ぬぞ〕

ユーノの心配も適当にあしらい、もう一人の対象に向けて皮肉をぶつける。

しかしすぐにトーンを下げ、念話越しにもわかるほど沈んだ様子が伝わってきた。

「……なのは。今回の暴走は私のミスだ。心配をかけてすまなかつたな」

「え……？ それはどういう……」

いつになくしおらしいアインの様子になのは戸惑うばかりだ。いつもならかったるそうにながらもなのは戦いの成果を評価し、プロの立場から修正点を指摘してくるのに、今回はそれが無い。

それだけ、今回のジュエルシードの暴走が予想外で、由々しき事態だったと言うことだ。

「今回の失敗は、ジュエルシードをただ願いを歪めて実現させる程度の障害程度にしか認識していなかったために起こったものだ。この場合、君には責任は……そんなにはないよ」

「で、でも……」

「くどい。まあ、君にも一応ロストログアの近くで戦闘に入ったという危険行為について咎めるべき部分はあるが……」

「う……」

「だがそれも仕方がないことだ。君は。あの子と話がしたかったんだろう？」

自分に非があることを認めながらも、的確になのはの行動の問題点を指摘し安堵を許さないところは健在だった。

だがそれを理解しながらも、アインはなのはがフェイトに抱く気持ちを優先させることを見逃した。それが可能な事態だとたかをくくっていたからだ。

「わかりあうためには、多少は傷つくのを知の上でぶつかり合う必要もある。……少し、複雑な事情があるようだったかな」

アインの、そしてなのはの脳裏にあの使い魔の言葉が蘇る。

——優しくしてくれる人たちのトコで、

ぬくぬく甘ったれて暮らしてような

ガキンちよになんか……何も教えなくていい!

あれは、歩み寄ろうとするのはを完全に否定する言葉だった。

彼女らに何があったかは知らない。しかしいまのなのはやアインでは理解してやれない深い闇が、フェイトとアルフにはあるのは確かだった。

それを知らない限りは、両者の間にある壁を越えることは叶わぬだろう。

「……はい。私……やっぱりの子のことが気になります」

考えるだけで遠く険しく思う道、しかしなのははそれでも歩み寄ろうとする努力をやめないつもりようだった。

アインもまた、このままでは終わらないつもりであった。自分の信条を裏切るつもりはさらさらなく、中途半端に関わったまま引き下がるのも性に合わない。

「……フェイト、だったか」

「あの子、なんだかすごく……寂しそうな目をしてたんです」

なのはの言葉を、彼女はちゃんと聞いていたように思う。

目と目を合わせ、フェイトの心の奥底まで知ろうとしたなのはが抱いた印象は、冷酷になりきれない儂い人形のような少女だった。

「すごく強くて、冷たい感じもするの……だけどなんだか優しそうで……なのに、なんだかすごく悲しそうな……」

アインの感想も同じだった。

ただしなのはほど優しい評価ではなく、背後にある何者かによって操られる、ただの哀れな人形という厳しいもの。瞳の奥に感じる強迫観念のようなそれは、事故の意思を塗りつぶしているかのように思えた。

「それに、前に私を撃った時、『ごめんね』って言ってたんです」

「……………」

「きつと、理由があると思うんです。戦ってでも、ジュエルシードを集めたい理由が……」

「その根底にあるものが、人に聞かれたくないものでも、か？」

「……………はい」

躊躇いながら、しかしはつきりとした意志を感じさせる声で、なのははアインに告げる。

アインは念話越しに低いうなり声を漏らし、どう答えたものかと迷うようなそぶりを見せる。強く反対されるかもしれない身を強張らせるなのはは、それでも意志を変えるつもりはないと唇をきつく食いしばってアインの反応を待つ。

「……………好きにしたらいい。私は、君たちの問題には手を出さないよ」

返ってきたのは、諦観に似たため息交じりの言葉だった。

呆れられているように聞こえたが、なのははその言葉からアインの信頼を感じ取る。彼女なりになのはの努力を認め、真剣な思いを汲み取ってくれたのだろうと察した。

すると、気分を変えるように息をついたアインが、声の調子を変えて尋ねてきた。

「ところでなのは。君の家、確か地元のサッカーチームのオーナーじゃなかったか？」

「え……………？ あ、はい…そうですけど…」

「今日は確か、その練習試合の日じゃなかったか？」

アインが聞くと、なのはは彼女がそれを知っていたことに驚きの表情を浮かべる。その感情が伝わってきたのか、アインは苦笑するような息遣いをしてからなのはの疑念に答えた。

「……………桃子がな、以前店に行つたときに話してくれたんだ。祝勝会ができる楽し

だつてな」

「そうだったんですか……」

一瞬、身の回りのことまで調べられてるのではないかと少し心配になったのはだったが、そういうことならと肩の緊張を解く。

時折、なのはや高間チケの近くには常にアインがいるのではないかという考えがよぎってちよつと背筋が冷えたのだが、早とちりだったと反省する。気遣いを疑うなどもつてのほかだ。

「サッカー？」

「私とアリサちゃんとすずかちゃん……みんなで応援したいね、つてお話ししてたの」

ユーノが尋ねると、なのはは楽しみな様子を見せる。父のサッカーチームの試合にはよく応援に行つていて、アリサやすずかと一緒に行つて精一杯の声援を送るのが恒例だった。

だがふと、その表情が曇る。いつも一緒に応援に行つていた親友たちとは、まだまともに話し合えていなかったからだ。

「……ちようどいい、行つておいで。君は十分頑張っている。あの子のことが気になるのは分かるが、いまの君に必要なものは十分な休息だ」

「僕もそう思うよ。きつとアリサちゃんやすずかちゃんも……なのはと会いたいんじゃない

ないかな？」

「……うん！」

なのはの迷いを感じ取ったらしいアインや、なのはの心身を第一に案じるユーノがア
ドバイスを送ると、背中を意された少女はどこか肩の荷が少し降りたように表情を和ら
げる。

アインは調子を取り戻しつつある少女の返答に、満足げに微笑みをこぼして念話を切
る。

「じゃあ…行こうか、ユーノ君」

「うん、なのは…でも今日はとりあえずゆっくり休んだ方がいいんだからね？」

「うん。無理はしないよ」

しつこいくらいに身を案じてくるユーノに微笑みを返しながら、なのはは携帯電話を
手に取ると画面を見下ろす。

連絡先に登録してある友人たちの名前をじっと見つめると、寂しげに眉を寄せながら
不安の気持ちちを口にした。

「アリスちゃん…すずかちゃん…お返事くれるかな？」

このまま話せなかったら、自分たちの友情が消えてしまうのではないか。

そんな後ろ向きの気持ちを言葉にして、改めて後悔を感じながらなのははタッチキ―

に触れていた。

「……あー、もう、無理だ。限界、だ……」

なのはとユーノとの念話を切ったアインは、草むらの上に寝転びながら気だるげな声を漏らす。外で寝るには肌寒く、震えが走るほどの冷気の中アインは天を仰ぐ。

星空は煌々と輝きを放つてはいるものの、所々に漂う雲がそれらを隠してしまっている。徐々に分厚くなっていくそれらは、アインの瞳に映っている輝きさえも飲み込もうとしているようだった。

「……………寝るか」

押し寄せる睡魔に抗うことはできず、アインはゆっくりと瞼を閉じると春先の冷たい風を大きく吸い込み、意識を手放すのだった。

♠ ◇ ♥ ♠

「勝つたらお祝いに翠屋うちで好きなもん食っていいぞ！」

士郎の宣言に、翠屋JFCのユニフォームを纏った少年たちが歓声をあげる。オーナーの店のスイーツは男子たちにも人気で、昂ぶっていたやる気がさらに上昇していた。

なのはは芝生の傍でそれを眺めながら、母から預けられた父への愛妻弁当を抱えて走

る。その向かう先には、会話をしているアリサとすすかの姿もあった。

「おはよー」

「おはよう、なのはちゃん」

「おはよう！　アリサちゃん、すすかちゃん」

すれ違いによるぎこちなさはずいぶん薄れたのか、以前とほぼ同じ調子で挨拶を交わす三人だが、アリサはずいとなのはの顔を覗き込むと眉間にしわを寄せた。

「……今日は……元気よね？」

「ふえ？」

自分では気づかない表情の変化を見られたなのは、何を言われているのかわからず戸惑ったように目を瞬かせる。困惑する少女に、もう一人の親友が耳元に口を寄せて説明してくれた。

「アリサちゃん、素直になれないだけで……本当なのはちゃんをずっと心配してるんだよ。最近少し、元気がなかったから」

「あ……」

「もし心配事があるなら、話してくれないかな、つて……」

なのははその言葉を聞き、激しい後悔の念に苛まれる。今まではただ、隠し事をしていることを申し訳なく思い、それが原因で怒らせてしまったことを悔やむだけであつ

た。

だが親友たちは、そんなことを気にしていたのではない。問題を一人で抱え込もうとしていたのはを心配し、日常生活にも支障をきたし始めていることを案じ、自分たちでは力になれないことを憂いていたのだ。

例の少女のことを、自分のことだけを気にしていたのは、ようやくそのことに気がついて自身を恥じる他にない。

「アリサちゃん、すずかちゃん…心配かけてごめんね…：今は…：二人には何も言えないんだ…」

言葉を選びながら、なのはは告げる。本当は全て打ち明けたい、しかし魔法という途方も無い壮大な真相を話してしまえば、より心配をかけることにも、力を貸せない無力感を与えることになる。

なのはは今度は、思いを隠すことなく伝える。真実は教えられなくても、自分の思いを余すことなくまっすぐに伝える。それしかできなくても、二人には知っていて欲しいから。

「でも！ アリサちゃんもすずかちゃんも大切なお友達だから…！ なのはにとつて大事なお友達だから、きつと…！ 言える時が来たらちゃんと伝えるから…！！」

だから、誓う。二人の元に戻ってこられるように、元どおりの日常に帰ってこられる

ように。

「…うん、待つてるから。…ずっと応援しているからね、なのはちゃん」

「その…いろいろともどかしいけど、あんたが決めた事なら仕方ないじゃない。…でも！心配くらいさせてよね！あたしにとつてもあんたは大事な友達なんだから！」

「うん…うん！　ありがとうアリサちゃん、すずかちゃん…！」

アリサはどこか不服そうながら天邪鬼にそっぽを向き、すずかは静かになのはの思いを受け止めるように微笑む。思いを届けることができたなのは「えへへ…」と笑みをこぼし、抑えきれなかった喜びと安堵が涙とともに溢れ出す。

なのはの目尻に光る雫を見たアリサは思わず息を呑み、自身も涙を溜めながら声を張り上げた。

「なに泣いてるのよ！　あたしが泣かせたみたいじゃない！」

「ふふふ、アリサちゃんたら」

問題が解決したわけでは無い。しかし新たな誓いを立てた少女たちの距離は、以前よりも近づいて見えた。

「さーて…応援席も埋まってきたようですし、そろそろ試合をはじめますか」

「ですなー」

娘やその友人たちの様子を伺っていた士郎は自分の懸念が杞憂だったことを悟ると、

相手チームのオーナーに呼びかける。

様々な少年少女たちの思いが交差するサッカーコートに、試合開始のホイッスルが甲高く鳴り響き、天に向かってサッカーボールが蹴り上げられた。

♠ ◇ ♥ ♠

翠屋JFCの練習試合の翌日、なのはは自宅の縁側でまだ明けていない空を見上げる。

家族や友達に囲まれ、幸せな暖かさを改めて感じると、あの使い魔に言われたことが蘇ってきた。

確かに自分は恵まれているのかもしれない、いや、あの使い魔にとっては恵まれているのだろう。父母がいて、兄姉がいて、友達がいて、愛し愛され、信頼されている。

もしあの少女や使い魔がそうでなかったのなら、その悲しみをわかってあげることが自分には不可能なのだろうか。

「ん？ あれ……なのは……？」

物思いにふけていたなのはの元に、ランニング姿の姉が顔を見せた。自分よりもずっと早くに起きていることに随分驚いている様子だ。

「あ……お姉ちゃん」

「どうしたの……？ いつにもましてすっぴい早起きさんだ」

「うん。ちよつと目が覚めちゃって…。あれ…お兄ちゃんは？」

「うん、今朝は父さんと一緒に少し遠くまで走りに行ってる。母さんは朝ご飯の支度だね。今朝のご飯も張り切ってるみたいだよー」

「お姉ちゃんはこれから鍛錬だよね？」

「そうだよー。父さんと恭ちゃんに戻ってくるまで、少し慣らしておこうかなって」

「そっか、がんばって」

笑って送り出そうとするのはに、美由紀は手を振って走り出そうと踏み出した。

しかし庭を出る前に、ふと足を止めた美由紀がなのはの方に振り向いた。ためらいがちに口をもごもごまごまごつかせたかと思うと、意を決したように唇を噛んでなのはの方に歩み寄ってきた。

「……とここで、なのは？」

「なあに？」

「あのさ…最近、アインさんとはどんな感じ？」

美由紀の質問の意図が読めず、なのはは困惑気味に首をかしげる。前に似たような質問を受けた気がするが、今だにその真意を知ることができていなかった。

「えつと…どんなって聞かれても、いつも通りだったかな…どうして？」

「んー。最近お店に顔出さないからさー。なんかあったのかな…って思っちゃって

ね」

ぼりぼりと気ままずげに頬をかき、美由紀は虚空を見上げて答える。高町家との因縁というか、過去の関わりについては一度聞いたものの、それだけを聞くにはここまで関係がこじれるとは思えなかった。

まだ姉は、そして父母や兄は自分に何かを隠している、そう思わずにはいられなかった。

「恭ちゃんのこともあるからあんまり大げさにはできないけど……父さんも母さんも気にしててね。そっか……いつも通りか……」

「……あの、お姉ちゃん」

安堵のような、反対にどこか寂しそうな表情の姉になのはは呼びかける。

困り顔で振り向く姉の目を見たなのはは言葉につまり、やがてふるふると首を振って苦笑を浮かべた。

「ううん……、何でもない」

「うん……こつちもごめんね。変なこと聞いちゃって。じゃ、行ってきます」

この空気の中から逃れるように、美由紀は駆け足で裏口の門を抜けて行く。たつたと軽快な足音が遠のいて行くのを見送ったなのははため息をつき、なかなかあの姉の様子の子の真意を問えずにいる自分に落胆する。

質問する機会はいくらでもあるだろうに、肝心なところで二の足を踏んでしまうなど情けなかった。

視線を向ければ、明るみ始めた東の空が見える。夜明け前の紫紺の空は、アインのバリアジャケットの色を思い出させた。

「……………私、まだアインさんのこと……………何も知らないんだな」

いつも近くにいる騎士を思い、なのはは朝練の時刻になるまで放心し続けていた。

5. 紫紺の騎士

それは、忘れられないほど忌まわしく——同時に忘れられないほど愛おしい記憶。けたたましいエンジン音とともに、砂漠に一筋の轍が刻まれていく。冬の風が前から叩きつけられる中、それを物ともせず突き進む影がある。

枯れた地を踏んでタイヤを回すのは、青いスピードをモチーフにした装飾の目立つ一台のバイク。そしてそれを操るのは、銀色のヘルメットに黒に近い紺色のライダースーツ、バイクと同じくスピードを模した銀色の鎧を身に纏った妙齢の女性だった。

背は高く、ライダースーツによって強調された豊満な肉体が振動によって揺れる。胸鎧に覆われた西瓜ほどもある胸元が上下左右に大きく揺さぶられ、鎧とライダースーツの光沢がその綺麗な形を誰にともなく見せつける。

「アルデブラント曹長、目標地点まで7200mです！」

「了解した！」

バイクによって繋がられた通信に、女性は仮面の中から答える。すでに最大速度に達しているギアを強く握り、自分が討つべき敵が待つ目的地へと急ぐ。

未だ遠いその場に急ぐ中、通信越しにオペレーターから焦燥じみた声が上がった。

〈急いでください！ マンダリン陸尉が苦戦しています！〉
〈マンダリンを救ってください。急げ、アルデブランド〉

まだ経験が浅いせいとか、緊張と焦りを見せるオペレーターの女性とは対照的な落ち着いた声、初老の男性の声が響く。騎手の女性はヘルメットの中でキッと視線を鋭くし、愛馬の心臓エンジンを力強く唸らせる。

〈曹長、目標が北へ100m移動！〉

情報を受けた騎手は大きくハンドルを傾けさせ、砂地をタイヤで深く穿ちながら方向を変え、砂塵を巻き上げながら加速した。

暗い暗い洞窟の中。自然の力に淘汰された古代の人類の痕跡が所々に残る天然のトンネルの中で、二つの影がぶつかり合っていた。

片方は赤いライダースーツに銀色の鎧を纏い、腰のベルトからは一丁の銃を下げ、トランプのダイヤと鍬形クワガタを模したような仮面をつけた銃士。分厚く重いそれを紙か何かのように軽々と着こなし、もう一方の相手に向かって拳を振るう。

銃士が相対しているのはまさに異形であった。悪魔のように醜くゆがんだ顔からは鋭い牙が伸び、青紫色の体はしなやかながら厚い筋肉の鎧に覆われている。手からは長い指が生え、その間には皮膚のような膜が広がっている。蝙蝠コウモリの特徴を有した人間型の

異形が、銃士に襲いかかっていた。

「ふっー！」

戦いは、銃士の方が押されているように見えた。体格も力も互角だが、銃士の得物は腰の銃。接近戦よりも遠距離からの狙撃に特化した武装であるためか、最大火力を叩き込めない体勢になっているようだった。

蝙蝠の翼に殴打され、徐々に追い詰められているダイヤの銃士。

彼が壁際まで追い詰められた時、けたたましい爆音とともに青い影が乱入した。

洞窟の闇の中を劈く光とともに、スピードを模したバイクのヘッドが蝙蝠の異形に突撃する。意識外からの乱入者に、蝙蝠の異形はなすすべなく弾き飛ばされ、ダイヤの銃士が解放される。

その場から後ずさって距離を取りながら、銃士は乱入した青いスピードの騎士に目を向けた。

「マンダリン陸尉！ 無事ですか!?？」

「アルデブラントか！」

騎士、アインはその場にバイクを止め、腰に佩いた片刃の剣を抜いて片手で構える。バイクのヘッドライトに照らし出された銀の刃が、蝙蝠の異形の目を射抜いた。

「ギイイイ——!!？」

敵が増えたことで不利を察したか、蝙蝠の異形は大きく腕を羽ばたかせる。その瞬間異形は無数の影に分かれ、通常サイズの蝙蝠に変化して飛び立ち始めた。

驚愕するアインたちの間をすり抜け、蝙蝠の群れは一つの塊になりながら洞窟の奥へと逃げていく。一瞬視界を奪われ、隙を疲れたアインたちはすぐさま異形の方へと方向を変えた。

「レッドランバス！」

「ブルースペイダー！」

銃士が懐から指輪を、待機形態のデバイス呼び出し、一声命じて目の前に突き出す。指輪は強い光を放つと宙に浮き、無数のパーツを生み出して一台のバイクへと形を変えていく。

アインの持つ青いスペードのバイクと、銃士の呼び出した赤いダイヤを模したバイクが並び立ち、逃走する異形を追って爆走を開始する。

やや狭い洞窟の中を、異形は我が物外で自在に群れの形を変えながら飛んで行く。その後を追う二人の騎士もまた、障害物を恐れることなく乗り越え、猛スピードで突き進んでいく。

視認できる距離まで近づくと、銃士はベルトからダイヤの意匠が施された銃を抜き、飛び回る蝙蝠の群れに向けて発砲する。無数に分かれていても痛覚は共有しているの

だろうか、銃弾が数匹に命中すると蝙蝠たちは目に見えて苦しみ始めた。

「ギギイイイ——!!??」

耳障りな咆哮をあげ、統制を失った蝙蝠の群れが失速する。バタバタと苦しみながら速度を落とした群れは一箇所に集まり、また一体の蝙蝠の異形になって立ち上がった。

蝙蝠の異形は憎々しげに自身の体を流れる緑色の血を見下ろし、ついですぐ目の前にバイクを留める騎士たちを鋭く睨みつける。

鋭い視線を受けながら、バイクから降りたアインは剣を逆手に持ち替え、鍔の部分を扇のように展開させる。その中に入った一枚の赤いカードを抜くと、剣に刻まれた溝に挿してスライドさせた。

【TACKLE】

野太い声が響くとともに、剣の腹に備わったのカウンターに数字が浮かぶ。カードに込められた力が数値化して表示されると、使用されたカードが光となって浮かび、アインの鎧に吸収されていく。

「ハアアア……!!?」

猪の祖たる不死の魔物の力がアインに宿り、突進力が強化される。体の内から湧き上がる力を全身に漲らせ、青い騎士が異形に向かって走り出した。

逆手に持った剣を携えながら、地面を踏み砕きながら凄まじい勢いで突撃するアイン

の一撃が決まるかと思われたが、蝙蝠の異形は横から張り手のように腕を振るい、それを防いだ。

「うぐあつ!!?」

不意の横からの攻撃で、アインの突進は勢いをそらされて不発に終わり、盛大に洞窟の中で転がる羽目になる。

ダイヤの銃士はあまり動揺せず、勝利の雄叫びをあげる異形を見やつて自ら前に出た。

「まだお前の手に負える相手じゃない、か。なら見ていろー!」

銃の撃鉄部分を展開し、ホルダーの中の二枚のカードを抜き出してカードリーダーにさし、素早くスライドさせる。

【FIRE, DROP】

尻に炎を灯す^{ホタル}螢の祖と硬い頭部を誇る鯨^{クジラ}の祖の魔物がカードの中で蠢き、二枚のカードが光となって銃士の鎧に吸収される。

【BURNING DROP】

炎の元素の力と、キック力強化の能力が銃士に付与され、銃士の身体に力が漲つていく。

デバイスの音声とともに、銃士は洞窟の天井すれすれの空中へと躍り出る。高く跳躍

した先でぐるりと前転すると、突き出した両足に業火が宿り、蹴撃の威力が大幅に増した。

「ハアアアアアアア!!??」

雄叫びとともに放たれる、火炎を纏った踵落としが異形の両肩に決まり、異形は爆炎に飲み込まれた。

蹴りを放った反動で宙返りした銃士が着地すると、炎に包まれて倒れる異形のベルトのバックルがガチリと左右に分かれた。

銃士はそれを確認すると、ベルトのバックルから一枚のカードを抜き、異形に向かって投げ飛ばす。異形の胸にそれが突き刺さると、緑色の光に包まれた異形がみるみるうちにカードに吸い込まれていく。

その姿が完全にカードの中に消えると、カードはクルクルと回転しながらひとりで宙を舞い、銃士の手の中に収まった。

「カテゴリー8か……」

それまで何も描かれていなかったカードの表面に、顔がスコープになった蝙蝠の魔物の姿が描き出される。二次元に封じられながらも蠢いているそれを、銃士は銃のホルダーの中に収納した。

アインは吹き飛ばされた際にぶつけた肩をグリグリと回し、顔をしかめながら銃士の

元へ近づくと、その姿を見て、銃士は苦笑するように肩を揺らした。

「技術は十分、いやそれ以上だがまだそのデバイスには慣れんか。アルデブラント」

「……そのようです」

「だが助かった。礼を言う」

銃士はそう言い、ベルトの中に入っていたカードを抜く。するとベルトの表面の紋章から半透明のスクリーンのようなものが現れ、銃士の体をすり抜けていく。

鎧が解除され、現れたのは一人の背の高い男性だった。服の上からでもわかる鍛え上げられた肉体を持つ、整った顔立ちの中年男性は、戦闘を終えてもなお鋭い視線をアインに見せる。

男、サクソ・マンダリン陸尉に倣ってアインも鎧を解除すると、残ったベルトを見下ろして首を傾げた。

「どうにも、このデバイスの機能はしつくりきません。はつきり言つて戦いづらいとしか……」

「アンデッドに唯一対抗できる力だ。今は慣れろとしか言えん。それにお前の加入は急な話だったからな、慣れないのは仕方がないだろう」

先ほどの戦闘、それはアインにとって納得の行くものではなかった。

通常の魔道士が身につけるバリアジャケットとは異なる甲冑、攻撃の発動に必要なプ

ロセス、見た目からして人間離れしている異形など、これまでアインが相対してきた問題とは毛色の違う相手に戸惑いが生じ、その祖語の積み重ねがアインの不調を招いていた。

不満げにデバイスを見下ろすアインに、サクソはふつと不敵な笑みを浮かべる。

「だがそれを使いこなした時、お前はいずれ俺を超えるライダーへと進化するだろう……その時が楽しみだ」

「……マンダリン陸尉にそう言っていただけで、光栄です」

ピツと背筋を伸ばして答えるアインに苦笑すると、肩の力を抜けとばかりにぼんぼんと肩を軽く叩く。この女騎士はストイックなのはいいが、少々肩を張りすぎる傾向にあるのがたまに傷だった。

「先に戻る。報告は任せておくぞ」

「ハッ！」

軽く手を振り、バイクの方へ戻っていくサクソを見送ると、アインは先ほど異形を封印した場所を見やる。そこにはもう異形が暴れていた跡など何もなく、まるで幻か何か出会ったかのように静寂が漂っている。

しかし、アインの手は握った剣の感触を覚えている。人間の力では到底及ばない、恐るべき異形と相対したという実感は、未だアインの中でうずいていた。

◆? ◆? ?? ♣?

ある、大学の構内に似た建築物の中を、アインは一人歩いていく。

二人の警備員に守られる職員専用の門をパスを提示して通ると、その奥にあるもう一つの扉で立ち止まる。まずは相棒デバイスを台にかざし、その次の台に手をかざし、最後に門柱のカメラに自分の瞳を見せる。

デバイス・指紋・網膜パターン認証の三つの厳重なセキュリティをくぐり抜け、ようやく開いたドアを抜けて進むと、それまでとは意匠の異なる廊下へと繋がっていた。

無数のパイプの通る天井、何十も並ぶ密閉された部屋、照明を極限まで減らした廊下とそこで行われているのは、彼らが相手取ろうとしている異形のサンプルを用いた実験と研究だった。

ボコボコと泡を立てる試験管やケースの中には、いびつな形状の生物の断片らしきものが浮かび、何本ものチューブや電極が取り付けられている。

全身を防護服で覆った者は水槽の中にゴム手袋を突っ込み、特殊溶液内でサンプルを切り分け、小さな試験管やシャーレの中に移し、密閉シラベルを貼って日付別に分別する。

電気ショックの反応や薬分を投与し、その反応を観測しては記録を取っていく。計器から吐き出されるデータが積もりにつもり、ちよつとした山のようになりつつあった。

「……いつ見ても慣れんな、この光景は」

そこにいる職員の格好や扱っているもの、暗さが相待ってマッドサイエンティストの集団が怪しい研究をしているようにしか見えぬ、アインが通る際いつも渋い顔になってしまっていた。

なるべくそれらを見ないようにしながら、研究施設を超えていくと、アインは分厚い執務室の扉の前へとたどり着いた。

「失礼する」

コンコンコンとドアを叩いて中に入ると、そこにはすでにデスクの椅子に座る壮年の男と、デスクの前で初老の男性を見下ろしているサクソと制服を着た女性がいた。

妙に重苦しい雰囲気があったが、アインは気にせずにその空気に割って入り、初老の男・BOARD局長ケインズ・クロスボードを見つめた。

「……これで、今月で3体目です」

黒光りする洒落た両袖机の上に、サクソの手によって蝙蝠の意匠のカードが置かれる。

一日かけてようやく封印した魔物がうごめくそれを、制服の女性、アインのオペレーターが興味深そうに覗き込んだ。

「どうして……こんな怪物がこの世界に……？」

「さあな……どうせ碌でもない連中の思惑だの、面倒臭い事情があるんだろう。私たちに分かることなどあるまいよ」

自然現象であろうが、人の手によつて生み出された存在だろうが、人に危害を加えない異形がうろついているなどはた迷惑にもほどがある。

そして、そんな相手を極秘のうちに対処しようとしていることに疑問を抱いているのか、サクソは目の前の壮年の男を鋭い目で見下ろしていた。

「なぜ、この一件を公表しないのですか。今の所民間人の被害は出ていませんが、このまま終わるとは私には思えません」

「まだほとんどのことが判明していない現状、パニックを起こすのは得策ではない。人間はお前ほど強くはない」

「何を言っておられるのか！ アンデッドの情報は、すでに一部の民間人には漏れているのですよ？」 何を今更……」

「陸尉、その辺で。ここで熱くなつても事態が好転するわけではありません。落ち着いてください」

激昂寸前の上司の肩を引き、アインが局長との間に入る。

サクソは不満げに目を細めてアインを睨むが、彼女の言葉にも一理あると判断したのか潔く引き下がった。不信任があつてもそれを抑えられるほどには落ち着いていたよ

うだ。

オペレーターは口論が起こらずにすんでホツとしたのか、胸をなでおろして状況を見守るだけにとどめた。

「……だが、我々はまだ知るべきことを知れていないことは確か。それを教える義務を怠っているのではあるまいか？」

先程とは打って変わって、冷たい覇気を背負ったアインがサクソに代わってケインズに問いかける。

サクソの怒りとは真逆の、殺気を伴った冷たい感情にさらされ、背後にいるオペレーターは顔を青ざめさせ、歴戦の戦士であるサクソも一筋の冷や汗を流した。

しかし、その殺気をまともを受けているはずのケインズの表情に変化はなかった。

「はつきりと聞かせていただきたい。——アンデッドとは、一体なんですか？」

隠し事も誤魔化しも、そして何より嘘を許さないと鋭い視線で語り、アインはケインズの目を見つめ続ける。

冬の冷たさとは明らかに異なる、背筋の中から冷え切る冷気の中、女騎士と局長はじつと睨み合う。

沈黙を先に破ったのはケインズの方だった。

「君たちが知る必要はない。それについては、我々が調査を進めている」

これまでと同じ、アインたちに対して何も教えないスタンスを貫き、ケインズはデスクの上で指を組み合わせる。アインとの壁を表すそれを見つめ、女騎士は深いため息とともに視線を伏せ、殺気を収めた。

「……いいでしょう。この場は退きます。ですが、もし私に対して虚偽を働こうものなら、私は一管理局員として厳しく追求させていただきます」

一歩引き、ケインズとの距離を取り直す。

しかしすぐにキツと険しい顔でケインズを見据え、一公務員としての姿で釘を指す。自分は命を、そして剣を預ける立場にあるのだ。重要な情報を秘匿されたままではそれを預けたままにまできはしめない。ましてや多くの人々の命がかかっている状況で。

普通の人間であれば動けなくなるほどの殺気を二度に渡って受けたケインズは、深いため息をつくと肩をすくめる。

「方針は局長である私が決める。……その殺気を抑えろ、老体には響く」
「……失礼します」

最後まで殺気を身に纏ったまま、アインは敬礼するとケインズに背を向ける。

かつかつと音を立てて歩き去っていくアインをオペレーターが慌てて追いついてからサクソも後に続く。最後にケインズを睨みつけてからサクソが退出すると、ケインズは無言で椅子の背もたれに体を預け、大きなため息をつくのだった。

セキュリティゲートをくぐり、研究所を後にするアインたち。

「ずんずんと怒りをにじませて歩いていくアインの背中を見つめていたオペレーター
の女性は、ためらいがちに口を開いた。

「……さっきの言い過ぎだったんじゃない？」

「甘い。これほどの事態が起きているのに、未だに詳しいことを秘匿したままな
ど納得がいかん」

「そりゃそうかもしれないけど……あんな、局長を疑うみたいには」

口を尖らせるオペレーターだが、アインも自分の感情であれほど問いただそうとした
わけではない。

場所も役割も違えど共に戦う者、命を預ける相手として最低限の役目を果たしてもら
おうと、きつい口調で確認しようとしたただけだ。何よりも、ただ使われるだけの存在で
はないとわからせる必要もある。

すると、アインの斜め後ろを歩いていたサクソが、眉尻を下げた申し訳なさそうな表
情で話しかけてきた。

「アルデブラント……すまんな」

「なんの話ですか？」

とぼけた調子で聞き返すと、サクソは苦笑しながらアインの前に出て、その足を止めて向かい合う。アインが立ち止まると、自分の頭半分下にあるアインの目をじつと見つめた。

「お前が言わなければ、俺が局長に怒鳴りかかっていたかもしれん。……俺もお前と同じ気持ちだ」

「……………お心遣い、感謝します」

軽く頭を下げ、アインは同じ気持ちの同志がいることに安堵する。

同時に、関係者にここまでの不信感を抱かれるこの研究所に不安を感じる。隠し事をされたまま顎で使われるのは、どうにもアインの気性に合わなかった。

「今日は助かった。……次もこの調子で頼む」

「はっ！」

気持ちいいくらいに背筋が伸びた敬礼を向けると、アインに向かい合ったサクソも敬礼を返す。アインのような生真面目さを感じさせる硬いものではなく、歴戦の経験が生む余裕のようなものを感じさせる礼だった。

「では私は、地上本部に報告に戻ります」

「ああ……………では、また」

アインに背を向け、サクソは研究所の出口の方へと去っていく。

その背中にどこか迷いのようなものが見えた気がしてアインは首をかしげるが、やがて勘違いとも思ったのか自分も踵を返した。

「お前も早めに帰れよ。じゃあな」

「あ、うん。またよろしくね。今度はもつと落ち着いてオペレートするから!」

「期待しないでよくよ」

「あつ! それひどいんじゃないの?」

オペレーターの慌てっぷりを思い出し、苦笑するアインに彼女が抗議する。それほど付き合いは長くはないが、オペレーターの持つ気安さと距離感の近さがアインにも心地よく、オフの時は碎けた調子で語り合えるくらいにはなっていた。

「私だつてねえ、管理局最強の女騎士様がベストコンディションで戦えるようになっていつも頑張ってるんだからね? バカにしないでよ!」

「最強ね……その称号に一体どれほどの意味があるのやら」

「あるでしょう? だからこそ『ブレイド』に選ばれたわけだし」

アインは彼女の言葉に、懐からバックル型のデバイスを取り出して無言で見下ろす。

かの異形に唯一対抗できる力を行使できる特別なデバイス、ベルカともミッドとも異なる術式により起動するこのデバイスを、アインはまだ使いこなすことが出来ていない。魔法に似た効果を発動させるまでにラグが生じ、相手に隙を与えてしまうことが

多々あつた。

最強だのなんだのと言われても、剣を振り回すことしか能がないと自覚している彼女にとつて、今はその称号は重荷でしかなかつた。

「……まあ、やれるだけやってやるさ」

ずつしりとした手の上の重みと、肩にのしかかっているように幻視できる重^{プレッシャー}圧に苦笑しながら、アインはぐつと強く手を握りしめた。

6. 解かれた封印

「つつつだあああああやつてられつか!!?」

ガンツと半分以上を飲み干したビールのジョッキを机に叩きつけ、アインは荒ぶる感情を丸々表に出して荒れる。

平静を取り繕ってはいたものの、ふつぶつと湧き上がっていた不満は消しきれず、こうして時折酒の席で発散するのが通例となっていた。

友人の仕事時とプライベートのテンションの差に苦笑しながら、リンディはアインに困ったような笑みを向けた。

「ふくん、それで今呑んだくれてるわけねえ……」

「ああ……! 飲まなきややつてられんだろうが!」

「でもあなた、ウワバミだから呑んでも酔えないんじゃないやなかったかしら?」

「雰囲気は酔うんだよ雰囲気。というか言うな、虚しくなる」

大概付き合いで一緒に飲み続け、酔い潰されてから家まで送られているリンディは、この勢いなら明日も二日酔い決定であろうなと覚悟しながらもジョッキを口に運ぶ。長い付き合いだ、それぐらいの無茶ならたまに付き合っつてやるのも友人というものだ

と、無理やり自分を納得させながらだが。

「あの局長め……新顔だからかなぜかは知らんが、一方的に小娘と侮りおつて！ しまいにやほんとに欺瞞で逮捕してやろうか……！」

「やめなさいよ。あなたらしくもない」

つまみの漬物をバリバリと咀嚼しながら、行儀悪く片膝を立てるアインの言動を注意するも、アインの表情に変化はない。当然本気で言っているわけではなかったようである。

ぐいっとジョッキを煽って飲み干すと、アインは先ほどとは打って変わって、疲れ果てたような乾いた笑みを浮かべてリンデイを見つめた。

「お前だけだよ、リンデイ。気軽にこんな愚痴をこぼせるのは……事情を知っている知り合いの中でも特に口が固いからな」

「任務に守秘義務があるのって、大変よねえ。一緒に飲める人にも限りがあるんだもの」
「あと店にもな。ほんとはもつと汚くても安い店で楽に飲みたいのに、そんなところで話したらどこから話が漏れるかわかったものじゃない。お気に入りの店にも最近顔が出せんのだ、全く」

「あなた、ほんと難儀な仕事してるわよね……それにしても」

友人の今の仕事の不満に相槌を打ちながら、リンデイは端末に表示したページを見やる。今話している、アインの仕事場に関する記事だ。

「人類基盤史研究所、通称BOARD……人類がこの世界の覇権を握るに至ったルーツを解き明かす、って言われてもね」

「私も最初に聞いたときはそう思った。今だに目的がよくわからんのだ、あの職場は」

「アインもまた胡乱げにリンデイの端末の表示画面を見たり、不審げに眉を寄せる。」

一般に開示している主な研究内容はリンデイが言った通りで、次元世界的な生物学の権威であるビスタ・ヘヴンズロードがとてつもない財力で管理局を動かして設立させた研究機関である。

しかしその内容の秘匿性は過剰なほどに高く、一部の関係者以外には研究所の所在も非公開のまま数回移転を繰り返して、その上嚴重なセキュリティを通過しなければならぬほどの徹底ぶりである。重要な役割を背負っているはずのアインでさえ、閲覧できる情報は限られていた。

「それがなんであんな化け物どもと毎日毎日格闘せねばならんのやら……こういうのは武装隊の役割じゃないのか？」

「武装隊も武装隊で、今は人出不足が深刻だしねえ……」

「ああ、そういえば前にレジアス隊長……じゃなくて陸佐が愚痴っていたな……えらく不機嫌に」

「そのせいで私まで睨まれてるのよ？ 嫌になっちゃうわ」

「その辺は今では仕方がない。改善されるまで我慢しろ」

「ああん……もう、いけずなんだから。いいでしょ？ 私もあなたに愚痴ったって」

互いに軽口を叩きながらも、いえばいほど抱えている問題の多さにため息の数も多くなってくる。息抜きのつもりで集ったというのに、余計にストレスがたまっている気がして嫌になった。

「それに、長年連れ添った相棒が使えんのは痛い。渡されたデバイスはクセが強すぎるし、相棒は今や『足』だ。笑うしかないだろう」

「ブルースペイダーはそこるところどうなの〜？」

【R e g r e t t a b l e 誠 道 悔】

「そうよね〜」

「お前には苦労をかけていると思っているよ」

誇り高き青き女騎士の剣が、いまではただの移動手段としてき使われていることにリンディは同情する。自分はインテリジェントデバイスを持ってはいないが、長年連れ添った相棒の隣に新顔が横から割って入ってくる心境というのは相当腹が立つのだからと苦笑した。

アインも相棒に精神的負担がかかっていることに思うことがあるのか、どこか申し訳なさそうにそっぽを向きながらジョッキを傾ける。

別の話題で気分を変えさせようと視線を外していると、ふとあることを思い出してリンデイの方に視線を戻した。

「……そういえば、お前今度結婚するんだったか？ 相手は確か……クライド？ グレ
 アム提督の部下だったか」

「えっ……ちよ、ちよつと……もうなんで知ってるのよお!!？」

急に話を振られたリンデイは一瞬言葉を失い、すぐにリングゴのように顔を真っ赤に染め上げてブンブンと顔と手を振った。

恥ずかしがりながらも嬉しそうに口元を歪め、いやんいやんと体をよじる友人にいらつとしたアインはジト目を向け、今だに相手も交際経験もない自分と比較してけつと冷笑した。同い年のはずなのにどうしてここまで差がついたのだろうか、と世の中の理不尽を呪いながら。

「噂になってるぞ。所構わずいちやつくバカップルがいるって。あれお前らだろ。彼氏なしの独身女子どもを嫉妬で燃え上がらせてるってのお前らだろ？ あーあー！ 毎日毎日始末書に追われて男つ気の全くないわたくしどもには羨ましい限りですなあ奥様!!？」

「ヤダもう〜！ 奥様だなんて気がはいわよこの〜！」

「あ、だめだこれ。皮肉もきかん。というか都合のいいところしか聞いてないわこれ」

嫌味を言ったつもりだったのに、逆によく聞いてくれましたと言わんばかりに始まったノロケ話に、アインは激しい後悔を感じながらうんざりする羽目になった。

とはいえ、友人の吉報を喜ばない友などいない。鬱陶しいくらいにはしゃいでいる友人の奇行も今ぐらいいは目を瞑り、追加注文で運ばれてきたジョッキを掴んで高々と抱えた。

「ああもう、構わん！ 今日はどことん飲むぞ!!？」

「いいわよ〜じゃんじゃん持つてきて〜♪」

「リンディ……後悔しても知らんぞ……」

すでに良いで正常な判断がつかなくなり始めているリンディにジト目を向けながら、アインもぐいっと再びジョッキを煽るのだった。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

「うっぷ……酔わないからといって、さすがに飲みすぎたか……腹が重い……」

チャプチャプと中で音を立てる腹を押さえながら、アインは青い顔で夜道を歩く。酔う酔わない以前に、人間が飲み干せる水分量の限界を失念していたことを恥じるほかになかった。

だがそれも仕方がなかった。酔いが回ったリンディが、自分の結婚相手との日々を聞いてもいないのにのろけだし、全く解放してくれなかったのだ。

馴れ初めからデートの思い出、相手の男のいいところや惚れた理由、挙げ句の果てには初体験についてまで赤裸々に暴露され、皮肉のつもりで話題を振ったことを激しく後悔した。そんな微塵も自分の身にならないトークなど聞かされては、飲む以外にやっつけていられなかった。相手に悪意がないのが余計にたちが悪い。

「あいつめ……私に男つ気がないからと言つてバカにしがつて。………まあ、事実だが」

このまま家に帰つても誰もいないことを思い出し、つい最近まで考えたことのなかった独り身の寂しさというものを痛感する。

同期の女性局員たちを差し置いて一足先に妻に、そしていずれは母親になるのである。友人の笑顔を思い出すと、アインの足取りは次第にゆっくりになり、やがて止まった。「………家族か」

自分で言葉にしてみても、自分にはその温もりというものが微塵も予想できないことに気づく。辞書や書籍でその単語の説明を読むだけのような、無機質な感想しか持てないことに少し落胆する。

近いうちにそれを新しく手にするという友人の笑顔を見ても、アインの心はどこか乾いたままだった。自分には全く関係のない、例えるならテレビの向こう側の遠い物事のようにしか、アインは感じられなかった。

漠然とした物寂しさを感じるアインの元に、不意に通信が入る。ハッと我に返ってデバイスを手にしたアインは、それが研究所の職員からの通信と気づくとすぐさま頭を仕事モードに切り替えた。

「…どうした？」

研究所から連絡が来る場合など、アンデッドに関わる事柄以外にない。出勤要請と思つて戦闘体勢に入るアインだったが、聞こえてくる音声に違和感を覚えた。

普段ならオペレーターたちのクリアな声が聞こえてくるはずなのに、通信から届くのはノイズだらけの耳障りな騒音ばかり。その上ノイズの合間に聞こえてくるのは、職員たちの悲鳴や断末魔の叫び声。

明らかな異常事態に戦慄するアインの元に、ようやく判別できる声が届いた。

「……………よう、アルデブラント曹長!!? 助けてください!!? BOARDが……………研究所がアンデッドの襲撃を受けているんです!!?」

「なんだと……………?」

切羽詰まった悲鳴混じりの声に、アインも表情を変えて言葉を失う。

拠点を何度も変え、秘匿を重ねてきた研究所が突然敵に襲われたなど、すぐには信じられなかった。ましてや相手は人を襲うだけの不死の怪物たち。隠された拠点を探し出して襲撃するだけの思考能力があるとは思つてもみなかった。

【早くっ……早く助けーあ、あああ、きやああああ!!?】

「おい、しつかりしろ! おい!!?」

甲高い悲鳴とともに通信がぶつりと切れる。ノイズと「No communication」の文字が浮かび上がり、アインの拳がギリギリときつく握りしめられていった。どこかの何者か、なんの目的があつて研究所を襲つたかは知らない。

だが自分の仕事場に、そしてともに戦つてきた同士たちに危害を加えられるなど、自分の縁をこれ以上奪われるということは、アインには許容できなかった。

「ブルースペイダー!!?」

【Yes, sir!】

スピード型のペンダントを放り投げ、同時に走り出すと高く跳躍する。

ペンダントが光を発しながら無数のパーツを生み出し、空中で組み合わさつて一台のバイクに変貌して着地する。地面に降り立ったタイヤが高速で回転し、勝手に走り出したバイクにアインがタイミングを合わせて飛び乗る。

後輪を滑らせ、土煙を巻き上げながらアスファルトの上を爆走し、アインは研究所の方へと急ぐ。交通法規などいまは気にしている暇などない、手遅れになる前に敵の元へ向かわねばならなかった。

けたたましい警報ベルの音が鳴り響く。研究員や管理局員たちの悲鳴がこだまする。しかしそれらの声はやがて一つずつ途切れていき、耳障りな壊れた警報ベルだけが反響するだけになっていく。

門をバイクに乗ったまま蹴破り、内部に突入したアインはその光景に絶句する。

煙をあげる計器などの機械は無残に叩き潰され、激しい火花があちこちで発生して薄暗い中を照らし出す。白い壁は跡形もなく破壊され、研究員や職員のものと思わしき夥しい量の血痕がこびりついていた。サンプルが入っていたガラスケースは粉々に割れ、中の肉塊が腐臭を放ちながら溢れ出ている。

それはただ獣が暴走しただけではなり得ない、悪意を持って暴れまわった下手人の存在を思わせる惨状であった。研究者たちの努力を嘲笑い踏みこむかのような、施設と研究者に対する敵意を感じさせる跡が、まだはつきりと残っていた。

アインはよろよろと惨状を前にしてよろめきながら、すぐ近くに倒れている白衣の研究員の元にしやがんで体を揺さぶった。

「おい!!? どうした、何があつた!??」

返事は、なかった。

どろりと粘っこい鮮紅が研究員の体の下から広がり、膝をつくアインの足元にまで届く。ぐったりとしたままの体は冷たくなりかけていて、命の炎が当に尽きてしまつてい

ると嫌でもわからせてきた。

「なんなんだこれは……!?」

蘇る、自身の中のトラウマ。幾百もの戦いを超えてきたものが必ず経験する、同士との永遠の別離。

何度経験しても慣れることのない、慣れることを許さない、体の奥底に冷たい氷塊が入り込むような、心にぽっかりと穴が空いて冷たい風が吹き抜けるような嫌な感覚が、アインの中に再び芽生えていた。

「しつかりしろ!!? おい!!?」

片っ端から倒れこむ職員たち呼びかけ、目覚めさせようと声を張り上げ続けるアインだが、誰一人としてアインに声を返してくれるものはいない。

勤務後に冗談を交えて笑っていた者も、同じ店で飯をともに食った者たちも、時に意見を対立させてぶつかり合った者たちも、誰も二度と目を覚ますことはなかった。

「……畜生」

がくりと項垂れ、悔しさに険しい表情を浮かべるアインは、思わず床を殴りつける。

手のひらに食い込んだ爪が皮を破り始めた時、アインは惨状の中に残るかすかな呼吸音に気づいた。慌ててそれが聞こえる場所に急ぐと、自分のオペレーターが血を流して倒れている姿が目に入った。

自分の衣服が血に濡れるのも構わず、アインは女性を抱き上げて顔を近づける。溢れ出る血はすでに致死量に達し、小刻みに繰り返される呼吸はか細く、心音も徐々に弱くなつてきている。医者でなくとも、あと数分の命であることは察せられるぐらいの重症であつた。

「…何があつた」

「アン、デッドが……！ アンデッドが……襲つてきて……!!？」

オペレーターは未だ襲われた恐怖の中にあるのか、それとも血が足りていないのか青ざめた表情で、気を逸らせたまま必死に説明を試みる。

アインはオペレーターの体をきつく抱きしめ、なだめるように背中を叩く。その甲斐あつてか、狼狽気味の彼女は徐々に勢いを落ち着かせ、言わねばならないことを少しずつまとめていく。

それでもその表情は、恐怖と驚愕に彩られたままだつた。

「でも……でもまるで……マンダリン陸尉が……操つてみたいで……」
「そんな……まさか!?？」

信じられない報告に、アインは思わず腕の中のオペレーターの顔を凝視する。今際の際にある彼女に詰問しても意味がないことはわかっているが、それでも先ほどの言葉はすぐには鵜呑みにはできなかつた。

しかし女性の呼吸は荒々しく、隙間風のように乾いた儚げなものになって行く。目も焦点を外して虚ろになり、光がみるみるうちに失われていった。

「まだ……まだあいつが……!!？」

アインではない、別の何かの影を幻視したらしい女性は不意に言葉を途切れさせ、やがて糸の切れた人形のようにがっくりと力を失った。

だらりと垂れ下がる腕を凝視したアインは言葉を失い、ややあつてからオペレーター
の体をそつと廊下の隅の横たえさせる。恐怖の形に固まった顔に手をかざし、見開かれ
たままの臉をそつと閉じると、体温を失っていく手をきつく握りしめた。

「……………クソツ」

特別仲が良かったわけでも、長い時間を過ごしたわけでもない。しかしつい数時間前
までは確かに同じ時間を過ごし、言葉を交わし合っていた相手が二度と動かなくなった
姿を目の当たりにし、アインの心には癒えない傷が刻まれる。

二度とごめんだと思っていた冷たい感覚が蘇り、アインはしばらくの間その場から動
けなくなっていた。

そんな時だった。どこからか耳障りな昆虫の羽音が、無数に重なり合つて聞こえてき
たのは。

ゆつくりと虚ろな視線を上げれば、バッタのような昆虫が何百匹も群れをなし、それ

らが集まって一つの塊となり、徐々に人に似た姿に変貌していく光景が目に入る。

昆虫の外殻を思わせる刺々しいシルエツトに、普通の生き物では考えられないほど無機質で冷たい複眼が、アインをあざ笑うかのように見下ろしていた。

「貴様か……」

向けられる異形の見下されるような視線に、アインの目に光が戻る。熱く、そして冷たく燃え上がる怒りと憎しみの炎が、愕然としていた女騎士に凄まじい活力を与える。

自分から縁を引きちぎった凶賊を許すまじと、アインの深い悲しみまでもを力に変換していった。

「貴様がみんなを……よくもっ!!?」

アインの怒りに、ライダーシステムが自動的に従う。ラウズカードが挿入されると、デバイスの端から射出された真紅のカードが帯となり、アインの周囲を旋回する。

腰の前に尾錠が張り付き、アインの腰にベルトが巻かれると同時に奇妙な音が響き渡る。アインはそれを聞き流しながら、右手を前方に差し出す例のポーズをとり、勇ましく吠えた。

「変身!!?」

【TURN UP】

尾錠の全面が反転し、スペードの紋章シンボルが露わになると、アインの前方に半透明の青い

スクリーンが排出される。アインは甲虫の姿が描かれたそれに向かって突進し、貫きながらその身に騎士の鎧を装着した。

「ウエエエエエエイ!!？」

腰に提げた醒剣ブレイラウザーを抜きはなち、バッタの異形に向かって躍り掛かる。自身の魔力が溢れ出し、紫電を纏う長い刃が異形の甲殻に食らいつき、深い傷跡を刻みつけた。

アインは獣のような雄叫びをあげながら剣を振るい、自身の憤怒を叩きつけるかのように追い詰めていく。激しい雷の斬撃により不死の怪物の皮膚は灼け爛れ、煙と焦げ臭い匂いがあたりに立ち込めていった。

無論異形もやられてばかりではない。しかしアインの怒涛の攻撃を前に反撃の隙も見つけられず、徐々に徐々に研究所の外にまで追いやられていく。照明も破壊され、炎だけが照らす暗い庭園に弾き飛ばされ、異形は苦悶の声を漏らしながら芝生の上を転がっていった。

追撃を重ねようとしたアインだったが、不意にその足が縫いとめられたかのように止まる。

「——！ マンダリン陸尉!!？」

暗闇の中、建物の陰から半身を覗かせる見覚えのある鎧を目にし、アインは思わず剣

を下ろして言葉を失った。

ライダーステム・ギャレンの装甲を纏う銃士、サクソはそんなアインにも答えることなく、ただただじつと動揺する剣士を見つめるだけであった。

「そこで何をやってるんですか!?」

呼びかけても、数歩近づこうとしても何も答えない。何を考えているのかもわからない緑の複眼を向け、ただそこに立ち尽くしているだけであった。

アインに敵対する様子もなく、ましてや手助けをする様子もない。アインの戦いを観戦しているかのような様子に、アインの中で疑念がさらに膨れ上がっていった。

「……………仲間じゃ、なかったんですか……………!?」

そう問いかけるアインの元に、起き上がった異形が再び襲いかかってくる。硬い甲殻と足の筋肉を使った蹴撃を振るい、アインをも餌食にしようと向かって行った。

アインはそれを紙一重で躲し、反対にすれ違いざまに斬撃を食らわせる。邪魔をするなどと言わんばかりに振るわれる刃が異形に深々とめり込み、おびただしい量の緑色の血液を撒き散らす。牙の並ぶ口から漏れる甲高い絶叫も、アインには耳障りではなかった。

戦闘の最中、サクソは興味を失ったかのようにアインに背を向け、夜の闇の中に姿を消していく。その行動そのものが、アインへの拒絶をはっきり表しているかのように見

えた。

「なぜだ陸尉……………なぜなんだああああ!!?」

理解ができないゆえの迷い、行き場のない怒り、見捨てられたという悲しみ、あらゆる感情が己の中で混ざり合い、アインの剣を徐々に鈍らせる。信念を失いかけ、芯を失いつつある剣は鈍へと堕ちかけていた。

「ああああああああああ!!?」

怒りのままに、アインは剣に自身の持つ魔力をありつたけ注ぎ込む。嵐の落雷のごとき威力を纏った刃が轟きをあげ、空気を振動させる。

もはや技術も何も無い、やけくそのような魔力の奔流が辛うじて斬撃の形を成し、異形を丸ごと飲み込んでいく。異形は叫び声をあげる間も無く光と熱の渦の中に消えていつてしまった。

一瞬の閃光の後、焼け焦げた芝生の上に黒焦げになった肉塊が倒れこみ、だくだくと緑の血を吐き出して転がる。そんな姿になっても異形の体は再生を始め、焦げ臭い匂いと黒い煙を上げながら元の形を取り戻そうとジユクジユクと肉を蠢かせていた。

「ハアツ……………ハアツ……………」

アインは剣の柄を展開し、表面に何も描かれていないラウズカードを抜くと、ピクピクと痙攣している異形に向けてそれを投擲する。

カードが突き刺さると、異形は緑の光に包まれながらぐにやりと体を歪め、平面の中に吸収されていく。その姿が完全にカードの中に消えると、それはクルクルと回転しながら宙を舞い、アインの手の中に戻ってきた。

先ほどまではなかった、一匹のバッタのモンスターが描かれたラウズカードを見下ろし、アインは険しい表情で歯を食いしばっていた。

ほぼ完全に崩壊した研究所の中で、数少ない機能を保ったままのPCの中身を確認し、アインは眉間にしわを寄せる。

職員や研究者たちが長い時間をかけて収集してきたデータがほとんど吹き飛んでしまっている。辛うじて残っているのは、所内の監視カメラの映像や、異形ではなく所内の人間に関わる一部の情報だけであった。

「……残ったデータは、これだけか」

残されたデータの中には、サクソと所長の姿が映った監視カメラのものがあった。

アインも報告に訪れたことのある部屋で、何やら大声で口論を繰り広げる様子のサクソとケインズ。ノイズが酷く、話している内容もほとんど聞き取れないが、サクソがケインズを糾弾している様子なのはわかった。

そのほかに残っていたのは、鎧を纏ったサクソがケインズを気絶させ、どこかへと連

れ去っていく映像。理由はまだわからないが、サクソに何か思惑があることを表している。

もしこの後異形の襲撃があつたのなら、その要因にサクソが関わっているというオペレーターの見撃情報とも一致する。

「……嘘だと言ってくれ。陸尉……」

疑う余地はない、しかしそれでもアインは、ともに戦つた上司のことを敵だと断定することはできなかった。できれば目の前で、関係などないと断言して欲しいのに、もう彼はどこにもいない。

残された血と煙の匂いが、アインの精神を蝕んでいくかのように感じられた。

7. ハートの弓士

「ふうん。それで行くところをなくして、私のところに転がって来たってわけね？」

とあるマンシヨンの一室。地球の和室のような装飾の施された部屋で、座布団の上に座ったリンデイがこたつの中で足を崩し、同じく座布団の上にあぐらをかくアインを見つめる。

棚の上におかれているししおどしやらダルマなどを物珍しそうに見ていたアインは、心配の色を濃く見せるリンデイに申し訳なきように眉尻を下げる。

「すまん。お前も忙しいだろうに」

「まあ……あなたは色々敵が多いものね。他に頼れるところがないのは仕方がないとは思うけど」

「陸の私と仲良くしてくれるお前には感謝している」

リンデイはアインと自分の前に湯呑みを置き、急須からとほとほと緑茶を注ぐ。ほくほくと湯気を立てるそれをアインは一気に飲み干し、未だ混乱の中にある精神を幾分か落ち着かせることができた。

熱湯を何のためらいもなく飲み干したアインに、リンデイはひくひくと頬をひきつら

せる。対する彼女も角砂糖を次々に緑茶の中に放り込んでいる様にジト目を向けられているが、互いに普段通りのことであるために特に何も言わなかった。

「それで、BOARDは結局どうなっちゃったの？」

「……それが妙でな。研究施設の跡地は夜明け前には局の者に占拠されていて、関係者のはずの私も入らせてくれなかったんだ」

「何それ……確かに変ね」

「上の方で何か働きがあったようなのは確かだがな」

憎々しげにそう吐き捨て、アインは腕を組んで壁に背を預ける。何から何まで今回の襲撃には謎が多すぎた。

拠点を転々として情報を極限まで秘匿し、謎多き資産家ヘヴンズフォードが出資し、管理局が人員を向かわせることで組織として成り立っていたBOARD。不意の襲撃の直後にしては管理局のその後の動きは非常に早く、まるで壊滅を予測していたかのような迅速な対応だった。

アインが自分の立場を提示して侵入しようとしても梨の礫で、何か都合の悪い事実を秘匿しようとしている様子に嫌でも疑問が深まる。

「まあ……仕方がないから私も、使えそうな資材を探して拝借させてもらったがな」

「ブツ……!?？」

してやったりといった笑みを浮かべて鼻を鳴らすアインの言葉を聞き、リンディは砂糖まじまじの緑茶を思わず嘔きこぼす。

聞き捨てならないことを聞いたが、できれば聞き間違いであつて欲しかった。何を正義の組織の一員がとんでもないことをやらかしてくれちやつているのだろうか、この最強の剣士様は。

「あなたそれ……重大な違反行為じゃないの？」

「バレなければ犯罪ではない。それにな、私はれつきとした関係者で、アンデッドを狩れる数少ない戦士だ」

「……あなたつて人は」

リンディは心底呆れ、ガツクリとコタツの上でうなだれる。

多少問題を起こしたところで、この女騎士は一向に気にしないだろう。自分の信じた道を迷わず突き進むと言う表現は耳に心地よいが、実際目にしてみれば我の強い嵐のよきな人間である。

上司の不正が関わつていようが、自分の首がかかつていようが御構い無しに、周りを巻き込んで暴れまわる剛の女なのだ。リンディもその性格に振り回されることがしばしばあり、矯正や自重などはとうに諦めている。

なによりも、それでしつかり結果を見せ続けていると言うのがタチが悪い。アインの

いまの地位も昇進と厳罰を積み重ねた結果で手に入れたものだった。

「それで？ その機材はどうしたのよ？」

「どうも何も、この部屋の前に置かせてもらっているに決まっているじゃないか」

「……………え？」

アインの何を言っているのかと言わんばかりの表情に、てつきり自分の家でも運んだものだと思っていたリンデイは、嫌な予感がしてその場で凍りついた。

一瞬頭が真っ白になるが、気合を振り絞ってアインの方に視線を向ける。錆び付いた人形のようにぎこちない動きで、不敵な笑みを浮かべているアインを凝視した。

「ま、まさか……………あなた！」

戦慄の表情を浮かべ、こたつから抜け出して後ずさるリンデイに、アインはにっこりと満面の笑みを浮かべた。

女騎士の向けるそれは世にも珍しい明るく爽やかな笑顔であったが、リンデイにとっては悪魔の微笑みにしか見えなかった。

「君のような勘のいい友人は大好きだ♡」

「いやあああああ!?？」

頭を両手で抱えて天を仰ぎ、リンデイは全力の絶叫をあげる。

膝をついて天を仰ぎ、両手で頭を抱えるその姿は、天から何かしらの通告を受けて絶

望する罪人のような雰囲気に見えた。

「今朝うちに来た時から嫌な予感してたのよお!!? ああこいつ絶対面倒ごと押し付けに来たってえ!!?」

「日頃の信頼の賜物だな、はっはっは」

「笑い事じゃないわよお……!」

打ちひしがれながら、リンデイは恨みを込めた目でアインを睨む。が、何を言っても無駄であると察してガツクリとうなだれてしまった。

長い緑の髪を垂らして顔を隠し、しばらく黙りこくっていたリンデイだったが、やがてどこか吹っ切れたようなため息をつき、顔をあげて髪をかきあげた。その表情には、完全な諦観が浮かんでいた。

「……はあ、もういいわよお。やればいいんでしょやればあ」

微笑みながら、アインは内心でほっと安堵する。ここまでの事態に協力してもらおうなど、開口一番に断られる可能性が多々あったために強引な手段を取ってしまったことを申し訳なく思う。

それに、長い付き合いの友人を巻き込むことに躊躇いがなかったわけではない。だが頼りが他になかったことも事実だった。

「それで? 一体どんな機材なわけ?」

「ああ。アンデッドサーチャーと言つてな、アンデッドの出現場所を直ちに知らせてくれる優れたのだそうさ。ただし、アンデッドが暴れ出した時にしか機能せんがな」

「要するに、オペレーターの代わりにやれつてことなのね……はいはい、了解」

リンディはもはや全て諦めたかのように肩を落とし、幽鬼のような足取りで部屋の外に向かう。

アインもそれについていき、自分が積んでおいたダンボールの山を崩して中身を取り出していく作業を始めた。

「どうだ？ 使えそうか？」

「……うん。重要な部分は傷ついてない。使い方もそこまで複雑じゃないし、いけるわ」
数十分後、リンディの部屋の一部を借り、BOARD跡地から拝借した機材を指示通りに組み立てたアインは、リンディにプログラムの再構築を行なってもらっていた。

渋々ながらも、リンディも初めて見る装置を興味津々に凝視し、無事なプログラムを立ち上げてなんとか使える程度まで仕上げて見せた。

「はあ、これで私も犯罪者の仲間入りね。嫌になっちゃうわ」

「すまん。手間をかける」

「いつものことですよ？」

リンデイが皮肉をこぼすとアインは苦笑する。局に入ったばかりの頃から自分たちはよく関わり、互いを頼つたり頼られたりしながら多くの事件に首を突っ込んできた。

命に関わる事件も数多く、相手を巻き込んだ割合も圧倒的にアインの方が多いものの、その結果は二人とも満足できるものが多く、この関係に悪い気はしていなかった。アインとリンデイにのみ許された絆が、それを可能にしていた。

「今の所は反応はないわね。……とりあえずあなたは、シャワーでも浴びて来てちょうだい」

「ん？ ……ああ、別にいいよ」

「あなたは良くても私は気になるのよ！ ほら！ さつさど行つて来なさい！」

しっしつと野良犬でも追い払うような仕草で追い出されたアインは、困り顔でその部屋を後にする。

デバイスや機械にそこまで通じていないアインではそれ以上の手伝いはできない。巻き込んだ側なのに任せつきりになってしまうことを内心で詫びながら、アインはリンデイの言葉に甘えてシャワールームへと向かった。

(……あいつには、気を遣わせてばかりだな)

リンデイも本当にアインの汚さを指摘したわけではあるまい。研究所を追われて、上司の裏切りを目の当たりにし、休む間も無く着の身着のまま自分の元を頼つてきた友

人に対する、せめてもの配慮なのだろう。

戦闘によって若干の汗を吸った衣服を脱ぎ捨て、適当にたたんで床の隅に置く。一人分のスペースのシャワールームに入ると、蛇口をひねってノズルから噴き出す温水を頭から勢いよくかぶる。

豊満ながら引き締まった長身の肌と、長くボリュームのある蜂蜜色の髪を余すことなく濡らし、アインはじんわりと広がってくる熱に安堵の息を吐く。

適度な暖かさの流水で洗い流されたお陰か、だいぶはつきりとものを考えられるようになって来た。

(あの人は一体、なんのためにこんなことをしてかしたんだ…)

ぐちゃぐちゃになっていた脳内の情報から、自分の感情からくる余計な主観が削ぎ落とされていく。裏切りによる悲しみと怒り、仲間の喪失による恨みと苦しみ、そして予想できない事態への不安と迷いが洗い流され、自分の目で見た情報だけがそこに残される。

だが極限まで情報を秘匿してきた組織の末端でしかないアインには、その情報を有効に活用できるほど事態を把握できていなかった。

(奴らは……一体何処から来たんだ。何をしに現れたんだ！ 何のために存在しているんだ!?)

ごっつん、と壁のタイルに頭をぶつけ、アインは俯いた。

是が非でも所長から真実を聞き出していなかったことが悔やまれる。いずれ、そのうちと問題を先送りにした結果、多くの大切なものを失い、指針さえ見失うことになってしまった。

その選択をしたのは自分で、その結果こんな事態を引き起こしたのは——自分だという事実には吐き気がした。

「私は……………何の為に戦ってきたんだ」

自問しても、答えは帰ってこない。道を見失った選士など、戦う理由を見失った騎士の剣など、不安定なただの凶器ではない。

流れ続けるシャワーの湯に濡れながら、アインは歯を食いしばり、拳を握りしめて激情を発散させるしかなかった。

その時だった。

「アイン！ アンデッドサーチャーに反応が出たわ！」
「！」

リンデイの興奮気味な声に、アインは弾かれたように顔をあげてシャワー室を飛び出した。体を拭くことも忘れて機材を運び込んだ部屋に入ると、目を瞠るリンデイの後ろからアンデッドサーチャーの画面を凝視した。

地図が描かれた画面の一点に、点滅する円が表れている。強い反応を示しているそれは、これまでアインが追いつけてきたものたちの同類と同じ反応であった。

「どこだ!!?」

「天文台……この近くね!」

「すぐに行く!」

「ええ……つてまずは服を着なさい!!?」

生まれたままの姿で突撃しようとするアインを必死に止めるリンディだが、無駄に力の強い友人を止めるのは予想以上に力が必要だった。

◆? ◆? ?? ◆?

小高い丘の上にある天文台は、すでに地獄と化していた。

計器などに影響を及ぼしかねない電波などの影響を遮るために、街から離れて設立されたそこは自然が多く、夜空だけではなく遠足や行楽目的での利用者も多く訪れていた。

そんな彼らは今、ピクリとも動かずものも言わぬ骸と成り果てていた。

施設の壁にはべつとりと鮮血がこびりつき、大勢の人間が積み重なるように倒れ伏している。苦悶の表情のままうつ伏せになっているものもいて、その凄惨さが一目でわかった。

それを見下ろしているのは、緑と赤に彩られた植物のような人型の異形。全身に巻きつく棘の生えた蔦や、花びらのような突起はバラを思わせ、触れるだけでその身を傷つける危うさを感じさせた。

凄惨な殺人現場を悠々と歩く異形は、どこからか近づいてくる機械音に気づいて足を止める。危険生物がいる場所に、好き好んで近づいてくる愚か者はそうそういないはずだと、異形自身も理解していた。

そして異形が待ち構えるその場に、坂道をバイクで駆け上がったのは、BOARDのジャケットを羽織ったアインとその後ろに乗るリンデイの二人だった。

「よお……出たな、化け物」

「……あんな怪物が、この世界に」

脱いだヘルメットをリンデイに預け、アインは目当ての怪物を睨みつける。対する植物の異形も乱入者を忌々し気に見据え、シウルシウルと体中の蔦を伸ばして威嚇を始めた。

リンデイが離れた場所に避難したのを確認し、ベルトとカードを取り出しながら、アインは自身の中で激情が燃え上がるのを感じる。BOARDが壊滅した時よりも大きく熱く燃える怒りが、雷となって周囲に漏れ出すのを尻目に、女騎士は鋭い視線で敵を射抜いた。

「よくもまあ、好きただけ暴れてくれたものだな……その首、おとなしくよこせ」
 「——!!?」

アインの目が、下等な人間が向ける目が気に入らなかつたのか、植物の異形は声にもならない咆哮を放ちながら自身の蔦を勢い良く伸ばす。矢のように鋭く速く、あるいは鞭のようにしなる蔦が一斉にアインに襲い掛かる。

アインはそれらの攻撃を最低限の体運びで交わし、腰の前にカードを装填したバックルを装備してレバーを引いた。

「変身!!?」

【TURN UP】

バックルの全面が反転し、アインの前に半透明なスクリーンが出現して盾となる。蔦の猛攻を弾くそれに向かって突撃し、アインはその身に騎士の鎧をまとうと、腰に佩いた剣を抜いて猛然と斬りかかった。

「ウエエエイ!!」

襲い掛かる蔦を片っ端から切り捨て、細切れにしながら植物の異形に斬りかかる。無数の蔦がアインを絡み取ろうと伸びてくるが、鋭い刃や鍛えられた臂力によつてそれらは悉く引きちぎられ、アインの勢いは全く止められない。

通常の魔法攻撃では相手にならない異形の表皮も、アインのライダーシステムの力は

有効なようで刻まれた破片が周囲に積み重なっていく。

異形の目前にまでたどり着いたアインの刃が異形の表皮を切り裂くと、緑色の体液を吹き出してたたらを踏む。正面切って戦う力よりも、相手を拘束する力に長けているらしく、異形はアインの猛攻に太刀打ちできずにいるようだった。

このまま畳みかける、そのつもりで剣を振るい続けていたアインだったが、視界の端に入った者と聞こえてきた声に、その動きを止めてしまった。

そこには、一人の幼い少女がへたり込んでいた。母親らしき、意識のない女性の傍らに座り込み、目をぬぐいながら盛大な泣き声を上げていた。母親に庇われたのかその身に目立った外傷はなかったが、その声はあまりに目立ちすぎた。

「しまつ……いー！」

異形の目が少女の方を向いていることに気づき、アインは焦る。一瞬にやりといやらしい笑みを浮かべたように見えた異形の首元から、勢いよく蔦が伸びるのを目にした時、アインの体は思うよりも先に動いていた。

少女のもとに蔦が向かうより先に、その直線状に体を割り込ませる。蔦は標的を変更し、アインの首に巻き付くとギリギリととてつもない力で締め上げ始めた。

「ぐっ……あああ!!？」

頸動脈を決められ、呼吸が止まりかけてアインの意識が遠のく。額や首筋に血管が浮

き立ち、アインの表情が苦悶にゆがむ。

異形はその様を実に愉しそうに見下ろし、鳶にさらに力を込めていく。バタバタともがき苦しむアインの長身が持ち上げられ、自分の体重までもが圧迫の苦痛を強めていく。

泣き叫ぶ少女と倒れた女性のもとに駆け寄ったリンデイは、予想外の苦戦をするアインを見ると悲痛の表情を浮かべる。自分の知る中で最も強い剣士であるアインでも歯が立たない相手など、他の誰もかなうとは思えなかった。

「アイン！ もう無理よ！ 一旦出直しましょう！」

「……それが、できればっ………苦労は、しないっ!!」

少女を抱きかかえ、撤退を薦めるリンデイだが、アインにはそれどころではない。今ここで異形を抑え込んでいなければ、標的は戦えないリンデイたちの方へ向かう。

だからこそ今この場で体を張っているが、止まりそうな呼吸で自分も限界に達しかけている。その葛藤さえも異形は楽しんでるようで、アインは悔しさと憎たらしさに一層顔を歪める。

鳶と剣の柄を掴む腕から、徐々に力が抜け始めていた。明確な死の予感よりも先に、自分が倒れた後に狙われるリンデイたちのことを案じながら、アインの意識が離れようとしたその時だった。

「変身!!?」

【CHANGE^{チェンジ}】

聞きなれぬ声が聞こえたかと思つた直後、アインの首を絞める鳶が何者かに両断された。

突然の事態に戸惑いながら、アインは異形が怯んだ隙に距離を取つて後退し、首に巻き付く鳶を無理矢理引きちぎる。そして、目の前に立っている存在に瞠目した。

黒いライダースーツを身にまとい、その上から鎧をまとつた男性らしき騎士。金色の模様が入つたその甲冑を支えているのは、分厚く鍛え上げられてると一目でわかる逞しい身体で、圧倒的な存在感を見せている。腰に巻かれているのはハートを模した装飾のついたバックルで、アインのベルトとよく似た印象を抱かせる。

顔を覆うのは赤いハートの形をしたバイザー、額からは昆虫の触角のような突起が生えている。物々しい形相は、凶悪なカミクリムシを思わせるものであった。

その手に下げられているのは、銀と金、紅に彩られた弓。持ち手の左右につけられた緑の宝玉と弦の部分が片刃の剣のようになったそれが、鋭くも美しい輝きを放つていた。

「■■■■■■■■■■……!!」

ハートの弓士は何か、アインには聞き取れない言語のようなものを発し、植物の異形

を睨みつける。ハートの弓を構え、まるで脅しつけているように見えた。

対する植物の異形はそれに激昂したように肩の部分を怒らせ、弓士に向かって蔦を伸ばす。言葉こそわからなかったが、弓士が異形に対して何か不都合なことを告げたのだという事はわかった。

ハートの弓士はその攻撃をややすと躲し、伸びた蔦を弓の刃で切り裂く。そして、ベルトのバックル部分を取り外すと弓の先端に装着し、ベルトのホルスターから一枚のカードを抜き出し、バックルの中心のスリットに差し込んでスライドさせた。

〔TORNADE〕

アインのデバイスと全く同じ野太い電子音声飛び出すと同時に、カードが光となって弓に吸収される。力を吸収させた弓がその先端に風の矢を作り出し、ハートの弓士はそれを植物の異形に向けて構えた。

「……お前はもう、眠れ……!!」

そんな声が聞こえると同時に、弓士は備えた矢を異形に向けて放つ。鋭く尖った風の鏃が異形の胸の中心に突き刺さり、その体を射抜く。

「——!」

強烈なダメージを負った異形は絶叫を上げ、それでも死ねない苦悶を表すように悶えながら後ずさる。その直後、異形の腰に巻かれていたベルトのバックルが左右に分か

れ、緑色の光が漏れ出し始めた。

弓士はそれを確認すると、ベルトのホルスターからも一枚のカードを抜き、異形に向かつて投げる。空中を切り裂くように回転しながら飛ばされたカードは、異形の胸の中心にナイフのように突き立てられる。

するとこれまでアイン達が行ってきた時と同じように、異形が緑色の光に包まれながらカードの表面に吸収されていく。その体が完全に平面の中に封じ込められると、カードは勝手に弓士の手元にまで戻っていった。

異形を封印したカードをホルスターに戻すと、弓士はその場から興味を無くしたように視線を外し、アイン達に背を向ける。だが、その足をアインが「待て！」と呼び止めた。

「お前、何者なんだ？ 私たちと同じライダーなんだな？」

「……………」

カードを媒介に力を使い、不死の異形を封印する。

それができるのは自分を除けばサクソだけであるはずなのに、目の前の戦士はさも当然のようにその戦い方を熟知している。アインにはそのことを見過ごすことはできなかった。

「私たちの味方なの——」

問いかけるアインに向けて、弓士が動いた。アインの方に爪先を向けすたと速足で近づきながら、バイザー越しに鋭い眼差しを向けてくる。

警戒するアインのすぐ目の前まで彼は迫ったかと思うと、突如ハートの弓士は自分の弓を振りかぶり、アインに刃を叩きつけた。

「ぐあつ!?」

「アイン!!」

アインの鎧に火花が散り、衝撃でアインの体が吹き飛ばされる。先の攻防による負傷もそうだが、完全に意識外の攻撃をまともに受けてしまい、受け身もうまく取れずに地面に転がされる。

倒れこんだアインのもとにリンデイが駆け寄るが、アインはその手を押しのけて弓士を睨みつける。路傍の意思でも見下ろすような目に、アインの中の疑念と怒りが膨れ上がった。

「何を……する!?」

「全てが俺の敵だ……お前もな」

吐き捨てるようにそう言うと、弓士はアインに背を向けて歩き出す。

そのそばに、一台の黒いバイクが停車する。弓士と同じデザインの手車は、自ら意思を持っているかのように弓士のもとに付き従い、彼の前で待機する。

無言でその座席に座った弓士はもうアインの顔を見ようともせず、何より戦えなくなった女のことなど気にも留めず、アクセルを噴かせるとさっさと惨状を後にしてしまふ。

残された二人は、その背が見えなくなるまで呆然と立ち尽くすほかになかった。

「アイン！ 大丈夫なの!!？」

「ぐっ……くそ!!？ あの野郎……ふざけやがって……!!？」

ぶつける相手を失った怒りを抱えたまま、アインは口汚く罵倒の言葉を漏らす。

幾つもの謎と新たな邂逅を終えるも、先の見えない闘いの日々は始まったのだった。

◆? ◆? ?? ♣?

「うぐっ……」

「じっとして……すぐにすむわ」

顔をしかめるアインをなだめ、リンディは手早く包帯を巻いていく。

異形の魔の手から生き延びた負傷者たちを誘導し、二人は丘のふもとの病院に世話になつていた。

異形による蹂躪の被害は思ったよりも大きく、病院の席に全員が座つてもまだあまりが出るほど。それだけ生き残つたと言えば聞こえはいいが、それだけしか守れなかったというのがアイン達の正直な感想であった。

手当てを終えたアインは包帯をさすりながら、唯一意識を保ったままあの場にいた少女の方へ向かった。

「では、改めて話を聞かせてもらおうか？ あそこで君は何を見た？ 思い出せることはなんでもいい、言ってくれ」

「！ うう……」

じつと強い目で見つめられ、茶髪で一、二歳のかわいらしい女の子は怯えたように首をすくめ、同じく手当てを終えた母親に縋りついた。

母親に申し訳なさそうに頭を下げられ困惑するアインだったが、ふいにその頭にリンデイの拳骨が落とされた。

「こらアイン！ あんたつてば取り調べじゃないんだから……」

「ムウ……」

不満げに唇を尖らせながら、アインは渋々リンデイに場所を空ける。

すっかり委縮してしまった少女に、アインに変わってリンデイが優しい気な微笑みを浮かべて向き合った。

「お嬢さん、お名前はなんていうのかしら？」

「……エイミイ」

「エイミイちゃん……いい名前ね。ごめんなさいね？ このお姉さんは目は怖いけど、

中身は無害だから怖がらないであげてね？」

「うるさい。一言余計だ」

アインの低い声に、少女はまたびくつと体を震わせる。

リンデイは今度はゆっくりと微笑を浮かべたまま振り返り、アインをじつと見つめる。しかしその目は笑っておらず、ゆらゆらと揺れる髪が異様な迫力を醸し出していて、アインは思わず居住いを正した。

リンデイは怒りを収め、再び少女に向き直ると、今度は二枚の紙を取り出して尋ねる。バリアジャケットを纏ったアインとサクソの鎧のスケッチだ。

「エイミイちゃんを助けてくれたのは、この人？」

「ううん。おかがはあのかたちをしてたよ」

「……奴だな」

「ええ……ほかに、思い出せることがあったら教えてくれる？ お姉さんたち、その人に

ちゃんとお礼を言っておいてあげたいの」

「うん！ わかった！」

リンデイの質問に、少女はどこか興奮気味に答えてくれた。広く知られた正義の組織である管理局の力になれることがうれしいのだろう。

時々話が脱線しそうになるのを、リンデイはうんうんと微笑まし気に頷きながら、内

容を事細かにメモしていく。

集められていく情報を見ながら、アインは険しい表情で唸った。

「……私の知らない、ライダーか」

「ねえアイン。ライダーシステムって、いくつ用意されていたの？」

「私とマンダリン陸尉のものを合わせて……3つだったはずだ。もう一つは確か適合者が見つかっていないかったとかで、見たことはないが……」

めぼしい情報を聞き終えたリンデイが尋ねるも、アインには心当たりが全く見つからない。

結局、謎がまた増えただけで何もわかったことはなく、状況は全く好転していないことに落胆するほかになかった。

そこへ、ズイッと無遠慮に包帯が付き出され、アインは目を見開いて振り向いた。

「……これ、追加の包帯です」

「あら、ハジメ君……ありがとう。もう休んでいいのよ？」

「いえ、まだほかにも負傷者の手当てが残っているのよ」

そう答えるのは、背の高い一人の青年だった。線の細い顔立ちながら、逞しい体つきをした若い男が、仏頂面でエイミイの母に包帯を届け、傷口に包帯を巻きつけていった。

先ほどまでは見ていなかった男の登場に驚きながら、アインはふと母親に尋ねる。

「……彼は？」

「最近この辺に住むようになった、ハジメ・アイゴくん。うちの子供たちの面倒も見てくれるいい人よ？」

「へへ。……どつかのお姉さんとは大違いね？」

「黙れと言っているだろうに」

いちいち茶化を入れないと気が済まないのかときつく睨みつけるが、リンディは舌を出しておどけるだけで気にしている様子はない。

彼女なりの場の和ませ方だとはわかつてはいるが、他はともかく今の自分にされては腹が立つただけだという事を分かかってほしかった。特に、不甲斐ない自分にもだが、こんな状況になっても動く気配のない管理局に対する憤りも感じる自分には。

「それよりもリンディ。本局の動きはどうなっている？ 民間人への被害が開始しているというのに、動く気配が全くないようだが？」

「私にそんな目を向けないでよ。ちゃんと報告したわ。……でも、まだ動いたという話は聞かないわ」

「一体何をやってるんだ、あの連中は……」

不機嫌に顔をしかめ、ぼやくアインだがそんなことで状況が好転するわけではない。局の連中の腰が重いのはいつものことで、入局当初からわかりきったことだからだ。

ひとまずこの場での役目を終える必要があると、アインは負傷者全員の目に留まるように立ち上がり、声を張り上げる。

「皆さん！ 現在、例の怪物についての調査、および今回の事件の真相については我々が追及していきませんが、皆さんもどうか注意してください……念のため、なるべく外出は控えてください。……この度は、我々の対処が遅れて多大な迷惑をおかけしてしまつたことを謝罪します。申し訳ありませんでした」

どこにいるかもわからない異形に、現れたら即座に対処するだけで手一杯ではあるが、市民にとってはそのような事情など関係がない。巻き込まれただけの彼らにとつては、口先だけの謝罪など何の意味もない。現に今生き残っている者以外に、亡くなつた者が大勢いるのだから。

しかしそれでも、怒りのはげ口としてアインは深く頭を下げる。それにリンディも続き、不満や怒りを可能な限り受け止める覚悟を見せた。

罵倒や八つ当たりの声はなかった。しかし負傷者の大半は、局員が立つた二人しかこの場にいらないことに思うところがあるようで、冷たい視線を二人に向けているのが見ずとも分かった。

「……では、我々はこれで」

「あ、あのー！」

避難の視線を背中に受け止めながら、アインがリンデイの背中を押し、その場を後にしようとした時、椅子から立ち上がって呼び止める音が響いた。

振り向いてみれば、エイミーの母が申し訳なさそうな表情でこちらを見つめてきている。エイミーはどこか、周りの大人たちに不安げな目を向けていたが、やがて真剣な表情でアインを見つめ、やがて深々と頭を下げた。

「この度は……本当にありがとうございました！」

「おねえちゃんたち、ありがとう！」

母親の、他の感情を押しつけて送られた感謝の言葉と、エイミーのまつすぐな思い。思わぬ言葉を受けたアインは面食らったように硬直し、すぐに気まずげに目をそらして背を向けた。

背後でぶんぶんと手を振る少女も見えないふりをし、気恥ずかしさと情けなさから早歩きになるアインを、リンデイは苦笑しながら追いかけた。

「……ありがとう、か」

くすぐったい気持ちになりながら、アインはその言葉を反芻する。

その言葉を求めていたわけではないが、避難さそしりを覚悟していた時にそんな言葉を受け取ると、心が満たされるような不思議な感覚に陥ってしまった。

だがふと、それとは別のことが思い浮かぶ。

「アイゴ…ハジメ、か」

なぜだかアインには、その男のことが気にかかって仕方がなかった。

彼の目には、人を寄せ付けまいとする壁のようなものを感じた。実際アインやリンデイに対しての目は友好的なものではなく、反対に敵意に似た拒絶の意を感じるのも確かだった。

正直アインも、近寄りたいたとは思わなかった。しかしそれでも、放っておけないような、近くにいななければならないような、そんな気がしていた。

これが二人の、ファーストコンタクト初邂逅だった。

8. 彼らは舵を取る

「……………ずいぶん、懐かしい夢を見たものだ」

爽やかな潮風に包まれる心地よさを堪能しながら、アインは目を覚ました。

気だるさが残る体を起こし、コキコキと首を鳴らして肩をすくめる。疲労が抜けきっていないのか、今だに夢の中にいるかのような曖昧な感覚の中で、ぼんやりと虚空を眺める。

少しの違和感に視線を下ろせば、そこには以前と変わらない自分の右腕が目に入っ
た。

「……………ようやく、半分元どおりだな」

何事もなかったかのように自分の肩から生えている腕を目の前に掲げ、アインはため息をつく。最近はあるほどまでの損壊を受けることなどなかったために、自分の中の感覚がずれていたらしい、と苦笑する。

異常な現象を当然のように見上げていたアインは顔を覆い、余計な時間を使ってしまったことを後悔する。

今になって、もっと他に取れる手段があったのではないかと自問した。

（余計な時間を費やしてしまった……まあ、あいつらもデバイスを破損させていたのは不幸中の幸いだったか）

自分の今の教え子と、敵方にいる少女のことを思い出し、それほど離れてはいないことに安堵する。

ジュエルシードの反応がここ最近現れなかったことも不幸中の幸いで、時の運に感謝する他になかった。

「……いや、もつと警戒すべき連中がいたな」

だが安心ばかりもしていられない。前回と今回、二度に渡って現れた蟲兵の存在が頭から離れない。

なのはやユーノにはまだ詳しくは説明していないが、あれはこの世界に、いやどこにも存在しているはずのない異形たちだ。出現した理由も目的も定かではない以上、油断は命取りになる。

アレの出現が自然現象なのか人為的なものなのか、それともただ似ているだけで、偶然この世界に迷い込んだものなのかもわからないため、アインの懸念は尽きることはなかった。何かとつてもない自体が動き出そうとしているのではないか、そんな虫の知らせのような予感が、アインの中で耳障りなほどの騒ぎ立てていた。

「I, m s o r r y t h e p l a c e o f t i r e d .」

「なんだ？」

虚空を睨みつけていたアインに、ペンダント状態のブルースペイダーが遠慮がちに話しかけてきた。

普段ならもつとフランクに報告も連絡も相談もこなす相棒の様子の変化に、アインは眉を寄せながら視線を向けた。チカチカと光るスベード型の宝石はなおも躊躇っていたかと思うと、意を決したように重い声で報告した。

「……」

It has received an incoming call from Ms, Li
「おおぅ……」

アインは相棒が言いづらそうにしていた理由を察して頭を抱える。

色々な自体が重なったり、自分の調子が悪くなったりで忘れていたが、アインは今回かなり無茶な行動をとっていた。

その報告をせずに何日も彼女を放置していたことに気づくと、とてつもない嫌な予感で体が震えるのがわかった。

「……Are you sure you want to ignore？」
「……繋いでくれ」

心なしかブルースペイダーも怯えるような雰囲気を出している。機械の人工知能で

ありながらも、主人の友人がキレたらどうなるか知っているために、恐怖を感じずにはいられなかった。

アインは観念し、相棒に通信をとつてもらうことを了承する。しかしデバイスからなるべく顔を離し、耳を思いつきり外らせようとするアインの元に、予想以上の怒号が響き渡ってきた。

「——あなたは一体何を考えているの!?!」

思つた通りの凄まじい剣幕の友人に、アインは申し訳なさそうに苦笑する他になかった。

◆ ◆ ◆

「……………それで、言いたいことはそれだけですか? アルデブランド陸士殿」

天井も壁も真っ白な、つなぎ目ひとつ見つかからない空間。

ミントグリーンのロングヘアを苛立たしげにかきあげ、青い軍服のような制服をまとつた女性は震える声でそう画面越しに尋ねた。

シミひとつない肌に大きな瞳、柔和な性格が現れているはずのその表情は眉間に皺がよつて険しくなり、ギロリと鋭く尖つた目によつて台無しになっている。頬の筋肉もヒクヒクと痙攣し、近寄りたいたいほどの怒気が垂れ流しになっていた。

『ああ、嘘偽りは一切ない。全て私が独断でやったことだ』

「あなたのやったことは、重大な違反行為よ。そんな説明で納得できると思っているのですか？」

『納得も何も、私の現場の判断は全て間違っていない。そう言っている』

無表情で勝手なことをのたまう同僚に、リンディは血管が浮き出そうになるのを必死に押さえつける。ただでさえ息子に好物のことで欲求を押さえつけられがちだというのに、ストレスで体調に悪影響が出れば目も当てられない。

この友人は昔からこうなのだ。使える縁はとことん使い、多少迷惑がかかろうが気にせず我が道を突き進むばかり。それで助かったことがほとんどだが、それでも理不尽に巻き込まれた記憶は薄れることはなかった。

「デバイスの無断使用、戦闘行為、民間人への参戦示唆……挙げればきりがありませんよ」

『示唆はしていない。現状、それ以外にいい方法がなかったからそうしただけだ。だが批判やそしりは甘んじて受ける』

画面越しにリンディは友人の顔を睨みつけ、二人は互いにじつと対峙する。矢のように突き刺さる視線を、柳のごとく受け流すアインも口を開かず、重い沈黙が降りていた。先に根をあげたのはリンディの方だった。心底呆れた表情でため息をつく、両手を上げて視線を逸らした。

「……はあ、わかったわ、わかったわよもう。なんとかこっちで書類を作っておくから、そっちはそっちでちゃんと子供達を守ってよね？」

『無論だ。……いつもすまんな、リンディ』

「……でも、本当ならとんでもないことよ。ダークローチが再び出現するなんて」

改めて自分で口にしたアインの報告に、リンディは表情を変える。

それはあり得ない状況のはずだった。アインが幻覚や嘘をついているのでなければ、自分の耳と正気を疑いかねないほどの。

「あなたの立場も危うくなるわよ」

『今とどう違うんだ、それ。大した違いはないだろう』

「大違いよ!!?」

樂觀的な様子のアインに、リンディは再び怒りをぶつける。どう見てもこの友人は自分の状況をわかっていないように見えてしまう。ことの大きさを理解しながら、それが自分にどれほどの影響を与えるか、その結果自分がどんな目に会うかを全く理解していない。

いや、理解はしているのだろう。しかしそれに対して何の感想も抱いていない。もはやそんなこと、どうでもいいというように。

「あなたがあの時結果を見せたから、上はあなたを首輪付きで飼い慣らすことで妥協し

たのよ!!? その前提が崩されるなら……あなた今度はどんな罰を受けるか……!!?」
険しい表情でリンデイは警告し、その間も友人の未来を想像して青ざめる。

体が震えるのを止められない。アインの背負った罪と、それが導く罰がもたらす結果がリンデイの心にとつともない恐怖を刻み込む。

「いいえ、罰なんてものじゃない。あなたが何も言えないことをいいことに、もつと理不尽な目にあわされるかもしれない。そうなったら……私は……」

『リンデイ』

取り乱すリンデイをなだめるように、アインは静かに語りかける。

ハツと我に返ったリンデイは、アインの穏やかな表情に言葉を失う。全てを諦めたかのような、悟ってしまったかのような、そんな風いだ波のような表情を前にして、リンデイはなにも言えなくなってしまった。

彼女は、何もかもをわかっている。この一件が解決しようがしまいが、己を待っている結末に代わりがないことを知っていてなお、剣を捨てようとはしていないのだ。

『言うな、何も』

「……………!!? バカ……………!!?」

苦しげにリンデイが罵倒すると、アインは困り顔で苦笑する。

俯いてしまったリンデイをじつと見下ろしていたアインは、やがてその表情を無に戻

した。

『では……こつちで待つているぞ』

リンデイの返事も聞かず、一方的にアインは通信を切る。ブツツと音がして、室内には空調の音だけが響く静けさだけが残された。

もう誰も聞いていない通信画面に半目を向けたリンデイは、不満と怒りがなймаぜになつたような目を向けて唇を尖らせた。

「……ほんと、バカ」

ガツクリとうなだれたリンデイは深いため息をつき、気分を変えるように顔を軽く左右に振る。サラサラと長い髪が揺さぶられ、少しだけ気分が晴れたリンデイがホッと息をついた。

髪をかき、身だしなみを整えるとリンデイはアインの友人としての表情ではなく、一人の管理局員としての表情に戻る。自分の感情を見せるのは、ここまでだ。

「みんな、どう？ 今回の旅は順調？」

先ほどの取り乱しようが嘘のように、リンデイは穏やかな表情で艦橋ブリッジに入り、クルーの全員に問いかける。

次元航行船へアースラのクルー達は各々のモニターに向きながら、地球とは異なる

文字で書かれた数値を読み解いて観測結果を報告する。

「はい。予定に遅れはありません」

「現在、第三船速にて航行中……目標次元にはおよそ160ベクサ後に到達の予定です」
「前回の小規模次元震以来、目立った動きはありません。ですが、二組の探索者が再度衝突する危険性は高いです。……それと」

一人のクルーが言いづらそうに言葉を濁し、視線に暗いものをにじませる。唇を引き
むすんでいて心なしか、嫌悪感のようなものを感じさせる様子だった。

それに気づいたリンデイは、ちらりとそのクルーの横顔を伺って眉を寄せる。周りを
見れば、クルーのうちの何人かが同じような昏い表情を浮かべていて、艦内の空気が若
干重くなっていることに気づいた。

「……『彼女』が再び力を使う可能性も」

「……そうね」

半ば予想できた反応に、リンデイは他のものに見えないように拳を握りしめる。だが
艦長として部下にそんな姿を見せるわけにもいかず、リンデイは湧き上がる感情を豊か
な胸の奥に必死に押さえ込み、自分の椅子についた。

「失礼します、リンデイ艦長」

背もたれに身を預けるリンデイの元にお盆に湯呑みを乗せた茶髪の少女が近づいて

くる。小動物的な可愛らしさを持つ部下の一人、エイミー・リミエツタが艦長専用の緑茶を運ぶ。

「はい、お茶です♪」

「ありがとう、エイミー」

湯呑みを受け取ったリンデイは礼を言いながら、一緒に持ってきてもらった角砂糖をぽちやぽちやんと湯飲みの中に投入する。クルーの何名かがさつと視線をそらすのも気にせず、リンデイは暑くて甘い緑茶をさもうまそうにすすった。

リンデイの奇行に、エイミーはいつものことだと表情こそ変えなかったが、リンデイが気づかないぐらいには距離を離していた。

「事件の中心人物と思われる2名の魔導師も、アルデブラント陸士も現在は活動を停止しているようです」

「そうね……ちよつと、厄介なものね。管理外世界での小規模なものとはいえ……次元震の発生は見過ごせないわ」

今は友人の件はひとまず置いておき、リンデイは顎に手を当てて状況を把握する。本来大した危険性のないものとして放置されていたジュエルシードという代物だが、今回これほどまでの数値を叩き出す暴走を引き起こした。

放置するには火種が大きすぎるため、件の世界へと急ぐ必要があった。

「そうよね、クロノ執務官?」

リンディは期待を込めた目で、エイミイの反対側で待機している黒衣の魔導士に問いかける。

髪もバリアジャケットも黒い、中世的な顔立ちの少年魔道士は静かに頷き、鈍色の輝きを放つデバイスに手のひらを沿わせた。

「はい……わかってますよ、艦長」

自信と実績を感じさせる落ち着いた声で、クロノ・ハラオウン執務官は艦長の問いを肯定する。若干14歳ながら執務官を務める彼の实力は確かなもので、アースラのクルー達は彼に絶大な信頼を抱いていた。

「迅速に解決しましょう。そのために僕はここにいますから。……たとえば、彼女が敵に回ろうとも」

嫌悪感をにじませる声で、クロノは特定の人物を敵視していた。その言葉に意見を挟むものはおらず、むしろ何処か同意するような表情を見せている。

部下の大半が自分とは真逆の感情を抱いていることに、リンディは深い心の痛みと同時に虚しさを感じ、わずかに眉間にしわを寄せて目をそらす。

ただ一人、エイミイだけが心配そうに苦痛の表情を浮かべるリンディを見つめ、クロノ達に聞こえないように耳打ちした。

「仕方ないっちゃ、仕方ないですよね……？ あのままだと、魔導師の少女だけでなくもつと被害が拡大した可能性もあるんですから……」

「……エイミー、そういう問題ではないだろう」

だが、なるべく声を抑えて話したはずなのに聞こえてしまっていたらしい。咎めるようなクロノの視線に、エイミーはごまかし笑いを浮かべながら後ろに引いた。

彼の騎士に対する認識に隔たりがあることを知りながら、クロノは樂觀的な同僚に呆れたため息をつき、改めて言い聞かせる。

「確かに彼女の功績は大きい……だがそれはあくまで結果だ。彼女には我々に対する逆心があるかもしれないのに、信じるなんて……」

「ごちゃごちゃやってねえですよ……シンプルに言っちゃくれねえか？」

困り顔で下を出すエイミーに忠告していたクロノを、別の気だるげな声が遮った。

冷たい見下したような目でクロノを見ているのは、茶色い制服を着崩し、椅子の上で足を組む背の高い青年だった。顔立ちはかなり整ってはいるが、ニヤニヤと歪んでいる口元や野犬のように鋭い三白眼が性格の悪さを滲み出させていて、非常に良くない第一印象を与える。

隣の椅子にはもう一人、青年と同じ制服を纏った少女が座っているが、こちらもどこか人を見下すような冷たい眼差しを見せる、近寄りがたい雰囲気少女だった。眉間に

寄ったしわやつり上がった眉が、気の強さを表していた。

「邪魔するやつらはみんな力尽くでぶつつぶしやいいんだろ？」

「……フン。面倒つたらないわね」

階級で言えば、彼らの方がクロノよりも下である。しかしそれを微塵も気にしていないような遠慮のない話し方に、思わずクロノの表情がこわばる。

今回のために急遽追加された部隊の人員であるが、聞いていた通りなかなか癖が強いのだと理解する。しかしクルー達にとっては、自分たちの上官を軽く見られているような態度に思うところがあり、艦橋の空気が一気に悪くなり始めた。

立場を分からせる必要があると、注意しようとしたクロノだったが、それは艦橋に新たに現れた男女に制された。

「口を慎め、お前たち」

厳しい口調の男の命令に、青年と少女はチツと舌打ちしながら目を逸らした。横柄な彼らであっても、彼の言うことは渋々ながらもちゃんと聞くらしい。

サングラスをかけた、中年ながら鍛え上げられた肉体をのぞかせる男は、咎めるように青年達を見下ろす。

「気を引き締めろ。これはやり直しのきく訓練ではないのだぞ」

「わーってますよオ、隊長」

面倒臭そうに青年が応えると、少女も罰が悪そうな表情で目をそらし、小さく頷く。どうかにか二つのチームの空気が落ち着いたことに安堵したリンディは、その原因となった二人の教育不足への皮肉も込めてサングラスの男を軽く睨んだ。

「あなた方にも、尽力していただきますよ。……三頭狼^{ケルベロス}の皆さん。今は仲間内で争っている場合ではありません。管理局員としての職務を全うできるように努めてください」
「ええ。わかっていますよ」

リンディの警告に、残る最後の一人が笑顔で答える。

長い黒髪を三つ編みにした、快活ながら真面目そうな印象を抱かせる少女は、先ほどの仲間の無礼を詫びるように頭を下げ、自信と自負にあふれた笑顔をリンディに向けた。

「我々管理局は、正義の味方なのですから」

二人とは真逆の礼儀正しい様子の少女に、リンディはやっと安堵のため息をついて椅子の背もたれに体を預ける。

そこでふと、リンディは気づく。

少女のその顔が、誰かに似ている気がしたことに。

9. 魔女と蛇

次元の陰に静かに浮かぶ、異様な雰囲気を放つ人工の島。

時の庭園と呼ばれる、失われし技術によって作り出されたその場所は今、ある女大魔導師の拠点となっていた。

庭園の中心に立つ城、その最奥の広い玉座の間にて、黒いウエーブがかった長髪の中年女性が不機嫌そうに机の表面を指で叩く。中年といっても、胸元が大きく露出した黒い衣服から覗く肌はまだ若く、メリハリの効いた体つきも崩れているようには見えないため、実際の年齢よりもずっと若く見えた。

しかしやや悪い顔色や目元に落ちる陰が本人に暗い印象を植え付け、重い経験を感じさせる雰囲気を放っている。彼女を初めて見た者ならば、英雄譚に登場する悪い魔女のようなイメージを抱いたことであろう。

「確かにジュエルシード……………間違いはないわ」

「……………はい、母さん……………」

か細く途切れそうな声で答えるのは、小さな白い箱を両手で持ったフェイトだった。

いつもは何かの使命感で引き締まった表情をしているはずの彼女は今、自信なさげに

うつむきながら体を縮めている。悲しげな目は怯えを孕み、冷たい目で見下ろしてくる黒髪の魔女を前に完全に萎縮してしまっているように見えた。

何を隠そう、この魔女こそフェイト・テストロッサの母プレシア・テストロッサであり、フェイトにジュエルシードを捜索させている主犯なのである。

「でも……この結果はひどいわ」

「……」

娘に向けるにはあまりに冷たすぎる目と感想に、フェイトは首をすくめて険しい表情になる。頑張った褒美が欲しかったわけではない、ただ一言「よくやった」といつて欲しかった彼女にとって、抱いたのは母に対する不満ではなく自分自身への不甲斐なさだった。

「私は言ったわね？ あの世界に散らばった21個のジュエルシードを全て回収してこいと……」

ギシリ、と椅子から立ち上がるプレシアを見るだけで、フェイトの体には震えが走る。優しかった母は、数年前の事故から変わってしまった。フェイトに優しい笑顔を見せることはなく、日々研究に没頭し顔もまともに見せてはくれなくなってしまった。

最後に見た笑みは、母がフェイトにジュエルシードの収集を命じた時以来ない。その笑みも、どこか有無を言わさない覇気を宿したものであった。

「あれだけ時間をかけてたつた3つ……たとえ邪魔が入ろうとも、全て集めてくるようにという母さんの命令は守れなかったのね……」

「あ……う……ごめ、なさ……」

お土産のつもりで購入したケーキの持ち手に力がこもり、体が凍りついたように動かなくなる。

冷酷な目を向けるプレシアはおもむろに、机の引き出しから取り出した革製の鞭を取り出す。猛獸か拷問のためにしか使われないようなそれを見た瞬間、フェイトの顔色は真つ青に染まりきった。

「フェイト……あなたは悪い子ね。母さんの期待を裏切らないでちょうだい」

「ひっ……!!? ごめん、なさいっ……すぐに、すぐに向かいます……!!? だから

……だから……!!?」

「ダメよフェイト……これはお仕置きなの」

ボトツとケーキの箱を取り落とし、後ずさろうとするフェイトだが、不意にその両手首に紫色の光の輪が嵌められる。プレシアが発動させた拘束魔法により、顔の筋肉を強張らせたフェイトの体がその場で吊り上げられていく。

哀れな少女は、罪を犯した奴隷か囚人のように空中に磔にされ、ガタガタと震えながら母を凝視する他にない。

プレシアはそんな娘を冷たく見据え、床に鞭を打ち付けてその威力を見せつけると、何の躊躇いもなく振りかぶった。空気が割れるような痛々しい音を立てるそれは、少女の柔らかい肌などたやすく引き裂き、血を吸うだろう。

本来引つ込み思案な性格であるフェイトは、その痛みを想像してパニックに陥り、何とか仕置をやめてもらおうと必死に叫ぶ。

「ごめ、なさいっ……今度はちゃんと勝ちますから！ あの人にも、黒い奴らにもっ……！！？」

「……………何ですって？」

今まさに鞭を振り下ろそうとしていたプレシアは、フェイトの言葉に違和感を感じてその動きを止めた。

まさかやめてくれるとは思っていなかったフェイトは、恐る恐る強くつむっていた目を開けてプレシアの様子を伺う。

「現地人と管理局員の邪魔が入ったのならわかるわ。……でも、それだけじゃないの？」

「え……」

「答えなさい、フェイト」

先ほどまでの狂気とは異なる、戸惑いのような表情を見せる母に言葉を失う。オロオロと迷っていると、答えを急かすようにギチギチとプレシアが鞭を持つ手に力がこも

り、慌ててその時の状況を思い出す。

「は、い……えつと、黒い人みたいな蟲の生物が、ジュエルシードの方へ集まってきて……襲ってきて、それで……」

フェイト自身、あの時の異形の軍勢が何者であったのかはわからない。しかし母が興味を示すことなら、何か重要なことなのだろうと必死に記憶を辿り、詳しい情報をただどしく伝える。

フェイトの見た全てを伝え終わると、プレシアは鞭を持つ手を下ろしながら何か考え込み始めた。不安げなフェイトの視線にも気づいていないように、険しい表情で虚空を睨みつけていた。

「……第三者の介入？ それともただの偶然……まさか……」

ブツブツと溢れる小さな声に、放置されたままですればいいのかわからないフェイトは困り顔でプレシアを見つめる。

しばらくその場で立ち尽くしていたプレシアは、ややあつてからようやく思い出したというようにフェイトに視線を戻し、ため息をついて背を向けた。

「……報告はもういいわ。下がりなさい」

プレシアがそう言うのと、フェイトの両手首を戒めていた拘束が弾けて消える。突然解放されたフェイトは戸惑いがちにプレシアの背中を凝視するが、思考の中に入ってし

まった母はそれ以上言葉をかけてくれない。

躊躇いながらもぺこりと頭を下げた少女は背を向け、その途中で無残に凹んでしまった自分の土産の箱を悲しげに見下ろし、振り切るように早足で退出した。

「……………まさか、ね」

一人残った大魔導師は、かすかな焦りを感じさせるような低い声で呟き、その眉間に深いしわを刻んでいた。

庭園の廊下を一人歩くフェイトの元に、アルフが焦った様子で駆けつけた。

「フェ、フェイト！ 何もされなかったかい？」

「う、うん……………大丈夫だよ、アルフ」

ペタペタと身体中を触って傷の有無を確かめてくるアルフに苦笑しながら、フェイト自身も戸惑い気味に眉を寄せていた。

母の様子は、自分の報告以来どこかおかしかった。母にも予想外の事態が起きたのは間違いないが、プレシアのあの表情は何か心当たりがあるように思えた。

「ほ、本当に大丈夫かい？ 隠したってわかるんだからね？」

「アルフ……………隠しててもわかるなら私が嘘ついてないってわかるでしょ」

「あ……………そうか」

目から鱗というように間の抜けた表情で頭をかき、無遠慮に体を弄ってしまったことをフエイトに詫げる。

気にしていない、とフエイトが首を横に振ると、アルフはまた不思議そうに首を傾げて眉間にしわを寄せた。

「……珍しいこともあるもんだねえ。あの鬼婆が何もせずに引き下がるなんて」

「アルフ……そんなこと言わないで」

「だつてさあ！」

不満げに声を荒げるが、フエイトは厳しい目でアルフを見つめる。使い魔を咎める目でありながら、その目に隠しきれない悲しみを宿しているのを見てアルフは口を閉ざした。

この主人は決して母に逆らわない。どんなに理不尽な目に遭おうと、自身が傷つこうと母のために粉骨砕身し、喜ぶ顔を求めてしまうのだ。まるで自分自身を縛り付けるように、過酷な任務で自分をいじめ続ける。

それでもやはり、優しかった頃の母が恋しくて感情を顔ににじませる姿が、アルフには悲しくて仕方がなかった。

「母さんは今、余裕がないだけ……母さんの言う通りにできない、私が悪いから」

「フエイトお……」

はつきりとそんなことはないかと否定しないが、有無を言わさないまっすぐな目でそう言われては、アルフはそれ以上口を挟めない。

ぺたりと耳をへたらせる家族に申し訳なきように唇を噛みながら、フェイトはアルフの隣を通り抜けた。

「行こう、アルフ。今度こそ、母さんの命令を果たさなくちゃ……!」

慌てて追いかけてくるアルフの存在に救われながら、フェイトは再び地球に向かう。母の願いを、叶えるために。

誰もいなくなつた玉座の間にて一人、頬杖をつきながら物思いに耽るプレシア。

そんな彼女の左側に、何の前触れもなく半透明なスクリーンが現れた。荒いノイズの音が映るその画面からは、元の状態が想像できないほどガラガラに加工された男の音が響いてきた。

↑——随分余裕がなさそうだね、プレシア・テストロッサ〜

馴れ馴れしく話しかけてくる謎の男に、プレシアは億劫そうに目を向けた。比べるまでもなく、プレシアは男に親しみを持っていないようだ。

「……何の用?」

へいはいや、ただの陣中見舞いだ。それに、お人形の様子も確認しておきたかったもので

ねえ……実に美しく育っているじゃないか」

「……………」

顔を見ずとも、汚らわしいやらしい笑みを浮かべていることが手に取るようにわかる。プレシアは、聞こえないように小さく舌打ちをする。ある意味で恩のある相手だが、どうしても好きになれなかった。

ジュエルシードの情報を流してくれたことや、移送船の襲撃に一役買ってくれたことは確かだ。しかしその行為の裏側には隠しきれない野心が見え隠れしていて、少しでも気を抜けば背後から食われる可能性があることを否定できない。

何より、一度だけ生身で相対したときに見た男の目が、プレシアに否応無く生理的嫌悪感を抱かせた。

「……少なくとも、娘と同じ姿をしたアレにそういう視線を向けられるのは虫唾が走るわ」

へおお、それは失礼した。……しかし、これは私の本音だよ。真実を知らず、命じられるままに母親に従って死地に赴く。実に健気で……滑稽だ」

フェイト・テストアロツサが普通の人間ではなく、プレシアの本当の娘アリシア・テストアロツサのクローンであることを知っているのは、男がかつて娘の死後に会ったことがあるからだ。

ヒュードドラの稼働実験に失敗し、巻き添えによって命を落とした娘を蘇らせる研究——プロジェクトF・A・T・E.の研究をしていたとき、この男が接触してきたことは記憶に残っている。当時はあまりの胡散臭さに断ったが、まさか今ほどに深く関わることになるとは思わなかっただろう。

男の粘着質な笑みは、その時から変わっていなかった。

へしかし実に惜しい。あれほどのポテンシャルを持った素材がそこにあるのに手に入らないというのは……君の持つデータとともにアレも渡してもらえらるなら、さらなる協力を約束できるのだがねえ……

「何度も言わせないで。最初の契約通りよ……計画内容に変更は一切ないわ」

〈無論それは理解しているとも。別に今更文句があるわけではないさ〉

男は妙にフェイトに興味を持っていた。アリシアの記憶を転写しても、姿形が全く同じでも、記憶の中にある娘とは全く違っていた失敗作のことを欲しがっている。

太陽のように朗らかだった笑顔とは程遠い困り顔や、逆の利き腕を見たときにプレシアは悟った。通常の技術では娘を取り戻すことはできない、真の神の領域に足を踏み入れなければならぬ。

そのためになら、この悪魔のような男と契約し、魂を売り渡しても構わなかった。

へしかし奇妙な話だ。君はアレを嫌い、憎んでいるものと思っていたのだがね？ その

反応はまるで、あのお人形のことを……」

「——黙りなさい」

なのに、フェイトを渡す気にはなれなかった。娘アリシアの出来損ないの失敗作であるというのに、見るだけで忌々しい娘の命を奪った金色の魔力光の持ち主であるというのに、手足として利用し続けていることが、自分でも不思議だった。

そしてそんな失敗作を欲しがるこの男が、何よりも気に入らなかった。

「計画の進行は私に任せるはずでしょう。ジュエルシードは全て奪い、あなたはそれと引き換えに私に技術と情報を渡す。……個人的な干渉はなしといったはずよ」

へ……まあ、いいだろう」

プレシアの本気の怒気が伝わったのか、男はたいして気にする様子もなく引き下がらる。しかしまだ諦めていないことは、多少の長い付き合いでわかり切っていた。

「それよりも、予想外の妨害が入ったわ。ジュエルシードを狙う異形がいるなんて……あの世界には魔法生物はいないんじゃないの？」

「残念ながら、私も全てを知り尽くしている全知全能の存在ではないのだがね……だが確かに奇妙だ。調べておくことにしよう」

わざとらしい、とプレシアは根拠もなくそう思う。

魔法文化の存在しないこの世界にジュエルシードが散らばってしまったことは計算

外であったが、この男と話をしていると手のひらの上で弄ばれているのではないかという考えが浮かんでしまう。

アリシアのことがなければ、今すぐにでも手を切つて距離をおきたいと思うぐらいに、プレシアは男を嫌つていた。

〈そんな存在があるのなら、私も困つたことになる。早急に手を打とうじゃないか〉

「……信用はしないわよ」

〈これは手厳しいな〉

口にしたほど気にした様子もなく、男は通信越しに可笑しそうに笑う。嫌悪感で顔をしかめるプレシアの様子も見えているように、男は気味の悪い笑い声を響かせた。

〈君の今後に期待するでしょう……では、またいずれ〉

最後まで不気味さを保つたまま、男からの通信がブツツと途切れる。

プレシアは気だるげに髪をかきあげると、玉座の背もたれに体重を預けて軽く背を伸ばす。嫌な相手との会話は実に疲れるもので、苦痛な時間だった。

そこでふと、フェイトが残して行つた崩れたケーキの箱が目に入る。あの高さから落としたのなら、もう中身は見るに値しないほどぐちゃぐちゃになつてしまつているだろう。

慰勞のつもりか、それともご機嫌取りか、もしくはただの社交辞令か、どうでもいい

ことのはずなのに、プレシアはなぜかその箱をじつと見つめたままフェイトの顔を思い出していた。

——プレシア……。

どんなに願つても死者は還りません……失つた時間も同じです。

今のあなたにはフェイトが……。

かつて飼つていた山猫のリニス。アリシアとともに死んだその山猫のクローンを使い魔が言つたことを思い出す。

フェイトの教育係として生み出した彼女は、秘密をフェイトに打ち明けることはなかつた。契約が果たされる最後の時までプレシアの元に付き従い、そして役目を終えるとともに姿を消した。

そんな彼女の言葉が、なぜか頭から離れなかつた。

プレシアは玉座から立ち上がり、壁に偽装した扉を開いてその奥に入る。フェイトもあの男さえも知らない、プレシアの最も大切なものを隠している秘密の部屋だ。

嚴重に隠したその部屋の中心には、繭のような形をしたガラスケースの中で永遠の眠る一人の少女がいた。長い金髪を揺蕩わせ、小さな体を丸くしているその少女の顔は、幼い時のフェイトと全く同じ顔。

6歳にしてこの世を去つた、プレシアの最愛の娘アリシアがいまにも目を覚ましそ

なほど完全な姿でその繭の中に収められていた。

「……心配しなくても、私の娘はあなただけよ」

プレシアは冷たいガラスにそっと触れ、すがりつくように頬を寄せる。ただのガラスで遮られた自分と娘の距離はわずか数センチだというのに、プレシアにはあまりに遠く感じられる。

だが、かつては手も届かぬと思っていた距離は、徐々に縮まろうとしている。もう少しで、願いは叶うのだ。

「……アリシア。早くあなたの声が聞きたいわ……」

今だけは、娘の模造品に憎悪をぶつけていた魔女の表情から、おぞましい狂気が消えていた。最愛の娘との再会を願い続け、狂ってしまった彼女にとって、自分の苦痛などさしたる問題ではない。

憐れなただの女に答える声は、未だ聞こえなかった。

第V章 違った想いは交わらず

1. 再始動

ジュエルシードが暴走し、なのはたちの探索が一時中断されてから数日後のこと。

学校からの帰路についていたなのはの前に、脇道の影からひよつこりと小さな影が顔を出した。それが自分の魔法の師であることに気づき、その口に啞えられている赤い寶石に目を見張る。

「ユーノくん！ レイジンググハート…直ったんだね、よかった」

【Condition Green】

出会った時と同じ、傷一つない輝きを放つ相棒の帰還になのはほつと安堵する。

しかしなのははまた不安に苛まれる。前回は自分の判断ミスで負担をかけ、レイジンググハートに苦しい思いをさせてしまったことが悔やまれる。そんな自分にまだ愛想をつかしてはいないだろうか、恐る恐ると言った様子で撫でる。

「また…一緒にがんばってくれる…？」

【All light…my master.】

レイジンググハートは、微塵も気にした様子はない。機械音声とは思えない優しさを感じ

じさせる声音で告げられ、なのはは思わず照れくさくなつて頬を赤くする。

「これからもよろしくね、レイジングハート……」

未熟な自分をここまで信じてくれる相棒と師匠に囲まれ、なのはは満たされるような温かい感覚に包まれるのだった。

まだ淡い西の太陽の光に向けて手を伸ばし、手のひらを透かしてみせる。あいにく流れているのは真つ赤な血潮ではないが、目の前には以前と何も変わらない自分の右腕があった。

これを見て、つい数日前に魔力暴走を押さえ込んで、黒焦げになつて崩れ落ちたなどと思うものはいないだろう。

「……ようやく、元通りか。私も向こうも……」

ぐっパツと握つたり開いたりを繰り返し、感覚のズレを修正する。数日休むとかなり身体や戦闘の勘が衰えるというが、この程度であれば今日中には元に戻るだろう、と見当をつける。

そこでふと、異様な状況なのにそれに微塵も違和感を抱いていないことに苦笑する。何度も繰り返し目にしてきたためか、感性が常人とは大きくズレてしまったようだ。

「つくづく化け物だな。こんな短期間で、しかも失つた四肢が再生するなど……まあ、

散々実験されたからわかつてはいるが」

自分自身の体に呆れながら、アインはこの姿をなのはやフェイトに見られなかったことに安堵する。

きつと彼女たちであつても怯えるだろう。自分のすぐ近くに、ここまで異常な化け物が存在し、何食わぬ顔でそばに居続けたなど悪夢以外の何物でもあるまい。

今更誰かに嫌われ、恐れられ忌避されることなど怖くはない。しかしなぜか、なのはたちにあの目を向けられることだけは避けたかった。

(……………ジュエルシードの反応はまだない……。だが、必ずこの町のどこかに存在している。発動する前に抑えられるのが最適なんだがな……………)

もうしばらく草の上で寝転がり、流れてゆく雲を眺めながら考え込む。

発動するまではただの宝石であるジュエルシードを搜索するのは、砂漠で一粒の砂金を探し出すような試練と同等の難易度を有する。できれば管理局のものたちの到着よりも先に決着をつけたいものだが、場所も特定できていないために難しいと判断する。今だに半分近くのジュエルシードの行方もわかっていないというのは、アインにとつても痛かった。

「……………あの……………アインさん？」

その時、ためらいがちに届く念話に意識を現実に戻す。数日ぶりに聞く新しい教

子の心配そうな声に、アインは彼女がまだアインの体調について気にしているのだと察する。

「……どうした？」

「ア、アインさん！ ……もう、大丈夫ですか？」

「？ ……ああ、そういえば君への連絡もずいぶんしていなかったな。すまない、ちよつとボーつとしていてな」

余計な気遣いとも思うが、何日も顔を出していなければ確かに不安にもなるだろう。悪いことをしたと内心で反省しながら、アインは起き上がって座り直した。

草の上であぐらをかくと、ゴキゴキと骨を鳴らして体を伸ばす。ほとんど気絶するよううに眠っていたため、体が鉛のように重かった。この辺りもあとで解消しておかねばなるまい。

「レイジングハートの調子はどうだ？」

「もうすっかり大丈夫みたいです。これからもよろしく……って」

「そうか………何よりだ」

なのはの声のトーンからそこはかとなく喜びが感じられる。

「さて、今晚からまた君へと訓練をつけるとしよう。……とはいっても、ユーノからもう聞いているとは思うが」

「あつ、はい…アインさん、魔法使えないって…」

「その癖にずいぶん偉そうだったと思うだろう？」

「い、いえいえいえ!!」 ただちよつと…ユーノくんのいた世界から来たって言つてたから、意外だなんて…」

なのはの感想に苦笑する。彼女は魔法の世界の住人はみんな魔法使いと思つていたのだろうが、現実はそのままで甘くはない。

膨大な魔力を持つ人間がいれば、反対に平均以下の魔力量しか持つていない人間、魔力があつても使う才能がない人間、才能があつても持て余している人間と、個性によつて様々なのである。

地球と同じく、すべての人間にはそれぞれ得意不得意分野があり、それを伸ばせるかどうかは本人の努力次第なのだ。

アインはその中でも、落ちこぼれといわれる部類にいた。

「生まれつき、魔法に関する才能がからつきしでね…：…かろうじてできるのは魔力の放出と蓄積ぐらいか…：…大規模封印砲から拘束魔法まで、多彩に操れるようになってきている君とは正反対だ」

「そ、そんな大げさですよ…：…私なんて…」

「謙遜するな…：…君には、天賦の才能があると私もユーノも感じてるぞ? なあ?」

「はい。ボクが通っていた魔法学院でも、こんなにめざましい成長をする魔導師は見た事がないよ」

顔は見えないが、まっすぐ目を見つめながらべた褒めされるような恥ずかしさを感じて、なのはは頬を赤くしながら苦笑する。

自己評価がやや低めの彼女には、その称賛はお世辞ぐらいにしか思えないのかもしれない。しかしそれでも才能があると言ってもらえて、自分が認められたような気がして嬉しいのだろう。なのはの表情は、実に明るいものであった。

今はまだ眠れる力、それを宿す少女に、アインはその未来の姿を幻視した。

「——いずれ君は、素晴らしい魔導師となるだろうな。いかなる困難をも超えて行ける、どんな人の元にもその手が届く……そんな魔導師に」

アインの声に混じっているのは、どこか羨望じみたものを感じさせる、そしてそれを必死に隠すかのような複雑な感情。一言では表せない様々な思いが混ざり合ったそれは、幸いにもなのはに届くことはなかった。

ただ師が自分にそれほどまでの期待を寄せ、あるいは将来を確信してくれているような言葉が嬉しく、思わずなのはも表情を綻ばせる。

「……そっか、この力でたくさんの人を助ける事が出来るかもしれないんだ……」

ずっと彼女が欲しかった力、ずっと彼女がなりたかったものが近づいているような気

がして、高揚する気持ちが抑えられない。体の奥底がムズムズするような感覚に陥るなのはを、ユーノが肯定するように深く頷く。

言葉にもならない喜びの感情は念話では伝わらないが、アインは容易になのはの様子を想像する。照れ臭そうに笑う教え子に向ける表情は、やはりどこか苦しそうであった。

「……本当に、羨ましい」

その本音は自分の胸のうちに隠し、アインは気持ちを切り替える。あまり褒めすぎるのも考えものであるため、餡の時間は今打ち切った。

「……そういえば、私の魔力やユーノくんの魔力って、色が違いますよね？　なんでですか？」

照れ臭さを取り払いたかったのか、それとも単に話を変えたかただけなのか、唐突な疑問を口にするのは。

アインは訝しげな表情を浮かべるが、自分やユーノにとっては当たり前のことでも、異なる世界の一般人であるのとはにとっては未知のことであると考え直し、簡単な説明を考える。

「基本的には、個人の魔力波長の違いによって異なる。単に波長の違いによって示されるだけの色で、魔導士や魔力性質そのものにはあまり関連はないんだ。まあ、魔力の高

い人間なら、髪の毛の色にそれが表れる場合もあるがな」

「あつ……そういえばフェイトちゃんは金色だ」

「……ああ、そうだな。だが私は、君の桜色もユーノの緑も優しい色で好きだぞ」

「……ありがとう、ございます」

また褒められるとは思っていなかったのか、不意打ちを食らったなのはがまた真つ赤になつて黙り込む。アインは余計なことを言つてしまったと反省し、ごほんと咳払いをして切り替える。

「さ、まずは遅くならないうちに帰りなさい。鍛錬はそれからだ」

「はい！ 今日もよろしくお願ひします！」

元気よく返事するなのはとの念話が切れると、アインは己の顔を覆つてまた仰向けに倒れる。眩しいからでも疲れたからでもなく、自己嫌悪による恥のためだった。

なのはにとつては褒め言葉に聞こえただろうが、アイン自身にとつては皮肉とも取れる意味を持つ。

なのはの持つ才能の高さ、彼女自身の心の美しさと純真さ、そして未だ何も描かれていない空白の未来に、アインは嫉妬していたのだ。彼女自身に何も非はないのに、それを持つてることが羨ましくて仕方なく、勝手に口をついて出ていた。

そんな自分がどうしようもなく浅ましく、醜く思えたのだった。

「……私のなりたかった存在に、あの子が一番近いのかもしれない」

迷いながら、何度も立ち止まりながら歩いてきた自分の道に後悔はない。

しかしその先に、自分が本当に行きたかった未来があったとは、口が裂けても言えなかった。

◇ ◇ ◇

乱れた呼吸を落ち着けさせようと、なのはは大きく肩を上下させる。陽もすでに落ち、公園の明かりだけがなのはの周りをぼんやりと照らしている暗い夜の闇の中、風が汗で濡れた体を冷やす。

度重なる魔法の行使によって、なのはの膨大な魔力も徐々に残量を削られ、半分を切っている。魔力をここまで使い果たしたことのない彼女にとって、自身を襲う虚脱感や意識のブレは未知のものであった。

しかしどんなに疲弊しようとも、勝機が見えずとも集中だけは欠かすことはできなかった。一瞬でも気を抜けば最後、目の前に下げられている刃によって自分の意識は簡単に刈り取られるであろうからだ。

「ひいんっ？」

それでもわずかに意識がそれた瞬間を容赦なく狙われ、なのはの首筋を銀色の刃が掠る。情けない悲鳴をあげながらもなんとかそれを躲し、なのはは涙目で気を引き締め直

した。

「止まるな!!?」 泣こうが喚こうが向こうは待つてなどくれんぞ!!?」

「ごっ、ごめんなさつ……にやああ!!?」

話をする間も無く、アインが繰り出す刺突がなのはバリアジャケットを小さく切り裂く。パツクリと裂けた袖にゾツと顔を青く染めるも、なんとか硬直しかけた思考を働かせて魔力弾を生成する。

膨大な魔力を使った数十発の魔力弾を惜しげも無く発射し、マルチダスク並行思考を利用して全てを操り、アインの四方八方から襲いかからせる。

が、アインが振るった斬撃によつてそれらは皆消し飛ばされ、同時に生じた衝撃波が刃となつてなのは顔面に迫る。なのはが悲鳴をあげて仰け反ると、風圧で巻き上げられた前髪が数センチ自身から切り離された。

「いまっ!!?」 今おでこをチツて!!?」

「安心しろ。薄皮一枚とも切れてなどいない……止まるなど言つたはずだぞ」

「ひいひい!!?」

「あわわわわわ……」

修羅の形相で襲いかかるアインになのは恐怖し、様子を見守っていたユーノもガタガタと体を震わせる。

なのはもこれまで何度か攻撃したものの、渾身の砲撃も牽制も陽動もうまくいかず、アインの怒涛の攻撃に逃げ惑うしかない。一切の隙を見せることなく、見せたかと思えば罨であつたり、隙を作ろうとしても全く動じなかつたりと、なのは次第に人間を相手にしている気がしなくなっていた。

一体どれほどの修練と経験を積みあげようなるのか、アインはまさに怪物のような強さを見せていた。

だがその時、アインのベルトに付けられていたタイマーが音を鳴らし、アインは剣を振り下ろそうとしていた手を止めた。

「よし、そこまで」

待ちに待った制止の声を聞き、安堵の表情を浮かべたなのははその場に大の字に倒れた。

ちよつと心配になるほど勢いよく倒れた彼女の元に、ハツと我に帰ったユーノが慌てて駆け寄っていった。

「なのは！」

「フェイト・テストアロッサの先日は基本的には白兵戦による近距離攻撃だ。あの速度を捉えるには並の動体視力では話にならんぞ」

「は……はひ……」

パクパクと死にかけの魚のように口を開けることしかできないなのは、アインの厳しい評価にかろうじて返事をする。

立ち上がろうとしてもなぜか体に力が入らず、草の上で寝転がったまま動けないことに、なのは悲しげな呻き声を漏らした。貧血や立ちくらみでも起こしたかのようなだ。

「あ、頭がぼーつとします……なんでですかあ」

「典型的な魔力欠乏の症状だよ。なのははまだ細かい魔力放出の調整ができないから……」

「今後はなるべくそこにも気をつけろ。あまり一気に魔力を使いすぎると、死ぬぞ」

「えー……」

アインの容赦ない言葉になのは頬をひきつらせる。

魔力というものは全ての魔導師が体内に持っているリンカーコアから生成されるもので、その総量は生まれながらに決まっている。

なのはの持つ膨大な魔力量は確かにすぐには減ることはないものの、一度に大量に放出してしまえば体にも不調は生じる。まさに大量に血を抜きすぎてしまったかのような症状を起こしてしまうのだ。

その限界まで魔法を行使する訓練に、ユーノは疑問を抱かずにはいられなかった。

「あの……」この訓練本当に意味があるんですか？　なのはの得意分野とは真逆の戦い方

ばかりで、負担が増えるばかりなんじゃ……」

「……生易しいことばかり言えなくなってしまったからな。せめて効率のいい魔力運用を体で覚えてもらわなければ」

「それは確かに……そうですけど」

「だ……大、丈夫……だよ、ユーノくん。私……まだ、頑張れるから……」

「いまにも気絶しそうな君が言っても説得力ないよ、なのは……」

ユーノの目には、いまにも気を失いそうなほど衰弱したなのは姿しか見えない。頑張り屋な彼女のことはいつも心配だったが、今は呆れの方が強かった。

「私はこれまで通り、あの異形の相手に専念する。局の連中が到着し、奴らの正体を突き止めるまでは、私の君への手伝いは訓練こしかできない……せめて、あの子と同じ土俵に立つぐらいにはなってもらわねば」

「……………」

「……この間と意見をひっくり返すようで悪いが、私にはこのくらいのことしか教えられないのだ。魔法も使えない、ただ敵を斬り刻むしか能がない、三流魔導師なもんでな」

アインがなのはに求めているのは、必要な魔力『のみ』を放出する戦い方だった。

魔法に触れて間もない彼女では仕方がないだろうが、一つの魔法を発動するために余分な魔力を消費してしまっているという弱点がある。

本来砲撃を放つために10%の魔力が必要な場合に、なのはは15%の魔力を放出している。単純な計算で考ええると、10発打てるはずなのに6発しか撃てないとすると、どれほど不利になるかは一目瞭然である。

もし、なのはとフェイトの魔力の量が同じだったとすれば、向こうの方が手慣れてい
る分多く魔法を放てると思うことになるのだ。

その問題を解決するには、才能センスはもちろんのこと慣れが必要となる。アインの経験上、それは普段の練習よりも実戦において最も強く身につくものであった。

「……あの、以前教官のようなことをしていたと聞きましたが……その時は？」
「無論、実戦形式のガチバトルだ。それ以外は私にはできない」

予想以上に脳筋な返答に、ユーノは必死に表情は隠しながら、内心で頭を抱える。この人に任せるのが不安になってきてしまった。

「……今日はここまでだ。これ以上は体を壊しかねん」
「は〜い……」

ある程度動けるまでには回復したと判断したアインが、なのはの腕をとって立ち上げらせる。

ふらふらとゾンビのようにおぼつかない足取りながらも、なのはは言われた通り急いで家路につく。あまり遅くなればまた心配をかけてしまうと、よろけながらも早足に

なっていた。

「士郎や桃子に、よろしく頼む……」

アインの声に答える気力も残ってないのか、今にも倒れそうなまま手を振って応える。

ユーノがその後を追い、二人の姿が完全に見えなくなってから、アインはガツクリとうなだれると天を仰いだ。

実は、隠していたつもりらしいユーノの本音はある程度察していた。実はあまり頭が良くないのではないかと言う蔑みの眼差しを受け、アインの心には決して小さくはない傷が刻まれていた。

まさか、かつての教え子と全く同じ目を向けられようとは。

「……本当に私は、無能な教官だよ。クロノ……」

虚しさや切なさがないまぜになったようなつぶやきは、瞬く星空に吸い込まれて消えていった。

2. それぞれの願い

それは唐突にやってきた。

アインの第六感ともいえるべき独自の感覚が、危険な魔の宝石が目を覚ましたことを知らせてきたのだ。

「……………来たか」

公道をブルースペイダーで疾走しながら、アインは向かう先に展開される封時結界を見据えてアクセルを噴かせる。

感じ取れる人の気配が消えて行くことを確認し、アインは相棒に目を向けた。

「ブルースペイダー、局の連中は？」

「It seems They will arrive soon.」

待ち続けた応援がようやくきたらしい。というよりも、こんな辺境の管理外世界に向くお人好し集団であることに少し安堵する。

彼女たちとはしばらく面と向かって話をしていないが、この調子ならそれほど気負う必要はないのかもしれない。好意的な視線を向けられることはないだろうが、なのはを邪険にすることもないだろう。

「……あの子も来るな。さて、間に合えばいいが……」

問題はまだ山積みである。目の前の一つ一つを確実に解決するしかない現状に不甲斐なさを覚えながら、アインは速度を上げるのだった。

♠ ◆ ♡ ♣

結界によつて一人も人間の姿が見えなくなった港のコンテナ置き場。その通路を挟むように、なのはとフェイトが対峙する。

フェイトはやはり、確固たる決意を秘めた表情を。なのはもやはり、わずかにためらいを抱くような複雑な表情を見せている。一触即発というわけではなさそうだが、両者の緊張により張り詰めた空気がその場を支配していた。

(……奴らが、いないな。それに越したことはないが、なぜ今回に限って……?)

コンテナの上で周囲を見渡していたアインが眉をひそめる。二度あることは三度あるというし、また再びかの蟲兵が出現するようなことがあれば、今回の事件との関わりは確実なものと考え、準備を進めていたのだが当てが外れたようだ。

現れないのなら好都合と思いたかったが、どこか言い表せない不安や疑念をどうしても消しきれなかった。

「……」

そんなアインに気づくことなく、なのはとフェイトは無言で見つめ合う。フェイトの

目力の強さのせいで睨んでいるように見え、若干なのはが気圧されていたが、お互いの行動を待つように一歩も動こうとしなかった。

「あの……フェイト……ちゃん？」

最初に口を開いたのはなのはだった。

本人から聞いたわけではない彼女の名前を確認するように、恐る恐るといった様子で呼ぶと、フェイトはややぎこちなく首肯した。

「フェイト・テスタロツサ……」

「ん……フェイトちゃん」

フルネームでの名前を知ることができて、少しは相手を知ることができたとなのはは安堵する。距離が縮まったとは思わない、しかしこれは確かな一歩なのだ、なのは胸には新たな活力が生まれる。

「私は……フェイトちゃんと話をしたいだけなんだ」

「……バルディツシュ、起きて」

【Yes, My master.】

なのはに應えることなく、フェイトは完全に修復されたバルディツシュに呼びかけ、戦斧へと変えて構える。

これまでと同じ、余計な問答に応じるつもりがないという無言の返答に寂しさを覚え

ながらも、なのはもまた相棒を構える。語る術は口で話すことだけではないと、最近彼女は自分でようやくわかってきた。

「ジュエルシードは…譲れないから」

「私も譲れない……理由を知りたいから。フェイトちゃんがどうしてジュエルシードを集めてるのか」

なのはが見つめる先にあるには、覚悟を決めた少女の強い眼差し——ではなく、それに覆い隠されている苦しい感情だった。

「どうしてそんなに……寂しそうな目をしてるのか」

なのはの言葉に、フェイトは一瞬驚愕と動揺で後ずさる。無然とした態度が崩れたように見えたが、フェイトはプルプルと首を振って何かを振り払い、先ほどよりも厳しい表情でなのはを睨みつける。

凶星だったのか、なのはに対する敵意がより大きくなっているように見えた。

その時、なのはたちから少し離れたコンテナの上から、まばゆい光の柱が立ち上がる。青く綺麗な光でありながら、同時に禍々しきを感じさせるそれはまさしく、ジュエルシードが目覚ました反応であった。

少女たちはその光を合図にするかのように、各々で戦闘態勢に入って行った。

「相変わらずスゴイね、こりゃあ……！これがロストロギアのパワーってやつか！ず

いぶん不完全で不安定な発露のしかただけど……！」

「……まさに不発弾だな」

冷や汗を流しながら興奮気味にこぼすアルフにそう返すアインだったが、少女たちを見やっただけで微塵も動かない。

今の彼女にとって、この一件は単なるロストログアによる事件ではない。戦う理由を持った少女と、戦う理由を見つけた少女による意志のぶつかり合い。危険な勝負ではあつたが、それを止めることはアインにはできなかった。

「理由があるなら……わたしはフェイトちゃんのことも助けたい！ 話し合いで……なんとかできるってことない……?!!」

「……ッ、話す必要なんてないッ！」

強く拒絶し続けるフェイトに、それでも懲りることなく向かって行くなのはの叫びがぶつけられる。

その必死さからは、彼女が軽い気持ちで説得しようなどと考えているわけではなく、本気で相手を理解し、心に近づこうとしていることが否応もなく伝わってくる。

フェイトもわかつてはいるのか、なのはの眼差しと言葉を受ける度に苦しそうに表情を歪めていた。

(……おそらくこの戦いに、正義などという陳腐な言葉は似合うまい)

見つめ合う二人の少女たちを見て、アインはそう感じていた。

世界のためだとか、大義のためだとか誰も考えてはいない。ただ自分が貫きたい想いのために、彼女たちは空を舞うのだ。

それが誰のためであつても言い訳にすることはなく、己の意思として望む未来を目指し続けている。

（あの子たちの「願い」と「願い」のぶつかり合い……その先にあるのは、私達とはまた違った結末なんだろうな……）

だとすれば、どうかその未来が美しいものであつてほしい。その過程に何があろうとも、最後に子供たちが笑っていられる世界があつてほしい。

それは、自分が選ぶことができなかつた未来だから。

アインが見守る中、なのはとフェイトはアスファルトの上に降り立ち、また相對する。

「……ジュエルシードには……衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん……タベみたいなことになったら、私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルデイツシュも……可哀想だもんね」

「……そして、あの人も」

「……うん」

なのはとフェイトの目が、アインの方に向けられる。身を呈してフェイトを守り、い

まも二人の勝負に水を刺さずにくれていている騎士の右腕に視線を集め、それでも変わらない決意を確認する。

「だけど……ジュエルシードは譲れないから」

「わたしは、フェイトちゃんと話をしたいだけ…… きちんと真つ直ぐー!」

フェイトは思わず、なのはの言葉から伝わる意志の強さに気圧される。今までブレていたものが一直線にまとめられたかのような、そんな少女の確かな想いが伝わってくる。

数日の間に、なのはの中で変わった何かが、少女に新たな力を与えているかのように思えた。

「わたしが勝つたら……ただの甘つたれた子じゃないってわかってくれたら……! お話、きちんと聞いてほしい!!」

魔力弾を配置し、なのはは再びフェイトに向けて突撃する。ユーノとアインに鍛えられた反射神経を全開にし、フェイトの速度に追いつこうと、フェイトに追いつこうとなのはは飛ぶ。

それを側から見るアルフは、ただ言葉を失っていた。なのはの甘さを目にし、思わず口について出ていたあの罵倒の言葉がまさか、少女にここまでの成長を促してしまったのかと。

「……どうだ、あの子は」

「！…な…何だつてんだい」

不意に声をかけてきたアインに、アルフはビクツと肩を震わせながら身構える。

アインはアルフに目もくれず、なのはの方をどこか眩しそうに見つめ、儂げな笑みを浮かべていた。以前見た笑みとは異なるそれに、アルフは何故か、目を背けることができなかつた。

「おつそろしいほどに頑固だ……逃げられると思うなよう」

アルフに向けられた言葉が、実感となつて胸に響く。ただのお邪魔虫だと思っていた少女が、本気でフェイトの力になりたいと願つてここまでたどり着いた。

自分の主人に近づきつつあることが今だに信じられないアルフにとって、なのはの姿は見た目以上に大きく感じられた。

激突する二人が、一旦距離をとつてデバイスを構える。相手の防御・回避を抜けて有効な一撃を加えようと、自身の魔力を注ぎ込んで狙いを定める。

そして、示し合わせたように蹴り出し、真正面からデバイスを振りかぶつた、その時だつた。

「そ…までだ」

聞いたことのない少年の声が響いた直後、青い光が迸つたかと思うと、なのはとフェ

イトのデバイスが突然何者かに掴まれ、押さえつけられる。

ピクリとも動かせないレイジングハートとバルディッシュを凝視し、なのはもフェイトも困惑の表情を浮かべた。

「な……!! なになにに!!」

「……ッ!」

慌てふためくなのはと言葉を失うフェイトの間に魔法陣が展開され、中心から溢れた光の中から一人の青年が姿を現した。

光沢のある黒髪に、一見少女にも見えなくない中世的な顔立ちで、なのはとほぼ同じくらいの背丈の少年が、静かな眼差しで二人を睥睨する。

彼が纏う夜闇のように黒いバリアジャケットは制服のようなデザインでありながら、鋼の籠手と足甲を備えた物々しい形状。生真面目そうな表情も相まって、規律を武力で守る番人のような印象を抱かせた。

「フェイト!!」

「なのは!!」

見知らぬ少年に捕らえられた二人に、ユーノとアルフが悲鳴に似た声を漏らす。素性の知れない、力も未知数の存在の近くに少女達がいるは、迂闊に近づくこともできない。そんな中アインだけは取り乱すことなく、現れた少年を厳しいまで睨みつけていた。

「……………遅いぞ、クロノ」

クロノと呼ばれた少年は、アインのつぶやきに応えることはなく一瞥だけくれ、なのはとフェイトに咎めるような鋭い視線を送る。アインはその固い雰囲気、思わず肩をすくめていた。

「……この戦闘行為は危険すぎる……こんな場所で戦闘して……また次元震を起こすつもりか？」

少女達の迂闊な行動を叱責していたクロノの目が、次にアインに向けられる。今度は少女達を叱っていたときのような厳しさを持った目ではなく、どこか嫌悪感をにじませた険悪な眼差しであった。

「無論……あなたもだ。アルデブラント陸士！」

「……………私もか？」

「当然です。現場にいながら二人の戦闘を止めることもせず……ただ傍観するだけなど」

とぼけた調子で首をかしげるアインに苛立つように、クロノは敵意のこもった叱責をぶつける。憎悪に似た感情を孕んだその眼差しに、近くでそれを見たのはとフェイトは思わず息を飲む。

なのはは今まで目の前にしたことがない別の種類の敵意に、フェイトは母から向けられる負の感情に似た迫力に押され、怯えたように表情をひきつらせる。

しかしアインはそれをさして気にした様子はなく、ため息をつきながら目をそらした。

「あいにく……その権限が私にはなくてね」

「どの口が……!!」

もはやアインの一挙一動が気に食わないのか、クロノの表情はより険しくなっている。

アインと見知らぬ少年の間の軋轢に、なのはもユーノも戸惑うばかりであった。

「時空管理局か……!!」

アルフはアインとクロノの会話から、彼らが属する組織にて面識があるものと察する。これまでは何故かアインがフェイト達を捕縛する意思を向けなかったために放置していた。

だが手間取っているうちに他の局員がやってきてしまうなど、自分の迂闊さを呪わずにいられない。

（まずい……！ まずいよフェイト……！）

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。さて……詳しい事情を聞かせてもらおうか？

まずは二人とも武器を引くんだ。このまま戦闘行為を続けるなら……」

クロノが投降を呼びかけたその時、彼に向けてオレンジ色の魔力弾が降り注いだ。

「!」

クロノはとつきに障壁を張って奇襲を防ぐが、炸裂した閃光に目を取られて、フェイトへの注意が逸れる。デバイスを掴む力が一瞬緩み、その隙にフェイトはクロノの拘束を振り払った。

目を見開くクロノをよそに、距離をとったフェイトがデバイスを構える。

「君…!!」

「フェイト! 撤退するよツ! 離れて!!」

「アルフ!!」

猛スピードでコンテナの上を走るアルフからの念話にフェイトは目を見開くも、自体の不利を悟ってその提案を飲む。クロノを警戒したまま飛行を開始したフェイトは、発光を続けるジュエルシードの元に急いだ。

クロノが狙撃しようとデバイスを構えた時、彼の隣を一条の赤い光が貫いた。

赤い魔力の矢は自ら意思を持っているかのように宙を裂き、歪な軌跡を描きながらフェイトの背中に突き刺さり、爆発となって食らいついた。

「フェイトっ!!」

思わぬ攻撃を食らったフェイトは大きく目を見開き、カハツと吐血しながら体を傾がせていく。主人を襲った無慈悲な一撃にアルフが悲痛な叫びをあげ、駆け寄ろうとする

がそれよりも早く二つの影が動いた。

金と緑、金属の軽鎧を纏った二人の戦士がそれぞれ剣と槍を構え、膝をつくフェイトに切つ先を向ける。細い首に無骨な刃を突きつけ、拘束しようと手を伸ばしていく。

「あ……ッ!!」

「フェイトちゃん!!」

「フェイト!!」

アルフだけではなく、なのはも女の子に対する暴挙を目の当たりにして悲鳴をあげる。敵なのか味方なのかもわからないが、歩み寄ろうとしている相手が乱暴を受けようとしているのに黙ってはいられなかった。

しかし、恐怖に目を見開き、顔をひきつらせるフェイトに無慈悲にも戦士の手が書けられようとした時だった。

「おおつと手が滑ったア!!」

「!!」

フェイトの体を押さえつけようとしていた手に向けて、鉄製の何かが回転しながら飛来した。辛うじて戦士はそれを躲したものの、驚きで突きつけていた武器がフェイトからそれてしまう。

フェイトはその好機を見逃さず、全身から雷電を放つて戦士の二人を怯ませ、拘束を

緩ませる。そこへアルフが唸り声をあげながら飛び込み、フェイトをさらうように抱きかかえて救出すると、勢いよく跳躍してコンテナの上に移った。

一度立ち止まったアルフは目だけを向け、何事もなかったように佇んでいるアインに申し訳なさそうな表情を見せた。

（ありがとう…ゴメンよ！）

念話も使えず、ただ心の中で感謝と謝罪を送るしかないアルフは、そのままフェイトを抱えて走り去っていく。

瞬きするうちに遥か遠くへ消えていく使い魔の背を見送っていたアインは、ため息を吐いて目を閉じる。

そして、周囲で聞こえる金属音に鋭い目を向けた。

「……おい、これは何のつもりだ？」

不機嫌そうに呟くアインの首に添えられる、鋭い刃に目を向け、それを構えている二人の騎士に低い声をぶつける。

金の鎧を纏っているのは、長い黒髪を三つ編みにした十四、五歳の少女。

Aの文字をモチーフにしたような鎧をまとい、ブレイラウザーに似た剣を構えた彼女は、優しげな目をきりりと引き締め、への字に曲げた口で生真面目そうな性格を表している。

鎧の上からでもわかるメリハリの効いた体つきは、アインほどまでは及ばないものの鍛え上げられていることがうかがえた。

もう一人の緑の鎧を纏った騎士は、同じくAをモチーフにした鎧と槍を持った青年。長身をしなやかな筋肉の鎧で覆った彼は、どこかアインを小馬鹿にするような冷やかな笑みを浮かべている。武装も何も持っていないアインの体を無遠慮に見下ろすその目は、やや嫌悪感を抱かせるものであった。

「それはこちらのセリフです…何をやっているんですか…？ クロノ執務官を妨害して、みすみす彼女たちを逃がすなど…。」

「公務執行妨害…いやあ、管理局への背信行為として軍法会議は免れませぬ、先輩…？」

アインを厳しく叱責する金の騎士の少女と、いやらしい口調で嘲笑する緑の騎士。

その鎧と武器の形状、腰に巻かれたベルトの意匠に目を向けたアインは、なにかを察したように目を細めた。

「…そうか、お前たちが三頭狼ケルベロス…ノアの子飼いの部隊か」

「ノア提督です。…三等陸士ゴときが立場をわきまえなさい」

ガチャリと、アインの後頭部に尖った金属が突きつけられる。

アインの背後に立ったのは、緑の騎士と良く似た形状の紅い鎧を纏った妙齢の女性。

彼らとよく似た意匠のボウガンを構えた彼女の表情は、アインに対し対抗心を抱いているような反抗的なものだった。

恐らくは、フェイトを射つたのは彼女のボウガンによるものだろう。

「わきまえろ、ねえ……?」

三人の騎士に刃を突きつけられながら、アインは不敵な笑みを浮かべる。

ニヤリとアインの口元に冷たい笑みが浮かべられると、騎士達はざわりと血相を変えながら警戒を深める。デバイスも展開しておらず、包囲しているのは彼らだというのに、己の首に刃を突きつけられているかのような寒気を感じたのだ。

「雑魚共が、私に刃を向けるな……!!」

獐猛な獣の形相に変わったアインが、バキバキと指を鳴らして騎士達を睨みつける。膨れ上がった殺気に騎士達が大量の冷や汗を流し始め、真っ青な顔でアインを凝視する。

危険な状況と察したクロノがデバイスを構え、アインを捕縛しようと魔法を構築し始める。そばにいたなのはもユーノも、今まで見たことのないアインの凄まじい形相に凍りついたように動けなくなる。

そんな緊迫した状況の中、アインの目前に半透明の画面が出現した。

『そこまでよ、アルデブラント陸士』

厳しい声で静止を求める、若い女性の声。その声を聞いた瞬間、アインの殺気は霧散し表情も元に戻る。

騎士達が荒い息をついて緊張から抜け出し、張り詰めた空気が徐々に緩み始めると、ようやくアインはスクリーンに映った女性、リンデイを見つめて声を発した。

「……ハラオウン提督、ずいぶん遅いご到着ですな」

『皮肉を言っている暇があつたらその剣をしまいなさい……あなたを逮捕しなくてはいいけませんよ』

「できるのか？」

『試してみますか？ 彼女たちが、果たしてあなたより格下なのか……』

手の中でブルースペイダーを弄びながら、アインはちらりと騎士達の方を見やる。

常人では気を失うほど、それも相当な実力者でも動けなくなるほどの殺気をぶつけてこの程度で済んでいる様子を見て、アインはデバイスを懐に戻した。

「やめておこう。時間の無駄だ」

降参と言うように両手を挙げ、アインは肩をすくめる。騎士達はようやくそこで武器を引き、しかし包囲は解かないまま厳しい目でアインを睨みつける。

危険な状況は脱したと判断したクロノは、アインの前のスクリーンに向けて申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません艦長、片方…逃がしました」

『ん…、ま、大丈夫よ。でね、ちよつと詳しい事情を聴きたいわ…その子たちをアースラまでご案内してね』

「了解です……すぐに戻ります」

通信を終えると、クロノは改めてなのはとユーノの方を向く。

何が起こったのか、クロノ達が一体何者なのか、何もわからずに立ち尽くすのはに向いて、クロノは静かに告げた。

「すまない…君達には次元船アースラへ同行してもらおう」

そんな彼を、騎士達に取り囲まれたアインは意味深な表情で見つめていたのだった。

3. 時空航行船〈アースラ〉

そこはまるで、SF映画の中のような空間であった。

未知の素材でできた真っ白な通路をクロノの先導で歩き続けていると、時折見つける窓から見える外の景色に何度か驚かされる。

一面極彩色でマーブル模様の空が広がり、少し不安を抱かせる雰囲気を漂わせていて、なのはは思わずアインの服の裾をつかんでいた。

「ユーノくん……ここって一体？」

〔時空管理局の次元航行船の中だね。ええと……簡単に言うと、いくつもある次元世界を自由に移動するための船〕

〔はあ……あ……、あんまり簡単じゃないかも……〕

聞きなれない単語が押し寄せ、なのはは困り顔で頬を痙攣させる。

違う世界から来たというユーノの話は聞いていたものの、ファンタジーの設定を聞くような気分であったために、いきなりSFの世界観を聞かされても困惑するばかりであった。

見かねたアインがフウと小さくため息をつき、ユーノの説明にたとえ話を加える。

「そう難しく考えるな。…例えるなら次元が海、地球や他の世界が陸だ。人間は単体では次元を渡ることができんが…こういう船を用意すれば渡れる」

「それぞれの世界に干渉しあうような出来事を管理してるのが…彼ら時空管理局」

「そうなんだ…?」

まだなんとなくわかっていないというか、スケールが大きすぎてその全貌を把握しきれずにいるのはに苦笑し、アインたちは通路を進む。

するとその途中、ふと立ち止まったクロノが振り返り、なのはの服装に目を向けた。

「ああ、君。バリアジャケットとデバイスは解除して。いつまでもその格好というのも窮屈だろう」

「あ、はい…それじゃあ…」

「君ももとの姿に戻ってもいいんじゃないか? ……そっちが本来の姿じゃないんだろう? 趣味でないなら解除してほしいね」

「あ……そういえば、魔力節約の非常措置としてずっとこの姿でいたから…忘れてました」

ハツとした様子で顔をあげたユーノが、慌ててなのはの肩の上から降りる。

バリアジャケットを解除し、普段着に戻ったなのはが訝しげな眼差しを向けていると、その変化は突如現れた。

小さなユーノの体が光に包まれ、その中であつたシルエットがみるみるうちに大きくなっていく。薄い黄土色の毛並みは淡い金髪に変わり、細い手足が伸びて通路にしつかりと二本足が立つ。

一見少女にも見える整つた顔立ちを彩る翠の瞳が開かれると、少年は柔らかな微笑をなのには見せた。

「ふう…」

大きく目を見開き、凍りついたように硬直しているなのには気付かず、ユーノはどこか照れ臭そうに首を傾げた。

「なのはこの姿を見せるのは久しぶり…だっけ?」

「え———っ?!?!」

無機質な通路に、少女の絶叫が響き渡る。

前触れなく上がる大きな声にアインもクロノも眉をひそめるが、ユーノはなぜかキョトンとした様子でなのは見つめていた。

なののは人間の姿に戻つたユーノと、今しがたまでフェレットとして存在していた彼の高さを交互に凝視し、激しい狼狽をあらわにする。初めて魔法に出会つた日も、ここまでの慌てぶりは見せなかつただろう。

「ええっ?! だつて……うそ、ええええ!! ユーノくんつて……普通の男の子だつたん

だ……？」

「ん？　なんだ気づいていなかったのか……使い魔でもないのに喋る獣はそういないぞ」

「お、教えてくれてもよかったですじゃないですか!?!？」

「いや、聞かれなかったし……」

本当にユーノをフェレットだと思っていたのかと思うと、アインは小一時間なのはに説教したい気分になる。

地球の物語では喋る生き物はポピュラーなのかもしれないが、流星石に自然界にそこまですべて知能の高い生物はいるはずがない。というかたとえそうでもユーノに対する扱いには色々物申したいと思われた。

「え!!　ええ……あれ、ボクは最初にこの姿を……」

「いや、私も見たことがないんだが……」

「……君たちの間で……何か見解の相違でも?」

思わぬ騒動にクロノは目を丸くしているが、なのはとユーノにとつては説明している暇さえない。徐々に自分たちの間で認識が間違っていたことがわかり、恥ずかしさで顔から火が出そうになっていた。

「それはそれとしてだ……」

そんな中、アインがじつとりと粘着的な目を向けながら、ユーノの肩をつかむ。

え、と困惑するユーノは、アインの手にかかる力が徐々に強まっていくのを感じる。なぜだろうか、逃げられないという感想が自分の中で浮かんだのは。

奇しくもユーノのその感想は、この状況において正解であった。

「ユーノ……………お前、小動物の姿をいいことに女風呂入ってたな」

「!!? あ、あれは断る間も無くなのには連れてかれちゃったからで……………!!? ってアインさんもわかってたんなら助けて……………」

「いや、かまわんかまわん。年頃の男の子だもんなあ…だから強く拒否しなかったんだろう?」

「だから誤解で……………」

不名誉な濡れ衣に抗議の声を上げるユーノだが、アインは知ったような顔でいやらしい笑みを浮かべたまま、それでもがっちりとしてユーノの肩を掴んで離さない。

このままではとんだ汚名を着せられてしまうと危機感を抱いたユーノは、これまでずっと一緒に頑張ってきた少女に救いを求め、期待のこもった目を向けた。

「ゆ、ユーノくんとこ、こゝこ混浴……………!!?」

しかし、思わぬ事実少女はすでにパンク寸前に陥っていた。

ずっと小動物扱いしてきた相手が実は同じ年頃の男の子だったと知り、そのうえ日常生活まで長らくともにしていたという事実脳に処理が追いつかずにいる。

今思い返せばとんでもないことをしていたという思いによって、なのはは顔どころか耳まで真っ赤にししながら固まってしまっていた。

硬直するユーノの肩に、ポンとアインとは別の手がおかれる。

「君、ちよつと向こうで詳しい話を聞かせてもらおうか」

振り返った先にあつた、クロノの厳しい目を目の当たりにして、ユーノは足元がガラガラと崩れていく気がした。

なお、誤解を解くまでには数分を要した。

紆余曲折ありながら、クロノに案内されて次元航行艦の奥へと進んできたなのはたちの前に、大きな空間が広がった。

まるで豪邸の庭かと見間違わんばかりに広いその空間では、清らかな水が人口の池のように溜まり、中心に橋ののような台座だが設けられている。

橋の中心にはなぜか野点のの用意がされていて、緑の髪をポニーテールにした妙齡の美女、リンデイが正座で待っていた。

「艦長……来てもらいました」

「……」

クロノが動揺していないところをみるに変わったことではないのかと、突然和風な世

界が用意されていたことに驚いたなのはとユーノは目をパチパチと瞬かせる。

一方でアインはじとつとした目でリンディを睨みつけ、深いため息をついた。

「……リンディ。お前仕事場に趣味を持ち込むなよ」

「あら、どこかおかしいかしら？」

「なのはの顔見てみる。呆気にとられているぞ」

思い切り立場を利用しているようにしか見えない、思い切った改造にアインは頭を抱える。以前彼女の部屋に上がった時も同じような感想を抱いたが、その時よりもひどくなっているのではないだろうか。

ふとクロノの方を見れば、アインに同意するように小さくうなずいている。彼なりに物申したいことがあるようだ。

「お前も大変だな、クロノ」

「いえ……はつきり母さんに言ってくれて助かります」

リンディ
上司から目をそらしながら答えると、部下の裏切りにリンディが不満げに唇を尖らせる。

しかし今更片付けさせるわけにもいかず、なのはたちは黙ってリンディに向かい合う位置に座り、大きな和傘の下に入った。

「なるほど…そうですか…」

事件に関わるまでの経緯を本人たちの口から聞き、リンディは思わず声を漏らした。

通報を受けた時点であらかたの説明は受けたものの、通報した本人がさつさとジュエルシードを追っていつてしまったために、詳しい情報を手に入れられなかったのだ。

「あのロストロギア…ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「はい…それでボクが回収しよう…」

「立派だわ」

「だけど同時に無謀でもある」

リンディはユーノに過剰な心的負担をかけまいと、優しい微笑みを見せながら聞き取り、本心から少年の勇敢な行為を好ましく思う。

しかしリンディの優しさとは裏腹に、クロノの反応は厳しい。勇気と無謀は違うもので、少なくともその結果に次元震が発生してしまっていることは見過ごせなかった。

「それはもう言った…と…ここでここまで対処が遅れた理由は、ちゃんと用意してくれているんだろうな？」

お前たちが叱るのはお門違いだ、というようにアインが咎めるような目を向けると、クロノは苦虫を噛み潰したような、リンディはやや困ったような笑みを返した。

そこで、不穏な雰囲気を感じ取りながらも、気になる単語が聞こえたのはが話に

割って入った。

「あ、あの……ロストロギアってそもそもなんなんですか？」

「んー……遺失世界の遺産……って言ってもわからないわね……ええと……」

魔法文化に疎いなのにもわかりやすいように説明せねばと、リンディがまず言葉を選ぶ。

それより先に、アインがなのはに横目を向けた。

「……次元空間の海の中には、いくつもの世界が島のように存在している……とさつき説明したな？」

「あ……はい」

「それぞれに生まれて育っていく世界……その中には、良くない形で進化しすぎてしまう世界がある。進化しすぎた技術や科学が自分たちの世界を滅ぼしてしまつて……そのあとに取り残された危険な遺産、それらを総称して『古代遺失物』^{ロストロギア}と呼ぶの」

そう説明を受けて、なのはは昔読んだ本やテレビの内容を思い出して当てはめてみる。

よくあるのが、アトランティスだのムー大陸だの、高い文明を誇りながらも滅びたとされる伝説の国を舞台にしたSF作品であろうか。現在よりもはるかに優れた技術を巡って、世界の存亡に関わる物語が展開して行くのだ。

「じゃあ例え、マンガとかアニメに出てくる古代兵器みたいな危ないものとか、そういうことなんですか？」

「危険性もピンからキリまであるから、一概にそうとは言いきれんが…簡単に言えば、滅びた世界に遺された技術などをロストロギアと呼んでいる」

あぐらをかいていた彼女の目が、鋭い光を発する。

膝の上に乗せられていたアインの右腕が、痛みを思い出したようにブルブルと震え始めた。

「そして、今回我々が相対してきたジュエルシードは…特に危険な部類に入るロストロギアだ」

アインの口からこぼれた低い声に、なのはとユーノは思わずゴクリと唾を飲み込み、アインの横顔を凝視する。

思えばあの暴走以来、彼女の指導は激しくなった。アインの中でのジュエルシードの危険度が大きく変動したがためなのだろう。

「使用法が不明…だが使いようによっては世界どころか、次元空間さえ滅ぼすほどの力を持つことさえある危険な技術…」

「そう…、私たち管理局や保護組織がしかるべき手続きをもって、しかるべき場所に正しく保管していなければならぬ品物…あなた達が捜しているロストロギア、ジュエル

シードについてもさつき調べたわ」

神妙な表情で、リンディはなのはたちをじつと見つめる。彼女たちが関わってきたものがどんなものなのか、いかに危険なものであるかを本当に知ってもらうために。

先ほどの柔和な印象から一転したリンディの圧に、なのはとユーノは背筋を伸ばした。

「あれは次元干渉型のエネルギー結晶体……流し込まれた魔力を媒介として、次元震を引き起こすことのある危険物。最悪の場合、次元断層さえ巻き起こす危険物……」

「君とあの子がぶつかった際のあの震動と爆発……あれが、次元震だよ。たった一つのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動……それでもあれだけの威力があるんだ。複数個集まって動かしたときの影響は計り知れない」

クロノもリンディも、観測した情報からでも容易に想像できる最悪の未来に内心で背筋を震わせる。多くの事件に関わってきた彼らは、救えた世界の平和よりも救えなかった世界の悲惨さを強く記憶していた。

「大規模次元震やその上の災害……次元断層が起これば世界の一つや二つ、簡単に消滅してしまうわ……」

「聞いたこと……あります……。旧暦の462年……次元断層が起こったときのこと」

「ああ……あれは……酷いモノだった」

「隣接する並行世界がいくつも崩壊した…歴史に残る悲劇…：…そんな事態は繰り返しちゃいけない、防がないといけないわ」

次元世界を守る者として、悲痛な表情でかつての悲劇を思い出し、決意を口にするリンデイとクロノ。

噛みしめるように呟くリンデイの目が、そのまま静かに横に向けられる。咎めるような鋭さを持ったその視線は、これまでの会話に我関せずといった様子で黙り込んでいるアインに向けられていた。

「どっかの誰かさんは、そんな危ないものを素手で抑えつけようとしてたけどね」
「……………」

ジロリとリンデイがアインを睨むが、アインはどこ吹く風といった様子で気にも留めていない様子だった。

リンデイは答えを返さないアインにあきれた様子でため息をつき、用意した湯飲みに角砂糖を数個入れていく。中身はコーヒーではなく、緑茶である。

ギョツと目を見開くなのは気づかず、美味しそうにそれを飲み干すと、リンデイは困ったように眉尻を下げて目をそらした。

「でも確かに、あの状況じゃあれしかなかったって、経験豊富なあなたなら言うんでしょうけどね」

「経験……ほう、ふ？」

リンディのセリフの意味がわからず、我に返ったなのはが訝しげな表情で首をかしげる。なんの経験があると言うのだろうか。

疑問の視線を受けたアインは少しの間黙っていたが、やがて観念したように口を開いた。

「…私のそもそもその仕事は、そういった普通の人間の手に余る代物を回収することなんだ。今回のようなジュエルシードや、人命に関わる危険な古代の遺物、またはそれに相当する技術やデバイスなんかをな」

「それでもあなたの選択は問題です…魔法に触れたばかりの素人にここまで手伝わせるなんて」

「……反省している」

なのはがさつき思い浮かべたSF小説の中で、古代兵器を主人公や悪人たちが奪い合う展開が思い出される。その主人公の顔が、なのはの中でアインのものにすぎ変わった。

なるほどと納得する一方で、なのはの脳裏にある疑問が湧く。

アインは封印術式どころか魔法もろくに使えない体質だと言う。なのにジュエルシードのような危険な魔法の遺産を扱う役目を担っていると言うのは、どうにも違和感

があつた。

考え込むのはよそに、リンディはじつとアインを睨みつけていたが、やがて深いため息とともに視線を逸らした。

「…これよりロストログア『ジュエルシード』の回収は私達、時空管理局が全権を担当します」

リンディが下した決断に、なのははハッと目を見開いて我に返ると、真剣な眼差しで見つめてくるリンディを凝視した。

しかし困惑しているのはなのはだけで、ユーノは悔しげにうつむいたまま、アインは目をつむったまま反論せず、黙々とリンディの決定を受け入れているようだ。

「君達は今回のことは忘れて…：それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも…：そんな…!!」

「やめておけ、なのは。本来の形に戻るだけだ…：」

「そう…：次元干渉にかかわる事件だ。今までが特例だったに過ぎない」

「でも…：」

クロノやアインに諭されるが、なのはは納得などできない。

これまでずっと、ユーノやアインとともに頑張ってきたのだ。それは確かに、命に関わる危険な事態に巻き込まれていたことはわかっている。

しかしこの数日間は、全てに自信が持てなかった自分自身が、これまでで一番輝けた時間、人の役に立てたと実感できる掛け替えのない時間であったのだ。

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩……ゆつくり考えて二人で話し合って。それから改めてお話をしましょ」

なのはの葛藤を察したリンデイがそう提案し、ようやくなのはは小さく頷く。どうしても彼女には、今この場で決断することなどできそうにはなかった。

ニッコリと微笑むリンデイを意味深に見つめるアインには気づかず、クロノが立ち上がったのはとユーノを促した。

「……おかつていこう……元の場所でもいいね」

「はい……」

気落ちした様子で従うなのはとユーノが、クロノの後に続いてその部屋を離れる。

その際、立ち上がる気配のないアインに気づいてなのはが眉を寄せた。

「あ、あれ？ アインさんは……？」

「彼女はもともとこちら側の人間だ。今回のことであらうと事情を聞かせてもらおう必要もあるから、しばらくはここに留まることになる」

それを聞き、なのはは慌てる。急な別れになるとは思っていなかったからだ。

ずっと一緒にいたために今後も同じ関係が続くものだと思っていたが、ユーノと

は違つてアインはこの組織の一員。本隊が到着した時点で、その行動は全て管理局の指示によるものに入れ替わるのだ。

狼狽していたなのは、アインが軽く目配せをしてきたことで落ち着きを取り戻す。何も、今生の別れというわけではないのだ。

「あ、あの……アインさん！　ありがとうございます！」

悩んだ末になのが取つたのは、これまでの感謝を伝えることであつた。最初に助けしてくれたこと、魔法戦闘について教えてくれたこと、いつも話を聞いてそばにいてくれたこと、その全ての感謝を伝えた。

アインはそんな彼女に苦笑しながら、ひらひらと手を振つて答える。

なのは目が潤むのを感じながら、深々と頭を下げると駆け足でクロノとユーノの後を追つて行つた。

4. かつての戦友たち

三人の姿が見えなくなると、アインは静かに息を吐いて足を崩す。けだるげであったその目が、次の瞬間には鋭くリンデイに向けられていた。

「……………リンデイ、お前」

アインには一つ引つかかっていることがあった。それは先ほどリンデイがなのはに向けて口にしたことで、よく考えれば違和感を覚えさせるものだった。

「ずるくなつたな」

アインの厳しい一言に、リンデイは優しい笑みに憂いを混じらせる。自分自身の汚さを自覚しているかのような、傍げで自嘲じみた笑みを浮かべた。

本当になのはの身の安全を考慮するなら、何が何でも彼女を関わらせない対処をとるべきであった。法に則ってデバイスを取り上げるなり、頷くまで根気よく説得するなり。

リンデイはそれをせず、なのはたちに猶予を与えた。自ら協力するという選択肢を、口にはしないままに提示したのだ。

「あの子達は、きつと来るぞ。あれは異様なほどに頑固な子だ」

クロノが聞けば、きつと激昂しながらアインのセリフを否定しただろう。管理局の正義を盲信している傾向にある彼にとって、組織の中でも重要なポストについている母がそのような選択をとったなど信じようとしまい。

しかし現に、リンディは否定も肯定もせず、乾いた笑みを浮かべながら物憂げな表情で虚空を眺めているだけであつた。

「昔のようにはいかないわ……………二十年前のようには。あなたの……………あなたたちの黄金時代のようには」

「……………そうだな。あの頃のようにはいかないよな」

汚い大人になってしまった二人の女は、そう言つて遠い目になる。

気高く綺麗な理想を掲げていたリンディと、決して折れぬ固い信念を持つて生きてきたアイン、当時の自分たちが今の自分たちを見れば、きつと幻滅するだろう。

そういう生き方しか選べなかつた未来を、きつと厭うだろう。それほどまでに、彼女達は世間の波に揉まれ、空気に穢され、変わり果ててしまった。

アインは首を振り、暗い感情を払いのけるようにしてリンディに向き直り、別の強い眼差しを見せた。

「……………それで、ハジメは？」

「まだ見つかつていないわ。というか、まず間違はなくこの世界にはいないはずよ」

「そうか……どちらかといえば、その方が話が簡単だったんだがな」

己の半身ともいふべき男がこの世界にいたのなら、これまで起きてきた数々の現象にも説明がつけられた。

しかしそうでないのならより謎が深まるばかりで、アインはつい皮肉げに苦笑してしまっていた。

「この世界には、何かと縁がある。……我々の不始末のせいで傷つけられた者達が、悲しみを与えてしまった者達が大勢いる。疫病神は、我々の方かもしれん」

「縁……？」

まるでこの世界で起こったあらゆることに関わりがあつたともいうようなアインのセリフに、リンディは眉を寄せて詰め寄る。

友人としてではなく、一人の管理局員としてもその言葉は見過ごせなかつた。

「何を知っているの……あなたは」

「……それは」

「お前がかつて、この世界で果たした任務のことか？」

凍りついたように顔色を悪くするリンディと虚空を見つめるアインの元に、一人の男の声が割って入った。

聞き覚えのある声にアインは目を見開き、その方向に振り向いて声の主を凝視する。

管理局の制服にいくつも勲章をつけた、背の高い中年の男性。黒いサングラスをかけたその男の前にして、アインはどこか切なげな表情で硬直していた。

「……マンダリン、陸尉……」

◇ ◇ ◇

目前に広がる、マーブル模様の空。

いい景色とは言い難い、少しばかり気味の悪さを感じさせるそれを眺めながら、アインと男性——サクソ・マンダリン一等陸佐は並んで立っていた。

「陸尉……いや、今は陸佐でしたか。随分、老けましたな」

「アルデブラント……久しいな。そう言うお前は変わらん……お前を見るたびに時の流れを忘れそうになる」

十代後半の姿のまま肉体が固定されているアインに比べて、サクソは時の流れの影響を受けていた。

サングラスに隠れた目尻には深いしわがいくつも刻まれ、よくみれば肌のあちこちにシミができています。しなやかな筋肉で覆われていた肢体にはさほど変わりはないものの、ほとぼしる覇気にはわずかにほころびが生じていた。

戦士としての全盛期を越え、サクソは今緩やかに老い始めていた。

「もしかしてムーヴも……に？」

「ああ……。お前がいると聞いて、自ら志願してきた」

「……大きくなったことでしょうね」

「……もう随分とな」

幾度か話題を差し示してみるものの、どうしても業務連絡のようになってしまい話が続かない。互いが相手に壁を作ったまま向き合っているために、空気が和らぐことはなかった。

傍観者に徹していたリンデイもこの空気には堪え兼ね、乾く喉を潤すために自分で入れた砂糖入り緑茶を数杯飲み続けていた。

「……とこころでどうですか、あなたが今育てているという新人たちは」

「見ての通りだ。優秀なのはいいが、その分失敗を知らずに育ってきたために誰にでもあの態度だ。……どうやら俺には、戦技はともかく人を育てる素質はなかったらしい」

「……心中、お察しします」

長く局に勤めているアインに対する礼儀など、全く持ち合わせていなかった3人の騎士のことを思い出してアインは苦笑する。今更敬語など使われても居心地が悪いだけだが、少なくともそれはどの場面であつても胸の内に隠しておくべきものだ。

サクソの態度を見る限り、あれがデフォルトの態度なのだろう。そう思うと、彼らを指導しているサクソの苦勞がうかがえた。

逆にサクソは、アインに対して羨望じみた眼差しを向けていた。その脳裏に浮かぶのは、優しくも芯の強さを持った純白のバリアジャケットの少女の姿だ。

「お前の教え子はいいい子に育っているな」

「あれは元からです。…私の手がなくとも、いずれもう一人の師が立派に育ててみせたいでしょう」

「それでも曲がらずに育ってきたのは、お前の功績もあるだろう。そう自分を卑下する必要は……………」

「私は、誰にも必要とはされぬ存在です。そしてここにいることも忌避されるべき存在です…気遣いは無用」

「……………そうか」

はつきりと、しかし無機質に言い切るアインにサクソは何もいえずに黙り込む。悔しさや自分の不甲斐なさを嘆くでもなく、他人事のようにただ事実だけを述べているようなアインの言葉に、サクソもリンデイも悲しげに目を伏せていた。

「思えば、あの頃よりお前も俺も歳をとったが、変わっていないのはお前だけのようだな」

「…………確かに変わっていないかもしれないね。今も昔も、私はこの世で最も醜く忌まわしき化け物です」

「そういうことではない……俺が言いたいのには」

「私はずつと……自分のことしか考えられない、くだらない女ですよ」

虚空を見つめたまま、無気力な様子で佇むアインに対して、サクソはそれ以上の言葉を見つけられない。

慰めも同情も、アインにとつてはなんら意味のないことのように、どんなに言葉を重ねても彼女は自分への評価を変えることはないように思える。

思い沈黙が降りる中、アインはややあつてからサクソの方に体ごと向いて目を合わせた。

「……それよりも、例のダークローチに似た連中について」

急な話題の変化にサクソは口をつぐみ、ついで大きくため息をつく。かつての戦友としての時間は、もうこれで終わりのようだ。

仕事としての表情に戻ると、サクソは以前送られてきた報告にあった情報を思い出し、眉間に深いしわを寄せた。

「ああ……記録は見た。色は確かに異なるが……確かにあれは」

「いまだに信じられません。あの異形達はその時……確かに消滅したんですから」

険しい顔になるサクソの動揺に同意するように、当事者であったリンデイもまた、ブルリと背筋を震わせながら目を伏せる。

一度世界の終焉を目の当たりにしかけて、間一髪で救われた者にとって、今回の事件はまさに悪夢の再来のようにも感じられた。もう二度と会いたくないと思っていた異形の兵士たちが、今度は別の世界に現れるなど、予想だにできなかった。

「酷似した何か……と言う可能性は？」

「ただ似ているだけならなんの問題もありません。問題は……奴らがどこから来て、何のために現れたのかです」

「お前がここにいる時点で『バトルファイト』が再開されたと言うのは考えにくい……偶然の自然現象でもないとするならば」

「……人為的な物、と言うことですか？」

「その可能性はある」

真剣な表情でサクソが口にした可能性に、リンディはかぶりを振って否定する。隣のアインが黙り込むのにも気付かず、想像するだけで恐ろしい予想を論破すべく理由を脳内に列挙していった。

「そこそ考えられませんよ。あんな怪物を無数に……そもそもあの不死の力を人間が再現できるだなんて思えません。研究自体、あまりの難易度に遅々として進まないまま凍結されたという話じゃ……」

「だがそれ以外に……」

もう二度と悪夢を見たくないリンデイと、悪夢の再来の可能性を否定できないサクソが反論し合おうとした時、それまで黙っていたアインがためらいがちに口を開いた。

「……その可能性は、あります」

アインの口にした一言に、リンデイとサクソは大きく目を見開いて振り向く。考えうる限り最悪の可能性を、かの事件の際たる当事者に肯定されてしまったのだ。

特にリンデイの狼狽ぶりは凄まじかった。無の表情で佇むアインの横顔を凝視し、どうか聞き間違いであつてほしいというような、すがるような眼差しを送っていた。

だがアインは、そんなリンデイに申し訳なさそうに首を振り、深いため息をついて語り始めた。

「私の細胞を使い、人工の生物を生み出そうとした科学者がいました。その目的は極めて個人的なものでしたが……その成果はあらゆる面で無視できない精度を誇っていましたよ」

「何ですって……!?」

思わずリンデイが声を漏らし、青い顔で口元を手で覆う。気を抜けば悲鳴がこぼれてしまいそうなほどの恐怖が、リンデイの胸中で膨れ上がっていた。

硬直しているリンデイに鞭打つ気分になりながら、アインはさらなる事実を告げる。自分自身の心の傷を、自分で抉りながら。

「……試作品トライアルシリーズ。そう呼ばれた生物兵器と、私は相對したことがあります」

「……お前の、細胞を？　だが……そんな話は」

「でしょうね……管理局の研究部門にて嚴重に管理されているはずの情報が外部に漏れていたなど、到底公表できるものではありませんから」

アインの手が、自らの二の腕に触れる。当時の感覚の全てが蘇つてきそうなほど、アインは自分で話しながら緊張を覚え、鳥肌がたつ肌をさする。

ぎゅう、と自らの腕を締め付けるその姿は、己への戒めか罰のようにも、溢れそうな痛みを抑え込んでいるようにも見えた。

「事態が片付いた折には、関係者には緘口令がしかれました。……首謀者と思われる人物はすでに死亡していたため、関連する事件のほとんどの原因であると記録され、事件は処理されたと聞いています」

「己の失態を隠し、程のいい生贄を矢面に立たせる……なるほど、らしいやり方だ」
「何をわかりきったことを……」

サクソの吐き捨てるような言葉に、アインは小さく鼻で笑う。

サクソもわかっているというようにアインの肩に手を置き、ついで呆れと苛立ちの混じったため息をついた。かつて共にいたときは組織の末端でしかなかった彼らにとつて、上の連中に使い捨て扱いされることは少なくなかったからである。

リンデイは今だに信じられないといった様子で険しい表情を浮かべていたが、やがて大きく肩を落とすと視線を外した。諦観にも似たその感覚は、随分昔にアインに味わわせられたものによく似ていた。

「…わかったわ。あなたの情報をもとに調べてみる……でも期待はできないわね」
「深入りしすぎるなよ。……この一件、思った以上に闇が深い」

アインの警告に、リンデイはいつかと同じように手を振って答える。かつてとは比べ物にならないほどの無茶振りを背負ってしまったが、それを聞いて放置できるほどリンデイは樂觀的ではなかった。

少しだけ、昔と同じ関係性に戻ったように見える二人を見つめていたサクソは、目を伏せるアインに向かって尋ねていた。

「……お前は、恨んではないのか」

サクソには、かつてアインがとった選択を責められなかった。地位、信頼、榮譽、己の持つ全てのものを犠牲にしても、彼女は自分の守りたかったものを守り抜いた。

正義の使者たる時空管理局局員としては認められない行為であっても、その選択の結果彼女は多くの人間を救ったのだ。

しかし体面を顧みたま局の上層部によって情報は改竄され、嘘の事実に踊らされた世間はその行為を讃えることなどせず、多くの人間を危険に晒したとして蔑み、憎しみの対

象とした。自らの命の恩人を、恥知らずにも憎悪したのだ。

サクソはそんな上層部や市民を嫌悪しながら、同時に何もできずにいた自分自身を恥じるほかになかった。

「お前に、それほどまでの重荷を背負わせた俺たちを……恨んではいけないのか」
「微塵も」

静かに見つめてくるサクソの眼差しに、アインは無表情で即座に答える。

その声には怒りも悲しみも、いかなる感情も宿ってはいなかった。

「私は私の意志で——この十字架を背負うことを決めました」

5. ハジメという男

新暦41年3月、ミッドチルダ西部エルセア地方にある一件の喫茶店の店先で箒を動かす男、アイゴ・ハジメと名乗った彼はいた。

まだ店を開けていない早朝とはいえ、無心に埃や塵を集める彼の表情には全くと言っていいほど親しさが感じられない。整った顔立ちをしているだけに、冷たい人形のような印象を抱かせた。

「……なんとというか、無愛想なやつだな」

そんなハジメを物陰から覗く、いや監視するアインはそう呟き、雰囲気を出すために購入したアンパンと牛乳を胃に流し込む。なぜかは知らないが、張り込みや見張りにはこのメニューが定番、というかお約束なのだとする知人から聞かされていた。

その後ろで腕を組み、おもたそうな胸を二の腕で持ち上げるリンデイが呆れた目で見つめる。店からは見えづらくても、後ろからは丸見えという間抜けな格好にため息をついた。

「アイン……あなたいくらアンデッドの反応がないからって、一般人のストーカーなんてやっていいの？」

「……ストーリーカーとは人聞きの悪い。監視だ」

「だからなんでアンデッドとは無関係の一般人を監視する必要があるのかって聞いているのよ」

朝も早よから叩き起こされ、理由を聞かされることもなく連れ出された先で始まった張り込みに、リンデイはどうにもやる気が出ない。

馬鹿馬鹿しいとばかりに肩をすくめ、堀に背中を預けてダレているリンデイに、アインは微妙に剣呑な表情を浮かべて目を伏せた。

「無関係、な」

関係ならば少しはある。以前天文台で出現したアンデッドを謎の騎士が討伐した直後、避難所に訪れていた彼のことだがアインは記憶から離れなかった。

確かにこうして見る分には、無愛想で子供以外にやや冷たい面を見せる他には何もおかしいことはなく見える。むしろリンデイには、ストイックな部分に好感を抱かせている。

だがアインはそうは思えなかった。長年現場にいた、敵と命のやり取りをしてきた彼女だからこそ、ハジメから感じる冷たい気配を見過ごすことができなかつたのだ。

「……」

その時、わずかな気配と視線を感じ取つたのか、ハジメは掃除の手を止めてアインた

ちのいる方を鋭く睨みつける。

気づかれた、と一緒に覗き込んでいたリンデイが身をすくめたときには、アインがリンデイを引っ張り込み、扉の影の中に身を潜めていた。

ハジメはしばらくじつとアインたちが隠れている場所を睨みつけていたが、やがて視線をそらすと掃除道具を片付け、店の中に戻っていった。

「……いびつくりした……」

「勘は鈍くないらしいな。一般人というには、ずいぶん物騒な目をしたやつだ」

「それはあなたが監視しているからじゃないの？」

未だドキドキと早鐘を打つ豊満な胸に手を当てるリンデイが、アインをなじるようにジト目を向ける。

微塵も悪びれた様子のないアインは、ハジメの入った店をじつと見据えて考え込む。その脳裏に蘇るのは、あの謎の騎士がアンデッドに向けてこぼしていた「言語」だった。

（あの時間こえたやつ声……アイゴ・ハジメ、あいつとは会話らしい会話はしていないが、やはり同じものに聞こえた）

騎士の発した声とハジメの声、どちらも判断材料としては聞いた時間が短すぎたが、それでも確信が持てるほどに近い声であったとアインは記憶している。

しかし、本当にアインの想像した通りだとすれば、さらなる疑問が胸中に浮かび上がった。

（あの騎士がアイゴ・ハジメだったとしたら……あの時会話していたように見えたのはどういうことだ？）

片や人を襲う不死の怪物、片やライダーシステムに酷似した鎧を纏い彼らを狩る謎の騎士。なのに両者は同じ言語を交わし、何らかの関連性をうかがわせる。

謎ばかりが放置され、真相が全く見えてこない状況の中、アインは自分の中の嫌な予感がどんどん膨れ上がっていくのを感じていた。

（……私の予感が当たっているにせよ外れているにせよ、気を抜くことはできんだろうな）

胸に下げたスペードのペンダントと箱型のデバイスに手を伸ばしながら、アインが己の判断を再確認していたときだった。

リンディの持っていた端末に振動が入り、慌てて画面を展開して通知内容を確認する。するとリンディの表情が驚愕に変わり、すぐさまアインに緊張の目が向けられた。

「！アイン、反応が出たわ！」

「……わかった」

アインは名残惜しそうに喫茶店から視線を外し、リンディの端末の情報からアンデッ

ドの位置を把握する。

手にしていたペンダントを宙に放り投げ、バイク形態になるように命じるとアインはすぐさまそれに跨り、エンジンを噴かせる。轟音を響かせてから、アインは地面を蹴つて己が騎馬を発進させた。

視界の端で、喫茶店の扉を慌ただしく開けて飛び出していくハジメの姿を捉える。店の外に停めていたバイクに飛び乗ると、ハジメもまた爆音を響かせて走り出していく。

その方向は、奇しくもアインと全く同じであった。

(やつも気づいた……?)

予感が確信になりつつあることを察しながら、アイン己の敵が待つ場所へと相棒の前輪を向け、全力疾走を開始するのであった。

◆? ◆? ♥ ◆?

そこでは、嵐が吹き荒れていた。

まだ若葉が生える前の寒々とした森の中、淡い青色の雷光があちこちに枝を伸ばしてはその鋭い枝先を刹那のうちに突き刺している。まるで乱気流の中であるかのような雷の暴力が暴れまわっていた。

その中心に立っているのは、広く伸びた鋭利な角を有する鹿に似た異形。筋肉質な二足歩行の体を支えにし、頭蓋から伸びた枝のような角から凄まじい勢いで電流を放出し

ている。その威力たるや、木々を熱で断ち切り岩盤さえも一撃で砕いてしまうほどだ。
「くっ……！」

そんな自然の脅威そのもののような異形を相手にして、流石のアインも苦戦を強いられていた。ただでさえ電流を通す鋼の鎧と剣を有しているのに、四方八方へと伸びる雷の槍がアインの接近を許してはくれないからだ。

ゴロゴロと枯れ葉の絨毯を転がりながら、アインは襲いくる雷撃の雨の中を紙一重で抜け続ける。速さで攪乱し、一旦物陰に隠れると、アインは剣を展開して一枚のラウズカードを引き抜いた。

前回のBOARDの襲撃の際、現れたバツタの異形——ローカストアンデッドを封印したことで手に入れた新たな力だ。

アインは数回深呼吸を繰り返して、張り詰めた筋肉を少しだけほぐして、呼吸を落ち着かせる。そしてアインは意を決して物陰から飛び出し、デリアアンデッド鹿の異形に向かって突進を開始した。

【KICK^{キック}】

ローカストアンデッドのカードを剣の溝に挿してスライドさせ、封じられた力の一端を解放させる。強靱な脚から繰り出される蹴撃の力がアインの右足に宿り、それによりアインから気迫が迸る。

「デИАーアンデッドは向かってくるアインに危機感を覚えたのか、放電の方向を一箇所に集めて撃ち放つ。砲撃のように収束された雷撃が、真正面から向かってくるアインを貫こうと襲いかかった。

だがアインはその瞬間、ブレイラウザーを投げつけ、雷の砲撃にぶつめた。金属である剣は避雷針のように雷撃を吸収し、まるで関係のない方を向いている鋒（シバ）から電流を放出する。

「ウエエエイ!!?」

一方向にのみ雷撃を集中させ、他の方位が無防備となったデИАーアンデッドに向けて、アインが勢いよく跳躍し、右脚を突き出した。

同じアンデッドの力が込められた一撃を胸の中心に食らい、デИАーアンデッドは衝撃とともに吹き飛ばされていく。その瞬間、デИАーアンデッドのベルトのバックルが音を立てて展開された。

アインはそれを見逃さず、デИАーアンデッドに向けて空のラウズカードを投げつける。カードが胸の中心に突き刺さると、デИАーアンデッドは緑色の光を発しながらカードの表面に吸収され、自ら回転してアインの手元に戻っていった。

「スピードの6……:THUNサDERダか」

地面に突き刺さった自分の剣を引き抜き、アインは回収したカードをその中に収め

る。

辺りを見渡し、たった一体の異形が作り出した惨状に顔をしかめる。これほどの被害をもたらす相手があと50体近く存在しているという事実には、柄にもなく不安を感じてしまっていた。

その時、そんな不安定な精神状態が影響したのか、背後から急速接近する蛾モスアンデッドのような影に気づくのが遅れてしまった。冷や汗を流しながら、アインが迫り来る蛾の異形に剣先を向けようとした瞬間であった。

【PLANET】

電子音声とともに、モスアンデッドの体に無数の蔓がまとわりつき、その体を縛り上げる。自由の効かなくなった体でもがくモスアンデッドが苦悶と怒りの咆哮をあげた。

その時、突然の事態に言葉を失うアインの目に、彼女が待ち望んでいた存在が目に入った。

「お前……!」

「オオオオオオオオ!!?」

弓の先端から蔓を伸ばした謎のハートの騎士はアインに視線を向けることなく、モスアンデッドをきつく拘束したまま全力で疾走し、弓の弧の刃を振りかざして雄叫びをあげた。

刃が蔓ごとモスアンデッドを斬り裂き、緑色の体液を噴き出させて吹き飛ばす。悲鳴をあげるモスアンデッドに、謎の騎士は容赦無く追撃を加えていった。

「????????
!!?」

だが、モスアンデッドもただやられるだけではなかった。自身の大きな羽根をばたつかせると、猛毒を含んだ鱗粉を撒き散らし始めたのだ。

騎士は冷静に、鱗粉ごとモスアンデッドを貫こうと矢を放つ。しかし放たれたその一撃はモスアンデッドにあたる直前で弾かれ、見当違いの方向に跳ね返されていった。

「????????
!!?」

「うわ!?」

何かをまくし立て、挑発するような声を発していたモスアンデッドの口の中から、毒々しい色の液体が吐き出される。

嫌な予感がしたアインと騎士は咄嗟に左右に分かれて跳び、撒き散らされる液体を躲す。地面の枯葉にかかったそれが、白い煙を上げて地面を腐食させていく光景を目にする。騎士は仮面の下でじつとりとした冷や汗をかいた。

再度二人を狙って毒液を吐きかけるモスアンデッドの攻撃を躲しながら、アインは騎士に鋭い目を向けた。

「お前には、聞きたいことが山ほどある！ お前は一体何者で、どこでそのライダーシステムを手に入れた!?？」

「……………答える義理はない」

吐きかけられる毒液に向けて、切り飛ばした木の枝を投げつけて盾にし、騎士がモスアンデッドに接近する。しかし振り抜いた刃はモスアンデッドが飛翔したことで空を切り、さらに遠距離から毒液をはきかけられてやむなく後退を強いられた。

「俺は俺のなすべきことをやるだけだ!!？」

未だモスアンデッドに凄まじい敵意を向ける騎士に、アインは困惑混じりの険しい表情を浮かべる。騎士に答えるつもりはないようだが、それでも騎士の言い分は奇妙に聞こえた。

「アンデッドと戦うことがお前のなすべきことか!!？」 アンデッドと会話をしていたお前が、アンデッドを狩るというのか!!？ 笑わせる!!？」

「敵と語らうことの何がおかしい……………現に敵である俺とお前も会話をしているじゃないか」

「少なくとも私は、問答無用で武器を向けてきたお前よりは、平和的に話しかけたと思うぞ!!？」

モスアンデッドが吐き出す毒液の散弾により、森が恐ろしい勢いで死んでいく様を見

ながら、アインは騎士に対して皮肉をぶつける。

遠距離からの攻撃は当たらない。しかし毒液のために近づくこともできず、向こうからの攻撃を躲し続けるしかない不利な状況に、二人の騎士は苛立ちを募らせていた。

「俺が戦うのは、これこそが俺に定められた宿命だからだ。お前のように軟弱な意思によるものではない」

「なっ……」

不意に騎士から告げられたセリフに、アインは状況も忘れて硬直した。顔を向けることもしない、何処の馬の骨ともわからない騎士からの罵倒に、アインの頭には一気に血が昇っていった。

「私が……軟弱だと？ ふざけるな!!? 私だって使命を受けてここにいる!!? 友を……これ以上大切な人を失わないためにこの剣を振るい続ける!!? それが軟弱だというのか!!?」

「……己のためではなく、他者のために力を使うというお前の意思が、根本的に軟弱そのものだと言っているのだ」

過剰に激昂するアインに向けて、ハートの騎士は仮面の下からでもわかるほど冷たく蔑んだ目を向けてくる。

その声はアインの信念を馬鹿にしているのではない。迷うことなく、しかしあらかじ

め用意されていたかのようなその言葉を口にした彼女を、憐れんでいるかのようだった。

「お前の使命はお前自身が決めたものか？ 組織に従うだけで、己で道を選んだわけでもないくせによくもそこまで大きな顔ができるものだ……使命という言葉を使い訳に使うなよ」

辛辣な騎士の言葉に、アインは咄嗟に反論することもできずに絶句する。それは決して凶星だったからではなく、認めたくはない、しかし心のどこかで納得してしまっている自分自身に愕然としていたからだ。

「だが……だがそうだとしても、私は自分の意思で友を守るために……！」
「お前はその他者のために戦い続けて——一体いくつのものを失った？」

その言葉が、アインの胸に突き刺さる。

アインの脳裏に蘇ってくるのは、襲撃によって儂く命を散らされたBOARDのメンバーたち、いまだに行方がしれないサクソとケインズ。

そして、かつてともに戦っていた戦友たちの最期の姿——その顔が、今力を貸してくれているリンデイのものに変わった。

「——あああああ!!？」

まるで悲鳴のような雄叫びがアインの口から放たれる。湧き上がった衝動のままに

木陰から飛び出したアインは、そのままモスアンデッドに向かって勢いよく突撃を開始する。

フェイントも策も何もない、無防備な格好のカモとなつてゐるアインに向けて、モスアンデッドは毒の散弾を吐きかけていく。

しかし毒液が鎧にかかり、腐食させボロボロにしてもアインは止まらない。肌が露出し、痛々しく焼け爛れても足を止めず、モスアンデッドの口に向けて剣の切っ先を突き出した。

「!?」

「おやおおおおおおおお!!」

喉奥を貫かれ、緑色の体液を吐き出しながら痛みには後ずさるモスアンデッド、その口からは、もはや毒液を吐き出すことはできない。舞い散る鱗粉も、接近戦では微塵も役に立つてはくれない。

毒液の散弾による妨害がなくなった今、騎士たちを止めるものはもう何もありません。あった。

【THUNDER, KICK, LIGHTNING BLAST】
 【CHOP, TORNADO, SPINNING WAVE】

手に入れたばかりの雷の力と蹴撃の力、そしてもう一人の騎士が操る竜巻と手刀の

力。それぞれが組み合わされ、不死の怪物を討ち取る必殺の奥義が発動しようとしていた。

「ウエエエエエエエイ!!？」

「フツ！」

示し合わせたわけでもない、しかし完全にタイミングの一致したそれぞれの一撃が炸裂し、爆発とともに異形の体が吹き飛ばされる。

自らが殺してきた森の残骸の上に投げ出されたモスアンデッドのベルトのバックルが、カチリと音を立てて展開した。

するとアインよりも先にカードを抜いたハートの騎士が、モスアンデッドに向けてカードを投擲する。緑色の光に包まれて消えていく異形を見届けてから、アインは剣呑な眼差しをハートの騎士に向けた。

「……今ようやくわかった。私は貴様が嫌いだ………顔を合わせているだけで不愉快だ」

「奇遇だな、俺もだ」

武器を互いに向け、アインとハートの騎士が睨み合う。相入れぬ想いは今この時、両者の間に大きな壁となつて立ちふさがっていた。

アインはいまだ、この騎士を敵とは認めてはいない。しかし分かり合えぬ相手である

ことは、先ほどのやり取りから察してはいた。

「もし私の友に手を出してみる。その首即座に撥ね飛ばしてくる」

「そんなつもりはないが……面白い。できるものならやってみるがいい」

どこか戦いそのものを求め、異形の血に濡れることに酔っている様子のある騎士に、アインは強い嫌悪感を抱く。

できれば目に入れることも遠慮したい相手であるはずなのに、この騎士を放置することとは許されない気がした。危険性だけではなく、自分の中の言い表せない感情から。

「お前もいずれ始末するつもりであつたが……少し興味が出た。その甘い覚悟がどこまで通用するか見届けてみるでしょう……じゃあな」

「余計なお世話だ」

剣を下ろすアインに背を向け、ハートの騎士は自らが呼び出したバイクに乗ってさっさと走り出してしまふ。

その背中をしばらく睨みつけていたアインは、その姿が見えなくなるとようやく肩の力を抜き、深いため息をついて目を伏せた。

と、その時、アインの携帯端末に着信が入り、アインはすぐに空間ディスプレイを展開する。案の定それは、切羽詰まった様子のリンディであった。

『アイン！ 別の場所からもアンデッドの反応が出たわ！』

「……わかった」

これ以上あの騎士にかまけていない場合ではない、と自分を納得させ、アインは再びブルースペイダーにまたがり、発進させる。

あの騎士を探す手がかりはある。次に出くわした時には今度こそ化けの皮を引き剥がしてやるのだと、アインは心に決めていた。

だがそんな激しい感情は、長くは続かなかった。

リンディのナビゲートでたどり着いた洞窟についたアインは、激しい戦闘の後をうかがわせる破壊された岩場を目の当たりにする。

「これは……」

すでにそこは静まり返っていて、戦闘は終わってしまったことを理解したアインは、その中心で立ち尽くしている人影に大きく目を見開いた。

封印された異形の絵が描かれたカードを持って俯いているその騎士、ダイヤをモチーフにした銃士を、アインは凝視してしまっていた。

「……陸、尉？」

6. 折れた心

目の前にいるダイヤの銃士の姿に、アインは思考すらも凍りつかせて立ち尽くす。ずつと姿をくرامせ続けていた男が、思いもよらない場面で何の前触れもなく現れたことに、理解が追いつかなかった。

見ればあたりはどこどころ焼け焦げていて、サクソがギャレンのライダーシステムを使用して戦闘を繰り広げていたことがわかる。そしてその手に挟まれている一枚のラウズカードを目にし、その勝者がどちらかも理解できた。

『アイン……？ どうしたの？ 何があつたの？』

通信機越しに、反応のなくなったアインを心配してリンデイが声をかける。

そこでようやくアインは我に返り、慎重にサクソの方に近づきながら様子を伺った。

しかしアインは徐々に、サクソの様子に違和感を覚える。彼ほどの男ならすでにアインの気配に気づいていてもおかしくはないのに、立ち尽くしたままずっと動こうとしなかったからだ。

「陸尉、なぜあなたがここに……いや、そんなことはもうどうでもいいです。一体今までなにをやっていたんですか!?？」

やや声を荒げ、振り向きもしないサクソを問い詰めるアインだったが、それでもサクソは微塵も反応を見せない。少しずつ嫌な予感を覚え始めたアインは、そこでようやくサクソの発する覇気が微弱なものになっていることに気づいた。

「陸尉……？」

戦士としての気配を失いつつあるサクソの元へ、ゆつくりと近づいていくアイン。

すると不意に、サクソの体がぐらりと傾ぎ、声も発さずに勢いよく倒れた。直後、サクソのベルトから放たれた半透明の壁がサクソを包み込み、ボロボロにくたびれた制服姿へと変えた。

「…………… 陸尉！」

慌てて駆け寄ったアインによって抱き起こされても、サクソは反応を示すことはなかった。

◆？ ◆？ ?? ♣？

まぶたに突き刺さる日の光に魘されていたサクソは、少しずつ意識を浮上させていく。

ぼんやりとしたまま目だけを動かし、自分がどこか見覚えのない場所で寝かされていることに気づく。妙な民芸品が並べられ、異国の雰囲気を放つ内装に改造されているその場所を見やると、サクソはのろのろと体を起こした。

上半身を起こしても、サクソはまだ朦朧としていた。自分の中の力が根こそぎ奪われてしまったかのような、そんな脱力感に苛まれたまま無言を貫く。

そこへ軽いノックの音が響き、サクソの返答を待つことなく扉が開かれる。無遠慮に入室したアインは、すでに目を覚ましているサクソを前にして安堵の表情を浮かべた。

「お気づきになりましたか」

「……アルデブラント」

平坦な声でサクソが名を呼び、アインの後ろにいる見慣れない緑色の髪的女性を見つめる。いや、よく見れば知っている顔だった。

局でも能力の高さや見目麗しさで有名な女性局員であったことをようやく思い出し、ついでサクソはなぜそんな者がアインと一緒にいるのかと訝しげに眉を寄せた。

「……は……一体どこだ」

「私の友人の家です。……あの時から、拠点として世話になっています」

「……前に聞いていた、ハラオウンか。次元うみの連中に助力を乞うとは、随分思い切ったことをしたな」

「ことは、もう海だの陸だの言っている場合ではないと思いましたがね」

やや警戒気味に距離をあけているリンデイがサクソを見つめるも、サクソは視線を外して俯く。

地上と仲の悪い次元の女に対する猜疑心と、組織を裏切った可能性のある男。互いにいい印象を持っていないがゆえに、この場の空気は最悪の一言に尽きた。

アインもその緊張感は察しながら、小さく咳払いをして気分を切り替える。両者に確執はあろうが、互いにやっておかねばならないことがあるのは確かだ。

「……マンダリン陸尉、一体何があつたんですか？　今まで……どこにいたんですか？」

「……………」

「何とか言っていただけませんか？　場合によっては、あなたには軍法会議での詳しい尋問が必要になるかもしれませんよ」

きつい眼差しを向けるリンデイが、黙り込んだまま動かないサクソに対して詰問する。リンデイのサクソを見る目は明らかに敵意を孕んでいて、歩み寄ろうとか説き伏せようという意志が微塵も感じられなかった。

アインは渋い表情でリンデイを見やるが、この場合ある意味間違つた行動ではない。サクソも地位と責任を持った管理局員であり、その行動の全てには常に注意が求められる。任務を放棄し、報告も連絡も相談もなく行方をくらませていた相手に対する遠慮など、あつてはならないものであつた。

「陸尉、お願ひします。あなたが何かを抱えていることはわかっていきます……そしてそれが我々にとって不都合なことであることも」

アインもサクソの動向へ疑念を抱いているがゆえに、真剣な表情でサクソを見つめる。

実力も経験も豊富で、信用に値する騎士であった彼の突然の行動の真相を知らなければ、アインは自分の中の信念の揺らぎを修正することはできそうになかった。奇しくも、以前ハートの騎士に言及されたように。

「ですが今は、どんな些細な情報であつても無視できない状況なんです。奴らのことももちろん、BOARDのことに関しても……」

真摯な態度で頭を下げるアインに、サクソはやはり視線さえ向けずにうつむいたままだった。

しばらく沈黙が続き、我慢の限界に達したリンデイが険しい表情で怒鳴りつけようと息を吸い込みかけたときだった。

「俺はクロスボードを探していた……あの男は、重大な事実を俺達に隠していた」

観念したように、もしくは堰き止めていた感情が溢れ出すように、サクソは唐突に話し始めた。アインは口を聞いてくれたことにも安堵し、リンデイは懽然とした態度で耳を傾ける。

向けられる二つの視線を気にかけるわけではなく、ただの独り言のようにサクソは虚ろな声で語って聞かせた。

「俺とお前が使い続けてきたライダーシステム……こいつには欠陥があった。使用するたびに装着者に悪影響を与え続け、いずれはその体を蝕む」

「なっ……」

「本当はお前にはもつと早く伝えるつもりだった……俺と同じで、戦う度に無自覚のうちに壊れて行くお前を見るのが忍びなくてな。俺はクロスボードを問い詰め、口を割らないやつを連れ出し尋問するつもりだった、だが……」

そしてサクソは思い出す。忌々しいあの日の夜のことを。

幾日も続く任務の最中、サクソは自分の体に表れ始めた異変に気付き、一度ケインズを問い詰めた。しかし返答は『ライダーシステムに不備はない。あるとすれば使用者の精神状態が性能に反映されることによるものである』というもの。サクソは納得できないものを感じながら、初めはケインズを信じて引き下がった。

しかし異変は収まらず、それどころか日常生活にも現れるほどに症状は悪化を始めた。日に日に増す恐怖心、まともに言うことを聞かなくなっていく体、その兆候はついに任務にも現れるようになっていった。

精神的にも疲弊し始めていたサクソは、ついに行動に出てしまった。ケインズの元を強襲し、力尽くでシステムにおける不備の真相とを責任の追及を行おうとした。それで

も口を割らないケインズを気絶させ、隔離した後で尋問しようとBOARDを離れようとした時だった。

予想外のアンデッドの出現により、BOARDが壊滅したのだ。

サクソが話し終えると、リンデイの私室にはしばらくの間沈黙が降りた。誰も口を開かず、しかし話し始めることを促すような空気が流れる。

居心地の悪い微妙な雰囲気をもっと破ったのは、大きなため息をついたアインだった。

「……あの襲撃はやはり、陸尉の手によるものではなかったのですね」

「その騒動の最中、俺はクロスボードを見失った。奴には今回の案件の責任の一端がある……俺はやつを許さない」

「……だったら」

肩の力を抜くアインの背後で、押し殺したような低い声が響く。

アインがハッと振り向いた先には、鬼のような形相でサクソを睨みつけるリンデイの姿があった。ざわざわと風もないのに髪が蠢いているようにも見え、悪鬼羅刹のごとき迫力を醸し出していた。

親友の見たこともない姿に、アインは思わず顔をびっしりと汗で濡らしながら、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「だったらなんで、アインの元に現れなかったのですか？　アインはずっとあなたのことを気にかけて、それでも懸命に戦い続けてきたんですよ……なのにあなたは、自分の復讐のためにアインを見捨てたんですか!?!?」

「リンデイ……落ち着け。頼むから落ち着いてくれ」

「あなたがもつと早くアインの前に現れていれば、傷つく人がもつと少なく済んだかもしれないのに!!?　それでよく、騎士なんて名乗れたものですね!?!?」

うつむいたまま何も答えないサクソに、リンデイ初乗りに募った不満をここぞとばかりに叩きつける。

アインに巻き込まれた腹いせやら、重大な事件に関わる羽目になった不安やら、恋人と最近なかなか会えなくなっている不満やら、様々な負の感情が溢れて止められなくなる。

しかしそんな嫌な感情を全て抑えて最初に頭に浮かぶのは、自分以上の不安と悲しみ、怒りに苦しんでいるアインの慟哭であった。

「なんとか言ったら……!」

無言を貫くリンデイだが、ふとした拍子にその表情が固まる。

力なく組み合わされ、膝の上に乗せられているサクソの両手。長期間銃型のデバイスを使い続けてきたことにより、いくつものタコができたその手は、震えていた。

「……もう、俺には時間がない。以前ほどの戦いは……この先できなくなっていくだろう」
恐怖か、システムの不備による副作用かはもはやわからない。しかし今、アインの頼れる先輩であった戦士はここにはおらず、ここにいる彼は心身ともに弱りきったただの憐れな男にしか見えなかった。

戦いこそ己の生きる糧、そして守り救うことこそ己の生きる理由。

そのための手段を徐々に失っていく恐怖に、サクソの心は耐えられなかったのだ。

「俺の体は……ボロボロだっ……!!??」

嘆きのような声を発し、サクソは急に立ち上がる。

その際に見えた顔を見たリンデイは、激しい後悔を表情に浮き立たせながら視線を逸らした。

「……邪魔をしたな」

誰とも視線を合わせることなく、サクソは荒々しい足取りでリンデイの部屋を飛び出した。

呆然としていたアインが我に返り、慌てて遠く離れていく背中を追うものの、扉の外に出たときにはすでにサクソの姿は見えなくなっていた。

「陸尉!」

ドアから飛び出し、道に出てサクソの姿を探すものの、人目を避けるかのようにサク

ソは足早に去った後で、見つけることは叶わなかった。

悲痛な表情で立ち尽くすアインは、自身の中に芽生えた喪失感とサクソから話を聞かされたことによる不安で頭がいっぱいになる。触れた胸の奥に巢食ったその負の感覚は、簡単には取り除けそうになかった。

「……あれが世界の命運を背負った戦士の成れの果てか。見れたものではないな」

不意に背後から聞こえた声に、アインは眉間にしわを寄せる。

ギロリと咎めるような視線を向ければ、声の主はそれを面倒臭そうに見やっつため息をついた。

「アイゴ・ハジメ……」

「一度は騎士として名を馳せた者が、朽ちていく自らの体を前にしてなんと脆いことだろうか……所詮はただの人間か」

「黙れ!!? 貴様に何がわかる!!」

戦士と生きること誇りを持っていた尊敬すべき人物が、自らが手にした武器のせいでその力を失いつつある。本来の自分を失っていく感覚がどれほどの恐怖かなど、アインには想像もつかない。

なによりも、人間を見下す傾向のあるこの男にサクソを馬鹿にされるのは我慢ならなかった。

しかしそこでふと気づく。単純に人間嫌いならわかるが、ハジメの発言にはところどころ違和感を覚える。嫌うというよりもこの男は人間に対して、人間がウジやハエなどの害虫に対する嫌悪を抱くような、そんな感情を向けている気がするのだ。

「……お前さつき、妙なことを口にしていたな。まるで自分が人間ではないような、どういうことだ」

「答える義理はない。面倒だ……」

「そういわれてはいそうですかと納得できるはずもないだろう」

剣呑な光を瞳に宿したアインが、自身のスピードのペンダントと懐のデバイスに触れる。

煌めく青い光に対して、ハジメも鋭い光を目に宿しながら身構えた。

「……ならば死ぬか？」

「……もういつペンやりあつてもいいんだぞ」

突発的に高まる敵意が、周囲に対して圧を放つ。まともにそれを受けた窓ガラスはビリビリと震え、そのうちのいくつかには小さく罅が入っていく。

気の弱い人間ならば実際に死にそうなほど凄まじい殺気を互いにぶつけあわせながら、アインはデバイスにラウズカードを挿入し、ハジメは一枚のラウズカードを取り出す。

互いのカードに描かれた甲虫ヘラクレスと蠍カマキリが蠢く中、部屋の外の異変に気付いて飛び出してきたリンデイが顔を引きつらせた。

「ちよつと…やめなさいよあなた達!!」

間に割つて入ろうとしたが、リンデイの介入に一切目もくれない二人の殺気に押されてそれ以上近づくことができない。どうしたらいいのかと、困り顔で天を仰いだ時だった。

リンデイのすぐ後ろに一台の車が止まり、後方の扉から何人もの黒服の男たちが雪崩出てきたのだ。デバイスらしき銃と実弾銃を装備した、覆面を被った怪しい集団は一直線にリンデイに迫った。

「な、なに!! きゃあつ!!」

「リンデイ!」

明らかに正規の組織ではない雰囲気を放つ彼らは、無言でリンデイを捕らえると車の後部座席に引き摺り込んでしまう。抵抗するリンデイであったが、背後に回った一人が口元に布をかぶせた直後、がくりと意識を失ってしまった。

すぐさまアインがデバイスを起動しようとするが、男たちはアインにも襲いかかり、武器を手にする暇を与えようとはしなかった。

「チツ…」

「!! オイ、どこへ行く……がっ!!」

状況がかなり怪しくなってきたことを察知し、ハジメが舌打ちしながらその場を離れる。

アインはそれに目もくれず、自分の友人が乱暴され、物のように担ぎ込まれたことに声を荒げる。

するとそれが大きな隙となってしまう、アインは利き腕を掴まれ、地面に押さえつけられてしまう。その力は容赦がなく、一瞬呼吸が困難になるほど強く叩きつけられた。

背中に両手を回され、手錠か何かで拘束されながらも必死に抵抗するアインは、どうにか首を回して犯人の顔を覚えようともがく。

「くっ、貴様ら……何者だ!?」

しかし覆面をした彼らの顔を確かめることはできず、後頭部を掴まれた拳句地面に押し付けられ、リンデイに使われたものと同じ布を嗅がされてしまった。

「……………!!」

急激に襲いかかる睡魔にアインは危機感を覚えるが、完全に関節を決められた彼女に抗う術はなく、アインは静かにうなだれた。

荒ぶっていた呼吸が徐々に穏やかになり、完全に動きを止めたことを確認した男たちは、アインを荷物のように抱えて立ち上がり、リンデイと同じように車の後部座席に放

り込んだ。

それを確認した黒服の集団の一人が、無線のような機械を取り出して波長を合わせると、冷淡な低い声で通信の向こう側に告げた。

「……アイン・K・アルデブラント、およびリンディ・ハラオウン確保。先に誘導したサクソ・マンダリンとともに、これより移送する。送れ」

『——ああ、よくやった』

通信の向こう側にいる人物は、何がおかしいのか機嫌よく答えた。耳にするだけで生理的な嫌悪感が芽生える、気味の悪さを感じさせる声を聞きながら、男はただ次の指示を待った。

『丁重にもてなせ……絶好のコンディションを保つてもらわねばな』

男は頷き、仲間たちと目標二人を乗せた車に自らも乗り込み、運転席に向けて合図を出す。

現れた時と同じく、タイヤの擦れる音だけを響かせながら、黒服の集団を乗せた車は猛スピードで走り去って行った。

その光景を一人、いち早く危機を察知して離脱したハジメが眺めていた。その表情はかなり険しい。

戦いの邪魔をされたことへの苛立ちもあるが、突然何処の馬の骨ともわからない奴らに自分の敵を奪われたことに對する怒りも、いまの彼の中には熱く燃えていた。

タイヤの跡だけが残った現場に近づき、しゃがんでその近くを観察してみると、数滴の血痕が残されていることに気づく。おそらくは先ほど、アインが顔を地面に押さえつけられた際にできた傷から垂れたものだろう。

ハジメは気だるげに立ち上がり、車が走り去った方向を見やると、大きくため息をついた。

「……気に入らないな」

人間のやることに興味などない。あるのは自分の戦いに関連することだけ、人間が死のうが殺されようがどうでもよかつたはずだつた。

しかし攫われたのは、自分を殺すと豪語した数少ない人間。そしてそれを実行できうる実力を持った、人間離れした逸材。何が原因かは知らないが、今の彼女の剣は鈍つてしまっているものの、何かしらのきつかけがあればいずれもとの鋭さを取り戻すであろう、そんな期待を抱かせる存在。

そんな感想を抱かせる、ハジメが初めて見るタイプの人間であつた。

「このまま見殺しにするのは惜しいな」

そう呟き、ハジメは自分のすぐそばに黒いバイクを呼び出し、ヘルメットをかぶつて

座席に跨る。エンジンを噴かし、残されたわずかな痕跡をたどりながらアインを連れ去つたものたちの追跡を開始する。

この時、彼は気付いていなかった。

アインを失うことが惜しいという感情。それは決して、闘争本能からくるものだけではなかったことに。すでにアインを、そこらの有象無象と同じただの人間と認識していなかったことに。

残された痕跡を探ることにのみ集中している今の彼は、自覚していなかった。

7. 悪の意思

アインが目を覚ましたのは、吹き抜けた生ぬるい風が肌を撫でたからだった。

鈍い痛みが身体中から感じる不快さに顔をしかめながら、ぼやけた視界に見える薄暗い空間に眉を寄せる。

「……………ここは、どこだ？」

かすかに反響するその空間は、無数の石柱が規則的に立ち並ぶ異様に広い空間であった。見上げれば天井は暗くて見えず、おそらく数十メートルはあるだろう。前後左右を見ても、あまりに暗く端が見えない。

以前聞いたことがある、都市には洪水や水災時に激流を誘導・排出する特殊な地下施設があるという話を思い出したアインは、空間の広さからこの場が地下であると判断した。

同時に、この空間へ出入りでき、アインを置いて行った黒服の連中が普通では無いことを察した。

「リンデイ！ おい、どこに行ったリンデイ？？」

同時刻に襲撃され、同じ車に乗せられたことは覚えているため、アインは姿の見えな

いリンデイを探して声を張り上げる。声がこだまのように反響し、帰ってくるまでのタイムラグが空間の途方も無い広さをさらに強調する。

しかし、視界の遮蔽物は石柱だけだというのに友人の姿は見当たらず、アインの中に焦燥が生じていった。

「なんだ……は……一体誰が何のためにこんなところに連れてきたんだ？」

いつまでもその場にとどまっていたのは仕方がないと、アインは険しい表情のまま歩き出した。

もしかしたら、暗がりの方に何か人の痕跡かりンデイの居場所の手がかりがあるかもしれない。そうでなくても、ここから一旦脱出する目処が立つかもしれない。

「おい!! 誰かいらないのか……!!」

苛立ち混じりのアインの声がかどまし、虚しく消えていった時。

アインは闇の中でうごめく影に気づいた。

「!」

立ち止まり、すぐさま身構えるアイン。

感じ取れる気配は明らかに、人間のものではない。人間に対する明確な敵意を孕んだ眼光が、暗闇の中からアインを射抜いていた。

低いうなり声を上げて現れたのは、堅固な甲殻で全身を覆った盾と刃を備えた

トリロバイトアンデッド、三葉虫の異形、猫科の生物の黒い頭蓋骨を顔につけた爪を備えた軽装甲の彪ジャガーの異形、豊かな金の鬘を生やした刺々しい鎧を纏った獅子ライオンの異形。

三種の種族の祖たる怪物が、アインに対して同程度の敵意を向け、じりじりと迫ってきていた。

「アンデッド……!? クソッ！ こんな時に……!!?」

それぞれが備えた武器の切っ先が自身に向けられていることを察し、アインはすぐさま懐からデバイスとラウズカードを取り出す。

それを戦闘の意志ありと判断したのか、三体の異形は耳障りな雄叫びをあげてアインに襲いかかった。

アインはその場で大きく跳躍すると振るわれた斬撃を躲し、遅れたトリロバイトアンデッドの頭を足場に大きく距離を取ると、腰に巻いたバツクルのレバーを引いて振り向いた。

「変身!!?」

【TURN UP】

バツクルの中心から飛び出した青色のスクリーンが三葉虫の異形を弾き飛ばし、後ろにいた二体を巻き込んで後退させる。

アインはスクリーンに向かって突進し、その身に紫紺と銀の鎧を纏うと、腰に佩いた

剣を抜いて猛然と斬りかかった。

「ウエアアアアア!!？」

トリロバイトアンデッドの硬い殻に刃が食らいつき、激しい火花を散らせてトリロバイトアンデッドがたたたらを踏む。

剣を振り抜いたアインの左右から虎と彪の異形が襲いかかるも、身をかがめたアインの頭上をすり抜け、反対に背中に手痛い一撃を食らう。

しかし不死の異形の耐久力は凄まじく、たった一撃食らわせた程度では封印できるほどの負荷は与えられない。彪の蹴りと獅子の拳、反射的に向かってくる反撃をくぐり抜き、跳ね返し、アインは襲ってくる三体の異形をたった一人で抑え込む。

「!!？」
「!!？」
「!!？」

しかしそれでも、迫り来る全ての攻撃は防げない。咆哮をあげて襲ってくるアンデッドたちに連携など頭はないだろうが、アインに対する警戒からそうなっているのか、互いに攻撃の間を開けないように次々に迫るようになっていく。

以前の彼女であれば、猛獣を相手にすると同程度の攻撃をいなし続けるなど造作もないことのはずだった。しかし今、絶え間無く振るわれる異形の刃はアインの肌を擦

り、小さくも確かな傷を残している。

「ああああああ!!?」

自分が思うよりも動いてくれない体に、アインは徐々に焦りを覚え始めていた。

「……やはりあの女、万全のコンディションと言えずとも人間のスペックをはるかに超えている……体に何か特殊な処置でも施しているのか? いや……判断するにはまだデータが足りんな」

暗い暗い闇の中、モニターや計器の光だけが照らし出し不気味な雰囲気醸し出す一室。

孤軍奮闘し続けるアインが大きく映し出されたモニターの前に陣取る男が、興味深そうにアインの戦いぶりを眺めていた。すぐ隣の計器にはアインの身体能力を算出したものと思わしき画像が映し出され、常に数値が変動し続けている。

高性能なコンピュータでも表しきれないアインの戦闘能力の高さに唸りを上げ、男は満足げに、あるいは物欲しげにアインを眺めていた。

「やはりライダーの戦闘データを採集するには……より強大な相手との闘争が必要不可欠のようだな——なあ、騎士殿」

男がちらりと、自身の背後の闇の中に視線を向ける。

闇の中、ただ無言で佇んでいるその男の目はどこか虚ろで、異様なほどの生気の薄さが不穏な雰囲気醸し出している。

一瞬マネキンか何かに見間違ひそうなほど動きを見せない彼に、男はアインを写したモニターを見下ろしながら愉しそうに口を開いた。

「さあ、行くがいい。君の使命は、まだ何も果たされてはいないだろう?」

「……ああ、その通りだ」

初めて発せられた声は無機質なようであり、同時に言い表し用のない欲望のようなものを感ぜさせた。

【THUNDER】

「ウエエエエエエエイ!!」

雷を纏ったアインの拳がトリロバイトアンデッドの顎を捉える。強固な殻に覆われていようとアインの強烈なアツパーの衝撃は凄まじく、脳を思い切り揺さぶられた異形は体をゆっくり傾がせていく。

左右に割れたベルトを見たアインは、投げるのも面倒だと直にラウズカードの角を突き立て、二次元空間の中に封印する。

緑色の光が完全に封じ込められると、背後から迫るジャガーアンデッドの爪を躲し、

新たに手に入れたカードと剣の中から抜き出した二枚のカードを合わせて、剣の溝でスライドさせた。

「THUNDER, KICK, METAL. LIGHTNING. HUMMER」

ディアスアンデッド

ローカストアンデッド

ライトニング グ ハムマー

トリロバイトアンデッド

鹿の異形の雷の力、蝗の異形の蹴撃の力、そして新たに手に入れた三葉虫の異形の鋼の力を合わせ、アインは自身の体に付与する。

右脚が鋼の硬度を持ち、その上でバチバチと雷電が纏わりつく。拳を振り上げて向かってくるライオンアンデッドをアインはその場で高く跳躍して流すと、体をまっすぐに伸ばしたままひねりを加えた宙返りを行う。

跳躍と回転によって慣性の力を増したアインは、振り上げた右脚をライオンアンデッドの脳天に向けて叩き落とした。

「エエエイ!!?」

「!!?」

頭蓋が陥没するほどの一撃を食らったライオンアンデッドは悲鳴を上げて後ずさり、夥しい量の緑色の血を噴き出させながら膝をつく。

バックルが割れた異形に向けてカードを放り投げ、封印されていく光景に背を向けながら、アインは残るジャガーアンデッドに相対した。

ジャガーアンデッドはアインに対して威嚇の咆哮をあげると、おもむろに体勢を低く

して四つん這いになる。鋭い爪が地面にしつかりと固定されるのを確認するように踏みしめられると、次の瞬間ジャガーア宁德ッドの姿は消え失せていた。

「なっ……がはっ？」

後ろ手にライオンア宁德ッドを封印したカードを受け止めていたアインは、驚愕の表情を浮かべた直後に吹き飛ばされる。金属同士が激突する、大きく鈍い音があたりこだまし、アインの意識が混濁した。

わけもわからないままに地面に這い蹲らされたアインは、鍛え上げた目が視界の中で高速で動き回る物体の存在に気づく。

「くっ……！」

アインはかろうじて、腕で顔と胸を守ることとで防御の姿勢をとるが、ジャガーア宁德ッドは一瞬で背後や側面に回り込み、鋭く早い一撃離脱の攻撃を加えてくるために防ぎきれない。

脇腹や背中を斬撃を食らいながらも、自らでは追いつくことのできない敵の猛攻を前にアインはある戦法をとることに決める。

【THUNDER, BEAT, LIGHTNING, SMASH】

剣に新たなカードの組み合わせを読み込ませると、アインは剣を地面に突き立て、雷を纏った拳を構える。わずかに一瞬だけ聞こえてくる足音に耳を澄ませると、アインは

深く息を吸い込みながら目を閉じた。

知覚できる情報の一つを自ら封じたことで、残る感覚を一時的に強化する。

武器を捨て、動きを見せなくなったアインをジャガーアンデッドは前後左右から執拗に斬りつけ、数えきれない数の傷をつけていく。

肌が切り裂かれ、どくどくと血液が噴出してアインの周囲を汚すも、青き騎士は決してその場から動かず抵抗の意図も見せない。

為すすべのない騎士を甚振るように周囲を走り回っていたジャガーアンデッドが、トドメを刺すようにアインの死角に回り込み、大きく爪を振りかぶる。

だがその時、アインの流した血を踏みつけ、高速で移動していたジャガーアンデッドの動きが一瞬ずれた。視覚できないほどの超高速戦闘を見せつけていた異形の姿が、一瞬だけアインの目の前に現れたのだ。

「おおおおおおお!!?」

アインはその決定的な隙を見逃さない。コンクリートが陥没するほどに地面を踏みしめ、全身の筋肉を奮わせ一気に拳を振り抜く。

バランスを崩したジャガーアンデッドは反射的に爪を振るうが、鋭い鋒はアインの頬を切り裂くだけで素通りし、硬く握り締められた拳がまっすぐに鳩尾に突き刺さる。

ゴパツ、と口から多量の血を吐いたジャガーアンデッドは吹き飛ばされ、ビクビクと

痙攣しながら倒れこむ。

アインは空のラウズカードを引き抜き、気だるげにジャガーアンデッドに向けて投げつける。流れていた緑の血ごと平面の中に封じ込められ、ジェットを背負った彪の絵が表面に描かれたカードがアインの手元に戻った。

その瞬間、アインの視界がぐにやりと歪み、体が倒れかけるのを必死に立て直す。捨て身の戦略のせいで流石に血を流しすぎたと、アインは険しい表情で舌打ちした。

「ハア……ハア……くそっ！ リンディは無事なのか……？ 巻き込まれていなければいいが……」

地下空間を支える柱に手をつけて体を支え、アインはまた暗がりに向けて歩き出す。正直今すぐにでも気を失いそうなほど疲労しているが、友人の無事も確認できないままではおちおち眠ってなどいられなかった。

「リンディ……どこにいる」

ふらふらと覚東ない足取りとかすむ視界の中、朦朧とする意識を必死に保ちながらアインは歩き続ける。ぼたぼたと絶え間無く流れ落ちる血を止めることもせず、足を引きずりながら前へと進み続けるその姿はあまりにも痛々しい。

しかしそれでも、友人の無事を確認するまでは立ち止まるまいと意地を張り、引っこ抜いた剣を引きずりながら暗がりへと進んでいった。

その時、不意にアインの耳に砂を踏みつける音が届き、アインはすぐさま剣を構えた。
「!!」

血に濡れた手で剣先を音のした方に向けるが、切っ先はふらふらと揺れて頼りなく、暗闇を見据える視界もグニャグニャと歪んでいて気持ち悪い。

「何者だ!! 今私はむしゃくしゃしているんだ……これ以上ちよつかいをかけるつもりならよそへ行け!!」

大きな声で、できる限りの闘志を併せて吠えるも、すでにアインは自分がまともに戦える状態ではないことを自覚していた。全力での戦闘を行うには血を流しすぎていて、無理な動きをしようものなら即座に意識が途切れる可能性もあった。

はったりをきかせて退けば問題はないが、それでも向かってくる場合には覚悟を決めなければならぬと考えていた。

すると、アインの目の前で金属音と何かが擦れる音が響き、見覚えのある青い光が照らし出される。暗闇の中から飛び出した光は大きな青いスクリーンとなり、闇の中から歩み寄ってくる人影を迎える。

【TURN UP】

鍬形虫の紋章が刻まれたスクリーンに人影が重なった瞬間、青い光が纏わり付いて一着の甲冑を生み出した。

赤いボディースーツに銀の甲冑を重ねた、トランプのダイヤを模した仮面をつけた銃士が現れたことで、アインは完全に闘志を霧散させてしまった。

「陸尉……？」

再会して別れたばかりの、それも戦闘行為に対して恐怖感を抱いていた上司が、自らの意思で再び鎧を纏っていることに疑問を抱きながら、アインは彼から感じる異様な気配に身を硬くする。

何かがおかしい、そう気付いた時には、サクソはアインに向けて腰に下ろした銃を構え、引き金を引いていた。

大きく目を見開いたアインはとっさに左へ飛び、多少ふらつきながらも剣を構え、サクソを睨みつけた。

「陸尉！ 何のつもりですか！！」

「うおおおおおおお！！」

同志に銃を向けるとは何事か、とアインは怒気を含めながらサクソに叫ぶが、サクソは全く耳を貸す様子もなくアインに襲いかかる。まるで手負いの獣のように暴れまわり、アインに殴りかかるその姿はとてもまともには見えなかった。

「正気を失っている……？ まさかこれが、陸尉の言っていたライダーシステムの欠陥……

！！」

振るわれる拳打を躲し、アインはサクソに掴みかかる。

「陸尉！ お気を確かに！ あなたほどの武人が何を惑わされているのですか！！ クロスボード局長を恨むお気持ちは察しますが、それで我々が争う理由などないはずでしょう！！」

「おおおおああああ！！？」

なんとかサクソを押さえつけようとしがみつくアインだが、サクソはもはや言語にさえなっていない雄叫びをあげるだけで、アインのことは見てもいない。

ただ単に、アインを己を縛りつけようとする煩わしそう枷のように血走った目で睨みつけ、押しつけのけ引き剥がそうと容赦なく殴りつける。

反撃の意思を見せないアインは、サクソが正気に戻ることを信じてしがみついていることしかできなかつた。

「陸尉！」

『無駄だよ、アイン君……今の彼は闘争本能の塊。説得は意味をなさないものと思う方がいい』

「っ！！ 誰だ！！」

突如空間に響き渡った声に反応し、アインはサクソをつかむ手を離してしまふ。分つと投げ飛ばされるように押しつけられ、疲労もあつてふらつくアインは思わず頭上を見

上げて眉間にしわを寄せた。

聞き覚えのない声は、明らかにアインを嘲笑っている。味方のはずのサクソを前に手を出せず、みるみるうちに弱って行く姿を見てほくそ笑んでいるのが丸わかりな声であつた。

『私のことか？ そうだなあ……今は、イストと名乗っているよ』

「……ふざけているのか」

『私は至極真面目さ……それよりほら、余所見をしていては危ないぞ』

イストと名乗った男の言う通り、アインが必死に押さえつけていたサクソが激しくもがき、アインの拘束を振り払って顔面を殴りつける。

ふらついたアインの腹に向けて回し蹴りが叩き込まれ、アインは軽く嘔吐しながら後ずさり、がくりと膝をついた。鈍い痛みと気持ち悪さに必死に抗いながら、アインはどこにいるともしれない敵に殺気を向ける。

「陸尉……!!? 貴様、陸尉に何をした!?!?」

『別に彼を操っているわけではないさ……私はただ、傷ついた彼にそれを補う力を与えただけのことだよ。そして、戦いを選んだのは……彼の意思だ』

まともに答える気のないさそうなイストに、アインは舌打ちすると腰を浮かせる。

サクソに何が起こっているのかはわからないが、このままでは問いただすよりも先に

自分が討たれてしまう。口惜しいが、この場は退く他になかった。

しかしアインの考えは読まれていたのか、イストは思い出したと言わんばかりに付け加えた。

『別に逃げてもいいが……君のお友達がどうなっても知らないぞ?』

「?! 貴様……貴様がリンデイを!!」

この場に連れてこられたときから姿の見えない友人が敵の手中にあることに、アインは焦りを抱きながら怒りも覚える。

婦女子を拐かしただけでは飽き足らず、味方同士を戦わせるための人質にするような卑劣な考えに正気を疑う。闘争本能をむき出しにして襲いかかってくるサクソも、イストとやらの手によってなんらかの干渉を受けているのだろう。

姿の見えない敵に対して憎悪の炎を燃やしながら、アインはなおも雄叫びとともに殴りつけてくるサクソに向き直った。

「陸尉! 聞いていたでしょう!! あなたを操る存在が何者なのか走りませんが、こんな戦いは間違っています!! あの男は、この状況を楽しんでいるだけですよ!!」

飛びそうになる意識を保ち、獣のようにがむしやらに向かつてくるサクソに呼びかけ続け、紙一重で攻撃を躲していく。

我を忘れているような今の彼に傷をつけるのは躊躇われ、アインは剣を放り捨てて懸

命に説得に励む。

「こんなのはあなたが信じていた正義など程遠い!! 我々は、殺し合いなんてしてはいけない!!」

いまの彼とは似ても似つかない、人々を守る己の戦いに誇りを持つていたかつての彼の姿を思い浮かべ、アインは叫んだ。

もう一度サクソの両肩を掴み、鈍い光を放つ仮面を覗き込みながら呼びかける。

「目を覚ましてください……陸尉!!」

その時、ガチャリとアインの腹部から金属音が響く。

目を見開いたアインが真下を見下ろせば、サクソの持つ銃の先が自分の腹部の中心に向けられていることに気づいた。臍の上、肋骨の少し下という人体で最も弱い部分に、冷たい銃身が突きつけられていたのだ。

サクソの肩を掴んだまま呆然と立ち尽くすアインの目の前で、サクソは過剰に膨らんだ闘争心で歪み、罅割れた声を放った。

「殺、す……敵は………殺す!!」

ドオン!と凄まじい破裂音が響き渡り、アインの体が一瞬空中に浮かぶ。

アインの背中から噴水のように鮮血が吹き出し、ピンク色の細かな肉片とともに背後の地面に飛び散っていく。それはまるで、殺風景だったコンクリートの地面や柱に紅色

の花の模様が施されたようにも見えた。

「……………あ、え……？」

よろよろと後ずさるアインはサクソを見つめ、白い煙を吐く銃身に信じられないといった表情を浮かべる。

痛みは一瞬で、後に続いたのは火で直接炙られているかのような熱さ。なのに体の芯は徐々に冷たく感じられていくという、気味の悪い感覚に苛まれ始めた。

「陸尉……」

何も口にすることなくただじつと見つめてくる、信頼していた上司に震える手を伸ばし、アインはか細く途切れそうな声で呼ぶ。

白んでいく景色にサクソの姿を映したアインは、ぐるりと己の意思に関係なく頭上の暗闇が映るのを最後に、仰向けに倒れた。

まとめていた髪が解けて大きく広がる中、じわりじわり血広がる鮮血がアインの体を汚していく。その姿を見下ろしていたサクソはおもむろに背を丸めると、天に向けて勝利の雄叫びをあげてみせた。

「うおおああああああ!!？」

そこに、自分の部下を殺したことに對する悲しみも怒りもない、ただただ己が獲物を屠ったことに對する喜びと満足だけが迸っていた。

同じように、イストも堪えきれないとばかりに笑い声をこぼしていた。自分の想定していた以上の結果を目にできたような、望むものを見られた歓びに満ちた声で、倒れたアインを嘲笑し続けていた。

誰もいない地下空間に、サクソの雄叫びとイストの嘲笑だけが響き渡る。

だがその時、閉じられた空間であるはずのその場所に、一陣の風が吹き抜けた。

「!?」

サクソは急に自身に襲いかかる風に雄叫びをやめ、イストも予想外の事態に目を瞠り、モニターに向けて身を乗り出す。

アインとサクソの間でその風が壁のように吹き抜ける中、ある一つの声が響き渡る。

「——手間をかけさせる……」

あきれた様子その声の直後、風はひととき強さを増すとアインの体を覆い隠し、一瞬にしてその場から消してしまう。

普通では考えられない風とともに消失したアインを探し、サクソがうなり声をあげながら辺りを見渡し始める。自分の獲物が、勝利の証である屍が無くなってしまったことに苛立ちを抱き、鼻息荒く地面を踏み荒らしながら咆哮をあげた。

一方で謎の風の正体に思い至ったイストはモニターから離れ、忌々しそうに虚空を見上げてため息をついた。

「奴か……余計なことを。まあ、あれではもう助かるまい。懸念材料が片付いたということでもいいか……」

現場に残された、夥しい量の結婚を見やりながら、イストは先ほどの悲劇的な光景を思い出し、恍惚の笑みを浮かべるのであった。

8. 乙女の献身

暗く陽の沈んだ川辺。地形の影響で無数の流木が堆積し、自然の手によるバリケードのようになっていている砂利の上。

パチパチと火花が弾ける焚き火に向き合い、大きめの丸い石の上に腰掛けるハジメは、かすかなうめき声とともに薄目を開いたアインに横目を向けた。

「……………気がついたか」

全身を包帯の代わりとして裂かれて作られた自らの衣服で包み、大きめの砂利を取り除いて作った寢床に横になったアインは、ぼんやりとしたまま夜空を見上げる。

だんだんと自分の状況を思い出してきたアインは、傍で佇んでいるハジメに訝しげな視線を向けた。

「……………なぜ助けた？」

「特に理由はない。強いて言うなら、気まぐれだ。おれを殺すと豪語した奴がああ程度で倒れられては、張り合いがない……………そのくらいのことだ」

「……………そう言うところが気に入らないんだ」

あれだけの出血の後だというのにこうして生きているなど、この男が何か手を加えた

としか思えない。

自分の体を見られたことぐらいうまくないほど羞恥心は枯れていたが、勝手に体をいじられていたことについては文句をつけたくなる。

だがそれでも、与えられた厚意に報いないということは許せなかった。

「……………礼を言う、助かった」

視線を逸らし、若干頬を染めながら小さく呟くアインに、ハジメはフツと鼻で笑う。

小馬鹿にされていると察したアインだが、反論することなくそっぽを向いて唇を噛む。謎も多く、何かと癪に触る男だが、少なくとも悪人ではないことはわかった。

「あの後……………陸尉はどうなった？ リンデイは？」

「さあな。お前の仲間がどうなったかなど興味がない……………だがあの男に何があったかはだいたいわかっている」

眉間にしわを寄せ、何やら苛立ちを感じさせる雰囲気を放ち始めたハジメが、忌々しそうに虚空を睨みつけて語り始めた。

初めて見るハジメのそういった表情の変化に、アインは少し意外に思いながら耳を傾けた。

「かつて起こった、世界の命運を分ける闘争。52の種族の祖が争い合い、世界の支配者を決定する頂上乱戦……………しかし種族の中には、争いを好まない温厚な種族もあった」

「……待て、何の話をしている?」

「そんな戦いを拒絶する種族の祖を無理やり戦場へ引つ張り出すために、あるものが投入された。…生物の闘争本能を刺激し、対象を好戦的な性格に変貌させるという特性を持った藻を材料とした薬だ」

ハジメはサクソからアインをさらった時のことを思い出す。サクソから漂ってきたその匂いは間違いなく、自分の腹立たしい記憶の中に残っているそれと同じであった。

誇り高い戦いに水を差す無粋な邪魔者の匂いとして、ハジメはその藻の存在を疎い、持ち込んだ者に対して怒りを募らせていた。

「あの男はその藻の成分を投与されているのだろう……奴が別人でもない限りはな」
「……そういうことか」

一種の薬物を投与されていたのだと解釈したアインは、少しだけ安堵のため息をつきながらも悲しげに目を伏せる。

あれはシステムの不具合によるものではなく、装着者自身に投与された物質による暴走であったのだ。自分がいずれ同じような目に遭うという可能性は下がったことに、不謹慎ながらほっと息をつく。

だがその場合、それを投与したことがサクソの意志であるという可能性に憂鬱な気分になる。自我を失い獣のようになる薬に手を出してまでアインを害そうと思っていた

のならば、以前のサクソとはかけ離れた存在になってしまっているかもしれない。

見捨てられたのだという事実は、アインの胸のうちにこれまで以上の傷をつけた。

「……その藻とやらの効果は、どの程度続くものなんだ？ まさかとは思うが……ずっとあのままとすることは」

「それはない。あくまであれは一時的な処置にすぎない。……だがあれは、投与した者に驚異的な戦闘意欲の向上を促すものであると同時に、強力な中毒性を持つ代物だ」

ハジメもアインの気の落ちようを目にしていたが、氣遣う様子もなく淡々と語り続ける。

重傷者に対して随分な態度に思えたが、アインにとつては下手に気を遣われるよりも気が楽に感じていた。

「戦いが終われば自分の心の弱さに怯え、戦闘が始まれば自我をも失う。……もうあの男に、かつての面影は残っていないだろう」

語り終えたハジメの横顔は、どこか不満げというか失望したような雰囲気を見せている。どこか遠くを眺めるその目には、がっかりとしているような様子に見えた。

アインはすでに、ハジメが謎の騎士カリスであると確信している。彼の騎士の言動を参考にするならば、ハジメは戦士同士の戦いに高尚な理想と信念を抱き、意義のあるやり取りを好み求めているように見える。

優しくはない、しかし決して残忍なわけではないのだと、アインはハジメと出会ってから過ごした時間の中で察していた。

だからこそアインは思う。

それほどまでに高潔な彼が、この事件に関しての知識を持っているのかと。

「だが、なぜ……そんなことを知っている。ハジメ……お前は何者なんだ」

「忠告しておくぞ。余計な詮索は命を縮めることになる……忘れるな」

ハジメはそう言つて、アインの体にかかけられていた布をまくり、アインの体を外に晒す。

鍛え上げられた体は今、痛々しく包帯がわりのボロ布に覆われていて、赤黒い染みが全身に広がっている。少しでも動けば、ふさがった傷口が開いて命はないということが、誰の目にも明らかかな姿であった。

「そしてお前はもう、戦える体ではないことを覚えておけ」

部外者であるはずの身元不明の男から告げられた戦力外通告に、アインは大きく目を見開き、固く唇を引き結ぶ他になかった。

◆ ◆ ◆

「ぐっ……あ……！」

黒ずんだ壁に四方を囲まれたその部屋の中心で、一人の男がうめき声をあげながら

ベッドに横になっていた。

露出した上半身には無数の血管が浮き出し、尋常ではない量の脂汗が噴き出してベッドを濡らす。食いしばった歯からは少量の血が滲み、ギシギシと嫌な音を立てている。

そんな彼の額に、不意に冷たく濡らされたタオルが当てられると、サクソはハツと目を覚まし、目の前の女性を凝視した。

「す、すみません……うなされていたもので、つい……」

「サテラか……」

余計なことをしたかと、サテラと呼ばれた女性がすぐさま手を引つ込めると、サクソは眉間にしわを寄せたまま体を起こし、ベッドの縁に腰掛けた。

「……なぜ、おれに構う？」

「……………」

サクソの疑問に、濡らしたタオルを絞っていたサテラは手を止め、少し困ったような笑みを浮かべる。どこか寂しげなその笑みにますます不思議な気分になりながら、サクソはその鋭い眼差しで問いただし続けた。

「世界のために戦う戦士だと聞いていますから……微力ながら、お力になれば、と」

「無駄なことを……」

サクソが身を寄せる、イストと名乗る謎の男の研究所。その彼の下で看護婦として仕

えているというこの女性は、どういわけかそう親しくないはずのサクソに対して甲斐甲斐しく世話を焼こうとしていた。

戦う力が失われていくなど、戦士としては絶望的な欠陥を抱えている男に献身するメリットがわからず、サクソはつい疑わしげにサテラを睨みつけてしまっていた。

「……ここにお前が来て、どれくらいになる」

「四ヶ月と少し……サクソさんと出会ってからは、もうじき二ヶ月半になるかと」

それは、サクソが自分の不調に気づいてからそう経たないうちのことであった。

調子を落とし続ける自分自身に恐怖を抱き、解決を求めていたサクソに接触してきたのがイストだった。彼は不調の原因が、ラウズカードと装着者を融合させるデバイスのシステムによるものと診断し、ある特殊な薬の投与による解決策を提案してきた。

異形の力を宿したカードは装着者の体内で徐々に毒性を放ち、精神を蝕み肉体に影響を及ぼし始めるのだとか。それを解消するには、カードの毒性を打ち消し、服用者の精神を飛躍的に高揚させる薬物を定期的に使用すればいいのだと、イストはサクソに語った。

初めは半信半疑であったサクソも、衰えていく戦闘能力を憂いていたこともあり、薦められた薬物を試した。その結果、かつての成果を発揮できるところがわかり、以来定期

的にイストの元で摂取するようになっていた。

しかしいいことばかりでもなかった。薬物の副作用により、日々サクソの体には激痛が走り、日常生活にも影響が及ぶようになった。

そこで急遽当てられたのが、かつては管理局に属する病院に看護婦として勤務していたというサテラだった。

「まさか私が、あなたの担当になるなんて夢にも思いませんでした。管理局でも指折りの実力者とお聞きしていましたもの……怪我などとは無縁と勝手に思っていました」

「幻滅しただろう……無敵の騎士が、薬に頼らなければ立ち向かえないほどに怯えているなど」

「人間ですもの……傷つくのが怖いのは当たり前ですよ」

背を向けるサクソに、サテラはせっせとタオルを動かして汗まみれの背中を拭う。サクソから向けられている嫌な感情を気にした様子もなく、慈愛に満ちた微笑みを浮かべて疲弊した体を清め続けていた。

視線をそらしていたサクソも次第に肩の力を抜き始め、背中に感じる心地よさを堪能し始める。

すると、懸命に動かされていた手が止まり、サテラが肩からサクソの顔を覗き込んだ。「少し、お出かけしませんか？」

川沿いの並木通りは、心地の良い風が吹いていた。

春が近づいているのか、上着が必要ないほどに温もった空気が肌に優しく、明るい日差しが髪を温める。空気さえ、明るく澄み渡っているように見えた。

木々の枝先についている蕾もまだ開きかけであったが、ちらほらと見える淡いピンク色の花卉が頭上を彩り、それを目当てに集まっている人の姿もあった。

「気持ちがいいですねー！」

「……そうだな」

数人がすれ違い、淡く色づき始めている並木の下を、サクソとサテラが連れ立って歩く。

サクソは最初こそ険しい顔を浮かべていたが、サテラの満面の笑顔や予想以上の外の空気の美味さに、自然と穏やかな表情になるようになっていた。

二人が並んで、並木の途中に設置されたベンチの上に腰掛ける。サクソは自分が暖かな風に包まれ、青空をぼんやりと眺めていると、自身の中に巢食う痛みが少し和らぐ気がした。

だがやはり、その瞳の奥には例えようもない暗い感情が根を張っている。それに気づいたサテラは、悲しげに目を伏せて口を開いた。

「……後悔しておいでなのですか、あなたが部下を手にかけたことを」

「……………」

「でもそれは、自我を失って襲いかかったことへの後悔じゃない…もつと早くそうできなかつたことへの後悔、違いますか？」

サクソはサテラを横目で見やり、少し苦しそうな眼差しを見せる。

何も言わずとも、なぜそう思うのかという疑問に満ちていることがわかった。

「知ってるんですよ？ あなたがあの人のために、わざと悪役になったってことぐらい」

「っ……………」

「もうこれ以上、あの人に戦わせたくなくなつたんでしよう。自分のようになって欲しくないから……自分で自分を傷つける無茶を繰り返すあの人を、止めたかつたんでしよう？」

サクソは唇を噛み、サテラの姿を視界から外す。

薬物の連続投与による暴走、そう見せかけて自らの意思でアインを手にかけたのは、確かだった。彼女を戦闘不能にし、この戦いから遠ざけるという意図もサテラの指摘通りであった。

しかし側から見れば、負傷した相手に容赦なく銃弾を食らわせ殺しかけた狂人の所業でしかなかつたはず。サテラのように好意的に解釈するのは無理があるはずであった。

手をかけたアインにも、そう思われるようにしていたのだから。

「なぜ、わかる」

「これでも看護婦です。あれが急所を外していたことぐらいお見通しです。そして何より……戦っていたあなたはずっと、泣いていました」

サテラは体を傾け、隣に座るサクソの肩にもたれかかる。震え続けている彼の手をさすり続け、慈愛に満ちた笑みを浮かべて優しく語りかけ始めた。

「もう……いいんじゃないやありませんか？　ずっと他のだれかのために頑張ってきたんですもの、今くらいは……ご自分のために生きても」

「……自分のため、だと？」

ぬくもりに気を取られかけていたサクソは、彼女を振り払うように立ち上がる。自分を案じる優しい声も、唾棄すべき所業を受け入れられることも、サクソ自身には受け入れられなかった。

「俺は戦士だ……戦い、守ることこそ俺の生きがいだ。そんな俺から戦いをとつたら、一体何が残るといふのだ」

「サクソ・マンダリンがいます」

サテラの返答に、サクソはハッと目を見開く。背中に触れる柔らかく暖かな感触に硬直し、振り払うことができなくなる。

サクソの大きな背中を抱きしめたサテラは、哀しみの混ざった笑みを浮かべてサクソをなだめる。どこか遠くへ行ってしまえばいい。彼を、この場に引き止めるように。

「あなたは戦うためにここで生きているではありません。人はみんな、生きるために戦うんです。……何も剣や銃を持って敵を倒すことだけが、戦うということではないでしょう?」

サテラはサクソの正面に回り込み、戸惑うような複雑な表情を浮かべるサクソの首に手を回す。背の高い彼に、爪先で立って高さを合わせたサテラは、まるで母や姉が弟にやるように優しく髪を撫で付けた。

「疲れた時は………いつだって私が胸を貸してあげますから」

かろうじてたち続けていたサクソの膝から力が抜け、サクソはその場に崩れ落ちる。

どうにか涙は堪えるものの、しわくちやになる顔はどうしようもない。おずおずとといった様子で伸ばした手で、サクソはサテラの背中を抱きしめ返すと、サテラは満足げにサクソを受け入れた。

「……俺はもう、休んでもいいのか」

甘美な誘惑に、サクソは徐々に惹き込まれていく。

死んでいった仲間、いまでもどこかでのうのうとしているクロスフォード、重傷を負ったアイン。背負ってきたものを全て投げ出してしまえばいいようになるほど、サクソの心は疲

弊していた。

その肩から、力が抜け始めた時だった。

「悪いがそれは遠慮してもらおう」

場の空気を切り裂く、悪意に満ちたその声にサクソの表情が一瞬で変わる。サテラもビクンと肩を震わせ、サクソの体に回していた手に力を込めてしまっていた。

「余計なことをしてくれたものだ……せつかく都合のいい手駒になりそうだったのに、牙を抜こうとするとは。飼い犬に手を噛まれるとはこのことだ」

不機嫌そうに呟きながら、声の主であるイストはゆっくりとサクソ達の前に近づいていく。白衣のポケットに手をつ込み、深いため息をついている彼は、道端のゴミを見るように冷たい眼差しを向けていた。

サテラはやや顔色を悪くしながらも、サクソを抱きしめたまま庇うように体を前に出す。

「私はもう……この人に戦わせたくありません！ この人がどうして、ここまで傷つかなくてはならないのですか!?!? ただ自分の誇りを胸に、必死に生きていたこの人が！」

「……君の意見などなんの意味もないのだよ」

サテラの必死の願いを面倒臭そうにあしらおうとするイスト。もはや視界にも入れ

ようとしない彼の態度に、サテラは怒りよりも深い悲しみを抱いた。

無力感に苛まれている彼女をよそに、イストは相変わらずの得体のしれない笑みを浮かべてサクソを見つめた。

「サクソ君……君は私のようにもつと野心的な人間だと思つていたんだがね。戦う力を取り戻したかつたのではないのかい？」

サクソは確かめるようなイストの言葉に、気まずげな表情を浮かべて目をそらす。

黙り込んだまま答えないサクソに、イストは心底落胆した様子で肩を落とした。目の前の人間から途端に興味が薄れ、同時にこれまで感じていた執着が消えて行く。そこらの有象無象と同じ価値に下がった男を見下ろし、イストはフツと嘲笑を浮かべた。

「……ハア、しょうがない。君は本当に腑抜けてしまったようだ」

イストが首をゴキゴキと鳴らし、何か体の中の枷を外すように背筋を伸ばす。その瞬間、イストの姿が大きく形を変えた。

黒と瑠璃色に彩られた大きな体に、目玉のような模様を有した羽飾りを全身に生やした鳥の顔の異形。瑠璃色の鳥の爪を至る所から生やしたその姿は、これまで遭遇してきた不死の怪物達とは一味違う印象を与えた。

クジャクを無理やり人型に変えたようなそのシルエットを見せつけ、異形と化したイストは鋭い剣を持ち出した。

「使えぬ札は……さっさと捨てなくてはね」

光を反射し煌めくそれが大きく掲げられた瞬間、並木の下にいた人々がようやく異変に気づき始めた。一人が悲鳴を上げて逃げ出すと、他の人々も蜘蛛の子を散らすように走り出して行く。

イスト、いや人間に擬態していたアンデッドの一体、孔雀ビークックアンデッドの異形は彼らに目もくれず、悠々と態度でサクソとサテラに近づいて行つた。

アンデッドを前にしたサクソは震える体に叱咤し、行かせまいとするように抱き寄せてくるサテラを押しつけて前に出た。

「変身!!?!」

【TURN UP】

デバイスを腰に当て、レバーを引いて鎧を纏うとサクソは雄叫びをあげながらピーコックアンデッドに向かって行く。

素人目には勇ましく映るかもしれないが、彼の内心はすでに恐怖が渦巻いてしまっており、走る速度も以前とは比べ物にならない。先ほどの雄叫びも、自分の恐怖心を誤魔化すためのものでしかなかった。

「ウオオオオオオオオオオ!!?!」

剣を携えて佇むピーコックアンデッドに振るう拳も蹴りも、硬い表皮を撃ち抜くには

全く威力が足りていない。

薬によって恐怖心が消えていたときは異なり、気持ちが悪えていない今の彼の攻撃はどれも不完全、避ける必要もないほどにとるに足らないものと成り果てていた。

ピーコックアンデッドはそれを実につまらなそうに見下ろし、やがて鬱陶しくなったのか殴りつけてくるサクソの腹に膝を入れ、横に蹴り飛ばした。

「がはっ……!!?」

弱体化した彼はそれだけで倒れ、立ち上がれなくなるほどになっていた。システムが危険と判断したのか、自動的にベルトからスクリーンが射出されてサクソを包み込み、鎧を解除させる。

ピーコックアンデッドはもはや振り向きもせず、青い顔で後ずさるサテラにゆつくりと近づいて行く。

「サテラ……! 逃げろ!!?」

サクソが必死に叫ぶも、恐怖に縛り付けられた女はまともに動くこともできない。

カタカタと震えるその胸に、ピーコックアンデッドの剣の切っ先が突きつけられた。

「君の力は買っていたつもりだったんだがね……がっかりだ」

そう、呆れたようにつぶやかれた直後。

鋭く尖った剣先が、か弱き女性の胸をずぶりと貫いた。

「……っ、あ……」

さしたる抵抗もなく、ゼリーでも貫くかのように軽く突き入れられた刃はサテラの心臓の中心をまつすぐに貫き、その機能を破壊する。

逆流した血液がごぼりと口から漏れ、剣がめり込んだ胸にじわりじわりと赤い染みが広がって行く。胸元から腹部へ、足元へも垂れていくそれは、やがてサテラを中心に大きな赤い水たまりを作り出した。

「…フン」

ピーコックアンデッドは無遠慮に剣を引き抜き、刃についた血液を振り払う。ドサリと倒れた元部下に一瞥もくれることなく、人間の姿に戻りながら億劫そうに元来た道に戻って行った。

「サテラ……サテラア!!？」

薬でボロボロになり、激痛のやまない体を引きずり、サクソはサテラの元へ急ぐ。血だまりを気にする様子もなく、この寄り、赤く染められていく彼女の体を抱き上げた。

ぐったりと力を抜いた彼女を揺さぶり呼びかけながら、サクソは必死に流れ出る血を止める方法を探る。しかし連絡手段を捨ててしまった現在、できることといえば、傷口に手を当てて流血を止めることぐらいだった。

その時、伏せられていたサテラの瞼が薄く開かれた。

「……サク、ソ、さん」

「喋るな！ 今病院に連れて行く！」

か細い声で答えるサテラを抱き上げようと膝を立てるサクソだが、もはや女性一人抱え上げられないほど体は衰えてしまっている。

人を守るべき騎士がこんなこともできなくなったのかと、サクソは自分自身を恥じ、それでも何もできないことを呪うばかりであった。

そんな苦しみを察したのか、サテラは自身の方が衰弱しているにもかかわらず、血の気の引いた手を伸ばしてサクソの髪を撫でた。

「……貴方が力を求めたのは……きつと……誰も失いたくないから。力さえあれば……もっと多くの救えた人がいる。……そうやって貴方は、自分自身を責め続けた……貴方の剣が鈍ってしまったのは……きつとそのせい」

「もういい……今は……」

もう喋るなどサクソは言おうとしたが、サテラの焦点のあつていない目を視線が混じり、口を閉ざしてしまふ。

今、彼女の言葉を聞かなければ後悔すると、虫の知らせめいたものが彼の中で響いていた。

「そう……かもしれない。だから俺は……君を守れなかった騎士を名乗る資格など……」

!!?」

「でも貴方は……私を救ってくださいました」

サテラの目に、もうサクソの顔は映っていない。

しかしその瞼には、最初に彼と出会ったときの姿が浮かび上がっていた。

まだ管理局に入る前の、小娘でしかなかった時。家族と引き離され、炎の中を一人さまい歩いていて彼女の元に現れた、優しくて大きな騎士の姿を。

「貴方は覚えてないかもしれないけど……私をその身で守ってくれたのは、他の誰でもない……貴方です」

騎士として名を馳せた彼が、彼女に未来を与えた。

彼の力になることが望みとなり、生きる理由になっていた。

サクソ自身も覚えていない、それでも忘れられない「初恋」の思い出が、サテラの胸の中に蘇っていた。

「失った命は……確かにあります。でも……貴方が救った命も、確かにあるんです……!

数や重さなど関係なく……貴方は私たちを助けてくださいました……あの時、あの異形の魔の手から、私を救ってくださいました貴方を——」

細く血に濡れた手が、サクソの頬を撫でる。

絶望の表情を浮かべる彼をなだめるように、サテラは優しく微笑みを浮かべて告げ

た。

「私はずっと……お慕い申し上げております」

「サテラ……！ 俺は……俺は……!!？」

これ以上聞きたくない、と駄々をこねる子供のように首を振るサクソに、サテラは潤んだ瞳を向ける。

もう目もよく見えなくなっている。あらゆるものが暗い闇の中に沈んで行くような感覚に陥りながら、さてらは一切の恐怖を表情に交えることなく微笑み続ける。

自分の最期が、これ以上彼の負担とならないように。

「どうか……顔を上げてください。私の大好きな……騎士様」

ナイト

その言葉を最後に、サテラの手から力が抜けて落ちていく。慌ててサクソがサテラの顔を覗き込むと、彼女は微笑を浮かべたまま呼吸を止めていた。

徐々に温もりが消えていく、氷のように青白くなっていく彼女の体を抱き寄せ、サクソはやがて嗚咽を漏らし始めた。

もう、彼女はここにいない。乱暴な口調と態度で迎え、労うこともなかった自分に献身し続けてくれた彼女はもう、いなくなってしまった。

激しい後悔と悲しみに苛まれ続ける哀れな騎士は、ポタポタと雫を垂らしながら震える声をこぼした。

「サテラアア……!!？」

9. 戦う理由

それが体の中を駆け巡ったのは、朝日が昇る寸前の明け方のことであつた。

虫の知らせと言ふべきか、己の体の奥にある本能的なものが警鐘を鳴らし、アインの目を強制的に覚まさせた。

「……………!?」

勢いよく体を起こすと途端に全身に、特に腹部に強く走る激痛に顔をしかめ、小さく背中を丸めるが、どうにかそれを押さえ込んで目を開ける。

周囲を見渡してみても、特に自分の害になるものは見当たらない。敵の殺気を受けたのであれば、もつとはつきりとした感覚を覚えるはずであるが、それとは異なる感覚であつた。

「なんだ、今のは……………」

かけられていたボロ布を外し、膝立ちになるアイン。直ぐ近くには燃え尽きた焚き火の跡が残っていたが、昨晩までその前に腰をおろしていた男の姿は見えなかつた。

アインは小さくため息をつく、痛みをこらえながら立ち上がり、首から下がったままのスパード型のペンダントを手にする。異常がないことを確認すると、合図をするよ

うに相棒の表面を叩き、何も無い砂利の方に向けて放り投げた。

「…世話になったな」

意味もなく、この場にいない恩人に対して礼を言うと、アインは一瞬のうちにバイクへ変形した相棒の上にまたがり、発進させる。

あつという間に遠く離れていく、つい先日まで重症で動けずにいた女騎士の背中を見やり、木陰に身を隠していたハジメは深いため息をついた。

「……すでに死んでいてもおかしくない体でも戦おうというのだから、あの女には呆れる他にないな」

実に愚かしいという感想とともに、そうでなければ面白くないという安堵が彼の中にはあつた。

◆? ◆? ◆? ◆?

ミッドチルダ中心部、クラナガン。

地上本部がある都市は今、多くの人々の悲鳴が響き渡っていた。本来は賑やかに人が闊歩しているはずの往來のど真ん中には、背中から黒い翼を生やした異形の姿があつたからだ。

金の皮膚の上に漆黒の鎧を重ね、猛禽類特有の鋭い目と曲がった嘴の仮面をつけた、大柄な人型の異形。両腕には二列に並んだ巨大な刃を備え、人々を追い立てるよう

堂々と歩む。

悠々と歩く異形の前半身で突如、色とりどりの魔力の弾丸が炸裂する。道路を塞ぐように陣取り、ストレージデバイスを構えた武装隊の魔導師たちが、どう見ても人間に友好的とは思えない異形に対して攻撃を行っていた。

すでに非殺傷設定の解除の許可は降りていて、人間であれば一撃で仕留められるほどの威力の魔力団が一斉に襲いかかる。しかし鷲に似た異形には動じた様子もなく、体の表面で始める魔力の爆発に目を細めた。

「……鬱陶しい」

苛立ちのこもった声で、鷲の異形は局員たちを睨みつける。
イーグルアンテッド

魔力弾の雨を真正面から受けながらおもむろに片手をあげると、降り注ぐそれらを振り払うように薙ぎ払う。途端に発生した暴風が魔力弾をかき消し、斬り裂き、局員たちを木の葉のように軽々と吹き飛ばした。

「ぐわあああああああ!?」

「貴様等に用はない……失せろ人間ども」

一気に隊列が崩れ、局員たちはそれぞれ天高く巻き上げられ、周囲の建物の壁や屋根に叩きつけられ、昏倒させられていった。運良く激突を免れた者も盛大に地面を転がされ、平衡感覚を失って立ち上がることもできなくなった。

何よりも魔法の一切が効いた様子のない怪物を前にして、若く経験の浅い局員たちはすでに逆らう意思を失ってしまっていた。

そこに颯爽と現れたのは、青いスピードの意匠のバイクを駆る背の高い女性のライダー。ヘルメットを脱ぎ捨てた彼女は、ついに首都付近で被害を出し始めた異形に向けて怒りの眼差しを向けた。

「アンデッド……またあの男の支配下か！」

幸いまだ、民間人に被害が出ている様子はない。しかし訓練された武装隊員たちがこうもあつさりと言っている光景に、アインは焦燥に近いものを感じる。

己の体はまだ全快とは言えないものの、ここで引けばいつまた民間人に被害者が現れるかわかったものではない。移動中にもずっと激痛が走っていた四肢に叱咤し、苦痛を誤魔化しながらアインはデバイスとカードを取り出し、腰に装着した。

「変身!!? ハアアアア!!?」

レバーを引き、目前に現れたスクリーンを通り抜けて鎧を纏ったアインは、雄叫びとともに剣を振りかぶる。静かに佇んでいるイーグルアンデッドが構えた刃と激突すると、武装隊員から引き剥がすように一気に突進を開始した。

地面に倒れ伏し、かろうじて意識を保っていた武装隊員の一人は、自分たちを守るように背を向けている紫紺の騎士の姿に目を丸くし、ついでチラリと見えた横顔に大きく

見開いた。

「!??!? ケンザキ!??!? お前こんなところで何やって……!!?!?」

同じ地上本部に勤務する、しかしここ最近では別の部署に移ったとかで顔を見ることがなくなっていた同僚が、見たことのないデバイスを使って異形と戦っているという光景に戸惑いの声をあげる。

イーグルアンデッドと鏑迫り合いになりながら、見知った顔ぶれにどう説明したものかとアインは顔をしかめる。

唇を噛んで黙り込むアインの前で、イーグルアンデッドは小さく唸り声をあげたかと思うと、先ほどのような暴風を巻き起こしてアインをはじき返した。

「どわあああああ!??!?」

不意打ち気味に暴風に巻き込まれた局員は、為すすべもなく空を舞って街路樹の葉の中に突っ込む。気を失ったのか、彼はそのままピクリとも動かなくなってしまった。

一方で暴風の直撃を真正面から受けたアインは、吹き飛ばされないように地面に剣を突き立てて耐えていた。地割れのように剣が引きずられてできた溝をみれば、イーグルアンデッドの放った暴風の威力の凄まじさがわかると言うものである。

退場することなくその場にとどまっているアインの姿に、イーグルアンデッドは多少の興味を持ったようだが、冷たく見下すような視線が変わることはなかった。

「邪魔だ女……怪我をしたくなければさっさと去れ」

「……?」

アインは不意に耳に届いた声に大きく目を瞠る。今のは間違いなく、目の前の異形の口元から聞こえてきた声だ。それも自分が発してきた言語と全く同じ種類のものを、はつきりと。

これまで戦ってきたアンデッドに対して、アインはただの人に似た形の化け物と言う認識しか持ち合わせていなかった。

しかしそんな印象を軽く吹き飛ばすほどの事実が、目の前の存在によって示された。明らかにこの異形は、他の異形とは格が違うのだと実感させられた。

「出てこい、ジョーカー……決着をつけようぞ」

呆然と立ち尽くしていたアインは、イーグルアンデッドが口にした聞きなれない切札ジョーカーという単語に眉を寄せる。

思い浮かぶのは、ライダーシステムに使用されるアンデッドを封印したラウズカード。デバイスとともに渡されたそれらは確か、トランプに似たデザインになっていた。

ジョーカーと呼ばれる人物が存在は、ラウズカードと何か関係があるのだろうか、そんな考えが頭に浮かんだ。

「お前たちは……何を求めている? 何をここに現れた」

「なんのためだど？ 知れたこと……以前の借りを返し、奴と再戦するためだ！」

呼吸も荒く尋ねるアインに、イーグルアンデッドは冷笑しながら高らかに告げる。気高き翼を宿した異形は、まだ見えぬ再戦の時を待ち望むように、あるいは天に座す力を渴望するように天を仰ぎ、よく通る野太い声で吠えた。

「この大戦、今度こそ我が血に支配者の力を取り込む！ 邪魔をするのなら……お前も倒す！」

「ハジメの言っていた、バトルロイヤルというやつか……」

嘘か本当かはわからない、太鼓の昔にあったという世界の支配者を決めるために執り行われた殺し合い。半ば伝説か何かのようなその話は、どうやら少なくともハジメだけが知っている与太話ではないようだ。

アインは眉間にしわを寄せながらも、やがて口元をニヤリと不敵に歪める。アンデッドがその殺し合いに参加する資格を持っているというのなら、彼らを何体も封印してきた自分にはないのは如何なものかと。

「生憎だがお前の相手は私だ……なあに、落胆はさせんさ」

「……邪魔だと言ったはずだ」

剣の切っ先を向け、挑発的な笑みを浮かべるアインに、イーグルアンデッドは苛立ちを込めた目を向ける。種の存亡をかけた殺し合いに神聖さを求めているような人格ゆ

え、本来部外者であるはずのアインが挑戦しようとしていることが気に食わないのかも
しれない。

完全に自分を邪魔者としか認識していない異形を前にしながら、両手で剣を構えたア
インは全身から闘気を迸らせた。

「支配者の力とやらがどんなものかはよくわからんが……とりあえずお前たちが争い合
うのは何かしらの報酬目的のようだな。私はその辺の事情に疎いんだ……是が非でも
聞かせてもらおうぞ!!?」

「ほざけー!」

ついにイーグルアンデッドは激昂し、アインに向けて鋭い二列の刃を薙ぐ。大気が斬
り裂枯れる甲高い笛のような音が響き渡り、刃がアインが掲げた剣と激突した。

激しい火花を散らせ、アインは剣を構えたまま吹き飛ばされる。本来であれば耐えら
れたはずの威力も、傷を負って衰弱したいまの彼女では受け流すこともできなかつた。

冷や汗を流しながらも、足を滑らせて踏みとどまったアインに、イーグルアンデッド
は次々に斬撃を浴びせかけていく。金属同士がぶつかり合う嫌な音が響き渡り、連続す
る衝撃にアインの表情も険しくなり始めた。

「がっつ!!?」

限界を迎えたのか、剣を弾かれて構えを解かれたアインの腹にイーグルアンデッドの

膝が食い込んだ。軽く宙を浮いたアインはさらに殴り飛ばされ、建物の壁に激突してうつ伏せに倒れこんだ。

痛みにうずくまるアインの肌を覆う包帯から、じわりじわりと赤い染みが広がっている。たつた二発で傷が開きかけている女騎士を横目に、イーグルアンデッドは面倒臭そうに鼻で笑った。

「フン…鈍に用はない。なんだお前のその剣は？ 外見ばかり取り繕って肝心の芯がないではないか！ こんな粗末なものでお前は俺の前に立っているというのか!!？」 笑わせる!!？」

自信満々に自分の前に立ちほだかっただかと思えば、見てくれだけ立派なただの雑魚であつたことに心底落胆させられていた。

イーグルアンデッドは苛立っていた。女騎士が秘めた力は本物だ、しかしそれを操る魂が翳ってしまっている。そんな不完全な状態で無様に命を取らそうとしている女騎士が、聖なる戦いを侮辱しているようにしか思えなかったのだ。

「そんな鈍を振り回して何を望む!!？」 何を理由にそんな無様な様を晒し続ける!!？」 俺の邪魔をするというのなら、答えてみせろ!!？」

イーグルアンデッドの言葉に、アインは答ええない。

血の滲む体を無理やり起こし、剣を杖代わりに突き立ててよろよろと立ち上がる。生

まれたての子馬の方がよほど頼もしく見えるほどに弱り切ったその姿は、痛々しいだけであった。

「無いと言うのなら………ここですごす」

ギリリと陽光を反射する凶刃を前にして、アインは前髪で顔を伏せたまま立ち尽くすだけであった。

突如始まった女騎士と鷲の異形の戦いを、椅子とは少し離れたビルの上で面白そうに観察していた。

邪魔と判断し、信頼する上司に無情に始末されたはずの女が、满身創痕の状態で再び戦場に姿を現したのだから。そのような状況に、狂人であるイストが興味を抱かないはずがなかった。

「おお、あの女あれだけの負傷を負いながらまだ立つか。実に興味深いな……あの男よりもあの女の方が駒として役に立ちそうだ」

つい最近捨てた役立たずの人間のことを思い返し、比べるのもおこがましいほどの大きな力を持った女に羨望の眼差しを送る。

苦戦してはいるが、今の所カテゴリーJのイーグルアンデッドを相手に目立った傷も負うことなく生き延びている。負傷による膂力や機動力の低下を自身の経験で補って

いるのだろうか、格上を相手によくもあれだけ渡り合えるものだと感じるばかりであつた。

「あれだけの力……そしてあれだけの美貌……年甲斐もなく欲しくなつてしまふじやないか」

しかし仲間の喪失や上司の裏切りにあつても保たれている強靱過ぎる精神は邪魔だつた。あの女騎士の心を折り、屈服させない限りは思うままに操れる手駒は作れそうにない。

どうしたものかと首を傾げ、しかしどれだけ残忍な手で痛めつけばうまく行くかと樂しそうに考え込む人間に化けた異形。

その表情が不意に、不機嫌そうに歪められた。

「……今更君が何の用だ。牙の折れた獣に興味はないんだけどね」

「……お前になくとも、俺にはある」

背後に音もなくなつた覚えのある気配に、イストは面倒臭そうにため息をついた。

何やら大事そうに守ろうとしていた女を目の前で処分し、逆らう気も立ち上がる気もなくなくなるぐらいに精神を責めてやつたつもりだつたのに、まだ向かつてくる意思があつたのか、と呆れる他にない。

「……しようがないな」

実に億劫そうに、イストは立ち上がって背後に立った男、サクソに向き直る。異形の姿へと変わりながら、気だるげに持ち上げた剣で肩をトントンと叩いた。

「壊れるまで遊んであげよう」

向けられる残酷で冷酷な目を前にしながら、サクソは無言のままデバイスにカードを挿入し、腰の前に当てて装着する。不思議な音を奏でさせ、騎士はゆつくりと構えを取る。

今の彼には何も無い。無くして奪われて壊れて、そしてついには自分で捨ててしまった。数え切れない傷と痛みを抱えた彼は心も体もボロボロで、立っているだけでも奇跡のような状態であるのに。

異形に向けられる彼の目は、まだ死んではいなかった。

「変身」

【TURN UP】

デバイスのレバーを引き、射出された鍬形虫が描かれたスクリーンがサクソを待つ。ゆつくりと足を踏み入れた彼の体にスクリーンがまとわりつき、その体に分厚く無骨な鎧を装着させる。

赤い血潮の色のライダースーツに、機械的でありながら神々しい輝きを放つ銀の装甲。天に向かって伸びる二本の牙の下には、どこか悲しげに垂れた翠の眼が並ぶ。

硬き宝石ダイヤを模したその鎧を引きずり、サクソはゆつくりと、そして徐々に走り出し、ついには雄叫びとともに殴りかかった。

「おおおおおおおおおおお!!?」

その拳に、以前のような迷いは一切混じっていなかった。

無数の金属音が鳴り響き、血飛沫が舞う。大量の紅とそれに微量に混じる緑が辺りに飛び散り、周囲の地面や壁にグロテスクな模様をあしらう。

刃で大きく撥ね飛ばされながら、アインはひび割れた地面を跳ねて体勢を立て直し、再び剣を構えて突撃した。

「……………なぜ立ち上がる」

突き出される剣先を防ぎながら、イーグルアンデッドはわずかに目を見開いて呟く。

かれこれ十数分は、そして数十回はこの攻防は繰り返されている。その間にアインについた傷は数えきれず、流れた血の量も計り知れない。イーグルアンデッドの体にも傷はつけられていたが、アインのものに比べれば微々たるものである。

とうに限界を超えているはずなのに、未だ己の足で立ち上がって向かってくる人間の女を前に、イーグルアンデッドは驚愕よりも恐怖を感じていた。

「それほどの恥を晒し、血反吐を吐き、死にかけの体を引きずり、なぜお前は立ち上がる

!?? 何かお前をそこまで駆り立てる!?? そうまでしてなぜ戦う!??」

アインの横顔を張り倒し、荒い呼吸のために肩を上下させながら、イーグルアンデッドは戦慄の眼差しを向ける。

この女はただの人間ではない、得体のしれない何かを抱えた化け物のような女だ。アインの中にある底知れない何かが変わらず、イーグルアンデッドは先ほどとは打って変わって必要以上の警戒を向けていた。

ブルブルと震える膝を押さえつけ、立ち上がったアインはやがて小さく口を開いた。

「私が………戦う理由」

その問いは、いつだったか別の相手に尋ねられたことがあった。裏切られ、奪われ、失くし続けてきたというのに、なぜ自分の体は立ち上がるのか、戦おうとするのか、あやふやなまま剣を降り続けてきた。

それはこれまでのアインにとって、呪いのようなものだったのかも知れない。信じてきたものが壊れ、積み重ねてきたもの全てが否定された自分自身を保つための、一種の現実逃避のようなものだったのかも知れない。

「——そんなもの決まっている」

だが、今は違った。ハジメに問われた時から求め続けた答えが、今はすぐ目の前に見えていた。

見下ろしてくるイーグルアンデッドに向けて、アインの渾身の斬撃が襲いかかる。鋭く急所を狙ったそれは片腕の刃で防がれたが、その威力はイーグルアンデッドの巨体を浮かせ、真後ろに後退させるほどであった。

「私は全てを失った……!」

驚愕で大きく目を見開くイーグルアンデッドに向けて、次々に刺突が食らいつく。弾丸のように無数に放たれる鋭い突きはイーグルアンデッドの防御を易々と抜き、夥しい数の傷を刻み込んでいく。

「信じるべき正義も! 大切な仲間も! 帰る場所も! なにもかも!!?」

たまらず後ずさるイーグルアンデッドだが、それを追うアインの方が何倍も早かった。地面を踏みしめ、高く跳躍したアインの右脚が大きく振り上げられ、イーグルアンデッドの首に叩きつけられる。

人間相手であれば容赦無く骨をへし折っていたであろう一撃を受け、イーグルアンデッドは耐えるだけでせいっぱいになっていた。

「だが……こんな私にも、まだ残っているものはあったんだ」

ブレイラウザーを握りしめるアインの手がブルブルと震える。

戦うことしか脳がないのに、大事なものを守ることができなかつた役立たず。肝心なときに務めを果たせないこの体に果たして価値はあるのかと自問することさえあった。

それでもやはり、立ち向かわないわけにはいかない。己が守るべきものは、救い出すべきものは残っているのだから。

「私の大切なものは……これ以上誰にも奪わせない!!?」

怒涛の斬撃の嵐がイーグルアンデッドに襲いかかる。つい数分前とは段違いの威力と速度の剣が振り抜かれ、異形の外皮を切り裂き毒々しい緑の血飛沫を飛び散らせる。

まるでブレていた芯がまっすぐに張り直され、より強固に固定されたかのような安定した力が、今のアインからは解放されていた。

「これ以上この手から取りこぼしたりはしない!!?」

必死に応戦するイーグルアンデッドは気づく、アインの目の眩しいほどの強い輝きに。他の何ものも自分の瞳に映すことはなく、イーグルアンデッドだけを討ち取るべき敵と見据えていた。

「私は、私が後悔しない未来を選ぶ!!? その道を阻むものは、纏めて薙ぎ払う!!?」

アインの激しい感情が荒ぶる雷を発生させる。全身から迸る雷電は剣へと収束し、嵐のように渦巻いて徐々に威力を増していく。

周囲の風までもを巻き込み、アインを中心とした暴風が生み出され激しい雷鳴と風切り音を轟かせた。怒りによる暴走などではない、己の意思によって現れた雷を剣へと集めた、アインの持つ奥義の一つだった。

「これが、私の答えだ!!？」

立ち尽くすイーグルアンデッドに向けて、大規模な砲撃魔法にも匹敵する威力の雷の暴風が放たれる。地面のアスファルトさえも砕くその一撃が、真正面からイーグルアンデッドを飲み込んだ。

凄まじい威力を誇る暴風の発現を、離れた建物の影から見守っていたハジメが息を呑みながら凝視する。瞬きをも忘れさせるほどのその力は、以前のアインであれば考えられないほどの強さを秘めていた。

「……愛……それがお前の強さか、ケンザキ」

それを為させたアインの中の力の源を、ハジメは真剣な表情で察する。確かな強者の力を見せたアインに向けられるハジメの眼差しは、少しずつ変わり始めていた。

それは、彼にとっても同じであった。

「……鈍が、ようやくまともに切れ味を取り戻したか」

全身に傷をつけ、緑の血を流しながら立っているイーグルアンデッドもまた、アインをまつすぐに見つめ返していた。

下等な種族と見下すことも、戦いに横槍を入れる邪魔者と蔑むこともない、ただ一人の戦士として、アインと真正面から相対していた。

「いいだろう……貴様を我が敵と認めてやる！ 我が名はイグニス・プラトー、誇り高き

翼の種の祖!!? 名乗られよ!!?」

「時空管理局陸曹長、アイン・Kケンザキ・アルデブランド!!? いざ推して参る!!?」

「来い!!?」

互いの得物から滴り落ちた赤と緑の雫が、足元にできた血だまりに波紋を生じさせたのを合図に、騎士と異形は激突した。

「うおおおおおおおお!!?」

凄まじい雄叫びとともに、サクソの拳がピーコックアンデッドの頬に突き刺さる。魔法の付与もラウズカードによる威力の底上げも行われていないにもかかわらず、騎士の放った一撃はたやすく異形の巨体を吹き飛ばした。

口から緑の血を吐き、盛大に地面を転がるピーコックアンデッドは驚愕に目を白黒させ、追撃を加えようと向かってくるサクソを凝視していた。

「くっ……これは、どういうことだ!!?」

すぐさま立ち上がって拳打を受けた止めるが、込められた拳の強さに押されて防御が崩され、また胴体に重い一撃を食らわされる始末。

心を折られ、再起不能になった役立たずどころか、薬に頼っていた以前の状態を上回る力を発揮しているサクソに、ピーコックアンデッドは訳もわからずやられるだけで

あった。

「貴様はもはや戦う力などもうないほどに落ちぶれていたはず！ 薬の反動で日常生活さえまともにこなせなくなるほど弱っていたはず……なのになぜ!?？」

理解の範疇を超えた状況に、ピーコックアンデッドはもはやまともな思考など働かない。かろうじて不死の体が猛攻を受け止めてはいるが、おそるべき勢いで攻め立ててくるサクソの拳を前にしては紙の鎧を纏っているも等しかった。

……君との思い出は数えるほどしかないのに、

君を思い出させるものは……数え切れないほどある。

そしてなにより……なにより——君の笑顔が忘れられない。

拳の一撃一撃が異形の体を撃ち抜くたびに、サクソの脳裏には懐かしい記憶と、当時の素直な感情が蘇ってくる。

衰えていく己の力を目の当たりにし、精神的に衰弱し始めたサクソを検診的に励まし、見守ってくれていたたった一人の女性。彼女の笑顔が、頭から離れない。

巻き込んでしまう形で、その命を儻く散らしてしまった彼女は、最後までサクソを案じながら事切れた。

——遅いかな……今頃になっていうのも。俺は……俺は——

そんな彼女に、いつしかサクソは特別な感情を抱いていた。

しかしそれを認めるには彼は非常に不安定で、受け入れることに対して臆病になっていた。また、失うことが怖かったから。

しかし、それを恐れる気持ちはサクソの胸の内のどこにも残ってはいなかった。

サクソには見えない位置で、アインは剣を振るい続ける。もう二度と大切なものを奪わせない、その覚悟を示すために。

失い続けてきた二人の騎士は、一度はくじけかけながらも再び立ち上がった。鈍へと堕ちた自らを情念の炎で熱し、打ち付ける逆境の金槌を受け入れ、鍛え直した。

もう一度、スタートラインに立つために。

「ああああああああああ!!?」

「オオオオオオオオオオ!!?」

相対する異形を殴り飛ばし、アインとサクソはそれぞれの武器を展開させ、三枚のラウズカードを抜き出す。

スロットにカードを差し込み、切り裂くようにスライドさせ、まだ試したことがない新たな力の組み合わせを発動させた。

【DROP, FIRE, GEMINI. BURNING. DIVIDE】
 【THUNDER, KICK, MACH. LIGHTNING. SONIC】

サクソの体が分裂の力で二人に分かれ、それぞれの両足に業火が付与される。炎を

力で望む戦いを全うできた誇り高き異形の戦士はどこか満足げに見えた。

しばらくもがき続けていたピーコックアンデッドも、やがてその表情に酷薄な笑みを浮かべて力を抜いた。彼が見つめる先には、空のラウズカードを抜いたサクソだ。

「ああ、実に楽しみだ……光を取り戻した君が、再び絶望に落ちていくその瞬間が」

アインとサクソが同時に投擲したカードが、それぞれの担うアンデッドの胸に突き刺さる。緑色の光に包まれ、吸収されながらもピーコックアンデッドローイストの顔から、気味の悪い笑みは消えることはなかった。

「近くで見られないのが残念だ……!!？」

その姿が完全に消え去り、役目を終えたカードがひとりでに騎士たちの元へと戻っていく。難なく受け取ったアインは、そこでようやくやくいつの間にか同じ場所で戦っていたサクソに目を向けた。

最後に会った時とは違う、理性を保ったまま立ち尽くしているサクソの姿を見て、アインの胸中に様々な感情が湧き上がる。安堵、怒り、喜び、疑惑、様々な感情が混ざりあつていて、どれもがうまくまとまってくれない。

「……陸尉……」

しかしそれを伝える暇もなく、アインの意識は唐突に闇に飲まれてしまった。血を失

いすぎたのか、疲労が限界に達したのか、あるいはその両方か、アインはゆっくりと体を傾がせながら、静かに目を閉じた。

「！ ケンザキ！」

「アルデブラント！」

駆け寄ってくる二人の男の声を最後に、アインは意識を手放した。

10. 明かされる真実

「……まさか、貴様がまた立ち上がるとはな」

パチン、と火花が弾ける。ハジメは昨晩使っていた河原の一角で火を焚き、傍にアインを寝かせてあぐらをかくと、無言で座り込むサクソと向かい合う。

それとなくアインとの距離を取らせているのは、サクソに対する信用度の低さによるものか。それとも別の負の感情によるものか、向けられる視線はかなり厳しいものであった。

「どういふ心境の変化だ」

「……もうこれ以上、失いたくないと思っただけだ。いや、これより後ろに引けなくなつたと言うべきか」

「不転の覚悟か……潔いが、こう遅いと少々情けないな」

「……わかつている。気づくのが、あまりに遅すぎた」

サクソは憑き物が取れたかのような穏やかな表情ではあるが、行き過ぎて自嘲気味な笑みが浮かんでいるように見える。理由があろうとも、自分の部下を戦線離脱させるために散々痛めつけた事を気にしているらしい。

その理由も、やむを得ない事情ではなく自分の心の弱さに起因するもの、本来であればこうして再び向き合うこともできないはずであった。

「……………アイゴ・ハジメ…だったな」

「ああ」

サクソは皮肉げに自分自身を鼻で笑うと、アインを守るようにそばに控えているハジメに訝しげな視線を向ける。彼の顔はまだ見たことはなかったが、イストのもとで得た情報から彼が何者かは検討がついている。

目的も明らかにせず、アンデッドとの戦いに自ら身を投じる彼がアインを案じている理由がわからず、首をかしげる他にない。

「……………お前は、なぜこの戦いに身を投じる？ イストは確か、この戦いに勝ち抜くための手駒が欲しいと言っていた。戦いとは誰とのものだ、勝ち残った先で何がある？」

「お前たちはどうも、余計な詮索が大好きなやつらのようだな」

深いため息をつき、ハジメは目を細めてサクソを睨む。今すぐに戦闘を開始するほど敵意に溢れているわけではないようだが、相変わらず人間に対してはいい感情は抱いていないらしい。

しかしすぐそばで眠り続けるアインにちらりと視線を向けると、しばらく考え込んでから肩をすくめた。

「…………この女の根性に免じて、一つだけ教えてやる。俺は報酬が欲しくて戦うのではない、本能のままに敵を欲しているだけだ。……まあ、好敵手のうちの一体はこいつに取られてしまったがな」

この女が無理をしたために開いた傷はもう塞がれているようだが、流れた血はすぐには戻らないために、数日は目を覚まさないだろう。

アインの顔にかかっている前髪を優しくどかし、仕方がないなという風にため息をつくハジメに、サクソは戸惑ったように眉を寄せる。

ハジメがアインに向け始めている感情を察しかけた時、ハジメは立ち上がってサクソに背を向けた。もうその横顔にアインに向けていたような穏やかさは消え、覇気で張り詰めた冷たい表情を浮かべていた。

「そして心しておけ。お前たちが正義を自称する管理局とやらの騎士であることを貫くなら…………いずれ俺とは殺しあう仲だ」

「…………それは、どういう」

「いずれ分かる。…………じゃあな、その女には、次に会うときまでには傷を癒しておけと伝えておけ」

そう言い置き、ハジメは夜闇の中に姿を消していく。砂利を踏みしめる足音が徐々に聞こえなくなっていくのを見送りながら、サクソは神妙な顔でアインを見やった。

アインの窮地を救い、偉業との戦いに身を投じる彼の男が残した不穏な言葉。それがサクソの中で何度も繰り返され、胸の内に波紋を生じさせる。

最強と謳われるアインでさえも苦戦する異形が暴れまわるこの事態に、さらに何が加わるのだろうか。

「……一体この世界に、何が起これると言うのだ」

「私も知りたいですねぇ……?」

何気なしに呟かれたサクソの言葉。虚空を見つめて座り込んでいたサクソはしばらく黙っていたが、その場にあるはずのない声にハッと目を見開いた。

ブワツと冷や汗が吹き出し、背後に感じる何者かの気配にガタガタと肩を震わせる。聞き覚えのある声は、恐ろしいほどの冷気を伴ってサクソを包み込んでいた。

「誰かさんの当て馬をおびき寄せるために人質にされた挙句親友を殺されかけて、その上今の今までほったらかしにしてまでしななければならぬ大事なお話について……!!」

闇世の中で、キラリと焚き火の光を反射する緑の瞳。口元はにつこりと笑みを浮かべているのに、光を放つその目は微塵も笑ってはいなかった。

慌てて振り向いたサクソは、すぐ目の前で佇んでいる緑の髪の女がゆっくりと片手を振りかぶるのを目にし、ギョツと息を飲んだ。

「ま、待……………」

狼狽しながらも、両手のひらを前に出して言いつくろおうとするサクソだが、もう遅い。

その数秒後、空気が破裂するような乾いた音が闇世の中でこだました。

◆? ◆? ?? ♣?

「……………すまなかつた、ハラオウン嬢」

頬に大きなモミジの模様をつけたサクソが、むすつとした表情で座るリンデイに頭を下げる。

明らかに不機嫌さを隠そうともしないリンデイは、奇しくもハジメと同じようにアイソとサクソの間に入って、壁役となっている。恐ろしい勢いでサクソの信用が落ちていた。

「アイソの容体は……………どうなんですか」

「命に別状はないが、しばらくは動かない方がいいだろう。：俺が言うのもなんだが、こいつはあまりに傷を受けすぎている」

不安げな表情でリンデイが尋ねると、サクソは眉間にしわを寄せてアイソの容体を伝える。自分が傷つくことに、死ぬことさえも躊躇わないような突撃を繰り返す部下など、サクソにとっては頭痛の種でしかなかった。

リンデイもアインのそう言う欠点を熟知しているのか、悲しげに目を伏せて唇を噛んでいた。

「ホント……仕方がない子なんだから」

「……………今回ばかりは言い訳のしようもないよ、リンデイ」

その時、何気無しに呟かれてリンデイの声に、不意に答える声があった。

ハツと目を見開いたリンデイは、薄く瞼を開いたアインが虚ろな目を向けてきていることによく気づいた。視界が定まっていないのか焦点がずれているようだったが、少なくとも意識はつきりとしているようだ。

「アイン……………」

あっけにとられていたリンデイは、やがてその目に涙を溜め、感極まった様子でアインにすがりついた。抱きつかれて痛みが走るアインだったが、心配をかけた側として黙ってその痛みをこらえ、抱擁を受け止めた。

しばらくするとリンデイは、泣きじやくりながらアインの胸を叩く。八つ当たりでもするように、ゴスゴスと自分の怒りや苛立ちをぶつけ始めた。

「このバカ！ こんなにボロボロになって……私のことなんか放っておけばよかつたのよー！」

そう痛くはないが体に衝撃が響く不快感に顔をしかめるアインは、リンデイの口にし

たやや無茶苦茶なセリフに目を細める。

「そんなことを本気で言っているのなら、私はお前と絶交するぞ」

「ええいいわよ絶交で！　こんなにボロボロになるくらいなら友達なんてやめてやるわよー」

「……悪かった。嘘だ」

「バカ……」

降参とでもいうように肩をすくめると、アインはリンデイの手を借りて上半身を起こす。体は異常にだるいが、寝転んだままでは会話もしづらかったために少しでも無理をした。

サクソは関係者がようやく集まったことを確認し、改めて二人に向き直った。

「それでハラオウン、どうやってイストの元から逃げ出せたんだ？　もう奴は封印したとはいえ、警備も厳重だったはず……」

「……………」

「ハラオウン？」

サクソが尋ねても、リンデイはそっぽを向いたまま貝のように口を閉ざしている。単に聞いていないのではなく、サクソの話を微塵も聞く気がないようだった。

戸惑うサクソに代わって、リンデイの心境を察したアインがため息をついてから口を

開いた。

「リンデイ、どういうことか説明してくれ」

「助けてくれた人がいるのよ……その人が、この事件についてかなり詳しいことを教えてくれたの」

神妙な顔で、リンデイは自分に起こったことを思い出す。

アインを戦場に縛り付ける枷として捕らえられ、暗い独房に入れられていた彼女は、なんとか脱出する方法がないかと試行錯誤を繰り返した。

しかしもともと戦闘向きの魔導師ではない上、自分がいる正確な位置も把握できずにいたために逃げるのができなかつた。

そんな時、独房の壁を破壊して現れた人物がいたのだという。警戒するリンデイに対して彼は忠告だけすると、リンデイを安全な場所に連れ出してどこかへ去ってしまった。

その時に言われたことこそが、事件の根幹に関わる重要な情報であったのだ。

「それは一体どんなことだ!? 頼む! 教えてくれ!」

「……………」

「リンデイ、そろそろ陸尉をいじめるのはやめてやれ」

「……こんな人、無視してもいいじゃないの」

「駄目だ。重要な関係者の一人なのは間違いない……まあ、私も許してはいないが」

唇を尖らせてぼやくリンディにアインは苦笑しながら促す。問答無用で殺されかけたことに対する怒りはもちろんあるが、今は私情よりも優先すべき事柄がある。

暗い顔で視線を背けるサクソを見ないふりをし、アインはリンディに向き直った。

「で？ その助けてくれた人というのは……」

「ここにいられたか」

尋ねかけたアインの耳に、聞き覚えのない声が届いた。

思わず身構えるアインやサクソの目に、暗闇の中から姿を見せた一人の男の姿が映った。大柄ながら、穏やかな印象を抱かせる顔つきの民族衣装に似た格好をした男は、アインたちの警戒を察してか少し距離をとって立ち止まった。

すると男の顔を見たリンディは、ホツとした容姿で肩の力を抜いた。

「シーマさん……」

「……ということは、彼が？」

先ほど聞いた恩人のことを思い出し、アインもまた警戒と緊張を解く。

サクソはまだデバイスに手をつけていたが、アインやリンディの視線を受けて渋々手を離す。敵意が薄まったことで、シーマと呼ばれた男はようやく近く近づき、焚き火の前で腰を下ろした。

「お初にお目にかかる……私はシーマ。クロスボード氏に依頼され、遣いとしてやってきました」

「遣い？ お前が局長の？」

毅然とした態度のまま名乗ったシーマという男に、アインとリンディは思わず眉を寄せる。ケインズの名を聞き腰を上げかけたサクソほどではないが、行方不明のままのケインズが寄越したと聞かされては不審感も生じるものである。

シーマは三人の反応を予測していたのか表情を変えることはなく、深いため息をつけて目を伏せた。

「私が何者なのか……これをご覧になれば分かるはずですよ」

覚悟を決めたように顔をあげたシーマがそう言った瞬間、彼の姿がぐにやりと歪んだ。ざわつくアインたちをよそに、シーマの影がみるみるうちに変化していく。

刺々しい紫の体を黒い外殻が覆い、肩甲骨のあたりからは左右に二本ずつの突起が生える。黒と橙のそれはまさしく蜘蛛の脚であり、同じようなものが右手首からも生える。兜のような外殻を被った顔は悪魔のように凶悪な形相をしていて、バイザーのような半透明の膜が覆っていた。

異様な迫力を醸し出す姿へと変わったシーマは、見た目とは裏腹の穏やかな声を発した。

「これが私の本来の姿——タランチュラアンデッドとしての姿です」

「タランチュラ……アンデッドだと!?？」

アインたちと敵対しているはずの異形、それもイーグルアンデッドやピーコックアンデッドのような上位の力を感じさせる存在を前にし、アインたちは迂闊に間合いに入れたことを後悔していた。

しかしシーマは彼女たちを安心させるようにすぐに人間の姿へと戻る。それでも警戒を解けないアインたちを前に、シーマは堂々とした態度で座ったままでいた。

リンデイやサクソは顔を強張らせたまま身構えていたが、敵意がないことを察したアインは深い息をついてから緊張を解いた。構えもしないシーマの度胸に圧されたのかもしれない。

「……なぜアンデッドの貴様が、人間であるクロスボードの依頼を受ける?」

「私はもともと戦いとは無縁の性格ゆえ……この戦いをできるだけ平和的に終結させられるよう、クロスボード局長に協力しているのです」

リンデイとサクソが険しい顔でシーマを睨む。先ほど見せられたアンデッドとしての姿が頭から離れないようだ。あれだけ凶悪な格好から温厚な性格とは思えないのだろう。

アインも思わず眉間にしわを寄せて唸ってしまったが、ふと以前にハジメが口にして

いたことを思い出した。

——しかし種族の中には、争いを好まない温厚な種族もあった。

「……そうか、お前は非戦派の輩だったやつか」

サクソに使われた薬物と同じものを投与され、無理やり戦いの場に引き摺り出された者、あるいは駆り立てられたものがいたという話を思い出し、アインは少しだけ納得する。

するとシーマは信じてもらえとは思っていなかったように目を見開き、戦いについての情報を知っているアインに訝しげな視線を向けた。

「私について何か知っておられるのですか？」

「ああ、さわりだけな。無理やりバトルロイヤルに参加させられたんだろう？ 陸尉と

同じように」

「一体それはどなたから……？」

「アイゴ・ハジメ……私たちとは異なるライダーシステムを使う黒いハートの騎士だ」

ほれ、とアインは自分の記憶を頼りにデッサンしたハートの騎士の顔をシーマに見せる。はつきり言って子供の落書きとそう大差はない出来で、リンディたちは呆れた視線を向けていたが、ある程度の特徴は捉えられていたために何も言わなかった。

シーマはやや苦笑していたが、見せられた絵を見て大きく目を見開くと、険しい表情

で考え込み始めた。

「なんと……まさか」

「何か不都合なことでもあるのか？」

様子の変わったシーマに、アインは何かまずいことでも聞いたのかと焦りながら尋ねる。得体の知れない相手であることは確かだが、アンデッドの一体がここまで取り乱すほどの相手だったのだろうか。

その時、リンデイがアインの方を引いて注意を引いた。途中で攫われて監禁されていたために、アインとシーマが交わす話の内容がわからなかったのだ。

「ねえ、どういふことなの？」

アインは少し考えてから、シーマに視線を向ける。小さく頷いた彼に代わって、手早く省略しながらハジメから聞かされた古の戦いについて説明を始めた。

話を聞かされたリンデイとサクソは、信じられないと言った様子でシーマを凝視していた。

これまで自分たちが関わってきた異形の絡んだ数々の事件。その発端は、世界の支配者になるための力を求めた異形たちによる身勝手なバトルロイヤルだったというのだから。

これまで数々の犠牲と被害をもたらしてきた事件の真相に、怒りよりも先に戸惑いが大きく生じていた。

「……遠い昔、『バトルファイト』は人間の祖であるヒューマンアンデッドの勝利で終わりました。今の人間の繁栄があるのは、その結果によるものなのです」

話し終えたシーマは、向けられる疑惑の眼差しにも無然とした態度を崩すことはない。彼にとつては不変の事実であり、歴史であるからだ。

リンディも未だ納得しかねている様子であったが、口について出そうになる反論を抑え込み、また別の疑問を問うた。

「……にわかには信じ難いけど、でもその話が彼となんの関係があるの?」

「……アイゴ・ハジメは、そのヒューマンアンデッドの名なのです」

「え……………」

その答えに反応したのは、アインだった。以前話していた謎の言語のことから可能性の一つとしては考えていたが、こうもあっさりとは肯定が返ってくると逆に不安になってしまった。

「なら奴は、アンデッドだということか?」

「そのことに間違いはありません……ですが、アルデブラント殿がおっしゃったハートの騎士は、また別のアンデッドの姿なのです」

アインたちの間に驚愕が走る。

シーマの見つめる先にあるのは、アインが書いた下手くそな絵。アインが見てきたものから判断するに、ハジメがアンデッドの力で姿を変えたのがハートの騎士ということになる。そこまではアインたちの持つライダーシステムと同じだった。

しかしシーマが言うことには、ハートの騎士そのものがアンデッドということになる。明らかな矛盾が生じていた。

「マンティスアンデッド……カマキリの祖たる存在こそが、カリスと言う名の戦士なのです」

「ちよ……ちよつと待って！ 一体どういうことなの？ たった一人が二体のアンデッドの力を持っているとでも言うの？？」

腰を浮かし、リンディが険しい形相でシーマに詰め寄る。

アインは興奮するリンディを抑え、静かに座らせると、真剣な眼差しをシーマに向けた。シーマも背筋を伸ばし、まっすぐにアインを見つめ返した。

「単刀直入に聞けど。ハジメは……一体何者なんだ？」

「……かのバトルファイトには、一つだけイレギュラーな存在がありました。52体のアンデッドが種としての支配権をめぐって戦い続ける中現れた、単に破壊と殺戮のみを求める存在……その存在がもし、バトルファイトの唯一の勝者となった時は、バトル

ファイトのルールに則って全ての生物は滅ぼされることになっていました」

その言葉に、アインは大きく目を見開く。

勝手なルールに対する驚きもそうだが、シーマの語ったイレギュラーとやたらに嫌な予感を抱き、彼女の背筋に寒気が走っていた。

「なんだと……!?」

「ゲームを盛り上げるための障害物、たったひとつの例外として彼は生み出され、己の身の内の破壊衝動に従って戦いの場に駆り出されてきました」

シーマの表情も、緊張のためかやや硬さが見える。

「アンデッドさえも恐れると言う存在に、リンデイもサクソもゴクリと唾を飲み込んでいた。」

「それが、最強にして最悪のアンデッド——ジョーカーという存在です」

第VI章 時空を護る者達

1. 喉から手が出るほどに

アースラ内部、大型のモニターが設置されたその部屋には、三人の男女が集まっていた。

アースラ所属の執務官クロノ、執務間補佐のエイミーがモニターの前に集まり、その後ろから覗き込むように一人の茶色の制服を纏った男性が立っていた。

温和そうな顔立ちの、二十代後半あたりの整った顔立ちの彼もまた、興味深そうにモニターを見つめる。

「へええ……！ これは凄いわ……どっちもSSSクラスの魔導師よ」

「ああ……魔力の平均値を見ても、白い子で127万……黒い子が143万……最大発揮時はさらにその3倍以上……」

モニターに映し出される二人の少女、白い子と称されたのはと黒い子と呼ばれたフェイト。その戦闘記録を閲覧していたエイミーが興奮気味に述べると、クロノは重苦しい口調で答える。

一見見れば冷静に見えるが、次元の辺境に現れた新たな魔導師の力を目にし驚嘆して

いる様子の彼に、エイミーは面白がるような笑みを浮かべた。

「……………クロノ君より…魔力だけなら上回っちゃってるねえ…う」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない…状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろ」

「その通りですよ。そうでなければ…ハラオウン執務官より数段魔力量の劣る僕の立場がありませんからね」

「あ…つと、すみません…………」

苦笑する男性に、エイミーは慌てて首を回して頭を下げる。クロノからの咎めるような視線に苦笑いを浮かべるエイミーだが、見えないところで小さく可愛らしく舌を出していた。

それに気づかないふりをしながら、クロノはカムシンに気の毒そうな目を向けた。

「カムシン陸尉…あなたも苦労してきたことと思います。魔力の大きさと実力が伴わない連中が、ここ最近は特に多いですから」

「アースラの切り札であるハラオウン執務官にそう言っていただけで気が楽です。魔法至上主義なんて……………得をするのは一部の魔導師だけですからね」

異なる色彩の制服を纏う二人は、互いの苦境を労い合うような腰の低い態度で語り合っている。

クロノの纏う群青の制服は次元航行部隊みのもの、カムシンと呼ばれた男の茶色の制服は地上本部くのもの。次元の側が毎年多数の局員を引き抜いていくために、地上本部は慢性的な人手不足に陥っていると言う背景があるために、本来このように並んで立つ姿は見られなかったはずだった。

しかし今回の一件は特殊な問題を抱えているために、数少ない対処できる人材を連れてくるために一時的な共闘関係が出来上がっていた。

その問題の一つに、クロノはギロリと鋭く横目を向けた。

「……この誰かさんは無駄に魔力を持っていながら活用できていませんけどね」

部屋の入り口の前で無言で佇んでいたアインは、クロノたちの前に姿を見せると向けられる敵意の主をちらりと一瞥する。面倒臭そうにため息をつき、小馬鹿にしたような笑みを浮かべて腕を組んだ。

「……この数年でずいぶん口が悪くなったな、クロノ。また訓練で泣かせてやろうか？」
「泣かされるのははたしてどちらなのか……」

飄々としながらニヤリと獐猛な獣のような笑みを浮かべるアインに対し、クロノは今にもデバイスを抜きそうな剣呑な目を向けあからさまな挑発を返す。

一触即発の空気になりかけ、先ほどまでクロノをからかっていたエイミイも冷や汗を流してゴクリと唾を飲み込む中、その空気を払うようにカムシンが二人の間に割って

入った。

「お久しぶりです、アルデブラント陸士。お変わりないようで」

「……………お久しぶりです、陸尉殿」

「堅苦しい挨拶はなしにしましょうよ、せつかくの再会なのですから。それに階級こそ上がっても、僕はまだあなたの後輩であることには……………」

「…ケジメをつけておかねば、他の者に示しがつきませんから」

硬い口調で視線をそらすアインに、カムシンはどこか寂しそうな笑みを浮かべて黙り込む。見た目はカムシンの方が年上に見えるが、態度や言葉遣いを見るに彼の方が後輩のように聞こえた。

さつきよりも重苦しい雰囲気になりかけ、慌ててエイミイが話題を探す。和気藹々とまでは行かなくても、もっと軽い空気でこれからのことを話そうと思っていた彼女にしてみれば、この状態が延々と続くのは勘弁して欲しかった。

「あー……えーつと！ アルデブラントさんから見てあの子たちはどうでしたか!! 会話とか……あ、白い子の訓練につきあたりしたんでしよう?」

「……………はつきり言つて、どちらも天才だな。経験不足や度胸に関してはまだ伸びしろがあるが……いずれ口出しする必要もなくなるだろう。2、3年たてば並の魔導師では太刀打ち出来なくなるさ」

「うひゃー…おつかない」

次元世界最強と謳われる騎士からのお墨付きに、エイミイはモニターに映る少女たちを見やつてため息をつく。

ともかく、空気の流れを変えることに成功したエイミイはちらりとアインとクロノノ目を向ける。クロノノの敵意がやや薄れていることを確認すると、エイミイは少し心拍を落ち着けてから次の話を切り出した。

「しかしまあ…黒い子を逃がしたのはさすがに問題だったんじゃないですか？」

「……あの場で捕らえることは確かに可能だったが、それでは問題の根本的な解決にはなるまい」

「…泳がせるつもりで？」

「それもある。……だがそれ以上にあまり手荒な真似はしたくない。彼女は何と云うか……危ういからな。そのうち何かしでかしそうで…いつか壊れてしまいそうで怖い」
ひどい棒読みでクロノノの妨害をし、その上地上舞台の精鋭たちとやりあつたアインの暴拳について咎めるクロノノだが、当のアインはまるで気にした様子がない。

理屈よりも私情の方が強く影響している気がして、クロノノの目が呆れたように細められた。

「…甘いですね、あなたは。とても次元世界最強と謳われた武人とは思えません」

「お前が厳しい分、私が甘くしているんだ。……もう、あまりあの子たちと関われなくなりそうだからな」

冷たいクロノの視線にも意を介さず、アインはモニターに映る黒い少女を見つめる。

無表情ながら、その濁いた目の奥には優しい光を宿しているアインを見つめていたエイミーは、ついクスリと笑みをこぼしていた。

「アルデブラントさんって……もつと怖い……ううん、冷たい人だと思ってきました。最初に会った時も……すごく険しい顔してたし」

「……………最初？」

「なんでもないです」

片眉をあげて尋ねたアインに、エイミーは小さく笑みを浮かべて視線を外す。その笑みはどこか寂しげに見えたのは、気のせいであろうか。

「仕事中だぞ、エイミー主任。真面目にモニタリングしろ」

「はいはいつと……」

クロノの注意で、エイミーはモニターに視線を戻す。大体の情報は観測済みだが彼女たち、特に黒い魔法少女については今後もより詳しい情報が必要になる。

エイミーがしばらく作業に集中していると、自動扉が開いて新たな訪問者を迎え入れた。

「おつかれさま、みんな…と、アルデブラント陸士」

「あ…艦長」

「おつかれさまです」

「お疲れ様です。それと、あらためて…ご無沙汰しています」

「しばらくぶりね…うん、なかなか大変そうね」

無言で佇むアインには若干よそよそしげに、カムシンに対しては懐かしそうに目を細め、リンデイは部下たちの集まる部屋に入室した。

リンデイはなのはたちの映るモニターに目を向け、腰に手を当てて興味深そうな表情を浮かべた。

「…エイミイ執務官補佐、あの二人の分析の結果はどうかしら？」

「はい、こちらに…」

エイミイが分析した、少女たちの能力値を表した書類を眺め、リンデイは思わず唸り声を上げる。何人もの優秀な魔導師を見てきた、ついでにえば身内に高い能力を持つ魔導師がいる彼女にとっても、なのはたちの持つポテンシャルには目を瞠るものがあったのだ。

将来の有望性だけではない、その力が生み出すかもしれない危険性に対しても。

「なるほど…やっぱり凄い子たちね…これだけの魔力がロストロギアに注ぎ込まれば

「次元震が起きるのもうなずけるわ」

「黒い少女の方もそうですが…特に白い少女…なのはちゃんですわ。彼女が保有する莫大な魔力量と瞬間出力…そして優れた遠隔制御能力…管理局でも全体の5%にすら満たない稀有な才能の持ち主かも知れませんか…」

毎年多数の魔導師をスカウト、または引き抜いている次元航行部隊ではあるが、広大にして多数な次元世界を管理する組織であるがゆえに慢性的な人手不足に悩まされている。その上高い実力や才能を持った人材ともなれば組織の中のほんの一握りという惨状でもあるのだ。

しかしその状況を省みなくても、なのはの持つ力は凄まじいと言うほかになかった。まさに管理局が喉から手が出るほどに欲しがっている存在であった。

「…最大速度と瞬間加速にこそ優れています…設置系や時間差系といった小技を使えないのか…これでは動きの速い相手には格好の的になる…」

「ユーノもさすがにそこまで多様な魔法は習得できていないようだな…私も教えられたのは簡単な接近戦くらいなものだ。他はほとんど自分で何とかやっている」

「避けるのではなく受けて反らす、あるいは正面から受けきる。細やかな動きはせずに攻撃と防御の身に集中しているのね。確かになのはさんの魔法には、たとえ10発撃たれても…それを耐えきって一発撃ち抜けば逆転できる威力がある」

幼く、体がまだ出来上がっていないために、なのはの技術はまだまだ未熟。経験不足であるために使える手札の数も限られ、魔導師としてはまだ原石のような程度だ。

もともと事件に深く関わらせるつもりもなく、最低限の鍛錬に付き合うだけだったアインも、彼女が自力で編み出しつつある技術に圧倒されることもしばしばあった。

「…十分な訓練や経験を積まずに実戦に出ざるを得なかったからこそそのスタイルね…魔法の訓練を初めてひと月も経っていないそうだから」

「ええっ!!」

「…気持ちはわかるぞ、エイミー。私は軽く自信を無くした」

流石にギョツと目を見開くエイミーの肩を、アインは複雑そうな表情でポンと叩く。ここにいる大人たちが数年かけて身につけてきたものに匹敵する強さに、たったひと月練習しただけの素人の少女が到達しつつあるのだから。

頬をひきつらせるエイミーに苦笑したアインは、なのはの画像を見つめて憂いを帯びたため息をこぼした。

「本当なら、あの子は戦場に出る必要などなかった……ただの一人の女の子として、魔法などという危険な力に目覚めることもなく平和に暮らしていたはずだったんだ……」

「…そうね、困ったことだわ……」

「何がです?」

「これだけの魔導師となると……正式な認可を得ずに管理局の管理外の世界……まして魔法の存在が認知されていない世界に、これまでの生活を何一つ変えることなく滞在し続ける……というのは難しいかもしれない……」

「……確かに……この第97管理外^地世界^球では……厳しいかもしれませんが……」

しみじみと呟くリンデイとエイミィ。その表情は理不尽に巻き込まれ、その結果これまでの日常を奪われるかもしれないことへの同情の他に、これだけの才能を持つ逸材に対する渴望も含まれている。

「くだらない法律だ………巻き込んだのは我々の方だろうが」
吐き捨てるようにアインが呟くと、クロノは苦虫を噛み潰したような表情で目をそらす。

再び険悪になりつつある空気の中、リンデイはこほんと咳をつき、自分に注意を向けさせる。クロノは我に返ると、どうにか自分の中の黒い感情をなだめた。

「……その件の対応については、本件が落ち着いてからでもゆつくりと。今は返答待ちでもありますし」

「そうね」

「うーん、すごく良い子だし……管理局的にも放っておくにはもったいない逸材ですよ
ね」

「うるさいぞ、エイミー」

単純な戦力としてではなく、もし今後捜査を手伝ってくれる仲間になってくれたらという期待の言葉をこぼすエイミーだが、クロノにとつてはあまり喜ばしくない提案のようだ。

自身が正義の組織の一員という意識が強い彼にとつて、民間人をこれ以上巻き込むことには忌避感があるのかもしれない。そのため事件を未然に防げず、少女たちを巻き込んでしまったアインには強い嫌悪感を抱いているらしい。

時折見せる憎悪の眼差しは、それ以前からある根の深いもののようなのだが。

リンディは自慢の部下が抱えている悪感情に困ったような笑みを浮かべていたが、やがてモニターに映るもう一人の少女に視線を移した。

「あの子たち……なのはさんとユーノくんがジュエルシードを集めてる理由はわかったけど……こつちの黒い子は……どうしてなのかしらね？」

「……フェイト・テストアロツサか」

ジュエルシードの墜落から、度々なのはたちの前に現れては襲撃を繰り返してきた謎の多い少女。解析した少女自身の能力や戦闘能力に長けた使い魔の情報から見ても、相当地な実力者であることは確かだ。

なのはとそう変わらない年齢で、それだけの強さを持つからには其れ相応の訓練を積

んできたことは確かであり、それゆえに心配な気持ちが募る。

実際に戦い、面と向かって話をしたアインは、その不安を最も強く感じていた。

「…彼女たちは随分と必死な様子でした…何か、よほど強い目的があるのか…」

「目的…ね…あなたは何か聞いていないの？」

「……………聞かなかった。聞けなかつた…というべきか」

リンデイたちには、拾ったジュエルシードの一つを渡したことは伝えていない。局員の端くれとして正しい行為ではないことはわかっていたが、そのまま叩きのめしてジュエルシードを持ち帰ることは何故か躊躇われた。

少女の表情から、瞳の奥に見えた何かに、小さな体にのしかかっているように見えた重荷に、体が勝手に動いてしまっていたのだ。

「まだ…小さな子よね…」

「ええ…普通に育っていれば…まだお母さんに甘えていた年頃でしょうに…」

親に甘えることもなく、ただただ危険な戦いに身を投じる金色の少女。

その寂しげな目に、アインはそこはかとなない既視感を覚えるのだった。

2. 共同戦線

『——だからボクもなのはも…そちらに協力させていたただきたいと』
ブリッジに映し出されたモニターの中から、フェレット形態のユーノが真剣な眼差しを向ける。

帰宅させてからまる一晩が経ち、帰ってきた返答にリンディは小さく息を飲んだ。アインが言った通りの展開ではあるが、たった一日でここまでの覚悟の顔を見せるとは思わなかったのだ。

「協力…ねえ…」

『ボクはともかく…なのはの魔力はそちらにとつても有効な戦力だと思います』

「…まあ、それはそうだけど…」

『ジュエルシードの回収、あの子たちへの牽制。そちらとしては便利に使えるはずですが…』

リンディたちに口を挟ませる暇も与えず、ユーノはなのはの力を例示し、必死に売り込んでいく。

その脳裏には、昨晚アインから秘密裏に伝わってきた念話の内容が流れていた。

——もし、お前たちがこれから先もこの一件に関わりたいたと、責任を取りたいと思うのなら、自分たちの明確な価値を提示しろ。

ただ手伝うだけではない。彼らにとつて必要な存在であると自分たちをアピールしてみせろ。

自分と相手が対等な立場であることを示せ。

なのはのフェイトに対する想い、ユーノの事件を引き起こした要因としての責任、両方を叶えるためにアインが提示してくれた案だった。

——リンディヤクロノは民間協力者に対して高圧的な態度をとるような輩ではないが……他の連中はそうとは限らないからな。

できるだけそういったやつらに舐められないようにしておけ。

この世界ではあの子が当事者であり、我々こそが余所者だ。

後になって事件に関わり、主導権を横からかつさらつていったというように皮肉げにアインは語ったが、ユーノにはそれとは別の意図も説明していた。

事件の解決に関わることではない、事件が解決した後の懸念のことについてだ。

——この一件が終息すれば、事件に関わろうが関わるまいが、なのはの持つ能力が管理局の本部の不埒な奴らの目に入るのも時間の問題だろう。

慢性的な人材不足にある管理局にとつては垂涎物の逸材だ……管理外世界と

いうことを踏まえても、あの手この手で懐柔しようとしてくる可能性もある。

その言葉に、ユーノはハツと言葉を失っていた。

確かになのはの能力は並みの魔導師をはるかに凌ぐ資質を備えていて、管理局が簡単に放置するとは思えない。ユーノでさえ羨ましく思ってしまう大きな力が何も起こさない確証もないため、安易に野放しになどできないはずだ。

最も程度の軽いものなら、管理局へのしつこい勧誘。酷くなれば家族や友人の生活が脅かされるなどと言った脅迫で、無理矢理所属を迫ると言ったこともあり得る。

ただ力があるというだけで、なのはには今後様々な思惑がまわりついてしまうのだ。

——あの子の平穩を脅かされるのを防ぐには、ただのお人好しなガキではないと印象付ける必要がある。

どうにかして、提督のお墨付きという称号を手に入れておけ。

組織というものが常に一枚岩ではないことから、アインはまずリンディの派閥に属することを提案した。

おそらくは彼女なら、なのはを組織に縛り付けるようなことはしないだろうと、そう結論づけた。

(きつとリンディさんも…同じことを考えてくれている。信じていいんですよね、アイ

ンさん)

画面の向こうで考え込んでいる様子のリンディを見つめながら、ユーノはこの場にはないアインに問いかける。何度も助けられ、助言をもらい、十分すぎるほどの信頼を向けている彼女の言葉なら、信じる事ができた。

そしてリンディは、フツと柔らかな笑みを浮かべてユーノに視線を返した。

「それならまあ、いいでしょう」

「か……母さ……艦長!?!」

「手伝ってもらいましょう? こちらとしても切り札は温存したいもの」

反対意見を持つていたらしいクロノが慌て、思わず公私を混同しそうになりながら声を上げるが、リンディは樂觀的な笑顔を浮かべて彼をなだめる。

「それになのはさんのあの潜在能力……目を見張るものがある。変な人たちに目を付けられないように、これからの成長を見守って育ててみたいじゃない?」

リンディの言葉に、緊張で身じろぎもできずにいたユーノは笑顔を浮かべる。

だが意味深にユーノを見つめる目を見るに、ユーノに助言を与えた人物がいることを察しているようだ。それが自分の友人だとわかると、リンディの表情には仕方がないと、言うような苦笑が混じっていた。

「ね? クロノ執務官」

「は、はい……はあ……」

上司の決定の手前、強く反対することもできないらしくクロには大きく肩を落とし、苦笑したエイミイに慰められている。

微笑ましい部下たちのやりとりに目をやってから、リンディは真剣な表情に戻ってユーノに向き直った。

「ただし条件は二つよ……よくって？ 両名とも身柄を一時、時空管理局の預かりとすること……それから私達の指示を必ず守ること」

『はい……わかりました……!!』

自分の願いが叶ったことで、ユーノは思わずフェレットのまま満面の笑顔になっていた。

◆ ◆ ◆

ユーノと一旦別れたなのは、喫茶店の手伝いをしながら彼の交渉の結果を待っていた。自分の今後に関わる、自分の想いに決着をつけるために必要不可欠な決定ゆえに、表面上は平静を保っている少女の足はやや浮き足立っていた。

洗い終わった食器を片付けていると、コップを拭いていた桃子が優しく笑みを浮かべてなのはを労った。

「ありがとうね、なのは」

「うんー」

お手伝いを張り切り、満足げな笑顔を見せる娘に桃子も微笑ましさを覚える。しかしその胸中では、なのはが時折何か考え込むように手を止めたり、何かを待っているように時計に目を向けたりしていることを気にしていた。

そんな母の不安に、なのははまだ気づいていなかった。

「なのは……」

一息ついていたなのはの元にユーノから念話が届き、なのはは思わず背筋を伸ばした。

管理局への提案が通ったか否か気になり、なのははグツと息を飲んでユーノに問いかけた。

「ユーノくん……！ どうだった……？」

「決まったよ……」

「うん……！ ありがとう、ユーノくん……」

望んだ結果が得られたことで、なのははついガッツポーズを取りそうになるのをこらえて恐る恐る振り向く。

幸いにも、桃子はなのはから廊下側に視線を移していたため、いきなり笑顔になったりガッツポーズをしかけたりという奇行を見られずに済んでホッとした。

桃子はそれに気づかないふりをしながら、玄関に向かつていくと恭也の元へ歩み寄った。

「さて……じゃあ桃子、なのは……。お父さんたちはちよつと出かけてくるからな」

「今日は久しぶりに公園で稽古をつけてもらつてくるよ」

運動着に着替えた二人がそう残し、竹刀の入った袋を背負つて、見送りに来た桃子となのはに顔を向けた。

「おつかれさま、少し遅くなるの？」

「いつもよりは……でも早めに戻るよ」

「気をつけて行つてきてね、お父さん、お兄ちゃん！」

「おう！」

「さて、行くか！ 久しぶりだからなくビシビシ行くぞ！」

「ああ……！」

妻と娘に見送られ、やる気をみなぎらせた土郎が力瘤を作つて答える。恭也も最愛の妹に声援を送られ、爽やかに笑みを浮かべた。

早速出発しようとしてドアノブに手をかけた土郎と恭也だが、遅れて登場した美由紀が急いで二人の元に駆け出した。

「あ、待つて待つて……！ 私も見学！」

「来るなら早くしろよ?」

「うん……ちよつと待つ……あいたああ!」

準備のために一旦戻ろうとした美由紀だが、慌てていたために勢いをつけすぎ、廊下の角に頭をぶつけて悶絶する羽目になった。

いきなりドジを踏んだ妹に、恭也は思わずしかめっ面になっていた。

「……美幸……相変わらずだな、おまえは……」

「うう……っ」

辛辣な言葉に、頭の痛みに涙目で俯く美由紀に、土郎から笑い声が起きる。呆れた顔でため息をついていた恭也もいつしか笑い出し、道化のようになってしまった美由紀が抗議の声をあげる。

意地悪だとわかっていても、なのはも桃子もつい一緒になって笑い声をあげてしまっていた。

「さ……これでおしまい、と」

「うん…… おつかれさま、お母さん!」

三人の家族が家を出て、二人きりになったのはと桃子。

課されたお願いをやりきって背筋を伸ばすのはをじつと見つめていた桃子は、やが

て真剣な表情を浮かべてなのはに向き直った。

「なのは…何か相談したい事があるんじゃない？」

「えっ……！」

「お手伝い中、ずっと考え事をしてたでしょう？ お顔に書いてある…お母さんにはお

見通し……言い難い事なの？」

「……ええと……」

今日一日結果を待ち、そわそわと落ち着かない様子を隠しきれていなかったなのは、戸惑いながら答えに悩む。自分から言い出せなかったのは、反対されたらどうしようという不安の表れであった。

桃子の眼差しは真剣なものであったが、決して強要するような言葉は使わず、なのはが自分のペースで話してくれることを待っていた。

「お母さんとなのはだけの秘密…約束するわ」

「……うん」

家族全員ではなく、一人だけに打ち明けるのならまだ言い出しやすかろう、という桃子の提案に、なのははおずおずと頷き、話し始めた。

無論、魔法のことは話せない。しかしなのはが本当に伝えたい思いを、自らが望んで事件に関わり、見届けたいと思っていることを。そして、ずっと気になっている少女と

関係に決着をつけたいということ、たどたどしくも余すことなく伝えきった。

桃子は途中で口を挟むことはなく、ただただまっすぐに娘を見つめて耳を傾けていた。

「もしかしたら…危ないかもしれない事なんだけど…大切な人たちと一緒に始めた事…最後までやり通したいの」

「……………うん…そうね……………」

「みんなに…お母さんにも……………心配かけちゃうかもしれないんだけど…」

「それはもう……………」

不安げに溢れたなのはの言葉に、桃子は感極まったように自分の想いを吐露する。

大切な娘がそんな事態に関わるなど、本来であればあつてはならないことだ。もしそれが巻き込まれた結果の出来事なら、なおさら放置しておきたくなかった。

「いつだって心配よ……………？ お母さんはお母さんだから……………なのはの事がすごく心配！
なのはがどっちにするか迷ってるなら、危ないことはダメよ…って言うとは思わ
ど」

目を熱くしながら、なのはに向けて偽ることのない本音を伝える桃子。

しかし何かを思い出しているのか、微笑ましそうな満足げなような不思議な表情で、なのはの目を見つめた。

「だけどね…なのはが何かに一生懸命に頑張ってるって事…お母さん知ってたわ」
なのはは内心で、桃子の言葉に驚愕を覚えていた。

怪我をして帰ったこともあるし、帰りが遅くなつて心配させてしまったこともある。それでも悟らせまいと隠してきたと思つていたが、母には全て筒抜けだったようだ。

「それになのははちゃんと決めてるでしょ？ その人たちと始めた事…最後までちゃんとやり通すつて…なのはがあつたその女の子と…もう一度話をしてみたい、つて…」
「うん……………」

「じゃあ……………いつてらつしやい…………後悔しないように。お父さんとお兄ちゃん、お姉ちゃん、お母さんがちゃんと説得しといたげる…ねっ」

「うん……………ありがとう、お母さん!!」

母が自分の想いを理解してくれたことに、信じてくれたことに、なのはは目頭を熱くしながら何度も頷いた。

決して破れない約束を交わし、なのはは大きな喜びを感じながら桃子の胸に抱きつき、桃子も娘を強く抱きしめ返した。

翌日、なのはは母に向けた手紙だけをダイニングの机の上に残し、自分のいくべき場所へと向かつていった。

わずかな物音を聞き、夫婦の寝室から自分の娘が旅立ったことを察した桃子は、寂しげな微笑みを浮かべて机の上に置かれた手紙を抱きしめる。

かつての経験からか自分から甘えることもせず、人の顔色を伺いながら何か自分が役に立つことを望んでいた少女の初めてのワガママを喜びながら、同時に手元を離れて行くこうとしている物悲しきを感じていた。

「……いつの間にかこんなに大きくなって、驚きますよね……?」

小さく呟かれた言葉に、部屋の影に立っていたアインが遠い目を向けた。いつの間にか部屋に入っていたことに驚いた様子もなく、桃子は小さく苦笑した。

「ああ……子供はどんどん大きくなる……それだけに、その過程を見られなかったことが残念でならん」

「私も……少し目を離れたすきにずいぶん自分の道を進んでいるようで、涙をこらえるのが大変でした」

「……親が子と一緒にいられる時間とは、こんなにも短いんだな」

感慨深げに呟くアインの表情は、桃子と似て非なる切なげな感情に染まっている。

アインはそこでじっと意味深な眼差しを向けている桃子に気づき、慌てて顔を背けて歩き出す。

玄関にたどり着いてから、アインはようやく立ち止まって重い口を開いた。

「……すまない、あの子と過ごす時間を奪ってしまつて…止められなかつた私を恨んでる」

「いいんです……あの子が頑固なのは、私が一番わかっていますから」

律儀に謝罪するアインに、桃子は胸中の不安を押し殺して言葉を返す。

アインに対して言いたいことは多々ある。しかし彼女ができることを最大限に行つた結果、自分の娘が選んだ道なのだとわかつているために、一方的に責めるようなことはできなかった。

最も、責めたとしてもアインはその罵倒を肅々と受け止めたであろうが。

「これまでもちゃんと守つてくれたんでしょ？ だつたら…」

「いや……ほとんどあの子自身が自分で切り開いた結果だ。私にできたことなど、たかが知れている」

「でもあの子が進もうとしている先には、確かにあなたの姿があつたんですよ。母親の私が言うんですから、間違いありません」

いつしかなのはが見せていた、アインに対する尊敬の眼差し。

一体彼女たちの間でどんなことが起こつたのかは知らないが、なのはが信頼に値するようないをしたのは確かだ。それも、何か人生に深く関わる事柄で。

「こんなに親に心配をかける困つた子ですけど、これからもお願いできますか…？」

「当たり前だ……」

桃子の頼みを、アインは血を吐くように身を震わせて受け止める。

ギリギリと握りしめられる拳に、震える声に彼女の強い後悔と覚悟が滲んで見えて、桃子はまた悲しげに目を伏せた。

まただ。あの事件が起きてからずっと、彼女は過剰な責任を感じて罪を背負い続けている。決して彼女一人の罪などではないというのに、その全てを背負おうとしているように、桃子は深い悲しみを覚えていた。

「……もう二度と、お前たちにあんな悲しみは背負わせない。あんな表情なんてさせない……次こそは、私のすべてを犠牲にしても」

「そんなことを望んでいるんじゃないやありません」

悲壮な覚悟を決めるアインの言葉を、桃子は即座に拒絶する。

傷ついて欲しいわけではない、死んで欲しいなどと願った覚えはない。ただあの時のようなことを繰り返して欲しくないだけ、元氣なままのなのとともに戻ってきて欲しいだけなのだ。

「あの人が戻ってこないかもしれないと思ったあの日……私はとても苦しかったわ……自分を犠牲にして戦い続けるなんて無茶なこと、無理にでも止めていればよかったですと何度も思いました……」

かつての痛みと苦しみを思い出しているのか、ブルブルと身を震わせて立ち尽くす桃子に、アインは何も返すことができない。

無言のまま、桃子の口から紡がれる必死な願いを背中で受け止めることしかできずにいた。

「あなたが本当にあの日のことを悔いているのなら……あの子と一緒に、また来てください」

涙に濡れた目で、桃子はアインを見つめる。

一度失われかけた大切な人は、ちゃんと戻ってきてくれた。

だから今度も、何も失うことなく帰ってきて欲しい。それだけであった。

「……今度こそ、ウチのケーキを食べに来てもらいますからね……」

「……善処する」

背を向けたまま、アインはそれだけ答えて玄関をくぐり、硬い音を立てて扉が閉じられる。その無機質な音はアインの心を表しているようで、ますます悲しい気持ち湧き上がる。

結局、アインは一度も桃子の目を見ることはなく、ただやりきれない思いだけが募り続けた。

「……約束は、してくれないんですよね……？」

3. 天狗たち

「…それで、私に用とは何だ？」

アースラ内部の通路を歩きながら、アインが前を歩くカムシンに問いかける。

なのはとユーノ、二人の現地協力者という強力な手札を手に入れた今、アインに下さる命令は限定される。それについての話し合いでも行うのかと尋ねれば、カムシンは小さく首を振った。

「今僕がいる部隊……その精鋭の者たちと顔合わせをしていただきたいんです。一度お会いしたとは思いますが、今後行動を同じくするものなら、多少は離しておいた方が円満に進むでしょう？」

「……ああ、あいつらか」

アースラが地球に到着してすぐに現れた、自身の相棒に酷似したデバイスを所持する騎士とその仲間のことを思い出し、アインの眉間に皺がよる。

忠告もなしに剣を向けてきた相手と再び会わなければならないことに、憂鬱な気分になる。かなり傲慢な態度を見せていたと記憶しているが、自分の立ち位置のこともあるためにあまりいい予感はないかった。

一人悶々と悩むアインはそのままカムシンに導かれ、アースラ内部に設立されている訓練室に入る。そこにはすでに、件の三人組がリラックスした様子で腰を下ろし、談笑していた。

「…おーい副隊長！ 待ちくたびれたぜえ!! ……つて」

槍型のデバイスを持った、ツンツンと尖った髪の若い男がいち早く気づき、カムシンに手を上げてフランクに挨拶する。しかし隣にいるアインに気づくと、不機嫌そうに顔をしかめて目をそらした。

ボウガンタイプのデバイスを持った女性も同じような嫌悪感の混じった表情を見せ、こちらは人目も憚らずに舌打ちをこぼす。たった一人、アインの剣と似た得物を持った少女だけが平然とした様子で微笑を浮かべていた。

「紹介します。槍を持った彼がジンガー・ケイマン陸曹長。ボウガンを持っているのがナディア・ミラジーノ陸曹。そして剣を提げている彼女がインシグニア・ジムニー准尉…この小隊の隊長です」

一斉に黙り込んだ三人に苦笑しつつ、カムシンが代わりに紹介する。上官に説明させるなど組織の人間としてはあまりよろしくない行為に思えるが、命じたところで素直に聞きそうにないくらいケルベロスの機嫌の悪さが感じられた。

「彼らが三頭狼ケルベロスと呼ばれる、ノア提督の精鋭部隊です」

「……よろしく頼む。私は……」

初対面時からの態度の悪さに呆れながら、アインはカムシンの苦勞を思つて自分から握手のために手を伸ばす。

仲良くできるなどと毛頭思っていないが、少なくとも同じ艦で活動する以上は会話程度は必要であろうと意思の疎通を図る。

「堅苦しい挨拶はなしにしようぜ？ 先輩……」

ややあつてから、ジンガーと呼ばれた槍使いの騎士が億劫そうに立ち上がり、アインに目つきの悪い視線を向ける。

階級のこともあるが、ジンガーのその目に年上であるアインへの敬意は微塵もない。敵に向けるものとほぼ変わらない厳しい目が向けられていた。

「三等陸士ご」ときが頭が高えんだよ……てめエは一番下の陸士、こっちは曹長だ。同じ艦に乗ってるからって同格だと思つてんじゃねエぞ……わかつたら大人しく俺達に従つてやがれ、ババア」

口汚く罵るが、他の二人も止めることもせず表情一つ変えない。特にナディアと呼ばれた女性は同じ考えであるのか、不機嫌そうに眉間にしわを寄せたままアインを睨みつけていた。

流石に見過ごせなかつたカムシンが前に出て、礼儀のなっていない部下たち諫めよう

とした。

「おい、お前たち……!!」

「カムシン陸尉：私はまだ、こんな女が局員としてのうのうとしていることを認めていません。いつまた私たちを裏切るか、分かったものじゃない……」

「この女に同調すんのは癪だが……おれも同じ意見だ。こんな女と一緒にじゃ、まともに戦うどころかやる気も起きねえよ。正直後ろから刺されやしねえか不安で仕方ないぜ」
過剰なほどに向けられる悪意、アインは慣れているかのようにため息をつき、やや困ったように首を傾けて腕を組む。

サクソが以前言っていたように、この新人達の能力はともかく人間性まではうまく育てられなかったようだ。彼の苦勞が偲ばれ、アインの胸中になんとも言えない虚しさが広がっていった。

「……そう構える必要はないさ」

やがて不敵に笑みを浮かべたアインが、小馬鹿にするように騎士達に目を向ける。

嫌悪の視線をもつものもしないアインの言葉に、ジンガーとナディアは鋭く目を光らせ、我関せずと言った様子で佇んでいた残りの一人もピクリと眉を上げて目を細める。

「私ならお前たち程度……背後を取る必要もない」

「なんだと……!?」

「ふざけてるの…」

お前達程度真正面から潰せるとでも言いたげなアインの返答に、騎士達は一気に殺氣立つ。急激に張り詰める空気に、カムシンは若干狼狽しながら両者の間に立った。

しかし両者は互いに引かず、先ほどの挨拶の意趣返しに甘く見られていると理解した二人が、思わずデバイスに手を出しかけたときだった。

『——その辺にしておけ』

訓練室にいた全員を見下ろすように、突如空間モニターが現れて低い声を響かせた。その中心に映っている初老の男性の視線を受け、ジンガー達は慌てて姿勢を正した。

「…!! て、提督っ…」

『此度の事件、アルビローチへの対処のためにお前たちをねじ込んだのは私だ。そして何より…あれらの正体に最も近い位置にあるのはその女だ。文句があるのなら、私に直接言う方がいい』

「い、いや……」

「私達は決して、そんなつもりで言ったんじゃない……」

「……アルビローチ？」

バツが悪そうに目をしらす二人をよそに、聞き慣れない単語が気になったアインが聞き返す。

ジンガー達の、そしてサクソやカムシンの現在の上司であるというノア提督は、訝しげな表情で見上げてくるアインにちらりと冷たい目を向けると、顎を上げて問いの答えを口にする。

『急遽決まった、あれらに対する仮称だ。ダークローチに酷似してはいるものの、その生態も発生条件も全く持つて不明である奴らは、まさに先天性遺伝^{ケル}子疾患^ヒのように色素が薄いことからそう名づけられた。：以後、奴らと呼ぶときはそうしろ』

「……承知いたしました」

『多少異なる特徴を持つとはいえ、奴らが再び現れるなどあつてはならないことだ……結果を見せろ、アルデブラント陸士』

高圧的な態度で命じるノアに、アインは首を垂れたまま一切視線を向けない。もし向ければ、うっかり目に表してしまっている苛立ちの表情が見られてしまうだろうからだ。

『では、健闘を祈る』

そう言い残し、空間モニターが消滅すると、ようやくジンガーらとは緊張を解いて肩を落とす。

そしてアインの方に目を向けると、不満げに眉間を険しくしながら目をそらした。

「……チツ」

「胸糞悪いわね……」

「まあまあ、そういわずにちゃんと仲良くしましょうよ」

ぐちぐちと未だに言い募る二人を宥め、剣を備えた少女が柔らかい笑みを浮かべた。思わず敵意を忘れさせるほど可憐なその笑顔に、ジンガーもナディアも複雑な表情に変わって肩を落とした。

アインは彼らよりも一回りは年下に見えるこの少女が、小隊の隊長だと言われていたことを思い出して目を僅かに瞠る。年下に宥められているというのに、二人がそれほど嫌がっていないことにも驚きを覚えた。

「…しゃーねえな」

「シグニア…あんたは本当にお人好しなんだから」

毒気を抜かれたように敵意を霧散させていく2人にクスクスと笑いかけると、シグニアと呼ばれた少女はアインにも柔らかな笑顔を向けて頭を下げた。

「お初にお目にかかります、アルデブラント三等陸士。先ほどご紹介にあずかりましたインシグニア・ジムニーです。親しいものからはシグニアと呼ばれています」

「…そうか」

「先ほどは仲間が失礼しました。過酷な任務明けでの急な出張で、彼も気がたっていたのです」

物腰といい、先ほどから常にニコニコと絶えない笑みといい、よくこんな天狗達の小隊を率いることができるかと素直に感心する。同じ穴の貉かと思えば、アインを相手にしていても嫌悪感を感じさせない礼儀を備えていた。

「どうかお許しを……」のような田舎世界では彼の望むような刀槍劍戟は期待できませんからね。不満で仕方ないのでしょー」

インシグニアの物言いに、アインの眉がピクリと反応する。

変わらぬニコニコ笑顔だというのに、丁寧な言葉と柔らかい雰囲気には隠された負の感情を敏感に感じ取り、少女に対する敵意が再浮上した。

「おそらくですが……あなたの出番は今後ないでしょう。ずいぶん長くこの業界で働き続けてきたのです。表向きは艦の一員でしょうが、この機会にゆっくりなさってみては？」

一度聞いただけでは、アインのことを気遣った労いの言葉にしか聞こえないが、隠された敵意を見抜いているアインにしてみればそれは全く別の意味を持つ。

老兵はとつとつとつこんでいろ、という意味に。

アインよりも長く付き合っているらしいジンガーとナディアも、そしてインシグニアの内情を知っているカムシンもその意図に気づいたのか、頬を引きつらせて必死に距離を取り始めた。

「……お前、友達少ないだろう」

「……あなたに言われたくはないですね」

アインとインシグニアは互いに口元に笑みを浮かべるが、その目は微塵も笑っていない。ハイライトが消え、隠す気もない敵意をあらわにした鋭い目で互いを射抜き、牽制しあっている。

霜が降りそうなほどに訓練室の空気が冷え込んできたような錯覚に陥り、カムシンとジンガーは互いに身を寄せ合って顔を見合わせた。

「何で連れてきちまつたんだよお……!!」

「すみません……本当にすみません……!!」

もはやアインが嫌いとかの問題ではない、一瞬にして互いを敵と判断した二人の女の戦いに巻き込まれまいと、男達は必死に被害を避けようともがく。

「バーカ……」

そんな情けない男二人を、ナディアは呆れたように見つめてため息をついていた。

♠ ◆ ♡ ♣

「………というわけで……」

ブリーフィングルーム
作戦会議室に整列する艦内の局員たちに向けて、リンデイが朗らかな笑みを浮かべて

話を切り出す。

局員の大半は、緊張感を感じさせないリンデイの態度に慣れた様子で苦笑を浮かべていたが、一部のこととなる制服を纏った局員たちは若干渋い表情を浮かべている。

彼らこそ、インシグニアたちと同じ部隊に所属している臨時の追加メンバーであり、ミッドチルダにて治安維持に勤めている者たちである。次元航行部隊に対する壁もそうだが、危険なロストロギアに関わろうというときに呑気そうに笑っていることが気に食わないのかもしれない。

元々のアースラのメンバーたちも、艦長に対して良くない態度を向けている臨時メンバーに時々厳しい視線を向けていて、別の緊張感が漂っていた。

リンデイはその空気の温度差に気付きながら、小さく咳払いをしてから新たなメンバーを手招きして紹介を始めた。

「本日0時をもって、本艦全クルーの任務はロストロギア：ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また本件においては特例として、問題のロストロギアの発見者であり結界魔術師でもあるこちら…」

「はい…ユーノ・スクライアです」

「それから、彼の協力者でもある現地の魔導師さん…」

「高町なのはです！」

「以上2名が臨時局員の扱いで事態にあたってくれます」

「よろしくお願いしますー！」

緊張のせいかわ、頬を少し赤くしてカチカチに体を固くしている少年少女たちを目にし、局員たちの間の緊張感が少し和らぐ。男性局員の大半は少女の可愛らしい動作に毒気を抜かれてしまっていた。

正直者な部下や意地っ張りな子供のような態度を取る臨時のメンバーたちに苦笑したリンディは、しばらくすると表情を改める。真面目な顔になった彼女は、なのはたちの隣で佇んでいるもう一人の協力者に視線を向けた。

「…そして管理局特務三等陸士である」

「……アイン・K・アルデブランドだ」

「彼女にも今回、臨時のクルーとして任務に関わっていただきます」

その名を聞いた瞬間、アースラメンバーに緊張が走る。刃のように鋭い、敵意や嫌悪感に満ちた視線が、あらゆるところから向けられる。

そんな剣呑な視線を向けられながらもアインは無言で目を閉じ、人ごとのように自然に佇んでいた。

「アインさん…?」

一瞬にして変貌してしまった艦内の空気に戸惑い、なのはが不安げな表情でアインに視線を向ける。同じ組織に所属しているはずの彼女が紹介された瞬間、ほとんどが向け

ていた歓迎的な視線が一気に拒絶的なものに変わったことに戸惑いを覚える。

ぶつきらばうながら、なのはには丁寧な対応をしてくれていたクロノでさえ同じように剣呑な視線を向けている。

だが突如、彼の首に細い女の腕が巻きついてきたことで、わずかながら張り詰めていた空気が弛緩した。

「もークロノくんつてば！　かわいい女の子の前でそんな目しちやだめでしょがー
！」

「痛ててー！」

いたずらっぽい表情でクロノにアームロックをかけるエイミーが、不穏な空気を払うように陽気な声を上げる。他の局員たちもそれで我に返ったのか、なのはに対して苦笑を見せ始めた。

しかしそれでも、アインに対する視線の冷たさに変化はない。若干空ぶったような気分になったエイミーは、頬を引きつらせながら頭をかいた。

「あ……あはは……ま、まあ人には合う合わないがあるから、この空気は気にしないでね
？」

まだ戸惑っている様子なのはだが、そろそろと局員たちが持ち場に戻っていく光景を見て肩をすくめる。

ふと視界に入った、何も言わぬまま去っていくアインに手を伸ばしかけたが、何故だか話しかけづらい雰囲気を感じて悲しげに手を下ろした。

なのはの心境を察したエイミーもまた、少し悲しそうに目を伏せてなのはの方に手を置いた。

「みんないい人だから……ただちよつといろいろあつて……あ、私はエイミー・リミエツタ、16歳。通信主任兼・執務官補佐でこのアースラの管制官。クロノ君は直属の上官だけど、学生時代からの友人！」

「はい……こちらこそよろしくお願いします」

「ちなみにクロノくんのフルネームはクロノ・ハラオウン、14歳ね」

「へえ……」

エイミーに紹介されたなのはとユーノの視線が、そっぽを向いたままのクロノに集中する。

生真面目ぶっているが、なのはと視線が合うと何故か頬を赤らめて顔ごと背けている。嫌われてしまっているのかと悲しげに眉を寄せるなのはの横で、クロノの内心を察したユーノがじとつとした視線を送っていた。

あれはどう見ても、照れをごまかすために興味のないふりをしているだけでしかない、と確信していた。

「ハラオウン…？ あれ？ もしかして…！」

そこでユーノはふと、エイミイが言った苗字に聞き覚えがあることに気づく。確かその名は、最初にアースラに乗った時に聞かされたことがあったはずであった。

まさか、とユーノが驚愕を顔に表していると、タイミングを凶つたようにアースラの艦長・リンデイが近づいてきた。

「あらためて…よろしくお願ひしますね、なのはさん、ユーノくん。私はリンデイ・ハラオウン…時空管理局・巡航Ⅰ級8番艦次元空間航行艦船アースラ艦長です。そしてクロノの母親です」

「やっぱり！」

「ええ〜！」

ユーノは自分の予想が当たったことに納得の声をあげ、なのははただただ驚きの声を上げる。

クロノは14歳と、自分より5つも年上であると聞かされたばかりだが、リンデイがそのくらいの年頃の息子を持つような年齢には見えない。

自分の両親も大概なことは気にせず、なのはは見た目ですでに騙されていたことに少なからずショックを覚えていた。

「クロノは素直じゃないところもあるけど…仲良くしてあげてね」

「はいー」

「わかりました」

リンデイからのお願いに、なのはとユーノは同年代の友達の母親に頼まれていような気分になりながら頷く。

本当に若いなど感心していると、先ほど去って行ったアインもリンデイと近い年齢なのだろうかと気になった。二人が会話をしているのを思い出してみると、かなり近い関係というか、大人の友達同士の関係性に見えていた。

しかし、彼女が向けられていた剣呑な視線を思い出してしまい、なのははまた不安げな表情を浮かべてしまっていた。

(……仲間、なんだよね……?)

同じ組織の人間なのに、アイン一人を全ての局員が敵視しているかのような居心地の悪い空気。

その気味の悪さに戸惑いながら、なのははアインが去っていった方向をじっと見つめていることしかできなかつた。

4. 新たな日々

「…で、…高町さんはご家庭の事情で何日か学校をお休みするそうです」

教卓の上から担任教師がそう報告すると、なのはのクラスメイトたちは皆それぞれの表情に心配そうな表情を浮かべる。

彼らにとつてのなのはといえば、真面目で正義感の強い、多くの人に好まれる性格の持ち主であり、実家が人気の美味しい喫茶店を営んでいることで有名な存在である。

そんな彼女が家庭の事情で欠席すると言う展開に、クラスメイトたちは何かあったのではないかと口々に不安をこぼしていた。

「でも、病気や怪我で…不幸な事があつてお休みするわけではないので…ということですから心配しなくても大丈夫ですよ」

彼らの困惑を察した教師が彼らの不安を取り除こうと付け加えると、ようやくざわめきが収まり生徒たちは安堵の表情を浮かべ始める。

ただ一人、アリサだけは表情を変えることなく、どこか遠いところを眺めていた。

「高町さんがお休みの間のノートとプリントは…」

「はい…あたしがやります！」

「アリサさん……それじゃあ、よろしくね」

「はい」

担任教師に笑顔とともに託されるのを見て、アリサの近くに座っていたはずかほはホツとしたような笑みを浮かべた。

なのはの想いを聞いてから、どこか落ち着かない様子を見せていたアリサが、友達のためにできることを見つけたことに安堵を覚えていた。

「さて……それじゃあホームルームをはじめましょう」

そこからは、いつも通りの日常が始まる。

だが、たった一人クラスメイトがいなくて、ずかにはパズルのピースが一つ外れているような、そんな寂しさを抱かされているような気分になった。

(なのはちゃん……元気でいるかな……)

窓の外の、どこまでも広がる青い空を眺め、どこにいったのかも知らされていない親友のことを思う。

少なくとも、この空の下の何処かにいるのだと自分を納得させ、寂しさを紛らわせようとした。

——なのは……。

すっかり頑張ってきたさいよ……。

アリスもまた、遠く空を見つめて親友の笑顔を幻視する。

何を隠しているのか、何を頑張っているのかは結局教えてはくれなかった。だが必ず帰ってくるかと誓ったのだ、ならば信じるほかにないだろうと無理やり自分を納得させる。

きつと共にいるのであろう、長身の金髪の女性のことを思い出しながら、ありさはムツと唇をかんだ。

——なのはに怪我でもさせてみなさいよ…。

絶対許さないんだからね！

◆ ◆ ♥ ♥ ◆ ◆

「ギイエエエエ!!!」

緑色の光の鎖にがんじがらめにされた巨大な鳥が、苦悶の咆哮を上げてジタバタと悶える。

鳥というには爬虫類の特徴が大きく現れた、前兆十数メートルはあろう巨体に勢いよく引つ張られかけるが、万全の状態での魔法により強度を増した鎖はユーノの手元でびくともしていなかった。

「捕まえた……!!! なのは、バインドの練習……やってみて!」

「うんっ!」

「Restrict lock!」

空中でユーノのサポートを受けるのが、レイジングハートの先端を向けて答える。すると、宝玉の前方に桜色の光が収束し、新たな術式が空中に描き出された。

覚えたばかりの魔法を発動させ、押さえつけられている巨鳥の全身に桜色の枷を食いつかせる。より強固になった拘束により、巨鳥は白目をむいて悶え苦しむこととなった。

「クエエエ!」

「そう……! バインドを上手く使えば動きの速い相手も止められるし、大型魔法も当てられる!」

「うん……!」

実に狙いやすくなった標的に、なのは再びレイジングハートを構える。即座に相棒は自身の形を変え、封印法を放つための大砲へと変貌していく。

「Standing ready. Cannon mode.」
「ジュエルシード、シリアル8………封印!」

レイジングハートの砲口から放たれた桜色の閃光が、巨鳥の全身を飲み込みみるみるうちに蒸発させていく。過剰な魔力を取り込んで巨大化した体はあつという間に元の大きさに戻り、外見も大きさに見合ったものに変わっていく。

「ギャアアアアアアアアア!!」

爬虫類のようであつた凶暴な顔つきは可愛らしい小鳥のものに戻り、びつくりした様子でその場からパタパタと飛び立って行つた。

後に残されたのは、空中に静かに佇む一つの宝石。沈黙したそれにシリアルナンバーが刻まれたことを確認すると、なのははユーノの方を振り向いて満面の笑みを浮かべた。

「やったー!」

思わずガッツポーズを取るなのはに、ユーノもホツと安堵の表情を浮かべる。

しばらく達成感の余韻に浸っていた彼女たちであつたが、ふと耳に届いた音にビクツと震え、すぐさまデバイスを構えた。

「!」

音の正体は、眼下の森の中を駆けていく複数の存在の足音であつた。先頭を走る大きな四足歩行の影を追い、二人の人間が凄まじい速度で木々の間を駆け抜けていつていく。

凄まじい形相の狼に似た暴走体に追隨しながら、若き女剣士は標的を冷静に追い立てていく。ただでさえ常人離れた速度であるのに、進みづらい入り組んだ森の中を減速することはなく、かなりの長時間を走つていながら一切息を切らせていなかった。

『シグニア、ターゲットは2時方向に移動。1.8秒後にジنگターの待機場所に入るわ』
「了解……!」

離れたところから状況を把握している仲間のナビゲートを受け、インシグニアは自身の距離や走る方向を変えて、標的自身が追い込まれていることを悟らせず巧みに暴走体を誘導していく。

「グオオオオオオオ!!」

咆哮を上げる暴走体の至近距離に接近し、その勢いのまま大きく跳躍すると、インシグニアは力強く剣を振るう。

方向を変えようとしていた暴走体の前方に切り落とされた太い枝が落下し、バサバサと付近にいた鳥や獣が逃げ惑う。暴走体も慌てて方向を変え、騎士が待ち構えている方向へと逃走を再開した。

『ナディア、追い込んでください』

「わかってる……!」

通信越しに命じられ、ナディアはボウガンを構えながら腰のホルスターから一枚のカードを引き抜く。三頭首の番犬が描かれた赤いAエースを、ボウガンの銃身に取り付けられたリーダーに差し込んでスライドさせる。

【MIGHTY】

「レイバレット!!」

ボウガンの先端から射出されたいくつもの光の矢が暴走体の前方に炸裂し、衝撃波を生む。

またも暴走体は方向を無理やり変えさせられ、苛立ち混じりの咆哮を上げながら懸命に足を動かした。

しかしその先には、獰猛な笑みを浮かべて槍を構えて待ち構えている、緑のAの騎士エースの姿があつた。

【MIGHTY】

「待ちくたびれたぜ……!・インパクトスタツプ!!」

ハツと大きく目を見開き、慌てて引き下がろうとした暴走体だがもう遅い。槍の石突きに取り付けられたリーダーにカードを差し入れ、槍の穂先に魔力を収束させていく。

正面から迫る暴走体の牙と爪を紙を紙一重で躲すと、ジンガーは槍を大きく振り回し、暴走体の真下から無防備な腹に強烈な一撃を叩き込んだ。

「ゴアツ……!!?」

暴走体はまともに声も上げられず、腹から伝わる衝撃で盛大に胃と肺の中ものを撒き散らされ、その勢いのままに吹き飛ばされる。

巨体がまるでボールのように撥ね飛ばされていき、地面に頭から突っ込んで大きく陥

没させた。

ピクピクと痙攣する暴走体の首元近くにインシグニアが立ち、カードを刀身のリーダーに差し込んで魔力を解放させる。

【MIGHTY】

「——グラビティスラッシュ」

金色の光を宿した剣が、暴走体の首を一切の容赦無く叩き斬る。完全にとどめを刺された暴走体は最後にピクンと大きく体を震わせ、やがて光に包まれて小さくなっていく。

後に残ったのは、ぐったりとうつつ伏せに倒れふす瘦せこけた子供の野犬と、光を放ちながら浮遊するジュエルシードだけ。

インシグニアが剣でジュエルシードに触れると一瞬で術式が発動し、シリアルナンバーが刻まれて完全に沈黙した。

「ジュエルシード・シリアル20……封印完了」

デバイスの中に魔法の宝石を収容したインシグニアたちは、歓声を上げることも互いに健闘を称え合うこともなく、静かにその場に佇んでいるだけであった。

「すつこお〜い……」

「なんて精度の高い連携だ……」

管理局の地上本部を守っているという、歴戦の守護者の実力をまざまざと見せつけられ、なのもユーノも呆然と立ち尽くすより他になかった。

「状況終了です……ジュエルシード・ナンバー8、20無事確保……」

「おつかれさま……なのはちゃん、ユーノくん」

『はあい』

『回収完了しました』

少しだけ疲れた様子ながら、達成感に満ちた笑顔を向けるなのはたちにエイミイも笑みを見せる。

なのはとユーノが正式に現地協力者として迎え入れられてから早数日、オペレーターたちが発見・位置を特定したジュエルシードの位置まで転送されるようになったことで、以前よりも格段に封印・回収の効率が上昇していた。

「ゲートを作るね……そこで待ってて」

『はいー！』

元氣よく答える二人に笑いかけ、エイミイは一旦通信を切る。

その後ろでは、なのはたちの戦闘を観察していたリンデイが羨ましげに頬に手を当てていた。

「んー…やっぱり二人ともなかなか優秀だわ…このままうちに欲しくらいかも」
「ですわねえ」

艦長の評価に、部下のオペレーターたちも深く同意する。経験がまだ浅いとはいえ、すでに波の魔導師を凌駕する実力の片鱗を見せているのはの存在は非常にありがたいもので、必要不可欠なものとなりつつあった。

おそらく彼女たちの協力がなければ、現在のような収穫は得られていなかっただろう。

しかし同じかそれ以上の結果を見せている存在が同乗していることに、リンディは笑みを一変させて険しい表情を浮かべた。

「そしてこの子たち…やっぱり言うだけあって凄いわね」

『まあ…あの人の教え子だからな。でなければ、地上の番犬』など呼ばれまい』

別の場所からリンディに送られている通信から、気だるげなアインの声が聞こえてくる。彼女は一人静かな森の中で、切り株の上に腰掛けて手持ち無沙汰な様子を見せていた。

万が一ということまで待機を命じられていたが、一行に仕事を任せられる気配がないことにやや不満げな顔になっている友人に、リンディは思わず苦笑していた。

「あの子たちの言う通り、かなりヒマになっちゃったわね…アイン」

『……………人員が余るぐらいなら別に悪くはないだろう』

そう言い返すアインだったが、以前インシグニアに言われたことを思い出しているのか、眉間にしわを寄せて目をそらしている。

華々しい活躍を見せている後輩とは真逆に、誰もいない森の中でただ無駄に時間を浪費させられている様は、確かに彼女としては不本意なのだろう。

少しだけ暇つぶしに付き合っつてやろうかと思いかけたリンディは、突如鳴り響くアラートにすぐさま表情を変え、緊張した面持ちのオペレーターたちに視線をやった。

「！アイン！」

『ああ……………わかつている。変身！』

甲冑を纏ったアインが切り株の上から立ち上がり、剣を抜いて森の中に鋭い目を向ける。

木々の影、資格から覗き込み取り囲むように蠢いている白い外殻の異形たちの姿を視界に捉えたアインは、数枚のカードを抜いて刃の溝にスライドさせ、猛烈な雄叫びとともに走り出した。

「ウエエエエエイ!!」

【THUNDER, TACKLE, MACH, LIGHTNING STRIKE
E】

空中に出現した三枚の光がアインの鎧に吸い込まれていく。雷と突進能力、高速化の能力が自身に付与されたアインは、己自身を砲弾としてアルビローチの軍勢に向かって突っ込んでいった。

インシグニアたちのような美しい連携も策もない、ただただ荒々しい破壊の嵐の中、アインの獣のような咆哮だけが響き渡っていた。

◇ ◇ ◇

「…さ、これでミーティングは終わり…。みんな、配置に戻って引き続きジュエルシードの位置の特定作業を…」

「はい…」

「出来上がっている分は、モニタールームに転送してあります」

ジュエルシード搜索のため、脚を使って走り回り、空を飛び回る作業を終えると、局員たちは一度アースラへと戻り方針の変更や報告の仕事に入る。

全員が自分のやるべきことを理解し、テキパキと働いている姿を、なのははあつけにとられた様子で眺めていた。

実働班であるのはとユーノの仕事は一旦ここで終わり、次のジュエルシードの発動が確認されるまで休憩に入っていたが、なのはは別の意味で興奮して気が休まっていなかった。

「ねえ、ユーノくん」

「どうしたの？　なのは」

「クロノくんやリンディさん…エイミイさんやオペレーターさん達…アインさん…みんな今回のジュエルシードみたいな事件や災害が起きないように…頑張っているお仕事なんだよね…？」

「…そうだね。危険なこともあると思うけど、やりがいのある仕事だと思う」

食堂で用意してもらった定食を口に運んでいたユーノは、局員たちに見とれている様子なのはに思わず笑みを浮かべていた。

「…なのははこういう仕事に興味があるの？」

「ええと…！」

不意に投げかけられたユーノからの問いに、なのはは慌てながらも小さくうなずいた。考えていたことが見透かされてしまったような気分になり、なのはの頬に朱が差した。

「う、…うん！　…ただただ、みんなすごいなあ、つて…」

よく言えば純粹に、悪く言えば単純に、平和を守るために懸命に働いている彼らの姿に圧倒され、強い憧れを持ちかけていることを認める。

魔法という、地球人にはない力を巧みに使い、地球よりもはるかに高度な科学力でそ

れをサポートする。自分が魔法と出会わなければ決して見ることもなかったであろう光景に、なのはは強く惹かれ始めていた。

「……………自分の力で誰かを助ける事が出来るなら、それは……すごく素敵だな、って……思う……」

「……なのはにはそういう仕事、きつと向いてると思うよ」

「そ、そうかな……?」

「うん。ボクなんか、現在進行形でなのはに助けてもらってばかりだしね……」

命を救われただけではない、ペット扱いだったとは言え衣食住まで世話になっていたユーノは恥ずかしそうに苦笑する。

また、なのはの能力の高さを借りなければ、自分が原因とも言えるジュエルシードの回収にこれ以上関わられなかった可能性も考えると、なのはには頭が上がりなくて仕方がなかった。

「……………ユーノくんを助けて、レイジングハートと出会って、アインさんに戦い方を教えてもらって……色々な事があつて……」

なののはもユーノと同じく、出会いと始まりの日のことを思い出しながら目を閉じる。

瞼の裏に浮かぶのは、ジュエルシードをめぐる戦ううちに、自分の脳裏に刻まれてきた記憶や芽生えた感情。勝利の喜びや達成感、敗北の痛みと悔しさ、友達への後悔と

決心、様々な思い出が蘇ってくる。

「……将来のこと、進みたい道……自分にできること、自分にしかできないこと……自分がやりたい事がぼんやりとしか見えてこなくて……辛い時期もあったんだ……」

最初は状況や自分の感情に流されるだけで、地に足のつかない戦いばかりを続けていたと思う。けれどフェイトと邂逅し、アインに導かれ、初めて自分の意志というものが芽生えていた。

父を失いかけた幼い時から抱いていた空虚を満たすなにかが、まだはつきりとしていないが見えてきた気がしていた。

「…………まだ道はしつかり見えていないけど、でも……はつきりわかっている事はあるんだ。今、自分がやりたい事……!」

そう言つて満面の笑みを見せるのはに、ユーノは思わず見とれてしまう。

幼く、まだ頼りなかった少女は、日常ではまず出会わない衝撃的な出来事と直面し、少しずつ経験を積んでいき、少女を強く育んだ。

見た目は全く変わっていないのに、どこか大人に近づいているように思え、ユーノは喜びとともに寂しささえ覚えてしまっていた。

「………そっか」

ユーノは優しい笑み浮かべ、内心でなのは成長を祝う。

願わくばこの清らかな心がずっとこのままであることを願ひ、成長中の彼女と語り合える時間を大切にしようと思った。

だが、そんな穏やかな空気は、突如悪意に満ちた声に遮られてしまった。「やってられねえってんだよ……ホントによオ！」

響き渡る怒鳴り声に、なのはとユーノはビクツと肩を震わせて縮こまる。恐る恐る視線を巡らせ、少し離れた席でテーブルを囲んでいる者たちを伺った。

そこでは、先ほど凄まじい連携を以って瞬く間にジュエルシードを封印した騎士たちが、アースラのメンバーとは異なる制服を着崩して座っていた。

さつき大声をあげたのは、その中行儀悪くテーブルの上に脚をかける目つきの悪い男性のようだ。

「こんな田舎の管理外世界に引つ張り出されて……こちとら向こうに仕事をため込んでるつてのに!! いい迷惑だぜチクシヨウが!」

「落ち着きなさいよジン……わざわざ口にする必要なんてないでしょ?」
「ため込みましたら愚痴にならねえじゃねーかよ!!」

なだめるナディアだが、彼女自身もジンガーの不満に共感するところがあるのか似たような表情で頬杖をついている。インシグニアは我関せずといった様子で目を閉じていて、咎める様子は見られない。

急激に冷え込んでくる食堂の空気に戸惑っていたのはとユーノは、少し離れた席に移ろうと静かに腰を上げた。

「……………ああいう人も、たまにはいるからね。大人の世界って…すごく大変だから」
「う…うん」

先ほどまで任務に対して真摯に向き合っていた局員たちを見ていた分、人目も気にせずわめきたてているものを見てしまったのははかなり落ち込んでしまっている。

なのはの夢を全力で応援する気でいたユーノも、あれだけ騒いでいる男を見て少し幻滅した様子である。

「……………なんで仲良くできないのかな。リンディさんたちも必死に頑張ってるのに」

アースラメンバーは愚痴ばかりをこぼすジンガーに険しい目を向けているが、ジンガーたちと同じ部隊の者たちは同意するようにうなずいたり、アースラメンバーを睨んでいたりにしている。

かつてないほどに張り詰めた空気の中、ジンガーは構うことなく暴言を吐き続けた。
た。

「胸糞わるいぜ……………なんだってあのアルデブラントのクソ女と一緒に仕事しなきゃいけないだよ」

「ジン……………その辺にしときなさいよ」

「あまり目立つのも考えものですよ?」

流石に悪目立ちしすぎたのかと思ったのか、ナディアとインシグニアがジンガーを止めに入るが、一度開かれた口はもう止まらない。

しばらく近づかないようにしようと思線を外したのはの耳に、その言葉は届いた。

「あくあ…あんな女、さっさと死んでくれた方がこっちは助かるってんだよ!!」

その瞬間、なのはの目から光が消え去った。

5. 少女の意地

薄暗い部屋の中で、いくつもの空間モニターに映し出された画面が変化していく。

コンソールを素早く叩き、ある少女の所在を調べるためにセンサーやサーチャーを街中に向けて満遍なく作動させる。優秀な解析官である彼女だからこそ任せられる、相手に悟られない慎重さを前提とした任務であった。

「この黒い子…フェイトって言ったっけ？」

「フェイト・テスタロツサ…かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

「ふえ……そうなの？」

モニターから目を話さないままエイミーが驚きの声をあげると、クロノもまだ信じられていないような表情で頷いた。

黒の脳裏に浮かび上がるのは、過去の事件についての資料を見ていたときに目に入った、一人の魔導師についての情報だった。

「だいぶ前の話だけだね…ミッドチルダの中央都市で魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして……追放されてしまった大魔導師」

「その人の……関係者？」

「さあね…本名とも限らない」

血縁者の可能性は考えられないわけではないが、情報ではずっと昔に離婚し、事故によつて一人娘を失つて独り身となつていたはずである。

ならば考えられるのは、自分についての情報を可能な限り隠すために名乗っている偽名、もしくは罪をかぶせるために名乗っているかなど、情報が少ないまはいくらでも可能性は考えられる。

考え込んでいたクロノは、エイミイの操作するモニターに「NOT FOUND」の文字が浮かび上がったことで意識を戻した。

「あゝ、やっぱりだめだ…見つからない」

任務を果たせなかったことに、エイミイは心底悔しそうな顔で机に突つ伏す。手強い相手であることはわかつていたが、これだけ頑張つて成果が出なかったことにつくりと肩を落としてしまった。

画面に映っている、黒衣の少女の張り詰めた表情を恨めしげに睨みながら、エイミイは不満げに唇を尖らせた。

「フェイトちゃんつてば…よつぽど高性能なジャマー結界を使つてるみたい…」

「向こうもなかなか優秀だ」

エイミイの力量に不足があったわけではないことを知っているクロノは、それを上回

る隠密性を發揮している少女と、オレンジ色の狼の使い魔に厳しい視線を向けた。

「使い魔の犬……たぶんこいつがサポートしてるんだ。人間形態の時もある」

「おかげでもう2個もこつちが発見したジュエルシードを奪われちゃってる………手強いなあ……」

高性能な機材と設備、万全と言えるサポートが充実しているとはいえ、物事には時の運も関わってくる。

ジュエルシードの反応を特定し、即座に人員を派遣したときにはすでにことは終わっていたということは、局員たちに決して小さくない敗北感を植え付けていた。

「しっかりと探して補足してくれ……頼りにしてるんだから」

「はいはいっ」

とはいえ項垂れてばかりはいられない。自分のやるべきこと、できることを最大限やり切らなければと、もう一度自分を叱咤するエイミイを見守り、クロノも考えを改める。敵は今の所二人だけとはいえ、さらなる脅威が現れないとも限らない。認めるのは癪だが、アインの言った敵を泳がせるといふ考えもあながち価値があると思えることに、クロノは渋い顔で腕を組んだ。

「……んっ？」

すると、何やら外の方から声が聞こえてくる。

バタバタと通路を走りながら、局員同士が何か騒いでいるような、互いを急き立てるような声が聞こえてくる。

眉をひそめたクロノは、訝しげに振り向いたエイミイの方に手を置くと、億劫そうに目を細めて声のする方へ歩き出した。

「何の騒ぎだこれは…」

そうして局員たちが小走りで行く方へ向かい、すでに多くの面子が集まっている食堂の方へ顔を出す。

人集りの中を押しつぶされそうになりながらかき分けて進んで行き、その中心にいる人物たちに目を向けた瞬間、クロノはギョツと大きく目を見開いた。

「何でそういうこと言うんですかー！」

人だかりの中心で、怒りに満ちた表情のなのはが怒鳴り声をあげる。普段はおとなしい少女が、ビリビリと空気が振動するほどの音量を出していることに、周囲の局員たちは驚いた顔で成り行きを見守る。

すぐ後ろにはハラハラと狼狽した様子のユーノが止めようと手を伸ばすが、少女の剣幕に押されて声をかけることができずにいた。

「どうして仲間なのに……そんなヒドイことが言えるんですか!! 消えてほしいとか…

！ 何でアインさんがそんなこと言われなきやいけないんですか！」

わずかに涙をにじませ、怒りをぶつけているのは、先ほどまである騎士に対する暴言を吐き続けていた槍使いの騎士。

大人でも怯みそうなほどの怒号に対し、彼は実に鬱陶しそうに顔をしかめて、ギロリと鋭い目を向けた。

「おいクソガキ……口の聞き方に気をつけろよ。たいそうな魔力量を持つてる様だが、所詮は素人に毛が生えた程度のちっぽけな存在。おれ達と対等になったつもりで話してんじゃねえよ」

「そんなこと……今は関係ないじゃないですか！」

「あるねえ……平和な世界で育ってきたお前にはわかかんねえだろうがな、俺達の世界じゃ力がものをいうんだよ。ランクの低い奴は生き残れねえし、そもそも魔力がない奴は生きてる価値すらねえ！」

ミッドチルダを含む、魔法文化の広まっている世界の住人にありがちな差別的思考が、ジンガーになのはに對する敵意を抱かせていた。

下に見て、優越感に浸る対象のはずの管理外世界の住人が、自分に匹敵するかもしれない力を使い熟し、同じ任務に就いている。それが腹立たしく、彼の自尊心を大いに刺激していた。

「もともとおれはお前らが加わることには反対だったんだ……ド素人に手を貸されるほど、俺達は落ちぶれちやいなえんだよ！」

「そんな……」

「なのにあの女……ヘラヘラした顔で受け入れやがって。何様のつもりなんだっての……！」

侮辱の対象の一つとなっているリンディは、何も言わずに厳しい表情のまま佇んでいる。

アースラ側の局員たちがチラチラと心配そうな視線を向けるも、ことの成り行きを見守るつもりのように何も口にしなかった。

「それは君も同じことじゃないのかい？」

目に余る暴言の嵐の中、ついに見かねたクロノが険しい口調で両者の間に入った。

ユーノはあからさまにホツとした様子で肩を落とし、今度こそなのはの肩を引いてジンガーから引き剥がす。なのはは不満げにユーノを睨むが、必死で首を振るユーノに気づき、渋々言うことを聞く。

ようやく静かになったと、クロノはジロリとジンガーを見据え、射殺しそうなほどに鋭い視線をぶつけた。

「どういう権限で、艦長に対してそんな暴言を吐いているんだ、君は？ 裁判にかけられ

てもおかしくはないと思うが？」

「おれ達の上司はノア提督だ。次元で勝手に船旅してる奴らに下げる頭なんざねえんだよー。」

「貴様……!!」

自分の上司、その上母親でもあるリンデイを真つ向から侮辱されるも、場所を考えて極めて穏やかに詰問しようとしたが、当のジンガーに反省の念も上官であるクロノを敬う気持ちが一切ないことで怒りが燃え上がる。

アースラ側の局員たちも地上本部側の局員たちを睨みつけ、陣営を真つ二つにしかねない緊張感が生まれてしまう。

危うくミイラ取りがミイラになるかけた時、それまで傍観していたインシグニアがやれやれといった様子で割って入った。

「……部下が失礼しました。確かに直接の上官ではないとはいえ、地位が上の方に口にする言葉ではなかったですね」

「チツ……」

上司にかわりに謝罪させると言うあり得ない失態を冒しているのに、ジンガーに表面的にも反省する様子はない。

クロノもこれには口を挟みそうになったが、これ以上場をかき乱すと様々な弊害が現

れることを案じて硬く口を閉ざす。本人への注意もそうだが、彼らを指導しているマンダリンにも色々と言わなければならぬようだ。

インシグニアは困ったようにため息をつく、先ほどまでの低姿勢とは真逆にきつく咎めるような視線を返した。

「ですが、やはり彼の言い分にも多少くらいは道理にかなった部分はあると思いますよ。クロノ執務官。彼女達をこの艦に乗せていることに、あなた自身も思う部分がないわけではないでしょう?」

「っ……」

インシグニアの指摘に、クロノはわずかに痛いところを疲れたと言うように眉間にしわを寄せる。

ジンガーが最も嫌悪している人物は、クロノも決してよく思っていない相手であるために、真つ向からその意見を否定することはできなかった。

てつきり自分の意見を支えてくれると思っていたのは、雲行きが怪しくなってきたことに気づいて表情を曇らせる。

そんな時だった。一触即発の雰囲気の中に、騒ぎの原因とも言える人物が顔を出したのは。

「いい加減耳障りだぞ」

さしたる感情も、苛立ちも感じさせない気怠げな平坦な声で、アインがジンガーを睨みながら歩み寄ってくる。

人垣はまるで賢人に割られる海のようにひとりでに道を作り、嫌悪といふを帯びた眼差しが左右から注がれる。アインはさして表情を変えることなくその間を通り、騒ぎの中心である両者の前に陣取った。

「てめえ……」

「君の声は少し大きすぎるな。ガキじゃあるまいし落ち着いて話したらどうだ？」

腕を組み、不快げに眉間にしわを寄せた彼女は、そういつて自分の後ろに立っている少女に目を向ける。

師とも言える女性がけなされていたことへの怒りもあるが、やはりガラが悪い年上の男に立ち向かうのは恐ろしかったのだろう。目は涙で濡れ、手は小さく震えて恐怖を隠しきれないでいる。

小さな体で必死に意地を通そうとした少女の勇姿に、アインは微笑ましさと同時に呆れも感じていた。

「それに、子供相手に大人げないのではないか？」

「……………教え子にずいぶんご執心のようですね」

挑発するようなアインの注意に、インシグニアは蔑んだ目を崩さない。

単純なジンガーが暴れ出そうとしているのを片手で止めつつも、彼女の目は部下と同じく青き女騎士への嫌悪に染まりきっている。

「それともなんですか？ 自分を擁護してくれる味方がいなくなるのがそんなに怖いのですか？ …薄汚い化け物のくせに」

「化け物って…そんな…！」

吐き捨てるように溢れたインシグニアのセリフに、なのは信じられないものを見る目で嘆く。

他社に対して心ない言葉で攻撃する人間は少なくなく、なのはも街中で実際に目にしたこととはある。しかしインシグニアのセリフは悪口の範疇を超えたものに聞こえた。

「…まさか、知らないのですか」

可憐な少女の白言葉のナイフになぜか自分が傷ついているような少女の表情を見て、インシグニアの表情に戸惑いが生まれる。

今度はなのはが戸惑う番で、自分が憐れまれているような、気の毒そうな視線を向けられている理由がわからず、ただその場で立ち尽くしてしまっていた。

「何のことですか…？」

「はっ！ やっぱり何も聞かされていなかったみたいだな…だったら教えてやるよ」

「ケイマン陸曹長…！ いい加減にして下さい!!」

ハツと我に返ったクロノは止めようと前に出るが、ジンガーはインシグニアもクロノも押しのけてアインの前に踏み出す。

無言のまま佇むアインのすまし顔にさらに怒りを募らせたようで、ずんずんと床を踏み抜かんばかりの勢いで迫る。

「この女はなあ………！」

「やめろ！」

ジンガーの目が、さほど変わらない高さにあるアインの目を見据え、己の瞳の奥に写った光景を見せつける。

破壊され燃え盛る街、無惨に斃れていく人々、かつての己が体験し、その目に焼き付けてきた記憶を突きつけるように、ジンガーは轟くような大声で叫んでいた。

「ミッドチルダの人類すべてを絶滅の危機に陥れかけた、裏切り者なんだよ!!？」

ギシリ、と初めてアインの表情が変わる。頬の筋肉が強張り、瞳孔が収束し、唇が噛み締められる。

といつてもそれは側から見れば小さな変化で、リンデイのように長く付き合ってきたものには分からないような些細なものだった。

だがそれでも、常に平静を保とうとするアインの表情をそこまで変えさせたという事実を知ったリンデイは、悲痛げに目をそらし黙り込んでしまった。

「裏切り者……？ アインさんが……？」

ジンガーの言った言葉の意味がわからず、なのはは呆然と繰り返す。

そんなはずはない、自分を助けてくれた騎士士であるアインがそんな悪魔のような所業を行なったなど、信じたくはなかった。

「やっぱりな………自分に都合の悪い話は全部秘密にしてたつてか。よくそれでそこまで師匠面できたもんだな！」

しかしジンガーの鬼の首をとったかのような表情が、インシグニアやナディアの侮蔑の表情が、クロノや他の局員たちの同意するような眼差しが、リンデイの気まづげな表情が、その言葉を真実だと語っている。

ぐらりと足元が揺れるかのような気持ちの悪い感覚が、なのはに襲いかかる。何か言い返したくても、言葉として声に出なかった。

「15年前…… ミッドチルダに現れた大量の化物の集団……今でも夢に見るぜ。親父も、お袋も、まだ5歳だったおれの弟もみんな!! 奴らに食い殺されて遺体も残らなかつた!!」

堰を切ったかのようにジンガーはまくし立て、何も言わずに立ち尽くしているアインを責め立てる。激しい怒りと憎悪の嵐がぶつけられ、他の誰も口を挟むことができなくなる。

アインは何も反論しなかったが、わずかに伏せられた目とギリギリと握り締められている拳が、その内心の荒ぶりを表していた。

「そうだったのはみんな……てめえが化け物の親玉をとつと封印しなかったせいだろうが!!」

ジンガーの手が、アインの襟首をつかんで引き寄せる。下がることもそらすこともできなくなった彼女の目を鋭く射抜きながら、ジンガーは己の思いの丈を全て叩きつける。

その姿はもはや騎士ではない。どうにもならない過去を持って余し、ただ己の不満を誰かにつつけることしかできないただのガキでしかなかった。

「てめえが俺の……!!」 俺達の家族の命を奪ったんだよお!!」

アインの唇が、食い破られそうなほどに噛み締められる。

ジンガーは鼻息荒くアインの襟を離し、どうにか自分で落ち着こうと乱暴な深呼吸を繰り返す。インシグニアはその肩を叩き、気持ちはわかつているというような慈愛に満ちた微笑みを向ける。

誰も彼を責めることはできなかった。深い事情を知らないユーノでさえ、ジンガーの経験は嘘偽りない事実だということを察し、アインに疑いの目を向けてしまっているくらいだ。

「ウソ……ですよね…？ アインさん…」

ただ一人、微かな希望をかけて、なのはは自分の目の前で立ち尽くしているアインを見つめる。

意地悪なあの人が言ったことなど嘘だと、そんなことをするなどあり得ないと信じた。だが体は自分のいうことを聞いてくれず、冷や汗が背筋を伝って震えが止まらない。

なのはの動揺を見ることなく察したのか、アインは深いため息をつくと彼女から目をそらした。

「……………否定はしない」

なのはの表情が、絶望で青く染まる。

そんな答えなど聞きたくない、そんな嘘を信じたくないと首を振るが、それっきりアインは顔を見せてくれない。

きつくアインの服の袖を握りしめるが、ふと振り返った彼女に振り払われてしまい、不安げに見上げる少女はさらなる悲しみに苛まれる。

「だが…一つだけ訂正してほしい」

「あ？」

不快げに眉間にしわを寄せるジンガーから視線を外し、アインはなのはに目を向け

る。

一切の興味を失った、冷たい無機質のような目を向けられ、なのはは怯えたように後ずさっていた。

「なのはは私の教え子ではない……………妙な勘違いはやめてもらえないか」

ヒュツと、なのはの喉の奥が締まる。体の中に氷を入れられたかのような悪寒が身体中を駆け抜け、不快感によって激しい吐き気に襲われる。

胸を締め付けられるような感覚を抱きながら、なのはは呆然とアインを見上げるしかなかった。

「アイン、さん…?」

「君もだよ、高町なのは……………あまり私に対して甘えるな。親しい仲と思われるのは正直迷惑だ」

ポロリと、それまでどうにか保っていた涙がこぼれ落ち、次々に溢れ出して止まらなくなってしまう。

自分の立っている場所がひどく不安定なハリボテの上に変わっている気がして、強い恐怖に支配されてしまう。

こんな場所に居たくない、それだけの考えに脳内が埋め尽くされ、なのははいつの間にかアインに背を向けて走り出していた。

「なのはー！」

慌ててユーノが追いかけるが、思った以上に速くあつという間に見失ってしまふ。

戸惑いの表情を浮かべて顔を見合わせる局員たちや、憎々しげに睨みつけるクロノ、咎めるような目を向けるリンディに囲まれ、アインは気だるげに肩をすくめた。

やっと鬱陶しい相手が一人いなくなった、そんな態度にさらに悪意を集めるのを自覚しながら、アインはジンガーに視線を戻した。

「……安心してくれ。不用意に君らに近づくつもりはない。じゃあな……」

「待てっ……！」

ジンガーの制止がかかるが、アインは全く聞くことなくその場から去っていく。触れることを忌避した局員たちが再び道を開け、女騎士は億劫そうに虚空を眺めて歩いていく。

その背中を、歯を食いしばりながら見送る他になかったジンガーは、一瞬で展開したデバイスの切っ先を受けながら再び吠えた。

「俺は……俺は絶対にお前を許さねえからな!!？」

激しく深い憎悪の声を受けるも、一切の注意を向けることなく、アインはその場から姿を消した。

誰もが、その後に残る点々と続く雫の跡に気づかないまま。

6. 生まれる波紋

「……損な役回りをさせちゃったわね」

アースラの中に設立された庭園空間、なのはたちとリンデイが初めて対面した空間で、アインは一人、橋の上で片膝を抱えて座っていた。

小さな滝が生み出すせせらぎや水面の波紋をぼんやりと見下ろしながら、一言も口にせず佇んでいる彼女に、リンデイは苦笑しながら近づき、その隣に腰を下ろした。

「…何の話だ」

「とぼけないですよ。…あのままだと、彼らの関係は真つ二つに割れてどうにもならなくなるどころだったわ。だから自分から敵役を買って出たんでしょ？？」

平坦な声で答えるアインに、リンデイはしょうがないというようなため息をついて目をそらした。アインがどんなにぶつきらぼうに振る舞い、隠してもリンデイにはわかっていた。

もともとそりの合わない次元航行隊と地上部隊の対立がジンガーの爆発で決定的なものになるところだった。

だからこそアインは、自分が憎まれる役目を負うことで互いの敵意を自分に逸らさ

せ、対立の激化を防いだのだ。

最悪の事態は免れたが、それを行なったアインに対するリンディの表情は、不満げなまま変わる様子はない。

「でもなのはちゃんを突き放すのはどうかと思うわよ。あの子、きつと今頃泣いているわ」

「……ジンガーの目を見ただろう。私が関わっただけで、あの子にまで敵意を向けるよ
うなやつだ。……味方にも睨まれるようでは、守りきることはできん」

「天邪鬼……」

ジンガーや、かつての事件で被害にあつた者たちの憎悪は計り知れない。わずかな親交があつただけで復讐の対象となることもあり得たため、アインはこれまで紡いできた縁を全て断ちながら生きてきた。

今度のはなのはその被害者になつてしまったなら、アインも今度という今度は理性を崩壊させて荒れ狂うかもしれない。

「大事にしなさいよ……守るって約束したんでしょ」

「……………」

リンディからしてみれば、もう親友は全ての人間を敵に回してしまつていてもおかしくはないほどに傷つき続けている。なのに彼女は、組織に所属したまま奴隷のように働

き続け、戦場に身を投じ続けている。

その理由が、たった一人の男への感情のためであることは、リンディはまだ誰にも教えられそうになかった。

◆ ◆ ◆

アインとリンディがいる場所からちょうど反対側にある訓練室の隅で、なのはは両膝を抱えてうずくまっていた。

目元は赤く、汚れた頬をみれば先ほどまで泣きじゃくっていたことが丸わかりだった。今もなお悲しげに目を伏せ、ヒックヒックとしゃくりあげているのが余計に悲痛に見えた。

「……アインさん……どうして……」

師のように慕っていた人からの心無い一言を真に受け、思わずその場を飛び出してしまったが、今は誰とも話をしたくなかった。先ほどの話を聞いたばかりでは、もう誰の言葉も信じられなくなりそうだったからだ。

局員のほとんどが任務中か、食堂に集まっていたために、誰もその場にはいない訓練室を見つげられたことは幸いであった。

「……ずいぶんあの人を信用していたようだね」

目を潤ませるなのはの元に、不意に聞き覚えのある声がかけられる。

ハッと我に返ったなのは、ゴシゴシと目元を乱暴にこすると居住いを正し、キツと声をかけてきた訪問者を睨みつける。

インシグニアは警戒している様子のなのはに苦笑し、安心させるようにゆつくりと近づいてから、静かに隣に腰を下ろした。

「あなたは……えつと」

「インシグニア・ジムニー。さつきはゴメンね。彼はちよつとけんかつ早い所があつて……昔の職場もそれで追い出されたことがあるんだ」

優しいな笑みとともに話しかける彼女に、なのはは警戒したまま体を引く。だがあの険悪な場において、比較的冷静な態度を貫いていたインシグニアのことを思い出し、威嚇するような視線の鋭さをやや緩める。

それでも気を許すようなことはせず、少しずつ距離を取りながら、インシグニアの顔をじつと横目で観察した。

「でも本当は……誰かのために起こることができる正義感の強い人なんだ。昔の職場でも……自分以外の誰かのために感情を爆発させちゃっただけ……それでも手を出しちやつたのはまずかつたと思うけどね」

苦笑しながら、部下の失態を本人に代わって謝罪に来たようで、なのはが距離を取ろうとしていることに気づいても傷ついている様子はない。

むしろ仕方がないとも言おうように、なのはの厳しい眼差しを真正面から受け入れていた。

「でもその正義感を部隊長に買われて……彼は今僕の仲間になつてゐる。もう一人の子も同じさ。彼女はまあ……セクハラに耐えかねての暴力だけどね」

始めは、あの二人の騎士たちを完全に敵として認識していたのはだったが、話を聞くうちにそう根は悪い人間ではないのだと思えてきた。

人との付き合いがうまくいかない人がいるのもわかつてゐるし、それぞれに異なる考えや思いがあることもわかつてゐる。

それでもなのはは、尊敬する人をひどく言われたことを許す気になれなかった。

「……………アインさんのこと、嫌いなんですか」

「……正直私も、彼女に対してはいい感情を抱いてはいないかな。これまでの功績や実力は評価すべきだとは思うけど……………でもそれでも、彼女は越えてはいけない一線を越えてしまった」

「でも……………誰も味方がいないなんて!」

部下のフォローを忘れないインシグニアでさえ、アインに対してははつきりとした悪感情を抱いていることに、なのははまるで自分が傷ついているかのような表情を見せる。

インシグニアは小さくため息をつき、目に涙を貯めて俯いている心優しい少女を見つめた。

「……………これは本当は…君に話すべきかどうか迷ったんだけど、あの人を尊敬してる君に目を覚ましてもらうためには必要な事だと思う」

まだ何かあるのかと、なのはは不安げな表情で振り向き、恐る恐ると言った様子でインシグニアの顔を見上げる。

何故だか、それ以上聞いたら絶対に後悔するという予感がしたが、アインの過去について、なぜ彼女がああも疎まれるのかも知りたいなのは、覚悟を決めた眼差しをインシグニアに送った。

「…タカマチ・シロウ、知ってるよね？」

騎士がつぶやいた名前に、なのはは驚愕で大きく目を見開いたまま固まってしまふ。知らないはずはない、たった一人の父親なのだから。

だがインシグニアは違う。魔法の世界で暮らしているはずの彼女にと父の間に接点などあるはずはないし、そもそも出会うきっかけなどあるはずもない。

ドクンと、なのはの心臓が妙な脈動を響かせ、徐々に彼女の血の気が引いて顔色を悪くしていった。

「お、とう……さん」

「そう……君のお父さんは数年前、ある任務の最中に追った怪我で生死の境をさまよった。そしてその原因は……ある技術から生み出された魔法生物によるものだったんだ」

「え……」

士郎の大怪我の話は覚えている。姉からも、大きな力を持った悪人と戦った結果その傷を負い、生死の境をさまよったのだと言うことは聞かされた。

そして同時に、そこにアインが関わっていたと言う話を思い出し、急速に湧き上がる嫌な予感のせいで冷や汗が噴き出し始めていた。

「その名は試作品^{トリアール}。人間を素体に好き勝手弄り、驚異的な不死性と能力を有した最強の兵士を作り出そうという……狂気の実験体。君のお父さんは仕事に、そいつらと遭遇してしまっただ」

聞かされた話に、なのはは愕然とした様子でインシグニアを凝視し、カタカタと体を震わせる。

インシグニアの語る計画が恐ろしい内容だったこともあるが、そんな事件が地球で起きていたことにも強い恐怖感を感じていた。ジュエルシードが初めてだったのではない、もつと前からこの世界は危機に瀕していた事もあるのだと理解し、信じられない気持ちでいっぱいになっていた。

真つ青に染まる顔色が彼女の動揺を表している、インシグニアは彼女に同情を孕んだ目を向けながらも、全て真実であることを告げた。

「ど……どうして……地球にそんなのが……」

「管理外世界は、管理局の目の届きにくい場所だからね……次元犯罪者や狂った研究者にしては都合のいい遊び場なんだ」

「そんなことのために……お父さんは……」

「大人って勝手だからね……一部とはいえ、他人のことなんて一切構わない酷い人たちもいるんだ。……かくいう私も、そういう勝手な大人の都合でひどい目に遭った」

インシグニアの手がかつて自分のみに起きたことを思い出しているのか、ブルブルと震えながら握り締められている。

それ以上にショックを受けているなのは悲痛げな目を向けるが、インシグニアは心を鬼にして、少女に真実を告げるために続きを口にした。

「さっき言った試作品トライアルシリーズの実験体……身体を弄るっていうのは話したよね？」

なのはは衝撃のために硬直しながら、なんとか小さくうなずいて肯定する。

インシグニアはどこか憎悪を感じさせるくらい目を虚空に見せながら、かつてある騎士が大きく関わっていた事件の真相を口にし始めた。

「ただ肉体を弄っただけじゃ、最強の生物なんて生み出せない。……研究者たちは試作品トライアル

に、ある特殊な細胞を植え付けたんだ」

まだ話の全貌が見えないのは、それでも胸の内に広がる不安と恐怖にとらわれ、凍りついたように動けなくなっている。

聞いてはいけない、後悔する前に話を中断してもらえ、耳を塞いでその場から逃げろ、そんな声が自分の中から聞こえるが、体はまるで自分のものではないように言うことを聞いてくれなかった。

「それは、管理局に飼われているある騎士だけが持つ力……世界そのものを御せる、万物の頂点としてすべてを支配できる力……永遠に戦い続けられる不死の力」

なのはとインシグニアの脳裏に、全く同じ人物の後ろ姿が映る。

圧倒的とも言える剣の腕前と、無数の敵を前にしても決して引かない胆力を兼ね備えながら、それを誰にも認められていない、憎まれ続けている一人の騎士が。

かつて不死の怪物を退治し、結果的に一つの世界を救ったというが、そこに至るまでに余りに多くの犠牲を出し、称えられることもなく責められ続けている一人の女性の姿が、なのはの脳裏には映っていた。

「アイン・K・アルデブラント……彼女が持つ細胞をね」

なのはの中で、あらゆる情報が線で結ばれ、一つの答えへと導いていく。

父とともにいた事件の日、父や母が見せる騎士への躊躇い、彼女に向けられている兄

や姉たちの表情、アインが見せる遠い眼差し、なのはに対する過剰なほどの干渉、そして、局員たちが見せる憎悪の眼差し。

その全てが、なのはが最も知りたくなかった真実を表していた。

「わかるかい？ ……君のお父さんをあんな目に遭わせたのは——君の先生なんだよ」

インシグニアの優しくなだめる笑みが、なのはには悪魔の微笑みにしか思えない。自分を苦しめる嘘ばかりを撒き散らす敵にしか思えず、なのはは思わず視線を真下に落としていた。

構わず騎士は、哀れみのこもった眼差しを向けながらなのはに語り始めた。

「今から数年前のことだよ——」

7. 御神の剣士

『ハンター0から総員へ、ゲストが到着した。繰り返す、ゲストが到着した』

インカム越しに聞こえるリーダーの声が、男に任務が開始されたことを伝える。

黒いスーツに身を包み、同じく黒いサングラスで視線を隠した装いで、彼——高町士郎は己が心を引き締め直す。一瞬の気の緩みを取り返しのつかない事態を招くこともあった。

今ここに集まっているのは、日本という国を動かしているといっても過言ではない影響力を持つ、各界の著名人だった。彼らに何かあれば、まず間違いなく士郎や同業者達の首が物理的に飛ぶことになるだろう。

『各員配置につき、任務につけ。周囲の状況変化に注意し、非常事態発生時に備えよ』
『ハンター1、2、3了解』『ハンター4、5了解』『ハンター6、7了解』

ホールの各地に配置された同業者達が、別口で雇われた同業者達の様子にも気を配りながら応答していく。

それを聞きながら士郎が横目を向ければ、窓の外から見える玄関口に一台のリムジンが到着し、後方のドアから一人の初老の男性が姿を現すのが見えた。幾人もの黒服達に

囲まれながら、初老の男性は士郎のいるパーティーホールへと入っていった。

士郎の隣に立つ、もう一人のスーツとサングラスの男性とうなずき合い、準備が整ったことをインカム越しにリーダーに伝えた。

「ハンター8、9了解……」

腰に備えた得物、士郎の流派である小太刀二刀流に最適な二振りの劍の重みを実感しながら、士郎は懐から一枚の写真を取り出してじつと見つめる。

ゲストが到着するわずかな時間、彼はそれを見て改めて英気を養う。それは仕事前に勇気をもたらうために持ち歩いている、彼の家族全員が写った写真だった。

その口元に笑みが浮かんでいることに気づき、もう一人の黒服の男、士郎の同業者がわずかに表情をほころばせた。

「……家族ですか？ 仲がよさそうで羨ましいですね」

「ええ……こんな仕事ですから、みんな家内に預けっぱなしになってしまっていますが……命に代えても守りたいと思う存在ですよ」

笑顔でカメラの方を向いている妻、息子と娘二人。

それこそが彼が生きる理由であり、彼がこの世で強く生を願う楔であった。彼女達の存在があるからこそ、士郎は危険な仕事にも臆することなく向かい、必ず変えるという鋼の意志を持つことができるのだ。

大切な家族の声を思い出し、戦意をたぎらせた土郎は写真を元の場所にしまい込んだ。

「末の子が特に甘えん坊で……まあ、甘えてくれればくれるほど力になるんですけどね」
「ただの惚気じゃないですか」

「ハハハ……」

あくまで任務に支障をきたさない、暇つぶし程度の雑談に興じる二人。

すると、ホールにゲストが到着した連絡が入り、すぐさま土郎と同業者は背筋を直す。英気は十分蓄えられた。あとはパーティーが終わるまでの間、任務に没頭するだけだ。

「さ、そろそろ世間話は終わりにしなければ。切り替えましょう」

「ですな」

黒服達から少し距離を取ったゲストの男性が、知人らしき裕福な服装の男性に近づいて挨拶を交わすのが見える。一見親しげだが、会話の裏に隠れているのは黒い腹の探り合いである。

耳を傾ければあちこちから似たような会話が聞こえてくるため、土郎は意識的にそれらをより分け、不穏な音や会話が聞こえないかどうか集中する。精神的な負担もそうだが、意識をそちらに削がれるわけにはいかないからだ。

「……………」

異様と言えるほどの集中力で、会場の監視に全力を注いでいた士郎だったが、ふとホールの一角に違和感を覚えた。

意図的にゲスト達の会話をシャットアウトしていた士郎だったが、その一角からは全くそういった会話どころか、人の話し声さえ聞こえなかったのだ。

その一角にいたのは、たった一人のドレスを纏った金髪の女性だった。

(……………いつからいた？ あの女性は……………)

女性は群青色の体のラインが現れたマーメイドドレスを纏い、その豊満ながら均整の取れた体つきを惜しげも無く見せつけている。ポリウーームのある髪は後頭部でまとめられ、白く艶めかしいようなじを露わにしていた。

化粧はほとんど施されてはおらず、なのにハツとするほど白い肌や艶やかな唇が異風を放っている。切れ長の目を縁取るまつげは長く、そこから除く瞳は真紅に輝いてホール内に鋭く向けられている。

誰もが目を奪われそうな美貌を隠すことなく、堂々とその場に佇んでいるというのに、誰も彼女に意識を向ける様子がなかった。

(……………あの女性、一見少し背が高いだけの令嬢に見えるが…あの佇まい。なんらかの武術を心得ているのか……………?)

非常に高い戦士としての才を持つ士郎でさえ見逃しかけたほど、女性は見事に気配を絶っていた。肌のほとんどを覆っているが、体格がよくわかる装いのために、女性の体つきが同じホール内にいる令嬢達とは明らかに異なることに気づく。

しなやかなカモシカのような脚といい、組まれた腕の筋肉の盛り上がりといい、おそらくは女性の大半が羨むであろうくびれ具合といい、相当な訓練を積んでいることがうかがえる。

何よりも彼女の見せている鋭い目つきが、常人では決して得ることの叶わない殺伐とした鋭さを見せていた。

(…私と同じ目だな)

いつだったか、任務終了後に鏡で自分の目を見返したときのような、抜き身の刃を目の前にしたような感覚が蘇る。

彼女の目がこちらに向いていれば、おそらく自分は無意識のうちに得物に手をかけていたかもしれない、そんな殺伐とした気配が、達人である士郎には透けて見えていた。

(…警戒すべきか)

もし彼女が襲撃者だったら、そんなことを考えるが、会場に堂々と姿を晒しなおかつ目立つ容姿を見せるだろうかと考え直す。

少なくとも要注意人物として記憶しておこうと、士郎は謎の令嬢に気取られないよう

に細心の注意を払ったまま、彼女をじっと観察した。

が、その注意が不意に途切れてしまった。

『……ハンター4から全員へ』

「！」

『現在、別館廊下にて不審な人物を発見した。危険なものを所持していないか確認する。そちらにも同様の人物がいないか、注意されたし』

別の場所を、特に会場である本館と別館の間の通路を監視していた同業者からの報告に、士郎はわずかに注意をそらしていた。

令嬢の気配を掴んだまま、忠告されたように他に不審人物がいないかを探り当てる。

「ハンター9、了解した」

しかしインカムを操作し、短く返答した士郎が視線を戻した時には、令嬢の姿はもうどこにも見えなくなっていた。盲点に入ってしまったように唐突に、士郎に対して気配だけをつかませたまま、煙のように消え失せてしまっていた。

(……見失った、いや、してやられたか)

士郎は苦い表情で、令嬢の姿があつた場所をサングラスの奥から睨みつける。あの令嬢は気配を隠していただけではない、士郎のような手練れのために敢えて僅かに気配を残し、なんらかのきっかけを待ってその場を離れたのだ。

蜥蜴が自分の尻尾を切り落とし、自切した尻尾の方に注意を向けさせている間に逃走するやり方と同じだ。

自分の実力を過信したと、土郎が思わず令嬢の姿を探しかけた時だった。

『ハンター1！ ハンター1！ ハンター4！ ゲストを連れて会場を離脱せよ！ こちらは何者かに襲撃を受けている!!?』

パンパンと乾いた破裂音や地響きが鳴り響き始めたのちに、インカムから同業者達の切羽詰まった声が聞こえてくる。

会場内のゲスト達にもその音は聞こえているようで、ざわざわとどよめきが上がると次第に悲鳴が響き渡ってくる。自分たちが危険に晒されていることに気づいてしまつたらしい。

狂騒パニックが起こり始める直前に走り出した土郎は、自分が依頼を受けたゲストの方へ向かいながらインカムからの音声に集中した。襲撃者の情報、あるいはそれに関連する音を得るためだ。

『なんなのこいつら…!!? 人間の動きじゃない……きやああ!!?』

『ハンター3がやられた！ ハンター3がやられた!!?』

『気をつけろ！ 敵はまともな相手じゃない！ 速やかにゲストを現場から退避させよ!!?』

しかし、聞こえてくる音声はまともなものではなかった。突然の襲撃に同業者達も冷静さを失っているらしく、そこから正確な状況を把握することはできなかった。

士郎は眉間にしわを寄せ、同じ位置にいた同業者とともにゲストの元へ駆け寄ると、緊急時の避難ルートへと案内した。

「(ちらへ……)」

「うっ……うむ」

ゲストの男性は多少戸惑ってはいるものの、他のゲストよりは幾分肝が座っているらしくかなり冷静な様子だった。

他のゲスト達にもSPからの誘導が行われているのを確認し、素人同業者は急ぎ足でホールの出口をくぐっていった。

パーティーの入り口はもう使えない。これがゲスト達を狙つての騒ぎであれば、どこから狙われている可能性もあるからだ。故に士郎達は、有事の際はホールに作られた緊急用の通路を使用することを予め決めていた。

設備がむき出しになっている特別な通路を走っていた士郎達であったが、不意にその足がピタリと止まった。

外へとつながる通路の先に、異様なシルエットの存在が待ち受けていたからだ。

「な……んだ、アレは」

同業者のつぶやきが通路の中で妙に反響する。士郎もまた、己の得物に手をかけながら、目の前に現れた異形の姿に目を見張っていた。

それはまるで、小説や特撮作品にでも登場しそうな異様な風体をした存在だった。

赤と黒に彩られた体は機械と生物が融合したような奇妙な質感を見せ、全身に張り巡らされたコードの束が異様さを醸し出している。恐ろしいな形相の髑髏の仮面を貼り付けたそれは、紫に輝く瞳を士郎に、性格には己の前にある存在すべてに向けていた。「……………なるほど、確かにこいつはまともな人間ではなさそうだ」

士郎がつぶやくと同時に、異形はその巨体に似合わぬ敏捷な動きで襲いかかってくる。

咄嗟に士郎が小太刀で受け止め、その隙に同業者がゲストを連れて脇に退く。鋼鉄の腕が振り下ろされ、激しい火花を散らしながら士郎をその場に押さえつけた。

「????」
「??」
「……!」

巨大な岩石に押し潰されているような重力を受け、士郎は思わず苦悶の声を漏らしながら眉間にしわを寄せる。どうにか小太刀で受け流し、重力から逃れたものの、異形はその目に激しい殺意を宿しながらなおも襲いかかってきた。

異形が腕を振り回し、士郎の構える小太刀に狂ったようにぶつけてくる。ただ力任せ

な攻撃だったけど、その威力は脅威であった。

「これは……少しまずいな」

衝撃を受け流し流しているうちにビリビリと痺れ始めた両腕の感覚に、士郎が思わず苦笑を浮かべる。

幸いなことに異形の標的は士郎に絞られているらしく、同業者に連れ出されて行くゲストの方には見向きもしていない。

しかし、警護対象が離れても士郎の不利は変わらなかった。

「!!?」

異形は奇妙な咆哮を放ちながら、先ほどよりも早く鋭く両腕を振り回す。

それを紙一重で躲し、異形に向けて小太刀を一閃する士郎だが、神速の如き刃の煌めきは異形の表皮をわずかに削るだけであった。

不意に異形が少ししやがみこみ、下から士郎に向けて拳を振り上げる。小太刀を交差させて防御した士郎は、そのまま後方に弾き飛ばされてしまった。

「ぐっ ぽっ」

難なく着地する士郎だが、そのこめかみには一筋の冷や汗が伝っている。刃が立たない相手をどう攻略すべきか、油断なく相手を睨みつけながら士郎が考える。

その時だった、士郎の背後から、甲高い靴音が響いてきたのは。

異形の注意も一瞬そちらに向き、ぐるぐると威嚇するような唸り声が響き渡った。

「!? あれは…」

背後を振り返った士郎は、ゆっくりと歩み寄ってくる人影に見覚えがあることに気づく。

通路の暗さが隠しているものの、わずかな光源を受けて輝いている金の髪や赤い瞳は忘れるはずもない。士郎がホールにて一度見失った、あの美女である。

なぜ彼女がここにいるのか、それを士郎が問いただすよりも前に、女性は背後から取り出した何かの機械を腰に巻きつけた。

「変身…!」

【TURN UP】

女性が機械についたレバーを引いた瞬間、ベルトとなったそれから勢いよく青い半透明のスクリーンが出現し、士郎の前で唸っていた異形を弾き飛ばした。

呆然となる士郎の横を女性を通り過ぎたかと思えば、飛び出したスクリーンが女性の体に張り付き、一着の鎧を形成するのが見えた。

【THUNDER, SLASH. LIGHTNING SLASH】

「ウエエエエエエエエ!!」

スピードを模した銀の鎧を纏った女性は、腰にさげた剣を抜くと、刀身に凄まじい雷

撃を纏わせて斬りかかる。

激しい電流が異形の体に走り、異形は全身から煙を吹き上げながらたたらを踏んで後ずさって行く。両の目に先ほど以上の殺意が灯るが、受けた電流の残滓に苦しんでいるのか、立ち上がることもできないようだった。

「まさか……こんな辺境の次元世界にまで手を伸ばしていたとはな。見つからんわけだ」
劍の切つ先を異形に向けながら、女騎士は冷たい眼差しで敵を射抜く。

士郎は女騎士を訝しげに凝視したまま、彼女が放つ凄まじい覇気に小さく息を呑む。幾度も死線をくぐり抜けた彼でさえ、女騎士ほどの殺気の持ち主を目の当たりにするのは稀であった。

「……あなたは一体、何者だ……？」

呆然とつぶやく士郎に対し、女騎士——アインはジロリと横目を向ける。

小太刀を持ったままの彼にも、なんの感慨も浮かばないような無表情を向け、気だるげに口を開いた。

「——ただの狗だ」

名乗ることも騙ることもせず、どこか投げやりな様子のアインは、視線が外れている間に逃げようと動いていた異形の首元に劍を突きつけ、逃走を妨害する。

視線を異形の方に戻すと、アインは士郎に背を向ける。彼に聞こえないように小さく

抑えたため息をつく、面倒臭そうに口を開いた。

「…迷惑をかけるな。コレはもともと私の獲物なんだ…だがまさか、こつちの連中の前で堂々と魔法生物をけしかけてくるとは思わなかった」

異形に対する苛立ちをあらわにしたような、低く平坦な声で語るアインは、そのまま異形の巨体を蹴り上げる。

サッカーボールのように高々と蹴り上げられた異形は天井にぶつかり、瓦礫にまみれながら再び地面に叩きつけられた。

もう反抗する気力もないように、呻き声を漏らす異形を見下ろしながら、士郎はもう一度アインに問いかけた。

「あなたもどこかの組織に所属しているので…?」

「語る必要はない…語る暇もない」

剣を肩に担ぎ、アインは士郎と目を合わせないまま乱暴に答える。

崩れた瓦礫を踏みつけ、苛立ちをぶつけるように蹴り飛ばすその様はチンピラのように、先程のような流麗な剣技からは想像もできなかった。

「私も…いつと同じ、余所者には変わりない。私はどこぞの科学者が生み出した奴らを殲滅するように言われただけ。終わればすぐに関わりをなくす…聞くだけ無駄だ」

常人ならば無愛想で粗野な印象を受けるが、士郎にしてみればコレは彼女なりの距離

の取り方に思えた。

遠ざけようという意思は感じられても、邪険にするような態度ではない。士郎をなるべく自分に関わらせないという考えが透けて見えた。

アインをじつと観察していた士郎だったが、ふと背後に気配を感じてハッと振り返る。

気づけばいつの間にか、さつき通ってきた通路の方にも先ほどのものと似たような異形が現れ、士郎とアインに鋭い殺気をぶつけてきていた。

それも一体だけではない、四体もだ。

士郎が体勢を変え、背後の異形たちに向けて構えた時、ヒュンツと剣を振りかざしたアインがその肩を掴んで引き止めた。

「私が奴らを引き付ける。その間に貴方達はクライアントを保護して脱出してほしい」「しかしそれではあなたが…」

「もともとあれらは私の獲物だといったはずだ……これ以上貴方達に迷惑をかけたくない。行ってくれ」

言うが早いのか、アインは剣に纏わせた雷撃を振りかぶり、異形たちに向けて解き放つた。

自然界のものとなんら変わりのない強烈な閃光と轟音、そして電流が異形たちに襲い

かかり、ガクガクとその体を震わせる。

しかし少しすると彼らの痙攣は波紋のように穏やかに止まり、思い出したかのように鋭く尖った腕を振り上げて襲いかかってきた。

「ウエエエエエイ!!？」

アインは鋭い咆哮とともに剣を構え、向かってくる異形たちを斬り伏せていく。急所を正確に切り裂かれ、異形たちは悲鳴をあげてバタバタと崩れ落ちていく。

しかし刃が異形の体に食らいつくたびに、夥しい量の毒々しい色の体液が噴き出す。しばらくすると端から傷口が塞がって体液も消えていく。

ただ頑丈なのではない、文字通りの不死の力によって、異形たちは決して倒れることがなかった。

「チツ……！」

思わず舌打ちしたアインの背後から、紫色の配色の異形が襲いかかった。音もなく至近距離にまで接近していた異形にアインは反応できず、あわや異形の爪が眼球に突き刺さる寸前にまで至った。

それが叶わなかったのは、真横からぶつかってきた斬撃の風によって、異形の体が軽々と吹き飛ばされたからだ。

間一髪で救われたアインだったが、それをなした相手に向ける視線は冷たく呆れた様

子のものであった。

「……行けと言ったはずだぞ」

「ここから最も近い出口は、あいにくこの先でしてね。それに、ゲストを全員無事に連れ出すのが私の仕事ですから」

爽やかな笑みを浮かべてそう告げる士郎に、アインは深いため息をついて視線をそらす。

ゲストもなにも、あの異形たちを追うために紛れ込んだだけで、守られるような立場ではなかったはずである。はつきり言つて厄介ごとに巻き込んでしまったのに、それに文句を言うことなく手助けしようと思つて持っている彼のお人好し加減に、呆れるばかりだった。

「……好きにしろ。命の保証はしない」

「……仕方ない人だ」

そつぽを向きながらアインが告げると、士郎は苦笑しながら小太刀を構える。

先ほど吹き飛ばした異形はすでに傷口を再生させ、忌々しげに唸り声をあげながら威嚇してきている。他の異形たちも、新たな脅威が現れたのだと判断してか、身に纏う殺気を強めていた。

「———」

改めて敵の姿を司会に捉えたアインと土郎は、示し合わせたように同時に動いた。

アインの剛剣が異形たちを押しとどめ、力づくではじきかえす。激しい火花を散らせながら激突する両者だが、数に差があるにも関わらずアインがはるかに押しつけて見せていた。

異形たちの中には、知恵を回してアインの剣を躲し背後を取ろうとする個体もあったが、すかさずその異形の背には目にも留まらぬ斬撃が食らいついていた。

神速と呼ばれる、土郎の流派に伝わる奥義の一つが、異形の硬い表皮にも届き、決して浅くない傷を刻みつけていた。

アインが防ぎ、土郎が攻める。互いについて何も知らない彼らだったが、互いの力量を測り、隣に立って戦っている今は、互いの邪魔をしない戦法を取っていた。

「THUNDER, KICK. LIGHTNING BLAST」
「ウエエエエエエエ!!」

異形たちが引いた隙に、アインが剣の刀身に数枚のカードを差し、スライドさせる。発動した力がティアラ型の角に収束し、刃を突き立てると右足に集まっていく。

その場で高く跳躍したアインは、異形たちに向けて青白い稲妻を帯びた飛び蹴りを食わせた。

「!!?」

異形の一体は断末魔の悲鳴をあげ、雷電に焼かれながらその体を崩れさせていく。

異形の体を大にもう一度跳躍したアインが降り立った瞬間、異形はズルズルと出来損ないのスライムのように体を崩壊させ、跡形もなく消え去ってしまった。

残された異形は、アインに対して慄くような態度を見せると、やがて通路の天井を突き破って逃走を開始した。

「待てー！」

すぐさまアインが後を追い、天井にできた穴をくぐって異形たちの後を追いかけていく。

士郎はアインを一人にすることに罪悪感を覚えたが、不意に襲ってきた疲労感にその場で膝をついてしまった。強がってはいたものの、これ以上人外の怪物を相手にするほどの余裕はなかった。

しばらく背を丸め、荒い呼吸を繰り返していた士郎は、やがて通路の先から駆け寄ってくる同業者たちに気がついた。

「……！ お、終わっていたのか？」

「あいつらを一人で……！ さすがは御神の剣士だな！」

「あ、いや私は……」

異形の姿がないことで、士郎が一人で片をつけたのだと解釈したらしく、同業者他と

は口々に士郎を称賛する声をあげる。

困った顔で眉を寄せた士郎は一人、天井に空いた穴を見上げてため息をつくばかりであった。

「……名前も聞きそびれてしまったな」

少し残念そうに眉尻を下げた士郎は、同業者に肩を借りて立ち上がり、よろよろと施設の外へ向かう。

任務はクライアントの無事を確保すること、まだまだ終わりではないのだと、士郎は軽く首を振って気持ちを切り替え、凜とした顔で顔をあげるのだった。

士郎たちが姿を消してから数秒後、天井の穴からアインが降り立ち、士郎が去った方を見やっつてため息をついた。

「……侮っていたな。魔力を持たない非魔導師が、これほどの戦闘能力を有しているとは……」

興味がない風に装っていたが、アインも士郎の戦闘能力の高さに息を飲んでいた。

逃げた異形たちが見つからなかったため割と早く戻ってきたが、士郎の元に駆け寄ってきた同業者たちを見て、思わず隠れてしまった。もしあいつらが士郎と同等以上の力量を有していたならば、少し厄介な事態になっていたかもしれない。

「……………」

腰に手を当てて佇んでいたアインは、ふと足元に見覚えのあるものが転がっていることに気づいた。

拾い上げてみれば、やや焦げ付いているそれは確か、倒した異形が腰に巻いていたものと同じに見える。

奴が落としたのか、と考えたが、そこでわずかに違和感を覚えた。

「ベルトだけ…?」

異形はアインの一撃を食らったあの後、崩れ落ちて消えてなくなってしまったように見えた。無論、機械の部分も生物の部分も分け隔てなく。

なのにベルトだけが残っていることが、不可解に思えてならなかったのである。

「……………チツ」

首を傾げて立ち尽くすアインに向けて、どこからか舌打ちが聞こえてきたが、本当に些細なものだったそれは、アインの耳に届くことはなかった。

8. 望まれぬ者

「——予定通り、後の捜査は我々は引き継ぐ。貴様はその街で待機し、我々の指示があるまで大人しくしている」

通信専用のデバイスから、吐き捨てるような乱暴な指令が下される。口を聞くことすら煩わしく思っているような、そんな口調だった。

いつものことだとは理解していたが、アインは通信相手にもう少し隠す努力を見せる気はないのかと思う。

「……逃げだそうなどと夢にも思わぬことだ」

「了解……」

恐らくは、デバイスの向こう側で激しい憎悪の表情を浮かべているであろう、現在の上司に刺された釘に内心苦笑しながら、アインは淡々と了承する。

ブツツと音を立ててデバイス通信が切れると、アインは腰掛けていたベンチに背中を預けて息を吐く。

「臆病者どもが……逃げやせんとやっているだろうに」

指令が下されるたびに毎度のように告げられる最後の言葉に、アインは流石にうんざり

りした様子になる。毎回言われなくともわかつていると言いたいが、向こうからすれば全く信用に値しないだろう。

億劫そうに立ち上がると、アインは次の指示が入るまでの時間つぶしとして街を散策することにする。

その途中、商店街の一角にひっそりと佇んでいる、一軒の喫茶店を偶然にも散策を開始して最初の店に見つけた。

「…たまにはいいか、こんな小洒落た店に赴いても」

派手すぎず、さりとして地味などではなく、どこか上品な趣を感じさせる佇まい。

見たところ客足はまだまだ遠いようだが、あまり賑わっている騒がしい店に行くのも気に入らないために、アインの足は自然とその店に向かっていた。

「あ……いらつしやいませー」

店のドアに付けられたベルが、カランコロンと心地の良い音を奏でると、テーブルの掃除をしていた一人の女性が満面の笑みを浮かべて振り向いた。

長い茶髪に温和な顔立ちをしたかなりの美人で、人気のない店にやってきたアインを柔らかな笑みで迎え入れた。

外から見たとおり、開店してそう経っていないのか客足はまだまだ遠のいているように感じられる。もつと繁盛していてもおかしくなさそうなのにと、ガランとした店内を

案内されるアインはぼんやりと勿体無さを感じていた。

「…おや？」

「…ん？」

その視線が、別のテーブル席を磨いていたもう一人の従業員とぶつかる。

その従業員の顔が見覚えのある、というか先日顔を合わせたばかりの男性のものであることに気づき、アインは珍しく目を見開いて驚きをあらわにしていた。

「お前は……確かタカマチ・シロウといったか？　なぜこんなところにいる」

「あなたこそ……まさか我が家でお会いすることになるうとは」

「我が家……？」

「まあ込み入った話は座ってからにしましょう。どうぞ、こちらへ」

士郎に促されるまま、アインは空席ばかりのカウンターに腰を下ろす。士郎がカウンターの向こう側で淹れるコーヒーを待ち、アインはじつとその顔を見つめた。

二人はそれ以降口を開かず、奇妙な沈黙が漂っていた。

「……問い詰めたりはしないんだな。自分で言うのもなんだが、私はかなり怪しいと思うぞ」

「恩人に対して、そんな無礼は働けませんよ」

「…恩人？」

昨日暴れたことを問われると思つていたアインは、何も聞かず黙々とコーヒーを砕く士郎に不思議そうな目を向ける。身分も目的も告げず、ただ剣を振り回しろくに会話も交わしていない相手が訪れてきたのだから、疑うことぐらいはしてくると思つていた。しかし返つてきたのは、自分には適当には思えない好評価。アインの表情が訝しげに歪むのも仕方がなかった。

「私は任務を果たしただけだ。……別に貴方を助けたわけではない」

「それでも、私が危ないところであつたことには変わりありませんよ。……ずいぶん遅れましたが、深く感謝しています」

表情の裏に隠した悪意なども微塵も感じさせない、御人好しそうな笑顔で礼を言われ、アインは居心地悪そうに視線を外す。

最近は感謝の言葉どころか、まともな人間扱いされされた覚えがなかったために、不意打ちに近い士郎の反応に戸惑つてしまつていた。

しばらくニコニコと笑顔を浮かべていた士郎は、やがてうつかりしていたと言うように手を止め、レジと厨房の方にいた女性と青年を呼び寄せた。

「ああ、ご紹介が遅れました。妻と長男です」

「はじめまして。主人の……友人？」

「よ、よろしく願います」

「……………そ、そうか」

いきなり家族の紹介を受け、アインは困惑気味に返す。

士郎としては自分の恩人を家族にも紹介し、自分がどれだけ感謝しているのかを知ってもらいたかったのだろう。

しかし人との会話自体が久しぶりなアインは、親しげに話しかけてくる人物の相手も初めてで、まともな反応も返せずにはいた。

「家族で、経営しているのか。この店は…」

「ええ。……………といっても、まだまだ軌道には乗れていないのですけどね」

苦笑しながらも、士郎は誇らしげに妻・桃子と長男・恭也の肩を抱いて笑っている。

危険な任務に臆することなく挑んでいた男が、暖かそうな家庭を築いている事実を知り、アインは無意識のうちに、士郎に羨ましがって妬ましがちな視線を送ってしまった。

その時、店のベルが再び鳴り、二つの人影が入店した。

「ただいまー…つて、あ…お客さん!?!?」

「ただいまあ……………あつ」

現れた二人の少女のうち、幼い声の主は店の中を覗き込み、カウンター席に見慣れない女性が座っていることに驚きの表情を浮かべる。

まだ客と顔を合わせたことが少なかったのだろう、その表情には強い緊張が表れてい

た。

「長女的美由紀と末の娘のなのはです。二人とも、ご挨拶しなさい」

「は、初めまして！ いらっしやいませ！」

「う、うん！」

士郎に促され、なのはと呼ばれた5、6歳の少女はトテトテと急ぎ足でカウンターの方へ近づいてくる。

体を強張らせながら、隣を歩く美由紀に寄り添われてなのはは背筋をピンと伸ばし、アインにペこりと頭を下げた。

「たかまち……なのは、です。は、はじめまして！」

年上の、思わずハツとするほどの綺麗な女性と話す緊張からか、なのはは頬を赤く染めて見つめてくる。

あどけない少女の精一杯の挨拶に、アインは微笑ましきを感じながら小さく息をつく。同時に、先ほど湧き上がった羨望がひとまわり膨らむのを感じた。

「……ああ、よろしくな。なのは」

そんな昏い感情をどうにか隠し、アインは優しい微笑みを見せるのだった。

◆? ◆? ◆? ◆?

それからの数日、アインは本部からの指令が下るまでの時間を翠屋で過ごしていた。

妙に親身に接してくる高町夫婦に困惑、と言うかどうかどう対応すべきか混乱しながらも、その店に入り浸っていたのは単純な理由から。

士郎の淹れるコーヒーと桃子のケーキの味が、悔しいほどにアインの好みと合っていたからであった。

「いつもご鼻屑にしていたでいて、ありがとうございます。アルデブランドさん」

「……なに、単なる暇つぶしだ」

毎日律儀に同じ時間に訪ねてきて、同じメニューを選んで口にする初めての常連客に、桃子は嬉しそうに微笑を見せる。

女神のように試合に満ちた微笑みを向けられ、人の温もりから長く離れていたアインは気まずげに目をそらしていた。だがそれは桃子には照れ隠しに見えたのか、やたらと微笑ましげに見つめられる羽目になっていた。

(……………どうにもやりづらいな、この一家は)

桃子の用意したコーヒーを口にし、アインはその味わいに浸ることで居心地の悪さを少しでも和らげようとした。

ちらりと周りに目を向ければ、以前は見なかった客がそれぞれテーブル席で談笑している姿が見える。やや煩わしくは感じるが、自分が気に入った場所が繁盛し始めているならまあいいかと、気にしないことにした。

アインは気づいていないが、最近の翠屋の繁盛は彼女が深く関わっている。というのも、店の中でくつろいでいる長身でグラマーな美女の美貌は男女問わず注目を集め、いつの間にか花に寄せられる虫のように誘惑してしまっていたのだ。

静かに過ごせる場所としてこの店を選んだというのに、自分の存在が騒がしさを生み出した原因になっているとは夢にも思っていなかった。

「ど、どうぞ……」

無言でコーヒーを喉に流し込むアインの前に、幼い手がケーキの乗った皿を運んできた。

小さな体で危なっかしく皿を置こうとする幼女から、アインは微笑を浮かべながら皿を受け取った。

「Ah, Thanks. ……じゃなかった、ありがとう」

一瞬だけ出てしまった異国の言葉に、なのははわずかにオロオロと狼狽した様子を見たが、アインが言い直すとホッとした様子で胸をなでおろす。

アインが受け取ったケーキをカウンターテーブルの上に置いてみると、傍らから注がれる興味津々といった視線に気づいた。

「………何か？」

「あの、えと、あ、アインさんは、その……どこから来たんですか？」

「ミッドチルダ……といつてもわからないか。とにかく遠い国だ」

異世界から怪物を殺しに来た、などとは口が裂けても言えないアインは、幼子のイメーヂを崩さないために言葉を選びながら説明する。

なにはは外国人と面と向かって会話すること自体が興味深いらしく、それだけでキラキラと瞳を輝かせていた。

「わ、わたし……外国の人とお話するの初めてで、お話しできたらいいな……あの、ごめんなさい。勝手なこと言つて」

「……別に構わないさ。何を聞きたい？」

その程度のことなら別に構うまいと、アインはなのはの遠慮がちな態度に苦笑しながら迎え入れる。

パアツと表情を明るくしたなのは何かを言いかけるが、すぐに迷うような素振りを見せ始めた。アインは少し考え、すぐにその理由に思い至った。

「おつとそうだな……。呼びづらいようなら、他に呼び方を変えてもいいんだぞ？　そこまで緊張されると、私がいじめているようだ」

「あ……はい！　えつと、じゃあ……」

思つていたことをピタリと当てられたことに驚きつつも、なのはは頬を赤くして目をそらし、またモジモジとためらう様子を見せる。

アインがしばらく言葉が再開されるのを待っていると、ようやくなのは意を決したように顔を上げた。

「アインお姉ちゃん……は、ダメでしょうか……？」

自分より一回り以上も年上の女性を、それも会ってそう時間の立っていない相手をそう呼ぶのがためらわれたのだろう。

しかし、同性であつても憧れを抱くほど綺麗な女性に対して、なのはが口にできる最大限の歩み寄りが、そんな親しみを込めた呼び方だったのだ。

「なら、そう呼んでくれ」

少女がなけなしの勇気を振り絞って掲げた願いを、女騎士が断る理由などなかった。

そして返ってきた満面の笑顔に、アインは少しだけ、ささくれだった自分の心が癒されるのを感じたのだった。

しかし、幸福を感じていた時間はそう長くはなかった。

誰かと言葉を交わして同じ時間を過ごし、高町家の面々と親しくなっていくうちに、アインの胸中には言いようのない不安と苦しみが募り始めていた。

——ここはまるで底なしの毒沼だ。

士郎も桃子も、赤の他人とは思えないほどにアインに歩み寄ろうとしてくる。その娘

のなのほも、緊張しながらも少しずつ、しかし確かに懐き始めている。

久しく感じていなかっただぬくもりにくすぐったい気持ちになりながら、不意に襲ってくる冷たい思考に我に返ってしまう。心地好い夢の中にいることを、他ならぬアインの記憶が許してはくれなかった。

（人との関わりを全て絶つて、命令されるままに戦い続けて、一人で生きて行くはずだったのに……いつの間にかあの家族のいるところが、心地よく感じてしまっている）

始めはお客だからと遠慮していた恭也や美由紀とも話すようになっていたが、親しい人ができるたびにアインはそれを失った時の絶望を考えてしまう。

自分の決断で選んだ生き方とはいえ、今の自分のままであればそう遠くないうちにこのつながりを失いことになるだろうと、漠然とした予感があった。

（もういいはいけないはずなのに……関わつてはいけないはずなのに、私はまだあの人たちにこだわり続けている）

アインの中の何者かが警告する。

今のうちにその温もりを手放せ。そうしなければこの先、より深く辛い悲しみや苦しみが続いているぞ、と。

その言葉が的を射ている事は、かつて同じ経験を繰り返してきたアイン自身がよくわかっていった。

「……………流石にもう、許されないよな」

今日は士郎ではなく、桃子が入れてくれたコーヒを口に含み、アインはカウンター席の椅子の背もたれに体を預けると、誰にもなく呟いた。

女々しい自分が名残惜しさを訴えかけてくるが、自分に厳しい決断をしなければ後悔するのは自分だと無理やり黙らせる。

「ここにくるのはおそらく……………これが最後だ」

「えっ!? ……ああ、お仕事の都合でしたものね。寂しくなります」

コーヒを潰していた桃子に唐突に告げると、高町家の母は驚いた様子を見せるも、やがて少し名残惜しそうに苦笑を浮かべてた。

士郎がどう説明したかは知らないが、アインは一介の客にそこまでの親しみを抱いてもらえていたことに、またしても心の温もりを感じてしまい、慌てて目をそらした。

「世話になったな、モモコ」

「こちらこそ、なのはの話し相手になっていただいたて……………また、来てくださいね」

隣のカウンター席に置いておいた上着を羽織りながら、アインは早々に会計をすませたしまおうと早足でレジに向かう。

人から見ればせつかちで無愛想な態度だが、ただ彼女が不器用なことを知っている桃子はニコニコと笑うだけだった。

「士郎は……どうした？」

「……今日も『お仕事』みたいですよ。私としてはもう違う仕事に移ってもらいたいですけど……そうもいきませんからね」

「そうか……武運を祈っておく」

最後に顔ぐらい見せておきたかった、などと自分でも情けないことを考えてしまったアインは、すぐさま首を振ってその雑念を振り払った。

桃子に見送られ、自分でも気づかないほどに小さな笑みを浮かべたアインは、わずかな幸福を感じたまま翠屋を後にする。

しばらくすると、商店街を歩き続けていたアインのデバイスに、一本の通信が入った。

「はい、こちらアルデブラント」

「こちら司令部！ 例の組織の拠点が判明した！ デバイスに位置情報を送る、即座に急行せよ!!？」

「……了解」

さつきまでの浮ついた気分が水を刺されたように、アインの中の熱がみるみる覚めて行くのを感じた。

店の中で通信を入れなかったことだけを内心で褒めてやりながら、アインは冷え切った赤い瞳で虚空を睨みつけた。

「……ちよūdい機会だ」

今、ここより先に必要なのは、人の温もりに植えた情けない女ではない。

あらゆる命への贖罪に全てを捧げた、組織に飼われた犬だ。

◆? ◆? ◆? ◆?

けたたましい警報音が鳴り響く、とある地下に建設された施設の中。

地中深くまで蜘蛛の巣のように張り巡らされたその場所は、今まさに地獄と化してい

た

!!?!

!!?!

口を中心にはべつとりと赤いシミをこびりつかせた異形、人の形をしながらまるで異なる外見を持つ生物兵器たちが、奇妙な方向をあげて武装局員たちに襲いかかる。

ストレージデバイスを手には健闘する局員たちだが、放たれた魔法も異形たちの外皮に阻まれてしまい、あるいは貫いても凄まじい勢いで再生され、討伐は困難を極めていた。

「……(い)ら……!!」

数では圧倒していたのに、徐々に押され異形の魔の手にかかったことで、仲間たちは次々に倒れていった。

あわや全滅かと思われたその時、局員たちの背後で強烈な閃光が走った。かと思えば

次の瞬間には、まるで龍のようになうつ雷の奔流が局員たちの頭上を飛び越え、異形に食らいついて破裂した。

「!!？」

異形たちは凄まじい断末魔の悲鳴をあげ、バリバリと弾ける雷撃の中に飲み込まれてく。

眩しさに顔を腕で覆っていた局員たちが、閃光が収まったのを感じて目を開ければ、そこには黒焦げの何もない空間が広がっていた。

「…再生能力は大したものだが、流石に消滅させられれば死ぬようだな」

呆然と立ち尽くしていた局員たちは、背後から聞こえてきた声にハッと我に返り、ついで嫌悪に表情を歪ませた。

ばちばちと帯電する剣を担いだアインは、そんな局員たちの視線を気にした様子も見せず、悠々とした態度で焦げ付いた通路に近づいていく。以前のような、ベルトだけが残っているようなことはなかった。

「まあ、所詮はまがい物というわけか……なにをしている？ さつさと突入したまえ」

あきれた様子でアインが視線を向けると、局員たちはそれぞれ舌打ちをしたり、目を背けたりと様々な反応を見せながらアインの隣を通り過ぎていく。

先へ進んでいく局員たちの背中を眺め、アインは小さなため息をつき、その後を追っ

て歩き出した。

どかっとな音を立てて、施設の外の木の幹に一人の初老の男性が押し倒される。

白衣を纏ったやや不健康そうなその男性は、自身を取り囲む何人もの局員たちを忌々しげに睨みつけ、ギリギリと歯を食いしばっていた。

「手間をかけさせてくれたな……こんな辺境の次元世界に目をつけるとは、発想だけは褒めてやってもいいかもしれんな」

局員らの一人、上の階級を示す徽章をつけた、この部隊の隊長である男性に見下ろされ、研究者はちつと舌打ちして目をそらす。

周囲に目をやれば、彼の部下らしき白衣の男たちが取り押さえられ、バンドで拘束されて何処かへ連れ出されているのが見えた。

「よもやトライアルシリーズのデータが持ち出されているとは思わなかった。……管理局の研究者ともあるうものが、墮ちたものだな。ヤヌス・ビュート」

「……お前たちのアレの管理は、恐れる割りには杜撰で楽だったよ。感謝するがいい。私のおかげで、アレの管理がより重くなるのだからな」

「減らず口を……」

研究者の男、ヤヌスが漏らした皮肉に、隊長は顔を赤くして鬼のような形相を見せる。

ヤヌスの言った言葉に間違いはない。彼は管理局の研究施設の重役の地位を利用し、秘匿されていたある細胞のデータとサンプルを盗み出して姿をくらませたのだ。

ロストログアに相当するそのデータのセキュリティは万全と思われるが、研究者にとつては拙いものでしかなかったようだ。

「チツ……」

怒りで拳を震わせていた隊長は、近くに控えていたアインを見つけると、その横顔に無言で拳を振るった。

アインはなんの抵抗もせずにそれを受け、少しだけ後ずさるも倒れることなく直立を維持する。理不尽な八つ当たりにも、アインは微塵も表情を変えないことはなかった。

「いつまでそこに突っ立っている……！ 貴様の仕事はこれで終わりだ。さっさと檻に帰って大人しくしている」

「……了解」

隊長の行為を咎める者は、この場には誰一人としていなかった。

むしろその行動を讃えるように、ニヤニヤと小気味良さそうに笑みを浮かべたり、グツと拳を上げる動作をしている者さえいた。

抵抗も抗議も、何もできない女騎士を殴りつけたことで少しだけ溜飲が下がったのか、隊長は眉間のしわを浅くして部下に視線を移した。

「連行しろ！ 残りのものは研究所のデータを全て回収、その後この場所は処分する！」
隊長の命令に頷き、局員たちはヤヌスの両腕を掴んで引きずるように連れ出してい
く。

アインはそれを冷めた眼差しで見送り、隊長に命じられた通りに自分もその場を後に
しようとした。

「…ク、ククク」

しかしその時、連行される途中だったヤヌスが不気味な笑い声を響かせ、局員たちの
足を止めさせた。

突然の奇行に訝しげにどよめき出す局員たちの前で、ヤヌスはギョロリと血走った目
を向け、アインを射抜くように睨みつけた。

「やはり変わらないな……10年前と何も変わらない、醜くおぞましい姿だ」

アインはヤヌスの放つ敵意が自分に向けられた者だと気づき、冷めた目で見つめ返
す。

局員たちが思わず後ずさるほどの殺意のこもった目であっても、アインにとっては見
慣れた視線の一つでしかなかった。

「敵の血だけではない、同胞の血すらも浴びて凶々しくも正義の側に立とうとする偽善
者……それはお前だ、アイン・K・アルデブラント」

「……お前はその同胞を裏切ったんじゃないのか」

「私の同胞はもう……この世のどこにもいない。お前があの時、全て奪ったんだよ……」
口の端から泡を吹きながら、ヤヌスは局員たちの拘束を振りほどかんばかりの力強さ
で近づこうとする。

どうにか局員たちは彼を逃すことはなかったが、それでもヤヌスはアインに掴みかか
ろうと懸命に抵抗し続けていた。

「なあ、何故だ……？　なぜ私の娘の命は理不尽にも奪われたのに、お前だけがのうのうと
生きながらえているんだ……？　なぜお前のような女が、まだそちら側にいられるんだ
？」

「まさか……貴様は」

「仲間を切り捨て、踏みにじり、その上人間までもを裏切ったお前が、どの面下げて私に
そんな目を向けている……！　悪魔、化け物、吐き気を催す害悪が……！」

ヤヌスの言葉に、アインの表情は次第に信じられないものを見るようなものに変わっ
ていく。

これまでは赤の他人を見るだけだったが、ヤヌスの顔立ちにどこか見覚えを感じ始め
てからは、震えが止まらなくなっていた。

しばらくアインを罵倒し続けていたヤヌスだったが、しばらくすると気味が悪いほど

に大人しくなり、その顔に満面の笑みを浮かべだした。

「だが、お前がここにいる時点で私たちの野望は達成された」

おぞましいほどの悪意と強烈な欲望に染まったヤヌスの笑顔に、アインは徐々に嫌な予感が募っていくのを感じていた。

行かなければならない。今すぐに動かなければ絶対に後悔する、そんな本能のような内なる声が、アインの中でうるさいくらいに叫び続けていた。

「私たちの大切なものを……ことごとく、奪ってくれた貴様への……我々からのプレゼントだ」

その瞬間、アインの常人をはるかに超えた聴覚が、どこかで弾ける爆発音を捉えた。

自分の中の予感とその音が結びつきそうになり、アインはまさかと言った表情で顔を青ざめさせる。

「せいぜい苦しめ、偽善者」

そう告げたヤヌスの目は、これ以上ないほどに満足げにギラついていた。

9. 忘れてはならぬ記憶

走る、走る。ブルースペイダーを限界速度で駆り、道無き道は無我夢中で走り抜ける。隊長の言葉も忠告も、何もかもを聞かなかつたふりをし、ただただ己の中の不安を振り払うように風を切っていた。

「早く……！ もつと早く……！」

任務を終えた直後、首謀者のこぼした不穏な言葉に突き動かされ、上司（副主）に逆らつても謎の爆発が起きた現場に向かうのは、漠然とした嫌な予感が拭えなかつたからだ。

かつて同じ異形を相手に背中を預けた相手、その顔が脳裏に浮かび、それが黒々とした闇に潰されていくようなイメージが浮かび、アインのこめかみを冷や汗が伝つていった。

（そんなはずはない……あの男と知り合つたのはごく最近、決して親しい仲なんかじゃない……！ だが……）

アインに失うものなどない。家族も誰一人生きてはおらず、友人も皆自分の元を離れた、いや突き放してきた。そんな彼女を苦しめるために、一体他の誰を狙うというのか。ありえないと思いつながらも、そんな根拠のない想像が脳裏から離れてくれなかつた。

(何故だ……何故あの人たちを狙う……!? 憎いのは私なんだろう……? 私を殺したいんだらう……!??)

ヤヌスの向けてた憎悪の眼差しが、アインの記憶にしつこいカビのようにこびりついている。

今まで幾度となく向けられてきたそれだったが、ヤヌスのものは別の歪みを見せていた。

他の何を犠牲にしても復讐を果たす、そんな確固たる誤った考えが彼自身を突き動かしているように見えた。

(あの人は関係ないだろう……! そんなことをして、苦しむものは別にいることが何故わからないんだ……!!?)

必死の形相でバイクを走らせるアインは、やがて森を抜けると爆発のあったビルの真下へとたどり着く。

遠くからでも聞こえてきていた悲鳴や、立て続けに響いてくる小さな爆発音、銃の炸裂音が、そこで起きている凄惨な現場を状況を伝えてきた。

「!!?」

ブルースペイダーを乗り捨てたアインは、煙の立ち上るビルの入り口から歩き出して、くろくろの異形を目撃する。

いびつなシルエットを持つそれは間違いない、ヤヌスが作り出し差し向けてきた異形の同類の生物兵器であった。

「邪魔だ！ 変身！」

〔TURN UP〕

表情を変えたアインは、バックルを操作しながら異形に向かって走り出して行く。手元に現れた剣を素早く抜き、居合のように斬り捨ててから、未だ日の上がるビルの内部へと突入を開始した。

ビルの内部はもはや、原型をとどめぬほどに崩壊していた。

壁は炎で焼かれて真っ黒に焦げ付き、床も焼けたカーペットの下でひび割れが広がる。あちこちの壁には大きな穴が空き、風通しのよくなったそこで炎の勢いがより強くなっている。

元は絢爛豪華なシャンデリアや高価な骨董品が飾られていたであろうホールも、痛々しいままで破壊されて、残骸を無残に撒き散らしている。

たった一体の異形が引き起こした惨状に、アインは唇を噛みしめるも、すぐさま目を鋭く尖らせて走り出した。

「だれか……誰かいないのか……！」

焦げた熱い空気と塵が舞う中を、アインは自身の聴力だけを頼りに歩く。

返事ができなくても、何か反応さえ返してくれたならすぐに駆けつける。それだけの集中力を発揮しながら、アインは地獄の中を一人探し歩いた。

そしてやがて、見つけてしまった。

「……………あ」

呆然と立ち尽くし、アインは大きく目を見開いたまま凍りつく。

轟々と燃え盛る炎の中、砕けた天井の破片が積み重なってできた山の下で、ぐつたりと倒れ伏しているスーツ姿の女性。

オレンジ色に照らされながらも、その肌の白さは彼女がもう呼吸を止めていることを知らしめている。

「……………あ、あ……………ああああ…!!?」

アインは言葉にもならない声を漏らし、その光景から逃れようとするように後ずさる。

そんな彼女を押しとどめるように、背後からいくつもの足音とともに奇怪な唸り声が響いてきた。

「!!?」

「!!?」

崩壊した室内を我が物顔で闊歩する数体の異形。

ポタポタとこぼれ落ちる、血のこびりついた腕を垂れ下げ、アインに向けてばかりにたような声を発している。

その姿は、アインの胸の内でも突き刺さっている忌々しい記憶の欠片を呼び覚ますには、十分すぎた。

「ああああああああああああああああ!!?」

バチィツと凄まじ勢いで弾けた電流が、みるみるうちに巨大な刃となって膨れ上がる。

アインは焦点の外れた目で異形を凝視し、ただ激情の赴くままに雷の剣を振り下ろす。崩れかけた建物への負荷も考える余裕さえなく、目の前の敵を殲滅することばかりを考え、雷撃を放っていた。

「ああああああ!!? 消えろ……! 消えろおおお!!?」

一瞬のうちに雷撃の中に飲み込まれ、その肉体を消滅させられて行くトライアルシリーズの異形たち。

その姿が見えなくなっても、アインは狂ったように剣を振り回し、一切の痕跡さえ残したくないというように暴れ続ける。

周囲の壁や天井もその余波をくらい、すでに悲惨な姿を晒していた室内がより凄惨な状態へと変貌していった。

「ハッ……ハアッ……!!?」

ようやく落ち着きを取り戻したアインが、大きく肩を上下させて立ち尽くす。

トラウマを刺激された女騎士は、あたりの惨状から目を背けようとするように背を向け、立ち去ろうと歩き出す。

しかしその先でアインは、今最も見たくないものを見てしまった。

「……土郎……?」

瓦礫の中に埋もれるように、ぐったりと力なく仰向けになっている一人のスーツの男性の姿が、そこにはあった。

致命傷と思わしき、夥しい量の血を胸元から流す彼の青白い顔を目の当たりにした瞬間、アインの全身に鋭く寒気が走った。

「土郎!!?」 しっかりしろ、土郎!!?」 土郎オオオ!!」

慌てて駆け寄り、剣を放り捨てて瓦礫を押しつけて土郎を抱き起こすと、懇願するように必死に呼びかけた。胸の内に広がる恐怖に身を震わせ、脳裏によぎってしまう最悪の未来凶の想像に吐き気を感じていた。

「……………これがお前への、報いだ」

そんな彼女の耳に、背後から聞き覚えのある声が届き、アインはキツと表情を変えて振り向いた。

それでもまだ若干青い顔色を見せるアインに、先ほど消滅させた異形の一体、その際に残った一部である首が目を向けていた。

「痛いだろう……？ 苦しいだろう……？ その苦しみが、我々遺族が受けてきた心の痛みだ。……存分に味わうといい」

嘲笑するような響きを持った声で、異形はぎよろりと黒い目を向ける。

その姿が、次の瞬間から変貌していくのを見て、アインは言葉を失って目を見開き、しかしすぐに険しい形相で睨みつけた。

刺々しい異形の貌から、ヤヌスの顔へと変化したそれは、ニヤリと意味深な笑みを浮かべてみせた。

「貴様……」

「驚いたかね？ トライアルシリーズはただのアンデッドの……ひいては貴様の遺伝子によつて生み出された兵器ではない……アンデッドの力を死者に付与し、疑似的な命を与えることを可能とした存在なのだ」

「死者……だと」

士郎をかばうように強く抱き寄せ、アインは首一つで未だ生き延びている異形を見下ろす。

表面上は冷静さを保っているようだが、内心では驚愕と同様で心臓がやかましく鳴り

響いている。それを知っているか、異形は満足げに目を細めていた。

「私の分身……いや、私が世話になったね。病に侵された体で、お前に復讐するために編み出した苦肉の策だった……こうも早く嗅ぎ付けられるとは思っていなかったから、短い寿命だったがね」

「死からの復活だと……そんな、馬鹿な」

「私にとつても机上の空論、苦し紛れの悪足掻きだったんだよ……だが実際に私は、こうしてここにいる。こうして……お前に悲願を果たせた」

まさか、と思ったアインが、他の異形が立っていた場所のハツと視線を巡らせる。

冷静さを欠いたアインによって、全力での高圧縮の魔力を至近距離でぶつけた結果、異形たちは一部を残して跡形もなく消滅してしまっている。

しかしかすかに残っている部分が、徐々に人間の肌のような質感に変化している様子が、絶句するアインには見えていた。

「思い知ったか……お前は自分の欲望と他者の命、全てを救う選択肢を選んだつもりかも知れんが……結局お前がもたらしたのはこんなどうしようもない残酷な結末なのだ……」

先ほど襲ってきたトラウマとは別の恐怖に支配されたアインは、ガタガタと体を震わせながら異形を凝視する。

あたりに散らばった異形の断片が、みるみるうちに塵に還っていき、一切の痕跡が失われていく中、異形はさも可笑しそうにくつくつと喉を鳴らしていた。

「そんなこと考えもしなかつただろう……？ 所詮お前はそんな人間なのだ……自分の欲望のためならば、他者を蹴り落としても心を痛めない、根っからの怪物……いかに偽善の皮を被ろうと隠せない、醜い本性なのだ」

「違う……違う……！ 私は……私は……!!？」

「違わないさ……現にお前は、こうして何人もの私を殺してくれたじゃないか。――

この人殺し」

告げられた言葉に、真つ青な顔のアインはビクンと全身を震わせる。

幾度となく聞かされてきた罵倒の言葉なのに、今この場においては、アインのこれまでもの中で最も心に突き刺さった。

「お前はこれから、未来永劫この十字架を背負い続ける運命なのだ……目をそらすな、耳を塞ぐな。我らの怨嗟と憎悪を一身に受け続ける。その重荷を永遠に背負い、後悔の渦の中を彷徨い続けるがいい」

ヤヌスの顔をした異形の目から、徐々に光が失われて虚ろになっていく。首の断面が崩れ、ポロポロと塵になっていく様子を、アインはただ呼吸を荒くしながら見つめていくことしかできない。

自身の死が目前になっていくというのに、異形は微塵も恐怖をにじませることなく、満足げな笑みを浮かべてアインを睨みつけていた。

「これが最後ではない……この悲劇は、永遠にお前の身に降りかかり続けるのだ。我らの憎しみが消えない限りな」

サラサラと崩れ、風に吹き消されていくヤヌスは、最後に凄まじく低い声で、アインに告げる。

全ての復讐者たちの心を代弁した、恐ろしい声で。

「ザマア見ろ、化け物」

「うわあああああああああああああああああああああああああ!!？」

轟々と燃え盛る地獄の中で、女騎士の慟哭が虚しく響き渡った。

第七章 異形の神は何を望むのか

1. 揺れる心

「——僕の知っていることは、これで全部だよ」

最後までなのはを氣遣った穏やかな口調で、インシグニアは話を締めくくった。

しんと静まり返った訓練室の片隅で、隣りに座る少女を見下ろして、劍の騎士は痛ましげに表情をゆがめた。虚空を見つめたままなんの反応も返さないなのはの姿は、あまりに見えていられないものだった。

何も苦しめなかったわけではない。大人たちの確執がどうして起きたのか知ってもらい、巻き込まれないように氣遣ったつもりだったのだ。

「確かにそもその原因は、ジンガーが言った大事件が起きた事だ。誰もが予想できなかったし、人が傷つくことは避けられなかったし、止めることはかなわなかったと思う。……でも、あの人の行動が事態を悪化させたっていうのは間違っていない。その点では、僕も彼を責める気にはならない」

膝の上に置かれた手がギユウツと握り締められ、なのはの動揺を伝えてくる。信じたくない、だけどジンガーらの態度に納得してしまう過去の因縁を聞かされ、どうすれば

いいのかわからなくなっているようだった。

インシグニアは困ったように頬をかき、少女の苦しみを和らげてやろうとしてか、小さな背中を優しく撫でてやった。

「……さすがに、あの事件のすべてがあの人への責任だとは思っていないよ？ でも、少なくとも根本的な部分であの人の浅はかな行動が起因になっていることは間違いない」

それでも何も答えを返さない少女に、インシグニアは痛ましげに眉間のシワを深め、少女に触れることもやめてため息をつく。

ただ慰めるだけでは、この少女の苦しみを和らげることはできそうにない。

周りに流されながらも、懸命に自分のとるべき道を探し続けていたと言う強い子だ。選択肢を与え、自分で心の整理をつけさせたほうがいいのかもしれない。

「君にとつては余計なお世話だったかもしれないね……。でも、これ以上傷つく君を見たくないかったんだ。これ以上あの人に傷つけられる前に、真実を知っていてほしかったんだ……」

俯く少女の表情は何も見えない。迷い、悲しみ、不安、もしかしたら怒りも混ざって頭がぐちゃぐちゃになっているのだろう。

信頼していた大人に「裏切られた」ショックは、相当に大きいようだった。

「あの人もそれをわかっていて、君を突き放したんだ。癪だけどあの人その厚意だけ

は、正しい判断だったって僕は思う。……これ以上深入りする前に、あの人とは距離をとっておいた方がいいよ」

先ほどアインがなのはに見せていた冷たい態度も、自分の状況を自覚している彼女にしてみれば必要なことに見えた。

罪を犯したとはいえ、管理局員という善の存在であることは間違いない。自分の都合に関係のない少女が巻き込まれることを懸念したその行為だけは、評価に値するものだった。

「……じゃあね。それと……ごめんね」

これ以上聞かせるのも酷だろうと、インシグニアは腰をあげてその場から離れていく。

その横顔に憐憫を滲ませて、剣の騎士はなのはの隣を後にした。

しばらくなのはは虚空を見下ろしていたが、やがて気だるげに顔をあげると壁に背を預けて天井を仰ぐ。深い息を吐いて、閉じていた瞼を開くと、その中からは切なげな光が覗いて見えた。

「……あれは、ただの夢じゃなかったんだなあ」

思い出されるのは、アインと最初に出会った……いや、再会した日の朝に見た夢。自分の記憶にはなかった、しかしどこか懐かしい感覚を覚えた光景。

あれはもしかしたら、この未来を予知したがゆえに蘇ってきた記憶なのかもしれない。でなければ偶然にしてはあまりにも不思議で、誰かが仕組んだもののようにさえ思えてしまう。

「アインさん、私と初めて会ったふうに見えたから、全然わからなかった。……知って、黙ってたんだ」

そう呟くのは目の目に浮かぶのは、騙されていたことへの怒りではなく、教えてくれなかったことに対する悲しみと寂しさ。

分かつてはいる。自分の過失で家族を失いかけた少女に名乗ることが、どれだけ勇気のいることなのか。幸せに笑っている少女の前で、かつてその相手を苦しめたなどという罪を告白することが、どれだけ苦しいことなのか。

受け入れられたかはわからない。だがそれでも、胸の内を教えてくれなかったことは辛く感じた。

「私を守ろうとしてくれたのはただ優しいからじゃなくて……あの時のことを、ずっと忘れていなかったからなのか」

颯爽と自分やユーノを助けてくれた姿を見たときは、絵本の中から出てきた優しくて強い騎士のように思えていた。

しかしその優しさの根元が、助けた少女への後ろめたさだったのかと思うと、まぶた

の裏に浮かぶ姿が徐々に曇っていくように思えた。

——悪い人がいて、その人が正義の味方に倒されれば平和が戻り、みんなが笑顔になる。

そんな事もあるのだろうが、現実のほとんどはそんな簡単なものではないという事を、私も理解している。

——昔自分が悲しかった時にも、冷たい現実に泣かされた時にも、そこには「悪い人」などいなかった。

物心ついて、おそらくは一番人恋しい時期に見ていた、一人ぼっちの夕暮れ。

事件が原因で病院のベッドに寝たきりとなり、自分を抱き上げることもできなかった父。

始めたばかりの翠屋を一人で必死に切り盛りしながら、夫と三人の子供の面倒を見なければならなかった母。

剣の鍛錬どころか、学校さえ休んで家業を手伝うことも多かった兄。

それらを手伝いながら、一人ぼっちになってしまいう妹を構ってやろうと懸命だった姉。

末の妹はただ一人、何もできぬ自分に悔やむばかりだった。

——父の事件の原因となった相手を憎むのは簡単だった。

憎んだところで悲しみが終わるわけではなかった。

すでに発生してしまったどうしようもない悲しみを止める方法など、そう簡単には存在しない。

——それでも折れずにいられたのは、あの日出会った騎士が寄り添ってくれたからかもしれない。

帰らぬ家族を想って泣きじやくる私を不器用ながらもあやし、悲しみをぶついても何も言わずに受け止めてくれた。

ずっと忘れていた想い出が、次々に蘇ってくる。

悲しみのあまり、忌まわしい記憶として封印してきたそれが、今になって鮮明に蘇ってくる。

——でも、もし……もし例えば。

——かつて自分を支えてくれた正義の味方が、本当は自分と家族を悲しみの底に陥れた張本人だったときは、どうすればいいのだろうか。

「……………私、もうわからないよ。アインさん……」

誰よりも力強い味方に感じ、頼りきっていた青い鎧の心優しき騎士。

それが全て幻だったとすれば、これまで抱いてきた憧れの気持ちはどうなってしまうのだろうか。

答えを見出せずにいるのははただ、訓練室の隅で小さくうずくまる他になかった。

◇ ◇ ◇

アインは虚空を見つめながら、頻繁に地球、海鳴市を訪れる因縁のきつかけとなった日のことを思い出す。

もう忘れ去ってしまった、しかし忘れることは許されない忌々しい後悔の記憶が、今もなお彼女を苦しめ続けていた。

「……あの時、士郎はあんな大怪我を負うはずではなかった。あんな事態に巻き込まれるはずがなかった。……すべて、私のせいだ」

「……………全部が全部あなたのせいじゃないわよ」

リンディはアインを気遣い、自分を責め続ける友人を慰めようとする。

リンディの観点からすれば、高町士郎が巻き込まれた一件にアインの責任は見受けられない。過去に彼女が関わった事件、その被害者の遺族の無念が暴走し、ほとんど関係のない知人が狙われたというだけのこと。

事件そのものにしても、アインは当時に全力を注いでいたことはわかっているため、遺族の復讐は言うなれば逆恨みのようなものに思えた。

「ただ……いろんな事情が重なって、間接的に関わってしまっただけで……」

「それでも……！ それでも私の行為が、あの事態を招くきっかけになったことは事実なんだ……！」

けれどそんな言葉は、アインにとってはなんの意味もない慰めの言葉ではない。

どんなに言い繕ったところで、周囲のあらゆる悲しみは自分の行いが根源にあるのだと信じ込み、自らの心をボロボロに傷つけていく。

敵に容赦なく、味方にどんなに理不尽な目にあわされようとも守ることをやめない騎士は、自分自身に対しても優しくなれずにいた。

「私の成すこと望むこと……すべてがほかの誰かの不幸を招く。呪われている……いや、呪いそのものなんだよ、私は……」

ポツリと呟かれる言葉が、アインの胸の痛みを顕著に表す。

遠くを見つめるその目は疲れ切っていて、なのはが見て憧れた輝きは微塵も残されていない。憐れに土に汚れ、錆びた鉄のような印象を抱かせるほどに、今のアインは煤けた様子を見せていた。

「どうしてみんないなくなってしまうんだろうな……母も、仲間も、組織も、愛した人も、何もかも私の手の中をすり抜けていく」

「……ダインさんのことは、それこそあなたのせいじゃないでしょう？ それに仲間も

……第七特機隊のみんなはまだ生きてるじゃない」

リンデイが口にした名称に、それまでずっと無表情で立ち尽くしていたアインは初めてくすりと微笑を浮かべる。

ずいぶん長く耳にしていなかった、自分がかつて所属していた部隊の名を聞き、アインは胸の奥が締め付けられる、苦しくも心地よい感覚を抱いた。

「ああ……懐かしいな。魔法もろくに使えない、落ちこぼれと呼ばれた私が送られた実験的な機動部隊。そうだ……みんな、元気かな」

「そういえば、あの頃からあなたたち無茶ばかりやってたわよね……いつか全員まとめてクビになるんじゃないかってヒヤヒヤしてた」

二人の若かりし頃、リンデイがキャリア組として経験を積んでいた時、アインはその部隊で暴れまわっていた。

とある事情から犯罪者、またはそれに加担するものに過剰とも言えるほどの憎悪を抱いていた彼女は、度々問題を起こしてはジウ館に呼び出されるということを繰り返し、リンデイの肝を冷やさせていた。

アインにとつて、管理局員とは単なる合法的に敵を叩き潰せる都合のいい役職でしかなく、しかし捨てがたい確かな力を持って余された結果、組織の掃き溜めのような場所へ押し込まれたのだ。

「そうだったな……だが、あそこにいた時が一番楽しかった」

決していい目では見られない、同じ落ちこぼれの溜まり場だったそこは、アインにとってはどこよりも居心地のいい場所だった。

存在すること自体望まれなかった自分が唯一ありのままにいられる、何よりも尊く大切な場所であった。

「初めて………家族とはこんな感じなのか、と思えたんだ」

懐かしげに呟くアインだが、その目が称えているのは相変わらずの悲しみの色。

できることならもう一度戻りたい、そう思えるほどに愛おしい時間なのに、それが叶わないことをわかっている分、思い出すだけで苦痛に感じているようだった。

「だが、あいつは死んだ。管理局の最強のアイアンマンになって世界中の美女を守ると言ったあいつは、他の誰かを庇って死んだ。……私が大好きだったあいつは」

リンディはそう言って俯くアインを見ていられず、自身も苦痛に表情を歪めて目をそらす。アインの想う友は、リンディも深い面識があったからだ。

アインのかつての心の支えとも言える存在であった彼は、リンディにとっても掛け替えのない友人の一人となっていた。

しかし、彼はもうこの世のどこにもいない。

唯一無二の存在を失った時のアインは、当時彼女を嫌っていた者も悪態をつくことを

ためられるほどに憔悴し、陰鬱な雰囲気を放っていた。

「あいっだけじやない……私が愛した人はみんな不幸になる。ともに生きたいと私が願った相手は、みんな私よりも先に逝ってしまふ」

生まれてから幼い頃までは何も得られず、せつかく手に入れたものは奪われるか無惨に壊されてしまふ。失うことそのものを運命付けられているような彼女にとつて、自身にただ近づくことさえ危険なことに思えてしまつていた。

「この世に生まれてきたこと自体が間違いだった私には、幸福など許されるわけではないのかもしれないな……」

立ち尽くし、虚空を見つめ続けるアインの目に映っているのは、どうしようもないほどに深い諦観の念だけであつた。

2. 悔いる者達

「……も空振りか……」

「……だね」

ひっそりと静まり返った森の一角で、フェイトとアルフは何もない空間を前にして、落胆した様子を見せる。

周囲の木々にはへし折られたり引きちぎられたような跡が残されていて、相当大きな戦いがあったことを示している。そしてわずかな魔力の残滓が、そこにいたのが高位の魔導師だということを表していた。

フェイトたちが探すジュエルシードの魔力の残滓も残っている。つまり彼女たちは今回、管理局に出し抜かれたということだ。

「やっぱ向こうに見つからないように隠れて探すのはなかなか難しいよ……」

「でも、ちゃんと集まってるから。だから……もう少し、頑張——」

相棒を安心させようと、儂げな微笑を浮かべて立ち去ろうとしたフェイトだったが、不意にその足取りが乱れる。主人がぐらりと体を傾がせた瞬間、アルフが慌ててその軽く細い体を受け止めた。

……」

今までは素人の魔導師一人が相手だったから、そしてもう一人は決して自分たちに危害を加えてこようとはしなかったから、なんとかなっていた。なんとかなっているように見えていた。

しかし今は、フェイトを上回る力を持った魔導師とその部下複数名、それをバツクアツプする面々を乗せた艦が相手なのだ。この状況が絶望的でなければなんだというのか。

「大丈夫……だよ……」

「大丈夫じゃないよ……！ 本気で搜索されたら、ここだっていつまでバレずにいられるか……」

気丈に応えようとして、全く演じきれていないフェイトにアルフは目尻に涙を溜めていく。ペタンと耳を伏せさせ、いまにも決壊しそうなになる思いを必死に抑える。

心も体もボロボロになりながらも、それでも願いのために健気に戦い続けようとする主人の姿を見ていることなど、性根の優しいアルフには我慢ならなかった。

だから、今すぐにでも彼女を連れて逃げ出したいと思っていた。

「フェイトはあたしのご主人様で……あたしにとっては世界中の誰より大切な子なんだよ……？ 群れから捨てられたあたしを拾ってくれて……使い魔にしてくれて……」

ずーっと優しくしてくれた……フェイトが泣くのも悲しむのも……あたし、嫌なんだよ……!!”

初めて出会った時のことを思い出しながら、アルフは苦しげな表情でフェイトを抱きしめる。

病魔に侵され、群れから追い出された弱く惨めなかつての自分。存在する価値をなくした自分をフェイトは見つけ、そして優しく抱き上げて、それまでいた地獄から連れ出してくれた。

本来使い魔とは、一つの契約によって魔導師と繋がられ、目的のために使用される言ってしまうば道具のようなものである。契約が完了すれば、新たに再契約しない限りそのうち消滅してしまう、儚い存在なのだ。

事実、フェイトの母プレシアも一体の使い魔を有していたが、その契約はすでに完了し彼女は姿を消している。プレシアのような大抵の魔導師にとっては、使い捨ての道具に近い認識であった。

しかしフェイトは、アルフに対してそんな接し方はしなかった。

アルフが嫌がることも、嫌うこともさせず、家族と呼んで暖かく迎え入れてくれた。生きていいのだと、存在する理由と価値を与えてくれた。

ただそばにいてほしい、ずっと一緒にいてほしい、そんな少女らしい他愛もない願い

が、フェイトとアルフを繋ぐ契約絆となっていた。

「ありがとう……アルフ……でもね……？ 私、それでも……母さんの願いをかなえてあげたいの」

フェイトは儂げに微笑みながら、胸に顔を埋めて泣きじやくるアルフを撫でて落ち着かせる。

何年もずっと一緒にいた相棒の言葉でも、フェイトの意思は揺るぐことはなかった。むしろ自分の願いで、相棒に耐えず負担をかけ続けることを悔やんでいるようであった。

自分の思いが届かないことを悔やむも、アルフはフェイトの胸の鼓動を聞きながら黙り込んでいた。

「あともう少し……最後まで、もう少しだから……だからお願い……」
「……うん」

アルフは悟る。自分の主人はもう、止まってはくれないのだと、この現状から逃げ出すつもりなどないのだと。

望んでくれさえすれば、アルフは今すぐにでもフェイトを連れて逃げ出すつもりになつていた。かつて彼女がそうしてくれたように、周りは敵だらけのこの世界から連れ出そうと思っていた。

しかしそれを望まないフェイトを救うことは、今のアルフにはできそうになかった。「フェイトが悲しんでると、あたしの胸もちぎれそうに痛いんだ……いつも……あたしも目と鼻の奥がツンとして、どうしようもなくなる……」

「私とアルフは……少しだけど精神リンクしてるからね。ごめんね……アルフが痛いなら……私、もう悲しまないし、泣かないよ……」

「あたしは……つ、フェイトに笑って、幸せになつてほしいだけなんだ……!!」
「ごめんね、ありがとう……アルフ」

泣き続ける使い魔を一旦離し、フェイトはその目を真正面から見つめ返す。赤い宝石の瞳が深い青の瞳に映り込み、不思議な色合いとなつている様子が見えた。

「でもね……私、母さんの願いをかなえてあげたいのは、母さんのためだけじゃない……きつと、自分のためなんだ。私自身が母さんを助けたいからなんだ」

それは、少女の抱く純粋な願いであつた。

どれだけ辛くあたられても、愛情を感じられず寂しさが募ろうとも、少女は母のために懸命になる。振り向いてほしいからではなく、母の目に光を取り戻すため。認めてほしいからではなく、ただ母に喜んでほしいがために、少女は危険を顧みず困難に挑み続ける。

それは側から見れば、依存に他ならない。しかしフェイトにとつてのそれは、間違い

なく自分の中で生まれた願いであり、この世に存在する理由であった。

アルフはリンクを通じて伝わってくる思いに目を閉じ、涙を拭うと強い眼差しをフェイトに向けた。

「フェイト、約束して…あの人の言いなりじゃなくて…フェイトはフェイトのために、自分のために頑張るって…そしたらあたしは、必ずフェイトを守るから!!」

「うん…」

目を真っ赤にしながらそう誓う家族に、フェイトは嬉しそうに表情を綻ばせる。

その道の先に待っているのが幸福か破滅であるかもわからず、しかし少女たちは、目の前に続いている一本道をただ歩き続ける他になかった。

◆ ◇ ♥ ♡ ♣

「あと…7個か」

荒々しく波が打ち付けてくる岩場、海鳴市の港から離れた海岸の端で、アインは一人佇みながら呟いた。

波飛沫が大量にかかってくるも気にした様子はなく、遠く広がる雲一つない青空と穏やかな水面を眺め、憂鬱そうなため息をこぼした。

ジュエルシードの捜索は、アースラクルーの助力もあつて順調に進んでいた。発動よりも前に微弱な魔力の波動を感知し、該当箇所待ち伏せ、発動とほぼ同時に確保する

という迅速な対応のおかげで、目立った被害も騒ぎもなく状況は進みつつあった。

しかしこれまで姿を全く見せずにいるフェイトたちも、地道な搜索の効果でアースラよりも先回りすることがあり、残る全てのジュエルシードを手に入れられたわけではなかった。

そんな中、アースラは新たな問題に直面していた。

残り数個のジュエルシードの所在がつかめなくなってしまうのだ。発動した形跡がないのが幸いだったが、順調だった搜索はここにきて暗礁に乗り上げてしまった。

〔搜索範囲は地上以外にも広がっていますが、あとは探すとなれば……〕

〔海……だな。まず間違いはないだろう〕

通信越しにエイミーがこぼすため息に、アインも億劫そうに肩をすくめて眉を寄せた。推理とは言えないほどの単純な答えに、双方気が重くなるようだった。

ゆえにアインは、先んじてこの場所に降り立っていた。己の直感と気配察知能力、そして脚を使った地道な搜索を行うためだ。

アースラのメンバーも海の中に観測機を回しているものの、水深数百から数千メートルの海中では歯が立たないらしく、どちらも芳しい報告はまだ上がってきていなかった。

「だがどうする？　いちいち潜って探し回るか？　砂漠で一粒の砂を探すようなものだろうか？」

「いやいや、さすがにそれは冗談でも笑えませんかよお。……下手したらアインさん、上の人たちの命令でほんとは行かされますよ？」

「……さすがに深海で耐えられるかどうかは試してないな」

やろうと思えばできなくはない、とアインは口には出さずに皮肉げな笑みを浮かべる。アインの体のことを考えれば確かに実行可能な策ではあったが、実際に行うには無駄が多く効率が悪すぎる。

だが確かに、上層部の耳にでも入れれば嬉々として許可が降りるであろう。首輪をつけ、リードで繋がれた犬が逆らうことなどできないと確信し、樂觀視している連中からしてみれば、うまい道具の使い方だと考えることだろう。

「まあ……ちよつとだけ待っていてください。どうかこつちの計器で探し出せないか頑張つてるところですから」

〔頼んだ〕

そんな作戦など到底認められないエイミイは、苦笑しながらアインにそう告げ、通信を切る。

空間モニターが消え、再び一人になったアインは青空を見上げ、さざめきと風の音を

耳にしながら深いため息をついた。

「……はあ。ヒマだな」

居心地の悪いアースラ艦内で出勤を待つよりはと、半ば勝手に海辺へ降り立ってみた。いいものの、大した成果は得られずにいた。

確かにジュエルシードの気配は感じる。しかし匂いが水に流されてかき消されてしまうように、もともとかすかな反応しか見せない発動前のジュエルシードの気配がさらに薄れてしまっている。

「……さすがにこう遠くでは、察知するのも難しいか」

ケルベロス
三頭狼という有力な部隊の参加によつて、ここ最近目立った成果を上げられずにいるアインは、あまり体を動かさずにいることにやや不満げに唸る。

今更華々しい活躍をしても出世などあり得ないし、もともと権力にも興味などない。自分が今この場で管理局に与していること自体がアインの望みに繋がっているために、任務を与えられないことに不満はない。

しかしそれでも、人生のほとんどを現場で過ごしてきたと言つても過言ではないアインには、何もさせてもらえないというのはまた別の意味で苦痛であった。

「……………んっ」

さてどう暇を潰そうかと空を仰いでいたアインは、ふとした瞬間に違和感を覚える。

いつの間にか風の流れが変わっている。先ほどよりも強く、そしてある一点に向かって吹き抜けている。それに伴い足元で弾けていた波飛沫も徐々に勢いを増し、岩場に打ち付けて大変危険な音を轟かせ始めていた。

明らかに自然的な現象ではない。何者かによる意図的な天候操作が行われている。

「これは……まさかあいつら……!」

アインは激しく波打つ海岸近くから跳躍すると、激流に攫われないように高い岩の上に乗る。

険しい表情で辺りを見渡せば、かすかに感じていたジュエルシードの気配が徐々にはつきりとしてくる。今はもう、正確な場所まで把握できそうなほどの反応の強さだ。

同時にアインは、その気配がするのと同じ方向に覚えのある魔力の気配を感じ取っていた。

「……最悪だ。あいつら……あそこまで馬鹿だったとはな……!」

忌々しげに歯を食いしばり、徐々に黒く染まっていく空と荒れ狂う海を睨みつける。

憤怒の表情で嵐の中仁王立ちするアインの耳に、デバイスに入った緊急通信からの声が届いた。

『エマーゼンシー! 捜査区域の海上にて大型の魔力反応を感知!』

通信の音が合図になったかのように、海はさらに荒れ狂いその光景を戦慄のものに変

えていく。

やがて気配の中心へと集っていく波がみるみるうちに渦を巻き、巨大な七つの激流の竜巻きへと変貌していった。まるで海に棲む龍が天へと登るように、大気を震わせる轟音を纏いながら暗雲の中へとそびえ立っていく。

常識を超えた脅威が今、海鳴市に迫りつつあった。

3. 正義の在処

びゅうびゅうと、不気味な風が海上のある一点を中心に集まり、吹き抜けていく。穏やかだった海面は今や荒々しく波打ち、激しい水飛沫を上げて打ち付け合い、轟音を響かせている。

けれどある境目から先は穏やかな海が広がっていて、それがただの嵐ではないことを表していた。

「アルカス・クルタス・エイギアス……きらめきたる雷迅よ、いま導きのもと降りきたれ……バルエル・ザルエル・ブラウゼル……」

暗雲の下で飛翔し、黒い戦斧を携え、足元に巨大な金色の魔法陣を展開させたフェイトは、その額に汗をにじませながら黙々と詠唱を口ずさみ続ける。

紡がれているのは儀式魔法。通常行使される魔法よりもはるかに高い威力を誇り、それに伴う準備の手間と呪文の難度を有するものだ。

一般的な攻撃魔法よりも長い詠唱が必要なため、実戦ではほとんど使用されないほどの隙が必要となるが、無論それは味方の守りがあって初めて成立するものである。

（正確な位置を割り出すために、海に魔力流を撃ち込んで強制的に発動させて捕まえる

…そのプランは間違つてないけど…)

その護衛の役を担つているアルフは、儀式魔法を紡ぎ続けるフェイトを心配そうに見つめ、強く拳を握りしめる。

全身から滝のように汗を噴き出させ、それでも構うことなく魔力を注ぎ続ける姿は、使い魔に力になれないもどかしさを抱かせた。

「…打つは雷、響くは轟雷…アルカス・クルタス・エイギアス…!!」

フェイトが雄叫びとともに、金色の光を放つ愛機を海面に向けて振り下ろす。暗雲から凄まじい威力の落雷が降り注ぎ、渦巻く海を貫き金色の染め上げていく。

次の瞬間、突然妖しく輝く青い光を宿す巨大な竜巻が発生し、竜のようにのたうちながら黒々と分厚い雲の集う天へと登っていく。激しい水飛沫が嵐のような勢いで降り注ぎ、轟々と凄まじい音が咆哮のように響き渡る。

穏やかだった海面は今や、大きく渦巻く激流の巣窟となつて唸りを上げている。まるで世界の終焉を思わせるような光景が広がっていた。

「見つけた…残りの、7つ……!」

竜巻の中に見える青い輝きに、フェイトはホツとしたように目を細める。

しかし、一度大規模な魔法を使った反動は大きく、飛翔する少女はいまにも墜落しそうなほどに疲弊している。大出力の魔力を放ったせいで、フェイトの顔は土気色に染ま

り、荒い呼吸を繰り返していた。

焦点を失いかけているフェイトの目を見たアルフは、その痛ましさに思わず目を背けた。

（こんだけの魔力を撃ち込んで、7つ全部を封印して……こんなフェイトの魔力でも絶対に限界を超えてる…）

ただでさえ弱っていた主人が、酷使された体に鞭打って大規模魔法を使うなど、無謀なことはわかっていた。

やはり自分も手伝えよかった。しかしそうすればフェイトを守る役目がいなくなり、敵に決定的な隙を晒すことになってしまう。

（なあ、アイン。あんたみたいなお人好しなら……こんな時どうしたんだい？）

フェイトの身を案じ、自分たちを捕まえずにいてくれたもう一人のお人好しの顔が脳裏に浮かぶ。

いきなり襲撃しても怒ったりせず、不器用そうなのにわざわざ弁当まで食べさせてくれた。ジュエルシードの暴走を力づくで止めようとしたフェイトを止め、体を張って封印に手を貸してくれた、稀に見る大馬鹿者のお人好し。

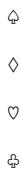
たいした時間を共有したわけではない。しかしこんな時に縋りたくなくなるほど、彼女の存在は大きくなっていった。

（都合のいいことばかり考えるな！ 赤の他人を頼ろうなんて考えるな！ あたしはただ……フェイトを全力で助けるだけだ！）

この場にはいない、助けを求めてはいけない相手のことを、ブンブンと首を振って脳内から追い出す。

最初から言っていたではないか、彼女は管理局員なのだ。時期が時期なら職務を全うしていたのだと、その口ではつきりと言っていたではないか。

しかし思わず手を伸ばしかけた誘惑を振り払いながらも、アルフの瞳には、青い騎士に対する苛立ちのようなものが宿っていた。



「この子達、なんてことを……！」

この世のものとは思えない、七つの海流の竜巻が天へと昇っていく姿を見て、エイミイは艦橋から戦慄の声を響かせる。冷静さを求められるオペレーターたる彼女であつても、いま目の目で広がっている光景には驚愕を禁じ得なかつた。

艦内にはけたたましいほどのサイレンの音が反響し、あちこちで赤い光が点滅を繰り返している。現場から感知できる魔力量は凄まじく、すべての機材がエラーを吐き出していた。

「なんとも……無茶をする子ね」

リンデイも表面こそ冷静だが、内心は例を見ない大災害を目の当たりにして冷や汗を流している。アースラクルーだけでなく、地上本部の派遣部隊も言葉を失い、食い入るように巨大な竜巻が映る映像を凝視していた。

いくつもの事件を解決に導いてきたベテランの組織でさえ、フェイトが発動させたジュエルシードが引き起こした惨事に目を見張っていた。

「無謀な……間違いなく自滅する」

「あれは個人の出せる魔力の限界を超えていますよ」

クロノは険しい表情でその映像をにらみ、低く唸るような声で呟く。

警報に呼ばれて艦橋に飛び込んだなのはとユーノは、竜巻に囲まれながら立ち向かうとしているフェイトを目にして息を呑む。

フェイトが何をしたのかは検討もつかないが、少なくともいまの彼女が非常に危険な状態にあることはわかった。

「フェイトちゃん……い……あの！ 私たち、今すぐ現場に……！」

「その必要はないよ」

どうにかして彼女を助けなければ、と胸元のレイジングハートを掴み、悲痛げな表情で振り向くのはだったが、クロノが返したのはそんな冷淡な一言だった。

凍りつくのはに向けて、同じように絶句するユーノに向けて、クロノは感情が冷え

切ったような平坦な声でさらなる答えを返した。

「放っておけば、あの子は自滅する」

「……………」

なのはは目を見開き、クロノをしばらく凝視してから映像の中のフェイトを凝視する。

金色の刃を振りかざしたフェイトは、竜巻の中の光に向かって突撃しては、凄まじい激流に弾き飛ばされていく。苦しげな表情で吹き飛ばされる少女は、飛ばされた先で別の竜巻きに叩きつけられ、再び苦悶の声をこぼす。

何度も何度も激流の衝撃を体に喰らい、その度に突撃を繰り返す少女の姿はあまりにも痛々しく、見ている方が苦痛を感じるほどであった。

「自滅しなかつたら力を使い果たしたところを叩く。今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

「で、でも……………」

少女の苦しむ姿を見ても動かないクロノに、なのはの中の疑念がさらに膨れ上がっていく。アインに最初に抱いてしまった疑いが、その同業者であるクロノたちにまで広がり始めていた。

リンディはなのはの戸惑いを察してか、純粹で優しすぎる彼女に対してどこか悲しげ

に眉をひそめてなのはを見下ろした。

「残酷に見えるかもしれないけど……これが最善」

「そんな……!」

「めんどクセエ真似すんじゃないやねエよ、ジャリん子」

返す言葉が見つからないのはに向けて、背後から乱暴な声がかけられる。

ハッと振り向けば、不機嫌そうに眉を寄せたジンガーが小さく舌打ちをしながらなのはを見下ろしていた。隣を見ればナディアも似たような視線をなののはに向け、鬱陶しうに表情を歪めている。

ユーノ以外に味方がこの場にはいないのは硬直してしまい、若干怯えながらジンガーの強面を見上げる他になかった。

「上の決定には従うもんだぜ」

「でも……あのままじゃフェイトちゃんか……!!?」

「あなた、年齢の割には賢いと思つてたけど……やつぱりガキはガキのようね。嫌になるわ」

ジンガーへの恐怖を押さえつけ、なんとか声を振り絞るなののはに向けて、ナディアが本気で苛立つた様子でため息をつき、腰に手を当ててなののはの顔を覗き込む。

至近距離で向けられる冷たい眼差しに一瞬怯み、なののは戸惑いの表情のまま硬直し

てしまった。

「あれは犯罪者。助ける義務なんてこつちにはないのよ。あの子とどんな関係かなんて興味ないけど、その感情に私たちまで巻き込まないでよね」

「そんなつ……私はただ、女の子が目の前で傷ついているのに動かないなんて我慢できなくて……」

「それが余計な感情だつて言ってるのよ。手間をかけさせないでよね」

なのはにしてみれば当たり前の思いを、ナディアは苛々した様子で踏みにじる。その態度は大人気ないと称するのがふさわしく、お世辞にも正義を自称する組織の人間が見せるものには見えない。

なのははただ困惑するばかりだった。別の世界から事件を解決するためにきてくれた、本物の正義の味方だと思っていた人たちが、苦しんでいる少女を放っておけと言う。

一度は憧れさえ抱いた人たちの見せる側面に、なのはは胸が軋むような不快感を覚えていた。

「口を慎め、相手は子供だぞ」

「へっ……」

サクソは少女に対して乱暴な態度ばかりを取る部下に一喝し、服幻想に腕を組んで睨みつける。

ジンガーは不満げながらも、インシグニアは表情を変えることなくその場を引いたが、ナディアだけは咎めるような視線をサクソに送っていた。

「お言葉ですが、組織として動けない人物に対してそれではあまりに甘すぎると思いません。その被害は全て我々が受け持つことに……」

「黙れ」

しかし、サクソはそんな彼女に凄まじい殺気を伴った視線を送り、一瞬にして口を噤ませる。空気さえ凍りつくような冷たい眼光に、その場にいた誰もがぞくりと背筋を震わせた。

ナディアは小さな悲鳴をどうにか胸中にとどめ、まだ何か言い足りなさそうにしていたが、やがて諦めたようにそっぽを向いた。

部下が黙り込むとサクソは殺気を霧散させ、切なげな表情で立ち尽くしているのを見て、小さくため息をついた。

「……ねえ、なのはちゃん。僕たちも別に、あの子を見捨てようと言っているんじゃない。むしろ僕らは、彼女を保護したいと思っているんだ」

少女への対応に困り、口を閉ざしたままのサクソに代わってムーヴが話しかける。

クロノやジンガーとは異なる優しい声に、なのははわずかに怯えを和らげ、しかしまだ不安そうに彼の顔を見上げた。ぎこちないなのはの反応に苦笑しながら、ムーヴは真

正面からなのはの目を見つめる。

「え……でも」

「確かにあの少女は犯罪者。……だがそれ以上に、僕たちには優先すべき任務がある」

「ジュエルシードの……封印ですか」

なのはが迷いながら答えると、ムーヴは小さく笑みを浮かべて頷く。

少女の抱いている、理解ができるが納得はできないと言った感情に気づいたサクソは、なぜか感慨深げな微笑を浮かべて口を開いた。

「そうだ。だがこの状況では、どちらも安全に行えるとは思えない。我々を完全に敵として捉えているであろうフェイト・テストロッサとジュエルシード、両方を相手取る余裕は、この艦には残されていない」

なのははその答えにぐつと息を詰まらせる。否定できる要素が一つもなく、返す言葉が見つからない。

悲しい話だが、今のフェイトに説得を聞いてもらえるほど、なのはと話した時間は短く頼りないものである。

「その上で、ハラオウン艦長はジュエルシードではなくフェイト・テストロッサに対する指示を下したんだ」

だが悔しげに俯くなのはに、ムーヴは優しく諭すように告げる。

言われて初めてなのは、クロノが下した指令がフェイトにのみ限られた内容であったことに気づき、ハッと目を見開いて青年の方へ振り向いた。

クロノはモニターに目をやったまま無言を貫いているが、否定をしないところをみるにそれが間違っていないことを示していた。

「管理外世界であるこの世界にいる限り、我々は限られた資材でしか行動する他にない。もし封印に成功したとしても、余力を残したフェイト・テスタロツサにジュエルシードを奪取される可能性もある。……その際局員が負傷したらどうする？ 消耗の補給も、応援もこの世界では期待できないだろう」

「うっ……」

「ハラオウン提督の決断は、人情と任務を天秤にかけた上での最善だ。彼女は、この艦の人間の命を預かっているのだから……俺たちは動かないんじゃない。動けないんだ」
なのはは今度こそ返す言葉を失い、唇をかみしめてモニターに映るフェイトを苦しげに凝視する。

デバイスから発している光が徐々に弱まり、金色の刃が小さく脆くなっているのが見える。大規模な儀式魔法を行使し、ジュエルシードの暴走体を七つ同時に相手取っている以上、その負担は計り知れない。

そんな彼女を放っておくことは、なのはにとって拷問のような苦痛である。しかしそ

れが、フェイトを過剰に傷つけることなく救うことに繋がるのだと聞かされてしまつては、なのにはもう手を出すことはできない。

「フェイトちゃん…」

大人の意見に異を唱えることも、現状を打破できる策を思いつくこともできない。あまりにも無力な自分自身に嫌気がさし、皮に爪が食い込むほど拳を握りしめるしかないのはが、沈痛な表情でうつむいた時だった。

「ABSORB QUEEN. FUSION JACK」

モニターに映らないどこから一瞬だけ、しかし確かな強い光が瞬いた。

と思った直後、フェイトに迫りつつあった竜巻の一つの側面で激しい水飛沫が生じ、衝撃とともに大きくのけぞるように弾かれた。

フェイトはなんの前触れもなく生じた波動に目を見開き、そして目の前に現れた青い影を凝視し言葉を失っていた。竜巻きからフェイトをかばうようにして宙に浮いているその人物は、この場にいるはずのない相手だったからだ。

そして驚愕に言葉を失っているのは、アースラ艦内の局員たちも同じだった。

「な——」

中でもクロノは、暴風雨の中で堂々と竜巻を前に立ちはだかつているその人物を凝視し、やがてきつく睨みつける。

リンディやエイミイも口を開けて間抜けな表情を晒し、地上本部の面々に至っては呆れと怒りがなймаぜになつた複雑な形相になつていた。

「何をやってるんですかあなたは!?!?」

クロノの怒号に、青い騎士——アインはちらりと面倒臭そうな表情で横目を向け、困つたように頬をかく。

通常時の姿とは異なり、アインの甲冑はどこどころが金色に染まり、高貴な輝きを見せつけている。赤いラインが入つた胸の鎧のスピード型の装飾は、翼を広げた鷲の紋章エンブレムが出現していて、正面の敵に鋭い眼光を向けている。

何よりも変化しているのはその背部。両肩からマント状に広がる真紅の翼が、飛行魔法の使えないアインに天空を舞う能力を付与していた。

異形の翼を得たアインは、小さくため息をつくときクロノに背を向け、刃の伸びた剣を担いで口を開いた。

『……さあな、気がついたらここにいた』

「ふざけているんですか!?!? あなたのやってることは、立派な命令違反ですよ!?!?」
『まあ、そう言われても仕方がないのは確かだな』

クロノやアースラの局員達だけではない。フェイトやアルフにまで疑惑の視線を向けられるアインは、流石に居心地悪そうに目をそらす。

裏切りにも等しい勝手な行動を諫めようと眉間にしわを寄せるクロノだが、アインは苦笑しながらそれを遮った。

『だがクロノ、悪いが私は私の好きなようにやらせてもらおうぞ』
「なっ……」

勝手な行動に加えて、勝手な予告まで口にするアインに、クロノは今度こそ空いた口が塞がらない。

苦笑を消し、無表情になったアインは周囲で渦巻く竜巻を睨みつけ、鋭い剣の切っ先を突きつける。

『私は、自分が正義の味方だなどと思ったことは一度もないが……今のお前達と同類扱いされるなど全くもって御免だ』

吐き捨てるように告げられ、アースラの面々に怒りの炎が灯る。リンディ達のフェイト達への気遣いを理解している彼らにしてみれば、アインの発言はその優しさを真つ向から否定するようなものであった。

しかしそんな彼らの憤りに何の反応も示さず、アインは近づいてきた竜巻を弾き飛ばしてからさらに告げる。

『苦しむ子供を守ることもできず、何が正義の味方だ』

「そんな……そんなのは子供の戯言でしかない!!? 僕らには、そんな甘えは許されて

……」

『なあ、頼むよクロノ』

雷光を纏った斬撃で竜巻をねじ伏せ、アインはサーチャーに振り向く。

理想を押し付けるようなアインの態度に物申そうとしたクロノは、モニター越しに向けられたアインの表情に思わず息を飲み、返す言葉を失った。

『私に……お前たちを見限らせないでくれ。お前たちが正義の組織を名乗るなら……それに見合う意思を見せてくれ』

アインは、いまにも泣きそうな表情でクロノ達を見つめていた。大切な宝を捨てなければならぬ、そんな極限の状況で浮かべるような切なげな微笑みを浮かべ、アースラにいるみんなのこゝろを見つめていた。

できることなら、その決断を自分にさせないでくれ。

そんな言葉が聞こえるような、苦しみと悲しみが混ざり合った痛々しい表情だった。

『私には戦うことしか……壊すことしかできない。でもお前たちは違うだろう……ただ最善を尽くすんじゃないくて、最良の結果を導き出すことができるだろう?』

「何を……言つて」

『消耗を恐れているなら私を使えばいい。私を使って少しでも結果が改善されるのなら……私は喜んでこの身を捧ぐ』

迫り来る竜巻を難なく弾き飛ばし、フェイトとアルフをその身一つで守り続けるアインに、アースラにいる者達はかける言葉が見つからない。

立ち尽くすばかりであつたなのは、たつた一人で全てを的に回してでも戦おうとしているアインの姿を凝視し、声すら出せずにいる。しかしそれは決して嫌な光景ではなく、むしろそれを見たことで視界にかかつていた靄が急速に晴れて行くような不思議な感覚に陥っていた。

『だから私は、いまでもここにいるんだよ』

激しい水飛沫とともに吹き飛ぶ竜巻と青い光を見据えながら、アインはキツときつく歯を食いしばって告げる。

組織としてでも、正義の味方としてでもない。

自分の背中を見て育つ幼き命に、そして自分自身に落胆させないために、青き騎士は全てを背負つて剣を振るい続ける。己の選んだ道に一切の後悔を残さないために、ただひたすらに戦いを挑み続ける。

『大人が現実を見て、諦めてもな……子供の夢は、壊しちゃいけないんだよ……！』

雄叫びとともに再び剣を振るうアインを、アースラ艦内の者達はただ声もなく凝視し続ける他にない。

呆れ、諦観、苛立ち、失望、驚愕。あらゆる感情が一点に向けられる中、少女だけが

柔らかに、安堵の微笑みを浮かべていた。

——ああ、やっぱりアイさんはアイさんだ。

4. 夢を真に

「ハア……これでまた始末書地獄の再来だな。今度は何ヶ月拘束されることやら」

近づいてくる竜巻を剣撃で弾き飛ばし、アインは気だるげにそう呟く。

よく見れば、竜巻同士は互いに融合しようとするかと近づいてきているのだとわかる。一つずつ力尽くで魔力を霧散させ、一時的に動きを止めることは可能だが、残る六つを放置するには少し危険な状況のようだ。

格好つけて介入したはいいが、結局はフェイトの盾にしか慣れていないことに気づき、アインの眉間に小さくシワが寄った。

「……あんた、どうして」

微妙な表情で立ち尽くすアインの背に、戸惑い気味のアルフの声がかけられる。満身創痍に近い状態のフェイトに寄り添いながら見つめてくるその目には、アインへの疑いと主人が無事だったことへの安堵が入り混じっていた。

迫り来る竜巻を蹴り飛ばし、啞然としたままのアインはニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「大した理由じゃない。……子供を守るのは、大人の役目だ。ただそれだけのことだよ」

アインがそう告げると、アルフはますます懐疑的な視線を向けてくる。

別に笑いを取りたかつたわけではないが、一切気を許す気配を見せない二人の態度に若干アインのやる気が減ってしまう。それなりに交流があるのだから少しぐらい態度を軟化させてくれてもいいのではないかとも思ってしまう。

どうしたものかと虚空を見上げていたその時、アースラと繋いだままであった通信から何やら騒がしい声が聞こえてきた。

『ごめんなさい!! 高町なのは…指示を無視して勝手な行動をとります!』

『君…?!』

『なのはさん…?!』

アインにとっては弟子に近い少女の慌てた様子の方と、それを止めようとするアースラの面々の声に、アインの片肩が上げられる。

久々に聞いたなのはの声は明るく弾んでいて、どこか吹っ切れたような軽さを持っている。最後に顔を見たときは打ちのめされたような表情にしまったのに、何があったのかとアインは首をかしげる。

「……あいつら」

罰を受けるのは自分一人でいいと考えていたアインにとっては招かれざる客である。しかし違反行為を行っているアインが注意するわけにもいかず、同時になぜか胸の奥か

ら暑い感情が湧き出してくるのを感じた。

転送装置の光の中から、純白のバリアジャケットをまとった少女が飛び出してくるのを見守り、アインは自分でも知らない間に微笑みを浮かべていたのだった。

クロノは怒り心頭といった様子で、モニターに映る大災害の中に乱入する少女と少年を凝視する。

妙な度胸のある少女達だと言うことはわかっていたが、あの騎士に影響されてここまです堂々と命令違反を起こすとは思ってもみなかった。最初に顔を合わせた時の素直な良い子という印象が、あつという間に塗りつぶされてしまった気分だ。

「君たちまで何をやっているんだ！ マンダリン陸佐の話を聞いていなかったのか!!」
しかしこのまま放置するわけにはいかない。今の所フェイトに攻撃してくる気配はないが、それでも十分危ない行動に出ている。彼女達への危険を考えれば、今すぐにも連れ戻すべきであった。

しかしそれを、クロノの肩に手をおいて止める者がいた。

「やめておけ、クロノ。もう無駄だ」

呆れたような、あるいは安堵したようなため息をついたサクソが、眩しい者を見るように目を細めてアインとなのは達が集まっている光景を見つめる。

隣に立つムーヴも懐かしい者を見るような穏やかな表情を浮かべ、フェイトに必死に語りかけるのはと疑いながら距離をとっているフェイトを見つめる。

フェイトはアインを盾にするように身を隠し、なのははそんなフェイトの態度に悲しげに眉尻を下げている。災害の中にいるとは思えないような微笑ましい光景が、そこには広がっていた。

「二度これと決めて走り出したあの子たちは、もう俺たちの手では止められまい」

もうすでに説得を諦めているようなサクソの言葉に反論しようとするクロノだったが、澄んだ真つ直ぐな目でじっと見つめ返されると形容しがたい何かを感じ取ったように、やがて苦虫を噛み潰したような表情で口を閉ざした。

サクソは黙り込んでしまったクロノの肩を軽く叩き、ムーヴとともになのはが使用した転送装置に向かって歩き出した。

「さて、では俺たちも行くとしようか」

「そうですね」

「マンダリン陸佐!!? カムシン陸尉まで!!?」

ハツと我に帰ったクロノは、物のついでだと言わんばかりに軽い態度で現場に向かうとしている二人に目を剥く。

放置するならまだしも、まさか一緒になつて命令違反を行おうとは思っておら

ず、不敵な笑みを浮かべる二人を信じられない者を見る目で凝視していた。

「あなたたちまでアルデブラント陸士の言うことを……!」

全ての原因とも言えるアインを苦々しげに睨みつけるクロノだったが、すでに通信は切られてしまったために文句をいうこともできない。

味方を危険に巻き込む迷惑な存在と認識し、険しい表情で黙り込むクロノに、サクソはため息をつきながら告げた。

「あの子たちにとつて、俺たちは魔法使い——夢と希望を叶える存在だ。その夢を、俺たちが潰すわけにはいくまい」

「そんなもの……屁理屈です!!? 夢で任務は果たせない……いつか夢は覚め、子供は現実に押しつぶされる!!?」

「だからこそ、俺たち大人が子供の夢を守らねばならんのだよ」

サクソは苦笑しながら、自分に言い聞かせるように吠えるクロノを見やり、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

表面上は見えないが、内心では激しい葛藤と戦っている少年が、サクソにはいじらしくて仕方がなかった。

「当然、お前もだぞ。クロノ」

「……………」

口では厳しいことを言うクロノだが、実際は真つ直ぐな信念を持った熱い男である。犯罪に加担しているとはいえ、いたいけな少女が苦しむ姿を見て何も思わないわけではない。

しかし根が真面目なため、セオリー通りにしか動けない融通の効かなさがあった。少女一人の無事と確実な任務の遂行、それらを天秤にかけてどちらを優先すべきかと言う答えを、一つしか見つけられずにいた。

「クロノくん、ここは君の負けだよ」

「！ エイミー……」

迷うような表情のクロノに、いたずらっぽいな顔顔を浮かべたエイミーが告げる。

フエイトが苦しむ姿にわずかに表情を歪めていた彼女だったが、いまはもう心底安堵した様子で肩の力を抜いている。

気づけば、他のオペレーターや魔導師達もいつのまにか、同じように安堵の表情を浮かべていた。

「子供の夢を守る、世界も守る。両方やらないといけないのが、わたしたち管理局の辛いところよね」

リンデイも苦笑し、モニターの向こう側で二人の少女に挟まれて頬をかいているアイズに目を向ける。

無茶ばかりをやっていた昔と何も変わらない、きつとずっと変わることはない、身勝手
手で向こう見ずな彼の騎士の姿。その光景に、諦観とともに安堵も覚えてしまうのだから、
自分も相当彼女に毒されてしまっているようだ。

同じく憑き物がとれたかのような上司の、母に様子にクロノはすっかり呆れ、深いた
め息とともに肩を落とす。

「甘すぎる……全くもって甘すぎる……!」

ジンガーもナディアも、リンディ達の態度の変化に納得できなさそうに表情を歪め、
アインをモニター越しにきつく睨みつける。

しかしそれは、命令一つ聞けない身勝手な裏切り者に対する憎悪などではなく、やる
べきことを先取りされた嫉妬の感情のように見えたが、二人ともそれに気づくことはな
かった。

他の地上本部の面々も悔しそうに歯をくいしばる中、インシングニアだけがどこか見直
したような穏やかな表情を浮かべていた。

「仕方がないわね。たった今より、マンダリン陸佐、カミジヨウ陸尉両名の戦闘行為を許
可します! ジュエルシードの暴走を抑え、高町なのはら4名の安全を確保すること!

……それと」

ため息をこぼすと、その直後にリンディは艦長としての威厳を戻し、部下達に新たな

命令を下す。

しかし口元にだけわずかに、聞き分けのない子供に向けるような呆れ気味の笑みを浮かべてみせた。

「勝手に出ていった大きな子供にお説教をしなければならぬので、引きずつてでも連れてくること。……いいですね？」

「フツ……了解した」

「あ、あんた達……」

転移の魔法の光の中から現れた二人の魔導師、なのはとユーノの姿を目にしたアルフは、信じられないといった様子で立ち尽くす。

普段の彼女であれば、二人をフェイトの邪魔をする障害として全力で排除しようとしたかもしれない。それほどまでにアルフには余裕が失われ、フェイトを守ることに必死になっていた。

「ユーノ、しばらくこいつらを抑えつけろ。一撃で仕留める」

「はいー！」

横目だけを向け、淡々と与えられるアインの指示に、ユーノはやる気を見なげらせた声で応じ、両手から緑色の鎖を発射させる。

魔法の鎖は激流の塊である竜巻を縛り、その進行方向を無理やり一点に絞られる。しかしやはり七つ同時に拘束するのは難しいのか、脂汗を流すユーノはきつく歯を食いしばり、ズルズルと引きずられつつあった。

「手伝って、フェイトちゃん。みんなであのジュエルシードを止めよう」

しかしアインの切なげな言葉に、そしてなのはの真っ直ぐな瞳に見つめられ、彼女達を敵と見なすことができなくなっていた。

だがそれでも、目の前にいるのはずっと敵対し続けていた相手である。心無い言葉を浴びせかけたこともあれば、傷つけたこともある。ずっと差し伸べられてきた手を振り払ってきた自分たちが、どうしてその手を掴めるだろうか。

「……私は」

冷たく振る舞い続けていたフェイトの表情に、迷いが表れる。苦しくて辛い、痛む心が差し出された手を望んでいるのに、これまで犯してきた罪への罪悪感がそれを掴むことを邪魔する。

なのはの、アインの想いを疑ってしまい、無意識に見えない壁を作り始めてしまったフェイトが、うつむき気味に目を逸らす。

【Divide energy.】

「……！」

レイジングハートの宝玉が赤く輝き、バルディッシュの金の宝玉に向けて桜色の波を届かせる。なのはの持つ魔力を半分、デバイスを介してフェイトに流したのだ。

なのはのフェイトに勝るとも劣らない豊潤な魔力が、墜落しかけていたフェイトに活力を取り戻させる。そこらの魔導師ではできない、なのはのような魔導師にこそできる荒技であった。

〔Power charge.〕

「二人できつちり……はんぶんこ！」

〔Supply complete.〕

ちようど同じ魔力量を与えられ、バルディッシュに光が戻る。同時に不安定だったフェイトの飛行も落ち着き、青かった表情もかなり回復する。

それでもためらいの表情を浮かべるフェイトを見て、アルフは渋い表情でなのはとアインを睨み、そして竜巻とそれに対処するユーノに目を向ける。複雑そうに眉間にしわを寄せていたアルフは、やがて諦めたようにため息をつき、その手から橙色の鎖を射出した。

「あーあー。見てらんなくて手伝っちゃったよ」

呆れたような、しかしそれでいて喜ばしそうな声でアルフがぼやき、竜巻に鎖を巻きつけて思いつき引き寄せる。

竜巻を押さえつける力が増やされ、徐々に一点に集められていくと、ユーノはホツとしたように表情を綻ばせ、不敵な笑みを浮かべるアルフと視線を合わせた。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれているうちに！ 私たち三人で、せーので一気に封印!!？」

標的が一箇所に集められていくのを確認し、なのははレイジングハートに魔力を注ぎ込み、封印砲の準備を進める。いつもより魔力がみなぎっている気がし、かつてない威力の魔法が完成していく。

何も答えられず立ち尽くすフェイトは、手に持ったままのバルディツシュの刃が修復されてく光景を目にして言葉を失う。

命令したわけではない。バルディツシュが自らそれを行なっているのだ。

「バルディツシュが…自分の意志で…！」

愛機からの言葉はない。しかし力強く輝くその光の刃が、まるでフェイトにこう告げているようだ。共に、戦えと。

フェイトの瞳に宿っていた迷いが薄れ、キツと決意の光が宿るのを目にする、アインはニヤリと笑みを浮かべて竜巻の方へと視線を戻した。

鎖で拘束された竜巻は一定の距離を保ったまま、一箇所にまとめて繋ぎとめられていく。あとはもう、暴走する魔力をまとめて吹き飛ばせるだけの一撃を叩き込んでやるだ

けだった。

「さあ行くぞ!!?」 思いつきりぶつ飛ばしてやれ!!?」

真紅の翼を広げ、アインはブレイラウザーを掲げるとホルダーを展開し、四枚のカードを抜き出して剣の溝に差し、スライドさせていく。

【SLASH, THUNDER, METAL, MACH】

斬撃の蜥蜴、雷撃の鹿、鋼鉄の三葉虫、疾走の豹。四種の異能力を持つ魔物の力が解き放たれ、アインの甲冑に集められていく。

雷のような光となってティアラから放たれた雷電が、甲冑を伝わって剣へと移っていくと、凄まじい嵐のような力が放出され始めた。アイン自身が暴風となったかのような、そんな迫力を醸し出し始めていた。

(うん、やっとなわかった)

竜巻に向けて、三人の魔導師が向かっていく光景を目にし、なのは小さく笑みをこぼす。

フェイトに会った時から、アインと自分の因縁を聞かされた時からくすぶっていたモヤモヤとした気持ちだが、いまこの瞬間かき消されていくのを感じる。

見えなくなっただけに不安を抱き、無意識に視線を逸らし続けていたものがいま、はつきりと見えてくる。

（一人ぼっちで寂しくて悲しい時に、一番してほしいことは……大丈夫？ って聞いても
らうことでも、優しくしてもらうことでもない）

隣に立っている二人を見やり、くすぐったそうに笑うなのはの手の中で、桜色の光が
徐々に収束していく。

迷いが晴れた少女が紡ぐ魔法は、これまでとは比べ物にならない精度を誇る。全身の
コンディションは最高潮に達し、スムーズに体内の魔力が魔法陣に送られていく。

（あの日、一人ぼっちになりそうだった私に、あなたが教えてくれた）

金色の光を大鎌に集めていくフェイトのさらに隣で、青い雷光を纏うアインの姿が見
える。

彼女はずっと変わらないままだった。泣いているばかりだった自分のそばにいてく
れたのは、贖罪のためだけではなかった。それが彼女にとって、なのはに必要なことだ
と思っただから、そうしてくれたのだ。

ただ隣にすることがどれだけ救いになるのか、それが今なのはようやくわかっ
た。

（今度は私が、フェイトちゃんに伝える番だ……!!?）

桜色と金色の光が、曇天の下で眩しく輝きを放つ。限界まで放出された魔力がデバ
イヌに集い、強大な力を生み出していく。

三人の間にはまだわずかに距離が空いている。しかし今は、同じ方向を向いている。そのわずかな一歩が、なのはには嬉しくて仕方がなかった。

「せええ——のっ!!?」

なのはが率先して音頭を取り、封印砲の砲口を竜巻に向けて構える。キラキラと輝く桜色の星と放電する金色のいかづちがひときわ輝きを増していく。

そして次の瞬間、なのはの声でタイミングを合わせた三人の魔導師は、限りなく同時に魔法を発動させていた。

「サンダー……………レイジツ!!?」

「ダイバイ——ン、バスタ——つつ!!?」

ライトニング・テンベスト
「雷鳴の暴風オオオ——!!?」

金色の巨大な斬撃が、桜色の閃光が、青色の暴風が竜巻の集合体に向けて放たれ、一つに合わさって激流を吹き飛ばしていく。

轟々と渦を巻いていた激流はさしたる抵抗もままならず消し飛び、残された七つのジュエルシードは三色の閃光の中に飲み込まれていく。邪悪な輝きが、一瞬にして神々しい光に塗り潰されていった。

天に渦巻いていた黒雲までもが散り散りに吹き飛ばされていく光景に、アースラ艦内の面々は呆然と立ち尽くしていた。

「すごい……!! ジュエルシールド7個、一発で完全封印!!?」

「なんてデタラメな……」

「でも、凄いわ……!!」

クロノは頬を引きつらせ、エイミイとリンディは戦慄の表情を浮かべながらも、興奮したようにモニターを凝視している。インシグニアも同じように、とてつもない一撃を見せつけたアインをこれでもかと目を見開いて凝視する。

ジンガーやナディア、地上本部の局員たちは派手な大技を披露した年下の少女たちと嫌われ者の女騎士を悔しそうに凝視し、しかしそれでも感嘆に似た唸り声をあげる。

転送装置の前で備えていたサクソとムーヴは、すでにジュエルシールドが反応を消していることにふつと苦笑を浮かべた。

「…我々の出番は、なかったようですね」

「そういう日もあるだろう」

二人ともやや不完全燃焼気味だったものの、何処と無くわかっていたようにため息をつき、晴れ渡った空の下で佇む少女たちをまぶしそうに見やる。

じつとまつすぐな瞳で見つめ合う二人の少女たちを、大人たちは微笑ましそうに見つめていた。

「フェイトちゃんに言いたいこと……やつとまとまったんだ」

すつかり風いだ風の中、漣の音だけが聞こえてくる心地のいい空間の中で、なのははフェイトを見つめながら告げる。

フェイトはその表情に緊張と戸惑いを織り交ぜ、答えを見出したような明るい表情を見せる少女を見つめ返す。数日前までは迷ってばかりだったはずの少女が、今は逆に自分を圧倒する決意を見せていることが不思議で仕方がなかった。

「私はフェイトちゃんといろんなことを話し合つて……伝え合いたい」

なのはは戸惑うフェイトの気持ちも察しながら、優しい微笑みを浮かべて手を伸ばす。

最初に鮮烈な出会いを経験し、敵意と拒絶を受けながらもどうしても見過ごすことができなかつた相手。どうして出会つたばかりの女の子にそんな想いを抱くようになったのか、なのははもう気づいていた。

「友達に、なりたくないんだ」

くすぐつたそうな、気恥ずかしそうな笑顔を浮かべ、なのははフェイトにそつと手を差し出す。

自分のためではない、誰かのために一生懸命に頑張る、一人ぼっちの寂しそうな女の子にできる最も大きなお節介。自分がかつてしてもらえたことを、目の前の女の子にも

してあげたかった。

フェイトはただ、困惑した様子で差し出された手をなのは目を見比べ、不安げに目を伏せて視線をそらそうとする。

しかし目の前の少女が決して目をそらそうとしないことに気がつく、助けを求めるように使い魔を、そして青い騎士に目を向ける。

使い魔もまた戸惑い反応を返すことができず、騎士は微笑みを浮かべながらフェイトを見つめ返す。

なのははただ、静かにフェイトの答えを待っていた。

徐々に、徐々に距離を詰めていく少女たちの手が、そつと触れ合いそうになった時。ビキツと、何かが割れる音がした。

「……？」

少女たちは目を見開き、視界の端に映る奇妙なものに目を奪われる。

ガラスにビビが入ったような、しかし今まで聞いたことのない耳障りな音の正体。それを目にした瞬間、少女たちは言葉も忘れてその場で凍りついてしまっていた。

空に入った亀裂—— 比喩ではなく空間そのものが砕かれ、どこへつながっているかわからない穴がぽっかりと口を開けている。底なしの穴を覗いたかのような恐怖が噴き出し、少女たちをその場に縫い付けていた。

その穴の奥から、一対の真つ赤な目がギロリと、こちら側を覗いているのが見えた。

5. 邪神降臨

それは、なのはとフエイト、アインが高出力魔法方法を発動し、七つのジュエルシードを一齐に封印するわずか数秒前のことだった。

アースラの機材が一齐にアラートを鳴らし、艦内の全員に事態の危険度を叫び伝える。オペレーターたちの前の景気は全て異常な数値を叩き出し、センサーの類が壊れるのではないかというほどの変動を見せていた。

「次元干渉……!?」 別次元から本艦・および戦闘空域に向けて高次魔力きます!!?
あ、あと6秒!?」

「な……!?」

エイミイの報告に、クロノもリンデイもその表情をさつと変える。

途端に時空間に停留しているアースラに、大きな揺れが襲いかかる。局員たちは震える艦内で必死に踏ん張りながら、職務を全うしようとして計器にしがみつき、モニターを睨みつける。

リンデイも艦長席で踏ん張り平静を保とうとするが、その表情には隠しきれない狼狽が現れていた。

「へ、これは一体……!?？」

「まさか、これってクロノくんが言っていた……!?？」

次元を跳躍する力は生半可なものではなく、非常に膨大な魔力と技術力が必要となる代物である。もしも個人でそれが使用できる場合は、想定外の場所からの強力な魔法攻撃にも使用できる。

そうそうそんな実力者は存在しないが、今回の事件について調べていたエイミイにはそれを可能とする人物に心当たりがあった。

本事件の重要参考人、ジュエルシードを求める謎多き少女フェイトが名乗るテストタロツサの名。それと同じファミリネームを持つ、悪名を轟かせる魔導師の名が、エイミイの脳裏には浮かんでいる。

彼女であればそれが可能である。そう考えていたエイミイだったが、計器に表示される数値をもう一度確認していると、徐々にその表情に変化が現れた。

「え……違う!!? 何、この反応!?？」

エイミイが凝視する、エネルギーの動きを表したモニターには、先ほどまで時空間を貫く膨大な力が映されていた。

しかし数秒たった今、その様子は変わっている。時空に穴を開けた「力」が、その穴をこじ開けるかのように形を変え、身を乗り出そうとしているように見えた。

それは、明確な悪意を持ってその場所に現れた。

そら、正確には空間の壁をガラスの様に砕いて顔を出したそれは、血のような赤い瞳でなのは達を睥睨し、奇妙な唸り声を響かせる。長く太い一本の角が生えた兜のようなものの下から覗くその目には、すべての生物に対する邪悪な感情が隠しきれていない。

ところどころに金色の装飾が施された、四つの肩の前にトランプと同じ紋章シンボルを刻んだ純白の鎧を纏い、数十階建てのビル程はある巨体で今もなお境界を割り裂いて乗りこもうとしていた。

四本の腕で境界を掴み、バキバキと世界そのものを軋ませ、徐々に徐々にこちら側の世界へと入り込んでくる光景は、なのは達にはもはやこの世のものとは思えなかった。

「——なに、あれ?」

なのはは空中で呆然と立ち尽くしながら、異空間の向こう側から近づいてくる巨大な異形を凝視し続けるほかにない。

異形ならばジュエルシードが取り憑いた暴走体と何度も相対し、その都度倒して封印してきた。何度か遭遇した白い群体の異形も、アインが率先して相手をしてきたために、無意識のうちにさしたる脅威とさえ認識していなかった。

だが、今日の前にいるこの存在だけは、明らかに格が違うとなぜか認識していた。本

能的な恐怖が、あの巨大な異形に立ち向かうことを拒絶させ、その場から逃げ出す気力さえも奪い去ってしまっていた。

「フェイト……!!?」

「?! か、母さん……!!?」

同じく立ち尽くすフェイトのもとに、時の庭園の母からの念話が届く。

慌てて我に返ったフェイトは、母の方から連絡を受けたことなど初めてであることを思い出し戸惑いながらも、突如顔を出した異形から目を離さないまま念話に応じる。

念話越し故に、母の顔は全くうかがうことはできない。しかしたとえ顔が見えなくても、上擦った声と早まる口調から、プレシアがかつてないほどに狼狽し、焦っていることは明らかであった。

「今すぐにそこから離れなさい!!?」

プレシアがそう叫んだ直後、巨大な異形が新たな動きを見せた。

ぎよろりと不気味に光る赤い瞳を動かしたかと思うと、視界に少女たちと、そして宙に浮かぶジュエルシードを捉え、面頬に似た仮面の口を大きく開いた。

その瞬間、なのはとフェイトの愛機たちがそれぞれ輝き、独自の判断で魔法を発動させていた。

【Protection!】

「放たれたのは、凡そ生物に出せる咆哮ではなかった。無数の金属片がこすれあうような、無数の獣が吠えるような、様々な不快な音を全て混ぜて一息に放ったかのような騒音が、なのはたちに襲いかかった。」

その声事態に特殊な効果があったわけではない。しかし突然目と鼻の先の距離から発せられたその音は、ジューエルシードの封印という大事を終えた後に油断した彼女たちには、あまりにも有効だった。

「く……あ……!!」

「なん……だ……この声……!!」

大気が震え、体の奥底にまで振動が伝わってくるほどの巨大な音に誰もが耳を塞ぐが、その程度で異形の咆哮を防ぎきることなどできない。防御魔法が間に合っていないければ、全員の鼓膜はなす術なく破られていたであろう。

ビリビリと臓腑が震えるという気持ちの悪さから、即座にその場を離れるという判断ができなかったのは仕方のないことだった。

しかしその誤った判断が、命取りとなった。

「! ……なのは、危ない!!」

「ふえ!!? ……なに!!?」

レイジングハートの防壁に守られるユーノが事態に気づき、すぐ近くで騒音に耐えていたなのはに叫ぶ。だが自らの手のひらで耳を抑えていたなのは、ユーノがなんといったのかもわからず振り向いて聞き返そうとする。

しかしその瞬間、なのは自分が巨大な影に覆われていることに気づいた。

軋む人形のようにぎこちなく振り向いてみれば、空間を割り裂いていた巨大な異形の片腕が、ゆつくりとなのはの方へと近づけられているのが見えた。太く長い骨のような、三本の鋭く尖った指を持つ異形の腕の影が、なのはの小さな体を覆い潰すように迫っていたのだ。

「あ……あ……」

比較することすらも馬鹿らしくなる巨大な掌を目の前にして、なのはの思考は完全に停止する。

なのはに向けられる異形の腕が、唐突にバチツと雷電を帯びる。どこか見覚えのある青い稲妻を凝視しながら、傍からのユーノの声やフェイトとアルフからの声も耳に入らず、恐怖で表情を引きつらせたまま硬直してしまふ。

「……？」

突然、そんな彼女の襟首がぐいと後方に引つ張られる。突然のことになのはは一瞬で我に返り、自身を押しつけた人物の背中を凝視して言葉を失う。

なのはとユーノを同時に押し出し、代わりに己が前に出ている青と銀の鎧。眩しい雷光に照らされながら、必死の形相で異形の前に立ちふさがる騎士に、なのはは別の理由で顔色を変えた。

「アインさんっ!!」

弾き出されたなのはが叫んだ直後、異形の手のひらに集まっていた雷電が異様なほどの閃光を放つ。

視界が一瞬で真っ白に染め上げられ、現場にいた者やアースラ艦内の局員たちは皆同時に目を塞ぐ。失明していてもおかしくないほどの眩しさに誰もが呻き声を上げ、微塵も状況を把握できなくなっていた。

「——かはっ……」

視界を潰す真っ白な光の中、割れた器から空気が漏れるような儂い声が聞こえてくる。

眩しさでまた閉じそうになる臉を無理矢理こじ開けたなのはは、徐々に収まっていく閃光の中で照らし出される、真っ黒な影を見つける。

肉が焦げた鼻につく匂いとしゅうしゅうと煙の上がる音、そして空に噴き出す緑色の霧。青と銀の鎧が真っ黒に染まり、ところどころが抉れた歪な影が、かろうじて人の姿を残していることに気づく。

燃える金色の髪と赤い翼の断片が、それがいったい誰であるのかを表していて、なのははようやく事態に気づくことができた。

「い……いやあああああ!?」

師のひとりの変わり果てた姿に、なのはの口から悲鳴が上がる。

その声に応えることはなく、全身を真緑に染め上げ、炭化し崩れた手足をボロボロとこぼしながら、アインは真つ逆さまに海に向かって墜ちていった。

確認するまでもなく、生きているとは思えない酷い状態の彼女を目の当たりにして、なのはは完全にパニックに陥っていた。

「なのは、危ない……!!」

「でも、アインさんが……!!」

必死になのはを羽交い締めにし、異形から逃れるために引きずっていくユーノの声さえもなのはは半狂乱になって拒絶する。

ユーノとてアインが墜とされたことに対して混乱していた。しかし自分よりも取り乱すなのはを見て逆に冷静になれたことで、彼らはわずかに窮地を脱しようとしていた。

同じく我に返ったフェイトとアルフもすぐさま退避しながら、言葉を失っていた。

「何なんだいあは……!!」

「…なん…だあ、ありやあ…」

アースラの艦内もまた、異常な緊張と喧騒が渦巻いていた。異形の放つ反応の異常さに計器は悲鳴をあげ、それを確認するオペレーターたちは己の正気を疑いつつある。

待機していた武装隊員や地上本部の面々も、これまで遭遇したことの無い怪物を目の前にして固まってしまっていた。

「魔力数値急上昇！ ま……まだ上がってる……!?」

「周囲の磁場に異常な乱れを観測！ け、計測しきれませんー！」

モニターの数値は異常な速度で変動を繰り返し、アラートが絶えることなく引き続き。さらには異形の放つ力が影響を及ぼしているのか、モニターは先ほどからノイズが混じりっぱなしでまともに映すこともできないでいる。

歴戦の局員たちでさえ対応しきれない異常事態が起き、誰もがその場で呆然となっていた。

「なんなの……この異常な反応!? ああ、あの巨人が起こしてるの!?」

全ての人間の視線を独占し、一撃でアインを墜とした異形は再びゆっくりと、己の巨大な腕を伸ばしていく。

その向かう先に青い七つの宝石の輝きがあることに気づくと、アルフはすぐさま血相を変えて動いた。

「！ させるかよー！」

あれが何者なのかも、どうやって姿を現したのかなど何もわからない。しかしその目的が自分たちと同じとわかった以上は、これ以上好き勝手にやらせるわけにはいかなかった。

先ほどの雷撃に注意しつつ、疲弊したフェイトの代わりにジュエルシードに向かつて一直線に飛翔するアルフ。

だが異形の腕を追い抜こうとした時、太く思い大樹のような腕がいきなり方向を変えた。

「うわっ!?？」

「きゃああつ!!?？」

ジュエルシードに手を伸ばしていたアルフは、とっさに防御の体制をとったものの巨大な壁に激突し、フェイトの方にまで弾き飛ばされてしまう。

障害物のない空中ではうまく止まれず、異形がジュエルシードを手の中に収める光景をまざまざと見せつけられる羽目になった。

「ち……くしようつー！」

顔をくしゃくしゃにして悔しがるアルフを、同じくらいに険しい表情で受け止めるフエイト。

未だ混乱の中にあるなのは抱えたユーノは、比較的冷静に異形を観察し、その行動を分析しようとしていた。

「アイツ……ジュエルシードを!!?」

『右舷損傷! システムも一部ダウンしています!!』

『次元跳躍攻撃……!!? まさかあの巨体で、魔法まで使えるとでもいうの?!』

危険なロストロギアを求める謎の異形の意図を考えていたユーノは、レイジングハートによる通信から聞こえてくる、リンデイラの切羽詰まった声に目を見張る。

時空を超えて移動してきただけではなく、離れた場所にあったアースラにまで先ほどの雷撃が放たれていたという情報に、ユーノは信じられないといった様子で言葉を失う。

つまりどこにいようとどこに行こうとも、あの異形から逃れる術はないということだ。

『なのはさん! ユーノさん! 速くその場を離れてください! あれはあなた達の手には負える相手ではないわ!』

「そ、それはもうわかってますけど……!」

「で、でも！ アインさんが!!」

『あの子はあれぐらいで墜とされるような軟な体じゃないわ!! いいから早く!!』

アインの身を案じ、危険地帯に留まるなのはにリンディは厳しい声で叱りつける。冷酷な言葉にしか聞こえないが、アインの体質を知るリンディからしてみれば彼女よりもなのは達の身の安全の方が確実に重要事項であった。

しかしなのはが躊躇っているうちに、ジュエルシードを手にした異形の視線はなのは達の方へと戻ってきてしまう。赤い二つの目が確かになのはを捉えていると、サーッと顔色を真っ青にしたユーノは凍り付いてしまう。

異形の腕が再び、なのはの方に向けられていった、その時だった。

〔FIRE, BULLET. FIRE BULLET〕

空間の境目から身を乗り出していた異形の顔面に、数発の火炎の弾丸が炸裂していく。つもの爆発を起こす。ダイナマイトのごとき強烈な爆発により、わずかな間異形の顔面付近が黒い煙に飲み込まれた。

しかし岩石程度であれば簡単に破壊できる爆発を受けても、異形の体表にさしたるダメージを負った様子はない。巨体に対してあまりにも乏しい威力であったが、その音と衝撃は十分に異形の注意を引いていた。

「……………まさか、こんな事態が起きようとはな」

ギョロリと目を向け、伸ばしていた腕を止める異形の前に、三対の翼を生やした赤いスーツの騎士が舞い降りる。

アインの鎧に似てとどこどころに金色が入った、トランプのダイヤを模した鎧を纏うサクソが、銃口に刃を備えた銃を手に現れたのだ。

「その声…サクソさん！」

「下がっている、高町なのは。ああいう化け物は……」

ホツとした笑みを浮かべるユーノを手で制し、異形を鋭く見据えたサクソは、孔雀の羽を模した翼を羽ばたかせ一気に天高く飛翔する。

釣られて視線をあげ、引っ込めた腕を再び勢いよく伸ばしてくる異形を前にしながら、サクソは銃を展開してカードを抜き出し、スリットに差し込んで能力を発動させた。

「俺達の獲物だ」

【FIRE, BULLET, RAPID. BURNING SHOT】

「ハアツ!!？」

サクソの銃から、先ほどよりも大量の銃弾が吐き出され、異形の体表に突き刺さっていく。絶えることなく生じる爆発を異形はただ受け止めるだけであつたが、やがて鬱陶しそうにサクソに向けて腕を振るう。

サクソは空中で軽々とそれを躲すと、迫る巨腕の表面スレスレを飛行しながら銃口の

刃を突き立て、飛行の勢いに乗せて切り裂いていく。

異形の体表に傷は入らなかったが、金属同士が擦れ合う不快な音が異形にも効いているようで、着実にサクソに対する敵意が集まっていた。

「そうだ……こつちへ来い！」

狙い通りに敵が動いていることに、サクソは仮面の下でニヤリと笑みを浮かべ、なのは達から遠ざかるように方向を変えて飛翔する。

明後日の方向に飛んで行くサクソに、しばらく悩むような表情になっていたアルフは意を決したように目を伏せ、フェイトの元へ急いだ。

「フェイト……!!」

「ア……アルフ……」

「ここはあの女の言う通りいったん逃げよう!! 今の状態であんな化け物とやりあうなんて無謀すぎるよ!!」

「でも……ジュエルシールドが……」

アルフの言葉の正当性を理解しながらも、フェイトはなおも異形の方へと洩る表情を見せる。魔力のほとんどを消費して封印したジュエルシールドは、ただの一つも手に入れないからだ。

アルフもそのことに関して是非常に悔しげに顔を歪めていたが、己が最も大切に思う

身構えるサクソだが、異形は今度はダイヤの騎士には目もくれず、彼が必死に引き剥がそうとしていた方へと体を向けようとしている。

最優先でアースラに回収してもらおうはずだった、なのはとユーノの方に。

『な、なんで陸佐を無視しているの?!』

サクソに指示を与えていたエイミーは、自分の策が失敗したことでやや狼狽した様子を見せている。冷静さを失っているのはを真つ先に救出するためにサクソに無理をしてもらったのに、異形の気まぐれのせいであらう全てが台無しにされつつあった。

サクソもまた啞然としながら、異形の見せていた行動を思い出してハッと目を見開いた。

「もしや奴は……膨大な魔力に反応しているのか?!」

ジュエルシールドを狙っていたことや、なのはとフェイト、そしてアインを優先的に狙っていることからそんな考えが浮かんだが、今はそんな場合ではないと頭を切り替える。

異形の目、鎧のような体表以外の場所を重点的に狙い、自分こそが相手にとって危険な存在であるとアピールし、なのは達から注意を引きはがそうと試みた。

「……つちを向け、化け物……!!」

サクソは内心で大いに焦りながら、懸命に引き金を引いて異形の頭部を狙撃し続け

る。

しかしそんなに近くで爆発が起きても、異形はそれを微塵も脅威と感じていないのか、それともより優先すべきものに惹かれているのか、サクソの挑発に全く反応を示す様子がない。

そうこうしているうちに、異形の伸ばした腕がなのは達のすぐ近くにまで迫ろうとしていた。

「ヒツ…!!」

「なのは!!」

「待て!! そつちへ行くなあ!!」

小さな悲鳴をあげ、青い顔で凍りついたかのように動きを止めてしまうのはを、ユーノが必死の形相で引つ張る。

サクソの叫びや、アースラからの通信がどこか遠くからしているように感じながら、なのはは自分の周囲の時間が遅く流れているような錯覚に陥っていた。

圧倒的な恐怖が胸の中から溢れ、少女の体を見えない鎖でがんじがらめにする。

漠然とした“死”の予感に諦めかけた、その時だった。

「——おい」

聞きなれた、そして待ち望んでいた声が聞こえた。

そう思った瞬間、なのはに向けて伸ばされていた異形の腕に火花が散り、決して浅くはない傷跡が刻まれていた。人間でいうところのどこか筋繊維を切断されたのか、まっすぐ伸びていた異形の手がぐりと落ちているのが見える。

その傷の中心に、一人の女が剣を突き立てて膝をついていた。

三つ編みでまとめていた髪は乱れ、黒く焦げた鎧には毒々しい緑の地を付着させながらも、その女は獰猛な笑みを浮かべ、異形を睨みつけていた。

「私の教え子に……!! 手を出すなあああああ!!」

凄まじい咆哮のような怒号とともに、血濡れの騎士——アインは汚れたブレイラウザーを振りかざし、異形の傷口に向けて深々と突き刺して見せた。

く重い金属音が響き渡る。緑の血に濡れた銀色の刃が巨大な異形の腕と激突し、激しい火花とともに凄まじい衝撃が発生する。

アインは力任せに異形の腕を弾き、憤怒の形相となつて異形の顔面へと勢いよく飛翔した。

「T H U N D E R , S L A S H , M A C H .
L I G H T N I N G I M P U L S E」

「ウエエエエエエエイ!!?」

カードの中の魔物の力が解放され、異形の防御をかくぐつたアインによる連続の刺突が襲いかかる。高速で突き出される月の雨はまるで無数の落雷のように鋭く速く、異形の顔面に炸裂して激しい衝撃を与える。

激しい火花に照らされ、不気味な目を閉じて顔を守ろうとする異形の憤怒に満ちた顔が見える。小さく弱い人間に一方的にやられているという屈辱が、異形の中で憎悪に変換されているようだった。

『な……なんて戦いだ。どちらが化け物か分かったものじゃない……!!』

デバイスからの通信で、アースラでつぶやくクロノの気圧されたような声が聞こえてくる。

なのはとユーノの隣に寄り添っていたサクソは、仮面の下でその光景を歯を食いしば

りながら凝視する。

かつての部下が痛々しい姿を晒して奮闘している光景に、ブルブルと拳を震わせて、内なる激情をこらえていた様子の彼であったが、不意にデバイスに入った通信で我に返った。

『マンデリン陸佐……！ その子達を連れてその空域から離れてください。急いで！』

「……………了解」

わずかに逡巡した様子のサクソだったが、傍で不安げな表情を見せているのはとユーノを見下ろしてかぶりを振る。

サクソは唇を噛みながら、断腸の思いでアインに背を向け、なのはとユーノの肩を引いた。

「行くぞ、ユーノ・スクライア。高町なのは。すぐに離脱する」

「えい？ はっ、はい！」

人間の見える戦いではない凄まじい光景に目を奪われていたユーノは、サクソに促されてようやく状況を思い出し、その指示に従う。

だがなのはやはり、その指示には納得がいかない様子でその場にとどまろうとした。

「ま、待つてリンディさん！ 私とユーノ君がいたら足手まといになるのはわかってま

す……でも、アインさんを一人にするんですか!?？」

「……悪いが、高町なのは。たとえば俺があの場合に加勢しに行つたとしても……同じことだ」

咎めるような悲痛な目でサクソを凝視し、そして今も異形の注意を引くために飛び回り剣を振るい続けるアインを見て、震える声をこぼすのは。

自分の人生の様々な場面で救つてくれた恩人に、全てを背負わせて逃げるような真似など許せるわけもない。

しかしサクソもそれを痛いほどに理解しながら、その思いに答えることはできなかった。

「今のアルデブラントの近くに行けば、あいつの攻撃に巻き込まれる可能性が高い。……下手な加勢は却つてあいつの負担になる」

「そんな……」

なのはの肩に置かれる手が、ブルブルと悔しさと怒りで震えている。それに気づいたなのはは絶句し、そして痛々しい表情で俯いてしまう。

元部下の助けになれないことを悔やんでいるのは彼も同じこと。サクソは黙り込んでしまったなのはの肩を引き、アースラから指示されたポイントへと急ぐ。

今アインのためにできる唯一のことは、彼女の戦闘の負担にならない場所へ一刻も早

なのはとユーノを離脱させるため、アースラが持ち直す猶予を得るために異形への囷を担ったアインだったが、あまりに固すぎる異形の防御にややその内心は焦りを見せ始める。

異形に対して全力で攻撃を行ってきたアインだが、最初の不意打ち以外では有効打となりうる一撃は加えられず、異形の方にも疲弊する様子はない。

しかし時間は、アインに考えている猶予さえ与えてはくれないようだった。焦れた様子の異形が、真に集中していた目をギロリと回し、転送ポイントで待機していたなのはたちの方に向けていたからだ。

「!?? クソが!!?」

アインはすぐさま空中で踵を返し、異形がゆっくりと腕を伸ばしていく先へと急ぐ。しかしその寸前で雷撃が逆り、翼を羽ばたかせたアインは急停止してそれを躲すものの、大きく時間をロスする羽目になった。

転送装置が起動するのを待っていたユーノは、止めるものがない異形が再び襲いかかるうとしている姿に気づき、恐怖で顔を引きつらせてサクソにすがりついた。

「さ、サクソさん! こっちに向かってくるよ!!?」

「くっ…!!?」

サクソは未だに動かない装置に苛立ったように舌打ちし、なのはとユーノをかばいな

がら銃を構える。せめて盾になるぐらいは、そう考えた彼だったが、アインに放たれた雷撃の規模を見る限りそれすらも叶いそうには思えなかった。

「私を無視するな、デカブツがああああ!!?」

もう一度自分に注意を引き戻そうと、獣の咆哮のような怒号とともにアインが全力で剣を振るう。狙うは最初に傷をつけた片腕、傷跡の中心に正確な一撃を叩き込むつもりで、アインは遙か頭上から急降下した。

だが刃が傷口に届く寸前、異形の目が突如アインの方に向けられ、もう片方の腕が持ち上げられる。

そしてその直後、アインに向けられた異形の手のひらから、凄まじい勢いで真っ赤な炎が放出され始めた。

『炎……!?? 雷の変換だけではなかったのか!??』

「ぐぎっ……!!?」

津波のような勢いで溢れ出す業火の中に飲み込まれ、アインは全身を焼かれながら苦悶の声をこぼす。雷撃による負傷もまだ完全には癒えきっていない中で、更なる激痛がアインにもたらされた。

しかしアインは、前身を焼かれ炭化させられながらも異形を睨みつけ、剣を手放すことなく片腕を盾にしながら接近を試みる。

「がああああ!!?」

焼かれた体が端からポロポロと崩れ落ち、少しずつ小さくなりながらそれでも灼熱の炎の中を進み続ける。盾にしている左腕がかるうじて骨を残す程度にまで燃やされ、熱がアインの眼球まで蒸発させていく。

視界を潰されてもなお、アインは凄まじい形相のまま突き進みついには業火の中から脱し、自身の勘のみを頼りにして異形の顔面に斬りかかった。

「ウエ——!!?」

相手の面にも同じキズをつけてやろうと、後手に隠していた剣に雷電を纏わせ、渾身の力で振るう。最初の一撃にも匹敵する威力と鋭さのそれが、一直線に異形に向けて振り下ろされたその時だった。

緑の血に濡れたアインの右腕が、剣とともに切り飛ばされた。

「ヒッ……!!?」

その光景を目の当たりにしてしまったのはが短く悲鳴をあげ、顔を引きつらせて後ずさる。

いつの間にか異形の手には、その巨体に見合ったとてつもない大きさの剣が握られていて、アインのものであろう緑の血液が付着しているのが見えた。

切り飛ばされた、正しく言えば剣の勢いで力任せに引きちぎられたアインの右肩か

異形の咆哮の余韻が消え、元の波のさざめきのみが聞こえる静けさが戻ってきたのは、それからかなり時間がたってからであった。

『……………、高エネルギー反応…消失^{ロスト}』

『て、敵影、確認できません』

ばくばくとうるさい自分たちの心臓の音を押しえつけようとしながら、オペレーター達が計器の示す数値を報告する。先ほどまで狂ったように数値を更新していたモニターは、今や不気味なほどに穏やかな変動を見せていた。

何も危険のない、緊急事態を脱したことが伝わっても、誰も喜ぶことができないでいた。

「……………チツ、逃げたか。いや…目的を達したからか」

穏やかな波だけが浮かぶ海面上に、剣を拾ったアインが静かに降り立つ。

ブレイラウザーは自身の限界値を覚を超えていたのか、いまにも折れそうなほどに刃こぼれし、焦げ付いて黒く染まっている。無事なのはカードホルダーの中に収められたラウズカードだけで、柄からバチバチと弾ける火花があまりにも痛々しい。

しかしそれは、今のアインの惨さと比べるまでもなかった。

乱れた髪は肩口まで燃えて無くなり、こびりついた緑の血は全身に染み付いている。スーツは勿論、鎧も大部分が欠損し、彼女の豊満な肉体がほとんど露出させられてし

まっている。

失われた右腕から滴り落ちる鮮血は未だ止まる気配を見せておらず、真下の海面を徐々に緑色に汚し続けていた。

「あの子たちはもう逃げたか……いやなものを見せてしまったな。機会があれば謝っておこう」

先頭に夢中で気づかなかつたが、異形の標的の一つであつたらしいフェイトの姿はすでになく、ただ青空だけが広がっているのが見えた。

視線を移し、サクソに守られているのはとユーノの姿を認めた瞬間、張り詰めていたアインの緊張が一気に緩んでしまった。

長く縁のなかつた、守るための戦いに勝つたのだとわかつた瞬間、アインに急速に眠気が襲いかかつてきた。

「……………私、も……………さすが、に……………げんか、い……………か……………」

実際にはたつた数分間の出来事、しかし当人達からすれば数時間にも及んでいそうに感じられた戦いは、ようやく終わりを迎えた。

ぐらりと歪む空を最後に目にし、アインの体がゆっくりと海面に向かって傾いていく。久方ぶりの満足感を得ていたアインは、頭上から急降下してくる白い影をぼんやりと見上げていた。

「アインさんっ!」

どこか怯えのようなものを孕ませた、幼い少女の泣き顔と悲鳴。

何度も聞いたその声を耳にしながら、アインの意識はぶつつりと途絶えるのだった。

♠ ◇ ♡ ♠

「……………ハアツ! ハアツ……………ハアツ……………」

玉座の上で荒い息をつく、時の庭園の主人たる大魔導師。

フェイトとアルフに撤退を命じ、海上の様子を見届けたプレシアは、そこで見た光景のせいで胸の動悸が治らずにいた。

次元を超えて出現した、おそるべき戦闘能力を有した異形の出現は、プレシアほどの魔導師であっても戦慄を覚える存在だった。

「なんだというの、あの化け物といい異形の群れといい……………地球という世界はここま
で魔境だったの…!?」

依然フェイトが遭遇した蜚ののような異形も、群としてみれば相当な危険性を持った異質な存在であった。そしてそれを一蹴するあの女騎士にも驚愕を禁じ得なかったが、今回の異形はそれをはるかに上回る脅威であると判断できた。

まともな魔法どころか、高威力の魔法を連続で食らっても耐えうる強固な鎧に、二つの属性の魔法を同時に扱う両腕。しかし体の半分は境界の向こう側から出てこなかっ

たため、戦闘能力はもつと高いものと考えられた。

地球などという田舎世界の生物では考えられない、異常とも言える存在である。

「あの男……もう少し詳しく聞いたです必要がありそうね」

動悸が落ち着いてくると、自身の協力者である男の顔を忌々しげに思い浮かべ、プレシアは眉間にしわを寄せる。

女騎士が囷とならなければ、フェイトはまず間違いなく奴の餌食となっていただろう。そんな未来を考えるだけでプレシアの背筋にはぞつと寒気が走り、震えが止まらなくなる。

しかしそこでふと、プレシアの胸中には疑問が生じた。

(……私はなぜ、あんなことを)

いままさにプレシアが抱えているのは、かつて我が子が危険にさらされたときに感じたものと同じ感情。

娘などでは決していない、ただの都合のいい人形としか認識していないはずのフェイトに抱くなど、ありえないはずの心の揺れ。それがいま自分の胸中で渦巻いていることに、プレシアは戸惑うばかりだった。

(らしくないわね)

魔が刺したのだと自分を戒め、プレシアは自身の心を凍りつかせてその考えを振り払

う。あれを心配するなどバカなことを考えるな、ただ娘と同じ顔だというだけで、思わず感情移入してしまっているだけに違いなのだ、と。

魔女としての冷たい表情に戻ったプレシアは、物憂げなため息をつくとき、誰かに言い訳するような自嘲気味につぶやく。

「私に必要なのは、ジュエルシードだけ……あの子はそれを集めることしか、いいえ、それすらも満足にできない役立たずのお人形……私の娘は、アリシアだけ」

そんなことわかりきっている。そう考え続けて、人形と顔を合わせる苦痛にも、日々体を蝕む病魔にも耐え続けてきた。

たつたいつときの気の迷いに揺さぶられる心など不要だと、思考の全てを凍りつかせていく。だが。

「なんだというの、この胸の痛みは」

いまになって何故か、そう決心するたびにプレシアの胸には痛みが走る。

自分自身が知らない自分が、その考えを咎め詰っているかのように、じくじくと胸の奥が痛みを訴えていた。

その理由を、魔女は未だ理解できずにいた。

7. アインという女

「で…なのはさんとユーノくんは、私じきじきのおしかりタイムです」

アースラの一室の中で、手を組んだリンデイがやや厳しい眼差しでなのはとユーノを見据える。

有無を言わさぬ怒気に心当たりしかない二人は暗く沈んだ表情でうつむき、肩を落として説教を受けていた。局の者達にも予想外な事態が起きたとはいえ、言いつけを破った結果とんでもなく恐ろしい目にあつたのだから。

「指示や命令を守るのは個人のみならず、集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動があなた達だけでなく、周囲の人達も危険に巻き込んだかもしれないということ…それは、わかりますね？」

「はい…」

「まあ…うちにもそれが守れない困つた子がいるのであまり強くは言えませんから、今回は特別に…あくまで特別に不問としますが」

苦虫を噛み潰したように、非常に気まずそうに告げるリンデイに、なのはとユーノはホッと安堵のため息をついた。

しかしリンディは、肩を落とす二人を再びきつく睨み釘をさす。

「ただし、二度目はありませんよ？ いいですね？」

「はい……」

「すみませんでした」

二人が心底反省していることを認めると、リンディはようやく怒気を納めて椅子に座りなおす。

目論見が甘い子供達への注意喚起は終わった。次は自分たち大人が気をつけなければならぬ事案が待っていた。

「さて……問題はこれからね……」

リンディが何について考えているのか察し、なのはは悲痛な目でリンディに問いかける。

重大な命令違反をした、リンディのいう困った子はもう一人いるはずだった。しかし彼女は今、アースラの治療室でずっと眠り続けており、一切面会を謝絶されていた。

夥しい量の血を浴びて暴れ狂う騎士の姿を思い出し、肩を震わせるのははためらいがちにリンディに問いかけた。

「アインさん……大丈夫なんですか？」

「心配はいらないわ……今のアインはどんなに傷ついても、死ぬことはない。……死ぬ

ことが許されていないの」

だから心配しなくても大丈夫だ、とリンデイは語るが、現場を目の当たりにしていたのはたちからすれば、信用に欠ける言葉であった。

焼かれ炭化した体、切り裂かれた片腕、撒き散らされる大量の緑の血、そしてアインの苦痛混じりの咆哮。全てがいまだに、鮮明に思い出せた。

「昔からああなのよ……正義感が強いって言うよりも、自分がその場に向かって解決しないと気が済まないって言うのかしら。とにかく自分が傷つこうが死にかけようが御構い無し……こっちはそのせいでハラハラしっぱなしだって言うのにな」

リンデイは昔を懐かしむような、どこか遠くを見つめる眼差しで虚空を見やる。

ユーノは前々から気になっていた、アインに対するリンデイと他の局員たちとの距離感の違いを思い出し、やけに親しげな彼女に思い切って尋ねてみることにした。

「……アインさん、いつから管理局に？」

「……ちようど、あなたと同じくらいの歳の頃ね。私はその時は本局に、アインは地上本部……こっちで言う所の警察とか自衛隊でいいのかしら？ 都市の治安を守る部隊にいたの」

リンデイは少し寂しげに微笑み、かつての記憶に想いを馳せる。

そばに控えていたクロノは無表情を貫きながら、やはり少し気になっている様子で横

目を向けていた。

クロノだけではなく、なのはたちへの説教を見守っていたエイミイも、そして待機していた他のアースラクルーたちも、そして地上本部の局員たちも、いい噂を聞かない女騎士の過去が気になるようで、離れた場所から様子を伺っていた。

「お互い本来なら顔を合わせることもなかったはずんだけど、如何してかよく関わる
ことが多かったの。ほとんど凶悪な犯罪者がらみだったけどね……思えば、あの頃が一
番楽しかったわね」

「……アインさんは、何者なんですか……?」

なのはの表情に混じる怯えに気づいたのだろう。リンディはすぐ近くに控えている
クロノやサクソ、様子を伺っているエイミイや三頭狼ケルベロスの面々に目を向け、深いため息を
ついた。

やがてリンディは覚悟を決めたように、もしくは諦めたように物憂げな表情のまま語
り始めた。

「もう……二十一年近く経つのかしらね」

リンディは記憶のページを一枚一枚めくり、ゆっくりと思い出していく。

かつて自分も、そしてミッドチルダのすべての人間が巻き込まれることとなった忌ま
わしき事件の全貌を。

その結末を担った、血に濡れた過去を持つ女騎士の姿を。

「あの子は……自分の願いのために全てを投げ出したの。地位も名誉も、そして……
自分自身でさえも」

局員たちから向けられていた嫌悪の眼差しが、わずかに強くなる。

数多の人々がその命を奪われた事件、その被害者も何人か混ざるこの場において、アインのやった行いは憎悪の対象となり得た。

それ故にまずは、アインが何者であったのかを語らねばならなかった。

「私は出会った当時から……私はあの子が壊れていることを悟ったわ」

——アイン・K・アルデブラントは、ミッドチルダにおいても名門とされる貴族の血を引いて、この世に生まれてきた。

しかしその血は半分だけで、残りの半分は何の変哲もないただの一般人から受け継いだものだった。

——アルデブラント家は、かつてベルカの戦役において「剣聖」と呼ばれた一人の傭兵が武勲により爵位を得て、貴族への仲間入りを果たした血筋であった。

子孫の多くは、ベルカ戦役において最強と呼べる剣技を受け継いでおり、一族はその戦闘能力により財を築き、現代まで繁栄を誇ってきた。

しかし、長い年月の末に高潔であったはずの一族の精神は墮落し、最強の剣技はいっしょか錆びつき、酒と欲に溺れ、富と権力を笠に着るようになっていった。

現代のアルデブラント家次期当主であった男も、例に漏れぬ下種を絵にかいたような存在であり、若かりし頃にアインの母を無理矢理手籠めにし、孕ませた後碌な援助もなく捨てるような碌でもない 男であった。

いくら貴族であろうとも許されない狼藉を働いたにもかかわらず、アルデブラント家は金にもものを言わせてその事実を隠し、味方を得られなかったアインの母は、たった一人ひっそりと生きるほかになかった。

長い間事実の隠蔽のために拘束され、もう墮ろすこともできないほど重くなつた腹を抱え、貧しい日々を生きなければならなかった。

——そうしてアインは、父親のいない娘として生まれた。

一人の愚かな男の性欲処理の結果にできた、誰にも望まれることなく作り出された命。存在するだけで母の命を蝕む呪われた娘として、アインは生まれてしまった。

自分の存在が望まれていないことを、アインは物心つく前から何となく察していた。他の同年代の少年少女たちとは明らかに待遇の異なる生活と比べてしまえば、どうしようもない虚しさを覚えながらも、アインは何も言えずにただそこに在るだけであった。

日に日に痩せ衰えながら、それでも腹を痛めて産み落とした娘を守るために必死になる母に痛々しさを感じながら、アインもまた必死に日々を生きていた。

しかしそんな生活も、そう長くは続かなかつた。

◆? ◆? ◆? ◆?

どんな世界にも、光の当たらない日陰がある。

それは人も同じことで、眩しい太陽の元を大手を振って歩くことのできない、それを許されない人間はどこにでもいる。

そんな者達が集まる、廃棄された街がある。犯罪率の上昇や人口の減少、様々な要因で住まう人間の質が低下した場所があり、それは魔法の世界ミッドチルダも例外ではなかつた。

「……母さん、今日はこんなに稼げたよ……」

スラム街の奥の奥、家と呼ぶにはあまりにも粗末な小屋。扉を開けるだけで全体がきしむその中で、母娘は暮らしていた。

ボロ布を重ねて作られた、腐臭のするベッドの上で眠る女性に、野良犬の毛のように乱れくすんだ金色の髪の少女が、数枚の貨幣を見せて儂げな笑みを見せる。

体は十分な食事も得られずガリガリにやせ細っていて、いまにも折れてしまいそうなほどに弱々しい少女——アインは母に心配をかけさせないと、気丈に笑みを浮かべて

いた。

「もう少ししたら、この間の荷物運びの分の給料が入るから、そのお金で母さんの薬を買えるよ。……余ったら、新しい毛布でも買おうか。最近、冷えてきたから……」

日に日に痩せていく母の横顔に唇を噛み締めながら、アインは母の体に新しく手に入れたボロ布を重ね、ぬくもりを与えようと努める。

凍える風がそのまま入ってくるほど朽ちた屋内だが、明日のパンさえ手に入れられない親娘にとっては貴重な寝床。

アインがこの世に生まれ、母が病魔に侵され寝たきりになってからは、この小さな空間こそが守るべき国であった。

「……………めんね」

背を向ける娘に、母はいまにも途切れそうなか細い声で語りかける。

本来であれば自分が命を賭してでも守らなければならなかった一人の子供、憎い男の血が混じっていても、それを理由に親の務めを放棄する気にはなれなかった。

だが、自分の意地で受け入れたつもりの生活も、時とともに強い後悔が募るようになっていった。

「私をもっとしつかりしていたら……あんな人に捕まることもなかったのにね……………本
当に……………めんね……………」

「……もう、その話はもう終わりだつて言つただろう？　母さんが悪かつたところなんて一つもない……大丈夫だよ」

アインは知っている、母がいつも眠っている間に涙を流していることを。何度も何度もうわ言の中でアインに謝り、あの男への恨み言を口にしながら続けていることを。

そして——いつからか、寝言の中に少しずつ彼女の本音が混じり始めていたことに、アインだけが気づいていた。

「——ごめんね。貴女を……産まなければよかつたね」

はつきりとした悲しみと申し訳なき、同時にわずかな憎しみの混ざつたその声を聞いたアインは、ピタリと手を止めて唇を噛む。しかし無理やり口元を歪め、無様な笑顔を浮かべて誤魔化すような眼差しを母に送る。

優しい母がこれ以上壊れないように、アインは必死に自分の苦しみの感情に蓋をしてきた。

——母の呟いた言葉は、アインの心を壊すには十分すぎた。

自分の命に、存在に価値を見出せないアインの根源は、この瞬間から生まれてきたのだつた。

——結局アインの母は、自分がアインをこの世に産み落としたことを後悔しながら

この世を去った。たった5歳の少女を残し、愚者に人生を滅茶苦茶にされた女は、ほかの誰かを恨むこともできずに儂く短い生涯を終えてしまったのだった。

天涯孤独となったアインはその後、何の悲運かアルデブラント家に引き取られた。アインの母の訃報をどこからか知り、仮にも血筋を引いている少女に利用価値を見出した当主——血縁上の父親が接触してきたのだ。

母への暴挙を知っているアインは当然それを拒否しようとしたが、無理矢理アルデブラントの屋敷へと連れていかれてしまった。

——そこで待っていたのは、より悲惨な地獄であった。

当主の正妻と妾の子らが、自分たちよりも圧倒的に立場の弱いアインに目をつけ、執拗に暴力や罵倒で責め立てるようになったのだ。

特に理由があつたわけではない。些細なアインの行動が気に入らず、そして父親から受け継いだ弱者への嗜虐願望が合わさり、苛立ちや日々の不満のはけ口としてアインに向けられてしまったのだ。

父親に似た悪魔のような笑みを浮かべ、殴る蹴るの暴行を加え、口汚く罵つて来る者達を、幼いアインはただ身を丸くして見上げることしかできなかった。

腹違いの兄弟や義母達、ときには実の父親にまで直接的な暴力を、中には性的な悪戯まで与えられ、アインの精神はわずか数日でボロボロに傷つけられていた。

当時のアインは、すでに生きることが諦めていた。ただ苦しみばかりが続く人生に価値を見出せず、最初のころには上げていた悲鳴もある日を境に一切こぼさなくなつてしまった。

「もう……いやだ……！」

屋敷の隅の隅、物置程度にしか使われていなかった埃まみれの小さな一室で、アインは膝を抱えながら涙を流した。

アインは屋敷に引き取られ、アルデブラントの姓を授けられた。しかしその後は養子とは名ばかりの粗末な扱いしかされず、与えられるものも最低限のものばかり。

「母さんもない……家族もない……！ あんな男に生かされるのはもうごめんだ……！
！ こんな地獄で生かされ続けるぐらいなら、いつそ……！」

一部の使用人たちからも都合のいい奴隷のように酷使され、輝や火傷を負ったアインの手はもはや子供の手には見えない。

この地獄から逃げることも叶わないアインの目は、窓ガラスを叩き割つて手に入れた鋭利なガラスの刃を映していた。

掴むだけで手のひらからは血が溢れ出す、鋭いガラスの破片の先端を自分の胸に突きつける。

「何を勝手なことをしている」

だが刃は、いきなり横から襲いかかってきた衝撃でアインごと吹っ飛ばされる。

顔の半分に行った鈍い痛みを目を見張り、ガタガタと震えながら見上げたアインが目にしたのは、気だるげながら下卑た笑みを浮かべる身なりのいい長身の男性。

甘い顔は数多の女性を虜にしそうなフェロモンを放っているように見えたが、じっと目を見れば人をものとしか認識していないような濁った瞳に気づける。

「お前の全ては俺のものだ……大した役にも立たないなら、せめて死ぬ瞬間まで俺の役に立てろ」

そういつて男性——アインの父であるアルデブランド家当主は、怯えた表情を見せるアインを愉しげに踏みつけ、悦に浸る。

アインはギリギリときつく歯を食いしばりながらも、その屈辱に耐え続ける以外になかった。

——アインに死ぬことは許されなかった。

アインの血を別の貴き血に混ぜる、つまりはどこぞの有力貴族の子を産ませ、さらなる権力を得ることを考えていた当主は、食事もとうとうとしないアインに無理矢理管を刺し、強制的に栄養を摂取させることで強引に生き永らえさせていた。

生きることも死ぬことも望まれない哀れな少女の地獄の日々は、一年も続けられることとなった。

しかしある時、アインを取り巻いていた地獄の日々は唐突に終わりを迎えた。

——アルデブラント家に何者かが侵入し、一家全員を惨殺してみせたのだ。

「ぐはっ……きき、ききさま……!!? こんなことをしてただで済むと………」

当主が血走った目を向け、目の前で自分を見下ろす黒い影を睨み唾を吐きかける。

吐いた唾に混ざるドス黒い赤色は、当主の胸の中心に突き立てられた刃によるもの。既に流れ出した夥しい量の血が、彼の命がじきに尽きることを表していた。

黒い影は舌打ちすると、突き立てた刃を引き抜き当主の首に向けて一閃した。

「ぎやああああああああ!!?」

単純作業のついでのような淡々とした作業によって、当主は無様な絶叫を上げて沈黙する。これまで散々悪事を働き、それを闇に葬り好き勝手に世を荒らし回っていた男にしては、あまりにあっさりとした最期であった。

アルデブラント家の屋敷は、あつという間に全ての気配を絶たれた。当主もその妻も、そして子供達も全員凶刃によって命を奪われ、物言わぬ骸となって床に転がされていた。

「……誰にも望まれることなく、しかして自ら命を断つことも許されなかったか。哀れだな、小娘」

最後に残った一人、屋敷の隅の物置でぼんやりと座り込んでいたアインのもとにも、黒い影は姿を現した。

彼女の装いを見て全てを察したのだろう。それまでの淡々とした動作とは異なり、一撃に全力を込めるようなゆっくりとした構えがとられる。慈悲ともとれる感情が、アインを映す目に宿っていた。

「……お前に恨みはない」

窓から差し込む月光を反射する刃が頭上に掲げられていつても、アインの表情が動くことはない。

怯えも悲しみも、解放されることへの喜びさえもない。ただただ一切の光を失った「無」の眼差しで、黒い影を見つめているだけだった。

「だが、許しは請わない」

そう短く告げられ、黒い影の振るった刃がアインの肩から腰までを斬り裂く。

わずかな沈黙の後、アインの胸元から大量の血液が噴出し、あたりを真っ赤に染めていく。やがてアインは最後まで冷え切った無表情のまま、血の海の中に倒れこんだ。

——墮ちた悪徳貴族は、こうして誰の目にも止まらぬうちに肅清された。一部の世間は好ましい顔を浮かべていたが、おぞましい事件であることには変わりがなかった。まだ年端もいかなない子供にまで手をかけた殺人鬼は当然恐れられ、一刻も早い拿捕が願われていた。

しかし被害者の中で、心臓にまで届きかけた重傷を負いながらも、アインは一命をとりとめた。生き残ってしまった。

——名門貴族を襲った悲劇はすぐさま管理局によって取り扱われ、大規模な捜査網が敷かれた。数十人が捜査に投入され、徹底的に事件は調べ上げられた。

しかし捜査は難航し、犯人の情報も何も見つけることはできなかった。無惨に殺害されていた被害者からは何の痕跡も残ってはならず、捜査によって明らかになった夥しい数の悪事の発覚により、犯行の動機も確定することは不可能に近かった。

たった一人生き残った少女——アインにも聞き込みが行われたが、明らかな暴行の痕跡の残る少女は、その質問に対する答えを一切口にしようとはしなかった。

長年にわたる傷跡を目の当たりにした魔導師たちはその痛ましさに思わず瞳目し、いつしか少女から事情を聞き出すことよりも、どうにか反応を引き出すことに専念するようになっていった。

しかしアインはどんなに優しい声をかけられたとしても、まるで良くできた人形のように沈黙するだけで、彼らに心を開くことはなかった。

——こうしてアインは牢獄から連れ出されたものの、依然として彼女は壊れたままであった。

孤児を引き取る施設にいったん預けられたアインは、笑うことも泣くこともせず、施設にいたほかの子供たちと話すこともなく、長い間一人で静かに過ごしてばかりいた。

日に日に痩せていく彼女に、事情を知らされた施設の職員たちは会話を試みるものの、そのどれもに反応を示すことはなかった。

——その日常に変化が現れたのは、意外にも数日後のことであった。

「……何だ、お前」

いつも通り、何をすることも何を見ることもなく、虚ろな目で虚空を見つめていたアインの元に歩み寄る、一人の女性の姿があった。

アインが施設にきて数週間、その頃には誰もがアインの心を開くことを諦め、いずれきたる安らぎの時までそっとしておくことが暗黙の了解となっていた。

そんな彼女に近づいたのは、アインがそれまで会ったことのない種類の人間だった。

「懐かしさに駆られて久々に来て見れば……えらく辛気くせえ顔したガキがいたもんだな。名前は？」

「……………」

「名前を聞かれたら答えるんだよ。おら、言ってみろ」

顔を両側から挟み、無理やり振り向かせた女性が乱暴な口調で問いかける。

アインは変わらさず表情を変えることはなかったが、女性の有無を言わさぬ態度にわずかに興味を持ったのか、それともさっさと離してもらおうと思っただのか、久しぶりに口を開いてか細い声を発した。

「……………」

「…何だ、言えるじゃねえか。だがその顔は頂けねえな。ガキのくせに死人みてえな顔晒してるんじゃないよ」

アインは抵抗も嫌がることもしなかった。腹が立っていた、ただなんとなく、そんなしょうもない理由で暴力を受け続けてきた彼女は、もう傷つけられることに対してなんの感情もわかなくなっていた。

しかし目の前の女性は、アインを攻め続けてきたものたちの見せる眼差しとは、全く異なる色を見せていた。

じつとアインを見つめていた女性は、しばらくしてニヤリと笑みを浮かべ、アインの

頭をわしわしと掻き乱し始めた。

「よし、決めた。お前はあたしが預かる。異論は認めねえ！ 以上！」

——アインの人生は、またも第三者の手によって変えさせられた。

しかし今回に限って言えば、その変化は決して悪いものではなかったようだった。

8. 生きろという願い

——女の名は、バサラ^{劍崎}・ケンザキ^{乃沙羅}と言った。

年齢21で時空管理局戦技教導官に任命されるほどに近接魔法戦闘に優れた騎士で、地上本部において知らぬ者はいないと知らしめた武人であった。

現在において、地上本部の守護神と謳われるレジアス・ゲイズとも旧知の仲であり、彼の指示のもと、無数の名だたる犯罪者たちとの戦いをくぐり抜けてきた歴戦の猛者だった。

幾千もの闘争剣戟の中に身をおいた彼女は数多くの事件を解決に導き、そしていつしか「無双の戦姫」の異名で知れ渡り、敵からも味方からも恐れられるようになっていった。

しかし猪突猛進型の彼女は他の魔導師と衝突することも多く、度々諍いを起こしては手を出してしまい、幾度も嚴重注意を受ける問題児でもあった。

それが原因かは知らないが、ある犯罪者が起こした事件の制圧に参加した後、バサラは唐突に管理局を辞め、ミッドチルダから姿を消してしまった。

レジアスを含む多くの人間がそれに待ったをかけ、引き留めようと近づいた

が、バサラは結局痕跡さえ残さずにミッドチルダを去った。

そんな彼女が気まぐれにミッドを再訪し、自分がかつて育った施設を訪れ、アインを見つけて引き取ったという話は、あまりにもできすぎた偶然のような話だった。

施設から引きずってきたアインを遠く離れた自宅……家と呼ぶには少々心もとないあばら家に連れ込んだバサラは、ボサボサの髪を撫でてすぐさま行動に移る。

「まずは風呂だな。ガリガリのお前には飯を食わせたいところだが、まずは手を洗うのが食い物に対する礼儀だ。だがお前は手以前に全身が汚い。丸洗いしてやるから脱げ！」

「……………」

「何だあ？ 一人じゃ脱げねえつてのか。しょうがねえから手伝ってやるよ、ホレ！」

「……ガリガリのくせにここは一丁前だなおい」

石を組んだ上に乗せたドラム缶に水を張り、真下で火を炊くと座り込んだままのアインの衣服を剥ぎ取る。

あちこちに残る傷跡や手の跡に、心ない陵辱の痕跡を見てバサラの表情にシワがよるが、彼女はそれに見なかつたふりをし、隅から隅まで泡が黒くなくなるまで洗い尽くす。そして十分に磨いたら、アインが溺れないように注意しながらドラム缶の湯船の中に

ゆっくりと沈めてやった。

しかしいつものまにか湯を沸かしすぎ、普通の人間なら触れることも叶わないほどの高温になっていたことに気づき、慌てて身体中を真っ赤にしたアインを引き摺り出す羽目になった。

危うく全身を火傷させるところであったアインは、それでも声ひとつあげなかった。

次にバサラは、台所らしい石窯や調理台のある空間に入ってしばらくすると湯気の立つ皿を持ち出してきた。

しかし皿に乗ったそれは、お世辞にも料理とは言えそうにない歪な出来であり、アインでなくとも遠慮するような代物だった。

「自慢じゃ無いが、自給自足の一人暮らしを始めてから、あたしは自炊が上手くなった自信がある。味も良くて空きっ腹が驚かない飯を食わせてやるから、残さず食えよ？」

「……………」

「見た目はアレだが味は保証するつて。箸の使い方はおいおい教えてやつから、とりあえず口に入れやがれ」

自覚がないのか、それとも開き直っているのか、バサラは笑みを浮かべながら皿の上の物体を手作りのスプーンですくい、グイグイとアインの口に押し付ける。

アインは近づけられる物体の刺激臭にも反応を示すこともなく、虚ろな目を浮かべていた。どれだけ近づけられても口を開けようとしないアインに焦れ、バサラは見せつけるように自分で口にしてはその出来の悪さに思わず吐き出す。

笑えるから周りを見せるバサラだったが、しかしそれでもアインの表情が動くことはなかった。

夜になり、就寝しようとして着替えたバサラは、寝心地の悪いベッドに連れて行こうと思っていたアインが部屋の隅で膝を抱えていることに気づき、深いため息をついた。

「どこに行つたのかと思えば……そんな部屋の隅に行かなくてもあたしのベッド使えつての。一緒に寝てやるからよ」

「……………」

「あたしにいちいち荷物みてえに運ばせる気か？ 仕方ねえな……あー、子供の体温つてあつたけー」

バサラに手を引かれ、アインは引きずられるままに妙にゴワゴワする布団の中に入れられる。

そのままバサラに抱き枕のように抱き寄せられ、豊かなふくらみに包まれる。バサラの鼓動の音が耳に届くように、赤子が安心するような体勢で抱き寄せ、バサラは静かな

笑みをたたえて目を閉じる。

しかしやはりアインは、虚ろな目に光を取り戻す様子はなかった。

何日も、何週間もそんな生活は続いた。

アインに人並みの反応をさせようと、不器用を通り越して下手くそな施しを続けるバサラと、それに無表情を貫くアイン。

もどかしい、代わり映えのない毎日に先に根をあげたのは、バサラの方だった。

「おい。なんでもいいから反応ぐらい返したらどうだろ？」

何度やっても上達しない料理を箸で掴み、アインの口元に突き出す。

アインの顔色は、出会った時よりは格段に良くなっている。固形の食べ物を食べさせることはまだできていなかったため、錠剤などを溶かした飲み物を半ば無理やり口移しで飲ませ、ようやくマシな状態に戻ってきたのだ。

「……………」

しかしアインは、自ら生きようという意思を見せずにいた。

生まれた時から生きる理由を与えられずに、母の命を食いつぶした罪悪感でのみ生きながらえていた少女。母を喪って、存在する理由を奪われた後は、人間である資格さえ奪われたあまりに悲しすぎる道のり。

気を遣い、決して無理強いをしようとはしなかったバサラだったが、そんな生活が長く続いたある日、我慢が限界に達した。

「……………オーケー、わかったよお嬢さん」

フツと微笑み、頬を引きつらせながら目を伏せる。過去の苦しみに同情はするし、心が痛くて仕方がないのはわかるつもりであり、できるだけ意思を尊重させたいとも思っていた。

だが、それとこれとは別の話。バサラの目が突如ぎらりと光り、俯いていたアインの口に無理やり箸でつまんだ肉の塊が突っ込まれた。

「上等だコラー！ 死ぬ気で食いやがれ！」

「んぶっ！！？」

いきなり喉奥につっこまれた刺激臭・衝撃的な味の物体に、アインは吐き出す暇もなく咳き込んでしまう。

どうだと言わんばかりにどや顔で見つめてくるバサラに、アインは問いかけるような眼差しを送る。ある種の劇物のような刺激がアインの感情に揺さぶりをかけたのか、アインはゆっくりとだが人間になりかけていた。

「ゲホッ……えほっ……なん、で……」

「あん？ なんか言ったか？」

「なんで……死なせ、て……くれ、ないの……？」

アインの呟いた言葉に、バサラはわずかに目を見張る。ずつと耳にすることがなかった少女の声が、途切れそうなほどに弱々しくも確かに紡がれた言葉を、聞き間違いではないかと疑ってしまう。

生きる理由はもうどうの昔にない。死ねない柵も、屋敷に閉じ込めていた悪魔たちがみないなくなったことでなくなっている。アインはもう、ゆつくりと近づいてくる最期の時を迎えるだけでよかったのだ。

「だれ、も、わたし、を……のぞん、で……ない……だれも……ひつよ、と……してない……かあさんも……あい、して……くれ、なかつ、た……！」

優しく、自分を守ろうとしてくれていた母も、最後は自身に襲ってきた苦しみで苛まれるうちに、アインを疎ましく思うようになっていった。

父親が求めていたものも、権力と財を成すための都合のいい道具。用が済めば捨てられるどうでもいい存在でしかなく、アイン自身を必要としている者は誰もいなかった。

施設にいた時もそうだった。預かった子供であるアインが死ねば、自身らの立場が危うくなるのがわかつているから、どうにか死なないように努めていただけのこと。誰も、本心からアインが存在することを望んでいなかった。

「いき、てるのが、つら、い……もう、ほつといて……ほしい……死な、せて」

「駄目だ。それはあたしが許さねえ」

涙さえ枯れた、死人の一步手前の表情でそう呟くアインに、バサラは険しい表情でそう答えた。

アインは苦しそうな目で、全てを放り出して楽になりたいアインの願いを否定するバサラを見上げる。だが、その目が次の瞬間大きく見開かれた。

「誰がお前に何と言おうと、お前が望んでいなかろうと、お前に死ぬことは許さねえ。……どこぞの誰かに苦しめられて死ぬなんざ、絶対に許さねえ」

アインを見下ろすバサラの眼には、怒りが宿っている。

だがそれは、アインが見てきた怒りとは異なるものだった。

屋敷にいた悪魔が見せていたのは、言うことを聞かない道具や家畜に苛立ちを募らせ、八つ当たりするような理不尽で身勝手なもの。しかしバサラが見せているのは、アイン自身ではなくアインのまわりのものに向けるような、どこか遠くを見るような眼差し。

アインがこれまで見た事がない感情が、そこにはあった。

「たとえお前が死を望んでいようと……あたしはお前に生を望む。苦しみの中で死のうと思うな。お前らがキは……苦しみを塗りつぶせるだけの喜びを抱いて死にやがれ」

そう告げるバサラに、アインはいつの間にか視線を逸らせなくなっていた。施設の人

間が言っていたような上つ面だけの言葉ではない、アインの眼の奥の奥まで覗き込み、自分の言葉を届かせようとするような、そんな力強さがあった。

やがて、アインが差し出された箸に口を開くようになるのは、そう遠くない事であった。

——果たして彼女が身元引受人にふさわしかったかどうかは、誰にも分らない。彼女は優しさや丁寧さとは微塵も縁がなかったし、生活が快適だったかと問われれば首をかしげるほかになかった。

しかし少なくとも、彼女はアインを途中で放り出すような真似はしなかったし、他の誰よりもアインを気遣い慈しんでいた。赤の他人であることを感じさせないほどに、常にアインのそばに寄り添い語り掛け続けていた。

施設の人間たちがいち早く匙を投げたのと同じ数週間が過ぎても、数ヶ月が過ぎて、バサラはアインのそばに居続けた。

「……あなたは、私に何をさせたいのですか？」

二人の生活が続き、一ヶ月と少し。ゆがんだ床の上で寝転んでいたバサラに、洗った食器を拭いていたアインは問いかける。

もはやアインの表情に出会った当初のような悲壯感はなく、肌は子供らしい瑞々しきを得つつある。体つきに至ってはすでに同年代の平均を上回っていたものが、十分な栄養を得ることによってより凹凸に富んで来ていた。

「何だ、藪から棒に」

「あなたは私に生を望むとおっしゃいました。…ですがただ生きることを望むには、この待遇はあまりに恵まれすぎていると思うのです」

「恵まれてるって……炊事洗濯まであたしから奪っておいてまだ何かやりたいってのか？ お前ちよつとワーカーホリック気味じゃねえか？」

「こごでもしなければ私が気分が悪いんです。というかあなたの生活は正直だらしなすぎます」

一から十までアインの世話を焼こうと奮闘していたバサラだったが、いつしかアインの手伝いたいという希望を聞き始めると、あつという間にほとんどの家事の役割を奪われることとなっていた。

もともと病弱な母の身の回りの世話をしていたアイン。質はともかく、戦うことしかしてこなかったバサラが敵うはずもなかった。

疑わしげな目で見つめてくるアインに、バサラは悩むように眉間にしわを寄せる。いまだに、見返りもなく自分を引き取る理由がわからなかった。

「……本当はもつと体が出来上がってからのにしようと思つてたんだがな。だが、まあいいか」

じつと見つめてくるアインに観念したように、バサラは腰をあげると近くの柵に向かう。

その一角に置かれていた小さな箱を手にとると、バサラはその中に収められていたデバイスを起動させ、一振りの剣へと変えさせた。

「お前には、私の剣の全てを受け継いでもらおうと思つてる。……ああ、お前がアルデブラントだから引き取ったわけじゃねえぞ？ 単純にお前が一番目立ってたからだ」

初めて見る魔導師のデバイスを興味深そうに凝視するアインに、バサラは真剣な眼差しで告げる。

アインはバサラの強い眼差しに何かを感じとつたのか、表情を引き締めてその目を見つめ返し、固く口を閉ざした。

「あたしは騎士として、弱者を弄ぶ下衆どもが蔓延らないように努めてきた。……だがふとあるとき思つたんだ。あたしだけが強いんじゃないや、いずれあたしがいなくなつたとき世の中はどうなるんだってな」

とある理由で、バサラは前線で戦い続けることが困難になった。魔導師としても騎士としても致命的な弱点を負ってしまったことで、常に全力で戦い続けることができなく

なつてしまったのだ。

故に管理局を辞めざるを得なかった。仲間たちには引き止められたが、自分自身が足手纏いになることを嫌ったバサラは自ら戦士の資格を放棄した。

だがそれでも、胸に抱いた義の心は衰えることはなかった。

「あたし一人がいなくなつたところで世界が減るわけでもねえ。でも少なくとも、鍛えてきたこの剣が無になるのは辛いなって、そう思つたんだ」

「……だから、私を」

「心の痛みを知り、胸の痛みを耐え抜いた者は必ず強くなる。…あたしの持論だ」

アインと出会つたには全くの偶然だったが、バサラにとつては願つてもみない邂逅であつた。

才能などでは測れない、アインの目に宿つていた絶望と悲劇を目にし、バサラは確信した。当時は確かに、心も体もボロボロで再起など叶いそうにない状態だったが、必ず立ち上がる未来を見たのだと、バサラは告げた。

「私は強くなるとなれるのでしようか……父親に裏切られ、母に置いていかれ、誰の手も取ることができなかつた私が」

「それでいいじゃん」

俯くアインに向けて、バサラはニツと笑いながら断言する。

訝しげに顔を上げるアインの不安を笑い飛ばしながら、デバイスを突きつけ、アインの揺れる瞳を覗き込んで自分の目の奥を見せる。

誰よりもアインに存在することを望んだ女が見せる、決して揺らぐことのない確信の光を見せた。

「100回人を裏切ったやつよりも、100回裏切られて馬鹿を見た人間の方が、よっぽど上等な人間だろうが」

惚けたように目を見開き、バサラを凝視し続けていたアインはしばらく黙り込んでいたが、やがて差し出された剣の柄を握り、強い光を宿した目でバサラを見つめ返した。

バサラはアインの見せた瞳の強さに満足げに頷き、おもむろに立ち上がる床屋の外へ向かつて歩き出した。

慌ててアインが後を追うと、バサラは小屋の外の壁に立てかけてあった二振りの木の棒を掴み、ブンブンと振って使い心地を確かめると、片方をアインに向けて投げ渡した。「いいか？ あたしがお前の一切を引き受けるからには、あたしがお前の神だ。あたしが許さない限りお前には死ぬことは許さないし、死のうとも思わせない。忘れるなよ」

「…わかりました」

取り落としそうになりながらも、受け取った木刀を構えたアインに向けて、バサラは同じく木刀を担いで説く。

これから教えるのは、戦うための力の使い方。魔導師のデバイスには非殺傷設定という都合のいいものがついているが、騎士の技はそこまで生易しいものではない。

剣で斬れば肉が裂け、槍で突けば穴が開き、槌で殴れば骨が砕け、弓で射れば急所を貫く。容易く相手の命を刈り取ることもあり得る、細心の注意が必要とされるもの。

アインもそれを、バサラのいつもとは異なる表情を見て察していた。それが自分に向けられることまでを想像し、ゴクリと唾を飲み込んだ。

そんなアインの反応に、バサラはより嬉しそうに笑みを深めた。

「じゃあ、死ぬなよ？」

「……………え？」

身構えていたアインは、なんの前触れもなく自分の目と鼻の先に現れたバサラに驚愕し、思わず目を見開いていた。

咄嗟のことで反応が遅れ、足をもつれさせて後ろに倒れ込んでいなければ、今頃バサラの振った容赦のない横薙ぎの餌食になっていただろう。

「ヒィッ?」

「目を逸らすな!!? 敵はお前が臆する姿を見せればすぐにその首を取りに行くぞ!!?

刃から目を離すな、腰を引かせるな、常に前に進み続ける!!?」

「そんな無茶な……………ひいん!!?」

厳しい声で激励し、バサラが的確にアインの首を狙って木刀を振るう。ヒュン、と無駄のない音が尾を引き、一瞬前に自分の首があつたところを木刀が通り過ぎた。

無論多少の加減はしているだろうが、それでも木刀を渡されたばかりの素人にはあまりにきつすぎる稽古に、アインは冷や汗を流して頬を引きつらせた。

「こ、殺す気ですか!?!」

「あたしにわかりやすく優しく教えてもらおうなんざ考えるな! やるとお前が決めたなら……死ぬ気で体で覚えな!?!」

「無茶苦茶です! スパルタにもほどがあるでしょうがひやあ!?!」

涙目で木刀を掲げるアインは、ガツンとぶつけられたバサラの横薙ぎの衝撃でよろめき、たたらを踏んで後ずさった。

期待しているとバサラは言った。そして自分の後を継げるとも。そのことに嬉しさを覚える暇もなく、もはや拷問の域にさえ達しかけている気がするしごきをどうにか乗り越えねばと、振るわれる木刀を睨みつけた。

(なあ、——。あたしはお前を見つけたのは偶然だって言ったけどな、ほんとにはアレ嘘なんだ)

バサラは執拗にアインを狙いながら、胸の内を隠していた本音を吐露する。

バサラは本当に後継者を探していたわけではなかった。戦士としての道を離れ、あて

もなく彷徨っているうちに自分の出身地である養護施設にたどり着いていただけで、考えがあったわけではなかった。

そして、出会った。幼い少女が、見ているだけで痛々しい姿でその場に座り込んでいるのを。泣くことも悲しむこともなく、ただそこに在るだけだった少女を。

バサラはその姿を見た瞬間から、強い既視感に襲われていた。

（お前はあたしだ。過去のあたしだ。心も体もボロボロで、誰にも助けてもらえなかったお前は、昔のあたしがそこにいるみたいで、放って置けなかった……あたしを拾ってくれた、あの人のように）

だから本当に、ただ助けたいという考え以外は持ち合わせてはいなかった。一人ぼっちで死に向かって時間をすり減らしていく姿を見ていられなくて、気づけば無理やり手を取っていただけだった。

だが、それでよかった。

「この……脳筋師匠が!!?」

一方的に攻められ続け我慢が限界に達したのか、ついにアインは自ら攻撃する側に立った。

かろうじて身につけようとしていた受け流しを土壇場でなんとか形にし、バサラの間の合いの中に入り込むと力強く地面を踏みしめ、木刀を握りしめる力を強めた。

「あああああ!!?」

あまりにも下手くそな、見て体で覚えるという無茶苦茶な指導に対する怒りが、アインに一時の力を与える。力が腕だけではなく全身に張り巡らされ、木刀の重みを利用した見事な一撃が完成する。

バサラはとっさに自分の木刀を引き戻し、アインの振るう一撃を受け止める。すると、アインの見た目からは想像がつかない思い一撃が入り、衝撃でバサラの腕にはビリビリと痺れが走った。

「……そうだ、それでいい」

もとより自分が上手に教えられるとは思ってなどいない。できることといえば、己が敵となることでアインに対戦の経験を与え、自ずと戦い方を学ぶことを覚えさせるつもりだった。

しかし今の一撃は、バサラの予想を大きく上回った。

今はまだ拙い見戯に等しい剣技。しかしアインは覚えがいいのか、それとも血がそうさせるのか、バサラの想定した以上の結果を見せていた。

「お前には才がある。経験さえ積んでいけば、この私さえ超える騎士になれる。……力は武器だ。この残酷な世界を生き抜くための。武器と戦い方さえ学べば、どんな敵にだって立ち向かえる」

本当に後継者になって欲しかったわけではない。

ただ、自分の身を守る力を、自分で道を切り開ける力を持って欲しい。
それだけが、バサラの願いだった。

9. 託された名

——アインにとってのバサラは、彼女が自分で言ったように神のような存在だった。

ただ死に往くだけであつたアインの運命を変え、それまで見えなかつた景色を見せてくれた、不器用でお人好しな英雄だった。

自分を拾つてくれた理由が本当かどうかはもうどうでもよかつた。バサラが生きることを望んでくれたから、アインは残酷な世界を生きていこうと思えた。

だが、そんな日々にも終わりは訪れることとなつた。

バサラが一度剣を手放した本当の理由、その期限が訪れてしまつたからだ。

「……お前にはもう、なーんにも教えることはない。悔しいけどさ、お前はあたしの全てを超える逸材だつたよ」

落ち葉がひらひらと舞い落ちる秋のある日、バサラは苦しい表情で自分を見下ろしてくるアインに向けてそう呟いた。

布団に包まれたバサラは、もう腕一本動かせないほど衰えた自分の筋肉を憂い、アイ

ンの目尻に滲む涙を拭ってやれないことを口惜しく思う。

バサラはかつて、ある一人の重犯罪者と相対し、負傷した。

その身に受けた傷が元で彼女は魔導師の命であるリンカーコアを損傷し、以前ほどの魔法戦闘をこなせられなくなっていた。何より重症だったのは頭部に食らった裂傷で、五感や身体能力に支障を及ぼすと判断された彼女は、やむなく剣を手放す他になかった。

その事実を仲間に伝えることなく、せめて静かに自分の痕跡を消そうと人の訪れない山奥に住居を構えたのだ。

「金は十分残してある。生活だって、今のお前なら余裕でこなせる……料理は今ひとつだけどな。でもお前ならちゃんとやっていける。あたしが保証してやるよ」

今にも重く閉ざされそうな臉を残ったわずかな力でこじ開け、バサラは傍に正座するアインに目を向ける。

一度引き受けた自分が、その役目を半ばで放棄しようとしていることに罪悪感はある。だが、いまのアインを見ると、自分の役目はしっかりと終えられたのだと思えていた。

「泣くなよ、——」。こいつは順番なのさ。ちよつとばかりし人より派手に生きてきた分、その順番が早まっちゃまったただけの話さ……お前を置いてつちまうことは、悪いと

思ってるよ」

「あなたは……!!? 私に全てをくれました!!? 人間でさえなかった私に、生きる意味を与えてくれました……! 光を見せてくれました!!?」

悲鳴の様な引き攣った声を発し、バサラを呼び止めるかの様に大気を震わせるアイ
ン。

ポロポロと、母が死んだときにも流れることのなかった涙がアインの目から溢れ出
て、止められなくなる。心臓を万力で締め付けられているかのような痛みが続き、呼吸
さえまともにできなくなっていた。

「でもあなたがいなくなったら……! 私は一体何を目印に進めばいいのですか!!? 私
がこれまで歩き続けてこられたのは、ひとえにあなたが導いてくれたから……あなた
手を引いてくれたから!!?」

アインはもう、バサラのいない時間など考えられなくなっていた。この命は全てバサ
ラによって与えられ、バサラの進む先に自分のいくべき道はあった。

しかし彼女は今、若くして命の炎を潰えさせようとしている。自分にとっての神様
が、自分の手の届かないところへ行こうとしている。

そのことが、アインには耐えられないことだった。

「また私は一人になってしま……! また孤独を強制されるのなら……なぜ私に心な

どくれたのですか!?!?」

「……お前は、もう誰かに生き方を縛られるようなやつじゃないよ」

怯える様に体を丸めるアインの頭を撫で、バサラは困った様に眉を寄せる。泣いている子供をどうあやせばいいのかなど、戦うことしかしてこなかった彼女にはわかるはずもない。

ほとんど衝動的に引き取った少女が泣きじやくる姿を見て、ようやくバサラは自分が背負った責任の重さを痛感する羽目になっていた。

「……まずは、まあ……生きてみろよ。そうすりゃ……今よりもっといろんなことがわかるだろうさ」

外に見える木々のうちの一本、枯葉がひらひらと一枚ずつ落ちている枝を見ながら、バサラはため息をつく。

枝を離れ風に飛ばされて行く枯葉が、自分の命の残量を表している様な寂寥感に苛まれないながら、徐々に重くなる臉を開き続けた。

そしてしばらくしてからふと、脳裏によぎった思いつきに目を見開き、誇らしげな笑みを浮かべてアインを見つめた。

「そうだ……お前、あたしの名を名乗れよ。名字がなかったら色々大変だろうし、あの名前は嫌いだろうからさ」

いい考えだ、と自慢げに笑うバサラに、アインはまたしても涙をこぼしてしまふ。

初めて二人が出会った時、アインはアルデブランドの名を名乗らなかつた。忌まわしき父親の血筋であるなど知られたくなく、何より自分が思いたくなかつた。

バサラは小さく頷くアインに満足した様に、深く深くため息をついて床に身を預けた。

「じゃあな……あたしは先に逝くけど、お前はもつと……遅刻して、こい……」

そう最後に告げて、バサラは弟子に、いやもはや自分の娘の様にさえ思っていた少女に見送られ、静かに目を閉じた。

閉ざされた眼差しに、アインはただただ眼から滴を落とすことしかできず、何度も何度もしゃくりあげながら俯き、声を押し殺す。

こうして、気まぐれでも偶然でも、傷ついた少女を救い一人の人間に戻してやろうとした最強の名を冠した騎士は、もう二度と帰らない旅に赴いたのだった。

「……申し訳ありません、師匠」

静かな森の中に、一つの石碑が建てられた。

自然のままの形を残す岩の表面を削り、バサラと刻まれた字は決して綺麗だと言えない出来だったが、少女がたった一人でそれを作ったと知ったならその想いの強さが窺い

知れることだろう。

木々が生い茂る静かな空間に師の体を埋め、それを建てたアインはじつと跪いたまま祈りを捧げた。

「私はどうしても、自分のために生きるということが理解できそうにありません。ただの物でしかなかった私には、存在する意味がなければ何をしたいのかわかりません」
眠る様に息を引き取ったバサラは、少し心配そうな微笑みを浮かべたままだった。自分の死期を悟りながらも、引き受けた少女がどんな道を進むのか憂いながら逝つてしまったのだろう。

アインはバサラと別れる最後の刻まで、自分が生きていることに理由を求めていた。師が望むからこれまで生きてきた。

自分が生きていることを望む人はもういない。しかし自分の存在理由だった女性の最後の願いもまた、自分に生きていてほしいというものだった。

いつまで自分は生きることが望まれるのだろうか、と自らが幸福を得ることを端から考えていないアインは悩み、考え続けた。

そして、一つだけ答えを導き出した。

「だから――」

茜色の空を見上げるアインの瞳は、何処かこの世ではない場所を映しながら、確固た

る決意を秘めている様に見えた。

時は流れ、さらに一年後。

ミッドチルダの平和を守る守護者達の集う組織、時空管理局地上本部にて、収集がかけられていた。

「——諸君は今この時より、ミッドチルダの治安を守る大いなる役割を担う事となる！」

壇上に上がり、整列した地上本部の制服を纏う局員たちに吠えるのは、大柄な体格で角刈りという威圧感を与える外見の中年男性。

岩石の様な拳を台の上につつけ、強烈な音を響かせて注目を集める男性からは、自身の志に対する絶対の自信と自尊心があふれて見える。ミッドチルダの平和を己こそが守っているのだという自負が、彼を成り立たせていた。

それを見つめる局員たちは男性の放つ威圧感に押されてか、身じろぎひとつできずに直立し続けている。

「我々が立ち向かうのは、世界を発展させられる奇跡の力を持ちながら、人道を外れた歪んだ考えを持った犯罪者たちである……！ 奴らは常に我々の監視の目をかいくぐり、己の欲望を満たすために暗躍を続けている！ それを未然に防ぎ、次元世界に恒久的な平

和をもたらすのが……我々に課せられた使命である！」

男性の言葉に確かな怒りが滲んでいるのは、現在の管理局における地上本部の扱いに對する不満のせいである。

優秀な実力者は、管理局の華と謳われる次元航行部隊みに引き抜かれ、地上本部くは慢性的な人手不足に陥り続けている。予算も片方に集中しているために備えも不十分であり、ミッドチルダの治安は悪化する一方である。

何度も現状を改善しようとして地上の重役たちは進言するものの、未だ状況が変化する様子は見られない。

故に男性は常に渴望していた。ミッドチルダの平和を守り、次元航行部隊みの連中に目に物を見せてやれる様な逸材を。

「……本日はさらに、一つだけ報告がある。来い」

男性が呼ぶと、かつかつと甲高く靴音を響かせて一人の局員の格好の少女が壇上に上がってきた。

くると踵を視点に回り、金色の髪を三つ編みにした、獅子の様な印象を抱かせる少女は局員たちを見下ろし、気を付けの体勢をとった。

多くの局員たちは少女の幼くも精錬された可憐さに目を奪われ、口を半開きにして立ち尽くしてしまう。また、一部の腕に覚えのある局員たちは、壇上に上がる少女の体運

びに無駄がないことに簡単な声をこぼし、熱く見つめていた。

「諸君らは我々と志を同じくし、守護者となるべく入局した誇り高き戦士であると思つている。こいつはそんな諸君らの手足となるためにここに来た………挨拶をしろ」

ギロリと男性に視線で促され、少女はサツとキレのある動きで敬礼をする。

年齢に似合わない、重みを感じさせる眼差しを見せる少女に局員たちは息を飲み、目を見張つて呼吸も忘れかける。自分たちの腰程度の高さしかない少女が持つ、歴戦の戦士の様な覇気に押されてしまい、すでに彼女をただの子供だとは認識できなくなつていた。

「………本日より、地上本部所属となりました」

しんと静まり返つた中、少女アインは敬礼を解いて直立する。

驚嘆、嫉妬、嘲笑、数多の思惑をにじませた視線を受け、それでも全くひるむ様子など見せず、アインは口を開き、そこに名を口にした。

「——アイン・ケンザキであります」

その瞬間、局員たちの間でどよめきが生じる。

アインが口にした苗字、それはかつて管理局でも知らないものはいないほど、敵はおろか味方をも震え上がらせた伝説の局員が名乗っていたなと同じものだったからだ。

先ほどよりも強く険しい、探る様な視線がアインに向けられる。勝手に名を借りた贋

作、実際の縁者か隠された親族か、あるいは人に言うことも憚られる禁忌によつて生み出された何者か。

そんな有象無象の視線にさらされながら、アインは氷のように表情を変えることなく、次なる指示があるまで仁王立ちし続けていた。

——だから私は、あなたのために生きます。

あなたがかつて守ろうとしたものを、あなたが戦っていたものから守ります。それが私にできる………唯一の恩返しです。

アインが生きるために掲げた誓い。

それを果たすための一歩が、この瞬間から踏み出されたのだった。

◆ ◆ ♡ ♡ ◆ ◆

「———そうしてアインは生まれた。……生まれてしまった。師の無念を晴らすためだけに生きる、兵器として」

一旦話を区切り、リンディはなのはたちを見つめてその反応を見る。

案の定、想像以上に壮絶な半生に少女達は言葉をなくし、まるで自分の痛みであるかのように苦しげな表情を浮かべていた。クロノやインシグニアに至ってはやや不機嫌そうに眉間にしわを寄せていて、憎く思っていた騎士の過去に思う何かがあることを示していた。

局員達の何人かは顔色を悪くしていて、途中で席を立ったものも少なくない。ある意味予想通りに反応に、リンディは困ったように眉尻を下げた。

「……聞きたいことは、こんなことじゃなかったわよね？ でも、アインを知ってもらうにはこの辺りから話していたほうがいいと思ったの」

「……人よりも苦勞してきたのだとわかりましたよ」

渋々といった様子でナディアが呟く。知りたかった情報ではなかったものの、現在の嫌われ者を作り上げたきっかけを知り、アインに対する印象が少しばかり好転したように見える。

それでもまだ認めきれずにいるようで、ナディアやジンガーらは複雑そうに唇を噛み締め、目をそらしている。

しかし以前よりは格段に話しやすくなったことを確信し、リンディは少しだけ安堵のため息をついていた。

「初めて出会った時は大変だったわ……まるでロボットだったんだもの。誰に対しても距離を空けて、話すことも必要最低限で……ほんと、よくもまあ友人になれたと思うわ」
アインが局員として前線に出るようになり、何度か同じ事件の解決のために顔を合わせるようになり、言葉を交わすようになった。

「色々無茶なことをしながら、戦って戦って戦い続けて……いつの間にか英雄なんて呼

ばれるようになって、ようやく私は、あの子が人間らしく見えるようになってきたわ。……なのに」

少しずつ、少しずつアインの表情に変化が現れるようになって、アインの心の傷が癒えてきたと思われる自分たちの若き日々。自分だけではない、多くの人との繋がりによってアイン・K・アルデブラントは再構築された。

それが全て水泡と帰す事件を思い出し、リンデイは怒りを押し殺したような険しい表情で俯いてしまう。

なのは小さく息を呑みながら、黙り込んでしまったリンデイの顔を覗き込んだ。

「何が、あつたんですか……？」

「アインがああなつたのは——もう十五年は前になるわ」

忌々しげに、しかしその感情をなのはに伝えないように、リンデイは低く押し殺した声で語り始めた。

第Ⅷ章 仮面の裏に涙を隠して

1. 石板（モノリス）

どこまでも長く続く暗い石造りの通路を、コツコツと靴音を反響させながら歩く。

そこは道の隅に配置された光源でかろうじて足元は見えるが、手に持った電灯がなければ互いの顔も見えないほど密閉された、息苦しい空間。ただ通ることのみを考えて直角にまっすぐ掘られたその道を、ケインズの案内の元にアインやサクソ、リンデイがやや緊迫した面持ちで進んでいく。

「……この場所を知っているのは、元BOARDの職員の中でも一握りしかない。幹部しか知らない、最重要資料の保管庫だ」

先頭を歩くケインズが、後ろの三人に振り向くことなく口を開く。小さな声だったが、四方の壁に反響して十分アインたちに伝わり、より神経を張り詰めさせたアインたちは、睨むような険しい表情を浮かべた。

「マンダリン陸尉：君は以前私に問うたな、アンデッドはどこから来たのかと。……その答えの一部が、この先にある」

問われたサクソが険しい視線をケインズに向けた時、一同の目の前に金属の扉が現

れ、思わず足を止める。

これまで続いていた石造りの壁とは明らかに様相のことなる扉で、外側からでもかなりの分厚さと頑丈さを伝えてくる。その先にあるものがどれほど重要で貴重なものなのか、一見するだけでうかがい知れた。

「真実を知る覚悟はあるか？」

後についてきた三人の覚悟を試すように問い、ケインズはようやくアインたちの方に振り向く。

アインとサクソは最初から嘘偽りなどを許さない、といった鋭い視線で。リンディは不安気ながら、ここまでできたのだから全部聞かねば気が済まないといった表情で頷き、ケインズに話すことを促す。

ケインズはそれをじっと見つめると、小さく頷いて扉の傍に移動する。そして埃をかぶっていた蓋を開き、中のナンバーキーを押して指紋認証機に手をかざす。

嚴重な身分証明を終えるとようやく、扉から甲高い電子音が鳴り、軋むような音を立ててゆっくりと左右に開いていった。

振動により積もっていた埃がパラパラとこぼれ落ち、黴臭い独特の匂いが舞い込んでくる。そして、続いて見えてきた内部にあったそれに、アインたちは一瞬で目を奪われていた。

「……………これは」

「……………これが一体いつの時代、どの世界で作られたものかは私にもわからない。だがこの石板はあらゆる世界、あらゆる時代の節目に出現し、ある一つの遊戯ゲームを執り行つてきた」

そこにあつたものは、とても一言では言い表せない強烈な存在感を有していた。

広い暗闇の中で無数のライトに照らされ、硬い岩石の中からそびえ立つように鎮座しているのは、メビウスの輪のようにねじれた分厚い石板モリス。傷一つないその表面からは奇妙な威圧感を感じさせる光沢があり、これが決して人工物などではないことを本能的に悟らせる。

それが一体何なのか検討もつかなかつたが、アインとサクソは即座にそれが、この世界にあつていいものではないということを感じ取つた。

「全52種の種族が頂点をかけて争い合う『バトルフアイト』……それが今この世界で起きている異常現象の正体だ」

啞然としたままのアインたちをよそに、石板のそばに近づいたケインズが語る。何も語らずただそこにあるだけの石板に向けられるのは、畏怖とも嫌悪とも取れる険しい眼差しだった。

「バトルフアイトに勝利した戦士の眷属……つまり惑星上に存在する種族にはその後1万

年間繁栄が約束され、惑星の支配者の資格を得ることができる。……この石板は、それを取り仕切る黒幕が使用する端末といったところか」

「黒幕……？」

「それについてはまだわからない……ただ言えるのは、それは尋常ではない力を持った“神”に近い何かだということだ」

荒唐無稽な話に、リンデイの理解は追いつかず頭痛を感じる。生物の支配権を巡る戦いだの、1万年の繁栄だの、それを取り仕切る黒幕だの、語られる内容はもはや神話の域に達している。

アインもサクソも同じ感想なのか、ケインズに懐疑的な視線を向けて立ち尽くしている。すぐに信じろという方が無茶な話だ。

「敗北した種は石板の中に封印されているラウズカードの中に封じられ、バトルファイトに参加する資格を失う……そうして生き残った最後の一体が、唯一の勝者となるわけだ」

だが、ケインズの表情に誇張や嘘は一切含まれてはいないように見える。彼自身も疑い、しかし何度も検証を行った結果たどり着いた真実なのだ、その横顔は語っていた。するとますますアインたちは、石板に戦慄の視線を集めて言葉をなくす。一体なぜ、こんなものが出現してしまったのかと。

「一体何故、このような代物が……」

「この石板が、そしてラウスカードが発見されたのは、今から3年前……新暦38年、ア
ンデッドが解放される少し前だ」

鋭い眼差しで尋ねるアインに、ケインズは石板に注目したまま語り始める。その表情
にはいつしか、かつての行いに対する悔恨のようなものが混ざり始めていた。

「過去に起こったバトルファイトは、有史以前の出来事であるため情報が紛失している
が……ルールについては他ならぬ一石板に刻まれていた。我々はそれを解析し、あらゆ
る世界における人類の繁栄の真相を知った」

「……バトルファイトに勝利したことで、人類はこの世界にて支配者の資格を得たと、そう
いうことですか」

「次元世界中のあらゆる管理世界を調査し、照らし合わせることで得た確かな事実だ
……そうそう信じられないとは思うがな」

耳にした事実には、リンデイの背筋にぞくりと寒気が走る。

ケインズの語る内容が真実なのだとしたら、これまで信じられてきた通説が全て否定
されることになる。己が努力と偶然によって成り立ってきた人類の進化の歴史が、実際
は何らかの意思による作弄的なものだったということになるのだ。

もしその意思が存在しなければ、人類はおろか他の次元世界における支配種の繁栄も

なかつたかもしれない。そう告げられているようで、大きな恐怖心が胸の内を埋め尽くしていく。

リンディは今更ながら、開けてはならないパンドラの箱を開けてしまったような心地になっていた。

「この事態は、いずれ起きることが確定していたということか……傍迷惑な石ころだな」
「まったくくだ」

忌々しそうに石板を睨みつけるアインに、サクソもなんども深く頷いて同意する。

これが必要ければ人類の発展はなかつたというが、自分たちがこれほど苦労させられているのだから、そもそもなかつたほうがよかつたかもしれない。

ケインズは二人の様子を無言で見つめ、再び石板に物憂げな視線を戻した。

「……だがここで予想外のことが起きた。石板モノリスが本来よりも早く覚醒し、バトルファイトが起こつてしまったのだ」

「どういうことだ？」

「バトルファイトの開催は、石板が現れる世界毎に決まった周期があつた。……バトルファイトが終了すると1万年の眠りに就き、時が来ればまた別の世界に転移し、新たな戦いを引き起こすはずだつた」

「……本来かかつているはずの封印が解け、再びバトルファイトが開催されたと？」

リンデイの確認に、ケインズは小さく頷いて肯定を示す。

まだ先にあるはずだった、世界の支配者の代替わりを決める戦。まだ猶予があったはずのそれが、なんらかの不足の事態によって時期を早められた。

アインたちが作作的な何かを疑ってしまふのは、仕方のないことだった。

「それに気づいたヘヴンズロードは、急遽ラウズカードを解析し、その能力を利用したライダーシステムを開発。今度は正規の遊戯ゲームとしてではなく、人間の存続のためのアンデッドの再封印を決定した。あとは、私が語るまでもないだろう……」

言われずとも、アインたちの脳裏には今日この日に至るまでの記憶が蘇る。

資格を見出され、戦士として異形の封印を担うことになった始まりの日から、突然のアンデッドの襲撃により拠点を壊滅させられた屈辱の日。

再起を望んで新たな拠点を見つければ、次々に敵や謎の存在が現れ翻弄され続け、かと思えば信じていた者からの裏切りの目に遭い、危うく命を落としかけることもあった。

そのどれもこれもが、目の前に鎮座する石の塊、それを操る何かによって引き起こされたことなのだと思わされてしまえば、もはや閉口する他にない。

「……私が話せるのはこれだけだ」

ずっと石板に視線を固定したまま語り続けたケインズは、それ以降口を固く閉ざして

しまう。

まだまだ話したいことがあったが、ケインズの背中はそれ以上の質問を許す雰囲気も放っておらず、あまりのスケールの大きさに適切な質問も思いつかなかった。

重苦しい沈黙が降りる中、アインが深くため息をついた。

「なんとも…胸糞悪い話だ」

「人間の進化が、他の誰かが糸を引いていたからだ、なんて聞かされたらね…」

リンディとしては、自分には手に負えない内容に感じたらしく、疲れ切った表情で腰を下ろしている。納得しようとは努めているものの、衝撃の事実を受け入れるのにかなり時間を要しているようだ。

しばらく無言で佇んでいると、アインがぎろりと鋭い視線をケインズに向けて口を開いた。

「話すことは他にもあるのでしょうか？」

「…話が早くて助かるよ」

急かされているように感じたのか、ケインズはかすかに苦笑を浮かべて肩をすくめる。せつかな子供を諭すような態度だったが、アインはそれほど気にすることなく、ケインズに話の続きを促した。

「君達も知っているとは思いますが、ヘヴンズロードが製作したライダーシステムはもう一

つ存在する」

「ああ、適合者がまだ見つかっていないということだったな」

「……それが、見つかったのだ」

「なんだと!?」

ケインズからの情報に、サクソが寝耳に水といった形相で振り向く。

現状においてアンデッドと渡り合い、そして封印できる唯一の武装ライダーシステム。それを使えるのは数少ない適合者だけで、現時点において纏うことができる人間はアインとサクソのみ。もう一人は最凶のアンデッドの容疑をかけられている正体不明の男だけである。

そんな状況で、新たに適合者が見つかったというのは吉報に間違いない。単純に戦力が増えるだけでなく、今後の方針もいくつか増やせるからだ。

だが、知らせたケインズの表情に浮かんでいるのは、何処と無く言いにくそうな複雑な様子だった。

「ムーヴ・カムシン、ミッドチルダ在住の学生……いや、元学生だ。以前より個人情報を入力し、こちら側に引き込むために接触する予定だった」

「……なぜ、そうしなかった」

「……それは」

きつく問い詰めるサクソから目をそらし、ケインズがなぜか間言い淀む。

言わねばならぬのに言えない、言いたくないと表すような煮え切らない態度に、苛立ったサクソが再度問いかけようとした時だった。

リンディの持つデバイスから、けたたましいアラームが鳴り響いた。あらかじめ有事の際にセットしておいた、アンデッドの出現を知らせるための警報システムだ。

「アインー」

「話の続きは後回しだ。私は先に行く」

リンディが駆け出そうとした時には、すでにアインは一言だけを残し風のように走り去っていた。

数日前の負傷など微塵も思い出させない、万全といった様子の素早さに、リンディは一瞬間まって目を瞬かせ、次第にプルプルと肩を震わせ始めた。

「…… ああもう！ 私のオペレートなしでどこいく気なのよ！！？」

考えるよりも先に体が動く厄介な性格の友人を追い、リンディはアインの戦闘を全力でサポートするために、大量の専用の設備が置かれた自宅へ急ぐ。

かましい女性たちの声が聞こえなくなり、しんと寂しげな沈黙に包まれる地下の秘密の空間。そこに残されたサクソは、石板の前で立ち尽くしているケインズに鋭い視線を向けた。

「……まだ何か聞きたいことがあるのか？」

「ああ……聞きたいことはほぼ聞き終えた。だがそれは、アンデッドにまつわることのみだ」

ギン、とサクソの刃のような視線がケインズの背を射抜く。

彼の言葉に嘘はない、語ってみせた情報に嘘偽りは一切ないだろう。この場でアインとサクソを騙すような愚行を犯すほど、この男は愚かではないはずだ。

だがサクソは、なおも真実を求める。虚構ではなく、秘匿の鎧によって隠されたケインズの中の本心を。

「お前はまだ、アインに隠していることがある……違うか？」

確信をもって投げかけられたサクソの質問に、ケインズはじつと石板を凝視したまま、無言を貫いていた。

ただそこに、否定の言葉はなかった。

2. 四人目の騎士

人一人いなくなった街道を、ブルースペイダーに跨ったアインが猛スピードで通り過ぎていく。

法的遵守速度を大幅に超えた速度だったが、それを咎めるものは誰もいない。なぜなら通報する人間も取り締まる人間も、とつくに異形が出現した箇所から避難し終わっているからだ。ただしそれだけ、アインの出撃が後手に回ってしまったという痛い事実があるが。

その分の遅れを取り戻すべく、アインはアクセルを全開にして愛機を走らせていた。〈そこからさらに800メートル……森林公園の入り口付近よ。一体だけしか確認できないけど気をつけて〉

「……休む暇もないな、私もお前も。だが、頼りにしている」

通信デバイスからは、かなりオペレートに慣れてきたらしいリンデイの声が頼もしく届く。

ケインズの話を引きずっているのではないかと、内心案じていたアインだが、聞こえてくる通信の様子からそのような素振りは何えず、フット笑みをこぼす。

しかしなぜか、リンデイからは全く別の理由で嘆き憂うような雰囲気、通信越しに伝わってきた。

「……気づいたらあなたの仕事をどっぷり手伝い続けてるけど、このまま無断欠勤で退職とかにはならないわよね？」

「…その、なんだ。いざとなったら陸尉になんとかしてもらおう」

〈恨むわよアイン……！〉

巻き込んだ手前、かける言葉が見つからないアインが目をそらす。管理局から任されている役目であるが、その部署が物理的に壊滅した場合は機能していることになるのだろうか。

本気で転職を考えるべきか悩みつつも、アインはやや気を紛らわせるように頭を振り、進路を見据えてギアをひねった。

次第に辺りには、何らかの力による破壊の跡が目立つようになっていく。一見すると前回のように、異形の出現に対し武装隊が出動していたのかと思いきや、よく見ればそういうわけではないらしい。

破壊の跡は多種多様だった。高熱で灼かれた場所もあれば爆発したのか粉々になっているところもあり、別の場所では腐食しているのか煙をあげている場所もある。もし武装隊であればまず使用されないだろう攻撃の跡で、全く別の存在によるものだと断定

できた。

「……嫌な予感がする」

険しい表情で前を向くアインは、やがていくつかの遊具が並ぶ整地された公園へとたどり着く。入り口まで移動するのが面倒で、勢いよくタイヤを回して柵を飛び越える。と、リンデイの指示通りに反応のある場所へとバイクを駆った。

疾走する直線上に目当ての異形の姿を捉え、アインは表情を張り詰めさせた。異形の足元に臥せる、男性の姿を捉えて。

「……こちらアイン。目標を捕捉、これより戦闘を開始する！」

〈了解……存分にやっちゃって！〉

リンデイに報告し、アインはラウズカードを挿入したバックルを取り出し、一瞬で腰に巻きつける。

怒りをエネルギーに変換しながら、獲物を前にガチガチと牙を鳴らす蜻蛉ドラゴンフライアンデッドの異形を真正面に定め、バックルのレバーに手をかけた。

「さあ、仕事の時間だ——変身」

【TURN UP】

バックルの前面が展開し、出現した甲虫が描かれたスクリーンにバイクごと突っ込み、輝く銀と紫紺の鎧を纏う。

る。

「■■■■■■■■■■！！？」

そうして徐々に背後の池へと近づいていくと、異形の動きが変わった。

方から生えた小さめの羽を震わせたかと思うと、空中に浮かんで池の中心へと後退し始めたのだ。今更ながらにアインは、敵が蜻蛉の祖先であり、高速飛行とホバリングという高度な能力を持っていることに思い至った。

「速っ……っておおっ！！？」

目を見開くアインに、ドラゴンフライアンデッドは加速をつけた突進で襲いかかってくる。

すぐさま反応したために攻撃は掠ることもなかったが、ドラゴンフライアンデッドは反撃の隙も与えずまた宙に浮かび、アインの剣が届かない場所に行ってしまう。

真っ向勝負に強い自身にはかなり厳しい相性に、アインは舌打ちをこぼした。

「クソ……！ こちとら飛行魔法もできんどころか魔法適性がないというのに。…だが、別に打つ手がないわけじゃないさ」

【THUNDER, SLASH, MACH, LIGHTNING, EDGE】

三枚のラウズカードを組み合わせ、刀身に雷を迸らせる。

魔力を魔法に変換できないアインは、アンデッドの能力の特殊性を利用し、擬似的な

遠距離攻撃魔法を新たに独自に編み出す。そうして完成させた雷の刃を、アインはブーメランのように撃ち放った。

だが、相手もそう単純ではない。空中を自在に飛行できるドラゴンフライアンデッドは、迫り来る雷撃を軽々と躲し、嘲笑うように牙を鳴らした。

「ちよ(まかと……)」

何十と雷の刃を放ち、飛び回る敵を狙い撃つアインだが、ただの一発も体表を掠ることさえ叶わない。

放たれる刃はジリジリとアインの魔力を削り続けていて、攻撃を加えるアインの方が次第に追い詰められていく。

だがアインの表情に焦りはない。

打ち出してきた雷の刃が、自ら意思を持っているように反転し、弾幕のようにドラゴンフライアンデッドに迫っているからだ。

「所詮は蜻蛉だな！ もらった!!？」

己の失態を悟ったドラゴンフライアンデッドが逃げ出そうとするも、迫り来る刃に通り抜ける隙間は見つからない。

動きを止めた異形に、アインが渾身の斬撃を叩き込もうと身構えた時だった。

【BLIZZARD】

聞き覚えのある電子音声とともに、突然アインに向かって白い風が襲いかかる。空気さえも凍てつかせる冷たい風圧が、刃を振り抜こうとしたアインの半身に嘯みついたのだ。

「なっ……ぐあああ……」

突然のことで反応が遅れたアインは、咄嗟に片腕で顔を覆って防御態勢に入る。両腕がバキバキと氷に包まれて激痛を感じながら、武器を持つ手と視界は塞がれないようにと耐え続けた。

次第に風圧に押され、大きく後ずさったアインの足元に、先ほど自身が放った雷の刃が次々に突き刺さっていく。

吹雪が収まり、ようやく視界を取り戻せたアインは、これ幸いと飛び去っていくドラゴンフライアンデッドの姿に舌打ちする。そして、風圧が向かってきた方向を忌々しげに睨みつけた。

「くっ……何者だ……?」

「名乗るほどの者じゃねえよ……とでも言おうか?」

片腕をほぼ凍結させられながらそう怒りをあらわに剣を突きつけるアインに対し、そう聞き覚えのない声が答える。

アインに対し嘲笑の意を示す、鼻につくような喋り方にさらに苛立ちが募る。サクサ

クともったいぶったように草地を歩く音が、徐々に木陰から近づいてくる。

そうしてようやく現れた、三つ目の仮面を被った一人の騎士に、アインは険しい形相で息を呑んだ。

「初めまして、ミッドチルダ最強の女騎士様……俺はムーヴ・カムシン。見ての通りの騎士さ」
同業者

「同業者だと……？」

先端にリング状の刃が備わった槍を携えた、緑を基調としたスーツに金の甲冑を纏う、紫の三つ目の騎士。

どことなく、アインの纏うそれと似通ったデザインのそれに、紫紺の騎士は嫌な予感を抱く。特に、謎の騎士の腰に巻かれている一本のベルトを目にして。

「その、ベルトは……お前が、レンゲルの適合者なのか？」

出撃前に少しだけ聞いた、三つ目のライダーシステム。

つい最近適合者が現れたばかりだというそれを有しているということは、やつこそがその適合者だということなのだろうか。

しかしそれならばと、アインの胸中には疑念が渦巻く。ライダーシステムはアンデッドを封じるための人類の手札、なのに先ほど振るわれた力は、明らかにアインに対する悪意が込められていた。

「なぜ邪魔をした。あれを放置しておけば、そのうち民間人に被害が及ぶのは考えずともわかるだろう……それとも、それすら思いつかないほどに馬鹿なのか？」

「……………ククッ」

険しい形相で詰問するアインの前で、謎の騎士は仮面の下で気味の悪い笑みをこぼす。

常人どころか、サクソのようなベテランでも微かに臆するくらいの殺気を向けられているのに、騎士にそんな素振りは見受けられない。むしろ、アインが向ける敵意を楽しんでいるようだ。

得体の知れない反応に、アインの眉間にしわが寄る。

すると次の瞬間、槍を構えた騎士が雄叫びをあげながらアインに向かって飛びかかってきた。刃を人に向けることに、一切の遠慮や躊躇も見せずに。

咄嗟に剣で受け止められたのも、アインほどの実力と経験があつてのことだった。

「何をする……………!?」

「何つてえ？ バトルフアイトに決まってるだろうが!!? 何のために俺が奴を解放してやったと思ってるんだ!?」

【STAB^{スタッブ}】

仮面越しにもわかる醜悪な笑みを浮かべて、騎士はラウズカードを挿した槍を構え

る。先端のリングが三方向に展開し、クラブのマークのように変わったそれを、アインめがけて鋭く突き出した。

「やめろ……ライダー同士で争ってどうする！ お前の敵は私じゃないはずだ!!？」
「説教なんていらねえんだよ!!？」 俺のやることに口を挟むんじゃないねえ!!？」

怒涛の勢いで放たれる突きを横から剣で弾き、アインはじりじりと後退していく。戦闘よりも思考に重きを置いているため、側からはアインが一方的に責められているように見える。

最強と謳われる女騎士を圧倒している事に酔っているのか、騎士はケタケタと笑いながら槍を振り回し続けた。

「ハハハハハ!!？」 どうしたおい……最強の騎士様の力はそんなもんか!!？」

ガキン、と甲高い音が響き、火花が散る。激突した両者の武器は激しい衝撃を生み、体重差のあるアインを軽々と吹き飛ばした。

空中に浮いたアインはクルクルと回転し、少し離れた木陰に一旦身を潜める。騎士の方も衝撃でよろめいたらしく、一瞬で移動したアインをしばらくの間見失っていた。

「クソ……！ 所長め、レンゲルの適合者がこうもひねくれてるなんて一言も言わなかったぞ……ああ、言おうとしたのはそれか」

悪態をつこうとして、出撃前の会話について思い出す。さしたる情報も聞かないうち

に出てきてしまったが、そういうえばケインズが何か口に仕掛けていたような気がする。

まさか聞いたそばでこのような出会いを果たすなどとは思ってもよらず、アインは自身に降りかかった偶然に言葉をなくしていた。

【STAB, SCREW, RUSH, SPIRAL STAB】

「おらあああああ!!？」

騎士はアインを見失ったことで苛立ったのか、槍に回転と連撃の能力を付与し、あたり一帯に無茶苦茶に刺突を繰り返していく。放たれた槍の一撃一撃が凄まじい威力を誇り、聳え立つ木々の幹を抉って片っ端からへし折っていく。

無慈悲で無差別な攻撃により周囲の木々は伐採され、みるみるうちに見通しが良くなっていく。

相手を追い詰めていることに笑みを浮かべる騎士だったが、不意にその表情がひきつる。自分の脇腹に突き立てられる、青い片刃剣の柄を見下ろして。

騎士は小さく吐血し、資格から不意打ちを食らわせた女騎士を振り払おうと槍を薙ぐが、アインはそれを一切の狼狽なく躲してみせた。

「ぐっ…クソが！」

「なめるなよ小僧…私が一体何年視線をくぐり抜けてきたと思っっている。その程度で隙をついたなどと思うな」

激昂し、無茶苦茶に槍を振り回す騎士にアインは呆れた様子で目を細める。付与されたアンデッドの力はまだ健在で、触れただけで大怪我を負う威力を伴った攻めも、当たらなければ意味がない。

アインがは騎士に対し過剰な警戒を抱いていたことを恥じ、そしてこれまでの攻防にそれほど労力を感じていないことに、非常に強い落胆を覚えていた。

「その偉そうな口調の割に、お前大した腕前じゃないな……せいぜいチンピラに毛が生えた程度か」

「てめえ…… 調子に乗るんじゃないやねえ！」

絶えず向けられる挑発の言葉に、怒りを爆発させた騎士が槍を大振りに構える。

アインはニヤリと不敵な笑みを浮かべると、注意がおろそかになっている騎士の足を払い、あつという間に組み伏せてしまった。騎士は何が起こったのかもわからないままに、首に突きつけられた刃に戦慄の声を上げる。

「その仮面を力尽くで剥いでやろうか？」

思った以上に楽に捕らえられたことで、アインの声には余裕が混じる。一度捕まえてしまえば、あとは調教なり再教育なりどうとでもなると。

だが次の瞬間、その考えは甘かったと悟らされた。

「……………たす、け……て……」

俯せに組み伏せた騎士から、か細い泣きそうな声が聞こえた。先ほどとは打って変わった、弱々しく折れそうな悲痛な声に、アインの表情は凍りついて動きがピタリと止まる。

思わずまじまじと騎士を見下ろせば、今度はこれまでと同じ不遜な態度でもがいている。しかしアインには、先ほどの態度が自分の見間違いや騎士の演技とは到底思えなかった。

そうしているうちに、アインの中にある可能性が浮上した。

「お前……まさか」

「チツ…… 鬱陶しいガキが、大人しくしてろっての！」

声を荒げた騎士が力尽くでアインを跳ね除け、槍を支えに立ち上がる。

獣のような荒い呼吸でアインをギロリと睨みつけるが、アインは呆然と騎士を凝視したまま構えることさえしていない。気づいてしまった騎士の真相に、どう行動すればいいのかわからなくなったからだ。

それを見た騎士は、チツと舌打ちして踵を返した。

「しやあねえ……今日はもうやめだ」

【SMOG】

「!? ? 待て！」

立ち去る騎士を慌てて追いかけてしようとするが、騎士が使ったラウズカードによってあたり一面に真っ黒な煙が充満し、視界が完全に塞がれてしまう。

ようやく煙が晴れ、視界を取り戻した時には、騎士の姿はどこにも見当たらなくなっていた。

「……聞いていたか、リンデイ。レンゲルの適合者を……ムーヴ・カムシンを見つけ
た」

〈聞こえていたわ……面倒なことになりそうね〉

「おそらくお前が思っているよりも厄介だぞ。…下手に手を出すわけにもいかなくなつたな」

通信越しに、リンデイの悩む声が聞こえてくる。先ほどまでの騎士とアインのやり取りは勿論、捕らえた際に聞こえてきた気弱そうな声も聞こえていたらしい。

そして、除いた一面から思い浮かべられた可能性に、リンデイも至っていたらしい。
(…とても、戦士には向かぬ者の声だった)

聞こえてきたその声が、アインの耳に強く残る。

若い、むしろ幼いと評するべき力なき声だった。就業年齢に制限がないとはいえ、まだ親の庇護下で守られているべき年端もいかなない青年の声だったと実際に耳にしたアインは確信していた。

なぜそんな子供が、あれほどまで豹変し危険な武器を手に行っているのか、その答えは一つだ。

「……弱い心を、アンデッドにアンデッドにつけ入れられたか」

激しい爪痕を残し、姿を消した四人目の騎士を思い浮かべながら、アインは険しい表情で立ち尽くすばかりであった。

3. 闇に囚われた心

人気がなくなつた街路、虚しく風が吹き抜けていくその道を、緑の鎧を纏つた騎士が槍を支えにしながら歩く。その足取りは重く、異形にやられて鈍痛が続く腹を抑えてよろよろと歩き続けていた。

だが、苦しんでいるのは肉体的な苦痛のせいだけではないらしい。頭痛も感じているらしく、時折頭を片手で抑え、霞む視界を払うように顔を横に振っていた。

「……くそ、チクシヨウが……これからって時によ……!」

口汚く、どこかの誰かに向けて忌々しげに罵り、体を引きずりながら歩き続ける。途中で脇道を見つけると、急いで身を潜めるように入り込み、物陰に潜り込む。

だがそこで、疲れ切つた体が限界を迎えたらしく、ズルズルとその場に崩れ落ち、膝をついてしまった。

「俺はまだ……満足しちゃい……ね……!」

悔しげに呟いた騎士の体が、横向きに倒れこむ。その際、左右に展開していたベルトの前面が戻り、青い蜘蛛の絵が描かれたスクリーンが飛び出し、騎士に重なっていった。スクリーンに呑まれた騎士は、一瞬で纏っていた鎧を消され、一人の青年の姿に変わ

る。

細い線の穏やかそうな顔立ちに、どことなく不安げに歪められた表情。先ほどまで口にしていた乱暴な口調が全く似合いそうにないほど、年端もいかぬ儂げな見た目の青年だった。

「ああ……まただ」

全身に残る気だるさと痛みに、青年は深いため息をついてうなだれる。ガリガリと頭をかいて苛立ちをあらわにし、もう一步も動きたくないと思表示するように小さくうずくまる。

しかし自分が動かなくなれば、脳裏に先ほどまでの自分が行っていた愚行の数々が否応なく思い出させられ、どちらにせよ苦しめられてしまう。

精神を苛む、醜い自分自身の姿に、青年は顔をしわくちやにしながら泣き言をこぼした。

「……なんで、どうして……僕がこんな目に……」

「ここにいたか」

「うわあああああ!?」

不意に、青年の耳元に凜々しい女性の声が届き、青年は大きく目を見開いてその場から飛びのく。

対する女性、青年の後を追いかけてきたアインは、普通に声をかけたただけなのに、まるで化け物と遭遇したかのような悲鳴を挙げられたことが気に入らず、不機嫌そうに眉間にしわを寄せた。

「うるさい、黙れ……いや、すまない。急に話しかけてすまなかつたな」

前回、幼い女の子に怯えられた経験を踏まえ、アインはまずは相手を安心させるために一歩後ろへ下がる。

認めたくはないが、どうやら自分の目つきはかなり威圧的なものに見えるらしく、一般人や精神的に弱い相手は気圧されてしまいうらしい。

リンディに指摘されたことを思い出しながら、アインはその場で膝をつき、小さな子供にやるように青年と視線を合わせた。

「君が、ムーヴ・カムシンだな？ 私はアイン・K・アルデブラント……時空管理局から出向している騎士だ。……少し、話をしないか」

なるべく口調も圧を感じさせないよう気をつけ、啞えて嘘偽りを一切許さないといった様子でじつと青年、ムーヴを見つめる。

しばらく青い顔でアインを見つめ返していたムーヴは、アインが急かすこともせず回答を待っているのに気づき、徐々に肩の緊張を抜き始めた。幾分か、強張っていた表情も柔らかくなってきた。

相手の壁が薄くなったことを察したアインは、ムーヴを見つめたまま口を開いた。

「…私が見るに君は、戦いには向いていないようだが……何故レンゲルそバックルれを持っているんだ？ 適合者が現れるまで、嚴重に保管されているはずだが…」

「……」

「咎めているわけじゃない。ただ、BOARDが襲撃されてから情報が集まりにくくてな…協力がほしいんだ」

やはりまだ初対面のアインを信用しきれないのか、硬い表情で体を縮こませるムーヴだったが、しばらくすると観念したようにうつむき、ポツポツと語り始めた。

「……ある時、学校の帰り道でいきなり……黒服の男達が僕の前に現れて」

ムーヴの脳裏に浮かぶのは、いつも通りの代わり映えのない生活が一変したとき、正体不明の男達が現れた時だった。

気が弱く、おとなしい性格で学校でも目立たない存在だった彼は、クラスメイトと下校することもなく一人で帰路についていた。

それを狙ってか、ただの偶然か、歩道を歩いていたムーヴの至近距離に停車した黒塗りの車から何人もの黒服の男達が現れ、ムーヴを車に引きずり込んであっという間に連れ去ってしまったのだ。

顔を袋のようなもので覆われ、視界を奪われたムーヴはパニックに陥るも、左右に座

る黒服達に威圧されて声もあげられなかった。

しばらくして、停車した車から降ろされると、長い通路を前後左右を囲まれながら歩かされ、どこかの部屋に連れ込まれる。

そこでようやく目隠しを取られ、ムーヴはその男と対面することとなった。

——手荒な真似をしてすまなかつたね。

だがこれは必要なことだったんだ、カムシン君…。

地下なのか、異様に暗い空間に設置されたデスクの向こう側から、その男は丁寧な口調でムーヴに語りかけた。

口元には笑みが浮かび、敵意を感じさせない紳士的な態度に見えたが、その時のムーヴはそこはかとない不気味さを感じていたという。同じ人種を相手にしていないような、根拠のない漠然とした嫌な感じがしたのだと。

——実にめでたい事に、君は戦士の力を手にする資格を得た。

人々を襲う怪異を退治できる唯一の力だ。

君には是非、この力を受け取って我々の騎士となってほしい。

何も心配する必要はない……この力を手にした時から、君は無敵になれるんだ

…！

男はデスクの上に、トランプのクラブを模したバックル型のデバイスを置き、ムーヴ

に受け取るよう促した。

デバイスはムーヴにとつては、あまりお目にかからない代物だった。両親も友人も一般市民で、ムーヴ自身も魔力適正の低いただの学生。高性能なデバイスを目にすることはほぼなく、訝しさや恐怖と同時に物珍しい気持ちも湧いていた。

迷うムーヴだったが、いつしか周囲に立っている黒服達に押されるように、デバイスに向けて手を伸ばしていた。

「…怖かったけど、言う通りにしないとともつと恐い目に遭う気がして。それで受け取って、言われた通りに起動させたら……」

「…心に乗っ取られた、と」

語り終えたムーヴは沈痛な表情でうつむく。恐怖に負けた自分がどれほど愚かな選択をしてしまったのか悔やむように、情けなさや悔しさがなまぜになった顔で歯を食い縛っていた。

アインは青年から聞いた話の内容に、自分も確かに多様な経験があることに思い至り、うなだれているムーヴにさらに問いかけた。

「その男の名は聞いたか」

「尋ねはしましたが…僕の質問には何も答えませんでした。ただなんていうか……僕、というか人を自分を対等に見てないっていうか、すごく冷たい目をした人でした」

「……あの孔雀野郎か？」

自分やサクソを利用して、ずいぶん勝手に暴れてくれた上級アンデッドの一体のことを思い浮かべる。

サクソの手によつて封印された今、懸念材料とはならないように思ったが、どうにも違和感が拭いきれない。出会ったこともないのに、油断していれば足をすくわれそうな、そんな予感がしていた。

「あとはもう、僕の手には負えないことばかりで……あの化け物が現れると、急に戦いたいつて、暴れたいって気持ち溢れ出してきて……もう、止められなくて」

それだけ口にする、またしても恐怖が蘇ってきたのか、ムーヴは頭を抱えて体を震わせる。

操られて自分の意思を奪われるわけではない、己の闘争本能が暴走させられ、望まぬ戦場に走らされる。己でそれを止めることはもちろんできず、刀槍剣戟の中に躍り出ることとなる。まるで自分が自分じゃなくなるような恐怖が、彼の中に巣食ってしまったのだろう。

その哀れな姿は、つい数日前に別の人間にも見たばかりだった。

(…陸尉と同じような症状だな)

「…僕はもう嫌だ……! あんな化け物と戦うのも、怖い目に遭うのももうたくさんだ!

嫌なのに……！」

ブルブルと顔を横に振り、蘇りそうになる戦闘中の光景を振り払おうとしているが、槍を振り回した手の感触が残っている限りそれは叶わない。

しまいには視界の全てを拒絶するように、頭を抱えてうなだれるが、しばらくすると諦めたように脱力し、アインに向けて頭を下げた。

「……今日は、ごめんなさい。僕もできるだけ、衝動を抑えられないか頑張ってみますけど……でも」

「お前……」

「さよなら……もう、会うことはないでしょうけど」

視線を合わせることさえ辛いのか、ムーヴはアインの方を見ることなく立ち上がり、ふらふらとおぼつかない足取りのまま歩き出した。

アインはその頼りない背中になんとも言えない哀れみを覚え、呼び止めることもできずただ見送ることしかできない。少し触れただけで崩れ落ちてしまいそうなほど弱々しい、儂い後ろ姿は、見ているだけでため息を誘った。

「あれでは、共に戦ってくれなどは……口が裂けても言えんな」

「賢明な判断だな」

思わず溢れたつぶやきに返ってきた声に、気配を感じていたアインは深いため息をつ

いて振り向く。

無言のまま、足音もなく近づいていたハジメに咎めるような視線を送り、アインは腕を組んで壁にもたれかかる。別に忍ぶ必要もあるまいに、声もかけずに傍に寄っているこの男には、デリカシーというものはないのだろうか。

ハジメはアインの視線に気にした様子もなく、立ち去っていく青年の背中を見やり、呆れた声を上げた。

「アレは戦士と呼ぶにはあまりにも脆い……この先の戦いを生き残れるとは到底思えんな」

「ハジメ……」

いつも通り、人間に対して隔意を感じさせる物言いに、アインは思わず眉間にしわを寄せる。

アンデッドと疑わしきこの男にとって、例の遊戯に参加する資格のない弱い存在は気に入らないのかもしれない。絶対的強者に立つがゆえに、弱き者が持つ屈辱や苦痛が分からないのかもしれない。

しかし、ハジメの告げた言葉は確かに的を射ている。實力差があり過ぎれば、同じ戦場で背中を預けることなどとても考えられない。

「ライダーシステム……その実態はアンデッドと一時的に融合し同質の力を得るとい

こと。あの騎士や少年のように心に隙があれば、簡単に衝動に呑み込まれる」

ピクリと、気になる言葉を耳にしたアインがハジメを訝しげに睨みつける。また何か重要な情報を気軽にもたらしたような、そんな違和感が生じた。

しかしハジメは気にせず、反対にアインを厳しく睨みつける。まるでアインに、軽率な行動を控えるように忠告しているような態度だった。

「足手纏いを気にかける暇が…お前にはあるのか？」

じつと見下ろしてくる、自分よりも上に位置する力の持ち主に対し、アインは黙ったまま視線を返す。

やがてその口がフツと笑みの形をとり、小馬鹿にするように鼻を鳴らした。

「……………何を言っているのやら」

「……………どういふことだ」

意味深な態度で目をそらすアインを訝しみ、ハジメが鋭い目を向ける。ハジメの忠告をどうでもいいことのようにあしらったのが気に障ったのか、その目にはわずかに怒りが滲んでいる。

ニヤリと笑みを浮かべたまま、ムーヴの方を見やっているアインにしびれをきらし、ハジメはアインの肩に手をおいて無理やり振り向かせようとする。

その瞬間、アインの連絡用デバイスに着信が入り、アインはハジメの手を払って通信

に応じた。

「なんだ？」

「アイン！ また反応があつたわよ！ 今度はすぐ近くでいくつも！」

「今日はえらく忙しいな……」

切羽詰まった様子の子のリンデイに対し、アインは残業の仕事でも前にしているような苦笑を浮かべる。

何か言いたげなハジメが、目の前を横切つていくアインを睨んでいると、ふとその視界に妙ななるものを見つけた。

「……あれは」

いまにもまた倒れ込みそうな様子で歩いてきたムーヴが、突如頭を抑えたかと思うと、まるで頭痛に耐えているように指を食い込ませていた。

アンデッドの出現を、融合したアンデッドが感知し戦場に向かわせようとしているのだろうとハジメが考えていると、どうにも様子がおかしいことに気づく。

片方の足が前に出ようとするのを、青年の手が必死に止めようとしている。歩く力の方が強いのか引きずられているが、それでも青年はめげることなく自分の体を押さえつけようとしていた。

その様子に、ハジメは思わず驚愕で大きく目を見開いていた。

「……抑え込もうとしているのか」

「あの子が弱いって？ ……あれを見ても同じことが言えるか、ハジメ」

鬼の首でもとったような不敵で得意げな表情で、アインはハジメを見やる。青年の抵抗をまるで我が事のように誇るアインに、ハジメはすぐに表情を無に改めた。

「あの子は抗っているのさ……自分に襲いかかる悪意に、ずっと」

アインは笑った顔のまま、歯を食いしばりながら移動していく青年を見つめ、小さくため息をつく。

今は確かに、アンデッドに突き動かされる衝動に負けてしまっている。だが、それがいつまでも続くわけではないとアインは確信していた。

気の弱い青年が、恐怖の対象に必死に抗う姿は、見苦しくも目を離せないものだった。「そういう根性のある子は、つつい手助けしたくなってしまうのさ……いくぞ、リンディ。オペレートを頼む」

そう言つてアインは、懐からブルースペイダーを取り出し、空中に放り投げる。

瞬く間にバイク携帯に変形したそれにまたがると、アインは急ぎリンディとの通信を再開し、後輪を回し疾走を開始するのだった。

「……ムーヴ・カムシン」

アインが去った後を、ずっと様子を伺っていたシーマが物陰からのぞいていた。

彼の目には、引きずるような足取りでどこかへ向かう青年の姿が映り、記憶に焼き付けられていく。優しい性格のシーマといえど、過剰に思えるほどに青年のことが気にかかっていた。

「レンゲル……クラブのスーツの騎士、私のラウズカードを持つ者」

争い続ける青年に向けて、平和を思う異形の男は覚悟を決めたような目を見せ、同時にいつしか微笑みを浮かべていた。

「手助けしたくなる子か……ああ、確かにその通りだな」

アインが呟いていた一言を自身の胸にも刻みながら、シーマは静かに歩き出し、緑色の光を纏ってその場から大きく跳躍して行った。

4. 異形の翼

「■■■■■■■■■■!!?」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!?」

リンデイの誘導で、アインがアンデッドの出現した現場へ急行した時、そこはすでに凄まじい有様になっていた。

木々はへし折られ、公園の物らしき人工物は瓦礫や破片と成り果て、その陰には人の骸が積み重なって転がっている。大人だけではない、小さな子供までもが倒れ臥している光景は、騎士に強烈な後悔を味わわせた。

だがアインが絶句した大きな要因はそれだけではなかった。

そんな地獄を作り出したであろう異形が複数、互いに食い合うようなおぞましい戦闘を繰り広げていたからだ。

山羊と、黄金虫と、猛牛。そのほか数体の異形達が傷口から緑色の鮮血を吹き出しながら、狂ったように暴れている光景は、歴戦の戦士であるアインでさえも絶句させられた。

「……堅気に迷惑かけてんじやねえよ」

虎に似た異形の口から出たのは、威厳に満ちた女性の声だった。

腕っ節で兵士をまとめる女傑のように勇ましいその声に、アインは一瞬目を丸くし、続いてどうしたものかと眉間にしわを寄せた。

「…口をきけるといふことは、上位のアンデッドか」

「……お前は」

思わずつぶやきをこぼしたアインに、タイガーアンデッド虎の異形は訝しげに振り向き、目を細めた。

不敵な笑みを浮かべ、剣を肩に担いで佇むアインを凝視していたタイガーアンデッドは、しばらく何かを確かめるように無言になり、やがて放っていた雰囲気を変化させる。先ほどまでのどこか苛立った様子のそれから、欲しかったものを見つけて歓喜するよ
うな、そんな気配だった。

「気配でわかるよ……お前、この時代で一番強いやつだね」

突き刺さってくる、タイガーアンデッドの放つ殺気と闘志に、アインは両手で剣を構えて対峙する。

以前に相手をしたイーグルアンデッドと同等の威圧感に、いつしか高揚と震えを覚えていた。

「我が名はティグラ。T i g r i sティグリスの長にして祖の戦士」

「アイン・K・アルデブランド。時空管理局所属の騎士だ」

見た目は完全に意思疎通の不可能でありそうな異形であるのに、タイガーアンデッドは武人らしい振る舞いを以って名乗ってくる。つられてアインも相応の挨拶を口にし、剣を握る手に力を込める。

自身に負けない殺気を見せてくる女騎士と相対し、タイガーアンデッドは口元をニヤリと嬉しそうに歪めた。

「無理矢理引き摺り出された戦場だが、お前みたいなのやつと戦えるんなら話は別さ……存分に死合おうよ」

「……この間のイグニスといい、シーマといい、見た目と性格にギャップがありすぎるやつが多いな。……イストは別として」

「ああ、あいつらに会ったのかい。楽しかったよ、あいつらとの戦も……」

はるか昔、前回のバトルファイトのことを思い出しているのか、タイガーアンデッドは遠い目で虚空を見つめて呟く。

そしてすぐに、アインを完全な敵と見定めて、鉤爪を振りかざして突っ込んできた。

「お前も、私を楽しませてくれよ！」

「さて……どこまで付き合えるかね！」

凄まじい衝撃波を辺りに撒き散らし、騎士と異形の戦士が全力で激突する。

それぞれの足元を深く陥没させ、地面に大きな亀裂を走らせながら、各々の持つ得物が食らいつき火花を散らす。耳障りな嫌な音が、その場に広く響き渡っていた。

「ふん！」

「おおおおお!!？」

互いの渾身の力で相手を弾き、また全力で激突する。甲高い音と火花が何度もあたりに飛び散り、ビリビリと衝撃が互いの腕から全身に走る。

その感触に、女戦士たちはよく似た好戦的な笑みを浮かべ、得物越しに相手を鋭く見据えていた。

(重いね……人間のくせに！)

(やはり格が違うな……長引くと不利か！)

「ウエイ!!？」

ゴギン、とアインがティアラを利用して自分の剣に頭突きをかますと、反動でタイガーアンデッドが後ずさる。

すぐにタイガーアンデッドは最接近し爪を振るうが、アインはそれを紙一重で躲し、鋭く素早く急所のみを絶え間無く狙う戦法に切り替えた。

「妙な奴だな！ バトルファイトとやらは異なる種族同士での覇権争い……世界の支配権をかけて争うものだと言いたが!!？」

「ああそうさ……！ 私も長だ、子孫のためにこの星の頂点に立つという意思は他の挑戦者と変わらない！ ……だがな!!？」

常人では反応も叶わない高速の連続突きを躲しながら、タイガーアンドレッドは頭蓋骨の仮面の下で獰猛な笑みを浮かべる。

放たれる剣撃や爪撃は徐々に速度を増し、次第にそれぞれ受け流すこともできなくなっていく。増えていく裂傷の痛みを、アインもタイガーアンドレッドも愉しそうに受け入れていた。

「それ以上に……強い奴らと戦って、己自身をさらなる高みへと至らせたい！ そんな想いがあるのさ!!？」

「なら……私も全力で応じなければ失礼に当たるな！」

渾身の力でタイガーアンドレッドを振り払ったアインは、剣の柄を展開させラウズカードを開く。そのうちの三枚を抜き取り、素早く読み込ませることで、異形たちの能力を自身に付与させた。

【THUNDER, BEAT, METAL. LIGHTNING^{ライトニング} STRIKE^{ストライク}】
「ウエエエイ!!？」

雷の力と鋼の硬度、拳撃の能力がアインに付与されると、アインは剣を地面に突き立てて拳を握りしめ、タイガーアンドレッドに向けて遠慮なく振るう。

に見えた、先ほど吹き飛ばされたアンデッドや、カードとバックルを持つて駆け込んでくる青年の姿に、顔をしかめさせた。

「ククツ……やつとまた暴れられるぜ。変身!!?」

【OPEN UP】

女戦士たちの戦いに乱入してきた青年、ムーヴは邪悪に満ちたどう猛な笑みを浮かべ、バックルにカードを挿して腰に巻き、バックルの紋章を左右に展開させる。

途端に、アインのものと同じような、蜘蛛の絵柄が描かれた紫色のスクリーンが出現し、ムーヴを飲み込んで無骨な意匠の鎧を纏わせた。

「ひやははは!!?」

「……カムシン……」

緑色のスーツにクラブのマークを模した金色の装甲、蜘蛛を連想させる仮面を被った甲冑を纏い、ムーヴはアインに向かって突進してくる。

だがその前に、ちつと舌打ちしたタイガーアンデッドが、アインを押しつけるように割って入った。

「邪魔すんじゃないやねえ……!!? こいつは俺の獲物だ!!?」

【BITE】

舌打ちしたムーヴが、コブラアンデッドの力を槍に付与し、タイガーアンデッドに咬

たムーヴに落胆したように一斉に彼に襲いかかっていく。

自分に敵意がないことを悟ったタイガーアンデッドは、振り下ろす標的をなくした己の爪を見下ろし、残念そうに視線を逸らした。

「……白けちまったね」

タイガーアンデッドは緑色の光に自身を包み、人間の女性の姿に変わると、ムーヴを見つめて悲しげに立ち尽くすアインの方を叩いてその場から立ち去っていく。

一人残されたアインは、戦いを望む本能に抗いきれなかつた青年が、無数のアンデッド達に襲われている光景を前に、憐れみで言葉をなくしていた。

「く、くそっ！ だけ！ 離れやがれ！」

「……本格的にバトルロイヤルが始まったか」

なんとか応戦するムーヴが、徐々に追い詰められていく姿に、アインは眉間にしわを寄せながら走り出す。

標的を、いまムーヴに最も近く迫っているアンデッド達に絞り、アインは剣のスリットに三味のラウズカードを挿して読み込ませた。

「T H U N D E R , T A C K L E , M A C H .
L I G H T N I N G I M P A C T」

雷の力を纏い、突進力を強化したアインが高速で駆け抜け、バイソンアンデッド猛牛の異形に渾身の体当

たりを叩き込む。

鈍く大きな音が響き渡り、ムーヴに凶牙が突き立てられる寸前にアンデッド達はまとめて吹っ飛ばされ、瓦礫の中に頭から突っ込んでいった。

アインはすかさず倒れたバイソンアンデッドに向けて、反応を示すラウズカードを投擲し封印を施す。

〔METAL, MAGNET, SLASH. MAG^マNET^グ. FA^フNG^ング〕

アインは一度も休ませることなく、剣に別のカードの組み合わせを読み込ませ、切っ先を地面に突き立てる。

新たに手に入れた磁力の力を使い地中の岩石を掘り起こし、鋼鉄化させ鋭く尖った切っ先をアンデッド達の真下から襲いかからせる。まるで巨大な牙に喰らい付かれたように、アンデッド達は血反吐を吐いて倒れていく。

だが、それが炸裂したのは全体の一部だけ、残るアンデッドはいまだに無傷のまま、アインとムーヴを取り囲んでいた。

「クソっ……!!? これは、かなりキツイな……!」

「アルデブラント!」

苦戦を強いられそうだと歯噛みしていた時、アインの耳にサクソの声が届く。

振り向いたアインは、自分に向けて投げ渡されてきた物体に気づき、慌てて片手で受

け止める。

金属製で箱状のそれには、ブレイラウザーと同じスリットやスペードの形をしたホルダーが取り付けられていて、体の一部に取り付ける仕組みになっていることがわかった。

「これは……………」

「カテゴリーQを封印し、それに挿せ!!? カテゴリーJを使えば、未知の力が手に入るはずだ!!?」

アンデッド達の包囲の上、崩れた建物の屋根の上から声を張り上げるサクソに、アインは訝しげな視線を向ける。

何をさせるつもりなのかと眉を寄せるが、考える暇など与えないというようにアンデッド達は迫り来る。アインは言われた通り、手持ちの空のラズカードが反応しているアンデッドを探し、次なる標的に定めた。

【KICK, MACH. MACH BLAST】

「ウエエエエイ!!?」

高速で放たれたアインの蹴りが、スカラベアンデッド 黄金虫の異形と山 ゴートアンデッド 羊に炸裂し、地に臥せさせる。

二枚の空のカードを投擲し、その体に突き立てると、カードに封印されたアンデッドはくるくるとアインの手元に飛び、その絵柄を示した。

時を示す黄金虫と、融合の力を秘めた二頭の山羊の絵姿を。

「……^取ABSORB、そう言うことか」

【^{アブソorb}ABSORB ^{クイーン}QUEEN】

詳しい使い方を聞いている暇はない。左腕に件の機械を装着し、サクソが告げたようにカテゴリーQのカードを機械の中に挿す。

そしてブレイラウザーを展開し、前回封印したJのカード、フュージョンイーグルのラウズカードを抜き出した。

「よく見ておけ……ジョーカー!!? これが、お前が弱いと吐き捨てた人間の強さ……諦めの悪い意志の力というものだ!!?」

いまだにこの場に現れないハジメに向けて、アインはJのカードを握りしめ、機械のスリットに挿して勢いよくスライドさせる。

【^{フュージョン}FUSION ^{ジャック}JACK】

電子音声が鳴り響き、ホルダーの表面に金色の紋章が張り付く。大きな鷲が翼を広げ、スピードを形作っているそれが次の瞬間、眩い黄金の光を放つ。

光は大きな鷲の姿となり、アインの周囲を旋回しその背中にとまる。やがてゆつくりと光はアインと同化し、アインの背中に三対の真紅の翼が生える。

鎧の一部とティアラも黄金に染まり、ブレイラウザーにも新たな刃が追加されて一層

の切れ味を増す。

力の全てが一段階上昇したアインは、警戒するように唸り声を上げているアンデッド達を睥睨し、ブレイラウザーから四枚のカードを抜き、スリットに通した。

「THUNDER, SLASH, METAL, MACH.
LIGHTNING ASSAULT」

「ウエエエエエエイ!!？」

基礎能力の上昇に加え、飛行能力まで会得したアインは天高く宙を舞い、目にも留まらぬ速さでアンデッド達に接近し、雷撃の剣撃を叩き込む。

まるで石を持つ嵐のような凄まじさで振るわれたアインの一撃は到底躲せず、アンデッド達は苦悶の声をあげて吹き飛ばされて行った。

「よくやった……！」

そのうちの何体かが倒れると、建物の上で立つサクソがさかささ反応を示すラウズカードを投げ、次々に封印を行う。

アインは翼を羽ばたかせてゆっくりと降り立つ、がその直前に慣れない飛行でバランスを崩したのか、少しだけ足をもつれさせてよろめく。

だがすぐに立ち直り、切った数と封印された数が合わないことに気づき、眉間にしわを寄せた。

「……何体かは逃してしまつたな。だがこれで、スピードのスイートのカードは残り一枚となつたわけか」

ブレイライザーのホルダーに並ぶ、12体の異形達の絵柄を眺め、特に理由はないがアインは達成感を抱く。

まだアンデッド達は多くミッドチルダ中に蔓延っている。いつの間にかムーヴもいなくなっているし、やるべきことは数えきれない。

だがひとまずの目安のようなものが果たされそうで、なんとなく感慨深いものを抱いていた。

「峠を越えた、とでも思うべきか……」

「楽しそうなことやつてるね……僕も混ぜてよ」

もう一踏ん張り、とそう意気込もうとしたアインは、不意に聞こえてきた声にピタリと立ち尽くす。

すぐ近くから聞こえてきたその声に、言い表しようのない寒気を覚えた。

「お前は……!」

振り向いたアインの目に映つたのは、目と鼻の先からアインを見つめてくる幼い少年。なんの変哲もない普通の格好をした彼の顔は笑顔で、ニコニコと人好きの思想な柔らかないものだった。

5. 例外なる者

黄金の甲虫の異形が操る二股に分かれた肉厚な剣が、アインの脳天に向けて振り下ろされ、ブオンと空気を裂く音が響く。

一瞬気圧され、思考が停止していたアインだったが、本能的なものか戦いに生きた習慣によるものか、意識することなくブレイラウザーを掲げ、振り下ろされた剣を受け止めることに成功する。

しかしその重量は凄まじく、防いだはいがそのまま叩き潰されそうになるほどで、アインの唇から苦悶の声 leaked。

「くう……！」

バキバキと足元が陥没し、気を抜けば平たく潰されそうな重力が襲ってくる。全身の筋肉を一本の鉄筋のようにまとめるように集中することで、どうにかそれに耐えていた。

だがアインが押されているのは、コーカサスヒートルアンテッド三角槍甲虫の持つ純粋な膂力ではない。同時に滝の激流のように降りかかってくる、異様な濃さの威圧感だった。

（なんとという重い威圧感……！ イストやティグルとも明らかに格が違う……やはり、

こいつは！)

数多くの中で研ぎ澄まされてきたアインの勘が、頭上から見下ろしてくる狂気に満ちた目の持ち主の正体を知らせてくる。

アンデッドの中でも特に強力な力を有していた鷲イーグルアンデッドの異形や孔雀ピコックアンデッドの異形、虎タイガーアンデッドの異形を凌駕する威圧感、それを持つ存在など、考えられる可能性は一つしかなかった。

ギリギリと鑢迫り合いに応じるアインに、屋根の上であっけにとられていたサクソが、ようやく再起動を果たして叫んだ。

「気をつけろ、アルデブラント！ カテゴリーKのアンデッドだ!!？」

サクソが告げた瞬間、アインはコーカサスビートルアンデッドの腹部に思い切り蹴りを放ち、わずかに体勢を崩させる。力の緩んだ大剣の下から抜け出すと、追いかけるように振るわれた刃を紙一重で躲し、高速で懐に入り込んでブレイザーを薙いだ。

しかし全力でふるったその一閃は、異形の左腕に備わった盾に防がれ、甲高い音を立てて弾かれてしまう。

ビリビリと痺れる腕をかばい、険しい表情で後ずさったアインに、コーカサスビートルアンデッドは首を傾げながら声を発した。

『ねーねーなんで逃げるの？ 僕ともいっぱい遊んで欲しいな?』

まるで子供のようない高い声で、しかし隠しきれない邪悪さをにじませて異形は女騎士

に問いかける。

その態度からは、微塵もアインに対する殺意を感じられない。例えるならば、逃げ惑う蟻の群れを見下ろし、笑顔を浮かべて踏みつぶそうとしているような、そんな危険な予感を味わわせる声だった。

「遊びだと…？」

『うん、遊び！』

身構えるアインに、黄金の甲虫の異形は大剣と盾を掲げてゆつくりとアインに近づいていく。

ズシンズシンと、地面に亀裂を走らせながら近づいてくる鎧の巨体に、アインはふと子供が小動物に触れに行こうと走り出す光景を思い浮かべる。

子供からすれば、単純に愛でて遊びたいだけの好奇心。だが体格さのありすぎる小動物にしてみれば、力加減のできない子供が接近してくる光景はどれほどの恐怖であろうか。

『僕が君を追いかけて、追いついて殺せたら僕の勝ち』

少なくともこの異形は、アインに対し尋常ではない害意を抱いていることは明らかだった。でなければ、鉄も岩も何もかも簡単に真つ二つにできる大剣を軽々と掲げたまま、余裕で人を踏み潰せる巨体で迫ってくるはずなどなかった。

せられていく。

徐々に大剣がアインの鎧をかすり、アインの表情に焦りが現れだした時だった。

【TURN UP】

野太い電子音声とともに、無数の光弾がコーカサスビートルアンデッドの体表に炸裂し、火花が飛び散る。

不意の衝撃に動きを止めた黄金の甲虫の異形の隙を突き、アインは土産とばかりに剣を一閃しすぐさま離れる。大きく後退したアインの近くに、鎧を纏ったサクソが降り立った。

「陸尉！」

「流石のお前も、こいつを相手にタイマンでは不利か」

「…お恥ずかしながら」

「ならば俺も、それなりに本気を出さねばな」

チャツ、と銃口を上へ上げ、サクソは苛立たしげに大剣を振り回す黄金の甲虫の異形を見やる。

通常のアンデッドであれば多少痛がるくらいの威力だが、カテゴリーKの異形は蚊に刺された程度の反応しか見せていない。むしろ中途半端な衝撃を鬱陶しそうに払っていた。

サクソはギャレンラウザーの撃鉄部分を展開し、カードホルダーを開く。その中から二枚のラウズカードを引き抜き、自身の左腕に装着したアインと同じ機械に読み込ませた。

【ABSORB QUEEN, FUSION JACK】

サクソは新たに入手したダイヤのスートのカテゴリーQ、サイベントアンデッド海蛇の異形の力を使用し、ビッコクアンデッド孔雀の異形と自身を融合させる。

途端にサクソの鎧は各所が黄金に染まり、背中には孔雀の尾羽のような三対の翼が展開する。そしてギャレンラウザーの銃口には、新たに金色の刃が装着された。

「うおおおおおおお!!?」

「はあああああああ!!?」

それぞれで飛行能力と基礎能力の上昇を得たアインとサクソが、雄叫びをあげて左右からコーカサスビートルアンデッドに襲いかかる。

異形は迫り来る騎士達に大剣を振るうが、翼を得た騎士達はそれを軽々と回避し天空へと舞い上がる。

アインは一気に急降下すると鋭い一閃をお見舞いし、サクソは天空から無数の炎の弾丸を発射し異形の鎧に火花を散らせる。

接近を避けたヒットアンドアウェイ、ただの一撃が尋常でないカテゴリーKを相手に

するためにとられた、苦肉の策だった。

『あははははは！ 速いね！ でも逃さないよ！?』

黄金の甲虫の異形は、それを全く意に介していない様子で嗤う。頭上を舞う騎士達をそれこそ蠅か何かのように目で追い、近づくとびに大剣を振り回す。

剣の届く範囲を警戒し、距離を取っていたアインとサクソだが、異形が不意に大剣を思いつきりぶん投げてきたことで虚を突かれてしまった。

「ぐおっ!?!?」

「陸尉!」

回避行動を続けていたアインはなんとか躲せたが、狙撃に集中していたサクソはそれをまともに受けてしまう。

空中でバランスを崩し、地面に落下したサクソに向かってコーカサスビートルア宁德ッドが近づいていくと、その前にアインが降り立ち塞がった。

【THUNDER, SLASH, METAL, MACH,
LIGHTNING ASSAULT】

【FIRE, GEMINI, BULLET, RAPID, BURNING GATLING】

アインがラウズカードを選択し剣のスリットに通していくと、サクソも同じく四枚のカードを抜いてスリットに通す。

それぞれ剣撃と銃撃に力が付与され、騎士達は威力を大幅に上昇させた一撃を構える。そしてサクソが引き金を引くのに合わせ、アインが渾身の一闪を振り下ろした。

「ウエエエエエエイ!!?」

大きな火炎の弾丸が無数に宙を貫き、それにアインの雷の斬撃が合わさってさらに破壊力を増す。

地面をも焦がす勢いで迫り来る攻撃を前に、黄金の甲虫の異形は大きく盾を振りかざし、思い切り横に薙ぎ払った。

何物をも通さない鋼の盾は騎士達の連携攻撃を受け止め、やや押されながらもそれを抑え込み、やがて咆哮とともに振り払う。弾かれた雷撃と炎弾は、アイン達の元へと跳ね返されていった。

「なっ……ぐあああ!」

「かはっ!!?」

全力で放った攻撃を、ほとんどそのまま返されたアインとサクソは、雷撃と火炎に呑まれ吹き飛ばされる。

宙を舞った二人は地面に叩きつけられ、強制的に鎧を解除させられ生身のまま地面を転がる。アインはまだ意識を保っていたが、怒涛の勢いで押し寄せた激痛により動けず、サクソに至っては転がった先でガツクリと項垂れてしまった。

『ねえねえ…もう終わりなの？ 案外脆いんだね、お姉さん』

気を失ったサクソには目もくれず、コーカサスビートルアンデッドは立ち上がろうとも楽進に向けて一歩ずつゆっくり近づいていく。

途中で地面に突き刺さった大剣を抜き、苦悶の表情で瓦礫をつかむアインの方へと向かっていくと、おもむろに大剣を持ち上げ、切っ先をアインの腿に突き立てた。

「ぐああああああ!!？」

ズブツ、と肉が裂け、アインの脚から鮮血が吹き出す。立ち上がろうとしていた体は激痛で動きを止め、アインの悲鳴が痛々しくあたりに響き渡った。

黄金の甲虫の異形はそれを愉しげに見下ろし、ニヤニヤと歪な口元を嗜虐的な笑みに歪める。

『でも結構面白かったよ……じゃあ、もういいや』

痛みで身動きが取れないアインに向けて、黄金の甲虫の異形が頭上に大剣を掲げている。

傷口を手で押さえ、掌を真っ赤に染めるアインは苦痛に顔をしかめさせたまま、身じろぎさえできない。ギラリと鈍く輝く刃が、格好の獲物となった女騎士にの脳天に狙いを定める。

『死んで?』

そう楽しいな子供の声で告げ、コーカサスビートルアンデッドが大剣を勢いよく振り下ろす。

あわや女騎士の頭蓋が西瓜のように叩き割られると思った瞬間、カツと目を開いたアインが自身の体を転がし、大剣は地面を叩き割るだけに終わる。

ゴロゴロと転がり窮地を脱したアインだったが、腿に走る痛みが激しくなりまた苦痛に顔を歪めた。

「くっ……ぐうー！」

『あははははは！ そうだよね！ そうこなくっちゃね！ 頑張つて逃げてよお姉さん、だんだん僕も楽しくなってきたよ！』

なんとか立ち上がろうともがくアインに異形は歩み寄り、女騎士の腹に爪先を食い込ませる。

みぞおちに強烈な一撃を食らったアインは目を見開き、血液の混じった胃液を吐き散らして後ずさる。ぼたぼたと口から吐瀉物をこぼし、呻き声をあげる女騎士に異形は身を震わせ、恍惚とした声を発した。

『ああ……その声すっごい気分いいよ……もつともつと聞かせてよ！』

コーカサスビートルアンデッドは後ずさるアインを執拗に追い、大剣で、大盾で、あるいは蹴りでその体を攻め続ける。女騎士の体には鋼の打撃を受けたことで深い傷が

刻まれ、痣となつて彼女の白い肌を汚していく。

何度目かの殴打を食らつて倒れ込んだアインは、それでもその目から力を失うことなく、下卑た嗜好を持つ異形を強く睨み続けた。

「ハアツ……ハアツ…… お前のクソみたいな遊びに付き合う暇は……ない！」

『駄目だよ……僕はまだ満足してないんだから。もつともつと殺させてよ……もつともつと苦しむ顔を見せてよ！ もつと！ もつと!!?』

腿の傷から鮮血を流し、身動きの取れないアインに向けて、黄金の甲虫の異形がもう一度大剣を振り上げる。

今度は腕の一本や二本を切り落とせる勢いで、躲す余力もなくなった女騎士を狙い、鈍い光を放つ刃を構える。アインは歯を食いしばり、だが目からは決して光をなくすとなく相手を睨みつける。

その手に握られた尖つた石を確かめ、四肢のどれかを犠牲にする覚悟でじつと好機を待った。

【TORNADO, DRILL, FLOAT, SPINNING DANCE】

だが、そこに割り込んできた竜巻きの刃により、アインとコーカサスビートルアンデッドは同時に別々の場所に吹き飛ばされる。

騎士と異形はそれぞれで受け身をとるが、負傷したアインはうまく立ちどまれずその

場に倒れ込んでしまう。だがすぐに、自分を庇うように立ち塞がるハートの意匠の騎士に、目を見開いた。

「ハジメ……！」

『なんだよ、お前。せつかく面白くなるところだったのに……』

苛だたしげに大剣を地面に叩きつけ、黄金の甲虫の異形がハートの騎士に吐き捨て、ギロリと殺意を込めて睨む。

ハジメはちらりと背後で這いつくばるアインを一瞥し、しばらくの間黙り込む。真に気づかれないようにきつく拳を握りしめた彼は、弓をヒュンと振りかざして構えをとった。

「この女に手を出すな」

仮面の赤い目が明確な敵意を示し、コーカサスビートルアンデッドを射抜く。陽光を反射する、もしかすると己よりも格上かもしれない存在を前に、一歩たりとも引く様子を見せずに刃に手を添える。

「それ以上この女に傷をつけるといふのなら……俺はお前を潰す」

『……邪魔を』

ビキビキと己の顔に血管を浮き立たせ、黄金の甲虫の異形が剣を振り上げ、ハジメに向けて走り出す。一歩踏み出しただけで地面に亀裂が走るほどの踏み込みで、コーカサ

どうにか加勢に迎えないかと、腿の傷を抑えて立ち上がろうとするアインは、ブルブルと震える自分の体に思わず苛立たしげに拳をぶつける。

現在のアインの身体は、イストの罫にはまり致命傷を負い、ほぼ傷がふさがっていないのにイグニスとの戦いに赴き、流れ達の補充もままならない状態である。ここまで動けた彼女の根性が異常なのだが、それを指摘できるものはこの場のどこにもいなかった。

強いて言うならリンデイだが、機材の都合で戦闘中の姿を見られない今、アインの負傷状況を知る由もなかった。

「ぐっ……！」

『あははははは!!? まず一枚……いつまで君は堪えていられるのかな……!!?』

そうこうしている間に、ハジメがコーカサスビートルアンデッドの体験の一撃を受けて大きく吹き飛ばされる。その際、ハジメの持つラウズカードの一枚が奪い取られ、黄金の甲虫の異形の手の中に収まる。

ハジメはどうにか立ち上がり、奪われたカードを取り戻そうと挑み掛かるが、どう言うわけか彼の動きに先ほどまでのキレがなくなり、異形の怪力に翻弄されるがままになっっていた。

「ぐはっ…………！」

「ハジメー」

ついにはハジメの持つラウズカードが、ハートを除く全てを奪われ、ハジメは強制的に鎧を脱がされ地面を転がされる。

呻き声を上げて倒れこむハジメの方に、アインは片足を引きずりながら駆け寄り、膝をつく彼の肩を掴む。

視線を移せば、遠く離れた位置にサクソとムーヴの姿がある。先ほど吹き飛ばされた衝撃で目を覚ましたか、呻き声を抑えてこの場から離れようと状況を見定めているのがわかった。

「……ハジメ、もう十分だ。ここからは私がどうにかする……お前も早く逃げろ……」

後数秒時間を稼げれば、二人とも強敵の前から離れることができる。一度撤退し、体制を立て直せば倒す手段は見つかるはずだ、とアインは敗走を受け入れようとハジメに促す。

だがハジメは、それに応えなかった。

「グ……グルルル……!!?」

「……ハジメ……?」

顔を伏せていたハジメから、獣のような唸り声が聞こえてくる。

空腹の獣のような、縄張りに入った敵を迎え撃つような、とてつもない威圧感を放ち、

ハジメはゆっくりと立ち上がっていく。

強者と認めていた男に生じた異変にアインが言葉を失っていた時、その変化は現れた。

「ガアアアアア!!?」

白目を剥き、天に向けて顔をあげたハジメが、ビリビリと大気を震わせるほどの咆哮を放った。

それと同時に、ハジメの全身に緑色の光が纏われ、その身体をあつという間に変色・変質させていった。

黒の混じった緑色の体に、漆を想わせる黒い鎧の皮を纏った、長い触覚を生やした昆虫に似た姿。悪魔のように悍ましく恐ろしい形相に緑の仮面が張り付き、全身からは鋭い棘が並んで生える。

見た目通りの化け物が、アインの目の前で凄まじい咆哮を放ち、黄金の甲虫の異形を睨みつけていた。

「■■■■■■■■■■!!?」

「グルアアアアア!!?」

互いに吠え合い、二体の異形が勢いよく取っ組み合う。

戦士同士の戦い方ではない、相手を確実に殺すと言う本能にのみ突き動かされた、身

の毛もよだつほどの殺意に彩られた戦闘。

強者として、誇りを持って戦い続けていたように見えた男の変貌ぶりに、アインは困惑した表情のまま固まってしまっていた。

「どうした…ハジメ……？」

目の前の異様な光景に、彼女はもう逃げることも考えられない。

異形同士が各々の武器を振り下ろすたびに、おびただしい量の緑の鮮血があたりに飛び散り、あらゆるものを汚していく。

へたり込む女騎士にもそれは降りかかり、金色の髪を汚していく光景は、誰もが目をそらしたがるものであった。

（全てのアンデッドを屠る者…全ての生命をリセットするために、バトルファイトを制するために生み出された異形。その存在理由は…己以外の全てと戦うこと…!!?）

戦場から距離を取りながら、サクソはムーヴを抱えて後ろを振り返る。

もはや近づくこともできないほどに戦いは苛烈さを増し、人の営みがあった場所を破壊し尽くしていく。バトルロイヤルなどと言う上等なものでは決してない、ただの殺し合いが繰り返り広げられていた。

「あれがアイゴ・ハジメの…ジョーカーアンデッドの真の姿か……!!?」

逃げることでできないことに歯噛みし、戦場を睨むサクソの憤怒の表情。

その目には、その地獄を作り出した異形達への嫌悪がありありと表れていた。

(近くにいるだけでも……巻き込まれそうだ！)

本性を露わにした二体の異形は、互いの肉を喰らい合うかのように刃を振り回し、緑色の体液を撒き散らして暴れまわる。すでに互いのことしか目に入っていないのか、金属音が鳴り止むことはなかった。

足を負傷し、全身あざだらけになった今の状態であの間に割り込むほどアインも馬鹿ではない。だが、物陰に潜んでいても巻き添えになりそうなほど激しい戦いに、内心で焦りを抱き始める。

だがふと、アインはあることについて疑問を抱いた。異形の一体が見せた豹変についてだ。

(だが、なぜハジメは急に暴れ始めたんだ……?) 奴にラウズカードを奪われた途端に、何かの籠が外れたように……!)

ジョーカーアンデッドと化したハジメは、その目に自分が相対している黄金の甲虫の異形しか映していないように見える。

騎士の姿で戦っていたときには見えていた理性が、異形の姿に変わった途端跡形もなく吹き飛んでしまったようだ。

「ガアアアアア!!?」

旋律の視線を向けるアインに構うことなく、ジョーカーはケダモノの雄叫びをあげて

愕然となった。

「ガアアアアアアアア!!?」

己の本能が求める、全力で刃を向けられる相手がなくなったことで、ジョーカーア
ンデッドは怒りと悔しさに満ちた凄まじい咆哮を上げて天を仰ぐ。

大気を振動させ、腹の底まで響いてくる叫びに、物陰から身を乗り出したアインがゴ
クリを息を呑む。

その時、アインの足元に小石が一つ転がり落ちる。小さな瓦礫のかけらで生じた乾い
た音は、獲物を求める異形の耳にしっかりと届いてしまった。

「…おい、待て。嘘だろう…!!?」

くるりと、異形がアインの方に振り向き、漆黒の闇の目がまっすぐに捉えてくる。

嫌な予感で大量に冷や汗を書いたアインが立ち上がりかけた直後、ジョーカーア
ンデッドは口から唾液を垂れ流しながら、再び咆哮を上げてアインに襲いかかった。

「ガアアアアアアアアア!!?」

「うああああつ!!?」

弾丸のような勢いで向かってくる異形の刃を、アインはほとんど反射的に体を逸らし
て躲す。しかし完全には躲しきれなかったようで、制服の胸元が裂かれて肌にならずかに
血が滲んだ。

ぱっくりと口を開けている制服に目を見開いていると、ジョーカーアンデッドはすぐさま追撃の斬撃をアインに振るってくる。紙一重でそれを凌ぐも、異形はためらいなくアインの鳩尾に蹴りを放ち、軽々と蹴り飛ばしてきた。

「くっ……ガハッ……！ しっかりしろ、ハジメ!!？」

地面にまた這い蹲り、泥まみれになりながらアインは必至の表情でジョーカーに、ハジメに呼びかける。

まだわずかでも理性が残っていることを期待しての叫びだったが、もはや今の彼に説得に応じる気がないのは明らかだった。女人の体など簡単に切断できる鎌の刃を、首に向けて振るってきたているのだから。

「聞く耳持たずか……！ 変身！」

【TURN UP】

自身の傷を度外視し、アインはもう一度ライダーシステムを使用する。

血を流しすぎた影響か、頼もしいはずの鎧が重く枷になっている気もしたが、窮地を乗り越えるために耐えることを決めた。

「こっちは余裕がないんだ……力尽くで大人しくしてもらおうぞ……！」

腰に佩いた剣を引き抜き、アインは唸り声を上げるジョーカーに切っ先を向けて構える。

現在の自分の状態で勝てるとも、まともに戦えりとももちろん思つてはいない。だがせめて手傷を追わせることぐらいはできねば、この場で殺されることは容易に想像できた。

アインは剣の刀身に片手を添え、姿勢を低くしながらじりじりと隙を伺う。

「ウエエエエエエイ!!?」

「ガアアアアアア!!?」

女騎士と異形は全く同時に雄叫びをあげ、それぞれの獲物を携えて真正面の獲物に向かって走り出す。

ジョーカーはアインの首に向けて、湾曲した自身の腕の刃を走らせて一息に両断しようとする。だがアインはそれを見極め、剣先をそつと当てて軌道を逸らせ、軽く弾いて逆にジョーカーの懐に入った。

「うえあああ!!?」

前髪の何本かを犠牲にしつつ、アインはとつさに放てる最大出力の一撃を叩き込もうと、デバイスに残った自身の魔力の全てを注ぎ込む。

だが、いざ力を解き放とうとした瞬間、ジョーカーアンデッドのもう一方の手が勢よく突き出され、危うくアインの目が貫かれそうになる。

即座に身を引くが、そのせいでバランスを崩し、戻ってきたジョーカーの刃に脇腹を

切り裂かれる羽目になった。

「がっ！…ぐっ……がはっ！！？」

無意識に傷口を手で押さええると、ジョーカーは容赦なくアインに刃を振るい、遠慮なく蹴りをぶつけてくる。

本当に本能に突き動かされているのかわからないほど、鳩尾や脇腹、喉と人体の急所を的確に狙い、アインの体をさらにポロポロにしていく。

度重なる負傷にアインはついに膝をつき、剣とベルトを落としてその場に倒れ込んでしまった。

「ガアアアアア！！？」

（畜生が……カリスの時よりも強いじゃないか……！！？）

新たに刻まれた傷口に走る痛みにも、アインはきつく歯を食いしばって呻く。これでは隙を見て逃げるどころではない、抗うこともできずになぶり殺しにされるだけだった。

何とか起き上がろうともがくアインの腹を、冷たい目のジョーカーが踏みつける。

「あぐっ……！！？ ハ……ジメ……！！？」

息が詰まりそうになり、徐々に体重がかけられてアインは苦悶の表情を浮かべる。

何故かもう、逆らう気など起こらない。自信を足蹴にしている異形が知った誰かだと思っただけで、アインはそれに剣を向ける意志さえ抱けなくなっていた。

「ガアアアアア!!?」

霞む目で見上げてくる女騎士に、異形は残虐な光を目に宿して刃を掲げていく。向けられる刃は女騎士の血に濡れ、鉄の匂いが辺りに充満して吐き気を催させた。

(……これが、本当に最後か)

刃を振りかぶる異形を前に、覇気をなくしたアインが脱力し、迫り来る刃を見つめながらつまらなそうなため息をつく。

多少の縁にこそ恵まれたものの、思い出されるのは決して幸福とはいえないろくでもない思い出ばかり。思い出すことさえ億劫になる程貧しく価値のない生であったと、思わず乾いた笑みがこぼれる。

これが自分の終わりか、と目を閉じたアインは。

自身の臉の直前で停止した異形の刃に気づき、訝しげな表情で固まった。

「……………! ハジメ……」

「ガ……アアアアア!!? ガアアアアアア!!?」

何が起きたのか、と眉間にしわを寄せてジョーカーアンデッドを見上げるが、当の異形自身も突然頭を抱え、狂ったように吠えてその場から走り出してしまった。

反射的に後を追いかけようとしたアインは、全身に走った激痛に硬直し、うつ伏せに倒れこむ。

どうにか痛みをこらえて顔をあげた時には、その場から異形の姿は跡形もなく消えてしまっていた。

◆? ◆? ?? ♣?

「……あれは格が違いすぎるわね」

和風な小物に囲まれた自室で、ぐるぐると包帯を巻きつけるリンデイがアインに眩く。

いつかのように傷だらけになり、処置をしたそばから血をにじませる親友に呆れながら、リンデイは今後の行き先が暗雲に閉ざされていく感覚を覚えた。

「ああ……正直手も足も出せなかった。自惚れていたわけではないが、あそこまで一方的にやられるとくるものがあるな……」

「謙遜しなくても貴女はミッド最強の騎士よ。貴女が敵わないんじゃないや……他のどんな魔導師も騎士も手に負えないと思うわよ」

「……………そうか」

どこか不服そうな表情で目を伏せるアインに、リンデイはため息をつく。

アインの言葉は自惚れでもなんでもない。現にミッドチルダで、いや大半の次元世界において彼女ほどの実力を有する騎士はおらず、最強の女騎士という呼び名は公然のものとなっている。

この任務について彼女が苦戦していたのは、なれないデバイスのシステムの使い方に慣れていなかったから。今となってはそのハンデもなくなりつつあり、再び最強と呼べる存在に戻りつつある。

そんな彼女が歯が立たなかった相手がまだ何体もいる、それはとてつもない不安をリンデイに抱かせた。

「……………気になっているのはカテゴリーKだけじゃないわね」

「……………」

物思いにふけっている様子のアインにリンデイがカメラをかけると、彼女は一瞬息を呑み、やがて大きなため息をつく。

誰のことを思い浮かべているかなど、問うまでもなかった。

「ハジメさん…本当にジョーカーだったのね。機材にとんでもない数値が表れていたわ。並のアンデッドじゃ比較にならないぐらい……………」

「……………予兆はあったんだ。だが私は……………それに見ないふりをしていた」

人間の姿でいる時には、ハジメはかなり穏やかな態度のままであった。だが必要以上に人と関わりとうとはせず、むしろ一定の距離を保ち続けていた。

だが戦いの場に赴けばそれは一転し、凄まじい力を振るう戦士と化す。まるで何かの枷が外れたように、あるいは別の何かに衝動を叩きつけるかのよう。

「クソツ……あの野郎……ずっとあの衝動を抑えながら戦っていたのか……！ 何もかもをぶつ壊したくなるのを必死に堪えて、騎士としての戦いを貫き通そうと……畜生が」

眉間に深いしわを寄せ、アインは悔しげに歯をくいしばる。窮地を救われたかと思えば片手間で一蹴され、いつも上から目線で答え、そのくせ自分がまた命の危機にさらされれば助けに入る。

そんな行動の読めない、憎たらしい男が実は、己の本能と理性の狭間で苦しみ、それでもなお己の意思を徹そうとするような男だったと知らされ、アインの思考はぐちゃぐちゃになる。

何もかもが負けた気がして、苛立ちや悔しさ、羨望が入り混じってしまう。

「無駄に……格好つけやがって。イレギュラーだか何だか知らんが……一人で抱え込んで片付ける気だったのか。ふざけやがって……!!？」

虚空を見つめ、なおも取まらない怒りを拳を握りしめることで表すアイン。

そんな彼女の横顔を見つめていたリンディは、しばらくぼかんとした様子で座り込んでいたが、やがて疑うような細目を向けて問いかけた。

「……アイン、もしかしてハジメさんに変な感情抱いてない？」

リンディがそう尋ねた直後、アインの動きがピタリと完全に停止する。予想外の操作

を受けてフリーズした機械のように、呆気にとられた様子で硬直する。

そしてじきに、女騎士の凛々しい顔はボツと赤く染まっけいき、ワナワナと親友を凝視したまま震え始めた。

「は……ハア!!? にや、何をいきなり……!!? 突拍子もないことを口にするな!!? この非常時に……!」

「だって貴女……何だか切なそうなんだもん。こう……構ってもらえなくていじけてる女の子みたいな感じなのよね、今の貴女は」

「馬鹿者が! そんな訳があるか!!? 奴は敵、アンデッド! 恋愛感情など持ち出すはずがないだろうが!!?」

同様のあまり嘖んだことにはあえて追求せず、リンデイは見たこともない表情を見せるアインをじつと見つめる。

目をそらして眉間にしわを寄せるアインは、心外だと言わんばかりに行儀悪くあぐらをかき、いまだにぶつぶつと文句を垂れている。しかし赤く染まった肌は耳まで広がっていて、顔をそらしただけでは隠すことなど到底できるはずもない。

普段であれば、無茶に付き合わされる意趣返しにここぞとばかりにいじり倒すつもり
のリンデイだったが、今回ばかりはその気にはなれなかった。

(……………恋愛感情なんて、一言も言っていないんだけどねえ)

アインは強く否定しているが、きっと彼女はあの異形の男に強く惹かれてしまっている。戦友や友人としてではなく、一人の男として。

母は死に、地のつながりがあつた親族にろくな者はおらず、唯一助けてくれた人も今は遠い空の彼方。痛みしかもたらさない世界で必死に生きてきた彼女にとって、強さは全てにおいての基準であつた。

そんな人生に突如現れた、己を遥かに凌ぐ強者。それまで彼女が男性に対して抱いていたイメージを払拭させるには、十分すぎただろう。

（正直、アインが自分で言っていた条件にぴったりなのよね……この子より強くて、誇り高い騎士の心を持つてる。そして……本能にさえ逆らう強い心を持つてる。アインの理想そのものかわ……）

何より、自身がそばにい続けても簡単に死ぬことのない存在は、アインにとって何を代価にしても欲しいと思う存在のはずだ。

だがだからこそ、リンディの表情には影が差していた。
（それだけに、不憫な話だわ）

初めて惚れた男が、人類にとつて害でしかない凶悪な異形。

次元世界の平和を担う時空管理局としては決して見過ごしてはならない問題が、アインの目の前には立ちはだかつている。

いずれアインが自身の気持ちに気づく時、その問題とも直面することになるだろう。「本題に戻りましょうか」

自身の思考を切り替え、リンディはアインと向き直る。

親友の抱いた想いが今後どういふ結末を迎えるにしても、一局員であるリンディが目の前の問題を片付けない理由にはならない。

そうすることが、自分と親友にどんな結果をもたらすかは、今は考えないことにした。

「……まず始めに、あの怪物をどうするのか。そして、暴走する確率の高まったハジメさんをどうするのか。……早速暗礁に乗り上げてる気もするけどね」

リンディの言葉に、アインはまだ暑いままの体をすぐに落ち着かせ、者の数秒で元の平静を取り戻す。

しかし、リンディが不安げな面持ちで俯いているのに対し、アインはさして考え込んでいる様子はない。その表情に、リンディはアインが喋り始めてから気づいた。

「そのことだが、私の勤が正しければ一方の解決がもう一方の解決に繋がるんじゃないかと思っている」

「………？ どういうこと……？」

はつと顔を上げたリンディは、自分を見つめてくるアインの瞳に覚悟の火が宿っているのに眉間にしわを寄せる。

訝しげなりンデイの視線に、アインは真剣な声で問いかけた。

「……………忙しくなる。手伝ってくれるか」

「……………ここまできたら、一蓮托生ってものでしょ」

アインの今更な質問に、リンデイはどこか投げやりな不敵な笑みで答えてみせた。

7. 託した意志

「クソ……がああああ!!?」

廃棄され無人となった工場の中で一人、荒ぶった青年が手頃な位置にあったドラム缶を蹴り飛ばす。

ガランと凹んだドラム缶が大きな音を立てるが、怒りと悔しきでいっぱいのもーヴは邪魔な物体としてしか認識しておらず、ますます眉間に深いシワを刻む。

「ふざけやがって……何が無敵の力だ、何が最強だ！　こんなもん……狩れるのは雑魚ばかりじゃねえか！」

近くにまとめられてある鉄パイプや鉄筋を手当たり次第に蹴り飛ばし、広い廃工場内で鈍い金属音が響き渡るが、ただただ虚しさだけがもーヴの中に残るだけ。

荒い息をついて、自分の中でうずまく感情をぶつけまくるもーヴは、やがて柱にすりつくるとひたすらに拳をぶつけるのみとなった。

「俺は……おれは………僕は……」

血が滲むほど握られた手で、ひたすらに柱を殴りつけていたもーヴの動きが、次第に弱々しくなっていく。だらりと腕をたれ下げ、柱に背中を預けてその場に座り込んでし

まった。

「僕は……何がしたいんだ………」

ムーヴから憤怒の感情が消え、不安に支配された暗い表情が顔を出す。闘争本能をぶつける相手を失ったことで、ムーヴを支配していた激情が失われ、心の中にぽっかりと大きな穴が空いた気分が陥っていた。

自分の意思ではない、本能に突き動かされる操り人形のようになっていた彼は、操者がいなくなったことで身動き一つ取れなくなっていた。

「何をやってるんだ、僕は……こんな時間に時間を無駄にして……何にもできなくて……」
己の意思を無視し、放り込まれた異形との戦い。大した力のない学生でしかない自分に与えられた、どう考えても分不相応な力。

逃げ出したい、何もかも放り出してしまいたい。けれどそれすらできなくて、流され続ける自分の情けなさが嫌で嫌で仕方がない。そうしてうずくまり、うつむいていた時だった。

「そうして……いつまでくすぶっているつもりかな、君は？」

不意に聞こえてきた靴音と声に、ムーヴはお空そうに顔を上げ、廃工場内に入ってくる古めかしい格好の男性を見つける。

ムーヴはその男性、シーマを胡乱げに見やっていたが、彼から漂ってくる気配に気づ

き、ハツと目を見開いて立ち上がった。

「つ……！ 貴方は……アンデッドだな……！」

「気配だけでわかるのか……アンデッドと融合し始めたからか、それとも天性の感覚か……」

「……何の用ですか」

「なに、ただの世間話さ」

警戒態勢をとるムーヴを気にせず、シーマは穏やかな表情のまま彼の方に歩み寄り、数歩手前で座り込み、対面する。

ムーヴは緊張で表情を引きつらせるも、シーマから敵意を感じないこと、そしていつも勝手に出てくる闘争心が発しないことに気づき、その場に留まった。なぜだか、この場で逃げ出すことは躊躇われた。

「アンデッドのくせに、どうして僕に対して敵意を向けないんですか。僕には、そんな価値すらないでも……」

訝しむムーヴに、シーマはどこか疲労を感じさせる眼差しを向け、困ったように頭をかか。これまで見てきたアンデッドのどれとも異なる態度に、ムーヴはますます困惑させられた。

「私はもともと争いごとが苦手だね。できることなら、誰とも戦わずに過ごしていた

かったんだ。……でも、そうもいかなくてね」

「だったらなんで……」

「長として、一族を守らねばならないからね」

憂いを帯びた表情でそう答えるシーマに、ムーヴはハツと息を呑む。

他者を蹴落として上に登るためなどではない、己の意思を抑えてでも、守るべきものがあるのだと呟くシーマに、ムーヴは返す言葉を失っていた。

青年が狼狽している姿に、シーマは苦笑を浮かべてため息をついた。

「弱肉強食のこの世界、生き残るためには常に勝者の立場にいたる必要がある……でも私以外の皆に力があるわけじゃない。私一人が勝ち残ったところで、待っているのは結局滅びのみだ」

「……だから、支配者の力を」

「そんなに高尚な願いじゃないがね」

己以外のために戦っている男の姿に敗北感を覚えているのか、愕然とした様子でムーヴにシーマは困ったように頭をかく。英雄か何かのように思われるのは居心地が悪いのか、じつと見つめてくるムーヴから顔をそらし続ける。

やがてシーマの視線は、虚しいものを見るように気だるげなものに変わり始めた。

「だがもはや、この戦いは悪意ある何者かによって汚されてしまった……今更参戦した

ところで、望む結果が得られるかどうか」

青年と同じく、望まぬ戦いに身を置き続けなければならぬことを悔やみながら、それをどうすることもできない無力感を感じさせざる表情で、シーマは己の手のひらを見つめる。

同類を見るような心地で視線を向けていたムーヴは、やがて振り向いたシーマに肩を震わせた。

「君はアンデッドの力に汚染され、闘争本能を掻き立てられているらしいね」

「……はい、それが何なんですか」

「それは本当に、抗いきれないものなのか？」

じつと見つめてくるシーマの問いに、ムーヴは一瞬意味がわからず硬直し、次第に苛立ちの表情を浮かべ始める。

今もなおムーヴを苦しめる葛藤、その努力の全てを否定するような一言は、ムーヴの感情を揺さぶった。

「君は他ならない適合者、ライダーシステムを用いて戦う資格を与えられた稀有な存在だ………なのにそれをまともに使いこなすことができないとは、矛盾しているとは思わないか？」

「……何が、言いたい」

「アンデッド……！」

「……とうとうここまで来たか」

シーマが憂鬱な声で呟き、アンデッドの姿を視認した瞬間、ムーヴは胸の内から発した闘争心に苦悶の表情を浮かべる。

先ほどシーマに言われたことを気にしたのか、以前は流されかけた衝動に耐えようと自身の体を抑えようとする。だがこの状況では、立ち尽くす彼はアンデッド達にとつて格好の餌食だった。

海月と烏賊の異形が同時に触手を伸ばし、鞭のようにならせてムーヴの体に叩きつけてきたのだ。

「うぐあつ……!?」

「……その壁を乗り越えられないのでは、所詮君はその程度ということだ」

背中から倒れこみ、苦痛の声を上げるムーヴを見下ろし、シーマは悲痛げな目を向ける。

シーマはじつとアンデッド達を睨みつけ、何かを決心した様子でムーヴに背を向け、かばうように異形達の前に立ちふさがった。

「退いてなお、降りかかる火の粉だと言うのなら……この手で払うだけのこと！」

■■■■■■■■■■
「!!?」

■■■■

達に立ち向かう力を与えていた。

「変…身！」

【OPEN UP】

「うおおああああああああ!!？」

ベルトから放たれた紫色のスクリーンに向かってムーヴは突進し、その身に鎧をまとう。同時に手元に現れた錫杖を構え、激突する三体の異形達に挑みかかっていった。

「■■■■■■■■！」

「があああああ！」

気づいた海月と以下の異形が触手を振るうが、ムーヴはそれを紙一重で躲し、伸ばされた触手を錫杖の刃で切り刻む。

そして突進の勢いのまま錫杖を振り回し、固まっていた三体の異形達に向けて渾身の雑を食らわせ、力の限り吹っ飛ばして見せた。

「俺は…！ おれは…！ 僕は…！ うおおおおお!!？」

突然の衝撃に後ずさる異形達の前で、ムーヴは邪魔な衝動を振り払うような咆哮を放ち、頭上で錫杖を振り回し構える。

新たな敵としてクラブの騎士に身構える二体の異形。その後ろで、しずかに両腕を下ろして佇む大土蜘蛛の異形に気づかず、ムーヴはラウズカードを錫杖の石突のスリット

に走らせた。

【BITE, STAB, RUSH, BLIZZARD. BLIZZARD TO RRENT】

「おおおおおおお!!？」

吹雪の力を錫杖に纏わせ、ムーヴが刃を振り回し異形達に薙を炸裂させていく。

水分の多い軟体を持つ海月と烏賊の異形は、大気をも凍らせる極寒の連撃に体の各所を氷結させられ、体を碎かれながら倒れこむ。

その後ろで、一歩も動かず吹雪の猛撃を受けた大土蜘蛛の異形が膝をつき、ムーヴはようやく我に返った。

「あなたは……わざと……」

「そうだ……それでいい。君が信じた道を進め、どんなに迷いながらも……前だけを見て」

気のせいか、呆然と立ち尽くすムーヴに向けられた大土蜘蛛の異形の悪魔の形相が、穏やかに緩められる。

直後ムーヴの耳にカチリという音が届く。倒れた異形達と、膝をついた大土蜘蛛の異形のベルトのバックルが、一時的な力の弱まりによって左右に開いた音だ。

「……………」

転がり、飛び出してくる女騎士に鋭い目を向けた。

『がはっ……!』

『おのれ……人間ごときが、この俺を……!!?』

憎々しさをあらわにして悪態をつく狼の異形だが、その身に受けた損傷は大きく立ち上がることもままならない。

カテゴリーJとQに位置する自分たち上級アンデッドが、たった一人の人間にこうも一方的に攻められ続けているのは、あまりの屈辱で脳が煮えたぎるほど。

アインはそんな彼らの憤怒も気に止めることなく、数枚のラウズカードを抜き出してその力を発動させた。

「THUNDER, SLASH, METAL, MACH. LIGHTNING
ASSAULT」

「ウエエエエエイ!!?」

雷の剣を振りかざし、アインは目にも留まらぬ速度でアンデッド達に接近し、落雷のごとき鋭い剣撃を刻み込む。

負荷が限界にまで達したアンデッド達はたまらず吹き飛ばされ、それぞれのバックルを展開させて崩れ落ちる。アインはすぐさまブレイラウザー、ではなく胸の谷間に手を突っ込み、二枚の空のラウズカードを引き抜いて両者に投擲した。

「…任務完了。リンデイ、次の獲物を探してくれ」

緑色の光に包まれて消えて行く異形達に背を向け、一瞥もくれずに飛来したカードをつかんだアインは、通信機の向こう側の相棒に指示を送る。

頼まれたリンデイは、その声に不安げな様子を混ぜて応答した。

「了解……と言いたいけど、あなたちよつと飛ばし過ぎよ。病み上がりなんだから無茶しないで」

「あいにく、そんなに時間がないんだ。頼むぞ」

「ちよつとアイン……」

一方的に自分の用件だけを伝えるアインに一言申そうとリンデイが声を荒げるが、アインはさっさと通信を切ってデバイスをしまい込む。

向こうでため息をつくりンデイの姿を想像し苦笑しながら、アインはまた胸元に手を突っ込み、数枚のラウズカードを取り出し眺めた。

「4、9、10、J、Q……これで残るはKのみ、か」

アインの手にあるのは、彼女の使うスペードのスイートのカードではなく、ハートの紋章が刻まれた五枚。

ジョーカーアインデッドでありカリスである、異形の男が有しているはずのそれを見つめ、アインは小さく息を吐いた。

「あのとき散らばったものを回収しておいてよかった……今のハジメに余裕はないだろうからな」

以前のハジメとの邂逅、コーカサスビートルアンデッドとの戦闘に介入した彼がカードを奪われた際に、一緒にばらまかれてしまった空のカード。

アインはそれを回収し、ハジメの代わりにアンデッド達を封印するために使用していた。ある、目的のために。

「……………」まで必死になったのは、いつ以来だろうな。他人のために、ここまで身を粉にして戦うなど……………」

いまの自分の姿を客観的に見て、アインの顔に思わず笑みが浮かぶ。他人にあらゆるものを奪われ、腐っていた自分が懸命に何かをしようとしているというのは、皮肉なものだと苦笑する。

なぜここまでやる気になれるのかと自問していたアインは、不意に脳裏に浮かんだ男の顔について赤面するのを感じ、慌てて頭を振って否定する。

何を余計なことを考えているのかと浮ついていて自身を叱りつけ、キツと表情を改めて頬を叩いた。

「さて、もう一踏ん張り……………」

そう自分に叱咤し、歩き出そうとしたアインは突如表情を強張らせ、即座にその場か

黄金の甲虫の異形は聞くに耐えない騒音のような咆哮をあげ、大剣を振りかざしてアインに向かって突撃していく。

笑い声のようにも聞こえるその咆哮の主に向けて、険しい形相のアインは静かにブレイラウザーを構え、同じく異形に向けて疾走を開始する。

そして次の瞬間、騎士と異形は互いに力の限り吠えながら、それぞれの得物を激突させた。

バトルロイヤルで一勝を得た喜びは今の彼女にはない。どこかの何者かによる悪意で呼び起こされ、駆り出された戦いなど胸くそが悪いだけで、心が微塵も奮いはしない。戦うたびに、虎の異形の心には不満が募り続けていた。

『いつそのこと……と言いたいが、それも癪だね』

一瞬だけ、自らの意思でこのバトルロイヤルを降りる考えを抱くが、どんなに不満があろうと己は戦士の一人であるという自負がそれを押しとどめる。己に誇れぬ戦いをするつもりはなかった。

この苛立ちをどう解消したものかと立ち尽くし、虚空を見上げていた時だった。

「……ハアツ!!?」

不意に背後から迫る裂帛の声に、虎の異形は振り向きざまに爪を構えることで応戦する。

振り下ろされた槍の刃と爪が激突して多くの火花が散り、乱入したクラブの騎士の仮面を照らし出した。

『またお前かい……?』

タイガーアンドデッドは面倒臭そうに振り向き、荒々しく槍を振り回して迫ってくる騎士と会いたいし、向けられた刃を爪で受け止める。

以前に彼我の実力差を見抜けず一方的にやられただけでなく、その後乱入した別の相

手に簡単にのされていた青年が再び挑んできたことに、タイガーアンデッドは心底鬱陶しそうに肩をすくめた。

『しつこい男は嫌われるよ』

「……………何を言われたって……………僕はもう……………退けない！」

『……………お前……………』

適当にあしらうことを考えていたタイガーアンデッドだったが、クラブの騎士が見せるこれまでにない気迫にふと振り向く。

以前まで見せていた凶暴性がわずかばかり引いて見える。荒れ狂う負の感情を理性で押さえつけながら、それでもなお敵に対する闘志を失わず、槍の切っ先を向けてきている。まるで前回とは別人のような変貌ぶりに、タイガーアンデッドは返す言葉をなくしていた。

「うおおおおお!!?」

雄叫びをあげ、ムーヴは槍を振り回しタイガーアンデッドに向かって突進していく。激情に押されるままの力任せの一撃だったが、思った以上に体重がかけられた強烈なもので、真正面から受け止めたタイガーアンデッドは思わず後ずさる。

続けざまに振るわれる突きは鋭く風を貫き、躲したはずのタイガーアンデッドの鎧に浅く傷を刻む。かすかについた裂傷を見下ろしたタイガーアンデッドは、思わずニヤリ

と不敵な笑みを浮かべていた。

『…へえ、この間よりは随分マシになってきたんじゃないか?』

「僕は……おれは……僕は、戦う! 他の誰に言われたわけじゃない…僕の意思で、お前達と戦う……!!?」

爪と槍がぶつけられ、激しい火花が異形と騎士の間に散る。クラブの騎士はヒュンヒュンと曲芸のように槍を振り回し、タイガーアンデッドを翻弄するように迫る。

向けられた爪の斬撃を紙一重で躲し、薙でタイガーアンデッドを弾き飛ばすと、宙に浮いたその真下でラウズカードを引き抜き、石突きのスリットに挿した。

「BLIZZARD, BITE . . . BLIZZARD CRASH」

「でやああああああ!!?」

食うちゆで身動きが取れないタイガーアンデッドに向かってムーヴは跳躍し、その腹を吹雪の力を纏わせた両脚で挟み込み、地面に向かって思い切り振り落とす。

地面に落下したタイガーアンデッドは、体の各所を凍結させられながら転がっていき、唸り声を上げてうつ伏せになる。だがすぐに体を起こし、四つん這いの体勢になってムーヴを睨みつけた。

『面白くなって……!!?』

未熟が過ぎ、強大な力に操られ流されるままであった青年。そんな彼がここにきて見

はあつという間に乱戦の場に変わり、異形たちの耳障りな咆哮が飛び交う惨状へと変わり果てた。

アンデッドたちから抜け出したムーヴは、いまもなお騒ぐ衝動に苦悶の声をあげながら、もう一度立ち向かおうともがく。

【FIRE, RAPID, BULLET, BURNING SHOT】

すると、突然アンデッドたちに無数の炎の弾丸が降り注ぎ、激しい爆発を起こして異形たちをまとめて吹き飛ばしてみせた。

ムーヴは目を見開き、バイクに乗って乱入してきた銀と紅色の鎧の騎士を凝視する。ダイヤの騎士もまた、バイクを停止させてムーヴの方に振り向いた。

「無事か、カムシン！」

「……！ あなた、は……？」

「返事ができるならいい。下がっている」

いつだったか、一度だけ面識のある騎士に案じられ、ムーヴは戸惑いつつも反応する。サクソはムーヴに一瞥だけくると、バイクから降りて銃を構え直し、起き上がったアンデッドたちに向けて銃口を向ける。

「おおおおお!!？」

一斉に向かってくる異形の群れに、サクソは雄叫びとともに発砲しながら、真正面か

ら突撃していった。

激しく激突し、火花や土煙を起こす騎士と異形たちの戦いを、膝をついたままのタイガーアンデッドが眺める。その目には、復活しかけたやる気を削がれた落胆の気持ちが大きく表れていた。

『…また横槍を入れられちまったよ……そういうのはもう、うんざりなんだけどね』

ようやく満足のいく結果にありつけると思ったのに、結局楽しみの邪魔をされるろくでもない結末。

何もかもを投げ出しなくなってしまったタイガーアンデッドがふと視線を動かし、槍を支えにもう一度立ち上がろうとしているムーヴに向けられる。

なおも立ち向かおうと抗っている青年の意地に、異形は知らぬ間に小さく笑みを浮かべていた。

『……まあ、一度くらいはこういう最期も悪くはないか』

仮ため息をついたタイガーアンデッドは、肩をすくめながら立ち上がり、ムーヴの方へと歩み寄っていく。

もがいていたムーヴは近づいてくる虎の異形に気づき慌てて身構えるが、異形が一切の敵意を見せず、その場にしゃがみこんだことで困惑の眼差しを向けた。

「……………何を……何?」

ムーヴは彼女が、槍に収められた空のラウズカードの一枚を抜き出し、自分の胸に突き立てたことでぎよっと目を剥く。

タイガーアンデッドはムーヴを見つめたまま、緑色の光に包まれカードに封じられる。その際、呆れた様子の声がムーヴの耳に届けられた。

「……せいぜい足掻きな。」

どうせなら、お前の力として戦うのも悪くはない…。

呆然と自分の手の中に収まるカードを見下ろし、自分の中に溶けていく声に言葉をなくすムーヴ。

ただの敵でしかない、人類を窮地に陥れる存在としか認識していなかった相手の予想だにしない行為に、周囲の状況すら忘れて固まってしまふ。

彼が我に返ったのは、すぐ近くにサクソが吹き飛ばされ、地面を転がってきたためだった。

「ぐおっ……！」

銀の鎧の各所を陥没させられたサクソはすぐさま起き上がり、徒党を組んだアンデッドたちを睨みつける。

その時、倒れた衝撃でサクソの腕から外れたラウズアブゾーバーが目の前に転がる。それを見た瞬間、ムーヴの脳裏に聞き覚えのある声が響いた。

「……今こそ、私たちの力を使う時だ……！」

ムーヴは自身のすぐ近くに、自分を想う二つの意思を感じて目を見開く。

その声に促されるまま、そして相変わらぬ破壊衝動に耐えながら、ムーヴは足元のラウズアブゾーバーを拾い上げ、左腕に装着した。

「……君は、何を……?」

「すみません……力を……借ります……！」

〔ABSORB QUEEN, EVOLUTION KING〕

ムーヴはサクソの声に應えることなく、自身の持つカテゴリーQとKのカードをホルダーから引き抜き、左腕のデバイスに差し込む。

その途端、デバイスから金色の土蜘蛛の紋章が描かれたスクリーンが出現し、ムーヴの体に重なっていく。同時に、ムーヴの全身から気味の悪い紫色の光が発生し始めた。

「ぐっ……ぐあああああ!!?」

体から溢れる異様な光にムーヴは苦悶の声をあげ、バチバチと帯電しながら棒立ちになる。

金色の光はムーヴの全身を包むと、まるで自らが鎧となるように彼から紫色の光を弾き飛ばす。その直後、鎧を生み出した時と同じ紫のスクリーンが出現し、その中から一体のアンデッドが姿を現した。

まれた。

ムーヴはそれを見届け、炎の中に倒れこむスパイダーアンデッドに向けて、空のラウズカードを投擲し、その中に封印を施す。

あつという間に行たちの姿はかき消え、しんと静まり返った。

「カムシン……」

「カテゴリーA、封印完了……」

サクソが凝視し、炎が踊る中、蜘蛛の描かれたカードを握ったムーヴが小さく呟く。

運命に抗い切ってみせた青年は、その成果であるラウズカードをじつと見下ろし、険しい表情で佇み続けるのだった。

◆? ◆? ?? ◆?

「がああああ……?」

悲痛な声とともに、空中に吹き飛ばされたアインが地面に叩きつけられ、ゴロゴロと転がっていく。

樹木の幹にぶつかってようやく停止し、アインは肺に溜まった血を吐き出して悪態をつき、悠々と近づいてくる黄金の甲虫の異形を睨みつけた。

『あははは……! ねえ……まだ終わりじゃないでしょ? もつともつと遊ぼうよ!』

「……! 生憎だがね……私はお前程度と遊んでいる暇はないんだ。それにな……お前に

もその時間は与えるつもりはない……！」

『そんなにボロボロになってなに言ってるの？ 面白いねえ、お姉さん……』

無然とした態度でもう一度剣を構えるアインだが、両足は膝をついたまま動いてはくれず、ガクガクと痙攣を続けている。

全身からじくじくと痛みが走るのは、おそらく包帯で塞いだだけの傷口が開きかけているからだろう。前回執拗に食らわされた無慈悲な猛攻の苦痛が思い出され、心よりも先に体が悲鳴をあげていた。

「アインー！ やっぱりそいつの相手は無理よ！ 一旦撤退して陸尉と合流しましょう！」

「……賢い選択だが、私にはできんよ」

「どうして……？？？ まだ時間はあるはずよ……？」

通信越しに、限界を覚已超过しているアインを案じたリンデイが悲鳴のような声をあげるが、アインはそれに頷くことはできない。

リンデイの言葉に間違いはない。自分よりも遥かに格上の敵、それも自分に次ぐ実力者であるサクソとともに挑んでも勝てないほどの強敵。単独で戦ったところで勝機はまずない。

しかしだからこそ、アインは目の前の異形に挑み、勝利を手にする必要があった。

(ハジメを救うには……カテゴリーKのアンデッドを、こいつと同程度の強者を倒さねばならない)

バトルファイトに参加するアンデッドの中でも、最強の一角を担っているというコーカサスビートルアンデッド。

助けを求めることは容易い。だがそれは、時空管理局員として最善の行動。ジョーカーアンデッドであるハジメを救うのは、アインの個人的な意思であり、管理局の方針とは大きく外れるもの。

本気でそれを成すつもりならば、アインはこの強敵に己一人で挑まなければならぬ。

(……あの時、私の力は確かにあいつに届いていた。慣れないデバイスに苦戦していたはずの体も思っていた以上に動き、全力で戦うことができた……その時抱いていた気持ちは、何だ?)

思い出されるのは、上級アンデッドである鷲の異形とたった一人で戦った時の記憶。

最初は一方的に打ち負かされるだけであった戦況は、イーグルアンデッドに叱咤され、己の覚悟を再確認してから大きく変化した。

その時に抱いていた感情は、一体なんだったのか。

(怒れ……怒れ……！ 思い出せ……私自身の過去を……忌まわしき因縁を……!!?)

じたアインは、それらの悲鳴を無理やり押さえつけ、自分の身体のみを構えて異形を待ち構える。

一歩も退く様子を見せないアインに、なおも撤退を願いリンディだったが、その表情が不意に驚愕で凍りついた。目の前にある機材が、異様な数値を叩き出してたからだ。

「これは……アインの適合係数が……急上昇している……何をしたの？」

「ウエエエエエエエイ!!？」

リンディの疑問に答えるそぶりなど一切見せず、アインは獣のような怒号をあげて走り出す。

コーカサスビートルアンデッドはそれを叩き潰そうと、大剣を振り上げて待ち構えていたが、アインは脳天に落とされたそれを思い切り殴りつけ、力尽くで弾き飛ばして見せた。

『は……え……?』

自分の手からすっぽ抜けた剣を凝視し、黄金の甲虫の異形は間拔けな声をあげて立ち尽くす。

アインはその隙を見逃さず、突っ立ったままの異形の鳩尾に渾身のフックを叩き込んだ。

「ウエエイ!!？」

「■■■■■■……！」

女の細腕とは思えぬ重い一撃が異形を襲い、黄金の甲虫の異形は緑の血反吐を吐いて後ずさる。

アインは休む間など与えず、異形の顔面に、脇腹に、胸に、情け容赦なく拳の連撃を突き入れていく。怒涛の勢いで放たれる乱打に異形は苦悶の声をあげ、あり得ないばかりにアインを凝視していた。

『な、ん……で……？？？ この間と……全然違う……！』

かすかに、異形の出す少年の声に怯えが混じって聞こえる。

コーカサスビートルアンデッドは、最強を自負する自分がそんな情けない声を発していることに気づき、すぐさま怒りに血管を浮き立たせた。

『ふざ……けるな人間があああああ!!?』

苛立ちをぶつけるように、黄金の甲虫の異形が片腕を振るってアインを吹き飛ばす。しかしアインは自ら後方に飛んで衝撃を緩和させ、突き立てた剣の位置にまで後退する。

展開したホルダーから三枚のラウズカードを引き抜き、剣のスリットに挿し、アインは迸る雷光を右腕に纏わせ、走り出した。

【THUNDER, BEAT, METAL. LIGHTNING STRIKE】

「おおおおおおお!!?」

「■■■■■■■■■■!!?」

赤い血を滲ませるアインと緑の血に濡れるアンデッドが、真正面から拳を振り上げて接近する。あつという間に両者の距離はゼロになり、固く握られた拳が迫る。

そして、かすかに速かったアインの拳がアンデッドの顔を打ち抜き、硬い鎧を砕いて破壊し、さらに鮮血を噴出させた。

『……嘘だ……こんなの……!』

割れた兜の中、大きく目を見開いたコーカサスビートルアンデッドが、なおも信じられないと言った様子で呆然とつぶやく。

巨体がゆつくりと傾いでいき、重い音を立てて地面に倒れこんだ異形は、やがてその顔を不気味に歪め、声をあげて高らかに笑い始めた。

『あは……はははは……! き……気をつけなよ……。レンゲルのように、封印したつもりで僕に支配されないようにね……』

「……余計なお世話だ、クソガキが」

『君がどんな最期を迎えるのか……楽しみにしてるよ。あは……あははははは……!』

アインは不穏な予言を残す異形に一瞥をくれると、自身の有する最後の空のラウズカードを取り出し、気怠げに投げる。

黄金の甲虫の異形は不気味に笑ったまま、緑色の光に包まれ封じられていく。その最期の姿である、赤いスペードの紋章と紫紺の甲虫が描かれたカードを手にし、アインは真剣な表情で立ち尽くしていた。

「……………これが、カテゴリーK……………」

最強の異形の力が秘められた、最後の一枚。

凄まじい威圧感を放つそれを、アインはただじっと見つめ続けていた。

9. 王の力

「……数がかなり……減った。残るアンデッドの気配も、そう多くはないな……」

深い森の中で一人佇むハジメは、本能によりうつすらと感じていた他の同類たちの気配が少なくなっていることに気づく。

カテゴリーAから10の下位アンデッド達だけではない、上位のアンデッドたちも続々と討ち取られていることに内心驚きながら、徐々に自身に迫る決断の時を思う。

残された時間がそう長くはないことを察しながら、歩き出そうとしたハジメの顔が不意に歪む。

「くっ……」

胸を押さえ、樹の幹に寄りかかったハジメは苦悶の声をあげ、体の内側から湧き上がる衝動を必死に押さえつける。

以前にスペードのスイートのキングと激突した時から起きていた破壊衝動。それが日増しに強くなり、抑え込むこともままならなくなり始めているのは明確だった。

「……限界、か」

正気を保てている時間もそう長くはない。いずれは本能に突き動かされるだけの、た

だの醜いケダモノに成り果てるのかと思うと、虚しさが募る。

そんな姿を見たあの女騎士が、いつたいどんな表情を見せることになるのか。それと思うと、ハジメの胸中は重く沈んでいく。

なるべく遠く、誰もいない場所に行こうと踏み出しかけた時だった。

「随分侵食が進んでいるようだね、アイゴ・ハジメ……いや、ジョーカー」

聞きなれない声に、ハジメは歩き出そうとしていた体を止めて振り向く。

その視線の先、木々の影から姿を現した、冷たい目を持つ中年の男を見つけると、ハジメの表情は険しく歪められた。男が浮かべている意味深な笑みが気色悪く、苛立ちを覚えさせられる。

「……お前は、何だ」

「名乗る必要なんてないよ……実験動物にいちいち挨拶を送る殊勝な人間がいると思うかい？ くだらない」

「……どうやら死にたいようだな」

話しかけておきながら、一方的に見下す態度をとる男にハジメはさらに苛立ちを募らせ、両の目から剣呑な光を発する。

己を抑え込もうとしていた理性の鎖を自ら解き放ち、ハジメは一瞬にして体の輪郭を歪め、悪魔のような形相の異形へと変貌した。

ど、どの生物の始祖とも思えない明らかな異形だった。

「グルルルル……」

ジョーカーアンデッドはおぞましい唸り声をあげ、敵意を向けてくる三つ首の異形を見る。

単に敵が現れたからだけではない、その異形から感じ取れる気配が、全てのアンデッドと同じ気配を放っていたことが、彼の琴線に触れた。

「さあ、観測開始だ。存分に暴れたまえ」

「ガアアアアア!!?!」

「■■■■■■■■!!?!」

謎の男の言葉が、二体の異形の戦いの火蓋を切つて落とす。ジョーカーが従ったはずもないが、目の前の異形が放つ敵意が彼の闘争本能を否応なく刺激し、駆り立てる。

耳障りな咆哮をあげ、再び激突するジョーカーアンデッドと謎のアンデッドは、互いに夥しい量の体液をぶちまけながら殺しあう。何者とも縁のない、戦うことしか考えられないよう生まれた異形達は、周りの木々をへし折りながら力の限り暴れまわった。

その様子を、あらゆる命が巻き込まれ踏み潰されていく光景を、謎の男は興奮した様子で凝視し、笑顔を浮かべていた。

「素晴らしい……！ ジョーカーアンデッドを正面から渡り合えるあの膂力……そして戦

闘を厭わない純粋な殺意………！ まさに戦うために生まれた個体……私に理想通りの生命体だ……！！？」

周囲に破壊と死をもたらし、それでも止まることなく命を削りあう異形達に、謎の男が浮かべるのは恍惚とした笑み。正気を疑うほどに醜悪に歪んだその笑顔は、長年待ち望んでいた存在を見つけたことへの歓喜で満ちていた。

本能に促されるまま、辺りを緑色に染め上げ荒れ狂う二体の異形。彼らが起こす轟音は、気配を感じて慌てて飛んできた女騎士をその場に呼んだ。

「ハジメー！」

撒き散らされた樹々の破片をかき分け、激戦の場へ飛び込んできたアインは、ぶつかり合う緑と三つ首の異形達を見つけて瞠目する。

アインの目にも、三つ首の異形の姿は異様の一言に尽きた。まるで何者かが異形達を無理矢理混ぜ合わせ、人為的に生み出したような醜悪な姿に、言葉をなくして立ち尽くしていた。

「何だあの化け物は……！！？」

「……いいところに来たねえ、アルデブラント陸曹長。ここまで協力してくれた君にはぜひ、アレの晴れ舞台を見届けて欲しいと思っていったんだよ」

目を奪われていたアインは、すぐ近くから向けられた気色の悪い笑い声にハッと表情

を変えて振り向く。

不気味な笑みを顔に貼り付けて話しかけてきた見覚えのない男に、アインは訝しげに眉をひそめる。だが、男の見せる見下したように冷たい眼差しに、ある青年の話を思い出した。

「お前は……そうか……お前がムーヴにレンゲルの力を渡した男だな」

「耳が早いねえ……そう、私はビスタ・ヘヴンズロード。君達の組織BOARDの設立者にして、ライダーシSTEMの生みの親……つまり君達にとつては主人に値する者だ」

「……!? お前が……!?」

覚えのある名を聞いたことで、アインの目の前にいる男に対する警戒心がさらに跳ね上がる。

これまで姿を見せてこなかった、事件に対する最大級の功労者。その人物が現れたことに驚くも、決して味方と思うことができず、アインは鋭い目でヘヴンズロードを見据えた。

「……主人とは笑わせる。今まで表に顔を出さなかつたくせに散々現場を引つ掻き回しやがつて……いや」

冷え切った爬虫類のような目を見て、そして今もなお暴れ回る三つ首の異形を見やり、アインはふと抱き続けていた疑惑を思い出す。

根拠は何一つない、しかしひしひしと感じられる危険な気配により、根付いていた疑いが確信へと変わりつつあった。

「そもそもお前こそ、バトルファイトの復活の原因で、この事態の黒幕つてやつじゃないのか？ ……あんな化け物を見る限りな」

「黒幕とは心外だな。私はただ……自分の夢を実現させようとしただけだというのに」
「夢だと……？」

否定が返つてこなかったことに舌打ちし、アインは続けて聞こえてきた意味深な言葉に眉を寄せる。

これでもう、この男がアンデッドを解放しミッドチルダに混乱をもたらした元凶だということとは確定した。隠す様子もないのは気になるが、悪びれる様子がないことが腹立たしく感じられて仕方ない。

だが今はそれ以上に、この男が何を望んでいるのかがわからない。凶悪な異形達を解放し、新たな怪物を作り出すことで何が満たされるといふのか。

無言で詰問するアインの眼差しに、ヘヴンズロードは良くぞ聞いてくれたというように笑みを浮かべ、三つ首の異形に恍惚とした目を向けた。

「君はこの世界が……たまらなく醜く思えることはないかい？」

その言葉に、アインの肩がわずかに揺れる。ヘヴンズロードに向けられていたさつき

がかすかに薄れ、言葉の真意を探るように視線が鋭くなった。

「私は耐え難い……！ これほどまでに醜く、薄汚く、汚れに満ちた生命体が世界の支配者を気取っていることが！ ちっほいで、そのくせ見栄っ張りなどうしようもない人間が、我が物顔でこの世界に君臨していることが！」

異形達のもたらず破壊音をBGMに、ヘヴンズロードは激情のままに語ってみせる。本心からの怒りを、ここぞとばかりにたった一人の観客に向けてぶちまける。

口調こそ義憤で悪事を成そうとしているように聞こえるが、アインの目にはそうは映らない。虚空に向けられているヘヴンズロードの熱に浮かされた目は、明らかにそんな大義を掲げているようには見えなかった。

しばらく騒いでいたヘヴンズロードは急速にその熱を下げていき、無言で佇んでいるアインに不気味な笑みを見せた。

「リセットが必要なのだよ……何者よりも強く、美しいアレのような存在が世界を牛耳るためにね！」

「…語るに落ちたな、クソ野郎が」

思った通りだと、アインは冷たい目でヘヴンズロードを見つめる。

どれだけ大層な理由を正義として掲げようが、本人の欲望を隠し切ることができていない。口にする言葉の全てが、単なる張りぼてにしかなくなっていなかった。

「……くだらんな」

アインは心底あきれた様子で、硬直するヘヴンズロードとジョーカーを相手に暴れまわるケルベロスアンドンデッドを見やる。

異形は自分の相手と戦う事に忙しいのか、冷めた目を向けるアインには気付かず吠えながら暴れ続けている。知性のかけらもない、とても高等とは思えない存在に、アインはむしろ哀れみに似た眼差しを送っていた。

「そんなろくでもない話で私に同意を得られるとでも思ったのか。結局、お前が言っているのは聞くに耐えない妄言じゃないか」

鬱陶しそうに眉間にしわを寄せ、アインはデバイスを取り出し、ラウズカードを差して腰に巻きつける。

赤いベルトが巻かれ、待機音を鳴り響かせると、アインはその目に怒りの炎を燃やしながらくつくりと構えをとった。

「私も……あいつも、そんなものに付き合っている暇はない。変身！」

【TURN UP】

レバーが引かれ、デバイスから飛び出した青いスクリーンがアインの体と重なる。

甲虫の紋章がアインと融合し、一瞬にして銀と紫根の鎧が纏われると、アインは険しい表情のまま腰に佩いた剣を引き抜いていく。

ヘヴンズロードはアインが戦意をあらわにしたことにあきれ、軽くため息をついて肩をすくめる。自分が生み出した最強の存在に、この女は無謀にも挑もうと言うのかと。

「今更君に何ができる……」

落胆したように吐き捨てたヘヴンズロード。だがその見下した顔は、アインが取り出したラウズカードの束を目にした途端一変した。

「……まさか、いつの間にそれを……?」

「受け取れ、ハジメ!!」

初めて、明らかな狼狽を見せたヘヴンズロードに構わず、アインは吠えるジョーカーに向けて、13枚のラウズカードをまとめて投げつける。

カードが散らばると同時に、アインは三つ首の異形の元へ駆け抜け、ブレイラウザーを掲げて躍り掛かった。

「……ケンザキ……まさか、お前……!」

ラウズカードの束を見下ろしたジョーカーアンデッドの姿が、すぐさま青年の姿に変化する。

呆然とカードを拾い上げて立ち尽くしているハジメを背にし、アインはケルベロスアンデッドを殴り飛ばし、一時距離を取る。その隙に、カテゴリーQのカードを左腕のデバイスに挿入した。

【ABSORB GUEN】

「……キング、私に力を貸してもらおうぞ」

そう呟き、真剣な表情で見下ろすのは、先日封印したばかりの三角の甲虫が描かれた一枚。

王を意味する文字が刻まれたその一枚をじっと見下ろしたアインは、それをデバイスのスリットに差し込もうとした。

「……気をつけなよ。」

レンゲルのように、封印したつもりで僕に支配されないようにね…。

不意に、封じられた黄金の異形が最期に口にした言葉が脳裏をよぎる。負け惜しみのような忠告が、今になって生々しい嫌な予感をもたらし、アインの動きを止める。

だがアインは、もう一度表情を引き締め、意を決した様子でラウズカードをスリットに通した。

【EVOLUTION KING】

野太い男の声とともに、アインのデバイスから青い閃光が走る。

その後ろで、覚悟を示したアインに続くようにハジメも一枚のラウズカードを、亡霊蠅の異形が描かれたそれを持ち、バックルのスリットに通す。

【EVOLUTION】

進化を意味する単語が紡がれ、女騎士と異形の戦士の体にそれぞれ黄金の閃光が迸る。

肉体に走る強大な力に、ハジメは平然とした様子で佇むも、アインは途端に苦悶の声をあげて体をくの字に折り曲げ始めた。

「ぐっ……がつ、ぐっ!!？」

大きく目を見開き、胸の内から溢れる力で弾けそうになる衝動に必死に耐える。デバイスから発せられた力が全身を貫き、とてつもない圧迫感と激痛をアインにもたらししていた。

ケルベロスアンデッドやヘヴンズロードが怪訝そうな視線を送る中、天を仰いだアインの全身が金色の光を放ち始めた。

「ぐっ……うああああああああああああああああああ!!？」

アインの絶叫に応じるように、アインの持つ13枚のラウズカードが宙に浮かび、アインの周りを回り出す。同じくハジメの周囲にもラウズカードが浮かび、円陣を組むように巡回する。

黄金の光を纏ったラウズカードは、アインとハジメの体の各所と融合し、新たな鎧へ変化していく。

黒いドレスに身を包み、肩・上腕・下腕・腿・膝・脛、そして胸に異形達の形を模し

た、金色の紋章を飾ったアイン。胸に緑のハートを飾り、真紅の鎧とスーツを纏ったハジメ。

一瞬にして、王の力を身に宿した二人の騎士は、新たな姿へと進化を遂げていた。

「……!? これは……一体……!?」

アインの戦闘を観測していたリンディは、急激に変動し始めた数値に驚愕をあらわにする。

ここまでの変動は、前回のカテゴリーKとの戦いにおいてカテゴリーJと融合した時と同じ、いや、それをはるかに上回る変動を表している。

それが単に、コーカサスビートルアンデッドの力が強力だというだけではないことは明らかだった。

「カテゴリーKとの融合……いや、それだけじゃない」

「どういうこと……!?」

同じく数値に目を釘付けにされていたケインズが、二体の戦士に起きている変化を冷静に分析する。だが、やはり驚愕が大きいのか、こめかみから一筋の脂汗が伝って落ちていった。

「ケンザキとアイゴは今……13体のアンデッドと融合している」

「何ですって……!?」

リンデイにもケインズにも予測できなかった、アインとハジメの進化。

黄金の鎧と真紅の鎧を纏った異形の戦士達は、それぞれの手に現れた新たな武装を手
に、獐猛な咆哮をあげる三つ首の異形に向けて身構えた。

「おおおおおおお!!?」

「あああああああ!!?」

アインは紫紺と金で、甲虫の形の装飾が施された大剣を、ハジメは二振りの小型の鎌
を構え、左右からケルベロスアンデッドに向かって突進する。

策など何も考える暇はない。湧き上がる力に促されるままの無我夢中の突撃だった。

「■■■■■■■■■■!!?」

唸り声をあげ、三つ首の異形は真正面から二人の突進を受け止める。

だが、アインが振り下ろした大剣は凄まじい重力をケルベロスアンデッドにもたら
し、地面もろとも異形を叩き潰す。深く地中にめり込まされ、アンデッドは混乱に陥れ
られながら苦悶の声をあげる。

「おおおおお!!?」

地面にねじ伏せられ動けないケルベロスアンデッドに、次にハジメの振るう鎌が食ら

いつく。

蠟螂を模した構えから繰り出された二閃は容易く異形の鎧を切り裂き、緑の血を大量に噴き出させる。傍目からは致命傷、しかし不死に近い肉体を持つ三つ首の異形はただ、体に走る激痛に苦しむばかりだった。

「■■■■■■■■■■！！？」

「うるさいー！」

狂ったように刃を振り回す異形に、アインは鋼鉄の籠手による拳をめり込ませ、思い切り吹き飛ばす。

異形の体は木々を粉碎しながら宙を舞い、木片にまみれながら地面に叩きつけられる。過剰なほどの損傷を受け続け、ケルベロスアンデッドは悲鳴のような咆哮を上げていた。

もはやそこで起きているのは戦いなどではない。圧倒的な力を持って余した強者による、一方的な殲滅だった。

「馬鹿な……?!? なぜケルベロスがここまで押されている?!?」

ヘヴンズロードは目の前の光景を信じられず、ただ打ちのめされるままのケルベロスアンデッドを凝視する。

全てのアンデッドの細胞を組み込み、研究の果てに完成した最強の生物。全ての生物

を凌駕しうるはずの絶対の存在が、ただの人間の女と過去の遺物に叩きのめされている。

だが、ヘヴンズロードの目に悲観はない。異形と騎士達の戦いの全てを、その目に刻み込もうとしていた。

「ウエエエエイ!!？」

「はあああああ!!？」

アインとハジメの振るった斬撃が、ケルベロスアンデツドの胸部を切り裂き激しい火花を散らせる。

地面や岩場を砕いて吹っ飛ばされた異形を見やり、アインは空中に手を伸ばす。そして現れた金色の輝きを放つ五枚のカード、ギルドラウズカードを手にし、大剣に呑み込ませていった。

【SPADE 10, SPADE JACK, SPADE QUEEN, SPADE KING, SPADE ACE】

同じくハジメも、何もない空中に手を伸ばすと、唐突に現れた一枚のカードを掴み、目に掲げる。

二振りの鎌を折りたたみ、柄を合わせると弓に組み込み、一つの刃に変える。そして手にしたカードを、弓のスリットに差し込み込ませた。

響かせて四散する。

爆風に髪を飛ばされ、バタバタとドレスの裾をはためかせたアインが、ブンと大剣を振るって緑の血糊を払いのける。

「…逃がし、たか」

自分の視界に、自体の元凶たる憎々しい男の姿が映らないことに、アインは小さく舌打ちをこぼして、バックルを外す。

鎧が音もなく消え去ると、ハジメのまどついていた鎧も霞のように消える。青年の姿に戻ったハジメは、破壊衝動の起こらない自身の変化に戸惑い、それをなしたアインにじつと視線を向ける。

「……………」

「…ケンザキ！」

不意に、ぐらりと体を傾がせたアインに気づき、ハジメは慌ててその体を受け止める。苦悶に満ちた表情で荒い息をつく女騎士を抱きかかえ、ハジメはどこか苦しげな、厳しい表情で立ち尽くしていた。

10. 愛のために

不意に降り出した雨は次第にその勢いを増し、あつという間に豪雨となつて木々を叩く。

分厚い雲によつて陽光はほぼ完全に遮られ、夜のように真つ暗な闇があたりを支配し始めた。

「……疲労だな。どれだけ長い間戦つていたんだ、お前は」

寂れた空き家の中を勝手に拝借し、腐つた家具の上に毛布をかけた簡易的なベッドにアインを寝かせたハジメが、そう呆れたようにこぼす。

荒い息を吐き、以前受けた傷の後を抑えていたアインは、そんな苦言に苦笑を浮かべた。

「つ……!!? すまん、ハジメ……」

「謝るぐらいなら、もつと自分を大切にしろ。……お前の友が泣くぞ」

「リンディか……泣くかな? むしろ、また無茶をやつたなと怒られそうだ……」

アインはやや朦朧とする意識の中、三つ首の異形との戦闘が始まってから、まったく親友に向けて通信を繋いでいないことに気づく。

突然始まった凶悪な敵との先頭にやきもきさせられた彼女がどんな反応を示すか、考えるだけで憂鬱だった。だが、いまのアインには正直それどころではなかった。

(……残るアンデッドは、ダイヤのスーツのカテゴリークだけ……だが、ヘヴンズロードがまだ何か目論んでいるんだろうな)

狂った天才が生み出した、多くの異形たちの遺伝子を利用して作り出された最強のアンデッド・ケルベロス。

土壇場で使用したカテゴリークの力を使い、ハジメと共闘してようやく討ち取ったあの異形が、一体だけだなどと樂觀視するつもりはない。おそらくまた、あの狂人は何かをもたらしにくることだろう。

「……お前は、これからどうするつもりだ」

アインは重い体に叱咤し、傍で黙り込んでいるハジメに向かって問いかける。彼は物憂げに振り向くと、アインをじっと見つめて問い返した。

「どうとは、どういうことだ」

「とぼけるな。カテゴリークを……全てのアンデッドを封印したら、残るのはお前一人だ。そうなれば……世界は」

「……滅ぶだろうな。だが、そうはならない」

ハジメは抑揚のない声でそう告げると、懐から一枚のラウズカードを取り出す。

『SPIRIT』と書かれたそのカードを見つめていた彼は、おもむろに立ち上がると、真剣な表情でそれをアインの手に握らせた。

「これを、持っていけ」

体にうまく力が入らないアインは、強引に持たされたらウズカードに訝しげな目を向け、行為の意味を聞こうとハジメを見上げる。

その瞬間、アインは大きく目を見開き息を呑む。立ち上がったハジメは、さらに取り出した空のラウズカードを掲げ、まるで自分の胸に刃を突き立てるように振り下ろしていたからだ。

「やめろ!!?!」

アインは声を荒げてハジメに飛びかかり、間髪その手からラウズカードを弾き飛ばす。

アインは押し倒したハジメの上に馬乗りになり、鋭い視線で見下ろす。その目に浮かんでいるのは激しい怒りで、ハジメはそれをどこか苦しげに見上げていた。

「何を馬鹿なことをしている……俺を封印する絶好の機会だったんだぞ。それがお前の使命で——」

「こんな騙し討ちのようなやり方で、私が納得すると思ったら大間違いだ!!?!」

咎めるように告げるハジメの言葉を、アインは激情をあらわにしながら遮り、言い放

つ。

ハジメは眉間にしわを寄せ、融通の聞かない女騎士に諭すような目を向ける。深いため息が表しているのは、わざわざ語ることへの気恥ずかしさか、あるいは悔しさか。

「こうする他に、人間が生き残る方法は残っていない……ヒューマンアンデッドを解放し、その上で俺を含む全てのアンデッドを封印しなければ、この世界の人間は滅ぼされるのだぞ」

「はっ……全てを破壊するジョーカーがずいぶん甘いことを言うものだな！ むしろお前は、それが望みだったんじゃないのか!?」

ハジメを組み伏せたまま、嘲笑を浮かべてアインは吐き捨てる。

本能のままに暴れまわり、己以外の全てを滅ぼすことを宿命として生まれてきた異形が、他者を思い自らを終わらせようと決断するなど、どれだけ歪んでいる考えか。

そして同時に、その歪みがどれだけ悲しいものか。

「……そうだと言えよ、ハジメ。お前がそういう存在なら、そのあり方を全うしてくれよ……」

アインはハジメの胸にうなだれかかり、悲痛さに満ちた声で懇願するようにこぼす。

もしハジメが、ジョーカーアンデッドが生み出された当初と同じ残酷な存在であったなら、アインは討ち取ることに一切の躊躇はしなかつただろう。

しかしこの異形は、変わってしまった。人の、優しさを手に入れてしまった。

「何でお前は……そうやって自分を犠牲にできるんだよ。こんなろくでもない世界のために、命を捨てられるんだよ……」

何よりも信じられないのは、人の心を学んだにも関わらず、自己犠牲の精神を有してしまっていることだった。

アインの知る人間にはそう多くはない、自分以外の誰かのために命を懸けられる存在、彼がそういう稀有な存在になってしまっていることだった。

「私は違う……私はずっと……自分のためだけに戦ってきた。自分の憎しみに突き動かされて、これまで生きてきた……それ以外に、私が存在する理由なんてなかったんだ……！」

自分の脳裏に蘇るのは、決して幸福とは思えない苦しみと悲しみに満ちた生。まともな親兄弟の愛情を知らず、存在そのものを否定され続けるろくでもない記憶のみ。

なぜ自分がこんな目に遭うのかと、世界そのものを呪っていた。

だからアインには、ハジメの姿が眩しく見え、どうしようもなく妬ましくて仕方がなかった。

「なんでお前はそう在れる……？　なぜ……自分以外のためにそうできるんだよ……！」

「……そうだな、以前の俺なら、こんなことをしようとは思わなかっただろう」

涙声で項垂れ、自分の胸にすがりつくアインを見つめ、ハジメは自嘲するようにため息をつき、アインの頭に手を乗せる。

ハジメも、自身の感情の変化に戸惑い、その理由がわからないことに複雑な思いを抱いていた。なぜ自分はここまでの変貌を遂げたのか、その家庭に何があったのかと不安さえ覚えていた。

そして今、ハジメは自分の胸の中にいるアインを見て、ようやく気づかされていた。

「誰にも望まれず、誰とも繋がりなかった俺にとってこの世界は、煩わしいものでしかなかった。どこの何とも知らない存在に破壊衝動を植え付けられ、憎まれるだけの存在でしかなかった俺は、何もかもを壊したくて仕方がなかった」

自分と彼女は同じだった。

憎しみと怒りを持って生まれてきた、限りなく同じ存在。身勝手な理由で生み出された、どこまでも似ている命。

鏡のように目の前に現れたその目が、怪物に心を与えた。

「……そんな中で、俺はお前に出会った。力なき種でしかないお前が、何度倒されようと、何度泥と灰にまみれようと、血を流そうと立ち向かう姿を見て……俺はひどく、惹かれていた」

ハジメの手が金の髪を滑り、アインの頬に触れてそつと持ち上げる。上げられた赤い

宝石のような瞳は涙に濡れ、切なげな表情がハジメの胸を締め付ける。

荒々しく、力の限り戦い続ける女傑。しかしその実態は、自分の弱さを押し隠すために必死に張られた、虚勢。

そんな彼女が見せている素直な感情が、異形の胸を打っていた。

「この姿を借りた影響なのかはわからん……だが俺は確かにお前に目を奪われ、焦がれるようになっていた。初めての感覚で、どうしたらいいものかと思っていた」

破壊の申し子として生まれた怪物が、人目を忍ぶために借りた姿。

仮初めの感情かもしれない。偶然生まれたバグなのかもしれない。しかしそれが偽物だと切り捨てることは、今のハジメにはできなかった。

今、自分の心臓を激しく脈打たせている力が、虚構だと思いたくはなかった。

「俺が勝ち残れば、お前のいるこの世界は終わる……だが俺が封印されれば、お前は守られる。……そう悪くないと、俺は思う」

言い切ってから、ハジメはアインの手に握られたラウズカードを見つめ、アインに促すように視線を向ける。

黙り込んでいたアインは顔を俯かせると、カードを握り締める手にさらに力を込める。絶対に渡すつもりはない、そう断言するように。

「……ハジメ」

「……なんだ」

「私はお前が……嫌いだ」

ハジメの頬に、滴った雫がいくつも当たる。

真上から覗き込んだアインが、ボロボロと涙をこぼし始めの顔を濡らし続けていた。眉間にはしわが寄り、眉尻は下げられ、苦しみと悲しみがいっぱいになった表情がハジメの瞳に映り込む。

その口から漏れ出た女の声は、普段からは想像もつかないほど弱々しく、痛々しい響きが混じっていた。

「誰よりこの世界を憎んでいるくせに、誰より他の存在を恨んでいるくせに、私一人のためだけに自分を犠牲にしようとするお前が……大嫌いだ……!!?」

「ケンザキ……」

「お前は…… どうしてお前のために戦えない!!? 誰かに突き動かされるのが嫌だったんだらう!!? 縛り付けられるのが嫌だったんだらう!!? だったらそうしろよ、お前のために戦えよ!!?」

ぶちまけられる罵倒の数々は、もはやアインの感情のままにばらまかれるだけの言葉の羅列でしかない。自分の思い通りにいかないことへの苛立ちを、ハジメに叩きつけているだけだった。

胸を叩き、醜態を晒すアインをハジメは遠い眼差しのまま見つめ、黙って頭を撫で付ける。自身も、湧き上がる感情を持って余しているような複雑な表情で、ただされるがままになっていた。

「私に焦がれてくれるなら……私を求めてくれるなら、そう言ってくれよ、ハジメ……！」

額を押し付け、アインは消え入りそうな声でハジメに懇願する。

疲労など感じる暇などない、今ここでこの男を繋ぎ止めておかねば後悔すると確信し、ハジメの上着をきつく握りしめたままうなだれる。

ハジメは顔をしかめ、自身に馬乗りになっている女の方を両手で掴み、顔を上げさせようとした。

「ケンザ……！」

紡がれようとした言葉は、覆い被さってきたアインの顔に遮られる。

ハツと息を呑んだ時には、アインの唇がハジメのものを塞ぎ、声そのものを封じてしまっていた。

呆気にとられていたハジメは、すぐに我に返るとアインの肩を押しつけようとする。だがアインは目の前の男の首に手を回し、後頭部で組んでしつかりと固定し離れることを拒否する。

永遠にも思える長い間、二人は唇を重ね続ける。ようやく離れた時、ハジメからは拒む気力が完全に失われていた。

「もう、何も言うな……ハジメ」

「……アイン」

薄暗い中で、もう一度アインとハジメは見つめ合い、瞳の奥底を覗き合う。

アインは頬を赤く染めて瞳を閉じ、また首を伸ばして唇を重ね合わせる。今度はハジメも抵抗せず、熱を孕んでいくアインの体を抱きしめ、自らも唇を重ねに行く。

互いの手が相手の衣服にかかり、ゆつくりと剥ぎ取られていくと、アインの体の傷にハジメの手が触れ、電流のような痺れが走った。

——これは、許されない行為だ。

生まれたままの姿にされていきながら、アインは脳裏で自身を引き止めようと呼びかける何者かがいることに気づく。

これ以上先に進めば、もう後戻りはできない。苦痛に満ちた未来しか待つていないのだと声高に叫ぶ、知っている誰かのような声が聞こえた気がした。

しかしアインは、止められなかった。自身の肌を撫でられる心地よさを拒めず、情欲のまま体が勝手に動いてしまっていた。

——これが罪だというのなら、それでもいい。

この温もりを奪われるのなら、もうこの世界の何にも価値など感じられはしない。

これは私が……ずっと欲しがっていたものだ。

触れ合った肌が火傷しそうなくらいに熱を帯び、壊れてしまいそうなほどに心臓が脈動する。男の手が敏感な部分に触れると、神経に異様な電流が走って脳が蕩けそうになる。

背筋に震えが断続的に走り、喉奥から自分でも聞いたことがない声がこぼれ出す。そしてその感覚を、麻痺のように欲し続けていた。

——なのに、世界はこいつを否定する。

私が求めていたものを、横から奪っていく。

世界は最後まで……私が望むものを拒絶していくんだ。

アインは自身を襲う快楽の波に、もはやされるがままになる。自身の体の奥底に打たれる楔に、胸の奥にあつた隙間までもを埋められるのを感じながら、ハジメのもたらず熱に咽び泣いていた。

やがて感じる、自身の中で弾ける白い熱により、アインの意識も天高く飛ばされていく。

それがどうしようもなく嬉しくて、同時にどうしようもなく悲しく、苦しみに苛まれ

た。

——ハジメが最後の一人になったら、この世界は終わる。

荒い息を吐き、アインはハジメの胸の中ですすり泣き、悔しさに歯をくいしばる。

確定してしまった事実の重さに、心が制御を受け付けない。

——他のアンデッドを解放したとしても、脅威が消えるわけじゃない。

ヘヴンズロードのように、新たな脅威を生む可能性だってある。

——きつとそれに抗えるのはハジメだけ。

最強のアンデッドであるジョーカーだけ。

そうなつてしまったら、もう何もかもが終わつてしまう。

体の痛みよりも、胸の痛みが激しくて仕方がなかった。

決して失いたくない、何物にも代え難いものを手にしたのに、それが否応なくわが身

から離れていくことが悔しい。それをどうしても認めたくなくて、アインは鬱屈とした

気分で悩み続ける。

そして不意に、ある一つの考えが頭をよぎった。

——最後の一人じゃ、なかったら？

本当に唐突な、きつかけも何もわからないほどにいきなり思い浮かんだその考えに、

アインはしばし言葉をなくす。

薄暗い闇の中でアインは、愛しい男の腕に包まれながら、そのことだけを考え続けていた。

11. 最後の二人

春風が吹き抜ける、心地よい休日の午後。

ミッドチルダ市街のショッピングモールには、大勢の家族連れの客が集まっていた。婦人服売り場では女性客が談笑しながら商品を眺め、遊具がおかれた広場では子供達の元気な声と、それに付き合う父親達の疲れたため息が響き渡る。

笑顔に溢れ、平和そのものを表したようなそんな場所で、その男は一人、立ち尽くしていた。

「…私が間違っていた」

無表情で佇む男、ヘヴンズロードは周囲の喧騒に一切の興味を示すことなく、虚空を見つめて小さく呟く。

その手に握られた一枚のカードに、初老の男は視線を落とす。己の全てをかけて生み出したそれが迎えた最期を思い出し、サングラスの向こう側の表情がぐつとしかめられる。

「どれだけ優れた能力と、比類なき剛力を兼ね備えた種族を作り出したところで……思慮深き頭脳を有していなければただの怪物」

三つ首の狂犬の絵が描かれたカードを見下ろし、消え入りそうな声で呟く男は、後悔の感情をにじませてこぼし続ける。

客には到底思えない異様な雰囲気醸し出す男を、周りの人々は遠巻きに眺め、そして関わり合いを避けようと距離を取っていく。好奇心旺盛な子供達でさえ、不気味さを感じたのか逃げるようなそぶりを見せている。

「欲深で醜悪な現在の人類を絶滅させたところで、同じ道を辿ってしまえば何の意味もない……同じことを繰り返し、またしても世界は醜く穢されていく」

周囲の困惑の視線も気にならないほどに、ヘヴンズロードはラウズカードを見つめ、顔を俯かせる。

やがて肩が小刻みに震え出したかと思うと、徐々に体が揺れ始める。ギチギチとラウズカードが握り締められ、食いしばられた歯が軋む音を立て出す。

それを見て、心配そうに近づいた一人の子供が、どうしたのかと下から顔を覗き込んだ。

「そうだ……こんな簡単なことになぜ気がつかなかった」

だが、男が浮かべていた醜悪な笑顔に、子供はハッと目を見開くとその場から後ずさり、慌てて逃げ出し両親の元へと向かう。

ヘヴンズロードは咎めるような厳しい視線を無視し、狂気に満ちた笑顔で天を仰ぎ、

ラウズカードを掲げてみせた。カードの中に封じられていた、さらなる可能性を見出したように。

「新たな種の創造者に、神になどなる意味はない……私こそが、支配者とならねば意味がないではないか」

ふと、横目を向ければ、誰かが通報したのか、警備員らしき制服を纏った男達が、客に案内されながら近づいてくるのが見える。

ヘヴンズロードはそれを一瞥すると、またさらに凶悪な笑みを浮かべてラウズカードを見やる。それはまるで、実験にちょうどいい相手が現れた、そんな醜悪な考えが助けて見える笑顔だった。

ヘヴンズロードは駆け寄ってくる警備員の前で、左腕に巻いたガントレットを晒し、その上に開いた口にラウズカードを挿入した。

「変身……！」

カードがガントレットに飲み込まれた直後、緑色の液体のような光に包まれ、ヘヴンズロードの姿が一変する。

刺々しい鎧を纏い、三つの首を肩と首の上に生やした異形ケルベロス。以前の個体と異なるのは、胸から生えた上半分の人の頭部、ヘヴンズロードの顔と目が覗いていることだった。

「ぐげあつ!!?」

『そうだ! 畏れよ! 崇めよ! この私こそが、全ての生命の支配者だ!!? ははははははは…!!?』

情けなく、恐怖に顔を引きつらせて遠ざかっていく人々を眺め、ヘヴンズロードは嘲りの声を上げる。もはや建前としていた平和を口にする気もなくなり、生み出した力の全てを見せつける事だけを望むようになっていた。

ひとたび腕を振るえば建物は粉々に砕け、それに巻き込まれた人々が骸となり果てる。軽く力を振るうだけで生み出される破壊の光景が心地よく、ヘヴンズロードはただただその状況に溺れつつあった。

その進撃が、ふいに止まる。

異形の背後からエンジン音が聞こえてきたかと思うと、その横を四台のバイクがあったという間に抜き去っていったからだ。

『……来たか。だが今更何の用だ? まさか…わざわざライダーシステムを返却しに来たわけではあるまいな』

四台のバイクはヘヴンズロードの前方数メートルの位置で停止し、旗手たちはヘルメットを被ったまま首だけを振り向かせる。

ドルンドルンとエンジンが響かせる音だけが聞こえる中、旗手たちが備えたイヤホン

から戦慄したような声が聞こえてきた。

「この反応……！ まさか、あのアンデッドはヘヴンズロード氏本人……?!？」

「……とうとう、人の心さえ捨てたか。いや、元からか」

聞こえてくるリンディとケインズの会話から、アインは背後で仁王立ちしている異形の正体を悟り眉間にしわを寄せる。

先ほど聞こえてきた声は聞き間違いではなかった、そしてどこからか遠隔操作しているわけでもなかった。人としての心も体も、この男は自ら手放してしまったのだと。

星の支配者になりたい、そんなくだらない野望のために。

「……ヘヴンズロード、お前にとつて俺達は、何だったんだ」

背を向けたまま、アインの隣でバイクを駆るサクソが問いかける。

この四人の中で最も長く組織に仕え、戦士として戦い続けてきた男は、そうなることを運命づけた男を睨みつける。言い訳も命乞いも聞きたくない、そう言いたげな感情の昂りを声に表し、サクソは続けて問いかけた。

「何故BOARDを作った?!？」 答えろ!!？」

『全ては計画通り……解放されたアンデッドを君達が封印し、実に効率よくデータを収集してくれた。そして……ケルベロスは完成した！ 感謝しているよ、偽善者達よ！』

異形と化した今、ヘヴンズロードがどんな表情を浮かべているかは分からない。

しかし、人間の姿でなくてもわかるような醜悪な声で告げられ、四人全員がその顔を容易に想像できていた。見るに堪えない、欲望と狂気に満ちた緑でもない顔なのだ。

サクソが最初に抱いた怒りは、四人全員の胸にも同じだけ激しい炎として燃え上がっていた。

「僕達は……あんたの身勝手な欲望に利用されて、振り回されて……」

「そして世界滅亡の片棒を担がされた……舐められたものだな」

縁もゆかりもない戦いの場へ駆り出されたムーヴも、永い眠りから呼び覚まされたハジメも、その事実には悔しげに歯をくいしばる。

過去の記録からすれば、いずれまた戦いは起こるはずだったかもしれない。しかしそれは決して今ではなく、そしていまのような犠牲が出ることもなかったかもしれない。

そんな、今更考えても仕方がない可能性を考えずには、いられなかった。

「俺達が信じた希望は……正義は……」

『全て幻……最初からなかったのだよ。……はは、はははは、はははははははは……!!?』
騎士達の思いを踏みにじり、ヘヴンズロードは高らかに嗤う。

異形となった狂人の思考にあるのは、己の野望のみ。そのためには自分を含めた全てを犠牲にすることなど、一切の躊躇いを覚えない。

狂人の演説の最中、閉ざされていたアインの目が、やがてゆっくりと開かれた。

「アイン……マンダリン陸尉……」

「——任務を開始する」

アインが告げると同時に、四人の騎士達は一斉にデバイスを取り出し、自身の腰に巻きつけていく。

そしてアクセルを回し、エンジンを蒸してその場から疾走を開始し、ヘヴンズロードから離れていく。そして十分に距離を取ってから反転し、猛スピードで異形に向かって突っ込んでいった。

「「「変身!!?」」」

ター^タン・アッ^アプ

【TURN UP】

チェ^チン^ンジ

【CHANGE】

オー^オブ^ブ・アッ^アプ

【OPEN UP】

横に並んだバイクの上で、騎士達はデバイスを起動させ、同時に鎧を纏っていく。◇・♠・♡と、トランプカードを基にした騎士が勢ぞろいした光景はまさに圧巻で、紛れも無い戦士の姿を見せつける。

ヘヴンズロードは迫り来る騎士達に光弾を放ち、凄まじい爆炎で包み込む。しかし業火は一瞬で切り裂かれ、女騎士と槍使いがまっすぐに飛び出してきた。

「でやあああー！」

「おとおおー！」

へヴンズロードに向けてサクソが発砲し、接近したムーヴが槍を振り下ろす。そしてアインが突きを放ち、ハジメが後方から狙い撃つ。

容易く受け止められ、防がれるが構わずアインとムーヴは突っ込み、サクソとハジメの援護とともに怒涛の勢いで攻め続けた。

「この屈辱は……！ この手で払う!!？」

「覚悟しろ！ へヴンズロード！」

これまでの怒り、憎しみ、悲しみの全てをぶつける覚悟で、アインとムーヴが四つ首の異形に斬撃を浴びせかける。

異形はそれらを受け止め、多少後ずさる程度の反応しか見せず、反対に凶悪に研ぎ澄まされた爪を振るって騎士を迎撃する。激しい火花が飛び散り、騎士達の体が空中に舞い上がった。

【FIRE, DROP. BURNING SMASH】

【BLLIZARD, BITE. BLLIZARD CRUSH】

だがサクソとムーヴは衝撃に耐え、それぞれで二枚ずつラウズカードを抜き出し、デバイスに読み込ませる。

そして空中で豪華と吹雪の力を自身の蹴撃に付与し、左右から異形の体に襲いかかった。

『ぬうああああ!!?』

しかしヘヴンズロードは、並のアンデッドなら吹き飛ぶ威力の必殺の力をそれぞれ片手で受け止め、逆に衝撃波とともに跳ね返す。

予想以上の脅力にサクソとムーヴは目を見開き、痛みを感じる間もなく吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたことでようやく我に返らされた。

「ごはっー」

「ぐああっ!!?」

『はははははは!!? この程度で、ケルベロスに傷一つつけられるはずが……!!?』

二人の騎士を自身の手で圧倒したことで、ヘヴンズロードはさらなる高揚を覚えて歓喜する。

最大の障害であった騎士が、管理局の戦士がなすすべなく塵芥のように吹き飛ばされる。その光景はまさに爽快で、笑いが溢れて仕方がなかった。

だが、それ故にヘヴンズロードは油断する。戦士ではないヘヴンズロードは、戦いの場で気を抜くという最大の間を晒してしまっていた。

「THUNDER, FIRE, BULLIZARD, TORNADE. EXTRE

「お前のような神がいてたまるか!!」

口汚く悪態を吐く異形に、アインは大剣を横薙ぎに振るって吹き飛ばす。一振り爆風が起きるほどの衝撃が襲いかかり、異形は鮮血を撒き散らしながら地面を転がっていった。

起き上がろうともがく異形を見下ろし、アインは大剣を地面に突き立てる。そして天に手を伸ばし、集った黄金のカードを異形に見せつけた。

「決める！ アイン！」

【SPADE 10, SPADE JACK, SPADE QUEEN, SPADE KING, SPADE ACE】

黄金の大剣が五枚のラウズカードを飲み込み、空中にその絵柄を映し出す。ポーカーにおける最強の手札と同じ並びが、アインの剣に強大な力を纏わせる。

それに加えて、アインが持つ膨大な魔力が足され、黄金の大剣はさらに眩く巨大な光を迸らせる。まるで黒雲から降り注ぐ雷光を全てまとめて収束させたかのような輝きに照らされ、異形だけではなくハジメ達までもが絶句していた。

「これで……終わりだアアアアアアアア!!？」

【ROYAL STRAIGHT FLASH】

怒号のような雄叫びとともに、アインが大剣とともに異形に突進し、刃を頭上から振

『忘れたのか……!?』　そこにいる男はジョーカーアンデッド……全てを滅ぼす最悪の存在!!?　私が、ケルベロスが消えたとき……残ったアンデッドはその男とハートのキングだけになるのだぞ!!?』

無言のまま顔を伏せるアインに構わず、生き汚く醜態を晒し続けるヘヴンズロードは氣付かない。

大剣のつかを握りしめるアインの手に血管が浮かび、顔の影に入った両の目が怪しく光を放っていることに。そしてその目が、異様なほどの覚悟を秘めていることに。

『人類の絶滅は免れない……!　お前達はその独りよがりな正義で、世界を滅ぼすことになるのだぞ!!?』

「……………だからなんだというのだ」

良心に問いかけるようにすがりつくヘヴンズロードに返ってきたのは、汚物を見るような目と、氷のように冷え切った眼差しだった。

途端に言葉を失うヘヴンズロードに向けて、アインはニヤリと笑みを浮かべる。高潔な騎士とはとても思えない、己が願望に満ちた危険な表情で、彼女は口を開いた。

「ミッドチルダに住まう全ての人間の命とハジメ……端から天秤にかけられるわけがないだろうが」

『……………!?　お前、何を……!?』

られていた。

「アルデブラント……」

「アイン……？」

何も言わず、黒く染まった地面を見下ろしているアインに、サクソやハジメ、通信の向こう側にいるリンディやケインズはかける言葉を見失う。

彼女が最後に残したつぶやきが、耳から離れなかったからだ。

「アイン……お前、何を考えているんだ……う？」

呆然とその場に立ち尽くしたまま、アインを凝視するハジメが思わずこぼす。

問われたアインは何も答えることなく、重厚な鎧に包まれた己が手を見下ろし続けた。

12、滅びの序章と終章

切り立った崖の上、激しく波が打ち付けてくるその上で、巨大な二本の角、正しくは牙を生やした金色の異形が佇む。

武器を持つその手は真っ赤に濡れ、先ほどまで生きた誰かが流していた温もりを保っている。醜悪に歪んだ異形の顔は、どこことなく愉悅に満ちていた。

「……追い詰めたぞ、ハートのキング」

そこへ、銃を構えたダイヤの騎士、サクソが颯爽と現れ、銃口を突きつけたまま異形に向けて告げる。

ゆつくりと振り向き、殺気を迸らせる異形と相對するが、仮面に隠された表情はためらいが生まれていった。

このまま戦い、封印してもいいのかという、そんな迷いだった。

(アルデブラントが一体、何を考えているのかは俺にはわからない……あの男の言った通り、ジョーカーを封印してもこいつを封印しても、どのみち世界は終わる)

ヘヴンズロードを、新たに現れたアンデッドを討った時にこぼしていた、部下である女騎士の言葉。

共に戦い、道の半ばで深い傷を負わせてしまった彼女を疑うわけではない。だが、それでも無視できないほど不穏な影を、アインは残していた。

(アイゴ・ハジメの出した案も使わず、どうやって人類の滅亡を防ぐつもりだ、アルデブラント……！)

ジョーカーアングッドを封印する、つまりハジメを犠牲にすればミッドチルダの人類を救うことができる。現状それ以外に、この事態を収束させる手段など見つからない。

それを拒絶したアインの考えを悟れず、サクソは目の前の異形、ジョーカーを除いた最後のアングッドを見つめ、拳を震わせた。

(……どのみち俺は、弱き人々に害をなす化け物を封印しなければならない)

「これが俺の使命……そうだな、サテラ……」

異形の手についた赤い雫を見やり、サクソは揺れていた己の意思を定めていく。己の意思に迷いを抱き、失ってしまった最愛の女性を思い浮かべ、サクソはキツと表情を改める。

組織の人間としてではなく、騎士として戦うために。

「うおおおおおおお!!?」

雄叫びをあげ、サクソは異形に向かって突進する。その手に自身が持つ最後のラウズ

でも恐怖をもたらすのに、それが一つの巨大な塊に見えるほど大量に押し寄せてくる光景は、絶望をもたらさずにはいられなかった。

ギチギチと耳障りな音を響かせて這い出た異形たちは、真つ黒な波となつて生まれ出でた世界へ侵攻を開始する。

その世界の全ての命を、無に還すために。

「ぎゃあああ!!?」

「いやっ…助けて…:…きゃああああ!」

つい数秒前までは平穏だった人の街は、一瞬にして悲鳴がこだまする地獄へと化す。それまで暴れまわっていた異形による被害とは比べ物にならない、天災格の脅威が人々に襲いかかった。

「撃て! 撃ちまくれ!」

「こいつらをこれ以上進ませるなああ!!?」

事態の深刻さに、やや遅い段階で管理局の武装局員たちが動き出し、正体不明の異形たちに向けて攻撃を開始する。非殺傷設定を解除した情け無用の全力砲撃が、至る所で異形たちを飲み込み爆発を生む。

だが、それらは全てが無意味だった。尋常ではない不死性を持つ異形たちにはいかに強力な魔法も通らず、加えて数え切れない数の暴力にあつという間に追い詰められてい

考えることも馬鹿らしくなるほど強力な力で、その場からは消しゴムで消したようにごっそりと異形たちの姿が消えていく。

しかしすぐに、建物の影や下水管から新たな異形たちが現れ、群れとなつて騎士の前へと進み出てきた。

「これが……世界の終わり……?」

その光景を、鎧を纏つたムーヴが啞然とした様子で凝視し絶句する。

無数の屍が転がり、街は見る影もないほどに破壊され、あちこちで火の手が上がる。かろうじて逃げ延びた人々も、刻一刻と迫る死に冷静さを保つ暇をなくしていた。

「お父さん……… お母さん………」

再び派手な雷の嵐を吹かせていたアインは、大剣を下げ聞こえてくる声に足を止める。

血だまりに沈む一組の男女と小さな影。おそらくは両親と弟妹であろう骸を前に、幼い男児が意味のない呼びかけを続けている。泣きじやくるその姿に、同じ場にいたムーヴはきつく歯を食いしばった。

「何やってるんですか、アインさん……! こんなのを……どうやって抑え込むっていうんですか……?」

共に戦い、窮地を救ってくれた恩人であるアインが思うことなら、きつと何か策があ

るのだろう。そんな信頼を抱いていたムーヴは、徐々にそれが揺らぐのを感じる。

こんな惨劇をどうやって解決するのか、ムーヴには微塵も想像できなかった。アインの友人、リンデイにも。

「アイン！ アインってば！ あなた一体何を考えているの？？」

「おおああああ！！？」

「こうしている間にも、ミッド中にこいつらが溢れているのよ！！？ 一体一体相手をしたところでなんの意味もないわよ！！？」

開きっぱなしになっている通信から、リンデイの泣き叫ぶような声が届く。だがアインはそれに一切の返答をすることなく、まっすぐに異形たちに挑み粉碎することをやめない。

川の水を人の手のみで汲み、流れを止めようとするような無謀な戦いに、リンデイは親友の正気を疑う他になかった。

そんな中、アインは通信に気を向けることなく、異形の一体を叩き潰してから小さく呟いた。

「……足りない」

「え？」

「まだ……足りないんだよ」

戸惑いの声をこぼすリンディに応えることなく、アインは次なる獲物を探して剣を振り上げ、駆け出していく。

その目がリンディを見ることは、なかった。

「アイン！」

◆? ◆? ?? ♣?

海がひっくり返ったのかと勘違いするほどに、激しく大量の雨が降り注ぐ。

異形の軍勢の断末魔の声が、いまもなお耳に余胤として残っているような気分に陥りながら、女騎士は彼の男と相對していた。

「……………やはり、お前が来たか。ケンザキ」

豪雨の中から、ジョーカーア宁德ッドは黒い目でアインを見つめ、口を開く。

人間の喉からは出せるはずのない、無数の声が混じったような不気味な声でアインに語りかける。見るのもおぞましい凶悪な外見であるはずなのに、アインの中に異形に對する恐怖心は微塵もなかった。

「……………ハジメ」

長い間戦い続けてきた女騎士はここで、初めて表情を歪ませる。悲しげに、苦しげに眉を寄せ、異形を凝視する。

ギシッと歯を食いしばり、必死の表情を浮かべて愛した男を凝視する。

「こんな未来に繋がる前に……、こんな結末を迎える前に……他になかったのか？ 私たちにはつ……もつと、選べる未来があったはずじゃないのか……？？」

「……それは、あまりに傲慢な問いだぞ。ケンザキ」

ジョーカーアンデッドは厳しい口調で、しかしどこか哀れむような声でアインに語る。

口ではどんな言葉を吐こうとも、胸の内の真意は女騎士と同じだった。心を持ってしまったがために、こんなにも愛しい人間のために苦しむことになろうとは、彼自身も思わなかっただろう。

「俺たちは所詮、ゲームの駒だ。俺という存在がここにいるだけで、人類の敗北は決定してしまっている。……それを防ぐためには、俺を封印する他にない」

「ッ……」

アインは唇を噛み締め、俯く。わかっていた。そんなことは。

わかっていて、これまでずっと見ないふりをしてきた。この優しい異形を失いたくなくて、奪わせたくなって、ずっと戦うことをためらってきた。

そうだ。こんな状況になったのは、全部自分の弱さが原因だ。

「ケンザキ、これは運命だ。……俺たちは、出会った時から戦うことが決まっていたんだ」

「……………嫌だ嫌だと駄々をこね、問題を先送りにしていた罰か、今のこのザマは」

雨雲を仰ぎ、アインは両目を手のひらで覆ってため息をつく。この惨状は他の誰でもない、自分自身が引き起こしたものだということだ。情けなくて涙が出る。

「……………うまくいかないな、何事も」

「……………そうだな」

力なく笑うと、頬を何か熱いものが伝っていく。何日目だろうか、この豪雨に感謝しそうなものは。

今ならきつと、どんなに涙を流したって誰も気付きはしないだろう。たとえそれが、目の前にいるかの男であつても。

「——決着をつけよう、ハジメ…………いや、ジョーカーアンデッド」

「始まった……」

リンディの部屋に集まった、一連の事件に携わってきた者達が、リンディから繋がれた通信に耳を傾ける。

音声だけが伝えてくる破碎音と金属音の大きさは、アインとハジメの戦いがどれほど凄まじいものかを物語っていて、誰もが息を呑んで立ち尽くす。何もできない己自身に、歯噛みしながら。

「一体どうするつもりなんですか、あの人は……！」

「わからないわ……私にはもう、あの子が何を考えているのかわからない……！」

ムーヴに問われても、リンディに応えることはできない。

長年苦楽を共にしてきた、親友と思っている女騎士が何を想い、救いも終わりもない戦いに赴いているのか、想像することさえできない。

ただ一つ、確信していることがあるのならば。

最後に残っているのは、誰もが悲しみに沈む残酷な結末だという事だけだった。

「……」つだけ聞かせろ、クロスボード」

しんと静まり返った部屋で、サクソが同じ空間にいるケインズに向けて口を開く。その声は厳しく、一切のウソ偽りを許さないといい強い意志が伺えるもので、直接それに向けられているわけではないムーヴも背筋を震わせた。

「なぜアルデブラントを適合者として見出した。たしかに実力も胆力も申し分はないだろう……だが、それだけではないはずだ」

問いかけられたケインズに、全員の視線が集まる。

リンディは親友を危険な事態に巻き込まれたことへの怒りを、ムーヴやサクソは現在の惨状に至る一因となった行為への糾弾の意を、その目に宿してケインズを睨みつけた。

ケインズは黙り込み、険しい表情で俯く。サクソが焦れたように立ち上がったところで、ようやく観念したように息を吐いた。

「アルデブランドでなければならぬ何らかの理由……それは一体、何だ」

「……始まりは、ある騎士の『預言』だった」

ケインズは、自身がBOARDの所長となる前、単なる一局員であった時、懇意にしている聖王教会のシスターに重要な予言をもたらされたことを思い出していた。

プロフェーティン・シヨリフテン
預言者の著書と言うレアスキルを持つ聖王教会の騎士が放ったそれには、こう刻まれているという。

——黒き石板のもと、古の祖たる徒が甦る

四人の騎士と不死者は争い、聖戦は悪意に穢される

闇より生まれし黒き蟲兵が世界を喰らい、世界は零へと還る

最期の選択は、蒼き騎士に託される

年に一度しか使えない上に解説が難解な古代ベルカ語で書かれているため、的中率こそよく当たる占い程度でしかない代物だった。

だが、ケインズはそれを戯言とは受け取らず、懸念すべき重要事項として取り扱い、精力的に動き始めた。全ての黒幕であったヘヴンズロードの協力要請を受け入れ、あらゆる伝手を使って事態を解決すべく一組織を作り上げた。

そして、奇しくもその「占い」は命中した。

「蒼き騎士……まさか」

「そうだ」

ケインズの告白に、リンディは思わず瞠目し通信画面を凝視する。

ケインズは小さく頷き、通信の向こう側で大剣を振りかざしているであろう女騎士の姿を思い浮かべる。

彼にとって、最初から重要だったのは適合者ではなかった。

アイン・K・アルデブラントこそ、彼が最も確保しておきたい最重要人物だったのだ。

「アイン・K・アルデブラントこそ、この戦いに終止符を打つ存在であると、私は睨んでいる」

「バカな!!?」

険しい表情で語ったケインズの襟首に、サクソが思わず掴みかかる。

ガン、と壁に叩きつけ、怒りに満ちた目でかつての上司を睨みつけるサクソは、今にも拳を出しそうになるのを必死に堪える。リンディやムーヴも、非常な決定を下したケインズを睨みつけ、罵倒しそうになる口を必死に抑えていた。

幾度も窮地を救ってくれた部下に課された責務のあまりの重さに、サクソはケインズに対して激しい殺意まで抱いていた。

「そんな大役をアルデブラントに……あいつの背負わせようと言うのか!!?」 恥を知れ
クロスボード!!?」

「罵倒も批判も覚悟の上だ。だが、私は謝らない……もうすでに賽は振られた」

襟首を掴む腕を無理矢理外し、ケインズは覚悟を決めた様子で言い放つ。

その気迫に、サクソたちは思わず押され、返す言葉を失わされた。

「世界がどのような結末を辿ろうと、我々にはただ見ていることしか許されてはいないのだ」

「ぐはっ!!?」

「ぐおっ!!?」

激しい衝突により、女騎士と異形は互いに逆の方向へ吹き飛ばされる。両者の間で大きな火花が散り、真昼のように明るく照らされる。

降り続く雨の中、両者ともずぶ濡れになりながらも鬨気を衰えさせず、各々の武器を掲げて睨み合う。こんな状態がすでに数時間続いており、しかし両方とも互角の状態を維持していた。

「…っ、もはや何の意味もないと言ったはずだ! バトルファイトは終わった…!」
「ただ戦い続けたとしても、世界の崩壊は止まらない! 俺達が……人類を滅ぼすんだ」

振りかぶる。黄金と翠、二つの輝きが雷のように迸り、目の前の相手に向かって研ぎ澄まされていく。

次の瞬間、両者は方向とともに力の全てを解放し、激突した。

地面に溜まった濁った水の中に、二つの人影が沈んでいる。

片方は背の高い男性、もう片方は制服を纏った女性。全身を雨水で汚しながら、うつ伏せに倒れた二人は身じろぎひとつせず沈黙を続けていた。

両者ともに、全身におびただしい量の傷が刻まれ、同じ色の血潮が流れ出していた。

「…………ぐ、お」

不意に、男の方がうめき声とともに体を起こし、前方で倒れ伏している女に視線を向ける。

視線を感じたのか、女の方もゆっくりと顔をあげ、直前まで刃をぶつけていた男に顔を見せる。美しい顔には痛々しい傷が刻まれ、男の胸にこれ以上ないほどの苦しみをもたらした。

だが、男の表情は次の瞬間、驚愕の形で凍りつく。女の頬の傷から流れる“色”に、思わず絶句していた。

「……………お前、それは」

「…大して違和感はないな。全能感もないし、苦痛もない。これが不死の怪物の身体か……」

ハジメの愕然とした声に、アインは苦笑を浮かべて体を起こす。

纏っていた制服はもう原型を止めないほどにボロボロになり、自身の肌の大部分が露出してしまっている。

しかし、目を奪われるのはそんなところではない。露わになった肌のあちこちに刻まれた深い裂傷、その全てから、人間どころか生物としてありえない緑色の血液が流れ出していた。

「お前一人が、あるいはただ一体だけのアンデッドが残ることで滅びが始まるなら、その前提を変えればいい。……つまり、新たなアンデッドが現れればいい」

「…そのための手段が、アンデッドとの融合……自身をアンデッドに変えるということか……!?」

異形に変わり果てた自身の体を、アインはむしろ満足げに見下ろし微笑む。狙い通りだ、と自身の結末を喜んでいるようだ。

呆然とその姿を凝視していたハジメは、すぐにその表情を悲痛に歪めていく。自分のために、世界の全てを犠牲にしようとした彼女を止めるため、自身は刃を振るっていたはずだった。

だが、違った。

アインは最初から、自分を犠牲にして全てを守ることを考えていたのだ。

「……………自分を大事にできていないのは、お前の方じゃないか……！」

ハジメはその場で膝をつき、女騎士の迎えた結末を嘆く。

かつて自分を封印し、愛してしまった女を守ろうとした時に、当の本人に言われた言葉。それを自ら破つてまで、自らの願いを貫いて見せた女騎士の意志の強さを、ハジメはただ悔やむ他になかった。

だが時は、彼に顔を伏せさせ続けようとはしなかった。

彼らの間のちようど真ん中に、見覚えのある金属の物体がゆっくりと降り立ってきたからだ。

「モノリス……」

「無粋な奴だ。急かしにでも来たか」

アンデッドを管理し、バトルファイトを執り行う謎多き石版。

得体の知れない存在の意思を伝えるそれは、雨に濡れた不気味な光沢を放つてアインとハジメを前に鎮座する。

無言で睨む二人は、脳内に直接響く聞き覚えのない「声」顔をしかめた。

——遊戯はまだ終了していない。

新たなプレイヤーとして、イレギュラーを認める。

一方的に告げ、モノリスは表面に波紋を生じさせる。

その奥で蠢いている、無数の黒い異形。世界の全てをリセットするために生み出される異形の軍勢が、今一度外に飛び出そうとその時を待っていた。

アインはそれを、冷たい目で見下ろす。愛しい男との最期の会話を邪魔されることに、苛立ちを抱く。

「……是が非でもリセットさせたいのだな。そうまでして世界を引つ掻き回したいのか、お前は」

——戦え……。

戦え……！

戦え………！！

その意思が何者なのか、何を理由にこの最悪の遊戯を執り行おうと考えたのかは、アインにもどんな人間にもわかりはしない。

執拗に決着を促すモノリスに向かい、アインは冷めた表情のまま歩み寄り、大きく拳を振りかぶった。

「黙れ、石ころが」

次の瞬間、アインの拳がモノリスに突き立てられ、凄まじい衝撃が周囲の雨粒を吹き

飛ばす。

雷を纏った拳は、謎大きい金属の板に深々と突き刺さり、その表面に罅を入れる。細かい亀裂は徐々に大きく広がり、石版の全体にまで広がると、一瞬で粉々に砕け散った。「お前の命令そのものが運命だというのなら、私は運命と戦う。そして勝ってみせる…。それだけの力が、今の私にあるのなら……」

バラバラと地面に落ちた石版の破片はさらに崩れ、粒子状になって雨に溶けて流されていく。

跡形もなく消滅し、声も聞こえなくなったモノリスに向けて、アインは吐き捨てるように告げる。姿なき何者かに向けて、挑発するかのよう。

ハジメはそんなアインを凝視し、言葉もなく立ち尽くす。すると不意に、アインが振り向き儂げな微笑みを見せた。

「……逃げろ、ハジメ」

優しい声で告げられ、ハジメは目を見開く。

アインは声すら出せずにいるハジメを見つめたまま、一歩ずつ後ずさり距離を取っていく。ハジメの姿の全てをまぶたに焼き付けようとするように、笑顔のまま下がり続ける。

徐々に広がっていく二人の間隔は、二人に課せられた運命の重さを表しているよう

だった。

「私たちはもう……出逢う事はない。触れ合う事はない……それでいいんだ。それが……私の答えだ」

それだけ言い切ると、アインはハジメに背を向け、どこかへと歩き出していく。一度も振り返ることなく、言葉もなしに永遠の別れを告げる。

自身の心がどれだけ苦痛の軋みをあげていようと、胸に引き裂かれるような痛みを覚えようと、決して彼女は振り返ろうとはしなかった。

「アイン……」

ハジメはそれを追おうとして、しかし動くことができずに立ち止まる。

アインが己の全てを代価に手に入れた、全てを救う未来を壊す勇気が出せず、伸ばした手を虚しく下ろすだけとなる。

アインはただ、微笑みを浮かべて歩き続けた。目尻から溢れる雫を雨で誤魔化しながら、愛しい男の姿が見えない場所まで歩き続けた。

これが最善なのだ、自分の心を偽りながら。

——さよなら……ハジメ。

私の……最愛の人。

こうして、世界は救われた。

全てを滅ぼす破壊者を守るために、同じ破壊者となることで、女騎士は愛しい彼と世界を守る道を選択した。

予言は、当たってしまったのだ。

13. 騎士の結末

豪雨の中、急遽設立された避難所の入り口を、完全武装した魔導師たちが守護する。それぞれの表情は皆一様に固く、白昼訪れた脅威がどれだけ恐怖をもたらしたのかを物語っている。

リンディは彼らに守られるように立ち尽くし、いまだに姿を見せない親友を待ち続ていた。

その目が、不意に見開かれる。豪雨の中に浮かぶ蜂蜜色の髪に、目を奪われたからだ。「！、アイン！」

濡れるのにも構うことなくリンディは、フラフラと覚束ない足取りで近づいてくるアインの元へ駆け寄っていく。

疲れ果てた、どこか虚ろに感じるアインの顔を挟み、リンディは彼女の体に負傷などないかと確かめる。その間、アインは人形のように身じろぎひとつしなかった。

「アイン……無事なのね？　生きてるのよね……？　ああ、よかった……あいつらが急に消えたから、あなたが何やったんだろうと思ってたけど、そのあと全然通信に出てくれないから何かあったんじゃないかと思ってたのよ！　無事でよかつ……」

涙か雨かわからなくなるほど顔を濡らしながら、リンディはホッと安堵の息をつく。が、その声はあるものを見た途端途切れた。

アインの右手から滴っている、どう見ても絵の具には見えない緑の液体を。

「……アイン……？ それ……どうしたの……？」

戸惑い、不安げな表情で見上げてくるリンディに、アインは一言も発さずにただうつむくばかり。親友に起きている異常に、リンディはまずは休ませなければとアインの手を握ろうとする。

しかしその手は、横から伸びてきた男の手によって妨げられ、体ごとアインから引き剥がされ、叶わなかった。

「何を……!?？」

リンディは思わず、険しい表情でアインを見据えるサクソを睨み、彼の目に浮かぶ複雑な色にグツと息を飲んだ。

「……アイン・K・アルデブランド、いや……新たなアンデッドよ。抵抗の意思を見せないということは、貴様が犯した罪がどれだけ重いものか自覚していると受け取っていいのだな」

「……………」

サクソの問いにも、アインは何も答えない。

ただ何も反応を返さず、全てを受け入れ諦めようとしているような、そんな虚ろな表情のまま、アインは騎士と向かい合っていた。

グツと唇を引き結んだサクソは、後ろ手から手錠を取り出し、アインの両手首に取り付けた。

「お前を拘束する……連れて行け」

「……！ 待つて……お願い！ 話をさせて!!？」

突然のことに動揺するリンデイを放置し、サクソは他の武装局員たちとともにアインを取り囲み、豪雨の中を進んでいく。

拘束されたアインは一切の抵抗を見せず、促されるまま無言でそれに付き従った。

「アイン!!？」

リンデイの悲鳴も、雨音にかき消されて聞こえなくなってしまう。

彼女が知るアインとまともに顔を合わせられたのは、これが最後だった。

◆? ◆? ◆? ◆?

『とんでもないことをしでかしてくれたな』

暗く広い、ある特定の間しか足を踏み入れることを許されない一室。

その中心で佇む女騎士に向けて、青い三つのホログラムが腹立たしげな言葉を吐き捨てる。時空管理局において最高位の地位に立っている彼ら——最高評議会の面々は、

異形に堕ちた女騎士に画面越しに憎悪の視線をぶつけていた。

『バトルファイトの復活…手に負えぬ化け物どもの騒乱がようやく収束したかと思えば、件のイレギュラーを野放しにするだけでなくもう一体増やすとは……!』

『いかに凄まじき偉大な力といえど、制御できぬ不安定な存在は次元世界の秩序を崩壊させかねん』

『あまりに前例のないこと……世界を破壊しかねぬX級ロストログアが、一個人と融合するなど。しかも……』

最高評議会は、姿なき顔をさらに歪めてアインをなじる。

拘束されている女騎士の見た目に変化はない。しかしその身に宿る異形の力は、いつでもどんなきつかけで破滅を再来させるかもわからない。

『新たな混乱の火種を生み出したのが、よもや長きに渡り管理局に首を垂れてきた貴様とはな……飼いだに手を噛まれるとはこのことだ』

それよりも問題なのは、この女騎士がいい意味でも悪い意味でも有名になりすぎたことだった。

女騎士の存在がミッドチルダの平和の維持にどれだけ貢献してきたのかは、彼らが最も把握している。そしてそんな忠実な犬がこれほどまでの大罪を犯したという事実が、どれだけの影響を次元世界にもたらすか。

恐ろしいほど長きに渡って次元世界の秩序を保ってきたと自負する彼らにしても、考えるだけでも億劫だった。

『アイン・K・アルデブラント。貴様はこの大罪をどのように償うつもりか』

『仮にも貴様は管理局の狗、これまでの功績を省みるに叛意を抱くような愚行には及ばないと推測する』

『貴様自身に意見があるならば考慮する猶予はある』

最高評議会の面々は、この狂犬をいかに制御するかを考え、ひとまずの案を狂犬本人に尋ねてみた。

これだけの罪を犯したとはいえ、その根本にはミッドチルダから厄災を取り除こうと願った正義があると仮定し、本人の考える贖罪の方法を知ろうとしたのだ。

だが、返ってきたのは抑揚のない、感情の欠落した声だった。

「……何も」

『何?』

アインは自分を見下ろしてくる三つのホログラムを、心底面倒臭そうに睨みため息をつく。

弁明も謝罪もする気にならない、咎める視線の全てが鬱陶しいという不遜な態度で、アインはその場に立っていた。

「大罪……そうだな、私は我欲によって多くの人々を危険にさらした罪深い人間……いや、存在。責められても文句は言えない。……だが」

ふっ、とそこで初めて、アインの表情に感情が戻る。

それは自分が行った策が予想以上の成果を残したことに対する誇らしさと、上から命令してくるだけの無能な連中を出し抜いてやったという自慢が表れていた。

「私は、自分のやったことが間違いだっとは思っていない」

そう言い切った途端、爆音とともにアインの体が真横に吹っ飛び、床に激しく叩きつけられる。

日殺傷に設定されていないその一撃は凄まじく、無防備な体勢のままだったアインの片腕を吹き飛ばし、緑の鮮血をあたりに撒き散らさせていた。

「…………… ぐう……」

『口を慎め、化け物。今の貴様の発言も存在も、世界に混沌をもたらす邪悪なものでしかないとまだ理解できぬのか』

『もはや矯正することも叶わぬ。手駒とするにはあまりに不安定』

『そうなった理由がジョーカーへの一方的な感情だというのも理解できん』

『危険である』

『異常である』

メキメキと再生していく腕の痛みに苦しむアインに、最高評議会の面々は気味の悪いものでも見るように罵倒し見下す。

彼らにとって重要なのは、次元世界の秩序を維持することのみ。それを個人的な理由で侵されかけた事実には、受け入れがたく理解の追いつかない事柄だった。

地面に倒れたアインは、やがて彼らの前でくつくつと不気味に含み笑いを聞かせた。

「……わかるものか、私だけのこの想いを……」

嘲笑うように吐き捨てると、またしても爆音と衝撃がアインに襲いかかり、彼女の体を宙に弾き飛ばす。

今度は脇腹を挟られ、アインは再生したばかりの腕で傷口を抑えて身悶える。痛覚までもが不死のため、いつまでも痛むが日数アインは長時間苦しみ続けた。

「がはっ……！　ハア………ハア………！」

『放置するにはあまりに不穏……よって別の利用方法を提唱する』

ややあつてから、最高評議会の面々はアインを放置して各々で会議を始める。

電子音声で作られた無機質な声が、その時だけはかすかに気色を孕んで聞こえる、と、激痛で朦朧とした意識の中、アインは感じていた。

『未だ到達しえぬ不老不死の力』

『夢物語に等しきその現物が今この場にある』

『飼い主に噛み付く狂犬ならば……せめてその肉体を我らのために役立てよう』

それを最後に、空中に映し出されたホログラムは消滅し、アインだけがその空間に残される。

そしてそこへ、複数の黒ずくめの格好の人影が集まり、アインを覆い隠していった。

◆? ◆? ?? ♣?

全てが終わってから数日経った時、リンデイは休憩室の一角で腰掛けながら、冷めきったコーヒートの表面を見下ろし黙り込んでいた。

かつては自分の目の前には、同じく休憩時間に入ったアインが座り、二人して愚痴や世間話をしていたものだが、いまは誰も言葉を交わす者はいない。

静か過ぎる時間を一人過ごしていた時、彼女のすぐ横に一人の男性局員が歩み寄った。

「……マンダリン陸尉」

「ハラオウン……その顔はアルデブラントの処分について聞いたようだな」

「あの人は……どうなりましたか」

必死に呼び止める自分を無視し、世界を救ってみせた親友を連行していった彼女の元上司に、リンデイは一瞬怒りを覚えるがすぐに抑え込む。

自分を見下ろすサクソの目も、悲痛さに満ちていてとても合わせられない。彼にもど

うすることができなかつたのだと察してしまい、リンデイは遣る瀬無い気持ちを持って余すこととなった。

「…事態の解決の功績を省みて欲しいと、俺も処分の軽減を願い出たのだが……なしのつぶてだった。決定は覆らないとの、最高評議会からのお達しだ」

「アインは……アインは今どこに……？」

「……アンドットと化した肉体を調べるために、研究機関へ送られた」

サクソが告げた現実には、リンデイは目の前が真っ暗になったような錯覚を覚えて顔を手で覆う。

彼の言う研究機関がまともな場所であれば、リンデイがこれほどシヨックを受けることはなかつただろう。しかし今の親友が、そんなぬるい処分を受けるはずがないと直感し、リンデイは肩を震わせて俯いていた。

「そこは研究施設……とは名ばかりの、倫理の吹っ飛んだ狂人たちの巢窟だ」

親友を襲う苦しみを想像してしまったのか、とてつもない恐怖で身を縮こまらせるリンデイを見ていられず、サクソは険しい顔で拳をきつく握りしめる。

自身の手から赤い血が流れることも構わず、元上司は自分の不甲斐なさに怒り続けるばかりであった。

「あいつはもう……二度と日の目を見ることはできないかもしれん」

「ありえない……ありえないぞそんなこと……!」 どんなに生命力の強い生物であろうと、これだけ切り刻まれてまだ生命活動を維持できる存在などあるはずがない……!」

「魔法生物だつてここまでの不死性を持つものはいない……一体なんなんだコレは……?」

同じようにメスを握る同僚も、施術の一切を記録する者も、皆一様にマスクの下の顔色を真っ青にしてサンプルの女を凝視する。

多くの生物を調査し、倫理など意に介さずあらゆることを解明してきた、世間一般的には狂人と言われる彼らでさえ、ここまでの異常性を見せる存在には戦慄を禁じ得なかった。

「……………!!?」

「上からはこいつの生態を余すことなく調べ尽くせと言われているが……正直手に負えない」

「何、そう気を重くする必要もあるまい」

冷や汗を流す一人の方を、別の白衣の男が叩いて宥める。眼鏡で隠された彼の目は、今もなお肉が蠢き再生していくサンプルを見下ろして興奮にギラついている。

その手が新たなメスを握り、ぞぶりと臓器に突き立てられる。その瞬間、サンプルのあげる悲鳴と反応がさらに激しくなった。

「どれだけやつても死なないのなら、どれだけ無茶をしても構わないだろう」

悪魔のような顔をした人間たちが、異形とかした女の体を切り刻み、ありとあらゆる実験に利用する。

痛々しい悲鳴をBGMのように流しながら、狂気に取り憑かれた人間達はその手を止めることなく、上から止められるその日が来るまでサンプルを刻み続けた。

『全く持つて期待外れだ』

以前と同じ、誰もいないホログラムだけが浮かぶ空間で老人の声が響く。

落胆をこれでもかとおらわにした声で吐き捨てる、自分たちのもとに挙げられた報告に存在しない顔をしかめさせる。

『あの犬の不死の力………解析できればどれほど役立つかと思えば、よもやここまで手に負えないものであったとはな。わざわざ時間と費用をかけてみれば………とんだ不良品を掴まされたものだ』

反逆の騎士に処分が下されてから数ヶ月、送られた機関から送られた分析結果の数々は、最高評議会の面々を別に意味で唸らせる結果のものだった。

世界を滅ぼしうる最凶の存在の全て余すことなく解析し、次元世界の平和に役立てようと目論んでいたのに、それができないと言う不満が残る結果。ぼやきたくなるのも仕

方がなかった。

『だがその力、このまま捨て置くには実に口惜しい』

ニタリ、と見えない顔が嗤うのがわかる。人の醜悪な部分の全てを混ぜ合わせたような、そんな悍ましい笑顔を浮かべ、老人達は再び呼び出した裏切り者に令を下した。

『貴様にはこれより、特別な任務に就いてもらう。如何に傷つこうとも決して死ぬことのない完全な不死の存在だ……貴様ほど我らの奴隷としてふさわしい存在はあるまい』
『逃げようなどとは思うな？ この宿命を放棄すれば……貴様の想い人の元へと我らの手のものが向かうことになるだろう』

そんな嘲笑の声を、アインはただうつ伏せに倒れこみながら聞き流していた。

応える余裕などあるはずもない。気の遠くなるような時間、そう錯覚するほどに長く苦しい時間を過ごさせられた彼女には、もはや自力で立ち上がる余力さえ残されてはいなかった。

「……だ、じょうぶ……だ、ハジメ……」

虚ろな目が見つめるのも、途切れそうな声が向けられているのも、ここではないどこかに向けて。

愛しい男がいるであろうどこかへ、アインは消え入りそうな意識の中で語りかけていた。

「私、は……平気、だ……から……」

力なく浮かぶ笑顔が、痛みと苦しみに歪む。

涙を流しながら、アインはただうわ言をこぼし続けていた。

「お前は……自由に、生きろ……」

こうして女騎士アインは死に、最悪の裏切り者として世間に知らしめられることとなった。

―― 反逆の理由が、ただ一人の男のためであったと言うことは、ごく一部のものにしか伝わってはいない。

第IX章 此に在るはただ一つの願い

1. 日常へ戻る

「……と……そんな感じの10日ほどだったんですよ」

「あらー……そうなんですかー」

差し出されたコーヒーを口にしながら、桃子と向き合ったリンデイが朗らかな笑顔でそう話すと、桃子もつられて笑顔になる。

一見母親同士の穏やかなコミュニケーションが取られているようにしか見えないが、リンデイの語った内容のほとんどが嘘偽りであることを知っているユーノには、冷や汗が止まらなかった。

「リンデイさん……見事なごまかしというか、真つ赤な嘘というか……」

「本当のことは言えないんですから、ご家族にご心配をおかけしないための気遣いと言ってください」

念話でそう言われても、ユーノはうまく反応を返すことができない。

幸い自分がフェレット形態でカゴに入れられ、会話に混ざらなければならないことが幸いだった。心配することといえば、高町家のほかの面々がいるこの場で妙な反応を見せな

いようにすることか。

「でも、なのはさんは優秀なお子さんですし……うちの子にも見習わせたいくらいで」
「あらあら〜またまたそんな♪」

「うちのクロノはどうも愛想がありませんで……」

聞こえてくる会話はやはり、事件を一切感じさせない世間話でしかない。

しかしその実態は、なのはが関わっている事件の危険性を悟らせず、桃子達に疑念を抱かせないためのフェイク。大人が見せるやや黒いやり方で、ユーノは思わず背筋を震わせる。

ニコニコとした笑顔を浮かべていた桃子だったが、ふと傍に座るなのはが黙り込んでいるのに気づき、眉をひそめた。

「……なのは、大丈夫？」

「え……？」

「さつきからずっと黙り込んで、どうかしたの？」

虚空を見つめ、不安げな表情をしていた娘は、心配そうに見つめてくる母の声で我に返り、慌てて平静を取り繕った。

「な、なんでもないよ！ なんでも……」

「そう？ 悩んでるみたいに見えたけど……もし何かあるなら遠慮なく言ってよね？」

「う、うん」

ややぎこちない返答だったが、何かを察したらしい桃子はそれ以上追求することなくリンディに向き直る。

ホツと安堵の息をついたなのはを見上げていたユーノは、まだ暗い顔をしているのはに念話で語りかけた。

「…なのは、もしかして昨日のリンディさんの話……アインさんのことで……？」

「……うん」

俯いたなのはの脳裏に蘇るのは、傷つき死に体となったアインの姿。そして昨日リンディから聞かされた、女騎士の辿ってきた凄惨な生き様。

一人が背負うにはあまりに重過ぎる宿命を知ってしまったのはが、まるで我が事のように落ち込んでいる姿に、リンディは自身の行為を後悔した。

「ごめんなさい、なのはさん……あなたに聞かせるには辛い話だったかもしれないわ……」

「そんな……私が知りたくて聞いたのに」

「それでも、あなたの心にそこまで傷をつけてしまったなら……話すべきではなかったわ」

桃子に感情の変化を悟らせないように、リンディは必死で表面上の笑顔を取り繕いながら謝罪する。

大人びているとはいえ、なのはやユーノはまだ子供。大人の世界で起こった理不尽さや残酷さは、少女に多大なトラウマを刻んでしまっただろう。保護している立場なのに、あつてはならないことである。

「あの子のことを尊敬してるあなたを、幻滅させてしまったかもしれない。でも、私としても、あの子が誤解されたままなのは避けたかったの……本当にごめんなさい」

「……幻滅なんて、してないです」

リンディの不安げな問いかけに、なのはは微笑を浮かべながら首を横に振る。

数日前、インシグニアに告げられたことでアインに疑惑を抱いてしまったが、今はずう解消されている。リンディの話を聞いたおかげでむしろ、らしい選択だと納得できたくらいだった。

なのはの様子が少ないいつも通りに戻ったことに気づき、それまで聞く側に回っていた美由紀が視線を向けた。

「ねね、なのは」

「っ！ なーに、お姉ちゃん？」

「今日明日くらいはおうちにいられるんでしょう？」

「うん！」

「アリサちゃんもすずかちゃんも心配してたぞ。もう連絡はしたか？」

「うん…さつきメールを出しといた。すぐかちゃんからはお返事も来たよ」
携帯電話を取り出し、メールのフォルダを開くと、結構な量のメールが届いているの
が見える。

その数かなのはを案じる気持ちの強さを示し、同時にどれだけ心配させたかを表して
いるかがわかって、なのはの表情に影が差した。

「みんなに心配かけちゃってるなあ…」

「そうだよー、なのはがいけない間寂しかったんだからっ」

「その分最後まで投げ出さずに頑張るんだぞ。理由は秘密だそうだが…」

「…うん！」

士郎の言葉に、なのはは元気を見せようと力強く頷く。

無理を言って、心配する気持ちを押して送り出してもらった以上、自分がなすべきこ
とをやり遂げなくてはならない。今は動けない彼女の分も、自分がしっかりと頑張らな
ければと、なのはは再び意気込んだ。

しかしふと、その視線が虚空に、どこかに浮いているであろうアースラに向けられた。
(…アインさんは、全部を守りたくて一生懸命だった。誰かに恨まれても、憎まれても、
自分の大切なもののためにどこまでだつてできた)

彼女は最後まで、自分のやりたいことを成し遂げた。

誰かに賞賛されるためでも、誇るためでもない、自分の願いを叶えるために戦い抜いた。それを否定されようと、憎まれようとも戦い続けた。

そんなことが他の誰かにもできるのだろうか、なのはは自分と比べて考えてしま
う。

(……私もいつか人を好きになったら、そこまでできちゃうのかな)

だとしたら、人が人を想う気持ちとはどれほどの力があるのだろうか、なのははぼんやりと考えてしまうのだった。

♠ ◆ ♡ ♠

「うおらあああああ!!?」

赤く目を光らせる、黒い外殻を持つ犬型の異形に向けて、Aを模した槍が振り下ろされ、一太刀で真つ二つに両断する。

息の根を止められた異形は地面に倒れ込み、次の瞬間ノイズと共に消滅する。現実存在する生物ではなく、立体映像として出された訓練用の異形を斬り捨てると、緑のAの騎士は次に現れる標的に狙いを定めた。

「くそっ……かかっつきやがれオラアア!!?」

わらわらと現れてくる標的を片っ端から薙ぎ倒し、ジンガーは荒い息のまま吐き捨てる。

訓練機材が生み出すホログラムは実にリアルで、見た目だけでいえば現場とそう変わらない緊張感を味わわせてくれるが、ジンガーには不満が募るばかりだった。

槍を使った近接戦闘を主とするジンガーには、感触の残らないホログラムなど相手にする甲斐がない。物足りないだけだった。

「チツ…胸糞悪イ」

最初に設定した標的の全てを狩り終えるが、ジンガーの中にくすぶる苛立ちは衰える様子を見せない。標的に手応えがないことではなく、別の対象に向けての苛立ちはむしろ大きくなるばかりだった。

少し離れた場所で、退屈そうにその様子を見ていたナディアは、深いため息をつくとしとりとした目を向けて尋ねた。

「それはどつちに對して？ 裏切り者？ それともあの女？ ……まさか」

「んなわけあるかよ！ あいつら全員に決まってるんだろ！ ムカつく話聞かせやがって…！」

八つ当たりのように怒鳴りつけ、ジンガーは新たな標的を呼び出そうと機材の方に向かっていく。

彼がこうなっているのは、昨日リンデイがアースラ艦内の全局員に向けて語り聞かせた、裏切り者の女騎士の過去を知らされてからだった。

ただ一人だけが語るだけで、真実と証明する術はない。だがそれを疑うことは、なぜか誰にもできずにいた。

「……管理局が、全員ここの奴らみたいに正義大好きのお花畑なわけじゃないのは知ってるでしょ。何を今更イラついてるのよ」

「だから違うつつつてんだろが！ そりゃあ……何も思わねえわけじゃねえけどよ」
「……私だつてそうよ」

居心地悪そうに喚くジンガーから、ナディアは自分でも気づかないうちに目を逸らす。

ジンガーには家族を失った背景にアインが関連していたことから、言い方は悪いが正當に恨む理由があった。しかし彼女の過去と事件の裏側を知ってしまった今、憎しみのぶつけどころをなくしてやるせなくなっているのだろう。

ナディアに関しては事件に直接の関与はしておらず、世間一般的な評価からアインを嫌っていたが、その前提から覆されて戸惑いを覚えている。

ほんの僅かにだが、ジンガーもナディアもアインに対する感情が変化し、距離感を測りかねていた。

「別にさ、あんな話聞かされたところで、あの女がやった罪が軽くなるわけじゃないし、こつちの意識が変わるわけじゃないけど……少なくとも、そういう気にはなれなくなっ

ちやつた」

面倒臭そうに頬杖をつき、ナディアが呟く。知ったところで、一方的に罵倒し嫌悪していたことについて謝意を抱いたわけでもなく、ただ感情を持って余ってしまった。

それまで黙り込んでいたインシグニアも、壁に背を預けたまま遠い目のため息をついた。

「……………僕は、彼女が無能を晒して封印まで時間がかかったって聞かされてきました。ですが、あの話が真実ならば…上の考えが多少わかります」

インシグニアが考えていたのは、アインのことではなく管理局上層部の思惑について。

途中に多くの失態があつたとしても、アインは事態の収束を成し遂げた実績がある。異形に堕ちた身といえど、これまで聞かされていたほどに悪評を押し付けられる必要があつたのか。

その理由について考えていた彼女は、険しい顔で口を開いた。

「世界を滅ぼしかねない二体のアンデッド…その存在の隠蔽、そして、ミッドに生じた被害の責任を全て彼女に押し付けることで、管理局への信頼の失墜を防ごうとした。……大体の思惑はこういうことでしょうか」

インシグニアの考察に違和感はなく、ジンガーもナディアもそれが真相であるかのよ

うに納得する。証拠は何もないただの想像だが、インシグニアに絶大な信頼を置いて二人でなくとも、信憑性の高い考えだった。

「彼女自身にも罪がある。それを利用することで、都合のいいスケープゴートを作り出した……そういうことでしょうかね」

「……所詮私たちは、上の連中の都合のいい道具でしかないのよね」

本気で鬱陶しそうにナディアがぼやき、やれやれと肩をすくめる。ジンガーもいらだたしげに拳を握りしめ、しかしそれを吐き出すことはなく、身を震わせながら立ち尽くす。

最初から知っている、どうしようもないことだとわかっているがゆえに、騎士達はふと胸中に沸き立つどす黒い感情を持って余してしまっていた。

「……提督は知ってるのか。このことを」

「さあ？ 知らないからこうして私達を、すでに首輪がついてるあの女に監視目的で送り込んだのかもしれないわよ」

一度疑い始めると、自分たちの上司である男性の考えまで怪しく思えてきてしまう。そんなことはありえないと思いつつも、もしかしたらと疑念が止まらなくなってしまう。ていた。

インシグニアは険しい顔で黙り込む二人の仲間を見やり、深いため息と共に肩を落と

した。

「……まったく、こうもややこしい心を持つているから、人間とは度し難い」

小隊長の言葉にジンガーとナディアは一斉に振り向き、胡乱げな視線を向ける。先ほどの言葉はどこか他人事のような、全く別の立場からはいた言葉のように思えたからだ。

「何目線だよ、シグニア」

「まるで自分が人間じゃないみたい」

呆れた顔で見つめてくる二人に、インシグニアは苦笑を返す。自分でもおかしなことを口にした自覚があったのだろう、照れたように頭をかきながら、誤魔化すように目をそらしていた。

「さあ、自分でもよくわかっていません」

意味深な言葉を残し、少女は笑みを浮かべたまま、遠い眼差しで佇んでいた。

2. 蛇の誘惑

悲しげな表情で、虚空を見上げながら膝を抱えるフェイト。

彼女がこの体勢になつてからもう何時間も経過し、元から儂げだった横顔はさらにやつれて見える。食事さえまともに取らなくなり、痩せていた体は折れそうなほどに弱々しくなつていく。

「…フェイト」

そんな主人の姿を見ていられず、アルフはどうにかフェイトに気力を持ち直してもらおうと話しかけるが、続く言葉になにを言えばいいのかわからず、まだ黙り込んでしまふ。

地球から引き上げてから、何度も繰り返し返してしまっている一連の習慣にアルフは歯噛みし、やがて意を決して表情を変え、フェイトに向き直つた。

「だ、大丈夫だよ。あの女が何者なのかはよくわかんないけど、あれだけの力があるなら無事だつて。きつとまた……」

フェイトを勇気付けようと、無理やり笑顔を作つて鼓舞するアルフだが、すぐにその脳裏に数日前の記憶が蘇る。

白い少女との共闘、その後に現れた、得体の知れない怪物。圧倒的な力で少女達を追い詰め、命を刈り取りかけた死神。そんな怪物に一人立ち向かい、自らの負傷を代価に退けることに成功した女騎士の最後の姿。

緑の血を流し、異形の本性をあらわにしながら海へと墜ちていった彼女の姿が、頭から離れなかった。

「また……出て、来るんだよね」

それは怪物に対して、また命の危機を迎えることへの恐怖のためか。女騎士に対して、これまでと同じ態度を貫けないことへの申し訳なさか。

あまりに多くの自体の変化を経験してしまったアルフには、それに立ち向かう気力は残されてはいなかった。

「…もう、やめようよ。あんなのもう、あたしたちじゃ手に負えないよ。プレシアだってそう思うさ。ジュエルシードのことは諦めて、もうどこかに逃げちまおうよ」

「…それは」

「勇気と無謀は違うって言うじゃないか！ あんなとんでもない奴相手に命かける意味なんてないだろ！」

フェイトの意思を変えさせようと、必死に叫ぶアルフの目には涙がにじむ。主人を助けてあげることができない不甲斐なさで、アルフの胸が締め付けられるように痛む。

そんな痛々しい姿を見てしまったフェイトはますます顔を歪め、唇を噛み締め、俯いてしまう。気づけばアルフも、黙り込んでしまったフェイトにすがりつき、きつく抱き締めていた。

「……お願いだからフェイト、そんな苦しい顔しないでおくれよ」

(違う……違うんだよ、アルフ……)

暖かいアルフの胸の中に包まれるフェイトは、使い魔の抱く悲しみでより一層の苦痛を抱く。

アルフはフェイトが、あれだけの危機に直面してなお退けずにいることを嘆いていたが、そうではなかった。確かに未だ、母の願いを叶えたいと思っていることは事実だが、フェイトの心を占めているのはまた違うことだった。

(これは恐怖からくる苦しみじゃない……私自身への怒りと、失望のせいだ)

突如現れた異形から、身を呈して守ってくれたアイン。しかしフェイトは、その後の姿を目にした途端、感謝の気持ち忘れて恐怖を抱いてしまっていた。

最初の頃の警戒心が薄れ、好意にも似た感情が芽生え始めた矢先に目撃してしまった、女騎士の本性。人と同じ外見の裏側に隠された異形の片鱗に、フェイトは本能的な嫌悪を抱いてしまっていたのだ。

その事実がたまらなく、フェイト自身の心を締め付けた。

（あの人を怖がってしまった……恩人のあの人を、化け物だと思ってしまった。私……最低だ……）

元はと言えば、彼女があんたの姿を見せたのは自分達を助けようとしたから。あの自体を自力で回避できる実力が自分であれば、それを知らずに済んだのだ。

後悔ばかりが募り、フェイトの表情は際限なく暗くなつていく。

アルフが心配そうに見つめるそばで、やがてフェイトはアルフの手を押し、辛そうにふらつきながら立ち上がる。涙目で見上げてくるアルフに、フェイトは儂げな微笑みを見せた。

「大丈夫……ちょっと、休みたいだけだから。しばらく……そつとしておいて」
「……うん」

フェイトに言われ、アルフは渋々頷き目を伏せる。そのままアルフは背を向け、陰鬱な雰囲気を負ったままフェイトのいる部屋から立ち去っていく。

フェイトはその背中について手を伸ばしかけるが、すぐにその手は力なく落とされ、二人の間の扉が音もなく閉じられた。

誰もいない通路を一人歩き、アルフはきつく歯をくいしばる。

主人が抱えている後悔の念に、アルフ自身も強く苦痛を感じさせられていた。本人の

意思がなくとも、流れ込むその感情は抑えられはしなかったのだ。

（お願いだからさ、フェイト…一人で抱え込まないでくれよ。言っただろ？ フェイトとは心で繋がってるから、フェイトの思いは全部わかってるって……）

家族として大切に思う故に、苦しみも悲しみも隠し通そうとする健気な少女だが、繋がりがあがる以上それは叶わない。互いの思いやりが混じり合うようで、二人は倍以上の心の痛みに苦しみ続けていた。

（あいつに向けちまった恐怖も、その後悔も全部あたしに伝わってるんだよ……フェイトが最低って言うなら、あたしだってそうさ）

フェイトは自分一人が、アインに恐怖と嫌悪を抱いてしまっていると後悔していたが、それはアルフも同じことだった。

獣としての本能によるものか、アインが見せた異形の一面に対してフェイトよりも強く深い恐怖を抱き、敵意さえ抱いてしまっていた。

そんな自分自身が、情けなかった。

「どうすりゃいいのかわかんないよ……！」

苛立ちと苦悩をぶつける対象を欲し、近くの壁を殴りつけるが、ただ自分の手が痛むだけで気持ちは一切晴れない。なんの意味もない行為に、虚しさが募るだけだった。

その耳が不意に、誰かの足音を捉えてピンと伸びる。ハッと表情を変えて振り向いた

アルフは、無言で近づいてくる黒髪の魔導士に気づき、眉間にしわを寄せた。

「……プレシア……」

数日ぶりに顔を見た魔女は、相変わらず何を考えているのかわからない無表情でアルフを見つめていた。

ここにこの女がいるということは、またフェイトに役目を果たすように急かして来たのかもしれない。ただでさえ精神的にまいっているフェイトがこれ以上戦えば、完全に心を壊してしまうかもしれないのに。

じつと凝視してくるプレシアに、完全に敵を見る目で睨みつけていたアルフだったが、魔女はさしてそれを気にした様子はなく、おもむろに口を開いた。

「……フェイトの調子は？」

「え……」

耳に届いた声は、思っていた以上に優しくかった。

抑揚に乏しく、ただ単に確認するだけの声音だったが、フェイトが動けずにいることへの苛立ちや焦りはあまり感じられない。以前よりも確実に、穏やかな表情と態度を見せていた。

困惑したまま立ち尽くすアルフに、プレシアはかすかに眉間にしわを寄せ、ため息混じりに軽く睨んだ。

「早く教えなさい。ぐずぐずしている暇はないのよ」

「……だいぶ、参ってるみたいだよ。あんなのに出くわしたんじゃね」

「……そうね」

同意の言葉を聞き、アルフはますます混乱する。アルフの知るプレシアは、フェイトに対して敵意にも似た激情を向け、とても親とは思えない非道を繰り返してきた、まさに魔女といった女だった。

だが、目の前にいるのは一体誰なのか。アルフを邪魔そうに睨むことなく、フェイトに怒鳴り付けようとする気迫は感じられない。まるで別人のように、プレシアはそこに立っていた。

「しばらく様子を見るわ。またあんなのに出てこられても困るし、今後の方針も練り直さなくてはいけないもの」

「あ、ああ……」

言いたいことだけ言い終えると、プレシアはアルフに背を向けて立ち去っていく。

残されたアルフはプレシアの背中を凝視し、パチパチと目を瞬かせて立ち尽くす。今度出くわしたら存分に感情の全てを叩きつけてやろうと構えていた分、肩透かしを食らって気が抜けてしまっていた。

「……………あのババア、こないだより増して妙に優しくなっていないかい？ どう言う風の

吹き回しだい……」

激情のぶつけどころをなくしたアルフは、その場に棒立ちになったまま、呆然と眩く他になかった。

♠ ◆ ♡ ♣

「……今後、か」

玉座に腰かけたプレシアは、自分が口にした言葉を自嘲気味に鼻で笑う。らしくもない、次の瞬間さえ生きている保証がない自分にしては、樂觀的すぎる台詞である。

魔女の掌の上に、魔法の寶石側になつて浮かぶ。その数は人形が死線をくぐり抜けた回数に比べて少なく、心許なかった。

「たった5つ……これでは次元震は起こせても、アルハザードへは届かない」

以前であれば、長い時間をかけてこの程度の成果しかあげられなかった人形に対し、強い憎悪と憤怒を抱いていた魔女であるが、今は違った。

自分が激情を抱く存在が、別に存在していたからだ。

「管理局の連中に先を越されたこともだけど、何よりの計算外はあの化け物……！ それさえなければ、あの子だって出し抜かれることは……!!？」

脳裏に蘇る異形の巨人の姿、そして以前に出現した無数の蟲兵。事前知識には一切登場しない謎ばかりを残す怪異の出現に、魔女は翻弄されっぱなしだった。それこそ、人

形の失敗になど怒りを抱く余裕もないほどに。

険しい表情で、プレシアは髪をかきむしる。怒りのままに髪の手を握りしめるが、自分の頭皮が痛むだけで全く気が晴れる気がしない。

「全て……全てはあの化け物が……!」

『また派手に荒れているね……機嫌でも悪いのかね?』

眉間に深くしわを刻み、唸るようにつぶやいていたプレシアの目の前に、前触れなく空間モニターが出現する。

ノイズで隠された画面から聞こえてくる男の声に、プレシアはますます不機嫌そうに顔を歪めた。ただでさえ不足の事態の数々に苛立っているというのに、この男の耳障りな声は非常に癩に触るのだ。

「あなたは私を苛立たせるために話しかけているの……!!? 次から次へとイレギュラーなことばかり……なんだというのこの世界は!!?」

『私に当たられても困る……こちらも調べてはいるが、第78管理外世界にあのような異形が棲み着いているなど、ましてやあんな怪物の情報などどこにもありはしなかったのだからね』

「白々しいことを……!」

声に悪びれた様子はなく、逆に憤慨するプレシアを面白がっているそぶりを見せる。

常人であれば震えて動けなくなるほどの殺気を向けられながら、モニターの向こう側の男は平然としている。魔女の怒りなど、どうとでもできるといふ余裕の表れのように。

『まあ考えても仕方がない。所在が不明だったジュエルシードは全て発見された。あとは……連中から奪い取るより他に無いだろう』

プレシアはまだ言い足りないようだったが、優先して考えるべき事案は確かにあると、渋々と肩を落として自分を落ち着かせる。

だが、男の声で目的を果たす上で目の前に横たわっている問題を思い出し、その困難さに険しい表情のままため息をついた。

「……今のあれに挑めというの？ あの化け物に襲撃された後とはいえ、精鋭が何人も揃っているのよ。流石に、そこまで愚かではないわよ」

今のフェイトは精神的に大きな負担が残り、プレシア自身も全力で活動できるほど余力は残されていない。男の提案は正しいが、現実味にかける考えで魔女は思わず呆れた目を向ける。

『何も真正面から挑めといっているわけではない。……あの子、白い魔道士の子はなんと言ったかな』

男はそれに、くつくつと耳障りな笑い声をこぼして応える。

訝しげに眉を寄せるプレシアを小馬鹿にするように、男は見えないモニターの向こう側で醜悪な笑みを浮かべていた。

『ずいぶん君の人形を気にかけているようだ……利用するには一番都合がいいのではないかね?』

「利用……?」

『ああ、そうだ。そうだな……例えばこんなのはどうかかな?』

疑わしげに睨むプレシアに、男は自身の提案を示す。

プレシアは無言でその考えを聞き、内容を理解して行くと同時に徐々にその表情を陰しくしていく。モニターに向けられる目はさらに鋭くなり、嫌悪感が表情全体に広がっていく。

男が案を語り終わると、プレシアは厳しい顔で考え込む。やがて顔を上げると、答えを待つように沈黙する男に冷たい声で告げた。

「……………その案だと、あの子を切り捨てることになるわね」

『君にとつては都合がいいのではないかね? 捨てる時期に悩んでいたようだし、何より……最後に役立ててあの人形も本望ではないかい?』

男の試すような声に、プレシアは小さく聴こえないくらいの舌打ちをこぼす。こちらの内心を把握しているような、確認するような台詞を聞かされるのは、相手を利用して

いる立場と自負している魔女にとっては、非常に腹立たしいことだった。

「……それで？ 捨てられたあの子をあなたが拾うつもり？」

『乞食のような真似は好みではないが……それも悪くはなさそうだ』

「……好きにきなさい」

ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべているであろう男から、プレシアは鬱陶しそうに目をそらす。

男はそれを気にせず、むしろプレシアの返答を喜ぶように高揚した声をあげた。

『では、具体的な日時は君に任せるよ。健闘を祈る……』

ブツリと音が切れ、玉座の間に久しぶりの静寂が訪れる。

聞いているだけで嫌だった男の声が聞こえなくなつて、プレシアはようやく一息つくように玉座に背中を預ける。張っていた方から力を抜き、額に手を当てて天井を仰ぐ。

しばらく黙り込み、気分の悪さが体から抜けて行くのを待つてから、プレシアは深いため息をついた。

(……こんな辺境の管理が異世界にくるようなお人好したちなら、あの子を無碍に扱つたりはしないでしょね)

脳裏に浮かぶのは、時の庭園の自室に引つ込んでいる自分が作った人形のこと。

今はまだ動くことはできないだろうが、自分が命令すればきつとまた立ち上がること

だろう。そういう風に育て、そういう風に命令してきた。

男の案が結構されれば、結果がどうなろうと彼女の役目は終わる。そのあとは、自分でどうとでもできるだろう。

(あの出来損ないの使い魔も、あの白い魔道士の子も、あの騎士もいる……あの子が孤立することは、きつとない)

それだけ考えて、プレシアはフツと自嘲気味に笑う。

ただひたすら憎かっただけに、使い潰しただけだったのに、ここまであの人形に気を配ることが、自分でもらしくないと思わされて笑いがこぼれてしまう。

いつの間に自分はここまで変わったのかと、戸惑うばかりであった。

「……俗物が、お前にだけは決して渡しはしない」

小さく呟き、決意を口にする。

自分の終わりの時が、刻一刻と迫り続けていることを実感しながら。

3. 再々始動

ピツ、ピツ、と規則的な電子音が響き、モニターに数値を表示する。数字の上では角ばった波が表れ、ベッドの上で沈黙する女の鼓動の状態を示す。

全身に包帯を巻き、それに緑色の体液を染み込ませながら、呼吸器を取り付けられたアインは身じろぎひとつせず、眠り続けていた。

それをベッドが置かれている部屋の入り口に立ち、一人の少年が見つめる。彼の仏頂面は、この時ばかりは特に険しくなっていた。

「クロノ……ここにいたのね」

「かあ……提督」

眠り続ける女騎士を遠巻きに見つめていた息子に、リンデイが話しかける。クロノはどこか気まずげに目をそらし、眉間のしわをさらに深くする。

そらされた目はまた病室のベッドに向けられ、もうすでに数日の間このままの状態が続いているアインを見つめた。

「……不死身の身体でも、昏睡状態には陥るんですね」

「どれだけ傷を負っても再生すると言っても、肉体の構造は普通の人間と同じなもの。」

過ぎた痛みは感覚を麻痺させ、心を苦しめる……死なないからと言って、強くなるわけじゃないわ」

リンディの切なげな声に、クロノは自分でも気づかないままに冷や汗を流す。母の言う苦痛がどれほどのものか、想像してしまふ。

雷に焼かれようと、炎に焦がされようと、凍らされ砕かれようと、腐らされようと、斬り込まれようと、引きちぎられようと、潰されようと、如何なる致命傷を負おうと死なず、しかしその苦痛は変わらない。それがどれだけの悲劇か、クロノの想像が追いつくことはない。

人間が長年憧れ、求めてきた不老不死。その現実の姿がこれだと思うと、クロノは恐怖しか抱けなかった。

「たとえ不死であってもなくても、あの子の戦いはそう変わらなかったでしょうけどね。いつだってあの子は……自分の命を使い潰すことばかりしてきた」

リンディは険しい顔で黙り込む息子を見下ろし、次いでアインを見やって深いため息をつく。

分厚く巻かれた包帯、その端からは、アインの体に刻まれた無数の傷跡が覗いている。不死となった今、アインがどれだけ傷ついてもその傷はいずれ消え、元通りになる。だが、不死となる前に負った傷は消えない。

それが表す意味に、リンディは呆れながら、深い悲しみを覚えずにはいられなかった。「大を救うために、小を犠牲にする……たとえ納得できなくても、それは正しい選択なんだと僕は思っていました……でも、彼女は違ったんですね」

「……………結果的にあの子は、多くのものを救った。でも世間はその結果をあえて見ずに、あの子の罪を大きく取り沙汰した。アインの存在を、骨の髄まで利用し尽くすために……」

クロノはきつく拳を握りしめ、吠えたくなる衝動を必死に押さえつける。

救うべきものではなく、救いたいものを救う。私情を主にした正義の組織にはふさわしくない行動だが、少なくとも口先だけの輩よりも人間らしく思える。

それを認めようとしなかった上層部には、微塵も正義を感じられなかった。

「母さんの言葉の意味がよくわかりましたよ……あの子は……壊れている……!」

同時にクロノは、眠り続けるアインに対してかすかに恐怖感を覚えていた。

アインの行動は、結果だけを見れば理想的な正義の味方の行いに感じられるだろうが、過程を含めるとそうとは思えない。アインの行動には、普通の人間では考えられない選択が多すぎる。

永遠に死なず苦しみ続ける咎を背負うなど、まともな人間であれば受け入れようとは思えない。

「自分以外の全てのために、自分の全てを犠牲に。滅私奉公なんてものじゃない………究極の、自己犠牲……」

「前回の地球での任務からより一層ひどくなつたわ……こんなこと、なのはさんには絶対に言えないけど」

アインを間近で見て、言葉を交わして、戦う姿を見たからこそ、クロノ達はアインの歪みを痛感する。噂や伝聞では知ることはできない、アインという存在の違和感がクロノとリンディには見えていた。

そのまま親子二人、身も心も普通の人間とは一線を画す存在となつてしまった女騎士を見つめ続けていた、その時だった。

「……壊れているとは失敬だな。人を狂人みたいに」

不意に聞こえてきた声に、リンディとクロノはハツと目を見開き振り向く。

二人の視線が向かう先では、不機嫌そうに脛を開けたアインが半身を起こし、ぶちぶちと体に刺された点滴の針を引き抜いている姿があつた。

一瞬棒立ちになつていたリンディは、アインがベッドから立ち上がろうとしているのを見てようやく我に返つた。

「アインっ……まだ動いちやダメよ！ 完治したわけじゃ……」

「もう十分だ。動く分には問題ない」

「そういうことじゃなくて……ああもう!!?」

動きづらそうに包帯を触り、眉間にしわを寄せるアインにリンデイは頭を抱える。眠り続ける姿は不安を抱かせたが、起きたら起きたで心配させるなドアくれて言葉も出なかった。

険しい顔で額を抑えるリンデイを見やると、アインは友人に心外だと言わんばかりに不満げな視線を返した。

「言っておくがな、お前ら。私は別に自分を犠牲にしているつもりは毛頭ない。自分がやりたいことのために、自分の持つ手札を全て使っているだけだ。でなきゃ、こんなにしんどいことなんてしない」

自分自身の行いに吐き捨てるように、アインは苛だたしそうに告げる。

アインにしてみれば、自分を悪として利用した上層部の評価はさほど間違っではない。結果がどうであれ、自分の願望のために危険な賭けを行ったのは事実で、それについて咎められることに何の不満もない。

当事者の感想を聞いて、英勇のように扱われる方が居心地が悪くて仕方がないのである。

「……人を守ったつもりも、世界を救ったつもりもない。結果的にそうなったただけだ。エゴなんだよ、私の……」

アインのつぶやきに、リンデイもクロノも厳しい顔で口を閉ざす。

リンデイは友人がこうも卑屈になってしまったことへの後悔に、クロノは事情も知らずに敵意を抱き、それを咎められなかったことに対する罪悪感で気まずげに目をそらした。

重い空気になり、しばらくの間しんと静まり返ったのち、アインが深いため息とともに口を開いた。

「そんなことより……状況は今どうなっている？ フェイトについて何か情報はつかめたのか？」

「………音声のログから、いくつか推測ができてきたわ」

諦めたようにため息をつき、リンデイは胸の下で腕を組み語り出す。疲れ切ったような表情は、友人が最初から引く気がないのを察したからであろう。

クロノも同じように呆れた顔で、上司とともに調べ上げた情報を端末からアインに渡した。

「フェイト・テストロッサのファミリーネーム、テストロッサ……かつてミッドチルダにいた大魔導師のものと同じだ」

「プレシア・テストロッサ……違法な研究でミッドを追われた科学者だと聞いている」

目を細め、空間モニターに表示された黒髪の女性の姿を見つめる。長い髪で顔の半分

を隠し、その下から冷たい眼差しをのぞかせた彼女は、どこか近づきたくない雰囲気を感じさせる。

異様な気迫を感じさせる美女の画像をじっと眺めていたアインは、やがて眉間にしわを寄せて唸った。

「23年前は中央技術開発局の第3局長だったが…当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉『ヒュドラ』使用の際、違法な材料を持って実験を行い、失敗。結果的に中規模次元震を起こしたことがもとで、中央を追われて地方へ異勤になったと。ずいぶん揉めたようだ。失敗は結果に過ぎず、実験材料に違法性はなかったと」

「ずいぶん詳しいですね…?」

「…少し、な」

じつと見つめて来るクロノから目をそらし、アインは答えない。過去の、それも自分が曲に入って間もないような頃の事件について知っているなど、理由がなくてはおかしいのに。

しかしリンディは深くは聞かず、あきれた様子でアインに続きを促した

「辺境に異動後も数年間は技術開発に携わっていたが…しばらくのち、行方不明になってそれっきりらしい」

「家族と、行方不明になるまでの行動は…?」

「そこまではわからん。綺麗さっぱり抹消されていてな…あとでエイミーに本局に問い合わせて貰えばいい。……私じゃ教えてもらえそうにないからな」

「あなたねえ…」

自虐的な言葉に、リンディは眉間にしわを寄せてアインを睨む。

しかし、すぐにいつものことと諦め、深いため息をついて肩を落とす。自傷の台詞で他人に余波をもたらそうが、一切に気にしないのだから夕チが悪い。

アインはそれに苦笑を返し、そして真剣な表情に改めた。

「あの時彼女は、たしかに『母さん』と呼んだのをなのはが聞いている。そこから推測するに……」

「…娘か縁者か、はたまた洗脳でもされているのか」

髪の色や雰囲気はあまり似ているとは思えない。だがよくよく見てみれば顔立ちや顔のパーツは似通ったところがあるように思える。

もし画像の彼女が、フェイトが見せるような切なげで遠い眼差しをしていれば、もつと似ていると思えるかもしれない。しかし画像の中の彼女は、撮影機に対して強い敵意を抱いているような、剣呑な表情をしていた。

(以前に会った時、フェイトから感じられたのは恐怖と焦り……母親が黒幕なら、可能性としては虐待されていたか、脅されていたか)

フエイトと遭遇した時、少女から感じられた感情は常に、自分を追い込むような負のものばかりだった。

なのはに對して罪悪感を抱き、相棒であるアルフにも申し訳なきを感じさせる苦しげな表情ばかりを見せ、本心からあのような行動をとっていたとは思えない。

母親から無理やり命じられたと仮定すれば話は簡単なのだが、アインはどうにも納得がでなかつた。

(だがあの時、母を呼んだ表情は…)

異形の巨人の出現、それによる戦場の均衡の変化と命の危機。

そんな中でフエイトは、母に對してひどく驚いた様子を見せていた。念話で何を言われたのかはわからないが、

「いずれにせよ、プレシア・テストアロツサが今回の事件の重要参考人となつたことは変わらん。…どうにか居場所を突き止め、確保できればいいんだがな」

「…あなたにはやらせないわよ」

顎に手を当てて考え込むアインに、リンデイがじとつとした視線を向けて言う。クロノも同じような冷ややかな視線を向け、心底あきれた様子で肩をすくめている。

愚行を咎めるような冷たい視線を横から受け、アインは不思議そうに眉を寄せた。

「休暇はなくなつたはずだが…?」

「休めっていつてるんじゃないの！ 戦わないでって言っているのよ!!?」

何を馬鹿なことを言っているのかと、限界にまで高まったリンディの怒りが爆発する。くわつと目を吊り上げ、犬歯をむき出しにした形相は鬼のようで、流石のアインもかすかに気圧された。

「あんな化け物と真正面からやりあって、普通なら死んでる傷を負って、そのあと何十時間も眠り続けて……!!? それだけ無茶をしたあなたを行かせられるわけないでしょうが!!?」

凄まじい剣幕で怒鳴りつけるリンディに、アインは目を見開いたまま冷や汗を流し黙り込む。

10年以上顔を合わせず、久しぶりに再会した友人が、不死となったからといって尋常ではない無茶を続けていれば、確かに不安にもなるだろう。しかしアインはそれに思いつくことができず、戸惑いの表情でリンディを見つめる他になかった。

しばらく思いの丈をぶちまけ続け、ようやく落ち着いたリンディは、深いため息とともに肩を落とした。

「……あなたは前回の出撃で十分すぎる成果を見せた。上層部だってあんなのが出てきたって聞けば重い腰を上げる……あなたがまた傷つく必要なんてないのよ」

「そうは言ってもな……」

鋭い目で睨みつけ、固く命じるリンデイにアインは渋い表情で目をそらす。

その鼻先に人差し指が突きつけられ、アインは真正面から向けられる気迫に思わず息を呑んだ。

「とにかく！ あなたはしばらく絶対安静!!? 何が何でもここを動かないこと!!? いい!?」

「あ、ああ…」

ようやく頷くと、リンデイはフンと鼻を鳴らして背を向け、早足で部屋から立ち去っていく。いつもより大きな足音から、まだ彼女が苛立ちを覚えていることがわかり、アインのこめかみに冷や汗が流れる。

友人の足音が聞こえなくなってようやく、アインは残ったクロノに苦笑を浮かべて顔を向けた。

「…お前の母は怒らせると怖いな」

「怒らせてる本人が何言ってるんですか…」

ふざけた調子で呟くと、クロノはじとつとした横目を向けてため息をつく。

彼女が目を冷ますまで抱いていた罪悪感が、先ほどの母との会話で一気に吹き飛んでしまったらしく、その表情はしかめっ面になっている。振り上げた拳の行き場を無くしたような、不完全燃焼感を感じさせた。

「…僕から言えることも同じです。せいぜい療養しておいてください、では……」

「……クロノ」

言いたかったことの全てを、口にする気をなくし、クロノは気だるげに退出しようとする。

その背に、アインがわずかに笑みを浮かべながら呼び止めた。

「私はしばらくそつちには戻れんだろうから……なのはとユーノ、それと…フェイトとアルフを頼む」

アインはクロノの背中をじつと見つめ、真剣な眼差しで懇願する。ふざけた調子はどうどこにもない、心の底から教え子達を案じる様子で、後のことを元教え子に託す。

クロノはそれに振り向くことなく、立ち止まったまま無言になるが、やがて小さく口を開いた。

「…言われなくても、やりますよ」

それだけ言い捨てると、青年は早足で部屋を後にし、仕事場に向かって颯爽と歩き出ていく。

静かに扉が閉じられ、一切の音が消えると、アインは誰もいなくなった部屋で一人ベッドに腰掛け、深く息を吐いた。

「…戦うな、か。意外と酷なことを言ってくれる……」

友人が口にした、自分を氣遣う言葉。

もはや人ではなく、戦うことしかできなくなつた怪物である自分にはふさわしくない言葉だと自嘲しながら、アインは寂しげな顔で天井を仰ぐのだった。

4. 親友との約束

明るく日、純白の制服を纏い、登校してくる小学生達で賑わうある教室。

その教室には、しばらく顔を見せていなかったある一人の女子生徒が久しぶりに顔を見せ、友人達に笑顔をもたらしていた。

「なのはちゃん……よかった、元気で」

「うん……ありがと、すずかちゃん」

都合により学校を休み、顔を見ることもできずにいた親友と再会した事で、すずかはホッと安堵の表情を浮かべていた。

その隣には、若干気恥ずかしそうに頬を染め、腕を組みながらなのはにじつと横目を向けるアリサの姿もあり、なのはもやっと安心のため息をついた。

詳しい事情も話せないまま、プリントやノートなどを任せつきりにしてしまったため、罪悪感を覚えていたのだ。

「アリサちゃんも……ごめんね、心配かけて」

「まあ……よかったわ元気で」

ツン、と赤い顔のまま目を背けるアリサを久しぶりに見た事で、なのははついクスク

スと笑つてしまふ。相変わらず素直じゃない親友達が、変わらずにそこにいることが嬉しくて仕方がなかった。

ふとアリサは、ずかと一緒に笑うのはをじつと見つめ、隅から隅までを確認するように眺める。様子の変わったアリサに、戸惑いの目を向けるのはに構わず、気が済むまで眺めたアリサはやがてふつと微笑んだ。

「……ちゃんと約束守ってくれたってことよね」

「え？」

「ううん、なんでもない」

不思議そうに見つめてくるのはの声で我に返り、アリサは慌てて首を横に振る。

まさか、親友とともに行動しているであろう女性に、彼女が知らない間に再会し、釘を刺していたなどと言えるはずもない。事情を話せずにいる親友に、逆に隠し事をしてしまい、アリサは複雑な表情で冷や汗をかいていた。

「さ、色々話したいことはあるけど、それは後にしましょ」

訝しげに見つめてくるなのはの背中を押し、各々の席へと誘導する。

タイミングを合わせたようにチャイムが鳴り響き、なのはは釈然としない表情のまま席に着くのだった。

「そっか……また行かないといけないんだ」

その日の放課後、帰り支度を進めていたアリサは、申し訳なさそうに報告するのには残念そうにつぶやく。

たった一日登校でただだけで、また顔を見られない日が続いてしまうのだということに、寂しさを抱く。また時が過ぎれば会えるとわかつてはいても、限られた時間が少なくなっていくのを思えば、惜しまずにいられなかった。

「大変だね……」

「うん……でも大丈夫!」

不安そうに見つめてくる二人を元氣付けようとしてか、なのはは満面の笑みを浮かべて二人を見つめる。自分が抱えた多くのことに決着をつけ、スッキリとした姿でまた二人と話そうと心に決めていた。

アリサもすずかもそんな彼女の様子に、自分たちが親友を不安がらせてはいけないと思ったのか、苦笑とともに頷く。

とにかく今は、限られた親友との時間を大いに楽しむべきなのだ。

「ねー放課後は？ 少しくらいなら一緒に遊べる？」

「うん! 大丈夫だよ!」

「じゃあ、うちに来る？ 新しいゲームもあるし!」

「あ、ほんと？」

「昨日、なのはちゃんか帰ってきたら一緒に遊びたいねって、アリサちゃんと話してたの」

和気藹々と話しながら、会えなかった時間の分まで楽しもうと放課後について話し合う。

教科書を詰めた鞆を背負いながら、ウキウキとした様子で教室を後にして行くアリサとすずかを追いかけるのは。

ふとその足が止まり、陰り始めた空に向けられた。

(…フエイトちゃんは、何してるのかな……?)

遠い何処かのいるであろう、自身が友達になりたいと、力になってあげたいと思った金色の少女。

異形による襲撃、本人の戸惑い、そして恩人の負傷によりまともに話せず、長い時間顔も見られていない少女のことを思い、なのはは無言で佇む

いつになっても来ないのはに痺れを切らし、アリサが呼びに戻ってくるまで、なのはは遠い目で立ち尽くしていた。

◇ ◇ ◇

「…今日も、食べてくれなかった」

すっかり冷めてしまった料理を乗せたトレイを運び、片付けながらアルフが呟く。弱々しいその声は、鉛よりも重く聞こえた。

アインがフェイトたちを庇って墜とされて数日経った今も、フェイトは強い責任感から食事も喉を通らない日が続いていた。まるで、何もできなかった自分自身を責めるように。

どうにか元気を出してもらおうとしたアルフだったが、虚ろな表情で俯く主を見ていと自身の気持ちも重く沈み、かける言葉を見出せないでいた。

「このままじゃ本当に死んじゃう……でも、どうしたら」

アインの無事さえ確認できれば、フェイトは安堵し元気を取り戻してくれるかもしれない。だが、時の庭園で身を潜めている今、管理局の現状を確認する手段はない。

それに、もしアインに何かあれば、余計にフェイトは落ち込んでしまうかもしれない。それを思うと、アルフはもう何もできなくなってしまうた。

そんな時、今最も聞きたくない相手からの声が耳に届いた。

「……ここにいたのね」

「…何の用だい。あんたの娘が大変な時に」

振り向く事なく、プレシアに敵意をぶつけるアルフ。

この魔女がフェイトに直接何かをしたわけではない、不足の事態における自己だとわ

かつてはいるものの、全てにおける根本的な原因であるという認識から、アルフは即座にプレシアに壁を作っていた。

それを気にかける様子もなく、プレシアは冷たい目でアルフを見つめ、やがて口を開いた。

「…アルフ、あなたに指示を与えるわ」

「指示だつて…？ あんた、誰に向かって言つてるんだい」

「無論あなたよ。戦闘能力ばかり気にして、頭が足りていないのかしら？」

「喧嘩売つてんのかい…!!？」

ギリツ、と食いしばった歯を剥き出しにし、プレシアに殺気を向けるアルフ。案の定屁にも思っていないように涼しげな顔をしているが、それでも睨まずにはいられなかった。

「あたしのご主人はフェイトだよ。あんたの言うことなんか…!!？」

「そのご主人様の役に立つことでも？」

だが、プレシアが放った一言でアルフの殺気は簡単に霧散してしまう。言うまでもなく、自分の主人を引き合いに出されてしまったからだ。

アルフの怒り、悲しみ、喜びに至る全ての感情、そしてその意思と望みはフェイトの気持ちで変化する。それを熟知しているように、使い魔の反応が変わった様を見たプレ

シアは、満足げな笑みを浮かべていた。

「……どういうことだい」

「全てのジュエルシードが見つかったのはいいけど、残念ながらこちらが回収できたのはごく一部。大半を管理局側に回収され、さらに一部もあの異形に持つていかれて行方知れず……状況ははつきり言つて最悪よ」

アルフは顔をしかめ、プレシアが語つた現状に唸る。長い期間をその準備に当て、探し続けてきたもののほとんどが敵の手の内にあると言ふのは、確かに堪えるものがある。

だが、それでもアルフの胸中に然程のやる気は芽生えない。さらに多くのジュエルシードを得る手段は、圧倒的な戦力を誇る敵人から奪うより他にないからだ。

「だったら……もう諦めれば」

「それは駄目よ……それだけではできない。何としてでも、最低でも五つを手に入れなければならぬわ」

「だったらどうするつてんだ!!?」

まさか管理局に向けて特攻でも行えと言ふのではないだろうな、とアルフは声を荒げてプレシアを睨みつける。

グルルル、と唸り声を上げて爪を剥き出しにするアルフに横目を向け、プレシアは口

元小さく弧を描き、唇を開いた。

「…あの子、管理局側の白い子にずいぶん気にかけていたわね」

ハツと息を呑み、アルフは目を見開いて後ずさる。

この魔女が研究とジュエルシード以外、フェイトを含む他人に対し微塵も興味を抱こうとしないのは、長年その姿を見てきたために理解している。

そんな彼女が、フェイトに歩み寄ろうとしている少女を覚えていたと言う事実には、嫌な予感を拭い切れなかった。

「…それがどうしたんだい」

「善良でお人好し、窮地にいようと敵であろうと心配する甘い子……あなたもそう言っていたわね」

「っ…」

いつの間に聞かれていたのか、とアルフは自身の迂闊さを呪い、歯を食い縛る。

本気でフェイトと友達になりたいと願い、立場を押しして窮地を救ってくれた、本当にフェイトを救ってくれるかもしれないとかすかな希望を抱いていたのに、この魔女は一体何をするつもりなのか。

「もし今、あの子に会いたいと請われたら…あの白い子も応えざるを得なくなるんじゃない？」

プレシアの言葉に、アルフは訝しげに目を細め、じつとプレシアを凝視する。氷のように冷たい表情には、自体を面白がるような冷酷な笑みが浮かんでいて、気味の悪さを感ずる。

ピンときていない様子のアルフに呆れるように、プレシアはふつと鼻で笑ってから説明を始めた。

「これまでと同じよ。あの子達がよくやつていた勝負…それを全てのジュエルシードをかけて行わせるの。リスクは高いけど、残されているのはもうこの方法だけ…最後のチャンスよ」

理解が追いついたアルフは、その策を考えたプレシアにこれまで以上の怒りの感情を向ける。

「実の娘だけではない、それに歩み寄ろうとする心優しい彼女にまでも毒牙を向けようと言うのか、と。」

「……なのはの気持ちを利用する気かい…?」

「なのはと言うのね…そうね、好都合だと思っっているわ。あれだけ甘い子なら、簡単にこちらの思う通りに動いてくれる……」

激しい嫌悪感に、アルフは鬼の様な形相で魔女を睨みつける。同時に自身の魔力が今にも弾け、目の前の悪女に炸裂しそうになるのを必死にこらえる。

どれだけ憎くつたって、愛する主人の母親。そして自身とは比べ物にならない破格の力を有する大魔導士。真正面から突撃したところでたやすく返り討ちにされるだけだと、理性が本能を抑え込んでいた。

「文句があるの？ あなたは……誰の使い魔？」

つまらなそうに問うプレシアに、理性の鎖がぎしりと軋みをあげるが、どうにか枷が外れることだけは回避する。

アルフは一度大きく息を吸い、熱く脈動する鼓動を鎮めると、怒りを押し殺した無の表情でプレシアに問い返した。

「……あたしは何をすればいい」

「伝えるだけでいいわ、最後の決闘だって……あなたは捕まるだろうけど、役目を果たせるんだから本望でしょ」

見下した魔女の言葉に、アルフは目をそらす。

言う通りにすれば、下手をすると二度とフェイトとは会えなくなるだろう。胸が張り裂けそうな悲しみが胸の奥にたまり、少し呼吸が苦しくなる。

だが、それができれば自分にできることは他にもできると無理やり納得できる。例えば、あの連中に助けを求めることとか。

「ついでに、向こうの連中に媚でも売っておけばいいわ……新しい主人でも探すことね。」

「……………話は終わりよ。行きなさい」

葛藤するアルフに短く告げ、プレシアは背を向けて歩き出す。俯いて、苦しげな表情で立ち尽くす使い魔を案ずることなど一切なく、話は終わりだとさっさと歩き出す。

その足が、うっかり忘れていたという様に不意に止められた。

「……………そうそう、あの女騎士ね」

「！」

一言で誰のことかを察し、アルフはハッと目を見開き、プレシアを凝視する。ずつと生死が知れなかった恩人の情報に、隠していた懸念が顔に出してしまう。

動揺していることが丸わかりな使い魔を見やり、プレシアは小馬鹿にする様な笑みを見せた。

「重傷は負ったけど、なんとか生きてるみたいよ。…よかったわね」

本心か、それとも皮肉か、すぐに安堵した様に表情の強張りを解いて行くアルフに告げると、魔女は今度こそその場を離れていく。

一人、取り残されたアルフは視線を落とし、胸元をきつく握りしめてはを噛みしめる。新たにもたらされた情報のおかげで、揺れていた覚悟が今、固まり始めたのだ。

（……………フェイト、安心しておくれよ。今度こそ…私が助けるから）

強い意志のこもった目で顔を上げたアルフ。

その脳裏に、遠い昔の記憶が不意に蘇り始めた。

——ほら、抱いて上げて…。

自分達の出会いは、偶然だった。

決して治らない病に倒れ、群れから見捨てられた自分を見つけ、豪雨の中抱き上げてくれた温もりだけを、使い魔となった今でも覚えている…：気がする。

——あ…あつたかい…柔らかい…。

——それが命の温度です。

——これからよろしくね、アルフ。

雨に濡れながら、優しい笑顔を見せてくれた少女の声を、アルフは忘れたことがなかった。

——あー？

フエイ…ト？

——うん、フエイトだよ。

フエイート！

それから始まったのは、少女と少女の師である山猫とともに過ごした日々。

赤ん坊の様にまっさらな自分に多くのことを教え、育んでくれたかけがえのない

日々。自分がなんのために存在しているかなど一度も気にしたことはなく、与えられる愛情にただ甘え続けていた。

だがそんな甘い考えは、魔女と出会ったことでたやすく否定された。

——使い魔って主人の目的のためだけに作り出す命なんだって……本当？

維持するのが大変だから、目的を終えたら消しちゃうのが普通って本当？

フェイトも自分の目的が済んだらあたしを捨てる？

あたしの事消しちゃうの？

——そんなの嫌だ…!!?

フェイトに捨てられるのも消えちゃうのも！

そんなの嫌だああ…。

自分の存在を否定されたような気持ちになり、アルフはただ泣きじゃくるばかり。山猫はそれを困ったように見つめ、苦しげに唇を噛み締めていた。

そんな中で、少女は優しい笑顔とともにアルフの前にしゃがみ込んだ。

——そんな事しないよ。

——でも、あたしフェイトの使い魔だ。

友達だって、姉妹みたいだって思ってたのに…！

——友達や姉妹じゃないとダメかな？

使い魔と主人って関係かもしれないけど、私は楽しかった。嬉しかった。大きくなったら守ってくれてくれるって言ってくれて、すごく嬉しかった。

真剣な表情で語りかけてくれる少女の姿に、アルフは知らぬ間に泣き止んでいた。決してこの子の言葉は嘘ではない、そんな漠然とした確信を持って、惚けていた。

——私が違う契約の内容を考えたんだ。

聞いてくれる？

——汝、使い魔アルフ。

主人・フェイトとの契約の元、以下の制約を遵守し履行せよ。

その四肢と心をもって自らが望む、満足できる生き方を探し、それを行え。

いかな地にあつても、主人と遠く離れても、命が尽きるまでその制約を胸に。

それは、主人であるフェイトにほとんどの利益がない優しすぎる誓約。膨大な量の魔力を分け与えながら、一切の見返りを求めない誰のための契約。膨大な量の魔力を分け与えながら、一切の見返りを求めない誰のための契約。膨大な量の魔力を分け与えながら、一切の見返りを求めない誰のための契約。

アルフはただ、誇らしげに微笑む少女を凝視し、自身の手を握る暖かさに呆然となるばかりであつた。

——私がアルフを使い魔にしたのは、アルフに死んでほしくなかつたから。

だからこの先、別に私と離れてもどこに行つてもいい。

だけど今までみたいに私のそばにいて、いろんな事を一緒にしていつてくれた

らうらしい。

私とアルフは友達でも姉妹でもないけど……きつと最高のパートナーになれると思うんだ。

——使い魔も主人も関係ないよ。

今までみたいに二人でいよう、これからもずっと。

その誓いを胸に抱き、アルフは自分の意思を見つけた。

自分以上にだれかを大切にできるこの少女のために、自分は全てを捧げよう。自分の全てを使って、この少女を幸せにしよう。

それが使い魔アルフの原点。自分がアルフになった、始まりの瞬間だ。

（あのババアのいうことを聞くのは癪だけど……あたしはフェイトが望むのなら、何だってやってもいいんだ。……どんなに胸が痛くなっても。それが……あたしの望みだから）

ぎゅつと胸に握りしめた拳を当て、アルフは目を伏せる。

いつだって薄れたことはない、大切な主人との想い出が自身に力と勇気を与えてくれる。どんな道へも向かっていける無敵の心を与えてくれるのだ。

だから、アルフは時の庭園を去る決意を決める。何よりも大切な主人を救うために。

（あいつならなら……きつとフエイトを助けてくれる。あいつなら……きつと守ってくれ
る。そうだろ、アイン……なのは……）

誰かに愛されていて、主人と同じくらい優しいありえないくらいのお人好し達。敵の
はずの自分たちのために、体を張ってくれる人達。

その優しい顔を思い出しながら、アルフはゆつくりと歩きだした。

5. 魔女の遣い

なのはが彼女の姿を見つけたのは、学校からアリサの家へ直接向かう途中のことだった。

久しぶりの友人達との下校時間を満喫していた時、ふと視界に入った見覚えのある毛並みになのはは一瞬固まり、勢いよく振り返った。

「……………」

この場にいるはずのない、追われる立場にいるはずの彼女の姿を捉え、目を大きく見開いて立ち尽くす。

しかしすぐに我に返り、突然立ち止まったことに訝しげな視線を向けるアリサとすずかに向き直った。ここで不審な姿を見せてしまえば、また余計な心配をかけることになる。

「どうしたの?」

「ちよ……ちよつと待ってて! 私、教室に忘れ物してきちゃった」

「早くしなさいよ?」

慌てた様子が功を奏したのか、アリサは疑う様子もなくなのはに呆れた目を向け、送

り出す。

ホツと安堵の息をついたなのは、内心で二人に謝りつつ見つけた彼女がいた方向かつて踵を返し、走り出す。彼女の方も、なのは都合を考えたのか、学校の方に向かって移動を開始し、適当な草むらの陰に身を潜めた。

なのはは校庭に入り、彼女が身を潜めた草むらの方へ駆け寄り、自身も同じく身を潜める。

住宅地ではあまり見られない特徴的な姿を取っている彼女は、草地に腹ばいになりながらじつとなのはを見つめ返した。

「やっぱり……アルフさん！」

「……ここで待つてりや、来てくれると思つてたよ」

教学をあらわにしたなのは、狼の姿に戻ったアルフは何処か安堵した様子で呟いた。

バニングス家の裏庭、広さで言えばさすがの邸宅のものにも劣らない広大なそこに、アルフは移動していた。

これ以上アリサとすずかを待たせ続けるわけにもいかず、なのはは一旦アルフと別れ、誰にも見られる心配のなさそうな場所に移動し、再度話し合いを再開することにし

たのだ。

その際は、フェレット形態のユーノも一緒だった。

「一体どうしたの? …君たちの間で一体何が?」

「……………」

何か覚悟を決めたような、悲痛な表情で鎮座するアルフにユーノが問いかける。

以前から、主人の一举一動に感情をあらわにしていた彼女が、今はそれを押し殺すような真剣な表情をしている。それに加えて、いつも一緒に見かけていた主人の姿が見えないことが、なのはとユーノに違和感を与えていた。

「あんたがここにいてるって事は…管理局の連中も見てるんだらうね」

「うん…」

眉間にしわを寄せ、虚空を睨むように視線を向けるアルフになのはは頷く。

ずっと行方を捜していた二人組の片割れが見つかった。その報告をしないわけにもいかず、なのははなんとなく自分が密告したような気分になって、罪悪感を覚えていた。

気まずげな空気が流れる中、タイミングを見計らったのか、通信越しにクロノが声を発した。

『時空管理局執務官…クロノ・ハラオウンだ。正直に話してくれば悪いようにはしない、君のことも…君の主フェイト・テスタロッサのことも』

「話すよ……全部。むしろあたしは…そのために来たんだ」

俯いたアルフの口の中から、ぎりつと軋む音が鳴る。頼ることしかできない自分の不甲斐なさを悔やみ、それが牙を食い縛るまでにこもってしまっていた。

「だけど約束しておくれ、フェイトを助けるつて。あの子はなんにも悪くないんだ…！
悪いのは……」

感情の赴くままに叫ぼうとしたアルフの言葉が、唐突に途切れる。脳裏に浮かんだ魔女のかつての悪魔の様な表情と、最近になって見せる様になった複雑な表情。その落差に、アルフの口は咄嗟に閉ざされてしまった。

それを訝しげに見つめるも、クロノはさして気にした様子もなく、傍に立っているエイミイに視線を向けた。

「…約束する。エイミイ…記録を」

「してるよっ」

準備が整ったことを明るい声で伝え、アルフに敵意がないことを示す。

自分が望む通り、彼らが味方になってくれることを感じたアルフは、ポツリポツリと少しずつ語り始めた。

魔女と、それに翻弄された心優しい主人に関わる、自分の知る限りの全てを。

「……そういう事か、だいたい予想通りだったな」

医務室のベッドに横になったアインは、遠い目になって呟く。

ベッドのすぐ近くに置いた椅子に腰掛けたリンディは、声を震わせながら語ってくれたアルフの悲しみと、理不尽な運命に翻弄されたフェイトの苦しみを思つて表情を歪める。

数多くの事件に関わつてきた彼女でさえ、正気ではいられなかった。

「誰かに助けを求めるときも、あの子にはできなかつたのね」

「子供にとつて親は神。逆らうことは身の破滅を呼び、叱られれば自分がすべて間違つていると思ひ込む……その親がどれだけ愚かな存在であつてもな」

遠い眼差しで虚空を見やりながら、アインは自分にとつての親を思い浮かべる。

あまりにも病弱で、娘に頼らなければ生きていけないほど儂かつた母。血の繋がつた娘に一切の情を持たず、人でなしとしか言えないほどの屑中の屑の父。そして、そんな存在でも実の両親を失つた娘を、短い余生を使い切つて育て上げた、赤の他人。

決して「普通」とは言い難い彼らのことを思い出し、アインは深いため息をついた。

「…手持ちのジュエルシードを餌に残る全てを得る、か。ずいぶん無謀な博打に出たな」

「そこまでして… 何を願うつもりなのかしら」

「しかもこつちがそれに応じざるを得ないお人好し集団とわかつての決断だ……何かし

らやらかすことは目に見えているな」

虐待を受け続け、度重なる戦闘で疲弊したフェイトを再び放つことをプレシアは明言し、それをアルフに伝えてきた。いわば、自分の娘を人質に管理局勢を引き付けたのだ。そしてプレシアは、なのは一人とフェイトが戦うことを望んでいる。他の戦力が手を出せば、間違いなく魔女は少女を連れて雲隠れしてしまうだろう。

少女の無事、そして残るジユエルシードを一刻も早く確保することを考えれば、従う他になかった。

『なのは……聞いてたかい……?』

『うん……全部聞いた』

『君やアルデブランと陸士の話と現場の状況……そして彼女の使い魔アルフの証言と現場を見るに……この話に嘘や矛盾はないみたいだ。……少しの変化を含めてね』

『……どう……なるのかな……?』

モニターの向こうから、なのはは不安げな表情でクロノを見つめてくる。

何度も見た、少女が見せる悲しみの表情の理由を知ってしまったからだろう。愕然とした様子で、不安げな顔で大人達を見つめてきている。

クロノはそれに目をやると、確固たる意志を感じさせる声で答えた。

『プレシア・テスタロッサを捕縛する』

当然といえば当然、しかし少し遅すぎたという後悔を目の奥に滲ませながら、クロノは宣言する。

いたいけな少女が、他者を常に気にかけてながら違法な宝石を集めようとしている。それは何故なのか、少し考えればわかったはずの問題に、クロノ達は悔やんでも悔やみきれなかった。

『向こうがこちらを釣り上げようとしているのなら、こちらもその意図を手繰り寄せるまでだ。二人が遭遇し、戦闘になった場合の結果がどうであれ、一気に捕らえてみせる』
クロノの目に、信念の炎が灯る。

自分の娘を人質にとつてまで、何かをなそうとしている魔女に対する怒りを燃やし、決してその思惑通りに行かせないと決心する。それがせめて、罪なき少女を救えなかったことへの贖罪になると信じて。

『僕達は艦長の命がありしだい、プレシア・テストアロツサの逮捕を最優先事項として動く事になる。君はどうする？ 高町なのは』

『わたしは……』

急に問われ、なのはは戸惑いながらも思考する。何度もぶつかり、すれ違い、ようやく自分がどういう思いを抱いていたのかに気づいた今、やるべきことは何なのかを懸命に考える。

胸に手を当て、瞼を閉じて考え続けたなのは、少ししてクロノ達を見つめ返す。

その目には、強い意思の宿った瞳が輝いていた。

『わたしは…フェイトちゃんを助けたい。アルフさんの思いと…それから、わたしの意思。フェイトちゃんの悲しい顔は…わたしもなんだか悲しいの。だから助けたいの……悲しいことから』

思い返せば、なのはが見てきたフェイトの表情はどれも悲しいものばかりだった。

誰かを傷つけること、誰かに迷惑をかけること、そして自分の気持ちが悪く報われないこと。悲しい思い出ばかりがいまの彼女の中にあるのだと気づき、なのはは自身も胸が締め付けられる思いを抱く。

じつと見つめてくるクロノ達に、なのはは期待に満ちた満面の笑みを見せた。

『それに、友達になりたいって伝えた返事も…まだ聞いてないしね』

『……そうか』

まっすぐで温かな気持ちを見せたなのはに、クロノはふつと微笑む。

彼女はいつもそうだった。周りの大人が抱く諦めを否定し、自身が全力を振るうことで最善の結果を掴み取ろうとし、周りの人間の協力を得て叶えてみせる。

時に非情にならなければならぬ立場にいる彼にとって、少女の笑顔は眩しすぎたようだ。

『フェイト・テスタロッサについては、なのはに任せる。アルフ、それでいいか?』
『うん……なのは……だったね……。頼めた義理じゃないけど……だけどお願いだよ』

狼の顔を鎮痛に歪めながら、アルフはなのはに深々と頭を下げる。

散々敵意をぶつけてきた、散々酷い言葉をぶつけて、傷つけてきた。そんな自分に手を貸して欲しいなど、面の皮がどれだけ厚いのかと詰られても文句は言えない。

それでも、頼れるのは彼女しかいないのだと、恥を捨てて首を垂れた。

『あの子……あたしに心配かけないように笑顔を作ったり、あたしの愛情に微笑み返してくれることはあっても、心から笑つてるところなんてもうしばらく見てない。きつとフェイトは……あの女が自分を抱きしめてくれたその時こそ、心から笑えるんだって信じてる……』

叶うかどうかもわからない願望を抱え、それでも盲信し続ける少女のことを思い、アルフの目に涙がにじむ。その行く先がどこに繋がっているのかはわからずとも、決して幸福な未来ではないことだけは確かだった。

『あの女が何を考えてるのかはわからない……でも、このままじゃ誰も幸せにならない。だからあたしは……』

『……うん』

『頼むよ、なのは。あたしが迷ってたせいであの子……いまほんとにひとりぼっちなん

だよ……」

なのはは泣きじやくる使い魔に、ただただ優しく労わる穏やかな目を向ける。幼子に向けるような慈愛に満ちた眼差しで、アルフの慟哭に応える。

俯いたアルフはまだそれに気づかない。ひたすらに、自身の真なる想いを口にして、懇願し続けた。

『フェイトを……助けて……』

『大丈夫……まかせて！』

満面の笑みを浮かべ、なのははアルフに笑いかける。まるで太陽のように、暖かく降り注ぐような笑顔で、アルフの真摯な思いに応えることを約束する。

アルフはその笑顔に見惚れ、同時に安堵したように肩の力を抜いた。根拠は何もなくとも、この言葉は信じられると、本能が告げている気がした。

アインもまた安心したように笑みを浮かべ、ベッドの背もたれに体を預ける。アルフのすすり泣く声を聞きながら、フウツと小さく溜息をこぼした。

「……さて、どう動くか」

その声に、モニターで繋がっていた全員がギョツと目を剥いて振り向く。

明らかに自分も出撃しようという意志を感じさせる一言に、彼女を襲った惨劇を目の当たりにした全員が自身の耳とアインの正気を疑った。

『……まさかこの後に及んでまだ関わるつもりですか』

「もう傷は塞がった。暴れるのにさして問題は無い」

「させないって言っているでしょうが！ 頼みますからおとなしくしてなさい！」

隣に立つリンディからも凄まじい剣幕で怒鳴られ、女騎士はふてくされたように目をそらす。

病院着に似た服の下の方の全身を包み、痛々しさを見せていた包帯はいつの間にか外され、古傷だけを残した肌があらわになっている。だが、それでもなのは達は、アインがまた戦いに赴くこと自体に不安を抱いていた。

「せつかく事件が終わると言うのに……」

『あなたが出るまでもありませんから……！ 安静にしてくださいください』

クロノやエイミイまでもが、リンディに似た剣幕でアインを睨みつけ、釘をさす。もうこの一件には絶対にかかわらせないと、鋼の意思が感じられ、アインは渋々と言った様子で引き下がる。

ふと、モニター越しに心配そうに見つめてくるのはに気づき、アインはつい苦笑を浮かべる。

「……というわけだ。私は参加させてはもらえないらしい」

『アインさん……』

なのはの声は、今は沈んで聞こえる。これ以上恩人が傷つかないことに安堵しながら、今後の戦いにおいて、彼女がそばにいてくれないことが不安なのだろう。

そんななのはに、アインはふつと不敵な笑みを浮かべる。どこか小馬鹿にしたようなそれは、教え子の覚悟を試すような笑みに見え、眉尻を下げていたなのはの表情がハッと改められた。

「……鍵は君だ。存分に全力を振るいなさい」

『はい！』

師からの一風変わった応援を受け取り、なのははそれに力強い声で答える。

ともになりたいと願った少女のために立ち上がった少女の勇姿に、女騎士は満足げな表情のまま目を閉じた。

6. 必ず帰ろう

「おそーい！ 遅いよなのはー！」

屋敷の中に戻ったたのはを出迎えたのは、アリサからの盛大な怒りの声だった。久しぶりに遊べると思ったのに、いざうちに来た途端に席を外し、そのまま何十分も戻ってこなかったのだから、腹をたてるのも仕方がなかった。

せっかく出来た貴重な時間を使い切ってしまうつもりかと、アリサのふくれっ面はありありと語っていた。

「あはは……ごめんごめん」

「ごっちごっちー！」

苦笑しながらなのはが答えると、なだめようと思ったのかすすかかなのはの手を引く。

大型のテレビの前には、一目で最新とわかるゲーム機と、テレビのCMか何かで見たことがあるようなパッケージのゲームが用意されてある。

封もまだ開けられていないゲームのケースを持ち、アリサとすすかは待ちきれないと言った様子で笑顔を見せた。

「さー、ゲームやろゲーム！」

「ほら…これが新作のゲームなの！　なのはちゃんと遊ぶの待ってたんだよ」

「楽しみ！」

二人につられるように、なのはも期待に目を輝かせて駆け寄り、いそいそと腰を下ろす。

久しぶりの友達と一緒にの時間を、精一杯堪能してやろうと心に決めて。

◇ ◇ ♥ ♥ ♡ ♡

「はー…なかなか燃えたわ」

「やっぱりなのはちゃんがいた方が楽しいよ」

「……ありがとう」

楽しかった時間にも、門限というタイムリミットが迫る。もう少し友達と過ごしていても、これ以上は家族に心配をかけることになる。

名残惜しく思いながら、なのはは一緒に熱中していたゲーム機から手を離し、アリサとすずかに向き直った。

「明日は朝から体育かー、ちよつと憂鬱だわ」

「えー、でもいいじゃない。アリサちゃん、体育は苦手じゃないんだし」

「そうそう！　朝から体を動かすのは気持ちいいよ」

「すずかは別格すぎるのよ」

「あはは…」

ガーンとショックを受けた顔で固まるすずかに、なのははつい苦笑を浮かべる。

そういうえば、おとなしい子に見えるすずかは何故だか身体能力はずば抜けていて、体育の日にはそれが遺憾無く発揮されていた。アリサも運動は得意なのだが、一緒に授業を受けていると否応にもなく比較してしまうのだ。

ジト目を向けられたすずかは冷や汗を流し、目をそらしながら必死に別の話題を探した。

「あ、そうそう！ 明日といえbaumちの工業機器開発会社で新製品の見学会があつてね……」

「露骨に話題そらしたわね…でもいいわね」

「面白そう！」

矛先をしらすことに成功したことで、すずかは心底ホツとした表情になる。実際な全く誤魔化せていないが、これ以上いじめてもかわいそうだとアリサもなのも気を使わずかの話題に乗る。

だが、明日という単語が出た直後、すずかの表情に影がさす。アリサもそれを察し、悲痛げに俯いてしまった。

「…なのはちゃんは明日からまた学校はお休み…なんだよね？」

「……うん」

与えられた貴重な一日が終わってしまった。その事実が心に重くのしかかり、どうしようもないほどの寂しさが募る。また戻ってきてくれるとは信じているが、それがいつになるのか、そして本当に戻ってこれるのかという不安で、二人の親友は暗い表情になる。

なのはは親友にそんな表情をさせてしまったことを悔やみ、きつく拳を握りしめる。だがすぐに、二人を安堵させようと笑顔を浮かべた。

「……多分もうすぐ全部終わるから…！ そしたらもう大丈夫だから！」

アリサはなのはの笑顔を見て、呆気にと取られたように目を丸くする。

以前見せていた、同じように心配をかけさせまいと取り繕った笑顔が、今のなのはは感じられなかったのだ。

気を遣うわけではない、本気でアリサ達を信じて告げた、大丈夫の言葉だった。

「…なのは、何か、少し吹っ切れた？」

「え……？ あ…えと…どうだろう…」

「……心配してた…ってあたしが怒ってたのはさ、なにはがいつも隠し事してるからでも…いつも考え事してたからでもなくて、なのはが不安そうだったり…迷ったりして

たから」

俯きながら、アリサは自身の本音を口にする。ある時を境に様子が変わってしまった親友に、苛立ってしまった本当の理由について。

同じ場所にいるはずなのに、違う場所にいるようで。同じ世界を見ているようで、違う世界を見ているようで。知らない間に自分達との間に見えない壁が、境界ができてしまったような錯覚を覚え、それがどうしようもなく怖くなっただけなのだ。

「それで時々……そのままもうあたしたちの所へ帰ってこないんじゃないかな……って、思っちゃうような目をしてたから」

「……行かないよ、どこにも……!」

グツと息を飲んだのはは、凄まじいほどの申し訳なきを感じながらアリサと向き合う。

彼女が話してくれてようやく、親友が抱えていた不安と葛藤に気づく事ができた。ずっと自分のことばかりで悩み、他の事に気を向けられなくなっていたことを堪らなく恥ずかしく思い、胸がぎゅつと痛んでいた。

「友達だもん……どこにも行かないよ!」

「うん」

「……そっか」

真剣に、一切の誤魔化しを混じえない真剣なのはの答えに、アリサもすずかもようやく安堵のため息をつく。

理由はやはり教えてもらえそうにない。だが、ずっと自分の将来について悩んでいた親友が見せた、やる気に満ちた明るい表情に、アリサもすずかもそれを応援する気持ちが生まれていた。

「…頑張るのよ、なのは！　せつかく見つかったやりたい事、途中で投げ出したりしたら承知しないんだからね！　全部終わったら、また思いつきり遊ぼう！」

「またみんなプールに行ったり！」

「温泉もいいよね」

「うん…うん！」

涙を滲ませながら、なのはは背中を押してくれる親友二人の優しさに、胸の奥に灯る暖かさを感じる。

ふと脳裏に、忘れてはならない一人の少女の横顔が思い浮かぶ。寂しげな、これまで一度も心からの笑顔を見せたことがないという、儂げな姿をした少女のことを。

「…その時は、新しい友達も紹介したい……！」

「絶対よ、なのは！」

「うん！　楽しみにしてるね」

親友達と笑いながら、なのは改めて決意する。こうしてまた仲のいい友達と語り合い、日々を過ごしていく日常に戻ってこようと。

そしてその日々を守る為に、目の前に立ちふさがっている問題に立ち向かおうと、なのは堅く心に決めた。

しかしそこでふと、なのは思う。

その時になれば、あの子もやつと笑顔を見せてくれるのだろうか。

虚空を見上げたなのは胸中には、そんな期待と少しの不安が芽生えていた。

♠ ◆ ♡ ♠

「ただいまー」

門限前に帰れば、空はすでに紫がかり、陽の光も遠くへ沈んでしまっている。

喫茶『翠屋』も営業を終了し、店員から主婦へと戻った桃子が台所に立って夕食の準備を行う時刻になっていた。

「おかえりなのは、ご飯まで少し時間があるから、先にお風呂入っちゃおう?」

「それなら一緒に入ろうか?」

「うん!」

学校から帰った美由紀に誘われ、なのはウキウキと脱衣所に向かう。

途中、肩に乗っていたユーノがハッと体を硬ばらせるが、なのは気付かずにいる。

「お姉ちゃんが入るの久しぶりだね」
「そうだねー」

それぞれで制服を脱ぎながら、姉妹は肌を見せ合うのが温泉以来であることを思い出す。家での風呂も、なのはがもう少し幼い時以来だったと気づいた。

脱いだ制服を畳み、籠に置きながら美由紀はふと視線を下に向ける。なのはの肩から降りたユーノが背中を向けている姿に、美由紀は無邪気に尋ねた。

「ユーノも一緒に入るー?」

「きゅきゅきゅ…!!?」

「あら残念」

「……あはは」

また体を洗ってあげようと思ったのか、ブンブンと首を振って必死に拒むユーノに残念そうな声を上げる。普通に言葉が通じて見えることにはもはやさして驚くことはなく、不思議そうに下着を外し始める。

一方で、一人真実を知るなのは苦笑を浮かべ、ユーノから見えない様に衣服のボタんに手をかける。

これまでペット扱いしてきた彼が実は人間だったと知った時、姉は果たしてどういう反応を見せるだろうか。今更になって、自分がどれだけ恥ずかしい姿を見せてきたかを

思い出し、なのははかすかに赤面するのだった。

「…そっか、助けたい子がいるんだね」

「うん……」

生まれたままの姿になり、お互いの体を洗い終えて湯船に浸かると、姉は妹が抱えている悩みについて問いかける。

なのはは肝心の部分については言わず、内容を選びながら答える。幸い、大部分については話すことができ、家族に隠し事をする罪悪感もさほど抱かずに済んだ。

「いっぱい悩んだんだ。なのはがしようとしてる事はすごく一方的で、無神経で、かえってその子を傷つけてしまうかもしれないって……」

思い出されるのは、まだアルフが向こう側にいたときに口ににした言葉。親や兄弟、友人に恵まれ甘やかされて育った者に、自分たちの苦しみがわかるのか、と。

その時はただ、悲しみを覚えるだけだったが、フェイトとアルフの過去を知った今では、自分自身に憤りを覚える。相手の苦しみを知らないまま、よくもそんな無神経なことを言えたのかと。

「その子にしてあげられる事なんてなくて、何もしないのが一番いいのかもしれないって……構われるより、迷惑をかけるよりそれがずっといいのかもって……」

フェイトにとって、なのはの行動はどの様に感じられただろうか。母の願いのために全てを捧げる覚悟を決めていた少女に、納得できないからと邪魔をされた心境は、どれだけ神経を逆撫でただろう。

悲しみをたたえた表情を見せた少女を氣遣つても、彼女と同じ苦しみを知らないのはの言葉では、あまりに軽く感じられたことだろう。

それがたまらなく悔しくて、しかし同時に胸に火が灯るのを感じた。

「それでもなのはは、その子に手を伸ばしたい。自分が伸ばした手を取ってほしい。これはなのはのわがままかもしれないけど……その子の力になりたいんだ」

真剣な表情で語る妹を、美由紀もじっと見つめる。

なのはと少女の間に何があつたのかはわからないし、聞くつもりもない。第三者である自分では、聞いたとしてもその気持ちの全てを理解することはできず、力になつてもあげられない。

だが、それが辛いとは思わなかつた。虚空を見つめるなのはの目に、例えようのない強い力を感じたからだ。

「……なのは、変わったね」

「そ、そうかな」

「うんうん」

くすくすと笑い、美由紀は湯船の淵で頼杖をつく。

数十日の間に起こった妹の変化に戸惑いつつも、その変化は非常に好ましく、見ていて安心感を感じられた。

「なのは小さい頃から、そうやって悩んじゃうと動けなくなるところがったじやない？ 誰かに迷惑をかけるのが嫌いで、父さんが大怪我した時も、一人で寂しかったり辛かったのにもいつも笑顔で……まあ、いつ頃からかマシになった気がするけど」

自覚がなかったのか、キョトンとほうけた顔で見つめてくるなのはに苦笑し、美由紀は一家が最も大変だった時のことを思い出す。

父が倒れ、経営に苦戦する母を手伝おうと兄とともに奔走し、一番甘えたい盛りの妹を気にかけてやれなかった。気づいたときに手遅れにならなかったのは、あの女騎士の尽力があったからだろうか。

一家が窮地に陥った原因でありながら、一家を守った恩人。相反する二つの印象に悩むも、美由紀の中には感謝の思いが強く残っていた。

「…アリサちゃんとすずかちゃんは友達？」

「うん…すごく大事なお友達」

「その二人とも、大ゲンカから始まった仲でしょ？」

「…うん」

「きつと、その時なのはが迷わずに気持ちをまつすぐにぶつけたから……アリサちゃんともせずじゃちゃんとも友達になれたんだよ」

ざばつと体を起こし、なのはを自分の胸に抱き寄せる。相変わらず小さな身体だが、その胸に抱えている多くの思いの重さを感じ、腕に力がこもる。

直接力になってあげられなくても、せめて応援している気持ちが伝われば。そんな思いで、美由紀は妹を優しく抱きしめた。

「どんな形であれ、気持ちをぶつけ合うのは大事。その子にも真つ直ぐなのはの気持ちをぶつけてみたらいいんじゃないかな」

「うん……」

そんな姉の気持ちを受け止め、なのはは風呂の熱とは異なる暖かさに、心地良さそうに目を細めた。

木刀を振り下ろすと、キレのある風切り音が辺りに響く。振り下ろしてもブレない切っ先が、恭也の凄まじい実力と集中力を示し、それることのない眼差しが意志の強さを表す。

それが途切れたのは、自身に近づく愛しい妹の気配を察したためだった。

「お兄ちゃん」

「どうした、なのは」

「今つて道場は空いてる…?」

「誰も使つてないぞ、大丈夫だ」

「ありがとう、お兄ちゃん!」

笑顔で手を振るなのはに答え、恭也はじつとその背中を見つめる。

運動が苦手なのはは、昼間に道場を利用することはない。しかし血筋によるものか、集中したい時や深く考える時は、誰もいなくなつた頃合いに一人、道場で座禅を組む習慣があつた。

それは本気で何かに取り組み、迷いと向き合つた時の行動。恭也はそれを、優しく見守り続けていた。

「……頑張れ、なのは」

ふと、その脳裏に一人の女の顔が浮かび、恭也の眉間にしわがよる。

かつて家族がバラバラになりかけた、間接的な要因を作つた彼女との誓い。大切な妹を託した、思うところはあれど自分達同様に思い何かを背負つた女騎士の虚像に、恭也は鋭い目を向けた。

「あんたを斬らずにすみそうだよ…アインさん」

しんと静まり返った道場の中心で、なのははじつと座禅を組んだまま目を閉じる。

誰に教わったわけでもない、だれかの真似をしたのが始まりなのかも覚えていないが、思い悩むことがあればなのははこの習慣を行なっていた。自分を思う誰かの言葉と自分の本心、それら両方を馴染ませるように、じつと耐え続けていた。

やがてなのはは、ゆっくりと目を開けて大きく息を吐く。

何かが掴めたわけではない、しかし以前よりも少しだけ、自分の前にあつた靄が晴れたようで、なのはの胸中から重りが減った気がした。

その時、じつと座り込んでいたなのはの背に聞き慣れた声がかけられた。

「いい顔になったな……迷いは晴れたか？」

「……お父さん？」

はつと目を見開き振り向くと、入り口に立った士郎が微笑みを浮かべ、座禅を組む娘を見守っていた。

一瞬ぼかんと惚けていたなのはは、徐々に士郎が口にした言葉の意味を理解し始め、ワタワタと慌て始めた。

「あ、あの……！ お父さん、なのはが迷ってた事知ってたの……？」

「そりやそうだ……お父さんはお父さんだからな！ あ、もちろん恭也や美由紀、桃子だってなのはの事はお見通しだと思っぞ」

思いもよらぬ事實に、なのはは一瞬で赤面し俯く。頑張つて悩み事を隠し続けたつもりになつていたが、全く意味がなかったらしいと気づき、恥ずかしさでいっぱいになつていた。

ただ、魔法に関わることについては知られていないのが、唯一幸いなことだろうか。「家族つていうのはそういうもんだ」

それぐらいできないでどうするということのように、士郎は不敵な笑みをなのはに見せる。

なのはは頬を熱くしながら、そこまでわかつていて何も聞かないでくれている父や母達に、深い感謝の気持ちを抱く。

なのはが自分で迷いを晴らすまで、信じて待つてくれているのだから。

「明日は朝早くからまた出かけるんだろ？」

「うん……」心配をおかけします……」

「……なのはは強い子だからな。父さんはそれほど心配してないよ」

くしゃやくしゃと娘の髪を優しく撫で、士郎はじつとなのはの目を見つめる。

辛い思いをさせてきて、なかなか難儀な性格に育ってしまった娘が、知らない間に大きく成長していることを喜びつつも、やはり寂しさを覚えて。

それでも士郎は、優しい笑みでなのはに告げた。

「頑張つて……い……しっかりな！」

「うん……！」

その様子を、キッチンに立った桃子が微笑ましそうに眺める。

そして、足元に立つユーノの前でしゃがみ、ニッコリと笑顔で語りかけた。

「なのはの事、よろしくね」

「……きゅっ！」

気づいているのか、いないのか。

そんな疑問も抱いたが、ユーノは自分の精一杯の誠意を伝えようと、ピシッと背筋を伸ばしたまま力強く頷いた。

こうしてなのはは、父母兄妹に背中を押されながら翌日を……フェイトとの再会の日を迎えた。

7. 最後の決闘

早朝、日課となつてゐる魔力操作のトレーニングを終え、少しの休憩を挟む。

特に気合が入つてゐる今、なのはは自身の全身に熱を行き渡らせるように念入りに取り組み、最高のコンディションを手に入れようとする。

過剰な分の熱量を冷ましてゐると、がさつと草木をかき分ける音とともに、橙色の毛並みが待ちかねたように姿を現した。

「…おはよう」

「あ、アルフさん！ おはようございますー！」

「おはよう」

まだ少しきこちなく、それでも初めてまともな挨拶を送つてくれたアルフに、なのはとユーノもすぐに応じる。

するとタイミングを見計らつたように、なのはの前に空間モニターが展開され、アースラの面々が顔を出した。

『はい、おはようなのはちゃん！』

『おはよう、なのは』

「エイミイさん、クロノ君、おはようございます」

『どうだい？ 今日の調子は』

「うん、バッチリ！ 魔法の調子もいい感じだよ！」

朝から元気がいいエイミイに感化され、なのほも笑顔を向ける。

言葉さえ口にしらないものの、サクソやムーヴ、三つ首狼ケルベロスのメンバーもモニターの向こうから顔を覗かせ、なのほを見つめてくる。

『うん…データ上でも異常なし！ 文句なしだね。しかし驚きだよね、魔法の基礎知識ほとんどゼロで今までこんなに魔法を使いこなしてたなんて』

「…その、きつとレイジングハートが優秀だったのと、アインさんとユーノ君の教え方が良かったからですよ」

「Thanks.」

エイミイの賞賛の言葉を気恥ずかしく思い、なのほは頬を染めて愛機を抱える。いまだに少女は、自身にある優れた能力の才を実感できず、単なるお世辞のようにしか受け止められずにいた。

そんななのほを見つめていたクロノが、ふいに目を閉じ口を開いた。どこか、呆れているような態度だ。

『…自立思考型端末は心を持つと言われていたが、人間の様に意識や言葉があるわけ

はない。だけど、誰よりも自分を上手に扱い、自らの性能をどこまでも引き出してくれる、深く強く自分を信じてくれている…そんな主人への熱い想いがある』

語り始めた青年に、なのははぼかんと呆けながら耳を傾ける。

アースラ内の面々も、急に饒舌に話し始めた同僚の変化を不思議に思い、じつと訝しげな視線を向けた。

『鋼の体で主人を守り、襲い来る痛みを退け、その手に勝利を。主人の魔力を自らの機体に通し、最適な形でそれを力と変える。使う人間の強い愛機への信頼の心に応えたいという愛機の願いが、より愛機を強くするんだ』

「Yes。」

『確かにレイジンググハートは優秀なデバイスだけど、なのはさんの素質も相当なものよ』
「あ、リンディさん！」

クロノの言葉を裏付けするように、顔を出したリンディが笑顔でなのはに告げる。

クロノはすぐに上司に位置を代わり、リンディの脇に退いて口を閉ざす。そつぽを向いたその表情は、青臭いことを言ったとき恥ずかしさを覚えているように見えた。

そんな彼を、リンディの後に続いたアインが見つめ、ニヤリと揶揄うような笑みを浮かべた。

『いつになく熱いじゃないか。お前がデバイスにそこまで思い入れがあつたとは知らな

かった」

「アインさん！ よかった…元気そうで」

病院着姿ではない、局員の制服に袖を通したアインの登場に、なのははほっと安堵の息をつく。痛々しく巻かれていた包帯はすでに取り除かれて、以前の頼もしい外見に戻っていて安心する。

涙まで目元に滲ませて喜びをあらわにする少女に、女騎士は気まづげに頬をかき目をそらす。

リンディは友人の情けない態度に深いため息をつき、ややあつてから表情を改め、なのはに向き直った。

『アバイスが優秀であればあるほど、使い手が優れていなければその性能を引き出すことはできないの……そしてなのはさんには、魔導師としての溢れる才能と未来があるわ』

リンディの誇張でも世辞でもない賛辞に、やはりなのはは照れて頭をかく。

そんな愛らしい少女を見つめながら、リンディは兼ねてから考えていた提案を持ち出すことにする。友人に一度釘を刺されはしたものの、やはり諦めきれない選択肢を示しておきたかったのだ。

『あのね、考えている事があるのだけど、聞いていただけるかしらっ？』

「? なんでしょう?」

『今の学校を卒業してからでいいし、基本業務の希望も聞くから時空管理局ちゆうくうに就職しな
ら?』

一瞬、リンデイが何を言ったのか理解できず、なのははまたぼかんと目を見開いて固
まる。

司会のうちではクロノがやれやれと肩をすくめ、エイミイが期待で目をキラキラと輝
かせ、リンデイが待ち遠しそうにニコニコと笑っている。サクソ達は新たな後輩ができ
ることに喜色を浮かべ、三つ首狼ケルベロスの面々に至っては、新たなライバルの登場と感じたよ
うに不敵な笑みを浮かべている。

唯一、アインのみが眉間にしわを寄せた険しい顔をしているのを尻目に、なのはは驚
愕の声をあげた。

「ええええ!?」

『お給料は良いし、福利厚生バツチりだし、きつとなのはさんも気にいるんじゃないかし
ら?』

ワタワタと慌てるのはを微笑ましく見つめ、リンデイは将来有望な少女を本気で
勧誘し始める。

だがそれを、隣に立ったアインがため息をつきながら、じとりと鋭い半目で睨んで咎

めた。

『…おい、ウソを教えるな。給料云々はともかく万年人手不足のブラック職場だろうが』
『ああん、もう！ せつかく誘つてるときに水を出さないでよ！』

「あ、あのあの…！ 流石に小卒で就職というのはこちらの世界のこの国的にはちよつとなんとというか…！」

『……なのは、お前なんか既に前向きに考えてないか？』

過去のいざこざからかなり気にかけている少女を、激務で使い潰させるわけにはいかないと、アインはリンデイに苦言をこぼすが、滅多にない出会いを惜しむリンデイはすぐさま抗議する。

当のなのはが提案に惹かれ始めていることに呆れた顔になっていると、エイミイがリンデイに近づいて耳打ちを始めた。

『艦長…調べたんですが、なのはちゃんの国では15歳までは義務教育なんだそうですよ』

『あら大変！ うーん…あと6年…』

「あ…あはははは』

管理局の最低就業年齢が非常に低く設けられていることに驚きつつ、なのははブツブツと妙な表情で考え込むリンデイに苦笑する。

普通は18歳から、最低でも16歳から就業が認められる世界で生きてきたものは、初めて受ける熱烈なスカウトに戸惑うばかり。それでもいつかのユーノとアインの評価や、リンディ達からの賞賛の声で、そういう自分の未来の可能性を想像し始めている。

クロノは母親にして上司である女性の本気度合いに呆れながら、自身もそれなりに望ましそうな雰囲気を見せていた。

『すまないな、ブラツクかどうかはともかく、人手不足なのは確かなんだ。特に君のようなAAAクラスの魔道士はかなりレアだから。優秀な使い魔持ちだったりするとおさらだ』

「え？ 私には使い魔はいないよ？」

きよとんと目を丸くし、不思議そうに首をかしげるのは。

すると、モニターの向こう側にいる全員の視線が、なのはの肩に乗っているユーノに集中した。

「……ボ、ボクは使い魔じゃない！ 人間の魔導師だ！」

バタバタと両手を振り、遺憾の意を示すユーノ。しかしわずかにしか見せていない人間の姿の印象はあまりに弱く、言われたなのも思わず納得の声をあげてしまった。

「そ、そうだったの？ あんたてつきりあたしと同じ使い魔だと…ネズミ素体の」

『…違うんですか？』

『何の違和感もなかったわよ』

『つーか使い魔じゃねえって言われた方が違和感あるわ』

「ボクは人間だしネズミじゃなくてフェレットっ！」

なのはのそばで同じく目を丸くするアルフに、悪ノリするようにニヤリと笑みを浮かべる三つ首狼ケルベロスの三人。

声を荒げるユーノだが、小動物の姿のままだとやはり説得力に欠ける。サクソやムーヴも同情の視線を向けつつ、特に反論の言葉をはさうことはなかった。

一人の少年を犠牲に、艦内の空気が和らいだ頃合いを見て、リンディはなのはの目を今一度見つめた。

『優秀な魔導師はいつでも足りないわ。そのせいで解決できるはずの事件が解決できなかつたり、起こらなくて済む悲劇が起こったりする…考えておいていただけるかしら？』

「……はい」

誘ったのは利用したいからではなく、本気でなのはの力を必要としているから。本当に困っている人達がいて、それに手を届かせるために必要としているのだと、リンディ

は告げる。

賛成的ではないアインも、今は口を挟まない。リンデイに腹黒い思惑があらうとなかろうと、掲げている願いは間違いなく真実を告げていると、信じていたからだ。

『…さて、話も落ち着いてきたところで…今日はよろしく頼む』

「はい！」

リンデイ達の声援に応え、なのはは両拳を掲げて頷く。

将来のことは、まだはつきりとは定まっていない。才能があつて、それを生かしたいという想いはあつても、すぐに判断できるほどの覚悟はまだない。

アインのように、傷つきながら戦い続ける覚悟はまだ持ち合わせてはおらず、その道を進むことへの躊躇いもある。

だが、その選択に至るために避けられない分岐路があるのだと、なのはは気合を入れ直した。

「…頑張つて、なのはは！」

「頼むよ、なのはは…」

「……うん！」

なのははキツと表情を引き締め、まずはもう一度会つて、話し合わなければならぬ少女の元へと向かう。

「……ならいいよね……出てきて、フェイトちゃん」

その足で向かったのは、結果が張られ、人気のなくなつた海鳴市内の植物園の中。

温室の内部で鬱蒼と茂る木々の中、なのははここ数日、顔を思い浮かべることがなかつた少女を呼び、同時に逸る気持ちを落ち着けようと努める。

「……こうすれば、きつと来てくれると思つたよ」

そして、一陣の風が吹気抜けたかと思うと、なのはの視界に待ち望んでいた金色が映つた。

漆黒の大鎌をさげ、以前にも増して寂しげな表情をたたえたフェイトは、さらに虚ろになつた眼差しをなのに向け、唇を噛み締めた。

「フェイト！ もうやめようよ！ これ以上、あの女の言いなりになる必要なんてないよ！ ……このまんまじゃ不幸になるばかりじゃないか、だからフェイト……！」

アルフが悲痛な声をあげ、今からでも遅くはないとフェイトに呼びかける。戦い続ける必要などない、いつか自分が言つたように逃げ出してもいいはずだと、主人に必死に語りかける。

だがフェイトは、首を振つてその道を選ぶことを拒む。ただ一つ、母の願いを叶えることだけを生き甲斐にしてきた少女に、逃げるという選択肢は最初からないのだと、そ

の表情は語っていた。

「だけどそれでも……私は、あの人の娘だから……」

「……ただ、捨てればいいってわけじゃないよね」

そんなフェイトに、なのは目を伏せて頷く。

それぞれが抱く譲れない想い、噛み合うことのないそれらがぶつかり合うのは必然のこと、どちらかが折れなければ前に進むことは叶わない。

心に抱えた柵から目を背けることは、決してできないのだと二人ともわかっていた。

「逃げればいいわけじゃ……もつとない。フェイトちゃんは立ち止まれないし……私はフェイトちゃんを止めたい」

フェイトはなのはを見つめ、バルドイツシユの刃を突きつける。なのはも同じくレイジングハートを構え、砲口を向ける。

幾戦もの激突を支えてきた鋼鉄の魔法使いの杖が、使い手の意志の硬さを表すように光沢を放つ。作られたもの達でさえ、負けられぬ思いを示しているようだ。

「……ジュエルシード、私とフェイトちゃんが出会ったきっかけ」

【Put out.】

「……」

【Put out.】

示し合わせたように、デバイス達がそれぞれで手に入れた魔法の宝石を…少女達の運命を変え、或いは狂わせ、そしてその運命を引き合わせた災厄の種を吐き出し、空中に浮遊させる。

巨大なる邪神に奪われた分を除く全てをその場に浮かばせ、輪ができる中で二人の少女は対峙し、強う眼差しで見つめ合う。

「たくさん思ってることはあるけど、まずはこの問題を片付けないと、きつと私もフェイトちゃんも先には進めない……だから賭けよう。お互いが持つてる全部のジュエルシードを」

ユーノとアルフ、リンデイヤクロノ達管理局員、そしてアインに見守られながら、二人の少女は構え合う。

アースラでは今、エイミイらの手によって着々と作戦が進められているはず。なのはの前にいる少女を救い出すために、多くの人間が尽力している。

勝ったとしても負けたとしても、少女の運命は大きく変動するだろう。

「それからだよ……全部、それから。私たちの全てはまだ始まってもない！」
だがなのはは、それでは満足しない。

自らの敗北を乗り越える、自分が救いたいと思つた相手を救う、ようやく気づいた自分の気持ちを全力で伝える。

そのために、目の前の少女に勝たなければならない。いや、勝ちたいと強く願う。

「…ほんとの自分をはじめめるために…：…始めよう」

カツと目を見開き、なのはは告げる。

望む未来を、自分自身の手で掴み取るために。

「最初で最後の本気の勝負!!？」

第X章 母は愛が故に道を誤る

1. あの日に戻りたい

晴天の下を、白と黒の二人の少女が飛び回る。流星のような速さで、互いから決して目を離さないまま、追い抜き追い越しを繰り返し、自らの魔弾を打ち出す時期を伺い天を突き進む。

その光景を、クロノ達はモニター越しに緊張交じりに見守り、いつ訪れるかもわからない決着の時を待ち続けた。

「戦闘開始……かな」

「ああ」

「しかしちよつと珍しいね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて」

機材を操作する手を止めないまま、エイミーが傍に立つクロノにそう問いかける。自身の正義感によるものか、事件解決に合理性を求める彼が、少女達の意地を汲んだ作戦を認めることは意外だった。

問われたクロノはというと、やや照れ臭そうに目をそらしつつ、腕を組んでモニターの方に注目を続けた。

「あの二人の勝負自体は、どちらに転んでも関係ないしね」

「なのちゃんが時間を稼いでくれてるうちに、フェイトちゃんの期間先追跡の準備……と」

クロノの態度に苦笑しながら、エイミーは自身にのしかかる責任の重さを再確認し、グツと表情筋に力を入れる。

クロノだけではない、リンディや他のクルー達はもちろん、普段は会うことのない陸上部隊にも注目されている今、何より世界の存亡がかかっている以上、決して失敗できない任務だった。

「あんたが重要なんだから、逃さないでよ」

「了く解！ わかってるっての！」

ナディアとジンガーに促され、エイミーはヤケクソ気味に答えて鼻を鳴らす。

最初から徹頭徹尾変わらない、生意気で不遜な彼らの態度を咎める気はどうにないが、そこまで言うなら自分でやってみると言いたいのが本音だった。

どうにか苛立ちを抑え込み、自分のやるべきことに集中するエイミーを見下ろしながら、ジンガーはクロノに横目を向けた。

「…伝えなくてよかったのか。あの女の過去について」

「なのはが勝ってくれるに越したことはないんだ…今は、悩ませたくない」

そう答えて、クロノはモニターに映し出されるフェイトとなのはを見つめ、小さく唸る。

フェイト・テスタロッサ何を背負っているのか、知ってしまったえばきつと、あの優しい少女はひどく心を痛めるだろう。恐らくは、勝負に影響を及ぼすほどに。

きつとそれは本人も望まぬことだと信じ、クロノは彼女に、自分でさえ吐き気を催した真実を伝えたい選択を取ることを決めていた。

【Photon lancer.】

「ファイアー！」

フェイトの周囲に現れたいくつもの金色の光弾が、彼女の前を飛行するなのはに向けて放たれる。

【Round shield.】

なのはは寸前で障壁を張り、光弾の直撃を防ぐと、足首に展開した桜色の光の翼を羽ばたかせ、フェイトの背後に回り込む。速度で劣る分を補うために練習した、兄や姉が使っていた踏み込みを模した移動だ。

しかしフェイトはすぐさまその場から加速し、なのはから距離を取る。その背中に向けて、なのはは自身の光弾を精製し、発射した。

【Divine shooter.】

「シュートっ！」

緻密な操作により、放たれた魔弾は正確にフェイトを狙い、一気に距離を詰めていく。そのままいけば直撃するであろうそれらが、瞬く間にフェイトの目前にまで迫る。

しかしフェイトは、急速な方向転換を行い光弾を躲し、障害物に激突させて自爆させ、あるいはそのまま通り過ぎさせる。

大鎌を構え、さらなる光弾を準備した彼女の脳裏には、かつての母との思い出が蘇っていた。

——ね…お花、とても綺麗ね。

——…。

母と戯れた、綺麗な花畑。いつのどこかもよく覚えていないくらい昔に訪れた、やすらぎの記憶の地。

その記憶の中でプレシアは、自分を今とは異なる名前で呼んでいた。どうして『フェイト』と呼んでくれないのかと疑問を浮かべながら、記憶に残る母の笑顔が、フェイトに戦う活力を与え続けていた。

【Thunder Barrett.】

【Flash move.】

無数の光弾を飛び交わせ、背後を取り合い、資格を狙い、音速の衝撃波によりビルのガラスを粉々に砕きながら、二人の少女はせめぎ合う。

息を荒くし、汗を滝のように流しながら、なのはは自身の全力を戦いに注ぎ込む。その最中、どこか焦燥を感じさせる響きを持つてレイジングハートが電子音声を放った。

〔She is more advanced than you.
You won't be her easily.〕

悔しいが、積み重ねてきた技術では向こうに分があり、まだ互角の戦いとまではいかない。それを認めざるを得ない状況が、愛機にとつて歯がゆくて仕方がなかった。

しかしそれを、なのはは首を横に降つて否定する。その様はまるで、レイジングハートの中にある不安を、取っ払おうとするようだ。

「……知恵と戦術はフル回転中……切り札だつて用意してきた。だからあとは負けないつて気持ちで向かつてください……でしょ？」

〔All right my master. — We have to help her. Don't lose heart. 《では、不屈の勇気で……一緒に助けましょう、彼女を。》〕

さらなる意思の炎を胸に宿し、なのははさらに加速する。以前までは追いかけるだけで精一杯だった彼女に、今度こそ追いつこうとするように。

一方で、フェイトは自分に追いつかなくなってくるのは、戦慄の眼差しを向けていた。何度置き去りにしようとしても、気を抜けばすぐ近くにまで迫られていたからだ。

（初めて会ったときは、魔力が強いだけの素人だったのに……もう違う。速くて、強い……迷ってたらやられる……!）

なのはが現在も感じている実力の差、しかしそれはすでにフェイトにとってあつてないようなもの。

最初の出会いからまだ数日、その短期間で見下ろすほどの実力差を埋めてきた彼女の存在は、思わず震えが走るほどの脅威だった。

（……私がここで負けたら、母さんを助けてあげられない……）

しかしそれでも、フェイトは自身の負けを想像するわけにいかなかった。

母の想い、自分の想い、友の想い、そして今はもうこの世のどこにもいない師の想いを背負っているが故に、臆するわけにはいかなかった。

ここでもし退いてしまえば、心が折れてしまえば、戻ってくることができなくなる。

“あの頃”に戻れなくなる。

蘇る記憶の中で、いつだったか母がいつものように笑ってくれなくなったときのこと
が、勝手に再生されていた。

——ママ、どうしたの？

事故による昏睡から目覚め、迎えてくれた母に触れようとした際、なぜか母は目を見開き、呆然とした様子で自分の頬に触れるフェイトの手を凝視していた。

それを訝しげに見つめていると、プレシアは慌てて取り繕うように笑い、フェイトの頬を撫で返してくれた。

「……なんでもないわ。

ほんの些細な、プレシアに起きた変化。

その理由に思い至らないまま月日は流れ、その時にはもう、母は以前のように笑ってはくれず、別人のように怒鳴り、鞭を振るうようになっていた。

「……次で決着をつける」

意気込みを口にし、フェイトは自身の最大級の攻撃のために、目前の海上で浮くのはに向けて構えを取る。

その際に思い浮かべたのは、師であるリニスに授けられた技。フェイトの抱える弱点を補うための、必殺の一撃についての授業のことだった。

「……フェイトの戦闘資質は、連射性に優れた固く鋭い射撃攻撃と、身軽な機動性を活かしての高速戦……」

徐々にバランスをとれるようにはなってきましたが、高速機動に頼りすぎて防御が弱いのが難点です。

それがあなた達の欠点であり、攻撃においても見落としやすいところです。

困った顔をしながら、リニスはまだ幼いフェイトとアルフに告げた。

二人の元を去る前、プレシアとの契約を終了する前の最後の授業。自分の教えられる全ての技術を受けた後の、彼女達が自分で道を切り開く方法を得るための時間、その記憶。

——あなた達は絶対的な防御力の持ち主との戦闘経験が少ないので、対処法を学びづらいつてことです。

二人とも細かい攻撃を重ねたり、防御を抜いたり崩したりしての一撃がほとんどですからね。

固い相手が万全の態勢で防御したら、おそらくは簡単に防げます。

自分ではそれを教えられないことを悔やみながら、それでもどうにか食らいついていける様に考え出した策。

それが必要とならないことを願いつつも、それが彼女たちの未来をつかめる様に想うという矛盾を抱きながら、考え出した最大限の切り札。

——そう言った相手に勝つには、砲撃は防御の隙をつくか、防御の上から魔力を削るのが基本です。

あなたの絶対防御対策は、単純な射撃魔法を一つの目標めがけて撃ち続ける。

最低三十発の発射体からフォトンランサーの一点集中連射…これを防ぎきれぬ術者なんてまずいけません。

それを教え、展開のための基礎を授けてリニスは去った。

それからフェイトは、血の滲むような努力を続けてリニスの教えてくれた切り札を使い熟す訓練を続けた。

母がまた、昔の様に笑ってくれるように。自分もまた、かつての幸せに戻れるように。

「…いくよ、バルディツシュ」

ガシャン、と相棒を構え、フェイトが呟く。

自身の魔力を限界まで引き出し、大気中にとどまらせながら、フェイトはすつと目を閉じ、声を紡ぎ出した。

「アルカス・クルタス・エイギアス…疾風なりし雷迅よ、いま導きのもと撃ちかかれ…バルエル・ザルエル・ブラウゼル…」

歌のように響く呪文が組み上げられていくと、なのはの周囲にいくつもの金色の陣が展開されていく。

自身を取り囲む形で広がっていく陣に目を見開き、冷や汗を流すなのはをよそに、フェイトは黙々と自身の切り札を完成させていく。

【Phalanx shift.】

完成したのは、三重を超える数の魔法陣で作られた砲撃の包囲陣。

全てがなのはに狙いを定め、バチバチと電流を迸らせて発射の時を待つ、相手を確実に撃ち落とすことを目的とした術式。

我に返つたなのはが回避を選択した時にはもう遅く、対象を陣の中に縛り付ける雷の枷が、いつの間にか彼女の四肢に絡みついていた。

「設置型のバインド……?」

「まずい、フエイトのやつ本気で次で決める気だ!!?」

膨れ上がる魔法の気配に、アルフもユーノも慌てふためく。

身動きが取れない状態で、しかも数えきれない数の光球に込められていく魔力の量と濃度は、どんなものか知らなくても危険であることは伝わる。

アルフにとつては、師であるリニスから授けられた切り札であることを知っている分、余計に焦りを抱いていた。

「なのは……いま援護を」

『手を出すな』

思わず飛び出しかけたその時、通信からおぞましいほどに殺気のこもった声が響く。

途端に凍りついたように動きを止め、目を見開くユーノとアルフ。ぞくつと背中に氷塊を入れられたような寒気を抱いた二人は、無言のまま通信の向こう側に耳をすませ

た。

『邪魔をしたら殺す』

「つ……………!?」

アインの姿はこの場がない。しかし今の感覚は、まるで彼女に首筋に刃を突きつけられていたような錯覚を覚えるほどの冷たさで、一瞬意識が飛んだ気さえしていた。

「あ…アンタ！ あの子が、弟子がピンチなのに助けない気かい!?」 フェイトのあれは本気でまずいんだよ！」

『……………で手を出して、果たしてあの子達は救われるのか』

「なっ……………」

このままでは危険だと吠えるアルフに、アインはどこか呆れたような態度でため息をつく。通信は声だけなのに、半目で軽く睨みつける表情が見えるようだった。

二人が黙り込んだのを確かめると、アインは放っていた殺気を収め、鼻で笑うような音をこぼした。

『あの子には私が教えられる全てを託した……………お前も持てる全てを持ってあの子を育てた。我々に許されたのはそれだけだ…あとはあの子自身の問題だ』

一度真剣勝負として受けた戦いを、勝手なお節介で汚すことを怒り、アインは二人に説く。

正々堂々を守る騎士道を示す彼女に、理解はできるも納得できないと言った表情になるユーノとアルフに、アインは厳しい口調のまま続けて言った。

『お前達があの子の友でありたいならば!!? ……そこで信じて待つていろ』

ぐつ、と唇を噛み、それ以上何も言えず立ち尽くしてしまふユーノ達。

金色の閃光がより強まり、雷電の弾ける音が一層危険な響きを持ち始める中、囚われ身動きの取れない状態に陥っているのはは、フツと嬉しそうな笑みを浮かべた。

(……ありがとう、アインさん…!!?)

アインが止めてくれなければ、自分が力の限り叫んでいた。

たとえ自分のためだったとしても、真剣勝負に手を出して欲しくはない。どれだけ窮地でも、自分が勝つことを信じていてほしい。

そんな思いを汲んでくれたことが、なのはの心の炎にさらなる糧をくべた。

『でも、フェイトのそれはホントにまずいんだよ…!!?』

「へー……きつー!」

青い顔で念話越しに叫ぶアルフに、なのはは不敵な笑みを浮かべて、力強く叫び返す。バルディツシュを掲げ、ライコウをあたりに撒き散らしていくフェイトを見据えたまま、なのははまばゆい閃光と相対した。

「打ち………碎けエエツツ!!?」

フエイトの叫びとともに、なのはの周囲に展開された陣から無数の雷弾が放たれる。一発ずつなどではない、全方位から数えきれない数の弾丸が降り注ぎ、炸裂して噴煙を撒き散らさせる。

「スパーク…：エンドッツ！」

最後に力強い咆哮が響き渡った直後、特大の閃光がなのはがいた場所に発生し、爆音に近い雷轟を響かせる。

迸る雷光は、容赦無く少女達と世界を真っ白に染め尽くした。

2. あの日を取り戻す

「なのは……っっ！」

「フエイト……ッ!!？」

爆音がどこまでも轟く空に、ユーノとアルフが悲痛な声と目を向ける。

数十もの光球から放たれた魔弾は余すことなく少女に炸裂し、白煙を辺りに漂わせ
た。フエイトの性格から、なのはが死ぬことはないとわかっていても、心配せずにはい
られない光景だった。

「はあ……はあ……」

しばらくすると光球は消え、肩を上下させて荒い息をつくフエイトの姿だけが残る。

自身の魔力をありつたばかり集め、全集中力を注ぎ込んで放った切り札。それがもた
らした結果を目の当たりにし、フエイトは苦しげに表情を歪める。

だが、その目が次の瞬間見開かれ、信じられないといった表情が浮かんだ。

「……打ち終わると……バインドってのも解けちゃうんだね」

白煙の中から顔を出した、バリアジャケットを焦げさせただけで目立った外傷のない
なのはが、笑みを浮かべながら告げたのだ。

フェイトはその光景に、勝機をも疑うように目を見開き、呆然と空中に立ち尽くす。自身の全身全霊の一撃が通じなかったことに、愕然となるばかりだった。

『……！ 耐えたか……！』

【Can you move, Master?】

「いけるよ、レイジングハート!!? 今度はこっちの……番だよ!」

通信越しに、アインから安堵の声が上がると、なのはは不敵に笑ったままレイジングハートを構える。

この場を見てくれているであろうアインに、そしてユーノに見せつけるように、大仰に愛機を振りかざし、砲門を金色の少女に突きつけた。

「うう……あああ……ッ!」

勝負の初めと変わらない、強い意志を宿した眼差しに射抜かれ、フェイトはもう平常心を保てない。

自身が持つ最大威力の切り札が効かなかった以上、もはや自分に対抗する手段は残されていらない。降参するという選択は、自分の感情で硬直した彼女の脳裏には浮かばなかった。

そんな彼女の四肢に、突如桜色の光の輪が枷となってまとわりついた。

「……な……ッ! バインド……!?? いつ!??」

『あの一瞬で覚えたのか……!?』

数秒前とは真逆の、囚われの身となった自身を見下ろし、フェイトは狼狽し必死にもがく。

想像できるのは、先程の意趣返し。自分が受けた攻撃とほぼ同じかそれ以上の攻撃を放たれれば、装甲の薄い自分では耐え切れることは確実に不可能だ。

そんな抵抗も虚しく、フェイトの目の前で、レイジングハートの砲門に桜色の光が収束していった。

【Cannon mode.】

「ダイバイン……バスター……」

気合いの咆哮とともに、彼女の有する砲撃魔法がまっすぐにフェイトに向かっていく。

すかさずフェイトは障壁を展開し、受け止めるも、相変わらずの凄まじい威力に障壁も肉体も悲鳴をあげ、フェイトの表情が苦痛に歪む。

「くっ……あ……」

軋みをあげる障壁を目にし、魔力のほとんどを使い切って意識が飛びそうになるのを、フェイトは必死にこらえ続ける。これを耐えきれば、すぐに反撃の機会を得られる。そう信じ、激流のごとく襲いかかる砲撃を防ぎ続ける。

放たれた熱量はやがてフェイトを飲み込み、白煙をあたりに撒き散らして視界のほとんども埋め尽くしていった。

「フェイト……」

閃光の中に消えたフェイトを目の当たりにし、アルフが悲痛な声をあげる。

現状を言えば、フェイトが負けて保護されたほうが彼女のためかもしれない。しかし主の願いと、自分の主が勝ってほしいという思いが、アルフに強い悲しみを抱かせた。

やがて白煙が晴れ、空中にとどまるフェイトの姿があらわになる。

肩を上下させ、滝のように汗を流す痛々しい姿だが、バリアジャケットのマントを喪失しただけで目立った傷はない。

競り勝った、そう思い顔を上げたフェイトとアルフだったが、目の前にあった光景に、またしても我が目を疑った。

「…あれは…?」

そこには、星空があった。

真昼の明るい青空であるにもかかわらず、燦々と輝く星が無数に散らばり、フェイト達を見下ろしている異様な光景。その星々はやがて、流星となって一点に向かって集まっていく。

その中心に、彼女はいた。愛機を構えたまま、砲門をフェイトに向けて、真剣な表情

で佇んでいるなのはの姿があった。

「……集束…砲撃……ッ!!?」

誰かが呆然とした様子でつぶやき、全員が目を見開いたまま立ち尽くす。

霧散した自身の魔力を回収し、さらなる威力を持った砲撃として撃ち出す集束砲撃。なのはのような幼い魔導師どころか、ベテランの魔導師であつても困難なそれが、おそるべき勢いで完成していく。

歴戦の戦士であるアインでさえも、自分の目で見ても信じられない光景がそこにはあつた。

『…ユーノ。あれ、お前が教えたのか?』

「しっ…知りません! あんなの一度も…!?」

通信越しにユーノに確認すると、彼も大いに狼狽しながら首を横に振る。確かに彼女の魔法の師は彼だが、教えられるのはあくまで一人前の魔導師としての技術のみ。

なのはが今放とうとしている一撃は、そんな一人前の範疇から脱し過ぎている代物だった。

「受けてみて………デバインバスターのバリエーションっ! これが私の…全力全開ッツツ!!?」

愕然とした表情で、目の前に広がる、もはや壁のようにも見える桜色の光を凝視する

しかないフェイトに、なのはが力強く宣告する。

試練を乗り越えたと思ひ込んだ直後に直面した、より強い絶望。それに襲われてしまったフェイトには、砲撃の直射上から逃れることも、再び障壁を張る余力も何も残されてはいなかった。

「スターライト…ブレイカーツ!!？」

そして次の瞬間、それは爆ぜた。

ドンツと待機そのものが爆発したかのような轟音が発生し、桜色の閃光が怒涛の勢いで溢れ出す。視界のほとんども同じ色に染められ、またしても少女は光の中に飲み込まれていく。

遠く離れた場所に立つユーノ達も、そのあまりに恐ろしい光景に言葉を失っていた。

『……な…っ…バカ魔力…』

『フェイトちゃん…生きてるかな…?』

『不吉なことを言わないでくれ…』

呆れてまともな声も出ないクロノに、不安げな表情で頬を痙攣させるエイミィ、それと半ば白目を剥いて天を仰ぐアイン。

現実を嘆くアインについて向けられた視線は、彼女に対する全く同じ不満が、ありありと表れていた。

なんとというんでもない弟子を育ててしまったんだこいつは、と。

大人達のそんな悩みを知る事なく、なのは立ち上る白煙をじっと見つめ、静かに佇む。

やがて白煙の下からフェイトが飛び出し、真つ逆さまに海面に向かって落下していく。瞼を閉じ、ぐったりとした様子に見え、完全に気を失っていることがわかった。

なのはは急いで急行し、フェイトの体を受け止めると、すぐ近くの足場に移動する。しばらくするとフェイトは、ピクピクと痙攣させたまま瞼を開いた。

「あ………ごめんね……大丈夫……？」

心配そうになのはが呼びかけるが、フェイトは茫然自失とした様子で、まともな反応を返せずにいる。

まだ自分が負けたことが信じられない、ということもあるようだが、なのはの放った最後の砲撃の衝撃が凄まじかったのも一因かもしれない。それでも今の状況が、自分の敗北を表していることは理解しているようだ。

「わたしの……勝ちだよ……？」

自分でもまだ、認識が追いついていないような、あやふやな態度でなのはが問いかけると、フェイトは力なく振り向き、黙り込む。

返答もできない主人に代わって、バルディツシュが宝石を光らせて答えを示した。

【Put out.】

「……そう、みたいだね……」

排出されるジュエルシード、それを見上げたフェイトはようやく我に返ったのか、自重気味な笑みを浮かべて俯く。

積み重ねてきた努力を、こうも短期間で追い越され、自分の意志よりも強い意志を見せつけられた今、不思議と悔しさは感じない。いや、自分はもうここまでで、母の力にはなれなかったのだと諦めに至る。

そんな雰囲気、今の彼女からは感じられた。

そして勝負が終わった今、この場にもう用はない。

よろよろと頼りなく、なのはにも心配されながら立ち上がり、少女は少女の前から去ろうと宙に浮かんだ。

それを見て、アースラのメンバー達も再び動き出そうとしていた。

障害の一つにして、最大の懸念事項であったフェイトが戦意を喪失したいだが、事態の收拾の絶好の機会だった。

「よし……なのは、ジュエルシードを確保して、それから彼女を……」

「……いや」

フェイトを案じたまま、その場から動こうとしないのはに指示を送ろうとしたクロノ。

その隣で、険しい表情で腕を組んで立っていたアインが不意に眩き、虚空を睨みつける。至近距離から感じる異様な圧に、冷や汗を流したクロノが訝しげな目を向けた時だった。

アースラ中に、けたたましい警告音が鳴り響いたのだ。

「来た……!?」

なのは達の映る方とは別のモニターを凝視し、エイミーがハッと息を呑む。

計器が観測したのは、凄まじい魔力の波動。次元を超えるほどの威力と精度を持った並大抵ではない力が、広域結界に向かって近づきつつあった。

思わず、最近現れた例の巨人のことを思い浮かべ、顔を青くするエイミーだったが、すぐに我に返り計測結果を確認した。

『高次元魔力確認：魔力波長はプレシア・テスタロッサ！ 戦闘空域に次元跳躍攻撃……?』
なのはちゃん、ユーノくんツ!!?』

あの巨人ではないと安堵する暇もなく、エイミーは目を見開いてモニター越しに叫ぶ。そして同時に、クロノやアインも表情を強張らせた。

時空を超える攻撃が、なのはとフェイトのいる方に向かって降り注ごうとしていた。

「母さん……ッ!?」

空に渦巻く黒雲を見上げ、フェイトが困惑気味に呟く。

感じた魔力は母のもの、しかし何故今それがここまで強く荒々しく伝わってくるのか、理由が全くわからず、空中で棒立ちになってしまう。思考がまとまらず、呆然となるだけだった彼女からは、回避という選択肢が消えていた。

直後、格好の的となったフェイトの頭上に、凄まじい威力の紫の雷が降り注ぎ、少女の前進に食らいついた。

「フェイトちゃんッ!!?」

なのはの悲痛な叫びが虚しく響き渡る中、雷撃をともに食らったフェイトはバリアジャケットをさらに破損され、意識を手放し再び落ちていった。

けたたましく鳴る計器を操り、エイミーが目を皿のようにしながらコンソールを叩き続ける。

非常な一撃を受けた少女を目撃しながら、いや目撃したからこそ、彼女は自身の役目に没頭し、求める答えを導き出そうとしていた。

「ビンゴ……！ しつぽ掴んだ！」

やがてそれは、確かな実を結んだ。これまで行方が全く把握できずにいた、時の庭園の正確な位置。魔女が棲まう城の位置を、ようやく割り出すことができたのだ。

「魔力発射地点特定……ッ！ 空間座標確認ッッ！」

「不用意な物質転送が命取りだ……座標を！」

「もう割り出して送ってるよん！」

そこからの動きは早かった。事態の解決の糸口を掴み、最大の難関を乗り越えた今、残すは元凶を討つという作業のみ。

だがそのためには、金色の少女が母親の手にかけられる必要があつたという皮肉に、喜びをあらわにすることはできない。

ここまでの時間がかかり、余計な苦痛を少女に与えてしまったという悔恨が、アースラメンバーを突き動かしていた。

「転送座標セット、突入部隊……転送ポートから出動！」

「任務はプレシア・テスタロッサの身柄確保です！」

『『『『はっ！』』』』』

転送ポートから、一瞬で時の庭園の内部に乗り込んだ武装局員達が、気合の入った声で応じる。

いたいけな少女に傷をつけた、血も涙もない所業を繰り返す魔女を討とうと、正義漢の多いアースラの武装局員達の誰もが、力を漲らせて燃えていた。

「いよいよ大詰めってことね！」

「さて、俺達も出ると…」

同時に、三頭狼の面々もやる気を出し始める。

先日の巨人の騒ぎによって待機が続ぎ、ストレスがたまっている状態だったところに、いよいよ大詰め of 舞台が整えられた。

アースラの面々とは異なる理由で、彼らは闘志に満ちていた。

「それは待つてください」

「あ?」

しかしそこに、インシグニアによる冷静な制止がかかり、ジンガーが苛立ち交じりに振り向く。ナディアも訝しげに止まり、自分達のリーダーと部隊の長を睨みつけた。

ようやく思い切り暴れられる場が用意され、意気込んでいたところに水を差され、二人共不満を抑えきれなくなっていた。

「何言つてんだシグニア! 今こそ思い切り暴れられるタイミングだろ?」

「ですが、先程ノア提督から隊長に通達が…」

険しい表情で食ってかかるジンガーに、インシグニアも眉間にしわを寄せて答える。

その視線がちらりと、彼女の背後で無言で佇むサクソとムーヴに向けられ、急かすような鋭い眼差しと圧が向けられる。それに気圧されたわけではないが、複雑な表情を浮かべたサクソが、ようやく重い口を開いた。

「〃指示があるまで動くな、待機せよ」とのことだ……」

「はあ!?」

「何ですって……!?」

《center》 ♠ ◇ ♥ ♣ 《center》

「ゲホ、ゲホッ……」

強く咳き込み、吐血しながら、プレシアが杖を支えに歯をくいしばる。

高出力の魔法を使用した直後、肉体が締め付けられるような苦痛に襲われ、重力が数倍になったような感覚に苛まれた。

手のひらにたまつたどす黒い色の血が、自分の末路を表して見えた。

「やつぱり……次元魔法はもう体が持たないわ……それに今のでこの場所も掴まれた……」

体にうまく力が入らず、目が霞んで前もよく見えない。日頃から使用している薬を今更飲んだところで、この苦痛を和らげることもままなるまい。

刻一刻と迫り来ているタイムリミットを実感していると、ふと魔女の脳裏に、思い出そうとも思わなかった昔の記憶が蘇ってきた。

——もう、研究に夢中になり過ぎて薬を飲み忘れるなんて……本末転倒です。

そんな事では成果が実るまで身体が持ちませんよ？

薬の袋と水を運んできたリニスが、呆れた様子でプレシアに語りかける。

自分はどうと、研究道具に向き合ったまま振り向かず、鋭い目で睨みつけることしかしなかった。

なのにリニスは、気にした様子もなく笑みを浮かべ、プレシアに話しかけ続けた。

——…今日のフェイトは凄かったですよ。

ランサーを5つも出せるようになったんです。

フェイトはどこに出しても通用する一流の魔導師に仕上がります、おそらく私の想像以上の早さで。

全部、あなたを想ってなんですよ、プレシア。

そう楽しそうに、我が事のように嬉しそうに語るリニスの表情を、プレシアは思い出せない。しかしなぜか声だけを、昨日のこつのように鮮明に思い出していた。

使い魔の言葉を、取るに足らない戯言と決めつけ、聞く価値もないことだと無視し続けていたというのに。

——…今は無理でも…いつか…、あの子^{フェイト}の愛情を受け止めてあげてください。

思い出したりニスとの記憶は、それで終わりだった。役目を終えた彼女は契約通りに

繋がりを断ち、人知れず消えた。

プレシアにとつては、周りから一つ声が消えただけの認識だったのに、なぜか今は彼女の存在をはっきりと思い出し、鮮明にその存在を感じていた。

「まだ…終われないのよ…あの子との約束を…かなえなくちゃ…」

誰にともなく眩き、重い体を引きずって歩く。

城の奥で、ガラスの繭の中で眠りにつく愛娘の元へと向かい、魔女は安らかな、しかし切なげな表情を見せていた。

「そうよね…アリシア」

その声に、物言わぬ骸でしかない娘が答えることはない。

しかしなぜだか、瞼を閉じてゆらゆらと漂うその顔は、悲しげに見えた気がした。

3. 語られざる真実

限界を超えたダメージを受けたフェイトは、バリアジャケットを強制的に解除されたのち、アースラの医療スタッフに運ばれ、医務室に担ぎ込まれていった。

気絶していたため、当初に予想していた様な抵抗もなくスムーズに保護することができ、クロノは内心で安堵の息をついていた。

「…大丈夫かな？ フェイトちゃん…」

だがエイミーは、奥へ消えて行ったフェイトを見送りながら、不安げな呟きをこぼす。自分が少しずつ改善されていると認識していたクロノは、そんな彼女に訝しげな視線を向けた。

「救急に向かった救護班の報告では、命に別状はなかったはずだが？」

「…そうじゃなくて…心の」

首を傾げていたクロノは、エイミーの言葉からすぐに察する。

体の傷はすぐに処置ができて、確かに今しがた起きた事柄を——母親に撃たれたなどという事態を考えれば、心配を抱くのも仕方がなかった。

突入部隊が時の庭園に侵入して数分後。

意識を取り戻したフェイトは、両手に手錠をかけられ、なのはとアルフに寄り添われてアースラのブリッジに連れてこられた。バルディツシユは預けられ、何もできない様に処置が施されている。

だがそうするまでもなく、フェイトに自ら動く気力が残されていないように見える。虚ろな表情で、覇気もなくその場に佇むだけだった。

「お疲れ様。……それからフェイトさん、はじめまして。あなたの事はアースラから監視していました。そのせいか初めてと言う気はしないわね」

「……」

初めて直に顔を合わせ、笑顔で自己紹介するリンデイだが、フェイトは俯いたまま何の反応も返さない。

まるで人形にでもなってしまった様に、光をなくした目で床を見つめるばかり。その姿に、リンデイも流石に悲痛げに顔を歪め、口を閉ざした。

「…なのはさん、聞こえますね？」

「は、はいっ！」

「…母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ…フェイトさんをどこか別の部屋に」

「…はい」

フェイトに聞こえないよう、念話でなのはに指示を与えると、少女は慌てて頷き拳を握りしめる。

今はまだ、何もかける言葉が見つからない。非常な苦痛を受けた同じ歳の少女を慰める方法など、リンディにも見つからないのに自分が見出せるはずもない。

「フェイトちゃん…アルフさん、良かったら私の部屋に…」

「…そうだね。行こう、フェイト」

せめて静かな、これ以上の刺激を与えない場所に連れて行くことしかできない情けなさを感じながら、アルフとともにフェイトの手を引く。

だが、フェイトは動かなかった。それまでなんの意志も見せず、突き動かされるままだった彼女が、ここにきて初めて見せる意志に、なのは達は思わず息を呑んでいた。

「フェイトちゃん？」

「フェイト？」

そのすぐ近くでは、不満を態度全体で示した三頭狼の面々が暇そうにたむろしていた。

彼らの見る先にあるモニターでは、庭園内の通路を突破した武装隊が、プレシアのいる玉座の間に到達している光景が映っている。局員が自分の責務を全うする、実に絵に

なる場面に、ジンガーが思い切り顔をしかめていた。

「ちっ…結局最後の美味しいところは連中のもんかよ」

「仕方ないわよ。今回は私たちの上司からの命令なんだから……」

「あーあ、暴れたかったんだがなあ」

万一の時に備えてと、彼らにとつての最も高いくらいにいる上司の命令で来たはいいが、その万一の事態が起こりそうにないため、非常に力が有り余っている。

他人のやるゲームなど、彼らにとつては最もつまらない娯楽で、やれることがないのならさっさと帰りたいというのが本音だった。

『プレシア・テストアロツサ…時空管理法違反、および管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します』

『武装を解除してこちらへ……』

玉座に腰掛け、微塵も動く様子のないプレシアを取り囲み、油断なく追い詰めようとする武装隊の魔導師達。

しかしデバイスを突きつけられてなお、庭園の主人である魔女に慌てる容姿は一切ない。諦めているわけではない、自信があるようでもない、名状しがたい態度のまま、プレシアはそこに鎮座していた。

異様とも言えるプレシアの様子に、武装隊だけでなくアースラで事態を見守っている

リンデイ達も、イヤな予感を覚えて黙り込む。

『……………これは……………?』

そんな時、それは見つけ出された。

玉座の裏に回っていた武装局員の一人が、隠されていた扉に気づき、一応の確認のためにより込んでいく。

暗い空間の中心で浮かぶその存在に、プレシアを除いた全員が目を見開き、言葉をなくした。

「……………え?」

「なっ……………何?」

そこに見つけた「顔」に、声が途切れる。

なのは達のすぐそばで立ち尽くす少女、彼女と寸分違わぬ同じ顔をした少女が、機械の繭の中でたゆたい、眠りにについている姿がそこにあった。

「何だよこれ…:フェイトとまるで同じ人間じゃないか…!!?」

まるで怖気を誘う悪夢を見せられているかのような、全身に寒気が走る心地に陥らされ、アルフが困惑しながら叫ぶ。

その隣では、同じ光景を目にし、虚ろな瞳に混乱を混ぜたフェイトが棒立ちになる。すると彼女の脳裏に、記憶の底に追いやっていた、かつての母の声が蘇ってきた。

「……アリ……シア……？」

遠い記憶の奥に残っていた、プレシアが自分に対して向けていた呼び名。

自分ではない誰かに向けていたような、しかしそんなはずはないと否定してきた、何故か寒々しさを感じさせる名前。

フェイトは少女の顔を見た瞬間、彼女こそがそうなのだと確信していた。

『私のアリシアに……近寄らないで！』

呆然と立ち尽くしていた武装局員達が、突如響き渡ったプレシアの声と共に、紫色の雷撃に襲われる。

不気味なほどに動きを見せなかった、大魔導師と呼ばれた彼女が放った雷撃は、容赦無く彼らを命の危機に瀕しさせ、局員達は力なく倒れ伏した。

「いけない！ 今すぐに彼らの回収を……！」

リンディの瞬時の判断で、戦闘不能になった局員達が転送されていく。

あつという間に、玉座の間から局員達の姿が消え、プレシアと少女の……アリアシアの亡骸のみが残される。

鬼のような形相で、少女の亡骸に近づこうとした者達が消えた場所を見つめていたプレシアだったが、しばらくすると急に咳き込み、突如多量に吐血する様を見せた。

『たった9個のジュエルシードでは……アルハザードにたどり着けるかどうかはわからない

いけど…でも、もういいわ…：…終わりにする』

母に起こった異常に、息を飲むフェイトの視線の先で、より一層ひどい顔色になったプレシアが気だるげに呟く。

今にも倒れそうなほど疲弊し、最悪の顔色を見せる魔女は、苦痛に勝る悲しみの表情をたたえ、ガラスの繭の中で眠る少女に縋り付いた。

『この子を亡くしてから暗鬱な時間も…：…この子の身代わりの人形を…：…娘扱いするの』

小さく溢れたプレシアの言葉に、フェイトの肩が震える。

何か、目にしてはいけない、耳にしてはいけない恐るべきものを突きつけられようとしているようで、無意識に体が震えて止まらなくなる。

これ以上なにも言わないでほしい、そんな微かな願いは、モニター越しに視線を向けてきたプレシアによって、あっけなく砕かれた。

『聞いていて…？ あなたのことよ、フェイト…』

プレシアの方にモニターは表示されていない。にも関わらず、まるでこちらの姿が見えているような態度で話しかけてくる魔女に、少女はただ怯えて言葉も出ない。

硬直し、震えるフェイトに寄り添うのはとアルフが背中を支えるが、それがなければとつづくに崩れ落ちていたかもしれない。

『せっかくアリシアの記憶をあげたのに……そっくりなのは見た目だけ……役立たずでちつとも使えない……私のお人形』

オペレーターか、もしくは三頭狼の面々の誰かが、グツと息を飲む声が聞こえる。画面越しにも伝わる悪意、冷たく背筋を凍らすような声が、歴戦の局員達をもたじろがせる。

『最初の事故の時にね……プレシアは実の娘……アリシア・テスタロツサを亡くしてるの。安全管理不足で起きた、魔導炉の暴走事故……アリシアはそれに巻き込まれて……』

なおも理解が追いつかない、凍ったように脳の回転が鈍くなったように、なのは達は立ち尽くす。

母とは名ばかりの、姿は同じでも全く違う化け物を見ているかのように、怯えを抱く少女達。そんな彼女達に、エイミーが自身も苦痛の表情を浮かべ、泣きそうな顔になりながら手に入れた情報を伝える。

『その後のプレシアが行つてた研究は、使い魔とは異なる……使い魔を超えた人造生命の生成、そして死者蘇生の技術』

「……そんな……！」

「それじゃあ、フェイトは……」

ハッと目を見開き、主人に目を向けるアルフ。真つ青な顔で、焦点も合わなくなりつ

つある彼女だが、目を離すこともできなくなっている。

説明されても信じられず、実際に目の当たりにしてもなお自身の正気を疑うような、そんな光景に呼吸さえ忘れそうになる。アルフとなのはでさえそうなのに、フェイト本人はどれだけの衝撃を受けているのか。

凍りついたように変わらない彼女の表情からは、何も何う事はできなかった。

『記憶転写型特殊クローン技術 プロジェクト・フェイト』。それが彼女が最後に関わった研究コード……つまり……「フェイト」って名前は……』

「当時の彼女の研究につけられた開発コード……」

『よく調べたわね……。そうよ……。その通り。だけど……。ちつとも上手くいかなかった』

ポツリと呟かれた答えに、プレシアは小馬鹿にしたように笑い、視線を外して吐き捨てるように告げる。

その声を聞いた途端、ビクンとフェイトの体が震え、指先が細かく痙攣を始める。氣力を失った今の彼女では、目をそらすことも耳を塞ぐこともできず、胸に突き刺さる事実を淡々と受け止める他にない。

『作りものの命はしよせん作りもの……失ったモノのかわりにはならなかった』

もはや魔女は、操り続けた少女に対する悪意を隠す素振りも見せない。恐怖をもつて促すことも、情を利用して動かすこともなく、はつきりと落胆した表情で、自分が望ん

で生み出したはずの少女を睨みつける。

『アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ…アリシアは時々わがままも言ったけど…私の言うことをとてもよく聞いてくれた。アリシアはいつでも私に優しくかった…』

「やめて…やめて…、やめてよ…」

隣にいるフェイトを強く抱きしめながら、なのはが悲痛に請い願う。

確かに腕の中にいるはずの、自分が友達になりたいと願った少女。わずかにでも力が籠もれば、ぐしやりと氷の彫像のように呆気なく砕けてしまうのではないかと思えるほど、儚く傷ついていく彼女の姿に、なのははひたすらに嘆き涙を流す。

だが魔女は躊躇わない。少女の懇願も、壊れていく娘の代わりの人形のことにも気にかけず、冷たい氷の言葉で攻め続ける。

『フェイト……あなたは私の娘なんかじゃない、ただの失敗作』

「お願い…もうやめて!!?」

『だから、あなたはもういらぬわ…どこへなりとも消えなさい』

項垂れていたフェイトの目が、ゆっくりと母と読んでいた魔女の方に向けられる。

光をなくした両目は、目の前の全てが夢であつて欲しいと願うように、虚ろで何も映さない。ひたすらに現実を否定したくて、母の言葉を求め続ける。

『いいこと教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずっとね…私はあなた

が——』

すがるように向けられる、その眼差しを振り払うように、プレシアは侮蔑と嫌悪の目を返し、冷めきった声を放つ。

世界で最も大切だったものを奪われ、壊れてしまった魔女がとどめを刺すように、操り続けた人形の少女を地の底に叩き落とす一言を告げる——その寸前のことだった。

——ライトニング・リベンジ雷の暴風。

ポツ！と空気が爆ぜるような轟音が響き渡り、金色の閃光が迸った直後、プレシアを移すモニターがノイズで覆い尽くされる。

音を伝えきれず、音声がひび割れごりごりと耳障りな雑音が続く中、鼓膜をつんざく不協和音に顔をしかめたクロノ達は、必死に意識を保とうと歯を食いしばった。

「!? 何だ!」

突然の事態に、局員達やなのは達は状況を確認しようとしてモニターに再度注目する。

モニターの向こうでは、同じくいきなり起こった現象に驚愕するプレシアの姿があり、続いて苛立たしげに黒煙に包まれる辺りを見渡しているのが見える。

一切の前触れのない、異様な光景の中で、ゆらりと一つの影が動いた。

『——くだらん話をいつまで続けるつもりだ?』

シャン、と金属音を響かせて、彼女は姿を現す。

状況を見守るすべての者達と、災厄の黒幕である魔女の視線が集まる中で、銀色の鎧を纏った女騎士が、鬱陶しそうに吐き捨てた。

4. ただの一人の騎士

『何やってるのよあの子はあ!??!』

通信から、怒りと困惑をこちや混ぜにしたりンデイの悲鳴が聞こえてくる。

それに知らんふりをしながら、アインは剣を肩に担ぎ、訝しげに自分を見つめてくるプレシアを見つめ返す。足元にポツカリと広がる、自分で開けた巨大な穴から前へと踏み出し、警戒心をあらわにする魔女に近づいていく。

深く深く地の果てまで続き、遙か先に極彩色の光がかすかに覗くほどに深い、一直線の穴だった。

『て、転移装置使用形跡なし……まさか自力で飛んであそこまで地面をぶち破ったんですか……?!?!』

『ムチャクチャだ……!』

通信越しに聞こえてくる、アースラメンバーからの呆れと驚愕の入り混じった声に苦笑し、アインは視線を前に戻す。

「あなた……そう、あなたが……」

突如轟音と共に現れた女騎士を前にし、魔女は訝しげな表情のまま、台詞の邪魔をさ

れたことからか、不機嫌そうに眉間にしわを寄せていた。

「会いたかったぞ、プレシア・テスタロツサ……趣味の悪い人形劇の操者よ」

「そう言うあなたは……アイン・K・アルデブラントね。名前は何度か聞いてたわ……そして、何度か見ていたわ」

名をフルネームで呼ばれ、アインは意外そうに片眉をあげてプレシアを見つめる。

何十年も表の世界から遠ざかっていた魔女が、比較的最近まで、次元世界のあちこちに派遣されていた騎士について知っていたのが、少しばかり意外だったのだ。

「人形が随分と懐いていたようね。話だけは聞いていたわよ」

「ほう？ 私は人形と戯れるような幼稚な趣味は持ち合わせてはいないが……人違いじゃないか？」

「なら勝手にじやれていたのかしらね。それとも、新しいご主人様でも欲しかったのかしら？ もしそうなら悪いことをしたわね」

「さあな。だが確かに私は、他人に自分の存在を委ねるばかりで立ち上がるつもりのない人形など、微塵も興味はないな」

アインのこぼした呟きに、音声聞いていたフェイトがびくりと肩を震わせ、アルフが毛を逆立てる。

最初の衝突の時から、好意的に干渉してきて胡散臭さを覚え、不思議に思う事は多々

あった。しかし、今の彼女から感じられるのは激しい落胆、以前の馴れ馴れしさが嘘のように感じるほどの冷たさがあった。

「自らの生を自らで切り開く意志もなく、身を預けることしかできないなど……そんなものはただの依存だ」

「あら、随分冷たいじゃない。それなりに遊んでやっていたものだと思っただけど？」

「それは、あの時は多少興味があつたからな。あれだけの理不尽に襲われながら歩みを止めない、何があいつをそこまで駆り立てるのか。何があいつを突き動かすのか」

ハア、と深いため息をつき、アインは肩をすくめる。

その脳裏に浮かぶのは、最初に出会った海鳴での夜の出来事。倒せぬ相手を前にしてなお、退くことを選ばなかった強い眼差し。何かを心に決め、果たすことを強く望む固い意志が、彼女の目に感じられた。

それがあつたからこそ、アインは捕らえることを選ばず、見守ることを選んだ。

だが、実際にはそうはならなかった。

「…その原動力がただの依存だと知って、失望したかな」

「そう、それは残念ね」

「ああ。己の意志で世界を敵に回したのかと思つたのだが……期待外れだった。大した剣を備えているのかと思えば、あつたのは鈍なまくらだったな」

虚空を見上げ、またため息をつくアイン。

プレシアはそんな彼女つまらなそうな、しかし確実に自分の道の障害になるであろう女騎士を、鋭く睨み続ける。

「それで？ そんな物騒な格好をしてここに来た理由は何？ まさかただ世間話をしに来たわけじゃないでしょう？」

「無論だ」

ギン、とアインの目がより一層の鋭さを有する。

ブレイラウザーの切っ先とほぼ同じだけ、静かな怒りの込められた殺気が、鋭い刃となつて迸る。感情がそのまま、剣の切れ味に直結しているようだ。

「お前は何かと気に入らない。せっかくの私の休暇を潰しただけでは飽き足らず、お気に入りの喫茶店がある世界もろとも滅ぼそうとしているのだから。腹が立つのは当然だろう」

「ああ……なんだそういうこと」

「二度嫌い始めると際限がなくてな……この手で一度叩き潰さねば気が済まん。ここまで苛立つのは実に久しぶりだ」

ビキビキと、アインのこめかみに血管が浮き上がる。アースラの通信から、小さな誰かの悲鳴が聞こえてくるが、それも気にならないほどにアインの感情は荒ぶっている。

一方でプレシアは、面倒臭そうにため息をこぼす。わざわざ聞いてやったことが、時間の無駄だったとでも言うように。

「知ったことではないわね。私にとつて大切なのはアリシアだけ……他のことなんて」
心底どうでも良さそうに吐き捨て、視線を逸らしたプレシアが、この無駄な時間をさつさと終わらせようと、杖を握る手に力を込める。

しかしその時、ふとプレシアは目を見開き、ニヤリと意味深な笑みを浮かべ、アインに視線を戻した。

「ああ、最初はよつぽど子供好きのお人好しなのかと思つたけど……もしかしてそういうことなの？」

「ん……？」

「ずいぶん歪んだ癖をお持ちなのねってこと」

意味がわからないと首を傾げるアインに、プレシアは嘲笑を浮かべて鼻を鳴らす。

魔女が見つめるのは、アインの騎士甲冑の端から覗く包帯の切れ端。数日前に遭遇した巨人と、血で血を洗う激戦を繰り広げたことを示す、僅かに残った跡だ。

「だってそうじゃない……偽善であんなに命をかけるなんてできるわけがない……あの子に対して、個人的な感情があるってことでしょう？」

下世話な口調と眼差しで、プレシアは馬鹿にした笑みを口元に浮かべる。

ようやくそこで意味を理解し、アインの表情が不満げに歪められる。プレシアは構わず、凶星だったかとますます嘲笑の笑みを見せ、見下した視線を女騎士に向ける。

「別にいいわよ……あなたにあげる。私にはもうあの子は不要だし、好きにすればいいわ……どう使ってもらっても構わない……」

「ちよつと待て……」

続けようとしたプレシアを、アインが眉間に深いしわを寄せて止める。

不満を顔中で表した彼女の表情は、不本意だという言葉がありありと示されていた。

「……お前の勘違いをいくつか指摘させてもらおうか」

「勘違い……?」

「私は別に子供が好きなのではない………というか、むしろ苦手だ。なぜか皆、私が面倒見のいいお人好しに見えるようだが……」

『え……?』

困ったように肩をすくめ、苛立ちも芽生えたのかぼりぼりと頭をかくアインに、プレシアは訝しげに眉を寄せる。

だが、彼女以上に戸惑いを覚えたのは、アースラでフェイトに寄り添っていたのは……だった。

自分に魔法戦闘の稽古をつけてくれたことや、ジュエルシードの暴走の際にフェイト

を身を呈して守ったこと、巨神を自らがボロボロになりながらも退け、守りきったことが思い出され、矛盾に首を傾げる。

どうしてあれだけのことができるのに、なのは達のような子供が苦手だと嘯くことができるのかと。

「ああいう邪気のない……純粋な心の持ち主達を見ると、自分がどうしようもなく穢れた存在であることを見せつけられるようで苦しくなる……だからなるべく、彼らと関わることをない場所を求めていた」

遠い目で、アインはため息混じりにそう告げる。

管理局、そして大人の世界におけるどうしようもない薄汚さ、腹黒さが、穢れを知らない少年少女達を見てみると、一層強く感じられてしまう。

そして、そんな世界で孤独に生きているうちに、同じ色に染まっている自身と比較して、激しい自己嫌悪に苛まれていた。

「だが、傷ついた子を見るともう自分ではどうしようもなく……胸が痛くて痛くて張り裂けそうなのに、動かざるを得なくなる」

「傲慢な話ね……いやだけど助けずにはいられないから、あの子も助けたいってこと？」

「残念だがそれも違う……」

呆れたような、見下したような目を向けて吐き捨てるプレシアに、アインはまたも首

を振る。

アインは、自身を正義の味方などとは認識していない。ただ破壊をもたらすだけの化け物が、人を救うことなどできるはずもないのだと割り切り、ひたすらに戦い続ける。

その理由は、過去の自分の姿がいまでも目の前にちらつき続けているからだ。

「ああいう子を見ていると……昔の自分を思い出してな。理不尽な目に遭っても、それを自分じゃどうにもできなくて苦しむばかりの子は特に……だからな」

スツ、とアインの目が突然据わる。世間話に興じる只人から、獲物を前にした狩人、いや肉食獣のような視線に変わり、まっすぐにプレシアを射抜く。

肌突き刺さるような殺気を受けた魔女は、途端に嘲りの表情を引つ込め、女騎士と同等の重さの威圧で迎え撃った。

「お前のように、子供に理不尽を強いる大人を見ていると……無性に腹が立つんだよ」

低い、感情の全てが死に絶えたかのような声でアインは告げると、おもむろに腰に巻いたバックルを取り外す。

青いスクリーンが展開され、主人を病院着姿に戻して消え去ると、アインは首にかけてスピード型のペンダントをローバイクであり相棒である、ブルースペイダーを引きちぎる。そして小さな声で、祝詞を唱えた。

「……」の手に宿すは鋭き誓い。例えこの身傷付きさらばえようとも、揺るがぬ意志にて

敵を討て。我こそ一刃無双の劍聖なりーブルースパイダー、セットアップ」

「Set up, Ready」

祝詞が終わった瞬間、アインの全身を眩い青の光が包む。

豊満ながら引き締まった肢体を強調するような、胸元や脇、腿があらわになった群青色のボディスーツを纏い、手足と胸、腰にスピードを模した銀色の甲冑が張り付く。

肩からは純白のマントが、腰からはスリットの入ったスカートが生え、アインが力強く一歩を踏み出すと、それに合わせて雄々しくはためく。

風もない中で揺れる髪は独りでに三つ編みにされ、劍の形をしたティアラが前頭部を飾る。

時間にして一秒もかからない間に、アインはこれまでとは印象の異なる、女性らしい騎士の格好へと変貌した。

「ここからは…プライベートな時間だ」

ブン、と振るわれたアインの手のひらの中に、青い光とともに無数のパーツが集まっていく。

スピード型の宝石を柄部分に、分厚く長い片刃を備えた、バイク形態の面影を持った劍。無数の小さな傷跡を刻んだ、本来の姿に戻ったブルースパイダーが、鈍い輝きを持って魔女に突きつけられる。

「今から私は…管理局員としてではない、ただのアインとして…お前を叩き斬る」

「…大きく出たわね。一介の騎士風情が私に勝てると思っても？」

「お前こそ…一介の魔導師風情が私に勝てると思っているのか？」

バリイツ、と紫電を走らせるプレシアに対し、アインも青雷を剣からほとばしらせて不敵な笑みを見せる。

余波であたりに散らばっていた瓦礫の破片が一掃され、二人の周囲から全ての障害物が消え去る。見ているだけで、威圧が胃に突き刺さるような、とんでもない緊張感が走っている。

しかし、アインが次に発した一言は、その緊張をさらに張り詰めさせた。

「娘のためという免罪符を盾に、ここまで好き勝手暴れる女は見ていて実にイライラする」

「……何ですって？」

「お前はそういう女だ。自らの欲望のために、娘すら言い訳に使うエゴの塊だ」

呆れるように告げられたアインの一言に、プレシアの目から光が消える。

硬直し、異様な気迫を放ち始めた魔女を前に、女騎士は一切ひるむ様子を見せず、フツと鼻で笑い、小馬鹿にしたような笑みを口元に浮かべた。

「娘の望みなどお前には関係ない、何を犠牲にしようと気にしない。娘と同じ顔の人形

を使い潰そうとも、良心が痛むことなどあり得ない。大した母親だな」

ひくり、と一度だけ痙攣する魔女の頬を目にしながら、女騎士は口を閉ざさない。言おう言おうと思っていた本音の全てを、ここぞとばかりにぶちまけていく。

流石の魔女も、徐々に身に纏う雰囲気を一層刺々しいものに変え、アインを鋭く見つめ始めた。

「……黙って聞いていければ、随分好き勝手言ってくれるじゃない」

「凶星を指されて起こったか？ 器が知れるぞ、大魔導士殿」

ぶちりと。

何かが切れる音が、その会話を聞いていた者達全員の耳に届く。

アインはそれを聞くと、満足げに鼻を鳴らし、浮かべた笑みをさらに深くしていった。

「…そう、あなたも邪魔をするのね」

魔女の表情が無に変わり、ざわざわと風もないのに長い黒髪が揺れ動く。光をなくした、黒々とした虚ろのような目が、目の前に立ちはだかる女騎士に向けられる。

すでにプレシアは、アインをただの人間としては見えていない。体の異常性ではなく、己の手で踏み潰さなければならぬ、自分たちの幸福を奪おうとする害虫として、全力で消し飛ばすつもりになっていた。

「いいわ……望み通り消し炭にしてあげる……!!? せいぜい泣いて嘆きながら醜く墜

ちなさい!!?」

「やってみろ…老害が!」

鋭く一喝したアインが、閃光をまとったブルースペイダーを振りかざして突進を繰り出す。

プレシアの抱えた杖も強烈な紫電を走らせ、凄まじい形相になった美女二人が、ズシ
ンツと轟音と衝撃波を撒き散らせて激突した。

「おおおおおお!!?」

「ああああああ!!?」

『アインさん!』

なのはの呼ぶ声もかき消されるほどに、女騎士と魔女は互いの目しか見ず、情け容赦のない全力全霊の一撃を、叩き込みあつた。

「あの子は…! 本気で何をやっているのよ!!?」

轟音と閃光が迸つたと思つた直後、ブツリと途切れた通信。

モニターからもスピーカーからも、伝わって来るのは雑音だけで、何が起きているのか全くわからなくなる。

しかしリンディには、断線の原因はあの女騎士達のせいで、今現在、それぞれの意地

を徹すための、激しい戦いが始まっていることを悟っていた。

「勝手にブルースペイダーの限定解除するわ、勝手に首謀者と戦闘を始めるわ、派手にやるわ……誤魔化しきれぬわけないじゃないこんなの！」

「か、母さん……」

ヒステリックに叫ぶ今の彼女に、提督らしい威厳は微塵も残っていない。山積みになつていく今後の残業と処分に頭を抱え、ひたすらに嘆きの声をあげまくる。

冷静沈着を常に求められ、そして本人もそれに準ずることを望んでいる、母であり上司が見せる醜態に、クロノやアースラクルー達は苦虫を噛み潰したような表情で目をそらす。今のリンディを見続けるのは、あまりにも心苦しすぎた。

『……あいつらしいな』

『ですわね』

そんな惨状をよそに、サクソがふっと呆れたように鼻を鳴らし、口元に笑みを浮かべる。ムーヴも同じく、苦笑を浮かべて頭をかく！

きっと自分も元上司として、この一件が終わった後で厳しい責任の追及が待っているだろう。だが、それが全く気にならないほどに、彼らの中には安堵の気持ちが強くなっていた。

『むしろあれくらい派手にやってくれた方が、こつちも四の五の考えずに行動できると

いうものだ』

「そんなこと言ってる場合じゃ……!」

ニヤニヤと笑い続けるサクソに、インシグニアが思わず苦言を口にしかける。が、前回の出勤のことを思い出したのか、すぐに呆れた様子で引き下がり、額に手を当てて天井を仰ぐ。

ひとしきり喚き終え、両目を手で覆って嘆く様を晒していたリンディは、新たに入った通信に我に返り、無理矢理顔を引き締める。

『負傷した局員の回収、終了しました』

「……わかったわ……」

今すぐに時の庭園との通信を復活させて、色々と物申したい気持ちでいっぱいだったが、それは後回しにしようとしてリンディは気合を入れ直す。

やり方や順序はどうあれ、あの女騎士は事件の首謀者のもとに挑み、足止めを買って出ている。彼女なりに職務に忠実に動いているのだから、意味などなくて求める必要などない。

「あとで覚えてなさいよ、バカアイン……!」

何か一言二言、いや気の済むまで罵ってやらなければ。

そんな覚悟を決め、女騎士が無事に戻って来ることを無意識に確信しながら、リン

デイが部下達に指示を飛ばそうとした時だった。

エイミイ達オペレーター側から、大きなどよめきの声が上がったのだ。

『ちよ…大変、見て下さい！』

「何事？ エイミイ？」

『時の庭園屋敷内に魔力反応多数！』

『なんだ…何が起こつてる…？』

俄かに騒然となるオペレーターと一般局員達。

嫌な予感を覚えたリンデイは、すぐさま自身のもとに計器のモニターを呼び出し、表示されている数値を確認する。

すると、一瞬で彼女の表情は、凍りついたように強張った。

「…これは？」

時の庭園の全域、その中に存在する魔力反応を視覚化した画像。

それが、突如現れた無数の反応によって、真っ赤に塗りつぶされていたのだ。揃えたように同規模の力を示す赤い光、それでいて蟲のごとく群れたその様に、アースラにいたクルー達は一気に緊張感を走らせていった。

『…魔力反応…いずれもAクラス！』

『総数60…80…まだ増えます！』

「プレシア・テスタロッサ……いったい何をするつもり……？」

騒然となるアースラ艦内、ブリッジにてその様子を見下ろすリンデイ。

彼女はノイズに阻まれ、一切の情報を得ることがないモニターを睨みつけ、険しい形相でそう呟く他にできずにいた。

5. 総出動

「おおおおおおお!!?」

獣の様な雄叫びをあげ、アインがブルースペイダーを振るう。

無数の細かい傷を刻み、それでもなお鋭さを衰えさせていない剣は、唸りを上げて雷刃を撃ち放つ。それを迎え撃つプレシアの雷撃は、激しい衝撃を放って相殺する。

「でやあああ!」

「はあっ!」

女騎士と魔女は息つく間もなく、次なる一撃をまるで示し合わせたかのように同時に放ち、轟音と衝撃波を撒き散らす。

杖にビリビリと伝わってくる振動に、プレシアの表情が歪む。力を抜いたわけではない、しかしそれでも押しきれなかった雷刃の凄まじさに、彼女の頬を一筋の冷や汗が伝っていた。

「くっ……ただの魔力変換でこの威力……!?」 ふざけてるわ……!」

「お褒めに預かり光荣だ!」

大魔導師としての矜持か、皮肉をこぼして憎らしげに歯を食いしばるプレシア。

それにアインは不敵な笑みを返し、バリバリと蒼雷をまとった刃を振りかざし、天高く跳躍する。

とつさにプレシアが張った障壁に、アインは鋭い一撃を叩き込み、雷の牙を食い込ませる。ビキリ、と大気が軋みをあげ、火花を散らす盾と牙を挟んで女騎士と魔女が睨み合う。

「ちいつ…」

バチィツ、とアインの刃が弾かれ、舌打ちをこぼした彼女が後方に降り立つ。

再び剣を構え、プレシアに突撃する時期を見計らっていたアインは、不意にどこから聞こえてくる轟音と地響きに気づき、鬱陶しそうに顔を歪めた。

「…何か始めたな。それも恐ろしくどうしようもないことを」

アインのつぶやきに、プレシアはニヤリと、してやったりといった笑みを見せる。息は上がり、顔色も最悪だが、地震の邪魔をする女騎士の不快げな顔を見られたことで、多少胸がすいたようだ。

アインは忌々しげに眉間に歯を食いしばり、続いて訝しげに眉間にしわを寄せる。あまりに余裕を保ち続けているプレシアの態度が、不審だったのだ。

「しかし妙だな……私は一応、お前を止めているつもりだったんだが、いつの間に動かしただ？ 隙など与えた覚えはないが」

「…フフ、そうね。正直あなたの相手をするだけで手一杯よ。さすが最強なんて言われるだけあるわね」

互いの得物を突きつけ合い、睨み合う両者。放たれる殺気はほぼ同じ濃さで、魔女にも女騎士にも手を抜いている様子はない。

しかし今、どこからともなく聞こえてくる稼働音が、魔女が計画を実行に移していることを示している。そんな素振りには、一切見せなかつたというのに、だ。

「だれかが邪魔をしにくるのはわかっていたもの……はじめから時限式で発動するようにはしていたの。何かあってもね…」

「…大した覚悟だ」

小馬鹿にしたような笑みを見せるプレシアに、アインは呆れ半分、感心半分のため息をつく。

実力者にそれだけの警戒をされたなら、剣士としての誉とも言えるだろうが、状況を鑑みると喜ぶ暇はない。ただでさえギリギリの状態なのに、事態の解決が遠のいていくようだ。

「そうまでして何を望む。自分自身までも壊して、何を得ようとしている」

「こんな身体…どうなろうと構わないわ。それに得るんじゃない……取り戻すのよ……！」

吐き捨てるように、プレシアは自身の胸を掴んできつく握りしめる。豊かな膨らみに爪が立てられ、血が滲んでも構うことなく、自身の怒りと無念をぶつけるように己が身を苛む。

狂気に彩られた表情で、その目の奥にあるのは凄まじい執着の光。暗い絶望の中で見出した希望にすぎず、狂人の目だった。

「私達は旅立つの……永遠の都アルハザードへ」

バリツ、と紫電が走り、無数の雷の矢となつてアインに降り注ぐ。一発一発が強烈な、一発で市に至るほどの威力を有したそれが、四方八方から女騎士を狙う。

それをアインは、蒼雷を纏わせた剣で弾き、四散させる。そして剣を振りかざし、再びプレシアの元へと走り出した。

「本当にあんなおとき話を間に受けているのか！ 滑稽だな大魔導師！ 実在も疑われる都をお探しとは、職をコメディアンに改めたらどうだ！ 売れはせんだろうがな！」

「なんとでも言うがいいわ……もう私に……私達に残されているのはこの道だけ！ 誰に何を言われたって気にならないわ！」

頭上から雨のように降る雷を、縦横無尽に駆け抜けながらかわし続けるアイン。肌を擦り、焦げ付くのも構わず、まっすぐに魔女に向かっていく。

捉えきれない俊足を見せる彼女を忌々しげに睨み、魔女は杖を掲げ、無数の雷の雨を

降らせ続けた。

「この力で旅立って…取り戻すのよ、すべてを！ その邪魔をしないで!!？」

「生憎だが……こつちも譲る気はさらさらない！」

一度生み出され、一箇所にとまって降ってくる雷の槍を、渾身の力で弾いてアインは突き進む。

急所以外に突き刺さる紫電を完全に無視し、魔女のみを狙って走るアインが、獣のような雄叫びとともに刃を振り抜いた。

「この身が止まる最後まで…付き合ってもらおうぞ！」

爆発のように響き渡る雷鳴と、駆け抜ける衝撃。

玉座の魔を半壊させるほどのその激突は、その後も絶え間無く二度三度と繰り返された。

凄まじい空間の揺れにより、次元航行船アースラの全体が軋みをあげる。巨大なうねりの中に飲み込まれようとしているかのように、大きくその船体が揺らぐ。

「次元震です……中規模以上！」

「震動防御！ デイストーションシールドを展開！」

リンデイの指示で、すぐさまアースラを移動させるために局員達が動き出す。オペ

レーターも技師達も、皆一丸となって事態を乗り切ろうとする。

しかしそれをあざ笑うかのように、アースラを包む空間は不穏な唸りを響かせ、うねりを強めていく。けたたましく鳴り響く警報音が、事態の深刻さをこれでもかと表していた。

「ジュエルシード9個発動…次元震、さらに強くなります!!？」

「波動係数拡大…このままだと次元断層が…！」

「転送可能距離を保ったまま影響の薄い空域に移動を！」

「了解！」

局員たち全員の顔に焦燥が浮かび、冷や汗が頬を伝う。わずかにでも行動を誤れば、途端に命が危機にさらされる異常な状況、冷静なままでいられる者など一人もいない。

そんな中、管制室を離れたクロノは、憤然とした態度で通路を走り、懐から自分のデバイスを取り出し、バリアジャケットを纏った。

「どいつもこいつも馬鹿なことを…！！ ゲートを開いてくれ、エイミー！」

『りょーかい！』

船の安全確保は、リンディに任せればそれでいい。経験を超える最悪の事態とはいえ、幾度も事件を解決してきた歴戦の猛者たちが乗る船ゆえ、ちよつとやそつとで落ちるほどやわではないと信用できる。

しかしその時、クロノは転送装置に急ぎながら、魔女が口にした単語に眉間にしわを寄せていた。

(忘却の都アルハザード……禁断の秘術が眠る土地。その秘術で亡くした命を呼び戻そうとでも……?)

死者さえ蘇らせる技術があつたという、今は亡き超古代文明の都市。

実在さえ疑われるような、人間の想像しうる奇跡の数々を現実のものとしてきたというその都の技術ならば、確かに魔女の願いは叶うかもしれない。

しかし今の世は、誰もそんな都を信じない。同じく、大切な人を亡くした経験を持つクロノにとつては、プレシアの行動はただの現実逃避にしか映らなかつた。

『次元震、震度徐々に増加中！ この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まではあと30分足らずです……!』

通信からは、オペレーター達の切羽詰まった声が響いてくる。それを聞くまでもなく、アースラ中に響く軋みが、あたりに襲いかかる力の凄まじさをこれでもかと伝えていく。

リンディの咄嗟の指示がなければ、きっとこの船は時空の乱れに巻き込まれ、航行不能になつていてもおかしくはない。

険しい表情で駆けるクロノ、彼の耳に、オペレーター達がさらに息を呑む声が届いた。

『庭園の駆動炉が異常稼働…駆動炉を暴走させて足りない出力を補おうとしてる…?!』

『あの駆動炉もジュエルシードと同系のロストロギアのはず…』

伝えられる情報に、わずかに目を見開いたクロノはすぐさま顔を引き締める。一度凄まじい災害を引き起こした古の負の遺物が、同時に二つ以上発動していると聞けば、誰であつても焦らずにはいられない。

同じようにリンデイも、唇を噛み締めながら小さなつぶやきをこぼしていた。

『…はじめから片道の予定なのね…』

「…エイミイ、急いでくれ」

『わかつてるよおー!』

転移装置を起動させているエイミイを急かし、クロノはさらに速度を上げる。ゲートまでの距離がもどかしく、もっと速く走れないのかと自身に対しても苛立ちが募る。

だがその足が、不意に停止する。フェイトとともにブリッジにいたはずのなのはとユーノが、通路の途中でクロノを待っていたのだ。

「クロノ君…どこへ?」

「現地向かう…元凶を叩く! あの人ばかりに任せてられない…!」

「わたしも行く…」

「ボクも……！」

固い決意と、その奥に隠れて煌々と燃える怒りの感情に気づき、クロノは一瞬悩むも、やがて頷きを返す。

今はもう、現場に出たての素人だの民間協力者の立場だのを気にしている場合ではない。武装局員が軒並み倒れた今、戦える者は一人でも多く確保していかねば、事態の解決は望めなくなる。

そして肯定を受け取ったなのはが走り出そうとした時、後ろに立っていたアルフに視線が向けられた。

「アルフは……フェイトについてあげて」

「あ……うん……」

自分も共に戦うつもりになっていたアルフは、なのはの願いにハツと我に返り、あげていた両拳を下げる。

今すぐにあの魔女を殴り飛ばしてやりたくて仕方がなかった使い魔だったが、心身ともに大きな傷を負った主人を放っておけるはずもない。猛っていたアルフは、途端に大人しくなっていた。

『クロノ……なのはさん、ユーノくん。追って私も現地に出ます。あなた達はプレシア・テスタロッサの逮捕を！』

「了解！」

「ちよつと待てよ！」

リンディも少女たちの同行を認め、より一層のやる気を漲らせるのは達だったが、そこに割り込む一人の男の声があった。

「俺たちをほつたらかしにすんじやねえよ……！」

「君たち……！」

振り向いた先に立っていたのは、Aの意匠の甲冑と武器を手にした三頭狼ケルベロスの三人。

苛立った様子で、完全武装となっている彼らに、クロノは鋭い視線を向け、低い声で問いかけた。

「……ノア提督からの許しは出たのか？」

「指示を待つまでもねえ！　こんなデカイヤマ……てめえらだけに任せるわけねえだろ！」

「あのババアには私たちもイライラさせられてるからね……ここらで派手に暴れて、鬱憤を晴らしておきたいのよ」

憤然と鼻息を荒くし、ジンガーが答えると、ナディアも同じく苛立った様子で告げる。

一度上司から止められたことで、中途半端に熱がこもって仕方がないのだろう。比較的冷静なはずのインシグニアでさえ、これ以上時間をとらせるなど言わんばかりの表情

をしていて、やる気が目に見えるようであった。

思わずクロノは、フツと笑みを浮かべる。何かと衝突してきた彼らと、こんな形で意見が合うことになるとは、思いもよらなかつた。

「ならいい……いくぞ」

「待て、お前達」

もはや何も言うまいと、先に進もうとしたクロノが、またしても呼び止められて、鬱陶しそうに顔が歪む。

代わりにインシグニア達が驚きの顔を見せ、早足で追いかけてくる二人の男達――彼らの上官のサクソとムーヴに振り向いた。

「！ 隊長……」

「俺の指示もなく勝手に行くな……」

「けどー！」

「ここでないでいつ行くつてんだよ！」

鋭い眼差しを向け、制止してくるサクソに、ジンガーとナディアはたまらず上下関係も忘れて噛み付く。

インシグニアはそんな二人の前にはずいっと進み出ると、ギロリと遠慮のない殺気をぶつける。上司であろうとも、邪魔をするなら容赦はしないと、そう視線は告げていた。

「止められても行きますよ…流石の僕も我慢の限界ですからね。あの魔女には一発きついのを叩き込まないと、こちらの気が……」

「落ち着いてください。勝手に行くなど隊長は言っているんです」

いまにも嘯み付いてきそうな気迫を見せるインシグニアに、ムーヴが半ば呆れた調子で制止をかける。

訝しげに口を閉ざし、どういうことかと目線で問いかける三人に、ムーヴは眼鏡を指で押し上げ、背筋を正しながら改めて口を開く。

「……『本事件の元凶を直ちに討伐せよ』と、提督からの命令です」

「……そうですか……」

「じゃあ、遠慮なく暴れに行けるな！」

「ええ……」

望んだ許しが上からもたらされたと、インシグニアは静かに笑みを浮かべ、ジンガーとナディアはぐつと拳を掲げて喜びをあらわにする。

思いつきり暴れられ、自分の苛立ちを解消できる機会を得られたことを何よりも喜ぶ三人を見つめるサクソだが、その表情は複雑そうに歪められていた。

「……まさかとは思いますが、この状況を見越していたわけではあるまいな」

「果たして…どうなんでしょうね。まあ、その辺はおいおい考えることとしましょう」

「ああ……そうだな。まずはこの一件を片付けに行こう」

もし本当に、この状況になることを読んでいたのだとしたら、それはそれであまりにも不気味で、サクソもムーヴも思わず疑いの気持ちを抱いてしまう。

しかし、今は身内に対する疑惑を明らかにする場ではない。怪しさを抱えた上官について調べるのは、この一件を全て片付けた後でもきつと遅くはないはずだと、サクソは部下達に向き直る。

三人とも、好戦的な笑みを浮かべてウズウズとしており、サクソは思わず、小さな笑みを浮かべていた。

ケルベロス
「三頭狼、出動だ！」

「了解！」

「やってやらあ！」

ビシツと敬礼を見せ、インシグニア達がゲートに向かって走り出す。

止められることもなくなり、存分に力を振るって良いと許可が降った彼らはもはや、鎖から解き放たれた猛犬も同じ。

ブンブンと得物を振り回し、ゲートの方になだれ込んでいくインシグニア達を見やり、なのはとユーノは思わず笑みをこぼす。

「行こう」

「うんー」

やる気を漲らせる二人は、先に向かった6人に、そしてすでに戦場にいる師に置いていかれまいと、駆け出していった。

アースラ内で再び発動した転移術式に、ブリッジで仁王立ちするリンディは、ふっと息をつく。

元凶を叩くのは、自分の息子と少女達、そして陸上部隊の精鋭達に任せておけば問題はないだろう。自分が相対すべきなのは、今もなお広がりつつある、次元を破壊しかねない最悪の災害である。

「私も出るわ……庭園内でディストーションフィールドを展開して次元震の進行を抑えま
す。みなさん、よろしくお願いしますね」

「はいっー」

部下達が力強く答えると、リンディはキツと鋭い視線をメインモニターに向ける。

じつと厳しい表情で佇んでいた彼女は、しばらくすると恨みがまじげな目を虚空に向け、低く唸るようなつぶやきをこぼした。

「…あとで覚えてなさいよ、アイン」

それに答える者は、この場に誰もおらず。

何となく虚しさを覚えたリンディは、部下達に聞こえないように小さくため息をこぼすのだった。

6. 母の本音

次元の狭間に浮遊する魔女の住い、時の庭園。

小島ほども大きく、広大な空間を有するその場所に突入したなのは達は、目の前に仁王立ちする無数の存在に目を見開く。

赤く目を光らせ、金属音を響かせるそれらは、刺々しい鎧に身を包んだ機械の傀儡兵。全てが全く同じ形状の、そして強いエネルギーを秘めた無数のそれらが、侵入者であるなのは達の元に次々に迫っていく。

「い……いつばいいね……？」

「まだ入り口だ……中にはもつというさ」

思わず冷や汗を垂らすなのはやユーノに対し、クロノや三頭狼の面々、サクソとムーヴはさして驚いた様子を見せない。

エイミイの観測からすでに情報を得て、そして多少の修羅場を前にしたところです。そう慌てない胆力から、傀儡兵の軍団を単なる障害物として見据えていた。

「クロノ君……この子達って……」

「近くの相手を攻撃するだけのただの機械だよ」

「そっか……なら安心した」

ほつと胸をなでおろし、なのははレイジングハートを構える。

もしも、アルフのような人工の生き物であったり、レイジングハートやバルディツシユのように意思を持つ存在だったならば、なのはは彼らを一方的に敵と認識できなかったに違いない。

フェイトを無惨に捨てた魔女を見た後では余計に、彼女に操られる存在達を憐れんでしまっていただろう。

「なら遠慮なく……」

「この程度の相手に……無駄弾は必要ないよ」

【Stinger sniper.】

【FIRE, BULLET. BURNING SHOT】

意気揚々と、進路を塞ぐ無数の傀儡兵を一掃してやろうと、愛機を手に前に出ようとするなのはを、クロノとサクソが平然と止める。

彼女の代わりに前に出た執務官は、自身のデバイスに命じ、周囲にいくつもの青い魔力の刃を生み出し、配置していく。その隣でサクソが、自身の持つ銃の銃口に赤い炎を纏わせ始めた。

「グオオオオ!!?」

自身らに向けられる魔力の刃を、危険な敵対存在の攻撃と認識し、無数の兵達が動き出す。

迫り来る鋼鉄の波を前にしながら、クロノはデバイスを槍のように構え、突きを放ち魔法を発動させた。

「スナイプ……シヨット！」

クロノの声に応じ、配置された数本の青い刃が撃ち放たれる。自らの意思を持つように飛び出したそれらは、不規則な軌跡を描いて傀儡兵達に食らいつき、その身を貫いていく。

瞬く間にその場にいた傀儡兵達は、動力源らしき中心の球体を貫かれ、行動不能に陥っていく。その後、サクソの放った炎の弾丸が炸裂し、耳障りな金属音のみを残し、機械の兵士達が残骸の山を作り上げていった。

「さすがー！」

「すごい……！」

クロノ達の見せた見事な技術に、なのはとユーノが思わず簡単な声を上げてはしゃぐ。

なのはやフェイトの高火力を羨んでいた彼だが、それを補って余りある精密な魔力操作能力に、青少年少女達は目を奪われる。なのはのように、経験の浅い者では早々真似で

きない技に、三頭狼の面々からも口笛が上がった。

「ヒュー……俺たちも負けてられねえな！」

〔MIGHTY〕

「そういうことね！」

〔MIGHTY〕

攻撃を放った彼らを待つことなく、すぐさま新たな傀儡兵が集まり、攻め込んでくる姿が見える。

クロノに代わって獰猛な獣の笑みを浮かべるジンガーに続き、ナディアも意気揚々とカードを抜き出し、自身らの得物に読み込ませていく。機械音声が鳴り響き、槍の穂先と矢の先端に緑と赤の光が灯る。

「おらああああ!!?」

「はあっ！」

強力な重力の力を宿した槍と矢が構えられ、ひとかたまりになって向かってくる鋼鉄の傀儡達に、その一撃が振るわれる。

ジンガーの槍が傀儡兵の頭を叩き潰し、残った体を砲弾のように弾き飛ばし。ナディアの放つ矢が数体の傀儡兵の核を正確に撃ち抜き、無数の敵に爆煙を噴き上げさせた。

「派手ですねえ……僕もやりますけどね」

【MIGHTY】

「後輩に負けて要られませんからね」

【BLIZZARD, POISON, RUSH. BLIZZARD VENO
M】

仲間が見せる雄々しい姿に苦笑をこぼし、インシグニアとムーヴも得物を構える。

迫り来る傀儡の軍に向けてインシグニアが切つ先を構え、渾身の力で刃を振り抜き、鋭く思い斬撃を放つ。宙を舞った斬撃は、瞬く間に鋼鉄の体を真つ二つに両断し、通路に残骸の山を築き上げていく。

一瞬にして、クロノとそう変わりのない数の敵が撃破され、なのはとユーノは呆けた顔で立ち尽くした。

「す、すごい……」

「ぼーっとしてないで……行くよ！」

「あ……うん！」

ようやく静かになった通路で、クロノが先陣を切つてなのは達を促す。まだ何も終わっていないのに、気を抜いていたなのは達は、思わず呻きながらその後を追う。

傀儡の残骸が散らばって歩きづらい中を小走りで進み、最奥を目指す彼らは、やがて周囲に奇妙な「穴」が空いている空間へと足を踏み入れた。

「この穴は……？」

「あまり近づかないで……踏み外すと死ぬより恐ろしい目にありますよ」

覗き込むと、マーブル模様の壁とも言えない妙な景色が見えるその空間を見下ろし、なのはが問うと、インシグニアが彼女の肩を引く。

険しい表情のインシグニアに同意するように、クロノやユーノが強張った表情を見せた。

「ユーノは知ってるな？」

「虚数空間……魔法が発動できない空間だ。飛行魔法も発動しない、落ちたら重力の底まで真つ逆さまだ」

「……了解！」

ブルリ、と最悪の未来を想像したなのはは、慌てて足元に空いている落とし穴から跳びのき、自分の周りを確認しながら慎重に進む。

虚数空間の落とし穴が続く通路が終わり、一同は分かれ道に到達する。先頭に立ったクロノが振り返り、なのはとユーノに鋭い目を向けた。

「二手に分かれる。君達は最上階にある駆動炉の封印を」

「クロノ君は……」

「プレシアを止めに行く！……それが僕の仕事だからね」

デバイスを手に、義憤以上に強い何かを感じさせる目をしたクロノがそう吠える。プレシアの独白が、彼の何を刺激したのかはわからないが、いつも以上の使命感に燃える彼に、なのはは黙って頷きを返す。

「だったら……その間の退路は僕たちが作りましょう」

と、そこでインシグニア達が背を向け、これまで走ってきた通路に剣を構え出す。

視線を向ければ、なのは達を追うように新たに姿を現した傀儡兵達が、ガチャガチャと音を鳴らして向かってくる光景が目映る。

その一団を前にし、三頭狼の面々が戦意をたぎらせた。

「テメエらだけにカツコつけさせるかよ」

「やるならさっさと片付けて、見せ場をこっちによこしなさい」

「ジンガーさん……ナディアさん……」

背を向ける彼らに、なのはは思わず息を飲む。

アインとのことで、彼らとの間には大きな溝ができていた。彼らにも悲しい過去があり、長く恨みを抱き続けていたと知ってからは、より強く壁を作ってしまったようにも思う。

だが、彼らもアインの背負っていた過去を知り、多少の余裕を抱けたように見える。その背を見やり、サクソがふつと笑みをこぼした。

「……頼んだ」

「了解！」

上官に告げられ、インシグニアを筆頭に三人が走り出す。

なのははためらいながらも、先頭を走るクロノ達の後を追おうと一步を踏み出す。が、すぐに立ち止まり、インシグニア達に向かって深々と頭を下げた。

「お……お願いします！」

「ケツ……さっさと行け！」

振り向くことなく、ジンガーが背後にいるなのはにきつい口調で吠え、促す。

もう一度ペこりと頭を下げ、表情を引き締めたなのはが走り去っていくのを確かめると、ジンガー達はニヤリと笑みを浮かべ、得物を振りかぶった。

「グラビティスラッシュ」

「レイバレット！」

「インパクトスタンプ！」

ズズン、と放たれた一撃が傀儡兵達に炸裂し、あたりを地震のように揺るがす。

砕け散る傀儡の残骸の中を駆け抜けながら、インシグニア達は獐猛な笑みを浮かべ、力の限り暴れ続けるのだった。

突入する魔導士達の姿が、空中に浮いたモニターに映し出される。

力の限り、それぞれの信念を胸に立ち向かう勇姿が、薄暗い病室のベッドの前で映る。その様を凝視していたアルフのそばには、ベッドの上に仰向けになり、虚ろな目のまま虚空を見上げるフェイトの姿がある。

力なく横たわり、か細すぎてかすかな息も聞こえてこないその様は、まるで本当に人形になってしまったかのような、胸に刺さる痛々しさがあつた。

「あの子達が心配だから……あたしもちよつと手伝つてくるね」

何の反応も返さない主人の髪を撫で、アルフが優しさに満ちた声と眼差しで告げる。いつものように答えてくれないことに、胸が痛みを訴えるが、それを抑えて微笑みを見せる。

「すぐ…帰ってくるからね。…それで全部終わったら…ゆっくりでいいから…あたしが大好きな、ほんとのフェイトに戻ってね」

もう、この少女が立ち上がることはないかもしれない。あの強さは戻ってこないかもしれない。

だけど、もうそれでいいのかもしれない。今立ち上がることができなくても、いずれ気持ちを取り戻してくればいい。戦うことができなくなっても、その必要もなくなつていれさえいい。

主人は充分戦った。人よりも多く傷つき、頑張り続けたのだ。少しくらい休んだって、誰にも咎められはしないはずなのだ。

「これからは…フェイトの時間は、全部フェイトが自由に使っていていいんだから」

何も答えを返さないフェイトの頬に触れ、アルフがぐつと唇を噛みしめる。

そして使い魔は、踵を返し歩き出す。これ以上主人が傷つく必要がないように、主人に涙を流させる最後の敵を、己の手で今度こそ排除するために。

アルフの姿が消えると、病室にはフェイト一人が残され、完全なる沈黙が降りる。

一切の身じろぎもしない彼女は、虚ろな目のまま天井を見上げ、陰鬱な思考の渦に飲み込まれていった。

「……母さんは…：…わたしのことなんか、一度も見てくれなかった。

何度も蘇る、母と想っていた女性からの拒絶の言葉。

自分の存在の全てを否定し、明確な敵意を見せた魔女の眼差しが、時間を経た今もなお、すでにポロポロの少女の心を責め続ける。

「……母さんは…：最後までわたしにはほほえんでくれなかった。

母さんが会いたかったのはアリシアで…：わたしはただの失敗作。

思い返せば、いくつも納得のいくことばかりが思い出される。

自身の名を呼ばない、過去の母の記憶。事故で長く眠り続けていたという自身の肉体の年齢とは、どうも噛み合わなく見える母の姿。

そして、故郷から遠く離れたあの場所に住んでいた、生活の異様さ。

全てが、母のロープレシア・テスタロッサの言葉を証明していた。

ローわたしの生きる目的は……ただ母さんに認めてもらうことだった。

どんなに足りないって言われても、どんなに酷いことをされても、だけど……笑って欲しかった。

あんなにはつきりと捨てられた今でも……わたし、まだ母さんにすがりついている。

そんな自分が、あまりにも滑稽で情けなく思える。

娘でも望まれた存在でもない、ひたすらに魔女の神経を逆撫でする失敗作であることを自覚しながら、それでも彼女に自身の価値を求めている。

フェイトは重い体を動かし、視線を移す。

少し前までそばにいてくれた唯一の味方は、今は遠くに行っていた。

ローアルフ……ずっとそばにいてくれたアルフ……

言うことを聞かないわたしに、きつとずいぶん悲しんで。

どれだけ腹立たしかっただろう、どれだけ苛立っただろう。

心の底からこの身を案じてくれていたのに、一向に聞き入れることなく、こんな状態に陥ったどうしようもない主人が。

なのに彼女は、戦いに赴いた。主人である自分の道を作るために。

それは、モニターに映る白い衣装の少女にも言えることだった。

——この子……なんて名前だったっけ……。

何度も……教えてくれたのに。

面と向かって、手を差し伸べてくれた白い少女。

どれだけきつく拒絶しても、傷つけても、歩み寄ろうとすることをやめなかった、優しさと強さを持った彼女。

今更になって、その温かい気持ちに惜しくなる。

——何度もぶつかつた……まっしろなあの子。

わたし……ひどいことしたのに……。

話しかけてくれて……わたしの名前を呼んでくれた……。

そんな彼女が戦場において、自分はこんな場所で一人泣き続けている。立ち上がることも、声を上げることもなく、自分の不幸ばかりを嘆き続けている。

側から見える自分の姿は、いったいどれだけ矮小なのだろうか。

「わたしは……わたしは……！」

痛みを訴え続ける、小さな胸。

ボロボロと溢れ出す涙を拭うこともできず、腕一本動かさないままだったフェイト。そんな彼女の耳に、ある声が届いた。

『……お前も大した道化だな、プレシア・テスタロッサ……!』

ガラガラと騒音が鳴り響き、瓦礫が雪崩のように崩れ落ちてくる。天井を彩っていたアーチが砕け、床に落下して山を築く。

数分前までとはまるで異なる場所のように変わり果てたその場所で、アインとプレシアが互いに荒い息を吐き、睨み合う。

だが、わずかにアインの方に余裕が残っているように見えた。

「よくもまあ……絵物語のような伝説にすがってここまでこれたものだ! 実在さえ疑わしい、子供も信じなさそうな過去の遺物がそんなに魅力的だったか!」

「ぐっ……」

「そんなボロボロの体でどうするつもりだった? 行つてすぐに死んでいるやもしれんのに……くだらん!」

耳まで裂けて見える、寧猛な獣の笑みを浮かべたアインが、杖を支えに肩を上下させるプレシアに嘲笑気味に吠える。

バリイツ、と紫電を走らせ攻撃を再開するプレシアだが、その威力は最初と比べて格段に衰え、アインの振った剣によってあっけなく弾かれてしまう。

「出来損ないの人形を操って、ボロ雑巾のように使い捨てて！ 母親を名乗るにはあまりに無様だ！ それで死んだ娘が喜ぶと思っているなら、お前の頭はおめでたい作りをしているな！」

誰に構うことなく、腹の底から放つ罵倒の言葉が続く。

するとそれまで一切応えることなく、迎撃と防御を繰り返していたプレシアの表情が、カッと一気に赤く怒りに染まった。

「喜んでくれるわけ…ないじゃないの！」

憤怒の咆哮とともに、プレシアの杖から段違いの威力の紫電が飛び出し、アインを襲う。

轟音とともに吹き飛ばされる女騎士を睨みつけながら、魔女は血反吐を撒き散らし、激情をぶちまけ始めた。

「私はもう…戻れないところまで来てしまった…！ たったひとつの宝物も守れず、取り戻す事もできない、無力なただの女…！」

虚空に伸ばしたプレシアの手には、自身の吐血の跡のみがある。

たったひとつの宝物を取り戻すために奮闘し、あらゆるものを代価に捧げて、残った

ものの虚しさに魔女が齒を食いしばる。

だがそれでも、止まると言う選択肢は彼女には残されていなかった。

「全てを捨ててでも……壊れてでも何かをしなくちゃ、あの子に合わせる顔がないのよ……!」

「それで……生み出した命を一方的に傷つけ放り出し、自分は片道で幻の国に行つて、犠牲にした世界を壊すと!!? ふざけるなよプレシア・テストタロツサ!!?」

「なんとでも言うがいいわ……私はあの子の母親じゃない。母親なんて名乗れない。私の娘は……アリシアだけ」

険しい形相で吐き捨てるアインに対し、プレシアも乾いた笑みをこぼしながら告げる。

人形の、ひたすらに己の反応を伺い、怯えながらもそばにいようとした作り物の姿を思い浮かべ、プレシアはフツと目を細める。

「あんなにも愚かで一途すぎる子が……私みたいな魔女の子のはずがないのよ」

その目からは、普通の母親と変わらない、真珠のような涙の雫が流れ落ちていった。

7. 殻を破る時

虚空を見上げ、口を半開きにして絶句するフェイト。

今自分が受け取った声が、今だに現実のものと思えず、目を見開いたまま固まる。それほどまでに、彼女を襲った衝撃は強かった。

「……これが……母さんの……本音……？」

敗北した自分に向けられた、母の冷たく容赦のない言葉の数々。全てを夢と思いたくて、自分の耳さえ否定したくて、意識を手放し自己防衛を図ったほどだった、心を抉る言葉のナイフ。

だが今の母と女騎士の対話からは、そんな感情は感じられなかった。自分にはない、魔女が自身に向けた怒りと悲しみが、そしてそれまで使い続けてきた人形に対する本心が、痛いほどに伝わってきていた。

「母さんが憎んでいたのは……私じゃないの？ 失敗した私じゃなくて……怒っていたのは……母さん自身……？」

戸惑いがフェイトを混乱の渦に放り込み、うまく頭が働かなくなる。同時に、なぜ今こんな声が自分の元に届くのかという疑問で、思考の全てが埋め尽くされる。

しかし、ただ一つだけわかったことがあった。

こんな真似ができるのは、今まさに大魔導士とうたわれる魔女と単身戦いに赴き、力の限り暴れ続けている女騎士しかないのだと。

「アイン……！」

目頭が熱くなり、頬を濡れた感触が伝う。

もはや、すべて流れて枯れてしまったと思っていた涙が、ボロボロと溢れ出して止まらなくなる。

手元には、ひび割れて無残な姿をさらしている相棒の姿がある。苦痛の中にありながらも、ずっと共に戦ってくれた相棒を、フェイトはきつく握りしめる。

「バルディツシュ……わたしの、わたし達のすべては……」

今もなお、フェイトの心には深い傷が残り、動こうとすると肉体が痛々しく悲鳴を上げていく。これ以上戦いたくない、痛い思いをしたくないと、立ち上がることを拒もうとする。

しかしそれでも、フェイトは立ち上がらずにはいられなかった。

人形のまま、全てが終わるまで待ち続けることなど、できるはずがなかった。

「まだ、始まってもない……」

ギギツ、と軋みをあげ、バルディツシュの宝玉がか細く点滅する。

いまにも砕け散ってしまいそうなほど、傷ついた機体を無理やり目覚めさせようと、鋼鉄の戦斧が自らを鼓舞する。

その姿に、フェイトの胸にぬくもりが広がっていく。

「……そうだよ、バルディッシュも……ずつとわたしのそばにいてくれたんだもんね。おまえも……このまま終わるなんて嫌だよね……？」

〔Yes, sir.〕

ひび割れた音声で答える相棒に、フェイトは頬ずりをする。

常にこの戦斧は、自分のそばにいてくれた。無茶をした時も、深く傷ついた時も、何も言わずに付き従い、自分に力を貸してくれていた。

こんなにも情けない主のために、そばに在り続けてくれたのだ。

そして、こんな自分に寄り添い続けてくれたのは、バルディッシュやアルフだけではなかったのだと思いつく。

冷たく突き放しても、手を伸ばし続けてくれた白い少女。そして、母と真正面から激突し、自分を奮い立たせる本音を引き出してくれた女騎士。

自分は決して、一人ぼっちではなかったのだと、ようやく気づいた。

「……あの子が言っていた言葉。『捨てればいいってわけじゃない』……うまくできるかわからないけど……一緒に頑張ろう」

【Recovery.】

リンカーコアが奮え、力が漲っていく。同時に相棒の全体にも魔力が浸透し、壊れかけた機体が再生されていく。

一度粉々に折られ、踏みにじられた少女の心は、彼女を思う者達の熱意によって鍛え直され、新たな姿へと復活を果たそうとしていた。

「わたし達のすべては……まだはじまってもいい。だから……ほんとの自分をはじめめるために」

フェイトの眼が見つめるのは、もう母に愛されていた過去ではない。

失った命の代用品でも、役立たずの人形でもない——プレシア・テストロッサに生み出された命、フェイト・テストロッサとしての、唯一の未来だった。

「いままでの自分を……終わらせよう！」

◆ ◇ ♥ ♣

ドオン、と桜色の弾丸が宙を舞い、傀儡兵を貫き爆散させる。

即座に次弾が装填され、次々に放たれていく傀儡兵だが、瞬く間に次の傀儡兵が姿を現し、残骸を踏み越えて迫り来る。

まるで時間が遡っているかのような、最悪の光景だった。

「くっそ……数が多し！ あとからあとから……っ！」

傀儡兵を殴り飛ばし、なのは達の元に駆けつけたアルフが悪態をこぼす。

何もせずじつとしてなどいられないと意気込んでいた彼女だが、終わりの見えない襲撃に徐々に息が上がり始める。

「うわっ……！」

近くにいた傀儡を叩き潰し、息を整えていたアルフは、背後から迫る一体の傀儡に反応を鈍らせる。

しかし次の瞬間、傀儡兵は真横から撃ち出された弾丸により頭部を貫かれ、その場がしやんと崩れ落ちた。

「陣形を崩すな！ 隙を見せれば物量で押しつぶされるぞー！」

「わ……わかったー！」

煙を上げるギャレンラウザーを掲げ、サクソが声を荒げて忠告する。

小さな爆発音が断続的に響き渡り、その度に傀儡兵の頭部が吹き飛ばされ、倒れていく様に、アルフは冷や汗をかきながら表情を改める。

しやべっている暇などない、ここで足止めをくらい続けていれば余裕もなくなり、集まってきた傀儡兵に追い詰められるのは明確である。

「なんとかしないと……！」

なのはがつぶやき、足止めを買って出てくれた三島狼のことを案じる。早く決着をつ

けなければ、より多くの傀儡兵達を相手にしている彼女達も窮地に追いやられるはずだ。

しかしその時、数体の傀儡兵が予想外の機敏さを見せ、背中を向けていたなのはに殺到し始めた。

「なのは……っ！」

ユーノが叫ぶが、狙撃の用意紙をしていたなのははすぐには反応できず、鋭い金属の爪の接近を許してしまう。

たまらず、まぶたをきつく閉じ、体を硬くして動きを止めてしまう。

だが、彼女に届いたのは痛みではなく、聞き覚えのある声と轟く雷鳴だった。

〔Thunder rage.〕

大気をビリビリと振動させ、雨のように降りかかる雷の槍。

数えきれない数で、眩いばかりの威力を誇るそれは傀儡兵を片っ端から貫き、一撃で行動不能に陥らせていく。

ゴトゴトと倒れこんでいく傀儡兵達を呆然と見下ろしたなのは、それをなしたであろう頭上にいる金色の少女を見上げ、満面の笑顔を浮かべる。

「フェー」

彼女の名を呼び、近づこうとしたのはだが、フェイトはきつと鋭い視線をなのは

に——その後ろで上がる粉塵の奥へ向ける。

そこには、他の傀儡兵を踏み潰して現れた、数十メートルはある鋼鉄の傀儡の姿がある。両肩に大砲を備え、比喩物にならないほどに分厚い装甲をまとったそれが、なのはとフェイトに狙いを定め始めた。

「大型だ……防御が固い」

「うん……」

砲門に集まっていく魔力の光を睨みながら、フェイトがなのはに語りかける。

真剣な表情で頷いたなのはに、強い自らの意志を感じさせる眼差しを向け、フェイトは少しだけ不敵な笑みを浮かべる。

「だけど……二人でなら」

「……うん、うんうんっ！」

初めて見せてくれた、フェイトの方から歩み寄ろうとする声に、なのはは心の底から嬉しそうに何度も頷く。

もう、敵として相対する必要はない。傷つけ合うことも、心を傷ませる必要もない。ちゃんと目線を合わせて、向かい合って、本当の気持ちを通わせることができるのだ。それが、たまたまなく嬉しかった。

見つめあつた二人は、真下から砲撃を備える巨大傀儡兵を見下ろし、互いの愛機を構

える。言葉を交わすには、まずあの敵が邪魔になっていた。

「行くよ、バルディツシュ…」

「こつちもだよ、レイジングハート」

今度こそ、壁を取り払い心を通わせあつた主人達に歓喜し、宝玉を輝かせたデバイス達が応じる。

桜色と金色、二つの眩しい光があつという間に砲門に収束し、巨大傀儡兵に狙いを定める。それぞれの愛機の柄を握り締めた少女達は、巨大傀儡兵の大火を噴いた瞬間、引き金を思いつきり引き絞つた。

「サンダー・スマツシャー！」

「ディバイン・バスター！」

「セーのっ！」

二人の息のあつた掛け声とともに、レイジングハートとバルディツシュの砲門から閃光が迸る。

光の激流となつた二色の砲撃は、巨大傀儡兵の砲撃と真正面から激突し、あつさり打ち破り傀儡兵に炸裂する。強力な一撃をその身に受けた傀儡兵は、たちまちただの鉄屑と成り果て、轟音を響かせて倒れ臥す。

土煙が立ち上る中、傀儡兵の沈黙を確認したなのとはフェイトが、じつと静かに見つ

めあった。

「……フェイトちゃん」

「……」

なのは案じるような声に、フェイトは無言のまま頷く。

吹っ切れた、というほど気持ち切り替わったわけではない。しかし、ただ操られていた頃とは雲泥の差に見える顔色に、なのははほっと安堵の息をつく。

同じく微笑みを返すフェイトに、感極まったアルフが抱きついた。

「フェイト……フェイトおっ!!?」

「ん……アルフ、心配かけて……ごめんね」

「うん……うん……っ!」

主人が気持ちを持ち直したことに、心底安堵し歓喜して、使い魔は涙をボロボロこぼしながらしがみつく。

フェイトはそれに申し訳なさそうに顔を歪め、優しく頭を撫でてやる。その様子に、サクソやムーヴも仮面の下で笑みを浮かべる。

「アインさんが時間を作ってくれて……間に合うのは、きつと今だけだよ」

「……うん」

泣き止まないアルフをなだめるフェイトに、なのはが表情を引き締めて告げる。

少女が自分を取り戻したことは喜ばしいが、まだ、何一つ終わってはいない。一組の親子の決着は、まだついていない。

フェイトは今一度覚悟を決め、母のいる玉座の間の方を見やり、唇を噛んだ。

♠ ◆ ♡ ♠

「ハア…ハア…クソ、やつと片付きやがった」

ガシャン、と最後の傀儡兵を斬り捨て、ジンガーがいまにも倒れそうな顔色で毒づく。鎧はボロボロ、その下はあざや切り傷だらけで、当分痛みが抜けない体になってしまっていることだろう。それでも生き延びられたことに、槍使いは深く息を吐き、安堵を見せた。

「流石の俺も、もう一步も動けそうにねえな…：…かつてねえ修羅場だった」

槍を杖代わりにし、よろよるとその場に腰を下ろす。最初から最後まで気の抜けない、チームプレイなど一切役に立たない全力戦闘。

気づけばほぼ一人で突撃し、がむしやらに目の前の敵を叩き潰すことばかり考えていた。そこでもうやく、ジンガーは他の二人の仲間のことを思い出した。

「おいシグニア…！ ナディアア！ お前ら無事か…!!? 死んでねえだろうな!!?」

しん、と静まり返った通路内で、ジンガーの怒号じみた呼びかけだけが響く。

動く物は、自分以外にいない。敵の傀儡兵は全て破壊したため、他の二人の返答が聞

こえるはず。なのに、返ってくる声は一つもなかった。

「……おい、笑えねえ冗談やめろよ。返事しやがれ。…おい、お前ら!!？」

ヒヤリ、と嫌な予感を覚えたジンガーが、悲鳴をあげる体を無理やり立たせ、傀儡兵が転がる中を進む。

槍に体重を預け、疲労で覚束ない足取りで、姿の見えない二人のことを案じる。

するとやがて、彼は目の当たりにする。

通路の途中で横たわる、ボウガン使いの少女の変わり果てた姿を。

「……ウソだろ……」

サーッと血の気を引かせたジンガーは、慌ててナディアのもとに駆け寄り、その体を抱き起す。

ぐったりと、糸の切れた人形のようにピクリとも動かない彼女を揺さぶり、なんとか覚醒させようと荒ぶる声をかけ続ける。

「ナディアア！ おい、しっかりとしろナディアア！ おい！」

いつもなら、不機嫌そうに眉間にしわを寄せ、悪態をつけて睨みつけてくる、長く苦楽をともした仲間の一人。

だがもう、ナディアは二度と言葉を返さなかった。虚ろな目を晒しながら、ジンガーに揺さぶられるまま沈黙している。完全に、死亡していた。

「……一体、何が……!?」 シグニアは……? シグニアはどこに……!?」

何が起こっているのか、全くわからない。

呆然とナディアを抱き起こしていると、ジンガーはふと手のひらの熱くぬるりとした感触に気づく。

それがナディアの体から流れたものであり、彼女に刻まれた大きな裂傷からだと思いついた時。

彼の胸を、鋭い刃が貫いていた。

「え……?」

目を見開き、自分の胸から生えているそれを見下ろすジンガー。

ごぼりと血を吐き、固まっていた彼はゆっくりと振り向き、自分を貫いている者の顔を凝視し、言葉をなくす。

目の前の顔がニタリと笑った瞬間。

ジンガーの意識は、深い闇の中に沈んでいった。

8. 罪人の告白

ガシヤン、ガシヤンと耳障りな金属音を響かせ、傀儡兵が破壊され、倒れていく。

あたりには無残な残骸がいくつも転がっていたが、それを踏み越えて次から次へと前に進み出てくる。長い戦闘が続いているが、一向に終わりが見えてこない。

だが、ユーノは決して引かない。魔導炉ヒュードラと相對するなのは背にし、不退転の覚悟で無数の心なき兵に挑む。

「防御はボクがやる…なのはは封印に集中して」

「うん！」

信頼する師にして友達である彼の言葉に、なのはは力強く頷き笑みを浮かべる。任せろといった彼の背中に疑う余地はなく、なのはは安心してもう一つのロストログアに挑むことができる。

レイジングハートを構え、術式を作り上げる彼女は、不意にふふつと笑い声を漏らした。

「……いつも通りだね」

「え？」

「ユーノくんは……いつもわたしと一緒にいてくれて、守ってくれたよね」

不意の言葉にユーノは訝しげに眉を寄せ、横目でなのはを見やる。

彼にとつては当たり前のこと……危険な戦いに巻き込み、怖い目に合わせてばかりの、元はただの心優しい普通の少女だった彼女のためを思えば、やって当たり前に行いのはずだった。

だがなのはは、それに首を振る。共に戦ってくれることそのものが、彼女にとつては重要な思いやりなのだ。

「……だから戦えるんだよ。背中がいつも……あつたかいから」

心の底から嬉しそうに、優しい微笑みを浮かべて語るなのはに、ユーノは思わず状況も忘れて見とれてしまう。

慌てて我に返り、隙を伺うように包围網を狭めてくる傀儡兵と向き直るが、不意に伝えられた温かい気持ちに、つい頬が熱くなってしまう。

「いくよ……！ デイバインシューター、フルパワー……！ シュートっ！」

それに気づくことなく、なのははレイジングハートによる砲撃を撃ち放ち、魔道炉を狙う。

自分に任された役目を全うするために。

今もどこかで戦っているもう一人の師に恥じないように。

傷つき、それでも立ち向かうことを選んだ優しい少女を、少しでも手助けできるように。

——母さん……!

襲いくる傀儡兵を片っ端から切り刻み、残骸にしていきながら、フェイトは長い長い通路を雷光のように飛翔する。

かつては通い慣れていた住まいであり、ジュエルシード搜索の任を受けてからは通るのが憂鬱であったその道を、少女は煩わしそうに通り過ぎていく。

無駄な広さが、今はただひたすらに邪魔だった。一刻も早く母の元に辿り着きたいのに、一向に目的地が遠いまなのだ。

——わたしは貴方に利用されていただけなのかもしれない……。

ただの人形でしかなかったのかもしれない……。

胸に宿る感情が、より一層フェイトを逸らせる。

ようやく見つけた、自分の想い。白い少女の助力で辿り着くことができた、自分の母に対する真なる想い、本当に伝えたかったこと。

時間切れになり、母が遠くへ行ってしまう前に、何としても言葉にしたかった。

——……それでもわたしは、母さんに伝えたい事がある。

たとえ耳を傾けてもらえなくても……。

お願い、間に合って……！

全身に漲る魔力の全てを推進力に変えるように、金色の少女は鋼の通路を飛び去っていった。

◆ ◇ ♥ ♡ ◆

「ハア……ハア……!!？」

「ゼエ……ゼエ……!!？」

斬り刻まれた、あるいは焼け焦げた地面を挟み、息を荒げる二人の美女が睨み合う。騎士と魔女、物語における善と悪を体現したような構図で、アインとプレシアが互いを見据えて得物を構える。

プレシアの衣服にはいくつも切れ目が入り、その下からは痛々しい傷跡が覗き、アインの鎧はいくらか砕かれ、じゅうじゅうと焦げる音と匂いを辺りに撒き散らしている。一進一退、お互いに退かない攻防があったことは明確であった。

しかし、流石の両者も疲労が溜まったのか、それ以上動く事ができずにいる。迂闊に動いた瞬間が決着の時だと、互いの動きを探っているのだ。

「プレシア・テスタロッサ。終わりですよ……次元震は私が抑えています。駆動炉もじき封印、あなたのもとには執務官が向かっています」

満身創痍に近い姿にもかかわらず、大気がビリビリと震える凄まじい緊張感を放つその空間に、通信越しのリンディの声が響く。

アインもプレシアもそれに視線を向ける事なく、互いを睨み合ったままだったが、聴覚だけはそちらへ傾けていた。

「忘却の都アルハザード……かの地に眠る秘術……そんなものはもうとつくの昔に失われているはずよ？　今やその力は……存在するかどうかすら曖昧なただの伝承です」

「……ふふ、バカなことを」

投降を促すリンディに向けて、プレシアは杖を構えたまま馬鹿にした笑みをこぼす。

疲労ですわった魔女の目には、未だ爛々と狂気の光が瞬いている。今更他者の言葉などで揺るぐことのない、崖つ淵に追い詰められたことによる不退転の覚悟を顔じゅうに表し、顔の見えないリンディを戦かせる。

「終われるはずがないじゃない……私はあの子に何もできなかった。私にいつも笑顔をくれて……生きる意味をくれていたあの子に何も返してあげられなかった。そんな私ができる事がこれなの……これ以外にないのよ」

しかしその目の奥にあるのは、狂おしいほどの愛だった。

何よりも大切で何よりも守りたかった命を、他ならぬ自分の失態で失うこととなった自責の念が、彼女をこうも駆り立てていた。

自身を侵す病魔の影を、娘に似せて作った人形に全く悟らせなかつたほどに。

「ウツ……ゴフツ！　ゴホツ！」

「…その身体で何ができるといふの、プレシア・テスタロッサ」

「これが最後なの……母として何も役目を果たせなかつた私にできる…あの子への最後の恩返しなの…意味がない？　知ったことではないわ」

死を目前にしてなお衰えることのない執念に、リンディはそれ以上の言葉が出てこない。

同じ母であり、愛する者を失う痛みを知る彼女であるからこそ、魔女の苦悩と絶望は痛いほどによくわかる。自分が彼女であつたなら、もしかしたら同じ道をたどつていたかもしれない、そう思えるほどに魔女の姿は痛々しく悲しい。

プレシアは自嘲するように笑みを深め、そしてキツと表情を憤怒に変えて、アインを睨みつけた。

「それを…あなたなんかに邪魔されてたまるものですか…！　女も捨てた…血と灰に汚れたあなたなんかに！　私の願いを邪魔されてたまるものか!!？」

バリツ！とプレシアの杖から紫の雷撃が迸り、幾本もの雷の槍となつてアインに降り注ぐ。

これまで剣で防ぎ、弾き、切り捨ててきたその雷の槍を——アインは一切避けるそ

ぶりを見せず、真正面から受け止めた。

〔アイン！〕

通信がノイズまみれになるほどの衝撃と轟音が響き、アインが爆炎の中に飲み込まれる。

常人ならば、バラバラに吹き飛び無残な姿に変わり果てていよう光景に、騎士の正体を知るアースラクルーからも悲鳴が迸る。リンデイさえもゴクリと息を呑み、粉塵の奥をじつと凝視し続ける。

「……ああ、わからないよ。わからないさ……」

やがて、粉塵をかき分けるようにして、アインが自嘲気味に鼻を鳴らして顔を出す。苦痛を訴えている様子は一切ない、平然とした態度のまま、砕けた足場を踏み越えてプレシアに再び接近していく。

「母になることすら許されなかった私には……失う痛みなんて……わかるはずもない」
その姿は声と釣り合わぬほどに、悲惨だった。

額は深く裂けて頭蓋が覗き、片目は眼孔ごと潰れて、どくどくと緑の血が噴水のよう
に溢れ出す。顔の半分も焼けただれ、ほとんど原形をとどめていない。

鎧は上半身のほとんどが吹き飛び、バリアジャケットも焼け焦げてほとんど衣服の役
割を果たしていない。あらわになった肌にも裂傷と火傷が刻まれ、吐き気を催すほどの

惨状を晒していた。

だがその姿も、徐々に変わっていく。焼け焦げた皮膚は剥がれ筋繊維があらわとなり、その上を新たな皮膚が覆っていく。

まるでCG画像のようなありえない光景を目の当たりにしながら、プレシアは眉間にしわを寄せる。

「やつぱり……復活が早いどころか、あれだけの傷を負って存命な上、あの化け物を相手に一人で大暴れするなんておかしいと思っていたら……普通の人間じゃなかったようね」「ベースは人間だよ……単に、死ねないだけで痛覚も残っている。慣れてしまったがな……」亀裂の入ったブルースペイダーの刀身を撫で、アインは困ったように肩をすくめる。額をぐいっと乱暴に拭うと、傷跡のないまっさらな状態を見せつける。

ほとんど全裸に近い上半身も、元からあつた傷跡を残して綺麗さっぱり元どおりになつていた。

まさに異形、まさに人ならざる存在。

プレシアはそんな様を見せて立ちふさがる女騎士に、信じられない様子で首を振つた。

「あなたこそ……そんな様になつてまで、どうして戦うの。人の身を捨てて……いいえ、捨てさせられてもなお」

「……さあ、どうしてだろうな。私にももうわからなくなってしまったよ」

恐れを孕んだ魔女の問いに、アインは遠い目で天井を見上げ、深いため息をつく。

自分がどれだけ不条理な存在で、望まれぬものであるかは十分理解している。娘への謝罪のために、世界を丸ごと巻き込もうとしている魔女にも負けず劣らない狂いつぶりに、我ながら呆れ果てるばかりである。

「あいつを失わずに済む道を選んだつもりで、二度と会えない身になった……自由な選択をしたつもりで、首輪と鎖付きで飼われる身になった……私は矛盾し続けている。そんな事、私が一番よく理解しているよ」

自分で口にしてみると、余計にどれだけおかしい思考の持ち主かがはっきりとして、ますますため息が重くなる。

しかしそれがなぜだか、他人事に思えるほどどうでもいいことに思えていて、自分自身の不可解さに苦笑が溢れる。

考えれば考えるほど、人とは相入れない存在になっているのだと自覚できた。

「だが、そんな事どうでもいいんだ……私は私のまま在り続けたい、あいつを愛し続けたままでもいい……それだけのことだ」

そんな彼女を支える唯一のものは、もう彼女の目の前に現れることはない。

一方的に解決策を強行し、身勝手に別れを告げ、突き放した女騎士は、彼の姿を睨に

思い浮かべたまま、魔女に再度剣を突きつける。

その姿に、プレシアは思わず呆れた表情でアインを見つめていた。

「……滑稽ね、あなた」

「自分でよくわかつているよ」

ケラケラと嗤うアインの前で、プレシアはこれまで以上にイライラとした様子を見せ始める。

どうでもいい話を聞かされた苛立ちか、時間を無駄にしていることへの焦燥か、空気を読まない女騎士の態度への怒りか、それとも。

同族嫌悪というものか。

「いい加減終わらせようか……この無意味な戦いを!!?」

「無意味というなら退きなさい……私の願いの邪魔をしないで!」

バリツ!と互いに迸った雷光がぶつかり合い、激しい火花が両者の間で弾け飛ぶ。余波だけで壁を砕くほどのそれを、互いの得物に宿し、次で決着をつけるほどの全力を注ぎ込んで行く。

だが、いざ飛び出そうと女騎士が身構えた時、彼女たちの頭上の天井が粉碎され、何者かが飛び出してきた。

「いや……もう終わりだよ、プレシア・テストロッサー!」

息を切らせ、そう吠えるクロノ。彼の額からは血が流れ、壮絶な死闘を繰り広げてきたことを物語っている。

そして彼の声には、妄執に囚われる魔女とそれに立ち向かう異形の騎士に対する怒りが、ありありと表れていた。

「どんな魔法を使つても……過去を取り戻すことなんてできやしない。そして、死者に償うなんてこともできはしない……！」

プレシアは叫ぶように語るクロノに、ギロリと鋭く突き刺さるような視線を向けて黙り込む。バリバリと帯電する杖を持ったまま、まっすぐに見下ろしてくるクロノを睨みつける。

「世界はいつだって……『こんなはずじゃない』ことばかりだよ……ずっと昔から……いつだって、誰だってそうなんだ」

少年の目にもまた、魔女と女騎士の目に浮かんだものと良く似た感情が表れている。そしてそれは、離れた場所にいるリンディの目にも似たものである。

かつて大切な人を理不尽に奪われた、心に刻まれた深い痛みを知るがゆえに、クロノはその傷口の抉り合いを続ける彼女達に、激しい怒りの声を向けていた。

「こんなはずじゃない現実から……逃げるか立ち向かうかは個人の自由だ。だけど……自分勝手な悲しみや後悔に無関係な人間まで巻き込んでいい権利は……どこの誰にもあ

りはしない！」

「……クロノ」

雄々しく吠え、デバイスを突きつけるクロノに、アインは剣を構えたままスツと目をそらす。

一進一退の戦いに増援が加わり、均衡が崩れ始めたその時。

「……母さん……！」

一人の少女の声が、玉座の間に大きく響き渡った。

9. 伝えたい想い

「……母さん」

ガラガラとどこからともなく、庭園が崩壊していく音が聞こえる。

プレシア・テスタロツサがこの地へ移り住んで数年、役目を全うしつつある時の城が、その命を終わらせようとしている。

そんな危険な地に足を踏み入れ、魔女の作った人形——フェイトは、か細くも意思のこもった眼差しと、声をプレシアに向ける。

プレシアは用済みとなった人形に胡乱げな目を向け、不機嫌そうに眉をしかめる。呼ばれても答えることなく、重苦しい沈黙が降りたその時だった。

「ウツ…」

突如、その場で口元を押さえ咳き込むプレシアを目にし、フェイトはハッと息を飲む。背を曲げ、新井行きを着く彼女の手に赤色が付着していることに気づくと、フェイトは慌てて駆け寄ろうとする。

「母さん……！」

「……何を……しにきたの……？」

しかし、母の身を案じる声は、母によって止められる。

かつての恐怖と癖が蘇ったか、ビクツと肩を震わせて立ち止まるフェイトに、プレシアは憎憎しげな視線を向けて背筋を正す。

「消えなさい……もうあなたに用はないわ……」

心配も手助けも求めない。お前の全てを必要としないとしても言いたげな魔女の態度に、少女はぐつと唇を噛み、後ずさりそうになる。

しかしその時、フェイトはどこからか強い視線を感じ目を見開く。

振り向くとそこには、真剣な表情で見つめてくる、緑の体液に汚れた女騎士の姿があり、フェイトに驚愕で瞳目させる。

しかし、彼女の中に芽生えたのは恐怖ではない。

自分を見守り、行動の全てを見届けようという意志を感じ、怯えて凍りかけていた心が、再び熱を取り戻し始めた。

「あなたに……言いたいことがあって来ました」

小さく深呼吸を行い、フェイトは再びプレシアに向き直る。

苛立たしげな態度を取られても臆することなく、自分の中にある想いを解き放とうと、しっかりとその場に立ち、魔女と対面する。

「……私は……ただの失敗作で、偽物なのかもしれません。アリシアになれなくて……期待

に応えられなくて、いなくなれって言うなら遠くに行きます。…だけど私は…フェイト・テストロッサは……」

すつと上げ、まっすぐに魔女に向けられた目に宿る、優しい光。

何度も迷い、悩み苦しみ、糸に引かれるままに彷徨い続けてきたかつての人形が、自分の中に見出した心。その中であつた、母に対する真なる想いを、フェイトは迷わず告げる。

クロノさえ、驚愕で大きく目を見開くほどに美しい笑顔で、心を凍結させた魔女に贈り届ける。

「あなたに生み出してもらつて、育ててもらつた…あなたの娘です。今までずっと…：今も、きつと」

胸元に手を当て、ぎゅつときつく握りしめられた少女の手が、想いの強さを表す。これだけは決して、誰にも否定させないという確固たる意志を見せつける。

クロノとアインは、そんな少女の覚悟と想いを見守るように、何も言わずにその場に佇む。犯罪者の捕縛など今は一切考えず、じつと一つの母娘の行く末を見届けようとしていた。

「母さんに笑つて欲しい。幸せになつて欲しいって気持ちだけは…本物です。私の…フェイト・テストロッサの、本当の気持ちです」

魔女も無言のまま、蓄え続けていた思いを口にした少女を見つめる。

だがアイン達と違い、魔女の目にあるのは呆れた感情だった。崩れる城や広がる虚数空間の穴、逃げ出さねば全てが終わるような惨状の中で、甘い事を口にする出来損ないの人形を凝視する。

やがてそれは表情にも表れ、プレシアはハッと大きな声で嘲笑い、フェイトを鋭く睨みつけた。

「だから何?？」 いまさらあなたを娘と思えと言うの?？」

「あなたが……あなたがそれを望むなら、私は世界中の誰からも、どんな出来事からもあなたを守る」

かつては肩を震わせ、怯えるばかりであった魔女の怒号にも臆する事なく、フェイトは穏やかな笑みを浮かべたまま、母の方へ歩み寄っていく。

近づいてくる、娘の姿をした出来損ないの人形を前にし、プレシアは無意識のうちに、一歩後ずささっていることに気がついた。

なぜ、後ずさったのか。この人形を相手に何を恐れたというのか。自分の行為に疑問が生じ、初めてプレシアの表情に動揺が混じる。

戸惑い、一筋の冷や汗を垂らして困惑をあらわにするプレシアの元へ、フェイトは少しも目を逸らさないまま歩み寄る。

「私があなたの娘だからじゃない……あなたが、私の母さんだから」

そう言つて、手を差し伸べるフェイトを前にして、プレシアの思考はますます鈍化していく。

何も気にする必要はない。ただの人形の戯言なのだと、自分にはもう関係のないどうでもいい存在なのだと、視覚からも聴覚からも追い出し、認識自体してやらなければいい。

なのに、なぜかプレシアは自分の視線をそらすことができなかつた。

——くくだらない。

しかしだからと言って、自分が口にした言葉の全てが消え去つたわけではない。それまで抱いていた人形に対する感情が、偽りに変わったはずがない。

自分のうちにあるすべての感情に蓋をし、はつきりと拒絶するためにそう吐き捨てようとした時だつた。

プレシアの体が、自分でも不思議なくらいスムーズに動き、フェイトに飛びかかり、その体を押し飛ばしていた。

「!?」

「プレシア・テスタロッサ!」

突然の凶行に、自体を見守ろうと下がっていたクロノが怒号をあげ、フェイトは絶望

に目を見開く。

同時に、アインもまたプレシアに向かって走り出し、下げていた剣を大きく振りかぶっていた。

向かってくる女騎士の、敵意に満ちた鋭い目に気づいたフェイトは、母に向けられている刃を止めようと、倒れこみながらバルディッシュを構える。

しかし、アインは急に方向を変え、逆にプレシアをかばうように背を向けて立ちふさがり、手にした刃を振り下ろす。

次の瞬間、ギイン！と甲高く耳障りな金属音が鳴り響いたかと思うと、赤と緑、二色の鮮血が空中に噴き上げられた。

「……………え？」

突然の事態に、飛び出しかけたクロノも、背中から倒れ込んだフェイトも固まり、見開いた目で目の前の光景を凝視する。

二人の前にあつたのは、大きくえぐられた脇腹を押さえ、俯せに倒れ込むプレシアと、同じく欠損した脇腹を押さえて膝をつき、大量の脂汗を顔爺から吹き出させるアインという。

我が目を疑う、壮絶な光景だった。

「ぐ……………あ……………」

「母さん！ アイーン！」

ごぼりと緑の血を吐き、剣を支えにしながら目を見開くアイーンと、苦痛のため過呼吸もまともにできないでいるプレシア。あまりに急な展開にフェイトは混乱に陥るも、即座に二人の身を案じ、駆け寄っていく。

だがそばに寄ろうとした少女を、女騎士は片手で制し追い返す。代わりにクロノがある一点を睨みつけ、アイーンを庇う位置に入った。

「アルデブラント陸士！ これは……」

「…………… どういう、つもりだ……………」

クロノはデバイスを構え、その方向に——アイーンとプレシアを貫いた金色の閃光が迸った方向を睨みつける。

アイーンの、苦痛に満ちながらもどすの利いた声が、姿の見えない襲撃者に向けられる。その直後、アイーン達のいる方に、コツコツと一つの靴音が響き渡ってきた。

「さすがです……あの一瞬で僕の気配に気づき、あの二人を救うとともに反撃に転じようとは。まったく……そううまくはいきませんよね」

瓦礫の積み重なった闇の向こう側から、そんな苦笑交じりの声が届き、アイーンとクロノはギロリと視線を鋭くさせる。

研ぎ澄まされた刃、いや、鋭利に尖った凶器のような目が、この突然の凶行をなした

乱入者を射抜き、凄まじい気迫をほとばしらせた。

「どう言うことかと聞いている……！ 小娘！」

「わかりませんか、アルデブラント陸士」

怒りをあらわに咆哮をあげるアインに対し、その人物は——インシグニア・ジムニーは困ったように首を傾げ、笑いかけるのだった。

「この事件を——いいえ、全てを終わらせに来たんですよ」

第Ⅺ章 切り札はその手の中に

1. 番犬の謀反

ズシン、と音を立て、最後の傀儡兵が仰向けに倒れこむ。

胸に大穴を開けられ、毒で錆つき、あちこちが氷漬けになったそれを見下ろし、ムーヴは荒く息を吐きながら踵を返す。

あたりに転がる敵の残骸を見渡し、それらを破壊するのにかかった決して短くない時間、間に顔をしかめつつ、無言で佇んでいる上官の元へ駆け寄る。

「…マンダリン陸佐！」

ダイヤの銃士に呼びかけるが、彼はそれに答えず、じつと足元に目を向けている。訝しく思ったムーヴは、一体何を見ているのかと彼の隣に向かう。

「こつちの傀儡兵はすでに全滅させまし……これは!?!」

「ムーヴか……どうやら、俺達は一足遅かったようだ」

それがなんなのか気づいたムーヴが、仮面の裏で驚愕に大きく目を見開いて絶句する姿を、サクソは横目で見やり唸るような声をこぼす。

瓦礫と残骸の中に倒れこんでいたのは、彼らの部下達の変わり果てた姿だった。

ナディア・ミラジーノとジンガー・ケイマン。性格にやや難がありながらも優秀な戦力を有し、本任務において期待をかけられていた二人の騎士。

そのはずなのに、二人とも胸を真っ赤に染めたまま、光を失った目で虚空を見つめている。もう二度と何も映すことのないその目からは、無念の証か涙の筋が溢れていた。

「ジンガー……ナディア……どうして二人が。まさか、傀儡兵に……？」

「わからない……俺がここに来た時には既に」

「い………いつたい誰がこんな事を……？」

部下に起きた訃報に、ムーヴは表情を引きつらせながら辺りを見渡す。

管理局に属する以上、殉職する局員が出るのは仕方がないこと。荒事を専門に行う部隊にあれば特に当たり前のことであり、覚悟をしていなかったわけではない。

しかし、この二人の死はあまりに唐突すぎた。彼らの有する力は、そう簡単に突破できるとは生温いものではなかったはずだからだ。

「この二人の相手は、この程度の傀儡兵では足止め程度にしかないはず………なのに、なぜ……？」

自分の目が信じられないと、仮面の奥を冷や汗でいっばいにしながらムーヴは誰にもなく問いかける。

サクソはじつと二人の部下の亡骸を見下ろしていたが、やがてわずかに目を見開き、

遺体のある点に注目し始める。

それは遺体において最も目立つ点であり、たった一つしかない傷跡。胸の中心から背中側まで達し、心臓を真つ二つに両断している痛々しい傷跡だった。

「…見る。外傷があまりになさすぎる。ろくな抵抗もできないままやられたと考えるべきだ」

「だったら尚更……！」

実力者を相手にそんなことができる猛者が敵にいるのか、と否定の言葉を口にしかけるムーヴ。

しかしじきに、その表情がが愕然としたものになり始める。

サクソが何を言わんとしているのか、そしてその推理が示す下手人の顔を思い浮かべてしまい、ムーヴの顔色はみるみるうちに悪化していく。

「……まさか」

「考えうる最悪の状況だ：一番恐ろしいのは、俺達がここに来るまでそれを悟らせなかったやつが仮面の分厚さだ」

サクソはナディアとジンガーの亡骸を抱え、仰向けに体勢を変えさせた後、開かれたままの瞼を閉じさせる。

別れの言葉もないままに逝ってしまった部下達に黙祷を捧げ、同時に彼らをこのよう

な目に遭わせた敵のことを思い、激しい怒りと悲しみを同時に抱く。

悔しき、憎しみ、怒り、疑問。あらゆる感情がサクソの胸の中で渦巻くが、それを抑えながらサクソが拳を握りしめる。

今最も懸念すべきは、本事件の黒幕——いや、おそらくは利用された魔女のところに向かった、旧知の女騎士のことだった。

「いかん……あいつが危ない」

♠ ◆ ♡ ♠

「ぐふっ……」

ひび割れた地面に膝をつき、アインが苦悶の声をこぼす。口と腹部の傷からは大量の血液が噴き出し、あっという間に足元を緑色に染め上げていく。

手のひらで傷口を押さえるも、溢れ出す鮮血を抑えるには至らず、グラグラと揺れる視界で地面を凝視することしかできない。

「効くでしょう？ ただでさえあなたの肉体は、度重なる戦闘のダメージを負い続け、その上同族からの一撃……立つこともままならないでしょう」

ガクガクと全身を震わせ、項垂れる女騎士に向けて、緑の血に濡れた剣を下げた少女が愉しげに笑う。

任務への忠実さを全身で表してきた少女騎士の変貌を前に、アインはもちろんクロノ

も絶句し、フェイトやアルフに至つては驚愕で理解が追いついていない様子。腹部をえぐられたプレシアも、激痛に唸りながらその光景を凝視し、顔を歪める。

次の瞬間、ごぼっ！と大量の血がアインの口から吐き出され、尻餅をついたまま固まつていたフェイトを正気に帰らせた。

「母さん……アイン！」

慌てて立ち上がり、女騎士達の元に駆け寄ろうとしたフェイトだが、背筋に走る寒気にすぐ足が止まる。

コツコツと靴音を響かせて向かってくるインシグニアの、人間どころか生物と思えないほどの殺気に気圧され、それ以上近づくことができなかつた。

「インシグニア・ジムニー！ 一体何のつもりだ!?」

「言つたはずです。この事件に終止符をうちにきたんですよ……僕の、本当の使命を果たすために」

「使命だと……!?」

代わつてクロノがデバイスを構え、鋭く声を上げて詰問をするが、インシグニアはその気迫を全くものともしていない様子で微笑みを返す。

意味のわからない返答に戸惑い、冷や汗を流して体を強張らせる青年に、少女騎士は突如遠い目で虚空を見つめ、ため息混じりに語り始めた。

「長かったですよ。本当に……一局員として今の地位に就くのも、マンダリン陸佐やカムシン陸尉に近づくのも、そして何より……自然にアイン・K・アルデブランド陸士に接近し、本事件に接触するまでも」

その声はまるで、長き人生の全てをかけて打ち込んできた何かが報われようとしているような、そんな満足感を感じさせる柔らかな声だった。さらにはうつとりとした恍惚な表情が、少女騎士の正気を疑わせる。

この惨状にあまりにも似つかわしくもない、そして何より狂氣的な執着を感じさせる言葉に、その場にいた誰もが言葉をなくしていた。

「やつと報われる……やつと僕の努力は果たされる！ 僕の悲願は、今この場でようやく果たされるんです……！」

ぎゅつと胸の前で指を組み、天井に潤んだ目を向けて叫ぶ様子は、天からの啓示に歓喜する狂信者のよう。

美しい要望の少女が見せる狂った姿に、フェイトやアルフはぞくつと全身に震えを走らせ、怯えた目を向ける他になかった。

「ああ……何という喜びでしょうか！」

剣を振りかざし、付着したアインの血を撒き散らして、インシグニアは自身の狂気をこれでもかと表す。

だが次の瞬間、その笑顔が固まる。

いつのまにか、彼女の周囲には無数の青色の魔力の刃が展開され、ずらりと一切の逃げ場をなくす形で浮遊していたのだ。

「…何をしでかすつもりか全くわからないが、聞く気もない。君のやった事は…重大な裏切り行為だ。今この場で拘束させてもらおう！」

近くを置き去りにする速さで魔法を完成させていたクロノが、天井を仰いだまま立ち尽くすインシグニアに告げる。

上下左右前後、どこに逃げようと絶対に逃げられない布陣を用意し、謎と狂気に満ちた裏切り者に警告する。

「ステインガー・レイ！」

殺しはしなくとも、動けなくなるほどに痛めつけるつもりで、クロノは生み出した刃を撃ち放つ。

着弾するまでに一瞬も必要ない、加減はしつつも容赦のない猛攻が、インシグニアを撃ち貫かんと一斉に放たれる。

しかし、いつそ絶望的な魔力の刃の雨を前にしてなお、インシグニアの笑みは消えていかなかった。

「無駄ですよ」

小さく、ぼそりと呟く声が聞こえた時には、凄まじい閃光と轟音が辺りに鳴り響いていた。

決着はついた、と確信していたクロノは、目の前にある光景に一瞬思考を忘却する。

インシグニアは、無傷だった。

黒鉛の後ろ、クロノの魔法が炸裂した位置とは一歩ほどずれた位置から姿を現した。そして悠々とした態度でクロノを見つめ、呆れたように剣を肩に担いで、とんとんと鳴らしてみせていたのだ。

「…バカな」

「一直線に向かってくるだけの魔力刃なんて、わかりやすすぎますよ。こんな隙間だらけの配置じゃ、ぬるすぎて誰も捕まえられませんねえ」

本気でそう思っているように、インシグニアの態度には落胆が混じって見える。どうしてこの程度のことかできないのかと、期待を裏切られたような様子を見せている。クロノは戦慄に硬直し、少女の姿をした化け物を凝視するばかりだ。

言葉も出ないクロノに代わり、通信越しにリンデイが鋭く睨みつける。しかし彼女も、状況の急変に戸惑い、内心の動揺を隠しきれずにいた。

『インシグニア・ジムニー……あなた…何を考えているの？』

「ハラオウン執務官……そしてハラオウン提督、あなた方は僕にとって非常に好ましい

人物だ。融通が利きづらいところを除けば、本当に……」

鋭い視線を向けられ、ほんの一瞬インシグニアが悲しそうに目を伏せる。それは本心からこの状況を悔やむようで、できることなら避けたがつっていたような、そんな雰囲気を感じ取る。

思いもよらない反応にリンディは目を見開き、詰問の声を途切れさせてしまうほどだ。

しかしインシグニアのそんな表情はすぐに消え去り、代わって二人の局員に冷徹な氷のような眼差しが向けられた。

「……だからこそ貴方方には、ここで消えてもらいたいのです」

ギラリ、とインシグニアの剣が掲げられ、鋭い光を反射する。ザリツ、と地面が踏みしめられ、クロノに向けて剣先が突きつけられる。

慌てて我に返るクロノに向けて、インシグニアが刺突の構えを取った時。

ドツ！と凄まじい勢いで飛び出した青い影が、インシグニアに襲いかかり、剣同士を食らい合わせて甲高い金属音を鳴り響かせた。

「……驚きました、まだ……まで動けたのですか」

「ハア……ハア……！ あいにく頑丈さだけが取り柄でな……」

突然の襲撃をたやすく受け止めながら、驚いた声を上げるインシグニアに、アインは

血反吐とともに荒い息を吐き、凄む。

ギリギリと両手で握った刃を押し込もうとするが、片手で券を持つ少女剣士を押し切れないことに焦る。負傷で弱ったことを差し引いても、インシグニアの力は異様だった。

アインは悔しげに舌打ちし、ギロツと背後に目を向ける。そして呆然と立ち尽くすクロノに向けて、低い声で告げる。

「クロノ…無事ならさっさとフェイト達を連れて退け。私が奴を引きつける」

「馬鹿なんですか…!!? その状態で……」

「いいから早く行け!」

ガアン!とアインの剣がインシグニアに弾かれる。体勢を崩されたアインは、思い切り歯を食いしばってから地面を踏みしめ、幾度も少女騎士を狙って刃を振るう。どぶどぶと傷口から鮮血が吹き出すことも厭わず、己の意識が持ち続ける限り剣を振り続ける。

それが止まってしまった時、終わるのは自分だけではなく、後ろに控えた少年少女も危険にさらすと知っているためだ。

「困りましたね……僕個人としては、あなたのことも傷つけたくはないんですよ。事が済むまで大人しく寝ていてもらえないでしょうか?」

「なめるな、小娘！」

平然とした様子で、インシグニアは怒涛の勢いで攻め立てるアインの剣をさばき続ける。

痛みと苦しみを押し殺し、命を燃やすような勢いで振るわれる全ての攻撃を、少女騎士はまるで赤子の手をひねるかのような表情で受け流し続ける。

その異様さにクロノやフェイトはもちろん、相對するアイン自身が最も強く驚愕していた。

（何だ、こいつの剣は……!? 私に完全に追いついている……いや、理解しきつていない?）

アインが驚愕しているのは、自分の剣が軽くあしらわれていることではなかった。

攻撃されたから防いでいるのではない。どこに攻撃されるかを完全に理解し、まるで迎えるように自分の刃を置きにきているのだ。フェイントも騙しも関係がない、全てが読まれてしまっている。

自分が何かの筋書きに入れられているかのような違和感に、アインの精神は徐々に余裕を奪われていた。

（時間稼ぎなどしている暇はない！今の私では、こいつは全力で仕留めなければ、こつちがやられる！）

ひととき強く刃を振るい、弾かれる勢いを利用して後ろに下がる。

そして、足をついた瞬間に前に出て、相手の意識の波間を探る。かつてフェイトに行った奥義をもってして、少女剣士を生死問わず、本気で仕留めにかかる。

そうして、後ずさったままの少女の首に自分の刃を叩き込もうとした時。

「それはもう覚ええました」

自分の目と鼻の先から聞こえた声に、アインの動きが止まる。

インシグニアが自分の刃を避け、自分と同じように意識の波間に潜り込み急接近していた、脳が理解した時には、アインの全身の至る箇所につつと切れ目が走り、大量の鮮血が噴き出していた。

奥義が破られただけでなく、己のそれを超える純度で模倣されたと気づき、アインはひたすらに困惑と驚愕に陥った。

「ぐっ……がっ……がっ……!?」

「アルデブラント陸士！」

脳から一気に血の気が引き、思考が全くまとまらなくなると、アインは目を見開いたまま前のめりに崩れ落ちる。

自分の体から噴き出た鮮血の沼に沈む様を、インシグニアは困り顔で見下ろし、小さく溜息をこぼす。

「あなたの剣は……全て学習済みです。非常に良い教材でしたよ……もう少し語らつていたかったのですが、あいにくここもあまり長く持ちそうにありませんね。手早く用事を済ませてしましましょう」

チャキ、と腰に剣を納め、インシグニアが踵を返して歩き出す。

向かう先にいるプレシアは険しい顔で彼女を睨みつけ、アインと同じく傷つけられた脇腹を抑える。だが、痛みと失血のせいですれ以上動くことができない。

インシグニアはそんなプレシアのすぐそばまで歩み寄り、襟首をつかんで無理矢理立たせる。

無理な体勢で息がつまり、苦悶の声を漏らすプレシアの姿に、フェイトが悲痛な悲鳴をあげる。

「母さん！」

「プレシア……！」

「それ以上は……近づかないことをお勧めします」

いまにも死にそうな顔を見せるプレシアに、フェイトとアルフは即座に駆け寄ろうとする。だが、プレシアの喉元に突きつけられる刃を目にし、グツと声を詰まらせて立ち止まる他になくなる。

それに満足げな笑みを浮かべるインシグニアに、囚われの身となったプレシアが、

憎々しげな目を向けて、か細く痛々しい声を上げる。

「…何をするつもりなの」

「あなたには、生贄になっていただくこうと思ひまして…何、どうせ古い先短い命です。少しくらいは役に立ちますよ」

「何をするつもりなのかと聞いているのよ…」

これから何をさせられるのか、それが自分にとつても他の誰にとつてもろくでもないということ、この少女騎士のイカれた姿を見れば予想がつく。

内容がわからずとも、この少女の思考が並の人間と外れたものを描いていることだけは確かで、プレシアのこめかみを冷や汗がったり落ちる。

そんな彼女の想像を正解だと嘲笑うかのように、インシグニアは胸元を開き、その中から数個の青い菱形の宝石を浮かび上がらせた。

「抑止力を生み出すのですよ…次元世界の平和のために」

プレシアは、インシグニアを囲むように浮かぶいくつもの魔法の宝石に目を見張り、より一層顔色を悪化させていく。

いま、この場にあるジュエルシードのシリアルナンバーとは異なる数字、管理局のあの少女が確保してきたナンバーのロストログアが目の前にあるのだ。

「ジュエルシード…しかも、そのシリアルナンバーは！」

「もう隠す必要がありませんからね。そろそろ、主役に登場していただくこととしましょうか」

絶句するプレシアや、同じく目を見開くクロノやアイン、そして理由不明の恐怖で身を強張らせるフェイトとアルフの前で、インシグニアが手を高く掲げる。

まるで、舞台を独占する主役のように。

「さあ、起きろ。フォーティーン」

その声が響いた直後、騎士と魔導師たちが集う玉座の間の天井が――いや、空間が割れる。

そしてその奥から、一度その姿を露わにした巨大な邪神が、割れた空間をさらに押し広げながらこちら側に現われ出でてくる。

深く傷を刻まれ、潰された片方の目の分も憎悪と憤怒に歪めた目を、倒れ込む女騎士に向けながら。

2. 邪神再臨

「…あ、あれは…！」

現れたそれを前にして、顔を真っ青に染めたアルフが後ずさる。

蘇る、海上での惨劇。強大にして異質な力を持つて、魔導師や騎士達をものもしない暴れぶりを見せつけた破壊の化身が、今日の前に再び現れている。

より一層恐ろしいのは、当時に一人の女騎士によってつけられた片目の傷。潰れたそれを補うもう片方の目が、ギラギラと殺意に濡れて向けられているのだ。

だが、フェイトはそうではなかった。

邪神の再出現に驚愕し恐怖したのはもちろんだが、その近くに囚われた母がいることが、彼女から冷静さを奪い取っていた。

「母さん！」

「フェイト、危ない！」

「離してアルフ！ 母さんが！」

駆け寄ろうとする少女を、使い魔が慌ててしがみつき止める。自身の命の危機にあるうとも、主人が災厄に向かって無謀に近づこうとすることは見過ごせない。

しがみつくてから逃れようともがく主に對し、アルフは決して離すものかと齒を食いしばり、フェイトをその場に止めようとする。

その時だった。

「バスターーーー!」

ボゴン!と凄まじい音を立てて、玉座の間の壁の一部が大きく吹き飛ぶ。そしてできた穴の中から、二人の騎士と二人の魔道士が飛び出してくる。

迷宮のように広く入り組んだ道を、砲撃でぶち抜きショートカットしてきた彼らは、間の中心にある光景に目を見開き、息を呑んだ。

「アルデブラント!」

「アインさん!」

「マンダリン陸佐……!」

見知った少女騎士に首を掴まれ、囚われた魔女。使い魔に羽交い締めになれ、ジタバタともがく金色の少女。そして、腹部を削られ膝をつく、緑の体液にまみれた女騎士。

言葉をなくし凝視してしまうほどの惨状を目の当たりにし、サクソは眉間にしわを寄せ、呆然と立ち尽くしている同僚を睨みつけた。

「い、インシグニアさん……?!?!」

「クロノ……これは一体どういうことだ……?!?!」

サクソの問いに、クロノは答えられない。彼もまたこの急な展開に圧倒され、うまく理解することができずにいるのである。

だが流石は執務官と言うところか、次第に少年の脳は状況の整理に成功していく。起きている現実、少女の言動、そこから導かれる真実を、クロノは限りなく正確に推測していった。

「お前が黒幕だったのか……? お前が奴を……あの化け物を呼び出したのか……?」

「うーん……厳密に言う『誘導した』といったほうがいいでしょうか? あれは今の状態では、一切制御の効かない本物の怪物でしかありませんから」

小首を傾げ、激しい怒りをあらわにするクロノに語ってみせる、裏切りの騎士インシグニア。

平然としたその表情に、今の状況を引き起こした罪悪感も微塵も感じられない。言い訳をする様子もない。ただ淡々と、自分の為すべきこととして、背後の空間の亀裂の中から顔を覗かせる邪神に、満足げな目を向けていた。

「ですがこれさえあれば、彼は多少言うことを聞いてくれるんですよ。ギブアンドテイクの精神は持ち合わせているようで……ちよūdい獲物が発掘されたので、本当に助かりましたよ」

「獲物……? ちよūdい……?」

そう言って、彼女は自身の周りに浮かぶ数個の魔法の宝石に手を添える。

何が何だかわからないと言った様子で、インシグニアとアインに交互に視線を向かわせるのは。

その隣でユーノが、険しい表情で少女騎士を睨みつける。

全ての根源、自分の過ちでもある最初の事件との関わりに、思い至ってしまったのだ。

「最初から……ジュエルシールドが目的だったんですか!?? そのために、僕のことにも用していたんですか!??」

「ジュエルシールドじゃなくても良かったんですけどね。高圧縮されたエネルギーを吸収できるものであれば……」

ユーノの激昂で、なのはは急に理解してしまふ。

ユーノが古代の遺跡から発掘し、運び出そうとしていたジュエルシールド。その途中、次元航行船は事故に遭い、危険な魔法の宝石は地球にばらまかれてしまった。

偶然ユーノと出会ったなのははジュエルシールドの回収に手を貸し、同じくそれを求めるフェイト達とぶつかることとなった。

果たしてこれが、ただの偶然だったのか。

その真相を示すインシグニアの言葉に、そして倒れ伏すもう一人の師の痛々しい姿に、なのはの中で怒りがふつふつと湧き上がる。

だが、向けられる憎悪の視線に、インシグニアは微塵も堪える様子を見せなかった。「彼にとつてこれはご馳走ですから…前回もそうやって呼び出したんです。どこにあるかもわからないロストロギアを探すには、どうしても発動が必要でしたし。思った通りに動いてくれて助かりましたよ…インシグニアさん」

「わた…し…う？」

突如名を呼ばれたフェイトは、呆然とインシグニアを凝視して固まる。母の元に向かうために藻掻いていたことも忘れ、急に背筋に走った寒気に震えだす。

少女騎士はあいかわらずの朗らかな笑顔のまま、安心したように胸に手を当て、フェイトにぺこりと頭を下げる。

「功を焦ったあなたならきつと…ああしてジュエルシードの強制解放に踏み切ってくれ
ると思っていました」

「…私の、せいで…あの化け物が…!?？」

「いいえ…あなたのおかげです。あなたのおかげで僕の計画は進んだ…感謝していますよ」

「つ…！ お前…ふざけるな！」

丁寧な口調で、愉しそうに残酷な真実を告げられたことで、愕然と膝をつくフェイト。力の抜けた主を案じ、荒い息を吐き始める彼女を抱きかかえたアルフは、キツとインシ

グニアを睨みつける。

だが、それ以上動けない。少女騎士の後ろで佇む邪神の圧に押され、使い魔は憎い相手に立ち向かうこともできない。何より、その場に今の状態のフェイトを置いていけなかった。

「そんな物騒な存在を呼び出してどうするつもりだ！ 制御できない本物の怪物だとわかっていて、なぜここに誘導した!?？」

「ええ…今の状態ならばね？」

アルフ達に代わって怒号を上げるクロノに、インシグニアは待っていたとばかりに上機嫌に笑う。

舞台役者の口上のような浮ついた声に、デバイスを構えるクロノの表情はますます険しくなる。同時に吹き出す冷や汗の量も増え、クロノの背には不快感が募り続けた。

「ですが…今からあれは兵器に変わるんです。あなた方には、その最初の目撃者に、そして見せしめとなっていたいただきましようか」

「見せしめ…だと!?？」

「…残念だが、そうなるつもりはない」

クスクスと声を漏らすインシグニア。

それを遮るように、ガシヤン、と音を立てて、サクソの構える醒銃が光沢を放つ。そ

れに付き従うムーヴも、クラブの槍を振り回し、闘志をあらわにする。

「正直うまく理解が及ばんが……お前がこの惨劇の元凶であることはわかった。この手で捕らえ……いや！ 討ち取る！」

「……隊長にそんな目を向けられるとは、悲しいですね」

「俺を隊長と呼ぶか……この裏切り者め……！」

キンツと甲高い音が鳴り響き、二人の騎士は裏切り者の騎士を見据え、各々の武器を構える。

インシグニアの顔から笑みが薄れ、より冷たい雰囲気が始めたその時。

ズバッ！と彼女の真下から鋭い突きが放たれ、即座に身を引いたインシグニアの前髪を一部、切り裂いた。

「……あなたもしつこい方だ。その傷、いい加減お休みになられたらいかがですか？ もう十分働いたでしょう」

「……社畜なものでな、動かすにはいられないんだよ！」

ゲホゲホと血を吐きながら、アインはなおも衰えることのない目でインシグニアを睨み、剣を杖に立ち上がる。だが、ガクガクと震える足はまともに動いてくれず、グラグラと視界も揺れて役に立たない。

それでも立とうとするアインを見やり、インシグニアは呆れたため息をつく。

片手に持った魔女の体は軽く、移動にさして苦はない。だが、こう何度も必死の奇襲をかけられ、上機嫌だった彼女も眉間にしわを寄せ始めた。

「ぐっ……！」

「ハハハハハ……！ もうそんなに頑張らなくてもいいんですよ？ あなたの役目はもうおしまい……これからは、僕が次元世界の守護者となるのですから」

刺々しい目で見下ろし、インシグニアは笑ってそう言う。

ぼたぼたととめどなく血を流し、口からも大量に血反吐を吐き、しかしアインはやがて、フツと少女騎士を小馬鹿にしたような笑みを浮かべてみせた。

「ハッ……ただ腕が立つだけの小娘がっ……吠えたな……！ どういう……方法でそれを制御するつもりか……知らんが、大それた欲……は身を滅ぼすぞ」

「欲……」

アインがそう告げた直後、インシグニアの表情から一切の笑みが消え、恐ろしいほどの殺気が迸り出す。

ギョツと目を見開いたアインに向けて、次の瞬間鋭い蹴りが放たれ、傷ついた腹部に炸裂し吹っ飛ばす。アインは苦悶の声も出ないほどに悶絶し、ぶしゃりとより強く血を吹く脇腹を抑えて、地に伏せた。

「……あなたは僕が、単なる欲望でこんなことをしているとでも思ったんですか？」

「ぐっ……あんな……化け物を呼び出すやつを考えなど、そうそう変わらん」

「…そうですか、あなたはそう言いますか」

全身を緑に染め、ガクガクと腕を震わせるアインに、インシグニアは目を伏せ、大きなため息をつく。

なぜか、傷つきながらも嫌悪の目を向ける女騎士に対する、彼女の表情は寂しげに見える、見た者に戸惑いを抱かせる。アインにそんな視線を向けられることを、嘆いているかの様だ。

しばらく黙り込んでいたインシグニアは、やがて虚空を見上げ、ため息混じりに声を放った。

「あなたは…いまの次元世界を見てどう思いますか？」

憂いを帯びた、心の底から案じる様な声に、アインは訝しみ眉間にしわを寄せる。

なんの前触れもない、今彼女がやろうとしている行いとは真逆の性質を持った問いに、女騎士と魔導師達はひたすらに困惑の目を向ける。

「どういう意味だ…!?」

「手も足りないのに増やしていく管理世界…杜撰な管理で被害を被る管理外世界、使い潰されていく人材…何より、そんな犠牲をもとめない肥え太った上層部の面々…あまりに醜く、悍ましい」

邪神が何も言わず、何もしないまま佇む空間の中心で、少女騎士が遠い目で呟く。そこに混じる嫌悪は、この場にいらない、決して出てくることのない、権力を笠にきた俗物達に向けられているのだろうか。

冷たい、笑み一つない無表情で語っていたインシグニアの目が、不意にメラメラと怒りをたたえ始める。

「そして、本当に救いを求める者のためには、彼らは戦わない。薄汚い欲望で正義を汚し、世界の全てを腐らせる寄生虫そのもの……！ そんなものと一緒にされたくなんてありませんよ」

ギリギリときつく歯を食いしばり、まるで悪鬼の様な形相に変わった少女騎士は、握りしめた拳からも血を……アインと同じ異形の血を流し、激昂する。

なのはやフェイトは、インシグニアのその気迫に押されごくりと息を呑む。真正面から相対しているわけでもない、直接向けられているわけでもないのに、はつきりと伝わる強烈な憎悪と怒怒の感情に、全身が金縛りにあつたように動かせなくなる。

インシグニアは、しばしそのまま怒りをあらわにしていたが、やがてすつと気迫を収めていく。そして最初と同じような、穏やかで自慢げな笑みを浮かべ始めた。

「だから必要なですよ………悪を裁くための絶対的な力が。正義を貫くための不変の象徴が！ 罪人を生み出させないための永久の導が!!？」

「…何を言っている…!!?」

「インシグニアさん…!!?」

そこでアインは、ある違和感を抱く。

今のインシグニアは、誰もが狂気を感じる異様な思想に取り憑かれている。だがそれは、自らの経験から生み出した考えではなく、他の何かから影響を受けて生じたものに見えた。

なのはははと、正義感溢れる誠実な騎士だと思っていた少女を凝視し、カタカタと肩を震わせる。

もうここに、自分の知っている彼女はいない。全くの別人が彼女のふりをし、好き勝手に暴論を口にかけているのだと思えるほどに、豹変したインシグニアを信じられない気持ちで凝視してしまう。

そしてなのはは、気のせいかな奇妙なものを目の当たりにする。

誇らしげに狂った笑みを見せるインシグニアの背後で、三日月のように歪んだ笑みを見せる、何者かの影を。

彼女は歪んでいるのではない、歪められているのだ。

この場にはいない、何者かによって。

「だから僕は…：…僕の主人は決断したのです。究極の力を手に入れようと」

「まさか……!」

インシグニアのその発言で、アインやクロノは確信する。

この少女騎士が全ての黒幕なのではない。彼女を唆し、思想を歪め、意のままに操っている何者かがいるのだということに。

途端にアインは怒りを再燃させ、腹の傷が悪化することも厭わず、立ち上がろうと藻搔く。

幼き騎士をここまで歪めた何者かへの凄まじい怒りが、そして言葉に言い表せない少女騎士への想いが、彼女を突き動かした。

「誰だ……?」 いったい誰がお前を……!」

『……喋りすぎだぞ、インシグニア』

激昂し、真実を突き詰めようと声を上げかけたアイン。

その時だった……場の緊迫をかき乱すような、傲岸不遜で他者を見下す、冷たい声が響いたのは。

クロノとサクソ、ムーヴはその声に目を見開き、壊れた人形のようにぎこちない動きで振り向き、言葉をなくす。

唯一、アインだけが納得した様子で、頭上に現れた空間モニターを睨みつけていた。

「……お前か、ノア」

『ノア提督だーいーいい加減覚えるがいい、化け物め』

そう吐き捨てるように告げ、その男はーいーサクソやインシグニアの上官にして、時空管理局提督ノア・アークは泰然と局員達を見下ろした。

3. 墜ちる騎士

「ノア、提督……!?」

『て、提督……!』

『どうなつてんだよ……なんで提督が!』

空間モニターの中に映し出された人物の顔を見て、サクソとムーヴ、そしてアースラ内で動いていた陸上部隊の局員達が騒然となる。

自分達をまとめる頭であり、多くの者が羨む地位と名誉を有している管理局の高官の一人。そして何より、犯罪を抑止すべき存在である法の番人。

そんな彼が、今日の前で恐るべき罪をあらわにしている少女騎士に答え、あたかも自身こそが黒幕であるかのように語っていることが、信じられなかった。

『どういふ事なの、これは……!』

『どうもこうも、我が娘が先ほど語った通りですよ』

ギョツと、その言葉を聞いた全員が目を見張る。

即座に視線を巡らせ、魔女を片手でつかみ上げる少女騎士を凝視し、息を飲む。

特に驚愕をあらわにしていたのは、サクソだった。

自分の部下であり、一個小隊の隊長を任せていた実力者。

経歴も所以も全て調べた上で引き入れた、裏切られたとはいえ自分が認めた強者が隠していた事実には、信じられない気持ちでモニターの向こうの男を睨みつける。

「娘だと……!?」

『私の自慢の娘です……命令を忠実にこなし、決して裏切らず、どんな任務であろうと果たしてみせる、誰に見せても恥ずかしくない最高傑作……!』

「……自分の部下を、仲間を殺させることも任務ですか?」

その場にいる全員を見下すように語るノアに向けて、ムーヴが低く轟くような声で問う。

上官と部下という関係で、親しい仲だったという認識はない。しかし間違いなく、長く苦楽を共にしてきた大切な仲間であり、決して理不尽に奪われていい命ではなかった。

二人の計報を初めて知ったクロノも、外道に墜ちた男に鋭い眼を向ける。

「ミラジーノとケイマンを……!」

『あれも十分に従順な駒でしたがね、計画にそのまま組み込むには自我がありすぎる……それに、最近は余計な思考も混ざり始めてしまったので、処分させたのですよ』
『自分の部下を……! 人を何だと思っっているの!?』

『さつき言ったでしょう、駒だと』

激昂するリンデイの声も、柳に風といった様子で全く気にした様子がない。

同じ人間とも思っておらず、ただ自分の目的のために消費されるために存在していると本気で思っているかのような調子で、鬱陶しそうに返答する。

アースラの面々も、玉座の間に集った者達も、ノアの言葉に絶句する。

人の姿をした別の何かがそこにいるかのような気分がして、何人かは激しい嘔吐感を催すほどだった。

『私が創造する世界に、主人に牙を剥きかねない犬はいらない……番犬でなくなった狂犬は、さつきと殺処分するものでしょう』

にちやり、とモニターの向こうから気味の悪い湿っぽい音が響く。顔を見ることができなくともわかる、彼は今、とてつもなく醜悪な笑みを浮かべているに違いない。

正義の心など微塵もありはしない、自分の欲望に忠実に動き、己のみ都合のいい未来を夢想する男の姿は、見えなくても激しい嫌悪を抱かせる。

なのにインシグニアは、それを自分も誇る様にこやかに笑い続けていた。

ユーノやアルフは、自分たちの尺度では勝てない彼女の有様に、ブルリと全身を震わせ、顔から血の気を引かせていた。

『次元世界の平定に必要なもの……それは支配。自由だのなんだの曖昧なものに必要な

い、ただ一つの神の元に統合されてこそ、平和は成るのです」

「そんなもの……偽りの平和だ！」

『それは結果が示します……全てを支配し、押さえつけた世界では、どんな争いも起こることはないでしょう』

ククク、と悪魔の笑い声が響く。

誰の言葉も届きはしない。たとえ親兄弟、彼の上官など、いかなる人物の言葉であっても、決して聞き入れないであろう狂気に、その場にいた全員が表情をこわばらせる。

怒鳴り返したくとも、どんな罵倒も意味をなさないことを理解し、クロノ達は悔しげに歯を食い縛り立ち尽くすばかりだ。

「……そんなことのために……私に近づいたの」

そんな中、苦しげな掠れた声が響く。

インシグニアに首を絞められたまま、宙吊りになっているプレシア。どうかか首と手の間に指を挟み、窒息を免れている彼女が、ギロリと殺意に満ちた目でモニターを睨みつける。

「プロジェクトF、A、T、Eの失敗……失意に沈む私に、接触してきたあなたがもたらした情報……あれも全て、こうするための行動だったのね……！」

プレシアは蘇る記憶の中、もたらされた虚構の希望と、それに縋り付いてしまった自

分自身の浅はかさを恨む。

事故の賠償金やあらゆる伝手を使い、長年の苦勞の末に失敗に終わった計画であり願
い。絶望して崩れ落ち、もう何もかもを投げ出しかけていた彼女の元に、その男はその
情報をもたらした。

もはや眉唾ものでしかない幻の地・アルハザード。そしてそこに至る可能性を秘めた
凶悪な魔法の種・ジュエルシード。

世界を滅ぼしかねない力を持ったそれらについて教え、男は自分の正体を明かしつ
つ、協力を申し出たのだ。……その裏に、穢れた我欲を隠しながら。

「ロストロギアの暴走……それがもたらす余波と……影響についての研究、だなんて……
ご立派な建前で近づいてきておいて……結局そういうことなのね、研究者なんて……！」
「貴様……まさか」

『あなたはいい隠れ蓑になつてくれましたよ。このような大事、最低でも一部隊を投入
しない限りこなせませんからね……なんの名目もなく動かせば、誰かが疑いますから
ね』

「……何か企んでいることぐらい、わかっていたわよ」

ぎり、とインシグニアの手がさらに力を強め、プレシアがうめき声をあげる。

悲鳴をあげるフェイトが近づこうとして、アルフに止められる様を横目に、プレシア

は齒を食いしぼり苦痛に耐え、吐き捨てるようにノアとインシグニアに告げる。

「…あなたが何を考えていようと、どうでもよかつた…：アリシアさえ取り戻せればよかつた…！ あなたとの契約は、そういうものだつたはずよ…：なの…！」

自分のたつた一つの、己を含んだ全てを犠牲にしても叶えなかつた願いを汚され、悲しき母は燃え上がるような怒りをあらわにする。

何が起ころうとも、この願ひだけは邪魔されてたまるものかと奮闘し続けてきた。それを我が物顔で遮り、自分の欲望のために利用するつもりでいるこの男だけは、八つ裂きにして苦しめ続けてやりたくて仕方がない。

ノアは魔女の憤怒の形相に、はあと呆れたため息をつく。雲泥の差もある反応の違いを見せ、面倒臭そうに魔女に答える。

『ですがその間、あなたも淡い夢に浸れたのだから構わないでしょう？ 愛する娘の復活などというくだらない夢に付き合つてやつたんです…その代価として、私の崇高な計画の礎になれるのですから、本望でしょう』

「ふざけないで…！ 誰があなたなんかのために…！」
『ふざけているのはあなたの方でしょう』

その声はまるで、わがままばかりで聞き分けのない子供をたしなめるようで、同時に気の狂つた精神病患者者に対し、何もかも投げやりに乱雑に扱うかのようだ。

モニターの向こうにあるノアからの視線は、おそらく残飯にたかる蜚ヒか蠅シに対して向けられるものとそう大差ないだろう。

『人間はいずれ死ぬのです。その法則を捻じ曲げ、逝った人間を連れ戻すような愚行を、誰が賞賛するのですか？』

「貴っ……様あ!!?　ぐっ!」

めきり、と。プレシアの首から嫌な音が漏れる。人間離れた能力を持つインシグニアがその気になれば、たやすく魔女の首はへし折られ、物言わぬ骸と成り果てるだろう。いつそうなるかと冷や汗をかくフェイトは、アルフの拘束から逃れようと必死にもがく。たった数mしかない距離を駆け、窮地の母の元に辿り着きたいが、何より主人のみを案じる使い魔がそれを許さない。

異様な力を持つ少女騎士と、破壊の化身のような怪物のすぐ近くに彼女を向かわせることなど、できるはずがなかった。

「母さん!」

「動かないでください…:最期くらい、痛みなく死なせてあげたいので」

微笑み交じりに告げられた言葉に、フェイトはハッと目を見開いて制止する。奇しくも敵の言葉で冷静さを取り戻し、無策のまま飛び出そうとしていたことに気づき、息を飲む。

騒がしかった少女がおとなしくなったところで、ノアがくつくつと含み笑いをこぼす。

ギロリと、インシグニアを除くその場にいた全員から鋭い目を向けられるも、一切気にする様子を見せず、また独りで満足げに語り始めた。

『手間がかかったよ……ちようどいい生贄の選別には。ただ、ジュエルシードが発掘されたことは幸運だった。あれだけの高圧縮エネルギーの塊は、餌として申し分ない。ゴリ押しで任務に關われて僥倖でした』

「あの事件も……あなたが裏で手を……！ そのせいで、どれだけ多くの人間を危険に晒したと……！」

『大義のためには必要な犠牲です……あなたにならわかるでしょう？ クロノ・ハラオウン執務官。任務のために、痛いげな少女を見殺しにできるようなあなたなら』

小馬鹿にしたような響きを持つ声に、クロノはますます嫌悪に満ちた表情を返す。怒りを抱く相手に、自分の掲げてきた正義を汚され、勝手な同意を求められることに、腹の奥がグツグツと煮えたぎって仕方がない。

忿怒をぶつけるべき相手が、手の届かないモニターの向こう側にいることが、たまらなく腹立たしかった。

「いいや……わからないね。わかりたくともないよ、そんな野望！ あなたは大義という

言葉を、自分の都合のいいように勝手に解釈して使っているだけだ。正義という言葉をも、自分の悪事を無理やり正当化させる為だけに使っているだけだ！」

『……これだから、世間知らずの青臭いガキは駄目なんですよね』

怒りに顔を歪めながら、毅然とした態度で否定の言葉を返すクロノに、ノアはため息交じりに吐き捨てる。

落胆、呆れ、嫌悪。どうせ自分と同類の、同じ穴の貉でしかない小僧が、自分の罪も棚にあげて糾弾してきている様が、気持ち悪いぐらいに苛立つ、そんな感情が漏れて感じる声だ。

やがてノアは、小さくため息をつく。

そして先ほどとは打って変わって晴れやかな声で、自分の指示を待つインシグニアに声をかける。

『さて……おしゃべりもこの辺りで、いい加減に事を進めるとしましょうか——シグニア』

「はい、提督」

鼻歌でも歌い出しそうな、喜ばしくて仕方がないといった笑顔で、インシグニアが応じる。

片手でつかんだプレシアを、その場で大きく体をねじり、思い切り空中に投げ飛ばす。

歯を食いしばり、苦悶の声を上げる魔女の体を、後ろで佇んでいた邪神に向けて放り上げる。

すると次の瞬間、邪神の口がバカツと大きく開き、暗い喉奥からまばゆい光が漏れ出す。

神々しくも悍ましい、汚く穢れた金色の光はプレシアを包み込み、自身の中へと取り込んでいく。あつという間に、魔女の姿は邪神の中に消え去ってしまった。

「母さん！」

「プレシアアア！」

フェイトとアルフが、消えたプレシアに向けて叫ぶが、彼女の姿はもう跡形もない。

アインやクロノ達もまた、突然の自体の変化に理解が追いつかず、動き出した邪神とその儀式をなした少女騎士を凝視し、絶句する。

「これは……!?？」

「プレシアが……アイツの中に吸い込まれた……!?！」

何が起こっているのか、とそこから動くこともできないまま、消えた魔女の姿を探す一同。

すると、慄く彼らに見せつけるかのように、邪神が潰れていない片目を開けて動き出す。低く、雷鳴のように轟く咆哮を上げ、自身の狂気を表すように全身を震わせ、光を

放つ口を大きく開く。

大気が恐怖しているように震え出し、こちらと向こう側をつなげる壁の穴がバキバキと広げられていく。

世界そのものが崩壊の危機を迎えているかのような光景に、誰もが青い顔で、呆然と立ち尽くした。

「ふふふふ……やつとこの時が来ました」

にこにここと笑みをたたえ、インシグニアが歓喜を見せる邪神を見上げる。自分の作業が全て終わり、ひと段落ついた様子を見せる彼女に、邪神がゆつくりと振り向く。

怪物と裏切りの騎士、双方の目が交わると、インシグニアの笑みがさらに深められる。不意に、もったいぶるように振り向いた少女騎士が、自体の把握に苦戦するアイン達に、人差し指を一本向ける。

その中の一人、強張った表情で空中に佇むのはに向けられた瞬間、アインの顔から一瞬で血の気が引いた。

「なのはっ!!?」

満身創痍のその体が動いたのは、もはや奇跡というに等しかった。

痛みを一瞬忘れ、体への負担を完全に無視した女騎士が、呆然と固まっている白い少女に向かって勢いよく飛びかかる。

凄まじい勢いで向かってくる、痛々しい姿のままの彼女に、なのははそのまま突き飛ばされ、アインの元から大きく引き剥がされる。

何を、と抗議の声を上げる暇もなく。

直前まで彼女がいた、代わりにアインが飛び出した箇所に向けて、膨大な量と威力の炎と風と雷と冷気が襲いかかっていた。

「アインさん!!?」

目を見開いたなのはの前で、全身を焦がされ、両腕と顔の半分を破壊されたアインが墜ちていく。

そのあまりにも凄惨な姿に、全員の心を絶望が覆い始めた。

4. 悪魔の科学者

それは、生まれてきてはならない命だった。

その存在が確認されたのは、十数年前ローアイン・K・アルデブラントがアンデッドと化し、アイゴ・ハジメを逃し、管理局の研究区域で実験動物に墮とされた後のことだった。

アイン本人が隔離された施設とは異なる、無数の素材が保管された区域。

貴重だったり、特殊な生態を有する生物をサンプルとして保存し、獲得した知識や技術を様々な研究にローアイン例えば使い魔などの魔法生物に転用するための施設があった。

そしてその中には、何も入っていない空の保存液が並んだ箇所があった。

数にして千個近く、手のひら台の大きなものから小指の先より小さなものまで、たくさん瓶が並べられていた。

もはや見る影もないが、少し前までそこには、ある人物から採取された人体の部品が保管されていた。

不死の怪物となったアイン、その脅威のメカニズムを解明するために、片っ端から解剖が行われ、全身を余すことなく切り刻み、パーツを一つずつ回収して保存していたの

だ。

麻酔など一切なく、泣き叫び悶える彼女を無理矢理押さえつけ、無慈悲に刃を通し続けたのだ。

だが、確かに保存したはずの肉片は、アイン本人から離れるとやがて崩壊し、やがて瓶の中から消滅してしまった。

その後何度も、再生を始めるアインの肉体の解剖が行われ、体組織の採取が行われたが、その全てが失敗し、大量の空の瓶だけが残されることとなった。

「…クローニングも失敗。株分けも失敗。ただ本人のみが不死のままの怪物。摂理を外れた存在か……本当に役に立たんゴミだな」

施設の主任だった研究者ローノアは、その結果に忌々しげに顔を歪める。そしてガラス窓の向こう側に並べられた無数の空き瓶に、唾でも吐きそうな視線を向ける。

上層部から興味深い研究素材を与えられ、かなり上機嫌だったことがもはや懐かしく感じられ、苛立ち混じりのため息が溢れる。

いかなる攻撃を受け、自身の体がバラバラになろうとも再生する、人類にとって永遠の夢である不老不死の力。

その力の源を解明できれば、万年人手不足と騒ぐ声がうるさい上層部も黙らせられる、本物の不死の兵が量産できるかもしれない。いや、自分に転用し、神に近い存在に

なることもできたかもしれない。

「採取したサンプルは全て破棄しておけ。もつとも、すでに原形をとどめていないようだし、処分方法は適当でいい」

「はい、了解しました」

部下に命令し、中に何も入っていない瓶を睨みつける。

怒りのままに蹴りつけ、叩き割ってしまったかっだが、一度でも化け物の肉片に触れた液体がどんな効果を持っているかもわからない以上、不用意に接触することは賢くない。

長い時間と労力をかけた夢と期待が水泡に帰したことに、ノアは舌打ちをこぼす。

今日も施設のどこかで、拷問に近い実験を受けて叫んでいるであろう、裏切り者の愚かな女騎士に、心底呆れたため息をついていた。

「……うるさい女だ、まったく」

「し、室長！」

吐き捨てるように言い、その場を離れようとしたノア。

そこへ、先ほどサンプルの破棄を命じた部下の一人が、血相を変えて走り寄ってくる。他の部下達も何事かと振り向く中、ノアは青ざめた顔の部下に訝しげな目を向け、尋ねた。

「なんだ、何かあったか？」

「さ、採取したサンプルデータの二つに、微弱な生体反応が……」

「……何？」

部下からの報告にノアは一瞬呆けるものの、すぐに踵を返しサンプルに近づく。

どれもこれも、中身が消えて役立たずになった空瓶ばかりのはず。しかし部下は機械を動かすと、大量に並べられた瓶のうちの一つを掴ませ、自分と上司のすぐ目の前にまで移動させる。

ガラスに遮られた向こう側でチャプリと揺れる保存液、その中はやはり何も無いように見えたが、同時に起動していたセンサーは、確かに微弱な反応があることを示していた。

「これは……あの女の」

「はい……子宮です。臓器そのものは崩壊したのですが、その中心に反応が……」

「ということは、まさか……」

ノアは脳裏に浮かんだその可能性に、顔中に脂汗を噴き出させながら絶句する。

女性器の中に発生した反応、生物の子宮の中で突如発生する生体反応など、同じ生物の胤以外にありえない。しかし肉体から切り離され、その上崩壊した臓器の中でなお反応が保たれているなど、常識ではまずありえない。

通常の生物ではありえない、あまりに強靱過ぎる生体反応。
それが表すことは――。

「急いでそのサンプルを保存……いや、人工羊水に移せ。貴重なサンプルデータだ。確実に確保しろ！ 早くやれ！」

「はっ、はい！」

途端に態度を豹変させたノアの剣幕に押され、部下達は慌てて機械の操作を開始する。

ガラスの向こうで動き出した機械。目に見えないほどの小さな何かが目覚めかけているという事実には、その場にいた誰も背筋が震えだす。

唯一嗤っていたのは、研究区域主任ノア、ただ一人だった。

「クククク……！ 愛だの恋だの下らないものに拘って、破滅した哀れな女だと思つていたが……まさかこんな結果を生み出すとは。生命というのは実に面白い……！」

◆? ◆? ◆? ◆?

ぐちゃつ！と、焼き焦がされた体が落下し、あたりに緑色の鮮血が撒き散らされる。

少しの間をおき、焼けて半ばからちぎれた両腕が左右に落下し、ピクピクと痙攣する様を見せる。まるで芋虫のように蠢く様に、誰もがひゅつと息を呑む。

真つ黒に焦がされ、顔の半分と体の一部しか無事な部分が見当たらない、変わり果て

た女騎士の姿。

自分を押しつけ身代わりとなり、邪神の放った怒涛のエネルギーの嵐にさらされたアイン。その成れの果てを目の当たりにして、なのははみるみるうちに顔を真っ青に染めた。

「アインさん……！ アインさん！」

震える体を無理矢理動かし、仰向けになったままピクリとも動かないアインの元に駆け寄り、焦げた体を抱き締める。

ぐったりと力の抜けた彼女は、虚ろな目で虚空を見上げるだけ。ドクドクととめどなく新たに血を流し、呻き声も上がらない。

「ア、アイン……！ 母さん……！ どうしよう……どうしたら……！」

「フェイト……！ ダメだ、落ち着いて!!?」

邪神の攻撃の余波で吹っ飛ばされていたフェイトも、なのはに抱き上げられているアインの燦々たる姿に、慌てて駆け寄ろうと体を起こす。

しかしすぐに、アルフが抱きついて止める。

こちらを見つめたままの邪神の眼光、ニヤニヤと不気味に笑うインシグニア、そして何より先ほどとは比べ物にならないほどに膨れ上がった威圧感に、アルフの本能がずつと警鐘を鳴らし続けている。

（ヤバイ…ヤバイヤバイヤバイ！ あれはダメだ…何かは全くわからないけど、あれは絶対のここにあつちやいけないものだ!!?）

ただでさえ恐ろしさを感じる、とんでもない力を持った怪物。

獣としての本能から、尻尾を股の間に丸め込んで縮こまりそうになるのを、プライドとフェイトへの想いで無理矢理耐えようとする。

できればその場からも逃げ出したかったが、その隙すらなかった。

（あんなの…化け物なんて可愛いものじゃない！ いるだけで何もかもが終わる！ 最凶最悪の何かだ!!?）

ごくくん、と次から次へと湧き出てくる唾液を飲み込み、フェイトをきつく抱き寄せ引き止めたまま、邪神を凝視する。

空間にできた大穴を通り抜け、全身が露わとなっていた。

4本の腕にそれぞれ武器を持ち、逆三角形の上半身の下から生えた、竜の尾のような太く長い下半身が、ぐねぐねと蠢き空中を泳ぐようにしている。

上半身だけで十数メートルはあつた巨体は、下半身も合わせると100メートルを軽く超えていた。

そして何より、見た目に見えぬ変化が一つあつた。

邪神の体内に含まれていた膨大なエネルギーが、異様な速度で跳ね上がって計測され

たのだ。まるで霧散し続けていた力が、急に一つにまとまり始めたように。

「何が起こった……!?? プレシアを吸収して……さらに力を強めた……!??」

冷や汗を流し、デバイスを構えたまま邪神を凝視していたクロノ。

混乱の最中にある彼に向けて、モニターの向こうから、ノアによる自慢げな口調の説
明が行われ出した。

『彼は元々……不安定なまま現界してしまいましたからね。本来の仕様で登場できてい
ないので、ああしないと全能力を発揮できないんですよ』

「あれは一体なんだ！ 知っていることを全て話せ、ノア提督！」

『知っても無駄だというのに……まあ、あの世への土産話にでも教えてあげましょうか』
口ではそういうものの、声の響きは最初から聞かせてやりたくて仕方がないという響
きを感じる。

空間ごと破壊される危険性のある現場、そこから遠く離れた安全地帯から、圧倒的な
力を行使する側に立っているという優越感。たやすく踏み潰せる矮小な存在達を見下
し、嗜虐心に煽られた男が、ペラペラと語り始める。

『彼の名はフォーティーン。バトルファイトの勝者に与えられる最強の力にして、勝者
以外の全ての種を根絶する邪神なのです』

黒幕によって明らかにされた情報に、アースラ側から息を飲む声が強く響く。

事件の当事者であるリンディが、自分の血が凍りついたのかと思えるほどの寒気に襲われ、ノイズに覆われたモニターの向こう側を、玉座の間に出現している邪神……フォーティーンを凝視する。

『バトルファイトって……でも、あれは……』

『ええ、ご存知の通り、今の世のバトルファイトはまだ終了していません……あの女騎士が愚かにも邪魔をし、勝者のないまま中断しています。ゆえに………バグが生じたのですよ』

「バグ……?」

くつくつと含み笑いをこぼし、ノアが語る。できの悪い生徒に、態とらしく落胆しながら教えようとするように、あからさまに馬鹿にした態度で語る。

『本来核となるべきバトルファイトの勝者の不在。終わらない戦い。そして、イレギュラーな新たな参戦者……それらが重なった結果、彼はこちら側に出てこられるようになったのです。因果なものですな……』

「……イレギュラーとは、アルデブラント陸士のことか」

『それもありませんが……もう一人いるんですよ』

母から、事件の当事者から直に聞いた、女騎士の身に起きた変貌。

強大な力を得るために、幾度も人ならざるものとの融合を繰り返し、力を振るい続け

たその結果、異形の力が肉体と混じり、自らをも異形の身へと墮としてしまった。

故に超古代より続く戦いの遊戯は、新たなプレイヤーとして彼女を認めざるを得なくなり、決着をつけることが拒まれたため、勝者が不在のまま遊戯は沈黙した。

一人が己の身を犠牲にしたことで、人類滅亡の未来は回避することができたのだ。

だが、それで終わらなかったのだと、ノアは語る。

女騎士の決断により生じた例外は、彼女自身の変貌だけにとどまらなかったのだと、そう語った。

『ジョーカーを除くアンデッドが封印され、その精を体内に受け入れたことで生まれたもう一体のアンデッド……それがアイン・K・アルデブラント。そして……』

「そのバグによって、僕が生まれたのです」

フォーティーンの外皮を撫で付け、宥めるようにしながら、インシグニアがノアの台詞を引き継ぐ。

リンディ達は少女騎士の台詞に、そしてノアが漏らした情報の中にあつたある言葉に、一つの可能性に思い至る。

アインとハジメの仲、変貌した原因、ノアの嗜虐的な台詞、そしてインシグニアの態度と物言い……あらゆる要素が一つにまとまっていき、少女騎士に隠された正体を導き出す。

「改めまして……僕はジョーカーアンデッドでありジョーカーアンデッドでないもの。名乗るならそうだなあー」

絶句する一同の前で、ニッコリと笑ったインシグニアの姿が、変化を始める。

刺々しい、昆虫に似た鎧のような体表に、悪魔のような恐ろしく歪んだ形相。長く伸びた二本の触覚に、爛々と輝く両目。

かつて世界を滅ぼしかけた、何者にも繋がらない不死の存在と瓜二つながら、純白の表皮と赤く輝く胸部が正反対の印象を与える、もう一体の例外的な存在。

「……アルビノジョーカー、とても言っておきましょうか」

声だけは少女のものそのまま、凄まじい威圧感を放つ異形へと変化した少女騎士は、巨大な鎌を手に持ち、そう名乗ってみせた。

◆? ◆? ?? ♣?

ゴボリゴボりと、目前におかれた円柱型の水槽の中で気泡が上がる。

黄緑色に光る液体の中、無数の管に繋がれたそれを見つめ、数人の研究員達が忙しく記録を取り続ける。

長い髪を揺蕩わせ、眠りつくそれに、研究員達は皆恐れを孕んだ視線を向け、それでもやはり好奇心を抑えられないようである。

唯一、恐怖を前面に出した若い研究員が、不安げに背後を振り返った。

「室長……あの……」

「羊水にうまく適応したようだな……このまま育てば、順調に完成するだろう」

少しずつ、少しずつ、10年の歳月をかけて成長を続けているそれを見つめ、ノアがニヤリと満足げに笑う。

局員として溜め込んできた莫大な資産、研究者として築き上げてきた立場。それらを存分に使い上層部には決して伝わらぬようにと最新の注意を払い、行ってきた、己の人生をかけた最大最高の実験。

その集大成が今まさに完成に近づきつつあると、ノアの中の欲望はさらなる肥大を続けていた。

「……何に怯える。素晴らしい生命の誕生だぞ、もつと喜んでもいいのではないか?」

「し、室長は恐ろしくないのですか!??これが生まれてしまったということは……あ、あの災厄がまた起こるといふことまで!」

「正直……我々も不安です」

若い研究員の眩きに、彼の隣にいた女性も青い顔で頷く。少女といつても差し支えない年齢の彼女は、すすすくと育っている水槽の中身を見やり、ブルリと肩を震わせる。

ノアはそんな彼らに、心底呆れた様子でため息をこぼす。

誰もが息を呑み注目する、今生最大の発見。そこから派生する人類史最大規模の実験

に関わることに恐れる要素があるのか、と。

己が欲望に突き動かされているノアには、その感情が全くわからなかった。

「何を躊躇うことがある……災厄の胤といえど、今はまだ誕生前。しかるべき教育と実験を課せば、いかなる兵器よりも凶悪で従順な兵器が完成するのだ。喜ばしいことじゃないか……！」

恍惚に歪んだ笑みを浮かべ、ノアはまるで神でも崇めるように水槽の中で眠る存在を仰ぐ。

早く生まれ出で、その力を振るってほしい。他の何のためでもない、自分一人の理想のために全てを統べる力を発揮してほしいと、ギラギラと欲望に輝く目で願う。

その姿はもはや人には見えない。

人の姿をした何かが語っているとしか思えず、若い研究員の精神は限界を迎えた。

「あ、あんたは狂ってる……イかれてるよ！」

思わず一歩、後ずさる。今すぐにこの場から離れたいという深層意識が、彼の体を勝手に突き動かす。

しかしその無意識の行動は、彼を破滅へと導くこととなった。

ドンツ！と破裂音が響き渡り、研究員の額の中心に穴が空く。

目をも開いたまま固まった彼は、頭部に受けた衝撃により体をゆっくりと傾がせ、声

もあげられずに斃れた。

「君は、私の研究室には不適切だったようだね……残念だ。これは必要なことなのだよ、次元世界の平和のためには」

ドクドクと広がる血溜まりの中心で、天井を仰ぎピクリとも動かなくなる研究員を、ノアは困り顔で見下ろす。

その手に持った質量兵器……拳銃の銃口から白煙を立ち上らせ、無意味に散ってしまつた若い命に嘆息する。それなりに貴重な駒を一つ、自分で潰してしまつたことを悔いて。

「皆が求めているのだよ……腐つた組織を一掃し、新たに立ち上がる正義の味方が。古き因習を討ち払う圧倒的な力が！」

またも陶醉した表情で語り出すノアに、残つた研究員達の半数は震え上がり、残つた半数は同意するように笑みを浮かべ出す。

聞いているだけで頭がおかしくなりそうな、未だ机上の空論に等しい野望。その一端に携わることが、この先絶対にはない機会だと、かろうじて保たれていた理性の枷が緩み始める。

ノアの周りには、徐々に彼と石を同じくする狂人達が集まり始めていた。

「お前こそが…… お前こそが新たな時代の象徴なのだ！」

そう吠え、ノアは水槽の中にいる自分の最高傑作——人間とアンデッド、二つの遺伝子を併せ持ち生まれてきた新たな存在。

幼い姿をしたインシグニアを讃えるように、力強く叫んだ

5. 忌み子

「アルビノ……ジョーカー……もう一体の、アンデッド……！」

突如目の前に現れた白い異形に、クロノはデバイスを構えたまま硬直する。

資料でしか、そして事件の当事者達の話からしかその姿を知らない少年は、信じられない気持ちで変わり果てた彼女の姿を凝視する。

アインのような例とは全く異なる、大鎌を構えて立つ本物の不死の怪物を凝視し、ゾツと背筋を震わせる。

同じく絶句し、終焉の異形に目を奪われていたリンディ、やがてある事実思い至り、ハツと息を飲んで後ずさる。

『あなた……まさか』

「ふふ、ふふふふ……！ まさか僕も思いませんでしたよ！ こんな偶然が起こるだなんて！ もし本当に神がいるというのなら、どうやってこんなにも滑稽な筋書きを思いつけるのでしょうか？！」

慄く人間達の態度を面白がってか、インシングニア……アルビノジョーカーと名乗る異形はクルクルと大鎌を振り回し、弄ぶ。

弾んだ声は彼女の上機嫌さをこれでもかと示し、軽い足取りはクロノ達を挑発しているかのよう。それに苛立ちを覚えないくらいに、クロノ達はひたすらに驚愕し、言葉もなくして立ち尽くしていた。

「ですがこの偶然は……あなた方人間が引き寄せたものです。いわば自業自得の因果応報……自らが招いた滅びの運命から、逃れられると思わないでくださいね」

シャキン、と音を立て、アルビノジョーカーが大鎌の先端を突きつける。

途端に強烈な殺気が彼女から迸り、周囲にいた全ての人間達の精神をを凍りつかせる。

後ずさろうにも、逃げ出そうにも、悪鬼の形相で見つめてくるアルビノジョーカーの、そしてそれに付き従う邪神フォーティーンの眼光を前にすると、まるで足が地面に縫い付けられてしまったかのように動けなくなる。

例え今、目前に近づかれ、手にした大鎌の刃で真つ二つに切り裂かれようと、反応一つ残せないであろうほどに、なのは達は恐怖していた。

だが、そんな窮地であっても、たった一人動く者がいた。

じやきん、とデバイスを突きつけ、恐怖で引きつりそうになる顔をどうか引き締めたクロノが、異形達を前になのは達をかばっていた。

「なのは！ アルデブラント陸士を連れて下がってくれ！」

「クロノくん……!」

「あいつはここで足止めする…君がいては全力を放てない。だから頼む! その人を連れて逃げてくれ!!?」

必死の声で叫ぶクロノに、ハッと我に返ったなのは迷うそぶりを見せ、クロノとアルビノジョーカーを交互に凝視する。

険しい表情で考え込み、きつく唇を噛み締めたのは、ためらいを振り払うように首を横に振り、横たわったままのアインを引きずっていく。ガタガタと震えていたユーノも、待っていたと言わんばかりに大急ぎでそれを手伝い、玉座の間の出口へと向かった。

「アルフ!」

「う…わ、わかった!」

クロノは固まっていたアルフにも叫び、呆然と立ち尽くしたままのフェイトを見る。

尾が股の間に丸め込まれるほどの恐怖をあらわにしていたアルフだが、生物としての本能か、使い魔としての誇りゆえか、すぐさま主人のもとに駆け寄り、棒立ちとなつている彼女の手を引っ張る。

「行くよ、フェイト!」

「アルフ…! わかつてる…だけど母さんが…母さんがあいつの中に!」

「……めんよ、フェイト！」

邪神に飲み込まれた母の安否を思い、対比に応じることができず洩るフェイト。逃げたいという本能よりも、プレシアに対する執着の方が強く、見捨てて逃げ出す選択肢が取れないらしい。

そんな主人の精神が流れ込んできて、アルフは苦しげに顔にしわを寄せ、一言謝つてから少女の体を担ぎ上げる。

最後に一目、殿を努めようとしている青年の後ろ姿を見やつてから、アルフはきつく歯を食いしばり、走り出した。

誰もいなくなつた、もはや原形をとどめていない玉座の間で、二体の異形と人間の青年が相対する。

身に宿す魔力の量、身体能力、体格差、あらゆる項目において圧倒されながらも、クロノは不退転の覚悟を決め、自身の周囲に魔力の弾丸を用意して身構える。

そんなクロノに、アルビノジョーカーはニヤニヤと恐ろしい形相で笑い続けていた。「……人間が憎いのか、インシグニア・ジムニー。いや……アルビノジョーカー」

「フフフ……少し違いますね。嫌悪と憎悪は違うものですよ。例えていうのなら、そうですね……残飯に集るハエやゴキブリを憎みはしないでしよう？」

悪魔のような顔を、ビキビキと音を立てて歪める異形。かつてそれが美しい少女で

あったことなど一切想像させない、あまりに醜悪で恐ろしい顔で、アルビノジョーカーは嗤う。

生真面目そうな口調は変わらない、しかしその中に感じる人間に対する隔意は強く、口にした言葉が全て本心であることを表している。

一局員として、そして何より己の正義を徹せる確かな実力を持った者として敬意を持つていた相手の変貌。

それがたまたまなく悔しくて、クロノはきつく唇を噛み締め、絶えるような声で問いかけていた。

「…君にとって人類とは、そういう存在か」

「ええ……ですが、他ならぬあの人が守ろうとした種です。自分の持つ全てを犠牲にして守ろうとしたものです。それを全て消し去るのは、僕にとっても本意ではありません。…僕は、あの男とは違う」

首を振り、クロノにとつて最悪の予想を否定するアルビノジョーカー。

全ての種族を滅ぼすために現れる最凶の存在ジョーカーアンデッドとは異なり、絶滅とは異なる未来を考えている様子に、クロノは警戒をさらに強める。

クロノの懸念を正解だと告げるように、アルビノジョーカーは醜悪な笑みをさらに歪め、くつくつと音を漏らして肩を揺らした。

「守ってあげますとも……いいえ、どうしようもない哀れな種族として、保護してあげますとも」

ギリ……とクロノのデバイスを持つ手に力がこもる。仲間と、味方だと信じたかった相手の最後の良心を信じ、それが砕かれたことに小さく落胆する。

もはや、自分の目の前にいるのは仲間でも、人でもない。

倒すべき、斃さなければならぬ、加減が自分の死に繋がりがねない、今生において最強最悪の存在であると、そう確信した。

「そう簡単に滅ぼされはしないぞ……化け物！」

「いいですね……やっぱりあなたとはやりにくいなあ。屑のような種族の中に輝く君達のような存在を、この手で摘み取らなくちゃいけないなんて！」

ドットと、アルビノジョーカーが勢いよく飛び出し、クロノに向けて大鎌を振りかぶってくる。

音速に近い早さで向かってくる鋭い刃を前に、クロノは周囲に展開した魔力の弾を刃へと変換し、発射する。

せめて自分の奮闘で、少女達が逃げ延びる時間を稼げるようにと。

それによって自分が生き絶えることも、覚悟の上で。

「けど仕方ないですよねえ……それが僕の生まれた意味なんですから!!？」

放たれた刃が炸裂する寸前、異形の振り下ろした大鎌の刃が、クロノの首元にまっすぐ迫っていった。

——僕は…兵器。

全ての人間を、次元世界を支配し、平和に導くために生まれた、絶対の存在……。

ごぼりごぼりと、緑色の液体に覆われた直径数十cmと高さ2mほどの狭い世界。生まれた時から眼前に広がっている、生物という括りから断絶された、生温かく無機質な空間で、彼女は生まれ出でた。

——僕は全ての生物の頂点にある存在。

何者も僕に勝利することは叶わず、何者にも脅かされることのない怪物…兵器。

唯一にして絶対、代わるもののないもの。

人口の羊水、全身に繋がれた無数の管。

分裂を繰り返し、徐々に変貌していく細胞に様々な薬品が投与され、内包されるエネルギーの総量と質にも変化が表れていく。

彼女を囲う世界の外では、いくつもの機械が瞬きを繰り返し、それを何人もの人間達が忙しなく確認し、記録し続ける。それを指揮するたった一人の男は、特に何かをするわけでもなく、ひたすら満足げに彼女を見つめて頷くだけ。

気づいたときには始まっていたその生活の中、彼女は退屈そうにごぼりと息を吐いた。

——そう教えられても、何も思わなかった。

生まれた時から優れた存在である僕が、どうして下等生物を管理しなければならぬのかと、常に疑問を抱いていた。

学べば学ぶほどに、人間という頭でっかちで派手好きで浪費家な、歪んだ在り方をしている種族の醜さが、ありありとよくわかる。

詰め込まれるあらゆる知識の中、その種族について教えられることだけ、億劫で仕方がなかった。

10年の時を経て、受精卵の状態から成長を促され、人の少女の姿へと変わっていき、ようやく外の世界に出されるようになってなお、彼女に自由はなかった。

来る日も来る日も、裸体にセンサーを付けられ、身体状況の検査を取られる日々。それが終われば、ホログラムでできた的を使った戦闘訓練を課され、終わればまた検査が行われる。

毎日毎日変わらない時間、一切存在しない変化と刺激。

なぜこんなにも暇を持て余さなければならぬのか、なぜこんなくだらないことに付き合わなければならないのか。

その理由を彼の男に答えられてからも、虚しさとつまらなさは変わらなかつた。ある日を最後にして。

——…だけど、こんな僕にもルーツはあつた。

そしてそれは、僕にとって唯一の例外となつた。

その日は、経過観察という名の、投薬も実験も何もなかつた日のことだ。

一人の男に与えられた権限を使い、施設の一角にあつた資料室に足を運び、なんとなく手を出してみた一部のファイル。

その中に記載されていたある名前に、彼女はなぜか興味をそそられていた。

『…アイン・K・アルデブラン』

——見つけたのは、僕を構成する遺伝子の片方の素である、一人の女騎士。

全人類の裏切り者とされ、今もなお組織に首輪をつけられて飼われ、あらゆる戦場に送り出されている、私と同じ兵器。

ただの一度も敗北はなく、幾度も死と再生を繰り返しながら戦い続ける、現時点において最強と呼ばれる存在。

文字と写真のみで記載された情報。それは細かく分けると二種類あった。

一方は淡々と事実のみを記録した、女騎士に対する情など一切ない無機質な内容の資料。

もう一方は世間に公表するために作られた、女騎士の立場を身勝手な悪役に転じ、事件の根本的原因として悪意を持って曲解させる内容の、いわば筋書き。

それらに大した興味はない。

人間の組織が、たかが女一人を生贄に組織の信頼と地位を保持しようという目論見に、嫌悪も同情も抱くことはなかった。

興味の対象は、女騎士に対してのみだった。

『…僕と、どちらが強いでしょうか』

——最初に思ったのはそれだけ。

人間でいう、母親の位置にあるその女騎士の名を耳にしただけでは、なんの感情も浮かばなかった。

だけど、それは少しずつ変わっていった。

彼女が自分の自由と引き換えに、ある一つの存在を守り抜こうとした経緯を知り、徐々に深い興味を抱き始めた。

まだ彼女が人間であつた頃、幾度も死を目前にしながらも、それでも自分の守

りたいもののために戦い続けた記録を見て、僕の中で何かが変わり始めた。

その生き様に、在り方に、ひどく惹かれ出していた。

彼女達は、自由がないという意味では似ていた。

しかし、在り方は全く異なっていた。

女騎士には始め、何もなかった。

手に入れたものをすぐ横から奪われ続け、かすかに残ったものを頼りに必死に這いずり、生き延びようとしていた。

その努力の結果得た地位も栄光も、たった一度の過ちで、女騎士を蔑み妬み恐れる者の迷惑のせいで全て奪われ、首輪を付けられ尊厳まで奪われた。

対する彼女は始めからあらゆるものが与えられていた。

優れた能力に全てが揃った環境、何をすべきか選択も用意されていて、自ら思考する必要もなく、ただ言われた通りに動いていればそれだけでいい、怠惰に過ごせる生。

自らの手で何かを手に入れた経験などなく、自由がない代わりに、何にも脅かされることもなかった。

——しかし、その憧憬は次第に、強い怒りと悲しみに変わり始めた。

なぜ彼女だけが、こうも苦しまなければならぬ？

そのことに気づいた瞬間、彼女はそれまでの彼女ではいられなくなつた。

得ては奪われ、それを繰り返す運命に翻弄されている女騎士と、ただ与えられるままに、促されるままに存在し続けてきた彼女。

同じ遺伝子を有する者なのに、どうしてこんなにも胸糞の悪くなるような差別が生まれているのか。

なぜ、彼女にその在り方を強制した者達が、被害者のような顔をして踏ん返り返ったままなのか。

——一度浮かんだ疑問は時とともに膨れ上がり、彼女の記録を見るたびに色濃く僕の中にこびりついていった。

災厄の遊戯を始めたのは誰だ——人間だ。

彼女に戦士の重責を負わせたのは誰だ——人間だ。

彼女をこんな存在にしたのは誰だ——人間だ。

彼女を怪物に変えたのは誰だ——人間だ。

彼女を苦しめ続けているのは誰だ——全て、人間だ。

それに気づいたら最後、彼女の憎悪は止まらなかつた。

興味のかけらもなかつた種族、道端でうごめく虫けらの様に、直接的な害さえなければ機に止めることもなかつた、ただの有象無象。

その認識が変わり、ただの虫けらではなく、本能的に嫌悪を抱かせる最悪の害虫へと、

彼女の中の人間は評価を変えられていった。

——人間は……この世にあるべきではない命なんだ。

ブツツ、と大鎌を振り払い、付着した大量の鮮血を除く。

足元に倒れ伏した、息も絶え絶えとなつた黒髪の少年を見下ろし、アルビノジョーカーが物憂げにため息をついた。

「たった一人にこんな重荷を背負わせるような世界に……そしてそんな愚かな種族に、存在する価値はあるのですか？」

返事はない。

身体中に刻まれた傷口からどくどくと血を流し、ピクピクと痙攣を繰り返しているクロノは、もはや意識があるかも疑わしい。

滅ぼしたいほどに嫌いな種族ながら、どうしても嫌いになれない心意気を持っていた彼に、白い異形は口惜しげな表情で虚空を見つめる。

どうして殺したくない者を手につけて、殺したい者を放置したままではいけないのか。

そんな嘆きが、彼女の中にはあった。

「救われた過去をまるでないもののように扱う者達に……どうして罪がないのですか？」

頭上から、ガラガラと瓦礫が落下してくる。玉座の間の狭い空間で窮屈そうにしていたフォーティーンが、伸びをする様に両腕を広げはじめたのだ。

バキバキと拡張されていく空間、暴れ狂うことを待ちわびているかの様な目をしている邪神、広がっていく空間の崩壊。

それらを見上げ、アルビノジョーカーは今一度クロノに目を向け、思いため息を聞かせた。

「僕は僕の全身全霊をもって、人間を嫌悪します。憎むことのできない、優しすぎるあの人に代わって、僕のルーツを嘲笑う全ての人間に鉄槌を下します」

そう言って、アルビノジョーカーはたんつと大きく跳躍し、フォーティーンの鼻先の高さにまで飛び上がる。

すると邪神と黒い異形の体から黒い光が漏れ、互いに発せられたそれが混じり合い、影が一つとなっていく。まるで空いていた穴が埋められていく様に自然に、ズブズブと重なっていく。

その間に異形と邪神が浮かべていたのは、あまりにも幸福そうな、恍惚とした笑みだった。

「だから……今その重荷から解き放つてあげますね、母さん」

その目に狂おしいほどの愛を宿し、アルビノジョーカーは……インシグニアはニッコリと微笑み、地に堕ちた母に向けて告げた。

6. 不屈の心

カラカラカラカラ……と、搬送台に乗せられたアインが、アースラ内部の医務室に運ばれていく。

四肢を一部欠損し、体表のほとんどを焼き焦がされた女騎士は、ほとんど聞こえないような細かい呼吸を繰り返し、虚ろな目で天井を見つめる。搬送台が揺れるたびに、彼女の焦げた皮膚がカサカサと崩れ落ちていた。

「アインさん！ 返事をして……アインさん！」

猛スピードで運ばれていく搬送台にすがりつき、涙目で声をかけるのは。その声が届いた容姿はなく、黒く染められたアインは沈黙したままだ。

通常の間人ならば即死しているような重傷。しかしそんな目を覆いたくなるような酷い状態になってなお、アインの肉体は腐敗しておらず、端から微々たる速度だが再生を始めている。

だが、再生した端から皮膚が崩れ、元の燦々たる状態に戻ってしまう。まるで死に続ける事を強要される拷問のような呪いに、医療スタッフは顔を真っ青にして絶句していた。

「いつもより損傷の回復が遅い……！ 同じアンデッドにやられたからか!?？ いや、復元が間に合わないほどに損傷が大きすぎるのか!?？」

「アルデブラント陸士！ 聞こえますか、意識を保ってください！」

光を失った目をしたアインに、医療スタッフは必死に呼びかける。全くと言っていいほど反応がなくとも、呼吸以外完全に死人のような有様になっていようとも、職務を全うしようとする。

その理由がアイン自身を案じてのことだけではなく、かの異形とまともに戦える数少ない戦力を損失するわけにはいかないという、打算的なものが混じっていても。

この場において、本心からアインのことを心配しているのは、悲しいことに約4名のみ。

泣きじやくるなのはとフェイト、呆然と立ち尽くすユーノとアルフだけが、痛々しい姿のまま治療室に運ばれていくアインを凝視していた。

「そんな……そんな……！ 私を……私をかばってアインさんは……私のせいで……！」

「アイン……アイン！」

「離れて！」

ガラガラガラッ、と搬送台ごとアインが緊急治療室に運び込まれ、払いのけられたなのはが尻餅をつく。

医療の力を持たない彼女達は、そして知人をやられて大きな精神的負荷を負っている彼女達にできることは何もなく、閉じられた治療室の前でへたり込むのみ。

誰も何も、口にできない。

誰より強く、無敵とさえ思っていた女騎士に降りかかった惨劇に、彼女を慕っていたのはもちろん、恩義を感じるフェイトも暗い表情で俯く。

そんな、空気そのものが冷え込んだかのような空気の中、座り込み棒立ちになる少女達を見つめていた二人の男が、顔を上げて踵を返した。

「…行くか」

「ええ…それ以外にないでしょうね」

小さくうなずき合い、歩き出す男達——サクソとムーヴに気づき、アルフがはつと顔を上げて振り向く。

二人の男達は通路の奥を、アースラの出入り口に通じるその道の先を見やり、迷うことなく歩を進める。まるでもう二度と振り向きはしないと決意しているかのように、颯爽と歩いていく。

死、そのものに向かって突き進もうとしているように見える二人の男達に、また呆然となっていたアルフは、我に返ると慌てて声を張り上げた。

「ま…待ちなよ！ あんた達まさか…あの化け物と戦うつもりなのかい!?」

「それが俺達の任務だ」

「バカ言うんじゃないよ！ アインがこんな目に遭うようなやつなんだよ!!? 勝てる

わけないじゃないか！」

「だからといって、見過ごすわけにはいかない」

「殺されるだけだ！ 何の意味もないよ！」

彼らとは、そう深い仲ではない。

話をした機会どころか、戦う姿を見たことも片手で数える程でしかない。

しかし、アルフの魔狼としての本能が語る、彼らの実力の高さは、アインよりも下にある。それだけははつきりとわかり、アルフは必死に首を横に降る。

最強と謳われる騎士が、手も足も出せずに墜とされるような存在を相手にして、無事ですむはずがないと、アルフは最悪の未来を想像していた。

だが、サクソもムーヴも、アルフの説得に振り向く様子はない。

それどころか、老いた騎士達のその背には、さらなる覚悟が積み重ねられたかのようにも見えた。

「意味がない……そうかもしれない。俺は……俺達がかつて、何一つ救うことができず、たった一人の共に全ての責任を押し付けた弱者だ。あれに対して、どれだけ傷を負わせられるかなど、考えるまでもない」

「……」

悲痛な後悔をにじませるつぶやきに、なのもフェイトもひゅつと息を飲む。重く、感情の全てを押し殺している声に、背筋にゾツと寒気が走る。

誰よりも近くで、女騎士の孤独で悲惨な戦いを見届け、全てが終わってなお苦しみ続ける彼女を見ていることしかできなかつた彼ら。

彼らは、少女達にも想像がつかないほどの後悔を抱き続けてきた。

揺るがぬ意志で戦い続けてきた彼女をも下した怪物、そんなものを相手にしようとするサクソ達は、やはり無謀としか思えなかつた。

「だ……だつたらー！」

「なればこそ！ 俺達はもう逃げられない……逃げてはいけないのだ！」

だが、どれだけ事実を突きつけられようと、サクソ達は退く様子を見せない。より一層の覚悟と闘志を見せ、前を見据えて声を奮わせる。

拳が震えるのは、怯えではなく自分への怒りからか。死を目前にして、それでも臆すことなく立ち向かおうとしている男達に、なのには悲痛な眼差しを向け、声を震わせ呼び止める。

「だめ……ダメだよ、サクソさん……ムーヴさん……！」

「俺は……俺達は一度逃げた臆病者だ。一度は立ち上がる素振りを見せておいて、結局ま

た無様を晒したろくでなしだ。今更失うものなど……何も無い」

「だからせめて……あの人が守ろうとしたものだけでも、君達だけでもここから逃がしたいんだ……！」

サクソとムーヴは、懐から長年使い続けている鉄の箱を——ギャレンバックルとレングルバックルを取り出す。

自分たちに激しく辛い戦いの運命を背負させた一因にして、彼らを守ってきた鎧と武器を与えてきたデバイス。血と汗と涙を流させてきた原因にして、使用者の命を守ってきた装備という、皮肉な在り方をした愛機。

抜き出したカテゴリーAのラウズカードを、二人はそれぞれのバックルに挿入し、勢いよく腰に押し当て、ベルトを巻きつける。

「見ていろ、高町なのは。これが……俺達の最後の戦いだ！ 変身！」

「変身！」

【TURN UP】

【OPEN UP】

聞きなれた機会音声とともにデバイスが変形し、中心から二つの半透明のスクリーンが出現し、サクソとムーヴはそれに顔から突っ込み肉体に纏わせる。

一瞬にして生み出された鎧に身を包み、ダイヤの銃士とクラブの槍使いが再びその姿

をあらわにする。

さらに高まる闘志を胸に宿し、戦いの運命を受け入れた二人の男達は、仮面の裏側でキツと鋭い表情に変わる。

「三頭狼はもういない……ならば最後の城壁は、我々しかない！ 出動だ！」

「了解！」

雄叫びとともに、二人の戦士が邪神と異形のもとに向かつて走り出す。勝算も何も無い、ただ己の全力を持って立ち向かうことだけを決めた彼らは、一切の迷いも躊躇いもなく、武器を手に戦場へと舞い戻る。

覚悟を決めたその二つの背中が、数秒前よりも少しだけ、大きく見えた気がした。

遠く去って行く背中を、取り残されたなのはとフェイト、ユーノとアルフが無言で見送る。

止めることもできず、ただみっともなく泣き叫ぶことしかできなかった少女達は、何も掴めずに終わった手を見下ろし、言葉もなく項垂れ続けていた。

「なのは……」

「フェイト……」

沈黙し固まってしまった少女達を見つめ、少年と使い魔は心配そうな目を向け、結局何も告げられず黙り込む。

彼女達と同じく……いや、彼女達以上に何もできず、死地へと向かった戦士達を呆然と見送ることしかできなかつた彼らは、なのは達の苦しみや悔しさを思い、きつく唇を噛みしめるばかりだ。

「…逃げちゃダメ、か…それなら……私もだよ」

そんな、重く鉛の様にのしかかる様な空気の中、ずっと黙り込んでいたなのはが、自嘲気味に呷く。

虚ろな表情のまま、ぼんやりとなのはの方を見やるフェイト。その目が、徐々に驚愕で大きく見開かれていく。

なのはは、笑っていた。

悔しさと不甲斐なさで顔をきつく歪め、眉間に深いしわを刻み、拳をきつく握りしめ、それでも感情を抑え込もうとする様に、無理矢理笑みを作る。

まるで、次々と降りかかる不幸の前に、心だけでも屈しない姿を保とうとしているかのような、痛々しいまでの虚勢の姿だった。

「ずっとずっと守ってもらって、助けてもらったのに…あの人が苦しんでるのを横目に、逃げるなんて…できない。いやだよ、そんなのは」

「……それは、私もだよ」

胸元に伸びた手が、愛機の赤い宝石をきつく握りしめる。最悪の敵の圧倒的な力を見

た恐怖がまだ残っているのだろう、その手は震えたまま、一向に落ち着いてくれない。だがそれでも、なのははゆっくりと立ち上がった。子鹿の様に震える足に叱咤し、恐ろしい敵のいる方に、確固たる決意を宿した眼差しを向ける。

その姿は、へし折れそうな心を奮い立たせるまさに不屈の心。

小さくも、強く眩しい力強さを見せるその姿に、フェイトもいつしか、同じ決意の表情で立ち上がった。

「……立ち止まってちゃ、ダメだよね」

「うん……今までずっと、守られてたんだから」

互いに顔を見合わせ、肯き合うのはとフェイト。

恐れはまだある。本音を言えば、今すぐにこの場から逃げて、誰も入ってこられない様な場所に閉じこもってしまいたいくらい、震えが止まらない。

だがそれでも、退くことはできなかった。

「行こう！ フェイトちゃん！」

強く領き合った二人の少女が、先に向かった騎士達の後を追い走り出す。

残されたユーノとアルフも、ほんの一瞬迷う素振りを見せたものの、すぐに表情を引き締め、振動で揺れる通路を駆け出していった。

びりびりと空間そのものが振動し、どこからともなく軋む音が響いてくる。

ブリッジにまで伝わってくる凄まじい衝撃をどうにか耐えながら、リンデイは庭園の奥に現れた邪神がいる方を睨みつけた。

「次元震動、現在も拡大中！」

「ジュエルシードの規模をはるかに上回っています！ このままでは……」

部下から上がる報告の声に、ぎりつときつく歯をくいしばる。想定外の敵の出現に、辺境の管理外世界だからとろくな準備をしてこれなかった不甲斐なさが強くなる。

所詮はどうなるうと損のない、文化的にも科学水準的にも優先順位の低い世界と日和見を決めていた上層部の尻の重さを恨みつつ、リンデイはキツと鋭い表情で顔を上げる。

「元凶を叩く他にないようね……砲撃用意！ 何としてでも、あの怪物にこれ以上活動させてはなりません！」

「了解！」

迷う事なく、アースラに搭載されている魔力砲を起動させる。できれば使う機会がないで欲しかった代物だが、今は頼もしいどころか心許ない。

そしてドンツ！と。

轟音とともに砲弾を発射し、時の庭園の奥に炸裂し大爆発を起こす。ちよつとやそつ

と硬い程度の対象ならば簡単に木っ端微塵にできる威力のそれが、何十発と叩き込まれていく。

が、観測される魔力の反応に変動は見当たらない。

それどころか、破壊された庭園の屋根をべきばきと押しつけ、見覚えのある巨体が見え、聞き覚えのある声が耳に届けられた。

『あはっ、あははははは！ そんなものが効くわけないでしょうが！ 悲しいですねえ……非力というのは!!?』

姿を現したのは、邪神フォーティンナーその胸の中心に融合している、上半身だけをあらわにしたアルビノジョーカーだった。

邪神と一体化した彼女は、高揚した声でアースラを、その中でどよめいているリンディ達をあざ笑う。

邪神の近くに、クロノの姿は見当たらない。最後に少女達を守り、殿を努めた青年は、影も形も見当たらなかった。

それが意味する残酷な事実には、リンディは血が流れるほどに歯を食い縛る。痛々しく顔をしかめながらも、提督の地位を有する彼女は必死に表情を取り繕う。泣き出したくなるほど胸が痛くなるが、無理矢理押し殺し敵を見据えた。

「……何とでも言いなさい……非力な人間でもね、友達や子供達を逃がす時間ぐらい

は作ってあげられるわ。見くびらないことね、怪物さん」

必死に虚勢を張り、不敵に笑うリンディ。

アースラクルー達も同じく恐怖心を隠し、決して力に屈しない姿勢を見せる。

少女達が戦場に混じることを認めてしまった罪を償うつもりで、誰一人持ち場から逃げ出す事なく、職務に向き合おうとする。

『……馬鹿ですねぇ』

だが、その去勢はわずか数秒で崩れていく。

フォーティーンが体を出す、庭園に開けられた穴。その中からわらわらと、白い異形の蟲兵達が這い出してくる姿が見えたからだ。

何度も見てきた、魔法の宝石を求めて現れた無数の蟲兵。

彼らが再び現れた事で、アースラメンバーは皆呆然と、リンディは目を見開き絶句してから、やがて納得したように皮肉げな笑みを浮かべ始めた。

「アルビローチ……い。ああ、そういうこと……あいつらが現れたのはー!」

『お察しの通り……僕の生み出した手駒です。もつとも、さして言うことを聞いてくれるわけではありませんがね。彼らは好き勝手に暴れるだけです』

ギチギチと音を鳴らし、庭園を自身の色で真っ白に染め上げていく白い蟲兵ーア
ルビローチ。

不気味に嗤い、牙と爪を鳴らして増えていく彼らの軍勢を操りながら、アルビノジョーカーはくすくすと肩を揺らして告げる。まるで、自慢のおもちゃを他人に見せつける子供のような態度で。

『ですが彼らは彼らで実に有能です……いずれ全ての人間を管理するためには、人ではいくらあつても足りませんからね。いい抑止力になってくれるでしょう』

返答はなく、代わりにグツと唇を噛むような音が聞こえてくる。

法の番人達が見せる、怒りと悔しさを抱きながらも何もできない無念さを現したその音に、アルビノジョーカーはひたすらに愉しげな声を上げていた。

『圧倒的な力に圧倒的な軍勢……これでもまだ、抗う気がおありですか？』

沈黙するアースラに向けて、アルビノジョーカーはゆっくりと片腕を上げる。それに従い、フォーティーンも自身の体を庭園の中から脱けだし、四本の巨大な腕を掲げていく。

途端に迸る、炎や風や雷や氷、四人の騎士達が使っていた四大元素の力が、凶悪な凶器として発生し、膨れ上がっていく。

それを止める手段は、今のアースラには残っていない。

たった一瞬で全てを破壊するであろう凄まじき力の奔流を前に、最後と覚悟したりンデイ達が、悔しさをあらわに目を逸らす。

だが、それを阻む一筋の赤い閃光があった。

【ABSORB QUEEN, FUSION JACK】

「おおおおお!!?」

【FIRE, BULLET, RAPID, BURNING SHOT】

孔雀の翼を背にまとい、刃を備えた銃を手にしたサクソが、邪神に向けて炎の弾丸を連射する。

着弾した弾丸は無数の小爆発を起こし、邪神の手に集まっていたエネルギーにも炸裂し、放たれるより前に暴発させる。邪神自体には全く傷が入ることはなかったが、わずかに動きが鈍くなっていた。

サクソはアースラの前に飛翔し、リンデイ達を背にかばう様にフォーティーンを睨みつける。

しかし、邪神に対抗するにはあまりに小さく頼りない背中に、リンデイは安堵ではなくさらなる不安を煽られた。

『マンダリン陸尉……!』

「あのデカブツは俺達がやる……ザコの掃除を頼みたい。腰が抜けた陸の連中も、時の庭園で初っぱなからぶつ倒された連中も、全員叩き起こして向かわせてくれ、以上だ」

『ま、待つてください！ あなた達だけでアレを相手にするなんて——』

止めようと声を上げるリンディだが、それにサクソが応じる様子はない。

ジャキン、と銃を構え直し、銃口をフォーティーンの眉間、アルビノジョーカーが融合した部分に向けながら、鋭い覇気を放つ。

その後から、槍を振り回したムーヴが、雄叫びとともに飛びかかった。

「でえやあああああ!!?」

「BLIZZARD, POISON, STAB, RUSH, BLIZZARD
GENOCIDE」

鋭い突きとともに放たれる、毒と吹雪の力を宿した槍の穂先。

渾身の力で振るわれたそれは、フォーティーンの蠅でも払うかの様な動作であっけなく弾かれ、ムーヴは大きく吹き飛ばされる。

しかし空間内で宙返りをし、ムーヴはアースラの外壁に着地し体勢を立て直す。

即座に槍を構え直すムーヴに横目を向けてから、サクソは翼を羽ばたかせ、フォーティーンに向かって勢いよく飛翔した。

「行くぞ、化け物。俺の元部下を散々痛めつけてくれた札を返してやる」

『無駄な事を……!』

仮面の奥から向けられる怒りの感情に、アルビノジョーカーは本気で呆れ、嘲りの声をあげて迎撃に向かう。

鋭い突貫で迫るサクソに、先程不発に終わった四大元素の砲撃をもう一度準備し、照準を合わせていく。集められた濃密なエネルギーが空間を揺らがせ、ダイヤの銃士を跡形もなく消し飛ばそうとする。

「ダイバイン……バスタ——!!?」

「サンダー……スマツシャ——!!?」

しかしその砲撃もまた、別方向から飛来した二色の砲撃に貫かれ、爆発四散し衝撃波をまき散らした。

フォーティーンは苛立たしげに、逆にサクソとムーヴは驚愕の表情で目を見開き、桜色と金色の砲撃が飛んできた方向に振り向く。

予想通り、頭上にいたのはなのはとフェイトだった。砲撃形態へと変形させた相棒達をそれぞれで手にし、それぞれの仲間を連れてサクソを見下ろしてきていたのだ。

「お前達……!」

「私達も……戦います!」

「無謀だ! 退け! お前達がここにいても状況は……」

「わかつてます!」

まさか、この状況で加勢しあの邪神を相手にするつもりなのか。

危険すぎる、無謀極まりない戦いに臨もうとしている少女達に、サクソとムーヴは当

然止めようと鋭い目を向ける。

だが、制止の声を遮り、なのはは確固たる決意の眼差しをサクソ達に向けて、レイジングハートを構えた。

「だけど……ここで逃げたら、私達はもうあの人に顔向けできません！ 頼るだけ頼って……甘えて、最後に全部押し付けたりしたら、もう二度と自分を許せなくなりませう！」
なのははに続く様に、フェイトもバルディッシュの黄金の刃を振りかざし、フォーティーンに鋭い目を向ける。

その後ろに、ユーノとアルフもややこわばった表情ながら並び立ち、魔法の光を手のひらに灯す。勝てるという見込みはほとんどない、しかし退くことは決してできないのだと、覚悟を決めた目を向ける。

「大切なことを……たくさん……！ たくさん教えてくれた！ 守ってくれた！ 今度は私達が……あの人を助ける！」

その雄々しく、いつそ美しくも見える少女達の宣戦布告に。

サクソもムーヴも何も言えなくなり、その姿を凝視するだけになってしまっていた。

7. 弓士の帰還

暗い暗い、深い海の底のような空間に、アインは一人漂っていた。

全身にまとわりつく思い感触、水圧のように圧迫し押し潰そうとしてくるそれが、肌を抜けて心臓にまで迫って来る気がする。

——ここは、どこだ。

ゆっくりと瞼を開けようとしても、まるで錘を縫い付けられているかのように重く、体のすべての自由が効かない。

なぜか、と考えようとしても、うまく頭も働いてくれなかった。

ぼんやりとしたまま時の流れに身を任せていると、徐々に脳裏に記憶が蘇ってくる。対峙した敵、変貌した巨大な怪物、狙われる少女、そして、圧倒的な力を受けて倒れて行く自分。何が起こったのかを少しずつ思い出し、焦燥が生じる。

——私は…そうだ、あいつらは。

あいつが呼び出したあの化け物は一体どうなつて…。

無理矢理にでも瞼を開け、自分が守ろうとした少女たちの元へ向かおうとするアイン。だが、彼女の身体はもう、本人の意思を全く聞いてくれない。

神経の全てが焼き切れてしまったのか、文字通り糸の切れた人形のように横たわるだけで、指先一本動かすことも叶わない。

何度も挑戦し、起き上がろうとするアインだったが、やがて脱力する。

役に立たない自分の体に、諦めを抱いてしまっていた。

——…駄目だな。

全身が鉛のように重い……起き上がることも、出来んのか。

底に穴の空いた器に、ひたすら水を注いでいるような気分になり、アインは激しい無力感に苛まれる。自分の行い全てが全否定されているような気がして、余計に意思が削り取られていく。

最も大切だった者との時間を棄ててまで背負った責務、自分で選び、苦しみなながらも、守りたいものを守り続けてきた自負が、多少なりともあった自分の生。

その全てが、別の誰かの思惑によつて全て水泡に帰したような、そんな遣る瀬無さで、アインは虚しさに苦しんでいた。

——結局私は……何のために存在していたんだろうな。

運命などと言う曖昧なものに踊らされ、せつかくできた大切なものを何もかも奪われ壊され、この手に残ったものなど何も無い。

この潰れた腕では、何も掴むことなどできはしない。

ただ……だれかと一緒に生きていたかっただけなのに。

こうなつた以上、もう自分には何もできない。

我儘で世界を引つ掻き回した責任を、あの場にいた誰かに押し付け、戦うこともせず
にこんなところで自嘲することしかできない、ただの木偶の坊でしかない。

虚しさに嘆息し、思考さえも放棄しようとした、その時だ。

覚えのある気配に気づき、闇に沈みかけた彼女の意識が、一瞬で覚醒を果たした。

——…この、気配は……?!

ずつと感じていたかった、しかしもう二度と感じてはならないはずのその気配に、ア
インは緊急治療室のベッドの上で、愕然と目を見開いた。

ドツ！と強烈な四大元素の砲撃が放たれ、アースラの外壁すれすれを通過する。

僅かに掠つた部分が瞬く間に蒸発し、シユウシユウと白い煙を上げる。その直後、遙
か後方に向かっていった砲撃が何かに炸裂し、爆発して凄まじい衝撃波を放ち、アース
ラ全体を揺らした。

空気そのものさえ熱するようなその一撃に、瞬時に上下左右に展開し回避したなのは
達は総じて目を見張り、冷や汗を流しながら息を呑んだ。

『あははははははは！……ちつぽけなあなた達に何ができるといいますか?！』

呆ける暇もなく、フォーティーンとそれと一体化したアルビノジョーカーが哄笑を上げて襲い掛かってくる。

巨大な四本の腕、その手に握られた巨大な武器を振り回し、少女達を木端微塵にしようにと凄まじい質量をぶつけてくる。

それだけではない、邪神と異形にだけ集中していると、邪神の腕から飛び出した白い蟲兵達が、唸り声と共に襲いかかつて来るのだ。迂闊に近付くことは、即座に死を示す。『せつかくあなた達は見逃してあげてもいいと思っていたのに……リンディ提督の気持ちが無下にするなんて、悪い子達ですねっ!!?』

「下がれ!!?」

頭上から迫る剣の刃を前に、頭上から迫る蟲兵の大群に、サクソが鋭く叫びなのは達に促す。なのは達は即座に応じ、左右に分かれて振り下ろされる刃から逃れる。

たった一度、剣が振るわれただけで凄まじい強風が吹き荒れ、辛うじて回避したなのは達を吹き飛ばす。

どうにか体勢を整え、反撃に移ろうとするが、邪神は休むことなく次なる一撃を向けてきていて、目で追い反応することで一杯一杯になつてしまっていた。

『あなた達に何ができますか!!? そんなちつぽけな力で、僕の願いを阻めますか!!? この力は全ての命を牛耳る力! 全てに対し正義を執行する絶対の力だと、最初に

言ったはずですがねえ!!?』

邪神の猛攻の合間を飛び、何とか反撃の機会を見出し、構えたレイジングハートから一発の砲撃を放つのは。

桜色の閃光は蟲兵達をまとめて呑み込み、瞬く間に蒸発させ消滅させる。そのまま閃光は、蟲兵達の親玉である邪神のど真ん中に炸裂した。

しかし、邪神の顔面に直撃したそれは一辺の傷をつける事も叶わず、絶対的な力の差を目の当たりにさせられるだけに終わってしまふ。悔し気に歯を食い縛りながら、なのはは振るわれる邪神の拳を躲し、頭上に跳び上がった。

「くっ…来ておいてなんだけど、今すぐ逃げちまいたいよー!」

「そうできるならそうしていたさ! だが…あいつの力からは逃げられるとは思えない」

「Sonic move.」

【BLIZZARD IMPACT】

ぼやくアルフがアルビローチを殴り飛ばしながら呟き、光の鎖で拘束を試みるユーノも同じく冷や汗を流して呟く。

その横を、雷光となったフェイトが飛翔し、氷結の力を槍に纏わせたムーヴと共に至近距離からの一撃を叩き込む。

甲高い音と鈍い音が重なり、耳障りな不協和音が辺りに響き渡る。だが邪神はその程度の一撃ではものともせず、鬱陶しそうに二人に片腕を振るい跳ねのける。

何とか直撃を避けた二人は今一度距離をとり、傷ひとつない邪神の体表を見据えて歯を食い縛っていた。

「諦めちゃ……だめだ!」

「たとえ限りなく0に近い可能性だったとしても……俺達が諦めるわけにはいかんだろうが!」

消極的な思考ばかりを口にする使い魔達に、サクソとムーヴが強く否定の言葉を告げる。その目は真つすぐに邪神を見せたまま、相変わらず一切退く気を感じさせない。

その身の全てを犠牲にしても、戦い続けると覚悟を決めた男達の勇姿に、邪神はけらけらと悍ましい嗤い声をあげた。

『あははははは……! 限りなく0に近い? いいえ! 完全な0ですよ!!?』

叶うはずもない、夢物語を語り続けるサクソとムーヴに向けて、アルビノジョーカーは引導を渡そうと思つてか、四代元素の力を四本の腕それぞれの武器に纏わせていく。

その威力の高さは、最初に放たれた砲撃とほぼ同じ。しかしそれよりも強く圧縮された強烈な一撃となつて、サクソ達を消し飛ばしてしまおうと迫る行く。

一瞬にして、この世から消滅する。

絞り出されたサクソの眩きに答えるように、弓士がため息混じりに告げる。ハートの形をした目で邪神を、写真の中心に融合する異形を見つめたまま、自嘲するように低い声をこぼす。

邪神もまた、突如目の前に現れた黒い弓士を凝視し、言葉を失くす。

だが次第に、彼女は大きく目を見開いたまま、口を耳まで裂けて見えるほどに歪めていく。ビキビキと軋む口が、獰猛な悪魔の形相を作っていく。

彼女の黒い目に表れるのは、狂喜であり、激しい憎悪と憤怒であった。

「忘れ物を片付けに来たつもりが……とんでもない連中と再会する羽目になったな、なあ……我が娘よ」

『……あは、あははははははは！ まさか……まさかまさか、僕もあなたと会えるとは思いませんでしたよ……!』

動きを止めていた邪神の全ての腕が、弓士に向けて迫る。四大元素の力を掌に集め、力尽くで握り潰さんとするために、鋭い爪が大きく開かれる。

アルビノジョーカー は悪鬼のごときその顔で嗤い、怒号のような、悲鳴のような、歓声のような、様々な感情が入り混じった声で大きく吠えた。

『アイゴ・ハジメええええええ!!?』

ドンッ、と合わさった四つの掌の中で、弾けた四大元素の力がぶつかり激しい衝撃波

が生じる。

熱が、振動が、圧が撒き散らされ、アースラやサクソ達に襲い掛かり、吹き飛ばそうとする。どうかその場に留まるだけで、人間達は精一杯になっていた。

そんな彼らを尻目に、弓士は——ハジメは風を操り力の奔流の中を飛びぬけ、再び邪神の目の前にまで迫る。

そして巨大な顔面に、鋭い刃を振りかぶってみせた。

「アイゴ・ハジメって……じゃあ」

衝撃に顔を覆い、吹き飛ばされぬよう耐えていたなのはが、聞こえてきた名前にハッと息を呑む。

仇敵を捕えようと動く、巨大な邪神の腕を掻い潜り、縦横無尽に空間を舞うハートの騎士。素顔の見えないその戦士を目で追いながら、なのはは脳裏に蘇る、恩人の胸が締め付けられるような悲しい過去を思い出していた。

「……あれが、アインさんの……!」

「ハートの弓士カリス……そして、ジョーカーアンデッド……!」

啞然としたまま眩くなのはに合わせるように、ユーノも半ば呆然とした様子で眩く。もう半分の彼の感情は、弓士に対する激しい怒りが占めているようだ。

凄まじい暴風が吹き抜け、頭上を邪神の腕が通り過ぎる。

それをハジメが紙一重で躲し、傷一つ負わないまま空ばかり切られ続けると、アルビノジョーカーは悪魔じみた顔をより凶悪に歪め、大きく吠えた。

『アイゴ・ハジメええ…… お前は……お前だけはああああ!!?』

「強い恨みの念だ……それはそうだな。そうなって当然なほど、俺の犯した罪は重い」
鋭く突き出された剣を受け流し、刃に乗る。

自身をうつすらと映す、鈍く輝くその上を駆けだし、フォーティーンの腕を登り本体のもとまで駆け上がっていく。

途中、別の腕がまるで蠅や蚊を潰そうとするように伸ばされるも、目にも止まらぬ速さで加速したハジメを捕らえる事は叶わない。

忌々しげに目を光らせるアルビノジョーカーを見据えながら、はじめは一枚のラウズカードを取り出す。

「お前は俺が生み出した闇だ……俺が抱いた情で、あいつに孕ませた災厄の胤だ。俺の軽率な行動で生み出してしまった……悪意によって育まれた悲しき怪物だ」

【EVOLUTION】

「俺を恨むのは当然……死ぬと言うなら死ぬ。そうしなければならぬ罪を俺は犯した……だが」

ベルトのスリットに、カテゴリーKのカードをスライドさせ、その力を自らの身体に

取り込む。

直後、彼の持つ13枚のラウズカード全てが空中に飛び出し、肉体に融合しその姿を変貌させていく。

人の血の色に似た深紅のスーツに黒い鎧、胸にアンデッドの血の色をしたハート型の結晶を輝かせ、ハジメが鋭く突貫する。

「そのためにお前は……あいつを傷つけた。あいつの守ろうとしたものを屠ろうとした、踏み潰そうとした。それだけは見過ぎすことはできない」

ジャキツ、と腰に備えた鎌を両手に装備し、振りかざし構える。

自身に流れる色と同じ、緑色のハートの目を輝かせ、弓士はアルビノジョーカーを——自分と愛する女の間に来た命を、完全な敵と見定めた。

「俺が生み出してしまった大罪の証……故にお前は、俺の手で始末をつける」

『どの口が吠えているんだアアアアア!!?』

激昂したアルビノジョーカーとフォーティーンが咆哮し、ハジメが駆ける腕を滅茶苦茶に振り回す。同時に別の腕も引き戻し、目前にまで迫った彼を叩き潰そうと武器を差し向ける。

足場が大きく揺さぶられるよりも前に、ハジメは大きく跳躍し別の腕に映る。それを何度も繰り返し、邪神の中心に融合する異形のもとまで向かっていく。

【WILD】

「おおおおおおおおお!!?」

13枚のラウズカードが合わさり生まれた、真なる力を秘めたカードを、鎌と弓を重ねた得物に纏わせ、大きく振りかぶる。

横一文字に放たれた一閃が、アルビノジョーカーの首を両断しようとする勢いよく迫る。

だが、直撃するよりも先にフォーティーンが動き、頭から伸びる長い角が剣筋に割り込み、受け止める。

凄まじい、甲高い音が鳴り響き、ハジメとフォーティーンの間で激しい火花が飛び散った。

『この偽善者がアアア！ お前のせいだ！ お前のせいである人はアアア！』

「ぐっ……おおおお！」

アルビノジョーカーが吠えると、怒りに呼応したフォーティーンがハジメを力尽くで弾き飛ばす。

空中に撥ね上げられたハジメは、どうにか体勢を整えようともがくが、異形はそれすら許さず、邪神の巨大な腕を振り下ろし、激突させる。ハジメは凄まじい速度で落下し、時の庭園の大地に叩きつけられる。

『何が始末をつけるだ！ 何が見過ごせないだ！ 全部全部……お前が残した責任だろ

うが！ 見た目だけ反省して、自分のやったことを棚にあげているんじゃない！」

『お前の存在が全ての元凶だ！ あの人はその全てを押し付けられたんだ！ お前さえいなければ……あの人はあんなに苦しまずに済んだんだアアア!!?』

地面にめり込んだハジメに、アルビノジョーカーはフォートティーンを操り、四大元素の力を宿した武器を何度も何度も振り下ろし、炸裂させる。

轟音と衝撃波が発生し、庭園がもう跡形もなくなるほど破壊されるも、それでもフォートティーンの動きは止まらない。ハジメの存在そのものを全て否定しようとするように、暴虐の手を止める事はない。

だが、その手は不意に停止させられる。

真横から伸びた、桜色と金色の砲撃を顔面に受け、邪神の巨体がわずかに横に押しつけられたからだ。

『……お前ええ……!』

邪神の顔から立ち昇る黒煙を見上げ、ぎろりと恐ろしい目を向けるアルビノジョーカー。

常人ならば確実に失神しているであろうその視線を受けながら、ハジメと彼女の間に割り込んだ白と黒の二人の少女とその仲間、そして二人の騎士達。

庇うように背中を向けている彼女達を、崩壊した地面にめり込まされたハジメは、呆然とした顔で凝視する。

「…お前達は」

思わずこぼれたハートの休止の声に、白い少女——なのはがキツと鋭く横目を向けてくる。

そこには、ハジメを氣遣う気持ちは一切ない。むしろ、嫌いな相手に向ける刺々しい感情がこれでもかと伝わってくる、厳しい表情があつた。

「とりあえずあなたがアインさんの……一番大変なときに一緒にいてくれなかつた女の敵つてことはよくわかりましたから、後で覚えておいてください」

ふんつ、と鼻を鳴らし、なのははまたハジメに背を向ける。同じくフェイトも、無言のまま厳しい視線を向け、背中から怒りの感情をにじませる。

彼女達の隣に立つユーノとアルフも同じく険しい表情であり、じつとハジメを見定めようような目を向ける。

強い圧を放つ視線を向けながら、不意にアルフが口を開いた。

「詳しい事情はよくわかんないけど、あいつの言い分が正しいんなら……あんたがあいつにとつての大事なやつなんだろ」

「…そうだ」

「…なら、あんたのこともぶっ飛ばしてやりたいけど、今あんたに倒れられても困りそう
だ。手を貸してやるよ」

言い訳一つせず、頷くハジメにニヤリと獐猛な獣のような笑みを見せ、アルフも邪神
と異形に向き直る。

ぐつ、と仮面の奥で息を詰まらせるハジメを見て、なのはも同じく笑みを見せる。

ガシャン、と砲撃形態に移行させた相棒を構え直し、なのはは鼻息荒く告げる。

「まずはあの人を止めて、それからじっくりお話を聞かせてもらいますー」

勇ましい姿を見せる少女達に、その左右に立ったサクソとムーヴは、仮面の奥で感心
の笑みを浮かべる。

幼い少女達に一方的に言い負かされている不死の怪物。中身こそ恐るべき存在であ
るのに、見た目は年端もいかない子供に言い負かされる情けない大人の姿でしかない。

その姿にどうしても笑いを隠すことができず、サクソとムーヴは肩を揺らしながらハ
ジメに目をやった。

「そうだな…今は庇ってくれらるだろうアインはいない。逃げられると思うな」

「ええ…いろんな人から色々言われるでしょうから、大人しくしていることです」

「…そうだな」

自分よりもはるかに若い者達に諭されたことで、ハジメも苦笑を禁じ得ない。

8. 希望と絶望

今も尚、けたたましい悲鳴をあげる数値の数々。

留まる事を知らない邪神フォーティーンの放つ力。そしてそれに立ち向かう少女達が巻き起こす戦闘の余波により、アースラは先程から大きな揺れに襲われ続けている。

砲撃で援護を試みようとしたが、照準を上手く定められず、なのは達を巻き込みかねないため、全く手出しがでなくなっていた。

「あの子達は……！ 無茶よ、あれに生身で対抗するなんて……」

守ると決めた、生きて帰すと誓った少女達が死地にいるのに、何も出来ずにいる自分の不甲斐なさに、リンデイは自分を殴り飛ばしたいほどの悔恨に苛まれる。

しかし、どれだけ考えても、髪を掻きむしっても、邪神を退け少女達を救う手立てが全く思いつかない。予想だにしなかった敵の出現に、リンデイの脳は上手く働いてくれない。

それがますます、リンデイの精神を追い詰めていた。

「リ……リンデイ提督……」

険しい顔で俯き、自分の膝を叩いていたリンデイの耳に、エイミイの悲痛な叫び声が

届く。

訝し気に、声がした背後、艦橋への入り口がある方を振り向いたリンディは、目にした者にハッと目を見開く。

そこには泣きじやくるエイミーと、彼女が抱える、傷だらけではあるが確かにか細く息をしているクロノの姿があつたのだ。

「クロノ君が…クロノ君が！」

「…!?」 あの人…まさかあの惨状でクロノを助けて…!?」

息を呑み、そして目に涙をにじませるリンディ。

もう手遅れだと思ひ込んでいた息子が、命を拾われていたことに驚愕し、そして深い安堵を抱き、口を手で覆つてぶるぶると震えてしまう。

しかし、リンディはぶるぶると首を横に振り、表情を改めてから、ボロボロと涙を流してクロノに縋りつくエイミーに向き直った。

「すぐに治療を！　そして…あの子達の戦闘を全力で支援するのよ！　誰一人…死なせてはいけないわ！」

「りよ…了解！」

リンディの指示でエイミーも我に返つたのか、涙が止まらない目元を強引に拭い、クロノをその場に寝かせ直す。

エイミイは自分のスカートをビリビリと引き千切り、即席の包帯を作ると、クロノの身体に走る目立つ傷口に巻き付け、止血を始めた。

入口から救護班がやってくる様子を横目に、リンデイはモニターに向き直る。

そしてまた、険しい表情で歯を食い縛った。

「……………こんなことになるのなら、アルカンシエルでも積んでくればよかつたわ。後始末の悲惨さなんて、屁でもないのに……！」

少女達の助けとなるべく、隙と時機を見計らい、アースラからの攻撃を試みるも、砲撃が直撃した邪神にさして効いている様子は見受けられない。

リンデイは悔しさを噛みしめながら、当然のことと納得もしていた。サクソ達、ラウズカードの騎士達が全力で攻め込んでもびくともしていない怪物である。通常兵装程度の生半可な攻撃が通用するはずもない。

管理局が有する禁忌とされるほどの、リンデイ自身深い因縁のある最強の装備の存在を今になって惜しみながら、小さく呟いた時だった。

『……いや……希望はまだ、ある……！』

不意に、通信機からノイズ混じりの声が響く。

聞き覚えのある、決していい感情を抱いていなかったある男の声に、リンデイは大きく目を見開き、振り向く。

すると彼女の目の前に、新たなモニターが現れた。

ノイズが走るそれに映し出されたのは、病室らしき部屋の中でベッドに入った、一人の老人。

ケインズ・クロスボードという名の彼——リンディにとっては、親友を修羅の道に引き込んだ元凶の男が、そこに映し出されていたのだ。

「あ、あなたは……！」

『こんな姿で通信をつなげた事、謝罪させてもらいたい……もう、あまり長くなくてな。二度と病室からは出てこれれんと言われている』

記憶にある姿よりも老け込んだ、そしてやせこけた弱々しい姿で、ケインズはリンディに語り掛ける。

しかし、老いてなお彼の目に宿る光は強く、目を逸らすことを許さない鋭さを有している。困惑の表情で立ち尽くすリンディに、ケインズはため息交じりに冷笑を浮かべた。

『久しいな、ハラオウン嬢……いや、今はハラオウン提督か』

「なぜ……ここに？」

『すでにこちらの……ミッドにおける数値も異様な数を叩き出している。事はもう、管理外世界だからと傍観している場合ではないのだ』

ケインズの言葉に、息を呑むリンデイ。

相変わらずの無表情で、淡々と事実を突き付けてくる彼に対して、信用する気はまず起きない。世界の為と称し、一人の女騎士をその生贄に差し出そうとしたこの男を許すことなど、端からできはしない。

しかし、現状がケインズの言葉を真実だと裏付けている。今も尚けたたましい悲鳴をあげる計器が、リンデイに現実を突き付けてくる。

恨みを持つ男にそれを見せつけられ、リンデイはますます眉間にしわを寄せる。

「そんなの……どうやって止めたら」

『絶望している暇はない……今から伝えることを理解してくれ』

俯くリンデイに、ケインズは小さく咳をこぼしながら告げる。

十数年という年月が彼にもたらした老いは、確かに彼の体を蝕んでいるらしく、話すだけでも苦しいのか徐々に顔色も悪くなってくる。

しかし、ケインズは自分の言葉を遮る咳を無理矢理抑え込み、リンデイに向き直る。まるで、自らの命を代価にしても、自らの使命を果たそうとしているかのようだ。

『単刀直入に言う。あの怪物を止める手立てを打ち出した……その実行のため、諸君らに協力を要請する』

病室からモニター越しに放たれた、唐突過ぎる言葉。

アースラのブリッジからすべての音が消え、振り向いたスタッフ全員から驚愕の視線が向けられる。

リンディは大きく目を見開き、呆然とモニターに映るケインズを凝視する。

しかし、次第に彼女の表情は再び険しくなっていく、ケインズに対する敵意が膨れ上がる。

信じられない、妄言か戯言としか思えない言葉を発した彼に、責めるような鋭い視線が向けられる。ふざけるな、と彼女の表情は無言で語っていた。

「……こんな状況でそんな冗談、笑えませんよ」

『冗談に聞こえたのかね……まあ、君と私の仲だ。信じられないのも無理はないだろう』
刺すような視線を向けてくるリンディに、ケインズは自嘲気味に口元を歪め、目を伏せる。

自分の行いがどれだけ罪深いかを自覚しているがゆえに、全く堪える様子がない。開き直っているというよりは、今更どんな償いも意味をなさないと諦めているような、そんな投げやりな雰囲気さえ感じられる。

リンディは益々怒りをあらわにし、ギリギリと自分の拳をきつく握りしめ、ケインズに自らの感情を叩きつけた。

「あれをどうにかする……? 現場にもいないくせに、適当なことを言わないでください

！」

『……その言い分では、君はもう、あれを止めることは叶わないと諦めてしまっているように聞こえるが』

「そういうわけじゃ……！ 話を逸らさないでください！」

激昂するリンディに、ケインズはじつと真つ直ぐに視線を向ける。口を挟むな、とでも言っているような、強い眼差しである。

責める立場にありながら、叱られているような妙な気分陥ったリンディは、思わず黙り込み僅かに後退っていた。

『現場にいないからこそ、伝えられるものもある……今の君のように、冷静さを失わないまま、別の視点から解決法を探り出している私のようにね』

何度も咳き込み、時に手に血を滲ませながら、ケインズは続ける。

迫り来る終わりの時を目の前にしてなお、己が果たすべき役割を果たさんとするその姿に、リンディは気圧され言葉も出ない。

かつて事件に巻き込まれ、友と共に翻弄され続けていた女性に、ケインズは胸を切造り握りしめ、それでも口を動かし続けた。

『あれから十数年……石版の破片を調べ、古代の遺跡を調べ、バトルファイトに関するありとあらゆる情報を探し続けた末に辿り着いた、最期の希望だ……どうか、心して聞い

てくれ』

景気の警告音が響き渡るブリッジに、ケインズのもたらす最後の情報が届けられる。

その内容に、リンディはおろか、アースラの全スタツフがハツと目を見開き、続いて揃って、戦場となっている時空に。

そこで戦う、ある一人の騎士に視線が集中した。

「デイバイン……バスタ——ッ!!?」

金色の杖から放たれた桜色の砲撃。極彩色の空を駆けたその一撃が邪神の腕に炸裂し、振り下ろされかけた剣を弾く。それにより邪神は大きく体勢を崩し、前身に大きな隙ができる。

開けた胸元に向けて、黒衣の少女が飛翔し、金色の雷を纏った刃を振りかざし、鋭い斬撃を食らわせる。

刃が激突すると、激しい火花が散って辺りを照らす。

雷鳴のような咆哮をあげ、フォーティーンは忌々しげに少女達を睨みつけた、

「諦めない……絶対に諦めない! アインが繋いでくれたこの命……守ってくれたこの心!

お前なんか壊させはしない!」

「あいつに借りを作つたままなんてごめんさ! あいつはもう十分に戦った……! だつ

たら今度はあたしらの番だ！」

後退したフェイトに代わり、アルフが空中を駆け、フォーティーンにオレンジ色の魔力団を射出する。

威力としては大したことのない、しかし炸裂と同時に広く煙をまき散らしたそれは、邪神の視界を一時的に奪い、動きを止めさせる。

鬱陶しそうに腕を振るうフォーティーンは次の瞬間、緑色の光の鎖に腕を取られ、怒りの咆哮を上げた。

「僕達はまだ……何も返せていない！ たくさん……返さなくちゃいけない思いがあるんだ！」

僅かな力ではあるが、腕の動きを制限され、少しでも動きが鈍るフォーティーン。力尽くで引きちぎろうとしてか、フォーティーンは鎖を別の腕で掴み、ギシギシと無理矢理引つ張ろうとする。

フォーティーンの意識が鎖に向いた直後、高速で飛翔したサクソとムーヴがデバイスを振るい、弾丸と斬撃をフォーティーンに叩き込んでいく。

次々に向けられる、邪神にとっては蚊に噛まれた程度の衝撃。

苛立たしげに吠えるフォーティーンが、再び邪魔をする魔導士と騎士達を睨みつけ、重く轟く咆哮をあげる。

悍ましく恐ろしい目を向けられてなお、なのは達の目に、怯えは見えなかった。

「見ててください、アインさん！ 私達はきつと……運命にだつて負けない！ そして、勝つてみせるから！」

もうこれ以上、傷つけさせないと誓った大切な人に向け、叫ぶのは。

不退転の覚悟を胸に宿し、レイジングハートを構えた彼女は、砲口に自身の魔力を大量に注ぎ込んでいった。

ビリビリと室内にまで伝わってくる、戦闘により生じた震動。

艦体そのものが軋む、次々に起こる轟音に、アースラ内のスタッフ達はみな恐怖で顔を引き攣らせる。

このまま死を迎えるのか、そんな不安で、誰もが真つ青な顔で立ち尽くし、あるいは度重なる揺れで体勢を崩し、その場に座り込んでいた。

そんな中でただ一人、ずるずると身体を引きずり動く者がいた。

搬入された緊急治療室のベッドからずり落ち、廊下へと抜け出したアイン。全身に走る激痛を堪え、アインは壁に手をつきながら、アースラの外に向かつて足を引きずり歩いていた。

全身に巻かれた包帯に緑色の血が滲むのも構わず、顔中から汗を噴き出させ、少しずつ

つ少しずつ前へ向かう。

目指すのは、自分を守るために戦おうとしている、少女達の元だ。

「……もう、やめてくれ。もう、いい……無駄なんだよ、なのは……」

異常事態にあるためか、誰もアインの無謀な行動を咎めない。

皆、自分の身を守る事だけに精一杯になっていて、自ら死地に向かおうとしているア

インを気遣う余裕がない。

艦体が悲鳴をあげ、揺れるたびに上がる悲鳴と泣き言。すぐ先の未来に絶望しか見え

ず、頭を抱えて項垂れ、涙を流す事しかできないクルー達。

そんな彼らの横を通り過ぎ、アインはひたすらに前を目指す。その顔に浮かんでいる

のは、目を背けたくなるほどに痛々しい、悲痛な表情だった。

「こんな……弱くて惨めな、出来損ないのために……これ以上命なんて懸けないでくれ。も

う、何もかもが手遅れなんだ……私があんな、情に流されて、自分勝手な決断をしたせ

いで、こうなってしまうんだ」

アインの胸中にあるのは、自分自身への怒りと、過去の行いに対する後悔。自分の決

断によって招かれた、この最低最悪の結末に対する嘆きである。

只巻き込まれ、戦いの場に引きずり出されてしまっただけの少女達が、その尻拭いを

させられている。

他ならぬ自分がどうかしななければならぬ問題なのに、本当なら何のかかわりもなかった彼女達が立ち向かわされている。彼女達の意志があらうと、そうさせてしまったのは自分の責任なのだ、アインは自分を責め続けていた。

「私は……とつくの昔に負けていたんだ」

ガクン、とアインの膝から力が抜け、べしやりとその場に倒れ込む。起き上がろうと手をついても、滲み出た自分の血で滑り、うまく動けない。

包帯から染み出た血が垂れ落ち、アインの周囲に溜まる。身を起こそうとしたアインが手を滑らせ、緑の血の海の中に倒れ込む。

無様を晒し続ける自分の姿は、あまりにも滑稽で泣きたくなってくる。

血の海の顔の半分をつけたまま、唇を噛み締めたアインは、小さく呻きながら項垂れる。耐え続けた女の心が、ぼきりと儂く折れようとしていた。

『もう、諦めるの?』

ふと、アインの脳裏にそんな声が届く。

ひどく聞き覚えのあるような、幼い少女の声だ。

のろのろと顔を上げ、振り向いたアインは、自分の背後に立っていた彼女に訝しげな目を向ける。

そこにいたのは、見知らぬ、しかし酷く既視感を覚える少女だった。

ぼさぼさの金髪に、血のような赤い瞳。枯れ枝のように細い手や足で、しかし胸元には大きな膨らみが見える、全く知らない、しかしやはりどこかで見た気がする、乾いた眼差しを向けてくる少女だ。

少女の視線を受け、アインはますます困惑する。

周囲がアースラの通路などではない、真つ暗な闇の中になっっている事にも気づかず、アインはじつと少女を凝視し続けていた。

『みんなみんな、一緒に戦ってるよ。あんたが守ろうとしてた人達が、今度はあんたを助けるために……あんたはもう、何もしないの?』

少女が口から放つ、どこか咎めるような響きを持った言葉。

逃げる事を許さない、横たわった女騎士を無理矢理起き上がらせようとしているような、そんな声で少女は問いかけてくる。

アインはその問いに、フツと嘲りの笑みを浮かべる。

少女からも目を逸らし、光を失った目で、自分の指のかけた手を見やった。

——無茶を言うなよ……今の私に何ができる。

身体はガタガタ、感覚もほとんど切れて、指先一本動かさそうにない。

……いや、そもそも指先どころか、腕も足も吹っ飛んでしまっているのだぞ……?

邪神フォーティーンの猛攻により、丸ごと吹っ飛んだアインの両手足。顔の半分も焼

き焦がされ、脳まで達したのか意識も飛んでいた。

遅くなっているとはいえ、少しずつ、少しずつ再生が始まり、元の形を取り戻しつつある。しかし、完全に元に戻るには何十時間もかかるであろうし、何より疲労と痛みでまともに動けそうにない。

言外に、自分はもう完全な役立たずになったのだと伝えるアイン。

しかし少女は、ますます鋭い目でアインを見下ろし、吐き捨てるように告げる。

『そんなの、ただ動きたくない言い訳にしか聞こえないよ。あんた以外のみんなは、そうなったらもう死んじゃうんだから……』

容赦のない、少女の言葉。

しかしアインは、なおも起き上がる事はない。虚ろな目で自らの流した血の海を見下ろし、やがて瞼を閉じる。

—— そうだ、私はもう戦いたくない。

こんな苦しみばかりもたらず世界で、生きたくなんてない。

疲れた……もう、疲れたんだよ。

虚勢を張ることに、我慢し続けることに、何もかもに飽き飽きしているん

だ。

闇に閉ざされた女騎士の視界に映る、彼女が出逢い、そして別れてきた者達の顔。

望まぬ娘を生み、何の幸福も得られないまま逝ってしまった最初の母。甚振られ、死にかけて自分を拾い、やがて病でこの世を去ったもう一人の母。その後の人生で出会った掛け替えのない、そしてもう二度と会えない友人達。

誰も彼も、アインが心の底から愛し、そして彼女の手の届かない場所に行ってしまった、大切な人達。

アインが求め、そして失ってしまった者達だった。

—— 何かを得ようとすれば、それを喪う。

何かを成そうとすれば、悲劇を起こす。

こんな呪われた生が、いったい誰に許されると言うんだ。

あらためて感じる、自分の人生のどうしようもなさには、アインはフツと鼻を鳴らし眉間にしわを寄せる。目尻から涙がこぼれ、たまる血の海にこぼれ落ちる。

自分の行い全てが否定されるような、自分で勝利すると誓った、辿ってきた人生の残酷さに、乾いた笑いが溢れて止まらない。

凄まじい虚しさに襲われ、アインは長い間、肩を揺らして悲痛な笑い声を漏らしていた。

—— 私がいなくても、バトルファイトは再開されない。

もう一人のジョーカーがいるのなら、また争いが起こることはない。

だから…ハジメ、お前はこの先も逃げていてくれればよかった。

あのままで、よかったのに…！

いつの間にか、見知らぬ少女の声は聞こえなくなり、気配も感じなくなっていた。

しかしその代わりに、また別の誰かの気配がアインのすぐそばに立ち、鋭い視線を向けられるのを感じた。

『甘えんな。それはただ、逃げてるだけだろ…アイン・ケンザキ』

耳に届いたその声に、アインはハッと目を見開く。

ぐぐつと身体に力を込め、顔を上げてその誰かの顔を自分の視界に移す。その瞬間、アインはひゅつと息を呑み、言葉を失っていた。

硬直するアインに、その女は——鋭い目を有した、歴戦の戦士の気配を纏った女剣士は、舌打ち交じりにアインに語り掛ける。

『運命だとか定めだとか、下らないことで悲劇のヒロインを気取ってるんじゃないよ。お前がやったことは全部、お前のやりたかったことだ。やらされたとか、他人を言い訳にしてんじやねえ』

全てを諦め、死を待ち続けていた少女に、再び命の炎を灯してみせた女剣士は、呆然と固まったままのアインを睨みつける。

しかしその顔に、やがてにかつと快活な笑みを浮かべ、アインの頭に手を伸ばす。そ

して少々荒っぽく、しかし慈愛を感じさせる手つきで撫でてやった。

『全部ほっぽり出して、勝手に逃げるな。最後まで……お前のまま戦え』

その言葉で、アースラの通路に投げ出されていたアインの手が、ぐつと強く握りしめられる。

そしてゆっくりと、屍のようだった女騎士の身体が、起き上がった。

9. 黄金の剣

激しい爆発音が響き、黒煙が空中に生まれる。

すると次の瞬間、黒煙の中から勢いよく小さな人影が飛び出し、アースラの外壁に激突し、轟音が鳴り響く。

煤だらけ、傷だらけになった時空航行船の外壁にさらに大きなへこみを作り、機体を少しだけ揺らした人影——なのはは、額から血を流し、小さく呻き声を漏らした。

「う……く……」

「なのは！」

上着は失われ、身体の各所を守る装甲も砕け跡形もない。スカートもずたずたになり、裂傷を幾つも受けた素足を晒す彼女の姿は、痛々しいという他にない。

レイジングハートにも大きな罅を刻ませた彼女の元に、フェイトがすぐさま駆けつける。

白い装いが黒焦げになったなのはを抱き上げるフェイトだが、彼女の方も満身創痍の状態でいる。

レオタードのようなスーツは裂けて血が滲み、マントも既に失われている。バル

ドイツシユも罇が入り、再び砕けてしまいそうなほどに損傷している。なのにもフェイトも、今にも倒れそうなほどに痛めつけられていた。

『いい加減鬱陶しいんですよ……払っても払ってもわらわらわらわらと。大人しくしていただくさいよ、僕はあなた達を殺したくない』

動くこともできなくなった二人の少女達に、ゆつくりと近づくと巨大な邪神、そして、見下すように冷ややかに告げる異形。

アルビノジョーカーはそう言つて、自らの傷一つない体を見せうつけるように、四本の腕を掲げ、武器を構える。四つの元素による光を灯し、すぐにでも彼女達の命を奪えることを示す。

きつく歯を食い縛るなのはとフェイト。二人の前に、彼女達の相棒達が駆け寄り、盾となるように立ちはだかる。

その様を、邪神はただ嘲笑う。

何の意味もない行為を、次の瞬間には無に帰すような存在が立ち向かってくる姿を、可笑しげに見下ろし続けていた。

『でもしようがないから……手足の一本や二本ぐらひは我慢してくださいよね』

身動きの取れない四人に向けて、群れる蟻を踏み潰すかのようにな、邪神の片腕が振り下ろされる。

逃げる余裕はもはやない、呆気なく、アースラと共に時空の藻屑と化すであろう巨大な質量を前に、少女達と使い魔達は諦めで、きつく脛を閉じる。

それを見た騎士達が、彼女達を守ろうと宙を舞い駆け寄ろうとするも、それが間に合わない事は明らか。

目の前で、幼い命たちが叩き潰されようとした、その時だった。

嗜虐的に歪んだ笑みを浮かべていた異形が目を見開き、邪神がピタリと動きを止めたのだ。

『……まだ立ち上がるのですか？！』

ぎろり、とアルビノジョーカーとフォーティーンの目が、少女達から離される。同時に、邪神の武器に宿っていたエネルギーが霧散し、異形から狼狽に似た雰囲気醸し出される。

訝しみ、眉を寄せたなのは達は、邪神と異形が見ている方へ自分達も視線を移す。

そして、彼女達と同じく、驚愕で大きく目を見開き、絶句することとなる。

「……生憎、私は死ねないからな」

彼女達の目に映ったのは、アースラの搬入口からカッソ、カッソと音を立て、剣を杖にして少しずつ前へ進む、一人の女騎士。

全身を包帯に巻かれたアインが、必死の形相でなのは達の元へ、そして邪神の方へと

進んでいる姿だった。

それも、まだ完全に復活していない。指先や足先はまだ不完全で、骨や肉が覗いて見えている。

見ているだけで痛みを覚えるほどに悲惨な姿で、アインは邪神に立ち向かおうとしていた。

その様に、一人の騎士が最も悲痛な声を上げる。

「アルデブラント……！」

「なぜ……なぜ来たんだ、ハジメ……！」

思わずこぼれたハートの弓士、ハジメの声に、アインがギリツと歯を食い縛りながら答える。

自らの身体に走る激痛だけではない、胸の奥に突き刺さる痛みで、女騎士の顔はくしゃくしゃに歪み、涙が溢れる。

十数年という年月を越えて再会し合った、決して愛し合ってはいけなかった二人は、互いに対し責めるような、焦がれるような、悲し気な眼差しを送り合っていた。

「私は……！ お前が生きてさえいてくれれば、それでよかった！ どんな目に遭ったって、死んだってよかった！ なのに……なのに何故来たんだ、アイゴ・ハジメ!!？」

泣き叫ぶ女騎士の口から溢れるのは、どこまでも弓士を想う言葉。自分のことなど微

塵も考えていない、ただ一人愛する男の事だけを案じる言葉であった。

自分の存在そのものを投げ捨てるような悲痛叫びに、なのはやフェイトは目を潤ませ、口を手で覆う。体温ある女性がそんな悲しい言葉を吐くことが、つらくて仕方がない様子だった。

ハジメはそんなアインに、仮面の奥から悲痛げな視線を送る。

そしてやがて、アインを見つめたまま肩を竦めてみせた。

「……惚れた女を苦しめ続ける男が、いてたまるか」

深い愛を伴って響くその言葉に、アインはハッと息を呑み、目を見開く。

その時彼女は、仮面越しでもはつきりとわかる、愛する男の優しい笑顔を目撃する。

自らを痛めつける、悲しい運命に翻弄され続けた女に向けた、心の底から彼女を想う気持ち、溢れんばかりに伝わってくる。

その態度を目撃したアインは呆け、そしてすぐに嫌な予感を覚え、瞬く間に顔色を悪くさせていった。

「もう十分だ、十分多くのものを俺はお前からもらった。人が一生のうちに得るような宝を、俺はお前から貰ってきた——だからもう、いいんだ」

「……お前、何をするつもりだ」

まるでこの先に何もなかったかのようなハジメの物言いに、アインはその場に立ち尽く

し、徐々に肩を震わせ始める。

そして考える、なぜ彼はこの場に現われたのか。

圧倒的な破壊力を持つ邪神に対し、足りない戦力しか伴わずに、立ち向かいに来たのか。そんな無謀な戦いを始めるために、逃げる事を止めてアインの前に再び現れたのか。

疑問が次から次にあふれ、激痛もあり、アインの脳はうまく働いてくれなくなる。

戸惑いの表情のまま固まる女騎士に向けて、ハートの弓士は小さな声で語りかけた。

「——アイン、お前を愛してる」

唐突に告げられた愛の告白に、十数年前もついで聞くことのなかった思わぬ言葉に、アインは今度こそ混乱で固まる。

大きく目を見開き、剣を杖にした不安定な体勢のまま立ち尽くす彼女を見つめたハジメは、不意に邪神に向かって振り向き、風を操り突っ込んでいく。

誰もが啞然とし、動く事を忘れた中、人の姿をした不死身の怪物は真つすぐに邪神の中心に飛び込んでいき、弓の刃を突き出していく。

ホツと安堵し、ボロボロと涙を流して喜ぶフェイトから目を離し、アルフはもがき苦しむ邪神を見上げた。

「あ、あいつがあああの化け物の中に入って……プレシアが弾き出されたのかい？」
プレシアと入れ替わるように、邪神の中に姿を消したハートの弓士、アイゴ・ハジメ。状況を見るに、彼が何かをしたことで、劣勢だったアルフ達の状態が変わったのだと確信する。

これまでほとんど弱った姿を見せた事のないフォーティーンが、凄まじい咆哮を上げて、四本の腕を滅茶苦茶に振り回す。

巨体さえ無視すれば、まるで道端で死にかけて小さな虫けらのような、生き汚く見苦しい様相を見せていた。

『何を…何をして……があああ？！』

そして、邪神の中心で融合するアルビノジョーカーも、自身に起きる異変によって激しく苦しみ、悶え続ける。

口から緑の血を吐き、ばたばたと上半身を暴れさせながら、混乱と苦悶と怨嗟の声を上げる。優位に立ち続けていた異形は、完全に立場を逆転させられていた。

まるで奇跡のようなその光景を前に、アースラの中では一つ二つと、希望を宿したざわめきが上がりに出す。

目に光を取り戻し、血の気を戻しつつある彼らをよそに、リンディだけは真つ青な顔のまま息を呑む。

彼女の脳裏には、つい数分前まで続いていたある男との対話の内容が、蘇っていた。

——バトルファイトの勝者。

全生態系の頂点に君臨する一種が最後に手に入れることができる、絶対的な破壊の力を持った邪神……それがフォーティーン。

息を殺し、モニターに映る男の言葉を一字一句聞き逃すものかと身を硬くするリンディに、ケインズは淡々と語った。

これから行われる残酷な行為に表情一つ動かさず、何度も苦しそうに咳き込みながら、冷酷な魔差しをモニター越しに見せつけていた。

——邪神フォーティーンは本来、勝者の証である四枚のカテゴリークィングのラウズカードと、核とする生贄を一つ捧げること以降臨する……

しかし、今のフォーティーンはその限りではない。

バグにより召喚条件が曖昧となり、ラウズカードと同規模のエネルギー源を捧げることで、その力をこちら側に引き出すことができるようになった。

……ならば、さらなるバグを起こせばどうなる？

ハツと息を呑むリンデイ。ケインズが言わんとしている事を察し、わなわなと唇を震わせてその場に立ち尽くす。

しかし同時に、その作戦が必要とする犠牲にも気づき、リンデイの顔から見る見るうちに血の気が引いていく。

構わずケインズは、自分が弱り切った身体を押し当て探し当てた打開策を、躊躇うことなく口にした。

——生贄の一人を引きずり出し、生き残った勝者がその器に収まる……。

どんなことになるかは未知数だが、少なくとも邪神はバグで強く苦しむこととなろう。

それだけで、破壊神は止まる——最後にそれを討つことで、フォーティーンは完全に破壊することが可能となる。

筋の通った、納得のいく策。細かい差異はあるだろうが、確かにその方法なら、誰も止められないと思っていたあの怪物を弱体化、さらには討つ事も叶うかもしれない。

しかし、そのために見過ごすことのできない問題に、リンデイは尚も強張った表情を戻せずにいた。

——……でも、それでは。

——そう……器に入った生贄も死ぬこととなる。

だが——奴は、それを覚悟の上だ。

そう告げた老人の、覚悟と狂気に満ちた顔を、リンデイは忘れられずにいた。

自分の信じた正義の為、そして求めた結末の為ならば、如何なる犠牲をも辞さない。

たった一人の女騎士が異形に身を落とし、一体の怪物がその身を犠牲にしようとも、一切心を痛めることなく、冷静に指示を下す。

その在り方が、リンデイにはたまらなく恐ろしく見えていた。

そしてその覚悟は、犠牲となろうとしている怪物の男にも言える事だった。

邪神の中に潜り込み、その血からの全てを阻害している彼は、自らが消滅することを受け入れようとしている。

己の遺伝子を受け継いだ、同じ怪物である少女を道連れに。

『アイゴ・ハジメええええええええええ!!?』

「暴れるな……これが俺に、お前に父ができる唯一のことだ。最期まで……付き合つてもらうぞで」

「■■!!?」

アルビノジョーカーの、インシグニアの怒号とフォーティーンの悲鳴が混ざり、辺りに広く響き渡る。

自らの胸を掻きむしり、混じり込んだ異物を取り出そうとする邪神だが、その行為も自らを苦しめるだけで、苦痛から解放される事はない。

邪神の胸で悶えるインシグニアは、自身から力を削ぎ続ける怪物の男に憎悪と憤怒の感情を向け、緑の血の涙を流し吠える。

なのはやサクソ達、怪物同士の戦いの現場に居合わせた誰もが、その光景に瞠目し、息を殺して事の成り行きを見守る、その時だった。

棒立ちになる彼らの元に、邪神の胸の奥から微かな声が届けられた。

「今だ……やれ」

その言葉が示す意図に、なのはとフェイトはひゅつと喉を鳴らし、ユーノとアルフは目を見開く。

同じくサクソとムーヴも仮面の奥で言葉を失い、残酷な願いを口にしたハジメが消えた方向を、食い入るように凝視する。アースラの面々も、大きな騒めきを漏らし始める。

動揺で固まる彼らに、ハジメは邪神の奥底に潜り込みながら、フツと自嘲気味に笑みをこぼした。

「俺にできることはこんなことでしかない……世界を引つ掻き回してきた怪人の片割れとして、責任を果たすことぐらいしかね」

「ハジメさん……！」

定的な隙が、これによって永遠に失われてしまいかもしれない。

だが、そう考えても、なのは達の足は動いてくれなかった。

自分の手で、味方の命を奪わなければならないという事実に押し潰され、武器を構える事ができなくなっていた。

無論それは、アインにとつても同じ事だった。

「…殺せと言うのか、私に…お前を。自分も自分以外の何もかもを犠牲にして、生きていて欲しいと思ったお前を…：私自身の手で殺せと言うのか」

ボロボロと涙を流し、ぶるぶると剣を握る手を震わせ、アインは嘆きの声を上げる。

自分の想いの、これまでの苦しみの全てを否定するかのような願い。守り続けてきた大切な何かを、自らの手で木端微塵に砕かせるような頼み事に、アインはひたすらに戦慄き、泣きじやくる。

例え、愛する男からの願いであつても、彼女は頷くことはできなかった。

「馬鹿…馬鹿野郎！ それじゃあ…それじゃあ私は、なんのために…！」
「…頼む」

邪神の絶叫、異形の悲鳴、肉体が破壊される音、女騎士の慟哭が混じり合う中、ハジメが再び語り掛ける。

その穏やかな声に、アインは邪神の中に消えたはずの彼の。

優しく微笑みかける、もう一度見たいと思つていた顔を見た気がした。

「アイン…お前の手で俺を、俺達を終わらせてくれ——」

それ以降、ハジメの声は聞こえなくなつてしまふ。同時に、邪神の絶叫がより強く大きくなり、強烈な波となつてアースラに襲い掛かる。

揺れに襲われた局員達の焦燥の声や、なのは達の苦悶の声が聞こえてくる中、女騎士はきつく唇を噛み締め、俯き黙り込む。ズズン、と余波を受けたアースラの機関部から、聞き逃せない爆発音が響いた瞬間。

女騎士の目が、雷光の如き鋭い光を放つた。

〔ABSORB QUEEN, EVOLUTION KING〕

「おおおおおおお!!?」

血反吐を吐きそうなほどに激しく轟く咆哮を上げ、剣を振り抜き立ち上がるアイン。

その叫びに呼応するように、13枚のラウズカードが浮遊し彼女の身体に融合していく。ばさりと腰布を翻し、黄金の大剣の切先をズン、とアースラの外壁に突き立てる。

滝のように涙を流し、鬼のようにすさまじい形相になりながら、アイン・K・アルデブランドは、悲鳴をあげる巨大な敵を見据え、気炎を吐いた。

「ぐっ…がふっ!」

だが、突如アインは大量に吐血し、黄金の鎧を緑色に汚してしまふ。

溜まりに溜まった痛みと疲労、ボロボロになった肉体が悲鳴をあげ、これ以上敵に立ち向かう事を拒否してくる。

しかしそれでも、ぐらりと体を傾がせても、アインは決して膝を突こうとしなかった。ギギギ、と骨が軋む音を響かせ、肉が裂け、内臓が押し潰される感覚に苛まれながらも、二本の足でしかと断ち続ける。まるで一度でも屈してしまえば、もう二度と立ち上がる事ができなくなると、自分に言い聞かせるかのように。

そんな不退転の覚悟を決めた女騎士の姿を、白と黒の少女達は瞬き一つせずに凝視し、やがてキツと表情を改める。

彼女達の目にも、女騎士と同じく、固く重い覚悟の光が灯った。

「アインさんー！」

「アインー！」

なのはとフェイトが叫び、壊れかけた相棒たちを差し向ける。すると、二つのデバイスにそれぞれ備わった宝玉が光を放ち、一筋の光となって空中を走る。

桜色と金色の魔力の光は、仁王立ちする女騎士の身体に重なり、彼女の体内に染み渡っていく。傷付いた身体に、ほんの少しではあるが活力を与え、ふらついていた体に芯が戻る。

前へ進む力が体に広がっていく様に、アインは目を見開き息を呑む。

そして視界に映る、弱々しくも、しかし不敵な笑みを浮かべるのはと、心の底から案じる眼差しを向けるフェイトを凝視した。

「私の分も……あの人をぶん殴ってあげてください」

ぐつ、と拳を突き出すのはに、フェイトが頷く。

もう一切の余力も残っていない、全てを託した二人の少女達の隣で、ユーノとアルフも、サクソとムーヴも覚悟を決めた様子で頷く。

そこにいないリンデイやエイミイ、多くの局員たちも、アインに向けて強く祈っていた。

自身に伝わってくる、多くの者達の願いと希望。

その熱さを感じながら、アインはグツと唇を噛み締め、上空に向けて弾丸のような勢いで跳躍した。

【SPADE 10, SPADE JACK, SPADE QUEEN, SPADE KING, SPADE ACE.】

アインの両腕が握る大剣に、5枚のラウズカードが飲み込まれ、宿った力を解放していく。

黄金の刃に大量の魔力が纏わりつき、何倍も、何十倍も大きな刃に変化していく。あつという間に、邪神の体長とそう変わらない大きさの剣に変貌し、辺り一面を黄金色

『ウソだ……こんな！ この力が、フォーティーンが破れるなんて……ああ、あああああ!!』

フォーティーンの巨体を斬られる痛みと苦しみ、アルビノジョーカーの身体にも伝わる。一瞬で終わらない、いつまでもいつまでも続く苦痛が、異形を苦しめ続ける。

格下と、取るに足らない存在だと見下していた者達による、自らの命を奪う凶行に、アルビノジョーカーは——インシグニアは何度も首を横に振り、現実を否定しようとしていた。

そしてやがて、黄金の刃が、剣を振り下ろす女騎士が、彼女の目の前に迫る。

まるで太陽のように眩しく、強く、熱い光の中にいる女騎士は、目を剥いて叫ぶ異形を見つめながら、ポツリと小さく眩いた。

「……ごめんね——」

か細く、消え入りそうな声で紡がれたその言葉に、インシグニアはハッと目を見開く。痛みも忘れて、光の中にいる女騎士を——母を凝視する。

視界に映った彼女の目に、悲しい光を見つけたその瞬間、インシグニアはフツと脱力し、ゆつくりと瞼を閉じていく。

そして彼女達のいる空間は、真っ白な光に塗りつぶされ、全ての音が消え去ったのだった。

10. 戻らないもの

どこまでもどこまでも、白く曇った景色が続く、朧げな印象を与える空間。

まるで雲の中にもでもいるような、それにしても自分の姿がはつきり見えると言う、奇妙な得体の知れないどこか。

そこにアインは、たった一人で立ち尽くしていた。

キョトンとした様子で呆け、あたりをゆっくりと見渡し、眉間にしわを寄せる。深い眠りから覚めた直後のように思考は鈍く、うまく情報をまとめられない。

ひたすら戸惑う様子を見せ、アインはやがて、ぼそりと呟いていた。

「……ここは、どこだ……?」

あれだけ傷つき、苦しみ、血反吐を吐いていたのに、全身を襲っていた激痛も不快感も、何もかもが綺麗さっぱりなくなっている。全てが夢であつたかのように傷は跡形もなく、五体満足の自分が目の前にある。

何が起こつたのか、どうしてここにいるのか、ここは本当にどこなのか。

疑問が後から後から湧いて出て、その処理が全く進まず、ますます混乱するアイン。自分が直前まで何をしていたのかも全く思い出せず、首を傾げてばかりになる。

「……ケンザキ」

悶々とした女騎士の思考を止めたのは、彼女の背後から声をかけた一人の男だった。それを耳にした途端、アインはひゅつと息を呑み、勢いよく振り向くと、大きく見開いた己が目に見えぬ姿を焼き付ける。

十数年間一度も忘れたことはない、たった一度でいいから再会し、気持ちの全てをぶつけるように抱きしめたかった、愛おしい男。

アインはわなわなと震えると、無言で見つめてくる彼の元へ、無意識に走り出していた。

「ハジメ……ハジメー！」

「……来るな、ケンザキ」

泣きそうな顔で笑みを浮かべたアインが、両手を広げて抱きつこうとする。

しかしそれを、ハジメは厳しい声で止め、首を横に降る。強い後悔と悲しみに満ちた表情で、きつく唇を噛み締めながら、同じく愛する女の抱擁を拒絶する。

思わぬ反応に、アインはひゅつと息を呑みながら立ち尽くし、啞然とした様子でハジメを凝視する。

「ハジメ……？」

「俺達はもう……交わることはない」

「お前……何を言ってる……」

困惑気味に問い返し、なおも近づこうとするアインだが、彼女の体は意思とは裏腹に動いてくれない。

途端に、アインの脳に凄まじい量の記憶が蘇る。

何故自分がここにいいのか、何が起こったのか、そして目の前にいるこの男に何が起こったのか、全てを思い出す。思い出してしまふ。

呼び出された邪神、異形となり邪神と融合した少女騎士、それに立ち向かう少女と騎士達。そして駆けつけた異形の騎士と、自らが振るった刃の重さと、切ったものの鈍い感触。

自らの意思で封じていた記憶が、激流のような勢いで飛び出し、アインの心を激しく苛み始めた。

「嫌だ……嫌だ、嫌だ……！ どうして……嘘だ……！ 私……私……私……！」

「無茶をしたものだ……こんなにも傷ついて、こんなにも弱って、俺はお前に、そんな風になつて欲しくはなかった」

頭を抱え、滝のような汗を流すアインに、ハジメは険しい顔で拳を握りしめる。指の間から血が流れるほどに強く、自分で自分を苛むように、爪を皮膚に突き立てる。

アインは愛する男の元に、ふらふらと吸い寄せられるように近づこうとするが、何故

か二人の距離は近づかず、それどころか遠ざかって見える。まるで二人の間に、見えな
い壁が出来上がっていくような、そんな錯覚に陥らされる。

手を伸ばしても、覚束ない足取りで走り出しても、一向にそばに近づけないハジメを
凝視し、アインはポロポロと涙を流す。

「俺の存在が、お前を変えてしまった……やはり俺は、存在すべき者ではなかったんだ」
「違う……違うんだ、ハジメ。お前は何も悪くなどない。この決断をしたのは私だ……私が
全ての元凶なんだ！ 私……！」

「そうさせたのは、俺だ」

悲痛な声で呼びかけ、遠ざかっていく彼を呼び止める女騎士。時間が経てば経つほ
ど、ハジメが語るごとに距離は伸び、ハジメはの姿はみるみる小さく、なっていく。

なんとなく、直感的な何かで、アインはこれが最後なのだと確信する。

遠ざかるハジメの姿が見えなくなれば、今度こそ自分達は会うことができなくなるの
だと、そう感じ取る。

途端にアインは、より早く強く走り、距離を縮めようとする。しかしそれでも、ハジ
メはどんどんと遠ざかっていった。

「すまなかつた、アイン……だが、たとえ時間を巻き戻せるとしても、きつと俺は同じこ
とを繰り返しただろう。お前と共にいられない時間など、今の俺には……想像する事も

できない」

懸命に走り続ける女騎士を見つめ、異形の男は瞼を閉じる。

視界を暗くすると、そこには彼のあらゆる記憶が走馬灯のように流れていく。

現代に目覚め、遊戯の駒として戦い、人間の姿を偽ったことで人間の心を有してしまつた。

古の遊戯は止まることなく、戦いが激化する中、一人傷だらけになりながらも剣を振るう、一人の女騎士と出会つた。

幾度もぶつかり、刃をぶつけ、感情をぶつけ合つた彼女に対し、いつしか抱いていた経験のない想い。怪物である自分が抱くはずのなかつた、抱いてはいけなかつた想い。

決して許されない、しかし決して忘れられない日々が、アイゴ・ハジメという男の中にあり、彼を満たしていた。

「ここにいるのは、アイゴ・ハジメと名乗つた男の最後の残滓だ……いずれ俺は消える。重大なエラーを起こしたバトルファイトも……どうなるかはわからない」

自分の胸に手を当て、申し訳なきように目を伏せながら、ハジメは告げる。

もう、お互いの姿はかすむほどに遠く、見えなくなつてくる。どれだけ走つても、空を飛んでも届くことのない距離が、二人を引き裂いていく。

それでも諦めず、走り手を伸ばし続けるアインに、ハジメは泣きそうな顔で笑いかけ

た。

「だがお前はもう…戦わなくてもいい。もう十分だ。お前がこれ以上傷つく必要はない」

「…ダメだ、私は……」

「命を奪うことが罪だというのなら、生きとし生けるものはみな罪人だ。お前一人が責められていいはずがない……お前はお前の守りたいもののために生きたのだからな」

たった一人、孤独に罪を背負って戦い続けた女に向ける、最期の言葉。

何もかもを背負おうとした女を、この時間を持つて赦そうとする言葉を、ハジメは震える声で告げる。

ふと見下ろすと、ハジメは自分の両手がうつすらと透けていることに気づく。手だけではない、足先も透明になっていき、徐々に広がりつつある様を目撃する。

ゆっくりと、とつくに薄れていた感覚が消え去っていくのを感じながら、ハジメは苦笑をこぼした。

「……そろそろ時間のようだ。俺はもう…消える」

「まだ…まだ逝くな！ 私は……私はまだ……」

消えていくハジメに、アインは泣き叫び、いやいやと大きく首を横に振り、幼子のように駄々をこねる。

みつともなくとも、恥を晒しても構わない。二度と手を離したくないのだと、愛する男の残滓を追い続けようとする。

そんな彼女に、ハジメは困ったように眉尻を下げ、しかし慈愛のこもった眼差しを向け、最後にもう一度だけ口を開いた。

「さらばだ、俺を生かしたいのなら、お前はずっと俺のことを覚えておいてくれ……この醜い、最悪の化け物を」

「ハジメ——」

笑うハジメの姿が、まばゆい光の中に消えていく。

最後にかすかに残っていた気配までもが消滅したその瞬間、アインは愕然とした様子で固まり、手を伸ばしたまま立ち尽くす。

そして彼女の意識も、真っ白な光の中に飲み込まれていき、そして——

「アイン……アイン！」

鼓膜を震わせるその声に、アインはハッと瞼を開く。

一瞬で意識がクリアになり、白く無機質な天井が、そして、すぐそばから顔を覗き込み、泣き顔で見下ろしてくるリンデイに気がついた。

「リンデイ……」

掠れた声で名を呼ぶと、リンディはボロボロと涙を流し、唇を噛み締め身を震わせる。親友はもう二度と目覚めないかもしれないと、不安に打ちひしがれていた彼女は、親友が自分の名を呼んでくれたことで安堵の息をつく。

ぼんやりとはしているものの、アインの目の焦点ははつきりしている。彼女はまっすぐにリンディを見つめ、次いで辺りに視線を巡らせた。

「……」は、アースラか」

「今、負傷者を搬送し終えて、治療に当たらせているの。：犠牲者への対応は、まだ手付かずのままだけ」

聴覚に意識を集中させれば、別のどこからアースラスタッフ達の声が聞こえてくる。医療室はすでに怪我人で一杯なのか、ざわめきやうめき声がかすかに聞こえてくる。

かく言うアインも、限界を超えて酷使した肉体はもう動かず、痛みもほとんど麻痺している。まるで鉛のような重さに苛まれ、凄まじ違和感で気分が悪く感じられる。

全身に包帯が巻かれて動きづらいだけでなく、顔の半分も包帯で覆われて視界が半分消えている。肌が露出している箇所は、もうほとんど残っていなかった。

「なのはさんとフェイトさんが、あなたを心配していたわ。二人とも、最後の一撃の時にかなり消耗していたけど、命に別状もないわ」

「…そうか」

「あなたが目覚めたことを知ったら、きつと元気になるわ。今はちよつとバタバタしてるけど、あとで必ず時間を作るから、その時にでも……」

アインの意識が戻ったことではほど安心したのか、リンデイは上機嫌で報告してくる。まだ目尻が赤く腫れ、涙が滲んでいたが、それを誤魔化すように弾む声をあげる。腰を上げ、彼女の覚醒を皆に知らせようとしてか、いそいそとアインの前から立とうとするリンデイ。

そこへ、アインの小さな問いの声が響き、彼女を立ち止まらせた。

「リンデイ……ハジメは」

「っ……」

「……そうか」

ピタリと動きを止め、息を飲むリンデイ。

彼女のその態度だけで、アインは全てを理解し目をそらす。

気まずげに背を向けたまま、顔を見せようとしないうリンデイを前に、アインはふつと深く息を吐き、天井を仰ぐ。

白い天井を見つめる、傷ついた女騎士の目は、まるで死人のように虚ろになっていた。

「結局私は…誰一人大切な者を守れないままだったわけか」

「そんなことないわ！ あなたはちゃんと……多くの人を」

「……その多くの人の中に、私が想っている者は何人いたのだろうか」

慌てて振り向き、アインに自虐の言葉を否定するリンディだが、アインはその慰めを拒絶する。どれだけ労られようとも、残った結果が全てを物語っているのだと、親友の言葉を受け入れない。

開き直ることもなく、嘆くこともなく、アインはベッドの上でため息をつく。

今の彼女に、かつての活力は残っていない。自分の行い全てにおける罪の重さに呆れ、ひたすらに自分を責め続ける。それは彼女が異形になったときよりも酷く、重い症状だった。

「……すまない、リンディ。私にとってはもう、顔も知らない有象無象のことなんてどうでもよくなつてしまつたんだ」

「アイン……」

「最後まで守りたかつた者達……：……そいつらがもうこの世にいないというのなら、私は敗北したも同然なんだ。最強の騎士なんておこがましい……最低最弱の、どうしようもない負け犬なんだ、私は」

フツ、と自嘲の声をあげ、目を細めるアイン。

虚ろな目は天井だけを映し、一切の光を宿さない。まるで本当に死人になつてしまつ

たかのような。

リンディはその姿を見ていられず、何度も口をまごつかせ、結局何も言葉を発せられないまま、暗い表情でうつむき黙り込む。

どんなに慰めの言葉をかけても、氣遣つても、今の彼女がそれを受け入れてはくれないのだとわかってしまったのだ。

「挙げ句の果てに……自分の娘まで手にかけて。一体私はどこまで墮ちれば気が済むのだろうか？」

「アルビノ……インシグニア・ジムニーの遺体は、まだ見つかつてはいないわ」

「時間の問題さ。あいつの遺した命さえ……私は壊した。愛した男と言っておきながら、私はこの手にかけて。世界のためと言いながら、私は結局体面をとつたんだ」

あのとき初めて知った、この世でたった一人の自分と血の繋がった存在。

愛する男との睦で生まれた唯一の娘と、自分がずつとなりたいと思っていた母にしてくれた最愛の男。

孤独だった少女が、長年絶えることなく願い求め続けていた“家族”が、あの日あの瞬間、たった一度だけ集まっていた。

それを彼女は、壊してしまったのだ。

それを手に入れ、守るためならばどんなことでもしようとさえ思っていたのに、最後には全てを自分の手で碎き跡形もなくしてしまった。

どうしようもない自分の有様に、アインの自嘲は止むことを知らない。

長い間、そうやってくすくすと自分自身を嗤い、体を揺らしていたアインは、やがてため息混じりにリンデイに告げた。

「しばらく一人にしてくれ……眠りたい」

「……わかったわ。あとで……また来るから」

「ああ……」

心配そうに顔を歪め、名残惜しそうに何度も振り向きながら、リンデイは病室を後にする。

リンデイが病室から出て、扉が閉じられると、アインをしんと沈黙が包む。

誰もいなくなった病室のベッドの上で横になり、虚空を見上げていたアインの両目から、ポロポロと涙が溢れ出してくる。

やがて嗚咽が聞こえ出し、先ほどとは別の感情で体を揺らし、アインは小さく引きつった声を漏らした。

「ハジメっ……!」

今の彼女の心の全てを表したような、切なく悲しい声。

誰もいない孤独な空間で、
アインはじつと身じろぎもできないまま、
ボロボロと泣き
続けていた。

11. 父と母と娘

「急げ……早くしろ！ さっさとここを離れるんだ！」

ガサガサガサツ！と、大量の紙束やデータディスク、メモリーチップなどの情報端末が、箱の中に叩き込まれる音が響く。

分別や整理など考える暇もなく、ただ必死に全ての端末を運び出すことだけを考え、手を動かす。その懸命の努力の結果、ダンボールの山がいくつも築かれることとなった。

「証拠は何も残すな！ これが上に伝われば私達は皆終わりだぞ！ 計画や研究につながるデータは全て運び出せ！ 消去や破棄するのは後でいい！ さっさとやれ！」

数人の部下により、隠蔽作業が行われる執務室にて、ノアは目を血走らせて命令を下す。すでに動いている彼らを急かすように、バリバリと頭をかきむしり、顔中から冷や汗を垂らして足踏みをする。

醜く歪んだ、悪鬼のような顔で歯を食いしばり、事件の真の黒幕であった男は、苛立たしげに床を踏みつけていた。

「おのれ……おのれおのれおのれ…… あのカソ女も、女狐も、役立たずのカソガキも、全

員許さんぞ……！」

ガンツ、とデスクに拳を叩きつけ、憎悪に満ちた声を漏らす。脳裏に浮かぶ、腹立たしい顔ぶれ全員に殺意の刃を突き刺し、惨殺しながら、それが何の意味もなさない事に嘆き怒る。

ギリギリと握りしめた拳から、一筋の血が流れ出すも、思考を怒りに支配されたいまのノアは気付かず、ガンガンと何度も拳を振り下ろし続ける。

その度に、デスクには真つ赤な血の花が広がっていった。

「あれを完成させるまで……！ この計画のためにどれだけの金をかけたと思っている！ 10年以上だぞ！ 10年以上かけてようやくここまで漕ぎ着けたというのに……クソオオオ！！？」

血まみれになった自分の拳を労わることもせず、そして頭をかきむしりすぎて、額をだらだらと血が垂れ流れることも構わない。

自分の苛立ちを解消できず、グラグラと自分の腹の奥が煮えたぎる感覚に苛まれ、ノアは頭を抱える。

自分の思い描いていた夢……いや、欲望の全てが水泡に帰したことが、たまらなく悔しくて仕方がなかった。

「あのガキを象徴に、全ての次元世界は私の支配下に落ちるはずだったんだ！ 生意気

なゴミ共を続べ、私こそが唯一で頂点に立つはずだったんだ！　なのに……肝心なところであのクソガキは……！」

罪を犯し、最凶の怪物の力をその身に宿した実験動物モルモットの女。そしてその胎から生まれ出でた、怪物の血を引く純粋な化け物の仔。

高度な教育を与え、物事に対する認識を自分の都合のいい形に作り上げ、決して逆らうことのないよう自分を絶対的な存在として教え込ませた、長い年月と莫大な資金の結晶。

しかしそれはつゆと消えた。

大きな期待と金をかけたというのに、取るに足らない有象無象を仕留められず、死人に等しい瀕死の女騎士に敗れた。

主人の願いを一つも叶えることもできず、全てが無に帰したのだ。

「見るだけで吐き気がするあの化け物を……誰が生かしてやったと思っっている!!? 断じてこんな惨めな最後を迎えるためではない！」

怒りのままに吠え、近くにあるごみ箱や椅子などを蹴り飛ばすノア。

彼の部下達は巻き添えになることを恐れ、荷物を運ぶ出すことを口実にその場を離れている。

それは、上官の罵詈雑言の対象になることを避けるためでもあり、怒り狂う醜悪な彼

の姿を見たくないためでもある。十数年もかけた計画の全てに失敗した上官を、部下達は見限り始めていた。

「これで私は神に……！ 金も女も酒も……全てが思い通りにできる世界が作れたはずだったのに……！ 所詮野良犬の騎士のガキは出来損ないか……」

食いしばった歯の間からも、血が流れる。その痛みさえ無視し、ノアは自分の計画失敗の無念をあらわにする。

たった一人、執務室に取り残された欲深で醜悪な男は、自分の犯した罪と失敗を怒り、八つ当たりの対象を探し続けていた。

「——それ、本当ですか……？」

その声が聞こえた瞬間、ノアはビシリと硬直する。そしてあつという間に顔中を脂汗で濡らし、ガタガタと背筋を震わせ出す。

立ち尽くしたまま固まる彼の耳に、今度はどさつと何かが倒れる音と液体が滴り落ちる音が届く。水音に関しては、真水よりもずっと粘度が高いものに聞こえ、その上鉄臭さが伝わってくる。

沈黙に耐えかねたノアはぎこちなくゆっくりと振り向き、音の発生源に目を向ける。

そしてそこにあつた光景に、目を見開いた表情を凍りつかせ、その場にへたり込んだ。「おかしいなあ……僕が聞いていた話と全然違うじゃないですか。変だなあ、変だなあ……それじゃあ僕、騙されてたみたいじゃないですか」

片手に何かをぶらさげ、執務室の入り口に陣取る淡い金髪の少女騎士。

数々の命令をこなし、父と呼ぶ上官に多くの栄光をもたらしてきた最強の戦士にして、最凶最悪の異形を正体とする存在。

しかし、そこにいたのは提督が知る少女ではなかった。

全身に裂傷を刻まれ、各所を灼け爛れさせ、自ら嘔き出した緑の鮮血と、赤い血潮で肌のほとんどを汚した、痛々しく悍ましい姿。

それよりも異様だったのは、カクカクと揺れる首に瞬きを忘れた乾いた両目。そしてだらりと下げられた両手のそれぞれが持つ、赤い血塗れの剣と肉の塊――ノアの部下の誰かの首だった。

「ヒツ……ヒイイイイ！」

「全ての世界を総て……争いのない世界を生み出す。それがあなたの目的だったんじゃないんですか……？」 僕に、そう言ってくれたんじゃないや、なかったのですか……？」

ケタケタと不気味な笑みを浮かべる少女、インシグニアを目の当たりにして、ノアは壁に背中をぶつけ、それでも後退ろうとする。

自身が作り上げ、兵器として仕立て上げ、意のままに動く様教育を施してきた少女。それが討たれたただけではなく、強烈な殺気を伴って自分に向かつてきている光景が、恐ろしくてたまらない。

なんとか逃げようともがいている、これまで父と呼んできた男を見下ろし、インシグニアはニタニタと笑い、一歩ずつ歩み寄っていく。

「くっ…来るな！ 来るな化け物！ おい誰か！ 誰か来てくれ！ この化け物を誰か殺してくれ!!？」

「ねえ、お父様……本当のことを言ってください。僕が頑張れば、あの人は救われるんじゃないんですか…僕が礎に代われれば、あの人は運命から解放されるんじゃないんですか……!!？」

「早く来いよ！ 早くこの化け物を殺せよ！ さっさとしろよ役立たずのゴミ共が!!？」

男の呼ぶ声に応える者は誰もいない。それはそうだ。

彼の命令で、証拠隠滅のために動いていた部下達は皆、壊れた少女の姿をした化け物の手によって、一人残らず惨殺されているからだ。

首を断たれ、胴を断たれ、心臓を貫かれ、臓器を抉り取られ、脳を割られ、バラバラに裁断され、踏み潰され……まるである女騎士に行われた非道を、そっくりそのまま返

す様に廻り殺しにされていた。

そして、異形の少女の次なる標的は、もう一人しか残っていないかった。

「ぎっ……ぎやあああああ!!？」

ザンツ、と音がして、肉の塊がごとりと床に落下する。腿から断たれたノアの片足が、大量に血を噴出させて床を転がる。

同じく大量に出血する、切り株の様になった残りの足を、ノアは悲鳴を上げて掴み、出血を止めようとする。止まる事なく噴き出す血が、彼の周囲に池を作り出す。

ゴロゴロと床を、自らの血の中を転げ回り、泣き叫ぶ男の姿は悲惨を通り越して滑稽で、目を向く顔は醜悪そのもの。

絶叫するかつての父を、インシグニアはくすくすと歪に笑い、そして涙を流していた。

「ふふ、ふふふふ……バカだなあ、僕……こんな人に騙されるなんて、こんなに長い時間、一体何をやっていったんだろう……？」

思い浮かぶのは、これまでの自分の人生……いや、兵器という名の化け物としての生。

ガラスの繭の中で生まれ、少女の姿にまで育ち、名と使命を与えられた。命令を果たすために必要な力と知恵を与えられ、何を敵とすべきか、何に従うべきかを頭脳に埋め込まれた。促されるまま、数多の敵を屠り、数え切れない数の汚れ役も担い、ひたすら

に指示を果たすためだけに生きてきた。

それが父のため、世界のため、そして生き別れとなり、悲惨な運命を背負わされた母を救うためだと信じ、凶刃を振るい続けてきた。

その行いの全てが、たった一人の男の欲望を叶えるだけでしかなかったのだと気づき、少女は自分の全てが無意味だったことに気づいた。

そして、自分の中に芽生えた衝動のままに、この場所へと転移を繰り返してきた。

「でも騙されたマヌケでも、マヌケなりの筋は通さなくちゃいけませんよね……あなたもそう、そんなくだらない理由で人を潰すつもりだったなら、自分もそうなる覚悟ぐらい持っていたでしょう……？」

「たっ……助けて……お願いします……もうやめて……！」

「ダメですよお……ちゃんとやったことには責任を持たなくちゃ」

クスクスと肩を揺らし、目を細め、インシグニアがノアを見下ろし告げる。顔中から体液を溢れさせ、弱々しく懇願する男に嫌悪を抱きながら、耳まで裂けて見えるほどに口を歪める。

ぼたぼたと赤い血と緑の血が混じり、滴る剣を掲げていく。ドロドロに汚れたその剣はもはや切れ味など無いに等しいが、怪物の力を持つ彼女には関係がない。

ただ死ぬのではない、激痛に苦しみながら死ぬ未来を突きつけられ、ノアはより一層

悲痛な顔で懇願を繰り返していた。

「僕にできることはもう、これくらいしかないけれど……そしてやつてもあまり意味がないけれど、やらないよりはマシですよ。あなたの望む通り、いらぬゴミは片付けなくちやいけませんよね……？」

「あ……あ……」

もう、ノアの口から漏れるのは、言葉にならない意味のない声だけ。

まともに悲鳴をあげる事もできず、ポロポロと滝のように涙を流す醜悪な男が、自身の目前に迫る「死」に怯えるだけ。

そんな哀れで滑稽な男を見下ろして。

インシグニアもまた、自身の頬に一筋の涙を流した。

「サヨナラです、お父様」

直後、ザンツと肉を断つ音が響き渡り、辺りにおびただしい量の鮮血が撒き散らされる。

書類やデータで埋め尽くされ、あれた室内が真っ赤に染められる光景を目にしながら。

ノアの意識は、真っ暗な闇の中に沈み込んでいった。

ドタドタと足音を立て、恐るべき企てをしていた管理局の裏切り者の部屋に駆け込む、本局の武装局員達。

重厚なデバイスとバリアジャケット、そして積み重ねた実力で武装した彼らは、追い詰められた獣に噛みつかれる可能性を考慮し、万全に準備をした上でその場所に踏み込む。

しかし彼らは、裏切り者の居所に足を踏み入れた瞬間、表情を凍りつかせる。

そこに残っていたのは、バラバラに切り裂かれた研究員らしき男女数名と、首から上を失った男性の亡骸のみ。部屋全体がどす黒く染まった中に、原型をとどめていない人間の破片が転がる、悪夢のような光景が広がっていたのである。

噓せ返るような鉄の匂いが全体に漂うその景色に、武装局員達はひたすらに絶句し、立ち尽くすのであった。

「…あーあ、せつかく会えたのになあ。全部片付けてから…もつと色々…話したかったのに、全部全部無駄になっちゃった…」

ズルズルと足を引きずり、緑の血に汚れた少女が街影を一人で歩く。

涙の跡を頬に残し、ケタケタと壊れた笑い声をあげる彼女は、覚束ない足取りでひたすら前を、人目のない場所を求めて歩き続ける。

彼女を動かすのは、とてつもなく大きな後悔だった。

知ってしまった真実、自分のこれまでの行いも、自分の存在そのものを否定するような事実を突きつけられ、激しく嘆き続けていた。

自分が救いたいと思っていた人を、自分が最も苦しめていたことに気づいてしまい、自分で自分を殺したい衝動に駆られていた。

その思いが叶わないことを痛感し、インシグニアはぼろぼろと涙を流し続けた。

「これからどうしようかな……何にもなくなっちゃった。あの人のためにやってきたつもりだったのに、あいつのせいで全部めちゃくちやになっちゃった……あは、あはははは」
壊れた笑い声が止まらない。

情けなくて恥ずかしくて、そこから逃げ出そうとする足が止まる様子を見せない。

ふらふらと彷徨っていた少女は、たった一度だけ立ち止まり、どことも知れない虚空を見上げる。

黒々と渦巻き始めた空を見上げ、少女はポツリと眩く。

「……お母さん」

彼女の眩きは、直後に降り始めた豪雨によって、容易くかき消されてしまう。

水飛沫が広がり、全ての音が水音に飲み込まれ始める中、少女の姿はまるで霞のように消え失せるのだった。

第Ⅻ章 明日を選んだ蒼き劍聖

1. ありがとう

「今回の事件解決について大きな功績があつたものとして……ここに、略式ではありますが……その功績をたたえ、表彰いたします」

表彰状を両手に持ち、リンデイが優しい笑みと共に内容を読み上げる。

前に立つリンデイに見つめられ、そしてアースラクルー達に見守られ、なのはとユーノが頬を赤らめる。

学校で、ボランティア活動で地域に貢献して与えられるものとは比べ物にならない。一歩間違えば、本当に世界が滅んでいたかもしれないような事件に立ち向かい、解決に貢献したのだ。

その賞賛が自分に向けられていることにまだ実感が持てず、どうしても浮き足立つのが止められなかった。

「高町なのはさん、ユーノ・スクライアくん……ありがとう」

最後にそう伝え、リンデイが二人に順番に表彰状を手渡す。受け取った二人には、クルー達から盛大な拍手が贈られ、ますます気恥ずかしそうに頬を染めた。

思えば随分遠くまで来た気がする。

ユーノは自分が起こした失態の尻拭いのために、なのはは遠い世界にたった一人降り立ち、戦おうとしていたユーノを手伝うために、ここまでの大事件にまで発展するとは夢にも思わず、責任感や善意で首を突っ込んだ。

しかし、時が経つにつれて二人の心境には変化が表れだした。

失態の責任を取るつもりだった少年は、命がけで手伝ってくれている少女を自分も助けたいと思うようになり。

軽い気持ちで挑んでいた少女は、悲壮な覚悟を決めて立ちふさがった少女と出会い、彼女を救いたいと言う強い想いを抱き、最初よりも強い覚悟を抱くようになっていった。

一ヶ月近い争奪戦を経て、少女と少年は一周りも二周りも成長していた。

自覚のないなのは達は、そう大人達に見られることが非常に気恥ずかしく思えてしまうのだった。

「次元震の余波はもうすぐ収まるわ……ここからなのはさんがいた地球になら、明日には戻れると思う」

「……よかった……」

リンディの知らせに、なのははホッと安堵の息をつく。

生まれて初めてかも知れない、家族にぶつけた大きなわがまま。ここ最近心配ばかりかけてきた、故郷に残した家族や友達の顔が浮かんでくる。

一度思い出すと、今すぐにも帰還して顔を見せたいという気持ちが強くなり、体が勝手に動き出しそうだった。

喜ぶのはだが、視線をユーノに向けたリンデイの表情がやや曇っていることに気がついた。

「ただ、ユーノくんの故郷……ミッドチルダ方面の航路はまだ空間が安定しないの……しばらく時間がかかるみたい」

「え……」

「数ヶ月か半年か……安全な航海ができるまでそれくらいはかかりそうね」

申し訳なきように眉尻を下げるリンデイの言葉で、なのははハッと息を呑み、ユーノに視線を向ける。

なのはのいる世界よりも、ずっと遠い世界に住んでいたユーノは、そう気軽に故郷に戻れない。次元震の影響が強い現在ならなおさらなのだ。

道場の視線を送るなのはの前で、ユーノは困ったように頭をかきながら、苦笑をこぼしていた。

「そうですか……その……まあうちの部族は遺跡を探して放浪してる人ばかりですか

ら、急いで帰る必要はないといえませんが…」

帰れないことに関しては、ユーノはあまり気にしていないらしい。

もともと故郷というものに愛着がなく、場所を移って暮らしている習慣が強いため、住む場所に特にこだわりはないようだ。

しかしそれでも、ユーノの表情には悩みが混じっている。

家族に会えないこと、故郷に戻れないこと以上に考えあぐねている事によって、リンデイに申し訳なさそうな目を向けていた。

「…でもその間、まさかここにずっとお世話になるわけにもいかないし…」

「じゃあうちにいればいいよ！ 今まで通りに！」

はい！と手を挙げ、提案の声をあげるなのは。

フレット姿が基本だと思ひ込み、人間の姿になった瞬間の驚きはあったものの、友達であることは変わらない。彼が姿を変えている間、色々と恥ずかしい思い出が出来上がってしまったが、そこはさして問題ではない。

そんな友達が困っているのなら助けてあげたいという気持ちで、なのはは迷いなく手を差し伸べていた。

「なのは…いいの？？」

「うん！ ユーノくんさえよければ」

まだしばらく、大切な友達が自分のそばにいてくれる。

そんな温かい気持ちに向けてくれるなのは、ユーノはホツと安堵し、笑みを返す。子供達の優しいやり取りを、リンデイやクロノ、エイミー達は穏やかな表情で見守っていたのだった。

そうしてしばらくの間、ユーノと見つめあっていたのはだが、不意に思い出したように目を見開く。

リンデイ達の方に振り向いた彼女は、最近常に自分の頭の中にあつた心配事を口にした。

「……あの、フェイトちゃんとアルフさんは？」

「心配しなくとも、二人には一緒にある役目を任せている……まあ、あとで色々言われるかもしれないが、彼女達の望む役割を与えてある」

なのはがクロノに問うと、青年は若干顔をしかめながら答え、肩をすくめる。

何か、ジュエルシード事件とは異なる激戦を終えた後のような、心底疲れ切ったような彼の表情に、なのは訝しげに首をかしげる。

その隣ではユーノが、クロノのそばではリンデイとエイミーが、クロノの苦勞を察して苦笑をこぼしていた。

「……申し訳ないが、しばらく隔離になる。面会は許可できない」

「そんな……！」

「今回の事件は、一歩間違えれば次元断層さえ引き起こしかねなかった重大な事件だ。時空管理局としては、関係者の処遇には慎重にならざるを得ない……それはわかるな？」

「とりあえずずっとそのままってことはないから、もうちよつと待つて、ね」

「……はい」

クロノの説明で、なのはは渋々、そして無理矢理自分を納得させる。

ジュエルシードをめぐる事件で、最も苦しんだ被害者であるフェイトが、まるで危険人物であるかのように扱われていることには、一言も二言も文句を言いたい。

その上、事件の解決には、彼女の協力もあつてのことなのだから。

しかし、フェイトが危険を冒し、その影響が街に現れたことも事実。命じられていたとはいえ、何もお咎めなしで済む話ではないのだと、なのはは暗い顔で俯いた。

すると彼女は不意にハッと目を見開くと、辺りを見渡し始めた。

「あの……えつと……ア、アインさんは今……？」

「……っ」

再び上がった問いの声に、クロノはなのはに聞こえないほどの小さな声量で息を飲む。彼女に見えないよう、グツと歯を食いしばり、梓上がつた激情をどうにか抑え込む。

突如沈黙し、鋭い視線を虚空に向けていたクロノに、なのは不思議そうに首をかしげる。

しばらくの間、少女が彼の横顔を見つめてっていると、やがてクロノは深い息を吐き、なのはに向き直り口を開いた。

「彼女にも、ある罰を受けてもらっている。…事件解決の功労者とはいえ、命令に違反し好き勝手暴れたからな。それは見過ごせん」

「アインさん……」

「心配しなくとも、ベッドでおとなしくしてもらっているだけだ……もつとも」

多くの傷や痛みと引き換えに、なのはの世界や一つの家族を救って見せた女騎士が、どうして責められなければならないのか。

そう思うが、フェイトと同じく、命令違反や暴走、独断専行と色々とやらかしていた彼女の所業を考えると、理不尽とは言い切れない気がしてくる。

不老不死の怪物であることを理由に、凶悪な敵であろうと邪神であろうと一切臆せず、たった一本の剣を振りかざして暴れまわった強者にして狂人。

自分もクロノ達と同じく、女騎士が傷つくたびに悲鳴をあげ、ヒヤヒヤとさせられた経験を思い出し、フェイトの時よりも深く納得する。どこかで閉じ込められているのなら、その辺を反省してもらいたいものだ。

なのはが溜飲を下げたことに気づくと、クロノはまた深いため息をつき、大きく肩を落としてみせた。

「隣の人物と仲良くできているかどうかまでは不明だがな」

「いい考えだと思っただけだなー？」

「エイミィ……」

困ったような顔で首を傾げ、ぽりぽりと頭をかくエイミィに、クロノは心底呆れた様子で頭を抱え、リンデイもまた苦笑する。

何やら悩み、困っている様子の彼らに、なのはとユーノは首を傾げるばかりであった。

2. ここから始める

アースラ内の一室。

本来であれば犯罪者を収容しておく、嚴重な鍵が備えられたその部屋は、大規模な改装が行われた後になっていた。

無機質な部屋には二つの大きなベッドが並べて置かれ、棚や机などの家具もいくつか用意されている。一見すると病室そのものの外観だ。

そして配置されたベッドの上にはそれぞれ、金髪と黒髪、二人の美女が横になっていた。

「……」

「……」

片や、全身に包帯を巻いた長身の女騎士アイン。

片や、腕に点滴を刺した痩せ細った魔女プレシア。

二人ともほとんど同じ、心底心外でやってられないと言いたげな、ぶすすと不満だらけな表情で天井を見上げている。

怪我や病で衰えた体ゆえ、身じろぎひとつできない体を恨めしく思いながら、アイン

が深いため息とともに、口を開いた。

「なんでよりによつてここなんだ」

「…それはこちらのセリフよ。どうして一時殺し合つた仲の人と同じ病室にさせられなければならぬの」

崩れゆく庭園の中心で激突し、罵倒の限りを尽くして戦つた二人。

どちらも運命という名の荒波に揉まれ、大切なものをなくし、その心の隙を狙われいように利用されたという、非常によく似た経歴を持つている女達である。

しかし、隣り合つた彼女達に仲の良さなど一切存在しない。首さえ動けば、敵意でいっぱいになった目で睨みつけている事だろう。

二人の間の空気は、極地のように冷たく凍り付いていた。

「理由はわかるがな…どつちも満身創痕で目的を見失つた者同士、争う理由は皆無…：それと、私は命令違反、お前は単純に大勢に迷惑をかけた者として、ちやうどいい嫌がらせなんだろう」

「…そうね」

「だがあいつら…！あとで覚えておけよ…！」

ひくひくと頬を痙攣させ、アインは遠く、アースラの艦橋にいるはずのリンデイ達に向けて呟く。

自分でも相当に暴れ、彼女達に心配と迷惑をかけた自覚はある。あとでどれだけ責められ、思い罰を受けさせられるかも覚悟はしていた。全て承知の上で暴れたのだ。

だが、これだけはないとアインは思う。

どうして殺しあつた者同士で、しかも互いに後で恥ずかしくなるような本音のぶちまけ合いをした相手と部屋を一緒にされなければならぬのか。

ひたすら気まずく、息苦しい中、プレシアがため息混じりに呟いた。

「……これからどうなるかしらね。私もまさか、死に損なうとは思っていなかったのに……」
「多少の減刑はされるんじゃないか？ 乗せられていたんだからな……他ならぬ、法の番人である管理局の高官に」

「もみ消される可能性もあるんじゃない？」

「あれだけやらかしてか？ あの通信と証拠映像があれば、トカゲの尻尾を切るには十分だろう」

アインにそう返され、プレシアは暫く考え、納得する。

どれだけ悪辣な姿を晒し、我欲で穢れた真つ黒な正体を見せつけ、証拠を残されたとしても、手中に収めた邪神の力を使って、敵に回した全てを滅ぼすつもりでいたノア。

世界の一つや二つ簡単に滅ぼせるために、人間がどれだけ吠えようと痛くも痒くも思わなかっただろう。

よもや、最強最悪の生物兵器が破られるなどとは、夢にも思わなかったはずである。それさえなければ、力押しでも人間の世界を破壊し、支配する事はできたかもしれない。

ジョーカーアンデッドが自らを犠牲にし、アインが覚悟を決め愛する男を斬つたこと。それが彼の、唯一の失態であつたのだ。

「……まあ、捕まつていないようだがな。それどころか……もうこの世にいないようだ」

天井を仰ぎながら、ぼそりと呟くアイン。気だるげな表情からは、焦りなど微塵も感じられない無気力な態度で、衝撃の一言をこぼす。

一瞬固まったプレシアは、勢いよく振り向きアインの横顔を凝視すると、目を見開いたまま問い返した。

「何ですって……？」

「本局の連中が踏み込んだ時にはすでに……首を真つ二つにされて息絶えていたらしい」
「……あの男が死んだというの。自殺……なわけがないわよね」

世界を滅ぼそうる怪物を育て、自分の思い通りに動く駒に仕立て上げ、全てを統べる神になると豪語した狂人。

狂つているとしか言いようがない計画が失敗し、生きていてもやがては捕らわれ、法に裁かれる未来しか待つていなかった男だ。先を憂いて自ら命を立つたと聞かされて

も不思議はなさそうに思える。

しかしプレシアは、少しの間、それも声のみでの関わりでしかないが、自分が利用し、実際は事態を真に操っていた男のことを思い返す。

たった一人奮闘するプレシアを嘲笑うように、まるで餌のようにジュエルシードの情報をちらつかせ、操っていた彼が、心折られて死ぬとも思えない。

意地汚く生き残り、計画を邪魔した全ての者達に復讐することぐらい考えていそう
だ、とプレシアは考えていた。

そこでふと、プレシアは思いつく。

大惨事を引き起こしたノアは今後、大勢の人々に恨まれながら刑の執行をまたなければならなかったはず。

ならば、彼を最も恨んでいるのは、いったい誰であるのかと。

「まさか…彼女…あなた…」

「ああ…おそらくな。どこかで生きてはいるんだろう…いや、必ず次元世界のどこかにはいる」

「わかるの？」

「なんとなくな…」

ふう、と息を吐き、瞼を閉じるアイン。

つい最近になって発覚した、自分と自分の愛する男の遺伝子を持ち合わせる、異形を正体にもつ少女。

本来生まれるはずのない、生まれてはならなかった例外の命である彼女に、アインは深く悲しみと罪悪感を抱く。

まるで自分の背負った罪を、存在そのものに対する罪を、一緒に背負って生まれてきてしまった少女に、アインは心の底から申し訳なく思う気持ちでいっぱいになっていった。

「…あいつが消えたいま、残るアンデッドは私とあの子だけだ。もしかた相見えようものなら……次こそ世界は終わる」

アインはひたすらに悲しみを覚え、深くため息をつく。怪我だけではなく、気だるさとやるせなさで、指先一本動かせない。

せつかく再会でできた愛する男とも、ろくな話もできないまま永遠の別れをさせられ、十数年経って初めて存在を知った一人娘とも、もう二度と会ってはならないのだと決定づけられてしまった。

求めたものが、全て奪い取られる。手にしてはならないのだと拒絶される。

幼い頃から変わらない、自分の人生にかけられた呪いのような因果に、アインは心も体も重く感じてばかりだった。

「何から何まで……似ているわね、私達は」

ふっ、と鼻で笑い、プレシアが吐き捨てるように言う。

時の庭園で、互いに思いの丈をぶちまけあつたせいだろうか、嫌悪を抱きつつも無視をする気にはなれない。むしろ、本音を語る女騎士の話を、もつとじっくり聞いていたとさえ思えてくる。

命のやり取りのせいで、余計な心のしがらみや壁まで破壊されてしまったのかと、プレシアは苦笑を見せた。

「大切なたった一人の家族と再び会うことを許されず、ただただ醜く足掻くだけ……滑稽に踊るだけの道化つてところね」

「腹立たしいものを感じるのは……同族嫌悪があつたからかもしれない」

「そうね……でも、私とあなたでは違うところがある」

そう言って、プレシアはアインの方に顔を向け、じつと凝視し始める。

病室に担ぎ込まれた時は、死人に等しい惨状を晒していた女騎士。

自分と比べるまでもなく、重傷でどうしようもない姿を晒していた彼女は、いつの間にか腕も足も取り戻し、傷がふさがるのを待っているだけになっている。

少しずつ体が衰えている自分とは正反対の有様に、プレシアは羨むどころか、憐憫の眼差しを送り続けていた。

「あなたは不死で、私は近いうちに必ず死ぬ……あなたはその苦しみを、延々と続けなければならぬ。そうでしよう？」

「…そうだな」

「この世に神がいるというのなら、そいつはなんていい性格をしているのかしらね。人をこんなにも苦しめて…何が楽しいのかしら」

言っても仕方がないことをつぶやき、また思い息を吐く。

いつかないかもわからない全知全能の存在。いるのなら、自分の願いを叶えて欲しいと祈ったことも何度もあった。

けれど、与えられるのは試練とも言えない、悲惨で残酷な苦痛ばかり。

そんなことができる誰かがいたとしても、プレシアもアインも、呆れることしかできなくなっていた。

「あ、あの…入ります」

その時、二人のいる部屋の扉が静かに開き、一人の少女が恐る恐る顔を覗かせる。

不安げで、しかしアインとプレシアの様子を心から案じる様子を見せる彼女、フェイトは、トレーを両手で持ち入室する。その後ろには、やや気まずげな様子のアルフの姿もあった。

「…何をしにきたの」

「…艦長の方とお話しして、母さん達が動けない間のお世話をさせてもらえる事になりました」

一瞬目を丸くしたプレシアが、厳しい口調で問うと、フェイトは以前のように萎縮することなく、プレシアの枕元へと近づく。

用意されていた椅子に腰掛けると、同じく病室に置かれたテーブルの上にトレーを置き、載せていた果物を移していく。

見るからに見舞い用のものであるそれらを見やり、プレシアは眉間にしわを寄せた。

「あなたは馬鹿なの…？ あの時、玉座の間でも言いたかったけど、あなたが私に何をされてきたか、忘れたわけじゃないわよね」

騒動の最中の記憶は、曖昧ではあるが残っている。

ノアに騙され、邪神の核として飲み込まれた間も、フェイトが自分を呼ぶ声はずっと聞こえていた。何者かが邪神の中に手を伸ばし、自分を外に押しやったあと、彼女が泣きながら縋り付いていたことも、うっすらとだが体が覚えている。

しかし、それ以上にプレシアが覚えているのは、自分がフェイトに向けてはなつた暴言の数々だった。

生まれた直後から先日までずっと、冷たく突き放し、自分と二度と関わることはないよう、徹底的に心に傷を残す言葉をぶつけようとした。最後は隣にいる女騎士に邪魔を

されたが、それでも見限られるには十分なことをしたはずなのだ。

なのにフエイトは逃げることもせず、こうして今も自分に向き合おうとしている。

それがひたすら、不思議でならなかった。

「分かっています…母さんに言われてきたこと、されてきたこと、全て覚えているし、忘れたことなんてありません…だからここにいます」

「あなた……」

「フエイト……」

「私がジュエルシードを集めていたのは、母さんに言われていたからじゃありません。私がそうしたいから……そうしたんです」

ベッドに横たわる母の顔を、フエイトはじっと見つめて語りかける。

いつものように俯くことなどなく、しっかりとその場に立ちふさがり、決して逃げないという意思表示をする。

プレシアだけでなく、アルフもその姿に驚愕し、啞然とした様子で立ち尽くす。

時折頑固になることは知っていたが、彼女はこんなにもはつきりとした言葉と態度で、自分の気持ちを示しては来なかった。

その姿で思い出すのは、崩壊するときの庭園に突入したときのこと。

悲しみを克服し、折れた心を根性で復活させて挑んだプレシアの目の前で見せたとき

と、全く変わらない姿だった。

「全部を母さんのせいにして、逃げる気なんてありません。自分がやってきたことを否定して、のうのうと生きるつもりはありません。…誰かに導かれるままじゃない、自分の意志で全部を背負って、これからは生きます」

目を見開き、固まるプレシアはただ、フェイトの決意を聞届けることしかできない。

ふと、彼女の視界にある幻覚が映り込む。

フェイトよりも小さく、幼く、しかし気の強さを感じさせる綺麗な目をした、プレシアにとって最も大切だった宝物。

見た目以外何も似ていないはずの少女が、全く同じ表情でフェイトの隣に寄り添い、語りかけてきていた。

「私は母さんに何と言われようと…どんな考えで遠ざけられようと、母さんの…大魔導士プレシア・テスタロッサの娘だと言いつつ続けます」

はつきりと、記憶にある彼女よりもずっと力強い目を見せる少女に、プレシアは目を離すことができなくなる。

しばらくの間見つめ合い、無言のまま時が流れる。

やがて、ふいつつプレシアが視線をそらす。気まづくなつたのか、自分で自分が馬鹿らしくなつたのか、呆れた様子でフェイトから目をそらす。

つい悲しげに目を伏せるフェイトに、プレシアは寝転んだまま大きなため息をつく。

「……好きにしなさい。まったく……これまでの苦労がパーだわ」

「いい気味だな」

「黙りなさい……いったい誰に似たんだか」

一部始終を見ていたアインから、ニヤニヤと小馬鹿にした調子で話しかけられ、プレシアのこめかみに血管が浮かぶ。

殺気に近い圧が降りかかるも、アインはそれを平然と受け流す。二人とも重傷で、指先一本まともに動かせないで喧嘩も何もあつたものではないからだ。

不満げに目を細める魔女に、女騎士は意地悪く笑い、やがて瞼を閉じる。

どうやら自分は本当にひどい状態らしく、少し話ただけで随分眠気が襲ってくる。少しずつ、意識も揺らぎ始めていた。

「言っておくが、この子がこうなつたのはきつと、私以上に頑固なあの子の影響だと思つぞ。いや……類は友を呼ぶというから、もともとこうなる素質があつたんじやないのか？」

「……そうかもしれないわね」

アインの呟きに、プレシアは反論しなかつた。彼女の記憶の中から蘇つた、今は亡き娘の思い出が蘇っていた。

気が強く、やんちゃで、好奇心旺盛で、よく母を困らせることもあった元気な子。煩わしいと思ったことなど一度もなく、その全てが愛おしかった。

そんな彼女は、一度決めたことはどうあつたつて曲げない頑固者でもあつた。それは自分にひどく似ていて、やはり親子だと安心することもあつた。

そしてその性格は、人ならざる生まれ方をした目の前の娘にも、しっかりと受け継がれていたのだ。

「……ママ、私ね……！」

「……少し眠るわ、ちよつと疲れが残っているみたい」

脳裏に蘇るアリシアの声にフツと微笑み、プレシアは瞼を閉じる。

そうだ、随分昔のことと忘れていたが、娘はそんなことを口にしていた。

当時の自分では叶えられず、曖昧に笑って誤魔化すだけだった娘の願いが、数十年経った今になって思い出される。

そしてその願いは、確かな形となって叶えられたのだと、皮肉を感じていた。

「……ありがとう、フェイト」

小さく溢れたその眩きに、フェイトとアルフがハツと目を見開く。

そしてフェイトは少しずつ笑みを浮かべ、アルフはニヤニヤと意地の悪い笑みを返す。

長い時間をかけ、ようやく出発点にたどり着いた一組の家族に。
アインはただ一人、眩しげで羨ましげな眼差しを向け、深い眠りにつくのだった。

3. ただいま

「シュートツ!!?」

[Divine shooter.]

なのはがレイジングハートを構え、桜色の光球をいくつも操り、撃ち放つ。放たれたそれらは上下左右に軌道を描き、的に当たって霧散する。

それを何度か繰り返し行い、生じた数値がモニターに表示され、記録されていく。

地球への期間を明日に控えたなのはに申し出された、彼女の能力を測る実験。

少しでもアースラの局員達との交流を覚えておきたいと、なのははそれを二つ返事で受け入れ、言われるままに愛機とともに魔法の行使に専念していた。

『どう? クロノ君、なのはちゃんの魔法の実使用を間近で見た感想は?』

「……うん、数値は異様に高いレベルを出す事もあるけど、均整が取れているとは言いづらいな」

データを見たクロノが、思わず難しい表情で答える。今よりずっと前から、執務館としていくつもの任務にあたり、多くの魔導師と触れてきた彼であるが、なのはの能力はどうにも言い表し難かった。

遠方射撃には圧倒的防御力。

変則軌道が可能な誘導操作弾での攻撃。

わずかな隙を一撃必殺で撃ち抜く中遠距離単独戦闘のエキスパート、従来の魔導師のどれとも当てはまらない形態。

クロノにもエイミーにも、これまで遭遇したことのない独特の戦法を有する人物だった。

『なのはちゃんはちよつと変わってるスタイルだよね』

「何にせよ、専門の期間で訓練したわけでもない素人がこのレベルとは……お前、一体どんなスパルタな教育をしたんだよ」

「ボ、ボクは魔法の基礎を教えただけだよ！　したとしたらアインさんだよ！」

「人のせいにするな」

じとつと呆れた目を向けるクロノに、ユーノが慌てて反論する。

確かに、経験など一切ない少女に魔法の力を託し、危険な戦いに巻き込んだ負い目、何より本人の希望で練習メニューを考えてきた。

しかし少女がこれほどまでに、異様と言えるほどの成長を見せたのは、ひとえに本人の才能と執念による努力の賜物。ユーノが与えたのは単なるきっかけに過ぎず、呆れられる謂れはないはずなのだ。

騒ぐ少年達二人をよそに、エイミイは上機嫌な様子で、収穫したなのはのデータを記録し、大切に保管する。

『こんなレアケースの魔導師は滅多にいないからね。可能な限りのデータを取っておかなきゃ。ごめんね、なのはちゃん。明日には地球に帰るのにデータ取りにつき合わせちゃって…』

「いいえ！ お役に立てるならー！」

通信越しに頭を下げるエイミイに、なのはは満面の笑みで答える。

運動は苦手な彼女だが、魔法を使うために体を動かすことについては、かなり積極的になるらしい。

むしろ、もつと魔法の訓練をしたいと、努力に貪欲になっている印象さえ与えてくる。本人が全く気にしていないのをイイことに、エイミイがくすくすと笑う様に、クロノがため息をついた。

「まったく…なのはにはアースラで過ごす最後の日になるかもしれないってのに…」

『お別れが寂しいなら素直にそう言えばいいのになあ…クロノくんってば照れ屋さん』

「エイミイ…な、何を…?？」

押揃うように呟いたエイミイに、クロノが頬を染めてぱつと振り向く。エイミイのその呟きに、ユーノがまさかと言った表情で凝視し、空気が余計にこじれ始める。

やや少年達の間で険悪な空気が流れ始めるのを、なのはは苦笑しながら見つめていたのだった。

『なのはちゃん……ここにはいつでも遊びに来ていいんだからね?』

「はい……ありがとうございます」

「エイミー! アースラは遊び場じゃないんだぞ?!?」

『いいじゃない、どうせ巡航任務中はヒマを持て余してるんだし!』

「……お前なあ」

最初から最後まで、年下に甘く悪戯っぽい雰囲気崩さない彼女に、クロノは頭を抱えて肩を落とす。

しかし、彼女の言葉を否定はしない。

重大事件にずっと関わり、解決のために一生懸命に尽力した少女達のことを、嫌いになれるはずもない。

別れが惜しく思うと言うのも、確かだった。

そしてやがて、別れの日は訪れた。

不安定だった時空の流れが安定し、地球に転送できる日目の目処がついたのだ。

寂しそうに眉尻を下げるのはと、その肩に乗るユーノ。

二人を見送るために、手が空いたスタッフ達は全員、ゲートの前に整列していた。皆、一生懸命事件解決のために手伝ってくれたなのは、深い感謝を抱いていた。

「それじゃあ…今回は本当にありがとう」

アースラメンバーを代表し、クロノが語りかける。

気負うことが多く、仏頂面が板についていた彼だが、この時ばかりは柔らかく穏やかな笑みを見せている。

思えばいろいろあった、となのはは思い返す。

自分とフェイトの一騎打ちが続くと思っていた矢先にあった、異世界の警察組織の介入。

事件は預かると言われ、諦めきれなくて自分から協力を申し出た後は、怒涛の日々だった。

方針に納得できず、自分勝手に動いて心配をかけ、第三者どころか第四者の介入まで起きて、より一層危険な命の危機が訪れた。

忘れようもない、忘れられるはずのない、凄まじい日々だった。

「…協力に感謝する」

「うん、クロノ君も元気で」

クロノが差し出した手を、なのははぎゅっときつく握る。

最初は怖いという印象を抱いた、生真面目さが全面に出た少年。任務のためなら冷酷になれるような人物なのかと思えば、熱い心を持った勇敢で優しい男の子でもあった。

すると今度は、地上部隊の二人、サクソとムーヴが歩み寄ってくる。

二人ともなのはに向けて、試合に満ちた穏やかな微笑みを送ってきていた。

「ずいぶん世話になったね。まさかこんな大事になるなんて思ってもみなかったよ」

「色々、見苦しい部分も見せてしまったが……君達に対する感謝は変わらない。本当に、ありがとう……」

「サクソさん……ムーヴさん……」

ユーノ以外の、もう一人の師アイン。

彼女とともに昔戦っていたという、不屈の心と熱い心を持った男達にも、なのはは心の底から感謝の眼差しを送る。

地上部隊の面々とは、色々あった。確執を目の当たりにし、一方的にアインを罵られて怒りを抱いたり、その後いつの間にか敵意が収まっていたり。

何より、思わぬ裏切りがあらわとなりながらも、共に事件に立ち向かった記憶がある。

そきでふと、なのはは辺りを見渡し、事件以降一度も姿を見られていない薄幸の少女と女騎士の姿を探した。

「……あの」

「フエイトの処遇は決まり次第連絡する。大丈夫さ……決して悪いようにはしない。プレシアに関しても、できるだけ罪を軽くできるように準備を進めている」

不安げに見つめてくるなのは、クロノは安心させるように告げる。

ひたすらに娘との再会を願ひ、自他問わぬあらゆるものを犠牲にしようとした魔女の凶行。しかし、その裏には時空の守護者であるべき一人の男の、信じられないほど悪辣で身勝手な野望が混じっていた。

全てがそうではなくとも、プレシアの願ひが捻じ曲げられ、利用されたことは確かな事実。

一切の言い訳も弁解も聞かず、無慈悲に罪に問うようなことは、クロノ達はできる限り避けるつもりだった。

「あの人に関しては……不安も残るが、何とかしてみせるさ」
「うん……ありがとう」

一目、少女や女騎士に会いたいと思うのはだが、その気持ちはぐつと内心に閉じ込める。

これ以上、クロノ達に迷惑をかけるわけにはいかず、彼らを信じて待ちたいという気持ちもある。

何よりも、重傷のままベッドに封じられているアインのことを考えると、動かずその

まま眠っていて欲しいと考えた。

「ユーノくんも、帰りたくなったら連絡してね。ゲートを使わせてあげる」

「はい…ありがとうございます」

『『事件は解決したら終わりではない』というのが私の持論なの…またきつと会いましょう』

いたずらっぽくリンデイが笑い、ユーノが頷く。至れり尽くせりの気遣いに、逆に申し訳ない気持ち溢れるくらいだ。

するとやがて、なのは達の背後の転送装置が起動し、少しずつ光を放ち始める。コンソールを操作する局員達が、少女達を地球に送るための扉を構築しているのだ。

「じゃあ…そろそろいいかな?」

「はい」

クロノに促され、なのはは背を向け、何度も使い慣れたゲートの方へ向かう。これまでずっと、戦いに赴くために使っていた扉だが、今度は自分の身を休めるために開かれるのだ。

眩しい光に包まれ、クロノ達の姿が見えづらくなる。

それでも、笑みを浮かべて自分たちを見送ってくれている大人達に、なのはとユーノは大きく手を振り、別れを告げた。

「またね、クロノ君…リンディさん、エイミーさん！」

やがて、光は消えた。

気づけばなのは草地の上に立っていて、見上げれば青空が広がっているのが見える。

振り向けば海に面した街が——もう懐かしいとさえ思える、海鳴の故郷が眼に映る。何日ぶりになるだろうか、潮の香りでいっぱいの風を全身に受け、心地好さそうに深呼吸をする。

風が体に染み渡るのを感じながら、なのははふつと微笑み、方に乗ったユーノに語りかけた。

「じゃ……帰ろうかユーノくん」

「うん」

そうして、少女は歩き出す。

ずっと待ち望んでいた、なんでもない“日常”に戻るために——。

——こうして『ジュエルシード事件』はひとまず終わりを迎えて。

そして戻ってきた……私の日常。

——今までどおりだけど……いろんなことがあった分、今までとは少しだけ……違う日常。

——夢中だった時のことは……過ぎ去ってしまえば、なんだか一瞬のこのよううで。だけど……心の中には確かに残ってる。

——出会ったこと、必死だったこと……いろんなこと。

——だけど、終わってないのは……残った気がかりは、あの人達のこと。

——綺麗な目をした……きつと優しいあの子のこと。

——ずっと戦って、守ってくれていた……誰より優しくて強い、あの人のこと。



その報せが来たのは、少女が普通の生活に戻ってすぐ後のことだった。

——乱れた時空が落ち着くのを待っていたアースラ、その乗組員達の中でも、一部の人間達にのみその報せは伝えられていた。

「……なのはが帰った後で、本当に良かった……！　こんな決定……彼女には絶対聞かせられるわけがない……！」

——モニターに表示されるその内容に、クロノが歯を食いしばりながら呟く。その後ろで、リンデイやエイミィ、サクソやムーヴ、アースラメンバーや地上部隊の面々もいて、全員が険しい表情を見せる。

字面で示されたそのあまりにも無慈悲で無遠慮な決定に、誰もが驚愕し、直後に怒りをあらわにさせていた。

「そんな……どうして……！」

「これが……これが自分の全てをかけて世界を救った者に対する仕打ちなのか!?? ふざけるな！」

ガンツ、と拳を壁に叩きつけ、目を釣り上げるサクソ。ムーヴはひたすらに拳を握りしめ、爆発しそうな自分の感情をどうにか抑え込む。

彼らの同僚達である地上部隊も、全員信じられないと言う気持ちを前面に表し、一切の言葉を返すことができない。

リンディは無表情を貫き、惘然とした態度を貫いている。

だがもし、彼女が人目のつかない場所に行つたのなら、募り募つた不満と怒りが火山のように爆発することだろう。

「……別にそうおかしな話ではないだろう」

「アイン……！」

重い空気を切り裂き、沈黙の原因の一端である女の声が、念話を通じて届く。自分の最期に関わることだと言うのに、平然と、まるで気にしていない態度だ。

病室にて養生、と言う名の監視を受けているアインは、一切表情を変えないまま虚空

を見上げる。

横を向けば、プレシアのためにおっかなびつくりといった手つきで、リンゴの皮を剥くフェイトと、それをオロオロと見守っているアルフの姿が見える。待っているプレシアは、穏やかで静かな微笑みを浮かべている。

もしアインが表情を変えれば、彼女たちは途端に気付くだろう。

今あるこの時間を壊さないために、アインは亀のように口を閉ざし、平静を保ち続けていた。

「いつまた世界を滅ぼすかわからん化け物が、まだ生きて手の届く場所にいるんだ……実に合理的な決定だ」

「……こんなもの、認められるわけないでしょう!?」

軽い口調でそう答えるアインに、リンディは激昂し念話越しに怒鳴る。到底受け入れられない決定、それを受け入れようとしている親友を、リンディはもう全く理解できない。

そしてひたすらに、悲しかった。

自分勝手に傲岸不遜なくせに、自分の幸せを何一つ求めず、自分を苦しめてきた相手の命令に肅々と従う。

まるで操り人形そのものだと、リンディの方が苦しくなった。

「アイン……あなたは……！」

「もういいんだよ、リンデイ……今まで好き勝手やってきたんだ……妥当な結末だと思わないか？」

「思えるわけ……ないじゃない」

「他のみんなはそう思うさ……何より私が一番納得している」

深く息を吐き、アインは瞼を伏せる。

親友と共に過ごしてきた時間、共に乗り越えた困難、共に分かち合った喜び、数々の思い出を瞼の裏に映し、アインはふつと微笑む。

数多くの思い出に浸り、彼女は初めて、満たされたと感じていた。

「どうせ見送るなら……笑って見送ってくれよ、リンデイ」

そんな親友の、おそらくは最後となる我儘に。

リンデイはもう、何も答えることができなくなってしまった。

アイン・K・アルデブランド

管理局員権限を完全に凍結。

及び管理局規定SSS級隔離施設にて、永久凍結封印処置を決定。

ミッドチルダに輸送を完了次第、処置を開始する

4. 名前を呼んで

その報せは、突然だった。

取り戻した日常、家族との温かい時間、親友達との楽しいひと時を堪能し、しばらく経ってからのこと。あの戦いの日々が、遠い夢か何かだったのではないかと、ふと思うようになっていた矢先であった。

就寝前、自室のベッドに横になっていたなのはの携帯電話に、一着の電話がかかってきた。

こんな夜中に誰からだろうか、となのはは訝しげに携帯電話を開き、どこの誰からのものかを確認してみる。

そこにあつた文に、なのはの思考は一瞬硬直し、すぐさま驚愕で目を見開いた。

「……？　え……えええつ？？」

そこにはこうあつた、『時空管理局』と。

なのはは慌てて通話ボタンを押し、耳に当てる。そこに際の彼女はなぜか、ビシツと背筋を伸ばして正座になっていた。

「はい、もしもしっー！」

『ああ、なのはさん。ごめんなさいね、朝早くに』

「いえっ—」

自分がやや引きつった、驚愕と戸惑いがごちやませになった声で応えると、もはや懐かしいとさえ思える女性の声が聞こえてくる。

なのはの驚愕する様を想像してか、向こう側からくすくすと笑う声が聞こえる。驚かす事に成功し、達成感でも味わっているのだろうか、実に楽しい笑い声である。

そんなリンディのいたずら心も、慌てるのはは気づいていない。ひたすらに、久しぶりの会話に驚いていた。

『フェイトさんとプレシアさんの裁判の日程……来週から本局行き……って決まったわ』

「はい」

『でね? その前に少しだけなんだけど…』

何だろうか、と首をかしげるなのはに、リンディはもったいぶってから語り出す。

電話の向こうではきつと、いたずらっぽい笑みを浮かべて、なのはの反応がどんなものかと想像し楽しんでいるのだろう。語る声は、常に上機嫌に聞こえていた。

なのははじつと耳を澄まし、リンディの言葉に耳を傾ける。

そしてやがて、顔全体で喜びをあらわにし始めた。

「……はい……はい、はいっ! すぐ行きます……はいっ!」

何度も力強く頷き、弾んだ声で答える。リンディがもたらしたもう一つのサプライズ、自分が待ち望んでいた日がきたのだと知り、なのはは目を輝かせた。

少しして、リンディからの電話は切れ、なのははしばらくの間放心する。

心底嬉しそうな笑顔で天井を仰ぎ、携帯電話を握りしめる彼女に、ユーノが訝しげな表情をしながら問いかける。

「なのは……どうしたの?」

「フエイトちゃん、少しだけど会えるんだって!」

「そうなんだ?」

「私に会いたいわって……言ってくれてるんだって……!」

思いもよらない申し出に、なのははもう思考がうまく働かない。

もう一度、たった一度でいいから会いたいと思っていた、友達になりたいと思っていた少女との再会に。

なのははしばらくの間、興奮で眠れなくなってしまうのだった。

◇ ◇ ◇

そして、その日は来た。

場所は、以前最後の勝負を行なった海浜公園。何度も痛い思いをしたが、それ以上にあの少女と心を近づけることができた、思い出深い場所。

落ち着かない気持ちのまま、急ぎ足でその場を訪れたなのは。

もう来ているのか、まだ来ていないのかと辺りを見渡し、数週間振りの再会を待ち望む。

するとやがて、なのはは自身の元へ近づくと人影に気づく。

緑色の髪の女性、黒髪の少年、狼の耳を生やした女性に連れられてやってくる、どこか不安げな表情をした、金色の髪の少女。

再会を待ちわびていたフェイトが、なのはの前に歩み寄った。

「フェイトちゃん…」

「ん…」

二人は互いに見つめ合い、ややぎこちなく微笑み合う。

もう二度と会えないのだろうか、声を聞くこともできないのだろうかと不安がっていた時、不意に機会に恵まれたせいか、どう顔を見せればいいのかわからなくなる。

無言で見つめ合う二人に気を使い、クロノ達が背を向け、その場を離れ出した。

「僕達は向こうにいるから」

「あ…うん、ありがとう…」

「ありがとう」

リンディとユーノもクロノの後を追ひ、なのはとフェイトを二人きりにする。他の者

の目があると、気安く話すこともできないと判断したのだろう。

そのおかげか、なのはもフェイトも少し緊張がほぐされ、自然な表情を浮かべることができた。

ほっと安堵し、見つめ合うのはとフェイト。

しばらくしてなのはが、クスツと苦笑を浮かべて肩をすくめる。

「あはは……いっぱい話したいことあったのに、ヘンだね。フェイトちゃんの顔見たら忘れちゃった」

「私は……そうだね、私も上手く……言葉に出来ない……」

困ったような顔で、二人とも頬を染める。

会えない間ずっと考えていた言葉は、いざとなるとうまく形になつてくれない。しっかり考えていたはずなのに、感情が先に来ようまく頭が働かなくなる。

それはお互い様だったのだと気づくと、より一層自分自身へのおかしさがこみ上げてきた。

「だけど……うれしかった。まっすぐに向き合ってくれて……」

「……うん、友達に……なれたらいいなって思ったの」

ようやく素直な気持ちを口にできて、フェイトもなのはも感動でもが震える。

片や、自分の居場所に悩み、本気で物事に取り組むことができずにいた少女。片や、母

からの重い圧力に苦しみ、自分の居場所を見失いかけていた少女。

どうあるべきかに悩み、苦しんでいた少女達は、偶然出会った相手に影響され、徐々に異なる自分が変わっていった。

誰にも恥じない自分自身に、知らない間に変わっていたのだ。

「でも……今日、もうこれから出かけちゃうんだよね」

「そうだね……少し長い旅になる」

「また……会えるんだよね？」

心配そうになのはが問うと、フェイトは頷き、少し寂しそうな笑みを浮かべる。

フェイトの戦いはまだ終わっていない。アルフもプレシアも、自分の行いを今一度顧み、犯した罪を償う大事な役目が待っている。

それがいつまでかかるかはわからない。しかしフェイトは、しっかりと自分の意思で向き合おうと決意していた。

今この瞬間、なのはと再会したことに關しても。

「少し悲しいけど……やつと、ほんとの自分をはじめられるから。来てもらったのは……返事をするため。君が言ってくれた言葉……友達になりたい……って」

「あ……うん、うん！」

「わたしにできるなら……わたしでいいならって、だけどわたし、どうしていいかわからな

い：だから、教えてほしいんだ。どうしたら友達になれるのか」
不安げに俯き、フェイトは目を泳がせる。

ずっと母の命令を聞き続け、アルフや育ての親であるとする山猫以外の誰とも関わりを持つてこなかった少女にとつて、それは全くの初めてに挑戦である。

どうしたら正解なのか、何が間違っていないのか、そんなことばかりを考え、不安に苛まれていた。

そんな彼女を見て、目を丸くしたなのは、やがてフツと微笑みながら語りかけた。

「友達になるの：：簡単だよ、すごく簡単。名前を呼んで……はじめはそれだけでいいの」
なのは言葉に、今度はフェイトが目を丸くする。身構えていたところに教えられた、あまりに簡単すぎる正解に、しばらくの間固まる。

反応が止まってしまったフェイトに促すように、なのはは自分の胸に手を当て、フェイトを見つめて名乗ってみせた。

「わたし、高町なのは！」

「……なのは」

恐る恐る、フェイトは目の前にいる少女の名を呼ぶと、なのはは心の底から嬉しそうに笑う。リングゴのように頬を染めながら、紡がれた自身の名をしっかりと鼓膜に刻みつける。

それからフェイトは何度も、何度もなのは名を呼ぶ。二度と忘れないように、自分の心に刻みつけようとするように。

二人はさらに歩み寄り、手のひらを重ねて握りしめる。ようやくゼロになった二人の距離を噛み締めながら、二人の少女達はただ、喜びを共有し合う。

「ありがとう……なのは」

思わず溢れたフェイトのつぶやきに、なのはは何度も頷き返す。

そんな美しい少女達の姿を、物陰から様子を伺っていたクロノ達も、微笑ましそうに見やり、目を細める。

必死に泣く声を我慢するアルフに苦笑しつつ、大人達は少女達を優しく見守り続けていたのだった。

しかしふと、なのはは物足りなさのようなものを感じ、あたりに視線を巡らせる。

どうしたのか、と見つめてくるフェイトに、なのはは慌てて申し訳なさそうに俯いた。

「えつと……あの、あの人もいるかなって思ったんだけど……ごめんね、急に」

「ううん……私も会いたって思ってたから、一緒だよ」

フェイトは納得し、苦笑をこぼすと同じように目を伏せる。

二人の脳裏には全く同じ記憶が、時の庭園で一人奮闘していたアインの姿が蘇ってい

た。

高位の魔導師であるプレシアとの一騎打ち、それも彼女の本音を引き出す為にひたすら加減をしたままという無謀な挑戦。それが終わったと思えば、背後から裏切りの一撃に襲われ、続いて現れた邪神に瀕死の重傷を負わされる。

守る為に、意地を通して為に立ち向かい続けたアインの最後に見た姿、その痛々しさに、なのもフェイトも悲痛げに顔を歪められた。

「まだ怪我が治ってないのかな……それとも向こうで大変なのかな」

「わからない……あの人についての情報は、全然届かなかったから。リンデイさんやクロノも、わからないって言っていたし……」

首を振り、自分への情けなさに肩を落とすフェイト。

重要参考人である今の立場では、無理に詳しく情報を入力することなどできない。いつもたらされるかわからない情報を、待つ他にないことがとてつもなく歯がゆい。

元気な姿を見ることも、声を聞くこともできないのかもしれないと思うと、なのはとフェイトの胸はきつく締め付けられるようだった。

「このまま……お別れなんてやだな」

そう、思わずなのはが呟いた時だった。

「……嬉しいことを言ってくれるじゃないか」

不意に届いた、今まさにもう二度と聞けないかもしれないと案じていた声に、なのとはフェイトはハツと目を見開く。

近づいてくる足音に、二人して勢いよく振り向き、声の主の姿を目の当たりにして息を呑む。

そこにいたのは、ずっと会いたいと思っていた女騎士……アインだった。

包帯も何もつけておらず、最初に出会った時と全く同じ五体満足な姿で、アインはなのは達の元に歩み寄る。

浮かんでいる微笑に、二人は安堵と歓喜で目を潤ませる。

「アインさん……!」

「アイン……!」

慌ててアインの元に駆け寄り、勢い余って彼女の腰にぶつかる。

二人の少女達の突進をしかと受け止めたアインは、クスクスと笑い声をこぼし、二人の背丈に合わせてその場にしゃがみこむ。

「少しだけ時間を作れてな……最期に顔を見にきた」

「け、怪我は!?? 体は大丈夫なんですか!??」

「見ての通り、ピンピンしている。お前たちのことだ……せつかく話す機会を得たのに、どうせ私のことで重苦しい雰囲気になっていいるだろうと思つてな」

なのはとフェイト、二人の視線に合わせ、優しい笑みとともに語るアイン。

思わず振り向き、クロノ達が一時立ち去った方を見てみれば、クロノはやや居心地悪そうにそつぽを向き、リンデイは悪戯が成功したようににこやかに笑い、なのは達を見つめているのが見える。

思わぬサプライズプレゼントがもう一つ贈られた事で、なのはももとしてつもなくこそばゆい気持ちになる。

しかしすぐに我に返ると、まるで謁見するようになるのは達に跪くアインに、しっかりと真正面から向き直つた。

「…あの、えつと……これだけはちゃんと申しておかなくちゃと思ひまして！」

「うん、私も…… アイン……色々迷惑かけて、心配かけて……それでも見捨てずに、ずっと助けてくれて」

「本当に……本当にありがとう……」

出会つて数日、恩ばかりを受けてきた少女達は、これまでの想いの全てを込めるつもりで、深々と頭を下げようとする。

命を救われた、存在を認めてくれた、導いてくれた大恩に少しでも報いたいと、感謝

の言葉を差し出そうとする。

しかし、それらは途中で遮られてしまった。

アインがなのは達を抱き寄せ、豊満な胸元に押し付け、きつく腕を回してきたからだ。

「礼を言うのは……私の方だ」

「アインさん……？」

一体何が起こっているのか、自分達は何をされているのか。

唐突に抱きしめられ、戸惑いと恥ずかしさで目を白黒させるのはとフェイト。頬は赤くなり、顔中に熱が溜まって思考が全く定まらなくなる。

混乱の渦に放り込まれ、あわあわと慌てふためく二人に苦笑しながら、アインは囁くように小さな声で語りかけた。

「お前たちには、一つだけ大切なことを教えてあげよう……アインというのは、私の本当の名前ではない」

「え……？」

「……かつて戦いに身を捧げた時から、私は一度自分を捨てた。弱い自分を殺して、強い自分になろうと思ってな」

驚きの言葉で、正気に戻るなのは達。言い慣れた名前が、本来のものではないという衝撃の事実、混乱が止まらなくなる。

困惑の視線を向ける少女達を見下ろしながら、アインは今にも泣きそうな表情で、彼女達を抱きしめる力を強める。

ふらふらと、自分をなくして彷徨っていた自分の目を覚まさせてくれた、救ってくれたのだと、心からの感謝を込めて少女達を胸元に抱き寄せる。

「だが、それは間違いだったと気づいたよ。どんなに自分を偽ったって、私は私でしかないだって……何年もかかって、ようやくわかった」

やる事なす事、全てが裏目に出てしまう呪われた忌々しい人生。

他人のためであろうと自分のためであろうと、決して幸福というものと縁を結べなかった長い時間の中で、やっと得られた結末。

何一つ守れなかった不甲斐な自分が、ついに守り通すことができた尊い命が、自分の手の中にある。それが、たまらなく嬉しかった。

「だが、それでいいんだとわかった。誰もが同じで、弱い自分を持っているんだって気づいたから。だから私は、大切な人には本当の私を知ってもらおうと思ったんだ」

ふと、目尻に何か熱いものが伝わる感触がする。

ずっと凍り付いていた自分の感情が、ここにきてようやく溶け始めたのだと気づき、アインはおかしさにふつと笑みをこぼす。

アインはもう一度二人を抱き寄せ、耳元に自分の口を寄せる。

「私の本当の名前は……………アイシス」。アイシス・ケンザキ・アルデブランドだ」
「アイシス…さん……………」

「私の…………二人の母からもらった大切な名だ。知っているのは、本当にわずかな人間だけなんだぞ?」

もう、片手で数えるほどにしかいなくなってしまった、自分が愛した大切な者達。もう二度と会うことの叶わない数人に託した、本当の自分。

それをアインは、己が初めて守り抜いた少女達、掛け替えのない宝物達に託した。

やがてアインはぐいっと乱暴に目元をぬぐい、立ち上がるとなのは達に背を向けた。

「そろそろ時間だ。クロノが口を挟んで微妙な空気になる前に、私はさっさと行かせてもらおうよ」

「アイン……………」

「あ、はい…あの、アインさん! 本当に……………」

女騎士がその場を去ろうとしていることに気づき、慌てて姿勢を正し、一度でもいいから例の言葉を口にしようとするのは。

しかし、最後にもう一度だけ振り向いたアインの表情を——寂しさに満ちた儂げな微笑を目の当たりにし、二人はその場に縫い付けられたように動けなくなってしまうた。

「さよならだ……なのは、フェイト」

消え入りそうな細かい言葉でそう告げ、無言のまま歩き去っていくアイン。

彼女のその言葉は、なぜか真正銘、彼女が口にする最後の挨拶のように思えた。

5. さらば愛しき友よ

指定の場所までの道を、アインはリンデイと並んで歩く。

アインはいつも通りの、リンデイは暗い表情で、他に誰もいない道を黙々と歩く。会話もなく、ただ無言で歩き続ける。

クロノは先に行った。母を友人と一緒にいさせてやろうとでも配慮したのだろう。

しばらくの間、二人は並んで歩き、やがて転移の指定位置まで辿り着く。そこで初めて、アインがリンデイに話しかけた。

「……礼を言う。時間をくれて」

「いらぬいわよ、そんなの……」

「だが、私のわがままを通すために随分無茶をしたと聞いている……最期まで、苦勞をかけてすまないな、リンデイ」

アインが口にした、もう聴き慣れた謝罪の言葉に、リンデイはふんつと鼻を鳴らしてそっぽを向く。

アインが何かをするたび、暴れるたびに起こしてきた被害の数々。そのフォローに回り、時に巻き込まれることも多々あったリンデイに、アインはよくこうして謝っていた。

価値が軽く思えるほどたくさん耳にし、本気で謝る気があるのかといぶかしむこともあつたそれらが今は、ひたすらに重く聞こえていた。

「さつさと、どこへでも行つちやいなさいよ……バカ」

「……すまん」

吐き捨てるように告げられ、アインは寂しげに微笑みながら歩き出す。

転移の陣は二つ用意されている。一方はアースラに、もう一方は別の時空航行船に——アインの拘束具が用意された艦につながるもの。

アインとリンデイは、ここから別々の陣に足を踏み入れることになる。

アインはふと、頭上に青々と広がる空を見上げ、ため息をこぼす。

永久封印が決定されたアインにとっては、今生に最後に見られる青空だ。もう二度と拝めないものと覚悟し、しっかりと目に焼き付ける。

そうして、満足げに目を伏せ、もう一つの船に乗り込むため、歩き出した時だ。

「行かないでよ……アイシス」

キュツ、と、アインの服の裾が引かれ、弱々しい声が耳に届く。

ハッと息を飲んだアインは、背後でうつむき、いまにも泣き出しそうな声で懇願してくるリンデイの前で、固まってしまふ。

立ち止まった親友に、リンデイは声を震わせながら語りかけた。

「どうして……どうしてあなたが最期まで泥を被らなければならぬのよ?!? 誰より傷ついて、大勢の人を救ってみせたあなたが……これ以上ない功績を挙げてきたあなたが、なぜ罪人として扱われなければならないの?!?」

悲痛な消えでそう叫び、リンディは涙を流す。

もう二度と会うことのできない、子供の頃からともに戦ってきた親友。誰よりも優しく、誰よりも強く、誰よりも多くに人々を救ってきた自慢の友達が、理不尽な命令により、遠く手の届かない場所に連れて行かれようとしている。

それが、リンディには我慢がならなかった。どうやったって、納得できるはずがなかった。

「リンディ……これは、決まったことなんだ。世界に私は……必要ない」

「そんなの……別のだれかが勝手に決めたことでしょ! そんなことを言うくそつたれに、従う必要なんてないわよ!」

アインは振り向くことなく、ふつと微笑む。

そこでふと、クロノがこの場にいない理由が、母の泣きじやくる姿を見たくないがゆえなのではないかと推測する。

それとも、自分がなく姿を他人に見られたくないからだろうか。口では厳しくしつつも、優しい心を持った彼ならば、そうなったっておかしくない。

温かい気持ちにあふれたアインは、深くため息をこぼす。

これ以上ない満足感に、感想も何も出て来ず、頭上に広がる青空を見上げ肩の力を抜く。

「充分だ……もう充分なんだよ」

そう言い、アインはその場から歩き出す。

リンデイの手が服から離れ、伸ばされた彼女の手が宙を彷徨う。

すがるような、いますぐにでも大声で呼び止めたがつているような、必死な顔で凝視してくるリンデイに。

アインは、最高の笑顔で振り向いた。

「さらばだ……愛おしき、我が友よ」

それを最後に、アインの姿が光とともに消える。

リンデイはそれを、顔中を涙で濡らしたまま、見送ることしかできないでいた。

「……お前は、こつちだ」

「ああ、わかった」

最後に訪れることのできた地球を離れ、数十分。

時空間を進み、あとは本局までじっくりと航行するだけの時間が流れる。

アースラとは異なる時空航行船の通路を、アインは前に歩く局員に従い、黙々と進む。艦内に転送された直後姿を見せた、連行役だと語った男は、なぜか帽子を目深にかぶっていた。

それを訝しく思いながらも、アインはさっさと歩き出した男の後を追う。

途中、何度か他の局員たちとすれ違うこともなく、異様に静かな空間を二人だけで進んでいると、どうにも奇妙な心地になってくる。

やがて案内役の男は、ある一つの部屋の前で立ち止まり、入口の端にある機械にカードをかざし、扉を開く。

無言で入室する男についていくアインだが、中を見た途端困惑をあらわにする。

「……………？　おい、ここは整備室だろう。場所を間違っているんじゃないのか」

男が入ったのは、数々の備品が保管されたやや埃っぽい空間。

デバイスや機体の修理に使用される道具に、修繕のための部品など、狭く苦しく薄暗い空間である。

とても、罪人を収監しておくような部屋ではない。

拘束具もなく、完全に入出入りを封じる強固な鍵もない。カードによる認証だけで、出ようと思えば力尽くで出られる頼りない入口だ。

なぜ、本局で封印措置を行われる予定の自分が、このような場所に案内されたのか。

アインは首をかしげる。

「……いや、ここがいいんだ」

アインの問いの声に、男は静かにそう答える。

そして懐に手を伸ばすと、一丁の銃トードイヤの衣装が目立つ赤い銃・ギャレンライザーを、銃口をアインに向けて構えた。

「……!?」

目の前に突きつけられる銃口、平局員に姿を偽った戦友サクソが構えるそれに、アインは驚愕で目を見開く。

呆然と、何が起こっているのかまるで分かっておらず、立ち尽くす彼女に向けて、サクソは銃の引き金を引く。

放たれた銃弾はアインの顔のすぐ横を通り過ぎ、整備室の壁に炸裂し、大きな爆発を起こす。

爆音と衝撃で我に返ったアインは、壁にあいた大穴に気づき、より一層の混乱で目を泳がせる。

「なっ……わっ!?」

すると次の瞬間、ふわりとアインの体が浮き、壁にあいた大穴に吸い寄せられていく。時空間と艦内、環境の異なる二つの空間を分ける壁が壊されたことで、生じた気圧の

差が気流を生み、アインを艦の外へと吹き飛ばしたのだ。

アインは必死に手を伸ばし、大穴の縁にしがみつき耐える。そして、一人だけ艦内の支柱を掴み、気流に耐えていたサクソを睨みつけた。

「…………… なんの…………… つもりつ、ですかつ…………… マンダリン陸尉!?」

「…………… 『アイン・K・アルデブラントは本局護送の際、爆発事故により生じた乱流に巻き込まれ、時空間に放出される。それ以降、行方知れずとなる』」

ぎろり、と若干の殺意も込めて凄むアインに、サクソは平然と答える。

危うく自分も吹き飛ばされていたかもしれない危険な行為を、何の躊躇いもなく行った男は、艦の外で気流に揺さぶられる元部下にそう告げる。

しかしアインには、サクソの言っていることがまるでわからない。彼が何をしようとしているのか、その答えに気づくことが恐ろしくて、脳が理解を拒んでいる。

絶句するアインに向けて、サクソは帽子を脱ぎ捨て、ふっと不敵に笑ってみせる。

「これが俺達の用意したシナリオだ」

「なつ…………… 何を、言つて……………!?」

サクソの不敵な意味が、いきなりのこの暴挙が、アインにある可能性に導く。

先ほどの謎の筋書きをもとに考えてみると、サクソが、そして彼に協力する者達がいかにインをどうしたいのかが見えてきてしまう。

しかし、それは非常に危うい道である。

事故を装い、それを名目に罪人を逃がし、事件を未解決のまま終わらせようと試みているのだ。

そんな嘘がバレれば、彼は、彼らは重く罰せられることになる。

「まさか……何をやっているんですか!!? そんなことをしたら、あなたの立場が……!!?」

「どうでもいいことだ……部下を見捨て、地位にしがみついて何の意味がある。ムーヴも、同じ考えだ。覚悟ぐらいできている……!」

「もう……もういいんですよ!!? 私にはもう、生きる理由などない!!? 私の存在は、望まれないものなんです!!?」

サクソの身を案じ、悲痛な消えで拒絶しようとするアインに、サクソは笑ったまま何も返さない。

アインはきつく歯を食いしばり、眉間にしわを寄せて項垂れる。

これ以上誰も巻き込まないように、自分がこれ以上何も壊さないように、全てを捨てて封じられる道を選んだというのに。

どうして、自ら傷つきに來てしまうのかと、アインはひたすらに嘆いた。

「もう……私を眠らせてください……!!?」

自分の覚悟を無駄にしないでくれ、もうこれ以上自分を苦しめないでくれ。そんな想いを胸に、アインは必死に艦内に戻ろうと踏ん張る。

だが、そんな悲痛に泣き叫ぶアインに、サクソはぎりつと歯を食いしばり、しがみつくアインの手を拳で殴りつけた。

「……言いたいことはそれだけか」

「っ……」

「お前は一人で生きてきたつもりか。馬鹿を言うな、お前は散々誰かを巻き込み、頼り、支えられて生きてきたはずだ。そんなお前が、今更全て捨てて眠りにつくだと……ふざけるな!!?」

怒号をあげ、見たこともないほどに鋭い目で、サクソはアインを見据える。

アインの手を押し潰そうとするように、叩きつけられた拳には力がこもり、血管が浮き出る。拳句、爪が皮膚を裂いて血が滲み出す。

アインは息を呑み、呆然とサクソを凝視する。

怒られたからではない、元上司の見たことのない姿を見たからでもない。

彼が口にした言葉に、心臓を無数の刃で貫かれた時と、全く同じ強烈な痛みが走ったからだ。

「お前の命はもう、お前一人のものじゃない!!?」 お前に生きて欲しいと望む者がいる、

お前の幸せを願う者がいる!!? そんな者達の想いを踏み躪る権利など、お前にはない!!?」

ギリギリと、アインが艦体にしがみつくと手が、穴の淵に食い込んで血が滲む緑の地帯で手が滑り、気を抜けばあつという間に吹き飛ばされそうになる。

苦痛に慣れたアインには、どうということもない痛み。

今のアインは、それをはるかに超える胸の痛みに苛まれ、地震が傷を追っていることにすら気づいていない。

ただじつと、泣き出しそうな顔で吠えるサクソを見つめるばかりだった。

「失ったことを後悔しているなら、奪ったことを償いたいなら、逃げることなど考えるな!!? 諦めず、運命と戦い続けろ!!?」

「私は……………私は……………」

まっすぐに見下ろしてくるサクソの顔を見ていられず、目を背けるアイン。

ぶつけられる言葉は全て正論で、一切否定することができない。自分の過ちの全てを突きつけられ、針のむしろに立たされているような気分になる。

しかしそれでも、サクソの策を受け入れられない。

さらなる罪を犯すかもしれない自分が、ここで逃げて生き延びるといふ選択肢を、どうしても選ぶことができない。

アインがもう一度、首を横に振ろうとしたその時だ。

『この……バカッ!!??』

整備室の放送から、涙に濡れた女の悲鳴じみた叫びが響く。

アインはハツと、唸り声と啜り泣く音が聞こえる箇所を目を向け、目を潤ませる。

つい数分前、別れたばかりの親友の悲痛な声に、アインはぐつと息を詰まらせ、痛々しく顔を歪める。

彼女もまた、この嘘に関わるつもりでいるのだと気づき、胸が張り裂けた時と同じように凄まじく痛んだ。

「リンディ……」

『あんたっていつつもそう！ 勝手に決めて勝手にどっか行って勝手に傷ついて……おいていかれる私たちのことは見向きもしない!!?? 勝手すぎるのよ、昔から!!??』

ぎやーぎやーとぶつけられる、これまで抑えていた分も合わせた不平不満の数々。

目に余る女ど自分を大切にしない親友を、付き合っていた分も合わせた不平不満の数々。結局そうできずにずっと続いてきた仲。

リンディはやはり、大好きな親友が手の届かない場所に行くことに、耐えられなくなつたようだ。

『だから私だつて勝手にするわよ!!?? あんたの意思なんか聞いてやらないつ……私た

ちの思いを全部背負って、それでも生きなさいよ!!? 頑張ってみなさいよ!!? ……
お願いだから、生きてよ……!!?』

泣きながら叫ぶ、リンデイの声。

彼女の声に混じって聞こえるのは、おそらくはアースラのクルー達の声だろう。全員で泥を被り、アインを見送るつもりなのだ。

いつしか、アインの目尻からポロポロと涙が溢れる。

長い間一人で戦い続け、すっかり壊れてしまった涙腺が、アインの本音をこれでもかと溢れさせているらしい。

もう君値を表に出すことはあるまいと思っていたのに、みつともなく顔中をぐしゃぐしゃにしてしまっている。

何と情けない話であろうか、とアインは思わず自嘲する。

気づけばアインは、艦体から手を離していた。

次元間に生身で放り出され、目に見えない流れに翻弄されながら、次元航行船からあつという間に引き離されていく。

それを見て、アインは小さくため息をつき、胸元から下がるスピードの形のペンダントを睨んだ。

「……………ブルースペイダー、お前もグルか」

「……Sorry, sir.」

やや皮肉げに、相棒がボソリと答える。

生身ではまず突破できない次元の狭間を、手ぶらで放り出すなど正気を疑う行いだ。

しかし不死身であるアインなら、普通ではないデバイスを有する女騎士ならば、生き延びられる可能性は格段に跳ね上がる。

そのため、本来没収されるべき相棒も、手元に残されたままなのだろう。

きつと、最後にこうして地球に来る許可が降りる前から、こうすることを考えていたのだろう。

「ひどい奴らだ……お前たちは。こんな私に、まだ生きろというのか……ああ、全く」

アインはフツと微笑み、ブルースペイダーを握りしめる。

小さく、相棒の力を解き放つ呪文を口ずさみ、光とともにその身に青き鎧を身に纏う。

流れ行く先は、一体どこであろうか。

人の住めない不毛の地か、弱き生物を殺す修羅の世界か、はたまた陸地の存在しない無の世界か、どこかはまるでわからない。

ただ何処であろうとも、この不死の体は生き延びてしまうのだろう。

「本当に重い、罰だ」

罪を背負ったまま、何をしたいかもどうなりたいのかも不明な、あてのない旅を延々

と続ける。

それはなんと、残酷な罰なのだろうか。

生きろと願われることが、こんなにも苦しくて切ないことだったのかと、アインはふつと皮肉げに笑みを浮かべた。

「まだ何もない……だが、そうだな。探してみるとしようか」

極彩色の空間を、青の女騎士が揺蕩っていく。

流れに逆らうことも、進むこともせず、アインという名の女は、自分も知らないどこかへと消えていくのだった。

最終章 かの者の旅は終わらない

∞. 遠い地からの便り

高町家の道場から、乾いた破裂音が何度も響き渡る。

道場内で対峙する、兄恭也と妹美由紀。師弟関係でもある二人が、短めの竹刀を二手に持ち、目にも止まらぬ早さで打ち合っていた。

数十と打ち合った後、二人は示し合わせたように同時に手を止め、竹刀を下ろして向かい合う。

息を切らせ、汗を流す美由紀に対し、恭也は平然とした様子でフツと笑みを浮かべた。「朝稽古はこれくらいにしておくか」

「ありがとうございます！」

恭也にぺこりと頭を下げ、満足げに笑みを浮かべる美由紀。

恭也も妹も成長を自分の手で実感したからか、フツと達成感を感じさせる微笑みを見せる。

使用した後の習慣、道場の掃除を行った二人は、揃って出入り口に向かう。

恭也に先に行かせると、美由紀が鍵を取り出し、道場の入り口を閉めに入った。

「恭ちゃんは先に行つていいよ」

「わかつた」

恭也が頷き、自宅に向かつて歩き出してから、美由紀は道場の鍵を閉め、続いて自宅の門に向かう。

朝に届いた郵便物は何かあるかと、ポストの中を覗き込む。

すると、一通の封筒が入られていることに気づき、おや、と目を丸くする。

手にとつて見てみると、中身が詰まった海外の封筒の様である。だが、海外から手紙を届ける様な知り合いがいたのだろうか、と美由紀はふと首を傾げる。

「あれ？ 誰からだろ？」

送り主はどこか、と封筒をひっくり返し、書かれた文字をじつと読む。

読む者に配慮してか、宛先や送り主はしっかり日本語で書かれていて、難なく読むことができた。

送り主の名を見た途端、美由紀はあつと目を見開き、続いてふつと頬を緩める。

そして、優しい笑みを浮かべたまま宙を———広く開けた青空を見上げ、その下の何処かにいるであろう妹のことを想い浮かべる。

「なのは、きつと喜ぶだろうなあ……ん？」

物思いにふけていた美由紀だったが、ふと指先に違和感を覚え、再度郵便に視線を

向ける。

最初に見た一通の他に、もう一枚紙を持つ感触がある。一緒に取って紛れてしまったのだろうか。

すつ、と重なった紙を指でずらし、下に隠れていたもう一通を確認する。

それは手紙ではなく、折り畳まれた紙切れの様だったが、うつすらと何か文字が刻まれているが見える。こちらの手紙、というよりメッセージの様だ。

「もう一通……誰から?」

誰が書いたものなのだろうか、と美由紀が紙切れを開いてみる。

そこに書かれていた、手紙というには短くそつけな一文に、美由紀は一瞬目を見開き、やがてふつと呆れたような笑みをこぼした。

——こんにちは、高町なのはです。

ユーノ君との出会いから始まった小さな事件…

異質世界の遺産ロストロギア：ジュエルシードを巡って起きたあの事件も終わりを告げて……また少し時間が経ちました。

あれからわたしの周りでは、魔法に関する事件も起きる事がなくなり、みんな、おのおの平和で穏やかな日々を過ごしています。

競い合ったり戦ったり、色々あつてやつと友達になれたわたしと同年の魔法使い、フェイトちゃんとも今はまだ離れ離れ。

わたしもすっかり平凡な小学三年生…のはずだったんですが、色々と思うところもあつて、今も魔法の練習は続けています。

ヒュンヒュンと宙を舞う桜色の光。

その中心に立ち、なのははじつと集中し続ける。

ジュエルシードをめぐる事件の間も続けていた魔力操作の練習、いくつもの魔力弾を同時に正確に制御する力を育む訓練。

だが、今回のそれは少し異なる点がある。

相棒であるレイジングハートは近くのベンチの上に置かれ、なのはは素手で魔法を使っている事だ。

つまりは、デバイスの補助をなくして、正確な魔力の操作を行おうとしているのである。

やろうと思えば、できない事はない。

しかしそれがどれだけ難しいことかと聞かれれば、多くの魔導師が気まぎれに頬をひきつらせる事であろう。

「うん！ 上手、すごいよなのは」

「ありがとう」

相変わらずなのはの師として、彼女の努力を見守り続けているユーノも、驚嘆で声を弾ませる。

必要に迫られての訓練ではなく、自分から積極的に行う訓練。しかも行うたびにめぐるしい成長を見せるなのには、驚かされてばかりだ。

ふとそこへ、なのはの一通の着信音が響く。

あつ、と声をあげたなのはは急いで荷物を探り、自身の携帯電話を取り出し、表示された発信元を確認する。

そ表示された名前に、なのはは満面の笑みを浮かべ、すぐさま通話ボタンを押した。

「はい。もしもし、なのはです」

『おーい、おはよう！ なのはちゃん』

『おはよう、なのは』

「エイミイさん、クロノ君！」

聞こえてくる、もはや懐かしいときえ思える二人の声に、なのはは歓喜で声を弾ませる。

いったい何をどうやっているのか今だにわからないが、電波も届きそうにない遠くの世界から、こうして時々かかってくる電話に、なのはは内心で不思議そうに首を傾げる。

管理局の技術力とは、こんなにも凄まじいものなのだろうか、とまだまだ知らない世界に強く興味が湧いてくる。

『どうだい？ 魔法の練習は順調かい？』

「うん、作ってもらったテキストはわかりやすいし、ユーノ君も教えてくれるよ」

『それはよかった。レイジングハートはもう完全になのはが自分のマスターだって認めているし、きつともっと強くなるよ』

「That's right.」

ここ最近、時間がある限りこうして連絡をよこしてくれる二人。互いの最近についての世間話や魔法について、あるいは事件のその後についてなど、色々と教えてくれたりしていた。

事件が終わっても、こうして色々と気遣ってくれるクロノ達に感謝しながら、なのはは彼らとの久しぶりの会話を楽しんでいた。

『だから、なのはさんは学業が落ち着いたらぜひウチに…ね？』

『また艦長は……』

「あはは……」

比較的本気そうにそう言うリンディに苦笑しつつ、なのはは真面目に考えだす。

辺境とさえ言われるほど、管理局からは遠いこの世界。そんな場所で生まれた自分に

は、別の世界では当たり前のようにある力が宿っていた。

それは言ってしまうえば偶然なのだが、こうして事件に深く関わった今となると、運命じみた何かがあるような気がしてくる。

もし、この力をもつと強く大きく育て、クロノやフェイト、女騎士のあの人、あるいはあの巨大な怪物にも負けなくらいになれたとしたら。

そういう未来も、何もなかったと思っていた自分にも選べるのだろうか。

『なのはやフェイトのように優秀な使い魔持ちは本当にレアなんだ。しっかりと教えるんだぞ、ユーノ』

「ボクは使い魔じゃないんだけどな……」

なのはがまだ見ぬ未来を夢想する側で、クロノの苦言にユーノが肩を落とす。

フェレットの姿でいることが普通になってしまったために、すっかり使い魔としての印象が染み付いてしまった現在。

今後もずっとこうして弄られるのかと思ひ、ユーノは重いため息をつくのをやめられなかった。

そこに、パンツ！と破裂音が響く。

話題を切り替えるために、エイミイが手を叩いたようだ。

『でね、今回の通信はいつもの連絡！ 今も名前が上がった、なのはちゃんが気になって

る「あの子」の事と……今も行方が知れない「あの人」の事」

「は、はいっ、お願いします！」

せつかく友達になったのに、ずっと会えていない、顔も見られていない新しい友達のことを思い、なのははピンと背筋を立てる。

事件を起こしてしまった責任の追及、被害に対する賠償、違法な研究に対する事情聴取。

それらの膨大な罪状に加え、現役管理局員による犯罪示唆や違法な研究の発覚と、多くの事情が重なって非常にややこしいことになっているらしい。

フェイト自身の罪はそこまでひどくはないものの、当分会う事はかなわないらしい。

その事実にも、なのはは思わず暗い表情で俯いてしまった。

『——前にも言ったが、大丈夫だよ』

「うん、ありがとう」

『…それとね』

なのはを安心させようとしてか、極めて明るい声で語っていたエイミイが、不意に勢いを落とす。

なのはが知りたい、もう一人の友人についての情報。彼女の現在について、なのはは一度聞かされていて、つい固く身構えてしまう。

本局へ向かう前に事故に遭い、そのまま行方不明になった。

そんなことを聞かされた当時はひどく狼狽し、落ち着いた今でも彼女の安否を心配し、落ち着かない日が続いていた。

『アインさんの事は…正直全然わかってないの。時空の流れに飲まれちゃってそれっきり……』

『いくら不死性の高いアンデッドといえど、あの空間で無傷でいるとは言い切れない……生きている事は確実だが、今どんな状態でいるか』

「そう…ですか」

俯くなのはに、クロノ達はやや気まずげに唸る。

女騎士を敬愛していたなのに対し、こうして「嘘」を突き続けることに、全員申し訳なさを抱いていた。

だが、決してそれを伝えたりはしない。

真実を語れば、管理局の……人間の恐ろしく冷たく、残酷な一面についても語らなければならなくなる。

まだ子供である彼女にそんなものを見せるわけにはいかず、クロノは事実を隠し続けるという、かつての彼であればまず考えられない選択を取っていた。

クロノの葛藤に気づくことなく、なのははふつと深呼吸をする。

荒ぶりかけた精神をどうにか落ち着け、なのはは画面越しに、ふっと柔らかな微笑みを浮かべた。

「アインさんのことは心配です……でも、きつとあの人なら無事でいるって思えるんです。なんでかはわからないけど……」

『……そうだな、多分どこかで生きているだろう』

まぎれもない本心で、クロノも笑みを浮かべる。

こんなにも大勢に想われているのだから、ちゃんと生き延びていろよと内心で罵りながら、クロノもまた、艦内から見える極彩色の空に想いを馳せるのだった。

その日の分の練習を終え、家路につくなのは。

友人達と久しぶりに話ができて嬉しい反面、話したかった相手と何も言葉を交わせなかったことが悲しく、暗い表情となる。

しかし、家族にそんな顔を見せるわけにはいかないと気持ちを切り替え、むんと平静を取り繕う。

空元気を見せるなのはに、ユーノがやや心配そうな眼差しを向ける中、なのはは高町宅に戻ってくる。

すると、門の前で待つ一人の女性——美由紀の姿があることに気づき、なのはは駆

け足で姉の元に駆け寄っていく。

「ただいまー!」

「おかえり、なのは」

元氣よく声をかけ、なのはは目をキラキラと輝かせて、美由紀を見上げる。

その理由は、ちらりと見えた姉が手にしている何かのためだ。

それはもしかや、ずっと会いたいと思っていた少女からの便りなのではないかと期待し、美由紀にずいっと詰め寄る。

「あ……あの……お姉ちゃん、何かわたしに……」

「ん〜?」

それぞれと落ち着かない様子を見せるなのはに、美由紀はいたずらっぽく笑みを浮かべてとぼける。

知っているくせに、わざと知らないふりをする意地悪な姉に、妹はつい責めるような目を送ってしまう。

必死な様子を見せる妹に微笑ましさを感じながら、美由紀はにっこりと笑みを見せ、後ろ手に隠していたもの、一通の郵便を見せた。

「じゃ〜ん♪ 届いてたよ、時空管理局のフェイトちゃんから!」

美由紀にそれを手渡され、なのははパツと表情を明るくさせる。

面と向かって言葉を交わす事はまだできない。しかし、クロノ達が気を利かせて、フェイトとアルフが撮ったビデオメールを送ってくれるようになったのだ。

これまでも何度も、フェイト達とはメールのやり取りをしている。今度の便は、前回なのはが送ったメールの返事を届けてくれたようだ。

「お姉ちゃん、ありがとう！」

「よかったね、なのは！」

「うん……！」

まるで宝物を抱きしめるように、なのはは送られてきたビデオメールを胸に包む。

早く見たい、そして今の自分のこの気持ちを伝えたい。

ソワソワと先ほどとは異なる気持ちで、なのはは落ち着かない様子を見せる。

「あ、あとそれとね……！」

だがそこに、美由紀が口を挟む。

フェイトのメールを渡した時よりも優しい笑みを浮かべて、もう一通の手紙をなのはに手渡す。

フェイトの他に、誰が送ってきたのだろうか。

そう訝しんだなのは、首を傾げたまま手紙を受け取り、紙を開いて書かれた文に目を通す。

そして、ハツと目を見開き、次いでいまにも泣き出しそうな表情で、ホツと安堵の息をついた。

『ありがとう また会おう』

紙に書かれた文章は、たったそれだけ。

心配させたことへの詫びも、寂しがるなのには対する気遣いも一切ない、素っ気なすぎると。一文。

だがそれでも、なのは心の底から安堵し、そしてまだ見ぬ未来に希望を抱く。

どんなに時間がかかるかわからないが、きつとまた会える。きつとまた、言葉を交わし、より深い絆を育むことができるようになる。

アイシスと言う名の女が送った手紙は、そんな期待を少女に抱かせた。

——今はそれぞれの場所で、それぞれの笑顔と涙を集めて

再会ときつとまた新しく始まっていくはずの日々に思いを込めて

リリカルマジカル

きつとみんなが幸せでありますように。

◇
◇
◇
◇

その場所は、草木の一本も生えない不毛の大地だった。

人気は一切感じられない、あらゆる命が死に絶えるような過酷な環境。

乾いた砂漠が延々と続くその世界には、一本の轍が刻まれていた。

広く、寂しく、途方も無いほどに果てまで続く砂漠に、長い長い跡が残されていた。風もなく、音もない無の世界に。

ある女騎士が残した足跡だけが、どこまでもどこまでも続いていたのだったー。

F I N